芳賀団地遺跡群 第1巻

芳賀東部団地遺跡 I

――古墳～平安時代編 その1――

1984・3

前橋市教育委員会

粕川村出土文化財管理センター

芳賀団地遺跡群 第1巻

芳賀東部団地遺跡 I

——古墳～平安時代編 その1——

赤城南麓航空写真（南方上空から）

下端を東西に走る大正用水の北側一帯が芳賀東部団地遺跡である。西寄りの一大住宅団地は、かつての芳賀北部団地遺跡である。

遺跡全体航空写真（東側台地）

遺跡全体航空写真（北方上空から）

レ３～４付近の竪穴式住居跡と掘立柱建物跡群（東から）

掘立柱建物跡群（20－1区東側斜面、南から）

4 号 製 鉄 址（北から）

方形の柱穴を持つ掘立柱建物跡
（149号掘立柱建物跡）

掘立柱建物跡の調査のようす

F・Aの堆積状況（H449号住居跡）

竪穴式住居跡の調査のようす

序

上毛三山のひとつの赤城山は、群馬を代表する名山である。赤城山は、裾野が長く広がりをもっている。山麓には多くの湧水地が散在し、そこに端を発する開折谷により、舌状台地が良く発達している。この台地上には古くから人が住み、今に多くの遺跡地を残している。

また、赤城山は、四季折々の姿、形の美しさにより古代から人々の信仰の対象ともなっている。

この赤城山南麓の芳賀の地に住宅団地・工業団地造成が計画され前橋市教育委員会と同発掘調査団が中心となり、昭和48年から昭和55年にかけ８ケ年間の長きにわたり発掘調査を実施した。その結果、約40haに及ぶ広大な面積を全面発掘調査を実施することができ多大な成果を上げることができました。

特に、遺跡、遺構においては、縄文時代の住居跡を始め古墳、奈良、平安時代の住居跡、製鉄跡等々が1740余も発見されており、遺物においては遺物整理箱約800箱に及ぶ貴重な文化遺産が発見されました。

ここに、芳賀団地遺跡調査報告書第１巻を刊行するにあたり遺構、遺物、写真、図面等を整理検討した結果芳賀東部団地遺跡の谷東側を中心といたしました。今後は、各遺跡の位置、時代、性格等を検討してあと４巻の刊行を計画しており全５巻になる予定です。

芳賀団地遺跡調査報告書を順次刊行して全５巻が完成した暁には「和名類従抄」に記載されている「芳賀」郷の所在・性格や土器の型式編年、住居空間の構成、住居地の変遷、住居の選地、文化の交流圏等々を解明する重要な資料を提供できるものと確信しております。

最後に炎暑酷寒の中で黙々とフイルドの作業に携った方々、専門的な立場から御指導、御助言をたまわった故尾崎喜左雄、新井房夫、野村哲、三辻利一氏を初め、奈良国立文化財研究所等々の研究者、研究機関の方々、前橋市関係各課、前橋工業団地造成組合の各位に厚くお礼を申し上げます。

昭和59年３月

前橋市教育委員会

教育長　金　井　博　之

例　　言

1　本書は、前橋工業団地造成組合による、工業及び住宅団地の造成に伴い事前調査された、前橋市嶺町・勝沢町・小坂子町・鳥取町・小神明町・五代町の計40haに及ぶ、芳賀団地遺跡の発掘調査報告書第一巻である。

2　芳賀団地遺跡群は、北部団地遺跡（嶺・勝沢・小坂子町。48・49年度調査。約3.6ha）、西部団地遺跡（鳥取・小神明・五代町。50年度調査。約2.5ha）、東部団地遺跡（鳥取・小坂子・五代町。51～55年度調査。32・78ha）の3遺跡から成り立つ。

3　調査の実施は、前橋工業団地造成組合の委託を受けて、芳賀団地造成地内埋蔵文化財発掘調査団が行なった。

4　芳賀団地遺跡群の報告書は全5巻を予定しており、その内訳は、東部団地遺跡3巻、北部団地遺跡1巻、西部団地遺跡1巻で、記述の順に刊行を予定している。

5　芳賀東部団地遺跡は、東西を谷地に挟まれた2つの台地と、両台地間の谷地の北寄りに南端をのぞかせる台地の、計3つの台地から成り立つ。本書は、東側台地に所在する土師器を伴う遺構を中心に収録したものである。なお、第2巻は西側台地と中央台地の土師時代の遺構・遺物を、第3巻は東部団地遺跡全体の縄文時代と中・近世の遺構・遺物を収録する予定である。

6　調査の組織及び調査担当者、調査員については、本文の「Ⅰ、発掘調査に至る経過と調査の組織」をご参照願いたい。

7　本書に係わる遺物の整理は、中澤充裕（担当者）、唐澤保之（担当者）、中束彰子（調査員）が中心となって行った。

8　本書の作成に係わる整理作業は、昭和56年度から実施されたが、昭和58年度からは発掘調査に直接携わった者を中心に編集・執筆委員を委嘱し、報告書の整理・刊行のための組織化を計った。

編　集　委　員

松　島　栄　治（前橋第二高校教諭）
松　本　浩　一（群馬県立埋蔵文化財センター次長）
相　澤　貞　順（前橋市立女子高校教諭）
中　澤　充　裕（旧姓福田、前橋市立芳賀中学校教諭）
福　田　紀　雄（前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係長）
唐　澤　保　之（同上、主任）

執　筆　委　員

川　合　　功（群馬大学附属中学校教官）
中　村　富　夫（群馬県教育委員会文化財保護課指導主事）
木　部　日出雄（前橋市立天神小学校教諭）
石　川　克　博（群馬県史編さん室専門員）
白　石　凌　海（東福寺）
富　澤　敏　弘（群馬県教育委員会文化財保護課文化財保護主事）
井　野　誠　一（赤堀村立赤堀小学校教諭）
飯　塚　　誠（群馬県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）
川　崎　　始（大胡町立大胡小学校教諭）
田　口　正　美（前橋市立荒砥中学校教諭）
杉　浦　つや子（佐波郡東村立東小学校教諭）
唐　澤　裕　美（旧姓入内島、前橋市立東小学校教諭）
中　束　彰　子
江　原　　清（前橋市永明公民館主任）
松　村　親　樹（前橋市収税課主事）
鵜　木　晋　一（前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係主事）

中　野　和　夫（同上、主事）
福　田　瑞　穂（同上、主事）
近　藤　昭　一（同上、主事）

9　本書の編集は、上記編集委員によるが、基本的な編集方針については、上記組織化以前に事務局で決定したものである。事務局側の編集は、整理開始の昭和56年度を中澤充裕が、昭和57・58年度を唐澤保之が担当した。執筆は編集委員と執筆委員で行った。文末には文責を明記した。

10　本書を作成するのにあたり、遺物・図面整理、図版作成等に対し、下記の方々の手を煩わした。記して感謝の意を表するものである。

中東彰子（調査員）、金井君江(調査員)、粟岡エミ子、青柳宏枝、安藤友美、鬼形美由起、亀井弘美、岸朱美、木部理有子、佐藤久実子、佐藤里恵、柴崎まさ子、渋川則子、白川栄恵、城田和泉、新保一美、須田まさえ、須藤圭子、竹内敏江、橋本礼子、福島裕子、布施恵子、洞口恵美子、江部美鈴（旧姓渡辺）

11　遺物写真の撮影は、新保一美、城田和泉が行った。

12　航空写真の撮影は、前橋市在住たつみ写真スタジオの宇貫達男氏による。

13　本書の各種一覧書は、新保一美、須藤圭子の両名が中心になって作成した。

14　発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸氏、諸機関に御協力をいたたいた。記して感謝の意を表するものである。

新井　房夫（群馬大学教授）
飯島　静男
石川正之助（群馬県史編さん室補佐兼専門委員）
井上　唯雄（群馬県教育委員会文化財保護課参事）
大江　正行（群馬県埋蔵文化財センター主任）
桂　　敬（東京工業大学製鉄址研究会）
高塚　秀治（同　上）
右島　和夫（群馬県教育委員会文化財保護課指導主事）
三辻　利一（奈良教育大学教授）
宮本長二郎（奈良国立文化財研究所）
東京工業大学製鉄址研究会

15　発掘調査にあたっては、担当者・調査員の他に約100名に及ぶ発掘作業員と事務員による御協力があった。この方々の協力なしでは発掘調査及び報告書の作成は成し得なかっあであろう。巻末ではあるが、記して感謝の意を表するしだいである（奥付参照）。

16　関係図面及び出土遺物の整理・保管は、前橋市教育委員会教育課文化財保護係が行っている。

凡　　例

1　本書における遺構記号は次のように表わす。（　）の略称は主に付図で使用する

J……縄文式土器を伴う遺構

例　J１号住居跡（略称J－１）、J１号土壙（略称 JP－１）

H……土師器を伴う遺構

例　H１号住居跡（略称H－１）、H１号土壙（略称 HP－１）

K……掘立柱建物跡

例　１号掘立柱建物跡（略称K－１）

T……製鉄址

例　１号製鉄址（略称T－１）

W……溝

例　１号溝（略称W－１）

F……B軽石降下後の土壙

例　F１号土壙（略称 FP－１）

2　芳賀東部団地遺跡では、西側台地から調査を始めている。従って、東側台地分を収録した本書の遺構番号は、西側台地の続きとなるため、各遺構は途中番号から始まることになる。また、昭和55年度調査分については、各遺構の通算番号の後に、55年度遺構番号を（　）で表わした。

3　遺構挿図中のセクション・エレベーションの基準線標高は、「L.」または基準線上の数値である。掘立柱建物跡の基準線標高は、挿図の左隅に記載してある。同じ図中でその標高以外のものは、その部分の基準線上に数値を入れた。

4　本書における遺構の実測図は1/60、遺物の実測図は1/4を原則とする。遺構・遺物によってはその限りではないものもある。

5　本書で使用している竪穴式住居跡の部位名称及びスクリーントーンは、遺構見本図のとおりである。

6　遺物実測図の表現方法は、見本図のとおりである。

7　遺構の記述は、原則として下記の竪穴式住居跡の記述方法に準じたが、古墳等は原則の限りではない。また、条件次第で適宜省略した。

位置　グリッド上、及び調査区域全体の中の位置。位置する場所の地形、周囲の遺構との関係。

形状　形・規模・壁・隅角・周溝・方位・張り出し等の施設。面積は1/20図上で、プラニメーターにより３回計測し、その平均値。方位は長軸方向で測定。

床面　踏み固め部分、床面の起伏具合、貼床、焼土の散布状況等。

ピット　位置・形状・傾き・柱痕の有無及び柱痕径・規模・その他。

炉　位置・形態・規模・構造・焼土の厚さ等。

カマド　位置・構築材・形・規模・火床面と住居床面との比高差等。

貯蔵穴　位置・形状・規模。

遺物　種類・出土位置・出土状況・床面とのレベル差等。

テフラ　純層またはそれに近い状態で認められた場合は、その種類及び床面からの距離。その他。

重複関係　重複している遺構名・重複箇所・新旧関係等。

その他　遺構の性格に係わること、または特記事項。

8　遺構挿図中の方位は、磁北を表わす。

9　掘立柱建物跡（K）のピット番号は、原則として北東隅をＰ１として、反時計回りに番号をつけている。

10　遺物の記述は、原則として土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、石製品、その他の順で行っている。記述内容は、器種名、器形形状の特徴、成形及び調整法、付着物等である。

11　遺物挿図で、遺物番号のとなりに（覆）とあるものは遺構内覆土中出土、（カ）とあるものはカマド内出土を表わし、それ以外のものは、原則として発掘調査時に床面ないし床面付近で出土したものを意味する。

12　本文中の遺物写真の縮尺は、不統一である。

13　遺物写真中の遺物番号と遺物挿図の番号は、対応させている。

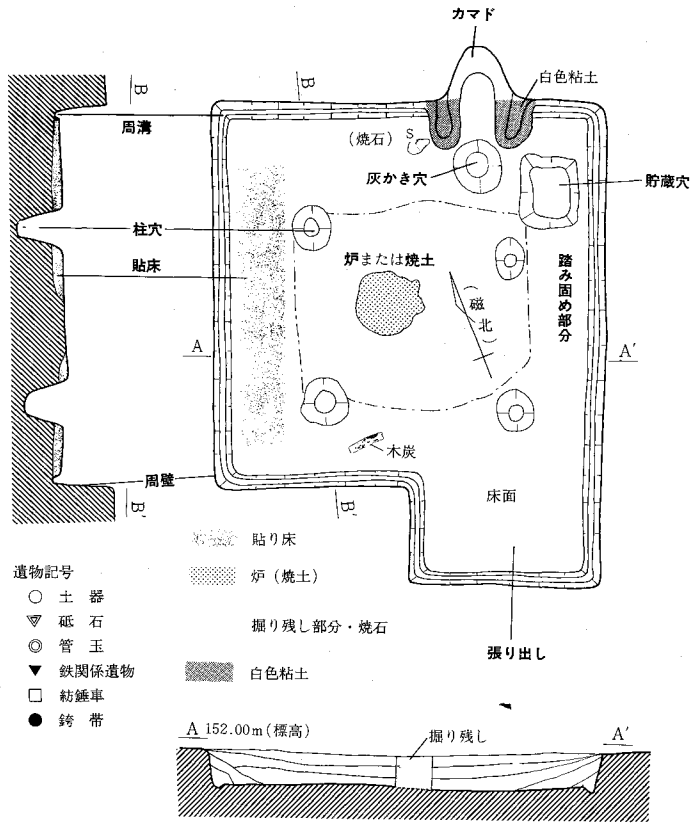
14　土器の各器種ごとの名称は、便宜的に使用したもので、その機能を検討した上で使用しているものではない。

　従って「――型土器」の略称と考えられたい。

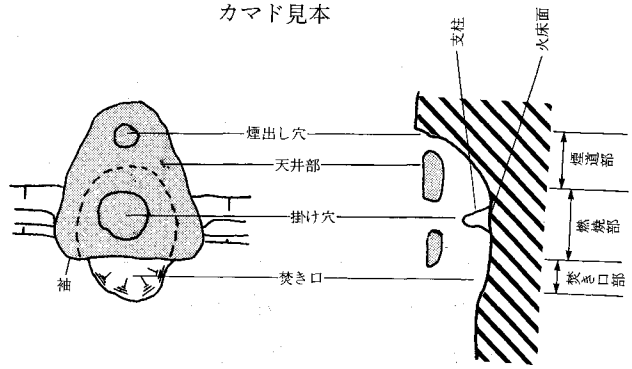
15　溝及び溝状遺構地層断面の「N・S、E・W」は方向を示す。

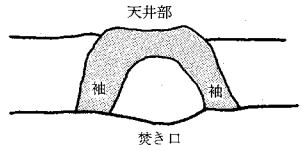
16　竪穴式住居跡と掘立柱建物跡は、図版等のつごうで遺構順になっていないものも若干ある。その場合、前後の頁または挿図目次をご参照願いたい。重複している場合は原則として若い遺構番号の所で扱っている。

竪穴式住居跡見本

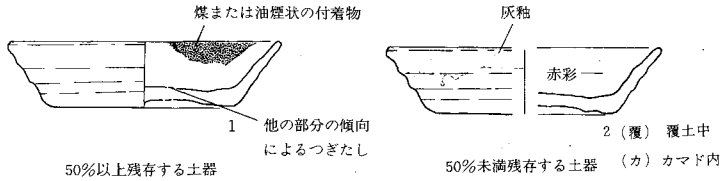


カマド見本





遺物見本



目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
　本文目次
　挿図目次

Ⅰ　発掘調査に至る経過と調査の組織 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 14
Ⅲ　調査及び整理の経過 …… 19
Ⅳ　調査の方法 …… 23
Ⅴ　基本層序 …… 24
Ⅵ　遺構と遺物 …… 25
　1　概　　要 …… 25
　2　古　　墳 …… 26
　3　竪穴式住居跡 …… 41
　4　竪穴遺構 …… 257
　5　堀立柱建物跡 …… 259
　6　製鉄址 …… 323
　7　溝 …… 330
　8　土　　壙 …… 342
Ⅶ　化学分析 …… 352
　1　芳賀東部団地遺跡出土土器の胎土分析 …… 352
　2　群馬県前橋市芳賀東部団地遺跡出土滓の分析について …… 357
Ⅷ　ま　と　め …… 359
　1　芳賀東部団地の古墳 …… 359
　2　奈良・平安時代の土器の分類について …… 361
Ⅸ　結　　語 …… 378

写真図版

巻頭図版

1　赤城南麓航空写真（遺跡地遠望）
2　遺跡全体航空写真
3　遺跡全体航空写真
　竪穴式住居跡・掘立柱建物跡群
4　掘立柱建物跡群
　4号製鉄址
5　方形の柱穴を持つ掘立柱建物跡（149号掘立柱建物跡）
　F・Aの堆積状況（H449号住居跡）
　掘立柱建物跡の調査のようす
　竪穴式住居跡の調査のようす

付図1　1号墳・4号墳地層断面図
付図2　遺跡全体図（第1巻分）
付図3　芳賀東部団地遺跡全体の遺構配置概念図
付図4　土壙の時代別色塗り図

挿 図 目 次

図－1　芳賀地区地形図……14
図-1-1　芳賀東部団地遺跡現形図……15
図－2　遺跡の位置と周辺の遺跡……16
図－3　芳賀東部団地遺跡年度別調査地区図……19
図－4　グリッド模式図……23
図－5　基本層序……24
図－6　1号古墳全体及び復元図……26
図－7　1号古墳石室実測図……27
図－8　1号古墳遺物出土状態・石室断面図……28
図－9　1号古墳出土遺物実測図（土器・他）……29
図－10　1号古墳出土遺物実測図（刀）……30
図－11　1号古墳出土遺物実測図（鉄製品）……31
図－12　2号古墳全体図及び地層断面実測図……33
図－13　2号古墳石室実測図……34
図－14　2号古墳出土遺物実測図……35
図－15　3号古墳全体図……36
図－16　3号古墳周掘地層断面実測図……37
図－17　3号古墳出土遺物実測図……38
図－18　4号古墳出土遺物実測図……38
図－19　4号古墳全体図……39
図－20　4号古墳周掘地層断面実測図……40
図－21　H267号住居跡実測図……42
図－22　H267号住居跡出土遺物実測図……42
図－23　H268号住居跡実測図……43
図－24　H269号住居跡実測図……43
図－25　H270号住居跡実測図……44
図－26　H270号住居跡出土遺物実測図……44
図－27　H271号住居跡実測図……45
図－28　H271号住居跡出土遺物実測図……45
図－29　H272号住居跡実測図……46
図－30　H272号住居跡出土遺物実測図……46
図－31　H273号住居跡実測図……47
図－32　H273号住居跡出土遺物実測図……47
図－33　H274号住居跡実測図……48
図－34　H274号住居跡出土遺物実測図……48
図－35　H275号住居跡実測図……49
図－36　H275号住居跡出土遺物実測図……49
図－37　H276号住居跡実測図……50
図－38　H276号住居跡出土遺物実測図……50
図－39　H277号住居跡実測図……51
図－40　H277号住居跡出土遺物実測図……51
図－41　H278号住居跡実測図……52
図－42　H278号住居跡出土遺物実測図……52
図－43　H279号住居跡実測図……53
図－44　H279号住居跡出土遺物実測図……53
図－45　H280号住居跡実測図……54
図－46　H281号住居跡実測図……54
図－47　H280号住居跡出土遺物実測図……55
図－48　H282号住居跡実測図……56
図－49　H282号住居跡出土遺物実測図……56
図－50　H283号住居跡実測図……57
図－51　H283号住居跡出土遺物実測図……57
図－52　H284号住居跡実測図……58
図－53　H284号住居跡出土遺物実測図……58
図－54　H285号住居跡実測図……59
図－55　H285号住居跡出土遺物実測図……59
図－56　H286号住居跡実測図……60
図－57　H286号住居跡出土遺物実測図……61
図－58　H287号住居跡実測図……62
図－59　H286・287・288号住居跡関係図……62
図－60　H287号住居跡出土遺物実測図……62
図－61　H288号住居跡実測図……63
図－62　H288号住居跡出土遺物実測図……63
図－63　H289号住居跡実測図……64
図－64　H289号住居跡出土遺物実測図……64
図－65　H290号住居跡実測図……65
図－66　H290号住居跡出土遺物実測図……65
図－67　H291号住居跡実測図……66
図－68　H291号住居跡出土遺物実測図……66
図－69　H292号住居跡実測図……67
図－70　H292号住居跡出土遺物実測図……67
図－71　H293号住居跡実測図……68
図－72　H293号住居跡出土遺物実測図……68
図－73　H294号住居跡実測図……69
図－74　H294号住居跡出土遺物実測図……69
図－75　H295号住居跡実測図……70
図－76　H295号住居跡出土遺物実測図……71
図－77　H296号住居跡実測図……72
図－78　H296号住居跡出土遺物実測図……72
図－79　H297号住居跡実測図……73
図－80　H297号住居跡出土遺物実測図……73
図－81　H298号住居跡実測図……74

図--82　H298号住居跡出土遺物実測図 ……74
図—83　H299号住居跡実測図 ……75
図—84　H299号住居跡出土遺物実測図 ……75
図—85　H300号住居跡実測図 ……76
図—86　H300号住居跡出土遺物実測図 ……76
図—87　H301・302・311号住居跡実測図 ……77
図—88　H301号住居跡出土遺物実測図 ……78
図—89　H303号住居跡実測図 ……79
図—90　H303号住居跡出土遺物実測図 ……79
図—91　H304号住居跡実測図 ……80
図—92　H304号住居跡出土遺物実測図 ……81
図—93　H305号住居跡実測図 ……82
図—94　H305号住居跡出土遺物実測図 ……82
図—95　H306・307号住居跡実測図……83
図—96　H306・307号住居跡出土遺物実測図……84
図—97　H308・309号住居跡実測図……85
図—98　H308号住居跡出土遺物実測図 ……86
図—99　H308・309号住居跡出土遺物実測図……87
図—100　H310号住居跡実測図 ……88
図—101　H312号住居跡実測図 ……88
図—102　H312号住居跡出土遺物実測図 ……89
図—103　H313号住居跡実測図 ……90
図—104　H313号住居跡出土遺物実測図 ……90
図—105　H314号住居跡実測図 ……91
図—106　H314号住居跡出土遺物実測図 ……91
図—107　H315号住居跡実測図 ……92
図—108　H308・309・315号住居跡関係図 ……92
図—109　H315号住居跡出土遺物実測図 ……93
図—110　H316号住居跡実測図 ……94
図—111　H316号住居跡出土遺物実測図 ……94
図—112　H317号住居跡実測図 ……95
図—113　H317号住居跡出土遺物実測図 ……95
図—114　H318号住居跡実測図 ……96
図—115　H318号住居跡出土遺物実測図 ……96
図—116　H320号住居跡実測図 ……96
図—117　H320号住居跡出土遺物実測図 ……96
図—118　H319号住居跡実測図 ……97
図—119　H319号住居跡出土遺物実測図 ……97
図—120　H322号住居跡実測図 ……98
図—121　H322号住居跡出土遺物実測図 ……98
図—122　20—1区部分図（H354・365・366号住居跡周辺）……99
図—123　H354・365・366号住居跡重複関係図……100
図—124　H354・365・366号住居跡出土遺物実測図101
図—125　H355号住居跡実測図 ……102
図—126　H355号住居跡出土遺物実測図 ……102
図—127　H356号住居跡実測図 ……103
図—128　H356号住居跡出土遺物実測図 ……103
図—129　H357号住居跡実測図 ……104
図—130　H357号住居跡出土遺物実測図 ……105
図—131　H357・359・395・396号住居跡重複関係図105
図—132　H358号住居跡実測図 ……106
図—133　H358号住居跡出土遺物実測図 ……106
図—134　H359号住居跡実測図 ……107
図—135　H395号住居跡出土遺物実測図 ……109
図—136　H360・361号住居跡実測図……110
図—137　H360号住居跡出土遺物実測図 ……111
図—138　H362号住居跡実測図 ……112
図—139　H362号住居跡出土遺物実測図 ……112
図—140　H363号住居跡実測図 ……113
図—141　H363号住居跡出土遺物実測図 ……113
図—142　H363・364号住居跡位置図……113
図—143　H364号住居跡実測図 ……114
図—144　H364号住居跡出土遺物実測図 ……115
図—145　H367号住居跡実測図 ……116
図—146　H367・368号住居跡重複関係図……116
図—147　H368号住居跡実測図 ……117
図—148　H368号住居跡出土遺物実測図 ……117
図—149　H369号住居跡実測図 ……118
図—150　H369号住居跡出土遺物実測図 ……118
図—151　H370号住居跡実測図 ……119
図—152　H370号住居跡出土遺物実測図 ……119
図—153　H371号住居跡実測図 ……119
図—154　H371号住居跡出土遺物実測図 ……120
図—155　H372号住居跡実測図 ……121
図—156　H372号住居跡出土遺物実測図 ……121
図—157　H373号住居跡実測図 ……122
図—158　H373号住居跡出土遺物実測図 ……122
図—159　H374号住居跡実測図 ……123
図—160　H374号住居跡出土遺物実測図 ……123
図—161　H375・383号住居跡実測図……124
図—162　H375・383号住居跡出土遺物実測図……125
図—163　H376号住居跡実測図 ……126
図—164　H376号住居跡出土遺物実測図 ……127
図—165　H377号住居跡実測図 ……128
図—166　H377号住居跡出土遺物実測図 ……128
図—167　H378号住居跡実測図 ……129
図—168　H378号住居跡出土遺物実測図……130

図—169　H379号住居跡実測図 ……131
図—170　H379号住居跡出土遺物実測図 ……131
図—171　H380号住居跡実測図 ……132
図—172　H380号住居跡出土遺物実測図 ……132
図—173　H381号住居跡実測図 ……133
図—174　H381号住居跡出土遺物実測図 ……133
図—175　H382号住居跡実測図 ……134
図—176　H382号住居跡、１号墳関係図 ……134
図—177　H382号住居跡出土遺物実測図 ……135
図—178　H384号住居跡実測図 ……136
図—179　H385号住居跡実測図 ……137
図—180　H385号住居跡出土遺物実測図 ……137
図—181　H386号住居跡実測図 ……138
図—182　H387号住居跡実測図 ……138
図—183　H387号住居跡出土遺物実測図 ……139
図—184　H389号住居跡実測図 ……139
図—185　H389号住居跡出土遺物実測図 ……139
図—186　H388号住居跡実測図 ……140
図—187　H390号住居跡実測図 ……141
図—188　H390号住居跡出土遺物実測図 ……142
図—189　H391号住居跡実測図 ……143
図—190　H391号住居跡出土遺物実測図 ……143
図—191　H392号住居跡実測図 ……144
図—192　H393号住居跡実測図 ……145
図—193　H393号住居跡出土遺物実測図 ……145
図—194　H394号住居跡実測図 ……146
図—195　H397号住居跡実測図 ……146
図—196　H397号住居跡出土遺物実測図 ……147
図—197　H398号住居跡実測図 ……148
図—198　H398号住居跡出土遺物実測図 ……148
図—199　H399号住居跡実測図 ……149
図—200　H399号住居跡出土遺物実測図 ……149
図—201　H400号住居跡実測図 ……150
図—202　H400号住居跡出土遺物実測図 ……150
図—203　H401号住居跡実測図 ……151
図—204　H401号住居跡出土遺物実測図 ……151
図—205　H402号住居跡実測図 ……151
図—206　H403号住居跡実測図 ……152
図—207　H403号住居跡出土遺物実測図 ……152
図—208　H404号住居跡実測図 ……153
図—209　H404号住居跡出土遺物実測図 ……153
図—210　H405号住居跡実測図 ……154
図—211　H405号住居跡出土遺物実測図 ……155
図—212　H406号住居跡実測図 ……156
図—213　H407号住居跡実測図 ……156
図—214　H408号住居跡実測図 ……157
図—215　H409号住居跡実測図 ……157
図—216　H407・408号住居跡出土遺物実測図……158
図—217　H410号住居跡実測図 ……158
図—218　H411号住居跡実測図 ……159
図—219　H411号住居跡出土遺物実測図 ……159
図—220　H412号住居跡実測図 ……160
図—221　H412号住居跡出土遺物実測図 ……160
図—222　H413号住居跡実測図 ……161
図—223　H413号住居跡出土遺物実測図 ……161
図—224　H414号住居跡実測図 ……162
図—225　H414号住居跡出土遺物実測図 ……163
図—226　H415号住居跡実測図 ……164
図—227　H416号住居跡実測図 ……165
図—228　H416号住居跡出土遺物実測図 ……166
図—229　H417号住居跡実測図 ……167
図—230　H417号住居跡出土遺物実測図 ……167
図—231　H418号住居跡実測図 ……168
図—232　H418号住居跡出土遺物実測図 ……170
図—233　H419号住居跡実測図 ……171
図—234　H419号住居跡出土遺物実測図 ……171
図—235　H420号住居跡実測図 ……172
図—236　H420号住居跡出土遺物実測図 ……172
図—237　H421号住居跡実測図 ……173
図—238　H421号住居跡出土遺物実測図 ……173
図—239　H422号住居跡実測図 ……174
図—240　H422号住居跡出土遺物実測図 ……175
図—241　H423号住居跡実測図 ……176
図—242　H425号住居跡実測図 ……176
図—243　H424号住居跡実測図 ……177
図—244　H424号住居跡出土遺物実測図 ……177
図—245　H426号住居跡実測図 ……178
図—246　H426号住居跡出土遺物実測図 ……179
図—247　H427号住居跡実測図 ……180
図—248　H428号住居跡実測図 ……181
図—249　H428号住居跡出土遺物実測図 ……182
図—250　H429号住居跡実測図 ……183
図—251　H429号住居跡出土遺物実測図 ……183
図—252　H430号住居跡実測図 ……184
図—253　H430号住居跡出土遺物実測図 ……184
図—254　H431号住居跡実測図 ……185
図—255　H431号住居跡出土遺物実測図(1) ……186
図—256　H431号住居跡出土遺物実測図(2) ……187

図—257　H432号住居跡実測図 ……188
図—258　H432号住居跡出土遺物実測図 ……188
図—259　H433号住居跡実測図（建て替え後） ……189
図—260　H433号住居跡実測図（建て替え前） ……190
図—261　H433号住居跡出土遺物実測図 ……191
図—262　H434号住居跡実測図 ……192
図—263　H434号住居跡出土遺物実測図 ……192
図—264　H435号住居跡実測図 ……193
図—265　H435号住居跡出土遺物実測図 ……193
図—266　H436号住居跡実測図 ……194
図—267　H437号住居跡実測図 ……194
図—268　H438号住居跡実測図 ……195
図—269　H438号住居跡出土遺物実測図 ……195
図—270　H439号住居跡実測図 ……196
図—271　H439号住居跡出土遺物実測図 ……197
図—272　H440号住居跡実測図 ……198
図—273　H440号住居跡出土遺物実測図(1) ……198
図—274　H440号住居跡出土遺物実測図(2) ……199
図—275　H440号住居跡出土遺物実測図(3) ……200
図—276　H441号住居跡実測図 ……200
図—277　H442号住居跡実測図 ……201
図—278　H442号住居跡出土遺物実測図 ……202
図—279　H443号住居跡実測図 ……203
図—280　H443号住居跡出土遺物実測図 ……203
図—281　H444号住居跡実測図 ……204
図—282　H444号住居跡出土遺物実測図 ……204
図—283　H445号住居跡実測図 ……205
図—284　H445号住居跡出土遺物実測図 ……205
図—285　H446号住居跡実測図 ……206
図—286　H446号住居跡出土遺物実測図 ……206
図—287　H447号住居跡実測図 ……207
図—288　H447号住居跡出土遺物実測図 ……207
図—289　H448号住居跡実測図 ……208
図—290　H448号住居跡出土遺物実測図 ……208
図—291　H449号住居跡実測図 ……209
図—292　H449号住居跡出土遺物実測図 ……209
図—293　H450号住居跡実測図 ……210
図—294　H450号住居跡出土遺物実測図 ……210
図—295　H451号住居跡実測図 ……211
図—296　H451号住居跡出土遺物実測図 ……211
図—297　H452号住居跡実測図 ……212
図—298　H453号住居跡実測図 ……212
図—299　H453号住居跡出土遺物実測図 ……213
図—300　H454号住居跡実測図 ……213
図—301　H455号住居跡実測図 ……214
図—302　H455号住居跡出土遺物実測図 ……214
図—303　H457号住居跡実測図 ……215
図—304　H456号住居跡実測図 ……216
図—305　H456号住居跡出土遺物実測図 ……216
図—306　H458号住居跡実測図 ……217
図—307　H458号住居跡出土遺物実測図 ……217
図—308　H459号住居跡実測図 ……218
図—309　H460号住居跡実測図 ……218
図—310　H460号住居跡出土遺物実測図 ……219
図—311　H461号住居跡実測図 ……219
図—312　H461号住居跡出土遺物実測図 ……219
図—313　H462号住居跡実測図 ……220
図—314　H462号住居跡出土遺物実測図 ……220
図—315　H463号住居跡実測図 ……221
図—316　H464号住居跡実測図 ……222
図—317　H464号住居跡出土遺物実測図 ……222
図—318　H465号住居跡実測図 ……223
図—319　H465号住居跡出土遺物実測図 ……223
図—320　H466号住居跡実測図 ……224
図—321　H466号住居跡出土遺物実測図 ……224
図—322　H467・468号住居跡実測図……225
図—323　H467・468号住居跡出土遺物実測図……226
図—324　H466・468号住居跡滑石製未製品実測図…226
図—325　H469号住居跡実測図 ……227
図—326　H469号住居跡出土遺物実測図 ……227
図—327　H470号住居跡実測図 ……228
図—328　H470号住居跡出土遺物実測図 ……228
図—329　H471号住居跡実測図 ……229
図—330　H471号住居跡出土遺物実測図 ……229
図—331　H472号住居跡実測図 ……230
図—332　H472号住居跡出土遺物実測図 ……230
図—333　H473号住居跡実測図 ……231
図—334　H473号住居跡出土遺物実測図 ……231
図—355　H474号住居跡実測図 ……232
図—336　H474号住居跡出土遺物実測図 ……232
図—337　H475号住居跡実測図 ……233
図—338　H476号住居跡実測図 ……234
図—339　H476号住居跡出土遺物実測図 ……234
図—340　H477号住居跡実測図 ……235
図—341　H478号住居跡実測図 ……235
図—342　H478号住居跡出土遺物実測図 ……236
図—343　H479号住居跡実測図 ……236
図—344　H495号住居跡実測図 ……237

図—345　H３号竪穴遺構実測図……257
図—346　H４号竪穴遺構実測図……258
図—347　H５号竪穴遺構実測図……258
図—348　116号掘立柱建物跡実測図 ……260
図—349　117号掘立柱建物跡実測図 ……261
図—350　117・119号掘立柱建物跡重複関係図……261
図—351　118号掘立柱建物跡実測図 ……262
図—352　119号掘立柱建物跡実測図 ……263
図—353　120号掘立柱建物跡実測図 ……264
図—354　掘立柱建物跡配置図（1） ……265
図—355　121号掘立柱建物跡実測図 ……267
図—356　122号掘立柱建物跡実測図 ……268
図—357　122・123号掘立柱建物重複関係図……269
図—358　123号掘立柱建物跡実測図 ……269
図—359　124号掘立柱建物跡実測図 ……270
図—360　125号掘立柱建物跡実測図 ……271
図—361　135号掘立柱建物跡実測図 ……272
図—362　136号掘立柱建物跡実測図 ……273
図—363　137号掘立柱建物跡実測図 ……274
図—364　138号掘立柱建物跡実測図 ……275
図—365　138号掘立柱建物跡出土遺物実測図 ……275
図—366　139号掘立柱建物跡実測図 ……276
図—367　140—（Ⅰ）（II）～143号掘立柱建物跡重複関係図……276
図—368　140—（Ⅰ）号掘立柱建物跡実測図……277
図—369　140—（Ⅰ）号掘立柱建物跡出土遺物実測図277
図—370　140—（II）号掘立柱建物跡実測図……278
図—371　141号掘立柱建物跡実測図 ……278
図—372　141号掘立柱建物跡出土遺物実測図 ……279
図—373　142号掘立柱建物跡実測図 ……279
図—374　143号掘立柱建物跡実測図 ……280
図—375　144号掘立柱建物跡実測図 ……281
図—376　145号掘立柱建物跡実測図 ……282
図—377　146号掘立柱建物跡実測図 ……283
図—378　146・149号掘立柱建物跡重複関係図……283
図—379　147号掘立柱建物跡実測図 ……284
図—380　147・148号掘立柱建物跡重複関係図……284
図—381　148号掘立柱建物跡 ……285
図—382　149号掘立柱建物跡実測図 ……286
図—383　150号掘立柱建物跡実測図 ……287
図—384　151・152号掘立柱建物跡重複関係図……288
図—385　151号掘立柱建物跡実測図 ……288
図—386　152号掘立柱建物跡実測図 ……289
図—387　153号掘立柱建物跡実測図 ……290
図—388　154号掘立柱建物跡実測図 ……291
図—389　155号掘立柱建物跡実測図 ……292
図—390　156号掘立柱建物跡実測図 ……293
図—391　158号掘立柱建物跡実測図 ……294
図—392　159号掘立柱建物跡実測図 ……295
図—393　159号掘立柱建物跡位置図 ……295
図—394　160号掘立柱建物跡実測図 ……296
図—395　161号掘立柱建物跡実測図 ……297
図—396　162号掘立柱建物跡実測図 ……298
図—397　163号掘立柱建物跡実測図 ……298
図—398　掘立柱建物跡配置図(2)……299
図—399　164号掘立柱建物跡実測図 ……301
図—400　165号掘立柱建物跡実測図 ……302
図—401　166号掘立柱建物跡実測図 ……302
図—402　167号掘立柱建物跡実測図 ……303
図—403　168号掘立柱建物跡実測図 ……304
図—404　168・169号掘立柱建物跡重複関係図……305
図—405　169号（Ⅰ）（II）掘立柱建物跡実測図……305
図—406　170号掘立柱建物跡実測図 ……306
図—407　171号掘立柱建物跡実測図 ……307
図—408　172号掘立柱建物跡実測図 ……308
図—409　174号掘立柱建物跡実測図 ……308
図—410　175号掘立柱建物跡実測図 ……309
図—411　176号掘立柱建物跡実測図 ……310
図—412　176・183・184号掘立柱建物跡重複関係図 310
図—413　177号掘立柱建物跡実測図 ……311
図—414　178号掘立柱建物跡実測図 ……312
図—415　182号掘立柱建物跡実測図 ……313
図—416　183号掘立柱建物跡実測図 ……313
図—417　184号掘立柱建物跡実測図 ……314
図—418　195号掘立柱建物跡実測図 ……315
図—419　（番号不明）掘立柱建物跡出土遺物実測図315
図—420　４号製鉄址遺構実測図……323
図—421　４号製鉄址出土遺物実測図（土器）……324
図—422　４号製鉄址出土遺物実測図（羽口）……325
図—423　４号製鉄址出土遺物実測図（羽口）……326
図—424　５号製鉄址遺構実測図……328
図—425　５号製鉄址出土遺物実測図（土器）……329
図—426　５号製鉄址出土遺物実測図（羽口）……329
図—427　39号溝実測図……330
図—428　遺跡内溝全体図……331
図—429　40号溝実測図……333
図—430　45号溝実測図……333
図—431　46号溝実測図……334

図—432　46号溝出土遺物実測図……334
図—433　47号溝実測図……334
図—434　48号溝実測図……335
図—435　48号溝出土遺物実測図……335
図—436　49号溝（50・51号溝）実測図……335
図—437　50号溝（49号溝）実測図……336
図—438　50号溝出土遺物実測図……336
図—439　51号溝（52号溝）実測図(1)……336
図—440　51号溝実測図(2)……337
図—441　52号溝実測図……337
図—442　51・52号溝出土遺物図……337
図—443　53号溝（溝状遺構）実測図……338
図—444　54号溝（45号溝）遺構実測図……338
図—445　55溝出土遺物実測図……339
図—446　56号溝実測図……339
図—447　56号溝出土遺物実測図……339
図—448　58号溝実測図……340
図—449　59号溝実測図……340
図—450　60号溝実測図……340
図—451　61号溝実測図……340
図—452　溝状遺構1実測図……341
図—453　溝状遺構2（49・50号溝）実測図……341
図—454　H76号土壙遺構実測図……342
図—455　H76号土壙出土遺物実測図……342
図—456　H78号土壙遺構実測図……343
図—457　H83・84号土壙遺構実測図……343
図—458　H102号土壙遺構実測図……343
図—459　H77号土壙遺構実測図……344
図—460　H60号土壙遺構実測図……344
図—461　H81号土壙遺構実測図……344
図—462　H33号土壙遺構実測図……345
図—463　H34号土壙遺構実測図……345
図—464　H57号土壙遺構実測図……345
図—465　H63号土壙遺構実測図……346
図—466　H67号土壙遺構実測図……346
図—467　H67号土壙出土遺物実測図……346
図—468　H86号土壙遺構実測図……346
図—469　H100号土壙遺構実測図……346
図—470　H101号土壙遺構実測図……347
図—471　大H7号土壙遺構実測図……347
図—472　H96号土壙遺構実測図……347
図—473　H99号土壙遺構実測図……347
図—474　H79号土壙遺構実測図……348
図—475　H92号土壙遺構実測図……348
図—476　H62号土壙遺構実測図……348
図—477　H95号土壙遺構実測図……348
図—478　H103号土壙遺構実測図……349
図—479　F182号土壙遺構実測図……349
図—480　F182号土壙出土遺物実測図……349
図—481　芳賀東部団地遺跡出土土師器のK量……352
図—482　芳賀東部団地遺跡出土土師器の C_a 量……353
図—483　芳賀東部団地遺跡出土土師器の F_e 量……353
図—484　芳賀東部団地遺跡出土土師器の R_b 量……354
図—485　芳賀東部団地遺跡出土土師器の K/C_a-R_b/S_r 分布図……354
図—486　H387号住類土器群……361
図—487　H283号住類土器群……363
図—488　H294号住類土器群……364
図—489　H275号住類土器群A(1)……365
図—490　H275号住類土器群A(2)……366
図—491　H275号住類土器群B……367
図—492　H271号住類土器群……369
図—493　H267号住類土器群……370
図—494　H273号住類土器群(1)……371
図—495　H273号住類土器群(2)……372
図—496　H272号住類土器群……373
図—497　H290号住類土器群……373

芳賀東部団地遺跡 I

Ⅰ　発掘調査に至る経過と調査の組織

1　発掘調査がはじまるまで〈昭和45年度～47年度〉

昭和35年、「消費都市から生産都市」への転換を目標に、10ケ年総合整備計画を開始した前橋市は群馬県と共同で「前橋工業団地造成組合」を発足させ、首都圏市街地開発区域としての指定も受け、工業団地造成事業に着手した。その後、「調和と秩序ある近代都市前橋」の実現に努め、工業団地に付随して住宅団地や流通団地も計画、造成し、これらの事業は今日まで引継がれてきている。こうした造成計画の一部に芳賀地区団地造成計画もあった。芳賀北部団地は住宅団地として昭和45年に用地買収を始め、芳賀西部工業団地、芳賀東部団地（住宅団地と工業団地）はそれぞれ昭和46年から用地買収が始められた。

群馬県内において大規模な開発が計画され、推進されるのも芳賀地区団地造成と相前後した時期である。鉄道建設審議会が運輸省に東北・上越・成田の三新幹線建設を答申したのは昭和46年１月であり、同年８月に日本道路公団東京建設局が関越自動車道の計画路線（東松山～渋川間）を発表、９月には上武国道の路線発表がなされた。この時期、すでに進められていた群馬用水事業、東北自動車道があり、一挙に県内の開発が進められようとした時期である。これら開発計画のなかで、特に関越自動車道が上野国分寺と国分尼寺との中間を通過する計画であることから「国分寺を守る会」が結成され、国分寺遺跡を中心として、大規模な開発から文化財を保護しようとする運動が展開された。市民の文化財保護に対する関心が一段と高まってきたのがこの頃からである。

こうした社会状況のなかで、芳賀地区団地造成に伴う埋蔵文化財の問題が行政上最初にとりあげられたのは昭和45年11月である。前橋工業団地造成組合（管理者は群馬県知事、事務局は前橋市役所内）は市教育委員会を経由し、県教育委員会に対し、団地造成に伴う埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。これについて、県教育委員会は前橋工業団地造成組合と前橋市教育委員会とに次のような回答を出した。

1　埋蔵文化財の取扱いについては、現状保存を検討され、その被害を最小限にとどめること。
　この現状保存の方法等については前橋市教育委員会の意見を尊重されたい。
2　やむを得ず破壊する埋蔵文化財については、事前の調査を実施し、完全な記録保存をとること。
　この場合の調査については、前橋市教育委員会の指導を受け、貴組合において実施されたい。
3　事前調査に要する費用については原因者である貴組合において負担されたい。
4　その他、文化財保護上必要な助言、指導等については、当教育委員会においてもできるだけの措置をはかるものである。

その後、昭和46年度には前橋工業団地造成組合と市教育委員会との間で、団地造成、埋蔵文化財の取扱いについて何の連絡もなかった。昭和48年２月になり、埋蔵文化財の発掘調査を市教育委員会へ依頼する方向で話し合いは進められ、昭和48年３月20日にいたり、前橋工業団地造成組合から市教育委員会へ芳賀北部団地内の埋蔵文化財発掘調査が正式に依頼された。これを受けて、市教育委員会では３月27日、文化庁への埋蔵文化財発掘届を県教育委員会へ提出した。４月17日、県教育委員会文化財保護課ではこの届出書では問題があるとして、下記理由を付けて市教育委員会へ返却してきた。

1　担当者１名では、広大な地域の発掘調査には問題があると思料されること（調査計画不明）。
2　該地域は、縄文時代遺跡としては、相当重要なものと考えられるので、調査の慎重を要すること。
3　団地造成計画が提出資料だけでは不十分であること。
4　前橋工業団地造成組合と市教育委員会とで、この発掘調査について、基本的な契約が締結されているか否か不明であること。（両者の十分な事前協議がなされているか。）

2　芳賀北部団地遺跡の調査〈昭和48・49年度〉

昭和48年度、市教育委員会は芳賀北部団地遺跡の発掘調査を実施するに当り、まず、この県教育委員会の措置への対応が必要であった。市教育委員会では前橋工業団地造成組合と具体的に協議を重ね、芳賀団地造成地内埋蔵文化財発掘調査団を結成（表１）し、調査団規約（表２）を作成した。

それとともに、調査団と前橋工業団地造成組合との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」(表3)を締結した。

表－1　芳賀北部団地遺跡発掘調査団構成（昭和48年度）

団長	岩渕　威	教育次長
副団長	藤島清多	都市計画部長
顧問	藤井精一	助役
〃	伊藤　順	教育長
〃	阿部正六	総務部長
〃	内山博治	商工部長
〃	清水　実	財政課長
幹事	富沢　宏	社会教育課長
〃	上原有良司	学校教育課長
〃	小森益男	工業課長
〃	宮田勝己	宅地開発課長
〃	金井隆作	総務課長（教育委員会）
参与	松田徳松	文化財調査委員
〃	山田武麿	〃
〃	中沢右吾	〃
〃	松島栄治	〃
〃	丸山知良	〃
発掘調査担当者	相沢貞順	育英高校教諭
〃	松島栄治	前工高教諭（文化財調査員）
発掘調査員	阿久津宗二	社会教育課係長
	川合　功	社会教育課主事、現場主任
	大沼克彦	臨時職員
	小林敏夫	群馬県立聾学校教諭
	依田治雄	藤岡市立小野小学校教諭
調査補助員	小中学校教諭他教育委員会事務局職員	
事務局員	青木恒司	工業課次長
	阿部明雄	工業課主事
	今井信好	〃　主任
	主代　清	宅地開発課次長
	天野昭二	〃　工務係長
	町田趙夫	〃　主任
	大塚正夫	〃　技師
	十野正斌	社会教育課次長
	武藤　茂	〃　主任
	酒井正保	〃
	奈良友一	芳賀公民館長
	福田和代	社会教育課主事補

表－2　前橋市芳賀団地造成地内埋蔵文化財発掘調査団規約

（名　称）

第一条　本団は、芳賀団地造成地埋蔵文化財発掘調査団（以下「調査団」という。）と称する。

（所在地）

第２条　調査団の事務所は、前橋市教育委員会社会教育課内に置く。現場事務所を芳賀公民館におく。

（目　的）

第３条　本団は、芳賀団地造成地内の埋蔵文化財を発掘調査し、遺構の全容を明らかにするとともに、保存又は記録保存し、あわせて文化財保護に資することを目的とする。

（事　業）

第４条　本団は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1,　埋蔵文化財の発掘調査

2,　調査資料（遺構、遺物）の収集、整理、記録。

3,　調査報告書の作成、出版。

4,　その他

（経　費）

第５条　本団の経費は、次に掲げるもので支弁する。

1,　前橋市工業団地造成組合の事業委託料

2,　その他

（会計年度）

第６条　本団の会計年度は毎年４月１日に始まり、翌年３月31日までとする。

（役員、調査担当者等）

第７条　調査団に団長、副団長、幹事、調査担当者、調査員、調査補助員、事務局員若干名を置く。

第８条　調査団に会計監査２名をおき、団長が委嘱する。

第９条　調査団に専門委員、顧問および参与をおくことができる。

第10条　団長は調査団を代表し、副団長は団長を補佐する。調査担当者は、本団の調査を推進する。事務局は本団の調査の経理、管理等を行う。

（会　議）

第11条　会議はすべて団長が招集する。

（委　任）

第12条　調査団の運営について必要な事項は、団長が定める。

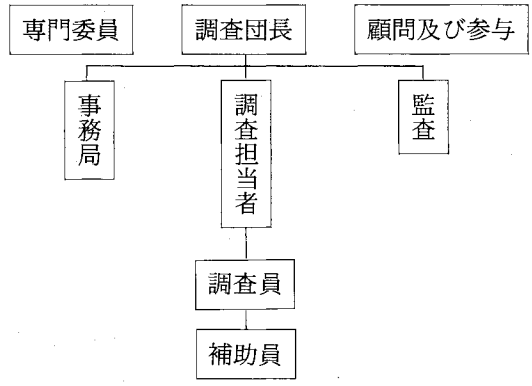
第13条　調査の事業実施にあたっては別に調査団細則で定める。

第14条　発掘調査の推進その他必要な事項は調査担当者及び調査員で運営する。

（付　則）

第15条　この規約は調査団において出席者の過半数の同意により改正または廃止することができる。

第16条　この規約は昭和48年５月７日より施行する。



表－３　埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書

群馬県前橋市芳賀北部団地造成事業地区内における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査（以下「発掘調査」という。）の実施

に関する業務（以下「業務」という。）について委託者前橋工業団地造成組合（以下「甲」という。）と受託者芳賀団地造成地内埋蔵文化財発掘調査団（以下「乙」という。）との間に次のとおり委託契約を締結する。

（総　則）

第１条　乙は、別紙の発掘調査実施計画書に従って、業務を実施するものとする。

2　乙は、業務の実施に必要な土地所有者等の承諾を取りまとめるものとし、かつ法令の規則に基づく諸届出等を甲にかわって行うものとする。

（期　間）

第２条　乙の発掘作業は、昭和48年５月１日から昭和48年10月30日までとし、昭和49年３月３０日までに業務を完了するものとする。

（費　用）

第３条　甲が業務に関する費用として、乙に支払う金額は金18,000,000円以内とする。

2　前項の費用の支払方法については、乙の業務に支障のないよう甲、乙協議して定める。

（作業の実施）

第４条　乙は、業務の実施に当って、甲の施行する事業の工程に支障のないように努めるとともに、甲は、乙の業務が円滑に実施できるよう便宜を供するものとする。

2　乙は、業務の実施に当っては、作業箇所に作業標示をし、関係者に腕章等を着用させるものとする。

（作業日誌）

第５条　乙は、発掘の実施中作業日誌を作成し、甲はその指示を求めることができるものとする。

（出土品の取扱い）

第６条　発掘された出土品の処置については、甲、乙協議のうえ乙が甲の名において法令の定めるところにより処置するものとする。

（中間報告）

第７条　甲は、必要のある場合は、乙に対し業務の進行状況について報告を求めることができるものとする。

（追加調査）

第８条　乙は、この発掘調査地区内において、さらに本格的調査を行なう必要があると認める区域については、甲と協議し、別途の発掘調査委託契約により、調査を実施するものとする。

（決算および精算）

第９条　乙は、業務が完了したときは、業務に要した費用について決算を行ない、決算書を甲に提出するものとする。

2　甲は、前項の決算書の提出を受けたときは、当該決算書にもとづき、第３条により約定した金額の範囲内において、乙と協議して精算を行うものとする。

（発掘調査報告書）

第10条　乙は、業務が完了したときは、発掘調査報告書を添えて発掘調査完了報告書を甲に提出するものとする。

（協　議）

第11条　この契約に定めない事項、または契約の事項について疑義を生じた場合は、甲、乙協議して定めるものとする。

この契約の証として、契約書２通を作成し、甲、乙それぞれ記名捺印のうえ各自１通を保有する。

昭和48年５月１日

甲　前橋工業団地造成組合
管理者　神田坤六　印

乙　前橋市千代田町一丁目8—8
芳賀団地造成地内埋蔵文化財発掘調査団
団長　岩渕　威　㊞

この契約書により発掘調査は発掘調査実施計画書（表４）に基づいて進めることとなった。

表－4　発掘調査実施計画書

1．発掘調査の目的

前橋市工業団地造成組合が芳賀団地を造成しようとするに先だち、埋蔵文化財の保存のため学術的に発掘調査を実施し、保護しようとする。

2．遺　跡　名

①	嶺町桂正田遺跡	11，882㎡（第一次調査）
②	小坂子町五反田遺跡	19，286㎡（〃二次　〃）
③	勝沢町新次郎遺跡	16，244㎡（〃三次　〃）
④	〃　勝沢城遺跡（鼻高、番城）	13，345㎡（〃四次　〃）

3．遺跡の状況

調査地区は標高155m～200m の起伏に富んだ南傾斜の土地で、地質は60cm の耕土下は関東ローム層を基盤としている。遺物の散布状況および予備調査では、縄文文化中期の遺構（住居跡）が検出され、土器、石器の出土が、かなり多い。土地所要者は前工団。

4．発掘調査団の構成　（別紙のとおり）

5．発掘作業日程　　昭和48年５月７日～49年３月

6．発掘調査委託費　　概算　1800万円　　一次調査分

7．報告書作成部数　　500部

8．その他

発掘調査は造成地域全体に20m 四方の方眼をかぶせ区画ごとに綿密な調査をし遺構を検出する。

これら条件整備をする一方、改めて４月23日、埋蔵文化財発掘届を提出した。かくして、最初の調査団会議を５月７日に開催するとともにその日から発掘調査をはじめた。昭和48年度における発掘調査は次のとおりである。

◇１次調査　昭和48年５月７日～７月21日

市教育委員会社会教育課文化財保護担当職員１名と臨時調査員１名とを中心として地元作業員の協力を得て作業が進められた。この間に発掘調査団の再編成がなされ、新たに専門委員が設置され、調査担当者、調査員が増員、委嘱された（表５）。

表－5　専門委員

専門委員	尾崎喜左雄	東国古文化研究所長
〃	近藤義雄	県文化財保護課長
〃	森田秀策	県文化財保護係長
調査員	田島桂男	高崎市立養護学校教諭
〃	中村富夫	共愛学園教諭
〃	石川克博	伊勢崎市立南小学校教諭

◇２次調査　昭和48年７月23日～８月31日

学校の夏休みを利用し、調査担当者、調査員が現場作業に従事し、また調査補助員として群馬大学歴史研究部学生、高崎経済大学考古学クラブ学生、前橋工業高等学校歴史研究部、前橋育英高等学校郷土部、高崎高等学校郷土部、埼玉県幸手商業高等学校郷土部の生徒が加わり、地元作業員の方々と合せて一日平均46人という規模で調査が進められた。

◇３次調査　昭和48年９月１日～10月31日

調査体制が再び１次調査の状態にもどった。この間、10月20日に社会教育課では文化財保護担当職員を２名増員した。

◇４次調査　昭和48年11月１日～昭和49年３月31日

２名の増員により調査体制をやや整え調査を推進した。

昭和48年度中に発掘調査した遺構・遺物は多いが、住居跡だけをみると縄文時代25、土師器使用時代41であった。また、発掘調査が終了した面積は約２haである。

なお、調査団長として献身的な努力をされてきた岩渕威教育次長が昭和49年に急逝され、調査団にとって大きな痛手であった。

昭和49年度は市教育委員会社会教育課に文化財保護係が設置され、係長以下５人の職員が置かれた。これらにともない調査団の構成も改められた（表６）。

表－６　昭和49年度調査団構成

団長	富沢　宏	社会教育課長
副団長	藤島清多	都市計画部長
専門委員	尾崎喜佐雄	東国古文化研究所長
〃	近藤義雄	県文化財保護課長
顧問	藤井精一	助役
〃	阿部正六	総務部長
〃	内山博治	商工部長
〃	伊藤順	教育長
〃	清水実	教育次長
〃	奈良三郎	財政課長
参与	松田徳松	文化財調査委員
〃	中沢右吾	〃
〃	山田武麿	〃
〃	丸山知良	〃
発掘調査担当者	相沢貞順	社会教育課主事
〃	川合功	〃
調査員	松島栄治	社会教育課文化財保護係長
〃	中村富夫	社会教育課文化財保護係主事
〃	江原清	社会教育課文化財保護係主事補
幹事	小森益男	工業課長
〃	宮田勝己	宅地開発課長
〃	金井隆作	総務課長（教育委員会）
〃	上原有良司	学校教育課長
事務局員	小野正斌	社会教育課次長
〃	小林八郎	工業課次長
〃	前田真一	工業課主任
〃	梅山千秋	工業課主事
〃	主代清	宅地開発課次長
〃	立川宏二	宅地開発課庶務係長
〃	細野松三郎	宅地開発課移転係長
〃	加藤通明	宅地開発課工務係長
〃	町田趙夫	宅地開発課主任
〃	大塚正夫	宅地開発課技師
〃	阿久津宗二	社会教育課社会教育係長

〃	酒井正保	社会教育課社会教育係主任
〃	木村三治郎	芳賀公民館長
〃	中嶋隆二	社会教育課主任
〃	斉田節子	社会教育課主事

調査団規約、委託契約書、発掘調査実施計画書は基本的には前年と同じである。

昭和49年度の調査は次のように進められた。

◇5次調査　昭和49年4月1日～5月5日

前年度から継続していた地区の調査を終了させた。5次調査終了後、係職員は地元作業員の方々と王山古墳の調査を実施し（5月15日～7月25日）、引き続き山王廃寺1次調査も実施した（7月22日～9月6日）。その一方で芳賀北部団地遺跡の調査を再開した。

◇6次調査　昭和49年7月22日～昭和50年2月28日

6次調査をもって、約2年にわたる芳賀北部団地遺跡の発掘調査は終了した。

発見された遺構・遺物は膨大に数量になるが住居跡だけをあげると縄文時代31、土師器使用時代237（掘立柱建物跡6を含む）にのぼっている。終了した調査面積は約3.6haである。

3　芳賀西部工業団地遺跡の調査〈昭和50年度〉

昭和50年度、市教育委員会では今後の開発事業に対応し、文化財保護に対する市民の期待に答えるため、社会教育課文化財保護係の定員を1名増員し6名とした。しかし、この時期に文化財保護係の仕事も埋蔵文化財だけでなく、一般行政事務としてより弘い文化財保護行政への対応が行われるようになってきていた。芳賀西部工業団地造成面積は20.2haあり、この内遺跡地と推定される面積は9.5haである。調査団長に尾崎喜左雄氏を迎え、調査団組織を改めて調査に取り組んだ（表7）。

表－7　芳賀西部工業団地遺跡発掘調査団組織（昭和50年度）

団長	尾崎喜左雄	東国古文化研究所長
副団長	清水実	教育次長
顧問	伊藤順	教育長
〃	藤島清多	都市計画部長
〃	森田誠芝	商工部長
幹事	金井隆作	総務課長（教育委員会）
〃	富沢宏	社会教育課長
〃	宮田勝己	宅地開発課長
〃	小森益男	工業課長
〃	松島栄治	社会教育課文化財保護係長
発掘担当者	尾崎喜左雄	東国古文化研究所長
〃	相沢貞順	社会教育課主事
〃	川合功	〃
調査員	松島栄治	社会教育課文化財保護係長
〃	中村富夫	社会教育課主事
〃	石川克博	〃
〃	江原清	〃
事務局員	小野正斌	社会教育課次長
〃	中島隆二	社会教育課主任
〃	斉田節子	〃

〃	主代　清	宅地開発課次長
〃	加藤通明	宅地開発課工務係長
〃	町田趙夫	宅地開発課主任
〃	大塚正夫	〃
〃	小林八郎	工業課次長
〃	保坂高義	工業課主任
〃	前田真一	〃
〃	梅山千秋	工業課主事

◇1次調査　昭和50年5月8～7月31日

遺構の分布範囲を確認する試掘調査を中心に進められた。そのなかで、縄文時代住居跡3、古墳3、その他の遺構15が発掘調査された。

1次調査終了後、2次調査までの間に国指定史跡蛇穴山古墳の環境整備事業に伴なう発掘調査（8月1日～16日）と山王廃寺跡2次調査（8月18日～31日）とが実施された。

◇2次調査　9月8日～12月24日

この調査により芳賀西部工業団地遺跡の発掘調査は終了した。

この遺跡において発見調査された主な遺構は縄文時代住居跡7、配石遺構3、弥生ピット1、古墳31である。

4　芳賀東部団地遺跡の調査〈昭和51年度～昭和55年度〉

芳賀北部・芳賀西部の各遺跡調査を終了し、遺構実測は委託業務として出す等、大規模開発に対する発掘調査の形も次第に定着化してきた。一方、発掘調査資料の累積のため報告書作成への対策と準備とが大きな課題となってきた。しかし、当面芳賀東部団地遺跡の調査を推進させることが先決であると考えられ、調査は進められた。

◇昭和51年度　昭和51年6月7日～昭和52年1月8日

昭和51年度はこれら一応の安定した体制のなかで社会教育課長を調査団長として、調査団組織を改め調査が進められた（表8）。

表－8　芳賀東部団地遺跡発掘調査団組織（昭和51年度）

団長	下田文太郎	社会教育課長
副団長	宮田勝己	宅地開発課長
〃	小森益男	工業課長
顧問	尾崎喜左雄	東国古文化研究所長
〃	中村利三郎	総務部長
〃	清水実	教育長職務代理者・教育次長
〃	藤島清多	都市計画部長
〃	森田誠芝	商工部長
担当者	尾崎喜左雄	
〃	松島栄治	社会数育課文化財保護係長
〃	相沢貞順	〃　社会教育主事
〃	中村富夫	〃　主事
〃	石川克博	〃　主事
〃	江原清	〃　社会教育主事
〃	富沢敏弘	〃　臨時職員
調査員	黒沢晴美	〃　臨時職員
事務局員	小野正斌	〃　次長

〃	中　島　隆　二	〃	主任
〃	斉　田　節　子	〃	主任
〃	松　井　　尚	〃	
〃	主　代　　清	宅地開発課次長	
〃	加　藤　通　明	〃	工務係長
〃	町　田　趙　夫	〃	主任
〃	大　塚　正　夫	〃	主任
〃	小　森　泰　夫	〃	
〃	小　林　八　郎	工業課次長	
〃	前　田　真　一	〃	主任
〃	梅　山　千　秋	〃	主事

昭和51年度の埋蔵文化財発掘調査通知では20haが造成面積とされており、この内遺跡地と推定される面積は14.5haであった。この年度に発掘調査を終了させた面積は3.6haで、主な遺構は縄文時代住居跡５、土師器使用時代住居跡84（掘立柱建物跡３を含む）である。

◇昭和52年度　昭和52年５月10日～昭和53年１月28日

昭和52年度は社会教育課文化財保護係の体制も調査団組織もほぼ同じ構成で調査は進められた。本年度の実施計画書において、団地造成計画面積は45haとなり、この内遺跡地と推定される面積が36.5haと判明した。本年度調査終了した面積は5.5haで、主な遺構は縄文時代住居跡13、土師器使用時代住居跡21、製鉄跡２等である。

なお、昭和48年度の芳賀北部団地の調査以来、調査団の専門委員、調査団長、顧問、担当者等として本調査に貢献してこられた尾崎喜左雄博士が昭和53年１月４日逝去され、調査団にとって主柱を失った感じであった。

◇昭和53年度　昭和53年５月８日～昭和54年２月28日

本年度は文化財保護係の職員定数を10名に増員し、発掘調査団も教育次長を調査団長として組織を改め、調査を実施した（表９）。

表－９　芳賀東部団地遺跡発掘調査団組織（昭和53年度）

団長	清　水　　実	教育次長	
副団長	小　森　益　男	商工部長	
〃	藤　島　清　多	都市計画部長	
〃	藤　沢　守　夫	社会教育課長	
顧問	高　橋　藤　治	助役	
〃	金　井　博　之	教育長	
〃	山　田　武　麿	学識経験者（群馬大学教授）	
〃	奈　良　三　郎	企画財政部長	
幹事	大　沢　敏　雄	工業課長	
〃	宮　田　勝　己	宅地開発課長	
〃	高　橋　和　一	総務課長（教育委員会）	
発掘担当者	松　島　栄　治	文化財調査委員（前橋第二高校教諭）	
〃	相　沢　貞　順	社会教育課文化財保護係長	
〃	中　村　富　夫	〃	主事　（文化財保護係）
〃	富　沢　敏　弘	〃	主事補（　〃　）
調査員	福　田　紀　雄	社会教育課主任　社会教育主事（　〃　）	
〃	池　田　茂　則	〃	主事　（文化財保護係）
〃	江　原　　清	〃	主事　社会教育主事（文化財保護係）

〃	唐沢保之	社会教育課主事　(文化財保護係)
〃	井野誠一	〃　主事補(　〃　)
〃	飯塚誠	〃　主事補(　〃　)
〃	川崎始	〃　主事補(　〃　)
事務局長(兼)	藤沢守夫	社会教育課長
事務局員	本間怜	総務課次長(教育委員会)
〃	若林健二	社会教育課管理係長
〃	中嶋フサ子	〃　主任　(管理係)
〃	中根良一	〃　主事補(　〃　)
〃	山田ちとせ	文化財保護係臨時職員
〃	矢崎祐一	工業課次長
〃	前田真一	工業課工業開発係長
〃	遠藤龍一	工業課主任(開発係)
〃	高橋伸之	〃　主任(　〃　)
〃	酒井昭司	宅地開発課次長
〃	井野清	宅地開発課換地第一係長
〃	小林泰之	〃　技師(換地第一課)
〃	加藤通明	〃　工務係長
〃	大塚正夫	〃　主任(工務係)

調査を終了した面積は6.5haで、遺構としては縄文時代住居跡21、土師器使用時代住居跡109(掘立柱建物跡26を含む)等遺構総数は266におよんでいる。

◇昭和54年度　昭和54年5月8日～昭和55年2月20日

本年度は土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査も加わることとなり、文化財保護係定数を15名に増員し、調査団組織も拡充して調査を実施した(表10)。

表—10　芳賀東部団地遺跡発掘調査団組織(昭和54年度)

団長	佐藤寅雄	教育次長
副団長	小森益男	商工部長
〃	藤島清多	都市計画部長
〃	藤沢守夫	社会教育課長
顧問	山田武麿	学識経験者(群馬大学教授)
〃	高橋藤治	助役
〃	金井博之	教育長
〃	奈良三郎	企画財政部長
〃	吉田弘	教育次長
幹事	平松弘	企画財政課長
〃	斉藤和雄	工業課長
〃	宮田勝己	宅地開発課長
〃	本間怜	総務課長(教育委員会)
発掘担当者	松島栄治	文化財調査委員(前橋第二高校教諭)
〃	相沢貞順	社会教育課文化財保護係長
〃	福田紀雄	〃　主任　(文化財保護係)社会教育主事
〃	中村富夫	〃　主任　(　〃　)

〃	富沢敏弘	〃 主事（〃）
〃	飯塚誠	〃 主事補（〃）
調査員	木部日出雄	〃 主任（〃）
〃	福田充裕	〃 主任（〃）
〃	池田茂則	〃 主事（〃）
〃	唐沢保之	〃 主事（〃）
〃	松村親樹	〃 主事（〃）
〃	井野誠一	〃 主事補（〃）
〃	川崎始	〃 主事補（〃）
〃	田口正美	〃 主事補（〃）
〃	入内島裕美	〃 主事補（〃）
〃	杉浦つや子	〃 主事補（〃）
事務局長(兼)	藤沢守夫	社会教育課長
事務局員	荒木昭之	総務課次長（教育委員会）
〃	若林健二	社会教育課次長
〃	中嶋フサ子	社会教育課主任（管理係）
〃	中根良一	〃 主事（〃）
〃	白田潤子	文化財保護係臨時職員
〃	山田ちとせ	〃
〃	木暮雄一	企画財政課次長
〃	渡辺勝利	企画財政課理財係長
〃	飯塚朝一	〃 主事（理財係）
〃	真塩浩一	企画財政課主事（〃）
〃	矢崎祐一	工業課次長
〃	雨田真一	工業課工業開発係長
〃	遠藤龍一	〃 主任（開発係）
〃	馬場章	〃 主任（〃）
〃	高橋伸之	〃 主任（〃）
〃	酒井昭司	宅地開発課
〃	井野清	宅地開発課換地第一係長
〃	小林泰之	〃 技師（換地第一係）
〃	加藤通明	〃 工事係長
〃	大塚正夫	〃 主任（工務第一係）
〃	井上裕一	技師（換地第一係）
〃	宮田光代	工業課主任（工業開発係）
〃	森村幸男	〃 主事（〃）
〃	奈良克二	〃 主事補（〃）

発掘調査終了面積は6.5haで、遺構としては縄文時代住居跡11、土師器使用時代住居跡86、掘立柱建物跡89等があり総数は314である。

◇昭和55年度　昭和55年4月21日～11月14日

本年度の発掘調査団構成はほぼ前年と同じである（表11）。

表—11　芳賀東部団地遺跡発掘調査団組織（昭和55年度）

団長	佐藤寅雄	教育次長
副団長	斉藤和雄	商工部長
〃	宮田勝己	都市計画部長
〃	片貝高四郎	社会教育課長
顧問	山田武麿	学識経験者（群大名誉教授）
〃	高橋藤治	助役
〃	金井博之	教育長
〃	藤島清多	総務部長
〃	奈良三郎	財政部長
〃	吉田弘	教育次長
幹事	木暮雄一	財政課長
〃	二瓶益己	工業課長
〃	主代清	宅地開発課長
〃	本間怜	総務課長（教育委員会）
発掘担当者	松島栄治	文化財調査員（前橋第二高校教諭）
〃	相沢貞順	前橋市立女子高校教諭
〃	松本浩一	社会教育課文化財保護係長
〃	福田紀雄	社会教育課主任（文化財保護係）社会教育主事
〃	福田充裕	〃（〃）
〃	唐沢保之	社会教育課主事（〃）社会教育主事
〃	松村親樹	〃（〃）
調査員	木部日出雄	社会教育課主任（〃）社会教育主事
〃	池田茂則	社会教育課主事（〃）
〃	鵜木普一	〃（〃）
〃	井野誠一	〃（〃）
〃	飯塚誠	〃
〃	川崎始	〃
〃	田口正美	社会教育課主事補　文化財保護係　社会教育主事
〃	入内島裕美	〃
〃	杉浦つや子	〃
〃	近藤昭一	社会教育課嘱託
事務局長(兼)	片貝高四郎	社会教育課長
事務局員	荒木昭之	総務課次長（教育委員会）
〃	若林健二	社会教育課次長
〃	中嶋フサ子	社会教育課主任（管理係）
〃	渡辺一彦	社会教育課主事（〃）
〃	新井明美	文化財保護係臨時職員
〃	野口晴美	〃
〃	茂木早苗	〃
〃	亀井正美	財政課次長
〃	渡辺勝利	財政課理財係長
〃	飯塚朝一	財政課主任　理財係）
〃	真塩浩一	財政課主事補（〃）

〃	矢崎祐一	工業課次長
〃	前田真一	工業課工業開発係長
〃	遠藤龍一	工業課主任（開発係）
〃	馬場章	〃（〃）
〃	宮内光代	〃（〃）
〃	高橋伸之	〃（〃）
〃	森村幸男	工業課主任（〃）
〃	横堀広美	工業課主事（〃）
〃	竹内弘昌	宅地開発課次長
〃	加藤通明	〃
〃	井野清	宅地開発課換地第一係長
〃	小林泰之	宅地開発課主任（換地第一係）
〃	井上裕一	宅地開発課技師（〃）
〃	大塚正夫	宅地開発課工務第一係長
〃	羽鳥等	宅地開発課技師（工務第一係）
〃	野本和男	宅地開発課工務第二係長
〃	原沢保孝	宅地開発課主任（工務第二係）

発掘調査終了面積は10.6haである。遺構は縄文時代住居跡８、古墳時代住居跡75、奈良・平安時代住居跡149、掘立柱建物跡76等で総数は645におよんでいる。

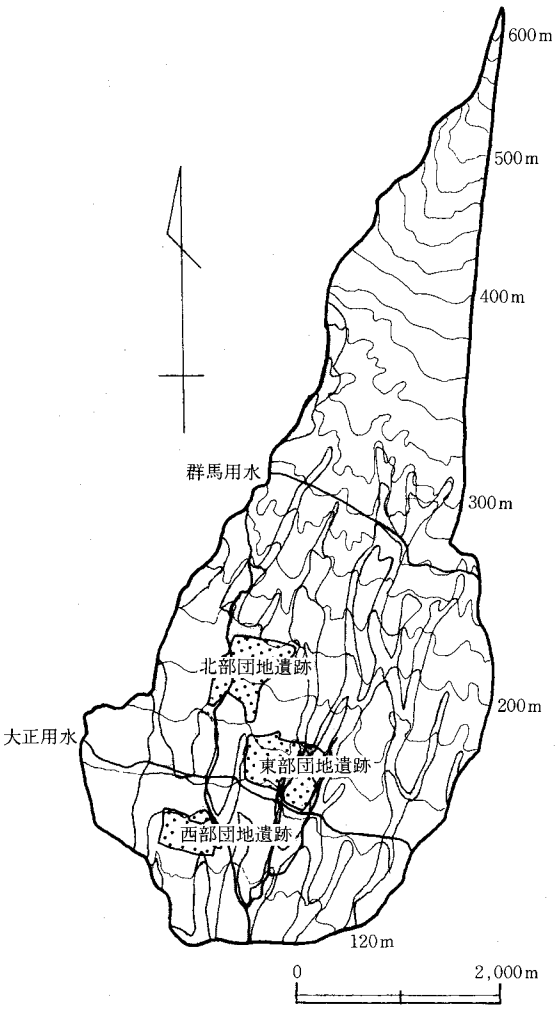
芳賀東部団地造成計画面積45ha中、遺跡地と推定される面積38.9haのうち上武国道予定地と0.2haの抜根不可能な藪地を除いて、全ての発掘調査必要面積を終了した。昭和51年度から55年度の調査終了まで５年間での実質延べ調査日数は693.5日、この間に作業に従事した作業員の方々の延べ人数は28,432人である。主な遺構としては縄文時代住居跡が58、土師器使用時代の竪穴住居跡495、掘立柱建物跡189と膨大な数にのぼっている。

II　遺跡の立地と環境

遺跡地は、前橋市鳥取町、小坂子町、五代町にかけての地に所在する。この地は、昭和29年に前橋市へ吸収合併されたもので、それまでは勢多郡芳賀村の一部分であった。このため、遺跡地を含んだ旧芳賀村の地域は、現在前橋市においては、芳賀地区の呼称もある。

芳賀地区のこと旧勢多郡芳賀村の地は、関東平野の北端に悠然と構える上毛三山の一つ、赤城山南麓の斜面に在って、南北に細長い不等辺三角形状を呈している。頂点にあたるその北端は標高620mで、底辺にあたる南端は旧利根川の河川敷とされる沖積地でその標高は110mを数え、その南端から北端にいたる平均傾斜はほぼ5/100を測る。こうした芳賀地区の地勢を更に傾斜分布で概観すると、大きく11度、8度そして4度部分に分けることができる。これを標高に合わせてみると、11度部分はおおよそ標高460m以上の地となり、8度部分は標高360～460m地域、そして4度部分は標高360m以下の地域となる。これら傾斜分布のうち、11度および8度部分にあたる標高360m以上の地は、本地域の北部高所にあたり、その面積は、約2.5㎢で芳賀地区全体のほぼ14%を占めている。これに対し、傾斜分布4度部分すなわち標高360m以下の地は、北部高所の地に続く山麓の地域で、その面積は13.68㎢で芳賀地区全体の約86%となり、芳賀地区の殆んどはこの部分に含まれることになる。

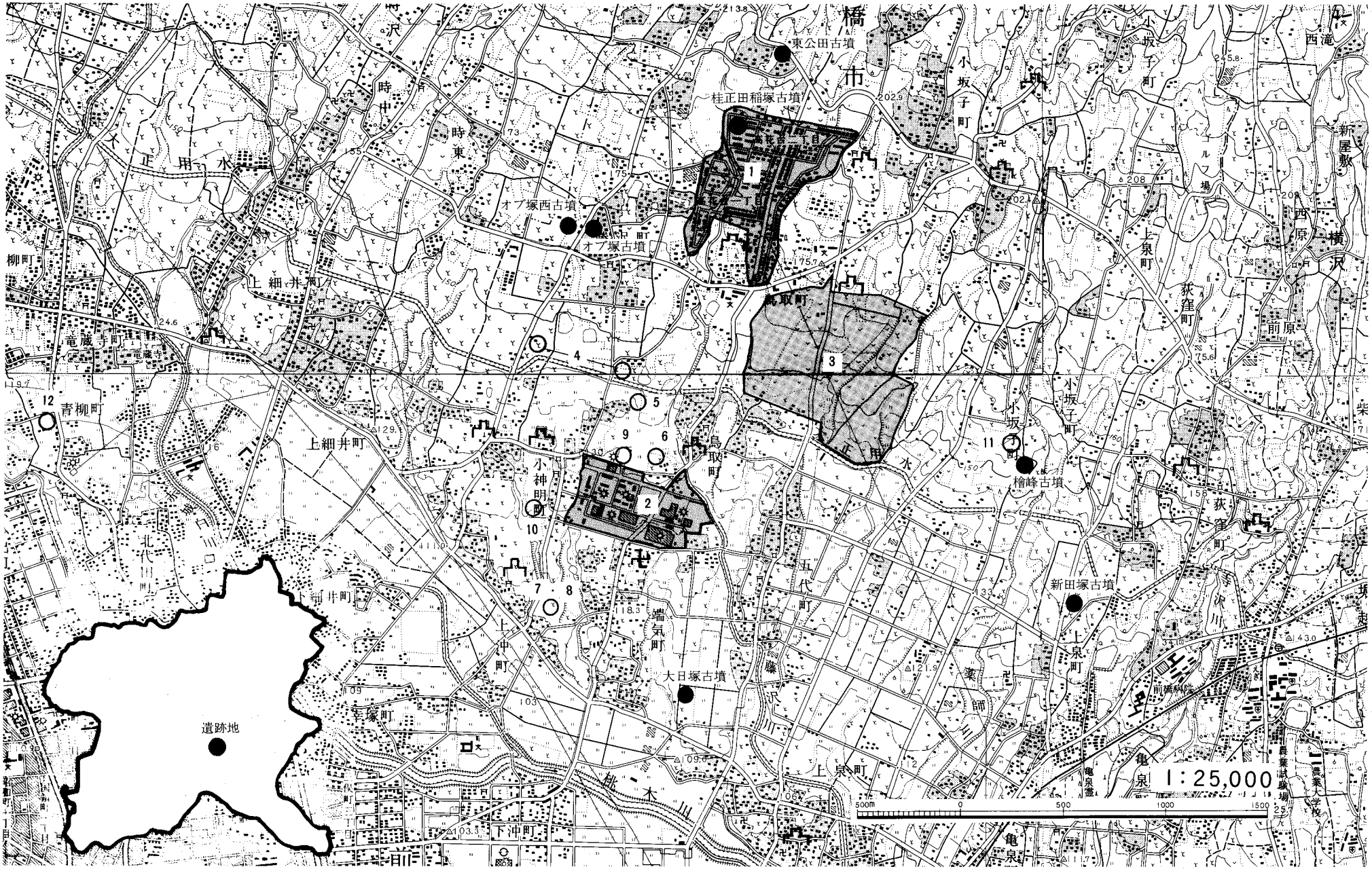
ところで、こうした傾斜分布からみる芳賀の地形は、傾斜変換線を境にして大きく変化することに気付く。就中、8度部分から4度部分へ変化する標高約360mの等高線を境にしてその変化は著しい。即ち、標高360m以上の傾斜分布8度および11度の部分の地形は、地区北端に位置する鶏山を頂点として扇状地状に火山岩層によって形成され、山腹的要素が強く、その大部分は明治30年代までは山林・原野としての景観を保っていたという。これに対し、標高360m以下の土地は、傾斜変換線付近の湧水を源とする川水によっての浸蝕が目立ち、ここを谷頭とする開析谷が、地区南端の旧利根川河川敷の沖積地に向かってよく発達している。なお、現在こうした地形上には、開析谷中の低地には水田が、谷と谷の間の丘陵性の台地上には集落が、そして周辺には畑が開かれ、人間生活に直接深い係わりをもつ所となっている。



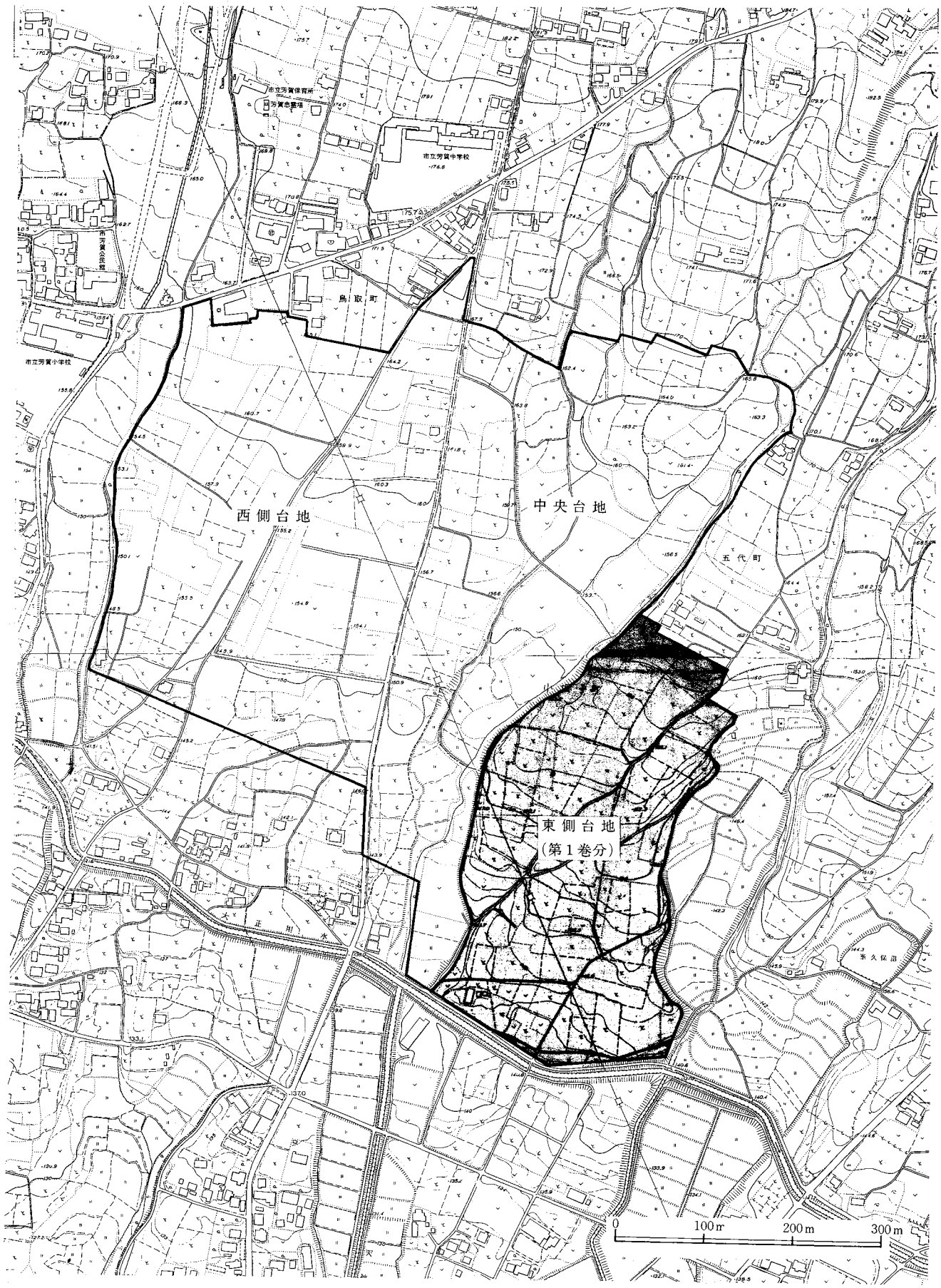
芳賀地区地形図

芳賀地区における遺跡・遺物の分布は、芳賀地区の約86%を占める上記傾斜分布4度地域、すなわち標高360m以下の地域の高所において、その殆んどの場所で認められている。このことは、芳賀地区の約86%の地域が遺跡地あるいはそれに係わりをもつ場所であることを示すと共に、今日にみる芳賀地区の、人間生活の舞台としての歴史は、遠く原始・古代社会にまで溯ることを示唆している。すなわち、芳賀地区において発見され調査された遺跡は、おおよそ表—12のとおりである。

なお、表—12のほか芳賀地区では、昭和10年の調査において64基の古墳が在るとされ、赤城山南麓では、旧荒砥村、粕川村、旧桂萱村についで古墳の多い所とされている。その地域的内訳は、小坂子27基、五代11基、勝沢9基、嶺7基、鳥取5基、端気4基、小神明1基とされている。ところで、こうした数値は、古墳存在の実数を示すものではない。例えば、昭和50年に実施された芳賀西部団地遺跡では、昭和10年の調査の折にはその対象とはならなかった墳丘の平夷された古墳が31基も発見され調査されている。また、同じような例が、鳥取町の西田遺跡、芳賀東部団地遺跡あるいは嶺町東公田地内にもあり、少なくとも



図－1　遺跡の位置と周辺の遺跡



図－2　芳賀東部団地遺跡地形図

表－12　周辺の遺跡概要一覧表

時代	遺跡番号	遺跡名	所在地	遺構の種類及び数	備考
縄文時代	1	芳賀北部団地遺跡	嶺町1756他14筆、勝沢町604他22筆、小坂子町29他20筆	竪穴住居跡31（内敷石住居４）配石遺構17	前・中期
	2	芳賀西部団地遺跡	鳥取町171他103筆、小神明町740他62筆、五代町９他１筆	竪穴住居跡７、ピット６、配石遺構３	前期
	3	芳賀東部団地遺跡	鳥取町844他95、筆小坂子町903他261筆、五代町699他96筆	竪穴住居跡58（内敷石住居６）、ピット103、配石遺構１	前・後期
	4	小神明遺跡群Ⅰ	小神明町富士塚下353―2他、勝沢町下田1006他	竪穴住居跡７、ピット４、その他１	中期・後期
	5	九料遺跡	勝沢町九料1032―1他	敷石住居跡１	後期
	6	西田遺跡	鳥取町字西田92	竪穴住居跡３	前期
	7	端気遺跡群Ⅰ	端気町塚越456、着帳510、上沖町根際555他45筆	竪穴住居跡１、ピット１	前期
	8	端気遺跡群Ⅱ	端気町字着帳507番地他33筆	竪穴住居跡１	中期
弥生文化時代	2	芳賀西部団地遺跡	鳥取町字倉本木171他103筆、五代町高橋9他1筆、小神明町字五反田740他620筆	ピット１	
	9	倉本遺跡	鳥取町字倉本103―12他	竪穴住居跡２	中期～後期
	7	端気遺跡群Ⅰ	端気町塚越456、着帳510、上沖町根際555他45筆	方形周溝墓２、ピット１、溝状遺跡１	後期
古墳文化時代	2	芳賀西部団地遺跡	鳥取町171他103筆、五代町高橋９他１筆、小神明町740他620筆	古墳31、埴輪棺１他	周堀内にＦ・Ａ堆積のあるものとないものの２者がある。
	3	芳賀東部団地遺跡	鳥取町844他95筆、小坂子町903他261筆、五代町699他96筆	竪穴住居跡約80	前期～中期・後期
	5	九料遺跡	勝沢町字九料1032―1他	竪穴住居跡12	後期
	6	西田遺跡	鳥取町字西田92	竪穴住居跡４、円墳４基、ほたて貝式１基	住居（中期）古墳（Ｆ・Ａ後）
	10	大明神遺跡	小神明町字大明神496他	竪穴住居跡２	後期
	7	端気遺跡群Ⅰ	端気町塚越455、着帳510、上沖町根際555他45筆	竪穴住居跡２	中期・後期
	8	端気遺跡群Ⅱ	端気町字着帳507番地他33筆	竪穴住居跡14	後期
	11	檜峯遺跡	上泉町檜峯2224番地	竪穴住居跡11以上	後期
奈良・平安時代	1	芳賀北部団地遺跡	領町1756他14筆、勝沢町604他22筆、小坂子町29他20筆、	竪穴住居跡231、掘立柱建物跡６、製鉄遺構９、溝14、井戸４、ピット20	奈良・平安
	2	芳賀東部団地遺跡	鳥取町844他95筆、小坂子町903他261筆、五代町699他96筆	竪穴住居跡約415	奈良・平安
	4	小神明遺跡群Ⅰ	小神明町富士塚下353―２他、勝沢町下田1006他	竪穴住居跡３	奈良・平安
	11	檜峯遺跡	上泉町檜峯2224番地	竪穴居跡59以上（掘立柱建物跡１）	奈良23以上・平安36以上
	12	青柳寄居遺跡	青柳町198番地	竪穴住居跡12	平安中期

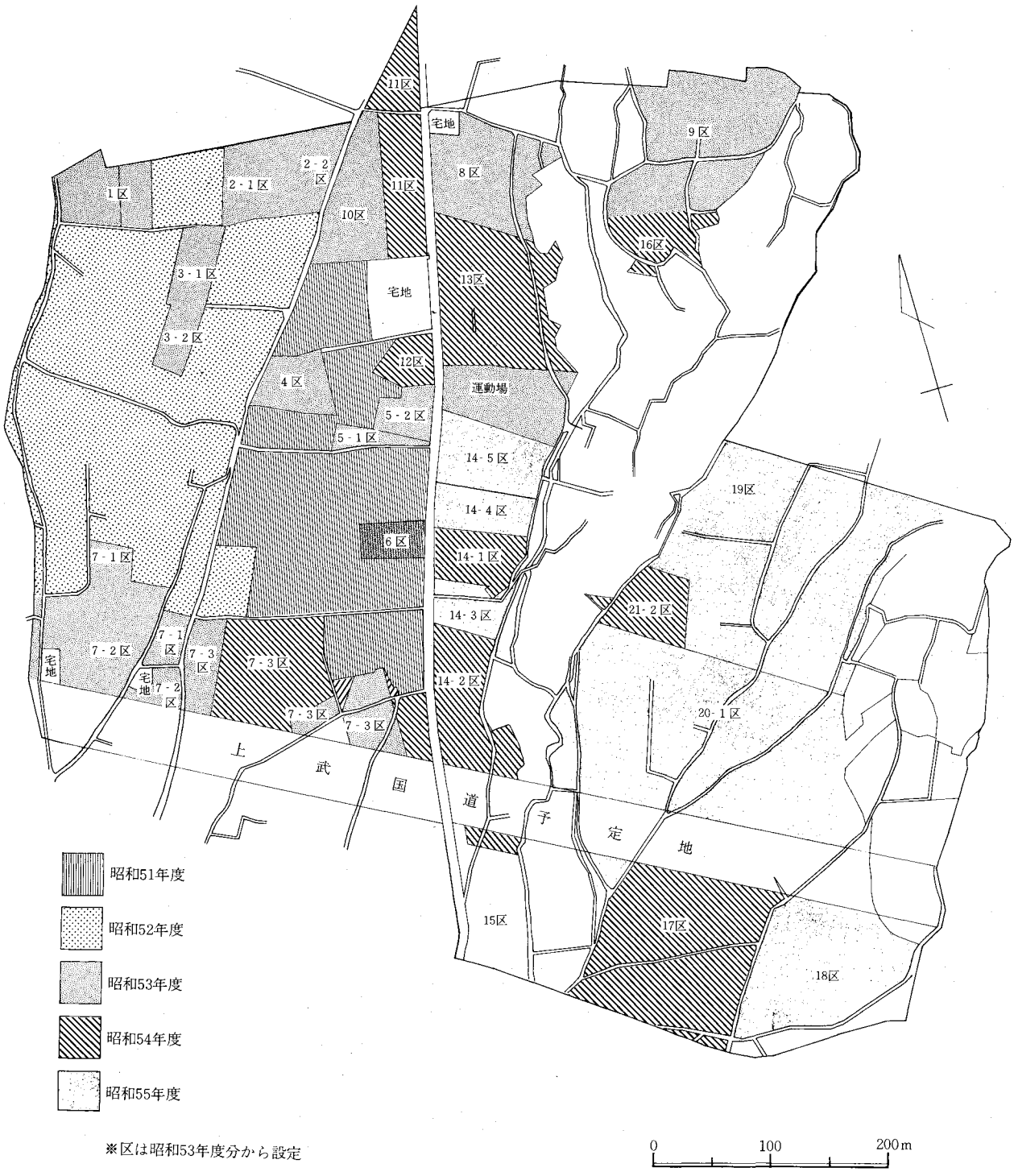
7～8基の古墳の存在が新たに確認されている。従って、これらの古墳を併せると、芳賀地区は、実に100基もの古墳が存在することになり、赤城山南麓における古墳の集中地域の一つとされている。なお、これら古墳の築造期は、6世紀後半以降とみられ、先記、古墳文化期の住居跡等と併せて、この地域の繁栄の様子がうかがわれる。

また、こうした古墳文化時代に続く、奈良・平安時代に関して、平安時代前半につくられた『和名抄』では、上野国勢多郡の郷名として、深田、田邑、芳賀、桂萱、真壁、深渠、深沢、藤沢、時沢など9郷をあげている。このうち、芳賀は、明治22年村制確立の際、本地区の村名として採用され、本地区との係わりを匂わせた。事実、本地区の南端、旧利根川河川敷にある沖積地に接する崖の上に位置する「端気」（はけ）とされる地名は、地形的特色によって付けられた地名で、古くからの地名とされ、これが転化して芳賀（はが）となったとされ、古代芳賀郷は、端気の地を中心に成立していたものとの一般的考えがある。また、これとは別に、『言海』では、「はが」とは、とりもちで鳥を捕えることと記している。ところで、芳賀地区には鳥取の地名があり、上野国神名帳では、勢多郡内に鳥取明神の存在を記載しており、これもまた古くからの地名であり、そこには「鳥取部」が居住していたものとみられ、芳賀郷の成立は、それに起因するものとも思われている。何れにしろ、倭名抄にみる芳賀郷は、現芳賀地区の一部とする観方が強い。加えて、藤沢郷についても、最近本地区内にあてる考えが強い。すなわち、藤沢とされる地名は、本地区を含めて、今日勢多郡下にはない。しかし、河川名には藤沢川とよばれるものがあり、これが芳賀地区をほぼ北方から南方に向って貫流している。そして、この藤沢川とその支流に挟まれて「勝沢」の地名がある。勿論、藤沢と勝沢とでは、文字も読み方も異なる。ところで、この勝沢の地を中心とした藤沢川に沿った地域は、前記したように近年における発掘調査によって、奈良・平安時代の住居跡群が数多く確認されており、この地が奈良・平安時代に一核心であった感が強い。そこに明治以来、しばしば識者によって指摘されてきた、藤沢の藤の字の草かんむりが欠落し、勝に変化して勝沢とされる地名が生じたとする考えも、必ずしも否定しきれない。すなわち、藤沢郷もまた芳賀地区に存在したとする可能性が高い。これを要するに芳賀地区は、古墳文化時代に引続いて奈良・平安の時代においても、赤城山南麓における核心的地域の一つと思考され、その政治的、社会的そして文化的性格並びに役割については極めて注目に値するものがある。なお古代末期において、本地区から南橘地区にかけて「細井」および「青柳」の御厨が設置されたのも、仁治4（1243）年在銘の国指定重要文化財、善勝寺の鉄造阿弥陀如来坐像もこうした歴史的事情を背景としたものではないだろうか。

本芳賀東部団地遺跡は、こうした芳賀地区の中、鳥取、小坂子、五代町にかけての地にあり、その面積は、32.78haにも及ぶ広大な遺跡で、市道芳賀地区304号線（農面道路）を挟んで、西限より約600mを隔てた谷地までの範囲で、南端の標高はほぼ142m、北端の標高は165mを数え、南北端の標高差は23mで、平均傾斜度は2.5度である。なお、遺跡地中ほぼ北から南方に向かって、やや東よりの位置に谷地が貫通し、それより東西両側の台地との比高は6～7mを数え、低地である谷の部分は主に水田に、高地の大部分は畑地に利用されていた。（松島）

III　調査及び整理の経過

芳賀東部団地遺跡は、昭和51年度から55年度までの５年間に、約33haの発掘調査を実施した。各年度の調査地区の設定に当っては、前橋工業団地造成組合の造成計画及び土地の買収状況を鑑み、調査団の対応できる範囲内で、図－３のように年度ごとに調査地区を設定し、調査に取り組むことにした。地区名は、53年度からの通算番号で表わしているが、グランドの北半部分のみ「グランド」としている。



図－３　年度別調査地区図

第1巻に収録した遺構は、芳賀東部団地遺跡のうち、東側の台地に係わるもので、17区と21－2区を54年度に、残りの18区、19区、20－1区を55年度に調査を実施したものである。55年度調査予定分の20－2区、20－3区については、抜根不可能の藪地であること、湧水が激しいこと等により、調査を断念した。55年度の冬期からは、社会教育課文化財保護係分室（元総社町、元総社南小学校敷地内）に作業現場を移し、整理作業に入った。以下、本書に係わる部分について、月別に調査の経過を追って見ることにする。

昭和54年11月　26日から17区にグリットを設定し、試掘調査を開始する。まもなく遺構の存在が確認される。27日、奈良国立文化財研所から、西村・岩本両氏を招き、磁機探査を実施する。

12月　3日から21－2区にグリットを設定し、試掘調査に入る。竪穴式住居跡1、溝2等が確認される。下旬までに17区、21－2区の調査を終了する。28日、残務整理を行ない、御用納めを迎える。

1月　発掘現場で、図面の整理、遺物の洗浄、ナンバーリング、復元、鉄器のサビ落し等を行う。下旬から2月上旬にかけて、次年度（55年度）調査予定地の地層の堆積状況を調査し、重機による表土剝ぎの際の基礎資料とする。1月から3月は54年度調査分の概報（未刊）づくりに主力をそそぐ。

2月　25日から3月29日まで、次年度調査予定地の19区全域を、バックフォーで遺構確認面までの掘削作業を実施する。

3月　8日、次年度調査に備え、プレハブを東側台地の21－2区に移転する。下旬には、54年度芳賀東部団地遺跡のまとめと55年度調査計画の資料づくりをする。25・26日、群馬大学教養部野村哲教授に依頼し、住居跡カマド内の熱残留磁機の調査をする。31日、54年度分の残務整理を終了する。この日、昭和55年度の発掘調査実施計画書及び予算書を前橋工業団地造成組合に提出する。

4月　1日、委託契約を締結する。上旬から、55年度調査に伴う諸事務、諸準備を開始する。担当者会議で、前年度に表土剝ぎの実施していない20－1区、18区は、20m間隔の南北または東西方向のトレンチを入れ、遺構及び遺物の分布状況を確認した上で、重機による遺構確認面までの掘削を行うことにする。また、遺構番号は、とりあえず今までの芳賀東部で使用している通算番号を止め、55年度を意味する「5」を遺構名の略称の前につけて、「5H－1（土師器使用の竪穴式住居跡）」、「5K－1（掘立柱建物跡）」のように1番から出発することにした。15日から現地で諸準備にかかる。17日、昭和55年度の調査団の結成にともなう委嘱式と第1回調査団会議を開催する。21日、昨年度に遺構確認面まで重機で掘削しておいた19区から調査を開始する。併行して、写真・図面の整理、土器の洗浄を行う。26日には、現地で調査団長・副団長のあいさつがある。調査開始後、市商政課・工業課、及び商工部長の来訪が相次ぐ。この月、12軒の竪穴式住居跡の調査に着手する。

5月　先月に引き続き19区の調査を継続する。19区の道の東側からは、竪穴式住居跡の他に、北部に4棟、南部に2棟の掘立柱建物跡を検出する。後者の建物跡は、後の20－1区の調査で判明するが、一大掘立柱建物跡群の北端が現われたものであった。中旬からは、土器の洗浄と併行して、3名の整理作業員で土器の復元を開始する。下旬から、西側台地14－4区にバックフォーを入れ、遺構確認面まで全面掘削に入る。ここは、昨年度までの周囲の調査の状況から、遺構の存在が確実視されていた所である。

6月　19区は、道西の45・46・49・50号溝で周囲を囲まれた所を除き、竪穴式住居跡と掘立柱建物跡の調査を終了させる。溝と土壙の調査は継続する。3日から調査の主力は、西側台地の14－4区に移る。6日には、掘削の終了した14－4区から、その南の14－3区へバックフォーを移す。16日から14－3区にも調査に入る。20－1区及び18区では、9日から全面に20～40m間隔の南北または東西方向のトレンチを設定し、バックフォーで遺構確認面まで試掘を行い、遺構・遺物の分布状況を確認する。その結果、20－1区では1号墳の周囲でほとんど遺構が確認されず、道東と古墳からやや離れた南北両側に遺構の集中することが判明したので、後者を先に遺構確認面まで全面掘削することにした。この区では、南側に石田川期の住居跡、北側に真間・国分期の住居跡が、東の谷地に向かう斜面には掘立柱建物跡の集中していることが確認された。18区では、東半分に3基の古墳と石田川期の住居跡が濃密に分布し、西半では南北に走る浅い窪地のためほとんど遺構はなく、17区から続く溝2条が検出されただけであった。18区の東半部分は、上記した20－1区の掘削終了後、全面遺構確認面まで掘削することとした。

16日　第1回目の航空写真の撮影を行う。

調査が軌道にのり、多くの遺構・遺物が発見されると、芳賀中学校生徒、県立女子大学生等の見学が相次ぎ、市広報の表紙写真の撮影も行われた。

天候は強風で砂塵の舞う日が多く、調査に苦慮する。

この月は、調査の主力を14—4区、14—3区に注ぎ、20—1区と18区の遺構確認に専念した月であった。

7月　6月下旬から7月中旬にかけて雨の日が多くなる。2日には、遺跡の中央を南北方向に斜めに走る道路がゆるんで、使用不能になる。

調査の主力は再び東側台地にもどり、前月に掘削した20—1区東斜面から順次西へ向かって調査を開始する。上旬までは掘立柱建物跡群を中心に、中旬からは住居跡を中心に調査をする。また、この月から、墳丘の一部を残す1号墳の調査も開始する。15日に、群馬大学教育学部新井房雄教授に、テフラを中心とする土層鑑定を依頼する。

先月に引き続き、永明小学校児童・龍谷大学生・県埋蔵文化財調査センター井上次長他の見学・来訪が続く。市教育委員会教育長・教育次長の視察がある。

8月　前月に続き20—1区の調査に全力を注ぐ。中旬からは、遺構確認面までの掘削の終了した18区東半部分の調査にも入る。下旬には、1号墳周辺の遺構のほとんど見られない部分を除いて、ほぼ調査の終了した20—1区を引き払い、19区の未調査部分（45・46・49・50号溝で四囲を囲まれた範囲）の調査に入る。18区では住居跡と古墳が、19区では住居跡と掘立柱建物跡が確認されたが、いずれも住居跡を優先して調査をする。1号墳は引き続き調査中。

この月も、前橋市新規採用教職員、群馬県史関係者等の見学があった。29日には、NHKが発掘調査風景の撮影・取材を行った。24日の日曜日には、親子体験発掘を開催し、多数の参加を得、好評を博した。また、30日には、作業員研修を実施し、県立歴史博物館・県立埋蔵文化財調査センター・高崎正観寺遺跡等の見学を行った。

夏休みを利用して、県立女子大学と前橋市立女子高校の郷土史クラブの参加を得て、調査は大いにはかどった。

9月　調査の中心は18区と19区の四囲が溝に囲まれた部分に移っている。18区では、竪穴式住居跡の他に2～4号墳の調査も実施し、この月で18区の調査はほぼ終了する。掘立柱建物跡と竪穴式住居跡が濃密に分布した19区の調査も、9月一杯でほぼ終了する。20—1区では、7月から始めた1号墳の調査も終了する。また、この区では、6月のトレンチ調査で遺構のほとんど見られなかった1号墳周辺に、10m間隔のトレンチを入れなおして再度バックフォーによる試掘を実施すると、石田川期の竪穴式住居跡を中心に、古墳の西側に濃密に、他でも散在することが確認されたので、1号墳周辺地区も遺構確認面まで全面掘削を施すことになった。これで、本台地の調査対象地区では、18区西半部分を除く全面を調査することになった。

5日には、県立埋蔵文化財調査センター井上唯雄次長に御指導を願い、2基の製鉄址の調査を実施した。また、2日には、第2回目の航空写真の撮影を実施した。

引き続き多くの見学者が来訪した。群馬県史古代史部会（黛弘道、松島栄治両氏他）、大胡町の文化財担当者、芳賀小学校教職員他。

10月　この月は強風や雨が相次ぎ、調査に苦慮する。9月に実施した、1号墳周辺地区の掘削が終了したので調査の中心は再び20—1区にもどる。18区と19区は上旬まで残務整理を行う。下旬から、西側台地のグランド下南半部分（14—5区）の調査に入る。この月から、調査の終了した区ごとに、ローリングタワーを組んで、全体写真の撮影を始める。21日、第2回調査団会議を開催する。この席で、芳賀団地遺跡全体（北部、西部、東部）の調査終了を控え、今まで調査概要を報告するとともに、今後の整理と報告書の刊行について討議された。整理と報告書の刊行は市費で実施し、新総合計画の中に取り入れる必要のあること、本年度の調査終了に伴い調査団を解消させること、12年間の整理・刊行計画は長すぎるので再検討を要すること、市民に芳賀団地遺跡についてPR及び還元する立場から、報告書のダイジェスト版

的なもの（後の写真集『芳賀の発掘』）をつくること等が確認された。

見学者に、前橋市政モニター一行他があり、18日には東国古文化研究所主催の現地見学会がもたれた。

11月　朝に寒さを感じる季節となる。いよいよ残るは14－5区だけである。併行して、調査区域全体の未調査遺構等の確認を行う。いずれも、20日にはほぼ終了する。また、この日に、第3回の航空写真の撮影を行う。下旬には、遺跡からの撤収に向けて、発掘器材及び室内の整理を行う。

29日、前教研社会科部会の見学があった。

12月　2日、文化財保護係分室へ、器材・道具等の搬入を行い、現地を引き払う。以後、分室では調査員他4名で遺物の復元を行う。13日、芳賀農協会議室に於て、発掘作業員を対象に、発掘成果の説明及び慰労会を開く。この年の分室作業は26日で終了する。

昭和56年2月　24日、奈良県の元興寺文化財研究所に、55年度芳賀団地遺跡出土鉄製品の保存処理を委託する。

3月　24日、調査団の解団式を開く。この席で、芳賀団地遺跡の今後の取り扱いとして、市費による整理作業及び報告書の刊行、写真集「芳賀の発掘」の刊行が決定される。29日、前橋工業団地造成組合に決算書を提出する。

4月　土器の復元を中心とする整理作業を継続する。

昭和57年6月　第1巻に収録予定の土器の復元を終了する。

7月　遺物実測及び遺構図面の検討に着手。併行して、遺構・遺物図面の墨入れ、版組を開始する。

10月　芳賀団地遺跡の元担当者を中心に、報告書作成のための組織化に向けて、第1回準備会を開く。

昭和58年4月　歴代の文化財保護係長を中心に、上記組織化のための第2回準備会を開く。

5月　編集委員及び執筆委員の委嘱を行う。併せて、執筆委員会を開く。

6月　原稿依頼に伴う遺構データー一覧表の作成に着手。同時に原稿執筆依頼開始。

10月　編集委員会を開く。

11月　印刷所に第1回分の原稿を渡す。編集委員会を開き、土器の器種名・成形・調整用語等の検討を行う。

12月　土器の胎土分析を、奈良教育大学三辻教授に依頼する。土器の実測及びデーター一覧表の作成終了。遺構・遺物図面の墨入れ・版組が一部を除いてほぼ終了。

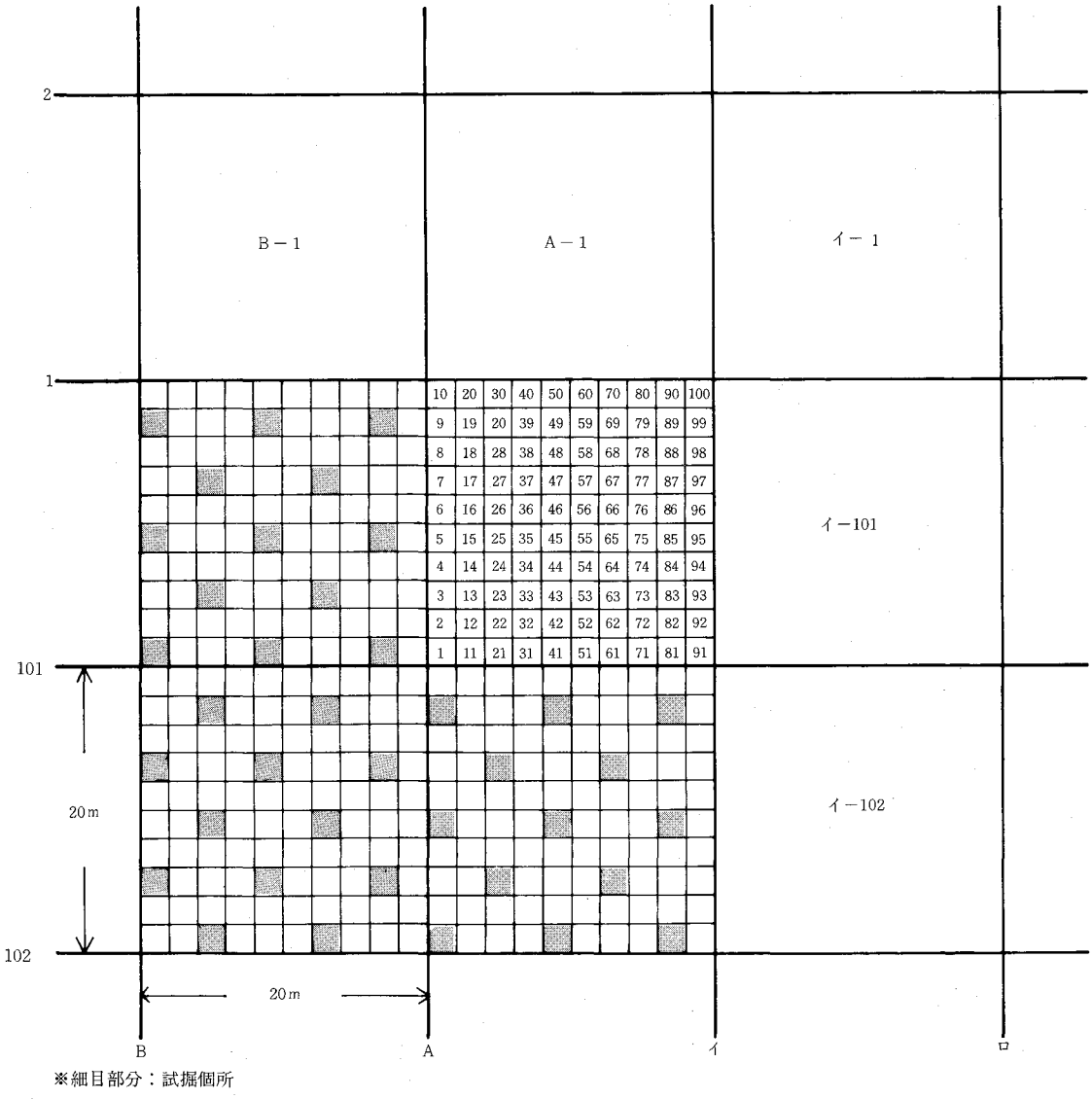
昭和59年1月　製鉄関係遺物の化学分析を、東京工業大学製鉄址研究会桂敬・高塚秀治両氏に依頼する。第1回原稿の校正開始。　（唐澤）

作業風景

Ⅳ 調 査 の 方 法

調査を実施するに当って、あらかじめ対象地全域に20m方眼の基準杭を打った。これの設定に当っては、東西方向と南北方向にそれぞれ任意の２点を結ぶ線を直交させ、これを基準に20m杭を設定した。南北方向の杭列は、基準線以東をイ・ロ・ハ、以西をＡ・Ｂ・Ｃで呼称し、東西方向の杭列は基準線以北を１・２・３、以南を101・102・103と呼称した。各々の20m杭の名称は、南北方向と東西方向の呼称を組を合わせて、例えばＡ１やイ101のように呼ぶことにした。四方を20m杭で囲まれた１区画の名称は、南西隅の杭の名称で表わすことにした。20m四方の１区画は更に２m四方の小単位に区画し、南西隅のものから北に向かって１・２・３とアラビア数字で表わし、以下図のように並列的に100まで番号をふった。この小区画の名称は、例えばＡ１－１のように呼称した。調査に当っては、この小区画を下図のように試掘し、遺構・遺物の検出状況により、周囲に拡張する方針をとった。

ところで、第１巻に扱う東側台地では、54年度に調査した17区と21－２区については上記の小区画試掘方式を取ったが、55年度調査分の18・19・21－１区については、短期間に約10haの調査を必要としたため、試 （次頁下段につづく）



※細目部分：試掘個所

図－４ グリット模式図

V 基本層序

第1巻で扱う範囲は、一台地で約10haの広さに及ぶが、基本的な層序関係は同一と見られた。しかし、深い耕作や人為的削平は至る所に見られ、窪地や遺構と関連する所にのみ残存する地層もある。例えば、浅間山噴出にかかるB軽石や榛名山の一峰二ツ岳噴出によるF・A層等である。そこで、本書では、自然地形と遺構の両者に見られる地層を加味した下図右側の柱状図を基本層序に設定し、その層序番号で統一することにした。各層の内容は次のとおりである。

第Ⅰ層　耕作により攪乱された層。遺跡全体に見られる。砂質味のある黒褐色土。厚さ20～25cm。

第Ⅱ層　B軽石を多量に含む砂質土層。色調は灰色がかった黒褐色土。大部分が遺構内覆土中に見られる。

第Ⅲ層　B軽石純層。遺構内覆土中にのみ認められる。古墳周掘では15～20cmを測る。上半は紫色を帯びた灰層。

第Ⅳ層　黒褐色土。自然地形の一部で見られるが、住居跡内の覆土の一部にも対応するものであろう。20cm前後。

第Ⅴ層　黒色土。C軽石と二ツ岳系の両者の軽石を混ぜる。褐色味を帯びることが多い。厚さは10～20cmが一般的。

第Ⅵ層　F・A純層、またはF・Aブロックの集積層。自然地形では残存しない。二ツ岳系の角閃石安山岩を混ぜる淡褐色の灰層。厚さ5cm前後。

第Ⅶ層　漆黒色土。C軽石を多量に混ぜる。自然地形の一部でC軽石の純層に近い所もある。厚さ4～8cm。

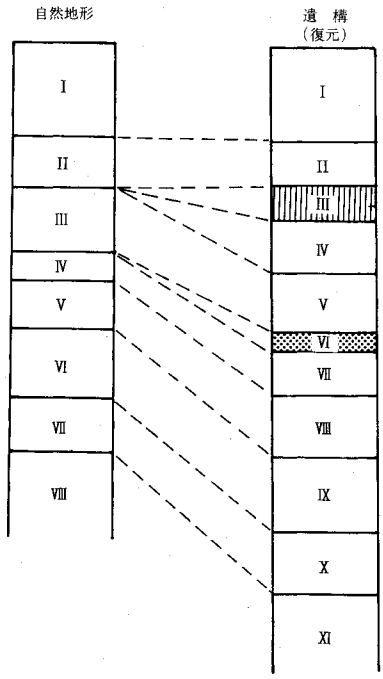
第Ⅷ層　黒色土。軽石をほとんど混ぜない。褐色味を帯びる。厚さ10cm前後。

第Ⅸ　暗褐色土。ロームへの漸移層1。厚さ20cm前後。

第Ⅹ層　褐色土。ロームへの漸移層2。厚さ10～15cm前後。

Ⅺ層　ローム。

遺構確認面は、石田川期の住居跡がⅦ層上面、奈良・平安時代の住居跡がⅤ層上面である。遺構とテフラとの関係はB軽石純層（Ⅲ層）を覆土中に持つものとして平安時代の竪穴式住居跡・溝・古墳周掘、F・A層（Ⅵ層）は石田川期の竪穴式住居跡覆土中と古墳の構築面下に堆積する。遺構を直接に埋める覆土と軽石との関係は、C軽石のみを混ぜるもの（Ⅶ層）に、石田川期の住居跡とH土壙、C軽石と二ツ岳系の軽石を混ぜるもの（Ⅳ・Ⅴ）に、奈良・平安時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・製鉄遺構・古墳（周掘）・H土壙・溝、B軽石を混ぜるものに溝・F土壙がある。



図－5　地層柱状図

なお、遺構内の覆土は基本的には図の層序番号と対応すべきものであるが、本書ではⅣ・Ⅴ・Ⅶ層に対応する覆土については、各遺構ごとに別に記号を用いて土層説明を行っている。（唐澤）

（前頁のつづき）

掘方法を変え、上記20m杭に沿って東西または南北方向に幅1.5mのトレンチを対象地全域に設定し、これをバックフォーで遺構確認面まで掘削し、遺構・遺物の検出状況によって、広域に拡張する方針とした。この結果、東側台地では18区西半を除く全面を遺構確認面まで掘削することになった。

個々の遺構については、原則として十文字に土層観察用のベルトを設定した。遺構内の遺物は、比較的床面に近いものを平面図に図化した。個々の遺構平面図（$\frac{1}{10}$及び全体図$\frac{1}{100}$は）、測量業者に委託した。

なお、上記20m杭の南北基準線は、磁北より27.5°東に偏している。（唐澤）

Ⅵ 遺構と遺物

1 概　　要

芳賀東部団地遺跡全体の遺構の概要は次のとおりである。

縄文時代　竪穴式住居跡　58　土壙　103　その他　1

古墳時代　古墳　4　竪穴式住居跡　約80

奈良・平安時代　竪穴式住居跡　約420　掘立柱建物跡　約200　製鉄址　5　溝　74　土壙　約500

中・近世　城跡　1　土壙　271　井戸　9

※古墳時代～平安時代の竪穴式住居跡の総数は、553軒

これについては、今後整理が進む中で若干の変更が予想される所である。遺物量については次のとおりである。

縄文時代　パン箱　約130

古墳・奈良・平安時代　パン箱　約630

中・近世　パン箱　5箱と若干量

芳賀東部団地遺跡は、南城南麓の浅い谷地に挟まれた東西の2つの大きな台地と、その2つの台地の間にある谷地に南端を差込む台地の、計3つの台地から成り立っている。報告書の第1巻では、3つの台地のうち、東側の台地を扱い、内容的には、土師器を使用したいた時代の遺構に限定している。ただし、溝については、土師器の時代とそれ以降の時代の両者があるが、内容的に密接に関連している所もあるので、第1巻に一緒に収録することにした。本書に収録された遺構は次のとおりである。

古墳時代　古墳　4　竪穴式住居跡　73　土壙　4

奈良・平安時代　竪穴式住居跡　109　掘立柱建物跡　63　製鉄址　2　溝　3　土壙　76

B軽石降下後　溝　18

土坑については、F・A降下前と考えられるものを古墳時代に入れたが、奈良・平安時代のものの中に古墳時代のものがあるかも知れない。

次に遺構の種類ごとに概要を素描する。古墳は4基検出された。1・2号墳に横穴式石室を残存していた。4基とも破壊は著しく、1号墳を除き墳丘はすっかり平夷されていた。1号墳は玄門を持つ石室で、床面からは直刀・鉄鏃・耳環等の遺物が出土した。2号墳は玄室の根石列の一部と梱石を残し、床面上からは耳環・鉄鏃等が出土した。3号墳は周堀のみで、1号墳同様の「渡り」がみられた。4号墳は調査区域内の北側½が調査され、主体部の堀り形の一部が検出された。

竪穴式住居跡は、石田川期のものは調査区域の南半に、奈良・平安時代のものは北半に分布の中心を置く。1号墳の南西付近で馬蹄形に群集した石田川期住居跡群中には、大型住居跡や玉製品を出土する住居跡が集中した。東側斜面には奈良・平安時代の住居跡が濃密に分布するが、ここには大型の住居跡や銙帯を出土する住居跡が在る。奈良・平安時代の住居跡は、群ごとに一定の区域内で建て替えを繰り返すようすがみられた。

掘立柱建物跡の大部分は、奈良・平安時代の住居跡群中に包括され、柱穴内の覆土や遺物からもその時代のものとみられる。しかし、一部では石田川期の住居跡群中のものもあり、問題を残す。規模・形状では、両者の間に違いはない。掘立柱建物跡の配列は、L字型のものと、そうでないものとの2者がある。前者は大規模なものや、銙帯を出土する竪穴式住居跡に近接してつくられていた。竪穴式住居跡群中には、掘立柱建物跡を含むグループ、含まないグループ、更に前者では、倉に想定される総柱建物跡を含むものと含まないものがあり、検討を要する点である。

製鉄址は2基検出され、1基は製錬址、1基は鍛冶址である。前者には鍛冶址も併設される。製錬址は、円形の竪穴の中に、炉掘り形とその前に附設された作業場が認められた。炉の残存状態は余り良好ではないが、炉奥壁に元位置を留めるとみられる一石が貼りついていた。

奈良・平安時代とB軽石降下後の溝は、排水を兼ねながらも区画設定が主目的とみられ、走向も直線的で、直角に折れたり、他の溝と直交、平行するなど、掘削時の企画性を推測させる。集落との係わり方に検討を要する。

土壙については、大部分が性格不明であるが、F182号土壙底面から完形の灰釉陶器と須恵器の埦が出土した。墓壙に伴う副葬品の可能性もある。　（唐澤）

2　古　　墳

1号古墳（図版９～13）

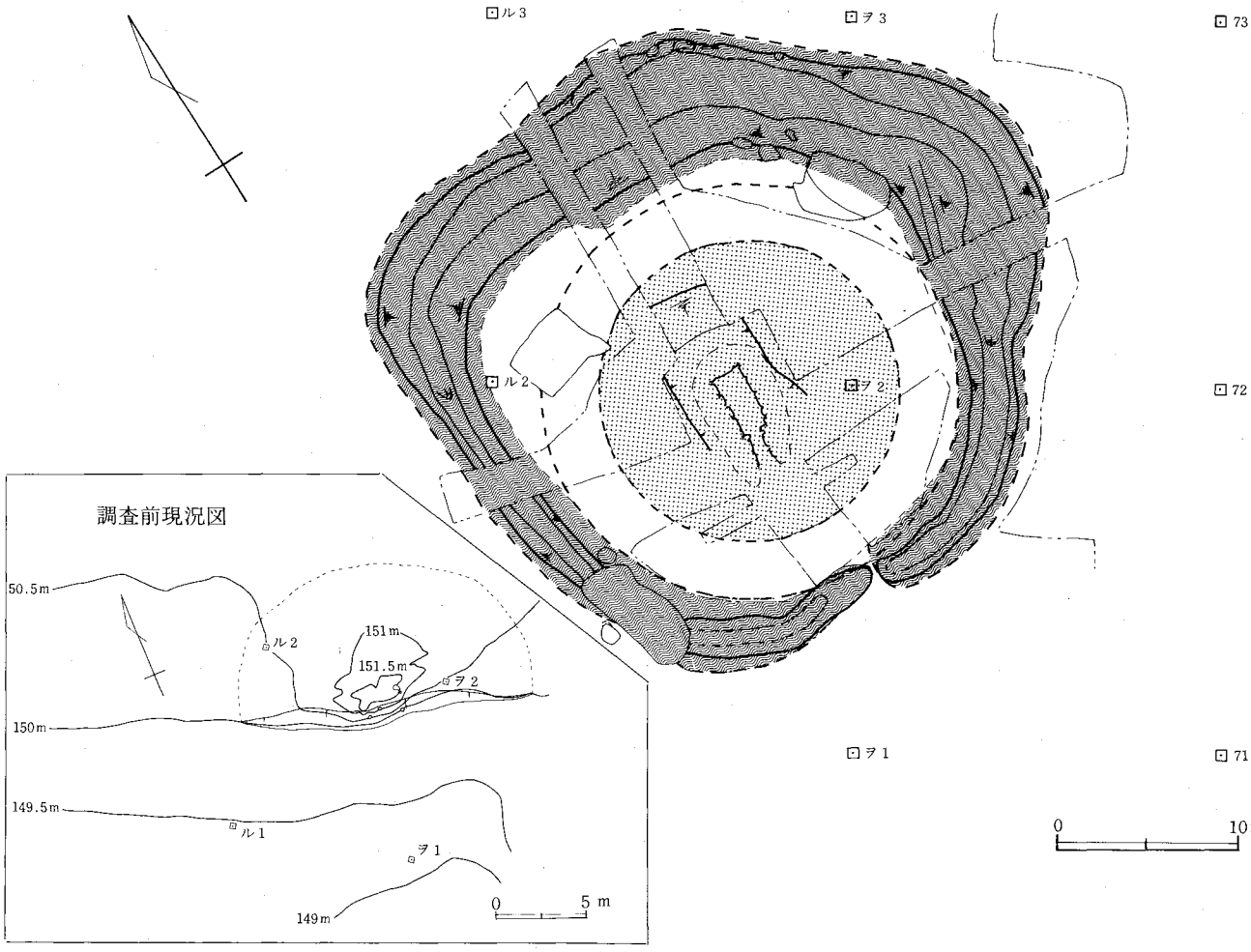
位置　ル１、２、ヲ１、２。芳賀東部団地遺跡東側台地では、台地南半に集中する古墳時代初期の住居跡群と、北半に集中する奈良～平安時代の住居跡群とに区分され、両者の分布する範囲は一線をもって画されていた。古墳は台地南半の古墳時代初期の住居跡の集中する区域に４基確認され、北半の区域では１基も存在していない。

本墳は、４基確認された古墳のうち北端に位置するもので、２、３、４号墳の北250mのところにあり、その周辺に近接する古墳はない。

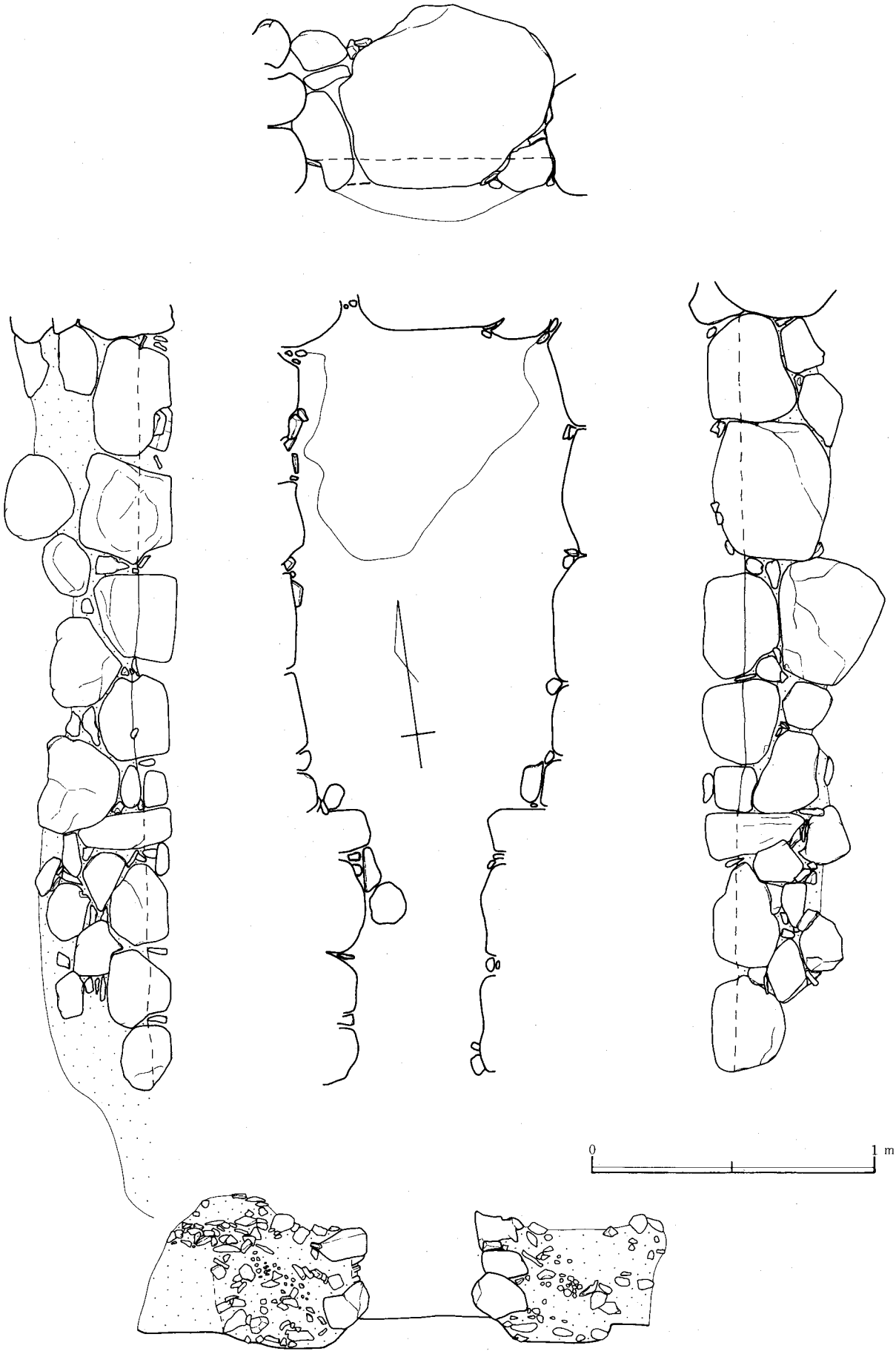
墳丘及び外部施設　墳丘の周囲にテラス状の平坦面と周堀をもつ円墳である。調査時点では、墳丘南半はすでに畑耕作等により削平されていたが、北半では1.5～２mほどの土盛りが残り、わずかに古墳の面影をとどめていた。墳丘の盛り土は、古墳構築時の表土であった黒色土層（榛名山二ツ岳の爆裂により噴出した軽石―FP―を含む）の上に直に積み上げている。墳丘原形をわずかにとどめた部分での墳丘切断面（東西）でみると、立体部である石室構築の工程にしたがい、石室に接する内側から順次土を盛り上げ、盛り土の範囲を次第に広げつつ高さを増していく過程が如実に示されている(付図１)。調査時に残った盛り土の高さは、旧地表上１mのところまでである。この盛り土は、石室を中心において、直径16.4mほどの円形に積み上げたものとみられる。

盛り土の周辺には、旧地表である黒色土層を整形したテラス状の平坦面が全周し（図６）、この外側に周堀がある。テラス状遺構の幅は北半部で広く、南半部で狭く一様でないが、幅の広がる北半では約4.5m、南半では約3.5mほどである。なお、北西部では、このテラス状遺構の周堀内への一部張り出しがみられる。張り出し部での幅は約5.5mである。テラス状遺構は、古墳構築時の地表を利用したもので、盛り土はなされていないが、その周囲に掘られた周堀の存在により、構築当初は、基段をもつ２段築成の古墳のように見えたことと考えられ、テラス状遺構を含めた範囲までを墳丘とみることが妥当であろう。ここまでを含めた墳丘の規模は直径約22.7m（東西）である。

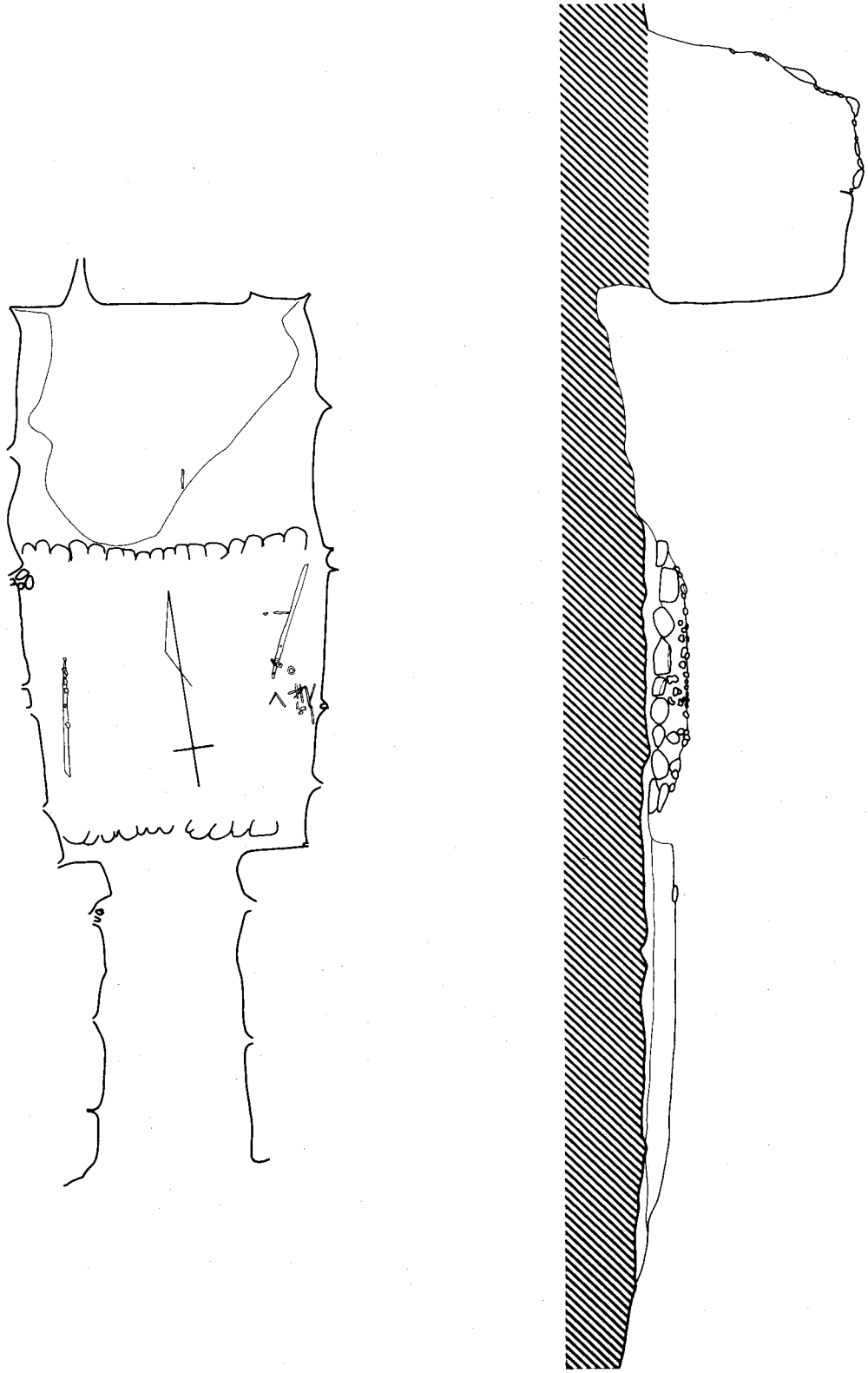
周堀は、テラス状遺構の周囲をほぼ全周するが、墳丘南端において一部途切れる。周堀の形状はかなり不正形で、その外周の形状は円形にはならない。特に西側では直線に近い傾向を示す。このため、周堀の幅も一様ではないが、全体的にみて、テラス状遺構と同様に北半が広く南半が狭い傾向がみられる。北では幅約８m、深さ60cm前後、南で幅約2.5m、深さ40cm前後、西では幅約3.5m、深さ50cm前後である。周堀外周まで含めた規模は、東西径が約35m、南北径は約35.5mである。埴輪の配列はない。



図－６　１号古墳全体及び復元図



図－７　１号古墳石室実測図



図－８　１号古墳遺物出土状態及び石室断面図

図6の墳丘復元図にもみるように、石室入口は、墳丘内にかなり入り込んだ位置に開口する。この石室開口部の位置からすると、石室入口前には、前庭の存在が予測されるが、調査時にはその様相を把握する資料を得ることはできなかった。前述のとおり、墳丘南半は耕作等によりほとんど削平され、石室先端の石も除去された様子からみて、削平、除去されたことも考えられる。

内部主体　自然石を積み上げた横穴式両袖形石室を主体部とする。

石室は、古墳構築時の地表である黒色土層を東西幅6.60mほどの範囲で、2段掘り50～60cmの深さに掘りくぼめた「掘り形」のほぼ中央に構築している。石室壁石の根石は、この「掘り形」底面に直接設置されている。石室左右の側壁は自然石（川原石）を積み上げているが、玄室にやや大ぶりの石を使用しているのに対し、羨道には比較的小ぶりの石を使用する傾向がある。奥壁には1.5m×1.3mの大形の石を据え、西側壁との間にできた間隙に川原石を積み上げている。玄室入口部には柱状の石を選定して設置し、玄門を構成している。天井石はすでに除去され、石室の高さの正確なところは不明である。石室の裏込めは壁石裏面に50～80cmほどの厚さに大小の礫を入れて壁石を補強し、その外周は石積みをして崩落を防いでいる。外周石組と「掘り形」法面との間には間隙がある。

以上の「掘り形」や裏込めの外周石組からみると、石室入口先端の部分は、墳丘南半を削平する際に取り除かれたものとみられる。現存した部分での計測値は次のとおりであるが、石室全長及び羨道長はこれより根石1～2石分は長かったものである。

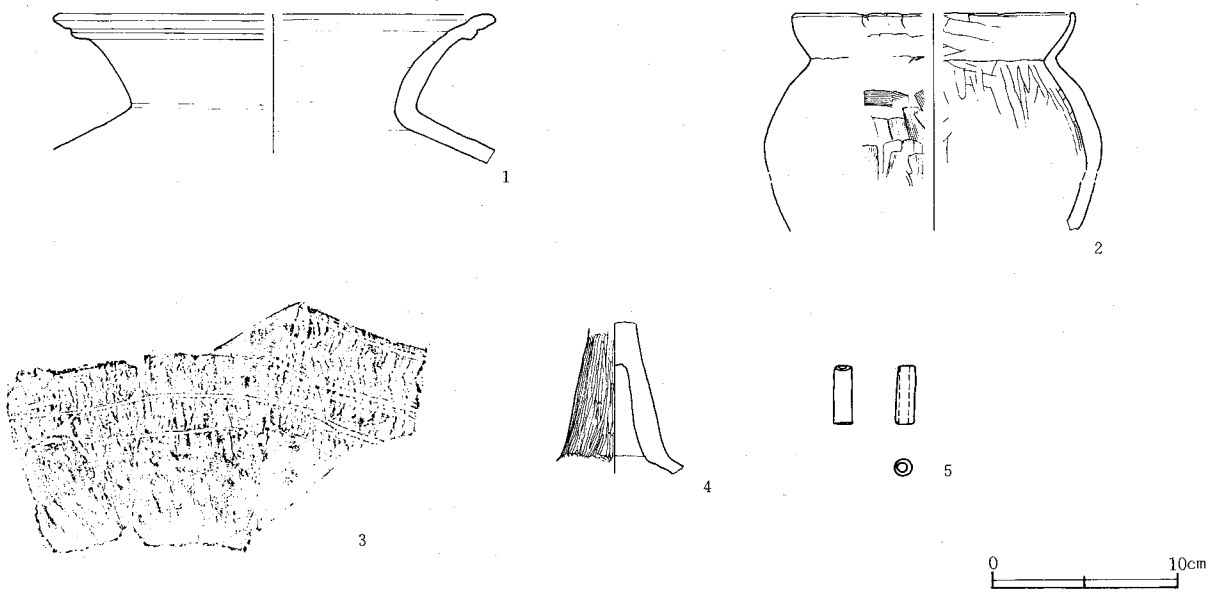
石室全長　536cm（現状）　　玄室長　339cm　　同奥幅　176cm　　同中央幅　185cm　同前幅　156cm

羨道長　197cm（現状）　　同奥幅　77cm

玄室平面形には胴張りの傾向がみられる。玄室床面は「掘り形」底面を整地した上に人頭大の川原石を敷き並らべ、さらに、小円礫を10～15cmほどの厚さに敷き上げて構成していた。出土遺物はこの小円礫上に置かれていた。なお、羨道部床面には、川原石の敷き石は認められない。

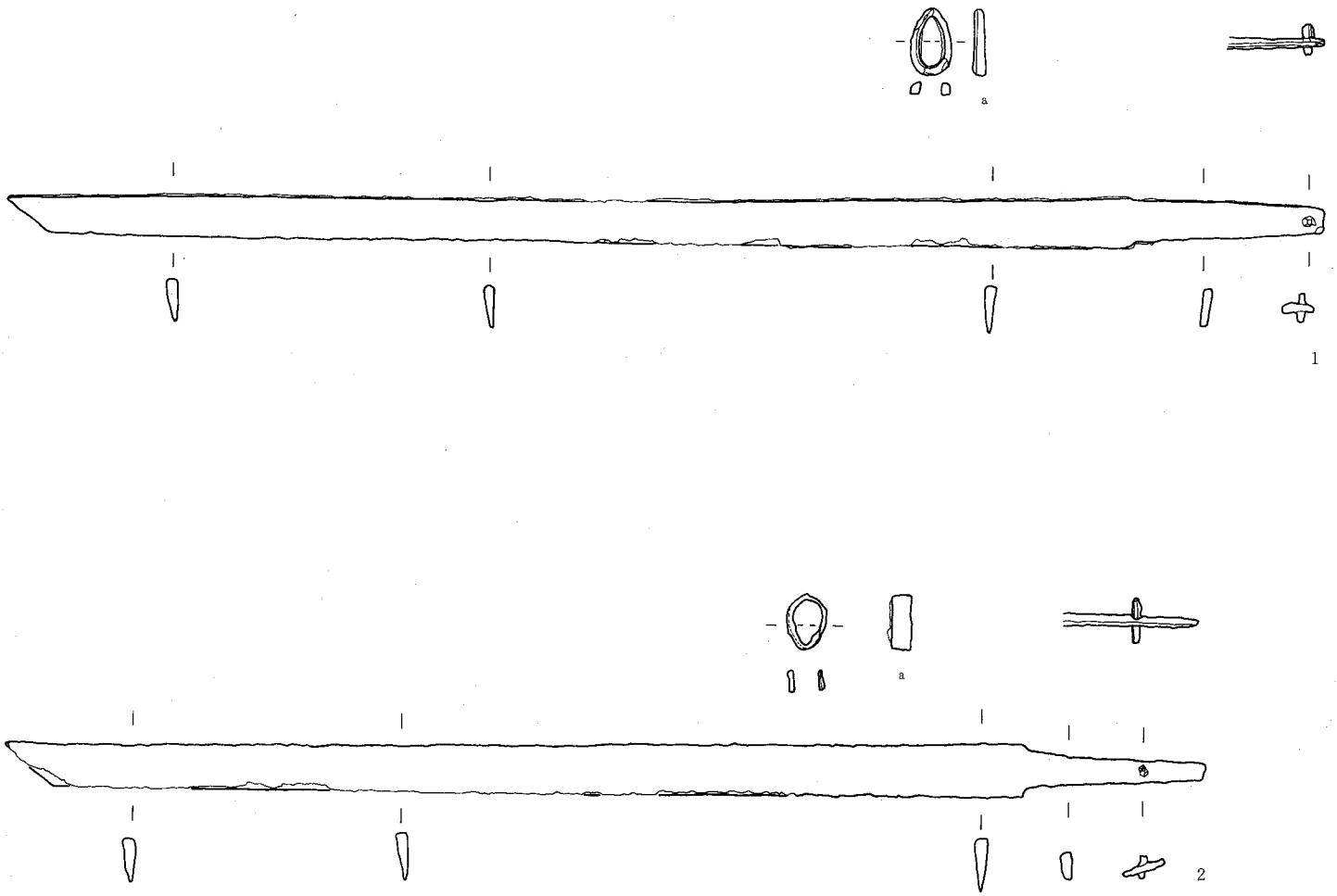
遺物　玄室奥半分は、床面下敷石も取り除くほどに攪乱されていたが、幸い前半分の部分が残され、鉄製品を中心に副葬品の一部が出土した。遺物は東西側壁に接したところに集中していた。東壁に接したところでは、直刀、鉄鏃等が多く確認できた。西壁に接しては、直刀が1本確認されただけである。埋葬当初から東壁部に対し、西壁部への副葬は少なかったものとみられる。

墳丘からの出土遺物はない。なお、本古墳の墳丘下に竪穴住居跡2戸が確認されている。縄文時代と石田川期の土器を使用する住居である。　（松本）

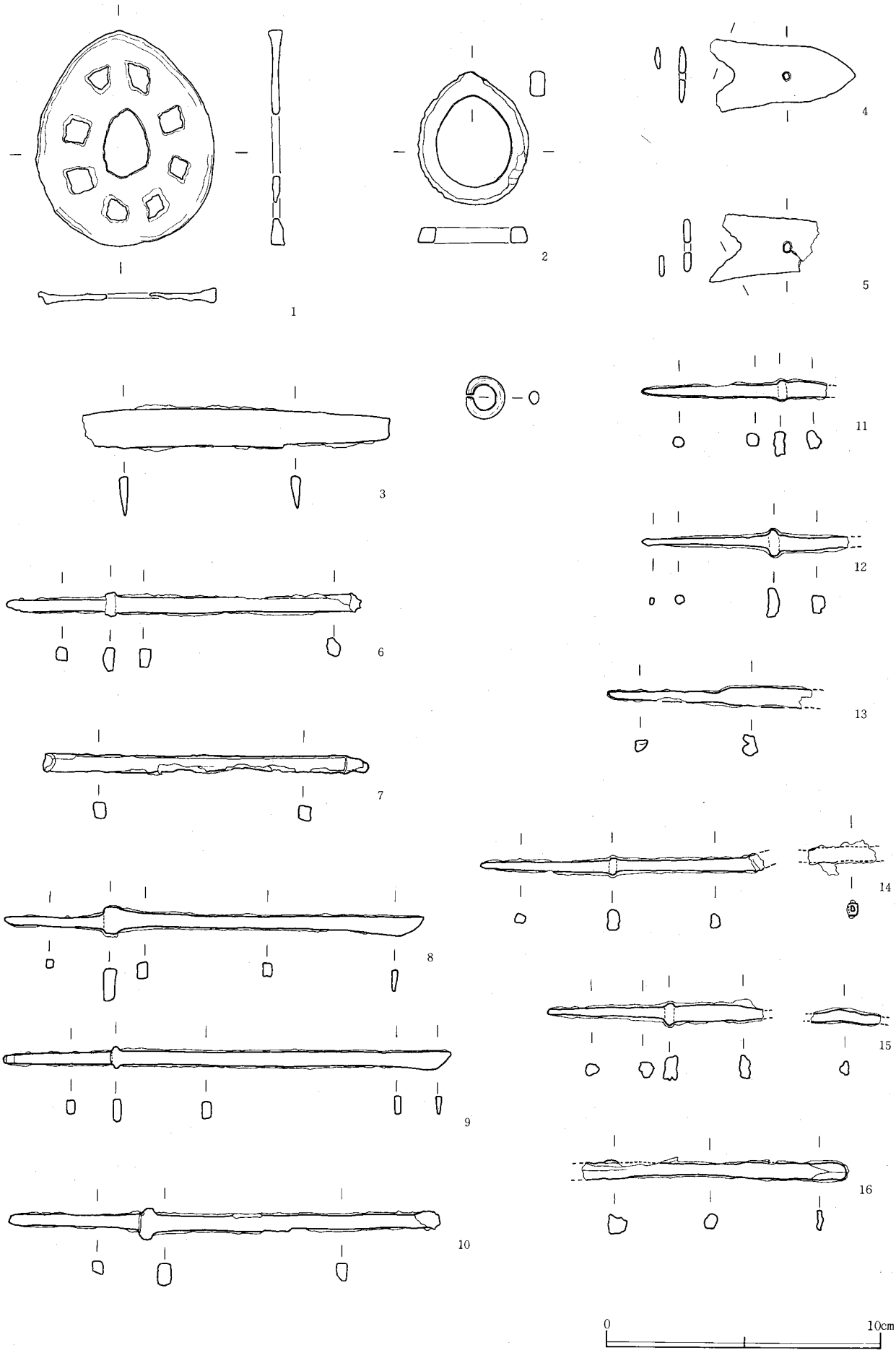


図－9　1号古墳出土遺物（1）

出土遺物　**土師器**　甕（2）、調整は全体に雑。外面は、口縁部に粘土紐痕を残す指押え、胴部はヘラナデ、内面は、口縁部にヘラナデ、胴部はヘラ削り。H382号住の覆土中出土か。高坏（4）、外面は光沢をもつヘラミガキ、内面は柱部に横方向のヘラ削り、裾部に横方向のヘラナデ。墳頂部攪乱層から出土。　**須恵器**　甕（1）、口縁部と肩部。やや白みがかった灰色で、堅緻な焼成。外面は、口縁部にヘラ状工具によるロクロナデ、肩部は縦方向の平行叩目文の上に、紋様状にヘラによるロクロナデ、内面は口縁部にロクロナデ、肩部は同心円文の叩目を指ナデで消す。内外面に自然釉。周堀内出土。　**石製品**　管玉（5）、1号墳裏込め付近出土。　その他（3）、土師質の焼成。横方向に3段の縦のハケ目状用具の押突。その上にヘラによる沈線。内面は斜ヘラナデ。墳頂部攪乱層出土。（唐澤）



図－10　1号古墳出土遺物 (2)



図－11　1号古墳出土遺物 (3)

表—13　刀及び刀装具データー覧表

直刀・小刀

（　）は残存長　（単位　cm）

遺物番号	全長	身巾	棟厚	茎			目釘			関	備考
				長	巾	厚	孔	長	径		
図10—1	74.8	2.8	0.7	10.8	2.2	0.6	1	1.6	0.4	両関	鮴鋒。西壁側で出土。
—2	67.7	3.0	0.7	10.3	2.1	0.6	1	2.5	0.5	両関	鮴鋒。東壁側で出土。
図11—3	(11.2)	1.4	3	(3.9)	1.1	0.4				刃関	茎と刃部の両側を欠損。石室中央やや奥壁寄りの攪乱を受けた床面から出土。

鍔

（単位　cm）

遺物番号	長径	短径	厚	備考
図11—1	7.9	6.5	0.2	倒卵形。8窓。周縁部のみ厚さ0.5cm。図10—2直刀の茎に装着して出土。

その他の刀装具

（単位　cm）

遺物番号	外径		内径		厚	備考
	長	短	長	短		
図10—1a	3.9	2.3	2.9	1.2	0.7	図10—1直刀の関付近に装着して出土。
—2a	3.2	2.3	2.5	1.6	0.35	幅1.15cm。図10—2直刀、刃部の関に接して装着されて出土。
図11—2	4.9	4.0	3.3	2.75	0.6	図10—2直刀の茎に近接して出土。

表—14　鉄鏃データー一覧表

（　）は残存長　（単位　cm）

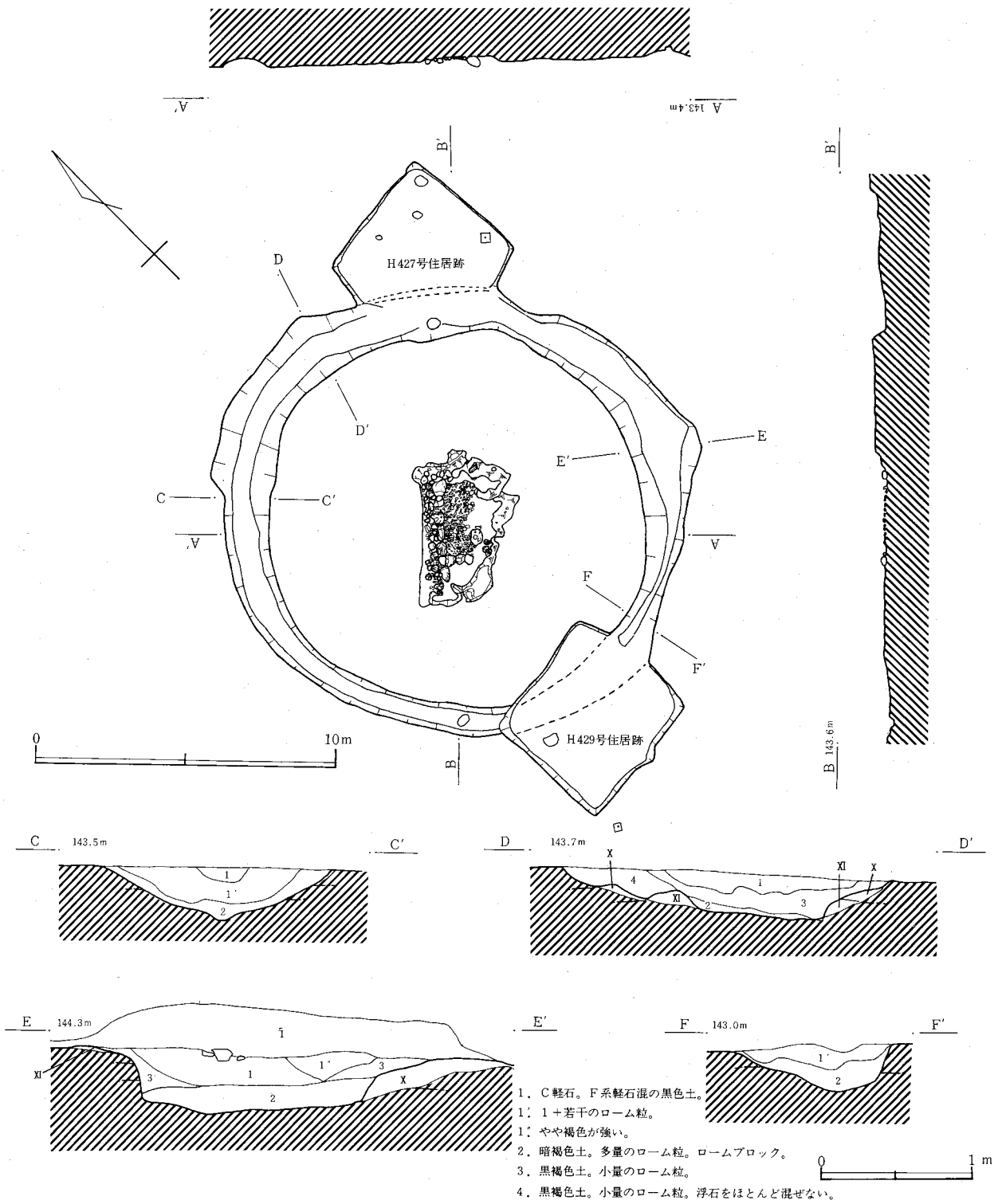
遺物番号	全長	鋒			柄		茎		備考
		長	巾	厚	長	断面	長	断面	
図11—4	5.7		2.9（腸抉巾）	0.2					無茎
図11—5	(4.0)		(2.5)（腸抉巾）	0.25					無茎
図11—6	(13.0)	(不明)	(不明)	(不明)	(9.0)	長方形	3.8	長方形	
図11—7	(11.9)	(不明)	(不明)	(不明)	(11.9)	長方形	(不明)	(不明)	片刃箭式とみられる。
図11—8	15.4	2.7	0.8	0.25	8.9	長方形	3.6	長方形	片刃箭式
図11—9	16.4	1.6	0.65	0.2	10.6	長方形	4.0	長方形	片刃箭式
図11—10	(15.9)	(不明)	(不明)	(不明)	(10.9)	五角形	4.9	台形	片刃箭式とみられる。柄断面は長方形の一角を削る形。
図11—11	(6.8)	(不明)	(不明)	(不明)	(1.8)	長方形	4.9	円形ぎみ	片刃箭式とみられる。
図11—12	(7.4)	(不明)	(不明)	(不明)	(3.0)	長方形	4.9	円形	片刃箭式とみられる。
図11—13	(7.5)	(不明)	(不明)	(不明)	(7.5)	長方形	(不明)	(不明)	柄の一部分のみ残存。片刃箭式か。
図11—14	(12.7分)	(不明)	(不明)	(不明)	(8.0分)	長方形	4.9	長方形	柄の部分で同一個体とみられる2片に分かれる。片刃箭式とみられる。
図11—15	(10.4分)	(不明)	(不明)	(不明)	(6.0分)	長方形	4.6	円形	茎全体に木質付着。片刃箭式とみられる。
図11—16	(9.7)	(0.5)	(不明)	(不明)	(9.2)	長方形	(不明)	(不明)	片刃箭式

2号古墳（図版14・15）

位置　ラ107、ム107。1号墳の南約250mに群在する3基の古墳のうち、東側に位置する古墳である。本墳の東約15mは谷地に落ちる崖になっており、台地の東端に所在する。東及び南には3、4号墳が近接している。周囲には石田川期の土器を伴う住居跡が濃密に分布しており、427・429号の両住居跡と重複している。本墳の方が新しい時期の産物である。

墳丘及び外部施設　周堀が全周する円墳である。調査時点では墳丘はすっかり平夷されており、もとの形をまったくとどめていなかった。周堀及び主体部掘り形の確認層はIX～X層（ローム漸移層）であり、古墳築造時の表土の認められる1号墳から判断して、古墳築造時の表土下で40cm前後掘削されているものと見られる。したがって盛り土等はまったく認められなかった。

周堀はほぼ正円形に全周している。周堀内側径は現状で12.6m前後で、ほぼ一定している。周堀の幅は一様ではなく、主体部奥壁方向の北東に広く、主体部入口方向の南西に狭くなる傾向が見られる。前者で幅2.2m、深さ40cm、後者で



図－12　2号古墳全体図及び地層断面図

幅0.9m、深さ30cmである。これに削平された分を考慮すると幅で0.5～1m前後広がり、深さで40cm前後プラスされるものと見られる。

石室入口は、周堀より内側に約3m入った所に開口する。この石室開口部の位置からすると、前庭の存在が予測されるが、古墳築造時の表土下まで削平されているため、この部分の様相を把握する資料は得ることができなかった。

周堀の内外及び本墳の付近から、埴輪の出土はまったく認められなかった。

図－13　2号古墳石室実測図

内部主体　左壁に自然石７石、右壁に同１石の根石列と梱石のみを残存した横穴式石室である。

石室は、南北4.7m、東西2.5m前後の掘り形の中に構築している。石室壁石の根石及び梱石は、掘り形の底面に直接設置されている。石室の壁石で残存していたのは根石のみで、左壁で７石、右壁で１石であった。他はすべて取り払われていた。このうち右壁の１石は、梱石との位置関係及び玄室床面の敷き石の分布状況から見て、10cm前後内側に入っており、現位置のものとは認めにくい。左壁の根石は玄室部に６石、羨道部に１石で、掘り形及び裏込めの状況から見て、羨道部にもう１石分置かれていたものと考えられる。根石は30～50cmの自然石の横口面を内に向けて配列しているが、奥壁に接する石のみやや大ぶりなものを使用している。これらの間にできた間隙には小さな川原石を挟み込んでいる。

羨道部に残存している１石は、玄室部の根石列より約10cm内に寄せて袖としている。右壁には対応する根石が現存しないので断定しかねるが、石室の平面形は両袖形の横穴式石室であったものと推測される。梱石は袖に接して、玄室寄りに３石設置されている。床面敷石の分布状況及び掘り形との位置関係から見て、当初から３石で現位置を保っているものと見られる。梱石は偏平な石を使用しており、その上面は石敷床面より５～10cm高い。

現存した部分での計測値は次のとおりであるが、石室全長及び羨道部長はこれより根石１石分（約50cm）は長かったものと見られる。

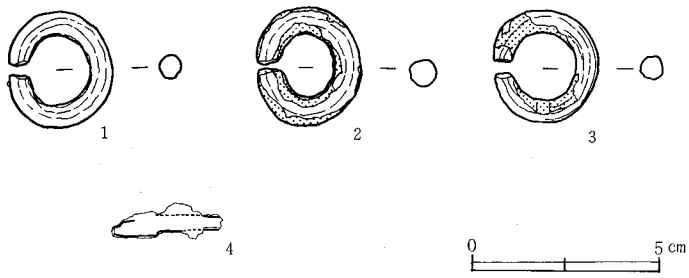
石室全長　325cm　　玄室長　270cm　　同奥幅　95cm前後（推定）　　同前幅（梱石幅）　90cm

奥壁～梱石間　240cm（推定）　　羨道長　54cm　　梱石奥行　30cm

石室床面は、梱石を境にして玄室部に敷き石が認められたが、羨道部にはまったく認められなかった。このような傾向は１号墳でも見られた。敷き石は10～20cmの川原石を中心に小礫を混ぜて掘り形床面に敷きつめていた。

石室裏込めは、壁石同様に左壁側に比較的良く残っていた。壁石裏側に40cm前後の厚さに大小の礫を入れて壁石を補強していた。裏込め外周は、玄室部側でほぼ掘り形法面に接しており、羨道部側では若干離れているが、全体として掘り形法面まで礫を充填しようとしたものと考えられる。

出土遺物　玄室中央奥壁寄りの敷き石上から耳環３、鉄鏃１、鉄片１が出土した。耳環のうち東西に30cm離れて対象的な位置に出土した２ケ（図14―１・２）は、現位置を保っているものと見られる。（唐澤）



図－14　２号古墳出土遺物

出土遺物　**青銅製品**　耳環（１～３）、１と３は出土位置から対とみられる。いずれも長円形ぎみである。１は、外径30×27.5㎜、内径19×16㎜、切込幅３㎜、断面６㎜、２は外径31×28㎜、内径15×14㎜、切込幅2.5㎜、断面７㎜。３は、外径30×28㎜、内径18×16.5㎜、切込幅４㎜、断面６㎜。２と３には鍍金を残存する。

鉄製品　鏃（４）、刀部先端と茎の大部分を欠損する。残存長は、刃部2.4cm、茎3.4cmである。（唐澤）

３号古墳（図版15・16）

位置　ネ108。３基群在している古墳のうち西側に位置するもので、２号墳の西40mに所在する。本墳の西には、自然の浅い窪地が南北に走っており、周囲の石田川期住居跡の分布の西限を画している。

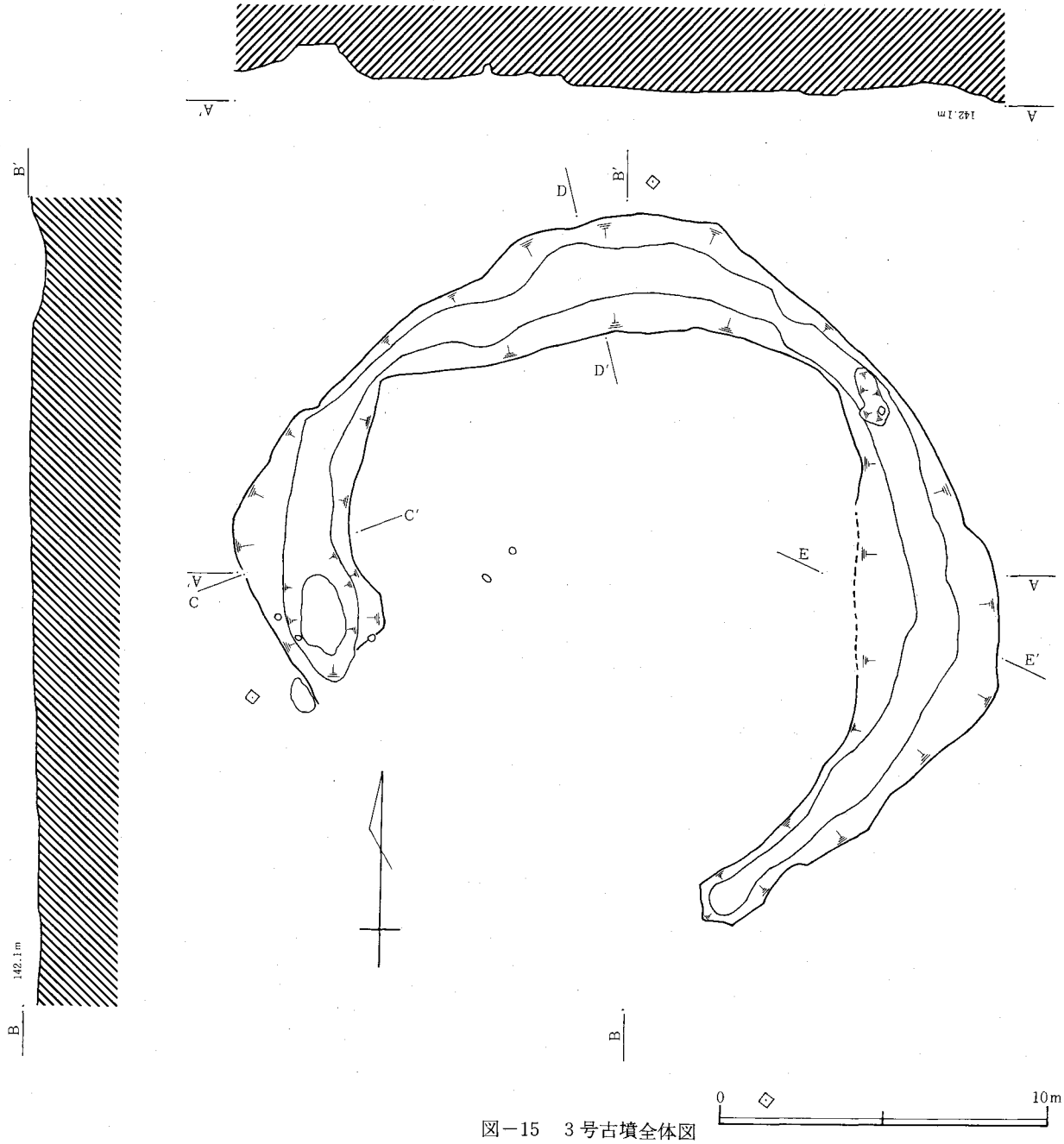
墳丘及び外部施設　隅丸方形に近い周堀のみを残存する古墳である。２号墳同様、調査時点では墳丘はすっかり平夷されており、もとの形をまったくとどめていなかった。表土をはぐとすぐＸ層（漸移層）が現われ、古墳築造時の表土下を40cm以上掘削しているものと見られる。古墳の南西部に２ケ所、３×3.5m、深さ40cmの竪穴状の土壙が認められたが、この底部には重機のキャタピラの痕跡が明瞭に残っていた。２号墳を含め、本墳付近一帯を削平した重機の可能性が高い。２つの土坑内には、本墳の主体部のものとも見られる大小の石塊を含む砂礫がつまっていたが、土坑の位置及び土坑底面のキャタピラの痕跡から見て、本土壙は主体部とは関係のないものである。主体部の様相を把握できる資料は得られなかった。

周堀は、外周で隅丸方形、内周で不整形を程している。南側は丸みを持ったカーブを描きながら途切れており、幅広い「渡り」とも言える様相を程している。１号墳から推して、この部分に向かって石室入口部が開口していたものと思われる。周堀の幅は一様ではなく、東・西・北の中央で幅広くかつ深い。それらをつなぐ部分では幅が非常に狭く、深さも浅くなっている。前者で周堀幅3.4～４m、深さ33～44cmで、周堀西側南端のみ97cmと特に深くなっている。後者は幅0.9～1.3m、深さ14～22cmで小規模である。周堀の規模は外周で、東西21m、南北19.5mである。周堀の様相は全体に１号墳と良く似ている。

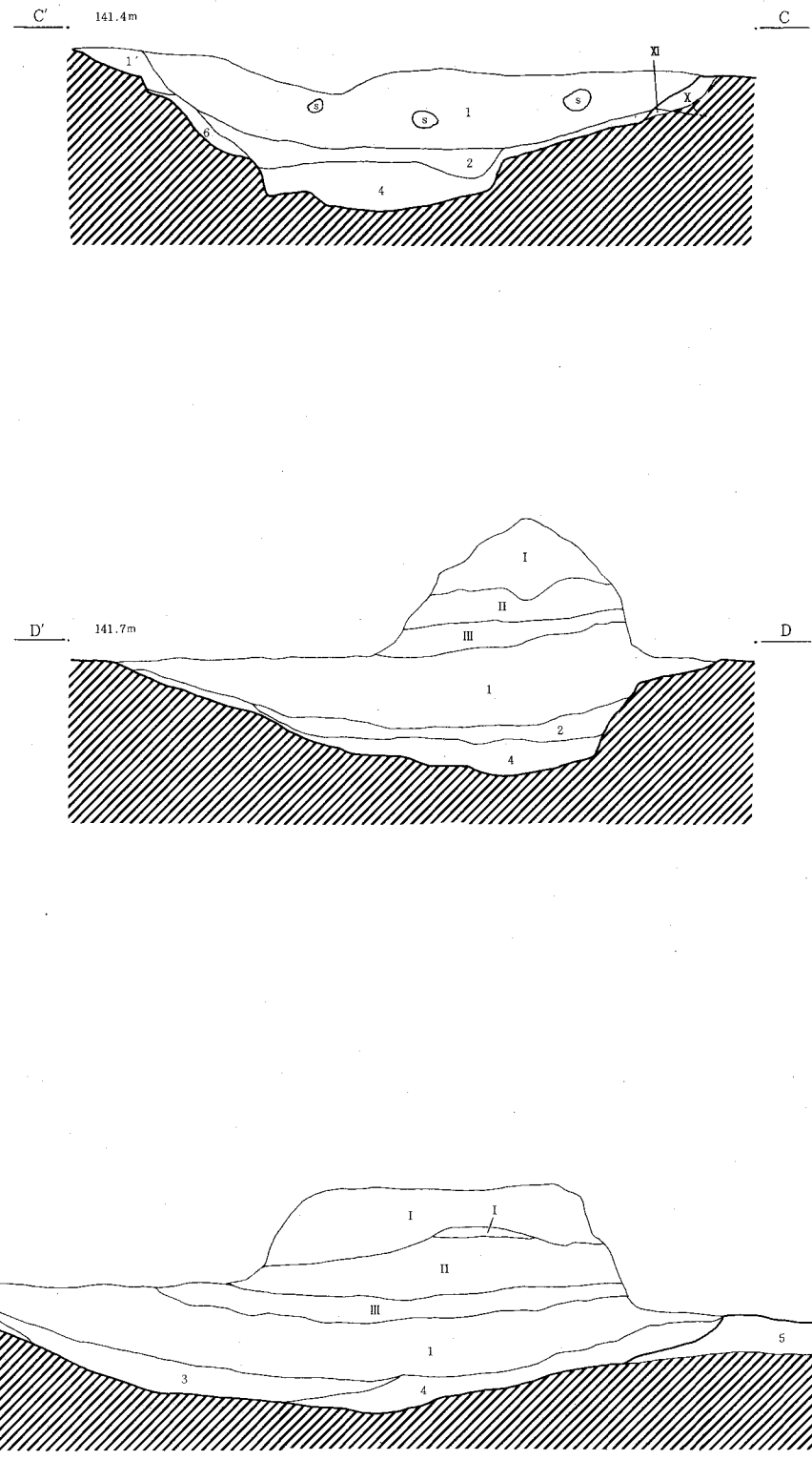
西側南端の周堀中（前記した周堀で最も深い所）からは、底面から20～60cm浮いて、人頭大のものを中心に多量の石塊が出土した。これらの中に遺物はまったく認められなかったが、周堀覆土中に見られる浅間山噴出にかかるＢ軽石純層下のものである。これがＢ軽石降下前の古墳の破壊（崩壊）を物語るのか、あるいは単に当時の窪地に石塊を投げ入れたのか不明である。周堀中でこのような様相を示すのは、ここ１ケ所だけである。

周堀の内外及び本墳の周囲から、埴輪の出土はまったく認められなかった。

出土遺物　底面にキャタピラ痕を有する土壙中からは、外面にハケ目を持つ石田川期の土師器甕小片が、周堀中からは須恵器長頸瓶？（1）、高台埦等が若干出土している。（唐澤）



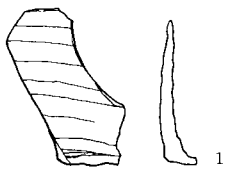
図－15　3号古墳全体図



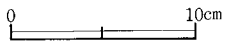
1．黒色土。C軽石と二ツ岳系軽石混。
1′．1＋ローム粒。
2．暗褐色土。ローム粒少量混。
3．暗褐色土。ローム粒多量混。
4．暗褐色土。多量のローム粒。ロームブロック。
5．暗褐色土。ローム層中の軽石を混ぜ縄文遺構を埋める覆土に似る。
6．褐色土。ローム主体。ブロック状に2層を混ぜる。

0　1 m

図－16　3号古墳　周掘地層断面図



出土遺物　**須恵器**　長頸瓶か（1）、口縁部片。口縁部先端を内彎させながら尖らす。内外面には顕著なロクロ痕を残し、自然釉がかかる。胴部との接着法は、胴部器壁の上に頸部を置く。色調は灰色で、極めて堅緻は焼成である。（唐澤）



図－17　3号古墳出土遺物

4号古墳（図版16）

位置　ラ108～109、ム108～109。最も南側に位置する古墳で、位置関係から見て、古墳の南側の一部は東西に走る大正用水路により破壊されている。大正用水路の北側は生活道路となっているため調査区域から外しているので、本墳の調査は北半部のみで、面積は古墳全体の40％程度である。

本墳を含めこの地区に群在しているのはわずか3基だが、地形の連続性から見て、南に延びる調査区域外の台地にも、多くの古墳が群在していたことが考えられる。

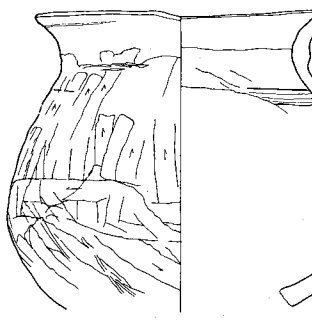
墳丘及び外部施設　2・3号墳同様、調査時点では墳丘はすっかり平夷されており、もとの面影をまったくとどめていなかった。生活道路面は調査地点より高い所にあるので、道路端を利用して、古墳全体を見通す切断面をつくり、地層観察を行った（付図1）。この結果、生活道路下では、表土の下には盛土が見られず、所々にⅥ層のF・A純層が認められ、大部分はその下のⅦ層ないしⅧ層の黒色土であった。一段低い調査区では、表土下はX層のロームへの漸移層であった。以上から、一段高い生活道路で、すでに古墳築造時の表土下まで削平され、調査区域内ではこれが更に40cm前後削平されていることが判明した。

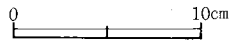
周堀は2.4m前後の幅で、1号墳や3号墳に比べ概してきれいな弧を描いているが、北西部でやや広がって4.5m前後の周堀幅となっている。周堀の深さは、北西部の幅の広い所で58cmとやや深いが、他の所でも30～57cmであり、全体に一定の深さと言える。周堀の広がりの規模は不明だが、現状のままで復元すると、周堀径は内周で27m前後、外周で30m弱の円墳が想定される。

周堀の内外及び本墳周囲から、埴輪の出土はまったく認められなかった。

内部主体　直接的に主体部を物語る資料は得られなかったが、本墳の中心に近い所に、主体部に伴う掘り形と見られる土壙の一部が検出された（図19）。地層断面の観察によると、現状で東西3.6m、南北1.4m、深さ1mで、2段に掘削されている。段差は約35cmである。埋土は土壙上段を黒色土で埋め、この中央部を再度掘り上げロームを主体とする褐色土で埋塡しているが、この際、上段底部を35cm程掘削して段差ができたものと推測される（付図1）。

この土坑が、古墳の主体部に伴う掘り形と見られる理由は、①周掘径を復元すると、その中心点が土坑北端から南4.3mの位置にくること。これは1号墳の墳丘盛り土の中心点の位置とほぼ一致する。②1号墳の主体部掘り形が2段に掘削され、これと共通していること。③1号墳において、主体部掘り形を一旦埋塡してから、再度掘り上げて石室を設置していること。④この土壙の検出された部分が、長方形の主体部掘り形の東北の隅とすれば、主軸は南東に向かって延びており、横穴式古墳の主体部が南方向に開口する例が多いのに合致すること。⑤生活道路をはさんで、土壙の南にかって大石があったという地元の証言が得られたことの、以上5点である。以上により、本土壙は古墳主体部の掘り形と考えられ、1号墳との共通性や⑤の大石から見て、本古墳は横穴式石室と推定される。

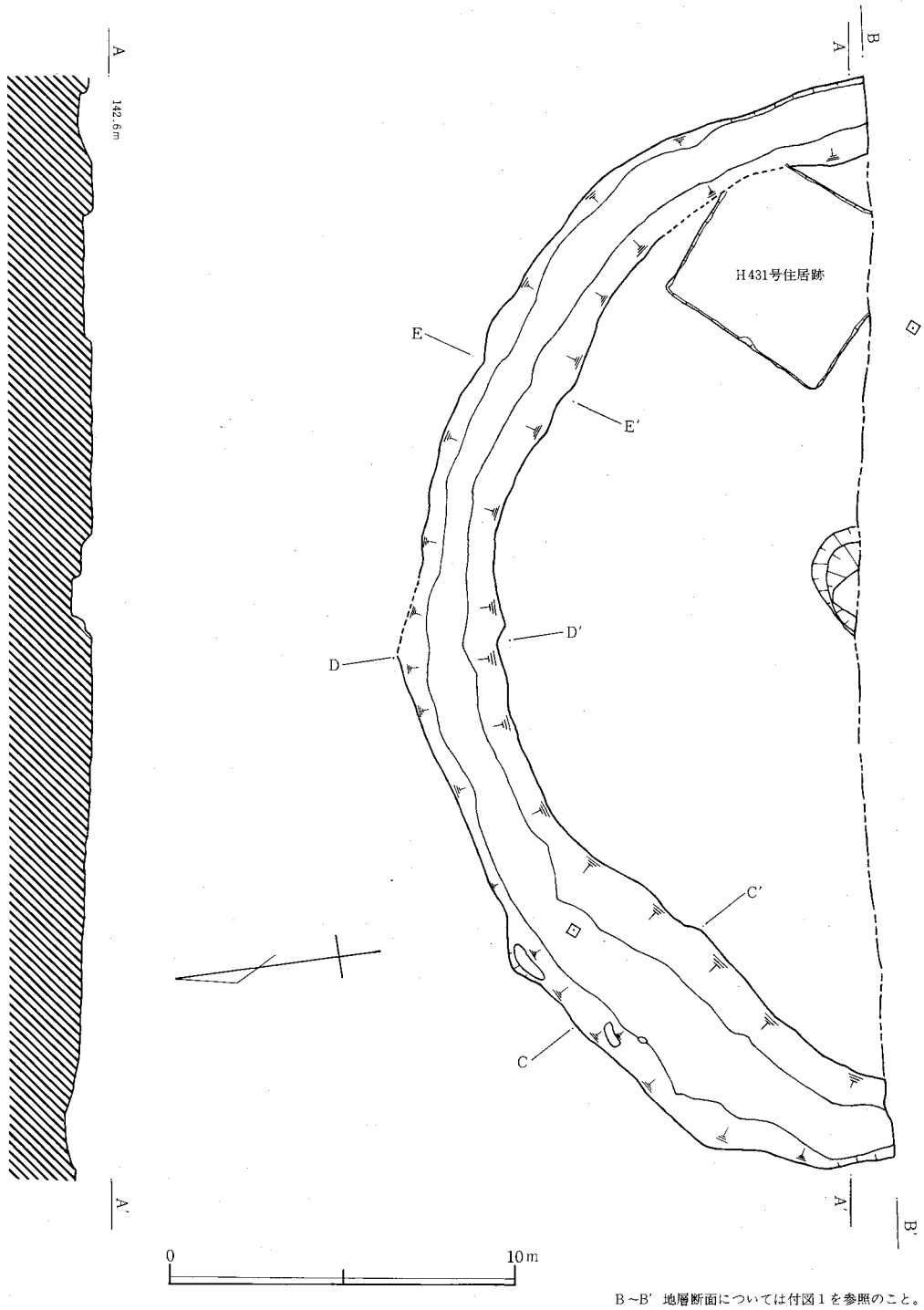




図－18　4号古墳出土遺物

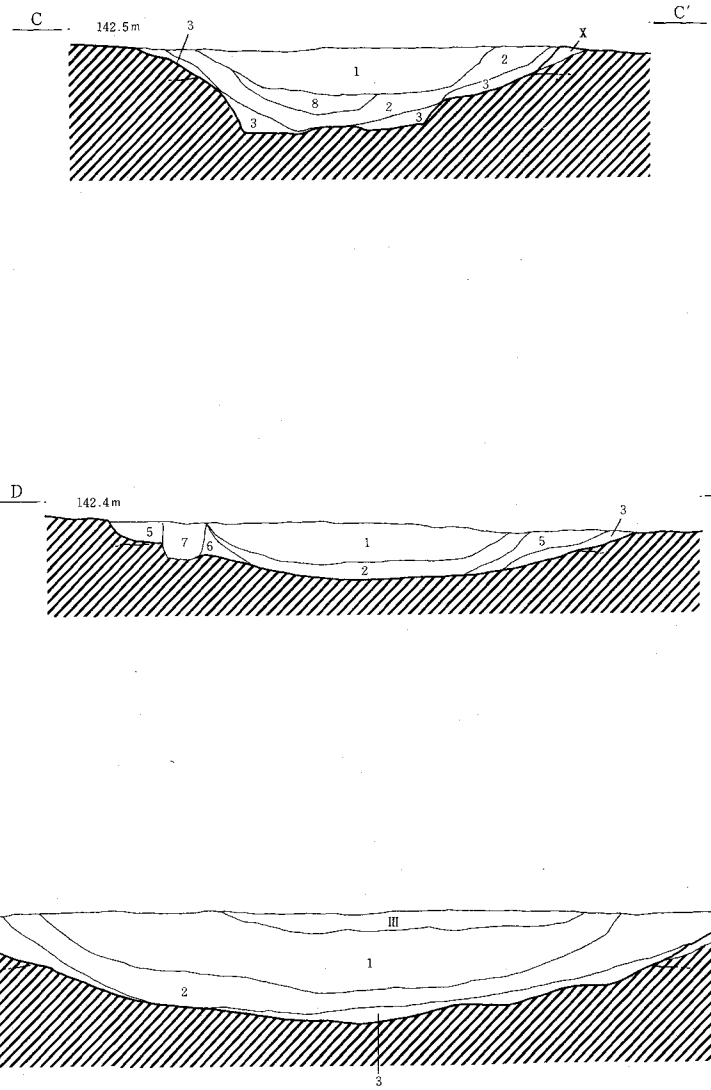
出土遺物　周堀西側の調査区域南端に近い所で、底面から約30cm浮いて土師器平底甕(1)、同坏(2)が出土した。（唐澤）

出土遺物　**土師器**　甕（1）、下脹れの胴部に厚い器壁。胴部外面のヘラ削り調整は雑。口縁部内外面はヘラ状工具による横ナデか。頸部内面に小口状道具によるハケ目。　坏（2）、内彎する高い口縁部。口縁部と底部内面に横ナデ。（唐澤）



B～B' 地層断面については付図1を参照のこと。

図－19　4号古墳全体図



1．黒色土。C軽石と二ツ岳系の軽石混。
2．黒褐色土。小量のローム粒混。軽石同上。
3．暗褐色土。多量のローム粒・ロームブロック。
4．暗褐色土。多量のローム粒。
5．黒褐色土。若干のローム粒。軽石1に同じ。
6．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
7．黒褐色土。ロームブロック（ピットを埋める）。
8．黒褐色土。若干のローム粒。1に似る。

0　1 m

図－20　4号古墳周堀地層断面図

3　竪穴式住居跡

概　要

芳賀東部団地遺跡全体で、合計553軒の竪穴式住居跡を検出している。内訳は、縄文時代58軒、古墳・奈良・平安時代459軒である。本書に収録した分は、東側台地の土師器を伴出する住居跡で、古墳時代（石田川期）73軒、奈良・平安時代109軒の、計182軒である。第２巻目で扱う西側台地の土師器住居跡のようすと比較すると、西側台地は石田川期の住居跡がなく、古墳時代後期（南関東の編年で鬼高IIIに相応する時期）から奈良・平安時代まで集落が続くのに対して、東側台地では、上記の石田川期住居の廃絶した後、古墳時代後期に横穴式古墳が構築され、奈良時代前後（南関東の編年で真間式に相応する時期）から再び集落が形づくられていく、といった違いがある。

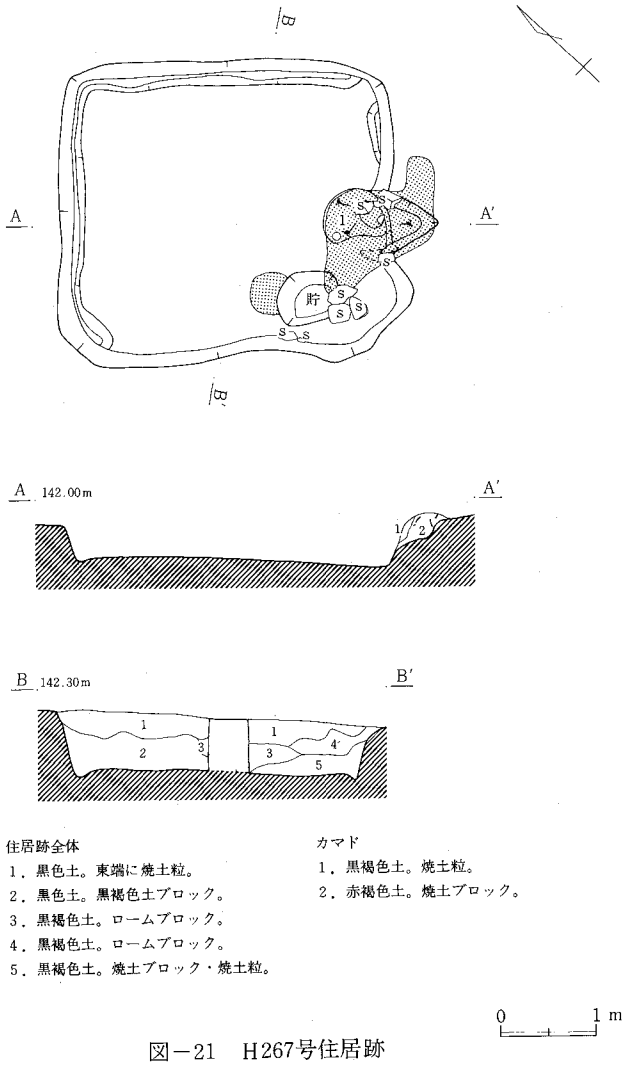
東側台地では、石田川期と奈良・平安時代の住居跡の分布に、顕著な違いがみられる。すなわち、石田川期の住居跡は、調査区域中程の１号墳の北側付近に北限を置き、古墳と共に分布の中心を南側に持つのに対して、奈良・平安時代の住居跡は、石田川期の北限付近を南限とし、東側傾斜面に高い密度で分布する。後者の奈良・平安時代の住居跡については、古墳時代の墓域を避け、東側の谷地を重視している（例えば、ここに当時の水田が埋もれていることも考えられる）ことと関連しているものとも考えられる。

石田川期の住居跡を方位別にみると、ほぼ３つのグループにまとめられる。南北方向の軸を、(1)、磁北より５°前後以内で西に振るグループ、(2)、東に15°前後振るグループ、(3)、東に30°前後振るグループの３者である。それぞれのグループ内での重複はないが、(1) と (2) の間で２カ所認められる。果して、これが時期差を表わすものかどうか、今後検討を要する所である。ヌ101付近には、一定の空間を囲んで馬蹄形に密集する住居跡群がある。この空間中に一棟の掘立柱建物跡があるが、石田川期のものかどうかは不明である。また、ここからは、際立って大型の住居跡（H416号住）や細長い住居跡（H466号住）が検出されている。管玉、同未製品、勾玉、同模造品もここの住居跡群から出土した。

奈良・平安時代の住居跡は、まとまりを持った群で存在するのが基本とみられる。この中には、掘立柱建物跡を含むものと含まないものの２者がある。東側斜面中には大型の住居跡（H359号住、H395・396号住）や、銙帯の出土する住居跡（H364号住）があって、両者の群に包括される掘立柱建物跡のみＬ字型に配列することが注目される。　（唐澤）

馬蹄形に群集する石田川期の竪穴式住居跡

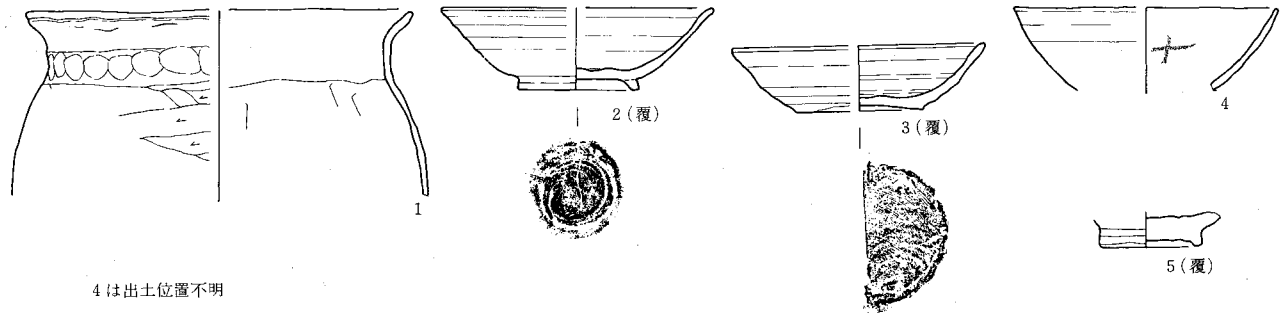
H267号住居跡　（図版17）



図－21　H267号住居跡

H267号住居跡　位置　17区調査区域の南端付近、ヨ109～110にかけて所在する。周囲には3軒の住居跡と4棟の掘立柱建物跡があり、これで一群を構成する。本遺構の東側には、南北に走る台地上の浅い窪地があり、この部分には39･40号溝以外の遺構は存在しない。**形状**　東西方向にやや長い隅丸長方形の住居で、規模は南北2.92m、東西3.82mを測る。南東隅貯蔵穴部分には弱い張り出しがみられる。東壁はカマド袖部分に向かって弧を描く。面積9.5㎡、長軸方向N－107°－E、壁高37～53cmを測る。周溝は北壁と西壁下及び東壁北側に存在する。幅8～16cm、深さ2～7cmである。　**カマド**　短辺の東壁南寄りに付設する。カマド両側の壁は袖に向かうように弧を描いており、それを利用して袖とする。この袖部分及び燃焼部には石材を利用したようすがうかがえるが、調査時にはすでに動いており、現位置をとどめなかった。また、右袖部は燃焼部の位置から考えて、粘土等で20～25cm内へ延びていたものと推測される。全長約90cm（推定）、燃焼部長35cm（推定）、袖部内幅約40cm（推定）。煙道部は一段高くなっている。貯蔵穴付近の石は、カマドから焼土が延びている（灰をかき出したものとみられる）ことを考え合わせて、カマドの石材ともみられる。　**貯蔵穴**　南東隅のやや西寄りに位置する。この部分のコーナーには、若干の張り出しを持たせる。隅丸長方形ぎみで、67×54cm、深さ21cmである。　**遺物**　カマド内及び焚口付近から貯蔵穴付近にかけての床面から、土師器甕片(1)が出土した。カマド先端の煙道部分には土師器甕が置かれていたような形で出土した。覆土中からは須恵器坏（3)、同埦（2・4・5）等が出土した。

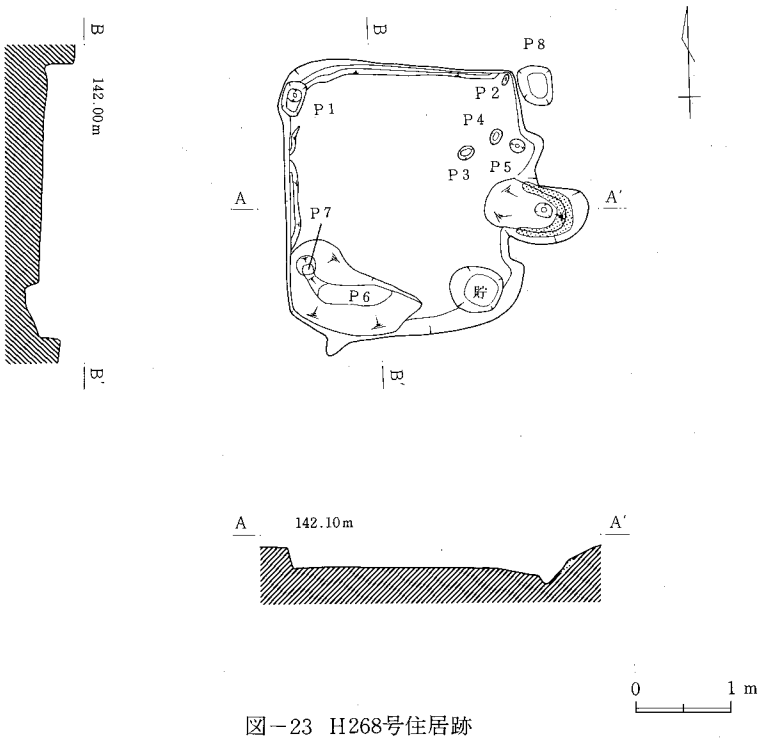
（唐澤裕）



図－22　H267号住居跡出土遺物

出土遺物　土師器　甕（1)、典型的なコ字状口縁甕である。口縁部は内外面とも横ナデを施すが、外面には顕著な指頭痕を残す。口縁部立ち上がり部（頸部）の上下の境には凹線をめぐらし、肩部と口縁外反部との境を明確にしている。胴部外面は横ヘラ削り、内面はていねいな横ヘラナデである。　**須恵器**　坏（3)、ロクロ整形。底部には回転糸切り痕を残す。体部外面には顕著なロクロ痕を残す。内面の底部中央は凹ます。胎土中には小礫が多く、その盛りあがりのため器面は荒れている。色調は灰色で、体部外面は黒灰色を呈す。焼成は堅緻である。　埦（2・4・5)、付高台。2は台形の高台に、直線的に延びる体部を持つ。口縁端部はやや肥厚する傾向を持つ。高台の内面接着は雑である。色調は淡灰褐色で部分的に灰色になる。焼成は甘い。口縁部内面に油煙状の黒色付着物。4は底部を欠損するが、台付埦とみられる。調整は内外面とも毛皮状のものでロクロ目を消すていねいなつくりである。うすい器壁で、口縁部端に行くほどうすくなる。暗灰褐色で、堅緻な焼成。内面に「＋」の墨書。5は底部のみ残存する。高台の形状及び接着は雑である。2・4・5の埦はいずれも底部に回転糸切り痕を残す。ロクロの回転方向は右である。　（唐澤）

H268号住居跡

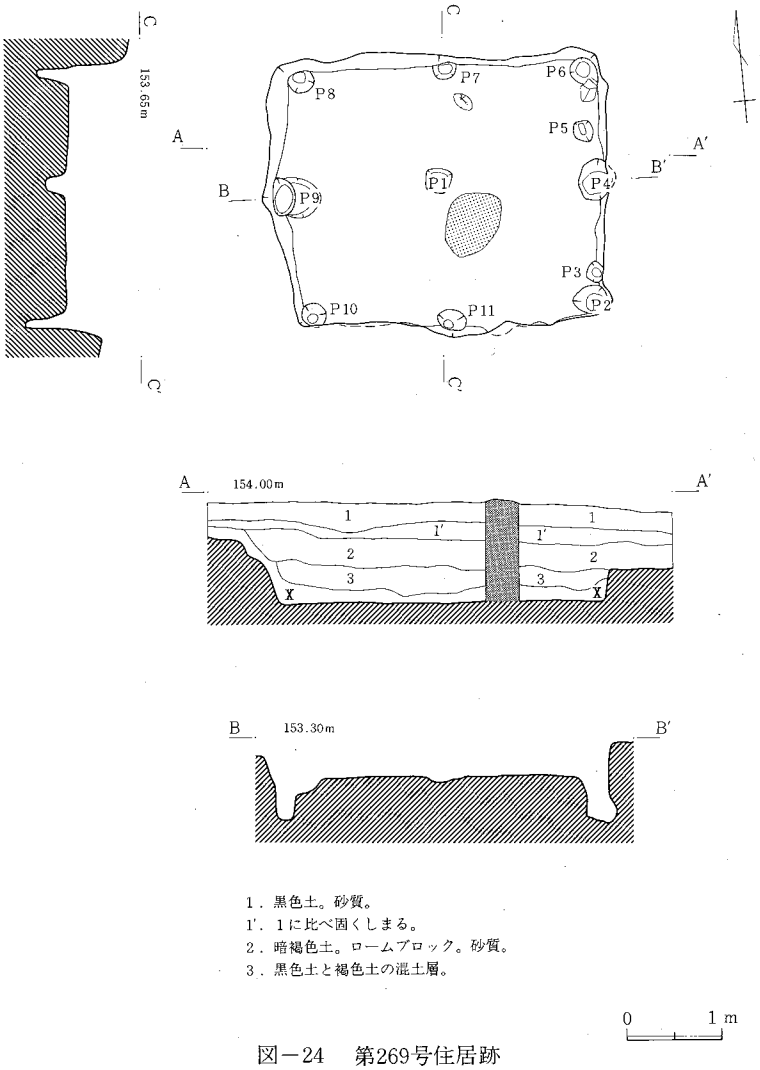


図－23　H268号住居跡

H268号住居跡　**位置**　タ109に所在する。本遺構を挟んで、南北に267・271号住居跡がある。南側には4棟の掘立柱建物跡がある。**形状**　南北にやや長い台形状の小型住居跡で、規模は南北に2.85m、東西2.4mを測る。東壁中程では、カマド長軸に直交するように壁の走向を変化させているため、壁線に出入がある。面積は6.3m²、長軸方向はN－1°－W、壁高は15－29cm。北壁と西壁下には、幅5～14cm、深さ1～2cmの周溝をめぐらす。　**ピット**　南東を除く隅角に径20cm前後、深さ6～29cmのピット（P1・P2・P7）がある。小型の本住居跡に相応する柱穴とみられる。カマド左手のP3～P5は、間敷切り的な機能を持つものと考えられる。深さは2～19cm。南西隅の不整形のP6は深さ14cmで、ここにピットを持つ例は多い。住居外のP8は深さ28cmで、住居との関係は不明である。　**カマド**　東壁南寄りにあり、壁外に掘り込む。左袖部分は地山を若干掘り残す。全長82cm、燃焼部長40cm、袖部内幅50cm、カマド先端の立ち上がり角度は30°である。火床面は住居床面より8cm程度低くなっている。燃焼部先端の小ピットは、支柱の抜いた跡ともみられる。

（唐澤裕）

H269号住居跡　（図版17）

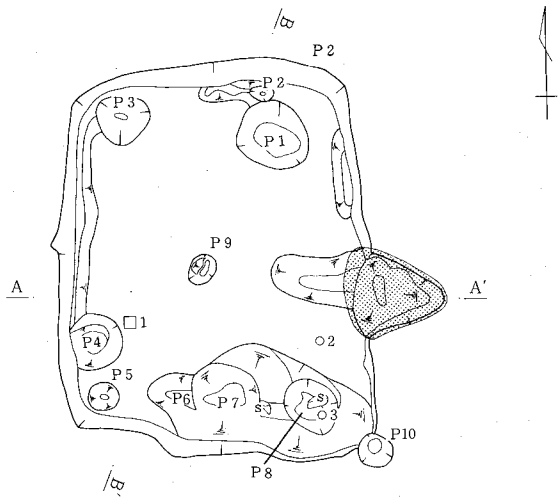


図－24　第269号住居跡

269号住居跡　**位置**　調査区域西側の北、又6に所在する。台地の西縁部より60cmほど東に寄った平坦な部分に当る。　**形状**　2.76×3.53mの短形を呈しており、長軸方向N－92°－E、面積8.1m²、壁高62～68cmである。西壁及び南壁はやや外に膨らんでおり、更に南壁はかすかに内傾している。　**ピット**　床面に合計11個のピットがあるが、やや小ぶりのP3・5を除くと、東西の心々150cm、短軸北側の心々120cm、南側の心々150cmの総柱建物の柱穴状を呈した位置関係にある。P4・9の掘り形がややしっかりとしている（棟持柱か？）外は、いずれも以かよった規模である。P1、深さ19.5cm・P2、深さ53.5cmを除くといずれも深さは30～40cmであり、四隅にあるP2・P6・P8・P10の4つのピットは300×240cmの長方形の角に非常によく一致しており企画性が窺える。なお、P3・5の性格は不明である。　**その他**　カマド・貯蔵穴等の施設は認められなかったが、床面のほぼ中央南東寄りの部分において、地床炉跡と考えられる長円形（74×54cm）の焼け込みを検出した。　**遺物**　床面及び覆土中において遺物は全く認められなかったが、P6・P7の傍に、比較的扁平な人頭大の割れ石が残っていた。

（飯塚）

H270号住居跡　（図版18）



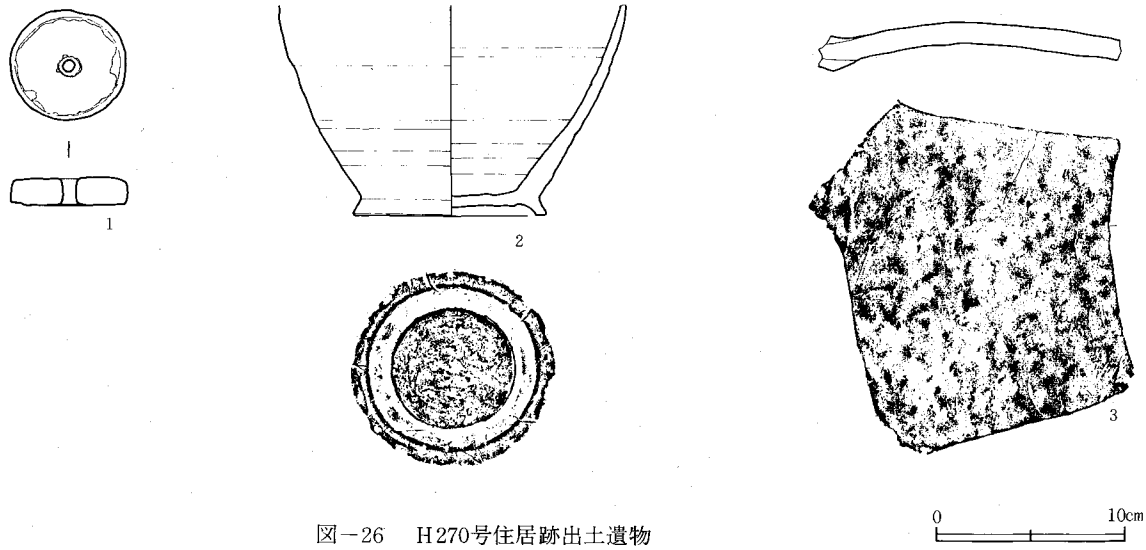
住居跡全体
1．黒色土。ローム粒・焼土。
2．黒色土。ローム粒・焼土・炭化物。
3．黒色土。黒色強。ローム粒・焼土・炭化物。
4．黒色土。ローム粒・ロームブロック。
5．黒色土。ローム粒・ロームブロック。

カマド
1．黒色土。ローム粒。
2．黒色土とローム粒の混土層。
3．黒色土とローム粒の混土層。焼土。
4．焼土主体。小量の黒色土。
5．黒色土とローム粒の混土層。

0　1 m

図－25　H270号住居跡

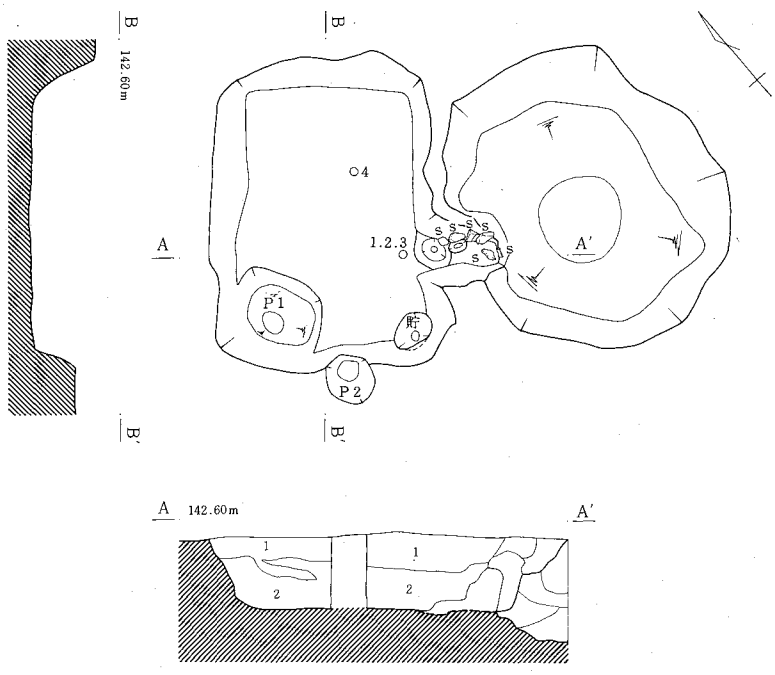
H270号住居跡　　**位置**　調査区域最南端の台地上先端部分、タ110に所在する。直ぐ南側を大正用水が東流し、これより南は急に傾斜が強くなる。　**形状**　ほぼ南北に長軸を持ち、南壁側がやや開がる隅丸台形。壁は南壁が階段状に斜行している他はほぼ直線である。東壁は西壁に比べ南側が約30cm、南壁の直線距離は北壁に比べ東側が約60cm長くなっている。南北４m、東西3.1mで長軸方向はN－2°－E、面積10.8m²、壁高18～38cmである。西壁のほとんどと、東壁、北壁の一部に深さ２～４cmの浅い周溝をめぐらす。　**ピット**　住居内に９個、住居南東隅外側に１個検出され、このうちＰ１、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ８を住居の形、掘り形の規模等から柱穴と推定。Ｐ７は南壁が階段状に外方に張り出していることなども考え合わせると出入口施設に伴うものという見方もできる。　**カマド**　東壁南寄り。全長92cm、袖部内幅80cm、燃焼部長72cm、壁への掘り込み角度67°で、壁外掘り込み82cm。焚口部分から手前に特に焼土が多く、火床面は床面とほぼ同じ高さである。　**遺物**　カマド右袖部前から須恵器長頸瓶下半部(2)、Ｐ４東側床面から土製紡錘車(1)出土。　（松村）



図－26　H270号住居跡出土遺物

H271号住居跡　（図版18）

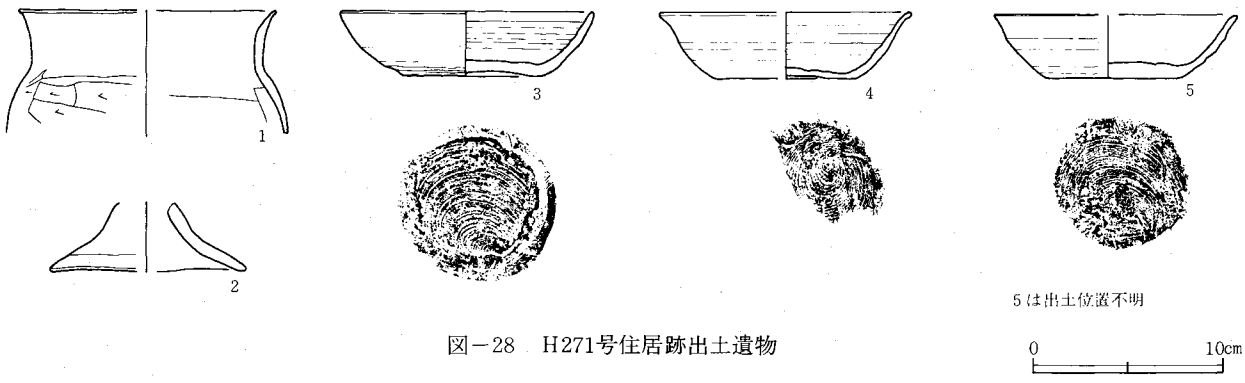
出土遺物　**須恵器**　瓶（2）、長頸瓶とみられる。胴部上半は欠失する。外面調整は紐積み（推定）後、ロクロ回転を利用するヘラナデ、その後毛皮状のものでロクロナデを施す。内面はロクロ回転利用の指ナデである。底部外面は、当初からの細かい凹凸が残り、荒れたようになっている。高台はていねいに接着する。　甕（3）、大甕の肩部小片。内面は同心内状のタタキ目をうすく残すが、外面については不明である。最後の調整はていねいな横ヘラナデ及び手のひら等の押しつけとみられる。　**その他**　紡錘車（1）、須恵質。黒灰色で堅緻な焼成。　（唐澤）



図－27　H271号住居跡

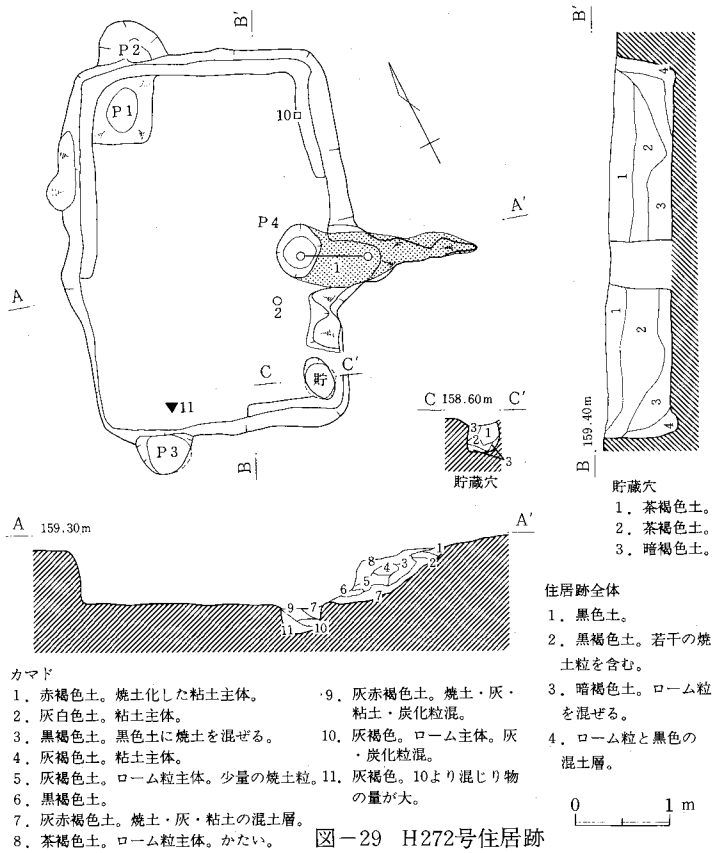
H271号住居跡　**位置**　タ109に所在する。すぐ東は南北に走る台地上の浅い窪地となっている。南西方向には、ほぼ同時期とみられる3軒の竪穴式住居跡と4棟の掘立柱建物跡がある。　**形状**　南北方向に長軸を取る隅丸長方形の小型住居で、規模は南北で2.8m、東西1.9mを測る。平面は概して整然としたつくりだが、南東隅の貯蔵穴と南西隅のＰ１部分の所で東西幅が広い。面積5.1㎡、長軸方向Ｎ－12°－Ｅ、壁高47～72cmで北側が高い。**ピット**　南西隅に隅丸方形状のＰ１、南壁中央付近の壁にかかってＰ２がある。前者はその形状からして貯蔵穴的な機能を推定できるのではなかろうか。深さは35cmである。後者は底が住居平面に達しておらず、遺構検出面からの深さは40cmである。性格は不明である。**カマド**　東壁南寄り、住居外に構築しており、煙道部左壁に4石分、右壁に1石分の石材を残す。全長130cm、燃焼部長40cm、袖部内幅46cm、煙道部立ち上がり角度56°である。火床面は住居床面より6cm低い。**貯蔵穴**　南東隅、長方形で46×32cm、深さ24cmである。　**遺物**　床面または床面直上から土師器（1）、同小型甕脚部（2）、須恵器坏（3～5）等が出土した。　**重複関係**　カマド部分先端とH大7号土坑と重複する。本遺構が新しい。

（唐澤裕）



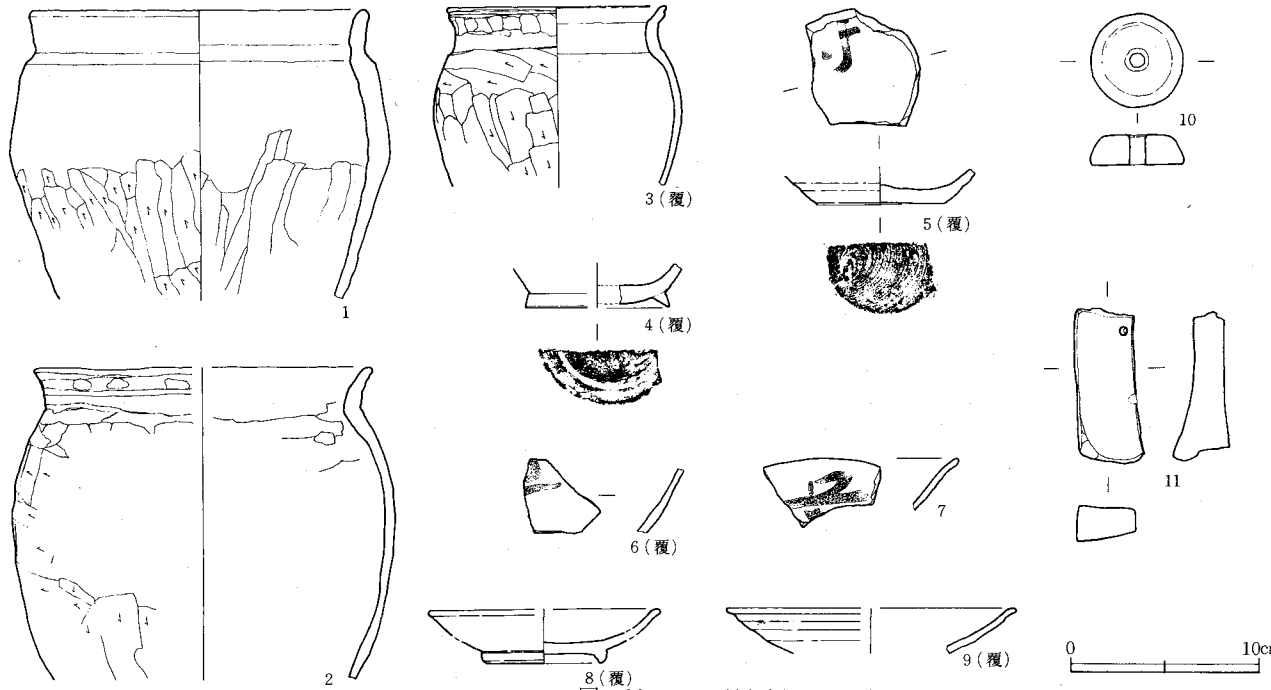
図－28　H271号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1・2）、両者は同個体の可能性がある。1はゆるやかに外反する口縁部を持つ小型甕で、調整は口縁部内外面に横ナデ(外面に指頭痕を残す)、肩部外面横ヘラ削り、同内面に横ヘラナデを施す。2は脚台付小型甕の脚部で、粘土紐を指押さえした後、内外面に横ナデを施す。外面には粘土紐接合痕を残す。1・2とも色調は淡褐色。　**須恵器**　坏(3～5)、いずれも右回転のロクロ成形で、底部には回転糸切り痕を残す。3は厚めな器肉を持つ底部に、浅く内彎する体部を持つ。体部内面にはロクロ痕を残すが、外面は消している。概してていねいなつくりである。色調は暗褐色で、体部外面のみ黒褐色。4は口縁端部が肥厚して外反する坏で、器肉もほぼ一様でうすい。色調は灰色で、表面に気泡状の小さい穴が多量に見受けられる。小礫を混ぜる。5は厚い底部の器肉に内彎する体部を持つが、口縁部付近で壁厚を減じる。外面には顕著なロクロ痕を残す。色調は灰白色で体部外面のみ黒灰色。　（唐澤）



図－29　H272号住居跡

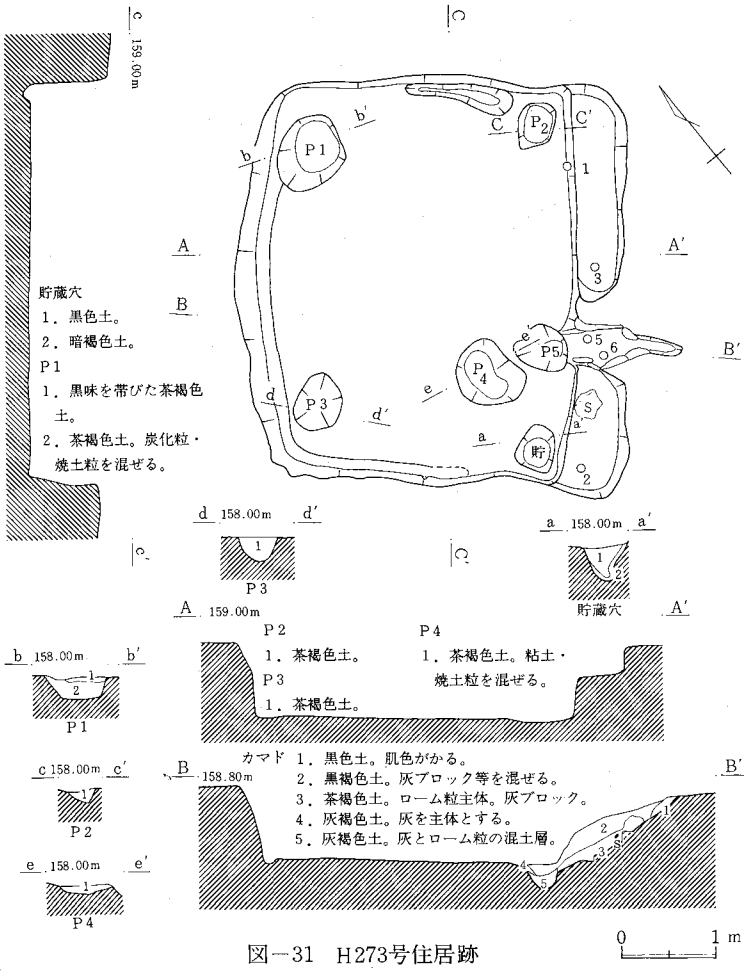
H272号住居跡（5H－1）　**位置**　調査区北端、ヲ13～14に所在し、台地の東西位置の中央付近に当り、全体として平坦な所となっている。**形状**　北々西から南々東に長軸を持つ長方形で、南北3.9m、東西2.7mである。東壁の北3分の1、西壁の南3分の1が内に寄る。長軸方向はN－24°－E、面積は10.1m²、壁高62～69cmである。北半分の壁下と東南隅の壁下には周溝をめぐらす。幅10～15cm、深さ5～8cmである。　**ピット**　床面2ヵ所（P1、P4）南北の壁にかかって2ヶ所（P2、P3）ある。P4は径が35cm前後、深さ25cmでカマドに付属する灰かき穴と見られる。P1は48×32cm、深さ9cmで性格は不明である。P2、P3は南北壁にかかって対象的に位置にあるが、住居跡との関係は不明である。**カマド**　東壁中央南寄り。右側袖部は20cm程の地山を掘り残している。全長156cm、袖部内幅50cm、燃焼部長76cm、壁への掘り込み角度38°で、壁外掘り込みは110cmである。火床面は床面とほぼ同じ高さである。　**貯蔵穴**　南東隅、長円形で規模は44×30cm、深さ32cmである。　**遺物**　カマド内及びカマド手前付近床面から土師器甕（1、2）が、北東隅及び南西隅に近い床面上からそれぞれ紡錘車（10）、砥石（11）が出土した。覆土中（5～7）からは墨書土器、灰釉陶器（8・9）が出土している。（近藤）



図－30　H272号住居跡出土遺物

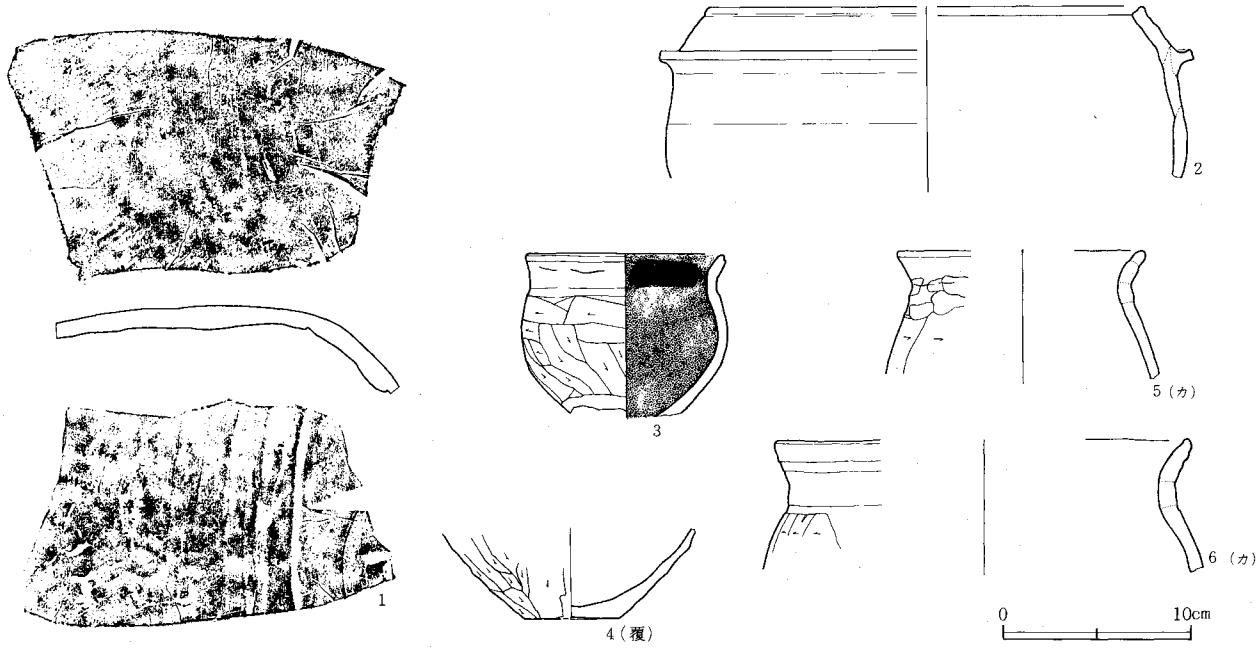
出土遺物　**土師器**　甕（1～3）、1は厚い肩部・短く直立する口縁部に横ナデを施し、胴下半部外面はヘラ削り、内面はハケが施される。緻密な胎土、堅い焼成を示す。2は口縁部・肩部ともに指頭痕を顕著に残し、口縁部は横ナデ、胴部外面はヘラ削り、内面はナデが施される。3は口唇部に浅い沈線状を巡らす小型甕である。台付甕であろうか。口縁部は指頭痕を残す横ナデ、胴部外面はヘラ削りを施す。　**須恵器**　埦（5）、ロクロ方向不明。底部切り離し後、断面三角形の付高台。切り離し技法不明。　坏（4・6・7）、墨書片。判読不明。　**灰釉陶器**　皿（8・9）、8の高台は幅が広く、外面下端部で弧状を成す。底部は回転ヘラ削りを施す。漬け掛け手法により、内面中央部及び高台部まで施釉される。内面に直接重ね焼き痕を留める。9は漬け掛け手法により、体部上方内外面に施釉される。灰白色で硬い焼成を示す。　**石製品**　紡錘車10は蛇紋岩製で重さ66.3gである。砥石11は流紋岩で端部に紐通し様の穿孔あり。（中束）

H273号住居跡　（図版19）



図－31　H273号住居跡

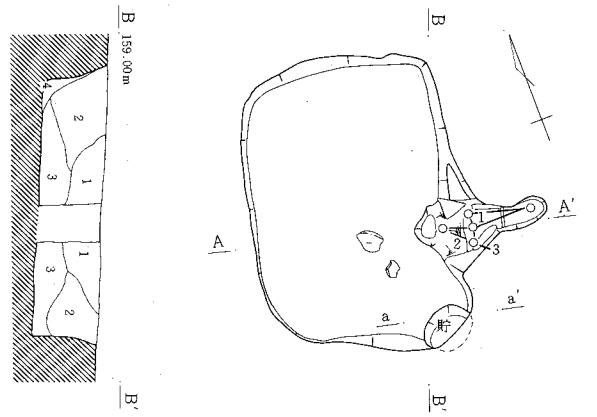
H273号住居跡（5H－2）　**位置**　調査区域北端ヲ13に所在する。本遺構東33mは谷となる。**形状**　南北4.17m、東西3.34mの長方形を呈し、長軸方向はN－38.5°－E、面積は12.6m²、壁高69～84cmである。南壁下にかけて、周溝が認められる。なお、東壁にはカマド部分を除いて棚状の段が付設されている。この棚状の段は、床面から48cmの高さに設置されており、奥行52cm前後を測る。長さは北側のもの2m、南側のもの1.3m前後である。　**ピット**　5個確認される。P1～P4までは、その性格は不明である。柱穴とするには、その配置からしてやや無理があるやにも思われる。深さは12～25cmと比較的浅い。P5はカマドに付属する灰かき穴と見られる。覆土中からは多量の灰と焼土粒が認められた。　**カマド**　東壁南寄り。全長134cm、袖部内幅30cm、燃焼部長30cm、壁への掘り込み角度36°で、壁外掘り込みは114cmである。燃焼部左右に都合6個の石材を使用する。　**貯蔵穴**　南東隅、不整円形で46cm×40cm、深さ42cm。　**遺物**　東壁に付設された北側の棚状の段上から土師器台付甕（3）が伏せられて置かれたような状態で出土している。また、南側棚状の段上から土師器羽釜（2）の破片が、カマド内から土師器甕（6）と小型甕(5)、床面から43cmの所で須恵器横瓶が出土。　**テフラ**　地層断面にB軽石純層が見られた。　（中澤）

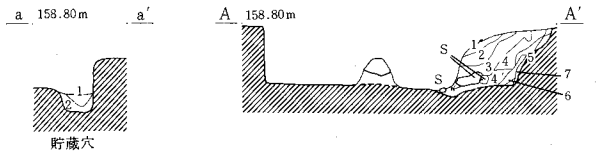


図－32　H273号住居跡出土遺物

出土遺物　　**須恵器**（1）、叩きしめ（内面には細い筋の同心円文内型をあて、外面には平行叩き目を施す）の後、ナデを施す。内面端部にみられる粘土しぼり目痕により、横瓶の破片と考える。細砂粒を多量に含み、淡灰色の硬い焼成を示す。　**土師器**　羽釜(2)、内外面に横ナデが施される。砂粒を多量に含む。色調は黄褐色。堅緻である。　小型甕（3・5）、3は口唇部の一部に沈線状の形成をみる。口縁部横ナデ、胴部外面ヘラ削りが施される。肩部の張りは少ない。胴下半部に施された横ナデにより、台付甕と考える。内面に炭化物が付着する。5は口縁部横ナデ、胴部外面ヘラ削りされた、なで肩状の土器片である。　甕（4・6）、4はヘラ削りの施された底部破片。6は口唇部がやや内湾し、口縁部横ナデ、肩部外面ヘラ削りされた厚手の破片。砂粒を含む。堅い焼成である。　（中束）

H274号住居跡





住居跡全体
1．黒褐色土。ローム粒が多い。
2．茶褐色土。ローム粒主体。
3．暗褐色土。ローム粒主体。やわらかい。
4．暗褐色土。3に比べ明るい。

カマド
1．黒褐色土。
2．黒褐色土。若干の焼土粒を混ぜる。
3．暗褐色土。ローム粒を混ぜる。
4．暗赤褐色土。焼土粒・同ブロックを混ぜる。
4'．4に比べ、焼土粒が多く、黒色味が強い。
5．暗赤色土。多量の焼土を混ぜる。
6．暗赤色土。やや黒色味が強い。
7．暗褐色土。多量のローム粒を混ぜる。

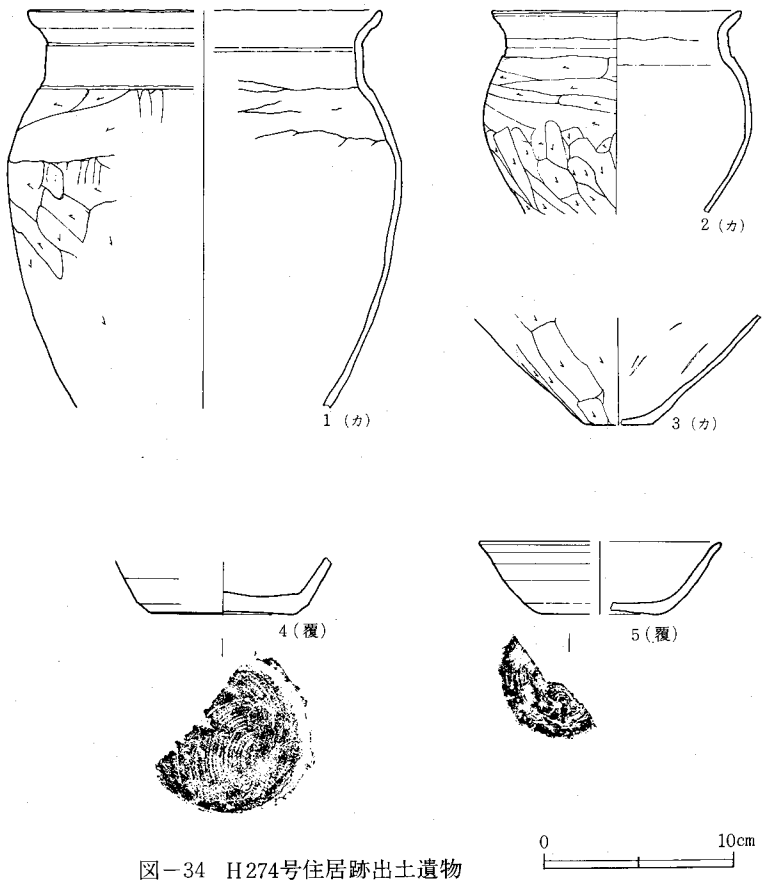
貯蔵穴
1．黒褐色土。焼土ブロックを混ぜる。
2．黒褐色土。ロームを多く混ぜる。

0　1 m

図－33　H274号住居跡

住居跡全景

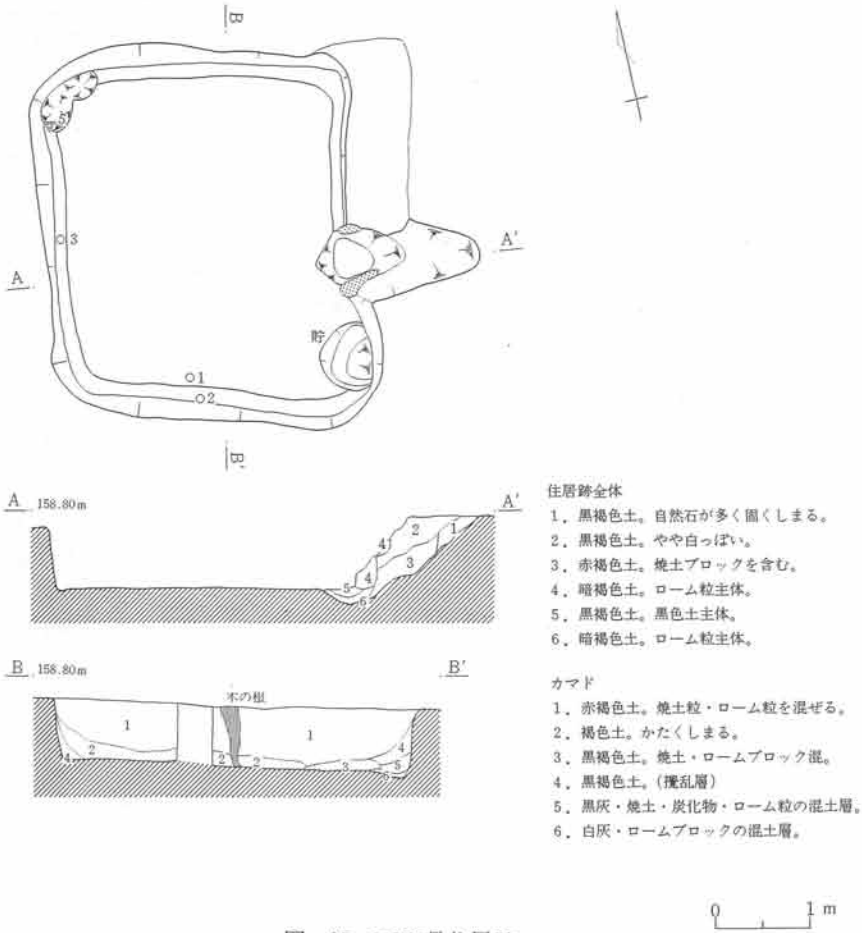
H274号住居跡（5H－3）　**位置**　調査区域北側のヲ13に所在する。ここには本住居跡を含めて7軒の竪穴式住居跡がまとまって存在している。　**形状**　南北2.9m、東西2mの隅丸不整方形で、南壁が内側に、北壁が外側に彎曲している。長軸方向N－14°－E、面積5.6m²、壁高54～66cmで北側が深くなっている。柱穴・周溝は認められない。　**カマド**　東壁中央南寄り、壁外に構築している。袖部は、東壁をカマド部分で住居内に屈曲させて袖としている。燃焼部壁及び冠材には石材を使用している。煙道は35cm程高くし東に延びている。全長115cm、袖部内側40cm(現状)、燃焼部長63cm、煙道50cm、壁への掘り込み角度67°である。住居内の焼石はカマド使用の石材とも見られる。　**貯蔵穴**　南東隅、長円形。東半分は壁をくり抜いてつくる。52×43cm、深さ27cm。　**遺物**　カマド内から土師器甕（1、3）、同小型甕（2）、覆土中から須恵器坏（4、5）が出土。　（唐澤）



図－34　H274号住居跡出土遺物

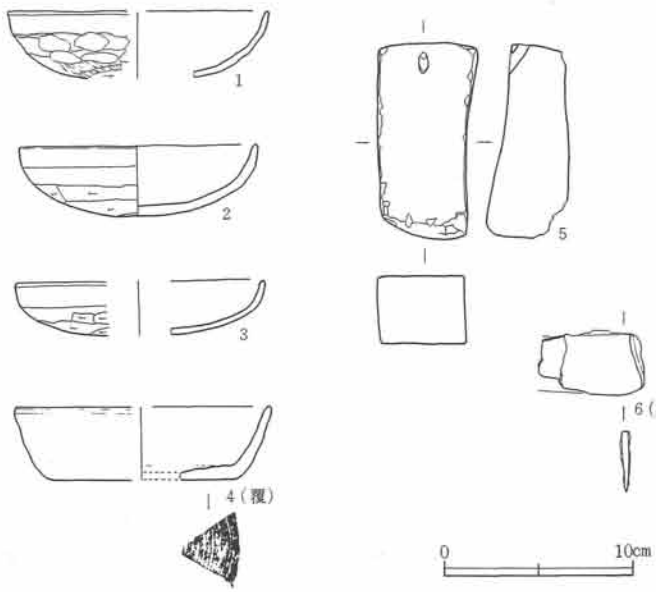
出土遺物　**土師器**　甕（1～3）、1・2ともコの字状の口縁を持つ甕で、頸部と肩部、または外反部との境を、ヘラ状工具(1)または強い横ナデ(2)で明確につくり出している。口縁部は外面に指頭痕を残す横ナデ、胴部外面はヘラ削り、内面はナデにより調整される。1の肩部内面は指による粘土のナデ付け後、ヘラナデを施す。2の肩部内面は斜めにナデを行う。3は胴下半部で、外面と底部はヘラ削り、内面にはナデを施す。1・2は赤褐色で堅緻な焼成、3は黄褐色で軟質である。　**須恵器**　坏（4・5）、ロクロによる成形。4は青灰色の堅緻な焼成、底部は肉厚で、回転糸切り後周辺部に回転ヘラ削り調整を施す。底部と体部の外面境目には浅い凹線をめぐらす。底部内面には渦巻状のロクロ目を残し、中央が盛り上がる。5は黄色土がかった灰色で、胎土に白色の小石を混ぜる。底部や体部の一部に、淡褐色の所も認められる。表面には細い穴が多量に認められる。底面には回転糸切り未調整痕を残す。軟質。（唐澤）

H275号住居跡



図－35　H275号住居跡

H275号住居跡（5 H－4）　**位置**　ヲ13の南へ緩やかに傾斜する台地上に立地している。隣接してH273号、H274号、H276号住居跡の各住居跡が存在する。　**形状**　隅丸長方形の平面プランを有し、南北長3.71m、東西3.22mを測る。面積は11．3㎡である。周溝はカマド～貯蔵穴部分を除く四周にめぐらされている(深さ3～8cm、幅13～18cm)。　**カマド**　東壁のやや南寄りに存在する。左右袖は自然石を利用して構築されており、袖部内幅は60cmを測る。カマド全長は150cm、燃焼部70cmの規模をもつ。　**貯蔵穴**　南東隅で東壁に接する形で貯蔵穴が存在する。平面長円形を呈し、深さは11cmと比較的浅めである。この他には住居内にピットは存在しなかった。　**遺物**　北西隅より砥石(5)が出土した。上部に穴を穿した、所謂「下げ砥」であるが、断面はほぼ長方形を呈し、わずかに使用痕をとどめている。この他、西壁、南壁近くの床面上からは丸底の坏（1～3）が出土している。　(田口)

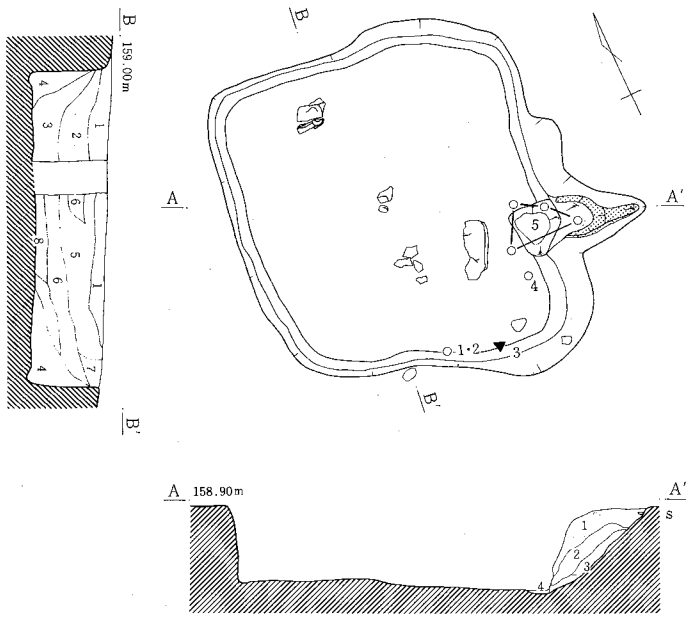


図－36　H275号住居跡出土遺物

住居跡全景

出土遺物　**土師器**　坏(1～3)、1は口唇部がやや外傾し、底部ヘラ痕を明瞭に留める形状である。が、ヘラ削りによる稜は形成されず、むしろ口縁部横ナデとの中間に占める指頭痕が顕著である。2は口縁部が緩やかに立ち上がり、横ナデが施される。底部はヘラ削りによりか僅に稜が形成される。横ナデ・ヘラ削りとの中間を占める指頭痕は不明瞭である。3は口縁部の立ち上がりが短い。軟質であり、内外面とも磨耗が著しく、口縁部横ナデ、底部ヘラ削り痕が僅かに認められる。　**須恵器**　坏（4)、ロクロ回転方向不明。底部回転糸切り痕を残す。体部は平滑な仕上げが施されている。砂粒を多量に含み、軟質である。　**石製品**　砥石(5)、流紋岩製、端部に斜の穿孔が施されている。砥石は第272号、第276号、第282号、第286号、第298号、第305号、第391号、第398号、第439号住居跡より出土しているが、穿孔形態は、本住居跡及び第272号、第276号住居跡にみられる。　**鉄製品**　鎌（6)、先端部の破片である。　(中束)

H276号住居跡　（図版20）



住居跡全体
1．黒色土。
2．黒褐色土。
3．黒褐色土。2より褐色が強い。
4．黒褐色土。ロームブロックを混ぜる。
5．褐色土。ロームブロックと黒褐色土の混土層。
6．黒色土。二ツ岳系の軽石を多量に含む。
7．褐色土。6に比べロームブロックが少ない。
8．6に同じ。
9．褐色土。ロームブロックを主体とする層。

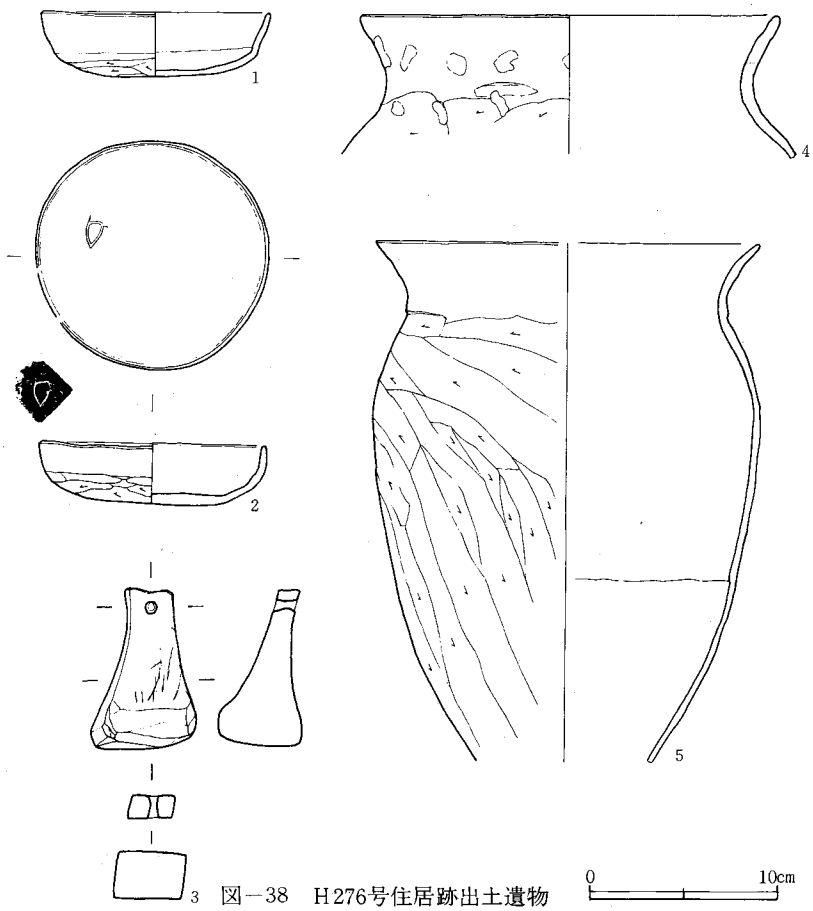
カマド
1．褐色土。かたくしまる。
2．赤褐色土。焼土ブロックを多量に含む。
3．黒色土層。灰主体。
4．褐色土。焼土、炭化物、ロームを含む。

0　1 m

図－37　H276号住居跡

H276号住居跡（5H－5）　**位置**　調査区域北端、標高159mの平坦なヲ13～ワ13に所在する。　**形状**　ほぼ南北に長軸を持ち、カマドのある東壁側がやや開がる隅丸台形で、四隅の隅丸の度合が強いため、全体に曲線化傾向を帯びている。南北3.6m、東西3.2mで、周溝はカマド部分を除き全周している。深さ6～12cm、幅10～18cmである。長軸方向はN－10°－Eで、面積10.2m²、壁高69～90cmである。ピット及び貯蔵穴は検出されなかったが南壁が南東隅に向って広がっており、ここに広い空間を持っている。　**カマド**　東壁南隅から3分の1の所にある。全長114cm、袖部内幅、燃焼部長ともに推定で約50cm、壁への掘り込み角度は44°である。火床面は住居床面より約10cm掘り込まれている。カマド袖はかつて住居内にあったと思われ、右袖部が住居内側に25cm入っていることから焚口は壁に対して斜めになっていて、このことは南東隅に広い空間を持つこととも符合して興味深い。　**遺物**　カマド及びカマド手前付近床面から土師器長胴甕（5）が、カマド右袖付近から土師器大型甕（4）が、南壁周溝付近から坏（1、2）と砥石（3）が出土した。他にカマド構築に使用したと思われる焼石が住居内床面に散在していた。

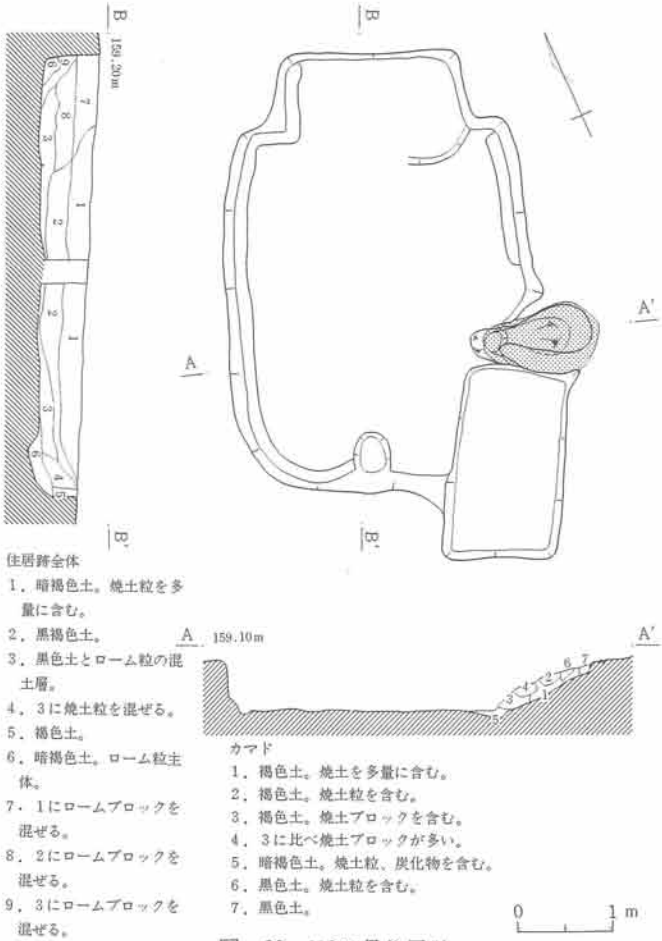
（松村）



図－38　H276号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　坏（1・2）、1は口縁部が緩やかに外傾し、内面底部及び口縁部接合位置には、指頭圧により稜が形成される。外面は底部ヘラ削りから、直ちに幅の広い口縁部＝体部に移行し、口縁部には横ナデが施される。更に、内面底部周辺は、ハケナデにより調整される。2は口縁部が丸味を帯びつつ、やや外傾する形状を示す。底部の規則的なヘラ削りにより、僅かな稜線が形成され、口縁部には横ナデが施される。口縁部横ナデ、底部ヘラ削りとの中間に、不明瞭な指頭痕が残る。内面には千鳥様の線刻がみられる。　甕（4・5）、4は受け口状を成し、口縁部には横ナデ、肩部外面にはヘラ削りが施される。胴張り状の大甕片であろうか。5は口縁部が緩やかに外反し、なで肩状を示す。外面は口縁部横ナデ、胴部ヘラ削りにより整形される。胴部の器壁は2～3㎜と非常に薄い。胴下半部には煤の付着がみられる。内面は口縁部横ナデ、胴部はナデにより平滑な仕上げが施されている。胴部からやや下方寄りに、粘土接合痕を留める。　**石製品**　砥石（3）、端部に直径6.5㎜程の紐通し状の穿孔が施され、縦方向の削痕が認められる。流紋岩製。

（中束）

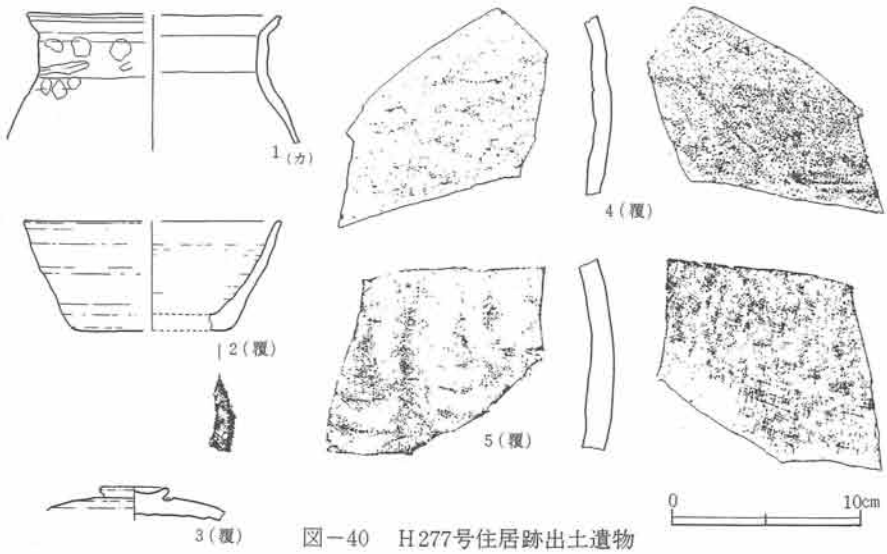


図－39　H277号住居跡

H277号住居跡（5H－6）　**位置**　ワ13の南へ緩やかに傾斜する台地上に立地しており、前述したH276号住居跡の北東方向に位置する。　**形状**　基本的には平面矩形のプランを有するが、これに加えて北壁中央部、及び南東隅部に「張り出し」を持つ。北側張り出し部は床面において住居本来の床面レベルと差異はないが、わずかに住居に入りこむ形で溝が検出された。これに対して南東隅張り出し部は住居床面より10cm前後下がる傾向にあり、ここには灰の堆積が見られた。「張り出し」を含めての計測値は最大値で南北4.7m、東西3.7mであり、面積は13m²を測る。周溝はカマド部分、張り出し部分を除いたほとんどの部分に残っている。　**カマド**　東壁のやや南寄りに位置している。石材等の使用は見られず、代わって上部構造（側壁と天井）を白色粘土を積み上げてつくっている。全長は推定で130cmであり、燃焼部長は現状で40cmである。　**ピット**　貯蔵穴は確認されなかったが、南壁に接して長円形（50cm×38cm）のピットが存在する。　**遺物**　床面につく遺物の検出はなかったが、覆土中、あるいはカマドの中(1)よりいくつかの遺物が出土している。　（田口）

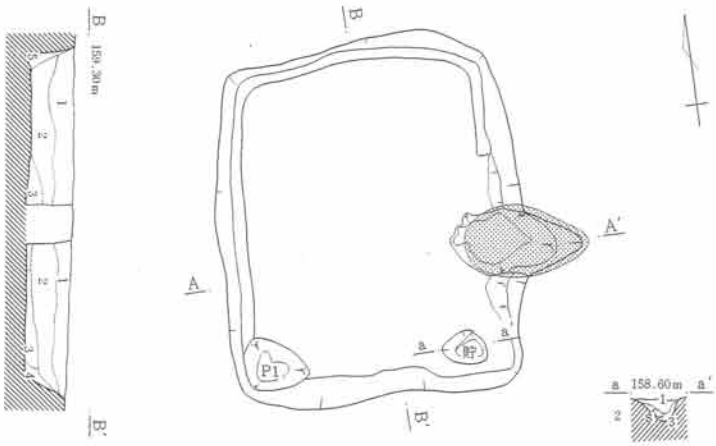
住居跡全景

カマド全景



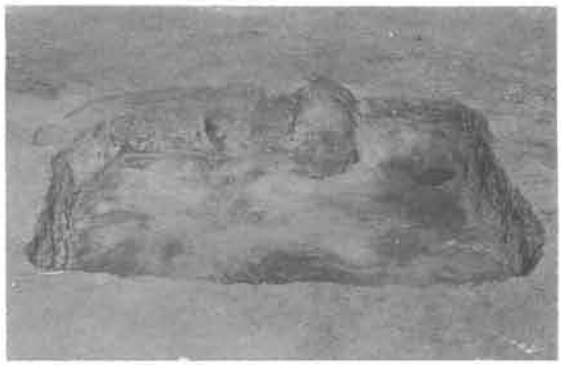
図－40　H277号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1）、コの字形を示す口縁部片である。口唇部辺には浅い沈線を巡らす。口縁部は点々と指頭痕を留め、横ナデが施される。肩部外面にはヘラ削りが施される。口縁部外面には所々にヘラ痕を残す。内面は平滑である。　**須恵器**　蓋（3）、右回転ロクロ使用。天井部中央に扁平な凹状のつまみが付けられる。周辺部はヘラ削り調整される。甕（4・5）、ともに胴部片である。4は内面に多少の当て具痕を残すが、外面のは不明瞭。砂粒を多量に含み、色調は青灰色、堅緻である。内面に含有鉱物の溶解がみられる。5は外面に格子状叩き目痕、内面に当て具痕を残す。色調は淡灰色。細砂粒を含むが、焼成は堅緻である。　**土師質須恵器**　埦（2）、体部はロクロ成形による凹凸を残し、底部切り離しは回転糸切りである。砂粒を多量に含む粗い胎土を用いているが、焼きしまりは良好。色調は淡褐色。（中束）



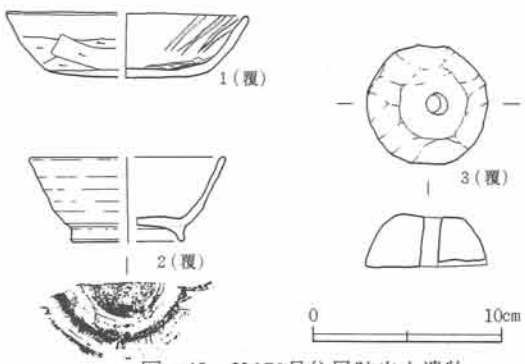
図－41　H278号住居跡

H278号住居跡（5H－7）　**位置**　調査区域の北端中央付近のカ13に所在する。すぐ東にはほぼ同時期と見られるH279・304号住居跡がある。　**形状**　南北3.5m、東西2.8mの長方形の住居跡である。壁は全体に直線的であるが、北壁は外側に彎曲している。南壁東端は、方形に83cmの幅で南に13cm張り出させている。その内側には貯蔵穴がつくられる。長軸方向N－0°、面積5.8m²、壁高38～48cmで北壁が高くなっている。南壁と東壁南半を除き周溝をめぐらす。幅8～13cm、深さ3～6cmである。　**床面**　中央部は固く踏みしめられているが、四壁下は比較的軟らかい。　**ピット**　南西隅に壁面に接して1個ある。規模は70×58cm、深さ14cmで、貯蔵穴と同じ三角形状を呈している。　**カマド**　東壁中央南寄りに位置する。袖部は、東壁を14～20cm程住居内に掘り残して袖としている。火床面は先のとがった三角形状を呈しており、住居床面より10cm程低くしている。煙道は火焼面から60cm上に、30cmの長さで認められた。全長140cm、袖部内幅58cm、燃焼部長54cm、壁への掘り込み角度52°である。　**貯蔵穴**　南東隅、三角形状を呈している。規模46×36cm、深さ30cmである。内部から長さ12cmの石魂が出土した。　**遺物**　覆土中から土師器坏(1)、須恵器埦(2)、紡錘車(3)が出土した。床面付近からの遺物の出土は認められなかった。　（唐澤）



住居跡全景

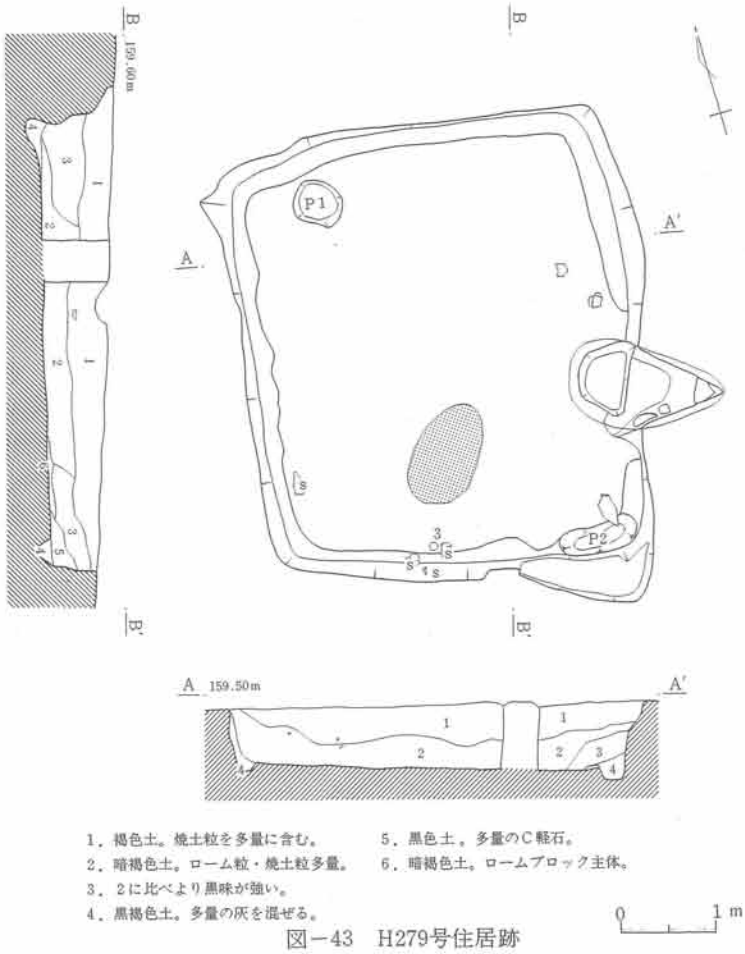
カマド全景



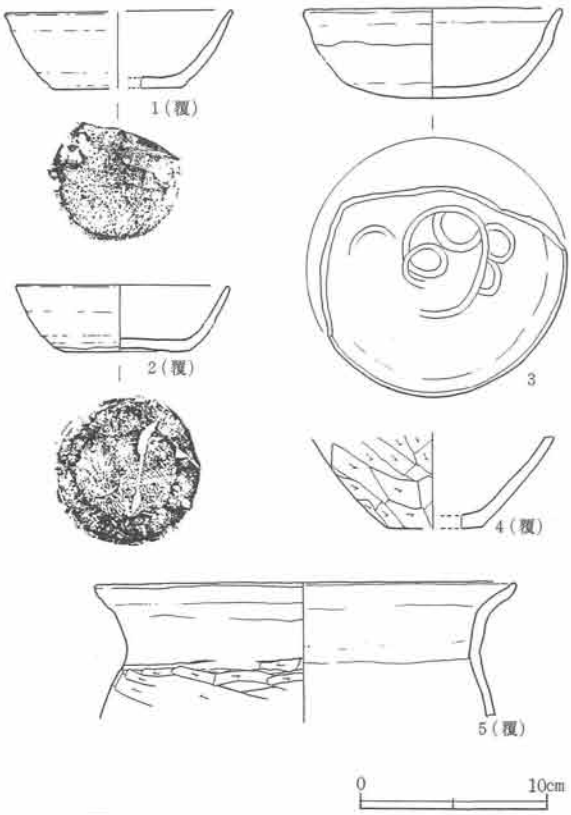
図－42　H278号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　坏(1)、やや丸味を帯びた平底から、内彎ぎみに立ち上がる体部を持つ。外面は口縁部横ナデ、体部及び底部ヘラ削り。内面は、体部に放射状暗文、底部にラセン状暗文を施す。体部の暗文は、2条を単位に平行に施こしたもののようである。色調は明茶褐色、胎土に砂粒を含む。　**須恵器**　埦(2)、底部から、すくっと直線的に立ち上がる体部を持つ。口唇部は丸みを持って肥厚する。ロクロ成形で、体部外面にはロクロ痕の凹凸を残す。底部は回転糸切り後、周縁部に高台を付す。接着はていねいである。高台と体部の外面境目には、ヘラ先で細い沈線を施す。色調は青灰色で堅緻な焼成である。胎土には白色の細い砂粒を混ぜる。　**石製品**　紡錘車(3)、輝石安山岩製、118.4g。一部欠損。　（唐澤）

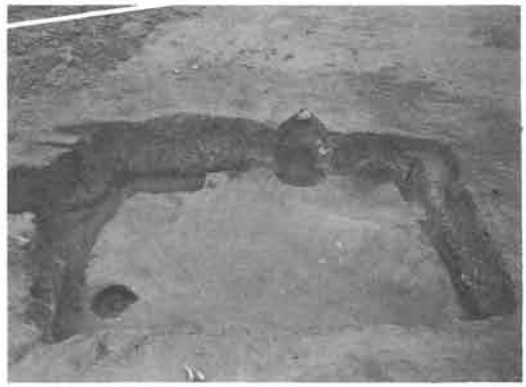
H279号住居跡



図－43　H279号住居跡



図－44　H279号住居跡出土遺物



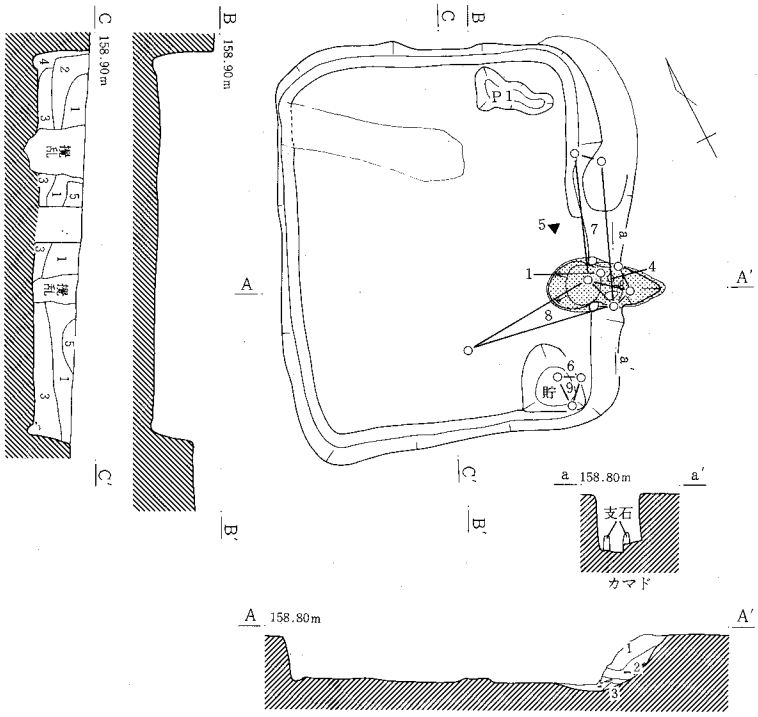
住居跡全景

H279号住居跡（5H－8）　**位置**　カ13の北端に所在し、55年度調査中最も標高の高い部分に位置する。J51号住居跡と重複する。　**形状**　隅丸方形の平面プランを有するが、東方向に向かって開き気味の傾向をもつ。南北4.6m、東西長3.99mで、面積は推定で16.3㎡を測る。周溝はカマド付近を除いて、ほとんど全周にめぐらされている。長軸方向、N－7°－E。　**ピット**　北西隅と南東隅にそれぞれ円形と長円形の比較的浅いピットが存在する。　**カマド**　東壁の南寄りに燃焼部と煙道部の殆どを壁外に造り出した形で設置されており、袖部はロームを掘り残す。右壁および天井部には焼けただれた石材が残存していたが、その他に床面にも焼石が散乱していた。また、床面中央南寄りには焼けた痕跡が見られた　**遺物**　南壁下の周溝中央部よりラセン状の線刻をもった土師器坏（3）が、覆土中より土師器甕（4.5）、須恵器坏（1・2）が出土している。　（田口）

南壁遺物3出土状態

出土遺物　　**土師器**　坏（3）、体部は緩やかに開き、口縁部でやや外反する。軟質。磨耗により、技法などは不明瞭であるが、僅かに口縁部横ナデ、底部ヘラ削り痕が認められる。内面にはラセン状暗文が施される。　甕（4・5）、4は外面ヘラ削りの施された底部片で、内面は平滑である。5は口縁部が受け口状を成し、内外面ともに横ナデが加えられる。肩部外面はヘラ削り、内面は平滑である。**須恵器**　坏（1・2）、1は口唇部がやや外傾する。内外面ともに含有鉱物の溶解が著しく、製作技法などは不明瞭である。色調は淡灰色。堅緻である。2は右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。内外面とも平滑であり、底部周辺部には手持ちヘラ削り調整が加えられる。　（中束）

H280号住居跡（図版20）



住居跡全体
1．黒色土。
2．暗褐色土。
3．黒色土。ロームを多く含む。
4．黒色土と褐色土の混土層。
5．褐色土。浮石等の混り物なし。

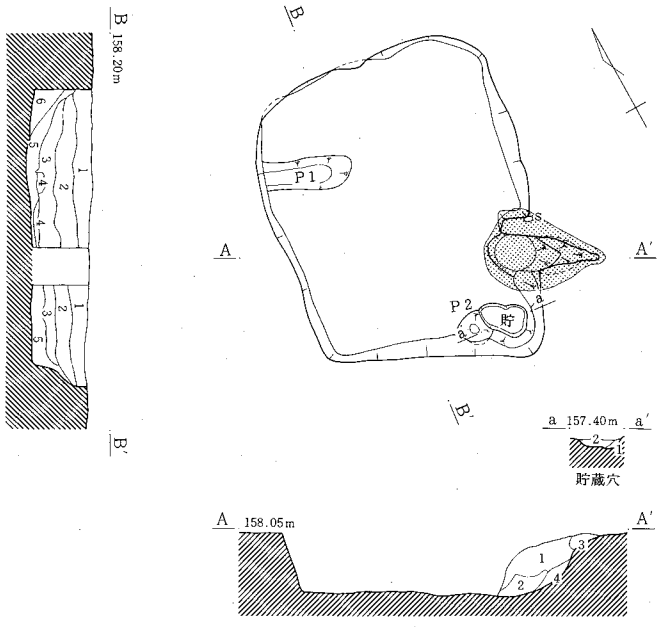
カマド
1．暗褐色土。
2．褐色土。やや焼けあり。
3．黒色土と褐色土の混土層。

0　1 m

図－45　H280号住居跡

H280号住居跡（5H－9）　**位置**　ヨ13に所在し、52号溝の西に近接する位置にある。　**形状**　南西隅が外側にやや膨らむものの、基本的には隅丸方形の平面プランを有している。南北4.1m、東西3.14mで、面積は11.8m²である。N－25°－Eの方位をとり、周溝は東壁南半を除く全周にめぐらされている。　**ピット**　北東隅の近くに長軸86cm、短軸47cm、深さ60cmのピットが存在する。　**カマド**　東壁のやや南寄りに煙道部を壁外に造り出した形で設けられていた。左右袖部は凝灰岩を芯として造られており、さらに燃焼部には南北に袖部と同様、凝灰岩製の支石が据えられていた。全長75cm、袖部内幅40cm、燃焼部長36cmを測る。　**貯蔵穴**　南東隅に不整円形の貯蔵穴が存在する。深さ16cmと比較的浅めであるが、しっかりした掘り形をもっている。　**遺物**　カマド内及びカマド周辺の床面上から土師器甕（7、8、9）が、貯蔵穴内より台付小型甕（6）が出土している。また南壁下の周溝中央部内より鉄滓が、カマドの左前面床上より鉄鏃？（5）がそれぞれ出土している。さらにカマド覆土中からは墨書土器の土師器椀（2）が出土している。　（田口）

H281号住居跡（図版21）



住居跡全体
1．茶褐色土。ローム粒主体。
2．茶褐色土。
3．茶褐色土。
4．黒色土。
5．茶褐色土。
6．茶褐色土。

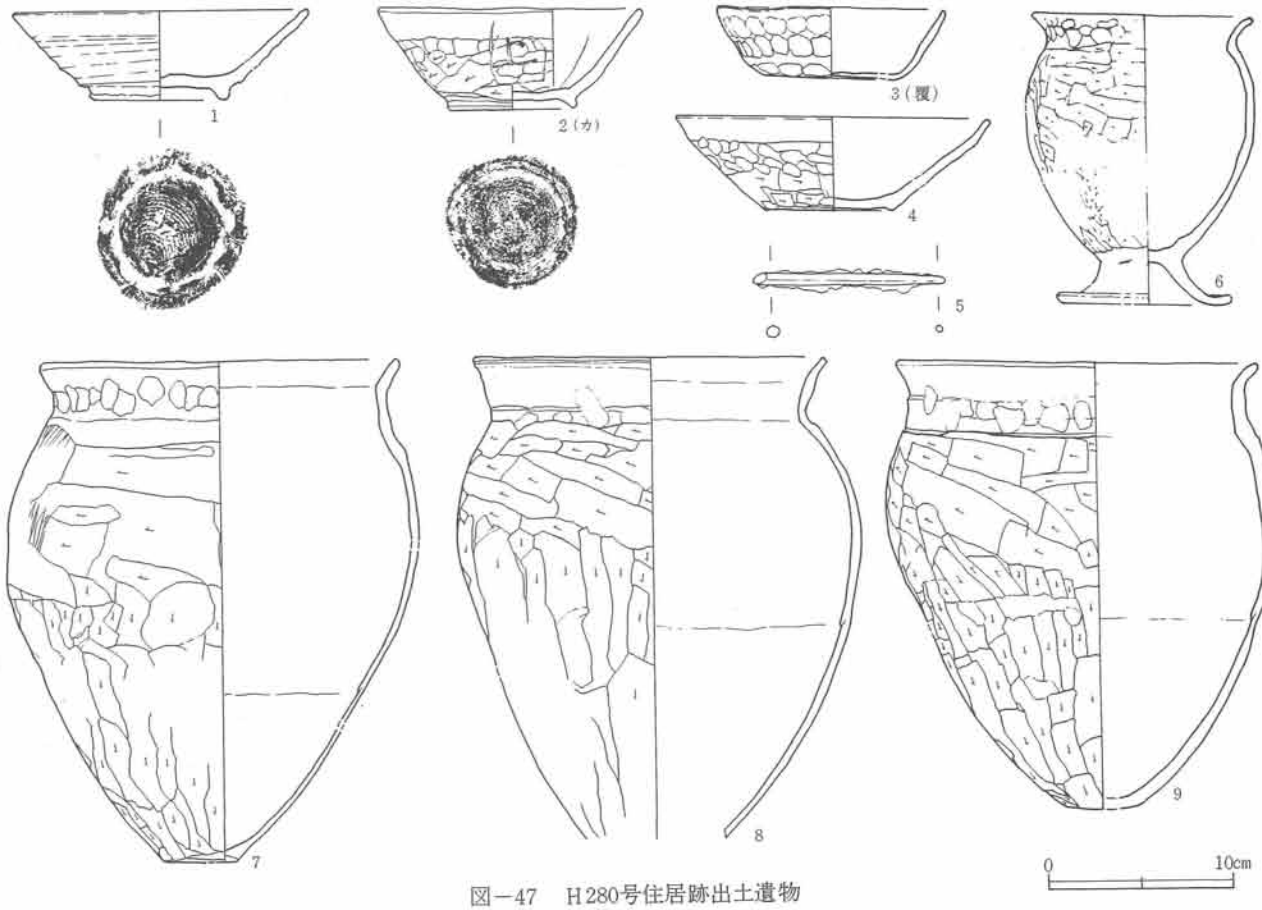
カマド
1．黄褐色土。自然石を含む。
2．茶褐色土。多量の焼土・ロームを混ぜる。
3．赤味を帯びた褐色土。
4．赤褐色土。焼土ブロック層。

貯蔵穴
1．灰色土。小量の焼土粒を混ぜる。
2．黄褐色土。ロームを主体とする。

0　1 m

図－46　H281号住居跡

H281号住居跡（5H－10）　**位置**　調査区域北端、ヨ12にある。台地中央部よりやや東寄りの平担地に位置する。　**形状**　北西-南東に長軸を持つ隅丸台形で、南北3.3m、東西2.5mである。東壁は西壁と比較して北側が、北壁は南壁と比較して東側が、各45cm長い。長軸方向はN－13°－E、面積8.3m²、壁高56～71cmである。周溝は存在しない。　**ピット**　床面に2個ある。P1は94×37cm、深さ6cmである。P2は南壁直下に位置し、径35cm前後、深さ9cmある。共に機能や性格は不明である。　**カマド**　東壁中央南寄りにある。左右袖部に30cm程の造り出しがある。全長105cm、袖部内幅38cm、燃焼部長37cm、壁への掘り込み角度65°で、壁外掘り込みは79cmである。住居床面とカマド燃焼部のレベル差は、約－5cmである。　**貯蔵穴**　南東隅にある。不整形で、規模は54×34cm、深さ12cmである。　**遺物**　カマド内から土師器甕（1～3）、床面上で砥石(5)が出土した。　（鵜木）

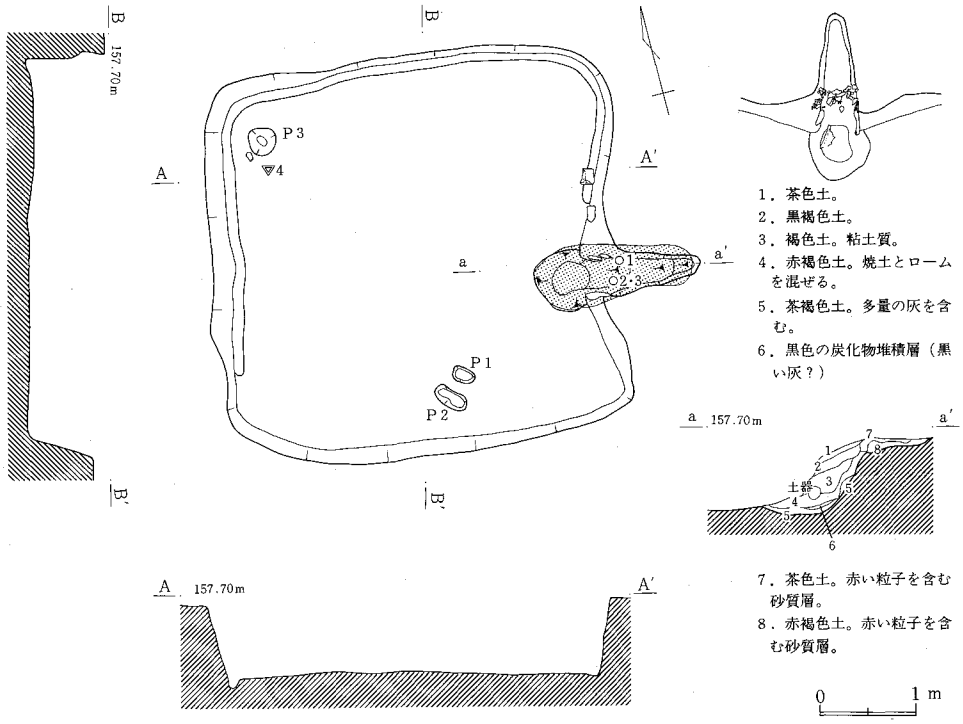


図－47　H280号住居跡出土遺物

H280号住居跡出土遺物

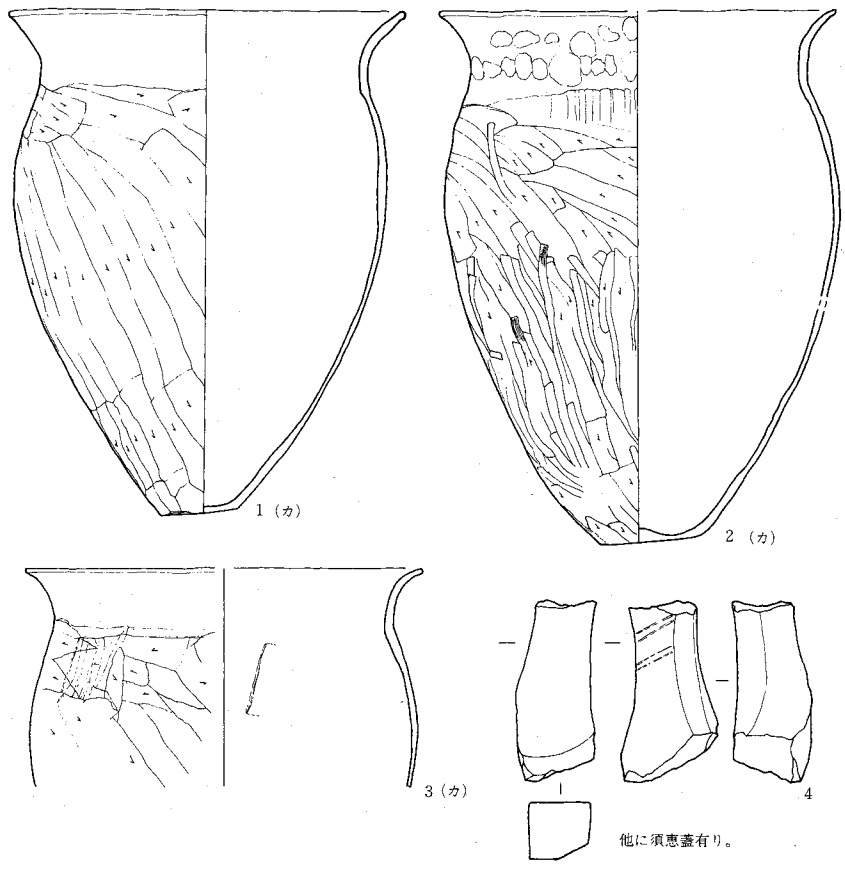
出土遺物　**土師器**　埦（2）、付高台。口縁部横ナデ、体部外面は指頭痕及びヘラ削り痕を明瞭に留める。線刻部分に田の墨書が認められる。内面はヘラ痕を残すが、平滑である。　坏（3・4）、3は体部及び底部に指頭痕を残し、平底状を形成する。4は2と同様、口縁部横ナデ、体部下方ヘラ削りが施される。底部にも円形のナデが施され、付高台の可能性が考えられる。　台付甕（6）、口縁部は緩やかに外反し、横ナデ、外面胴上半部は横、下半部は縦ヘラ削りされる。脚部は内外面とも横ナデにより平滑である。　甕（7～9）、7は口縁部中央付近からハの字形に開き、コの字状口縁の退化形態を示す。8は口縁部中央が肥厚し、緩やかに開く。口唇部辺に浅い沈線を巡らす。9はコの字形態を留め、横ナデにより中央部分に緩やかな稜が形成される。ともに口縁部横ナデ、胴部ヘラ削りが施されれる。内面はハケにより平滑となる。9は軽石や石英粒を多量に含み、胴下半部はやや脆弱である。7・8はカマド内出土の破片と接合する。

須恵器　埦（1）、ロクロ回転方向不明。体部外面の凹凸は顕著である。内面は平滑で、中央部分には直径1cm程の凹が形成される。底部の切り離しは回転糸切りによる。高台の作りは粗雑で、接合時の指頭痕を留める。色調は灰白色。石粒や砂粒を含み、軟質である。　**鉄製品**（5）、柄の破片であろうか。　（中束）



図－48　H282号住居跡

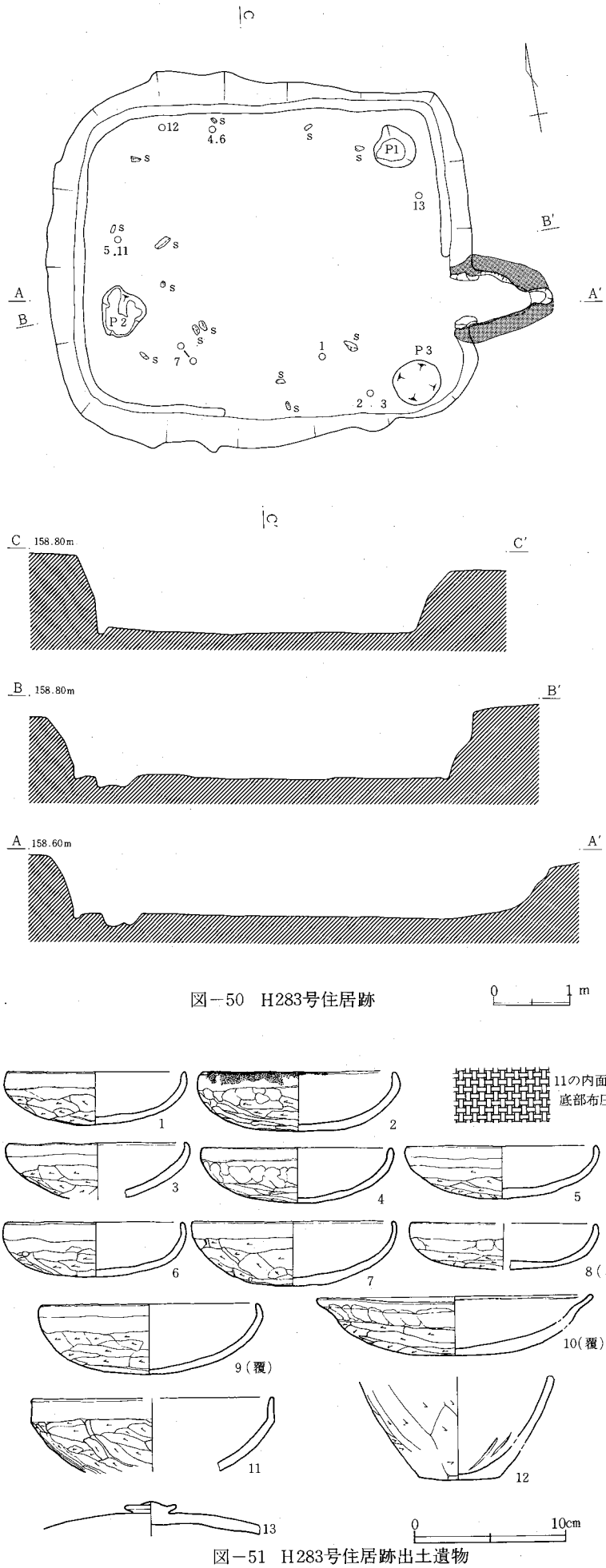
H282号住居跡（5 H－11）　**位置**　調査区域台地の北方東寄り、ヨ11西端に所在する。**形状**　南北4m、東西4mの隅丸方形。方位はN－13°－E、面積は15.6m²、壁高69～83cmである。西壁、北壁、東壁下北の3分の1には周溝をめぐらす。幅8～12cm、深さ5～9cmである。　**ピット**　P1、P2は出入口施設に関係する柱穴とも見られる。　**カマド**　東壁南寄りにある。燃焼部右側に1石、左側に2石を使用し、全長126cm、袖部内幅34cm、壁への掘り込み角度62°。火床面は床面より10cm低くなっている。**遺物**　1～3はカマド内、4は床面から出土。**テフラ**　覆土最上層（床面から65cm）にB軽石純層。　（近藤）



図－49　H282号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1～3）、3個体ともに緩やかに外反する口縁部が形成される。口縁部は内外面横ナデ、胴上半部外面は横及び斜ヘラ削り、胴下半部は縦ヘラ削りが施される。1は横ヘラ削りの幅が狭く、縦ヘラ削りが整形の主体を占める。底部もヘラ削りにより小さく整えられる。2は胴下半部のヘラ削りが入念に施される。ヘラの重複により磨き状を成す部分もみられる。全て内面は平滑であるが、3はヘラ痕を残す。2の底部中央にはヘラの集合により、僅かな高まりが生じている。胎土はともに砂粒を多量に含む。1では二次的な火熱を受けていることも考えられ、軟質で脆い。2の胴下半部外面には煤が付着する。　**須恵器**　蓋、ロクロ回転方向不明。天井部中央に凹状の小さなつまみが付けられる。周辺部には左への緩やかなヘラ調整が加えられる。砂粒及び溶解した黒色鉱物が散見される。色調は灰白色。やや軟質である。　**石製品**　砥石(4)、5面使用の痕跡を留める。荒目の砥石である。特に一面に於ては、二条づつの斜方向に走る削痕が認められる。輝石安山岩製。　（中束）

H283号住居跡（図版22）



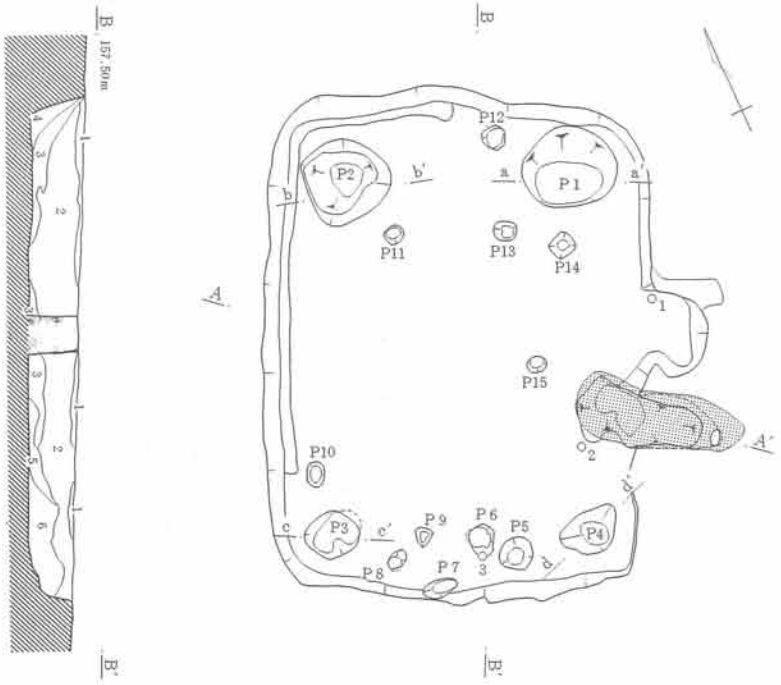
図－50　H283号住居跡

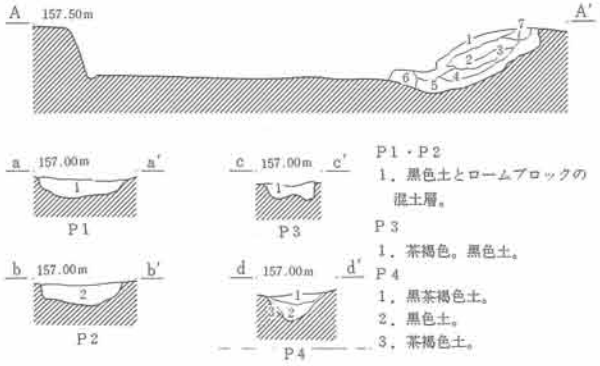
図－51　H283号住居跡出土遺物

H283号住居跡（5H－12）　**位置**　調査区域北端西寄りで、51号溝と52号溝に挟まれたタ12に所在する。　**形状**　南北4.2m、東西5.1mの隅丸長方形。北壁はほぼ直線的であるが、他はやや外方に彎曲している。長軸方向N－99°－E、面積20.6m²、壁高68～102cmで全体に北壁が高い。東壁南半と南壁東半を除き周溝がめぐる。幅8～14cm、深さ2～5cm。本住居跡は長軸方向及び規模において他と異なる。　**ピット**　P1は円形で径50cm前後、深さ35cm。P2は不整形で深さ15cm、底面も安定しない。P3は円形で径60cm前後、深さ6cmで椀底形を程している。P1とP3は位置及び形態から柱穴とも貯蔵穴と見られるが、両者が同じ機能を持つものとは考えにくい。　**カマド**　東壁中央南寄り。壁外に構築し、掘り形内側及び天形部に白色粘土を巻いている。焚口部にのみ袖石として安山岩を使用している。燃焼部は先端を細くして煙道としている。全長134cm、袖部内幅58cm、燃焼部長80cm前後、壁への掘り込み角度49°である。　**遺物**　大部分が土師器坏（1～11）で、他に土師器甕（12）、須恵器蓋（13）、10数cmの長石数個がある。これらは主に四壁沿いの床面ないし床面直上から出土している。　（唐澤）

出土遺物　**土師器**　坏（1～11）、規格及びつくりから、4種類認められる。第1種、口径12～13cm、深さ3.5～4cmのもの。1～8が相当する。底部は丸底で、中には8のように平底化しており、深さ3cmと浅いものも見られる。第2種口径15cm、深さ4.6cmで、第1種よりやや大型のもの。9が相当する。第3種、口径16cm、深さ5cm以上のもの。11が相当するが、底部欠失のため深さは不明である。第4種、口径18cm、深3.8cmの皿形のもの。10が相当する。つくりを見ると、第1種と第2種は共通なつくりで、口縁部横ナデ、体部～底部外面ヘラ削り、体部内面には指頭痕の凹凸を残す。5・6の底部～口縁部外面には大きな黒斑が認められる。いづれも口縁部は内彎する。第3種は口縁部が直に立ち、内面底部に布圧痕を残す。第4種は口縁部外面に指頭痕を残し、ここに指を当てて、口縁部を緩やかに外反させる。2の口縁部内外には、やや厚みを持った炭化物が附着する。　甕(12)、胴下位部のみ残存。胴部及び底部外面はヘラ削り。内面はヘラ状工具で粘土を削り、椀底状に仕上げる。　**須恵器**　蓋(13)、擬宝珠のつまみを持つ。笠部外面は回転ヘラ削り調整が施され、つくりはていねい。明るい灰色で堅緻。

（唐澤）

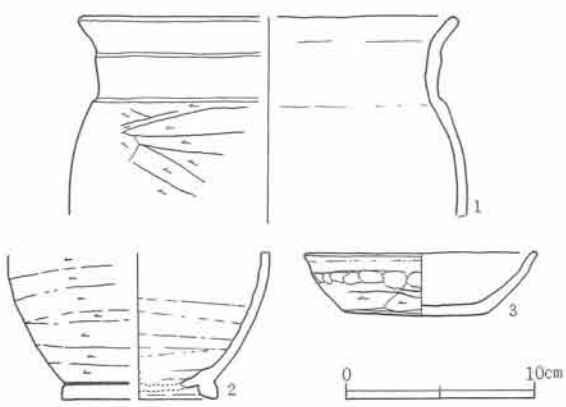




図－52　H284号住居跡

住居跡全景

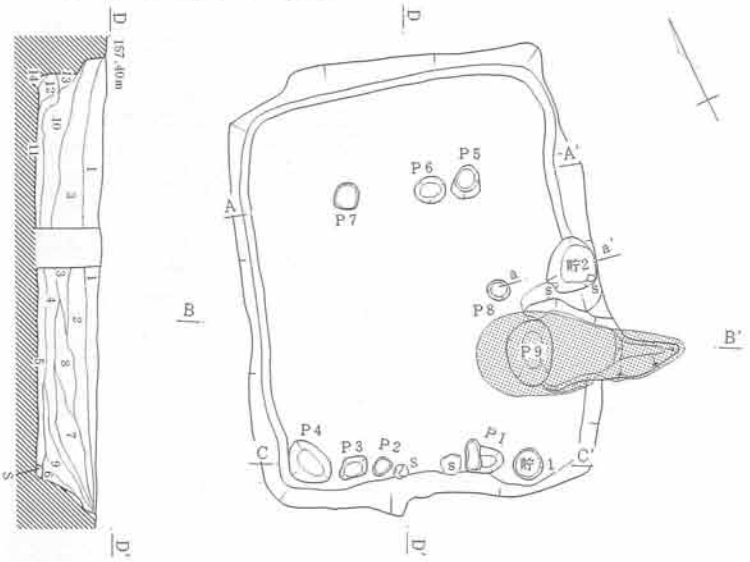
H284号住居跡（5 H－13）　**位置**　ヲ11に所在する。他の7軒の住居跡と共にまとまりを持った一群を成す。　**形状**　長方形を呈す。貯蔵穴状の施設と見られる張り出し部が、カマド左脇に確認された。その形状は不整方形で、幅62cm、奥行50cmを測る。四壁はいづれも外方に丸い曲線を描く。規模は南北5.2m、東西3.8mで、南北方向（N－25°－E）に長軸を取る。面積は18.6m²、壁高25～64cmで、北壁側が高い。北壁から西壁にかけて周溝がみられる。幅10～20cm、深さ2～5cm。　**ピット**　15個確認され、規模の大きいP1～P4は主柱穴と考えられる。深さはP1・P2が23cm、P3、42cm、P4、34cmである。柱穴間の距離は南北で3.6m、東西で1.8mである。その他の小ピットは、深さが9～52cmで、補助的な柱穴とも考えられる。　**カマド**　東壁南寄りにある。カマドの主軸は、住居跡の長軸に直交せず、東側で約15°南に偏す。全長154cm、燃焼部長72cm、袖部内幅45cm前後、煙道部の壁への掘り込み角度は28°である。火床面は、住居床面より14cm低い。　**貯蔵穴**　特定できるものはないが、カマド左脇の張り出し部に貯蔵穴的な機能を想定することもできる。　**遺物**　床面または床面直上から、土師器甕（1）、同坏（3）、灰釉陶器長頸瓶（2）が出土した。P1北端付近で、床面から若干浮いて、鉄鎌が出土した。　（中澤）

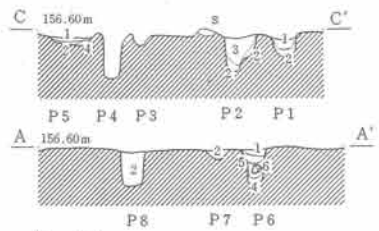


図－53　H284号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1）、コの字状口縁をもつ甕の破片である。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横及び斜ヘラ削りを施す。内面は平滑である。軽石粒及び砂粒を多量に含む。　坏（3）、平底状を成す坏である。口縁部は横ナデ、体部は指頭痕を残しつつ、ヘラ削りが施される。内面は器面の荒れが著しく、技術などは不明瞭である。酸化鉄粒及び軽石粒を多量に含む。　**灰釉陶器**　長頸瓶、胴下半部外面はロクロ回転利用のヘラ削りを施し、内面は成形時の凹凸を顕著に残す。底部を欠損しているが、やや内側の上った低い高台部が付けられ、高台及び周辺部はロクロ回転を利用した横ナデが施される。石粒を微量含むが、精選された胎土である。色調は灰白色。外面に刷毛塗りされた釉薬は、高台の一部にまで及び、さらにその上に淡緑色の自然釉がかかる。　（中束）

H285号住居跡（図版22）





P1～P8
1．黒褐色土。
2．暗褐色土。
3．1にロームブロックを混ぜる。
4．褐色土。ローム粒を多量に混ぜる。
5．黒色土。
6．5にローム粒を混ぜる。

P9
1．黒褐色土。
2．黒褐色土。
3．黒色土。
4．暗褐色土。ローム粒を多量に混ぜる。

0 1m

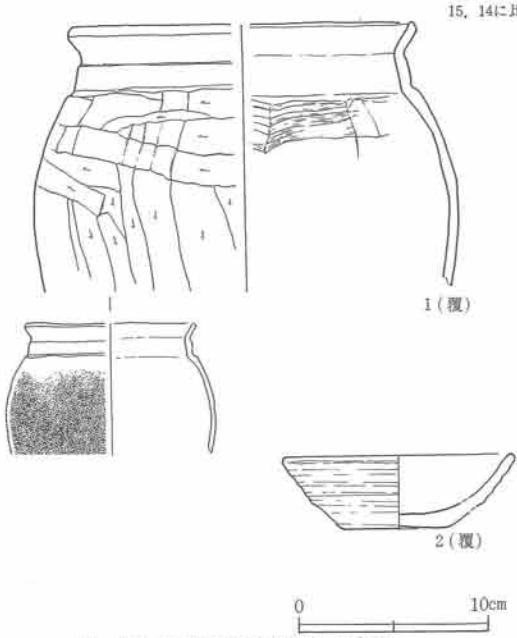
住居跡全体
1．黒褐色土。
2．黒褐色土。ロームを混ぜる。
3．黒褐色土。やや黒味が強い。
4．暗褐色土。焼土ブロックを混ぜる。
5．黒褐色土。白色粘土を混ぜる。
6．暗褐色土。ロームを一面に混ぜる。
7．黒褐色土。
8．14に比べローム粒が多い。
9．暗赤褐色土。一面に焼土を混ぜる。
10．黒褐色土。
11．黒褐色土。
12．黒褐色土。しまりなし。
13．暗褐色土。
14．褐色土。ローム粒を多量に混ぜる。

カマド
1．赤褐色土。粘土粒。焼土粒主体。
2．暗赤褐色土。焼土ブロックを混ぜる。
3．黒褐色土。
4．暗赤褐色土。
4'．4に比べ焼土ブロックが少い。
5．黒褐色土。
6．暗赤褐色土。
7．赤色土。（カマド天井と見られる）
8．4に比べ焼土ブロックを多く混ぜる。
9．焼土ブロック主体層。
10．暗赤色土。灰白色粘質土を混ぜる。
11．10に比べ多量の灰白色粘質土を混ぜる。
12．暗赤褐色土。
13．黒褐色土。
14．暗褐色土。ローム粒比較的多量に混ぜる。
15．14に比べ焼土の量が多い。

図－54　H285号住居跡

住居跡全景

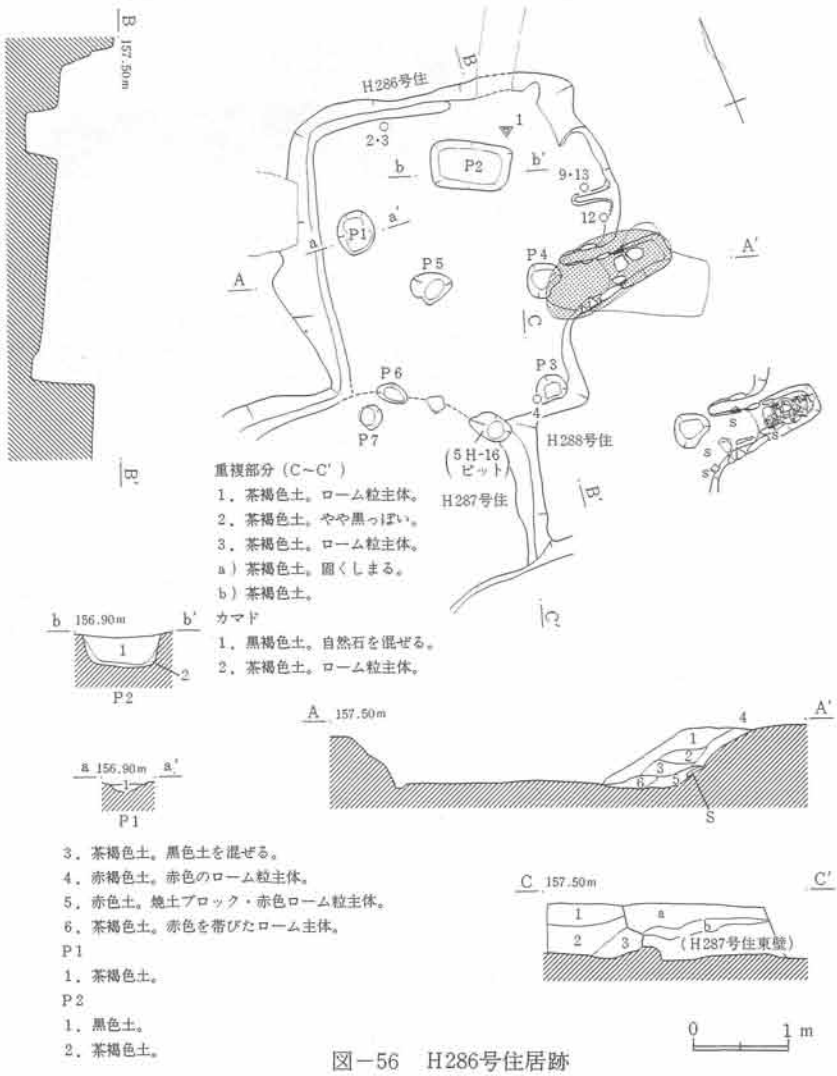
H285号住居跡（5H－14）　**位置**　ヲ11。**形状**　南北4.3m、東西3.4mの隅丸長方形。南壁中央の内側方向及び東壁の外側方向に彎曲が認められる。長軸方向N－18°－E、面積13.7㎡、壁高33～76（北壁）cm。幅8～12cm、深さ3～5cmの周溝をめぐらす。　**ピット**　P1東半、P2、P6、P7とP1西半、P3、P5、P7の二者の柱穴列が想定される。前者は台形の平面形を程すが、各辺の方向が住居四壁の走向とほぼ一致するので、建て替前の柱穴と見られる。　**カマド**　東壁中央南寄り。地山を掘り残して袖とし、住居内を燃焼部、壁外を煙道部としている。全長145cm、袖部内幅約70cm、燃焼部長50cm。　**貯蔵穴**　貯蔵穴1、56×52cm、貯蔵穴2、32×30cm、深さはいずれも25cm前後。前者の位置する南東隅壁には角を取る工夫が見られる。　**遺物**　床面から土師器甕、同小型甕小片が、覆土中からは土師器甕（1）、須恵器坏（2）が出土している。また、貯蔵穴2南端覆土中から砥石、P5覆土中からは鉄滓が出土している。　**重複関係**　H298号住居跡と北東隅で切り合うが、新旧関係は不明。　（唐澤）



図－55　H285号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　甕（1）、胴上半部から上30%を残存し、下半部は欠失する。丸く膨んだ胴部にコの字状の口縁部を付す。口縁部の立ち上がり部分は「ハ」字状に内へ傾むき、その両端の肩部や口縁外反部との境には凹線をめぐらして、口縁部立ち上がり部分を明確にしている。調整は口縁部内外面に横ナデ、胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。肩部内面は特に強くヘラナデを施しており、その痕跡はハケ目状になっている。胴部内面の調整は粗雑である。器肉の厚さは5㎜で、普通のコの字状口縁甕の2倍の厚さを持つ。色調は淡褐色で、胎土中に多量の小石を混ぜる。肩部以下の胴部外面には、一面に厚く煤を付着する。1は形態及び調整等から見て、コの字状口縁甕の退化形態と認められる。**須恵器**　坏（2）、小さな底部に内彎傾向を示しながらも直線的な体部を持つ。法量はやや小さな部類に属す。体部外面には顕著なロクロ痕を残す。底部外面は磨耗が著しいが、中央部が窪んでおり、若干認められる痕跡からも、回転糸切り未調整と見られる。回転方向は右方向である。色調はやや白っぽい灰色、胎土中には黒色粒子、砂粒、5㎜大の小石を混ぜる。器肉は6～8㎜で、全体に厚いつくりである。50%残存。　（唐澤）

H286号住居跡（図版23）



カマド全景（土師器甕使用の煙道）

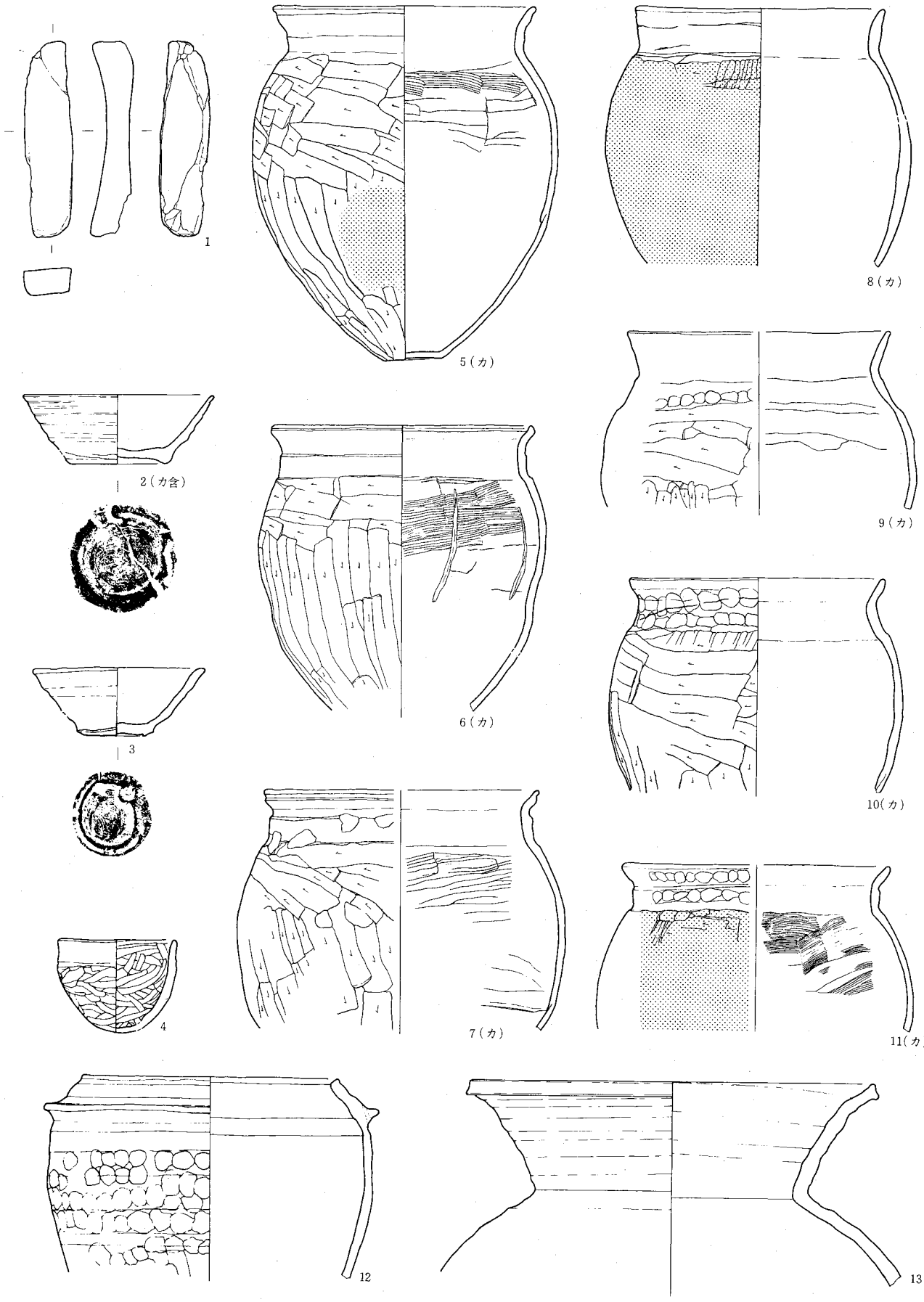
カマド全景（土師器甕を除く）

図－56　H286号住居跡

H286号住居跡（５Ｈ－15）　**位置**　ワ11　**形状**　南北3.4m、東西2.68mの長方形を呈し、長軸方向はＮ－12.5°－Ｅである。面積は11.3㎡、壁高53～41cmを測る。北東および北西隅は隅丸の傾向を示す。西壁下から北壁下半分にかけて周溝が認められる。東壁カマド北側には２つの弓字状の張り出し部が確認される。いずれも方形を呈すが、北側のものは幅64cm、奥行40cm、南側のものは幅42cm、奥行40cmである。この弓字状の張り出し部の性格は不明であるが、貯蔵施設の可能性もある。　**ピット**　７個確認される。Ｐ２は東西86cm、南北52cm、深さ42cmを測り、長方形を呈す。覆土には炭化粒や焼土粒が多く認められる。その壁面や床面には焼け跡は認められず、その性格は不明。Ｐ１、Ｐ３、Ｐ７はその間の距離から柱穴の可能性もあるが、はっきりしない。　**カマド**　東壁南寄り。全長142cm、袖部内幅50cm、燃焼部長72cm、その主軸は住居の長軸方向に直交せず、東側で約15°北に偏する。燃焼部および煙道部に石材を使用。とくに煙道部は底部に石を敷き、その上に土師器甕５個体分をつなげて煙道をつくる。　**貯蔵穴**　可能性としては南東隅のＰ３が考えられるが、カマド北側の弓字状張り出し部＝貯蔵穴にかわる施設の線も否定できない。事実、羽釜（12）や須恵器椀（2）の破片がその床面より出土している。　**遺物**　Ｐ２近くから砥石（1）、Ｐ３近くより土師器の小型丸底土(4)が出土している。煙道部に使用された甕は（5.8～11）である。　**重複**　H287号住居跡よりも本遺構の方が旧い。

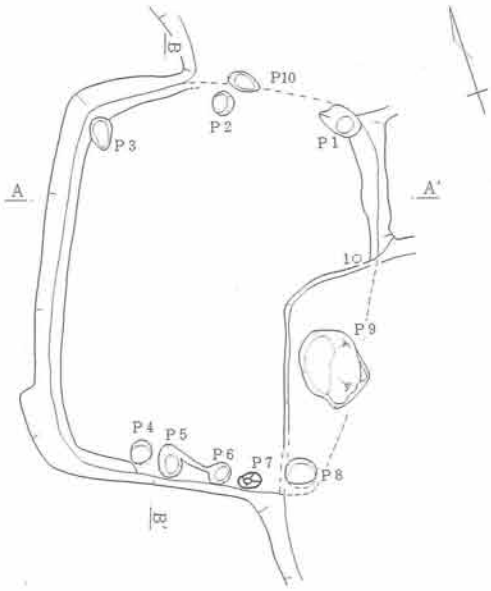
（中澤）

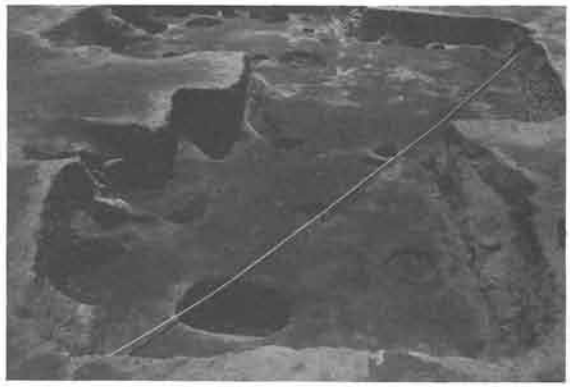
出土遺物　**土師器**　甕（５～11）、口縁部完形復元５・６・８・10の口径は、19.2cm、19.2cm、18.4cm、18.8cmと非常に規格的な値を示す。破片７・９・11についても、19～20cmの推定値である。全てカマド内での接合関係を示し、焼土が付着する。５・８・９は特に顕著である。口縁部の形態は多様であるが、表面の整形技法は一貫している。胴上半部内面はハケ又はヘラナデによる。６は粗いハケ目の上に縦の浅い沈線が残る。色調は６～８で白味を帯びた褐色、５９～11は茶褐色を示す。10は焼きしまり良好。羽釜(12)、指頭痕を残す胴部から内彎形態の口縁部に移行する辺に、短鍔部が形成される。外面には粗い横ナデを施し、内面は平滑である。礫及び砂粒を多量に含み、外面は淡褐色、内面は茶褐色を示す。　小型丸底土器(4)、口縁部外面は横ナデ、他は全て幅の狭いヘラ削りが施される。削りの重複により、光沢を生じる。　**須恵器**　甕(13)、口縁部は内外面の凹凸が顕著である。肩部内面は粗い波状の当て具痕を残し、外面及び口唇部周辺には自然釉がかかる。暗灰色、硬質である。羽釜とともに接合の主体はカマド内にある。　**土師質須恵器**　椀（２・３）、体部外面の凹凸は顕著で、２には粗いナデが加わる。内面は平滑である。底部は糸切り後低い高台部が形成されるが、作りは粗雑である。色調は淡褐色。　**石製品**　砥石（1）、二面使用痕を留める、流紋岩製。（中束）



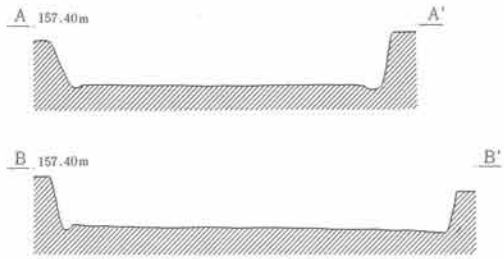
図－57　H286号住居跡出土遺物

H287号住居跡（図版23）

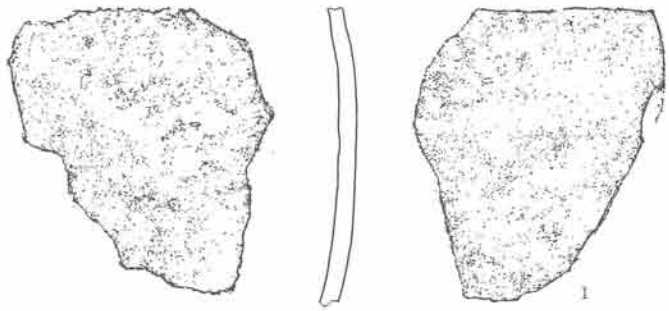




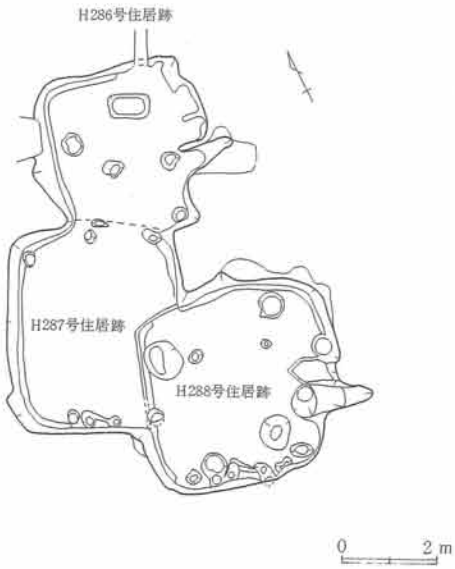
H286～288号住居跡重複状況



図－58　H287号住居跡　0　1 m



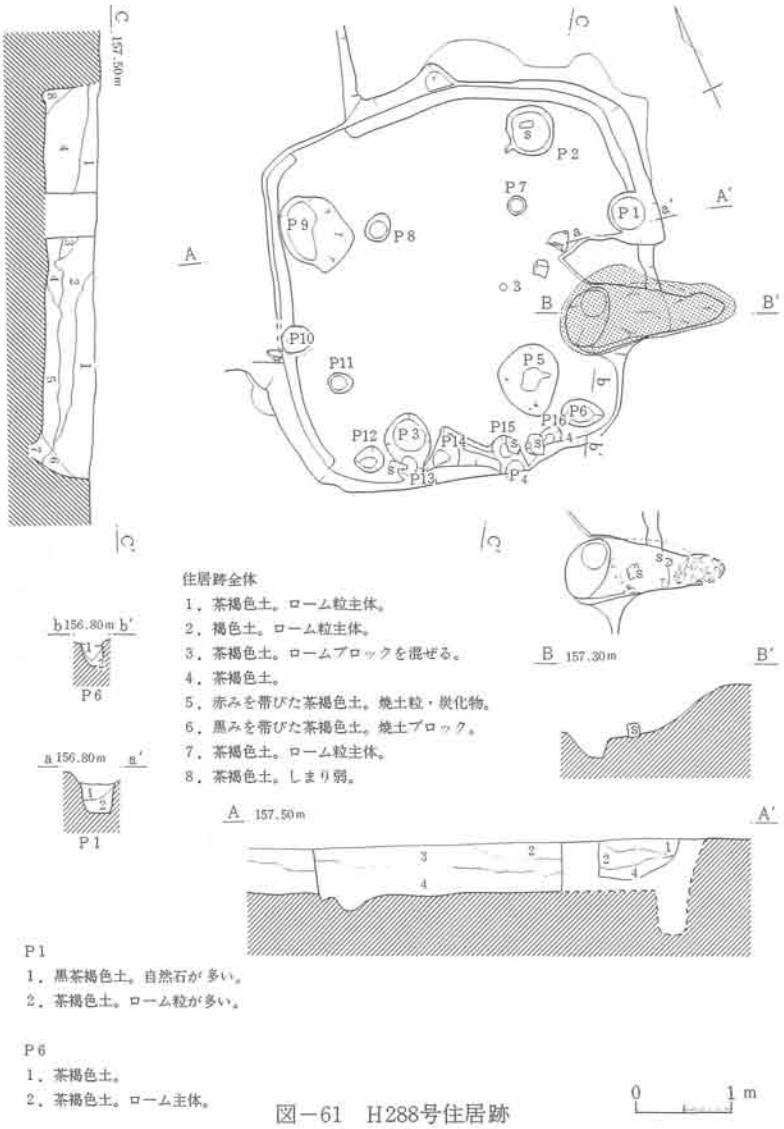
図－60　H287号住居跡出土遺物



図—59　H286・287・288号住居跡関係図

H287号住居跡（5H—16）　**位置**　ワ11。　**形状**　H286号住居跡およびH288号住居跡と重複するため正確な規模は不明だが、南北4.16m、東西3.34m、面積13m²を測る。重複する部分をのぞいて他はみな隅丸になる。長軸方向はN—27°—Eである。周溝は重複部分をのぞく壁下に認められる。　**ピット**　10個確認されている。そのうちP9はH288号住居跡構築のためにこわされた本遺構のカマド跡と思われる。他の9個のピットはその性格が不明だが、P2、P4、P8の傾きをみると、いずれも住居内側に傾斜しており、本遺構の柱穴跡とみられる。また、このようにピットが片側に集中する傾向は本遺構と重複するH286号、H288号住居跡にもみられるところである。　**カマド**　H288号住居跡構築に伴い破壊されたと思われる。　**貯蔵穴**　不明。しかし、P8の可能性もある。　**遺物**　東壁下の床面の中央部に土師器の破片がみられた程度である。　**重複関係**　H286号、H288号住居跡と重複する。H286号→本住居跡→H288号住居跡の順に新しくなる。（中澤）

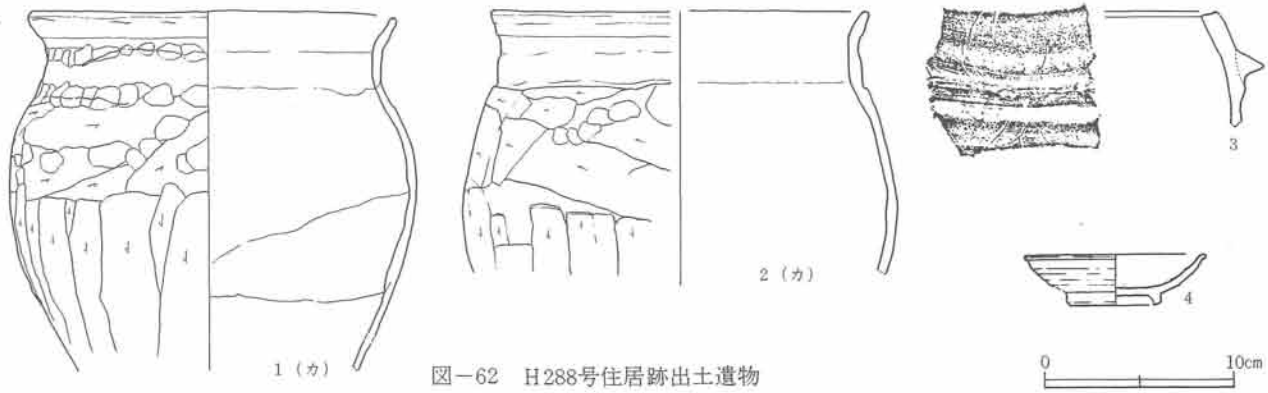
H288号住居跡（図版23）



図－61　H288号住居跡

カマド全景

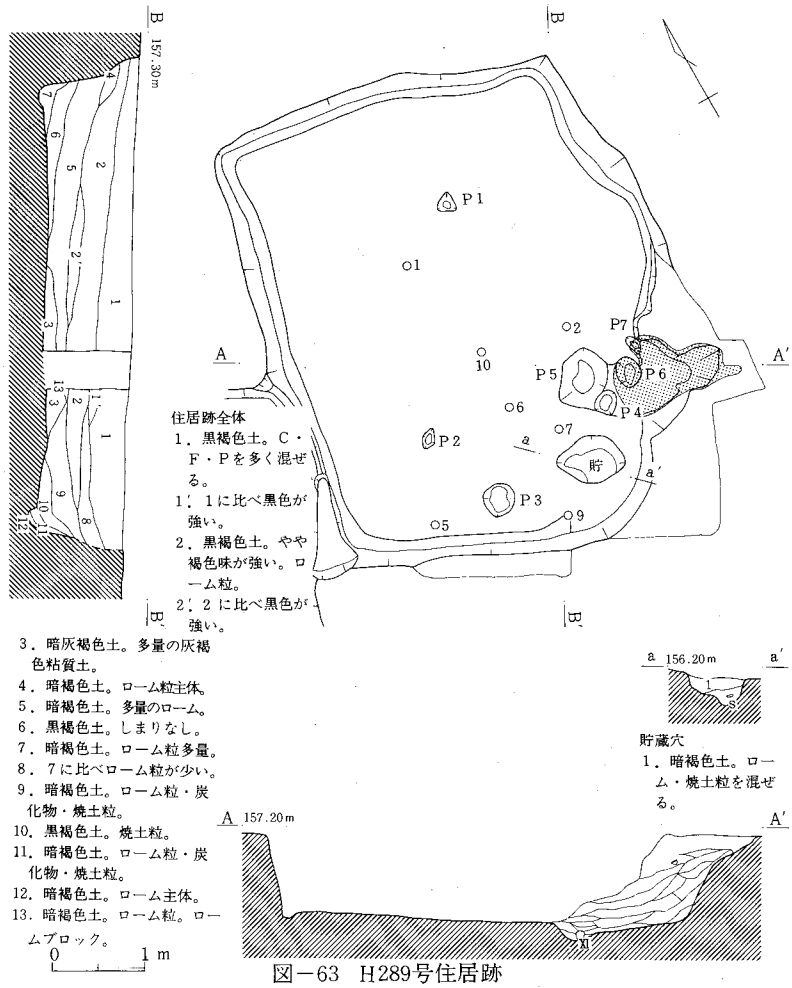
H288号住居跡（5 H－17）　**位置**　ワ11。**形状**　平行四辺形ぎみの隅丸方形を呈す。東壁および北壁は外方にやや彎曲する。南北4.04m、東西3.88mで長軸方向はN－19°－Eである。　**ピット・貯蔵穴**　16個が確認される。P1はカマド脇にあって円筒形を呈し、深さ43cmを測り、本遺構に付属するピット中で一番深い。性格は不明だが、貯蔵穴とも考えられる。P9、P10はH287号住居跡に付属するカマド等の跡と見られる。径30cm前後のピットが南壁下にとくに集中するものも本遺構の特色といえよう。　**カマド**　東壁南寄りで、主軸は東壁に対して直交する。全長168cm、燃焼部長109cm、煙道部に底の抜けた土師器甕1個体(1)を使用している。　**遺物**　床面より土師器羽釜（3）灰釉陶器皿（4）、カマドより煙道部に使用した甕以外の土師器甕（2）が出土している。　**重複関係**　H287号住居跡と重複し、本遺構が新しい。　（中澤）



図－62　H288号住居跡出土遺物

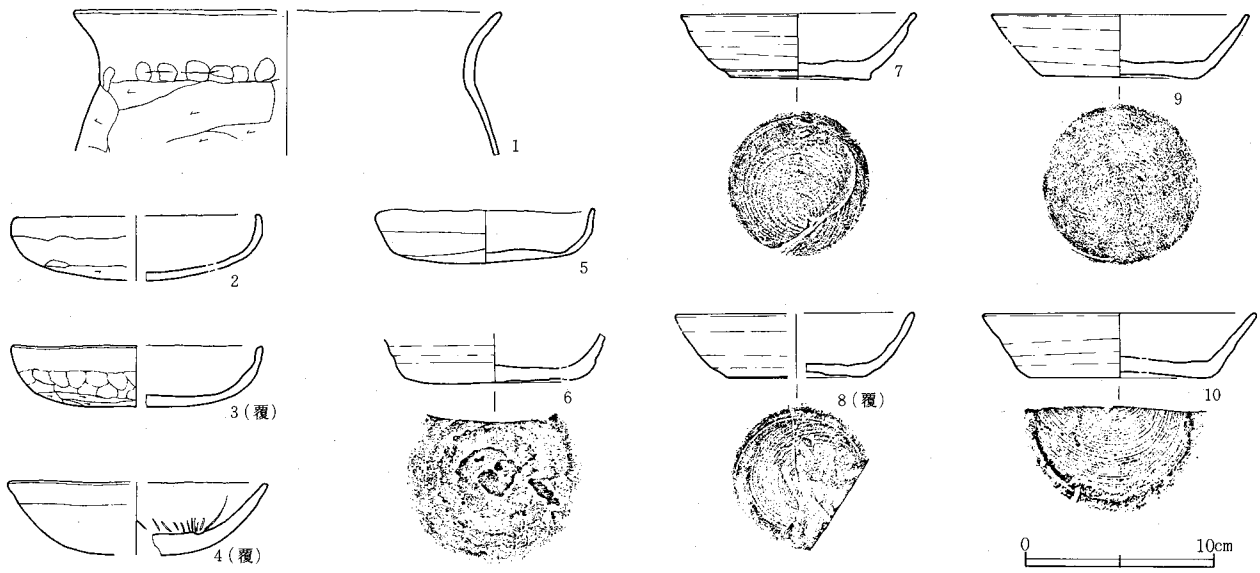
出土遺物　**土師器**　甕（1・2）、1は口縁部中央及び肩部との接合部に指頭痕を明瞭に留める。口唇部辺で受け口状を成し、肩部はハの字形のなで肩となる。肩部外面は所々に指頭痕を残す粗い横ヘラ削り、のち胴下半部は縦ヘラ削りを施す。口縁部は内外面横ナデ、胴部内面は横ヘラナデされる。胴部やや下方寄りに粘土接合痕を残す。微石粒を多量に含む。色調は淡褐色。焼きしまり良好。2は直立に近い口縁の形態を示し、口唇部辺でやや外反する。口縁部横ナデ、肩部ヘラ削りにより稜が形成される。1同様肩部外面は指頭痕を残す粗いヘラ削り、のち胴下半部は縦ヘラ削りが施される。肩部内面には荒いハケナデが施される。軽石粒を多量に含む。2個体とも所々に焼土が付着する。　羽釜（3）、やや下向きに鍔部が形成される。内外面にナデを施す。酸化鉄粒や砂粒を含む粗い胎土、色調は暗褐色。　**灰釉陶器**　皿（4）、外面はロクロ成形時の凹凸を留め、口唇部は丸味を帯びて、外反する。高台は外面下端部で弧状を成し、回転ヘラ削りによる底部調整を施す。体部内面に釉薬が認められる。内面には淡緑色の釉だまりを生じ、さらに全面斑点状の自然釉がかかる。微石粒を含む。色調は淡灰色。堅緻である。　（中束）

H289号住居跡（図版24）



図－63　H289号住居跡

H289号住居跡（5 H－18）　位置　ヲ11。**形状**　南北5m、東西4mの隅丸不整方形。北西隅と南東隅で交わる2辺はほぼ直交関係にあるが、他は鈍角になる。北壁東半と東壁北半を内に寄せて形の破綻を防いでいる。西壁中央のわずかな張り出しは、東壁中央やや北側の壁の走向の変化点にほぼ対応し興味深い。長軸方向N－12°－E、面積17.4㎡、壁高88～95cmで北側がやや高い。幅6～20cm、深さ4～9cmの周溝をめぐらす。　**ピット**　南壁下中央P3、35×34cm、深さ20cmで、出入施設に伴うピットとも見られる。カマド前P5、64×48cm、深さ16cmでカマドの灰かき穴と見られる。他は性格不明。　**カマド**　東壁中央南寄り。この部分の東壁は直線的で、それにカマド中軸線が直交する。左袖部は地山を造り出す。燃焼部は三角形を呈し、細い先端を煙道とする。全長116cm、袖部内幅70cm前後、燃焼部長56cm、煙道部傾斜角64°。　**貯蔵穴**　南東隅。長円形72×50cm、深さ29cm。貯蔵穴のある南東隅壁は整った曲線とする。**遺物**　カマド手前及び南壁付近を中心に土師器甕（1）、同坏（2～5）、須恵器坏（6～10）が、東壁沿い北半から羽口、鉄滓、鉄製品（形不明）が出土した。これらの大部分は床面又は床面直上から出土している。　**重複関係**　西壁南半でH207号住居跡と切り合う。本住居跡が旧い。　（唐澤）

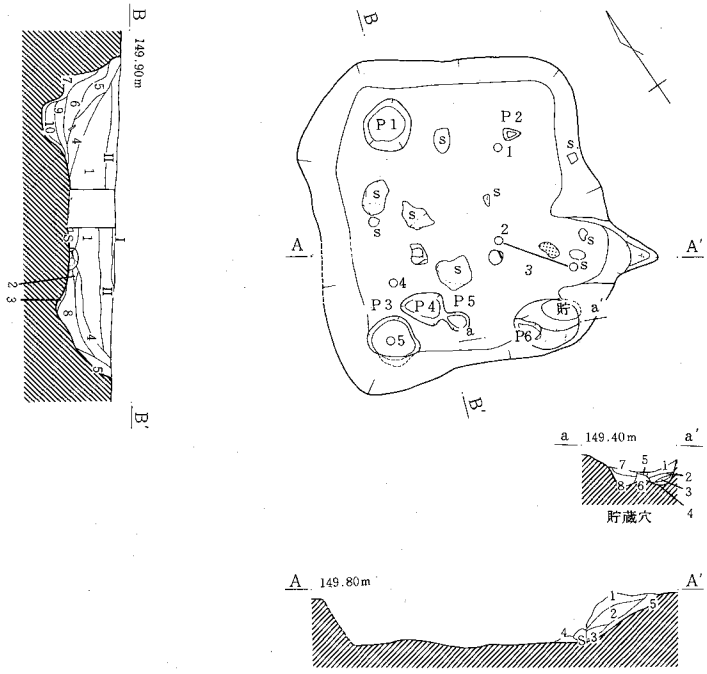


図－64　H289号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1）、緩やかに外反する口縁部を持つ甕で、胴部に最大径を持つ。口縁部は内外面とも横ナデだが、外面に指頭痕を残す。肩部内面はヘラナデ調整を施す。　坏（2～5）、2は厚い器内を持つ、浅めの椀形。口縁部内外面は横ナデ、体部内面横ナデ後放射状暗文、体部～底部外面はヘラ削りと見られる。底部内面外周に凹線をめぐらす。2・3は規模・つくり同じで、口縁部及び内面横ナデ、体部外面に指頭痕、底部外面ヘラ削り。4は2・3に比し一まわり小さいが、調整はほとんど同じである。底部から体部へ移行する所の内面には指頭痕が顕著で、ここに指を当て折りまげたものと見られる。　**須恵器**　坏（6～10）、6は底部回転ヘラ切り未調整で、底部内面に「×」印（焼成前）を持つ。7・10は、底部回転糸切り未調整、7の糸目は他に比べ太い。8・9は底部回転糸切り後、周辺部を回転ヘラ調整。体部外面下端には2段の回転ヘラ削りが認められる。いづれも焼成は堅緻で、7の外面には自然釉がかかる。7・8・9の胎土には、砂粒以外に黒色粒子を含む。ロクロ回転方向はいづれも右回転　（唐澤）

H290号住居跡（図版24）

H290号住居跡（5H—19）　**位置**　調査区域西端、ル9にある。台地中央部より北寄りの平担地に位置する。西に接して南北に45号溝が走る。　**形状**　南北に長軸を持つ隅丸長方形で、南北2.86m、東西2.33mである。北・南・東壁はほぼ直線であるが、西壁は外方に彎曲している。西壁と南壁は、相向かいの壁よりそれぞれ約15cm長い。長軸方向はN—30°—E、面積6.8m²、壁高45～55cmである。周溝は存在しない。　**ピット**　床面に6個（P1～P6）ある。P1・P2・P3・P6が、形状や位置等から推して柱穴と考えられる。P4・P5の性格や機能等については不明である。　**カマド**　東壁中央南寄りにある。焚き口付近には支石ともみられる焼石がある。右袖部は鼠色の粘土質の土で構築されている。全長108cm、袖部内幅75cm、燃焼部長58cm、壁への掘り込み角度35°で、壁外掘り込みは88cmである。火床面は住居床面とほぼ同じ高さである。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、円形で、規模は68×55cm、深さ22cmである。　**遺物**　床面北部と南寄り中央より羽釜片(1、2)、カマド手前床面より須恵器椀高台部分(3)、南西隅から土師質須恵器坏底部片（4)、P3内より土師質須恵器長頸瓶底部片（5）が出土した。又、P2・P4付近からは鉄滓も出土している。　**テフラ**　床面から約32cmの所に、B軽石層（純層）が確認された。　**その他**　床面上に散在する数個の石はカマドに使用されたとも思われる。　（鵜木）



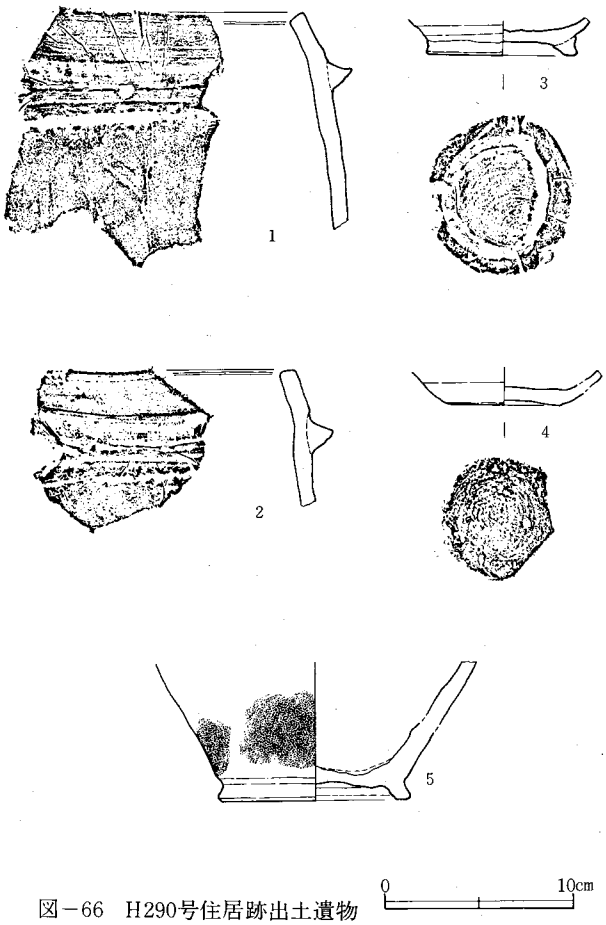
住居跡全体
1．黒色土。C軽石を混ぜる。
2．茶褐色土。ローム粒を多く含む。
3．茶褐色土。ロームブロックを含む。
4．暗褐色土。
5．茶褐色土。
6．茶褐色土。ローム粒を多く含む。
7．茶褐色土。褐色味が強い
8．茶褐色土。ローム粒を多く含む。
9．茶褐色土。大粒のローム粒を多く含む。
10．茶褐色土。

カマド
1．茶褐色土。多量のB軽石を含む。
2．茶褐色土。多量のローム粒を含む。
3．茶褐色土。若干の焼土粒を含む。
4．茶褐色土。
5．黄褐色土。ローム粒主体。若干の焼土粒。

貯蔵穴
1．茶褐色土。ローム粒を多く含む。
2．暗褐色土。多量の焼土粒を含む。
3．黄褐色土。
4．黄褐色土。
5．茶褐色土。
6．茶褐色土。
7．暗褐色土。ロームブロックを混ぜる。
8．茶褐色土。多量のロームブロックを混ぜる。

0　1m

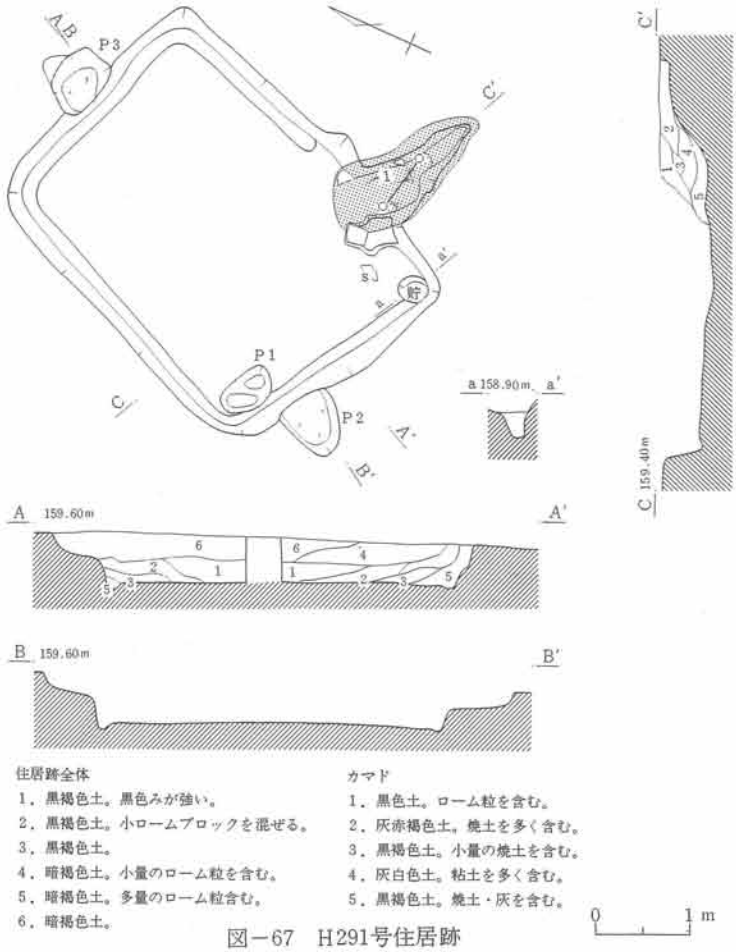
図－65　H290号住居跡



図－66　H290号住居跡出土遺物

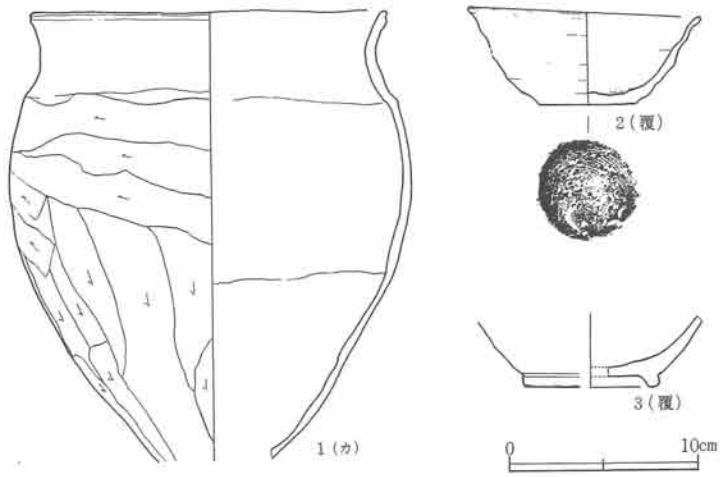
出土遺物　**土師器**　羽釜（1・2)、1・2とも体部成形後断面三角形の鍔部が設けられ、横ナデが施される。胴部外面には粗い縦ヘラ削りが施される。細石粒や砂粒を含む粗い胎土を用い、色調は淡茶褐色を示す。1・2は同一個体の可能性も考えられる。　**須恵器**　椀（3)、右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。高台部貼り付け。高台は幅広く、粗雑な作りである。　**土師質須恵器**　坏（4)、3同様右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。雲母片を多量に含み、色調は淡褐色を示す。　長頸瓶（5)、カマド内出土。器面の剝離が著しく、技法などの観察は不可能である。高台部形成後、周辺部にはナデが施される。細石粒や砂粒を少量含む。胎土は比較的緻密である。色調は濃茶褐色を示す。　（中束）

H291号住居跡（図版25）



図－67　H291号住居跡

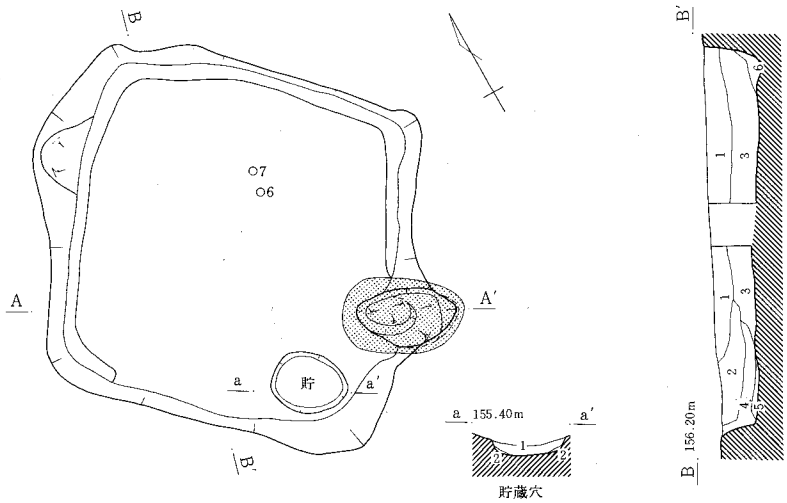
H291号住居跡（5 H－20）　**位置**　ヲ13～14。一群にまとまった7軒の住居跡の内の一軒である。　**形状**　南北3.9m、東西2.8mの隅丸台形を呈する。南西隅は純角で、東壁は南側が西壁より約30cm長い。主軸方向N－25°－E、面積10.8㎡、壁高43～55cmで北壁側が高い。東壁南半を除き、幅11～18cm、深さ3～6cmの周溝がめぐる。　**ピット**　住居内南西隅（P1）、南・北壁に接して住居外（P2、P3）に存在する。P1は60×38cm、深さ22～25cmで、覆土中より土師器の小片が出土した。P2は64×58cm、深さ19cm（検出面から。P3も同じ）。P3は68×52cm、深さ26cmで、住居の壁に一部を切断されたような形を呈する。P2、P3と同じような例はH272号住居跡にも認められるが、これらは柱穴跡とも見られる。　**カマド**　東壁中央南寄り。両袖部付近には石材が見られるが、極端に偏平（左袖部）だったり、壁から50cm離れている（右袖部）など、袖石とは考えにくい点がある。形状では全体が「く」字状に折れ、燃焼部主軸は東壁に直交しないで、焚口側が北上がりになる。全長約150cm、袖部内幅43cm、燃焼部長50cm前後で、煙道部は一段高く50cm程続いている。　**貯蔵穴**　南東隅。円形、32×28cm、深さ23cm、　**遺物**　カマド燃焼部奥の立ち上がり部分には、口縁部を下にした土師器甕（1）が底部を除きほぼ完形で出土した。貯蔵穴内からは土師器片、炭化物とともに、鉄滓2が出土した。　（唐澤）



図－68　H291号住居跡出土遺物

H291号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1）、一旦ハの字状に内傾したものがゆるやかに外反する口縁部を持つ甕で、胴部に最大径を持つ。口縁部は内外面とも横ナデだが、外面には指頭痕を残す。口唇部外面には強い横ナデで凹線をめぐらす。胴部外面は上位で横方向、下位で縦方向のヘラ削りを施す。肩部内面にはハケ目状の痕跡を残すヘラナデを持つ。口縁部と胴部の境及び胴部中ほどには接合痕を残す。色調は褐色で、胎土に砂粒を混ぜる。器肉は5～6㎜で、この手の甕ではやや厚い。土師質須恵器　坏（2）、小さな底部を持つ埦形の坏で、外面及び底部内面に顕著なロクロ痕を残す。底部回転糸切り未調整、色調口縁部灰褐色、体部以下黒灰色。　埦（3）、付高台。外面にロクロ痕を残さないていねいなつくり。内面は剝落。淡赤褐色。　（唐澤）



住居跡全体
1．黒褐色土。粘性をもつ。
2．黒褐色土。多量の炭化物・焼土粒。
3．褐色土と黒色土の混土層。
4．3に比べC軽石・二ツ岳系軽石が多い。
5．褐色土。
6．褐色土と黒色土の混土層。

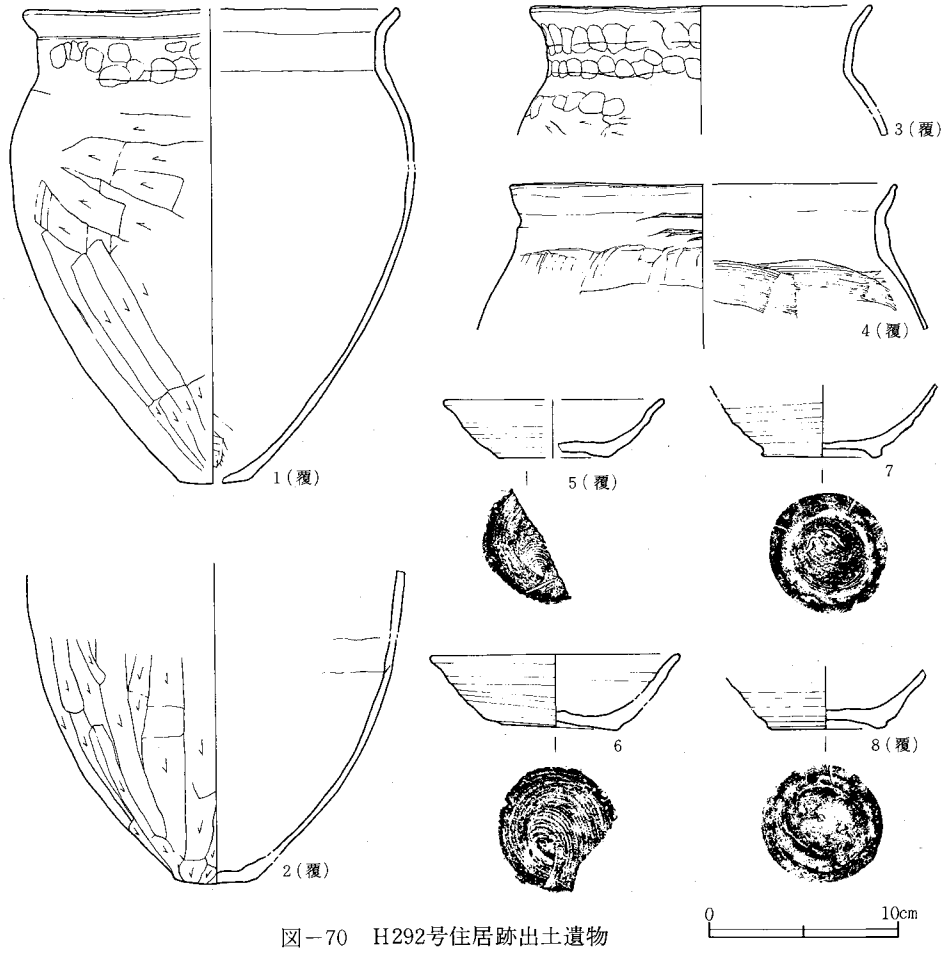
カマド
1．黒褐色土。焼土を混ぜる。
2．黒色土。焼土ブロック・ロームブロック。
3．暗褐色土。焼土灰を若干含む。
4．黒色土とロームブロックの混土層

貯蔵穴
1．黒色土。焼土粒・炭化物・灰。
2．黄褐色土。

0　1 m

図－69　H292号住居跡

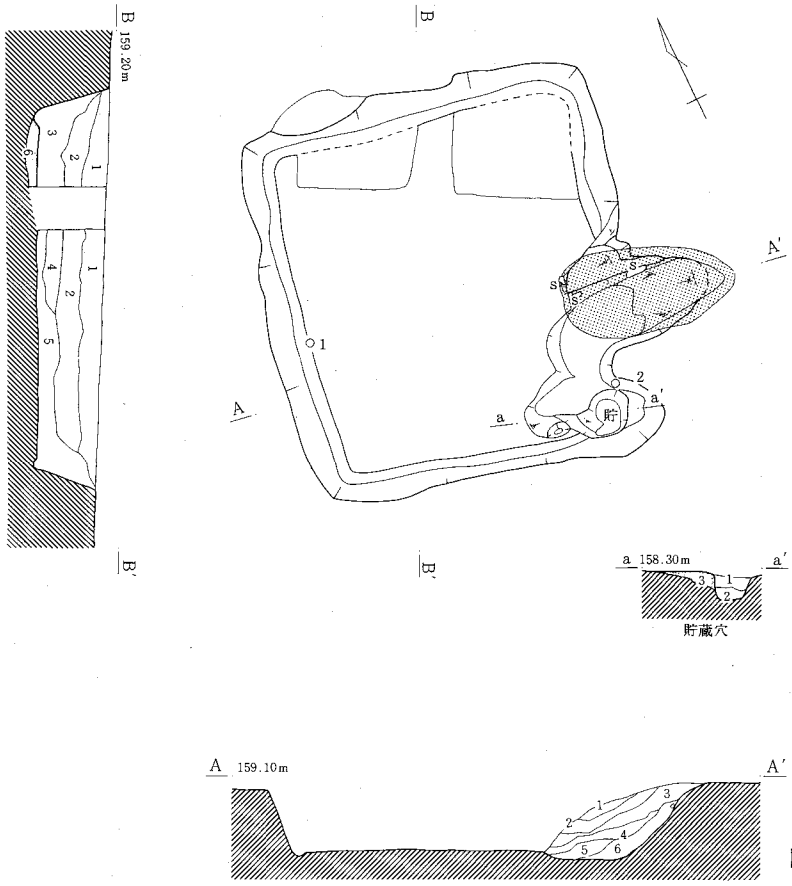
H292号住居跡（5H－21）　**位置**　カ9に所在し、49号溝と51号溝に挟まれている。**形状**　各壁とも外方に若干膨らむ傾向をもった隅丸方形の平面プランをもっている。南北3.6m、東西3.44mで、面積11.7㎡である。方位はN－41°－Eを向き、周溝は深さ2～5cm、幅12～18cmのものが北壁、西壁及び東壁の北半部に沿ってめぐらされている。**カマド**　東壁南寄りの位置に設置されていた。壁外への掘り込みは64cmで、全長72cm、燃焼部長55cm、袖部内幅58cmを測る。**貯蔵穴**　南東隅に長円形の貯蔵穴が存在するが、それ以外のピットは見られなかった。長軸82cm、短軸62cm、深さ22cmの規模をもつ。**遺物**　床面中央部北寄りに土師質須恵器椀（7）が、その南より糸切り痕を留める須恵器坏（6）がそれぞれ出土している。また、この他覆土中からは土師器甕（1、2、3、4）、須恵器坏（5）が出土している。（田口）



図－70　H292号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1～4）、コの字形態を残存させる1・3は、肩部の稜線が不明瞭になりつつあり、3では指頭痕が強調される。4は肩部がハの字形に開き、内面には細かなハケ目痕を残す。1・4は肩部外面のヘラ削りが波状を成す。胴下半部外面は1・2とも縦ヘラ削りである。1の底部内面には肩部同様粗いハケ目が施される。**須恵器**　坏（5・6）、2個体ともに、底部切り離しは回転糸切りによる。6は左回転のロクロ使用。5は石粒を多量に含み、色調は暗灰色。6は砂粒を多量に含み、淡灰色、軟質である。**土師質須恵器**　椀（7・8）、右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。低い高台部が設けられ、7は周辺部に、8は底部中央にまで調整が及ぶ。小石や多量の雲母を含み、8では他に酸化鉄粒が散見される。7は内外面にいぶしが掛かる。8は淡褐色を示し、軟質である。（中束）

H293号住居跡



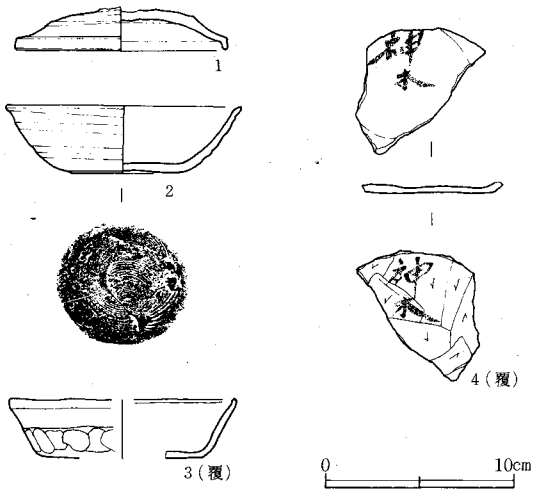
住居跡全体
1．黒茶褐色土。Ⅲ層。焼土粒・自然石。
2．茶褐色土。ローム粒・炭化粒。
3．2に比べ粘性を増す。
4．赤茶褐色土。焼土化したローム。
5．茶褐色土。3に似る。
6．茶褐色土。ロームブロック主体。黒色土。(貼床)

カマド
1．茶褐色土。若干の焼土粒。
2．茶褐色土。焼土ブロック。粘性あり。
3．2に比べ焼土ブロックが少い。
4．茶褐色土。ロームが混じる。
5．赤茶褐色土。焼土ブロック・白色粘土。
6．赤褐色土。焼土ブロック主体。

貯蔵穴
1．茶褐色土。焼土ブロック・粘土・炭化粒。
2．灰褐色土。
3．茶褐色土。ロームブロック・焼土ブロック。(貼床)

0 1m

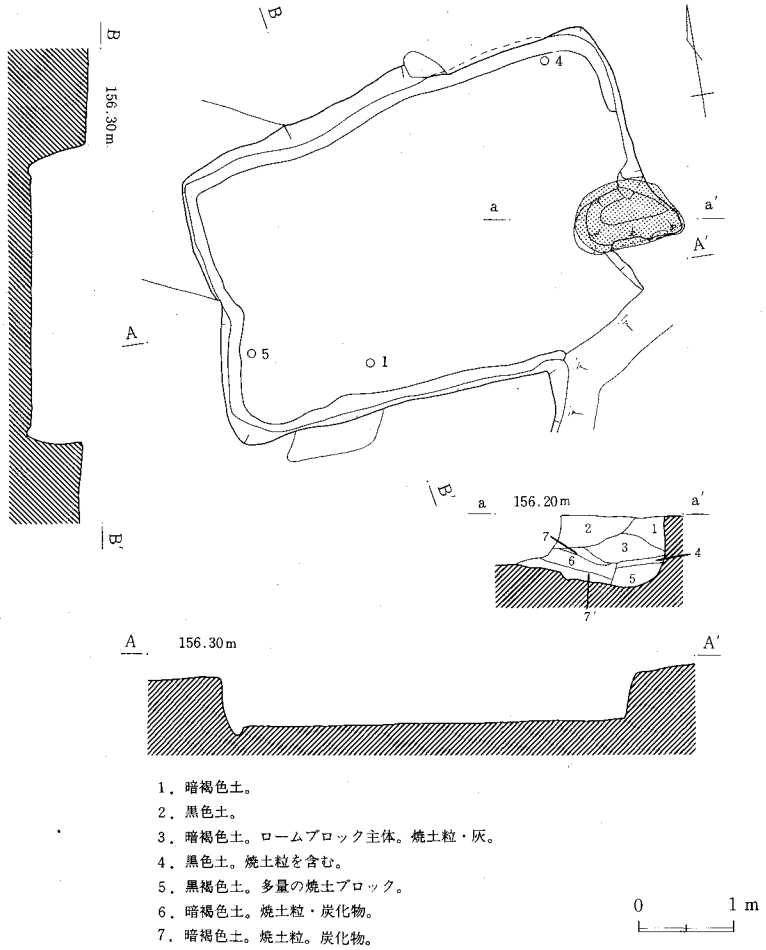
図－71　H293号住居跡



図－72　H293号住居跡出土遺物

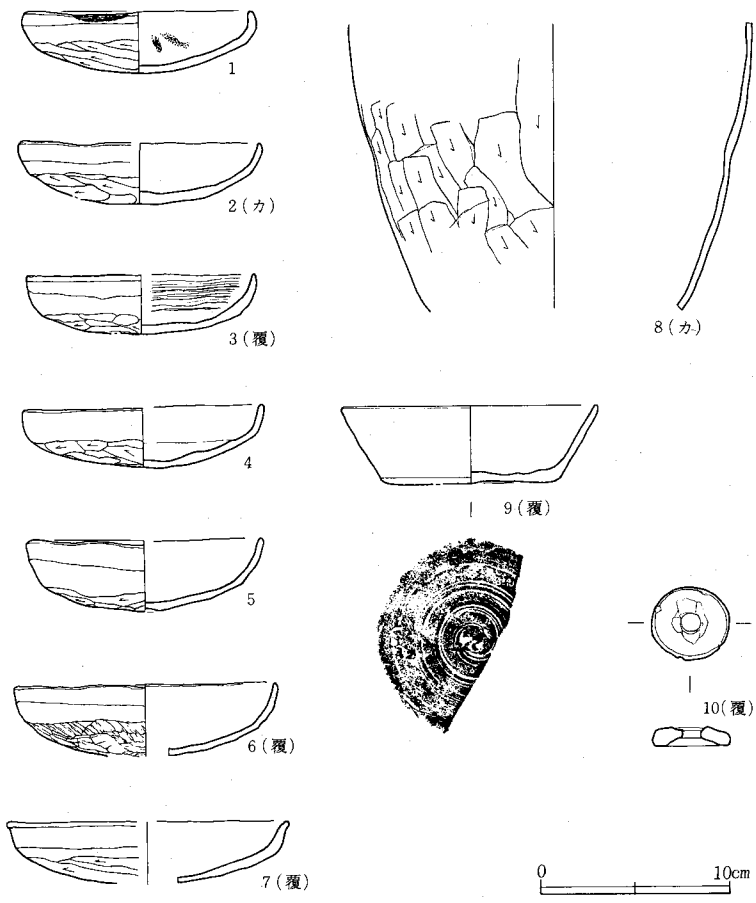
H293号住居跡（5H－22）　**位置**　ヨ13。　**形状**　南北3.82m、東西3.42mの長方形を呈す。長軸方向はN－12°－E、面積は12.3m²を測る。北壁は直線を示し、南壁および西壁は外側にやや彎曲しており、壁高66～86cmである。周溝はカマドと南東隅を除く部分に確認できる。その深さ3～5cm、幅10～16cm。カマド付近や住居内北辺に貼床が確認される。ロームブロックや黒色土を混ぜた土で固められており、厚さは14～17cmを測る。**ピット**　確認されていない。　**カマド**　東壁南寄り。全長150cm、燃焼部60cm、袖部内幅70cmである。主軸方向は東壁に対し直角とならずに、やや北へ偏して交わる。袖部は地山を掘り残し、燃焼部および煙道部に石を使用する。　**貯蔵穴**　南東隅で長円形を呈す。その規模は46×41cm、深さ30cm。　**遺物**　南壁南西隅付近にて鉄製の鏃が出土している。レベルは床面より34cm上を測る。鏃の先を下に向け、いかにも流れ込んだ様子で発見されている。南東隅床面付近からは、須恵器坏(2)が出土している。また、西壁のほぼ中央部より蓋(1)が出土しているが、床面より14cm上に位置し、本遺構に直接関係するかは疑問の残るところである。なお、覆土中より「神木」と墨書された土師器破片(4)が発見されている。　（中澤）

出土遺物　　**土師器**　坏（3・4）、3は底部がヘラ削りされた平底坏である。体部外面は指頭痕を顕著に残し、口唇部周辺は横ナデが施される。口唇部外面が僅かに内傾し、内面に於て小さな玉縁状を形成する。内面は平滑である。砂粒を含む。色調は淡茶褐色である。4は平底坏の底部破片である。内外面に「神木」と墨書される。古代の樹木信仰を彷彿させる資料である。神木は神を迎える依代（よりしろ）となり、また霊地を標示するものとして神聖視された樹木を指す。老木や巨木、奇種逸品、特殊な外見を示すことなどが神木の要因となろう。松、杉、榎、柳、槻、楊、桜、梅、銀杏など種々の樹木が神木となる。参考「定本柳田国男集」第11巻神樹篇　　**須恵器**　蓋（1）、つまみを欠損する小ぶりな蓋である。右回転ロクロ成形ののち、切り離され、天井部中央につまみが形成される。さらに周辺部には右回転ロクロ利用のヘラ調整が加えられる。礫や砂粒を含み、鉱物の溶出もみられる。色調は暗灰色。堅緻である。　坏（2）、右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切り。内面は平滑である。底部の周辺も平滑で、やや丸味を帯びる。底径は口径に対して小さく、口径の½以下の数値を示す。礫や酸化鉄粒を多量に含む。色調は灰褐色。やや軟質である。　（中束）



1．暗褐色土。
2．黒色土。
3．暗褐色土。ロームブロック主体。焼土粒・灰。
4．黒色土。焼土粒を含む。
5．黒褐色土。多量の焼土ブロック。
6．暗褐色土。焼土粒・炭化物。
7．暗褐色土。焼土粒。炭化物。
7'．7に比べ色調が暗い。

図－73　H294号住居跡

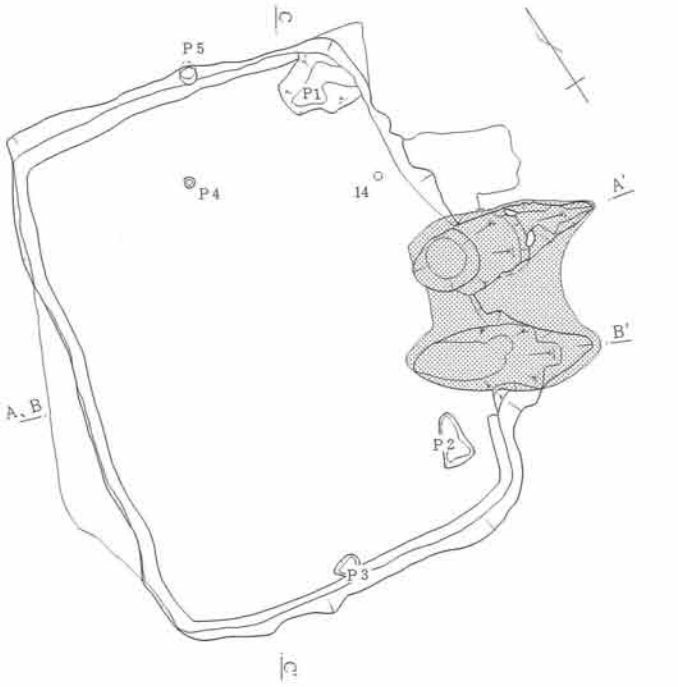


図－74　H294号住居跡出土遺物

H294号住居跡（5 H－23）　**位置**　カ9～ヨ9にまたがった位置に所在し、51号溝と本住居跡南東隅において重複する。　**形状**　南北3.15mに対して東西4.68mと、東西に細長い点に特徴がある。北西隅の直角の他は北東隅、南西隅共に隅丸の角をもった台形状の平面プランを呈する。周溝は東壁のカマド部分を除いてほぼ全周にめぐらられている。なお、方位はN－80°－Eをとる。　**カマド**　東壁南寄りに据えられていた。左袖部には石材の使用が認められるが、原則的には白色粘土を左右両袖に使用しているようである。また、左燃焼壁にも石材が残っていたが、燃焼面のみが平夷に加工されており、しかも一部が造り出し状になっていた。　**遺物**　本住居跡からは丸底の土師器坏が多数出土している。この内でも特に(4)は床面近くより出土したものである。また、覆土中からではあるが滑石製の紡錘車が出土していることも特筆すべきことである。　**重複関係**　地層断面より51号溝が本住居跡を切って造られていることが判明している。　（田口）

出土遺物　**土師器**　坏（1～7）、1は口縁部に施された横ナデの幅が狭く、口唇部がやや内傾する。体部内面及び口縁部外面の一部に、煤状の痕跡が認められる。2は体部が緩やかに外傾し、口唇部のみやや内傾する。3～6は体部が緩やかに外傾する。4は底部外面ヘラ削りから、直ちに口縁部横ナデに移行する。6の底部には細かな波状を形成するヘラ削りが施される。7は体部が外傾し、口唇部外面で小さな玉縁状を形成する。3は体部内面にハケ目痕が巡る。5にも同様の技法をみるが、3と比較してやや不明瞭である。1～7は礫や軽石粒、多量の砂粒を含む。色調は1・2・4・6・7で淡褐色、3は暗褐色、5は淡茶褐色を示す。2は軟質で磨耗が著しく、1・3・6・7は焼きしまり良好である。甕（8）、粗い縦ヘラ削りの施された胴部片である。内面に粘土接合痕を残す。砂粒を多量に含む。外面は淡褐色、内面は茶褐色を示す。**須恵器**　坏（9）、右回転ロクロ使用。底部切り離し技法不明。底部うず巻状の痕跡は、ロクロ回転を利用した調整痕か。砂粒を多量に含む。色調は赤味を帯びた淡灰色を示し、口唇部辺及び底部に煤の付着が認められる。軟質である。　**石製品**　紡錘車(10)、滑石製で重さは18.3gである。表面は著しく磨耗している。　（中束）

H295号住居跡



住居跡全景

カマド全景

住居跡全体及びカマド
1．暗褐色土。焼土粒。炭化物。
1′．1に比べ褐色が強い。
2．1に多量の炭化物を混ぜる。
3．ロームブロックと褐色との混土層。炭化物。
3′．3に比べ黒色土が多い。
4．暗褐色土。焼土粒。
5．焼土ブロック主体。灰・ローム・黒色土。
6．焼土粒と黒色土との混土層。
7．黒褐色土。多量の灰・焼土粒。
7′．に比べ焼土粒が多い。
8．焼土粒・焼土ブロックと灰の混土層。
9．焼土層。
10．ローム粒主体層（根による攪乱か）。

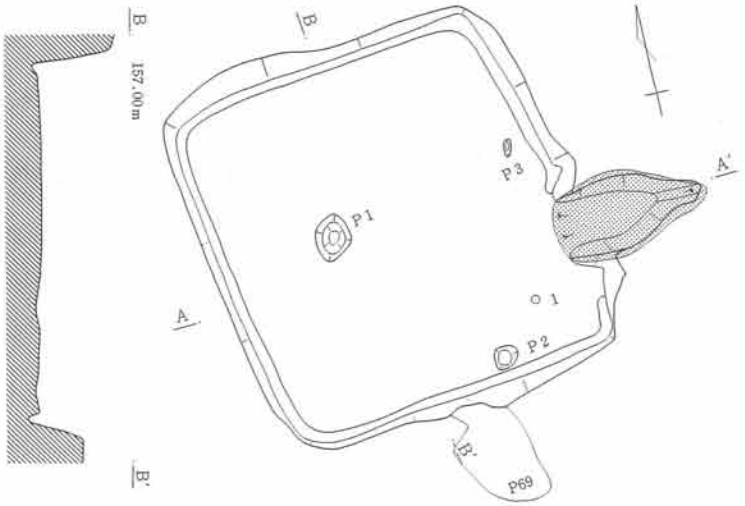
北カマド（A－A′）
1．黒色土。
2．黒色土とロームブロックの混土層。
3．黒色土と焼土ブロックの混土層。
3′．3＋炭化物。焼土ブロックも多い。
4．焼土。一様に焼ける。
5．赤褐色土。焼土ブロック主体。
6．暗褐色土。灰・焼土。
7．6＋焼土粒。

図－75　H295号住居跡

H295号住居跡（5 H－24）　**位置**　ワ9を中心とした地域に所在する。49号溝、50号溝、53号溝、46号溝の各溝状遺構によって区画された地区の北辺に位置する。周辺に住居跡、掘立柱建物跡が数多く存在するものの、重複関係にあるものはない。　**形状**　南北方向に長軸の向きをとる隅丸長方形の平面プランを有する。南北5.62m、東西4.36mで、面積は23m²と広い。壁高も79～93cmと非常に深く、周溝が東壁の一部を除いてほぼ全周にめぐらされている。　**カマド**　現状で東壁に南北に並んで2基のカマドが検出された。北側カマドは灰かき穴をきちんととどめ、燃焼部から煙道部へ移行する地点に、左右2個の石材を据えている。全長152cm、燃焼部長62cm、袖部内幅74cmと規模も大きく、壁への掘り込み角度も42°を測る。カマド主軸方位と住居跡主軸方位はほぼ直交する。北側カマドと接して存在する南側カマドは全長108cm、燃焼部長74cm、袖部内幅65cmであり、北側カマドに比して小ぶりの様相を呈する。全長も短いことから、壁への掘り込みの角度は63°と非常にきつい。主軸方位はN－47°－Eをとり、住居跡の主軸方位とは直交しない。2基のカマドは形態、つくり等から考えて同時に存在したものではなく、各部の残存状況や左右壁の様相、及び位置関係から南側カマドが北側カマドに先行して構築されたものと推定される。　**ピット**　床面に3個（P1、P2、P4）、南北の壁にかけて2個（P3、P5）存在する。P3とP5はそぜぞれ南壁、北壁のほぼ中央部に所在し対称的な位置にあること、及び規模も似通っていることから柱穴の可能性をもつものと思われる。　**遺物**　覆土中より坏を中心として多数の土器の出土をみた。　（田口）

図－76　H295号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　小型甕(12)、コの字形態を残存させる口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横ヘラ削りが施される。砂粒を多量に含む。　台付甕(13)、指頭痕を残しつつ、内外面にナデが施される。ナデは甕本体との接合部分及び脚端部に於て顕著である。酸化鉄粒や多量の砂粒を含む。色調は茶褐色。　甕(14)、口縁部外面は指頭痕を残し、内外面横ナデ。口唇部にはナデにより浅い沈線状が形成される。肩部外面横ヘラ削り、内面は平滑である。酸化鉄粒や砂粒を含有する。色調は淡茶褐色。　坏（15･16)、15は平底状を示す。底部はヘラ削り、体部外面は指頭痕を残す。口縁部にみられる横ナデの幅は狭い。内面は平滑である。砂粒を多量に含むが、焼きしまり良好。16は口唇部が内傾する平底坏の破片である。埦(17)、底部ヘラ削りにより平底状を形成する。体部外面は横ヘラ削り、口縁部は横ナデが施される。内面は平滑である。多量の砂粒や微細な雲母を含む。色調は茶褐色。焼成は良好。　**須恵器**　坏(１～８)、１～５及び７は右回転ロクロ使用。底部の切り離しは回転糸切りによる。６と８はロクロ回転方向不明。底部切り離しは回転糸切りによる。８ではさらにその後に周辺部ヘラ調整が加えられる。１と３は軽石粒を多量に含み、色調は淡い暗灰色を示す。軟質である。２は砂粒を含み、色調は淡灰色、軟質である。４は表面に黒色鉱物の溶出がみられる。色調は淡青灰色、堅緻である。底部にはヘラ記号状の痕跡をみる。５は砂粒を含み､色調は淡灰色。軟質である。底部内外面に記号「井」が認められる。６は砂粒を多量に含み、淡灰色、軟質である。７と８は軽石粒を多量に含み、暗灰色、軟質である。
埦（９～11)、10・11は右回転ロクロ使用。、底部の切り離しは回転糸切りにより、さらに高台部が貼付される。９はロクロ回転方向不明。高台部の周辺はナデ調整が施される。９・10は黒褐色の鉱物を多量に含む。色調は淡灰色、軟質である。11は黒色鉱物の溶出がみられ、色調は青灰色、堅緻である。　（中束）

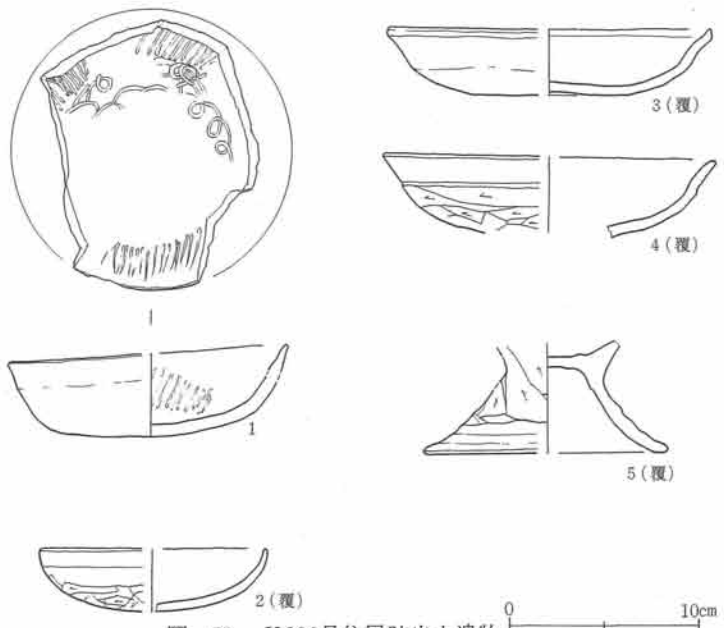


図－77　H296号住居跡

住居跡全景

H296号住居跡（5 H－25）　**位置**　調査区域の北東、タ10～11に所在する。台地が東南方向に傾斜を始める北西の端に当たる。　**形状**　北西～南東に長軸を持つ長方形で、南北3.8m、東西3.7mである。南西隅のみやや丸味を帯びている。長軸方向はN－8°—W、面積13.9m²、壁高101cm～58cmである。カマド部分を除き壁下に周溝をめぐらす。幅8～13cm、深さ1～8cmである。南と北の壁は直線的でほぼ平行になっており、東と西の壁は外側に少し彎曲している。　**ピット**　床面に2個（P1、P3）、南壁にかかって1個（P2）ある。P2は28×22cm、深さ14cm、椀形で、焼土粒を含んだ黒色土で埋まっていたが、貯蔵穴ではないと考えられる。P1（50×37cm、深さ11cm）、P3（19×8cm、深さ7cm）の性格は不明である。　**カマド**　東壁中央やや南寄りにある。カマド主軸は住居長軸に対して直角より3°南へ傾き、全長154cm、燃焼部長106cm、袖部内幅50cm前後、壁への掘り込み角度は46°で、壁外掘り込みは132cmである。火床面は床面より8cm低い。袖部及び燃焼部は白色粘土で構築されている。　**遺物**　カマド手前やや南寄り床面から土師器坏（1）が出土した。覆土中からは土師器坏（2～4）及び脚付甕（5）が出土している。

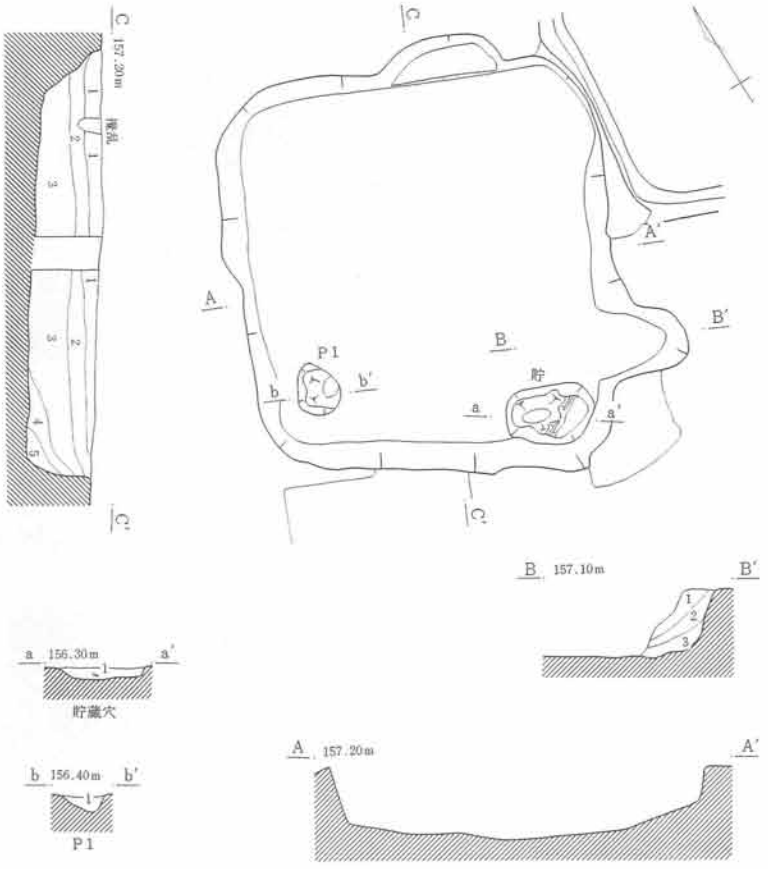
（木部）



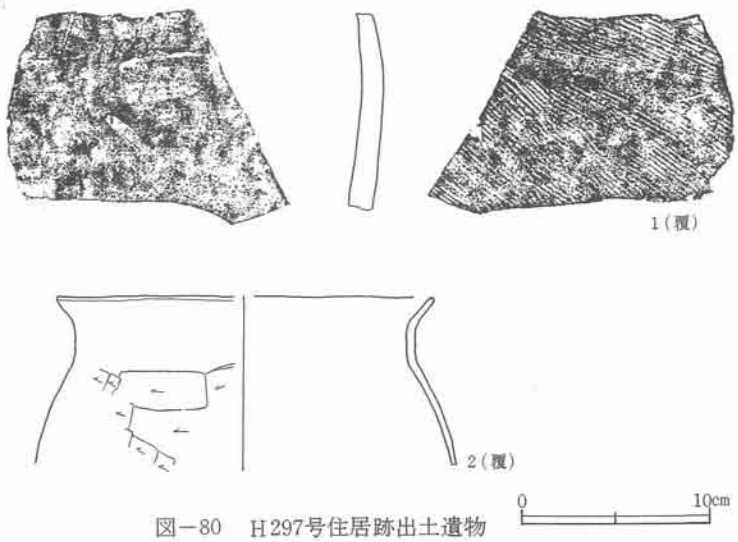
図－78　H296号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　坏（1～4）、内外面ともに器面の荒れが著しく、技法などの観察は不明瞭な点が多い。体部内面に放射状暗文、底部内面にラセン状暗文を認める。色調は茶褐色。礫や酸化鉄粒を含む。厚手で軟質。2は底部ヘラ削りから滑らかに口縁部へと移行し、全体的に丸味を帯びる。口縁部内外面に施された横ナデの幅は狭い。内面は平滑である。色調は茶褐色。軽石粒や礫を含む。焼成良好。3は皿形を示す。外面は器面の荒れが著しく、技法などは不明瞭。僅かに、口縁部横ナデ、底部ヘラ削り痕を認める。内面は平滑である。色調は茶褐色。礫を含み。軟質。4も3同様器形は皿形。口縁部は緩やかに外傾する。底部ヘラ削り、口縁部横ナデにより、稜線を形成する。色調は暗褐色。酸化鉄粒や砂粒を含む。底部辺に煤付着。　台付甕（5）脚部片。脚端部は内外面横ナデ。中央から甕の接合部にかけて、粗いヘラ削り。甕内面に指ナデ痕を認める。色調は淡褐色。軽石粒や多量の砂粒を含み、軟質。

（中束）



図－79　H297号住居跡



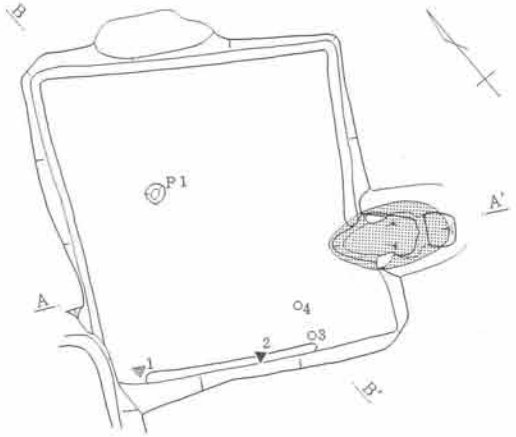
図－80　H297号住居跡出土遺物

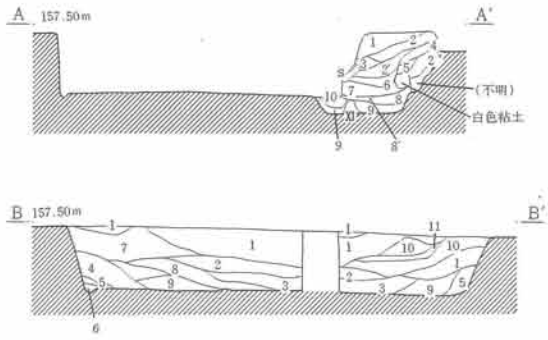
住居跡全景

H297号住居跡（5H－26）　**位置**　調査区域の北西、ヲ11に所在する。台地の北側で、少し西寄りのほぼ平坦な所である。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ隅丸不整方形で、南北4m、東西3.8mである。南壁は、西方に向かって約50cm内に寄っている。北東隅と南西隅及び南西隅は若干張り出し気味で、H275号住居跡と類似している。長軸方向はN－27.5°－E、面積13.7m²、壁高60～75cmである。周溝はなし。　**ピット**　南西隅の床面に1個（P1）あり、規模は58×28cm、深さ20cmで埦形をしている。性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄りにある。カマド主軸は北壁に平行で、西壁にほぼ直交する。全長79cm、袖部内幅74cm、燃焼部長74cm、壁への掘り込み角度75°で、壁外掘り込み96cmである。火床面は住居床面とほぼ同じ高さである。　**貯蔵穴**　南東隅、長円形で規模は94×64cm、深さ12cmである。　**遺物**　カマド手前付近の床面から土師器甕が出土した。覆土中からは土師器甕(2)が出土している。　**重複関係**　H289号住居跡と北東隅で隣接している。新旧関係は本遺構の方が新しいと推定される。　（木部）

出土遺物　　**土師器**　甕（2）、口縁部から肩部にかけて残存する小破片である。口縁部の形態は、中央辺から緩やかに外傾し、内外面ともに横ナデが施される。肩部外面は横ヘラ削りが加えられる。肩部はなで肩状を示し、強い張りはみられない。内面はナデにより平滑な仕上げが施されている。色調は明褐色である。砂粒を多量に含むが、焼きしまりは良好である。　**須恵器**　甕（1）、大甕の胴部片である。外面は細かな平行叩き目痕を残し、叩き目の重複部分には、小さな平織り状の布圧痕が付着する。内面には成形時の当て具痕を残さず、ヘラにより平滑な調整が施されている。礫や砂粒を多量に含有する。色調は外面は暗灰色、内面では灰褐色を示す。焼きしまりは良好である。　（中束）

H298号住居跡





住居跡全体
1．黒褐色土。焼土粒。
2．黒褐色土。小量のローム粒・ロームブロック。
3．黒褐色土。ロームの大ブロックを混ぜる。
4．黒褐色土。多量のローム。やや褐色強。
5．6層と同じだが、ロームブロックなし。
6．7に似るが、しまりなし。
7．1を基調とし、若干のロームブロック。
8．暗褐色土層。多量のローム粒。大ロームブロック。
9．黒色土層。
10．1を基調とし、若干のローム粒。
11．黒褐色土。灰褐色土と若干の焼土粒。

カマド
1．黒褐色土。
2．黒褐色土。褐色味やや強い。
2'．2に比べ多量のロームブロック。
3．暗灰褐色土。多量のローム粒。
4．暗灰褐色土。3より少量のローム粒。
5．暗灰褐色土。白色粘土主体。焼土粒。
6．黒褐色土。若干の白色粘土ブロック。
7．暗赤褐色土。一面に焼土・灰。
8．灰層1。純粋な灰層。
8'．灰層2。灰主体、7を混ぜる。
9．暗褐色土。多量のローム。炭化物灰。
10．黒褐色土。小量のローム粒・炭化物・焼土粒。

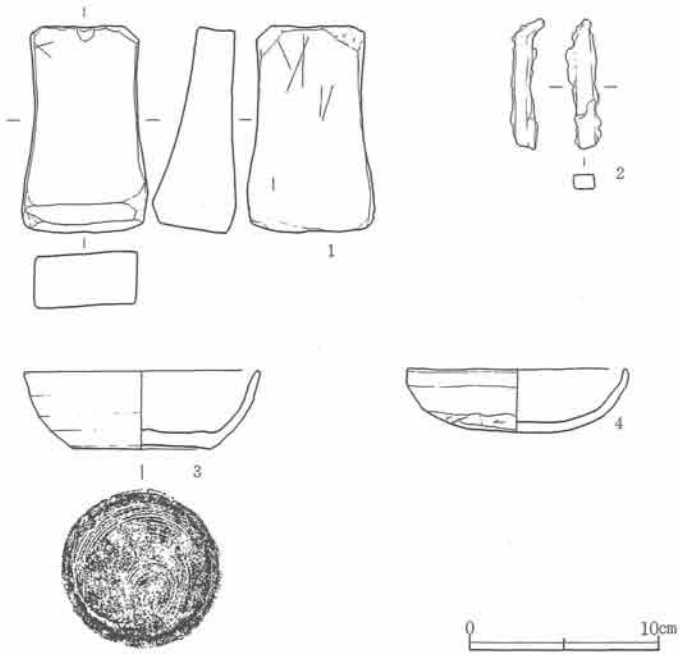
0 1 m

住居跡全景

カマド全景

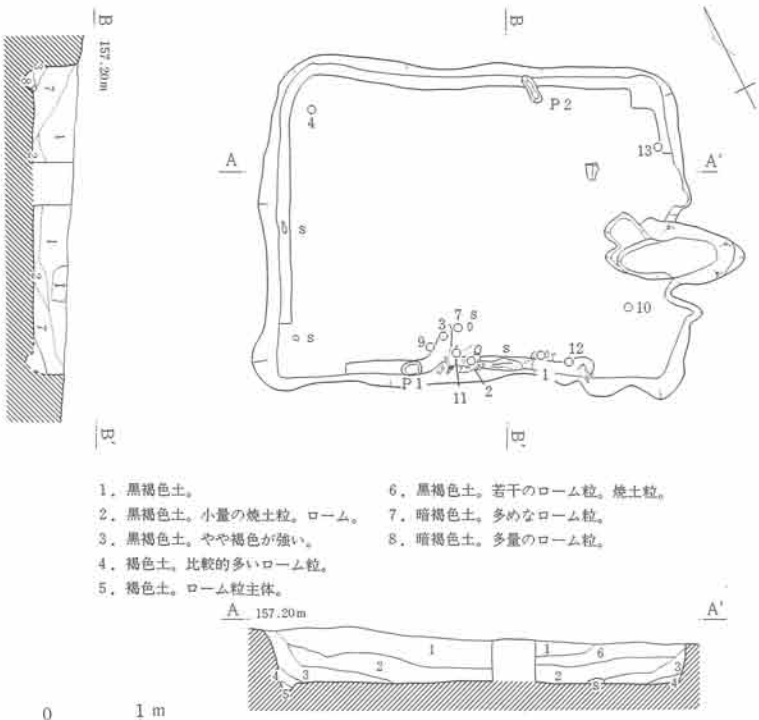
図－81　H298号住居跡

H298号住居跡（5 H－27）　**位置**　ヲ11。50号溝のすぐ北側で、他の7軒の住居跡とともに一群をなす。　**形状**　不整方形を呈すが、全体に直線的で整然としたつくりである。東壁3.2m、西壁3.4m、南壁3.1m、北壁3.3m。東壁はカマドを意識し、下端をカマド袖部に向かって住居内に寄せている。長軸方向N－25°－E、面積9.9㎡、壁高60～67cmで北壁がやや高い。南東隅を除き、幅8～12cm、深さ2～6cmの周溝がめぐる。　**ピット**　住居中央北西寄り。円形、21×22cm、深さ7cm。　**カマド**　東壁中央南寄り。掘り形の内側に袖部床面上で約30cmの厚さで白色粘土を巻く。両袖部及び冠材には石材を使用する。燃焼部は方形を呈し、厚さ18～10cmの貼り床を施す。燃焼部先端はすぼめて煙道とする。白色粘土の天井部が一部残存する。　**遺物**　南壁下から集中的に出土している。砥石（1）、須恵器坏（3）は床面ないし床面直上から、釘状の鉄製品（2）及び土師器坏（4）は床面から12～13cm上から出土している。覆土中からは鉄鎌・鉄滓が出土している。　**重複関係**　南西隅でH285号住居跡と切り合う。新旧関係は不明。　（唐澤）



図－82　H298号住居跡出土遺物

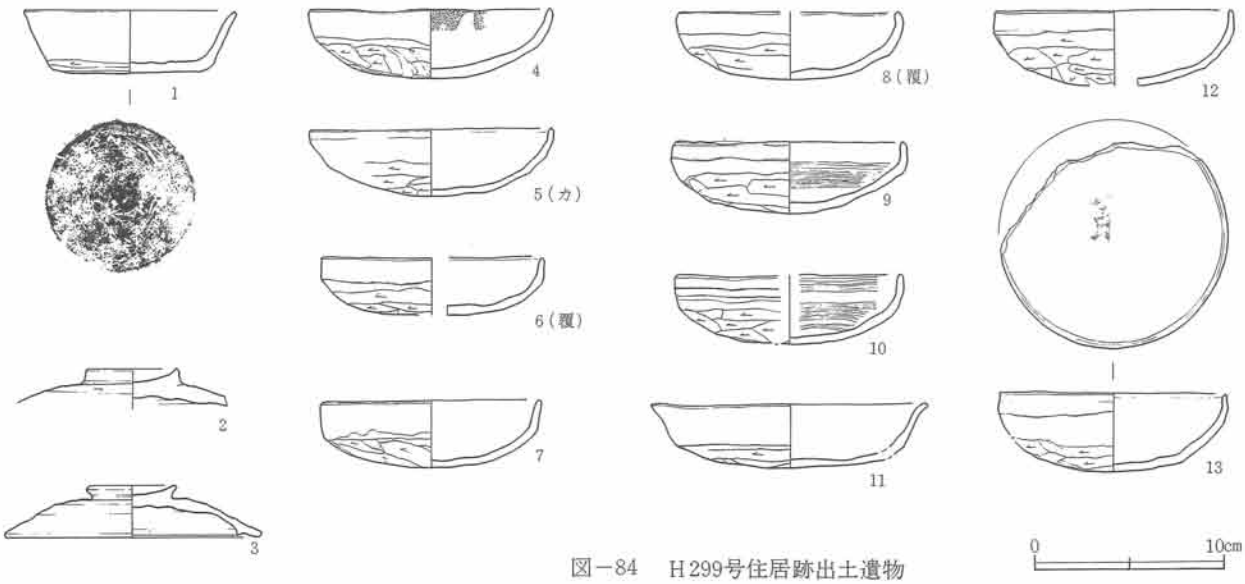
出土遺物　**土師器**　坏（4）、緩やかな丸底から立ち上がる体部は、口縁部でやや内傾する。調整は外面で、口縁部横ナデ、底部ヘラ削り、両者に挟まれた体部は指押えで指頭痕を残す。内面は、口縁部から底部中ほどまで横ナデ、底部中央は指頭痕を残す指ナデを施す。内面には煤状の炭化物を薄く付着する。　**須恵器**　坏（3）、ロクロ痕の弱いていねいなつくりで、内彎する体部を持つ。底部は回転糸切り後、周辺部に回転ヘラ削り調整を施すが、この中心が底部中央にないため周辺部より内側にヘラ調整されている所がある。体部下端は幅約5㎜の回転ヘラ削りが加えられる。ロクロの回転方向は右方向である。色調は黄色味がかった灰色で、部分的に黄色味の強い所が見受けられる。焼成はやや甘い。　**鉄製品**　釘（2）と見られるもので、先端部7.5cm程を残存する。断面は11×7㎜の長方形である。　**石製品**　扁平な形状をなす砥石（1）で小さい方の小口面を除く5面が利用されている。流紋岩製。　（唐澤）



図－83　H299号住居跡

カマド全景

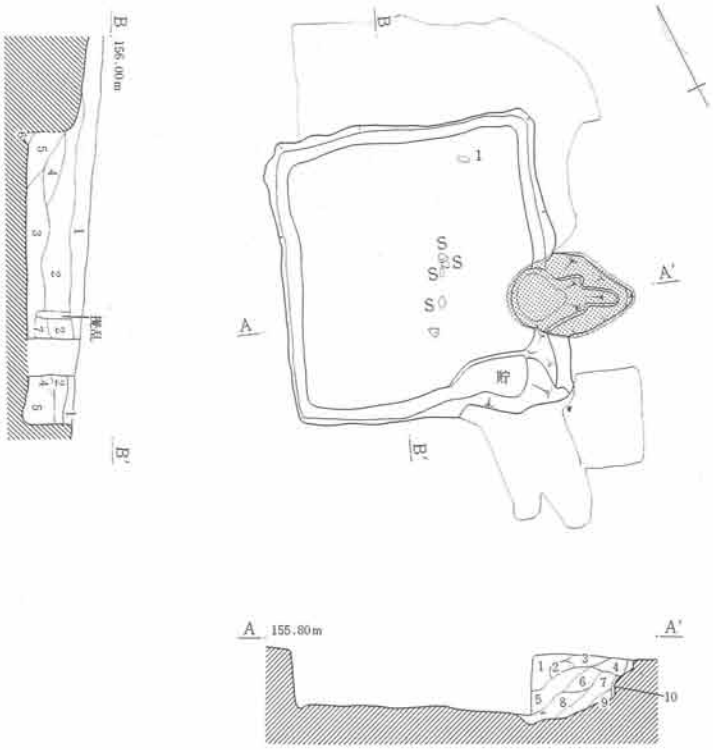
H299号住居跡（5 H－28）　**位置**　タ11。**形状**　4.4m×3.3mの東西に細長い長方形。南・北壁は内側に、東壁は外側に反る。長軸方向N－117°－E、面積13.2m²、壁高29～75cm、周溝幅11～20cm、深さ3～6cm。　**ピット**　南・北壁下に小ピット。深さ8～11cm。　**カマド**　袖部は地山を掘り残す。全長84cm、袖部内幅58cm、燃焼部長56cm。**遺物**　南壁中央の壁沿いに須恵器坏（1）、同蓋（2、3）、土師器坏（5～9、11）、8～12cmの長石、カマド冠材と見られる細長い焼石等がまとまって出土した。東壁北半の壁沿いからは墨書土器（13）が出土した。（唐澤）



図－84　H299号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　坏（4～13）、規模・形態・調整等から5種類にわけられる。第1種（12・13）、内彎する口縁部を持ち、最も深い器高を有する。13の底部内面には墨書（「茸」）。第2種（4・5）、第1種より浅い丸底。第1種同様半球状を呈する。4の口縁部内面には油煙状の黒色炭化物付着。第3種（8～10）、口縁部内外面から底部内面中程にかけてハケ状のヘラナデを施す。他では、この部分はすべて横ナデである。第4種（6・7）、口縁部と底部の境に弱い稜を持つ。第5種(11)、平底ぎみの浅い底部に外反する口縁部を持つ。口径は他に比較し一まわり大きい。第1種から第5種までの調整痕を見ると、底部外面ヘラ削り、底部内面中心に指頭痕を残す指ナデ、底部から口縁部に移る内外面に指頭痕の3者はいづれも共通する。　**須恵器**　坏（1）、広い底部に浅い体部。底部全面に回転ヘラ削り調整。色調は灰白色で、ていねいなつくり。　蓋（2・3）、3は内面に径11.4cmのかえりを持つ。笠部は中程まで回転ヘラ削り。灰色。2は3と同じつくりと見られるが、灰白色で粗い胎土。須恵器のロクロ回転の方向は右。（唐澤）

H300号住居跡



住居跡全体
1．茶褐色土。
2．茶褐色土。ローム粒が多くなる。
3．茶褐色土。焼土粒・炭化粒。褐色強。
4．茶褐色土。
5．茶褐色土。焼土ブロックを混ぜる。
6．茶褐色土。ローム粒主体。
7．茶褐色土。ロームブロック。

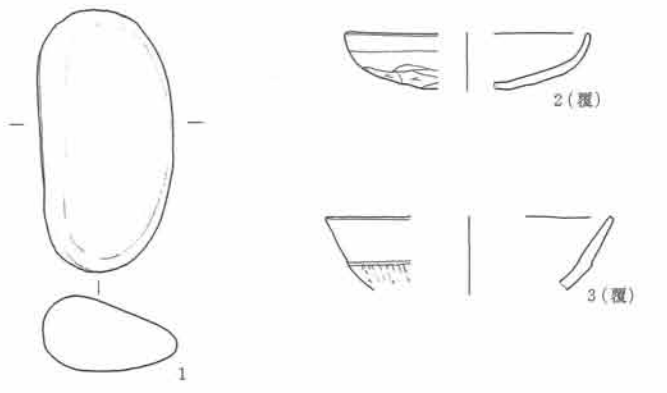
カマド
1．茶褐色土。多量のローム粒、若干の焼土粒。
2．茶褐色土。灰色がかる。焼土粒。
3．茶褐色土。焼土粒・焼土ブロック。
4．赤茶褐色土。焼土化したローム主体。
5．茶褐色土。焼土ブロック粒。赤みをおびる。
6．灰茶褐色土。灰・焼土。
7．赤褐色土。焼土化したローム主体。
8．黒茶褐色土。灰・焼土ブロック。
9．灰色土。灰主体。粘土・ロームブロック。
10．褐色土。ローム粒主体。

0 1 m

図－85　H300号住居跡

住居跡全景

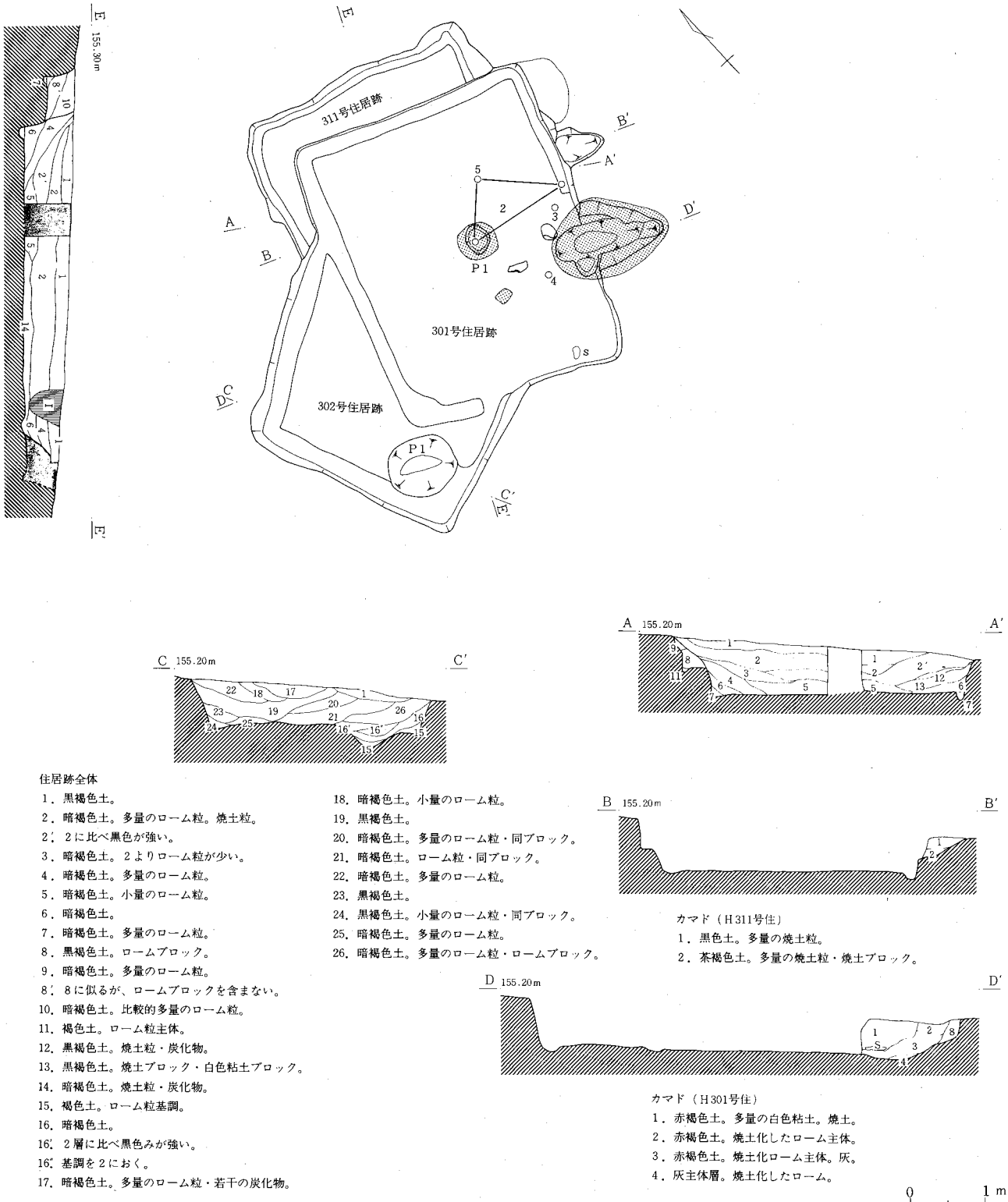
H300号住居跡（5 H－29）　**位置**　レ10。　**形状**　南北3.04m、東西2.75mの長方形を呈す。壁高は39～66cm、面積8㎡、長軸方向はN－21°－Eである。壁の状態をみると、北壁および東壁はやや曲りくねり直線になっていない。西壁のみ直線傾向が窺える。南東隅がやや不規則な形状を見せている。周溝はカマド部分を除いて全ての壁下で認められる。その深さは2～6cm、幅10～16cmを測る。　**ピット**　床面からは確認されていない。　**カマド**　東壁南寄り。全長94cm、燃焼部長42cm、袖部内幅65cmを測り、長さに比して幅広い感じを受けるカマドの構築になっている。また、壁外への掘り込みも94cmを測り、住居内に突き出るカマドの部分は比較的少なくなっているといえよう。地層断面から窺い知ることは、カマドを構築する材は主として粘土と考えられる。　**貯蔵穴**　南東隅と推定される。しかし、他の住居跡とは様子を異にして、周溝がそのまま大きく深くなったような状態である。50×50cm、深さ12cmである。　**遺物**　東壁近く、カマド脇より鉄製の鎌が出土する。しかし、レベルは床面より15cm上を測り、本遺構との直接の関係は不明である。北東隅近くからは、長円形の石が床面上より出土している。　**重複関係**　本遺構の南東隅が土師ピットらしきものと重複している。本遺構が旧。　（中澤）



図－86　H300号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　坏（2・3）、2は口縁部横ナデの幅が狭く、体部には指頭痕がみられる。底部ヘラ削りは、緩やかな波状を形成する。内面は平滑。器形は、丸味を帯びつつ外傾し、口唇部でやや内傾する。精選された胎土。色調は明茶褐色。焼成良好。3は口縁部が緩やかに外傾する。口縁部横ナデの幅は広い。底部ヘラ削りは、細かな波状を形成する。体部に弱い稜線が生じる。内面は磨耗する。礫や酸化鉄粒、砂粒を含む。色調は明褐色。軟質。　**石製品**　1は楕円形で、片側がやや扁平である。上面には斜方向に微細な削痕が走り、扁平部分周辺には敲き痕が残る。すり石や敲き石として使用された可能性が考えられる。　（中束）

H301・302・311号住居跡（図版25）



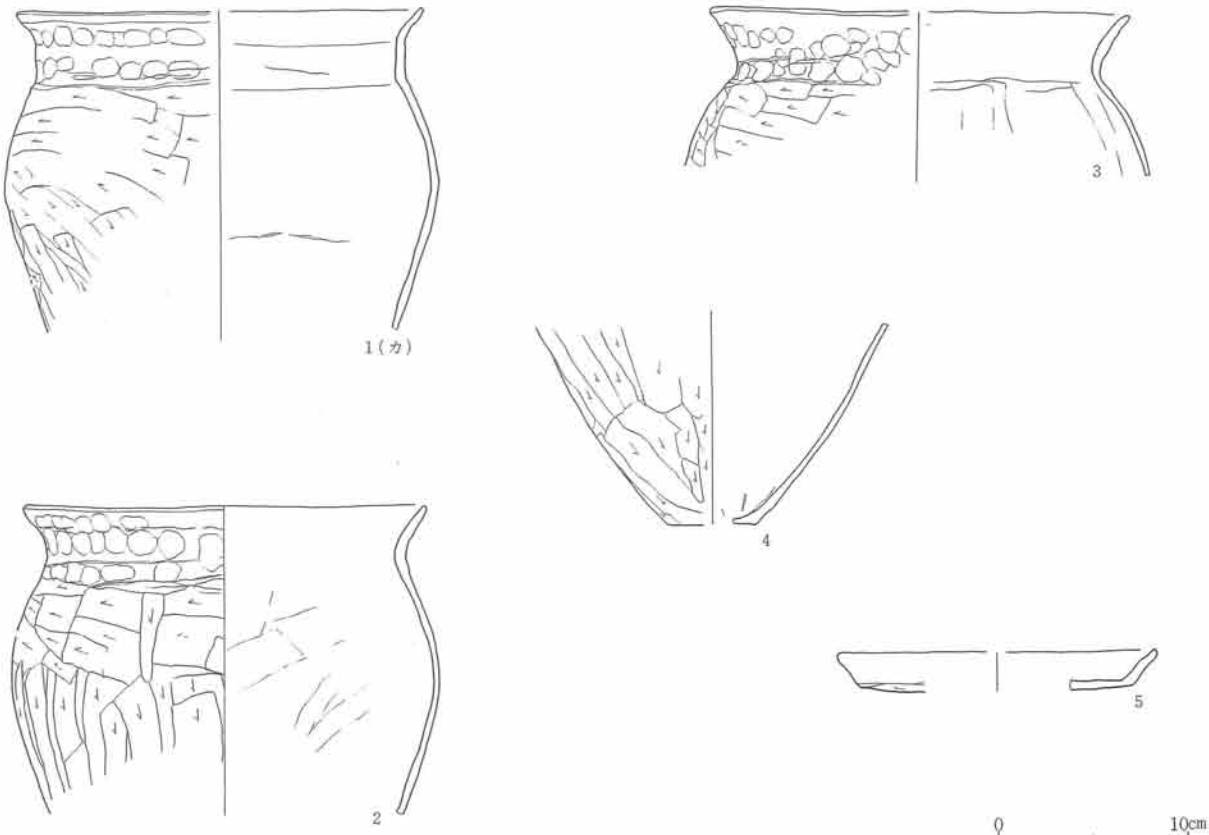
図－87　H301・302・311号住居跡

H301号住居跡（5H－30）　**位置**　レ10。　**形状**　南北4.4m、東西3.4mの長方形。南・北壁はやや内側に反る。南壁は北壁に比べ西側が約20cm短かい。長軸方向N－23°－E、面積13.4m²、壁高40～68（北西側）cm。幅10～28cm、深さ4～11cmの周溝がめぐっている。　**ピット**　住居中央。深さ10cmで、H302号住居跡のカマドの灰かき穴と見られる。　**カマド**　全長108cm、袖部内幅56cm、燃焼部長50cm前後。燃焼部先端を細くすぼめ煙道とする。煙道傾斜角25°。　**遺物**　カマド前付近を中心に土師器甕（1～4）、同盤状坏（5）、鉄滓、凝灰質砂岩と安山岩の焼け石が出土。これらは、出土レベルから見てもカマド付近から流れ込んだものと認められる。　**重複関係**　H302号、H311号住居跡と切り合う。新旧関係はH302↘H311↗H301号の順である。　（唐澤）

H302号住居跡（5H－31）　**形状**　東半分をH301号住居跡により破壊される。現状での規模は南北3.2m、東西2.9mである。しかし、H301号住居跡のP1が本住居跡のカマド残存部分とすれば、ここまでの東西長は3.6mで、カマドが短辺につく住居になる。また、面積は11.3m²と推定される。壁は北壁に彎曲を認め、東壁に向かって開く台形が想定され

る。壁高は現状で67～37cmである。東西方向の方位はN－70°－E。周溝は重複部分以外の所ではすべて認められる。幅6～30cm、深さ5～8cm。　**ピット**　南西隅にのみ1個認められた。規模は94×74cm、深さ26cmである。　**カマド**　現状では認められないので、H301号住居により破壊されたものとみられる。その点で興味深いのは、H301号住居跡のP1は焼けが認められ、本住居跡のカマドに関連するものともみられる。　**遺物**　覆土中から若干の土師器・須恵器小片が出土したのみである。　**重複関係**　H301号住居跡を参照。　（唐澤）

H311号住居跡（5H－40）　**形状**　北壁沿い全部と西壁沿いの一部を残存して、他はH301号住居に破壊される。（H302号住居跡により破壊された可能性もある。）現存長は南北1.9m、東西3.18mである。西壁の方向はN－17°－Eである。面積は5.9m²以上である。壁高は46～39cmである。　**カマド**　H301号住居跡カマドと並んで北側にその先端を残存する。東壁の延長線から想定すると壁外掘り込みは100cm以上のカマドとみられる。先端の壁への掘り込み角度は33°である。　**遺物**　本住居跡に関連する遺物は認められなかった。　**重複関連**　H301号住居跡を参照。　（唐澤）

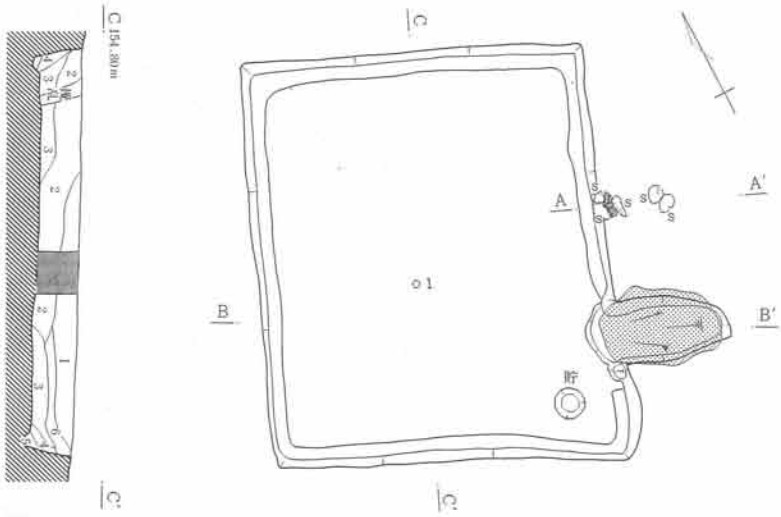


図－88　H301号住居跡出土遺物

H301号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1～4）、1はいわゆるコの字状口縁を持つ甕で、直に立ち上がる頸部を持つ。頸部は肩部との間に段差を設け、両者を明確に分けている。胴部は最大径の所でややくの字状の掘曲を感じさせる。調整は、口縁部外面に指頭痕を残す横ナデ、同内面横ナデ、胴部外面ヘラ削り、同内面ナデ。胴部内面に接合痕を残す。2・3は〝く〟の字状の口縁を持つ甕で、1同様に口縁部外面に指頭痕を残す。3は口縁部と肩部の境に段差を設けるが、2は両者がなだらかにつながる。2・3の胴部内面には斜方向（2）及び横方向（3）のヘラナデの痕跡を残す。その他の成形・調整は1とまったく同じである。4は甕の胴下半部で、胴部及び底部外面にヘラ削り、胴部内面に平滑なナデ、同下端にヘラナデの痕跡を残す。内面にはやや剝落が多い。色調は1・2淡褐色、3・4赤褐色で、いづれも胎土中には細い砂粒が多い。なお、2の胴部外面に煤、口縁部から肩部には焼土が付着する。　盤（5）、器高2cmの非常に浅い皿形の土器。内面及び口縁部に横ナデ、底部外面にはヘラ削りを施す。内面平滑。色調淡褐色、胎土に粗い砂粒・小石。　（唐澤）

H303号住居跡（図版26）

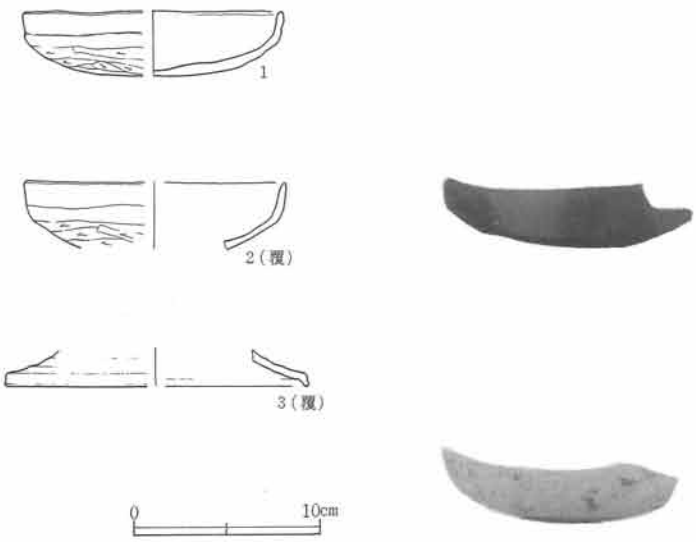


住居跡全体
1．茶褐色土。自然石が入る。
2．黒茶褐色土。
3．茶褐色土。ローム。
4．黒茶褐色土。ロームブロック。
5．茶褐色土。ローム粒主体。
6．（不　明）

カマド
1．茶褐色土。焼土粒・炭化粒。
2．白色粘土とロームの混土層。焼土粒。
3．焼土化したローム主体。焼土ブロック。
4．茶褐色土。焼土粒。
5．赤色土。焼土ブロック主体。
6．灰赤褐色土。灰主体。焼土ブロック。
7．焼土化したローム主体。灰・炭化物。

0　1 m

図－89　H303号住居跡



図－90　H303号住居跡出土遺物

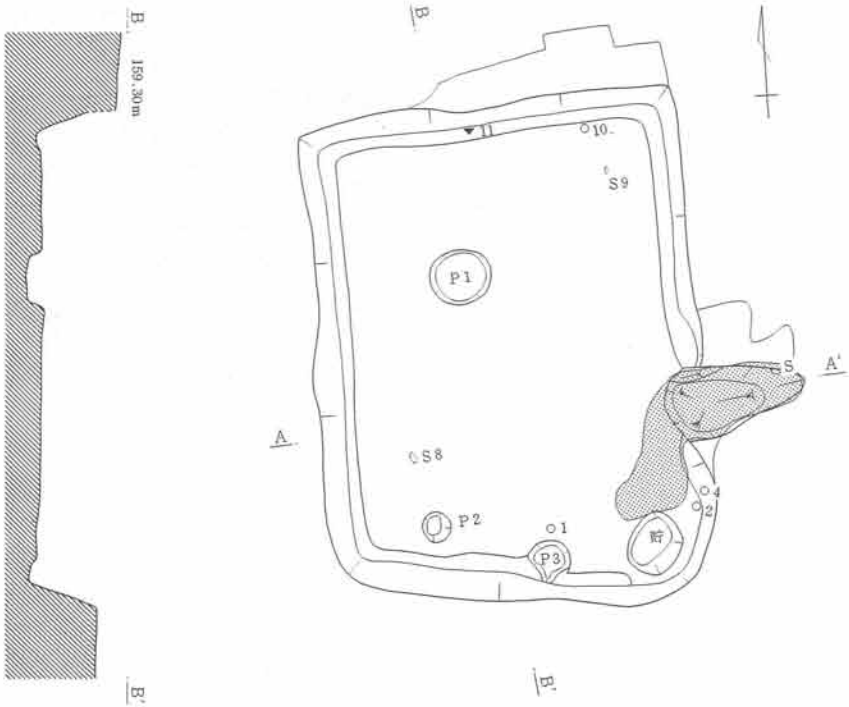
H303号住居跡出土遺物

住居跡全景

H303号住居跡（5 H－32）　**位置**　調査区域の北東、レ9～10に所在する。台地が東南方向に傾斜し、やや低くなった北東の端に当たる。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ台形で、南北4.2m、東西3.9mである。長軸方向はN－24.5°－E、面積15.3m²、壁高34～50cmである。カマド部分を除き壁下に周溝をめぐらす。幅10～16cm、深さ2～10cmである。壁はすべて直線的だが、西壁は北に向かって約40cm内に寄っている。　**カマド**　東壁南寄りにあり、カマド主軸は西壁にほぼ直交する。全長134cm、袖部内幅50cm、燃焼部長124cm、壁への掘り込み角度は、燃焼部6°、先端部で85°で、壁外掘り込みは122cmである。火床面は床面より20cm低い。掘り形の内側及び天井部に白色粘土使用。　**貯蔵穴**　南東隅。ほぼ円形で40×40cm、深さ14cm。　**遺物**　住居跡中央部床面から土師器坏（1）が出土した。なお、東壁にかかって出土した集石と本遺構との関係は不明である。　（木部）

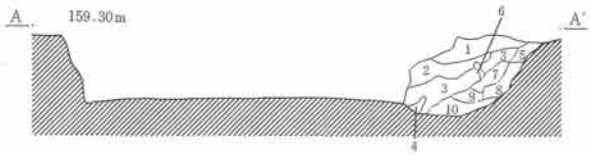
出土遺物　　**土師器**　坏（1・2）、1は口縁部横ナデ、及び底部のヘラ削り整形により僅かに稜が形成される。中間に残る指頭痕の幅は狭い。内面はナデが施され、平滑である。口縁部は緩やかに外傾する形状を示し、口唇部はやや丸味を帯びる。色調は茶褐色である。砂粒や微細な雲母片を多量に含有する。焼きしまりは良好。内外面に点々と煤が付着する。2は口縁部が緩やかに外傾する形状を示す。底部はヘラ削り、口縁部は内外面に横ナデが施される。内面はナデが加えられ、平滑である。内面には部分的に炭化状の付着物がみられる。色調は淡茶褐色。砂粒や微細な雲母片を多量に含有する。やや軟質である。　**須恵器**　蓋(3)、かえりの無い蓋の小破片である。ロクロ成形である。使用ロクロの回転方向不明。色調は淡灰色。砂粒を多量に含有するが、焼きしまりは良好である。　（中束）

H304号住居跡



住居跡全景

カマド全景



1．黒茶褐色土。焼土粒。
2．赤茶褐色土。多めな焼土粒。
3．褐色土。多めな焼土粒。炭化物。
4．黒茶褐色土。ローム粒、炭化粒、焼土粒。
5．赤茶褐色土。少量の焼土粒。
6．黒色土。根の跡か。
7．赤色土。焼土ブロック。
8．赤茶褐色土。多量の焼土粒、灰。
9．茶褐色土。灰主体。焼土粒。
10．赤茶褐色土。焼土粒、炭化粒、灰。

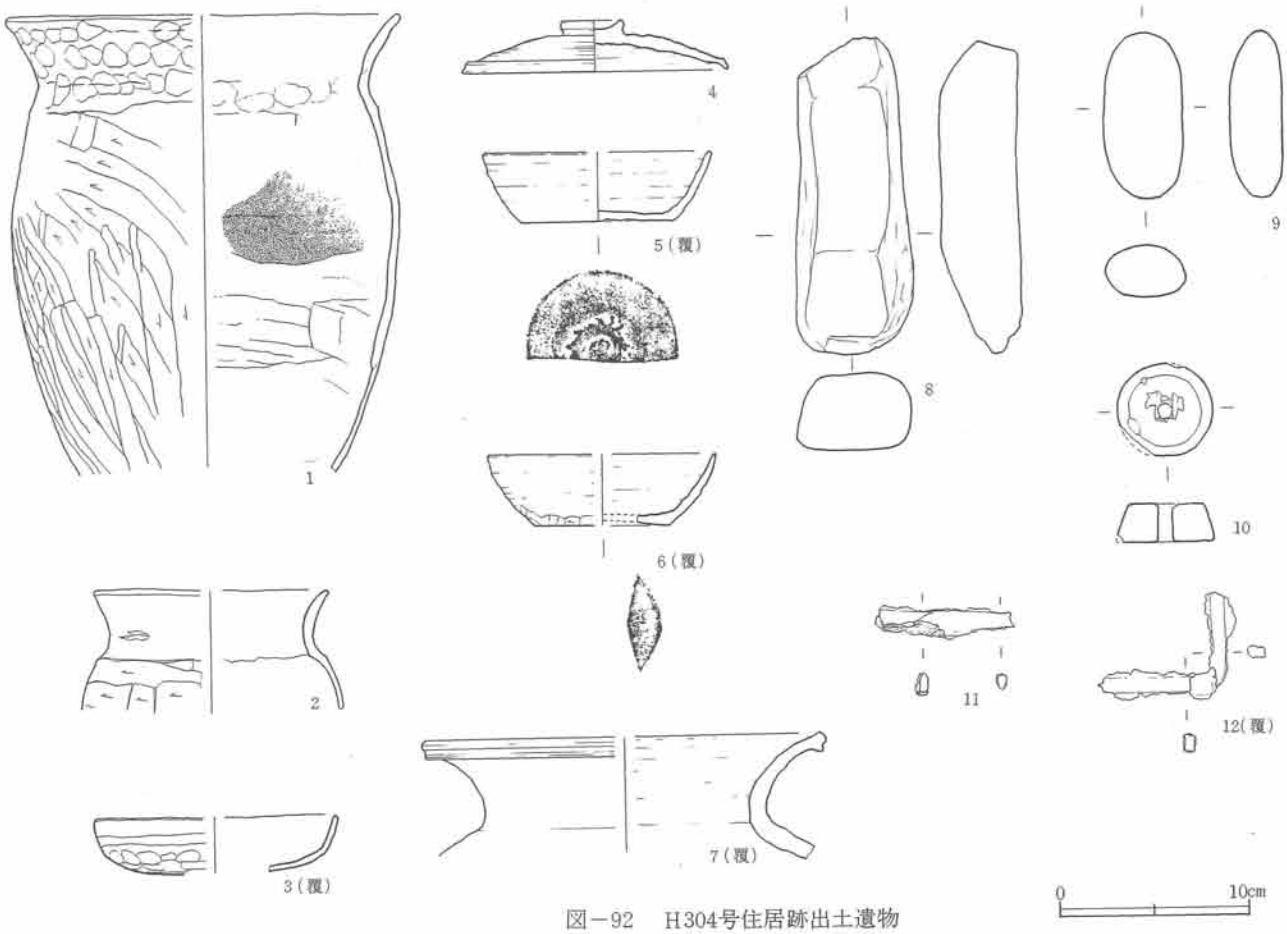
0　1 m

図－91　H304号住居跡

紡錘車出土状態

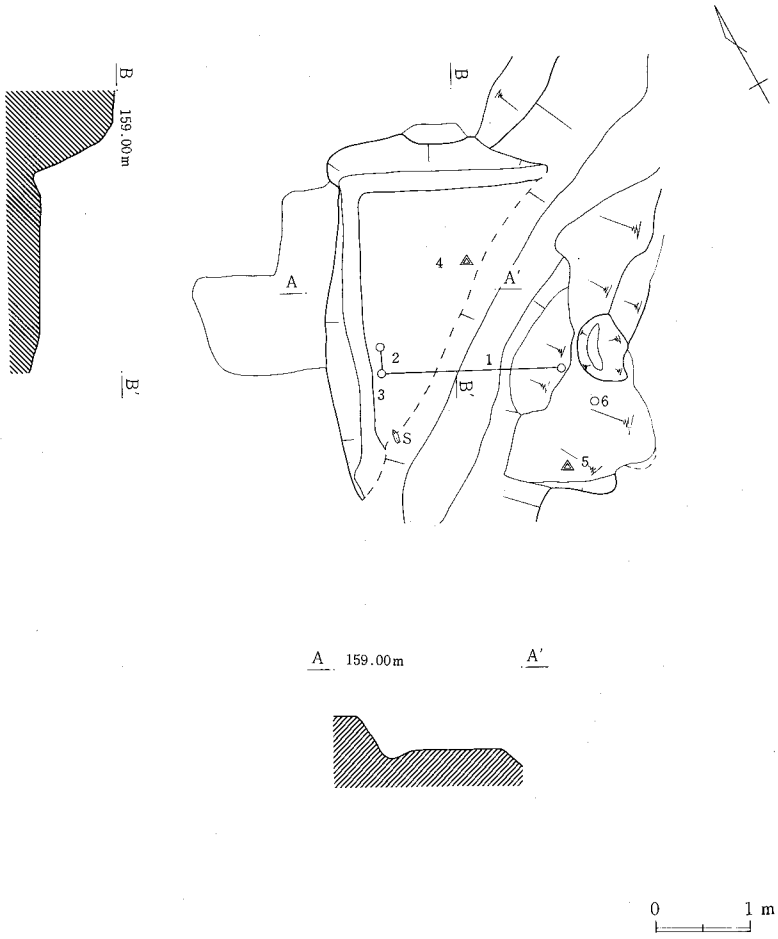
H304号住居跡（5 H－33）　**位置**　カ13～ヨ13。　**形状**　南北5.06m、東西3.9mを測るが、東壁は西壁より60cmほど長くなり、住居跡は台形を呈す。壁はみな直線で、隅は北東および北西が直角を示し、南西隅は鈍角、南東隅は隅丸が認められる。深さ5～10cm、幅12～26cmである。　**ピット**　3個確認される。P1は床面中央部より、やや北西に位置する。P2、P3はともに南壁に近く、もしくは接して位置する。深さは16～21cm、その性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄り。全長1.42m、燃焼部長95cm、袖部内幅58cmである。カマドを構築する材料は、その地層断面から考えるに主として白色粘土と思われる。　**貯蔵穴**　南東隅。円形を呈し、66×52cmである。　**遺物**　北壁東寄りの周溝部より紡錘車（10）、北壁中央部より刀子（11）が出土している。刀子の場合、床面より16cm上に位置しており出土位置も併せ考えると、本遺構に直接関係あるものとして捉えるには若干の疑問が残る。カマド南側で貯蔵穴近くから須恵器蓋（4）が出土している。　**重複関係**　52号溝と重複する。切り合い関係は不明だが、覆土より本遺構が新とみられる。（中澤）

出土遺物　　**土師器**　甕（1）、口縁部の形態はくの字形に外反する。外面は肩部から胴中央部辺まで斜ヘラ削り、胴下半部には縦ヘラ削りが施される。内面胴中央やや下方寄りに粘土接合痕を残し、周辺部にはヘラ調整が加えられる。内面の一部及び外面胴下半部に煤状の付着物が認められる。色調は明茶褐色。　小型甕（2）、口縁部はくの字に近い形状を示し、外反する。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横ヘラ削り整形される。内面は横ヘラナデにより平滑である。色調は暗褐色。軟質である。　坏（3）、全体的に丸味を帯びた形状を示す。底部はヘラ削り、口縁部は内外面横ナデ、中間に指頭痕を残す。色調は明茶褐色。　**須恵器**　蓋（4）、右回転ロクロ使用。切り離し技法不明。天井部中央に凹状の小さなつまみをもつ。周辺部は回転ヘラ削りによる調整が加えられる。砂粒を多量に含む。　坏（5・6）、5は左回転ロクロ使用。底部切り離しは回転ヘラ切り。6は底部切り離し後、周辺部ヘラ調整。ともに黒色鉱物を多量に含む。甕（7）、内面はロクロによる凹凸を残す。砂粒を含む。色調は灰褐色。　**石製品**　8は用途不明。9は端部に敲き痕あり。10は紡錘車、流紋岩製。　**鉄製品**　11は木片付着の刀子片。12はL字形金具。（中束）



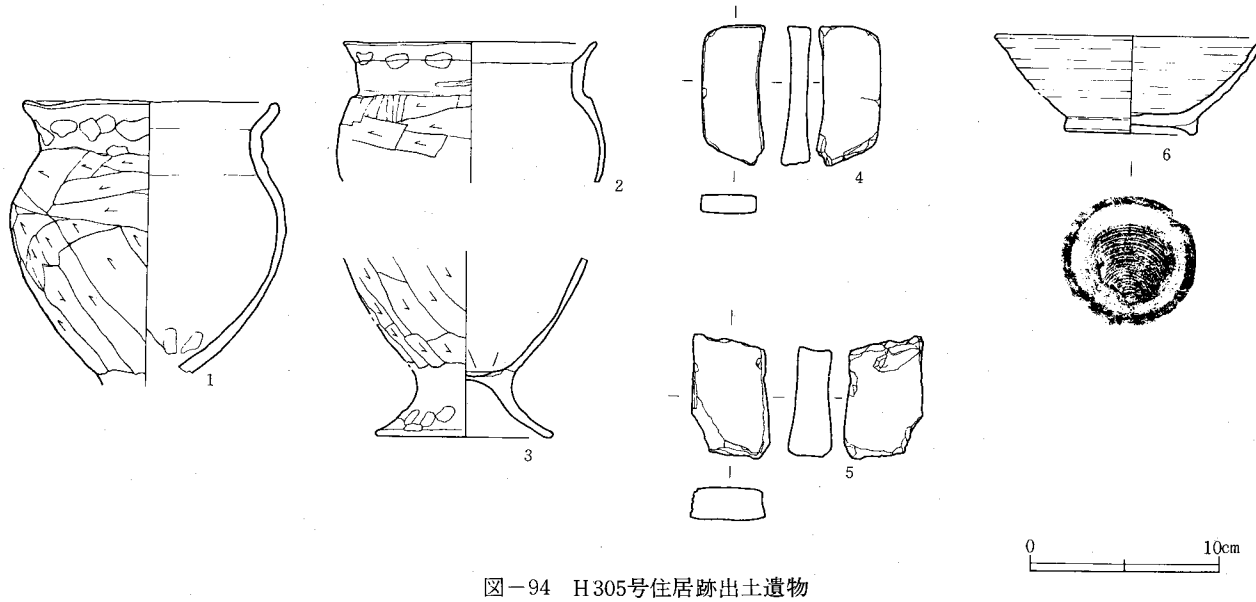
図－92　H304号住居跡出土遺物

H304号住居跡出土遺物



H305号住居跡（5 H－34）　**位置**　タ13。**形状**　51号溝の構築のため、本遺構の半分以上が破壊され、加うるに生活道路下に一部（東壁部）あるため十分な発掘ができていない。従って、規模等については不明である。現状で、壁高68～82cm、北西隅は直角を示している。周溝は51号溝に破壊されていない部分については確認することができる。幅12～20cmである。西壁の走行はN－25.5°－Eを測る。**ピット**　床面上からは確認されていない。**カマド**　おそらく東壁に構築されてはいるのであろうが、形状の項で記したように道路下になるため、確認調査はできていない。**貯蔵穴**　カマドと同様。**遺物**　51号溝を挟んで砥石が2個出土している。砥石（4）は51号溝の西側、北壁近くの床面より出土。そのレベルは床面より6cm上である。砥石（5）は51号溝の東側、南壁（？）近くより出土している。レベルは床面より2cm上を測る。また、西壁近くと51号溝の東側の床面より土師器脚付甕が3個体（1～3）出土している。**重複関係**　51号溝と重複し、本遺構が旧。**テフラ**　B軽石層が地層最上部に床面から約55cmの所で確認されているが、このB軽石層は本遺構を直接覆うものではなく、51号溝を覆うものとして捉えたい。（中澤）

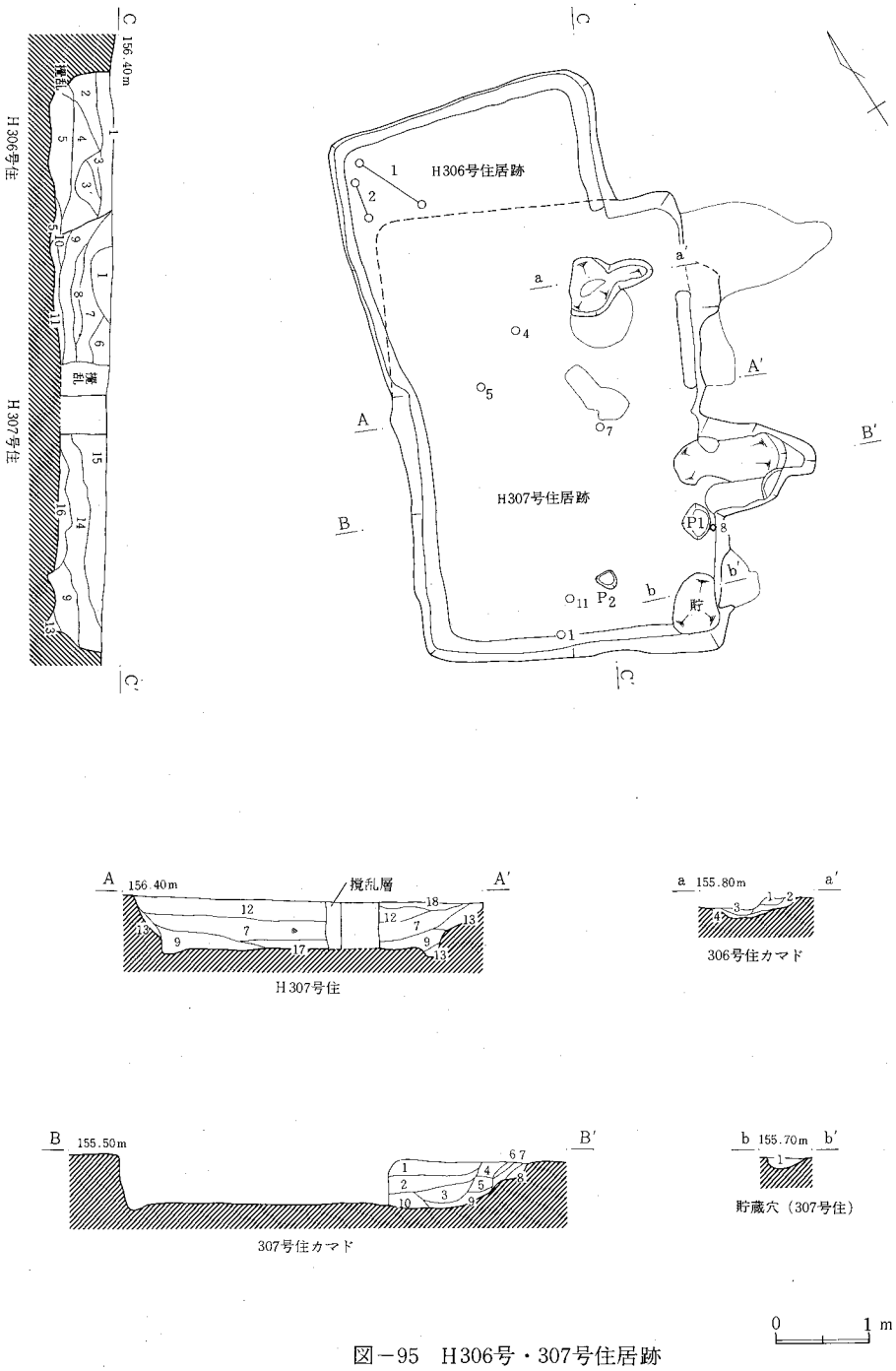
図－93　H305号住居跡



図－94　H305号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　台付甕（1～3）、1は口縁部が歪み、手作りの様相を示す。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横ヘラ削り、胴部は斜ヘラ削り整形される。内面は横ヘラナデにより平滑である。脚部を欠損する。胴下端部に横ナデ痕を残す。色調は明茶褐色。砂粒を含むが、焼きしまり良好。2は肩部が張り、口縁部内面には明確な稜線を形成する。口縁部は指頭痕を残しつつ、内外面横ナデ、肩部外面は波状を形成する横ヘラ削りが施される。内面はナデにより平滑である。ハの字形に開く脚部3は端部外面に指頭痕を残すが、横ナデされる。2と3は同一個体か。外面に煤が付着する。　**須恵器**　埦（6）、体部は内外面ともにロクロによる凹凸を残し、底部切り離しは回転糸切りによる。さらにその後、低い高台を貼り付け、周辺部にはナデが施される。礫や微細な雲母片を多量に含む。口唇部を除く全面にいぶしが掛かる。　**石製品**　磨耗の著しい砥石4・5が出土している。いづれも流紋岩製である。（中束）

H306・307号住居跡



住居跡全体
1．黒褐色土。大ロームブロック。
2．黒褐色土。若干のローム粒。
3．黒褐色土。
3′．3より黒色みが弱い。
4．暗褐色土。小量のローム粒。
5．暗褐色土。小量のローム粒・同ブロック。
6．黒褐色土。ロームブロック。
7．黒褐色土。
8．黒褐色土。若干のローム粒。
9．黒褐色土。やや黒色み強。焼土粒。
10．黒褐色土。小量のローム粒。
11．暗褐色土。多量のローム粒。焼土ブロック。
12．黒褐色土。焼土ブロック。
13．暗褐色土。多量のローム粒。
14．黒褐色土。
15．黒褐色土。焼土粒・炭化物。
16．暗褐色土。比較的多量の焼土粒。
17．黒褐色土。ローム粒・焼土粒。
18．黒褐色土。焼土粒。

H306号住カマド
1．暗赤褐色土。多量のローム粒・同ブロック。
2．暗褐色土。ローム粒・焼土粒・灰。
3．灰褐色土。多量の灰。焼土粒。
4．暗褐色土。ローム粒・同ブロック主体。（貼床）

H307号住カマド
1．黒褐色土。耕作土主体。
2．暗赤褐色土。ローム粒・焼土粒。
3．黒褐色土。黒色み強。焼土粒。
4．暗褐色土。多量のローム粒。焼土粒。
5．暗褐色土。ローム粒・焼土粒。
5′．5に比べ、若干ローム粒が多い。
6．暗褐色土。ローム主体。焼土粒。
7．暗赤色土。焼土主体。（煙道壁か）
8．黒褐色土。
9．黒褐色土。多量の焼土。灰。
10．暗褐色土。比較的多量のローム粒・焼土粒。

貯蔵穴（H307号住）
1．黒褐色土。ローム粒・ロームブロック。

図－95　H306号・307号住居跡

H306号住居跡（5H－35）　**位置**　ヨ9～10。すぐ東側を52号溝が南北に走る。　**形状**　南北2.9m（推定）、東西2.8mの隅丸方形と見られる。長軸方向N－20°－E、面積8㎡前後（推定）、壁高68～41cmで北西側が高い。重複部分を除く壁下には幅8～18cm、深さ2～9cmの周溝がめぐる。　**カマド**　東壁中央南寄り。上体はH307号住居跡により破壊されていたが、床面下に若干の掘り込みと灰、焼土粒の堆積が認められた。円形の燃焼部には2～6cmの厚さに貼床が認められた。燃焼部先端は細くすぼめて煙道としている。全長90cm（現存長。以下同じ）、燃焼部長50cm、煙道部長50cm。　**遺物**　北西隅付近から土師器坏（1・2）が出土している。2は墨書土器である。　**重複関係**　住居跡南半をH307号住居跡と切り合っている。本住居跡が旧い。　（層澤）

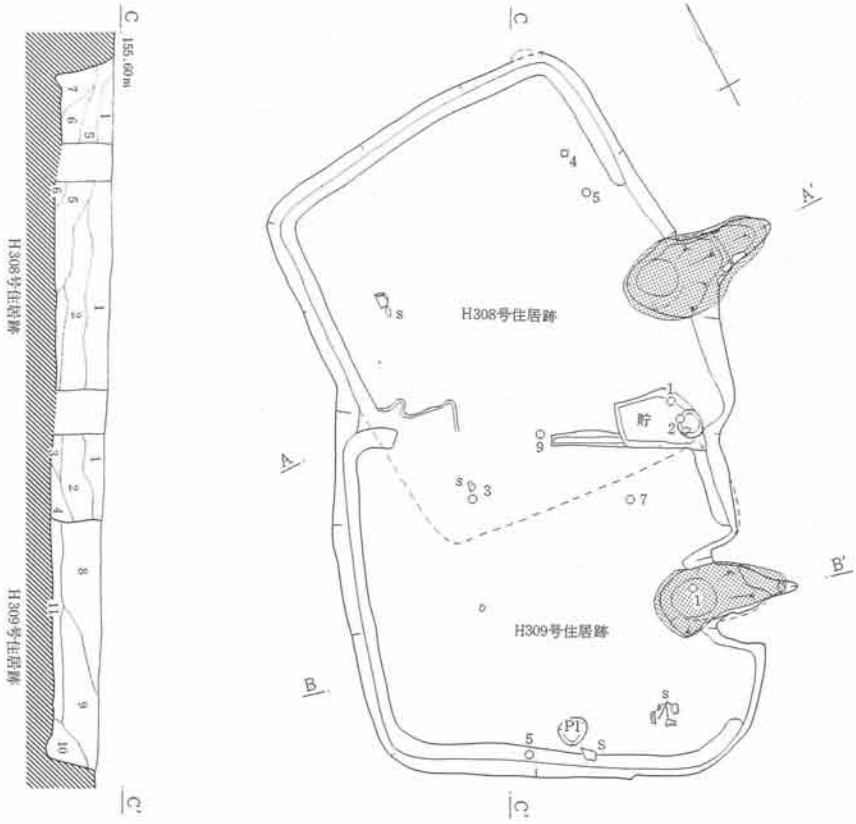
H307号住居跡（5H－36）　**形状**　南北4.6m、東西3.1mの長方形。非常に細長い形態をとる。長軸方向N－27°－E、面積14.8㎡、壁高67～36cmで北西側が高い。周溝は重複部分とカマド付近を除き認められる。幅10～20cm、深さ1～10cm。　**ピット**　カマド右袖部（P1）と南壁下やや北寄り（P2）に所在する。深さはいずれも12cm。　**カマド**　東壁中央南寄り。壁外につくる。左袖部には凝灰質砂岩を置く。燃焼部は全体に赤く焼け込んでいる。煙道部は燃焼部先端を細くすぼめて一段高くする。焚口部には深さ約20cmの灰かき穴と見られるピットがある。全長120cm、袖部内幅63cm（現状）、燃焼部長80cm。　**遺物**　土師器甕（11）、同坏（8～10）、須恵器坏（3～6）、同高台埦（7）が出土している。3・5は床面密着、他は床面上18cm以上または覆土中である。なおH306～307号住居跡の覆土中から鉄滓・羽口・砥石出土。　**重複関係**　北側でH306号住居跡を、カマド部分で52号溝を切る。　（唐澤）

図－96　H306・307号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕(11)、緩かに外反する口縁部を持つ甕で、胴部に最大径がくる。口縁部は下半がやや立ち上がりぎみになっているが、コの字状口縁甕の頸部ほど明確ではない。調整は、口縁部外面は上半分に指頭痕、下部にヘラ削り痕を残す横ナデ、肩部に横または斜方向のヘラ削り、口縁部内面横ナデ、肩部内面ナデ。外面の口縁部と肩部の間に段差はなく、なだらかに続く。口縁部外面の立ち上がり部分中ほどに接合痕が認められる。色調は赤褐色で、精選された粘土に細い砂粒を混ぜる。焼成良好。口縁部外面に焼土が付着する。　坏(1・2・8～10)、3種類に分けられる。第1種（1・2)、やや扁平な丸底を持つ坏で、口径13.4～13.6cm、器高3.8cm。概して口縁部から底部になだらかに続く。口縁部内外面から底部内面中ほどまでは横ナデ、底部外面ヘラ削り、同内面中心部は指頭痕を残す指ナデ、口縁部と底部の境付近は内面に顕著な指頭痕、外面には指頭による押えの痕跡が見られる。口縁部は内外に指を当てて折り曲げたものと見られる。色調は淡褐色で、胎土に砂粒を含む。第2種（9)、第1種に似た形態を取るが、底部は平底の傾向が強く、規模も口径12cm、深さ3.6cmとやや小さい。成形及び調整は第1種とまったく同じである。第3種(8・10)、底部外端にヘラ削りの結果生じた弱い稜を持つ。口縁部外面に強い横ナデを施しているため、体部全体は緩かにS字状の曲線を描く。また、底部内面は指頭痕が顕著に残り、凹凸が激しい。前2者に比較して概してつくりは雑である。口径12～13.6cm（復元)、器高3.5cm前後（推定）で、第1種と第2種の中間の口径を持つ。成形・調整は、基本的には前2者と同じである。第1種は306号住居跡、第2種と第3種は307号住居跡から出土しており、時期差を示すものと見られる。　**須恵器**　坏(3～6)、3は底部に薄く延ばした粘土板が貼りつけられ、二重底になっている。これは最初の底部器肉が薄すぎたか、中央に穴があいたため、粘土板で補強したものと見られる。当初の底部の周縁部には回転ヘラ削り整形が施されるが、中央部は不明である。補強後の底部は指をナデつけた程度で、雑な調整である。底部内面は指頭痕の凹凸が激しい。底部補強の際の痕跡と見られる。体部外面は布状のものを当てロクロナデを施す。色調は白色の強い灰白色。4は丸い腰を持ち、体部の立ち上がりが大きい。底部の切り離しは回転糸切り未調整。内面底部は平坦で広い。色調は灰白色、精選された胎土に多量の黒色粒子を含む。つくりはていねいだが、やや焼成が甘い。5は4とまったく同じ胎土でつくられている。4に比べ径の大きい底部に、直線的な体部を持つ。底部の切り離しは回転ヘラ切り未調整。色調は灰白色で、堅緻な焼成、つくりていねいである。体部内外面に自然釉がかかる。6は口縁部を欠失する。体部外面及び底部内面に顕著なロクロ痕を残す。底部切り離しは回転糸切り未調整。色調は白色の強い灰白色、精選された胎土に砂粒を混ぜる。焼成はやや甘い。坏3～6のロクロ回転の方向はすべて右である。3・5・6の底部外面には、乾燥前についたワラまたは細竹様の細長い筒状の痕跡が認められる。　埦(7)、付高台。口径15.8cmの大形の埦で、やや深く、直線的な体部を持つ。口唇部は若干肥厚する。高台は高く、ていねいに接着。回転糸切り未調整。色調は灰白色で、やや甘い焼成。

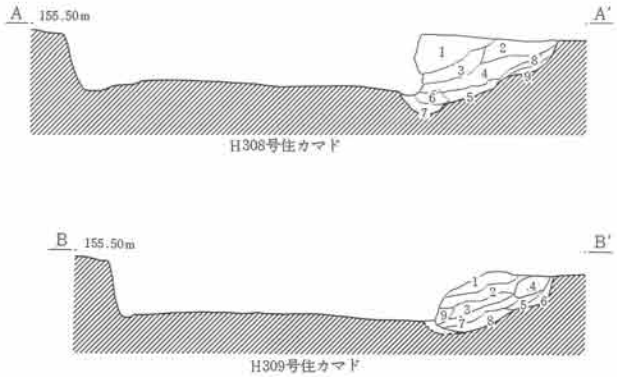
（唐澤）

H308・309号住居跡（図版26）



H308・309住居跡重複状況

H308号住居跡カマド全景



H308・309号住居跡全体
1．茶褐色土。焼土粒。
2．茶褐色土。ローム粒。
3．茶褐色土。焼土粒・炭化粒。
4．茶褐色土。
5．褐色土。ローム主体。
6．黒褐色土。ローム粒・焼土粒・炭化粒。
7．茶褐色土。焼土粒・炭化粒。
9．茶褐色土。多量のローム粒。
10．黒褐色土。焼土粒・炭化粒。
11．茶褐色土。

308号住カマド
1．黒褐色土。ローム粒・焼土粒。
2．暗褐色土。多量のローム粒。
3．黒褐色土。ローム粒・焼土粒。
4．暗褐色土。多量の焼土。炭化物・ローム粒。
5．暗赤褐色土。多量の焼土粒。灰。
6．黒褐色土。焼土粒。
7．暗褐色土。ローム粒・焼土粒。
8．暗褐色土。多量のローム粒。
9．褐色土。ローム粒主体。焼土粒。

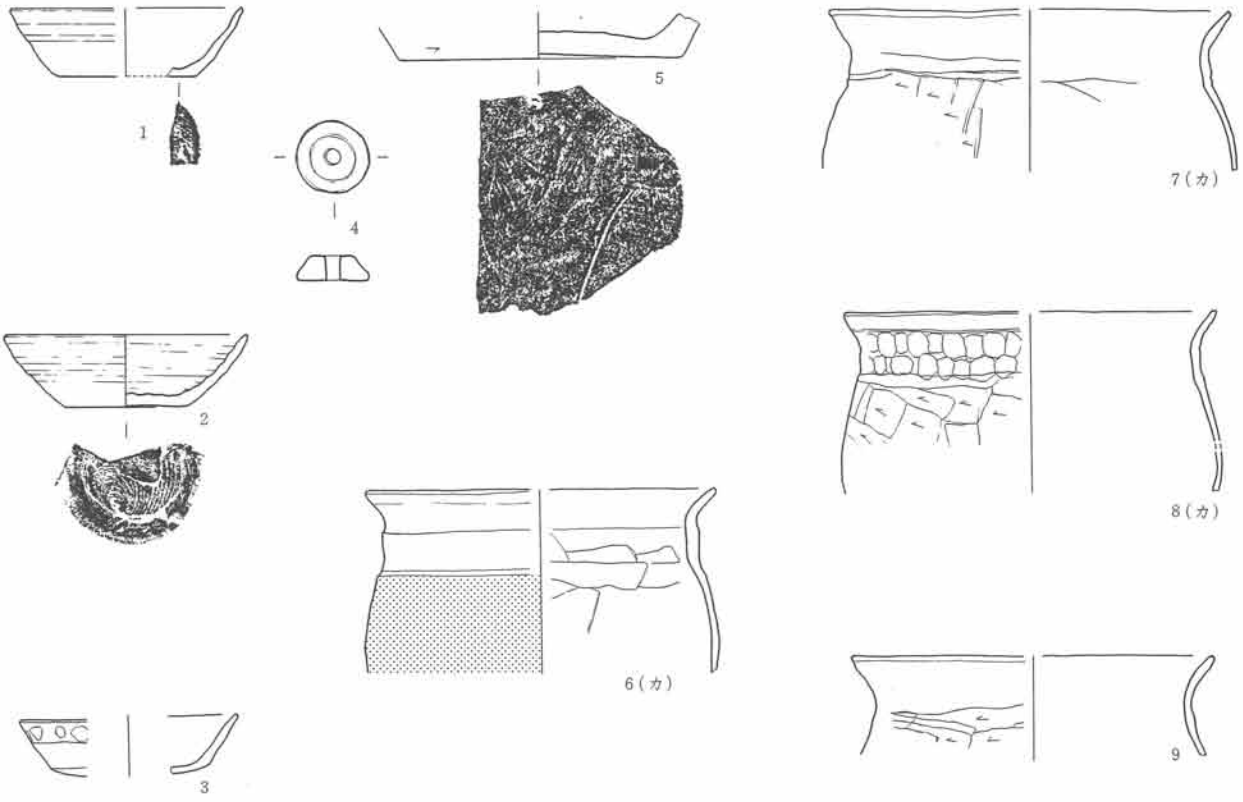
309号住カマド
1．茶褐色土。焼土ブロック。
2．赤褐色土。焼土化ローム主体。多量の粘土。
3．白色粘土主体。焼土化ローム。
4．焼土化したロームブロック。
5．ローム粒主体。焼土ブロック・粘土。
6．茶褐色土。ローム主体。
7．焼土ブロック主体。灰・ローム。
8．灰褐色土。灰主体。ローム・焼土。
9．（不明）

0　1 m

図－97　H308・309号住居跡

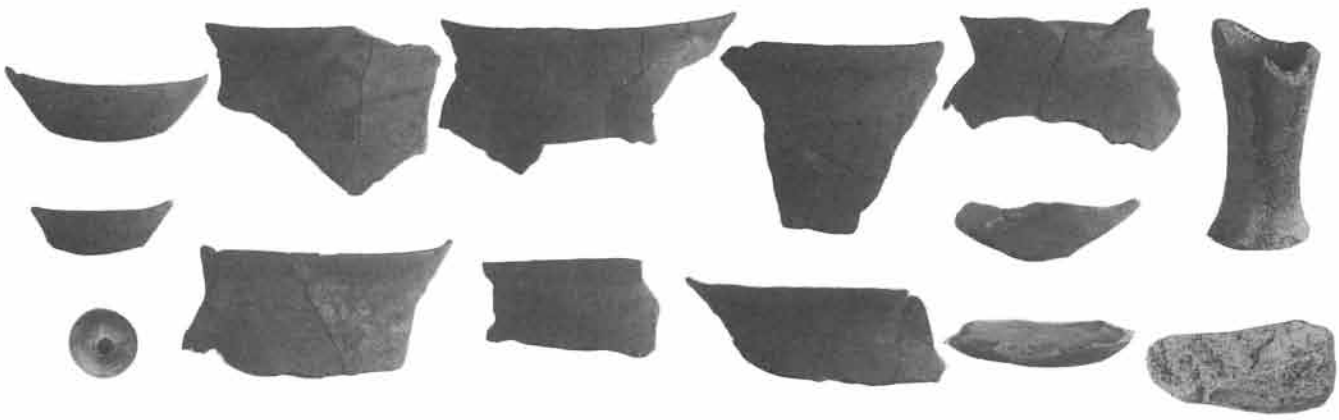
H308号住居跡（5 H－37）　**位置** タ9～10。　**形状**　南北4.4m（推定）、東西3.7mの隅丸長方形。北壁及び東壁は対峙する壁に比べ約30cm長い。長軸方向N－1°－W、面積14.6m²、壁高50～66cm（北西側）。周溝がめぐる。　**カマド**　掘り形内側に粘土を巻く。凝灰質砂岩と安山岩を混用。全長123cm、袖部内幅86cm、燃焼部長約50cm。　**貯蔵穴**　南東隅。円形、32×24cm、深さ38cm。　**遺物**　カマド内から土師器甕（6～8）、貯蔵穴付近貼床中から須恵器坏（1・2）が、東壁沿い床面で紡錘車（4）が出土した。　**重複関係**　H309号住居跡を切る。　（唐澤）

H309号住居跡（5 H－38）　**形状** 4.0m×3.6m（推定）で、東西に長い隅丸台形。東壁は西壁に比べ約60cm長い。長軸方向N－20°－E、面積10.8m²、壁高46～68cm（北西側）で、周溝をめぐらす。　**床面**　南東隅で貼床の一部を確認。厚さ40cm。　**ピット**　南壁下中央、深さ13cm。出入口に関連するものと見られる。　**カマド**　掘り形内側に白色粘土を巻く。全長111cm、袖部内幅70cm、燃焼部長50cm前後と見られる。　**遺物**　カマド内から土師器甕（1・2）、南壁下床面で須恵器坏（5）、覆土中からは砥石（8）等が出土した。7も実質は覆土中である。　（唐澤）

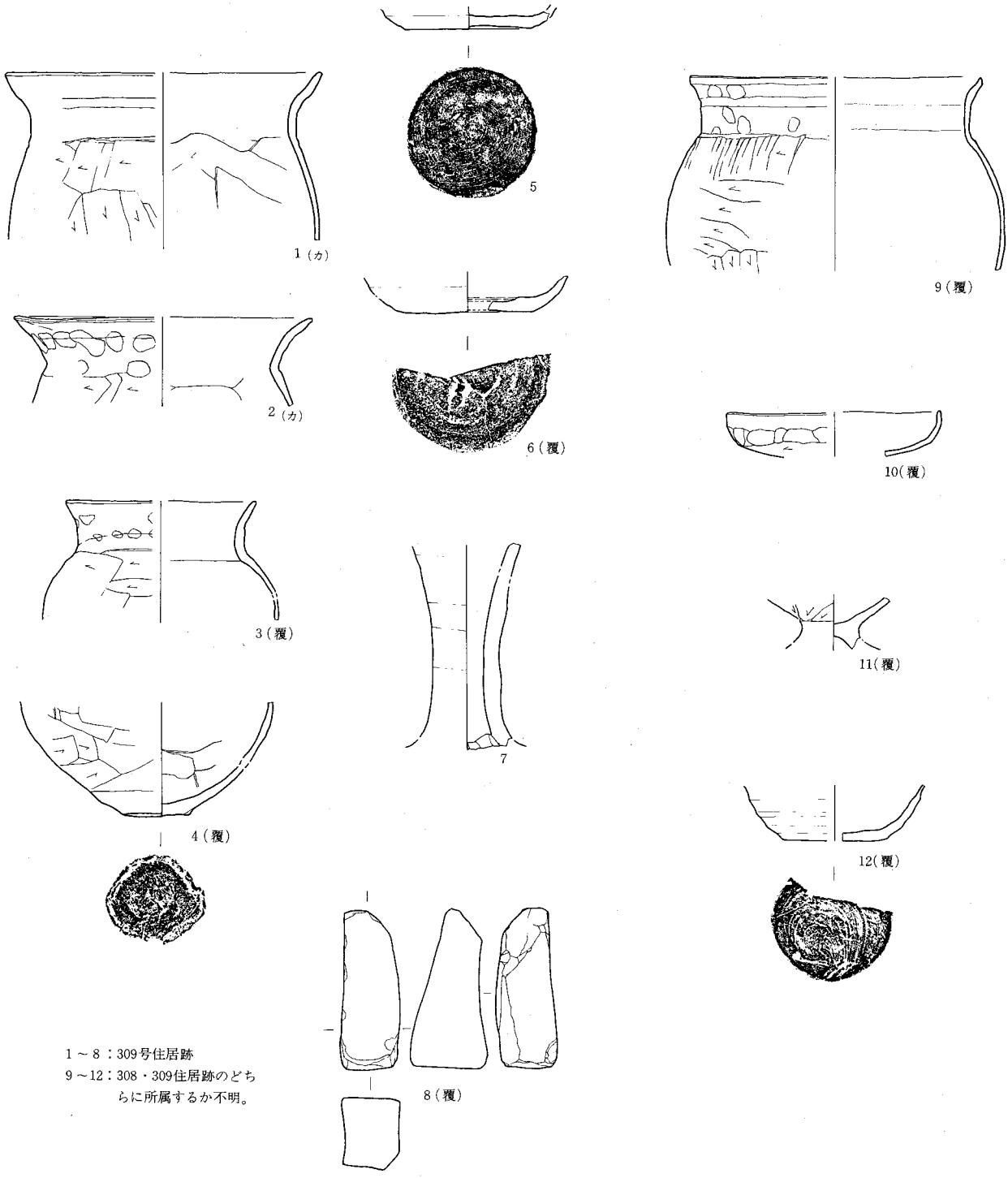


図－98　H308号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（6～9）、口縁部の形態及び調整手法から3種類に分けられる。第1種（7・9）、ゆるやかに外反する口縁を持ち、肩部はヘラ削りで口縁部より一段低くする。第2種（8）、コの字状口縁に近い外反する口縁部を持つが、頸部は明確でない。肩部から口縁部はなだらかに続く。第3種（6）、典型的なコの字状口縁甕で、頸部が明確である。以上3者の調整手法は基本的には共通している。口縁部外面に指頭痕を残す横ナデ、同内面横ナデ、胴部外面横ヘラ削り、同内面及び肩部内面にはヘラナデ痕を残す。　坏（3）、底部に丸みを残す坏で、口縁部内外面及び内面横ナデ、底部外面ヘラ削り、体部下半指圧による調整、内面屈曲部に顕著な指頭痕を残す。　**須恵器**　坏（1・2）、1はつくりのていねいな土器で、色調は青灰色である。底部切り離しは回転糸切り未調整。2は内外面に顕著なロクロ痕を残すが、外面下半部のみ消す。底部には回転糸切り未調整痕を残す。黒灰色。　甕（5）、内面にロクロナデ、外面周辺部回転ヘラ削り調整。青灰色。　**石製品**　紡錘車（4）、29.5g。蛇紋岩製。　（唐澤）



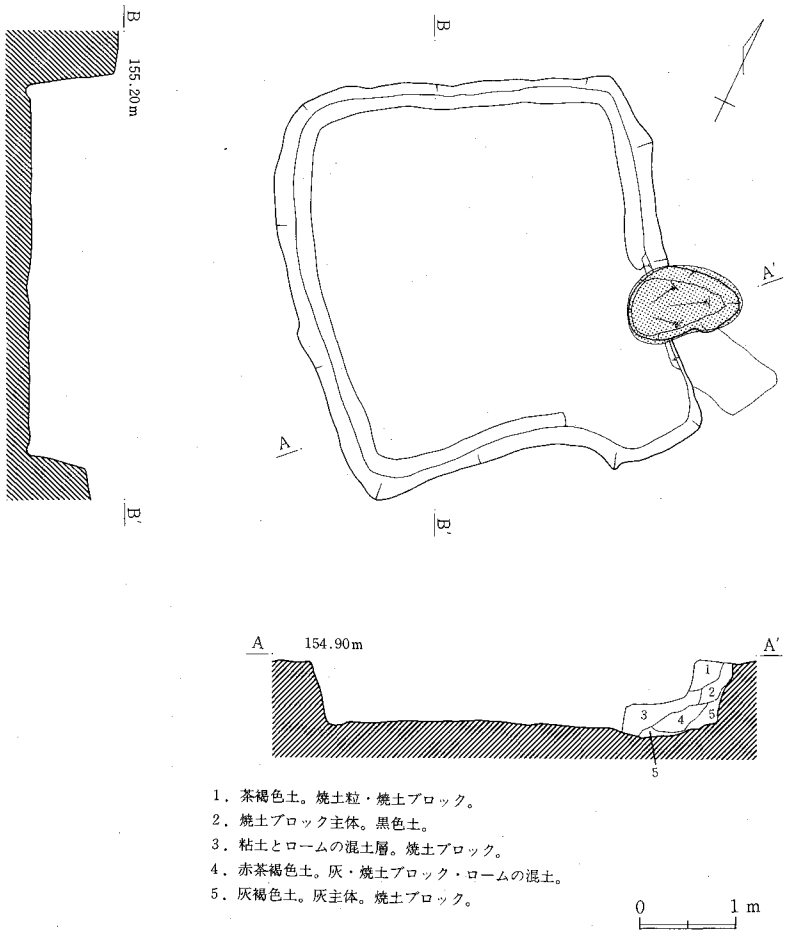
H308・309号住居跡出土遺物



図－99 H308・309号住居跡出土遺物

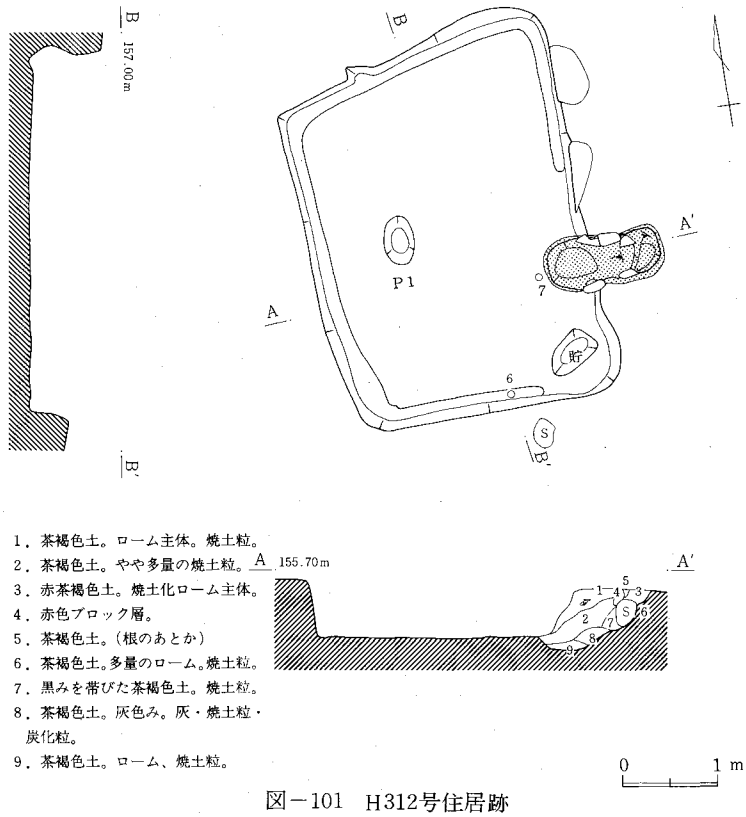
出土遺物　**土師器**　甕（1～4・9・11）、1・2は〝く〟の字状に外反する口縁部を持つ甕で、口径と胴部最大径を同じにとる。横ヘラ削りや頸部立ち上がり傾向が認められる。9はいわゆるコの字状口縁甕で、技法等は他住居跡出土のものと共通する。3・4は小型甕で、4は台部を欠失する。3は頸部の立ち上がりが明確である。4の胴部外面はすべて横ヘラ削りが施される。底部はヘラ削り整形後台部を接着する。11は台付甕である。以上、口縁部の調整は形態の違いを越えてほぼ共通する。胴部内面は1・4・9・11ヘラナデ、2指ナデ、3ナデが認められる。　坏（10）底部に丸みを残す坏で、口縁部内外面横ナデ、底部ヘラ削り、体部下半内外面に指頭痕。　**須恵器**　坏（5・6・12）いづれも体部または口縁部欠損。5は底部全面回転ヘラ削り調整。6の底部切り離しは回転ヘラ切りと見られる。周辺部手持ヘラ削り整形か。中央部を一段低くする。12の底部には回転糸切り未調整痕を残す。ロクロの回転はいづれも右方向。　長頸瓶（7）、下端及び頸部の半分に釉。頸部下端を上、肩部を下にして接合。　**石製品**　砥石（8）。流紋岩　（唐澤）

H310号住居跡（図版27）



図－100　H310号住居跡

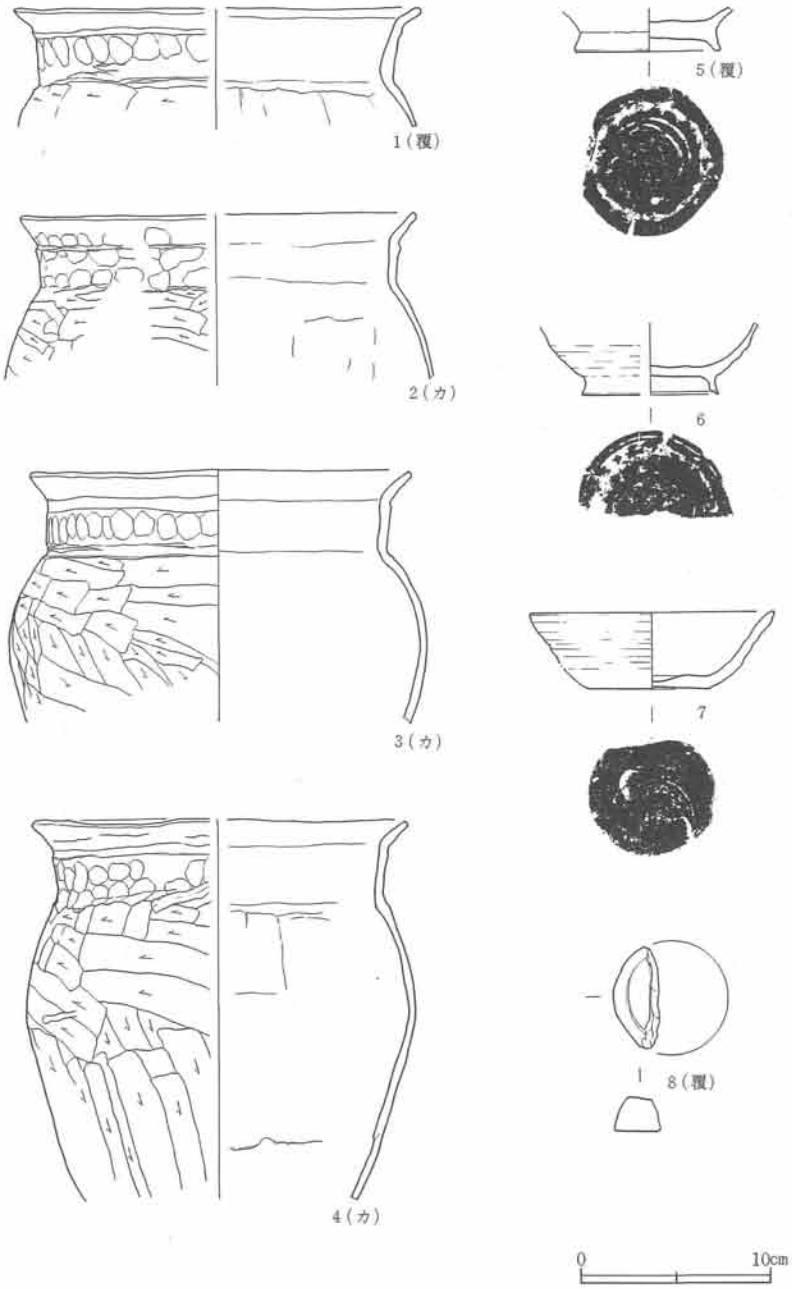
H312号住居跡



図－101　H312号住居跡

H310号住居跡（5 H－39）　**位置**　タ9～10、レ9～10にまたがって所在する。ここは東の谷地へ向かう傾斜地で、4軒の掘立柱建物跡を含む一大住居跡群となっている。**形状**　南北4m、東西3.6mの隅丸台形。南壁東端に台形状の張り出し部を持つ。これは、南壁西半の走向でそのまま東壁まで延ばすと、カマド石袖部に近接した所にコーナーがくるので、ここに張り出し部を設けることでそれを防ごうとしたとも考えられる。張り出し部を含む東壁長と西壁長はほぼ一致する。長軸方向N－39°－W、面積13m²、壁高59～90cmで北西隅付近が高い。カマド及び張り出し部を除き、幅12～20cm、深さ3～7cmの周溝がめぐる。　**カマド**　東壁中央南寄りに壁外に構築する。両袖部は地山を20～30cmの幅で、住居内方に5～10cm造り出している。燃焼部右壁上端には、白色粘土が覆いかぶさるように残存していた。構築材と推定される。燃焼部は三角形状を呈し、細くすぼめた先端を煙道とする。火床面は住居床面より18cm程低くつくる。全長87cm、袖部内幅68cm、燃焼部長71cm、燃焼部先端の壁への掘り込み角度は72°である。　**遺物**　床面又はその付近からの出土はなかったが、覆土中に体部の深い丸底の土師器坏小片や同甕体部小片が出土している。（唐澤）

H312号住居跡（5 H－41）　**位置**　タ10。**形状**　南北4.04m、東西2.83mを測るが、北壁は南壁に比べ約30cm、東壁は西壁より約60cmそれぞれ長くなっている。従って、全体の形状は台形を呈する。各コーナーは、北西隅を除いて他はみな隅丸となっている。壁の形状は全て直線である。長軸方向は南北にとり、N－4°－Wを測る。面積は10.2m²。幅10～26cm、深さ5cmほどの周溝がカマド付近と東南隅を除き確認できる。　**ピット**　一個確認される。53cm×31cm、深さ7cmである。その性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄り。構築材に石を使用するが、とくに左壁中央には凝灰質砂岩を用いている。全長86cm、燃焼部長60cm、袖部内部幅48cmを測る。　**貯蔵穴**　南東隅。55cm×30cm、深さ13cmの長円形を呈する。貯蔵穴を意識したのか、南東隅はきれいな曲線がつくられ、しかも、やや張り出しの様相さえ見受けられる。　**遺物**　カマドの前方より集中して出土する傾向がみられ、床面より1～15cm上に3個体分の土師器甕が壊れた状態でみつかっている。また、須恵器の坏（7）も1個分確認できている。南壁下の周溝上からは、須恵器の高台埦（6）の底部が出土している。（中澤）



図－102　H312号住居跡出土遺物

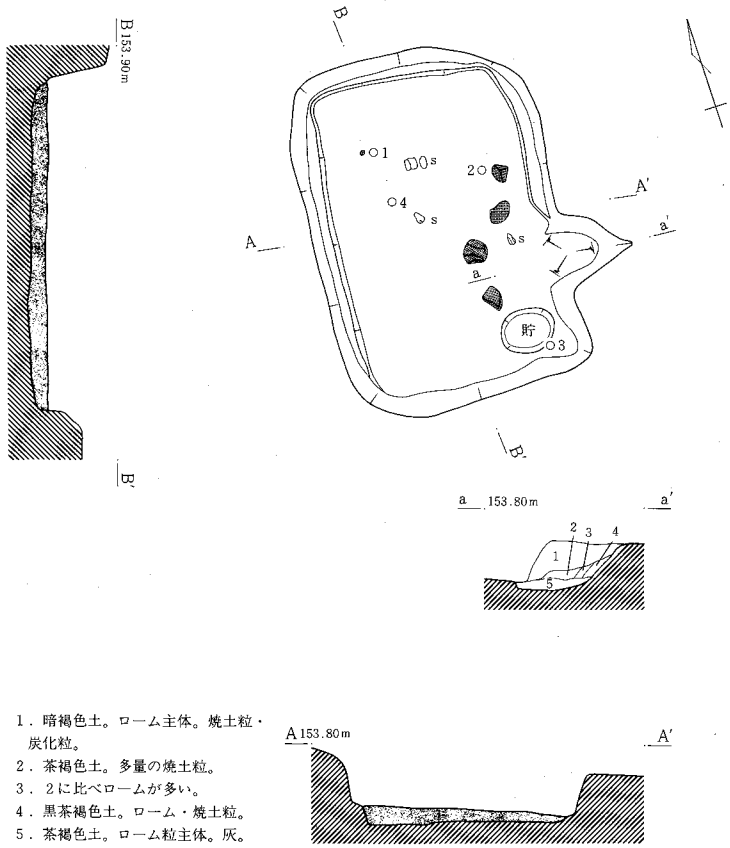
住居跡全景

カマド全景

カマド付近遺物２～４・６出土状態

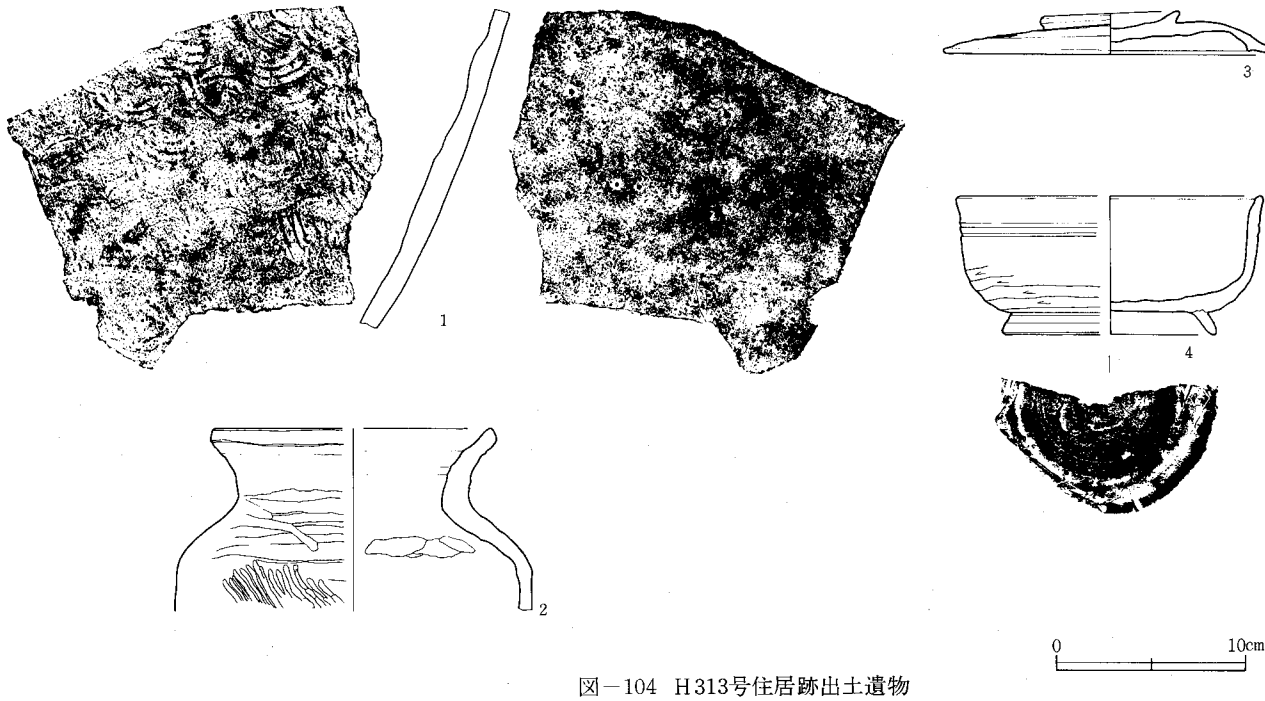
出土遺物　**土師器**　甕（１～４）、１は口縁部外面に粘土接合痕を残し、指頭圧痕を加える。口縁部内外面は横ナデ、肩部外面には横ヘラ削りが施される。内面にはヘラ痕を残す。内面は平滑である。色調は淡褐色。細石粒を多量に含み、やや軟質である。２の口縁部外面屈曲部分には明瞭な稜線が形成される。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横ヘラ削りが施される。頸部は指頭痕を残し、緩やかに肩部へと移行する。肩部内面は調整時のヘラ痕を残す。色調は茶褐色。焼きしまりは良好。３は口縁部外面中央部分に指頭痕を残し、内外面横ナデが施される。肩部には強い張りがみられ、やや球形状を成す。最大径は胴部にある。肩部外面は横ヘラ削り、胴部外面は縦ヘラ削り整形である。内面は平滑である。色調は茶褐色。酸化鉄粒や砂粒を多量に含む。４も１～３同様〝コ〟の字状口縁の形態を示し、口縁部外面には指頭痕が顕著である。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横ヘラ削り、さらに胴下半部に向けて縦ヘラ削りが施される。肩部内面にはヘラ痕を残す。胴下半部内面では粘土接合痕がみられる。色調は茶褐色。酸化鉄粒や微石粒を多量に含む。胴部外面には焼土が若干付着している。胴部内面はやや磨耗。　**須恵器**　埦（５・６）、５は右回転ロクロ使用。底部の切り離しは回転糸切りによる。高台貼り付け後、周辺部にナデ調整を加える。色調は暗灰色。礫や微細な雲母片を含む。軟質である。内外面ともに器面の荒れが著しい。６はロクロ回転方向不明。底部切り離しは回転糸切りによる。高台貼り付後、周辺部にナデ調整を加える。高台は細く、端部で凹状を示す。色調は暗灰色。礫や黒色鉱物を多量に含む粗い胎土を使用しているが、焼きしまりは良好。　坏（7）、右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。体部外面は成形時の凹凸が顕著であるが、内面は平滑である。色調は淡灰色。石英や微細な軽石粒を多量に含み、軟質である。器面が荒れていて、底部は切り離し後に周辺部調整が加えられているかのように見えるが、回転糸切りのままと考えたい。　**石製品**　８は直径６cm程と推測される紡錘車の破片である。　（中束）

H313号住居跡（図版27）



図－103　H313号住居跡

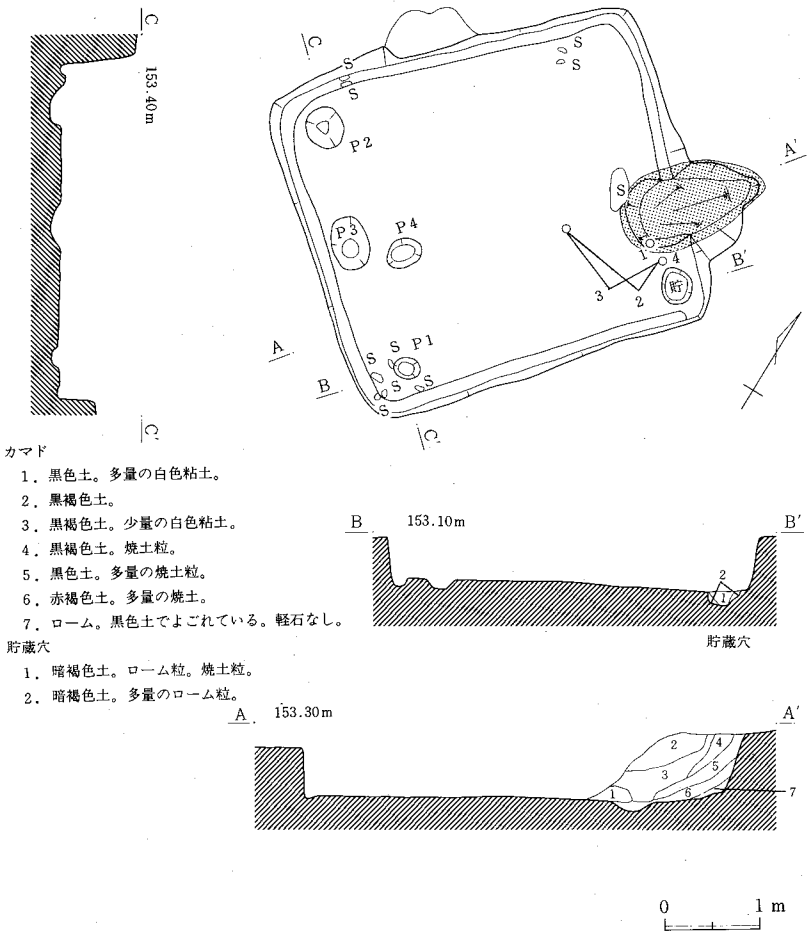
H313号住居跡（5 H－42）　**位置**　調査区域北部の最東端、レ9に所在する。全体的に南東方向に傾斜する台地が、東へ落ち込む最先端に当たる斜面にある。　**形状**　北西～南東に長軸を持つ長方形で、小さく張り出す南東隅を除いて全て隅丸である。四壁全て外側に彎曲している。北壁、西壁及び東壁北半分に拡張した跡が認められる。南北は3.3m（拡張前は2.1m）、東西は3.4m（拡張前は2.4m）、面積は7.9m²（振張前は6.9m²）である。長軸方向はN－16°－E、壁高38～66cm（振張前は47～86cm）である。周溝なし。　**ピット**　なし。　**カマド**　東壁南寄りにある。全長92cm、袖部内幅58cm、燃焼部長56cm、壁への掘り込み角度は45°で、壁外掘り込みは80cmである。火床面は拡張の前後共に床面とほぼ同じ高さである。カマド内（5）層は、燃焼部を張って、拡張後の床にしていると考えられる。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、円形で規模は60×44cm、深さは11cmである。　**遺物**　貯蔵穴の南側の壁上から須恵器蓋（3）、中央から北にかかる床面上から、須恵器甕（1）、小型壺（2）、高台付椀（4）が出土している。　（木部）



図－104　H313号住居跡出土遺物

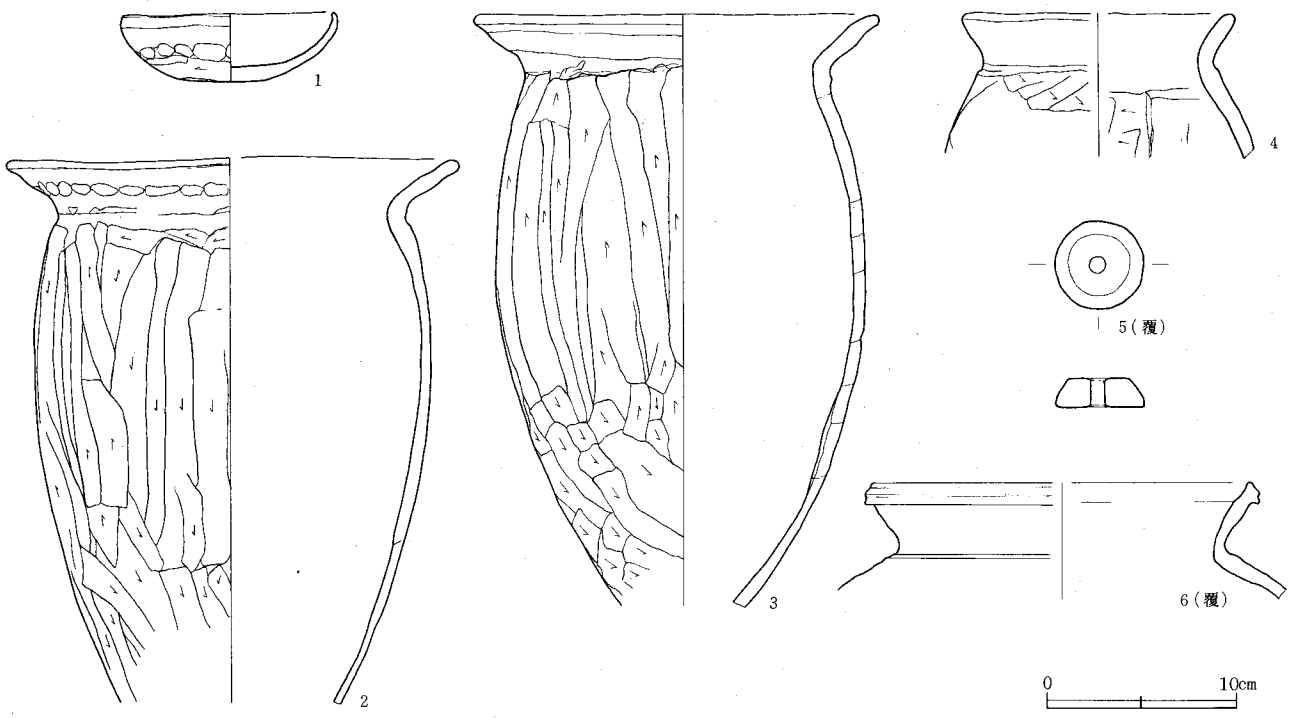
出土遺物　**須恵器**　甕（1）、胴部の破片である。内面には当て具痕がみられる。色調は淡い暗灰色を主体とする。外面には自然釉が掛かり、又、黒色鉱物の溶出がみられる。　小型壺（2）、胴部外面に平行叩き目痕、肩部内面には指ナデ痕を残す。口縁部内面は成形時の凹凸が顕著である。色調は暗青灰色。白色粒を多量に含み、やや軟質である。　蓋（3）、右回転ロクロ使用。内面にかえりをもつ。天井部は扁平で、中央に大型の凹状つまみが付けられる。天井部は濃緑色の自然釉が掛かり、重ね焼きの痕跡を残す。　椀（4）、ロクロ成形。底部には浅い溝を形成し、高台を接合する。体部外面下端はヘラ削り、口縁寄りには2条の凹線が巡る。色調は淡灰色。黒色鉱物を含み、やや軟。　（中束）

H314号住居跡



図－105　H314号住居跡

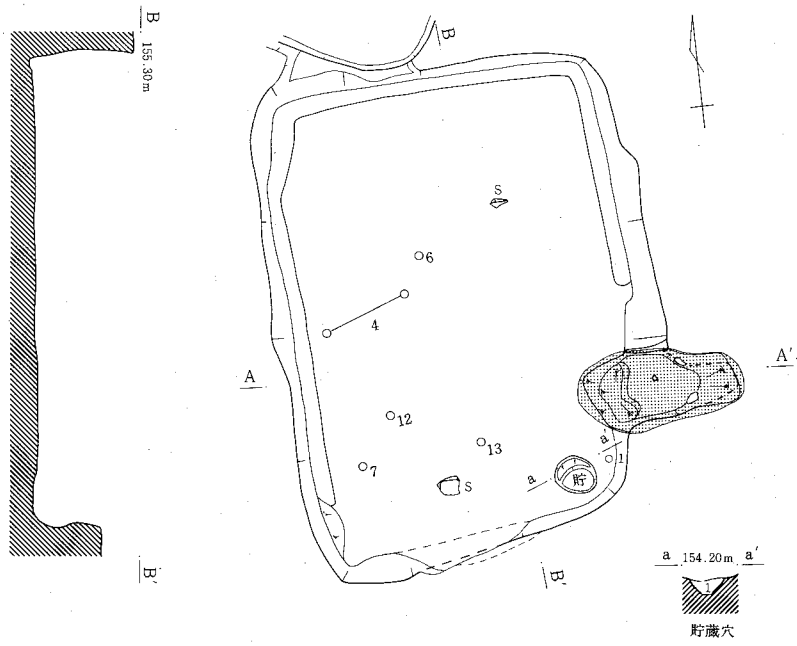
H314号住居跡（5H－43）　**位置**　東の谷地へ向かう傾斜地レ8に所在する。掘立柱建物跡4軒を含む大住居跡群の南端に位置する。　**形状**　南北3.9m、東西3.6mの隅丸台形。南壁は北壁に比べ約30cm長い。長軸方向N－41°－E、面積13.5m²、壁高35～88cm（北西側）。東壁南半を除き周溝をめぐらす。　**ピット**　南壁沿いに4個認められる。P1・P2は北東隅の貯蔵穴とともに柱穴と見ることもできる。ピット間の中心距離はP1～P2、270cm、P1～貯蔵穴、300cmである。深さはいずれも9～17cmである。P3は出入口施設関連ピットとも見られる。深さ13cm。P4は性格不明。深さ11cm。　**カマド**　北壁中央東寄り。カマド内覆土中から白色粘土を検出。構築材と見られる。焚口前面はピット状に低くなっており、灰かき穴と見られる。全長84cm、袖部内幅60cm、燃焼部長78cmでその先端を煙道とする。燃焼部先端の壁への掘り込み角度69°。　**貯蔵穴**　北東隅。円形、40×32cm、深さ17cm。柱穴とも見られる。　**遺物**　カマド前を中心に土師器甕（2～4）・同坏（1）と安山岩長石が出土。これらは出土レベルから見て、カマドからなだれ落ちたものと見られる。北東隅を除くコーナーには、2～5個の小長石（転石）が床面で認められた。覆土中からは紡錘車（5）等が出土。　（唐澤）



図－106　H314号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　甕（2～4）、2・3は細長い胴部に強く〝く〟の字状に外反する口縁部を持つ。最大径は口縁部にとる。口縁部は内外面横ナデ、外面に指頭痕を残す。胴部外面は縦ヘラ削りで、2の肩部に横ヘラ削り1段が認められる。胴部内面ヘラナデ。口縁部と肩部の境には肩部の低い段差が見られる。4は小型甕で胴部に最大径を取る点を除き2・3に同じ。いづれも厚い器肉を持つ。色調褐色。　坏（1）、半球形の丸底。体部中ほどの内外面に指頭痕。　**須恵器**　壺（6）、内外全面にロクロナデ。色調灰色。　**石製品**　紡錘車（5）、頁岩製。48.5g。　（唐澤）

H315号住居跡（図版28）



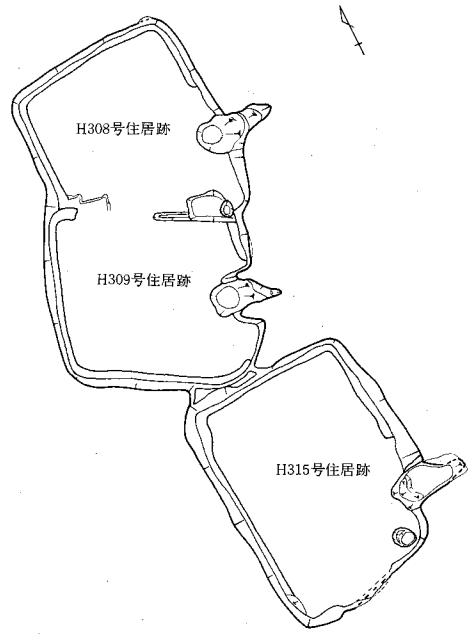
カマド
1．黒褐色土。
2．黒色土。白色粘土。
3．灰褐色土。多量の白色粘土。焼土粒。
4．褐色土。白色粘土・焼土粒。
5．黒色土。焼土粒。
6．黒褐色土。多量の焼土
7．黒色土。多量のローム粒。
8．黒色土。多量の炭化物。

貯蔵穴
1．黒色土。多量の焼土。軟らかい。

0 1 m

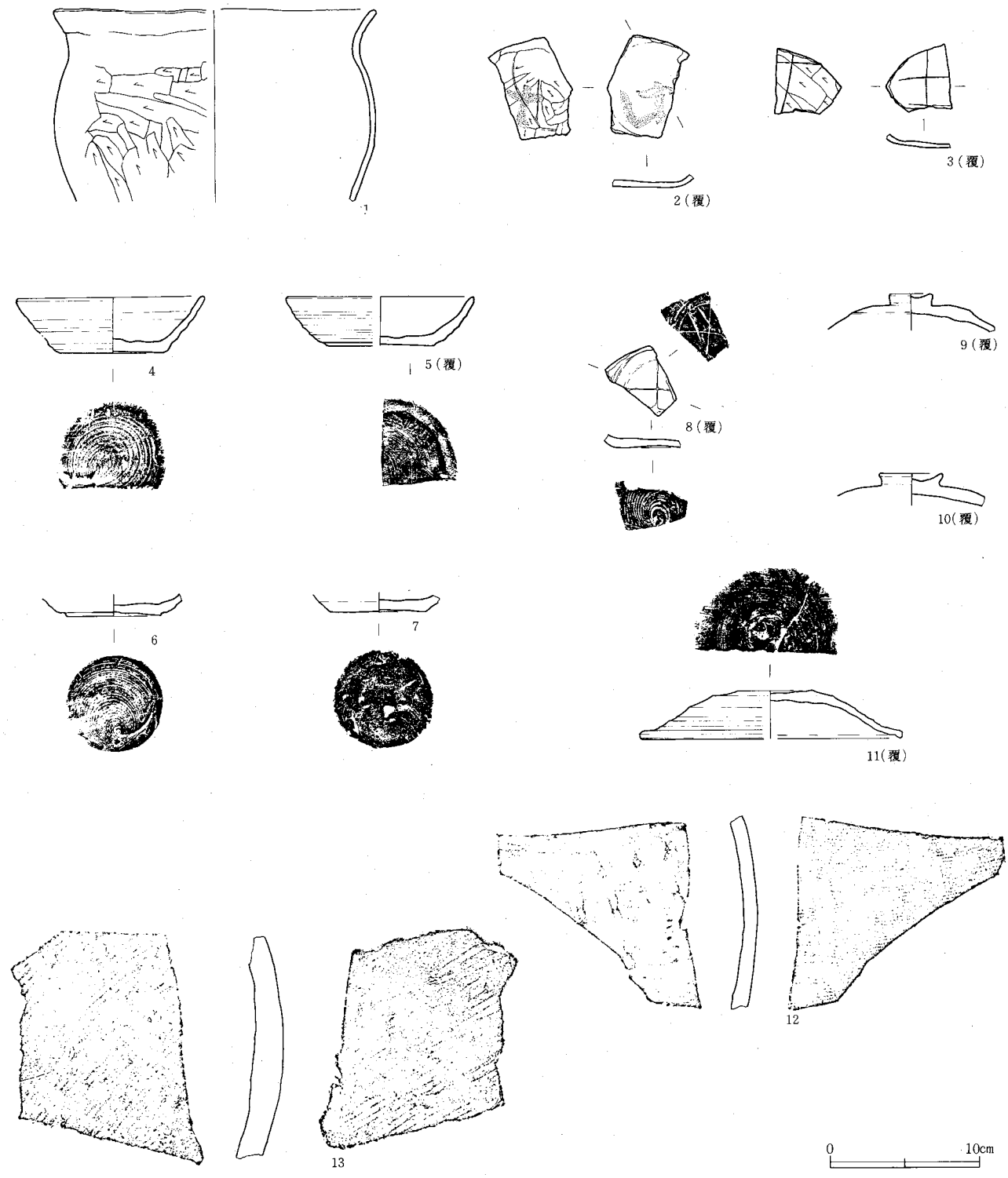
図－107　H315号住居跡

H315号住居跡（5 H－44）　**位置**　調査区域北東、タ9に所在する。台地が南東に傾斜する北側の斜面上にある。　**形状**　北西～南東に長軸を持つ台形で、南北4.9m、東西3.6mである。南東隅は隅丸になっている。北、東、西壁は直線的であるが、南壁中央部に床面レベルで30cmほど外側にえぐれるように張り出している部分がある。性格は明らかでない。長軸方向はN－2°－W、面積は16.8m²、壁高は66～106cmである。　**ピット**　なし。　**カマド**　東壁南寄りにある。全長140cm、袖部内幅80cm、燃焼部長100cm、壁への掘り込み角度47°、壁外掘り込みは東に向かって左110cm右140cmである。火床面は床面より18cm低い。構築に当たっては、凝灰質砂岩の石材を用い、白色粘土でかためたと推定される痕跡が認められた。　**貯蔵穴**　南東隅、円形で規模は46×36cm、深さ30cmである。　**遺物**　カマドの右袖の南側、床面より27cm上に土師器の甕（1）が、床面中央から南側にかけて須恵器の坏（4、6、7）が出土した。覆土中からは須恵器の蓋（9、10、11）が出土している。　**重複関係**　本遺構の北壁西寄り部分に、H309号住居跡の南東隅の部分が重複している。新旧関係は、本遺構の北壁がH309号住居跡の南東隅部分をわずかに切って造られることから、本遺構の方が新しいと推定される。　（木部）



0 2 m

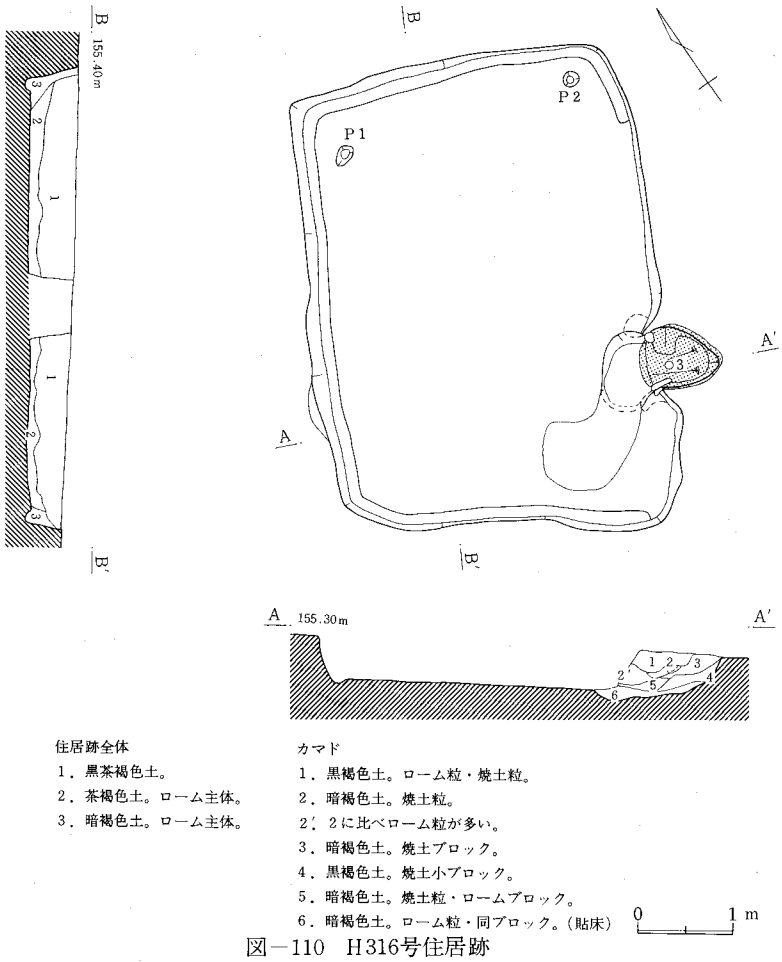
図－108　H308・309・315号住居跡重複関係図



図－109　H315号住居跡出土遺物

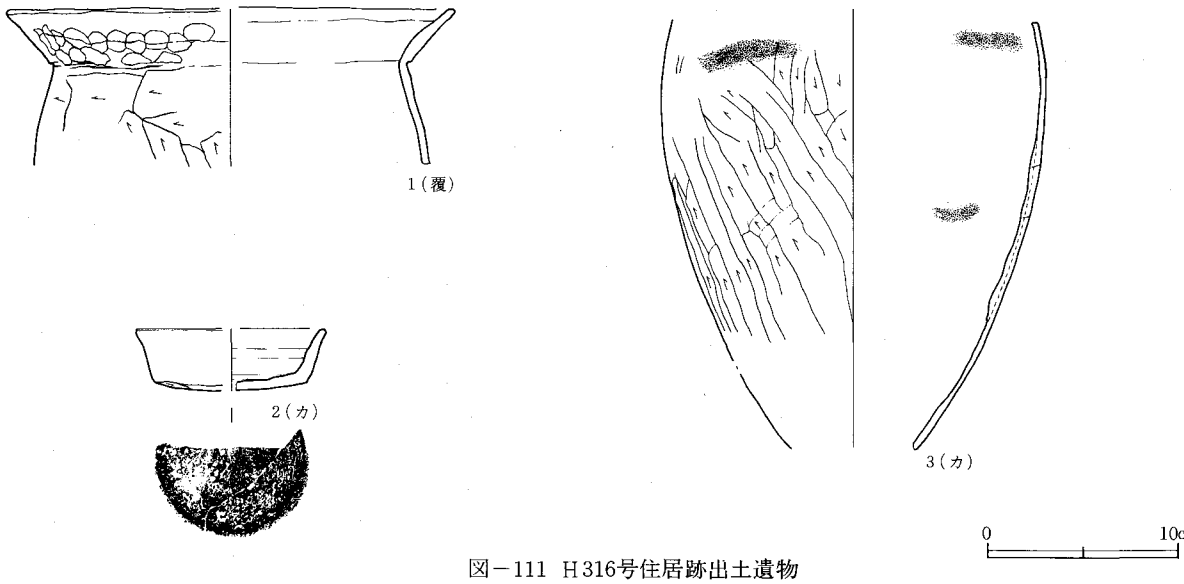
出土遺物　　**土師器**　甕（1）、緩やかに外反する口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横ヘラ削り、胴下半部に向けて縦ヘラ削りされる。内面は平滑。色調は淡褐色。坏（2・3）、底部破片。2は内外面に「此」と墨書され、3はヘラ記号「井」を認める。　**須恵器**　坏（4～8）、4～6は右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切り。7と8も切り離しは回転糸切り。4はロクロ目を顕著に残す。色調は淡い暗灰色。礫や黒色鉱物を含み、軟質。5は底部が灰褐色、体部は暗灰褐色を成す。軽石粒を含み、軟質。6は礫や黒色鉱物を含み、色調は淡灰色。7は黒色鉱物を含み、軟質。器面の荒れが著しい。色調は淡い暗灰色。8は内面にヘラ記号「十」を認める。　蓋（9～11）、9はロクロ成形、切り離しは回転糸切り。天井部中央に小さな凹状のつまみが付く。周辺部は右方向にヘラ調整。10は浅い凹状のつまみが付く。黒色鉱物を多量に含む。11は天井部にロクロ成形後の回転糸切り痕を残し、つまみ部分を闕失する。周辺部は右回転ヘラ削りが施される。甕（12・13）、胴部破片。12は外面に平行叩き目痕、内面に方形状の当て具痕を残す。色調は暗灰色。微細な白色粒を多量に含む。13は外面に平行叩き目痕、内面にも同様の平行条痕を残す。色調は淡い暗灰色を主体とする。外面には自然釉が掛かる。石英粒を多量に含む。12・13ともに堅緻である。　（中束）

H316号住居跡（図版28）



図－110　H316号住居跡

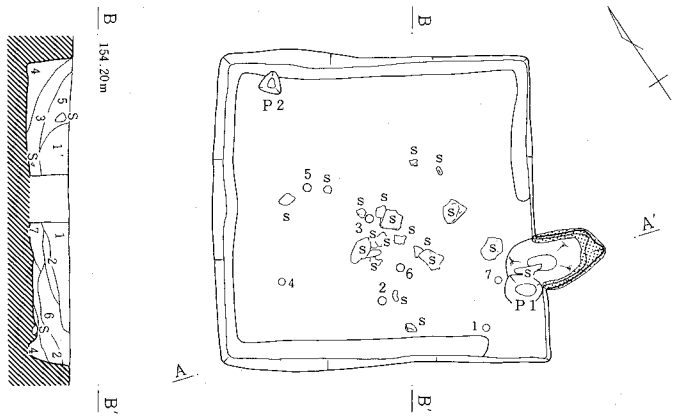
H316号住居跡（5 H－45）　**位置**　東の谷地に向かう斜面の高台部分、タ8に所在する。掘立柱建物跡4軒を含む大住居跡群の南端に位置する。　**形状**　南北5.1m、東西3.5mの隅丸台形。東壁に比べ南に60cm、北に30cm長く、外方にわん曲している。南壁東端は約20cm程度の弱い張り出し部を持つ。長軸方向N－29°－E、面積16.7m²、壁高25～57cmで北西側が高い。東壁を除き、幅8～16cm、深さ1～5cmの周溝をめぐらす。　**床面**　カマド焚口付近から南東隅にかけて、15cm前後の厚さで貼床の一部が認められた。　**ピット**　北東隅、北西隅に各々1個ずつ認められた。いずれも小規模で深さも4～11cmである。　**カマド**　東壁中央南寄り。掘り形の内側に10～25cmの厚さにロームと黒褐色土の混土を巻く。住居内には同材料で袖部をつくっている。両袖部には安山岩転石が置かれているが、先の袖部先端からは15～20cm奥に立てられている。すなわち焚口天井部分は同床面より奥へ入る形態のカマドが想定される。燃焼部火床面はロームを主体とする貼床を施す。全長90cm、袖部内幅46cm、燃焼部長80cmで、燃焼部先端の壁への掘り込み角度は61°である。　**遺物**　カマド内から土師器甕(3)と須恵器坏(2)が、覆土中からは同じ形態の土師器甕（1）等が出土した。　（唐澤）



図－111　H316号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　甕（1・3）、1は肩部以下を欠失するが、細長い胴部に強く〝く〟の字状に外反する口縁部を持つ甕で、最大径を口縁部にとる。口縁部は横ナデで外面に指頭痕を残す。胴部外面はヘラ削りで肩部に1～3段の横ヘラ削りを認める。胴部内面には横ヘラナデを施す。口縁部と肩部の境には段差があり、肩部側が低い。口縁部中ほどには粘土紐の接合痕が見られる。色調は褐色で、胎土中に細い砂粒を多量に混ぜる。3は口縁部と底部を欠失する。胴部外面は縦ヘラ削り、同内面には横ヘラナデを施す。色調は淡褐色で、胎土中に細い砂粒を多量に混ぜる。1・3はいづれも同じ形態と技法を取るものと考えられる。器肉は口縁部を除き3㎜前後で、非常に薄くなっている。　**須恵器**　坏（2）、底部に丸みのある小型の坏で、厚い器肉を持つ。全体にていねいなつくりだが、底部内面に顕著な渦巻状のロクロ痕を残す。底部外面は全面に手持ちヘラ削りを施す。ロクロの回転方向は右回りと見られる。色調は灰白色で、胎土中に多量の小石を混ぜる。　（唐澤）

H317号住居跡（図版29）



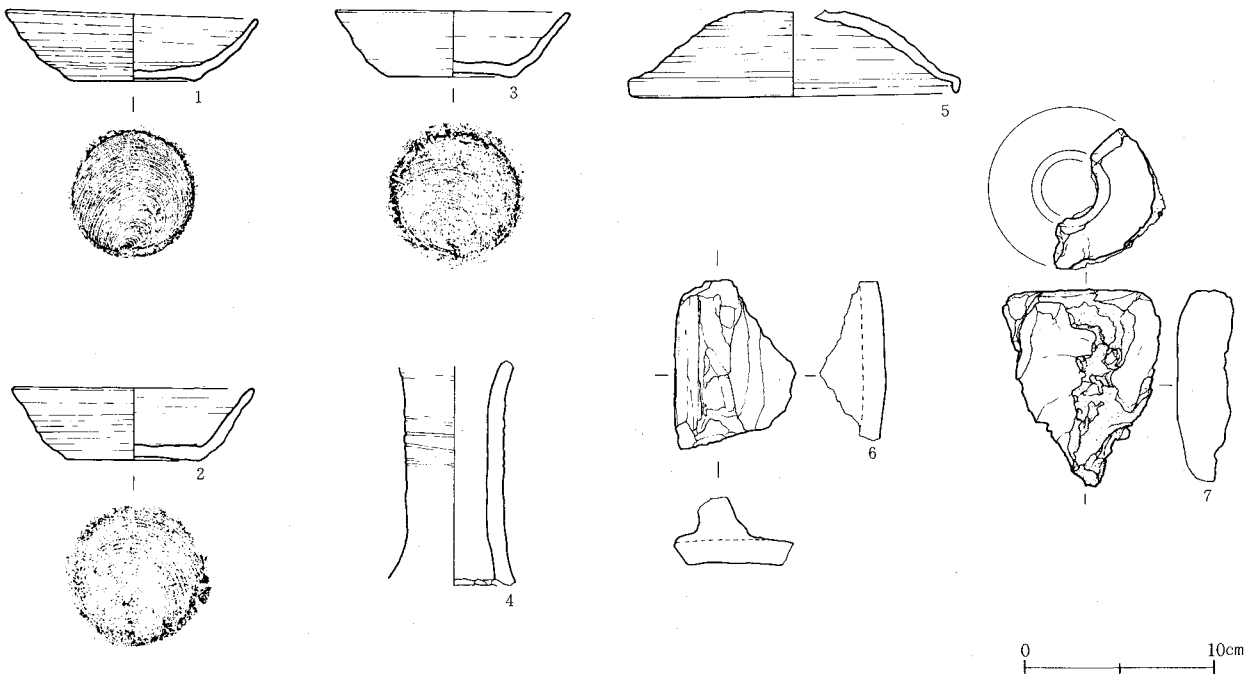
住居跡全体
1．茶褐色土。ロームブロック
1'．1に比べ軽石がやや少。焼土粒。
2．黒色土。焼土粒。
3．茶褐色土。焼土粒。
4．暗褐色土。炭化粒。
5．暗褐色土。ローム・焼土粒。
6．褐色土。ローム主体。
7．茶褐色土。多量のローム粒。

カマド
1．茶褐色土。
2．黒茶褐色土。
3．茶褐色土。焼土粒（特に下半分）
4．黒褐色土。焼土粒。
5．赤褐色土。焼土ブロック。

H317号住居跡（5H－46）　**位置**　調査区域北東、タ8に所在する。南東方向に傾斜する台地の東端に当たる。　**形状**　ほぼ方形で、規模は南北3.1m、東西3.4mである。四壁とも直線的で、四隅ともほぼ直角をなし、整ったプランを持つ。主軸方向はN－35°－E、面積10.3m²、壁高30～70cmである。カマド付近及び南東隅を除く全ての壁下に周溝をめぐらす。幅8～22cm、深さ1～5cmである。　**ピット**　カマドの右袖にくっついて1個（P1）、及び北西の隅付近に1個（P2）ある。P1は20×36cm、深さ20cm、P2は24×23cm、深さ38cmで性格は不明。　**カマド**　東壁南寄りにある。カマド主軸方向はN－109°－Eで東壁と直交せず、北向きに交わる。全長70cm、袖部内幅50cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度45°で、壁外掘り込みは70cmである。火床面は床面より16cm低い。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　.、3、5、7は床面より、4は床面上12cm、1は床面上22cmより出土。なお、住居跡の床面及び床面上10cm位の高さの所から、多数の石と土器片が散乱して出土した。これらは住居廃棄後、捨てられたものと考えられる。　（木部）

0　1m

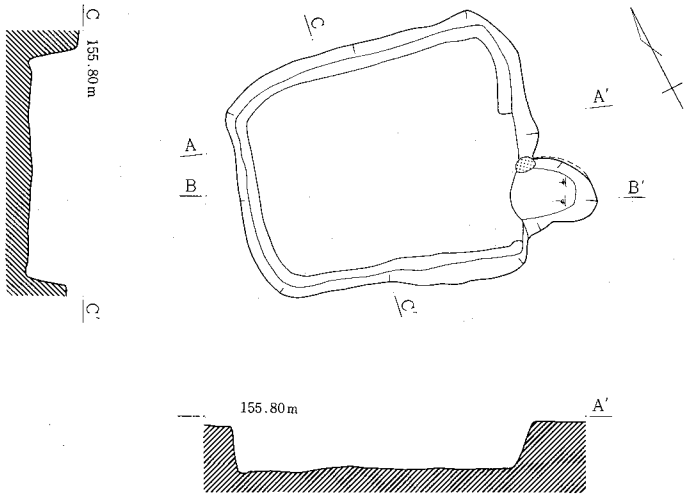
図－112　H317号住居跡



図－113　H317号住居跡出土遺物

出土遺物　**須恵器**　坏（1～3）、3個体ともに右回転ロクロ使用。底部の切り離しは回転糸切りによる。1は底部周辺に僅かなヘラ調整が施される。色調は淡青灰色。砂粒を含むが焼成は良好。2は微細な白色粒を多量に含み、軟質である。色調は淡灰色。3は内面に稜線が形成される。色調は淡灰色。焼成は良好。　長頸壺（4）、頸部片である。5条の凹線が巡る。色調は淡灰色を主体とし、断面は黄色味を帯びる。微細な黒色・白色粒を含む。　蓋（5）、高い天井部を形成する。つまみを闕失するか周辺部回転ヘラ削りを施す。色調は淡い暗灰色、黒色鉱物を少量含む。焼成は良好。
その他　（6）、大江正行氏より、祭祀用としてのカマド破片ではないかとの御教示を得た。7は羽口片。　（中束）

H318号住居跡（図版29）



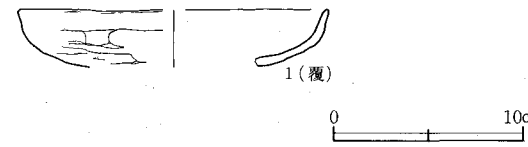
1．茶褐色土。焼土粒。炭化粒。
2．灰褐色土。白色粘土主体。焼土粒。
3．暗褐色土。ローム主体。
4．焼土化したロームと焼土ブロック主体。
5．褐色土（焼土化した壁）
6．赤茶褐色土。灰。焼土ブロック。
7．6に比べ、焼土粒・炭化粒が多い。

0　1 m

図－114　H318号住居跡

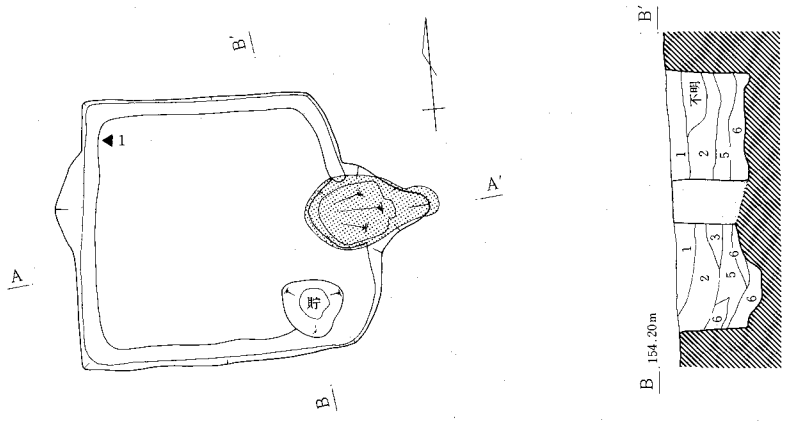
H318号住居跡（5H－47）　**位置**　ヨ9。　**形状**　南北長2.36m、東西長2.94mで、隅丸台形を呈する。東西に長軸をもち、その方向はN－82°－E、面積は6.7m²、壁高は40～50cmを測る。ほぼ全周にわたり壁下に周溝が認められる。幅8～14cm、深さ1～6cmである。　**ピット**　床面および遺構確認面からは認められなかった。　**カマド**　東壁南寄りに設置。全長80cm、袖部内幅54cm、燃焼部長30cmの規模をもつ。構築については、カマドの覆土の観察から白色粘土を用いたように思われる。また、左側の壁には、焼けを受けた石が1個確認されている。　**貯蔵穴**　確認されない。　**遺物**　床面上からは何らの遺物も発見されていない。本遺構覆土中より土師器坏（4分の1残）が見つかっている。

（中澤）



図－115　H318号住居跡出土遺物

H320号住居跡（図版30）



カマド
a．茶褐色土。ローム主体。
b．赤褐色土。焼土化ローム主体。
c．茶褐色土。ロームブロック。
d．3に似るが、焼土粒を混ぜる。
e．赤灰色土。灰と焼土ブロックの混土層。
f．5に比べローム粒が入る。

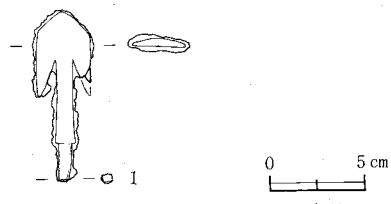
住居跡全体
1．黒色土。
2．黒褐色土。ロームブロック。
3．黒色土。ロームブロック。
4．暗褐色土。多量のロームブロック。
5．黒色土とロームブロックの混土層。
6．黒色土。

0　1 m

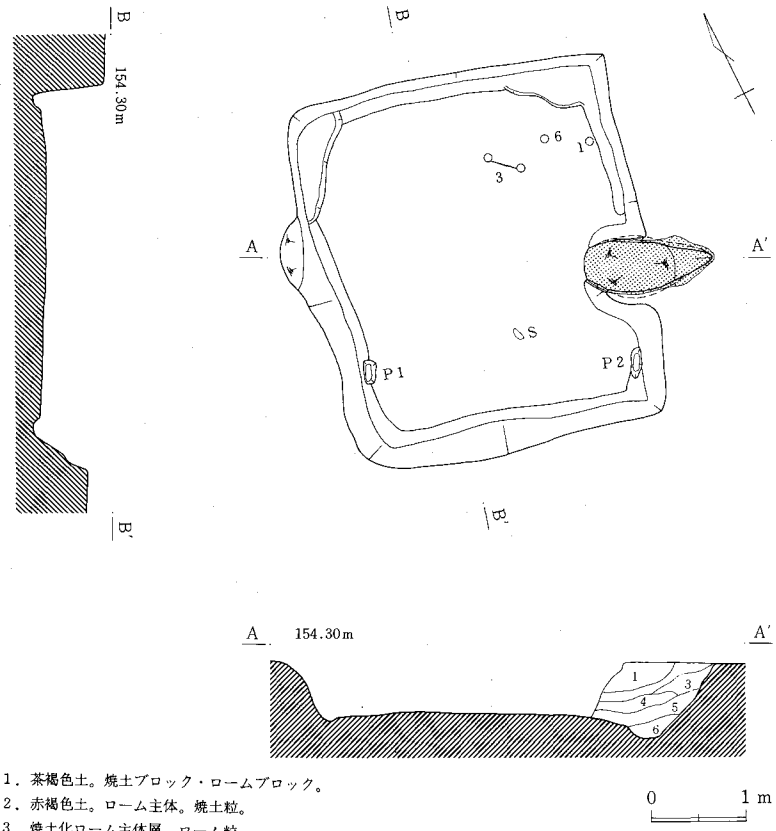
図－116　H320号住居跡

H320号住居跡（5H－49）　**位置**　ヨ7の南西隅に所在し、東に接してH319号住居跡、南に接してH370号住居跡が存在する。　**形状**　南北2.78mに対して東西が3.13mと東西に長い台形の平面プランを有する。北壁、西壁、南壁は直線に近いが、東壁は外方に膨らむ傾向を持ち、隅角もこれに比例して北西隅、南西隅が直角を呈するのに対して、北東隅、南東隅はゆるやかなカーブを描いている。面積は8m²で東壁の南半分を除いてほぼ全周に周溝がめぐらされている。長軸方向はN－92°－Eをとる。　**カマド**　東壁中央部にある。造りが丁寧で燃焼部と煙道部が明確に区分されている。全長66cm、燃焼部長41cm、袖部内幅70cmで壁への掘り込み角度は62°を測る。　**貯蔵穴**　南東隅に不整円形の貯蔵穴が存在する。長軸68cm、短軸58cmで深さ15cmである。　**遺物**　北西隅付近床面近くから鉄鏃が出土している。

（田口）



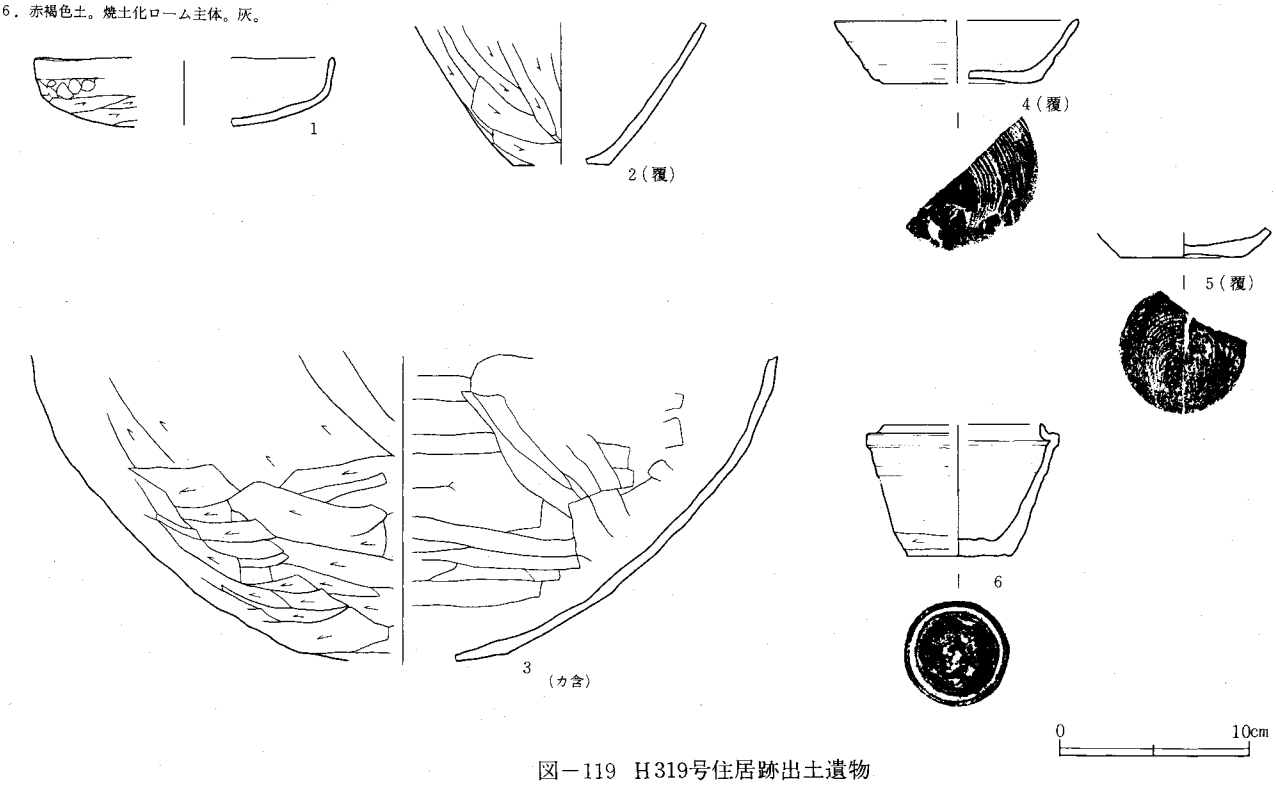
図－117　H320号住居跡出土遺物



1．茶褐色土。焼土ブロック・ロームブロック。
2．赤褐色土。ローム主体。焼土粒。
3．焼土化ローム主体層。ローム粒。
4．赤褐色土。ローム主体。焼土化ローム。
5．赤褐色土。多量の灰・焼土。
6．赤褐色土。焼土化ローム主体。灰。

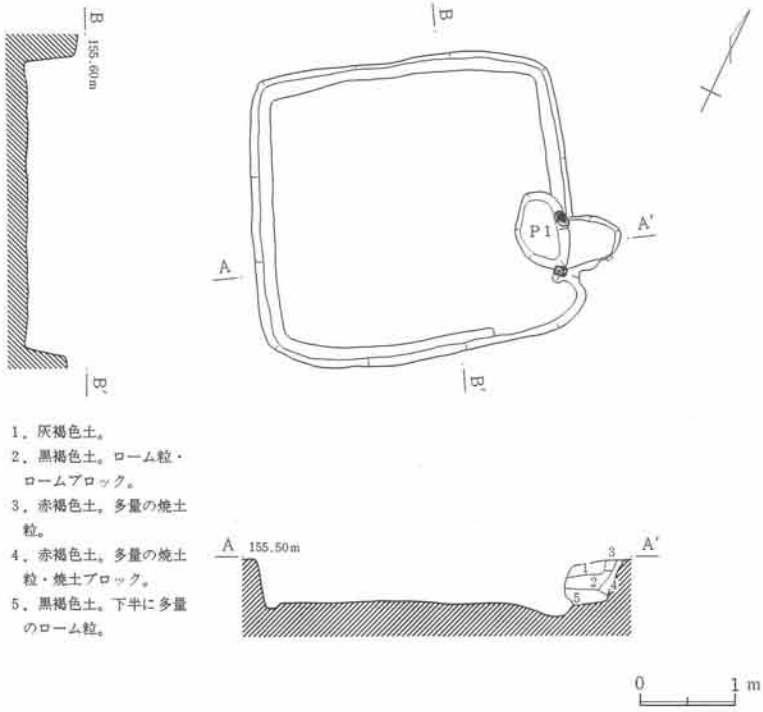
図－118　H319号住居跡

H319号住居跡（5H－48）　**位置**　ヨ7。**形状**　南北3.64m、東西3.3mで台形を呈す。長軸は南北で方向はN－17°－E、面積10.8㎡、壁高52～67cmを測る。周溝はカマド部分を除き、ほぼ全周に認められ、幅10～14cm、深さ3～8cmである。この住居跡でとくに注意をひくものは、住居の四隅である。北東および南東隅は鋭い角を呈し、北西隅と南西隅は隅丸を呈す。　**ピット**　西壁下および東壁下に1個ずつ認められる。形状はいずれも長円形。　**カマド**　東壁南寄り。左右袖部とも、それぞれ20cm程の地山を掘り残している。全長134cm、袖部内幅36cm、燃焼部長57cmを測る。カマド地層断面から観察すると、構築材料は粘土と考えられる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　東壁下の北寄りで土師器坏（1）、その手前の床面より須恵器の小型鉢（6）が出土。カマドからは、土師器甕（3）の底部が出土している。さらに、本遺構の覆土からは、須恵器坏（4）（5）が出土している。また、土師器の甕（2）も出土している。そして、鉄滓も見つかっている。　（中澤）



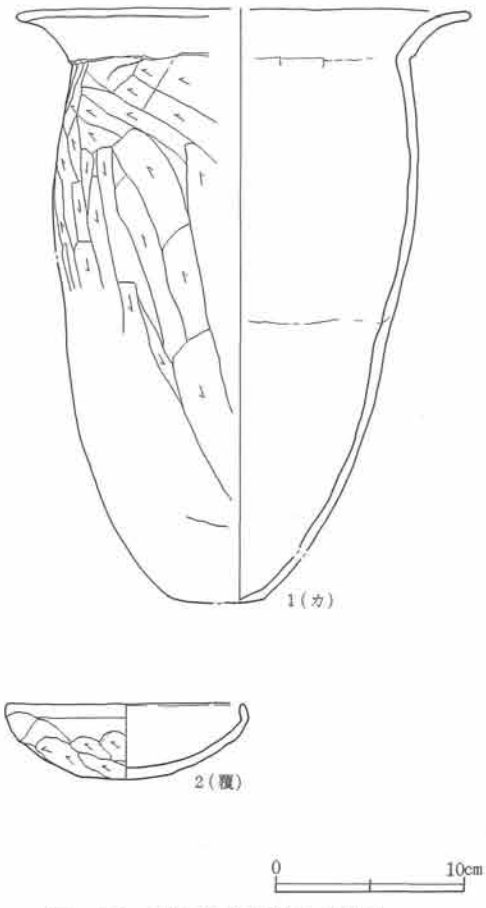
図－119　H319号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　坏（1）、口縁部が直立に近い形を示す、小破片。　甕（2・3）、2は胴下半部の破片。外面は底部に向けて斜ヘラ削りが施される。3は大型甕の胴部片である。胴部外面は横及び斜ヘラ削り、底部もヘラ削りである。底部には僅かに稜線が形成されるが、比較的丸味を帯びた形状を示す。内面は横及び斜ハケナデが施される。色調は淡い茶褐色を主とし、やや黒味を帯びる。石粒や微細な雲母片を含む。　**須恵器**　坏（4・5）、底部切り離しは回転糸切り。4は黒色粒や砂粒を含み、暗灰色。5は底部周辺にヘラ調整が加わる。淡灰色で、断面は淡褐色。　小型鉢（6）、口縁部は内傾し、肩部は厚く張り出す。体部下端には左回転ヘラ調整が加わる。底部切り離しにはヘラを使用か。底部には浅い溝が残る。色調は淡い暗灰色。自然釉が掛かる。微細な白色粒を含む。焼成は良好。　（中束）



図－120　H322号住居跡

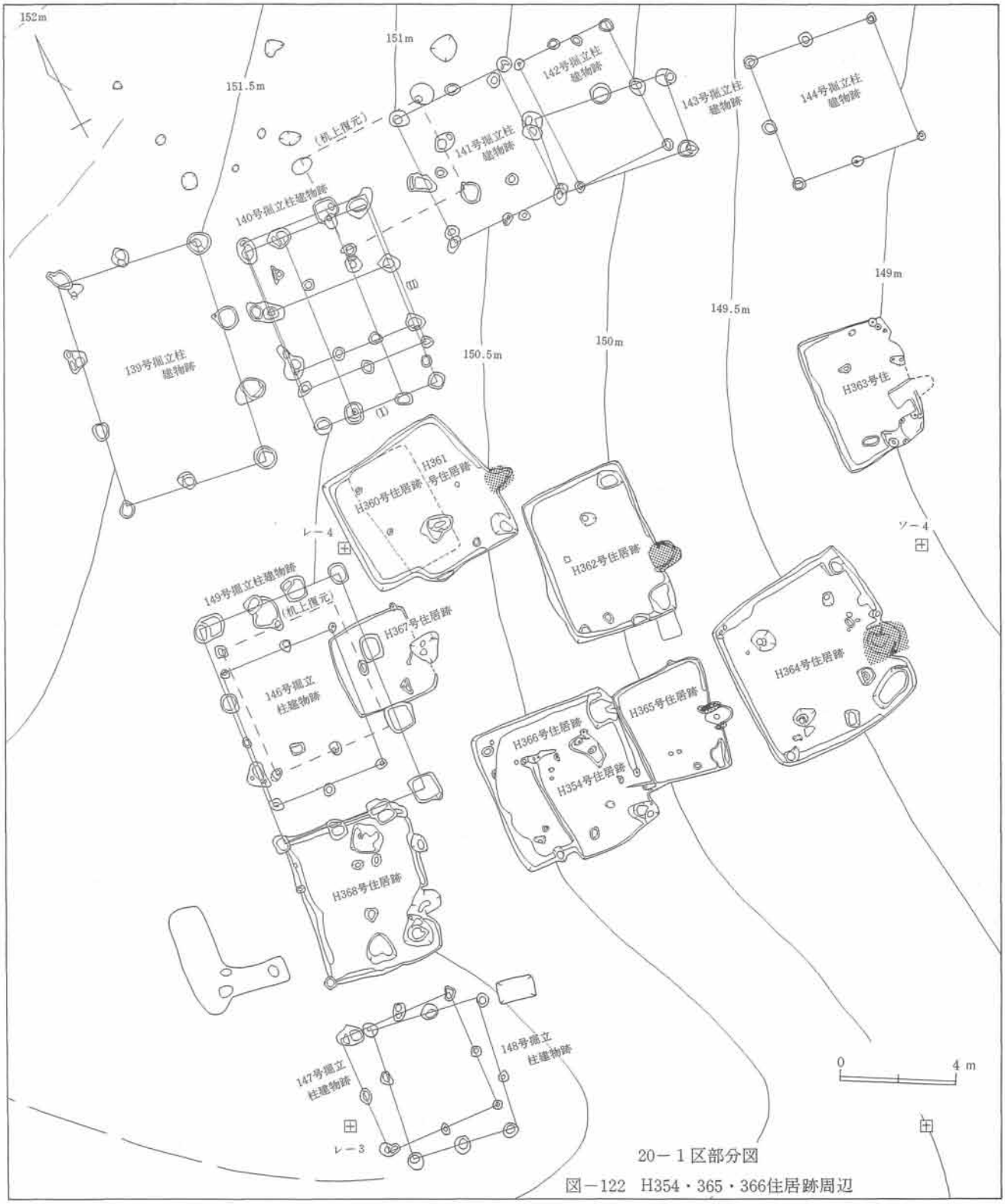
H322号住居跡（5 H—51）　**位置**　ヨ8の北辺部に所在し、51号溝と52号溝に挟まれた地域に位置する。　**形状**　南北、東西はそれぞれ3.04m、3.26mで、面積は9.5㎡を測る。東西がわずかに長く、主軸はN—56°—Eの方位をとる。壁の形状は南壁を除いてほぼ直線を呈すが、東壁のカマドより南の部分は外方に大きく膨らんでいる。周溝は幅10～16cm、深さ1～6cmのものが南東隅を除いた全周にめぐらされている。　**カマド**　東壁の南寄りに据えられている。全長72cm、燃焼部長56cm、袖部内幅42cmであるが、左右袖部共に地山を掘り残して造られており、袖石の使用が認められる。なお、燃焼部と煙道部の区分は判然としない。　**ピット**　カマドの前面に長軸89cm、短軸54cm、深さ12cmのピットが存在するが、位置から考えて灰かき穴と推定される。**遺物**　カマド内より土師器甕（1）が、覆土中より土師器坏（2）が出土している。（田口）



図－121　H322号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　甕（1）、緩やかに外反する口縁部には、内外面横ナデが施される。胴部は長胴形の系譜を示し、中央付近に若干のくびれが生じている。胴部内面では粘土接合痕が認められる。頸部は斜ヘラ削りにより鋭く抉られ、明確な稜線を形成する。胴部外面における整形の主体は、縦ヘラ削りである。内面は頸部付近にヘラ痕を残すが、全体的に平滑である。底部はヘラ削りにより、やや丸味をもつ。底部内面はすり鉢状を示し、中央付近の器壁は非常に薄くなるものと思われる。色調は淡い暗褐色を主体として、胴中央部及び底部周辺では黒味を帯びる。胴部には少量の焼土が付着する。砂粒を多量に含む。　坏（2）、底部中央は定方向ヘラ削り、その周辺を巡るかのように横ヘラ削りが施される。口縁部外面に残る横ナデの幅は狭く、口唇部は丸味を帯びて内湾する。内面は平滑である。色調は淡褐色を主体として、底部中央付近でやや黒味を帯びる。砂粒を含む。　（中束）

住居跡全景



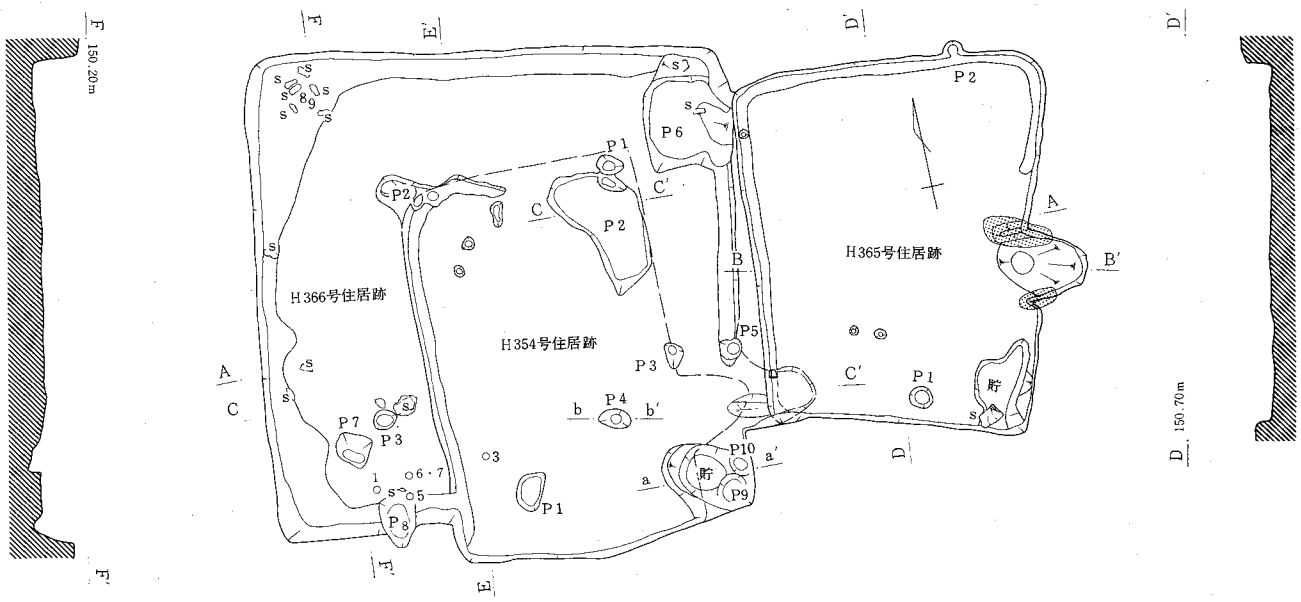
20－1区部分図

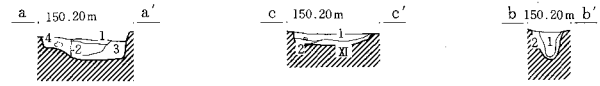
図－122　H354・365・366住居跡周辺

住居跡及び掘立柱建物跡の群集状況

H354・365・366号住居跡重複状況

H354・365・366号住居跡（図版30）

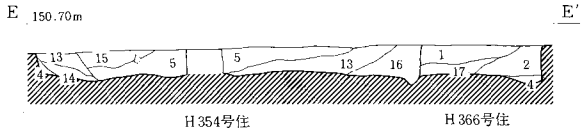


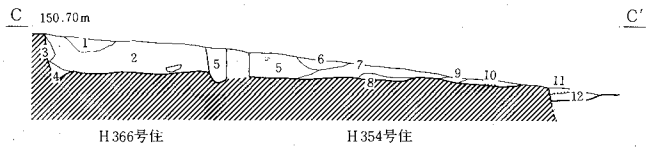


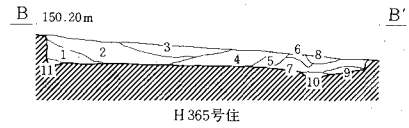
貯蔵穴（H366号住）
1．黒褐色土。ローム粒。
2．黒色土。焼土ブロック・炭化物。
3．暗褐色土。多量のローム粒・焼土粒。
4．貼床。

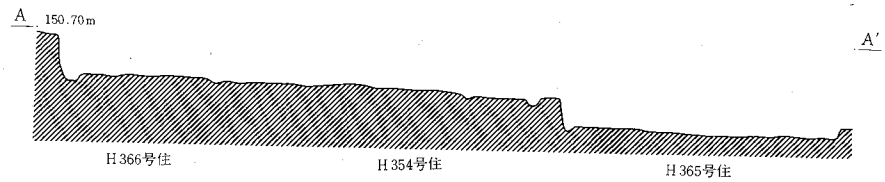
P2（H354号住）
1．黒褐色土。ロームブロック。
2．黒褐色土。ローム粒・焼土粒。

P4（H366号住）
1．黒褐色土。ローム粒。
2．暗褐色土。









354・366号（C～C'、E～E'）
1．褐色土。多量のローム。
2．黒色土。ローム粒。
3．褐色土。多量のローム粒。
4．黒褐色土。多量のローム粒。
5．黒褐色土。ローム粒。
6．暗褐色土。多量のローム粒。
7．黒褐色土。ローム粒。
8．暗褐色土。多量のローム粒。焼土。
9．暗茶褐色土。ローム粒・焼土。
9．暗茶褐色土。ローム粒・焼土。
10．黒褐色土。焼土。
11．灰黒色土。黒色土・灰・焼土。
12．黒褐色土。焼土。灰。
13．黒褐色土。多量のロームブロック。
14．黒褐色土。多量のローム粒。
15．黒色土。ロームブロック。
16．黒褐色土。ローム粒。
17．漆黒色土。ロームブロック

365号住（B～B'）
1．黒色土。ロームブロック。
2．黒褐色土。ローム粒。
3．黒色土。
4．灰茶褐色土。多量の白色粘土。焼土粒。
5．暗褐色土。多量の焼土。
6．灰黄色。ロームブロック。
7．暗褐色土。焼土・ローム粒。
8．7に似るが焼土はブロック状。
9．7に比べ黒色みが強い。
10．黒色土。炭化物多し。
11．ローム粒主体。

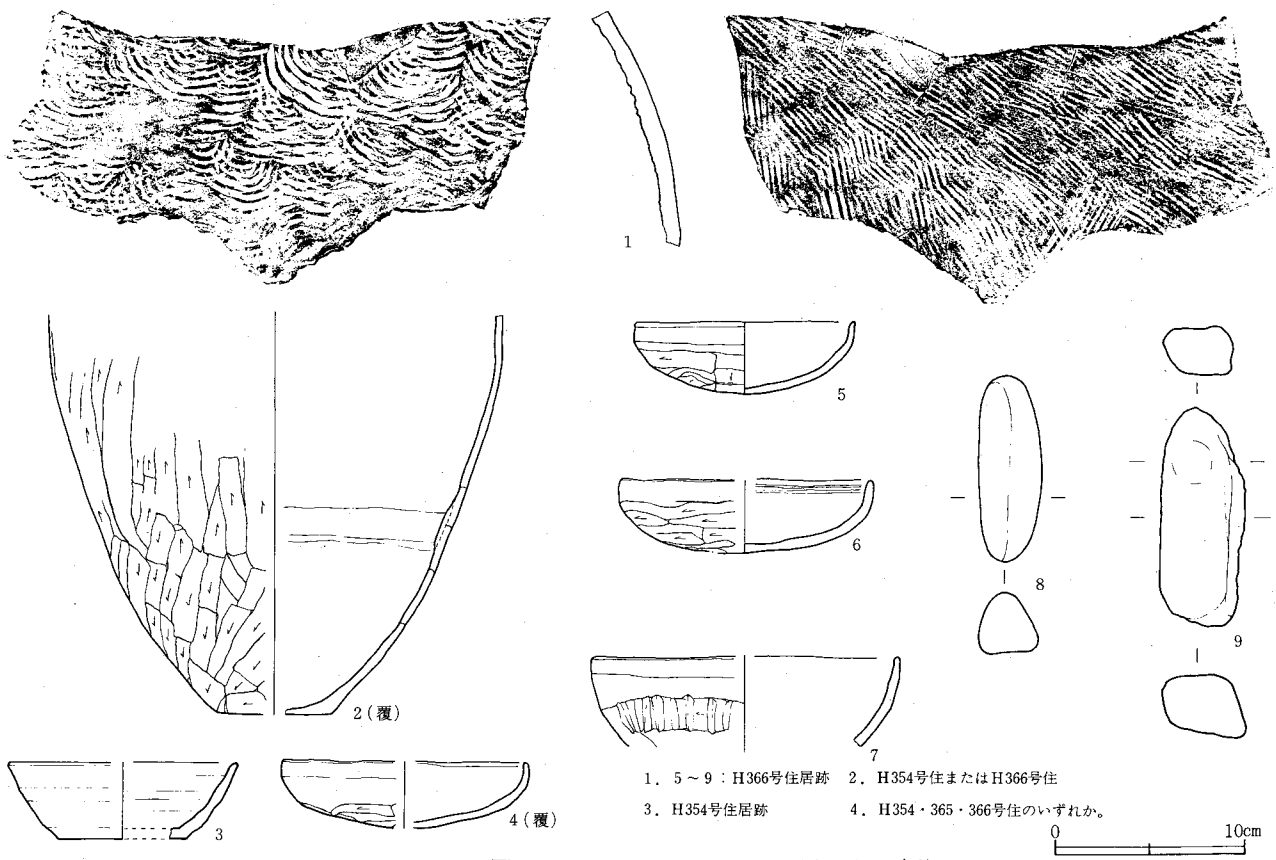
0 1 m

図－123　H354号・365号・366号住居跡重複関係図

H354号住居跡（5H－83）　**位置**　調査区域南東、レ3に所在する。東への傾斜を増す斜面に東からH366、354、365号住居跡と重複している。　**形状**　北壁と東壁が不明のため推定になるが、規模は南北4m、東西2.5mである。長軸方向はN－2°－E、面積は推定10.6m²、壁高17～36cmである。北壁西半分と西壁下に幅8～14cm、深さ5～6cmの周溝をめぐらす。　**ピット**　南西隅床面に1個（P1、39×28cm、深さ12cm）ある。性格等は不明である。　**カマド**　重複のため壊わされていて定かでないが、東壁南寄りと推定される。床面は平担で堅くしまっている。　**貯蔵穴**　不明。　**遺物**　西壁付近床面上3cmから須恵器椀（3）が出土している。**重複関係**　H366号住居跡との新旧関係は、本遺跡の床面が、H366号住居跡の南壁を切って造られているところから、本遺構の方が新しいと推定される。　（木部）

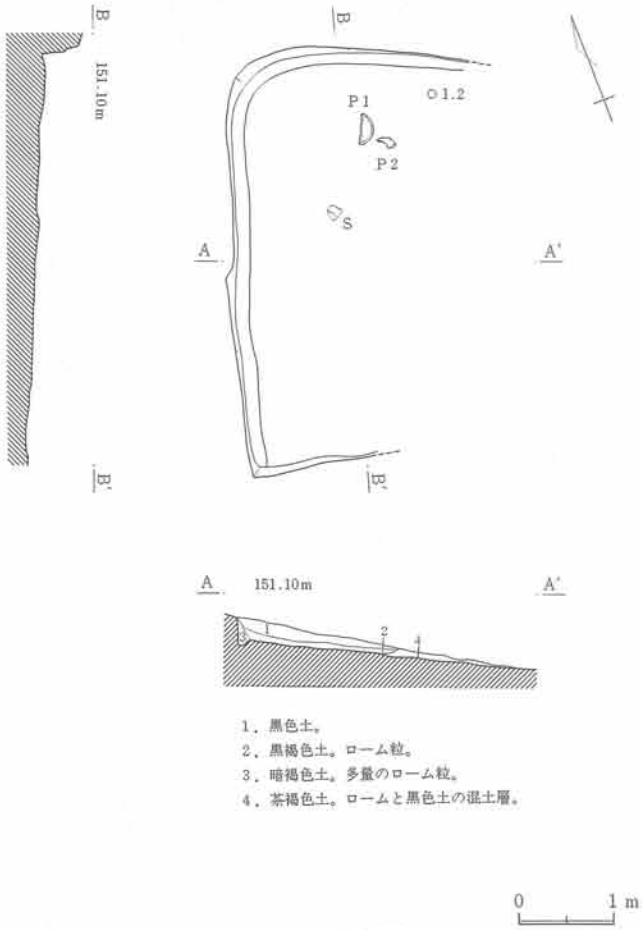
H365号住居跡（5H－94）　**形状**　北西～南東に長軸を持つ不整方形で、規模は南北4m、東西3.2mである。長軸方向はN－2°－E、面積は10.9m²、壁高11～40cmである。北、西の壁下及び東壁下のカマドより北に周溝をめぐらす。幅6～14cm、深さ1～2cmである。　**ピット**　南側床面に1個（P1、25×23cm、深さ13cm）、北壁に接して1個（P2、20×16cm、深さ床面とほぼ同）ある。　**カマド**　東壁中央やや南寄り。カマド主軸はN－56°－Eで西壁にほぼ直交する。全長90cm、袖部内幅60cm、燃焼部長82cm、壁への掘り込み角度71°で、壁外掘り込みは東に向かって左側74cm、右側45cmである。袖部に粘土使用。火床面は床面より14cm低い。　**貯蔵穴**　南東隅、不整形で規模は100×34cm、深さ21cmである。重複関係　H366号住居跡との新旧関係は、カマド部分の地層断面から本遺構の方が古いと推定される。　（木部）

H366号住居跡（5H－95）　**形状**　ほぼ方形で、規模は1辺約5mである。主軸方向はN－9°－E、面積23.6m²、壁高23～57cmである。H354号住居跡重複部分と、カマド付近から南東隅を除いた部分の壁下に周溝をめぐらす。幅14～54cm、深さ12～14cmである。　**ピット**　床面にほぼ方形に並んでいるP1～P4は、柱穴と考えられ、規模はいずれも径20～30cmで、深さは約30～50cmの円形である。P1とP2には建て替えが認められる。　**カマド**　東壁南寄り。全長80cm、袖部内幅は推定60cm、燃焼部長75cm、壁外掘り込みは80cmである。火床面は床面とほぼ同じ高さである。　**貯蔵穴**　南東隅、円形で規模は86×70cm、深さ29cmである。　**重複関係**　H365→本住居跡→354号の順と推定される。　（木部）



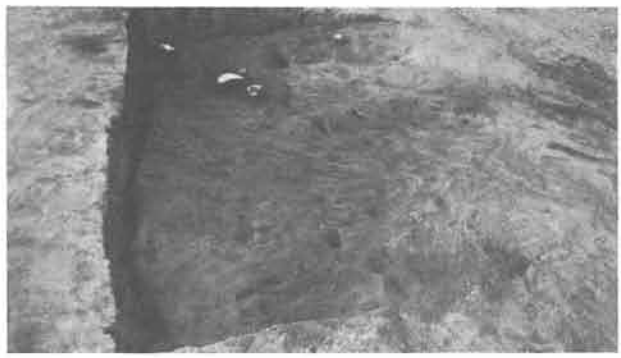
図－124　H354・365・366号住居跡出土遺物

出土遺物　**須恵器**　甕（1）、胴部片である。外面は平行叩き目痕、内面には波状の当て具痕を残す。叩きしめは良好で、焼成も堅緻である。色調は暗灰色。　坏（3）、小破片である。ロクロ回転方向不明。底部切り離し技法不明。暗灰色で、黒色粒を多量に含む。　**土師器**　甕（2）、胴上半部に向けて縦ヘラ削り、底部に向けて斜ヘラ削りの施された破片である。内面は平滑であるが、粘土接合痕を残す。色調は暗灰色。砂粒を多量に含む。　坏（4～6）、4は口唇部が丸味を帯びて、やや内傾する。色調は暗褐色。軟質。5は口唇部がやや外傾する。色調は茶褐色。6は口縁部が直立する。色調は暗褐色。3個体とも底部はヘラ削り、口縁部は横ナデが施される。6には口縁部内面にハケ条痕が認められる。　椀（7）、体部外面はヘラ削りにより波状を形成する。口縁部は内外面横ナデ。内面は平滑である。色調は明褐色。軟質。　**石製品**　用途不明の小石8と9が出土。9上面には浅い円形の凹が認められる。　（中束）

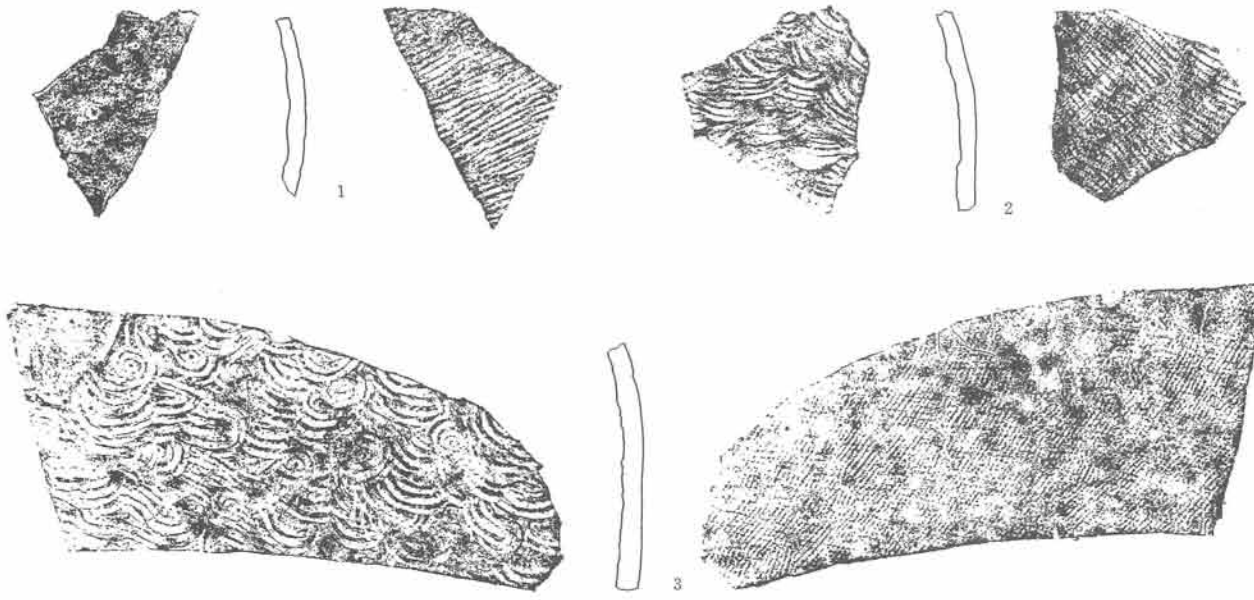


図－125　H355号住居跡

H355号住居跡（5 H－84）　**位置**　調査区域東端、レ6に所在する。台地の南北位置の中央付近に当たり、東へ傾斜する斜面の途中の所にある。　**形状**　住居跡の東側の約半分が斜面によって削り取られていて、全体の正確な形状を把握することは不可能だが、北壁と南壁が東側で内に寄っている台形と推定される。南壁と西壁はほぼ直線だが、北壁は外側にゆるく彎曲している。南北4.3m、東西2.8m以上、長軸方向はN－11°－E、面積12m²以上、壁高0～45cmである。北～西の壁下には幅10～18cm、深さ6～11cmの周溝をめぐらす。　**ピット**　北側の床面に半円形とややほそ長い形のピットが2個（P1、P2）ある。P1は32×14cm、深さ15cm、P2は20×10cm、深さは不明である。住居跡との関係は不明である。　**カマド**　削平のため不明。　**貯蔵穴**　削平のため不明。　**遺物**　1、2は床面上14cmより、3は床面上17cmより出土。　（木部）



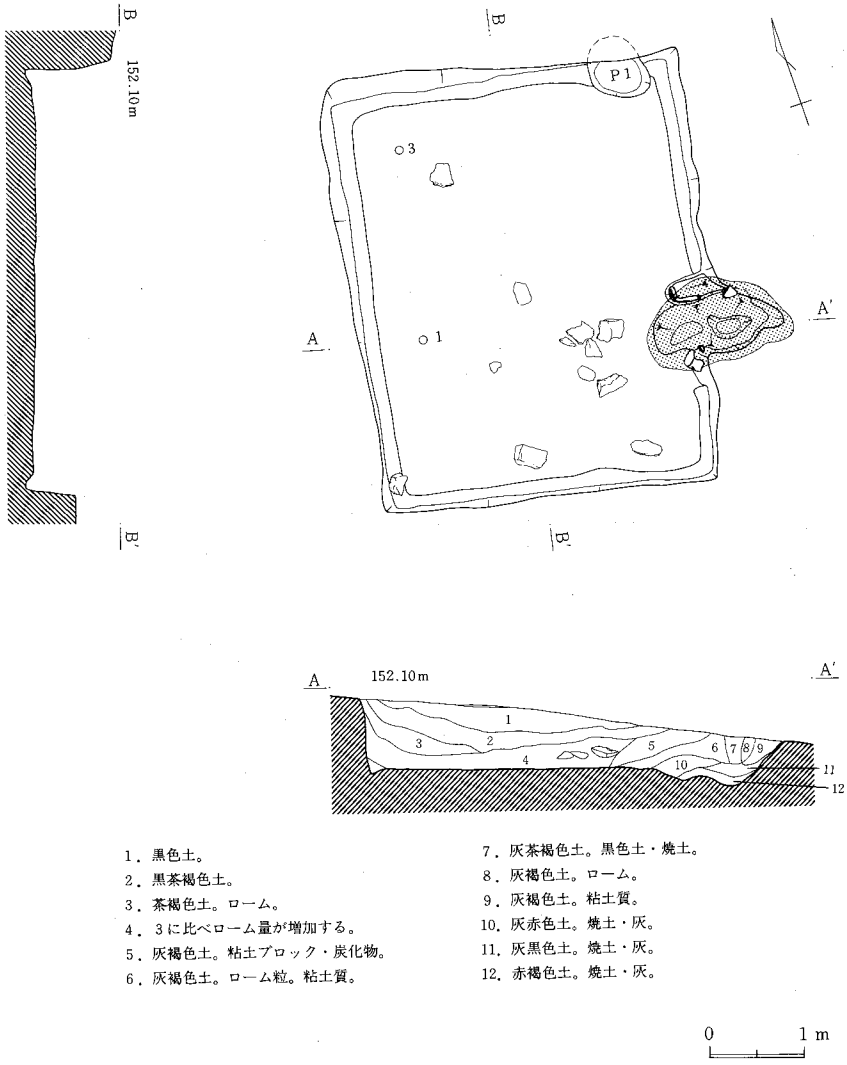
住居跡全景



図－126　H355号住居跡出土遺物

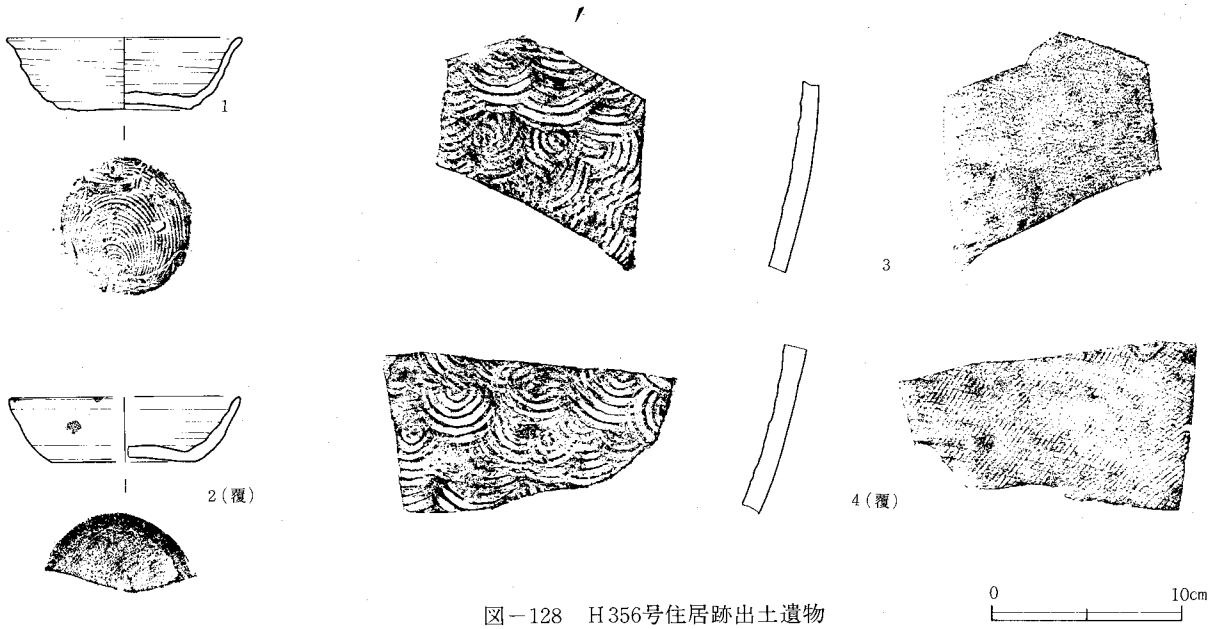
出土遺物　　**須恵器**　甕（1～3）、いずれも甕胴部の破片である。1は外面に平行叩き目痕を残し、内面にはナデによる調整が加えられる。色調は内面で紫を帯びた暗灰色、外面で暗灰色を示す。黒色鉱物の溶解がみられ、さらに外面には自然釉が掛かる。2は外面に格子状叩き目痕、内面に波状の当て具痕を残す。色調は淡い暗灰色。微細な白色粒を含む。3の外面では、平行条の叩き目が重複して、格子状を形成する。内面は同心円状の当て具痕を残す。色調は内外面ともに艶のある黒灰色。外面には自然釉が掛かる。礫や白色粒を含む。焼成は堅緻である。　（中束）

H356号住居跡



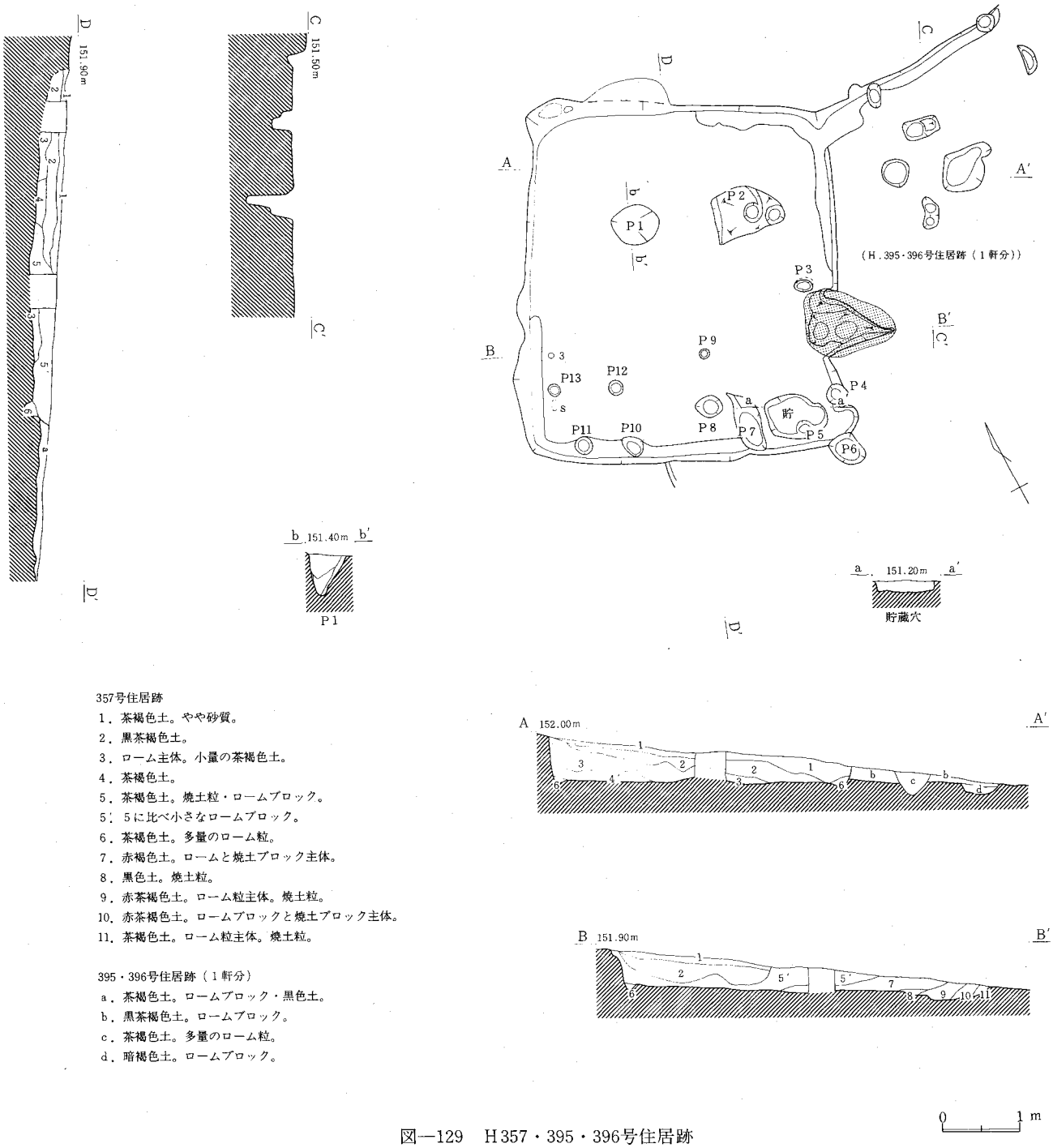
図－127　H356号住居跡

H356号住居跡（5 H－85）　**位置**　調査区域東斜面北部、タ6～レ6に当り、東傾斜の始まり部分に所在する。**形状**　ほぼ南北に長軸を持つ長方形で、南北4.4m、東西3.6mである。四壁とも直線的で、長軸方向はN－10°－E、面積は15.6m²、壁高31～83cmである。カマド部を除く壁下には周溝をめぐらす。幅10～20cm、深さ5～8cmである。　**ピット**　北東壁下に壁内へ30cmほど入り込むように所在する。径74×56cm、深さ79cmで、貯蔵穴的な機能を持ったものと見られる。　**カマド**　東壁中央南寄りにある。長さ40cmの粘土質の左側袖部先端と右側袖部に凝灰質砂岩の切石を置く。カマド前に散乱している凝灰岩質砂岩の切石は、カマド構築に使用されたものと見られる。全長112cm、袖部内幅51cm、燃焼部長さ66cm、壁への掘り込み角度44°で、壁外掘り込みは84cmである。火床面は床面より20cm程低く、袖入口に灰かき穴と見られる幅45cm、奥行40cm、深さ16cmのくぼみがある。　**遺物**　カマド内底部より土師器片、1は床面上で3は床面から＋25cm。　**テフラ**　覆土上端にわずかのB軽石純層が認められた。　（近藤）



図－128　H356号住居跡出土遺物

出土遺物　　**須恵器**　坏（1・2）、1は右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。色調は内面で白味を帯び、外面にはいぶしが掛かる。2はの底部切り離しは回転糸切り。体部及び口唇部の一部に煤が付着する。砂粒を多量に含む。　甕（3・4）、胴部片。3は外面に平行叩き目痕、内面に同心円状の当て具痕を残す。4の外面では平行条の重複により、格子状の叩き目痕が形成され、内面では同心円状の当て具痕が認められる。ともに堅緻である。（中束）



357号住居跡

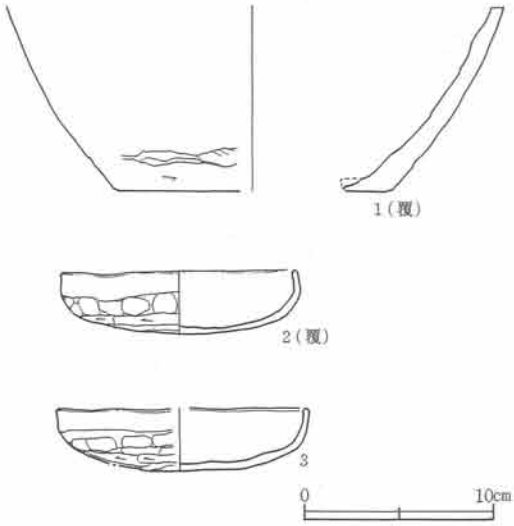
1．茶褐色土。やや砂質。
2．黒茶褐色土。
3．ローム主体。小量の茶褐色土。
4．茶褐色土。
5．茶褐色土。焼土粒・ロームブロック。
5'．5に比べ小さなロームブロック。
6．茶褐色土。多量のローム粒。
7．赤褐色土。ロームと焼土ブロック主体。
8．黒色土。焼土粒。
9．赤茶褐色土。ローム粒主体。焼土粒。
10．赤茶褐色土。ロームブロックと焼土ブロック主体。
11．茶褐色土。ローム粒主体。焼土粒。

395・396号住居跡（1軒分）

a．茶褐色土。ロームブロック・黒色土。
b．黒茶褐色土。ロームブロック。
c．茶褐色土。多量のローム粒。
d．暗褐色土。ロームブロック。

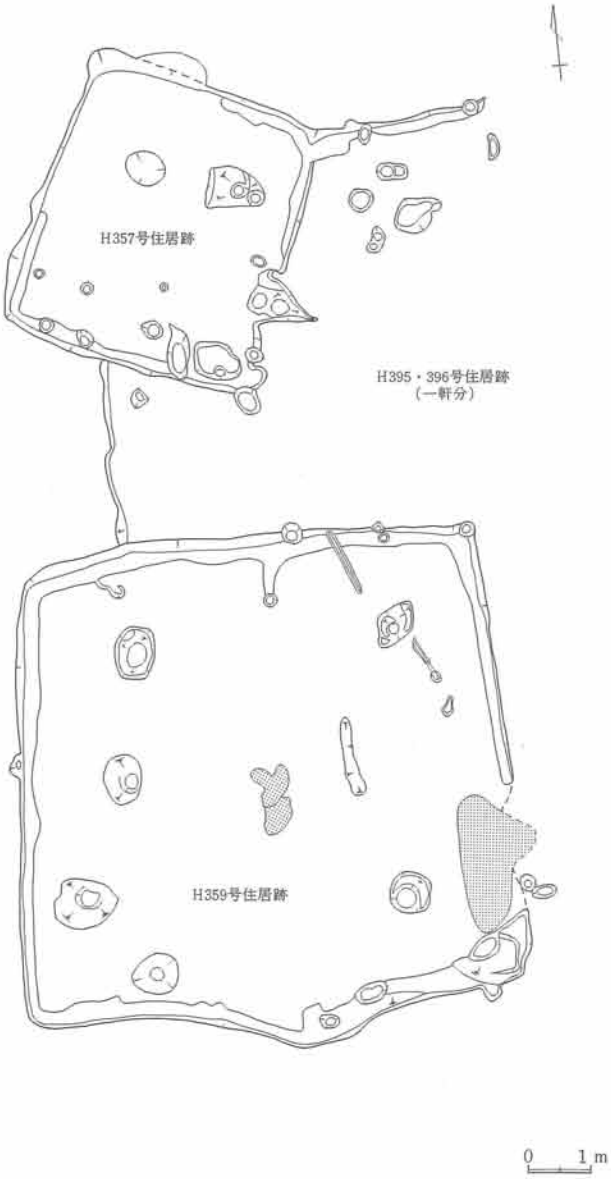
図—129　H357・395・396号住居跡

H357号住居跡（5H—86）　**位置**　レ6の20m杭近くにあって、地形が東へ傾斜し始めるところに位置する。　**形状**　南北4.45m、東西3.91mの長方形を呈す。長軸は南北で、その方向はN—28°—Eを測り、土地の傾斜とほぼ並行をなす。面積は16.8m²、壁高16～18cmである。北東および北西の隅角に隅丸を確認することができる。壁の形状をみると、北壁以外は、弱く外側に彎曲している様子が窺える。周溝は北東および南西隅を中心に、幅6～28cm、深さ2～6cmのものが確認できる。　**ピット**　都合13確認されている。そのうちP1、P2、P7、P10を柱穴と推定する。ともに東西の柱間距離1.5m、南北の柱間距離3mを測る。柱穴以外のピットについては、その性格は不明である。また、本遺構と重複するH395・396号住居跡との関連も出てくるが、どのピットがどの遺構に付設されたものかも一切不明である。　**カマド**　東壁中央南寄りにある。右側袖部は地山をそのまま三角形状に残している。全長110cm、袖部内幅78cm、燃焼部長45cmである。地層断面図から見る限りでは、カマドの主構築材は茶褐色の粘質土である。火床面は住居床面より9cmほど低くなっている。　**貯蔵穴**　南東隅、不整円形で規模は84×58cm、深さ14cmである。　**遺物**　P7の近くの床面で須恵器甕（？）の底部（1）、西壁近くの床面より土師器坏（3）が出土している。　**重複関係**　本遺構と重複するH395・396号住居跡との新旧関係は、本遺構がいずれよりも新。　**その他**　ピットの位置や数をみると、建て替えが行われた可能性も少しく残る。　（中澤）



図－130　H357号住居跡出土遺物

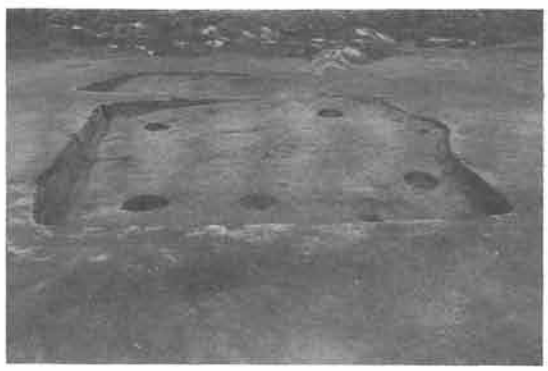
出土遺物　**須恵器**　1の器形は甕であろうか。胴下半部から底部にかけて残存する小破片である。胴下半部外面は細かな平行条の叩き目痕を数ケ所に留め、底部及び周辺部にはヘラ削りが施される。胴下半部内面には粘土接合痕を残し、指ナデが加えられる。色調は暗灰色を示す。黒色粒や微細な白色粒を多量に含有する。焼きしまりは良好である。　**土師器**　坏（1・2）、1の断面部分では口縁部がやや内傾する形状に表現されているが、全体的には表面の表現にみられるような、直立に近い形態を示す。口唇部は丸味を帯び、口縁部内外面に施された横ナデの幅は狭い。底部は中央付近で不定方向のヘラ削りが施されたのち、その周辺に一巡りのヘラ削りが加えられる。底部ヘラ削りと口縁部横ナデとの中間に指頭痕を留める。口縁部内面には粗いハケ目痕を残すが、中央部分では平滑な仕上げが施されている。色調の主体は茶褐色。口縁部外面に黒斑状を示す部分が認められる。砂粒を含む。3は口縁部が緩やかに外傾し、口唇部で丸味を帯びて内湾する。口縁部は内外面横ナデ、底部は不定方向ヘラ削り整形が施され、中間には指頭痕を残す。底部内面中央付近でも指頭痕が顕著である。色調は茶褐色。砂粒や微細な雲母片を含む。　（中束）



図－131　H357・359・395・396号住居跡重複関係図

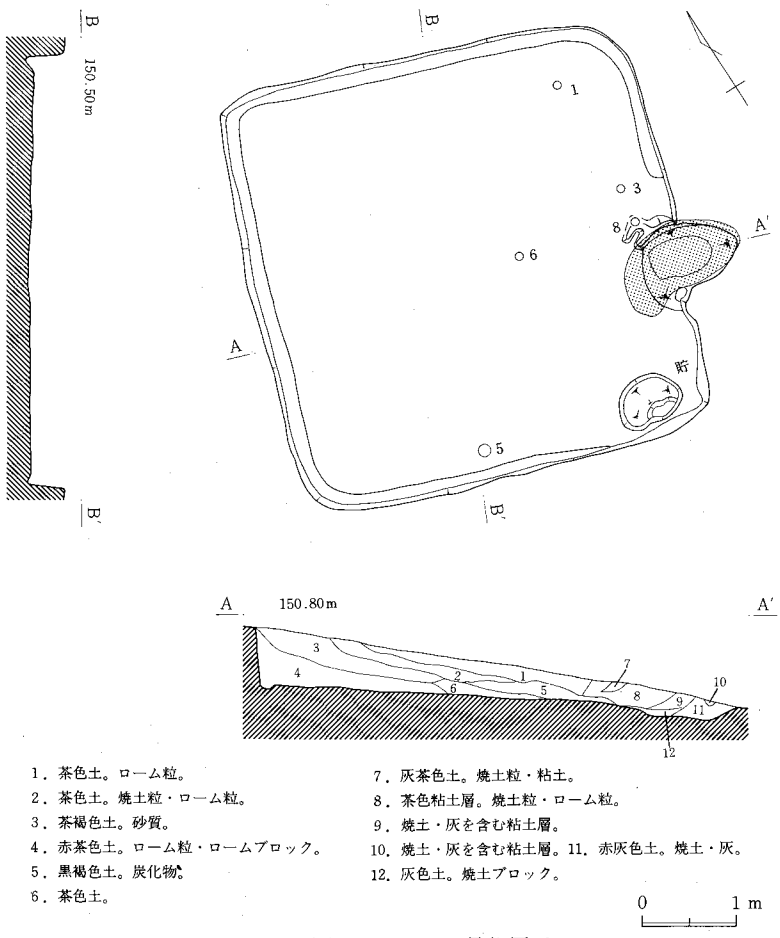
H357・395・396号住居跡全景

H357・359・395・396号住居跡重複状況



H359号住居跡全景

H358号住居跡



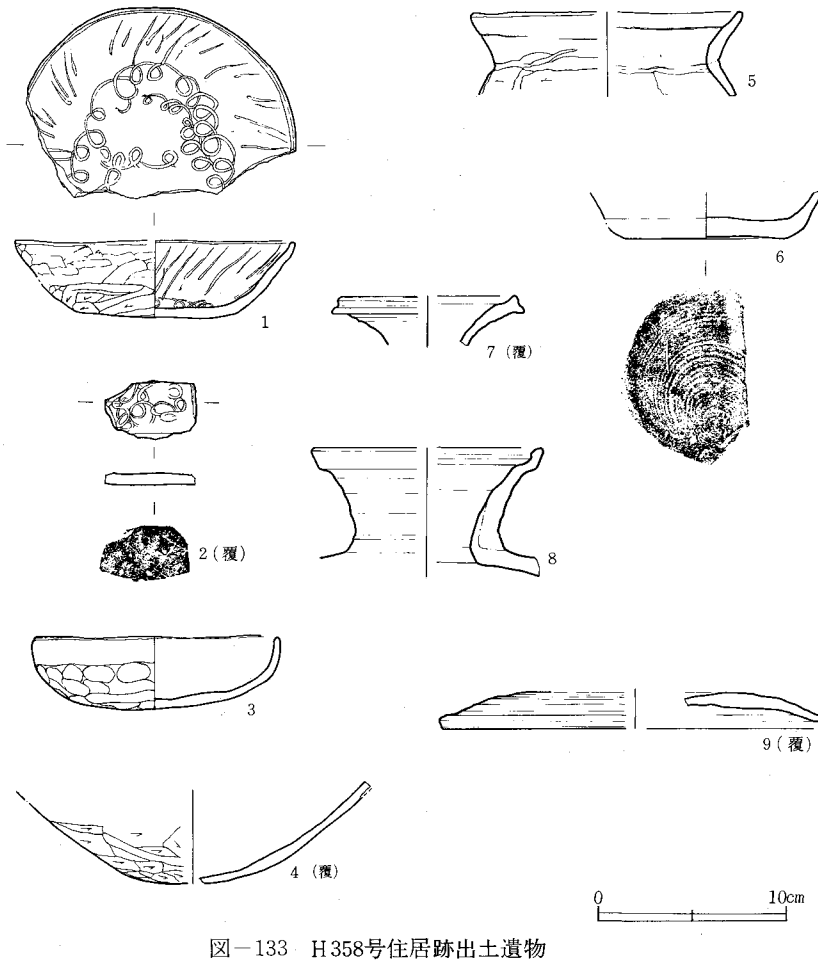
1．茶色土。ローム粒。
2．茶色土。焼土粒・ローム粒。
3．茶褐色土。砂質。
4．赤茶色土。ローム粒・ロームブロック。
5．黒褐色土。炭化物。
6．茶色土。
7．灰茶色土。焼土粒・粘土。
8．茶色粘土層。焼土粒・ローム粒。
9．焼土・灰を含む粘土層。
10．焼土・灰を含む粘土層。11．赤灰色土。焼土・灰。
12．灰色土。焼土ブロック。

0　1 m

図－132　H358号住居跡

H358号住居跡（5 H－87）　**位置**　調査区域の東斜面中央部、レ5～6に当る。　**形状**　隅丸方形で、南北4.5m、東西4.5mである。東壁は外方に弱い彎曲をもち、面積は19.3m²である。住居は傾斜置に立地しているため、壁高は西壁で109cm、東壁で13cmと高低の差がいちぢるしい。カマド付近および南東隅を除き、各壁下に周溝をめぐらす。幅6～16cm、深さ3～7cmである。　**カマド**　東壁中央南寄りにある。全長約100cm、袖部内幅56cm、燃焼部長66cm、壁への掘り込み角度30°で、壁外掘り込みは66cmである。火床面は住居床面より8cm低くなっている。カマドの袖部開口方向はN－91°－Eで東壁、西壁と直交しない。　**貯蔵穴**　東南隅に長軸70×47cm、深さ26cmの半切すり鉢状を呈し、長円形である。　**遺物**　住居北西隅の周溝寄り床面から釘状鉄製品、これよりやや内寄りから鉄滓2個が出土した。カマド周囲の床面～床面上12cmのところから土師器坏（1・3）、土師器甕口縁部（5）、須恵器壺口縁部（8）が出土している。

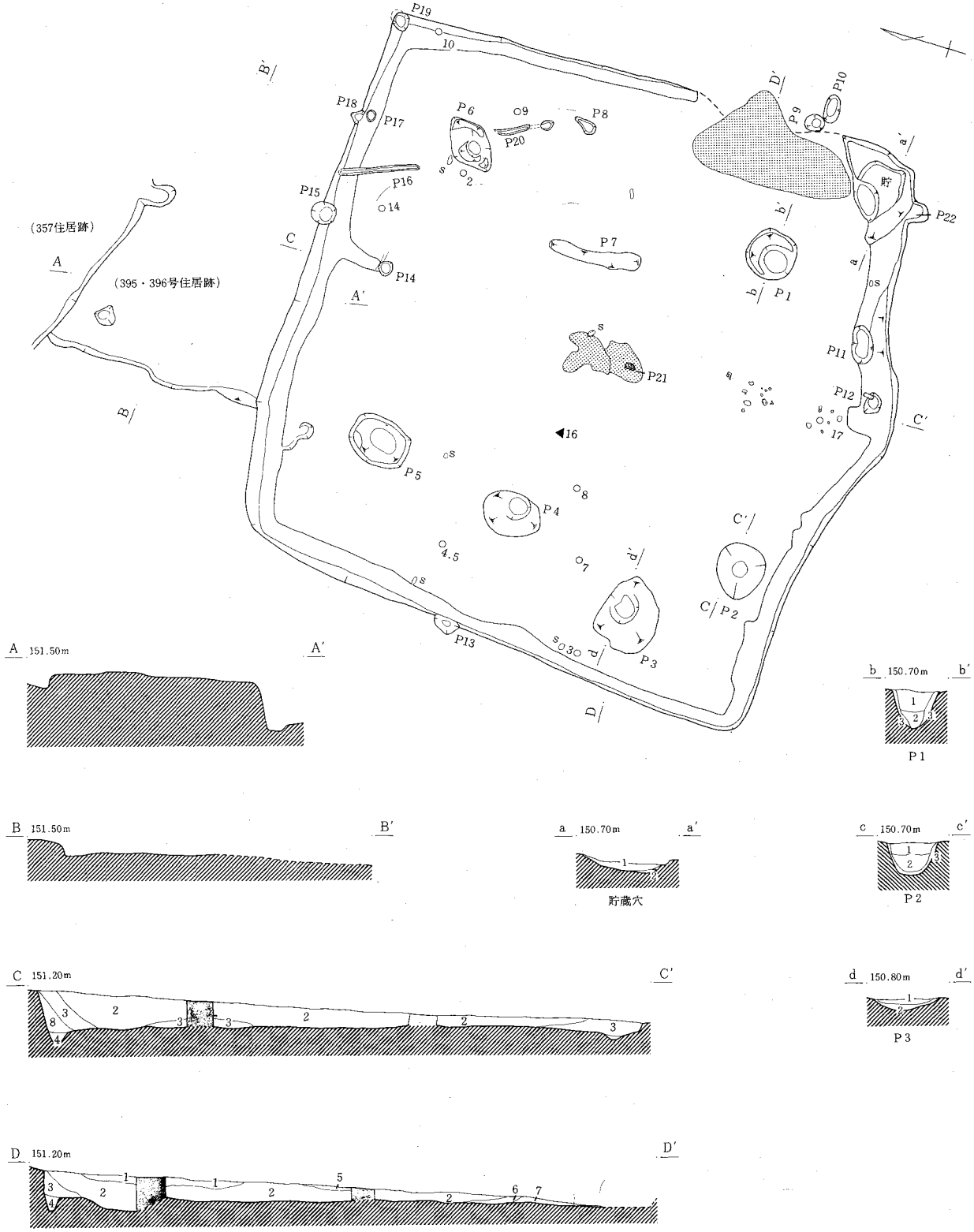
（近藤）



図－133　H358号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　坏（1～3）、1は内面に暗文の施された平底状の坏で、底部はヘラ削り整形である。色調は淡茶褐色。少量の酸化鉄粒や微細な金雲母片を多量に含む。やや軟質で、器面の荒れが著しい。2もラセン状暗文の施された坏片である。底部には線刻「井」が認められる。3は軟質であり、器面の荒れが著しい。指頭痕が幅広く認められる。砂粒を多量に含む。甕（4・5）、4は底部外面にヘラ削りの施された大型甕の破片である。5は小破片であるが、口縁部内外面横ナデ、肩部外面には横ヘラ削りが認められる。肩部内面に粘土接合痕を残す。　**須恵器**　坏（6）、右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。黒色粒や多量の砂粒を含み、軟質である。長頸壺（7）、口縁部の破片である。色調は淡灰色。堅緻である。　壺（8）、口縁部の小破片である。色調は暗灰色を示す。礫や黒色粒・砂粒を含む。やや軟質である。　蓋（9）、右回転ロクロ使用。つまみ部を闕失する。つまみ部周辺には右回転ヘラ削りが施される。色調は淡い青灰色。砂粒を含むが、焼きしまりは良好である。　（中束）

H359号住居跡（図版31）



住居跡全体
1．黒色土。
2．黒褐色土。ローム粒。
3．暗褐色土。多量のローム粒。
4．暗褐色土。多量のローム粒。
5．赤褐色土。多量の焼土粒。同ブロック。
6．茶褐色土。多量のローム粒。同ブロック。
7．黒褐色土。ローム粒。
8．暗褐色土。多量のローム粒。同ブロック。

貯蔵穴
1．暗黒色土。灰・焼土・ローム粒。
2．ローム粒を主体とする褐色土。

P1
1．黒褐色土。多量のローム粒。炭化物。
2．黒褐色土。ローム粒。炭化物。
3．暗黒色土。多量のローム粒。

P2
1．黒褐色土。ローム粒。
2．暗褐色土。ローム粒。
3．暗褐色土。多量のローム粒

P3
1．暗褐色土。多量のローム粒。
2．茶褐色土。多量のローム粒。

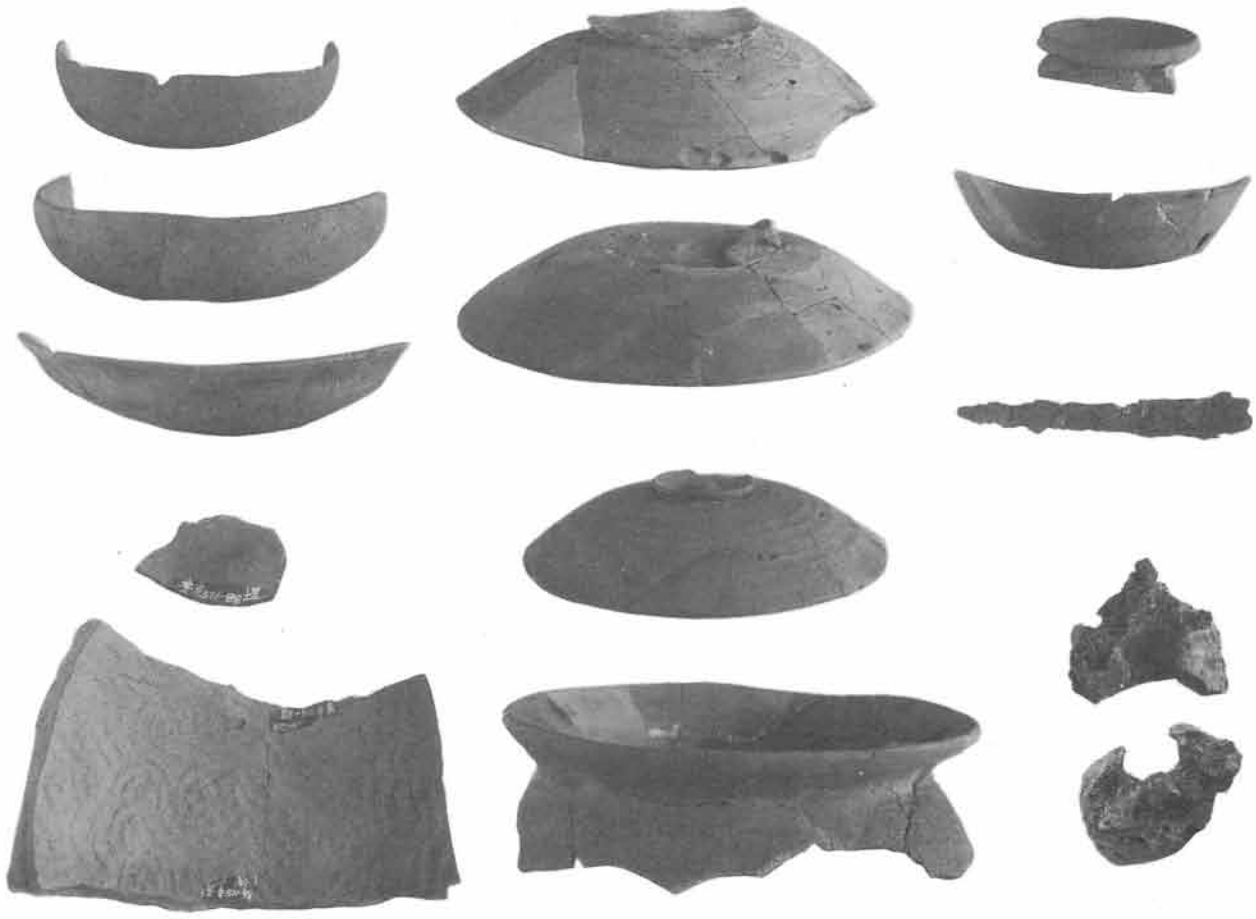
0 1 m

図－134　H359号住居跡

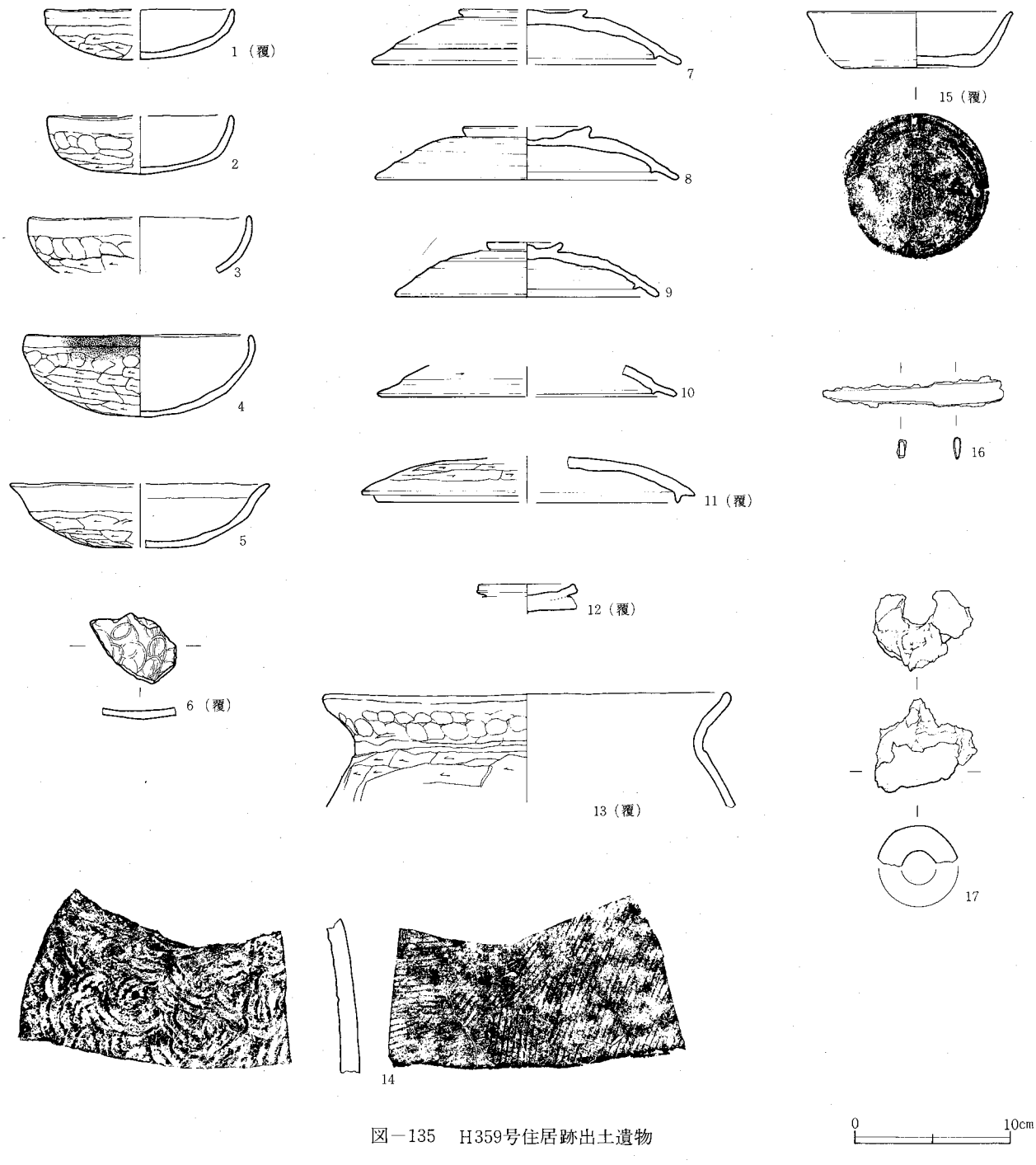
H359号住居跡（5H—88）　**位置**　調査区域東側中央、レ5に所在する。台地が南東に傾斜する東側斜面上の中央部分に当たる。　**形状**　北壁と南壁がほぼ平行になっている台形で、南北7.3m、東西8mである。北壁と東壁は直交し、東壁は西壁に比べて約30cm南端が長く、南壁は北壁に比べて約75cm西端が長い。南壁中央やや東寄りに、南壁から75cm外側に曲線的な張り出しがある。長軸方向はN—1°—W、面積58.8㎡、壁高35～68cmである。カマド付近及び南東隅を除いた全壁下に周溝をめぐらす。幅14～48cm、深さ5～15cmである。　**ピット**　P1、P2、P4、P5、P6は、いずれも規模が径60×80cm前後、深さ50cm前後であり、主柱穴と考えられる。P3は103×80cm、深さ20cmで、深さの点で主柱穴とは異なる。P3の性格、機能については不明である。また、P12、P14は対象的な位置にあり、溝が内に入っている点からみて、何らかの意味を持つものと考えられるが、詳細は不明である。さらに、P13、P15、P18、P19、P22は壁に沿う柱穴と考えられる。P15とP19、P13と北西の隅の間の距離は、約2.8mで等しく、規則性を持った壁側柱の配置である。P19の柱穴跡をみると、住居跡内側に向かって内傾してる。　**カマド**　傾斜地形のためにカマド壁が残存していないので痕跡で推定すると、東壁南寄りである。痕跡からみて地山を約20cmほど掘り残して袖としている。北東隅、袖部前端、南東隅はほぼ一直線になる。全長48cm、袖部内幅約70cm、燃焼部長48cm以上、壁への掘り込み角度は不明、壁外掘り込みは現状で30cmである。火床面は床面とほぼ同じ高さである。　**貯蔵穴**　南東隅、不整円形で2段になっており、規模は82×64cm、深さ34cmである。　**遺物**　北東及び北西床面から土師器坏（1、2、3、4、5）が、周辺部床面から須恵器蓋（7、8、9、10、11）が出土している。南壁の張り出し部分から住居跡中央にかけて床面からは多数の鉄滓及び羽口（5）が出土している。

住居中央付近では、床面から19cm浮いて刀子片（16）が出土した。　**重複関係**　北側でH395・396号住居跡（一軒分）と重複している。新旧関係は、本遺構がH395・396号住居跡の床面を壊して造られていることから、本遺構の方が新しいと考えられる。（木部）

H395・396号住居跡（5H—124・125）　**位置**　タ5～6、レ5～6。　**形状**　北壁および西壁と床面の一部が残存するのみで、全容ははっきりと把握できない。当初、H395・H396号住居跡の2軒分を考えていたが、検討の結果、1軒分の竪穴式住居跡と考える。南北6・1m以上、東西6.5m以上の規模を持つ。面積・壁の形状・隅角の形状は不明である。周溝は北壁下に幅14cm前後、深さ7cm前後のものがわずかに認められる。　**ピット**　都合9個確認されたが、P9については、本遺構と重複するH359号住居跡に付く可能性もある。また、H357号住居跡との関係も不明である。　**遺物**　地形が東側に傾斜しており、機械による表土剝ぎ作業で破壊されたことも考えられるが、カマドについては不明。　**貯蔵穴**　不明。　**遺物**　なし。　**重複関係**　H357号住居跡およびH359号住居跡と重複し、本遺構がいずれよりも旧である。（中澤）

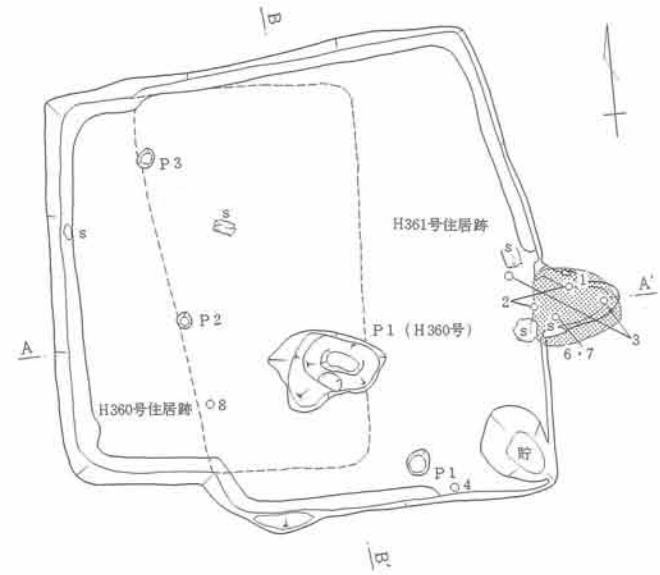


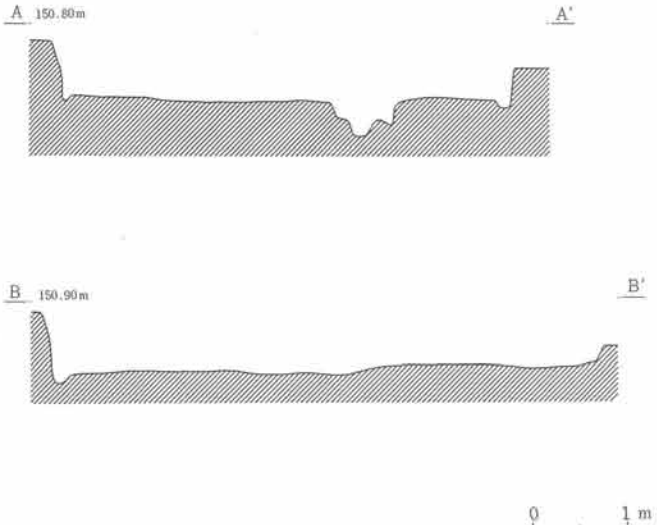
H359号住居跡出土遺物



図－135　H359号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（13）、口縁部が〝く〟字状に外反する大甕。口縁部は外面に指頭痕を残す横ナデ。胴部内面は横ヘラナデ。　坏（1～6）、1～4は丸底の坏で、口縁部外面及び体部内面に横ナデ、底部内面に指押えあるいは指ナデ、外面はヘラ削りで口縁部との境に指頭痕を残す。4は深みがあり、口縁部が内彎する古い形。5は口縁部が外反する盤状の坏で、底部との境の稜は不明確。調整は他のものと同じ。6は内面にラセン状の暗文を施す。**須恵器**　坏(15)、ロクロ成形は底部には切り離し後、全面回転ヘラ削り調整を施す。色調は白っぽい灰色で、やや甘い焼成。ロクロの回転方向は左。　蓋（7～12)、ロクロ成形。7・8は同じ胎土で同じつくりだが、8は灰褐色で酸化炎焼成となっている。つまみは円盤状でやや高い器高を持つ。外面は天井部からカエリの付近まで回転ヘラ削り調整、内面はカエリの内側に軽いヘラナデを施す。8はつまみ中心部を欠損。9は色調灰色の堅緻な焼成。やや小さめなつまみを持つ。中心部は突起する。外面の回転ヘラ削り調整は天井部のみで、7・8より後退する。内面のヘラナデは認められない。10の外面はカエリの位置まで回転ヘラ削り調整がみられ、そこで弱い段になる。内面調整法は不明。11は胎土中に多量の黒色粒子を含む蓋で、焼成は堅緻。外面調整はカエリの手前まで回転ヘラ削り、カエリ付近に手持ヘラ削りを施す。内面はカエリの内側に軽いヘラナデ。偏平なつくり。12は内面にヘラナデ。7～12のロクロ回転は右。　大甕(14)、内外面に叩き目。　**鉄製品**　刀子（16)、棟方に関。　**その他**　羽口（17)。　（唐澤）





図－136　H360号・361号住居跡

住居跡全景

H361号住居跡南壁遺物４出土状況

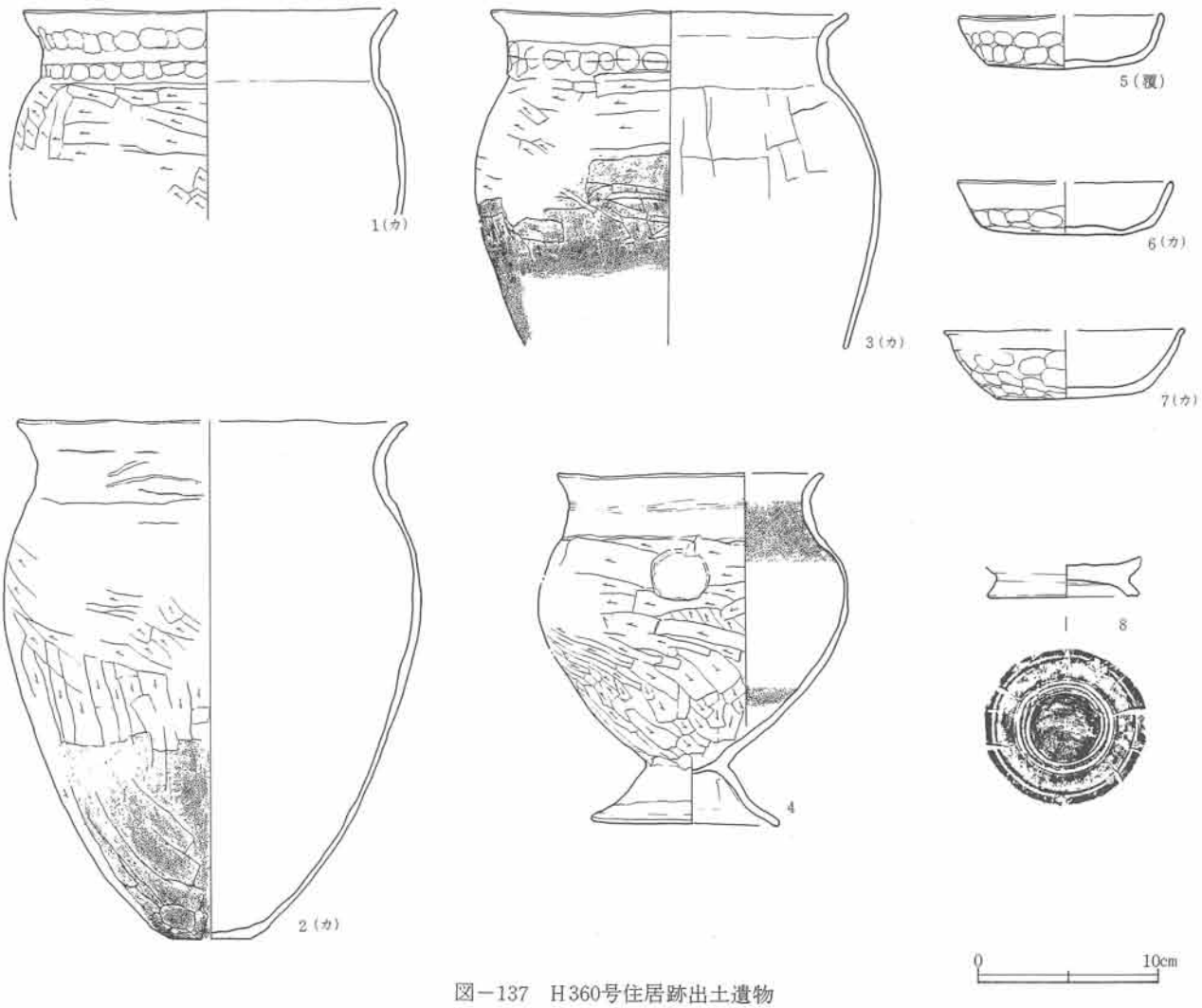
カマド焚口付近遺物出土状態

H360号住居跡（５Ｈ－89）　**位置**　調査区域東端、レ３～４にある。台地南東部の斜面上に位置する。周囲には竪穴式住居跡や掘立柱建物跡等の遺構が密集している。　**形状**　西北～南東に長軸を持つ長方形で、南北3.95m（現存長）、東西3.15m（推定）である。北・南・西壁はほぼ直線であるが、東壁はH361号住居跡と重複するため定かでない。隅角の状態は北西・南西隅のみ知り得るが、両者共隅丸である。長軸方向はＮ－２°－Ｅ、面積は12.6m²、壁高83cm（最高値）である。周溝は現存部分にはすべて巡っており、幅12～15cm、深さ10cm前後である。　**ピット**　本遺構推定範囲の東壁中央南寄りにある。124×58cm、深さ42cmである。カマドの痕跡とも推定される。　**重複関係**　H361号住居跡の西側部分と重複する。H361号住居跡１つ建て替える前のものと考えられる。　**遺物**　カマド内より鉄滓、土師器甕（1、2、3）、土師器坏（6、7）、南壁東寄りの床面より土師器台付甕（4）、南西隅床面より須恵器埦高台部分（8）が出土している。

（木部）

H361号住居跡（５Ｈ－90）　**形状**　南東に長軸を持つ台形で、南北4.92m、東西3.9m（推定）である。北・南壁は直線であるが、東壁は外に約30cm彎曲している。又東壁は南側が西壁より約45cm長い。西壁は重複するため定かではない。隅角の状態は北東・南東隅共隅丸である。長軸方向はＮ－６°－Ｗ、面積は12.9m²、壁高18～57cmである。周溝は西壁は不明であるが、カマドから貯蔵穴付近を除く東・南・北壁に沿って巡っている。幅８～22cm、深さ１～10cmである。　**ピット**　床面に３個ある。Ｐ１は南東隅にあり、29×22cm、深さ41cm。Ｐ２は西壁推定線中央に位置し、18×15cm、深さ23cm。Ｐ３は西壁推定線北寄りに位置し、10×14cm、深さは不詳である。Ｐ１は入口施設に係わる柱穴と推定されるが、他のものについては機能・性格等不明である。　**カマド**　東壁中央南寄りにある。石材で構築されており、全長86cm、袖部内幅60cm、燃焼部長72cm、壁への掘り込み角度65°、壁外掘り込みは86cmである。カマドの手前にある２個の石は、カマドの袖部に使用されたものと考えられる。住居床面とカマド燃焼部のレベル差は－４cmである。貯蔵穴は南東隅にあり、長円形を呈し、規模は92×68cm、深さ30cmである。　**重複関係**　本住居跡はH360号住居跡を建て替えたものと推定される。

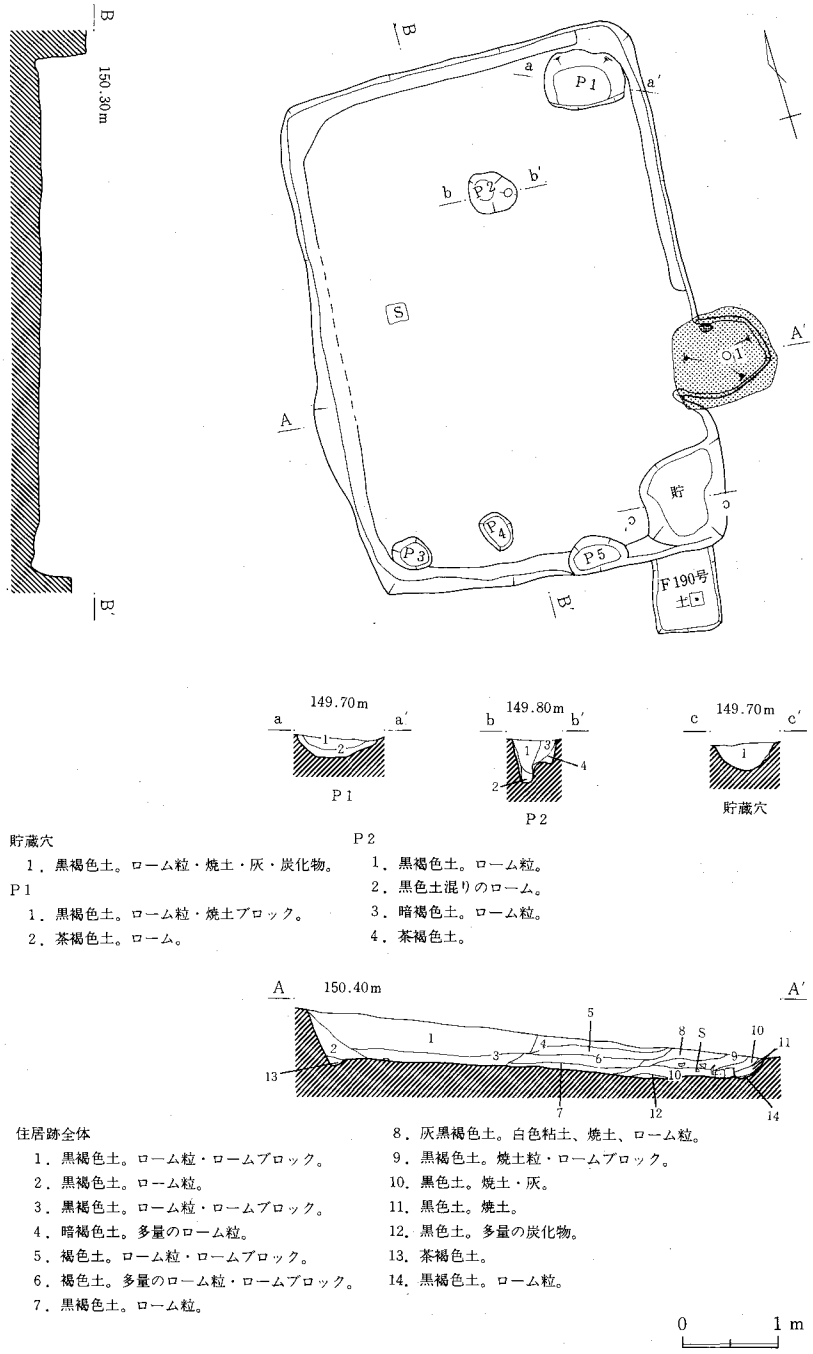
（鵜木）



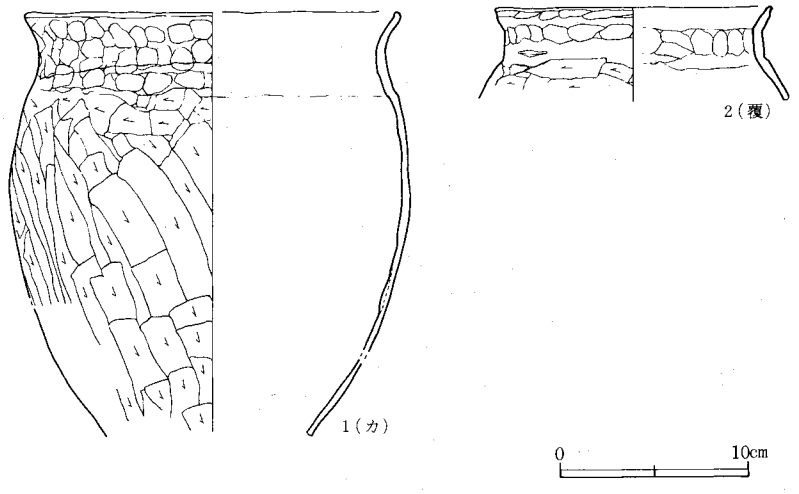
図－137　H360号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1～3）、1と3は最大径を胴部にもち、口縁部は受け口状を示す。口縁の立ち上がり部分には指頭痕が顕著に残る。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横及び斜ヘラ削り、胴下半部に向けて縦ヘラ削り整形が施される。1は砂粒を多量に含む。色調は淡い暗褐色を示す。3は口唇部がやや内湾し、丸味を帯びる。肩部内面には横方向のヘラ痕が認められる。胴下半部外面には多量の煤が付着する。砂粒を多量に含み、色調は淡い暗褐色である。2は土器片が微妙な残存状態を示し、形が不安定であった。そのため残りのよい部分を計測し、図上から器形復元を試みた。口縁部は緩やかに外反し、全体的に器壁は非常に薄い。口縁部は内外面横ナデ、胴上半部外面は斜ヘラ削り、胴下半部に向けて縦及び斜ヘラ削りが施される。胴部内面では器面が著しく荒れている。色調は明茶褐色を示す。砂粒を多量に含み、軟質である。胴下半部外面には煤が付着する。　台付甕（4）、緩やかに外反する口縁部、肩部は大きく張り出し、最大径を胴上半部にもつ。肩部には直径3cm程の穿孔がみられる。穿孔は焼成後に施されたものであろうか。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横及び斜ヘラ削り、胴下半部に向けて斜ヘラ削りが施される。内面は平滑である。脚部はハの字形に開き、外面及び内面端部周辺には横ナデが施される。脚部内面には若干のヘラ痕が認められる。砂粒を含み、暗褐色を示す。　坏（5～7）、砂粒を含み、平底状を示す。5と7は軟質である。6は外面に煤が付着する。　**須恵器**　埦（8）、高台部のみ残存。右回転ロクロ使用。回転糸切り後に高台部貼り付け。やや軟質である。　（中束）

H360号住居跡出土遺物



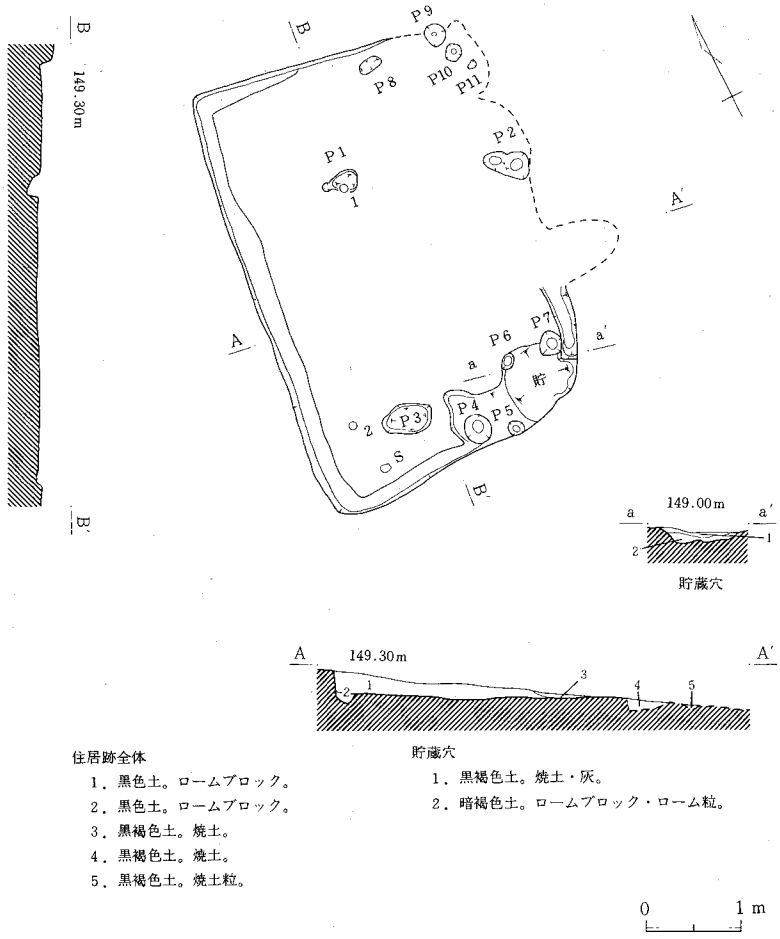
図－138　H362号住居跡



図－139　H362号住居跡出土遺物

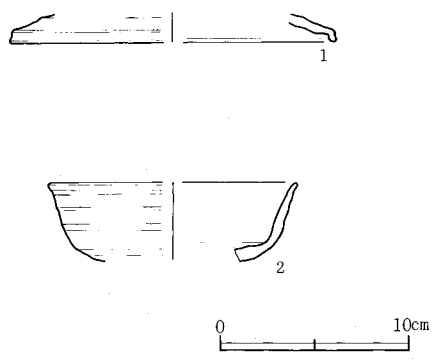
H362号住居跡（5H－91）　**位置**　東の谷地へ向かう傾斜面レ3～4にかけて所在する。ここには住居跡と掘立柱建物跡からなる遺構群がまとまりをもって存在する。**形状**　南北5.6m、東西3.9mの隅丸台形。北西隅は鈍角をなし、東壁北側は西壁に比べ30cm長い。南壁はやや外方にわん曲する。長軸方向N－60°－E、面積20.9m²、壁高24～66cm（北西側）。カマド及び貯蔵穴付近を除き周溝をめぐらす。　**ピット**　5個認められた。P1は82×62cm、深さ27cmで規模及び位置的に貯蔵穴に似る。P2・P5は深さ46cmないし58cmで柱穴にふさわしい。両ピット間の中心距離は406cmである。P3は深さ15cmで、南西隅にピットを持つ例は多い。P4は深さ12cmで出入口関連施設の痕跡とも見られる。　**カマド**　東壁中央南寄り。白色粘土使用の右袖部残存。燃焼部左壁には薄い安山岩1石が貼りつく。全長110cm、袖部内幅約70cm、燃焼部長100cm、燃焼部先端の壁への掘り込み角度50°。カマド焚口付近から南東隅にかけて、灰、焼土を散布する。　**貯蔵穴**　南東隅。方形を呈す。96×86cm、深さ30cm。P1も同様の性格のものか。　**遺物**　カマド内及び焚口付近、貯蔵穴内から土師器片が出土。カマド内の土師器甕は、燃焼部中央で、口縁部を煙道方向に向け、押しつぶされた状態で出土した。　**重複関係**　南壁東端でF190号土坑と切り合う。住居跡が旧い。（唐澤）

出土遺物　**土師器**　甕（1・2）、1は胴部上位に最大径を取る甕で、底部を欠失する。胴部は丸い張りを見せ、肩部から口縁部になだらかに続く。口縁部は緩やかに外反する。頸部の立ち上がりは明確ではないが、その傾向を見せる。口縁部は内外面に横ナデを施すが、外面には口縁部折り曲げの際の指頭痕を残す。胴部外面は肩部で2段の横ヘラ削り、それ以下は斜ヘラ削りを施す。胴部内面には横ヘラナデ痕が認められる。色調は淡褐色で、胎土中に細かい砂粒を多量に混ぜる。外面の所々には若干の焼土が付着する。2はいわゆるコの字状口縁を持つ甕で、肩部以下を欠失する。残存部分から見て、肩の張りの度合が大きい。口縁部内面の上位屈曲部は鋭い稜線を描く。口縁部は内外面に指頭痕の残存する横ナデを施す。肩部外面は横ヘラ削り同内面は横ヘラナデ調整である。頸部付け根の調整は雑で、肩部ヘラ削りの出入りが激しい。色調は茶褐色で、胎土中に細い砂粒を多量に混ぜる。肩部には薄く焼土が付着する。（唐澤）



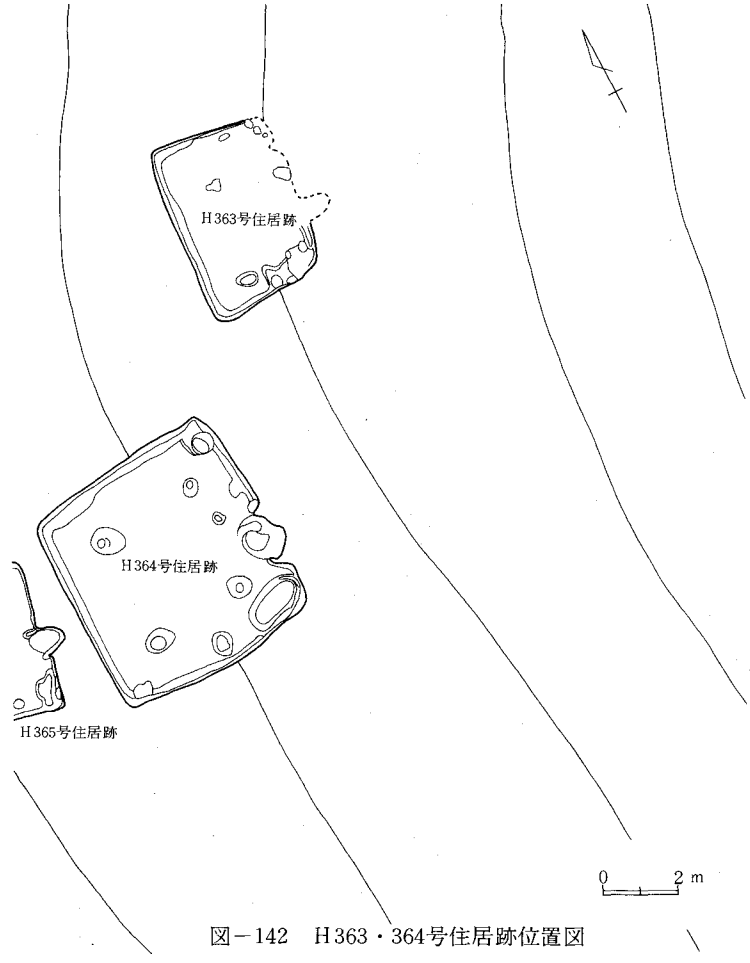
図－140　H363号住居跡

H363号住居跡（5H－92）　**位置**　調査区域の南東、レ4の東端に所在する。台地が東へ傾斜する中間に当る所である。　**形状**　西北から南東に長軸を持つ台形で、南北4.7m、東西3.3mである。西壁は東壁より南端が約60cm、北壁は南壁より西端が約30cm長い。西壁がほぼ直線であるのに対して、東壁はやや外へ彎曲する傾向にある。長軸方向はN－10°－E、面積13.1m²、壁高6～26cmである。西壁下から南壁下にかけて周溝をめぐらす。東壁カマドの南側にも周溝らしきものがみられる。幅10～24cm、深さ5～8cmである。　**ピット**　P1～P3及びP7は、位置的に柱穴とも考えられるが、深さはP2が西21cm、東15cm、P3が12cm、P7が26cmとバラついていて不明確さを残す。　**カマド**　東壁南寄り、斜面により削平されていて不明な点が多い。全長は推定で約84cm、袖部内幅は推定で約60cm、燃焼部長及び壁への掘り込み角度は不明、壁外掘り込みは推定で約84cmである。火床面は床面より18cm低い。　**貯蔵穴**　削平により不明確なため推定であるが、南東隅にあり、規模は94×66cm、深さ17cmの不整円形である。底面は凹凸が多く、しまりが悪い。　**遺物**　(1)は床面上16cmより、(2)は床面上10cmより出土。　（木部）

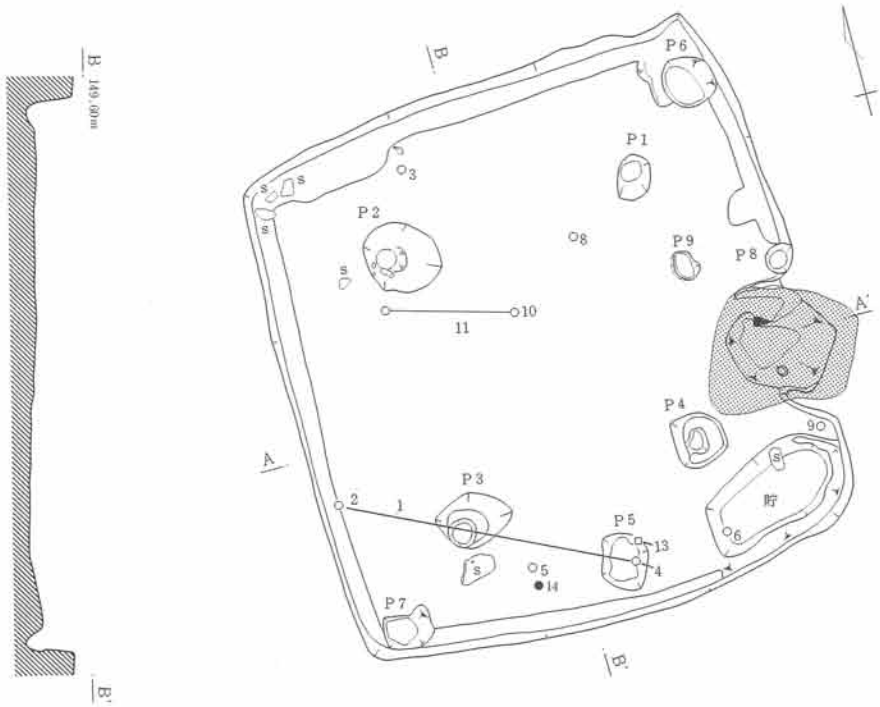


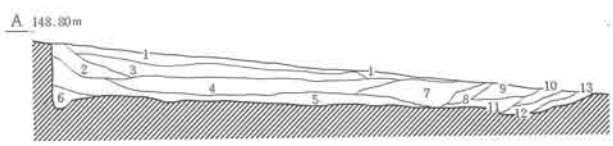
図－141　H363号住居跡出土遺物

出土遺物　**須恵器**　蓋(1)、端部のみ残存する小破片である。内面にかえりはなく、端縁の部分は丸味を帯びてハの字形に開く。色調は淡灰色を示す。砂粒を含むが、焼成は良好である。　坏(2)、小破片である。体部は緩やかに外傾し、口唇部で更に外反する。体部外面では成形時の凹凸が顕著であるが、内面は平滑である。底部の残存は極めて僅かである。底部はやや丸味を帯び、回転ヘラ削りが施される。色調は内面で暗灰色、外面ではやや黒味を増す。微細な白色粒を多量に含む。直径2～3㎜程の礫や、黒色鉱物も散見される。焼きしまりは良好である。　（中束）



図－142　H363・364号住居跡位置図





1．茶褐色土。
2．茶褐色土。ロームブロック。
3．茶褐色土。焼土粒・炭化物。
4．茶褐色土。ローム粒・焼土粒・炭火物。
5．茶褐色土。多量のローム粒。焼土粒。
6．茶褐色土。多量のローム粒。
7．茶褐色土。多量の焼土粒。炭化物。
8．茶褐色土。ローム粒・焼土粒。
9．茶褐色土。多量の焼土粒。炭化物。
10．赤褐色土。ローム粒・焼土粒。
11．茶褐色土。ローム粒・焼土粒。
12．青灰色土。多量の焼土粒。ローム粒。
13．赤褐色土。多量の焼土粒。ローム粒。

0 1 m

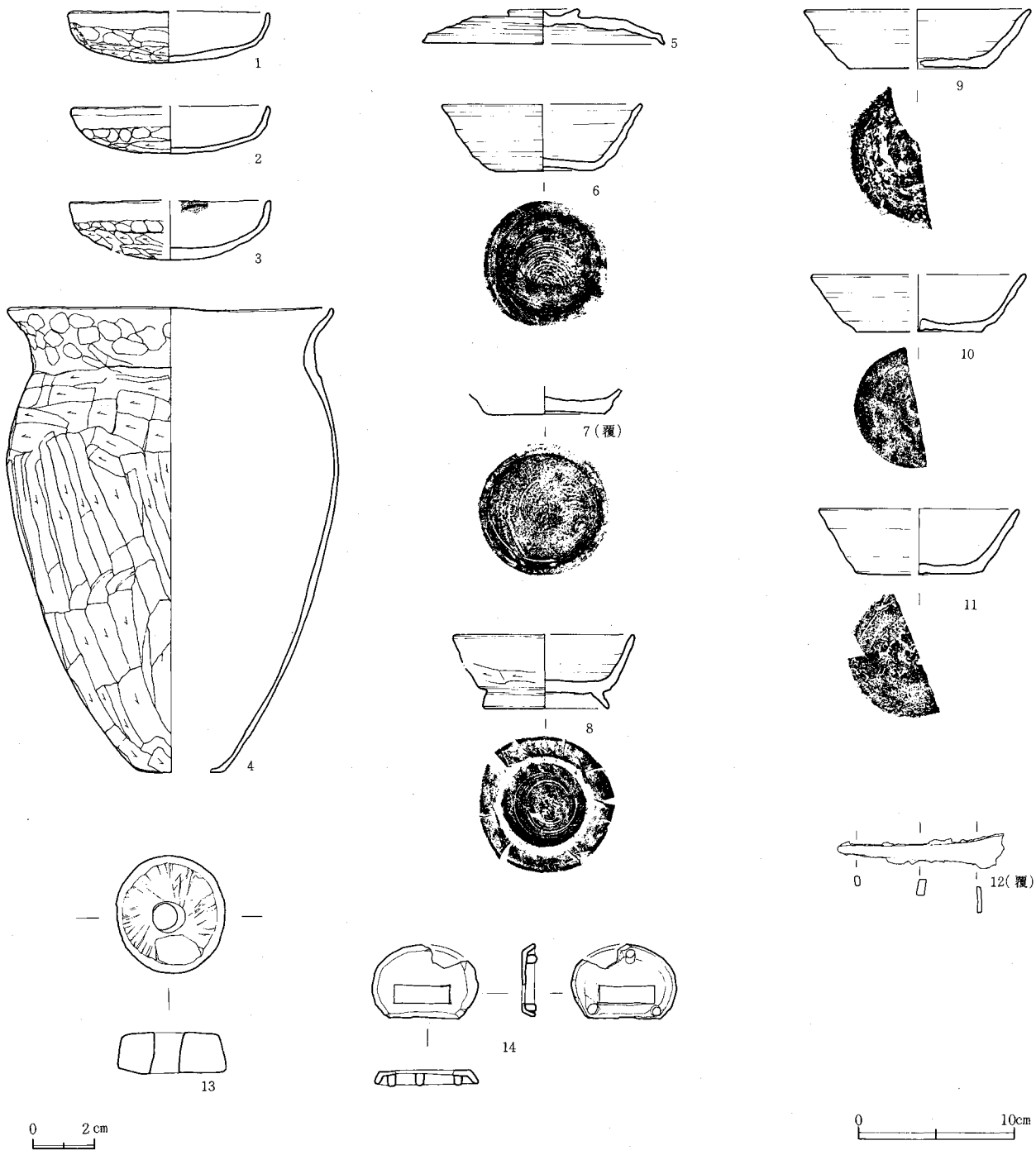
図－143　H364号住居跡

53　住居跡全景

54　貯蔵穴付近遺物6他出土状態

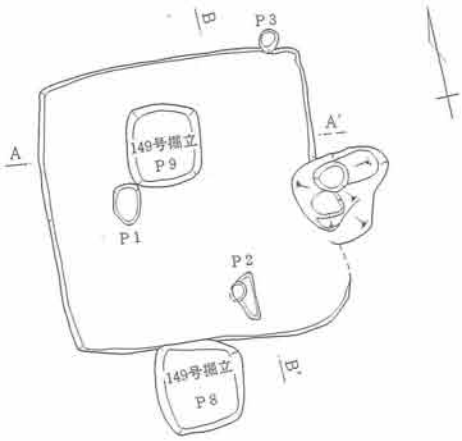
55　鈎帯・紡錘車出土状態

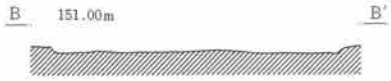
H364号住居跡（5H－93）　**位置**　調査区域東端、レ3にある。台地東南部の斜面上に位置する。西に接してH365号住居跡、北西に接してH362号住居跡がある。　**形状**　北西－南東に長軸を持つ台形で、南北5.92m、東西5.4mである。壁はすべて外に向かって彎曲する傾向を持つ。隅角の状態は北東隅は角があるが、南東・南西隅は隅丸である。東壁は北側が西壁より約60cm、南壁は東側が北壁より約30cm長い。長軸方向はN－1°－W、面積は28.6m²、壁高19～20cmである。周溝はカマド付近～南東隅を除き壁直下に巡っており、幅12～40cmである。　**ピット**　柱穴と思われるピットが、床面に4個（P1～P4）ある。P1は北東隅に位置し、48×36cm、深さ84cm。P2は北西隅に位置し、86×70cm、深さ99cm。P3は南西隅に位置し、70×56cm、深さ59cm。P4は南東隅に位置し、58×56cm、深さ36cm。その他5個あるが、機能や性格は不明である。ただし、P5は入口施設に伴うピットと推定される。　**カマド**　東壁中央南寄りにある。左袖部は石材で構築されている。全長80cm、袖部内幅69cm、燃焼部長42cm、壁への掘り込み角度20°、壁外掘り込みは30cmである。住居床面とカマド燃焼部とのレベル差は－7cmである。　**貯蔵穴**　南東隅、壁直下に位置し、長円形を呈する。規模は164×72cm、深さ32cmである。　**遺物**　周溝底部、床面北側からは土師器坏（1、2、3）が、床面中央部やや北寄りの所からは土師器甕（4）が、P5の住居床面レベルからは紡錘車（13）と鈎帯（丸鞆）（14）が出土している。他に、床面直上からは、須恵器坏（6.9～11）、同蓋（5）、同埦（8）が出土している。　（鵜木）

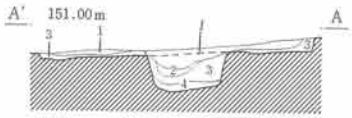


図－144　H364号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　坏(１～３)、緩やかに外傾し、横ナデとヘラ削りとの中間に指頭痕を残す形状を示す。１は底部周辺内外面に指頭痕を残す。色調は淡褐色。軽石粒や砂粒を含み、やや軟質。２は石英や軽石粒、多量の砂粒を含み、軟質である。色調は明褐色。３は口縁部内面に煤が付着する。色調は淡褐色。軽石粒や砂粒を含む。　甕(4)、口縁部は緩やかに外反、口唇部辺でやや内傾し、受け口状を示す。器面は肩部外面横ヘラ削り、胴下半部に向けて斜ヘラ削りされる。口縁部は内外面横ナデ。胴部内面は平滑。底部を欠失する。色調は茶褐色。砂粒を多量に含む。　**須恵器**　蓋(5)、右回転ロクロ使用。天井部中央には擬宝珠を扁平にした形態のつまみ部が形成される。つまみ部周辺は右回転ヘラ調整。色調は淡灰色。礫や砂粒を含み、軟質。　坏(６・７・９～11)、６は右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切り。のち底部周辺にヘラ調整を加える。色調は灰白色。黒色粒を含むが、比較的精選された粘土を使用。焼きしまり良好。７は左回転ロクロ使用。底部は回転糸切り後、全面ヘラ調整を施す。色調は暗灰色。大粒の黒色粒を含む。９はロクロ回転方向不明。底部の切り離しは回転ヘラ切りか。切り離し技法は非常に粗雑である。色調は灰白色。微細な黒色粒を含む。10と11はロクロ回転方向不明。底部切り離しは回転ヘラ切り。10の色調は淡灰色。内面に僅かな自然釉が掛かる。堅緻。11の色調は暗灰色。内外面に自然釉をみる。堅緻。　埦(8)、右回転ロクロ使用。底部切り離し後、高台貼り付け。体部外面にはヘラ削りを施す。淡灰色。砂粒を含むが堅緻である。　**鉄製品**　刀子(12)、茎の部分残存。　**石製品**　紡錘車(13)、右撚りの削痕が集合。蛇紋岩製。　**その他**　鈎具(14)、表面の腐食した丸鞆。　(中束)





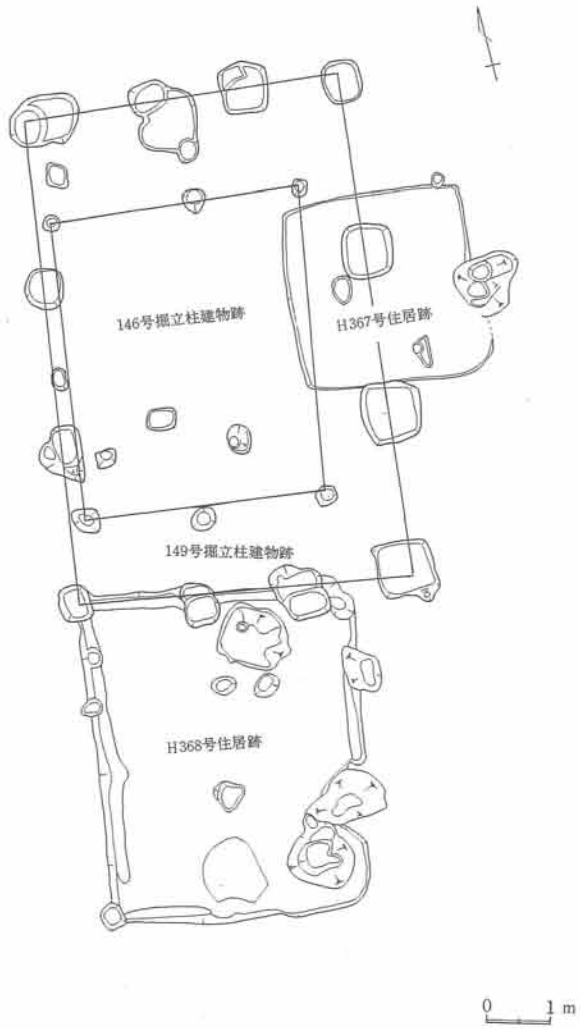


1．茶褐色土。ロームブロック。
2．茶褐色土。多量のロームブロック。
3．茶褐色土。多量のローム粒。
4．茶褐色土。

図－145　H367号住居跡

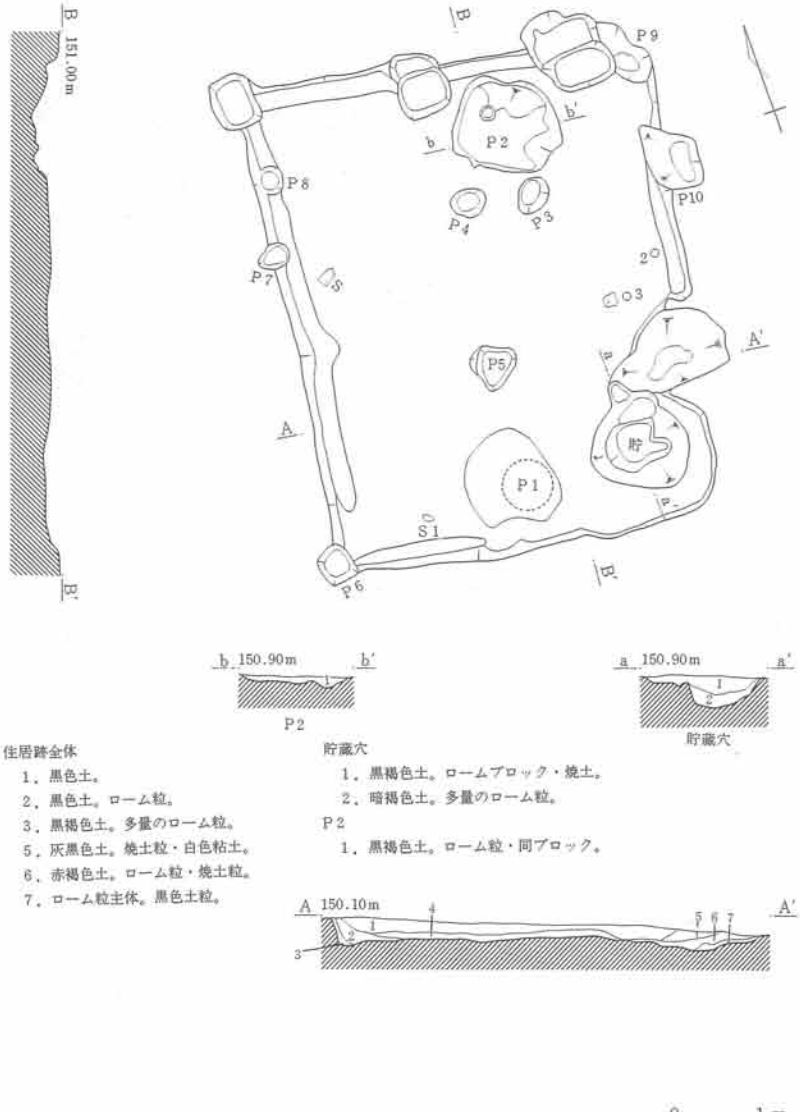
地層堆積状況（北から）

H367号住居跡（5H－96）　**位置**　調査区域東側レ3に所在する。台地東南部の斜面上に位置する。竪穴式住居跡や掘立柱建物跡等の遺構が密集している所で、北に接してH360号住居跡がある。　**形状**　正方形を呈し、南北、東西とも3mである。北・南・東・西壁もとほぼ直線であるが、北・南・西壁は外方に彎曲している。隅角の状態は南東隅に隅丸が顕著である。なお南壁は北壁に比べ東側が約30cm長い。主軸方向N－5°－E、面積は9㎡、壁高0（東壁）～16cmである。周溝は存在しない。　**ピット**　床面に3個、北壁に接して1個、南壁中央部に接して1個（149号掘立に伴うものと思われる。）ある。P1は42×30cm、P2は50×24cm（このピットの中にさらに20×18cm、深さ25cmのピットがある。）P3は25×20cm、深さ18cmである。これらのピットの機能や性格については不明である。　**カマド**　東壁中央やや南寄りにある。構築材は不明。全長72cm以上、袖部内幅35cm以上、燃焼部長30cm以上と推定される。壁への掘り込み角度は不明である。壁外掘り込みは72cmである。カマド主軸方向はN－82°－Eである。住居床面とカマド燃焼部とのレベル差は-18cmである。　**貯蔵穴**　なし。　**重複関係**　149号掘立柱建物跡、146掘立柱建物跡と重複する。2つの掘立柱建物跡の東側ピット列が本住居跡内を通っている。196号掘立柱建物跡との関係は不明であるが、149号掘立柱建物跡より本住居跡の方が新しいと考えられる。　（鵜木）

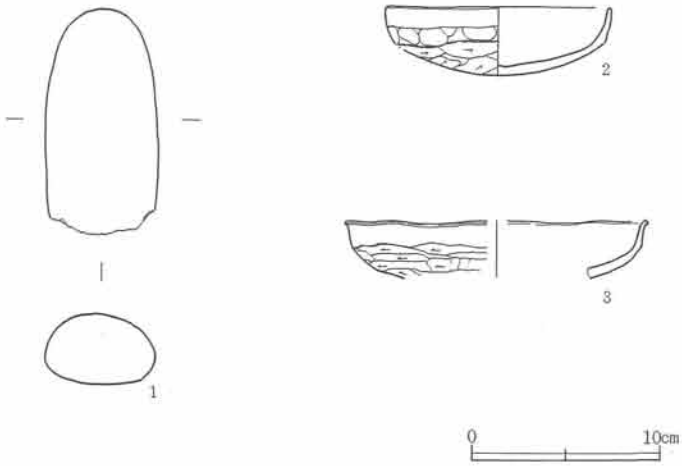


図－146　H367・368号住居跡重複関係図

H368号住居跡



図－147　H368号住居跡

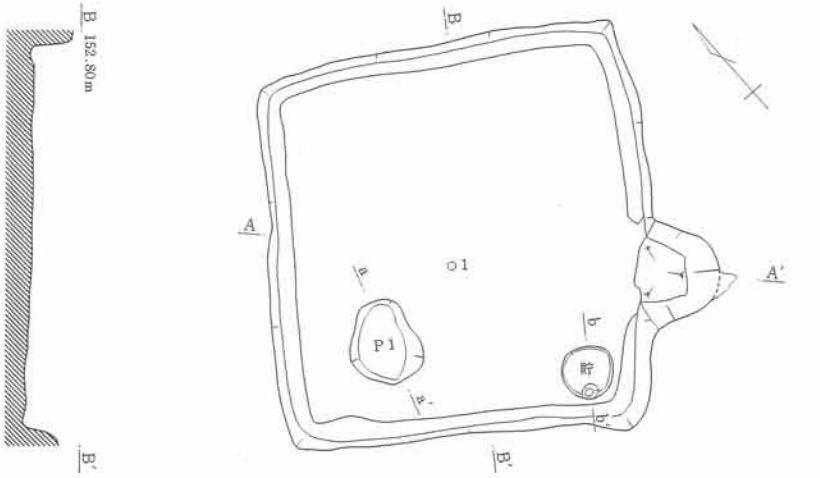


図－148　H368号住居跡出土遺物

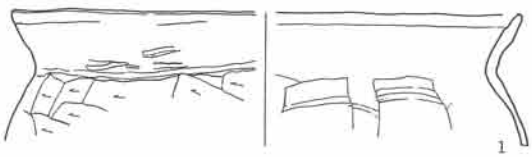
住居跡全景

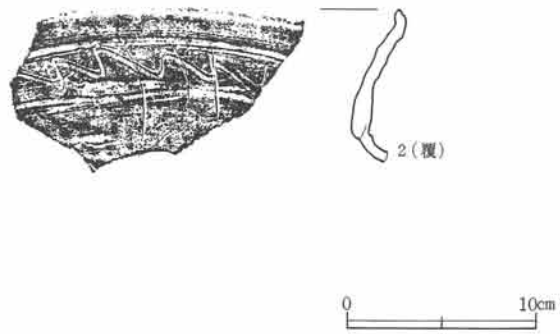
H368号住居跡（5H－97）　**位置**　調査区域南東、タ3～レ3に所在する。台地がゆるく南東に傾斜する斜面上にある。　**形状**　北西～南東に長軸を持つ長方形で、規模は南北5.1m、東西4.2mである。長軸方向はN－11°－E、面積20.9㎡、壁高6～22cmである。カマド付近及び南壁東半分を除き壁下に幅8～26cm、深さ56cmの周溝をめぐらす。南壁東端に150×14cmの細長い台形状の張り出しがある。　**床面**　全体的にやわらかく範囲は不明だが、厚さ22cm程度の貼床が南壁中央付近で確認できた。　**ピット**　遺構中央付近に南北に並んであるP4とP5は柱穴と考えられる。P4は深さ24cm、P5は深さ21cmである。なお、西壁際にあるP6、P7、P8及び東壁際にあるP9、P10は柱穴と考えられる。深さはP6、15cm、P7、9cm、P8、19cm、P9、17cm、P10、14cmである。　**カマド**　東壁南寄りにある。カマド主軸はN－78°－Eで、南西隅付近に向かっている。全長104cm、袖部内幅58cm、燃焼部長64cm、壁への掘り込み角度26°で、壁外掘り込みは34cmである。火床面は床面より12cm低い。袖部その他に白色粘土使用。　**貯蔵穴**　東南隅、不整円形（70×44cm、深さ32cm）である。　**遺物**　カマド北側の床面に土師器坏(2、3)、住居南西隅に石（1）が床面上で出土した。**重複関係**　北壁上で149号掘立柱建物跡と重複しているが、本遺構の方が旧いと推定される。　（木部）

出土遺物　　**土師器**　坏（2～3）、2は底部がやや肉厚で、体部の立ち上がりは直に近い形態を示す。口縁部は内外面横ナデ、底部はヘラ削りが施される。口縁部横ナデ、底部ヘラ削りとの中間に指頭痕を残す。内面は平滑な仕上げが施されている。色調は暗褐色。砂粒を多量に含む。焼きしまりは良好。3は口唇部が丸味を帯びて外反する。口縁部は内外面横ナデ、底部はヘラ削りが施される。ヘラ削りには波状を示す部分もみられる。横ナデとヘラ削りにより明確な区分が施され、指頭痕は残らない。内面には僅かにハケナデ痕が認められる。色調は暗茶褐色。砂粒を含む。焼きしまりは良好。　**その他**　用途不明な楕円形の石片（1）、が出土している。断面は卵形を示し、外見上では全面磨耗しているかのようにも思える。このようなタイプの石は、第304号・第397号住居跡からも出土している。　（中束）



図－149　H369号住居跡





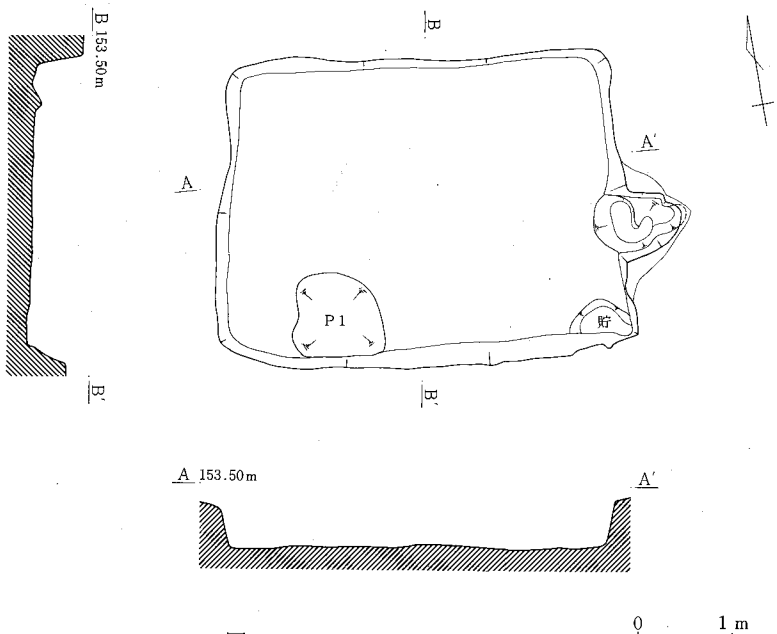
図－150　H369号住居跡出土遺物

住居跡全景

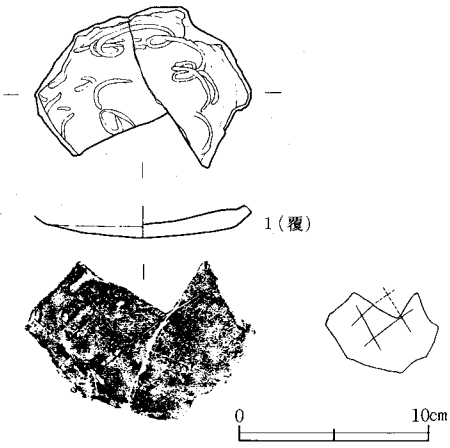
H369号住居跡（5H－98）　**位置**　カ5～6。　**形状**　南北4.1m、東西3.9mで、四隅がいずれも隅丸を呈す方形となっている。長軸は南北で方向はN－39°－E、面積15.2㎡、壁高29～46cmを測る。壁の形状は東壁が外に彎曲している以外は、ほぼ直線的である。周溝はカマド部分を除き全周に認められ、幅10～26cm、深さ2～7cmである。　**床面**　床面はカマド前を中心にして非常に固くしまっている。　**ピット**　南西隅付近に1個認められるのみ。規模は90×70cm、深さ18cmで、ピットの底部、壁等には焼きを受けた跡も確認されない。ﾋﾟｯﾄ格不明。　**カマド**　東壁中央南寄り。全長80cm、袖部内幅68cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度45°である。火床面は住居床面とほぼ同じ高さである。　**貯蔵穴**　南東隅、円形で規模は58×54cm、深さ22cmである。　**遺物**　床面ほぼ中央より、土師器甕口縁部が出土（1）　（中澤）

出土遺物　　**土師器**　甕（1）、緩やかに外反し、やや受け口状を示す口縁部の破片である。口縁部は内外面ともに横ナデ、肩部外面は横ヘラ削りが施される。肩部内面には粗い横ハケ痕が認められる。色調は淡い茶褐色を示す。砂粒や微細な雲母片を多量に含み、軟質である。　**須恵器**　甕（2）、口縁部の小破片である。口縁部は緩やかに外傾し、口唇部辺で内彎形態を示す。内面頸部付近には粘土接合痕が認められる。口縁部外面は凹線により区画され、段間にはそれぞれ1条づつの粗い波状文が描かれる。色調は暗灰色を主体とする。内面は黒味を帯びて、自然釉が僅かにかかる。白色粒を多量に含む。焼きしまりは良好である。　（中束）

H370号住居跡（図版31）



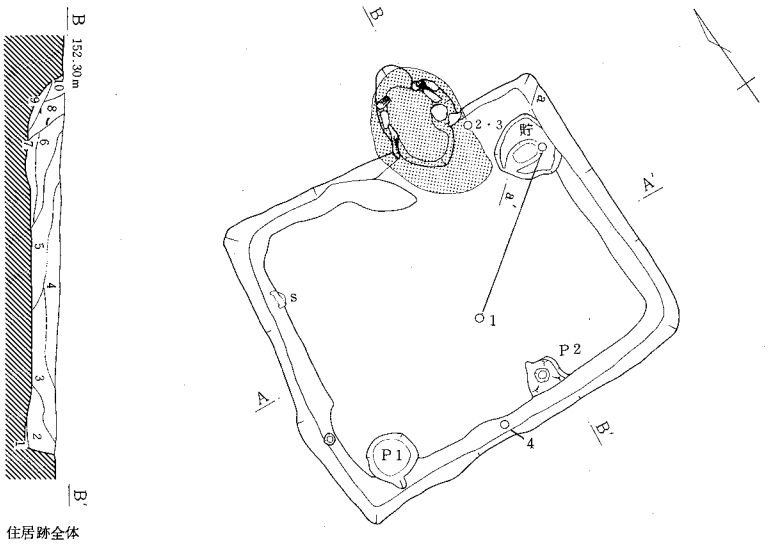
図－151　H370号住居跡



図－152　H370号住居跡出土遺物

H370号住居跡（5H－99）　**位置**　ヨ6。**形状**　南北3.03m、東西4.2mで、北東および南西隅が隅丸を呈し、全体としては台形をしている。長軸は東西で方向はN－97°－E、面積12.2m²、壁高39～56cmを測る。周溝は認められない。　**ピット**　南壁西側に98×90cm、深さ7cmの浅いピットが確認されたが、性格不明。　**カマド**　東壁南寄り。全長75cm、袖部内幅78cm、燃焼部長68cmの規模をもつ。しかし、カマドの覆土からは焼土や灰などが全く確認されず、カマド壁面にも焼けが認められない。未使用の可能性もあり得る。なお、壁への掘り込み角度は73°と大きいことも特徴といえよう。また、火床面は住居床面とほぼ同レベルをもつ。**貯蔵穴**　南東隅で半円形を呈す。規模は68×36cm、深さ6cm。覆土中からも焼土粒、灰等は確認されなかった。　**遺物**　直接本遺構の床面につくものは出土していないが、覆土中より土師器坏（1）が見つかる。これには暗文がついている。また、土師器甕の破片も見つかっている。　（中澤）

H371号住居跡



住居跡全体
1．黄褐色土。多量のローム。
2．茶褐色土。多量のローム粒。
3．茶褐色土。多量のロームブロック。
4．茶褐色土。多量のロームブロック
5．茶褐色土。多量のローム粒。焼土粒。
6．茶褐色土。多量のローム粒。灰・焼土粒。
7．茶褐色土。ローム粒・焼土粒。
8．茶褐色土。多量の焼土粒。ローム粒。
9．茶褐色土。多量のローム粒。
10．茶褐色土。多量のローム粒。焼土粒。

貯蔵穴
1．黒褐色土層。焼土粒・炭化粒・白色粘土。
2．暗褐色土。ロームブロック・焼土ブロック。
3．茶褐色土。ローム粒と茶褐色土の混土層。
3'．茶褐色土。焼土粒・炭化粒。

図－153　H371号住居跡

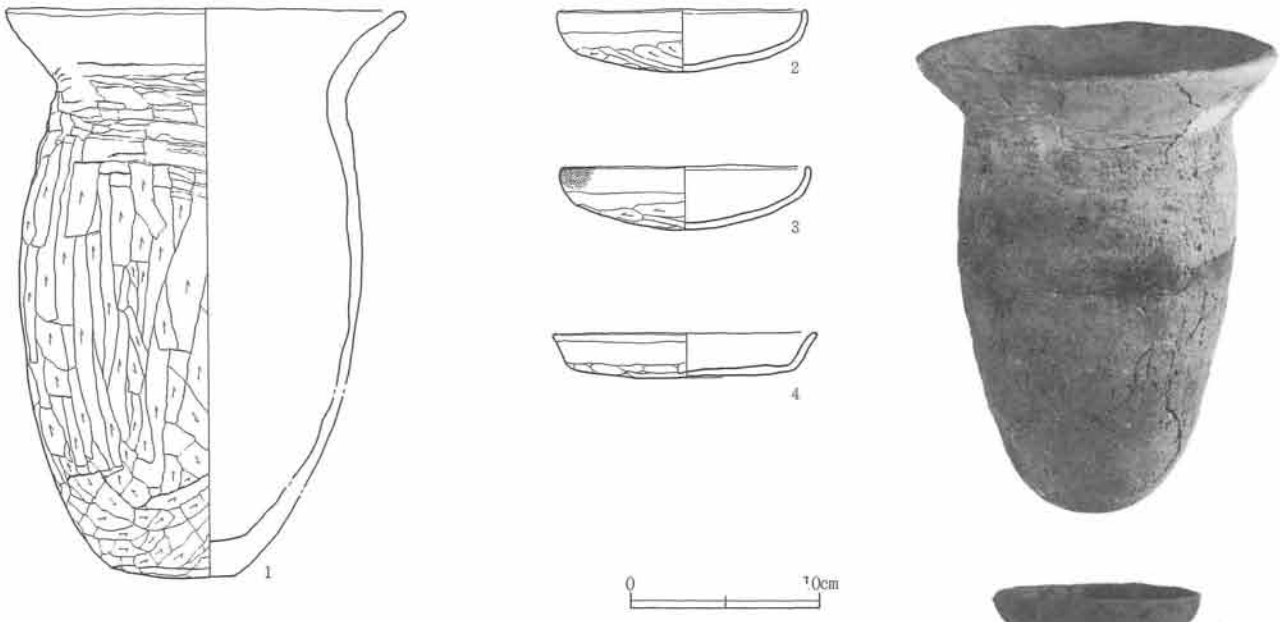
H371号住居跡　（5H－100）　**位置**　調査区域東部、ヨ5にある。台地中央部やや東寄りの斜面上に位置する。西に接してH373号住居跡がある。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ台形で、南北3.16mと3.31m、東西3.8mと4.4mである。北・南・東壁はほぼ直線であるが、西壁はやや外に向かって彎曲気味である。隅角の状態は北西隅と南東隅に隅丸が認められる。南壁は北壁より約60cm、西壁は東壁より約15cm長い。長軸方向はN－93°－E、面積10.7m²、壁高24～43cmである。周溝はカマド・貯蔵穴部分を除く壁直下に巡っており、幅14～26cm、深さ5～9cmである。　**ピット**　南西隅、壁直下に1個（P1）、南壁中央壁直下に1個（P2）ある。P1は61×51cm、深さ16cm。P2は40×31cm、深さ30cmで、入口施設との関連が考えられる。　**カマド**　北壁東寄りにある。石材を使用し、全長91cm、袖部内幅58cm、燃焼部長68cm、壁への掘り込み角度42°、壁外掘り込み91cmである。火床面と床面との差は4cm。　**貯蔵穴**　北東隅、不整円形で二段に造られ、規模は70×56cm、深さ49cmである。　**遺物**　貯蔵穴部より土師器甕（1）が、周溝底部より土師器坏（4）が、カマド手前付近より土師器坏（2、3）が出土している。（1）～（3）は床面上、（4）は21cm浮いて出土した。　（鵜木）

住居跡全景

貯蔵穴付近遺物１出土状況

カマド全景

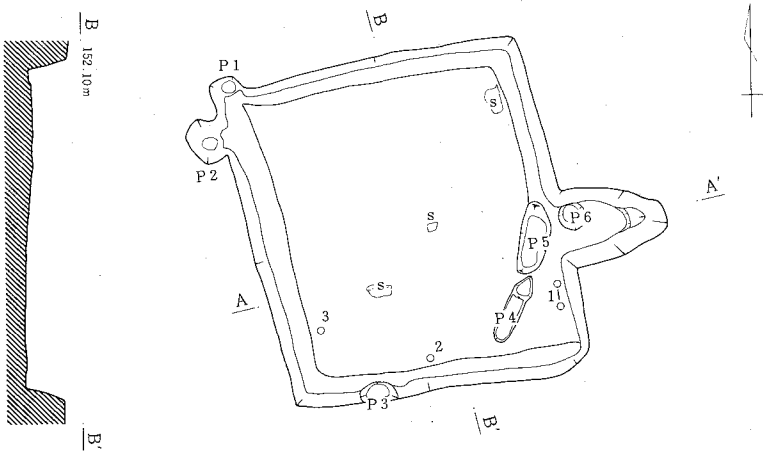
南壁下遺物４出土状態

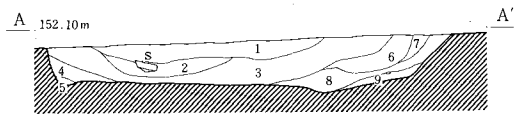


図－154　H371号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　甕（1）、全体的に厚手の土器である。底部は特に肥厚し、口縁部は緩やかに外反する形状を示す。口縁部は内外面横ナデ、胴部外面は縦ヘラ削りを主体とし、胴下半部は斜ヘラ削りが施される。頸部辺は胴部からの縦ヘラ削りが波状をなして及び、凹凸が顕著に残る。底部は、ヘラ削りによりやや丸味を帯びる。胴部外面は部分的に磨耗し、内面では器面の荒れが著しい。色調は暗茶褐色。礫や砂粒を多量に含む。　坏（２～４）、２と３は口縁部が丸味を帯びつつ外傾し、口唇部でやや内湾する形状を示す。口縁部は内外面横ナデ、底部はヘラ削りが施される。２の内面は平滑である。３は器面の荒れが著しい。色調は淡茶褐色。砂粒を少量含む。３の口縁部には煤が付着する。４は平底で皿形を示す。口縁部は内外面ともに横ナデ、底部はヘラ削りが施される。中間には指頭痕を残す。色調は淡い茶褐色。砂粒を含み、やや軟質である。　（中束）

H371号住居跡出土遺物



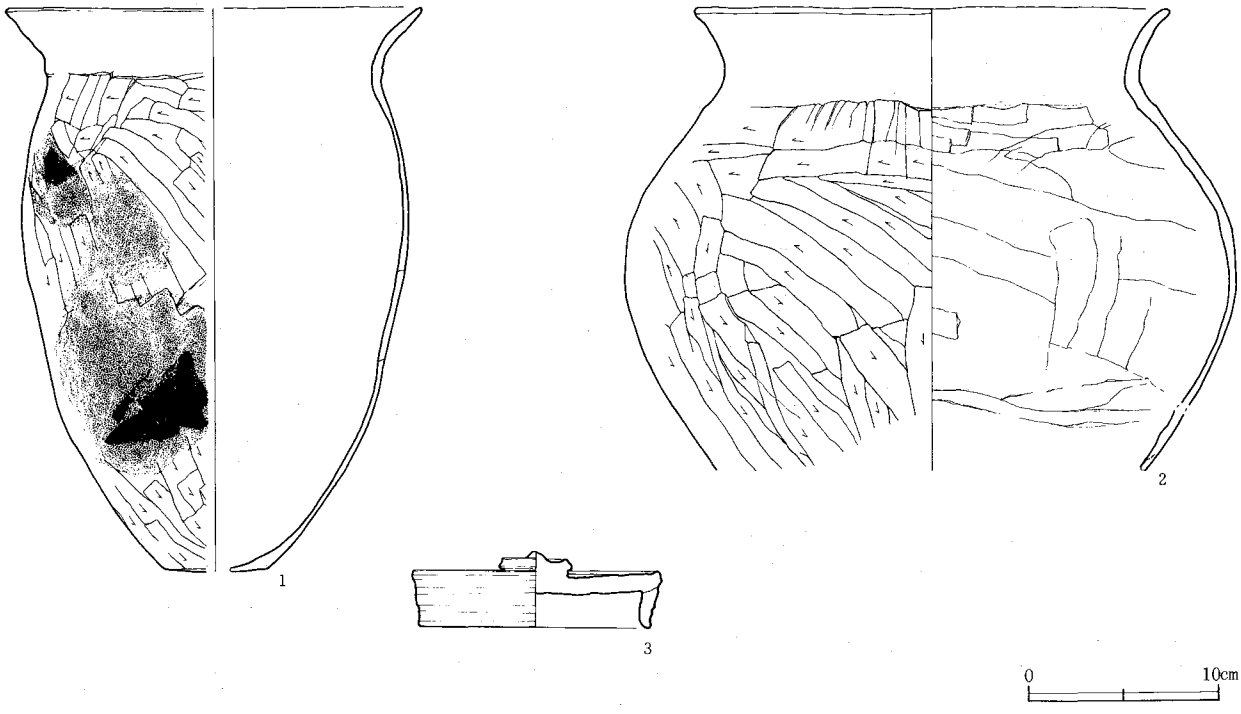


1．茶褐色土。多量のロームブロック。やや砂質。
2．黒茶褐色土。ローム粒。
3．茶褐色土。ロームブロック。
4．茶褐色土。
5．暗褐色土。ローム主体。
6．茶褐色土。多めなロームブロック。焼土粒。
7．焼土化（肌色）したローム主体。
6．赤色土。焼土ブロック主体。灰・炭化粒。
9．灰黒色土。灰主体。焼土粒・ロームブロック。

0　1 m

図－155　H372号住居跡

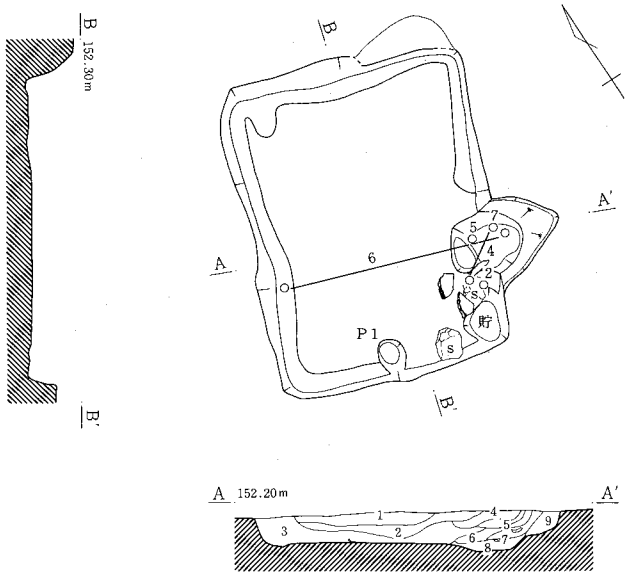
H372号住居跡（5 H－101）　**位置**　ヨ14。**形状**　南北3.4m、東西3.07mで平行四辺形の平面を呈す。壁の形状を見ると、北壁が若干外方に膨む以外は、ほぼ直線である。長軸は南北で、その方向はN－15°－W、面積10.3m²、壁高34～50cmを測る。周溝はカマド及びカマド以南の東壁を除いた以外は、ほぼ全周に認められる。その幅は14～26cm、深さ1～8cmである。　**床面**　カマド前を中心として床面が固くしまる。　**ピット**　都合6個確認できる。特にP1は北西隅の壁を削るようにして設けられている。その規模34×20cm、深さ15cmである。またP2はP1に接近して、西壁を削るようにして作られている。50×34cm、深さ44cmの規模をもつ。形状はいずれも円形。P3は南壁下の南西隅近くに造られている。規模は40×21cm、深さ34cmである。P1、P2、P3の性格は不明。残りのP4、P5、P6はカマド付近にて確認される。特にP5は灰かき穴か。　**カマド**　東壁南寄り。全長120cm、袖部内幅50cm、燃焼部長78cm、壁への掘り込み角度49°である。　**貯蔵穴**　なし。**遺物**　カマドよりも南側の東壁下の床面より土師器甕（1）、南壁下の中央床面の8cm上より土師器大甕（2）、西壁寄りの床面より須恵器蓋（3）が出土している。　（中澤）



図－156　H372号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1・2）、1は口縁部がくの字形を示し、緩やかに外反する。口縁部は内外面ともに横ナデ、肩部外面は横及び斜ヘラ削り、胴下半部にかけて縦及び斜ヘラ削りが施される。胴部内面は平滑である。色調は茶褐色。砂粒を多量に含む。胴部外面には煤の付着がみられる。2は口縁部が直立気味に外傾する。最大径を胴部にもつ、胴張り型の大甕破片である。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は波状を形成する横ヘラ削り、胴下半部にかけては斜ヘラ削りが施される。胴部内面は横及び斜ヘラナデにより平滑である。色調は淡褐色。酸化鉄粒や多量の砂粒を含む。軟質である。　**須恵器**　蓋（3）、左回転ロクロ使用成形。天井部中央に凸状のつまみが付けられる。色調は淡い青灰色。天井部全面に淡緑色の自然釉が掛かる。黒色粒や砂粒を含むが、堅緻である。　（中束）

H373号住居跡（図版32）

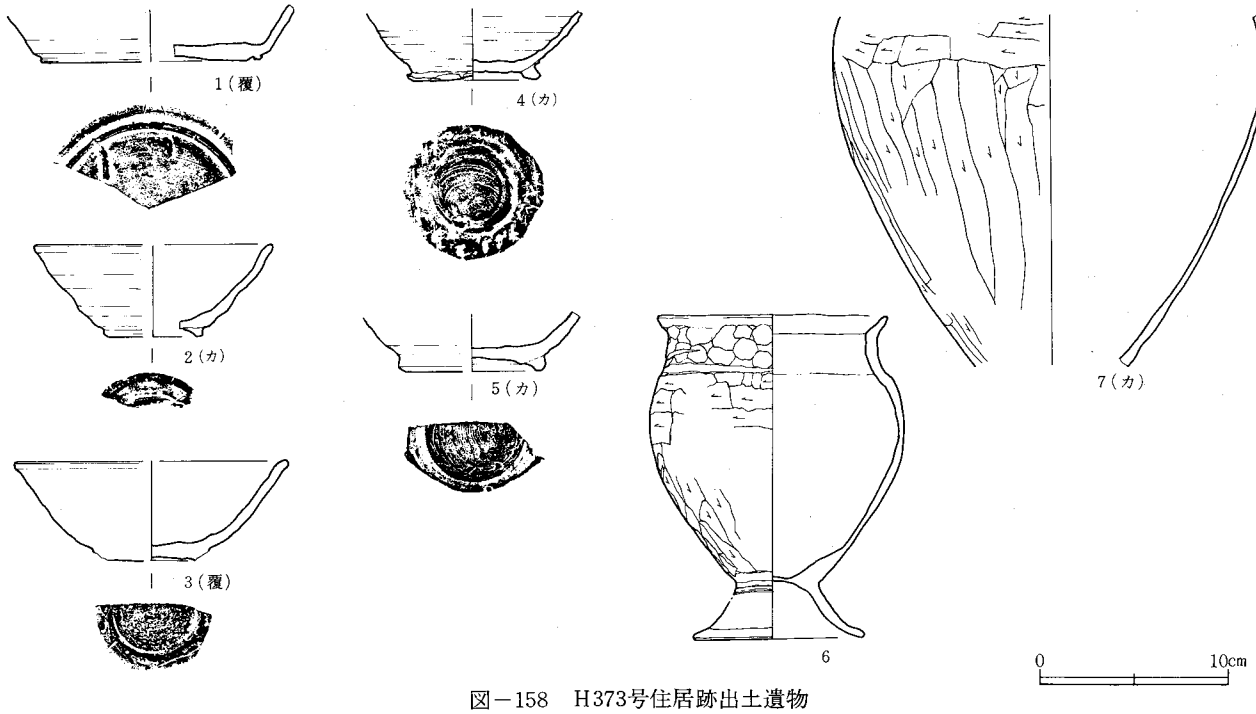


1．茶褐色土。
2．茶褐色土。ロームブロック。
3．茶褐色土。多量のロームブロック。
4．茶褐色土。多量のローム粒。焼土粒。
5．茶褐色土。ローム粒。
6．茶褐色土。多量のローム粒。
7．茶褐色土。多量のローム粒。焼土粒。
8．茶褐色土。多量のローム粒。焼土粒。
9．茶褐色土。多量のローム粒。

0 1 m

図－157　H373号住居跡

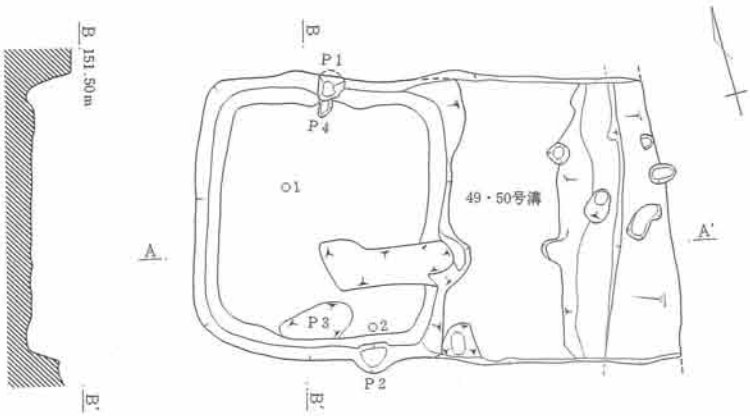
H373号住居跡（5H－102）　**位置**　調査区域東部、ヨ5にある。台地中央部やや東寄りの斜面上に位置する。東に接してH371号住居跡がある。　**形状**　北西～南東に長軸を持つ隅丸長方形で、南北3.2m、東西2.47mである。東壁はほぼ直線であるが、北壁と西壁は中央部が内へ向かってせり出し、南壁は外に向かってやや彎曲気味である。隅角は四隅とも丸味を帯びている。全体的にやや平行四辺形気味の形状である。長軸方向はN－25°－E、面積7.6m²、壁高は25～44cmである。周溝はカマド付近から南東隅に至るまでの部分を除き、全壁直下に巡っている。幅10～20cm、深さ1～3cmである。　**ピット**　南壁中央部、壁直下に位置する。規模は35×27cm、深さ32cmで、楕円形を呈する。その機能や性格については不明であるが、住居の入口施設に伴うものの可能性も考えられる。　**カマド**　東壁中央部よりやや南寄りにある。右袖部手前付近から南東隅にかけて焼石等が散乱し、石材（凝灰岩）をもって構築されたと思われる。主軸方向はN－102°－Eで、東壁とは直交しない。全長78cm、袖部内幅68cm、燃焼部長35cmである。壁への掘り込み角度は煙道部76°、燃焼部18°である。壁外掘り込みは80cmである。住居床面とカマド燃焼部とのレベル差は-10cmである。　**貯蔵穴**　東南隅にあり、不整円形を呈する。規模は64×48cm、深さ19cmである。　**遺物**　カマド内及びカマド手前付近床面やや上から土師質須恵器埦（2、4、5）が、床面中央やや南寄りの所から土師器台付甕（6）が6～19cm浮いて出土した。又、ピット東側付近の床面からは鉄滓の出土もみた。　（鵜木）

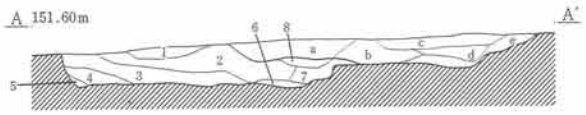


図－158　H373号住居跡出土遺物

出土遺物　**須恵器**　埦（1）、低い高台部を形成。底部にはヘラ調整が加わる。青灰色、堅緻である。　**土師質須恵器**　埦（2～5）、淡褐色で、微細な雲母片を多量に含む。ロクロ成形、回転糸切り後、高台貼り付け。4は右回転ロクロ使用。高台の作りは粗雑である。　**土師器**　台付甕（6）、口唇部はやや平坦である。口縁部は指頭痕を残し、内外面横ナデ。肩部外面には明瞭な稜が形成され、胴部はヘラ削り。肩部内面にはハケナデが加わり、脚部はナデが施される。部分的に黒褐色を示す。　甕（7）、ヘラ削りを施す胴部片。礫や砂粒を含み、色調は茶褐色を示す。　（中束）

H374号住居跡



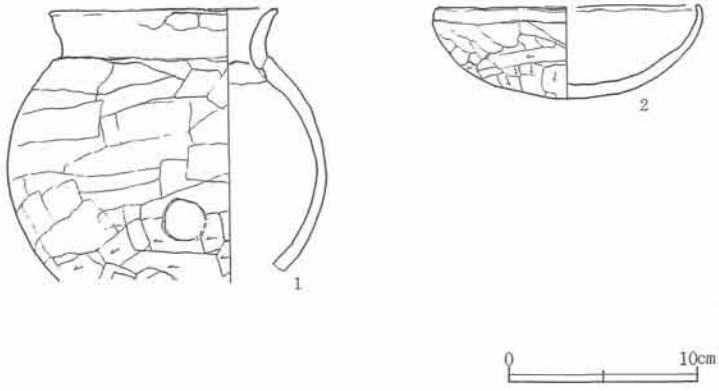


住居跡
1．黒色土。
2．茶褐色土。ロームブロック。
3．茶褐色土。ロームブロック・炭化物。
4．黒褐色土。
5．明茶褐色土。ローム粒主体。
6．暗褐色土。多量のロームブロック。
7．茶褐色土。白色粘土。
8．茶褐色土。

49・50号溝
a．黒茶褐色土。砂質。
b．水成の4～5層からなる固い砂質層。
c．黒茶褐色土。bに似る砂質。
d．茶褐色土。ローム粒。下部はやや砂質。
e．茶褐色土。ロームブロック。

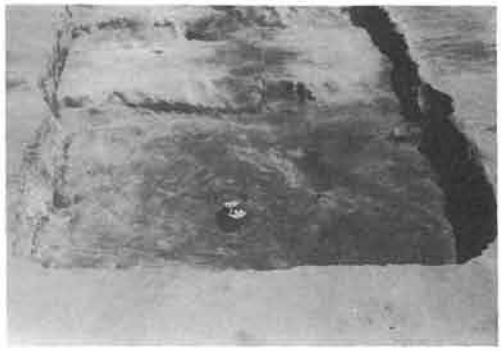
0　1m

図－159　H374号住居跡



0　10cm

図－160　H374号住居跡出土遺物



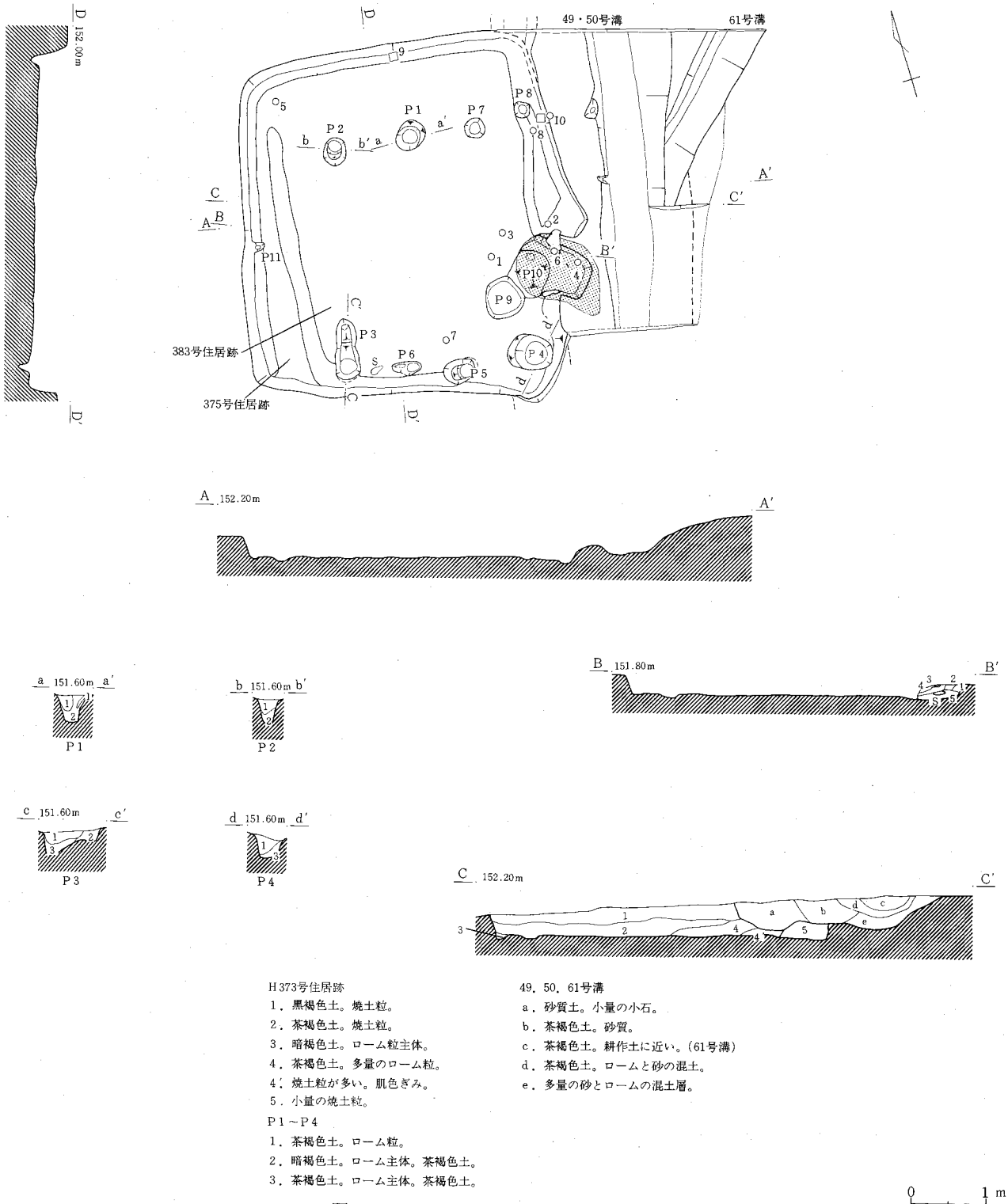
住居跡全景

H374号住居跡（5H－103）　**位置**　カ4。**形状**　南北2.73m、東西2.5mで四隅はいずれも隅丸を呈す方形である。壁の形状を見ると、北および西壁は直線、南と東壁は外方に若干膨む。長軸は南北で方向はN－19°－Eを測る。面積6.5m²、壁高33～41cmである。周溝はカマド部分を除いたほぼ全周に認められる。幅8～19cm、深さ3～8cmである。　**ピット**　北壁および南壁にそれぞれピットが確認される（P1、P2）。P1は北壁のほぼ中央に、P2は南壁の東寄りに位置する。その規模はP1が34×28cm、深さ28cm、P2は40×30cm、深さ8cmである。このようにピットが北壁と南壁で対応する形をとる住居跡はH272号住居距にも見られるところであるが、性格は不明。　**カマド**　東壁南寄り。右側袖は地山を若干掘り残す。構築材は白色粘土を多く使用していることが地層断面からうかがえる。全長44cm、袖部内幅42cm、燃焼部長39cm、壁への掘り込み角度75°を測る。しかし、49・51・57号溝によって破損を受け、カマドの掘り形の一部が残る。なお、カマド前の細長い落ち込みは灰かき穴的なものと見ることができる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　床面上7cmより土師器小型の甕（1）、P2近く床面上30cmより土師器坏（2）が出土している。　**その他**　49・51・57号溝と重複するが、本遺構の方が旧。　（中澤）

出土遺物　　**土師器**　甕（1）、短く直に立ち上がる口縁部は、口辺部辺でやや外反する。胴部は球形を成し、底部を闕失する。内面の頸部辺には粘土接合痕が明瞭である。壺形土器とも言える形状を示す。加えて、胴下半部に穿孔がみられることも、この土器の特徴であろう。穿孔は焼成後に施されたものと考えられる。内外面ともに器面の荒れが著しく、整形痕は不明瞭であるが、口唇部辺には指頭痕を残す。胴部外面はヘラ削りが施されていたと考えられ、粗いヘラの単位をみることができる。胴下半部では左方向への砂粒の移動がみられる。色調は明茶褐色。胴部片側には黒斑を残す。酸化鉄粒や砂粒を含有する。　坏（2）、全体的に丸味を帯び、口唇部で内湾する形状を示す。口縁部横ナデの幅は狭く、内外面に施される。底部はヘラ削り整形である。口縁部横ナデ、底部ヘラ削りの中間に、幅広く指頭痕を残す。内面はナデにより平滑である。色調は茶褐色。底部には煤が付着する。砂粒を少量含む。　（中束）

H374号住居跡出土遺物

H375・383号住居跡（図版32）



H373号住居跡
1．黒褐色土。焼土粒。
2．茶褐色土。焼土粒。
3．暗褐色土。ローム粒主体。
4．茶褐色土。多量のローム粒。
4′．焼土粒が多い。肌色ぎみ。
5．小量の焼土粒。

P1～P4
1．茶褐色土。ローム粒。
2．暗褐色土。ローム主体。茶褐色土。
3．茶褐色土。ローム主体。茶褐色土。

49，50，61号溝
a．砂質土。小量の小石。
b．茶褐色土。砂質。
c．茶褐色土。耕作土に近い。（61号溝）
d．茶褐色土。ロームと砂の混土。
e．多量の砂とロームの混土層。

0 1 m

図－161　H375・383号住居跡

375号住居跡（5H－104）　**位置**　カ5。　**形状**　H323号住居跡を建て替えたもので、その際、北壁と南壁及びカマドは再利用しているが、東壁と西壁を西に寄せて新たに掘削する。規模は南北4.75m、東西3.88m、面積17.7㎡、長軸方向N－7°－E、壁高23～41cmである。　**ピット**　東西に4個ずつ2列の柱穴列（P1～P8）が認められた。径は30～40cm前後、深さ30cm前後のものが中心を占める。P4は建て替え前は貯蔵穴だった可能性があるが、ここでは柱穴と考えたい。　**カマド**　東壁南寄り。左右袖部に石材を置く。カマド覆土中からは白色粘土も検出される。全長72cm、燃焼部長62cm、袖部内幅70cm。壁外に方形に24cm程掘り込む。火床面は床面より約5cm低い。　**遺物**　カマド内及び焚口付近から土師器（1～5）、壁際の床面上から須恵器皿（7）、紡錘車（9・10）、墨書土師器（8）等が出土した。このうち、8・10はH383号住のものと見られる。　**その他**　柱穴列の配置から西壁に出入口が（P11はそれに関連するか）、北壁側に寝室的な空間が中央に土間が想定される。　**重複関係**　49・50・61号溝に切られる。

H383号住居跡（5H－112）　規模は南北に4.76m、東西4.02m、面積12.9㎡である。　（中澤）

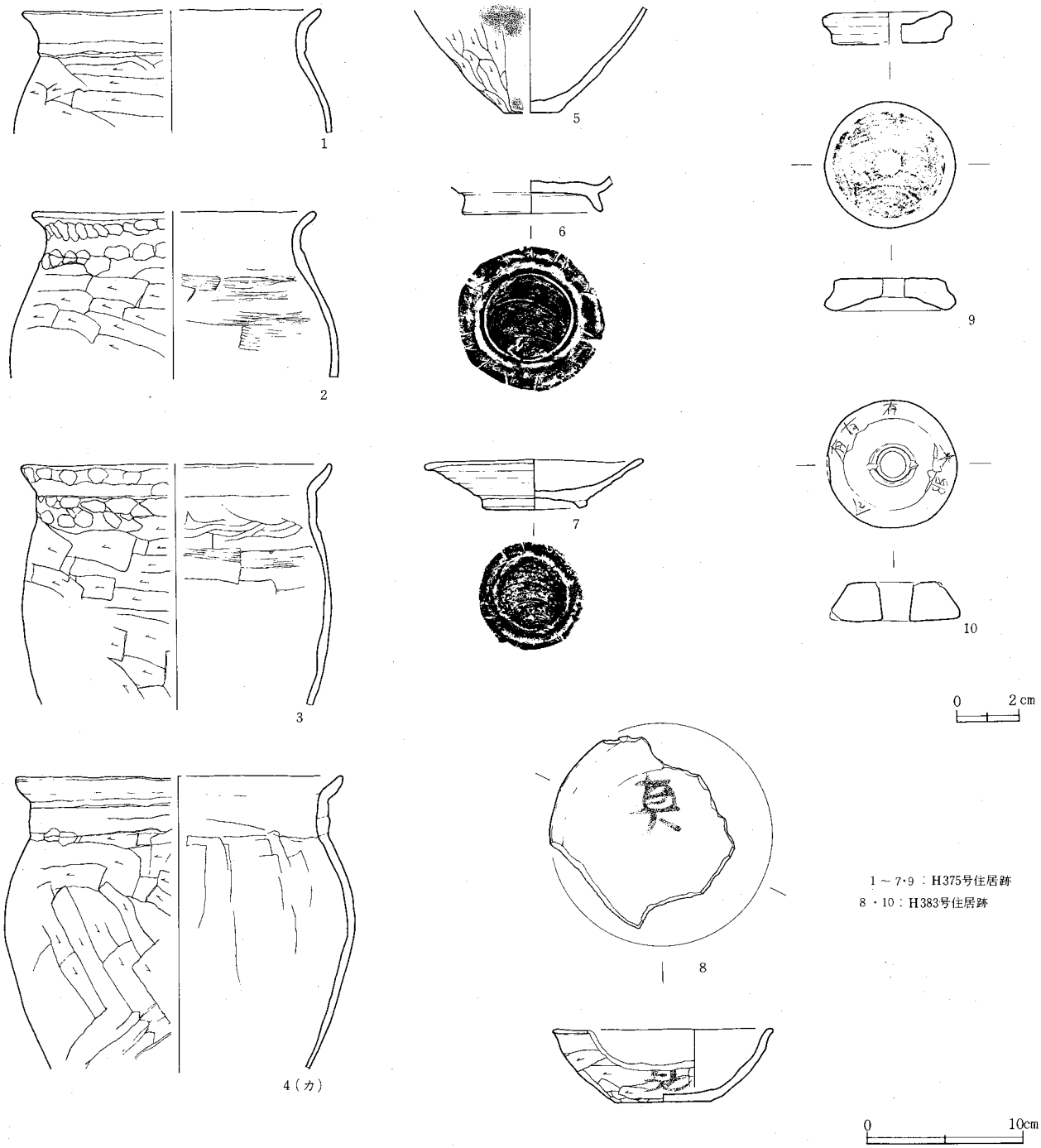
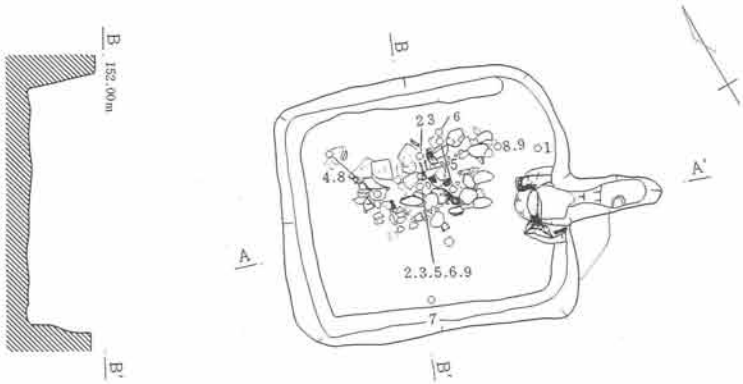


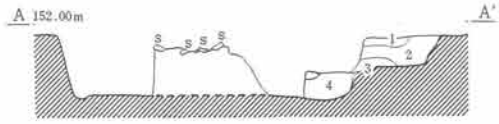
図162　H375・383号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1～5）、いずれも破片である。1は胴部外面横ヘラ削りにより、頸部辺に明瞭な稜線が形成される。口縁部は内外面横ナデ、胴部内面は平滑である。色調は茶褐色、酸化鉄粒や砂粒を含む。2は頸部辺がハの字形を成し、胴部内面には横ハケ痕を残す。平滑である。色調は暗茶褐色、軽石粒や酸化鉄粒を含み、軟質である。3・4は口縁部がコの字形を示しつつ、口唇部辺で受け口状を成す。4は肩部辺がやや丸味を帯びて、最大径となる。口縁部は内外面横ナデ、胴上半部外面は横ヘラ削りを主体とし、下半部に向けて斜ヘラ削りが施される。内面にはヘラ痕を残す。3の色調は淡褐色。砂粒を含む。4は明茶褐色。酸化鉄粒や砂粒を含む。焼きしまりは良好。5の胴部外面は縦ヘラ削りされる。煤が付着する。底部もヘラ削りである。色調は暗茶褐色、砂粒を含む。焼きしまりは良好。　**須恵器**　椀(6)、体部闕失。右回転ロクロ使用。底部回転糸切り後、高台部貼り付け。色調は青灰色。大粒の酸化鉄粒や砂粒を含む。皿(7)、体部外面はロクロ目が顕著に残るが、内面は器面が荒れている。体部形成の後、底部切り離しは回転糸切り。さらに高台部が貼り付けられる。色調は淡灰色、礫や雲母片を含む。やや軟質である。　**土師質須恵器**　椀(8)、体部外面は横ヘラ削り、口縁部は横ナデ、内面はナデにより平滑である。淡茶褐色で、酸化鉄粒や多量の軽石粒を含む。内外面に「真」と墨書される。　**石製品**　紡錘車（9、10）、9は須恵器蓋つまみ部分の転用である。製作時の糸切り痕を残し、中心部分には直径8㎜程の穿孔を施す。10は本住居跡と重複関係を示すH383号住居跡からの出土である。蛇紋岩製。「有」三字、「合」、「木」または「米」、他一字不明、線刻が施される。　（中束）

H376号住居跡（図版33）



住居跡全景



1．ローム。
2．茶褐色土。焼土粒・同ブロック。
3．ローム粒。
4．茶褐色土。かなりの焼土粒・同ブロック。

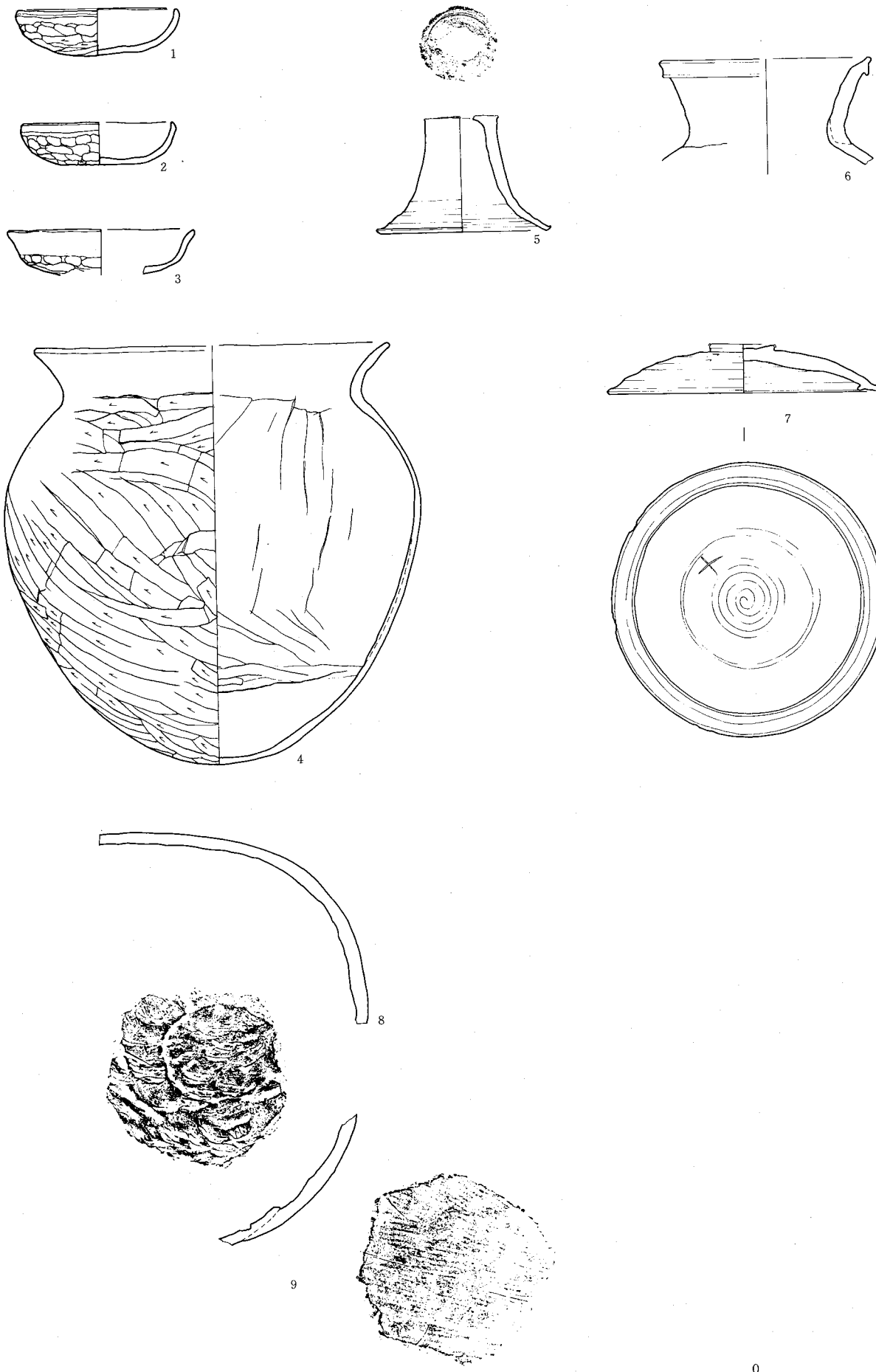
0 1 m

図－163　H376号住居跡

カマド全景

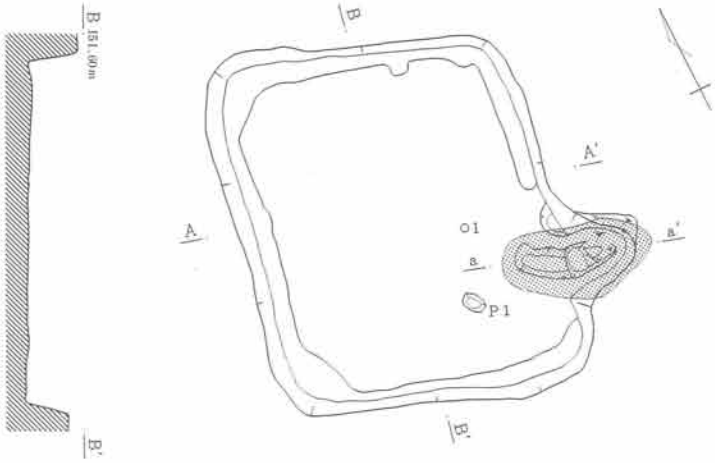
H376号住居跡（５Ｈ－１０５）　**位置**　カ４北東隅。　**形状**　南北2.46m、東西2.86mで、南西隅以外の隅角は隅丸を呈す長方形である。特に北東隅は大きなカーブを描く。壁の形状は北・南壁は直線。東・西壁は外方に膨む。長軸は東西で方向はＮ－18°－Ｅ、面積6.8㎡、壁高64～71cmを測る。周溝はカマド部分およびカマドから北側の東壁部分を除いて、ほぼ全周に認められる。規模は幅14～17cm、深さ２～３cmである。床面はカマド前が固くなっている。　**ピット**　認められない。貯蔵穴なし。　**カマド**　東壁南寄り。構築材は石を使用していることは左右の袖石、冠材、右壁燃焼部の石からわかる。なお、左袖部は地山を若干掘り残している。全長152cm、袖部内幅32cm、壁外への掘り込み角度106°を測る。煙道部の天井も残存しており煙道床面から天井部まで22cmである。また、カマド焚口部の石組が完全な形で残存をみる。　**遺物**　床面より約50cm上ほどを発掘中に、覆土中より多量の焼石、石魂、土器と少量の炭化物を検出する。この段階で確認された遺物は土師器坏（1、2、3）、土師器甕（4）、須恵器甕の口縁部（6）、須恵器高坏脚部（5）、須恵器横瓮（8、9）がある。この出土状況をみると、本遺跡の埋没がかなり進んだところで、他住居で使用したカマド構築の石や破損した土器片が投棄されたものと考えられる。この覆土中の遺物は北壁寄りに集中している。床面からの遺物は須恵器蓋（7）が南壁下のほぼ中央部より出土している。　（中澤）

出土遺物　**土師器**　甕（4）、口縁部はくの字形、底部は丸底を示す大型甕である。最大径を胴部にもつ。口縁部は内外面横ナデ。外面は胴部から底部にかけて、横及び斜ヘラ削りが施される。内面は頸部辺にヘラ痕を残し、胴下半部に粘土接合痕がみられる。指ナデ・ヘラナデが施される。色調は暗茶褐色。砂粒を多量に含む。外面に煤が付着する。　坏（１～３）、１と２は体部が丸味を帯び、口縁部でやや内彎する。口縁部横ナデの幅は狭く、体部に軽く指頭痕を残す。底部はヘラ削り。内面はナデにより平滑である。２の底部は平底状を成す。１の色調は茶褐色。２では底部が黒色を帯び、外面はにぶい黄褐色、内面は淡褐色を示す。砂粒を少量含み、ともに焼成は良好。内面に炭化物が付着。３は口縁部が緩やかに外傾する。口縁部横ナデの幅が広く、指頭痕は僅かである。底部はヘラ削りされる。色調は明赤褐色。砂粒を多量に含み、やや軟質である。　**須恵器**　甕（6）、頸部に粘土接合痕を残す。肩部には平行叩き目痕をみる。口縁部は巻き上げ、水挽き成形か。色調は淡青灰色。長石・石英粒を多量に含む。　横瓮（８・９）、８と９は胴部片である。８は外面に平行叩き目を施し、内面には粗い波状の当て具痕を残す。色調は淡緑灰色。９は胴の開口部分を粘土板で覆い、外面は平行叩き目痕、内面は波状の当て具痕を残す。色調は淡青灰色。６の肩部に僅かに残る平行叩き目痕、胎土の類似等から、６・８・９は同一個体の可能性が強い。　高坏（5）、巻き上げ、水挽き成形。端部に反りを生じる。礫や砂粒を含み、軟質である。　蓋（7）、右回転ロクロ使用。端部にかえりをもつ。天井部中央にはつまみ部が貼り付けられ、周辺部はヘラ削り調整される。色調は淡灰色。内面にヘラ記号「×」をしるす。　（中束）



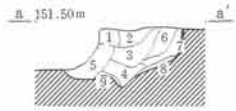
図－164　H376号住居跡出土遺物

H377号住居跡

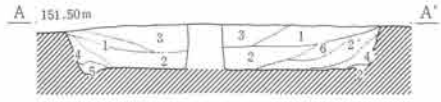


住居跡全景

住居跡全体
1．褐色土。ローム粒。
2．黒褐色土。ロームブロック。
2'．2に比べローム粒が多い。
3．黒褐色土。
4．暗褐色土。ローム粒。
5．黒褐色土。やや黒色み強。



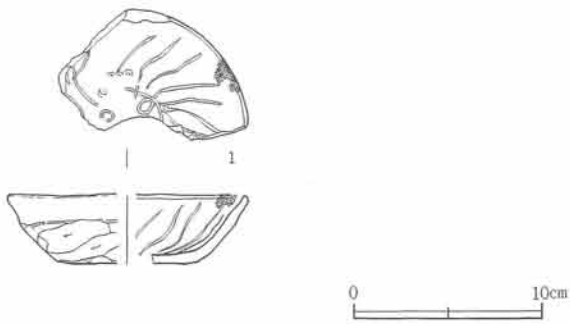
カマド
1．黒色土。ロームブロック
2．黒褐色土。ローム。
3．暗褐色土。焼土粒・炭化物。
4．暗褐色土。焼土粒・炭化物。
5．暗褐色土。多量のローム粒。焼土粒。
6．暗赤褐色土。ローム粒・焼土粒。
7．暗赤色土。多量の焼土。
8．黒灰色土。多量の灰。
9．黒褐色土。ローム粒。



図－165　H377号住居跡

カマド全景

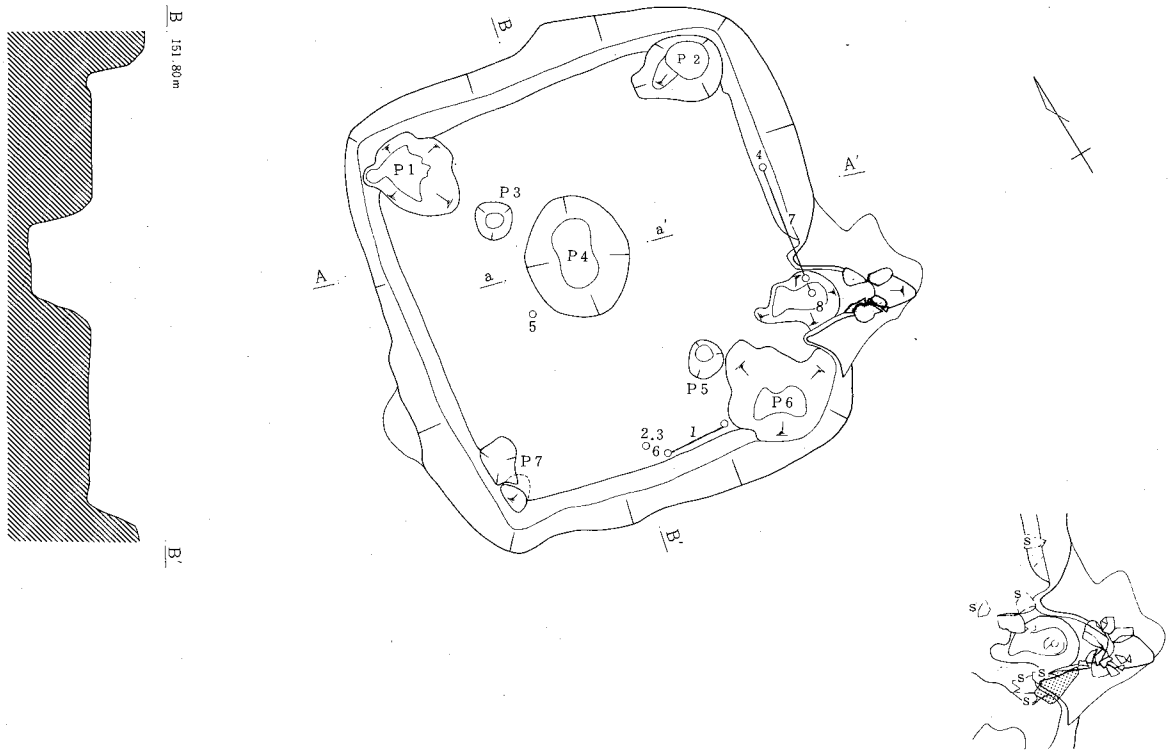
H377号住居跡（5 H—106）　**位置**　調査区域のほぼ中央、南下がりの平担地、カ4に所在する。東に接して49・50溝が南北に走る。　**形状**　南北3.7m、東西3mの隅丸平行四辺形。対峙する壁は約30cmづつずれる。南壁東端は若干張り出しぎみでコーナーへと続く。長軸方向N—11°—E、面積11.3㎡。壁高は37～56cmで北側が高い。しかし、南壁側の土層断面では59cmまで認められるので、本来の壁高は60cm以上であろう。カマド部分を除き、幅8～25cm、深さ1～10cmの周溝をめぐらす。北西隅と南西隅は幅が広がっている。　**ピット**　カマド手前付近に小ピット1個が存在する。長円形で、26×16cm、深さ22cmである。また、南壁下中央には、その南側を接して径50cm程度の浅い窪みが認められた。出入口に関連する施設の痕跡とも考えられる。　**カマド**　東壁中央寄り。壁外に構築する。左袖部は地山を16cm程造り出して、右袖部とそろえている。燃焼部には34×24cm、深さ17cmの小ピットがある。支柱を埋め込んだ穴とも考えられる。焚口部には深さ10cmの細長いピットが北上がりに続いている。これは灰かき穴と考えられるが、北上がりの方向はカマド使用者のとる方向と関連があるとも見られ興味深い。カマド全長85cm、袖部内幅60cm。燃焼部長は78cmだが、先端は煙道部を兼ねているものと見られる。先端部分は特に強く焼けていた。燃焼部先端の壁への掘り込み角度は87°である。　**遺物**　カマド手前付近から土師器坏（1）が出土した。床面から6cm程度浮いており、位置から見て他の例によく見られるように、カマド付近から流れ込んで来たものと考えられる。　（唐澤）

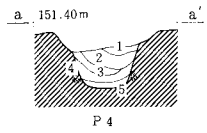


図－166　H377号住居跡出土遺物

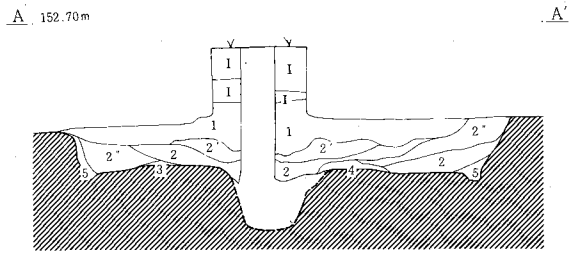
出土遺物　**土師器**　坏（1）、平底の底部から内彎ぎみに立ち上がる体部を持つ。口縁部は内外面に強い横ナデを施し、受口状の口唇部になっている。内面は体部に放射状暗文、底部にラセン状暗文を施す。体部下半及び底部はヘラ削りを施す。厚い器肉を持つ。色調は褐色で、胎土中に細かい砂粒を混ぜる。復元した形は安定感のある整った形態を示す。25%残存。　（唐澤）

H378号住居跡（図版33・34）





住居跡全体
1．黒褐色土。
2．黒褐色土。
2′ 2を基調とし茶色がかる。
2″ 2を基調とするが、浮石量が少。
3．黒褐色土。ローム粒。
4．茶褐色土。
5．暗褐色土。

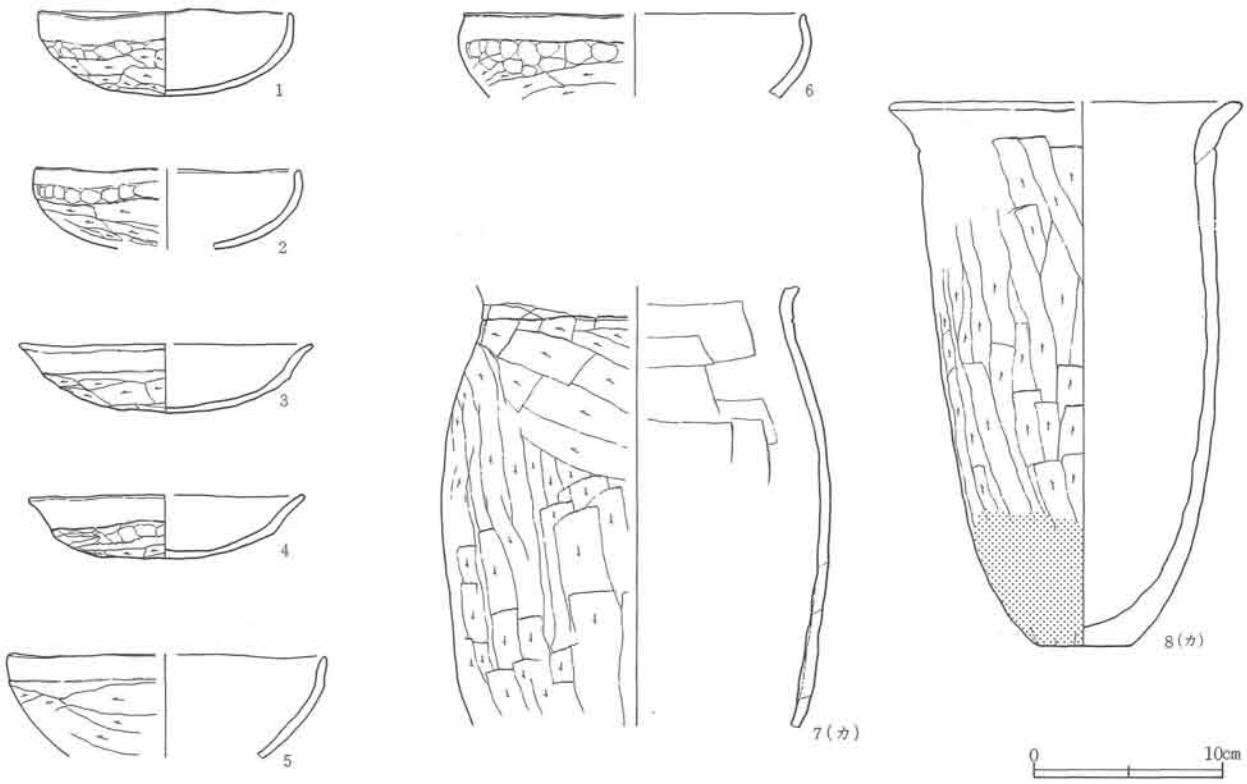


P4
1．暗褐色土。炭化物・ロームブロック。
2．茶褐色土。ロームブロック。
3．黒褐色土。
4．明褐色土。壁際に焼土。
5．暗黒褐色土。ローム粒。
1～5には、軽石、灰は含まれない。

0 1 m

図－167　H378号住居跡

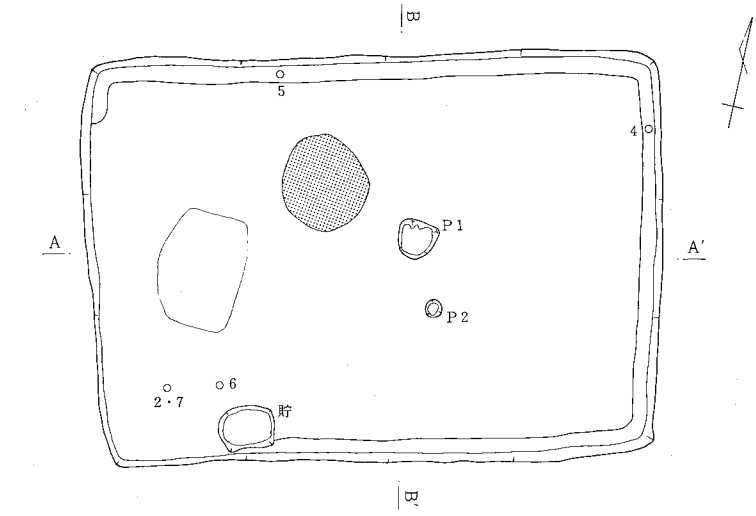
H378号住居跡（5H－107）　**位置**　調査区中央やや西寄りの平坦地東縁、ヨ3～4に所在する。　**形状**　南北4.5m、東西4.2mの長方形。西壁は東壁に比べ北端が約30cm、北壁は南壁に比べ東端が約35cm長い。長軸方向N－9°－E、面積18.3m²、壁高は地層断面の覆土の厚さからして70cm以上と見られる。カマド付近及び南東隅を除き周溝をめぐらす。**ピット**　住居跡四隅（P1、P2、P6、P7）及び中央（P4）と、南東隅と北西隅を結ぶ対角線上でP4の西側（P3、P5）の計7個が存在する。四隅のものは深さ28～83cmで位置から見て柱穴と推定される。P4は他に比べ卓越した規模（深さ62cm）で整然としたつくりである。底部周辺の壁は焼土化している。P3・P5の深さはそれぞれ58cm・65cmで一種の柱穴と見られるが、その位置からしてP4関連施設の痕跡であろう。P4は本住居跡の性格を考える上で最も重要なものと考えられる。　**カマド**　東壁中央南寄り。両袖部は地山を掘り残す。両袖部及び燃焼部東側に石材（安山岩）が残存していた。後者は壁以外に天井にも使用され、燃焼部先端を開いて煙道としている。支柱には土師器長胴甕（8）を逆位に置く。全長126cm、袖部内幅66cm、燃焼部長80cm。　**遺物**　1～6の土師器坏は床面から10～19cm浮いて出土した。カマド内からは支柱以外にも土師器甕（7）が出土している。鉄関係の出土遺物は全くなかった。（唐澤）

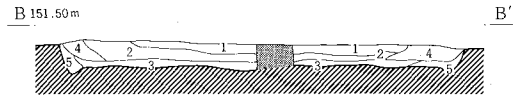


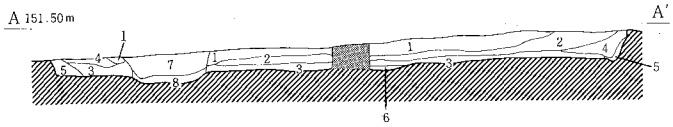
図－168　H378号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　甕(7・8)、7は肩部のやや張る長胴甕で、口縁部先端と胴部下半を欠失する。口縁部は横ナデ、胴部外面は肩部で横または斜ヘラ削り、それ以下は縦ヘラ削り、胴部内面にはヘラナデを施す。頸部ではヘラ削りを施した肩部側が一段低くなる。8は短かく外反する口縁部を持つ、ずんどう形の長胴甕である。口縁部は横ナデ、胴部外面は縦ヘラ削り、同内面はヘラナデ、底部外面にはヘラ削りを施す。前者の色調は淡褐色で胎土中に粗い砂粒を混ぜるのに対して、後者は赤褐色で細かい砂粒と異なる。　坏（1～6）、1・2は底部の丸い坏で、口縁部横ナデと底部外面ヘラ削りに挟まれて、指頭による押えを施す。3・4は浅い皿形の坏で、緩かに外反する口縁部を持つ。底部と口縁の境には弱い稜を持つ。5・6は大きな口径と器高を持つ埦形の坏である。6は体部が強く張って内彎する口縁部に、受口状に立つ口唇部を持つ。体部外面には5に比べ幅広い指頭痕を残す。　（唐澤）

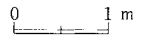
H378号住居跡出土遺物



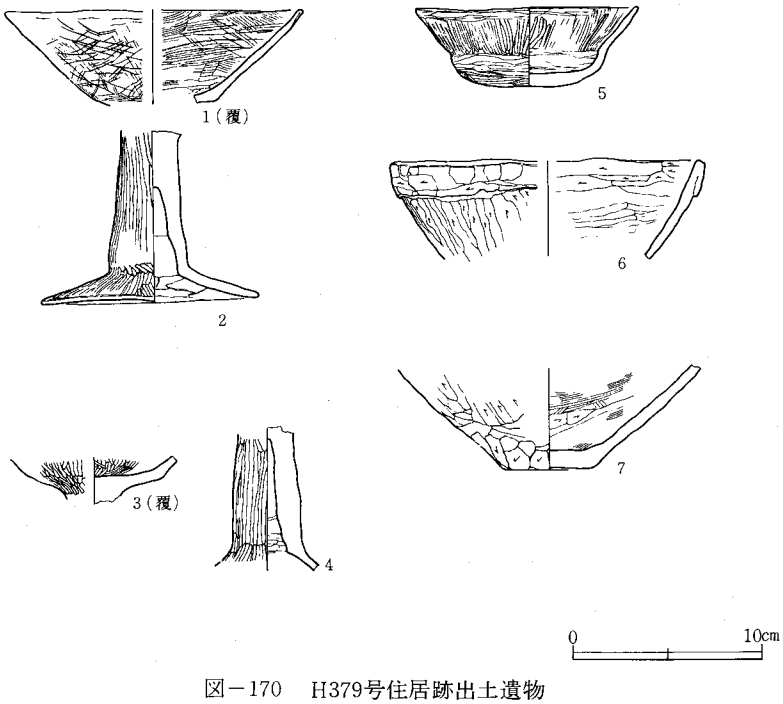




1．茶褐色土。
2．黒色土。
3．暗褐色土。ローム主体。
4．茶褐色土。
5．茶褐色土。ローム主体。
6．茶褐色土。ローム主体。（貼床）
7．黒色土。底部に炭化粒。
8．ロームブロックと黒みがかった粘土の混土層。



図－169　H379号住居跡

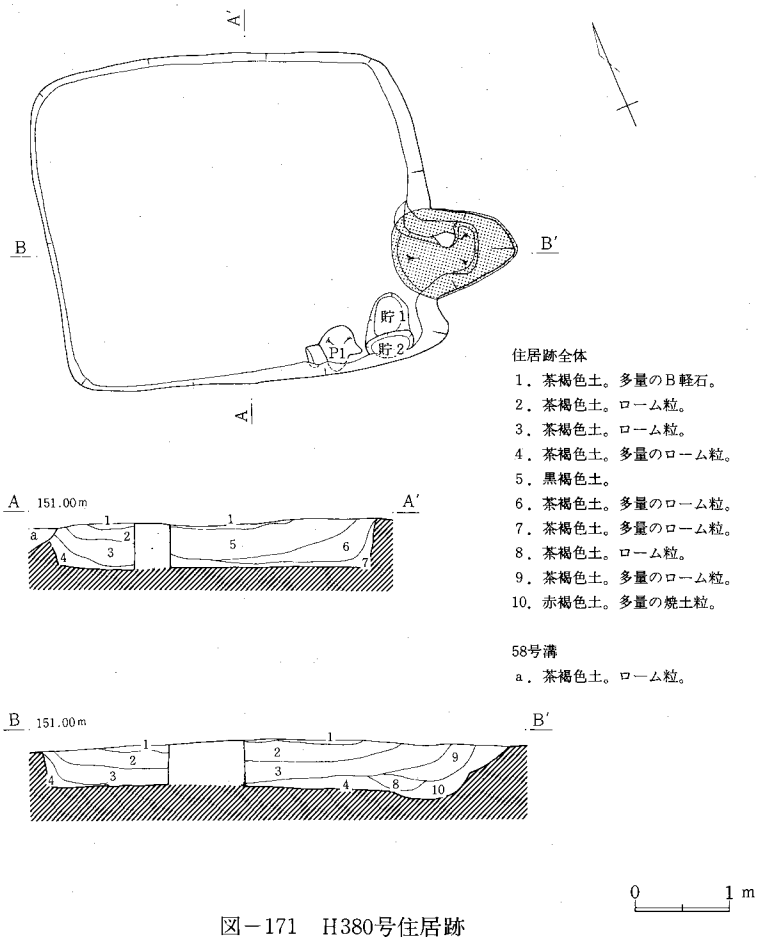


図－170　H379号住居跡出土遺物

H379号住居跡（5 H－108）　**位置**　ヨ3。**形状**　南北4.18m、東西6mの長方形を呈す。壁の形状はほぼ直線になっているものの西壁は外方に若干膨らむ。壁高13～34cmであり、比較的浅い。長軸は東西で方向はN－76°－E、面積24.2m²を測る。周溝は西壁と南壁西端を除いた部分に認められ、規模は幅12～18cm、深さ3～5cmである。**ピット**　都合2つ確認される。P2は住居中央近くに位置し、40×40cm、深さ6cmである。P3はP2の南20cm程に位置し19×7cm、深さ4cmを測る。性格は不明。西壁に近く長方形のピットが床面で確認されたが、地層断面図から本遺構より後のものであることが考えられる。**炉**　住居中央北西寄りに位置し、円形を呈す。102×92cmの範囲が赤く焼けを受けている。構造は地床炉である。　**貯蔵穴**　南壁西寄りに位置し、形状は四角ばった長円形で、規模は60×46cm、深さ55cmである。　**遺物**　住居中央床面より西側半分に集中して遺物が出土する。床面より9cm浮いて東壁近くと西壁近くから土師器高坏の脚部が出土する（2・4）。北壁に接するようにして床面で土師器坏(5)がみつかる。また貯蔵穴近くの床面より5cm浮いたところに土師器甑(6)が出土している。

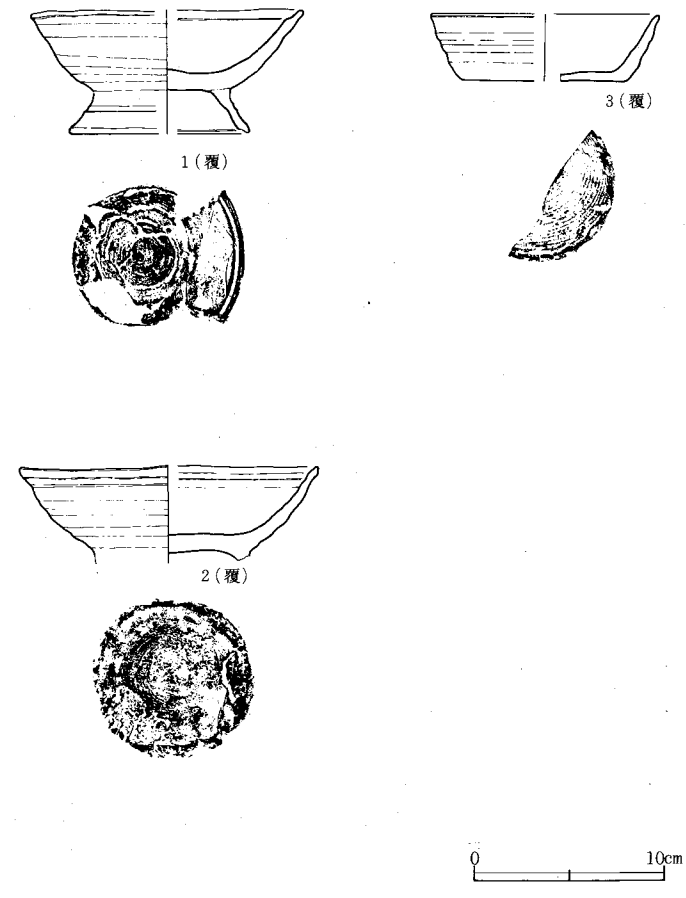
（中澤）

出土遺物　　**土師器**　甕(7)、平底甕の破片である。底部はヘラ削り。体部外面も縦ヘラ削りで、底部の周辺は鋭い削ぎにより調整される。内面はハケ調整。部分的にヘラ削りも加えられる。　甑(6)、折り返し口縁を形成する。口縁部は内外面ヘラナデ、体部は縦ヘラナデ。小破片である。　坏(5)、やや扁平な丸底状を成す。器面は内外面に丁寧な細かいヘラ磨き、口唇部辺に若干の横ナデが認められる。色調は浅黄橙色。　高坏（1～4）、1は稜を形成して、緩やかに開く形状を成す。外面はハケのち細かいヘラ磨き。内面は横及び斜ハケが施される。色調は浅黄橙で、部分的に灰褐色。酸化鉄粒や砂粒を少量含む。2の脚部は柱状を成し、下方で若干の膨みをもつ。稜を形成する。裾部は緩やかに大きく展開する。器面は脚柱部分でヘラナデ、裾部では細かいヘラ磨き。内面は脚柱部分に稜を生じ、横ヘラ削り、裾部にハケが施される。色調は淡黄色。酸化鉄粒や砂粒を含む。3は内外面に丁寧な細かいヘラ磨きの施された、坏部の残闕。外面に緩やかな稜を形成する。4は柱状を成し、内面に稜をもつ脚部の残闕。裾部に小孔片あり。器面はヘラナデされる。　（中束）



図－171　H380号住居跡

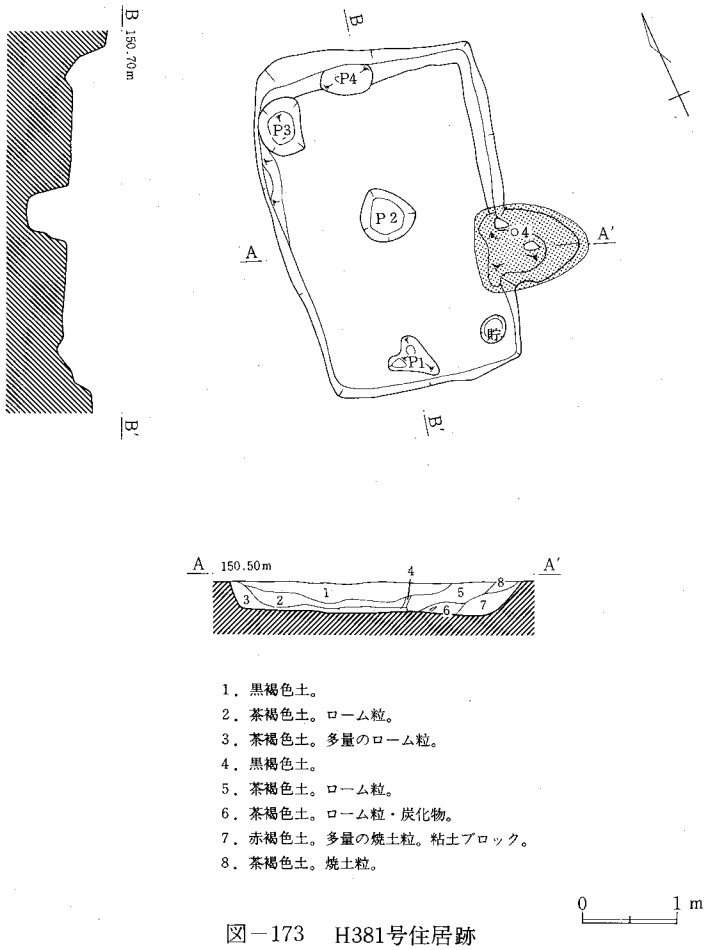
H380号住居跡（5 H－109）　**位置**　調査区域東南端、タ2にある。台地東南部、中央寄りの斜面上に位置する。遺構の分布はやや疎らであるが、58号溝と住居南壁で重複する。**形状**　北東から南西に長軸を持つ隅丸台形で、南北3.39m、東西3.85mである。北壁の東⅓、東壁のカマドを除く部分は、内に寄っている。長軸方向はN－105°－E、面積12.5m²、壁高33～52cmである。周溝は存在しない。**ピット**　南壁東寄り壁直下に1個（P1）ある。規模は48×40cm、深さは不明である。その性格や機能等は不明である。　**カマド**　東壁南寄りにある。両袖部地山を若干掘り残している。原位置とは思われないが、石が残存しており、石材で構築されたものと思われる。全長112cm、袖部内幅90cm、燃焼部長54cm、壁への掘り込み角度65°で、壁外掘り込みは106cmである。住居床面とカマド燃焼部のレベル差は、-5.5cmである。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、長円形が2個重なったような形状を呈する。規模は44×42cm、深さ15cmのものと、50×24cm、深さ34cmのものである。　**遺物**　覆土中から土師質の須恵器椀（1・2）と須恵器坏（3）が出土した。　**重複関係**　58号溝が南壁を切る形で重複する。本遺構がより旧いと考えられる。　（鵜木）



図－172　H380号住居跡出土遺物

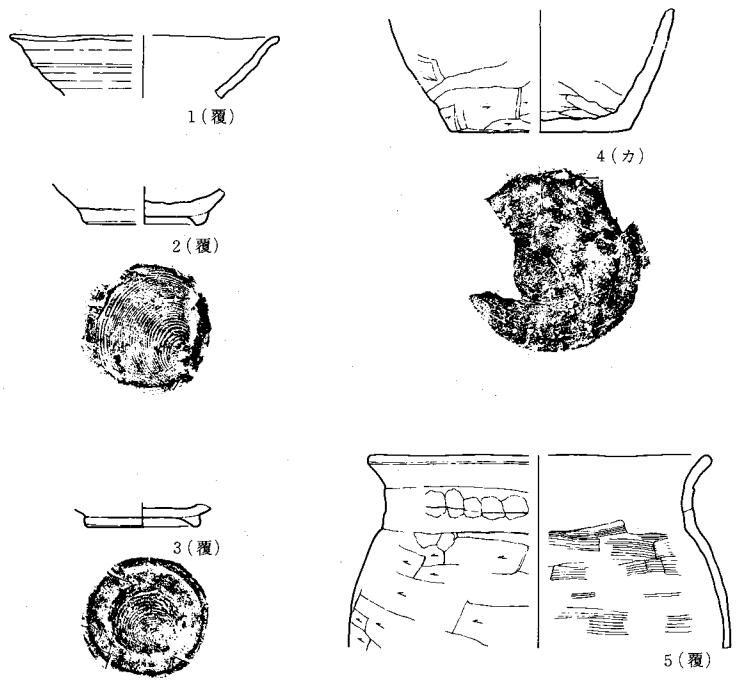
出土遺物　**土師質須恵器**　椀（1・2）、1の体部は比較的肉厚である。体部外面下半部はやや丸味を帯び、内面口唇部辺には緩やかな稜線が形成される。高台部はハの字形に開く〝足高高台〟の形態を成し、端部内面には浅い凹線が巡る。右回転ロクロを使用。体部形成後、底部の切り離しは回転糸切りによる。高台部分は貼り付け高台である。高台部外面周辺部及び底部全面にナデ調整が施される。色調は淡褐色。酸化鉄粒や砂粒を含み、やや軟質である。2も底部辺は比較的肉厚である。体部外面上半部で丸味を帯び、口縁部辺で若干のくびれを成す。口唇部は断面が三角形に近い形態を示し、やや外傾する。内面口縁部辺には2条の浅い凹線が巡る。高台部分を闕失する。右回転ロクロ使用。底部切り離し後、高台部の貼り付け。さらに高台部外面周辺及び底部全面にナデ調整が施される。ナデは口縁部内外面にも施される。色調は淡褐色であるが、1よりも灰色が強い。部分的には暗灰色もみられる。微細な軽石粒や砂粒を含み、軟質である。内面は器面が荒れている。　**須恵器**　坏(3)、破片である。ロクロ成形。ロクロ回転方向不明。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は体部外面で暗灰色、底部及び内面は淡灰色を示す。石粒や少量の砂粒を含み、加えて黒色鉱物の溶解がみられる。焼きしまりは良好である。　（中束）

H381号住居跡（図版34）



図－173　H381号住居跡

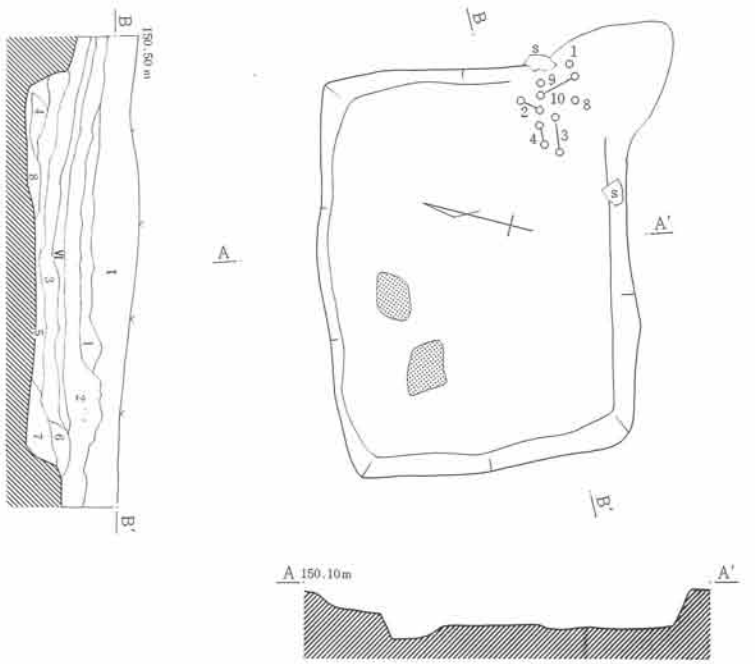
H381号住居跡（5H－110）　**位置**　調査区域南東端、タ2にある。台地南東部の斜面上に位置する。周囲の遺構の分布はやや疎らである。北東にH380号住居跡がある。　**形状**　北西～南東に長軸を持つ台形で、南北3.39m、東西2.39mである。四壁はやや外方へ膨らむ傾向を持ち、北壁は南壁より西端が約20cm長い。北西隅と南西隅は隅丸を呈する。長軸方向はN－15°－E、面積は7.5m²、壁高は17～34cmである。北壁直下とカマド北の東壁直下に周溝が認められる。深さ2～5cm、幅7～20cmである。　**ピット**　床面に3個（P1、P2、P3）、北壁中央の周溝内に1個（P4）ある。P1とP4が位置、形状等から柱穴と思われる。P1は50×44cm、深さ10cm、P4は56×32cm、深さ12cmであり、本住居は2本の主柱穴を持つ建物と推定される。他のピットの性格、機能については不明である。　**カマド**　東壁南寄りにある。左袖部と燃焼部中央にある支石は、凝灰質砂岩である。全長88cm、袖部内幅46cm、燃焼部長52cm、壁への掘り込み角度47°で、壁外掘り込みは80cmである。火床面は住居床面とほぼ同じレベルである。　**貯蔵穴**　南東隅にある。長円形を呈し、規模は32×26cm、深さ56cmである。　**遺物**　カマド内より須恵器甕（4）が出土した。　（鵜木）



図－174　H381号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師質須恵器**（1・2）、1と2は同一個体と思われるが、接合関係は得られなかった。1は外面にロクロ目を残し、口唇部で丸味を帯び、やや外反する。2は左回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。底部には低い高台が貼り付けられる。粗雑で、周辺部のナデ調整も僅かである。1・2ともに色調は灰黄色。底部辺は暗灰色。礫や微細な雲母片を含む。やや軟質である。　**須恵器**　椀(3)、左回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。底部には低い高台が貼り付けられ、周辺部にナデが加えられる。内外面にいぶしがかかる。酸化鉄粒を含む。やや軟質である。　甕(4)、体部下方から底部周辺にかけて、手持ちヘラ削り。内面は指ナデ痕を明瞭に残す。色調は暗灰色。礫や長石を含む。焼きしまり良好。　**土師器**　甕(5)、小破片である。口縁部はコの字形の系譜をとどめ、内外面横ナデが施される。外面には指頭痕を残す。肩部外面は横ヘラ削り。内面には細かな横ハケ調整が加えられる。色調は明褐色。酸化鉄粒や軽石粒を含む。焼きしまり良好。　（中束）

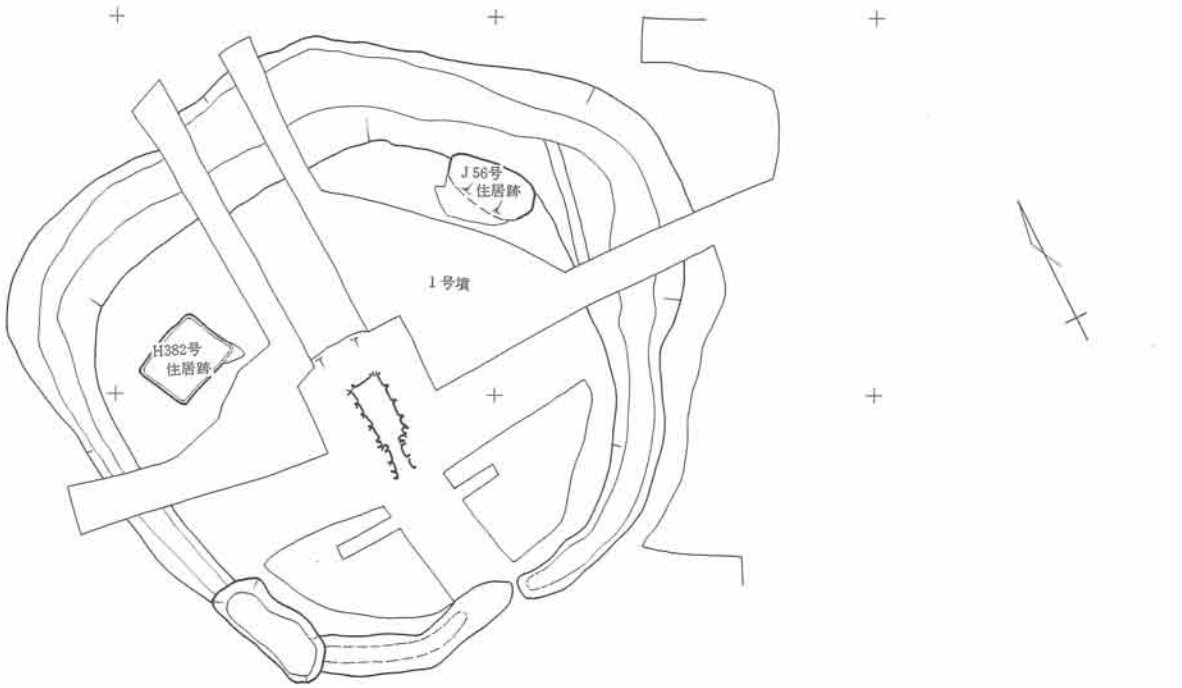
H382号住居跡



図－175　H382号住居跡

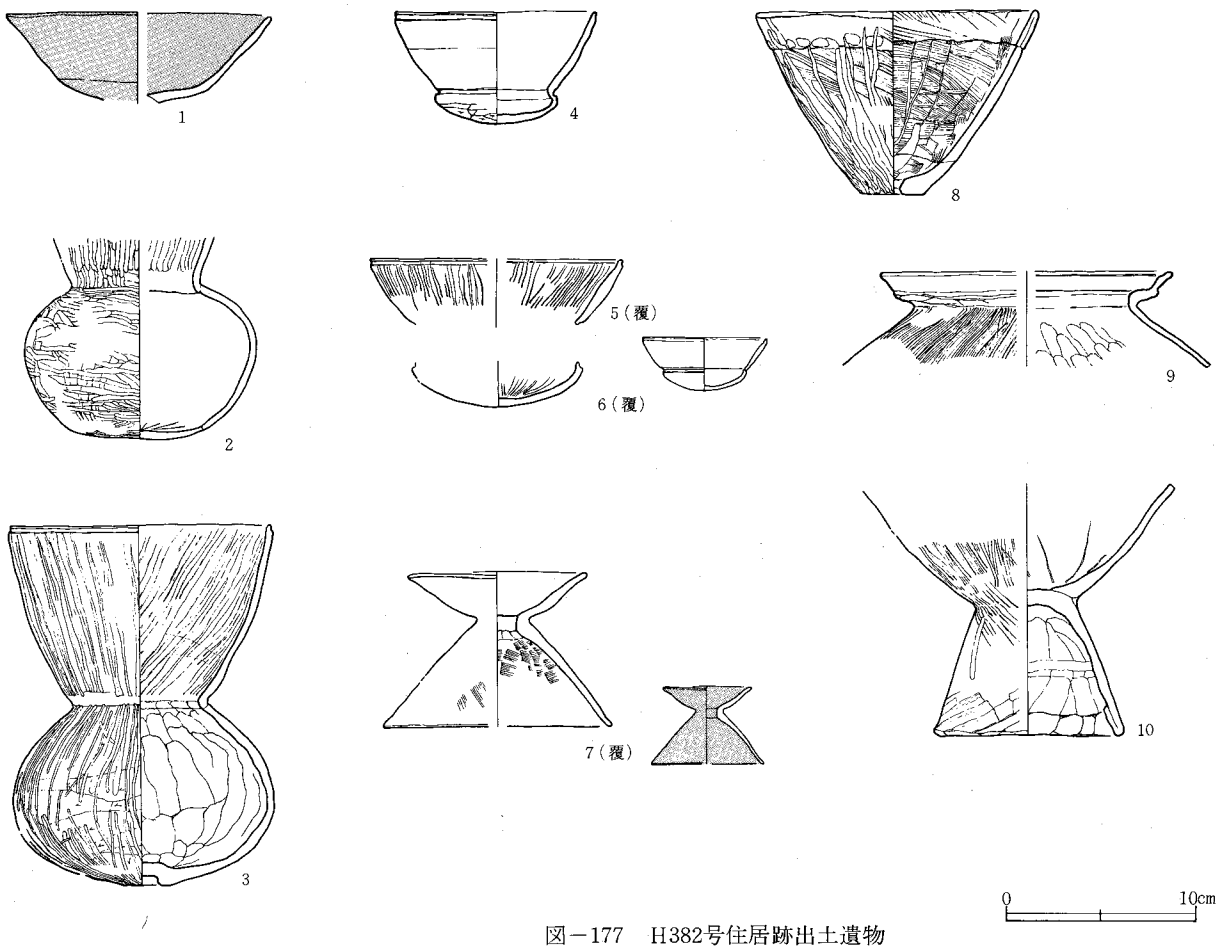
住居跡全景

張り出し部付近遺物出土状態



図－176　H382号住居跡、１号墳関係図

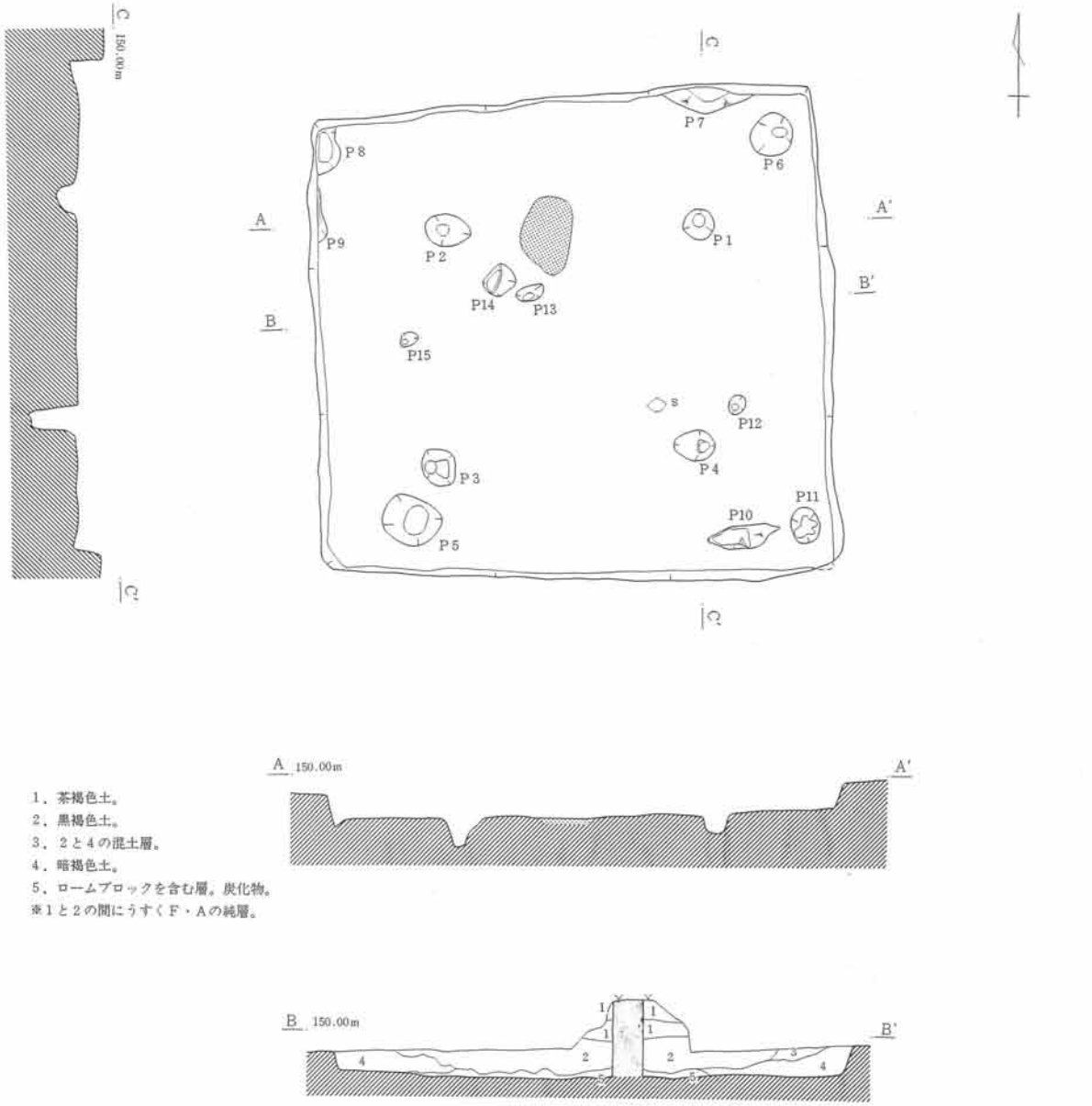
H382号住居跡（5H－111）　**位置**　ル2～3にかけて所在する。台地の東西位置の西寄りに位置し、全体として平坦な所となっている。本住居跡の上には1号墳が構築されており、その墳丘下北西寄りに位置する。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ長方形で、規模は南北3.28、東西3.9mである。北壁は外方に張り、南壁・東壁はほぼ直線、西壁は中央から南半を内に寄せている。長軸方向はN－72°－E、面積10.9㎡、壁高20～44cmである。南東隅には全長120cmの張り出しがある。この部分の土質は地山のローム層と異なり、うすよごれた灰黄薄茶色土でややねばりがあるが、衝撃的にはもろい土質と思われた。本住居跡を埋めていた黒色土層や茶褐色土とはやや異なり、古墳の築土層とも別のものであった。張り出し部覆土中、灰黄茶色土の中に微量の灰状の成分が認められた。カマドに類似する施設とも考えられる。この張り出し基部の左右には、床面には着いていないが、板石が認められた。張り出し部との関係は不明である。　**遺物**　土師器のみ出土した。カマドの張り出し基部付近から高坏(1)、長頸壺(2、3)、小型坩形(4)、甑(8)、台付甕(9、10)が出土した。これらは床面から15～40cm浮いていたが、土層関係より見て後に述べるF・A層よりは下から出土している。覆土中からは小型坩（5・6）、器台（7）が出土しているが、これらも前者の遺物とほぼ同じ所から出土したものとみられる。　**テフラ**　覆土中に、F・Aブロック層を多量に含む層が認められた。住居跡中央付近の最も床面に近い所で18cmである。　**その他**　住居跡北西隅付近に2つの不整方形の焼土が検出された。周囲平面と焼土上端の比高は、西側のもので7cm、東側のもので20cmある。後者東側焼土の地高から考えるとこれら2つの焼土は地床炉とは考えにくい。　（近藤）



図－177　H382号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　長頸壺（2・3）、2の底部は扁平な丸底状を成す。胴部外面はヘラ削り後、細かな横ヘラ磨き。内面は横ヘラナデ。頸部辺横ナデ後、口縁部内外面に細かな縦ヘラ磨き。3の口縁部は大きく内彎し、底部は凹状を成す。口縁部は内外面ハケ目後、細かなヘラ磨き。口唇部は凹が巡る。頸部外面横ナデ。肩部ハケ目、胴下半部ヘラ削り後、全面に細かなヘラ磨き。内面は指ナデ。　台付甕（9・10）、9のS字状口縁は、外反して口唇部がやや丸味を帯びる。内面の外反部分には凹が生じ、沈線的様相を示す。肩部のハケ目は細かく、内面は縦指ナデ。頸部内面にヘラ削り。10の脚部は内面に折り返し、指おさえ、指ナデが施される。外面はハケ目、端部にも弱いハケ目を残し、指ナデされる。　甑(8)口縁部は折り返し、軽く指頭痕を残す。外面はハケ目のち、ヘラ削り。削りの重複部分に光沢が生じる。内面はハケ目のち、底部辺のみ細かなヘラ磨き。　小型坩（4～6）　4と5は口唇部に浅い凹を生じ、口縁径が最大値を示す。4は底部が扁平で、ヘラ削り整形。口縁部は内外面横ナデ。5の口縁部は内外面細かなヘラ磨き。胴部内面ヘラ磨き。外面は磨耗。6は5の復元縮図。　高坏（1）坏部底辺に稜を形成し、内外面丹彩。　器台（7）脚部が発達する。器受部と脚部の接合部分は強くくびれ、直径20㎜程の小孔を穿つ。脚部内外面ハケ調整。全面に丹彩を施す。　（中束）

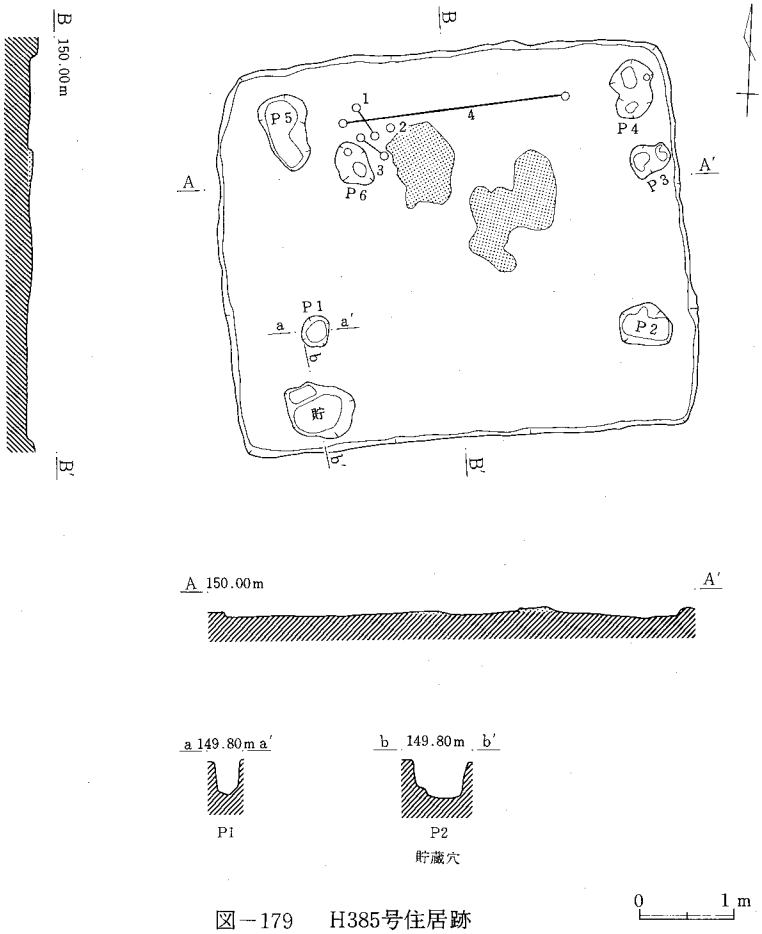
H384号住居跡



図－178　H384号住居跡

H384号住居跡（５Ｈ－113）　**位置**　上武国道予定地の北側タ１に所在する。台地東寄りの平坦地で、すぐ南には古墳時代とみられる52号溝が南北に走る。　**形状**　南北5.5m、東西5.8mのやや東西に長い台形を呈する。四壁は直線的であるが、気持外方に膨みを持つ。東壁は西壁に比べ北側が約30cm、南壁は北壁に比べ東側が12cm長い。長軸方向Ｎ－88°－Ｅ、面積30.7㎡。壁高は検出面からでは北壁の38cmを最大とするが、覆土の堆積状況から見て本来は50cm前後と見られる。　**ピット**　柱穴（Ｐ１～Ｐ４）を持つ。柱穴間の中心距離は東西方向Ｐ１～Ｐ２＝2.97m、Ｐ３～Ｐ４＝3.10m、南北方向Ｐ２～Ｐ３＝2.74m、Ｐ１～Ｐ４＝2.6mである。深さは北側のＰ１、22cm、Ｐ２、33cmであるのに対して、南側の柱列はＰ３、54cm、Ｐ４、58cmと20～30cm程深く掘られている。Ｐ５は66×56cm、深さ45cmで貯蔵穴と見られるが、小規模なＰ６（深さ11cm）、Ｐ11（深さ29cm）も貯蔵穴的なものとも見られる。あるいはＰ１１、Ｐ8（深さ17cm）で補助的な柱穴と見ることもできる。Ｐ７、Ｐ９はＰ８とともに周溝の一部とも見られる。深さはいずれも７cmである。　**炉**　地床炉。住居跡中央北寄りの柱穴Ｐ１、Ｐ２を結ぶ線上に位置する。長円形、88×58cmで、上面は床面と同じレベルである。　**遺物**　西壁下中央やや南寄りから勾玉１個が床面上に出土。　（唐澤）

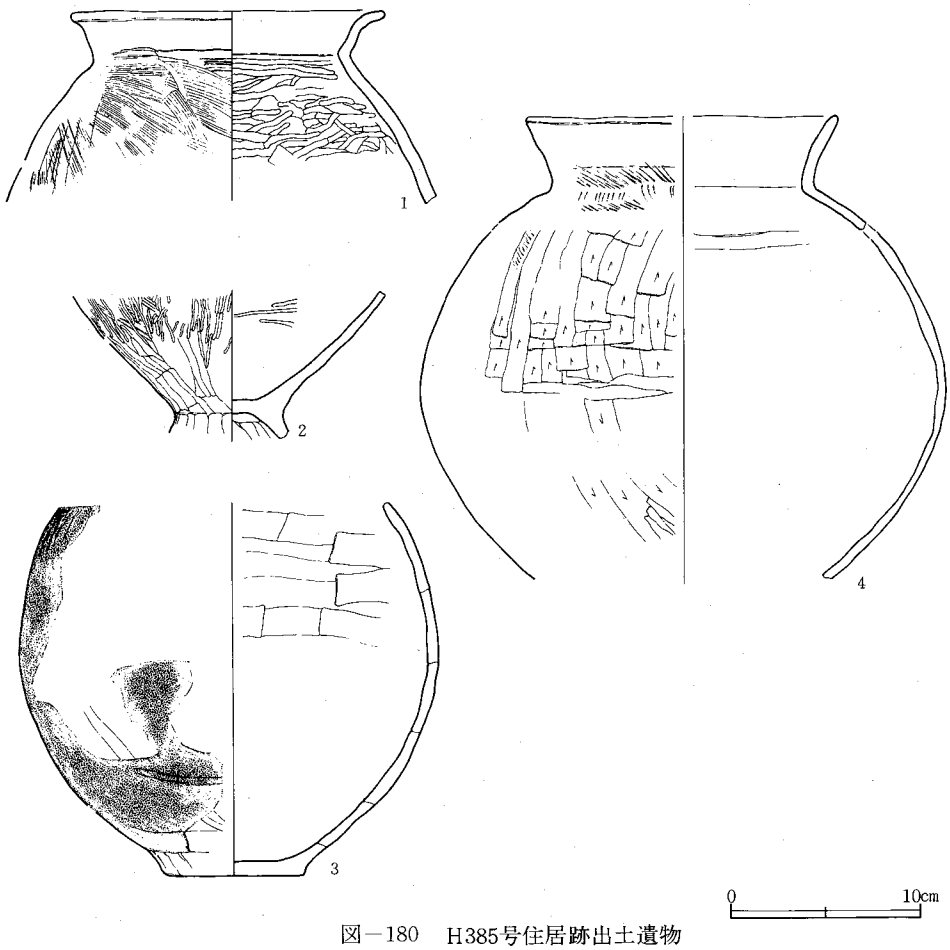
住居跡全景



図－179　H385号住居跡

H385号住居跡（5H－114）　**位置**　調査区域南端、ソ1～2に所在する。台地の東西位置の東端付近に当り、全体としてややなだらかな南斜面に位置する。　**形状**　東西に長軸を持つ長方形で、南北4m、東西4.8mである。四壁ともに直線的で、北東隅、北西隅、南西隅が隅丸になっている。長軸方向はN－83°－E、面積18.9m²、壁高5～11cmである。**ピット**　床面に6個（P1～P6）の柱穴が検出された。これらは炉が2つあることと考え合わせて、建て替えているものと見られる。P1、P2は兼用で、P4、P5は建て替え前、P3、P6は建て替え後のものと考えられる。　**炉**　床面中央やや北寄りと中央付近の東西2ヵ所にある。西寄りの炉は84×56cmの不整形で焼土の厚さは6cmである。東寄りの炉は126×90cmの不整形で焼土の厚さは6cmである。　**貯蔵穴**　南西隅P7が貯蔵穴と考えられる。　**遺物**　西寄りの炉とP6との間床面上5～9cmに土師器甕（1、2、3、4）が出土した。　**その他**　焼土は東が建て替え前で西が建て替え後と推定される。西側の焼土付近では多量の遺物が出土しており、住居の廃棄時まで使用されていたとおもわれる。

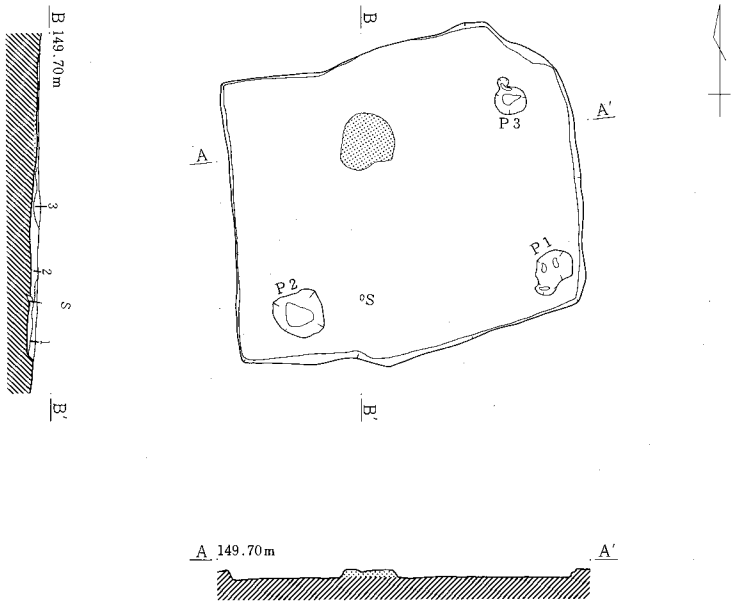
（近藤）



図－180　H385号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1・3）、1は口唇部が強く外反する形状を示す。胴部外面は細かなハケ目、内面は横ヘラ磨きが施される。口縁部外面は粗いハケ目の上に横ナデ、内面では横ナデ後に丁寧なヘラ磨きが加えられる。酸化鉄粒や砂粒を含み、焼成もよい。3は胴上半部に粗いハケ目、下半部に若干ヘラ状の調整痕を残す。内面は横ヘラナデである。軽石粒や砂粒を含み、やや軟質である。壺（4）、の口縁部は直に開く。胴部外面はハケ目の上にヘラ削りを施し、内面は横ヘラナデされる。口縁部は内外面ハケ目の上に横ナデを施す。ハケ目は頸部辺に顕著に残る。台付甕（2）、甕部外面はハケ目の上に細かなヘラ磨きが、甕部下方から脚部にかけてはヘラ削りが加えられる。内面は器面が荒れている。（中束）

H386号住居跡

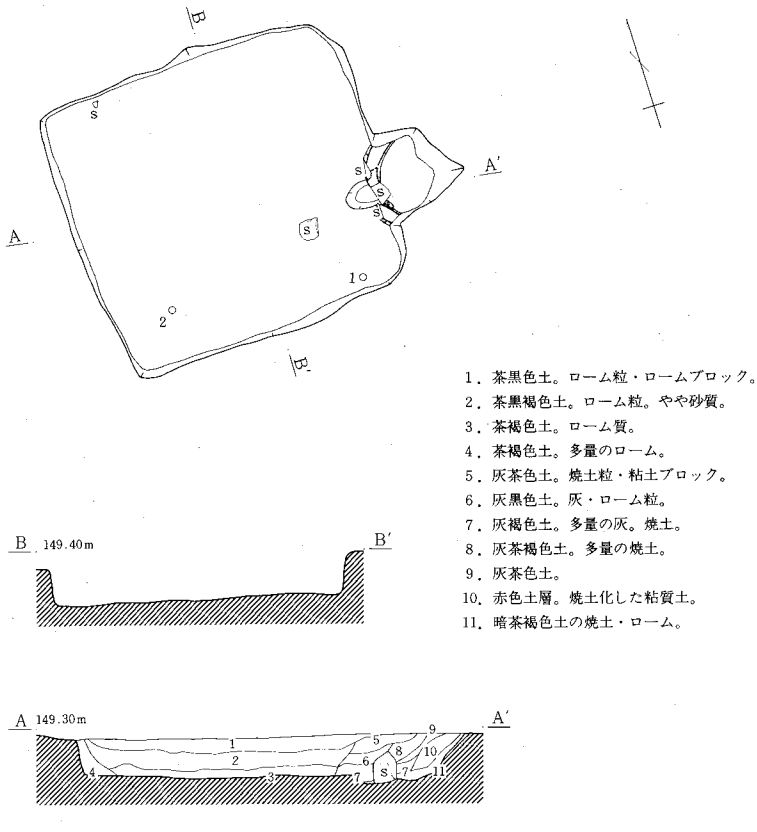


図－181　H386号住居跡

H386号住居跡（5 H－115）　**位置**　調査区域南東端、ソ101～1に所在する。全体としてゆるやかな南傾斜地でH387号住居跡の北西にあたる。　**形状**　東西に長軸を持つ不整方形で、南北2.9m、東西3.6mである。北壁の東三分の二が北へ約45cm程屈曲する。南壁の東側三分の二が北へ約45cmほど屈曲する。東壁と西壁はほぼ直線的傾向を呈している。長軸方向N－93°－E、面積は10.8㎡、壁高2～37cmと南東隅がいちぢるしく少くなくなっている。北西隅が直角を呈し、南東隅が鈍角になっている。　**炉**　住居跡中央北西寄りから不整円形の地床炉が検出された。規模は60×56cmで、周囲床面より9cm程盛り上がっていた。　**ピット**　南東隅近く床面ののP1は径34×48cmで深さ16cm、南西隅近くのP2は径52×48cmで深さ56cm、北東の隅近くP3は径33×40cmで深さ60cmの三カ所で確認出来たが、北西隅については検出されなかった。　**貯蔵穴**　P2が位置及び形状から見て、貯蔵穴の可能性がある。　**遺物**　P1近く床面上より土師器片3個が出土した。　（近藤）

0　1 m

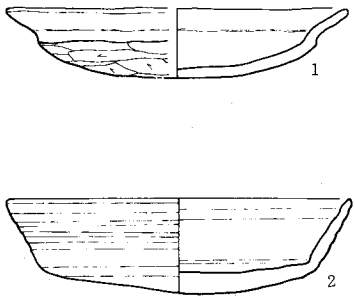
H387号住居跡（図版35）



図－182　H387号住居跡

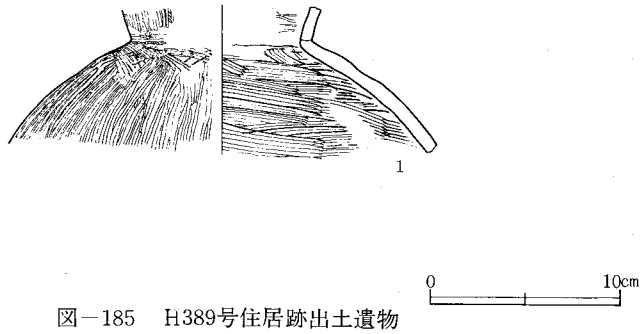
0　1 m

H387号住居跡（5 H－116）　**位置**　調査区域南東端、ツ1～101に所在する。台地の南東隅のゆるやかな傾斜面に当る。　**形状**　北東～南西に長軸を持つほぼ方形状の住居跡で、東西3.2m、南北2.97mである。北壁と東壁はほぼ直線的である。南壁もほぼ直線的で東側四分の一は約15cm内に寄る。西壁もほぼ直線だが南側四分の一は約15cm内に寄る。北東隅と南東隅は隅丸形を呈し、長軸方向はN－87°－E、面積は9.5㎡、壁高45～35cmである。　**カマド**　東壁南寄りにある。全長102cm、袖部内幅33cm、燃焼部長70cm、壁への掘り込み角度69°で、壁外掘り込みは95cmである。火床面は住居面より10cm程低くなっている。袖部には構築材として左右に一石づつ石材を置く。　**遺物**　カマド内左袖付近から土師器甕片、中央付近床面上から須恵器の坏2)、南東隅付近から土師器の坏片（1）が出土している。　**その他**　58溝以南では、数少ないカマドのある住居跡である。　（近藤）



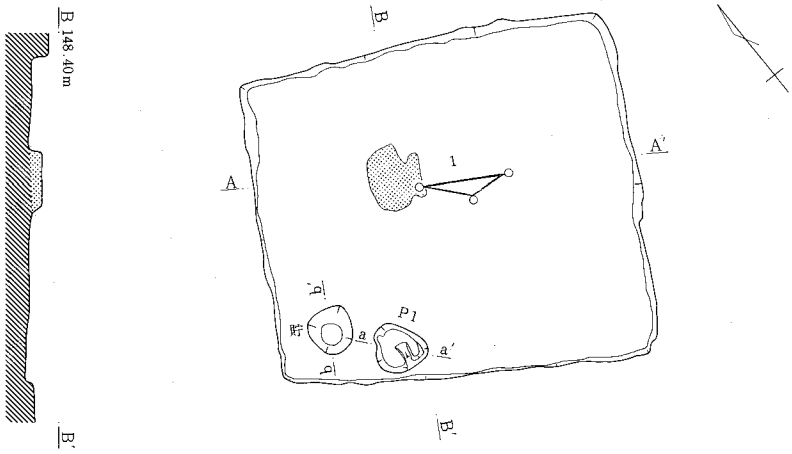
図－183　H387号住居跡出土遺物

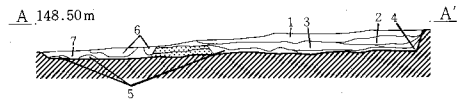
出土遺物　　**土師器**　甕(3)、大型甕の底部片である。底部は僅かに稜を形成する。外面は全面斜ヘラ削り整形。内面はヘラ痕を残す。色調は外面が暗褐色、内面が明褐色を示す。砂粒を多量に含む。外面に煤が付着する。　坏(1)、皿状を示す。口縁部は外反し、内面に段を生じる。底部外面はヘラ削り。口縁部は横ナデ。内面は全面磨耗している。色調は明赤褐色。砂粒や軽石粒を含み、軟質である。　**須恵器**　坏(2)、底部が僅かに張り出して、丸底状を成す大型坏である。底部は全面に丁寧な左回転ヘラ削りを施し、切り離し技法は不明。内面はヘラナデにより平滑である。色調は淡暗灰色。礫や石英粒を含む。焼成は良好。　（中束）



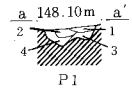
図－185　H389号住居跡出土遺物

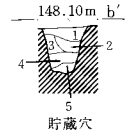
H389号住居跡





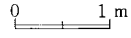
住居跡全体
1．黒色土。
2．暗茶色土。ローム質土と黒色土の混土層。
3．暗茶色土。ロームブロック。
4．褐色土。ローム質。
5．暗灰黒色土。ローム。
6．暗灰黒色土。ローム。
7．暗灰黒色土。ローム。





貯蔵穴
1．黒色土。砂質。
2．黒色土。ローム粒。
3．茶色土。ロームと黒色土との混土層。
4．黒褐色土。ロームブロック。
5．ロームと黒色土の混土層。

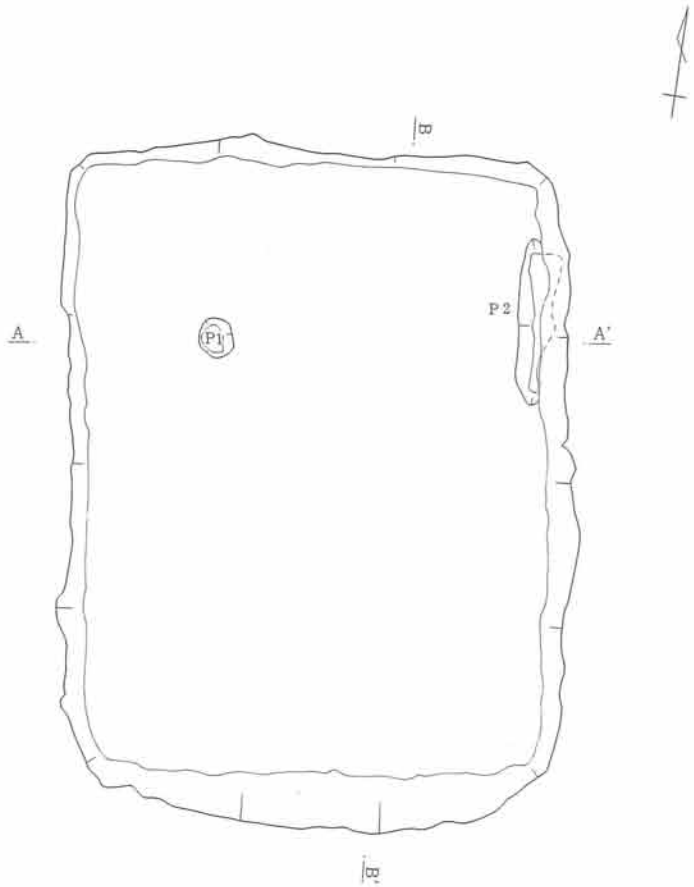
P1
1．薄茶黒色土。ローム質。
2．黒褐色土。ローム粒。
3．茶黒色土。ロームと黒色土の混土層。
4．茶褐色土。ローム質。



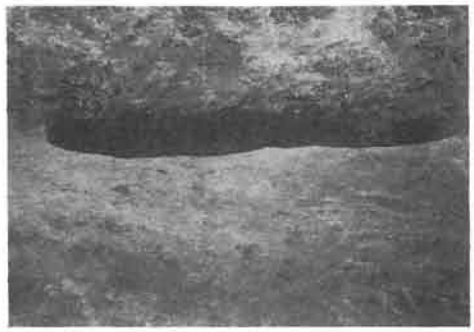
図－184　H389号住居跡

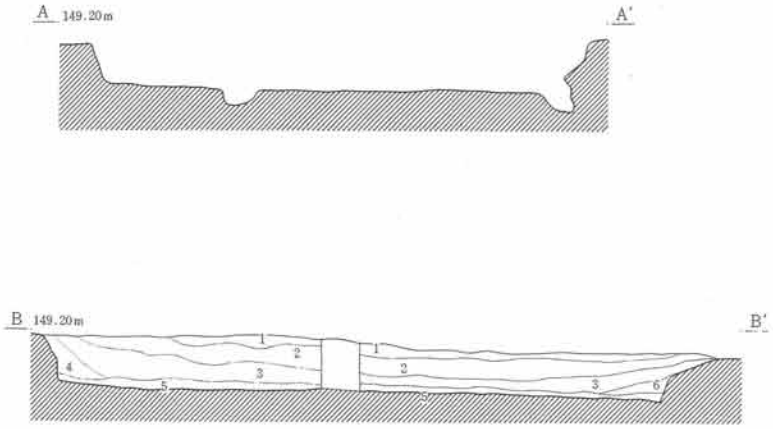
H389号住居跡（5 H－118）　**位置**　調査区域南端、ヨ101に所在する。台地の東西位置の中央付近に当り、全体として平担な所となっている。　**形状**　東西に長軸を持つ台形で、南北3.7m、東西3.9mである。北壁、南壁、東壁は若干外方に膨む。長軸方向はN－118°－E、面積13.2m²、壁高8～24cmである。東壁は西壁に比べ南端が27cm、南壁は北壁に比べ西端が22cm長い。　**ピット**　床面に1個（P1）南西寄りにある。径54×54cm、深さ18～27cmである。　**炉**　住居中央西寄りにある。径68×50cmの不整形で、地床炉の構造をもち、焼土の厚さは14cmを測る。　**貯蔵穴**　南西隅に位置し、円形で径48×46cm、深さ49cmである。　**遺物**　炉内北寄りに2片、炉付近床面上7～11cmから5片の土師器甕上半部が出土している。　（近藤）

出土遺物　　**土師器**　壺(1)肩部外面は丁寧なヘラ磨きにより、光沢が生じる。内面は粗い横ハケ調整。頸部外面には棒状圧痕が巡り、口縁部は縦ヘラ磨き。色調は赤褐色。酸化鉄粒を含む。焼きしまり良好。　（中束）



住居跡全景


P_2全景



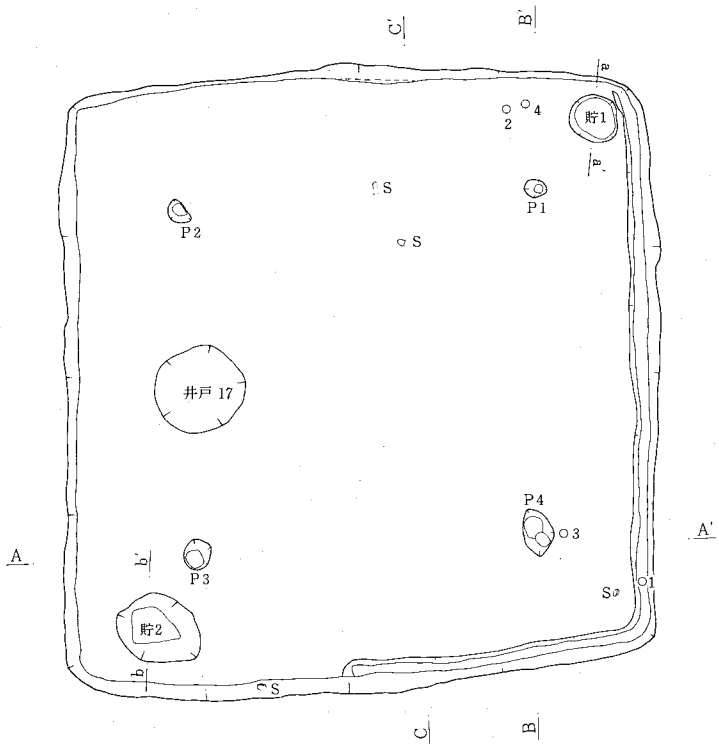
1．茶褐色土。
2．茶褐色土。小量のF・Aブロックを混ぜる。
3．茶褐色土。小量のF・Aブロック。
4．茶褐色土。多量のローム粒。内部に砂礫層。
5．茶褐色土。多量のローム粒。
6．茶褐色土。多量のローム粒。

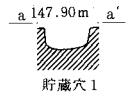
0 1 m

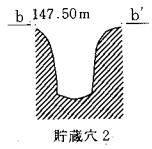
図－186　H388号住居跡

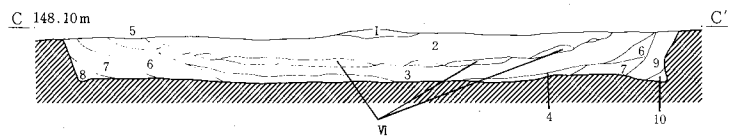
H388号住居跡（5H－117）　**位置**　上武国道予定地に一部がかかる、レ101～102にある。台地東の斜面上に位置する。遺構の分布の疎らな所である。西に接して52号溝が走っている。　**形状**　南北に長軸を持つ隅丸長方形で、南北6.44m、東西4.9mである。壁は東西南北とも直線である（壁下端は細かい凹凸が多いが、全体として直線と見られる）。隅角の状態は北東隅を除いて、すべて隅丸である。長軸方向はN－9°－W、面積は31.1m²、壁高は41～54cmである。周溝は存在しない。　**ピット**　床面に2個ある。P1は北西隅にあり、やや楕円形を呈する。大きさは42×36cm、深さ18cm。断面の形状は丸底の円筒形を呈する。P2は東壁北寄りの壁直下に位置し、東壁に沿って、細長く続いている。大きさは174×40cm、深さ20cm。断面の形状は円錐形を呈し、東壁下部に向かって、斜めに食い込むようにある。これらのピットの機能や性格については不明である。　**炉**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　本住居床面の遺物は皆無であった。ただし、覆土中から縄文式土器の出土が見られた。　**テフラ**　FAブロックの混入が認められる。床面からの距離は、約20cmである。

（鵜木）









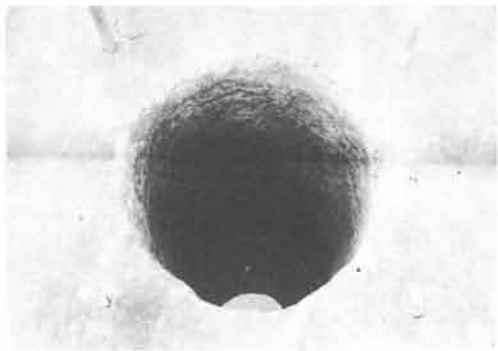
1．黒色土。斑点状の茶黒褐色土を混ぜる。
2．黒色土。
3．漆黒色土。
4．3とロームの混土層。
5．黒褐色土。ローム粒。
6．暗褐色土。ローム粒。
7．暗褐色土。ロームブロック。
8．黒褐色土。
9．9に比べ色調が暗い。
10．暗褐色土。多量のローム粒。

図－187　H390号住居跡

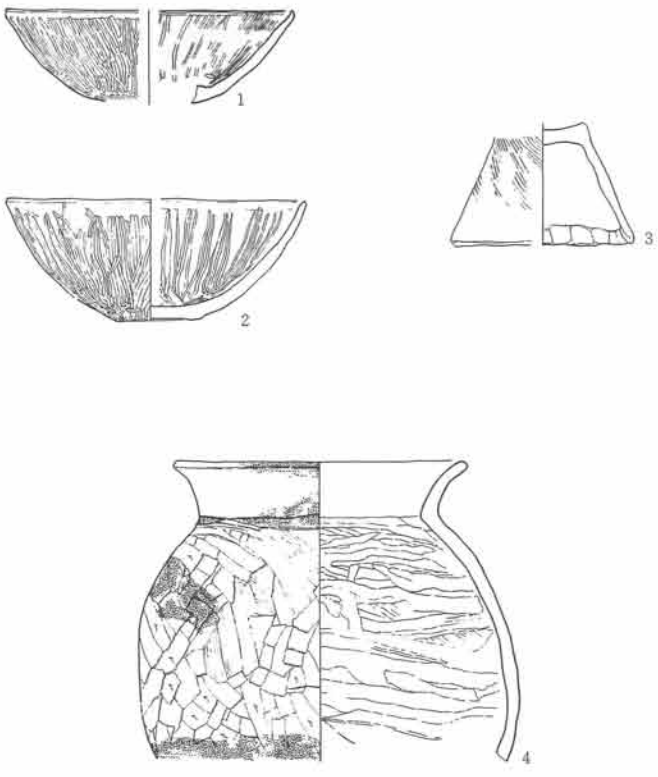
0　1 m

H390号住居跡（5H—119）　**位置**　上武国道予定地の北側カ101～ヨ101にかけて所在する。台地中央やや西寄りの平担地となっている。　**形状**　南北6.3m、東西6mの大型の隅丸長方形。東壁は全体に30cm北へ寄っており、平行四辺形ぎみの形状を呈す。北壁と南壁は外方にやや膨んでいる。長軸方向N—15°—W、面積37.2m²、壁高は住居内覆土の厚さから見て少なくとも70cm前後はあったものと推定される。西壁と北壁の西半には、幅6～17cm、深さ3～8cmの周溝をめぐらす。　**ピット**　4本の柱穴（P1～P4）を持つ。これらは住居対角線上のコーナーから約150cm内に入った所に位置する。径は20cm前後と細い。柱穴の深さはP1・P3、66cm、P2、34cm、P4、56cmである。柱穴間の中心距離は東西方向P1～P2＝3.81、P3～P4＝3.69m、南北方向P1～P4＝3.70m、P2～P3＝3.70mで、柱の配列は正方形を意図したものと見られる。　**炉**　特に認められない。P1・P2中間の床面から長さ14cmの細長い転石2個が検出された。これが地床炉の縁石で、元の位置から大きな移動がなければ、この当りに炉の存在を想定することができる。　**貯蔵穴**　北東隅及び北東隅の2個所に認められた。前者は下端で不整方形を呈し、97×65cm、深さ76cm、後者は円形で、55×40cm、深さ23cm。　**遺物**　西北隅及び南東隅付近にややまとまって出土した。前者は床面から土師器甕（4）、同椀（2）が口縁部を上にして出土した。後者は土師器甕台部（3）が床面上で、同高坏々部（1）が周溝底部から12cm浮いた状態で出土した。　**テフラ**　住居跡中央付近、床面から約15cmの所で、淡黄褐色で榛名山噴出にかかるF・P様の軽石を含む灰層が認められた。F・A層と見られる。　**重複関係**　西壁寄り中央付近で17号井戸と切り合う。覆土より見て、本住居跡の方が旧い。　（唐澤）

住居跡全景



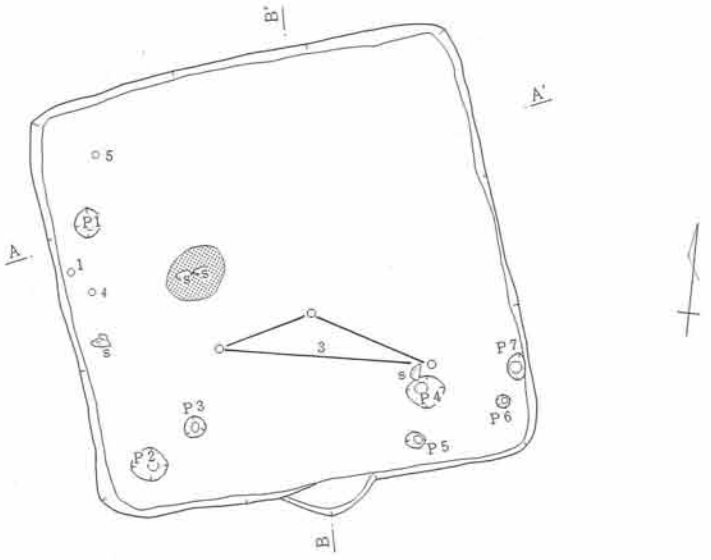
17号井戸全景

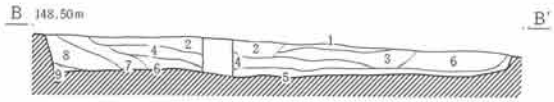


図—188　H390号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　高坏（1）、底部を欠失して坏部のみ残存。内面では体部と底部の境に屈曲が認められ、平坦な坏底部が考えられる。調整は内外全面にヘラ磨きを施す。口縁部内外面には横ナデ痕が残存する。色調は淡褐色。内面に細かい剝落がある。　椀（2）、小さな底部から内彎しながら立ち上がる体部を持つ椀で、1の坏部に似た形状を取る。調整は第1次として口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、体部内面ヘラナデ（？）、底部内外面指押え、第2次調整として体部外面と内部全面にヘラ磨き、底部外面にヘラナデを施す。色調は肌色に近い淡褐色で、部分的に褐色が見られる。　甕（3・4）、3は台付甕、台部のみ残存。やや器高が低く端部の開きも大きい。端部は内側に折り返す。調整手法は内外全面に指押えを施すが、外面はていねいに、内面は指頭痕を顕著に残して雑に仕上げる。外面上半はその後上半部に斜のハケ目を縦帯状に施す。台部上面には放射状のヘラ押えが見られる。4は胴下半部を欠失するが平底甕と見られる。球形の胴部に〝く〟の字状に外返する口縁部を持つ。調整は口縁部内外面に横ナデ、胴部外面は細かいハケ目の後ヘラナデ、同内面は粗いハケ目の後やや細めのヘラ状工具によるナデが施される。胴部内外面の第2次調整はやや雑である。色調は淡褐色で、胎土中に細かい雲母を多量に含む。頸部以下の胴部外面には煤が付着する。　（唐澤）

H391号住居跡



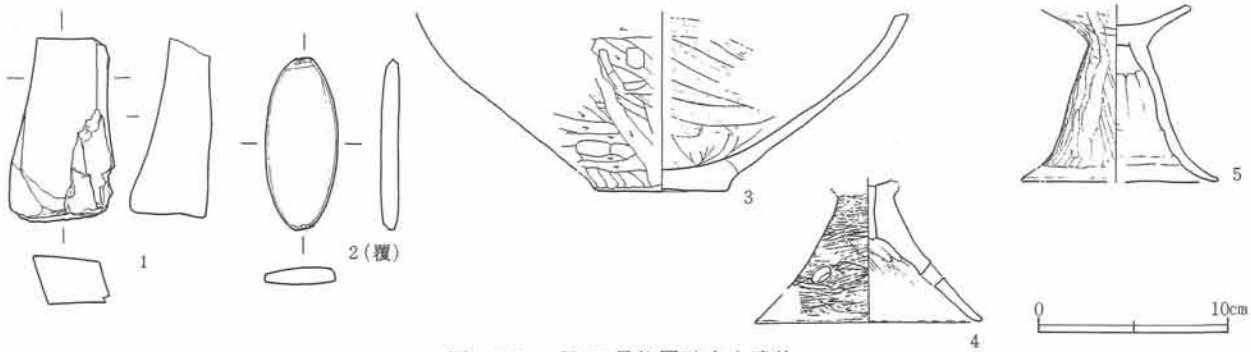


1．茶褐色土。ローム粒。
2．茶褐色土。ローム粒。
3．茶褐色土。多量のローム粒。ロームブロック。
4．茶褐色土。多量のローム粒。
5．茶褐色土。多量のローム粒。
6．茶褐色土。ローム粒。
7．茶褐色土。ローム粒。
8．茶褐色土。多量のローム粒。
9．茶褐色土。ローム質。

図－189　H391号住居跡

住居跡全景

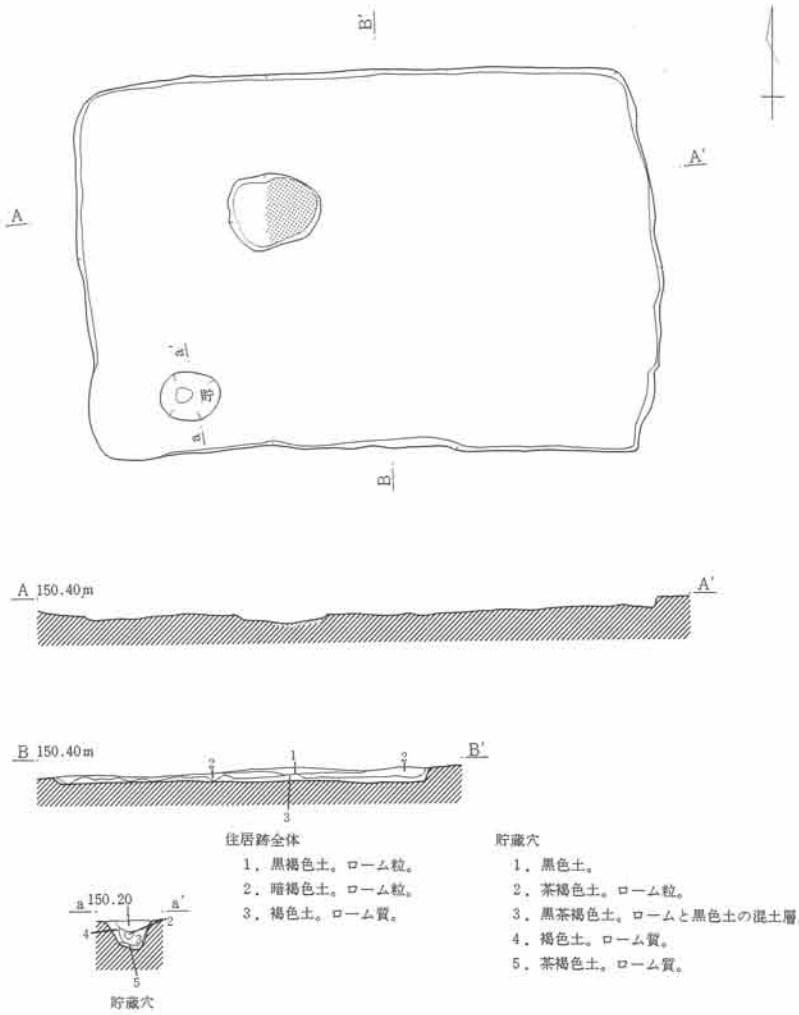
H391号住居跡（5H－120）　**位置**　調査区域南端、ワ101にある。台地の南端のほぼ中央部に位置する。東に接して160号掘立柱建物跡、東南に接して161号、162号掘立柱建物跡がある。　**形状**　東西に長軸を持つ隅丸方形で、南北4.48m、東西4.56mである。南壁と東壁は直線であるが、北壁は外方にやや膨んでいる。西壁は直線を意図したと見られるが、北半分が外方にやや膨らんでいる。なお、南壁は北壁に比べて東端が約20cm、東壁は西壁に比べて北端が約30cm長い。北東隅を除き、角は隅丸である。長軸方向はN－12°－E（南北方向で測定）、面積は20.3m²、壁高は21～41cmである。周溝は存在しない。　**ピット**　床面に7個ある。位置、形状、断面等から推してP1・P2・P4が柱穴と思われる。その他のピットは、機能・性格等不明である。　**炉**　住居中央西寄りに焼土部分がある。やや長めの円形を呈し、大きさは68×56cmである。焼土部分中央に石が2個（長さ15cm前後）並んで置かれており、地床炉と思われる。火床面は床面とほぼ同じ高さである。　**貯蔵穴**　前述のように、床面に5個のピットがあるが、貯蔵穴に相当する構造、形態を持つものは不明であった。　**遺物**　西壁直下中央の床面から、砥石（1）が出土した（一部破損）。また、北西隅付近の床面上から土師器器台（4）が、西壁中央付近の床面より3cm浮いたところから土師器高杯（5）が出土した。　（鵜木）



図－190　H391号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕(3)、平底甕の破片である。胴下半部外面は粘土帯接合部分に粗い斜ハケ目を残し、ヘラ削りされる。内面は斜ハケ目、底部辺には指ナデが施される。色調は外面で明赤褐色、内面で淡黄色である。大粒の酸化鉄粒や微細な石粒を含むが、焼きしまりは良好。　器台(4)、器受部を闕失する。脚部はハの字形を成す。器面は脚部外面で細かな横ヘラ磨き。内面では上半部にハケ目を残し、指ナデ、下半部には横ナデが加えられる。器受部内面には丹彩が施される。器受部中央には直径11㎜程の小孔がみられ、脚部にも直径10㎜程の3個の小孔が穿たれる。色調は暗茶褐色。酸化鉄粒、軽石粒、石英を含む。焼きしまり良好。　高坏(5)、坏部を闕失する。脚部はやや中膨らみで、裾部の広がりは少ない。脚部外面では、粗いハケ目を付ける削り状ヘラ磨きが施される。内面では、坏部及び脚部接合時のほぞ状の形態を留め、指ナデが施される。裾部は内外面横ナデされる。残存する坏部外面には、横ヘラ削りののちに、削り状ヘラ磨きが加えられる。内面では器面が剝離。色調は脚部辺で黒褐色、裾部では明赤褐色。酸化鉄粒や砂粒を含む。やや軟質。　**石製品**　砥石1と用途不明2が出土している。2は扁平で楕円形を示す。周辺部には擦痕がみられ、上下端部にも調整が加えられる。砥石1の素材は赤谷黒色頁岩とみられる。　(中束)

H392号住居跡



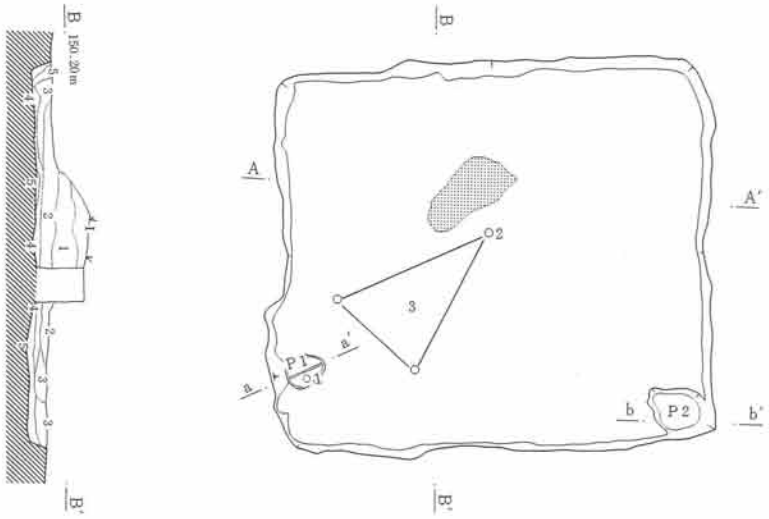
住居跡全景

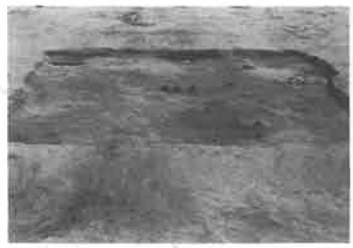
貯蔵穴全景

図－191　H392号住居跡

H392号住居跡（5H－121）　**位置**　上武国道予定地北側の、タ1～レ1に所在する。台地の東西位置のゆるやかな南東傾斜面の中央付近に所在する。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ隅丸長方形で、南北4m、東西6mである。北壁はほぼ直線、南壁は内方に膨む、東壁は外方に張る。西壁もやや外側に張る。隅角は南東隅を除く三隅が隅丸である。長軸方向はN－88°－E、面積は23㎡、壁高4～14cmである。　**炉**　住居ほぼ中央やや西寄りにある。長軸96cm、短軸77cmの半円形である。床面と同レベルの地床炉で、焼土の厚さ10cmである。炉の東半分が深さ8cmのピット状になっている。**貯蔵穴**　南西隅、長円形で規模は長軸64cm、短軸50cm、深さ32cmである。　**その他**　柱穴及びピットはなく遺物についても発見されえなかった。　(近藤)

H393号住居跡





住居跡全景

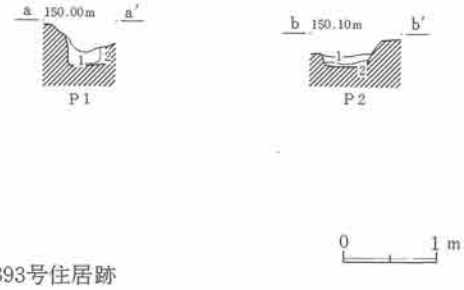
遺物3出土状況

作業風景

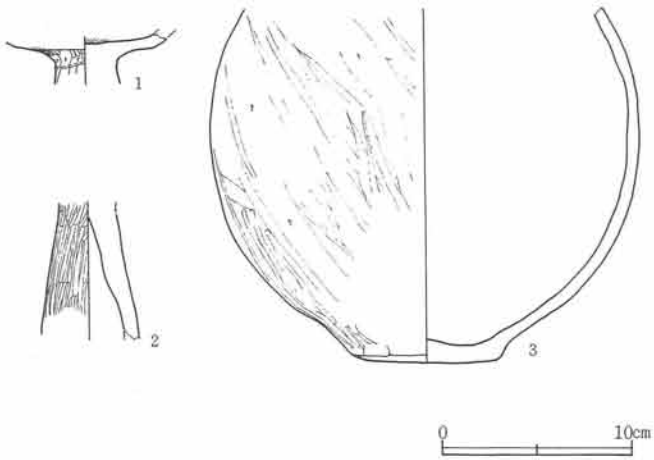
住居跡全体
1．暗褐色土。
2．黒色土。ロームブロック。
3．褐色土。F・Aを含む。
3'．3にロームブロックが入る。F・Aを含む。
4．褐色土。やや黄味が強い。
5．黄褐色土。粘質。多量のロームブロック。

P1
1．茶褐色。ロームと黒色土の混土層。
2．褐色土。ローム質。

P2
1．茶褐色土。ロームと黒色土との混土層。
2．褐色土。ローム質。



図－192　H393号住居跡

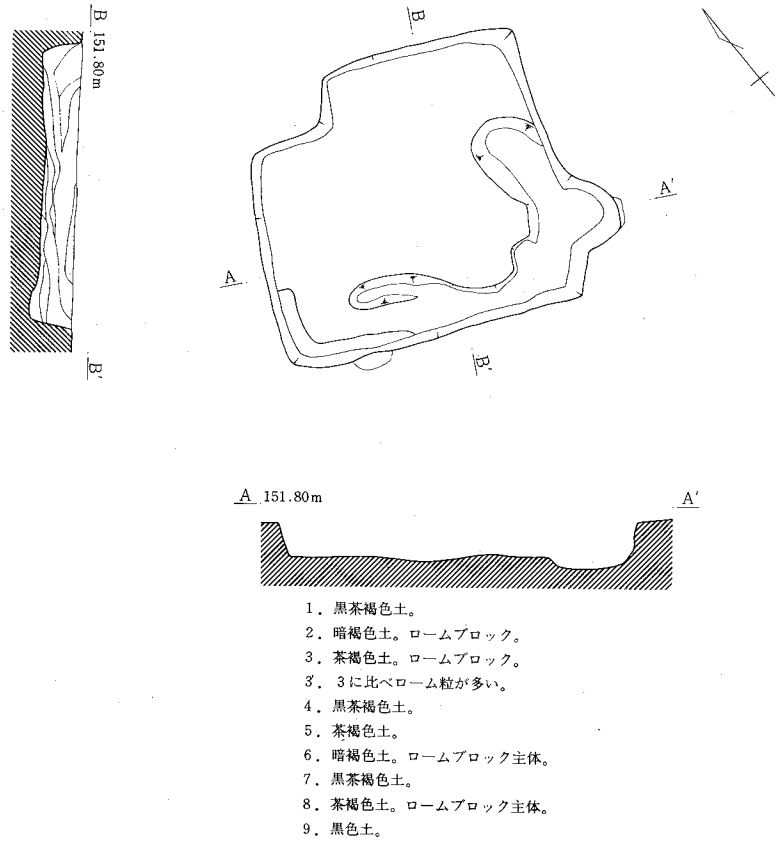


図－193　H393号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（3）、胴部は球胴形。底部は厚みをもって張り出し、平底形態を示す。胴部外面はヘラ削り後、ヘラ磨きが施される。内面は磨耗している。色調は淡黄色。やや軟質である。　高坏（1・2）、1は坏部と脚部の接合部分で、細くくびれる形状を示す。外面はヘラ削り。坏部底辺には僅かに稜が生じる。2は柱状を成す脚部の破片である。外面には、丁寧な細かいヘラ磨きが施される。色調は赤褐色。焼きしまり良好。　（中束）

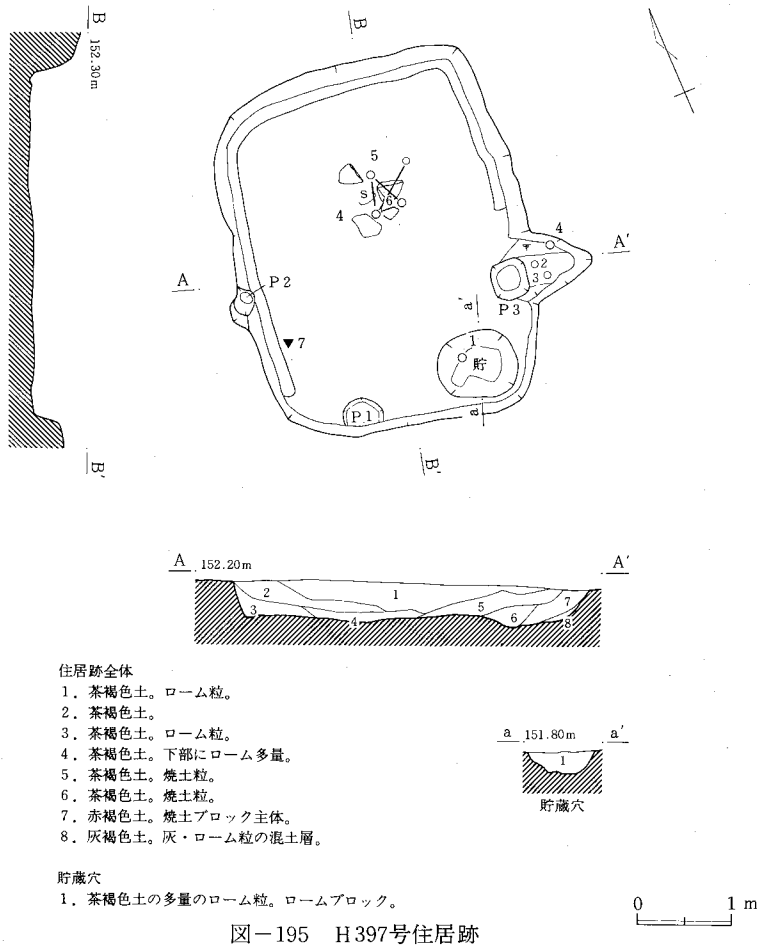
H393号住居跡（5H－122）　**位置**　調査区域南端の、南に張り出した舌状の丘陵の中程、標高150mのレ1に所在する。　**形状**　東西に長軸を持つ長方形で、南北3.9m、東西4.4mである。長軸方向はN－83°－E、面積16.9m²、壁高は遺構確認面から15～26cmと低い。壁はいずれも直線的で、北東と南西の隅がやや隅丸になっているがきっちりとした形をしている。周溝は確認されなかった。　**ピット**　西壁南西隅近く（P1）と南東隅（P2）の2個を検出した。P1は42×38m、深さ29cmの平面形が卵形の円筒形のピットで、覆土中から遺物を出土。P2は66×52cm、深さ5cmの皿形をしている。いずれも性格は不明である。　**炉**　住居中央北寄りに焼土範囲が確認され、それと認めた。不整形で規模は100×52cm。　**遺物**　炉付近床面から高坏脚部（2）、南西隅付近を中心に床面に散乱した状態で甕（3）が、P1から高坏（1）が出土した。　（松村）

H394号住居跡（図版35）



図－194　H394号住居跡

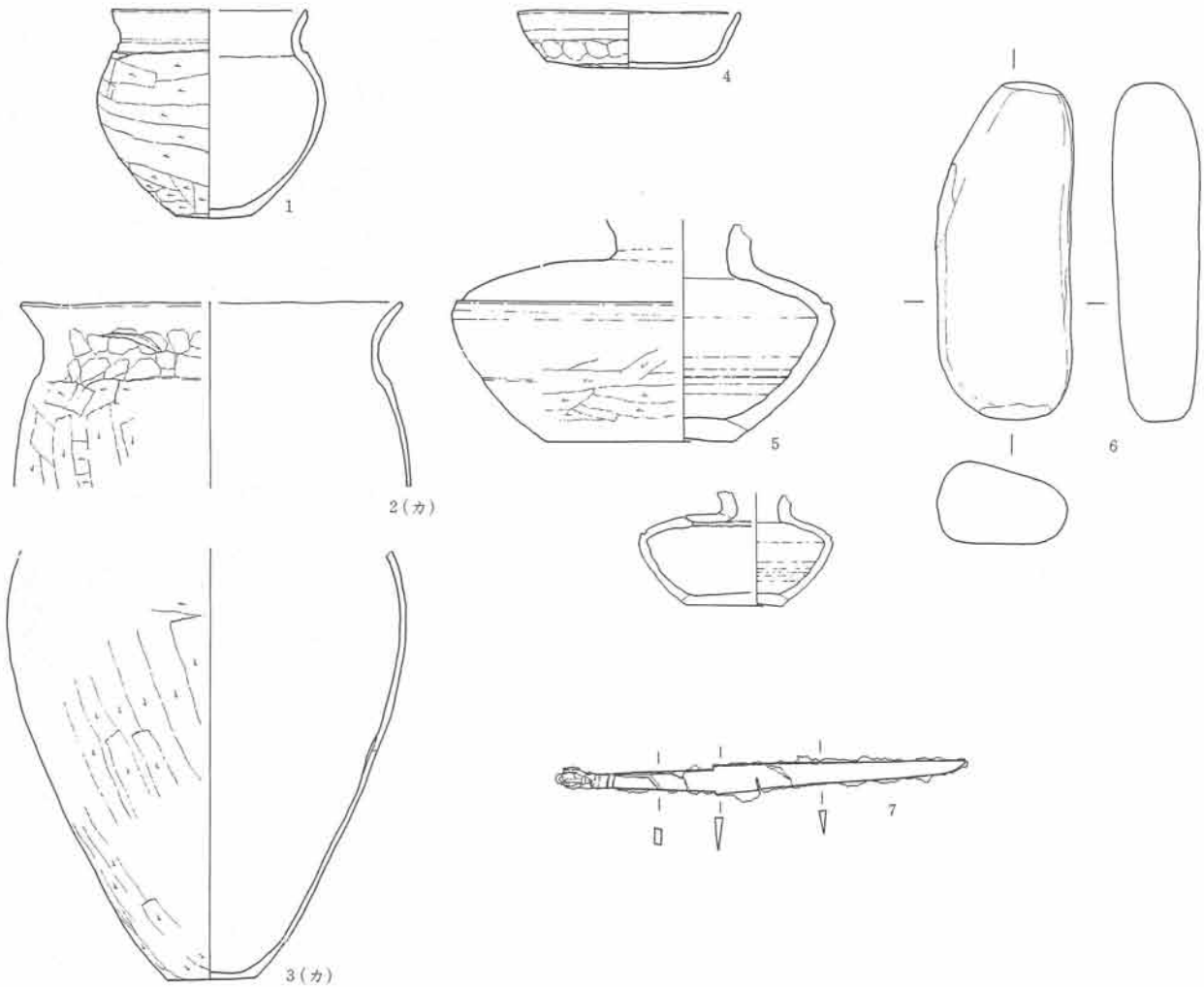
H397号住居跡



図－195　H397号住居跡

H394号住居跡（5H－123）　**位置**　タ4の20m杭をまたいでいる。　**形状**　張り出しのある長方形を呈す。南北2.86m、東西3.18mを測る。北と西では、どちらが張り出し部に該当するかは不明である。従って、張り出し部の規模については測定不可能であるが西壁は2.3m、北壁は2mを測る。壁の形状は北と西壁がほぼ直線、東壁は直線であるがカマドより南は走行を変える。南壁もほぼ直線。36～48cmの壁高をもつ。周溝は南西隅付近のみ残存する。幅12～16cm、深さ9cmの規模である。面積は8.4m²で、長軸方向はN－17°－Eである。　**カマド**　東壁南寄り。全長54cm、燃焼部長39cm、袖部内幅60cm、壁への掘り込み角度74°である。カマドの壁面に焼けの跡が認められない他、覆土中に焼土や灰、炭化物等一切確認できなかった。このことから、本遺構のカマドは未使用と考えられる。　**遺物**　カマド左側前方の床面から鉄滓が出土。　**その他**　①135号建物跡と重複するが、その新旧関係は不明。②カマドに使用の跡が認められないこと、貼床を施すべき箇所に貼床が認められないこと。③住居床面またはその直上から生活に関連した遺物が全く出土していないこと。以上①、②、③のことから、本遺構は住居構築途上において放棄されたものと考えられる。　（中澤）

H397号住居跡（5H－126）　**位置**　ワ5～カ5。　**形状**　南北3.66m、東西2.83mで、北西・南東・南西隅がそれぞれ隅丸を呈する長方形である。壁の形状は、北と南壁がほぼ直線、東壁は大きく外方に膨らむ。西壁の外方への膨らみはわずかである。壁高は32～53cmを測る。長軸は南北で方向をN－26°－Eにとり、面積9.8m²である。周溝はカマド付近と南壁を除くすべてに認められ、幅10～13cm、深さ1～3cmを測る。　**ピット**　3箇確認される。P1は南壁に接して設けられており、42×30cm、深さ6cmを測る。P2は西壁をいく分喰い込むようにして設けられており、26×20cm、深さ18cm（床面から）である。P3は灰かき穴と推定される。　**カマド**　東壁南寄り。両袖部は地山を若干掘り残す。構築材は不明だが、住居床面より焼け石4箇が確認されている。全長80cm、燃焼部長60cm、袖部内幅70cm。　**貯蔵穴**　南東隅。円形で86×72cm、深さ27cm。　**遺物**　貯蔵穴近くの床面より土師器小型甕(1)、床面より5～15cmに須恵の横瓶(5)、カマド内付近より土師器坏(4)、甕（2、3）が出土している。西壁床面からは刀子(7)も確認されている。　**その他**　南東隅を中心に半径約2mの孤を描いた部分の床が非常に固くしまっている。　（中澤）

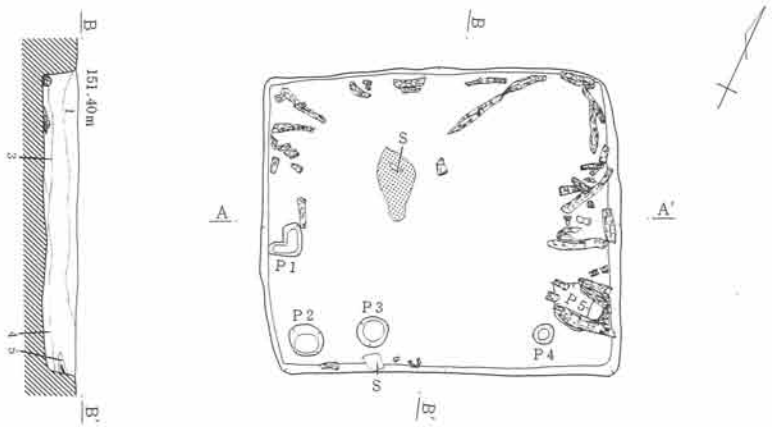


図－196　H397号住居跡出土遺物

遺物等出土状態

出土遺物　**土師器**　甕(2・3)、2の口縁部の形態は、軽く指頭痕を残して立ち上がり、緩やかに外傾する。口縁部は内外面横ナデ。外面にヘラ痕を認める。肩部外面は横ヘラ削り、更に胴下半部に向けて斜ヘラ削り。内面は肩部辺に僅かにヘラ痕を残すが、平滑である。色調は明茶褐色。砂粒を多量に含む。3の胴部外面は斜及び縦ヘラ削り。底部もヘラ削りが施される。胴部内面は粘土接合痕を残し、指ナデが施される。底部辺内面には、放射状のヘラ痕が残る。色調は胴部外面が暗赤褐色、底部が黒褐色、内面では明赤褐色を示す。　小型甕(1)、口縁部の形態は、稜を形成して立ち上がり、口唇部がつまみ上げられて、受け口状を成す。胴部は上半部が張り出して球形となり、底部はやや不安定な平底状を成す。口縁部は内外面横ナデ。胴部外面は横及び斜ヘラ削り。底部もヘラ削りが施される。底部及び周辺部は磨耗している。内面は平滑である。色調はにぶい褐色。砂粒を含む。　坏(4)、平底状を示す。底部は定方向ヘラ削りで、周辺部に調整を加える。体部には軽く指頭痕を残し、口縁部はやや内傾する。口縁部は内外面横ナデ。体部内面にはハケ目を施す。煤状の付着痕を認める。色調は明赤褐色。砂粒を少量含む。　**須恵器**　平瓶(5)、体部を形成後、中央の開口部分に粘土板で蓋をし、更に位置をずらして再び開口。口頸部を貼り付け、指頭圧を加える。口頸部が形成される。口頸部はナデ。体部側面はナデ、のちに手持ちヘラ削りが施される。内面の底部辺は指ナデが施される。(縮図は粘土板の接合状態を示す。)　**鉄製品**　刀子(7)、全長22.4cm、身の部分で長さ13.8cmを計る。両関造りである。茎の断面は長方形、刃部では断面三角形を示す。錆のために刃部はやや彎曲する。茎の部分に若干木片の付着が認められる。　**その他**　6は石英閃緑岩製の磨石である。河床礫を素材とし、長軸方向の上下端に磨痕が認められる。部分的には敲石として使用された可能性もあろう。また、左側辺部に敲打痕が認められる。　(中束)

H398号住居跡

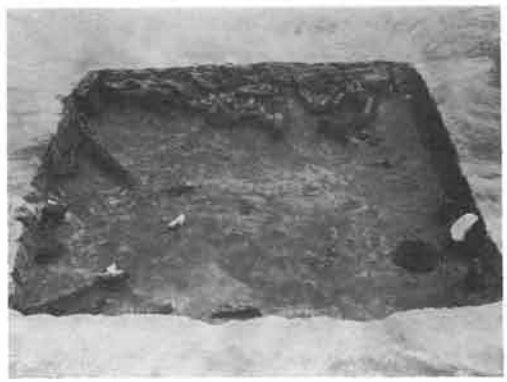


1．黒褐色土。やや黒色強。
2．黒褐色土。ロームブロック。
3．黒褐色土。ローム粒。
4．暗褐色土。比較的多量のローム。
5．黒褐色土。多量の炭化物。

図－197　H398号住居跡

0　1m

住居跡全景

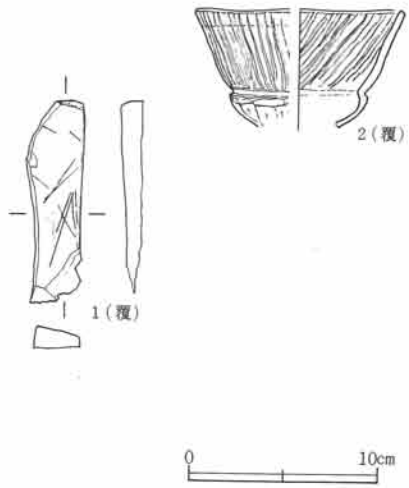


住居跡全景

炭化材出土状況

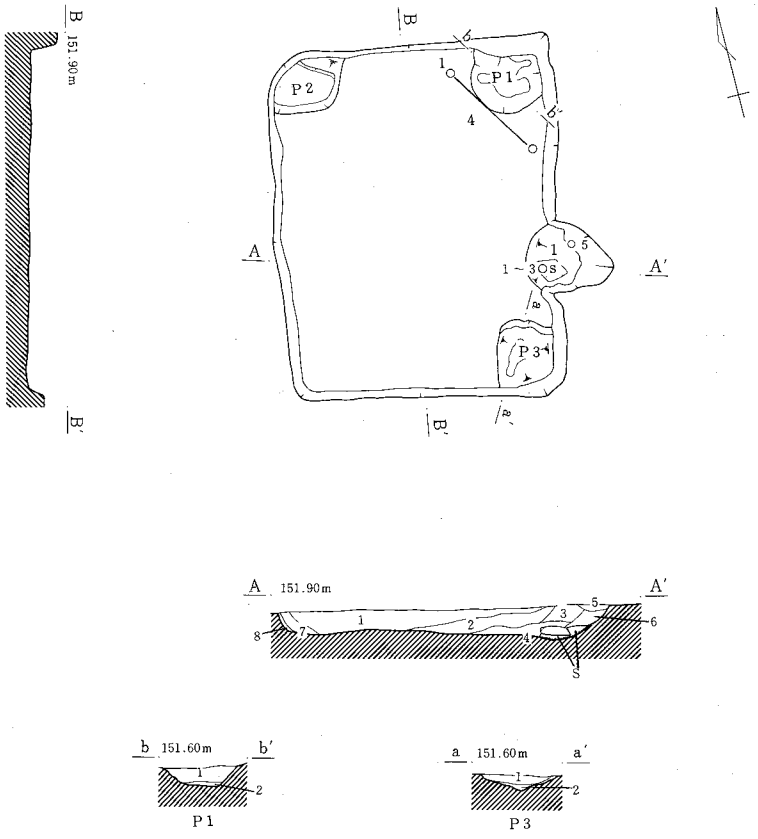
H398号住居跡（5H－127）　**位置**　1号墳の北約20mのヌ3～4に所在する。この辺りが、南に分布の中心を持つ石田川期住居跡の北限となる。　**形状**　南北3.1m、東西3.6mの長方形。北壁はやや外方に膨む。西壁南端を内に寄せて若干こける。北東隅には隅丸の傾向が認められる。全体的には整然とした形を呈す。長軸方向N－65°－E、面積10.9m²、壁高は20～42cmで北側が高い。　**ピット・貯蔵穴**　南西隅付近に3個（P1～P3）、南東隅に2個（P4、P5）の計5個のピットが認められた。このうちP2、P3は径35cm前後×32cm、深さ12cmと他のものより大きく、位置的に見て貯蔵穴と思われる。P1、P4、P5は深さはいずれも8～12cmで性格は不明である。　**炉**　住居跡中央西寄りに東西に細長い焼土が認められた。炉跡と見られる。床面と同レベルで焼けており、焼土上には長さ16cmの細長い安山岩山石がのっていた。炉に使用されたものと見られる。　**遺物**　炉跡の北で床面から浮いて土師器甕片及び同小型坩破片が出土した。覆土中からは小型坩（2）、砥石（1）等が出土した。　**その他**　東壁と北壁沿いの床面ないし同直上から、住居の構築材とみられる炭化材が多量に出土した。炭化材の断面は全体に丸みを持っているが、加工痕等は不明である。炉跡以外にも床面上から焼土塊が出土している。本住居跡は焼失住居と見られる。　（唐澤）

出土遺物　**土師器**　小型坩（2）、口径は胴部径・器高より大きく、胴部径と器高がほぼ等しい。口縁部高は胴部高の2倍強ある。調整手法は、口縁部が内外面横ナデ（外面下部は指頭による押し）後ヘラ磨き、胴部外面は底部中心に向かうヘラ削り、同内面は指頭痕が認められる。口縁部と胴部は溝状の深い凹線で分かれる。色調は淡褐色で、口縁部下半以下の外面に黒斑を留める。つくりは概してていねいである。　**石製品**　砥石（1）、細長い平板な砥石。両端の小口面を除く6面が使用されている。頁岩。　（唐澤）



図－198　H398号住居跡出土遺物

H399号住居跡（図版36）



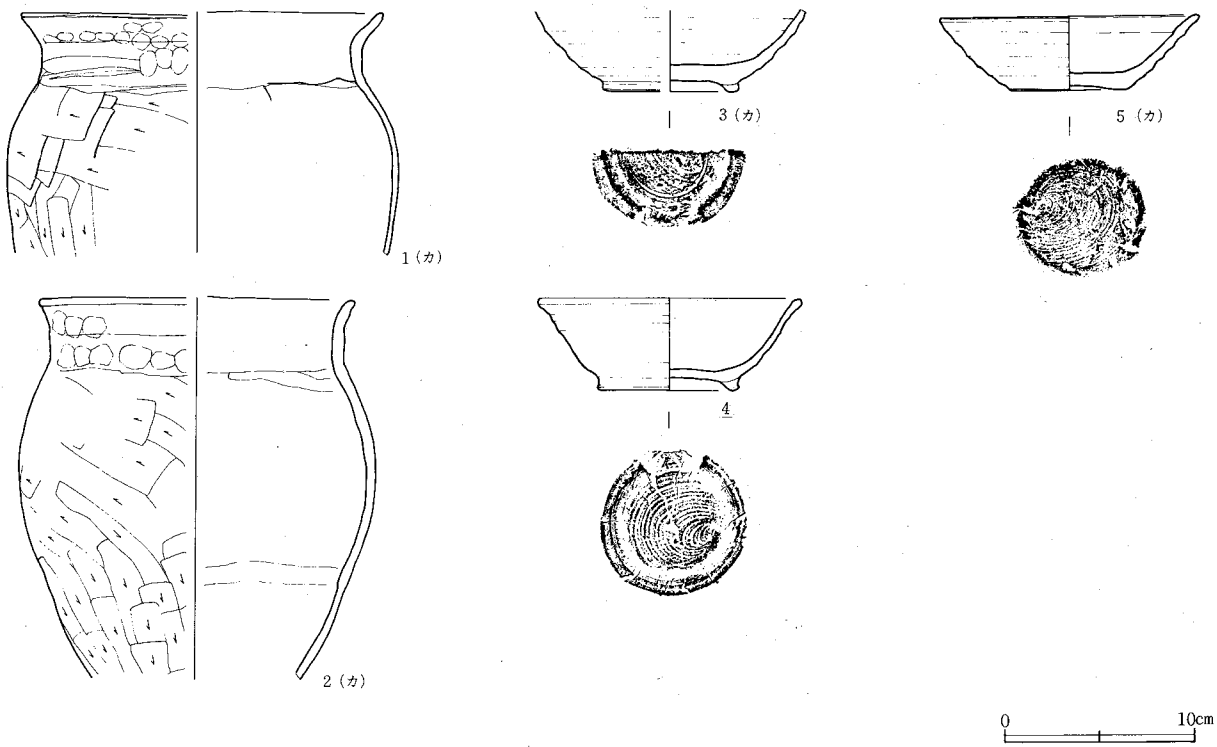
住居跡全体
1．黒色土。
2．灰茶褐色土。多量のローム。
3．黒褐色土。
4．灰茶色土。多量の灰。
5．赤褐色土。多量の焼土。
6．茶色土。灰・ロームブロック。
7．黒色土。
8．褐色土。多量のローム。

P1
1．茶褐色土。ローム粒・ロームブロック。
2．暗褐色土。ロームブロックと茶褐色土の回混土。

P3
1．淡褐色（肌色）土。粘土主体の粘土粒。
2．ロームと黒色土の混土層。

図－199　H399号住居跡　0　1 m

H399号住居跡（5H－128）　**位置**　調査区域中央部ワ5～7に所在する。台地の東西位置の中央付近に当り、全体として平坦な所となっている。　**形状**　南北に長軸を持つ長方形で、南北3.6m、東西2.8mである。北壁と南壁は直線的である。なお、東壁は西壁に比べ南端が約25cm、北壁は南壁に比べ東端が約15cm長い。西壁中央南寄りの壁の一部が外方に弱く突出している。長軸方向はN－28°－E、面積は9.8m²、壁高21～35cmである。　**ピット**　南西隅を除く三隅床面にある（P1、P2、P3）。形はいずれも皿形で、P1は径74×60cm、深さ24cm、P2は径68×56cm、深さ13cm、P3は径73×60cm、深さ17cmである。P3は貯蔵穴とも考えられるが、P1、P2と形状、規模等が類似していることから柱穴と考えられる。　**カマド**　東壁中央寄りにある。右側袖部はロームを掘り残している。全長74cm、袖部内幅66cm、燃焼部長40cm、壁外掘り込みは68cmである。　**遺物**　カマド内より土師甕（1、2）、須恵器坏（5）、同埦(3)が、P1付近から須恵器埦（4）、埋土中から須恵器坏が出土した。　（近藤）

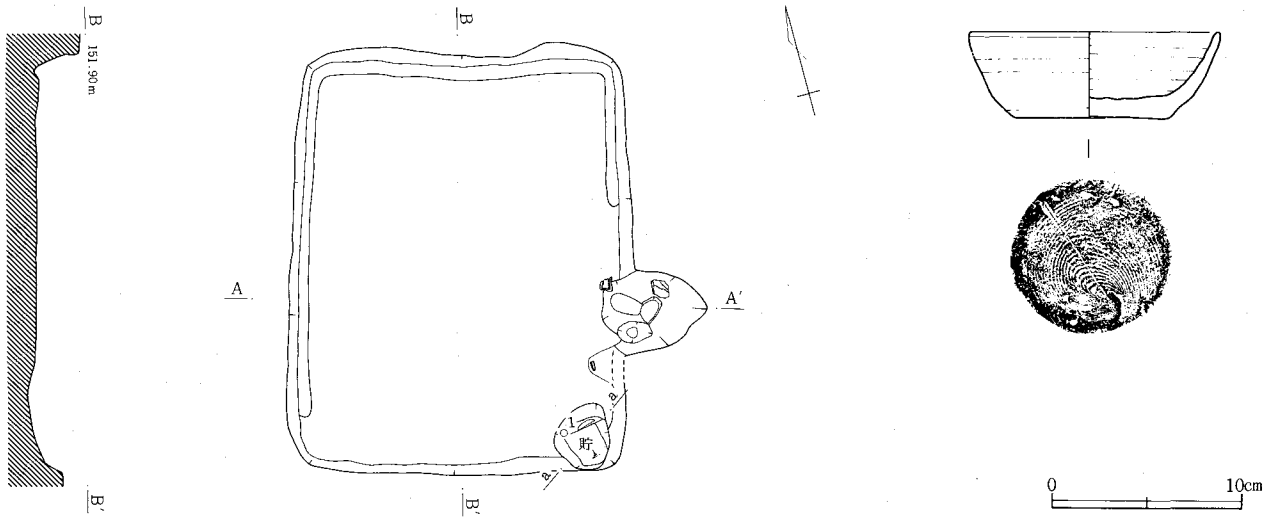


図－200　H399号住居跡出土遺物

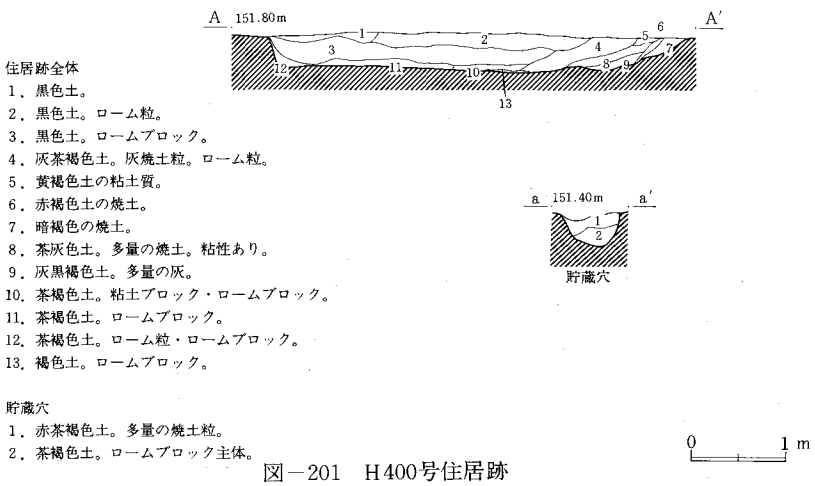
出土遺物　**土師器**　甕(1・2)、1の口縁部の形態は、外面に指頭痕を残し、受け口状を成す。肩部が若干張り出す。口縁部は内外面横ナデ。頸部辺にヘラ痕付着。肩部外面は横ヘラ削り、胴下半部に向けて、縦及び斜ヘラ削りが施される。頸部辺内面に、粘土接合痕及びヘラ痕を認める。色調は暗赤褐色。砂粒を含む。焼きしまり良好。口縁部内外面に炭化物の付着痕を認める。2の口縁部の形態は、外面に軽く指頭痕を残して直に立ち上がる。口唇部は丸味を帯びて、外傾する。口縁部は内外面横ナデ、胴上半部外面は斜ヘラ削り、更に下半部に向けて縦ヘラ削りされる。内面では、頸部辺にヘラ痕、胴下半部寄りに粘土接合痕を認める。色調は明褐色。軽石粒や砂粒を多量に含み、軟質である。　**須恵器**　坏(5)、ロクロ成形。底部切り離しは回転糸切り。外面はロクロ目が顕著であり、内面口縁部辺に僅かな稜が生じる。色調は灰白色で、やや浅黄橙色を帯びるが、底部辺は黒灰色。酸化鉄粒や軽石粒、多量の砂粒を含み、軟質である。　埦(3・4)、ロクロ成形。底部切り離しは回転糸切り。更に高台部貼り付け後、周辺部にナデを施す。4は内外面ナデ。3の色調は灰白色。4は淡灰色。ともに礫や砂粒を多量に含み、軟質である。　(中束)

H400号住居跡

H400号住居跡(5H—129)　**位置**　調査区域中央、ヲ5～ワ5に所在する。台地の東西位置の中央付近に当たり、全体として平坦な所となっている。　**形状**　北西～南東に長軸を持つ隅丸長方形で、南北4.2m、東西3.34mである。北壁はやや内側に膨みを持つが、他壁面はほぼ直線的である。長軸方向はN—15°—E、面積14.3m²、壁高33～42cmである。北壁全部と東壁北3分の1、西壁北10分の1には周溝をめぐらす。幅8～14cm、深さ1～3cmである。　**貯蔵穴**　南東の隅壁にかかって1個ある。不整円形で、径64×60cm、深さ34cmを測る。　**カマド**　東壁南寄りにある。左右袖部付近の石は浮いている。左壁の石は壁よりズリ落ちたかっこうで出土、いずれもカマド構築材として使用された可能性が濃い。全長96cm、袖部内幅68cm、燃焼部長46cmで、壁外掘り込みは96cmである。火床面は住居床面とほぼ同じ高さである。　**遺物**　貯蔵穴内覆土中から須恵器坏(1)が1個出土している。　**その他**　床面でピットは、確認することが出来なかった。　(近藤)



図—202　H400号住居跡出土遺物



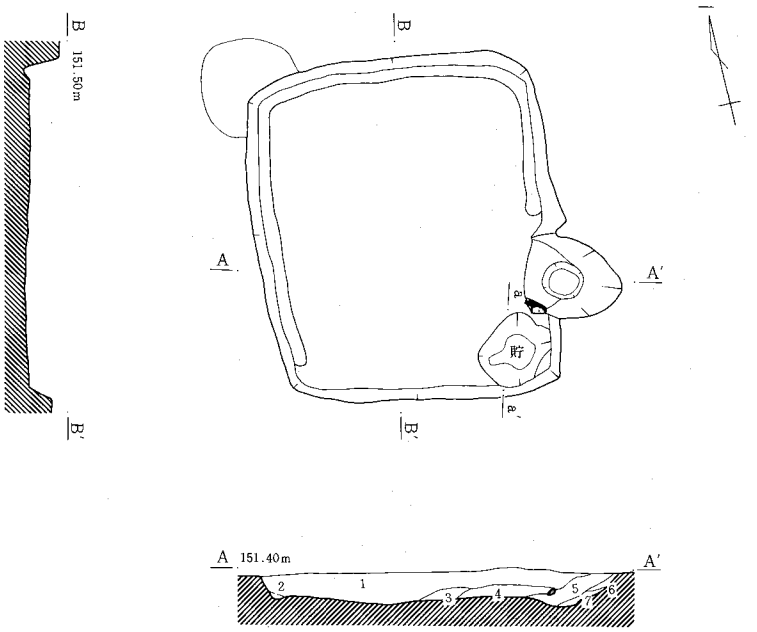
住居跡全体
1．黒色土。
2．黒色土。ローム粒。
3．黒色土。ロームブロック。
4．灰茶褐色土。灰焼土粒。ローム粒。
5．黄褐色土の粘土質。
6．赤褐色土の焼土。
7．暗褐色の焼土。
8．茶灰色土。多量の焼土。粘性あり。
9．灰黒褐色土。多量の灰。
10．茶褐色土。粘土ブロック・ロームブロック。
11．茶褐色土。ロームブロック。
12．茶褐色土。ローム粒・ロームブロック。
13．褐色土。ロームブロック。

貯蔵穴
1．赤茶褐色土。多量の焼土粒。
2．茶褐色土。ロームブロック主体。

図—201　H400号住居跡

出土遺物　**須恵器**　坏(1)右回転ロクロ使用。底部の切り離しは回転糸切りによる。底部の作りは比較的厚手で、内面にはロクロ目が顕著に残る。底部から体部への移行位置に、若干くびれが生じ、更に内湾する体部・口縁部が形成される。色調は淡青灰色。礫や軽石粒、多量の砂粒を含み、軟質である。外面底部周辺は磨耗している。　(中束)

H401号住居跡



住居跡全体
1．茶褐色土。
2．暗褐色土。ローム主体。
3．茶褐色土。多量のローム粒。
4．茶褐色土。焼土粒。
5．焼土化ロームブロック層。
6．赤茶褐色土。やや焼土化したローム主体。
7．赤茶褐色土。多量の焼土粒。ローム粒。

貯蔵穴
1．黒褐色土。焼土粒・炭化粒。
2．ロームと茶褐色土の混土層。

0　1 m

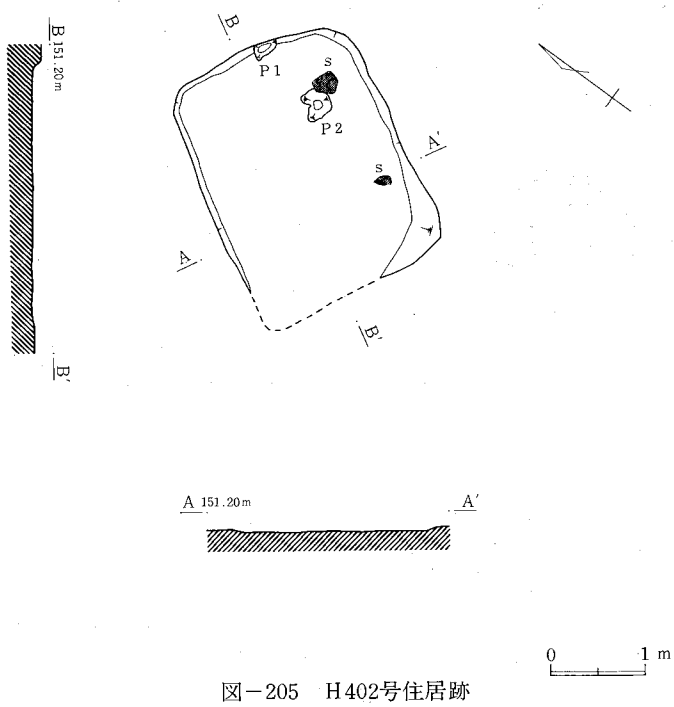
図－203　H401号住居跡

H401号住居跡（5 H－130）　**位置**　ワ4北部。　**形状**　南北3.43m、東西2.29mで四隅がいずれも隅丸を呈する長方形である。壁の形状は南と東壁が直線を描き、北と西壁は外方に膨らむ。壁高は16～34cmである。周溝はカマド付近および南壁を除いて全て認められ、幅10～16cm、深さ1～6cmを測る。長軸は南北で方向はN－22°－Eを測り、面積は9.4m²である。　**床**　南東隅を中心にして東壁長の約½を半径に描いた扇形の内部が固くしまっている。　**ピット**　なし。　**カマド**　東壁南寄り。袖部右側に石一箇残存。全長102cm、燃焼部長56cm、袖部内幅60cm、壁への掘り込み角度47°である。　**貯蔵穴**　南東隅に位置し隅丸長方形を呈する。78×76cm、深さ30cmを測る。覆土には多くの炭化粒と焼土粒が混入している。　**遺物**　住居床面北西部より鉄滓が2箇出土する。覆土中からは須恵器坏（1）が出土。　**重複関係**　北西隅でF196号土坑と切り合う。覆土から見て本住居跡の方が旧い。　（中澤）

図－204　H401号住居址出土遺物

出土遺物　　**須恵器**　椀（1）小破片である。ロクロによる成形。底部切り離し後、高台部貼り付け。高台部周辺をナデ調整。色調は淡青灰色。砂粒を含み、軟質である。（中束）

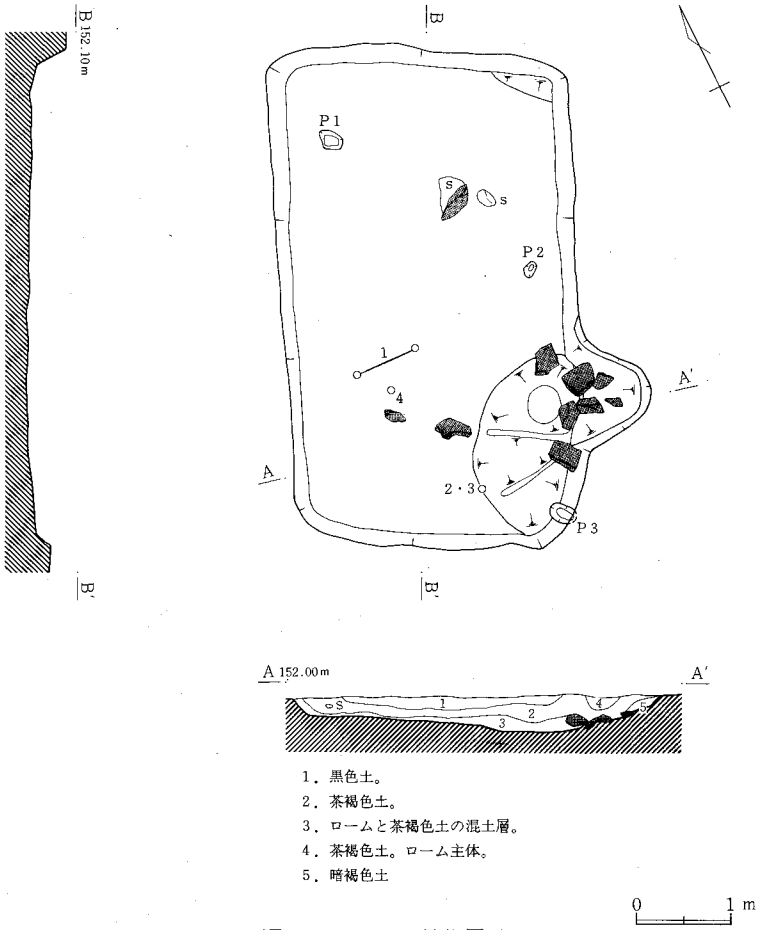
H402号住居跡



図－205　H402号住居跡

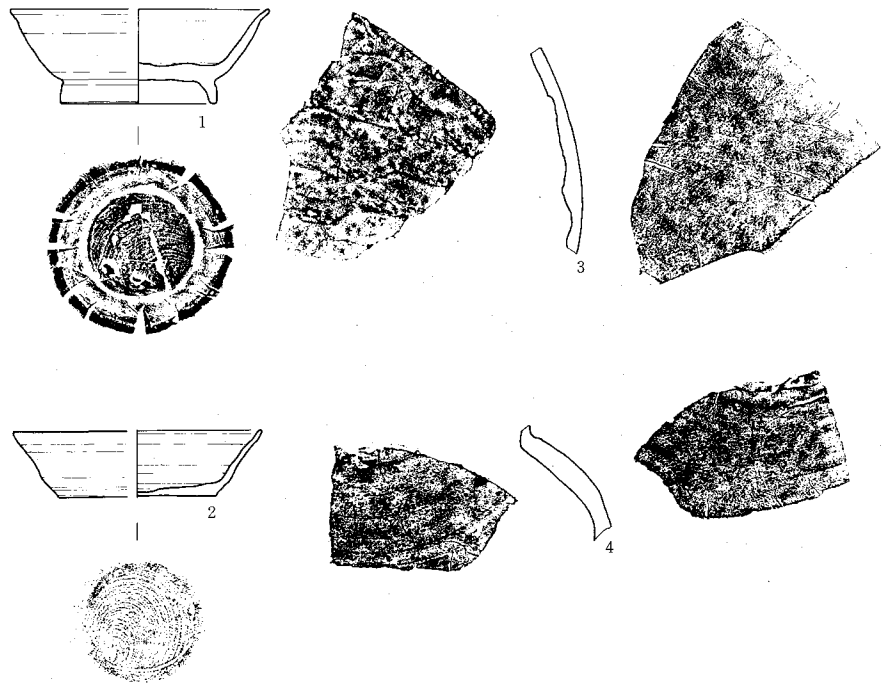
H402号住居跡（5 H－131）　**位置**　調査区域中央部、ヲ4～5に所在する。台地の東西位置の中心付近に当り、全体として平坦な所となっている。　**形状**　南北方向に長軸を持つ隅丸長方形で、南北2.7m、東西2mである。北壁と東壁は外方に膨む傾向が見られ、西壁は直線的で南壁は不明である。北東隅、北西隅、南東隅は隅丸に形どられ、南西隅については不明である。長軸方向はN－28°－E、面積は5.2m²、壁高4～14cmである。南壁よりの1m四方の床面はやや固くしまっている。南壁三分の二と西壁五分の一をきられて失っている。　**ピット**　北壁中央で壁にかかってP1、床面北東隅寄りにP2が所在する。いずれも不整形で、性格は不明である。P2、深さ7cm。P1は深さ不明。**炉**　所在については不明である。　**貯蔵穴**　貯蔵穴については不明である。　**遺物**　床面、覆土中共に遺物なしであるが、北東隅近くと南東隅寄りに焼石2個が床面について出土した。　**その他**　本遺構はカマドの無い点から見て、石田川期の遺構と推定され、小規模かつ炉の無い点から見て一般的住居とは異る用途を持つものではないかと推定される。　（近藤）

H403号住居跡（図版36）



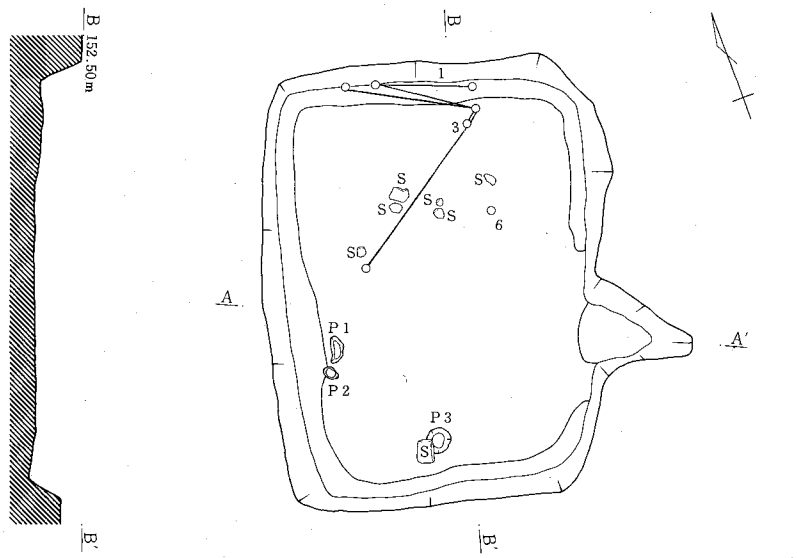
図－206　H403号住居跡

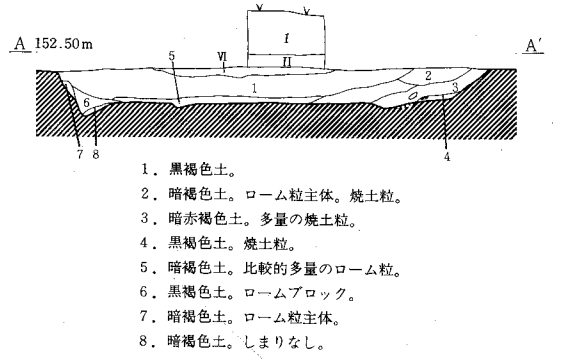
H403住居跡（5 H－132）　**位置**　リ4～5。　**形状**　南北4.9m、東西2.81m、面積14.2㎡を測る。壁の形状は東・西壁は直線的、北と南壁はやや外方に膨らみ、北東隅以外は隅丸を呈す。全体的には、隅丸平行四辺形といえよう。壁高9～39cm。周溝は認められない。　**ピット**　都合3箇確認される。P1・P2は床面に、P3は南東隅近くの東壁を喰い込むようにして設けられている。しかしP3の深さはほとんど無きに等しい。P1・2の規模も小さい。　**カマド**　東壁南寄り。構築材はカマド内に多くの焼石が確認されたことから石使用と考えられるが、もとの位置を確認できるものはない。カマドの全長90cm、燃焼部長48cm、袖部内幅97cm、壁への掘り込み角度17°を測る。　**貯蔵穴**　はっきりしたものは確認できなかったが、カマド前から南東隅に続く深さ5cmほどのくぼみのうち、南の方が貯蔵穴として使用されていたのかも知れない。　**遺物**　カマド内はもとより、床面からも焼石が数箇確認されている。住居床面ほぼ中央より須恵の高台付埦（1)・同壺(4)、南壁近くより須恵器坏(2)、同甕(3) 破片らしいものが四片ほど出土している。　（中澤）



図－207　H403号住居跡出土遺物

出土遺物　**須恵器**　壺(4)、小破片である。肩部であろうか。内外面にナデが施される。色調は暗青灰色。外面では斑点状に黒色気泡が認められる。堅緻である。　甕(3)、胴部片であろうか。外面は自然釉がふりかかり、浅黄緑色の斑点を成す。内面は成形時の当て具痕を明瞭に残す。色調は暗青灰色。黒色の気泡痕を多数認める。堅緻である。　坏(2)、右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。底部中央部分の作りは薄く、体部下半では器壁がやや張り出す傾向にある。色調は暗灰色。内外面に黒色の気泡痕を認める。堅緻である。　埦(1)、右回転ロクロ使用。底部切り離しは回転糸切りによる。更に高台部の貼り付け後、高台部周辺にナデが加えられる。高台の張り出しは小さく、端部は丸味を帯びてやや内傾する。体部及び口縁部はナデが施され、平滑である。色調は暗灰色。砂粒を少量含み、底部外面には、黒色の気泡痕が若干認められる。焼成は良好である。　（中束）

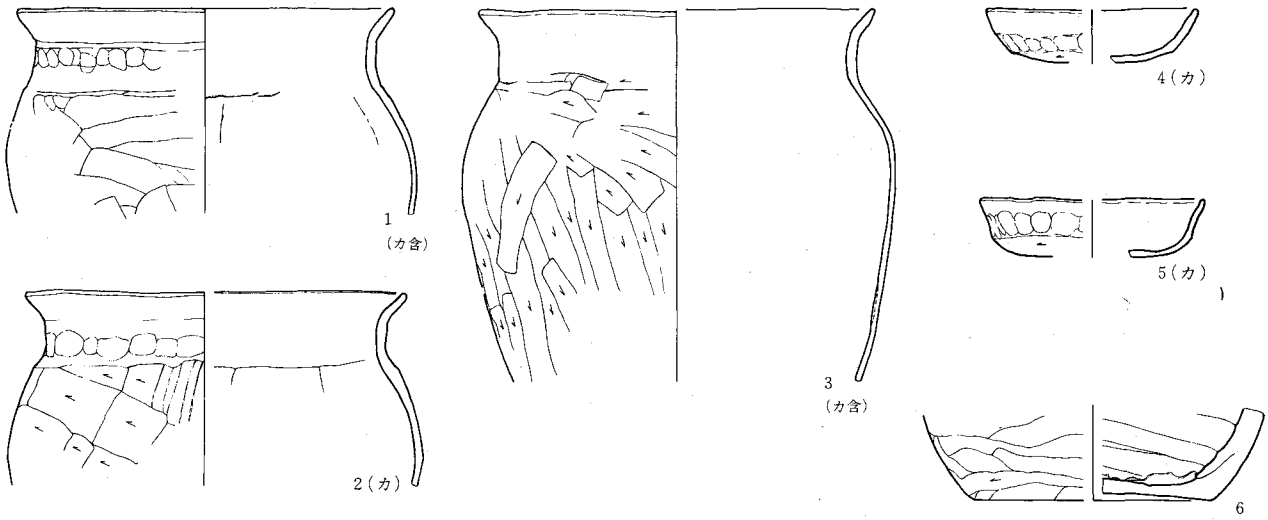




1．黒褐色土。
2．暗褐色土。ローム粒主体。焼土粒。
3．暗赤褐色土。多量の焼土粒。
4．黒褐色土。焼土粒。
5．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
6．黒褐色土。ロームブロック。
7．暗褐色土。ローム粒主体。
8．暗褐色土。しまりなし。

図－208　H404号住居跡　　0　1m

H404号住居跡（5H－133）　**位置**　台地の西端に近い平坦地、リ5に所在する。すぐ南の156号掘立柱建物跡を囲むようにして、H403・308号住居跡と一群を成す。　**形状**　南北4.4m、東西3.3mの隅丸台形。東・西壁は外方に膨み、南壁は中央部で若干内側に反る。北壁は南壁に比べて東側が約60cm長い。長軸方向N－24°－E、面積13.4m²。壁高は住居内覆土の堆積状況から見て50cm以上と考えられる。カマド部分を除き周溝をめぐらす。　**ピット**　西壁下中央南寄り（P1、P2）及び南壁下中央（P3）に所在する。P1・P2はやや不整形の小ピットで、深さは27～37cmである。性格不明。P3は深さ8cmで、出入口関連施設の痕跡と見られる。P3を囲むように輪状に周囲が若干高くなっていた。　**カマド**　東壁中央南寄り。壁外に構築する。燃焼部火床面付近から白色粘土ブロックが出土した。カマドの構築材と見られる。全長110cm、袖部内幅63cm。燃焼部長は64cmで、先端の壁への掘り込み角度は41°である。先を細くすぼめた燃焼部先端は煙道を兼ねると考えられる。　**遺物**　カマド内からは土師器坏（4・5）・同甕(2)等が、住居北半からは安山岩山石の石塊とともに、土師器甕（1・3）、須恵器甕（6）が床面から6～17cm浮いて出土した。この土師器甕の中には、カマド内出土のカメと同一個体のもの（1・3）も認められた。　**テラフ**　住居跡中央付近の床面から約30cmの覆土中にB軽石純層。　（唐澤）

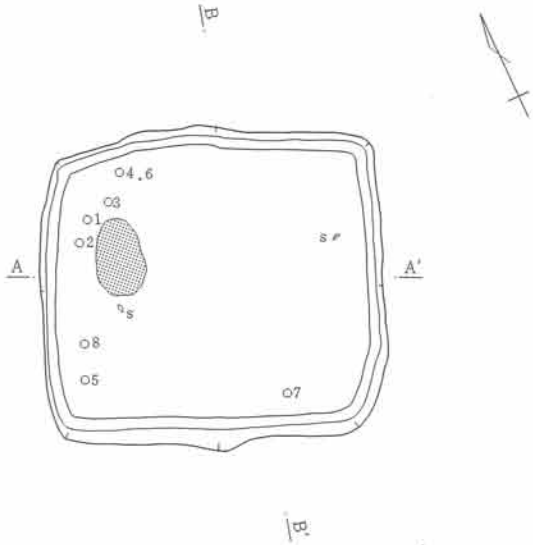


0　10cm

図－209　H404号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1～3）、いわゆるコの字状口縁を持つ甕で、いづれも胴下半部を欠失する。形態的には、1・2の胴部が緩かに張る肩部から丸味を持ちつつ底部まで続くのに対して、3の肩部の張りは強く、そこから底部まで直線的に延びる胴を持つ。いづれも頸部の立ち上がりは明瞭である。口縁部は内外面に横ナデを施すが、外面には顕著な指頭痕を残す。2の口縁外反部内面にはやや強い横ナデが施され、口唇部が受口状になっている。胴部外面は肩部付近に横または斜のヘラ削り、それより下では縦のヘラ削りを施す。胴部内面には横のヘラナデが認められる。色調は1が淡褐色、2・3が褐色で、胎土中に細かい砂粒を混ぜる。3の胴部外面には焼土が付着する。　坏（4・5）、4は底部に丸味を残す坏で、口縁部内外面から底部内面周辺部までは横ナデ、底部外面はヘラ削り、同内面は指ナデ、体部外面は指頭による押え、同内面には弱い指頭痕を残す。底部と体部の境に稜を残す。5は平底風の底部と緩かなS字状の体部を持つ坏で、体部外面及び内面屈曲部と同底部に顕著な指頭痕を残す。底部外面はヘラ削りである。全体に磨耗が著しい。　**須恵器**　壺か（6）、底部のみ残存。体部及び底部内面にロクロナデの痕跡。灰赤褐色。　（唐澤）

H405号住居跡



1．黒褐色土。
2．暗褐色土。ローム粒多量混。
3．黒褐色土。ローム粒。
4．黒色土。

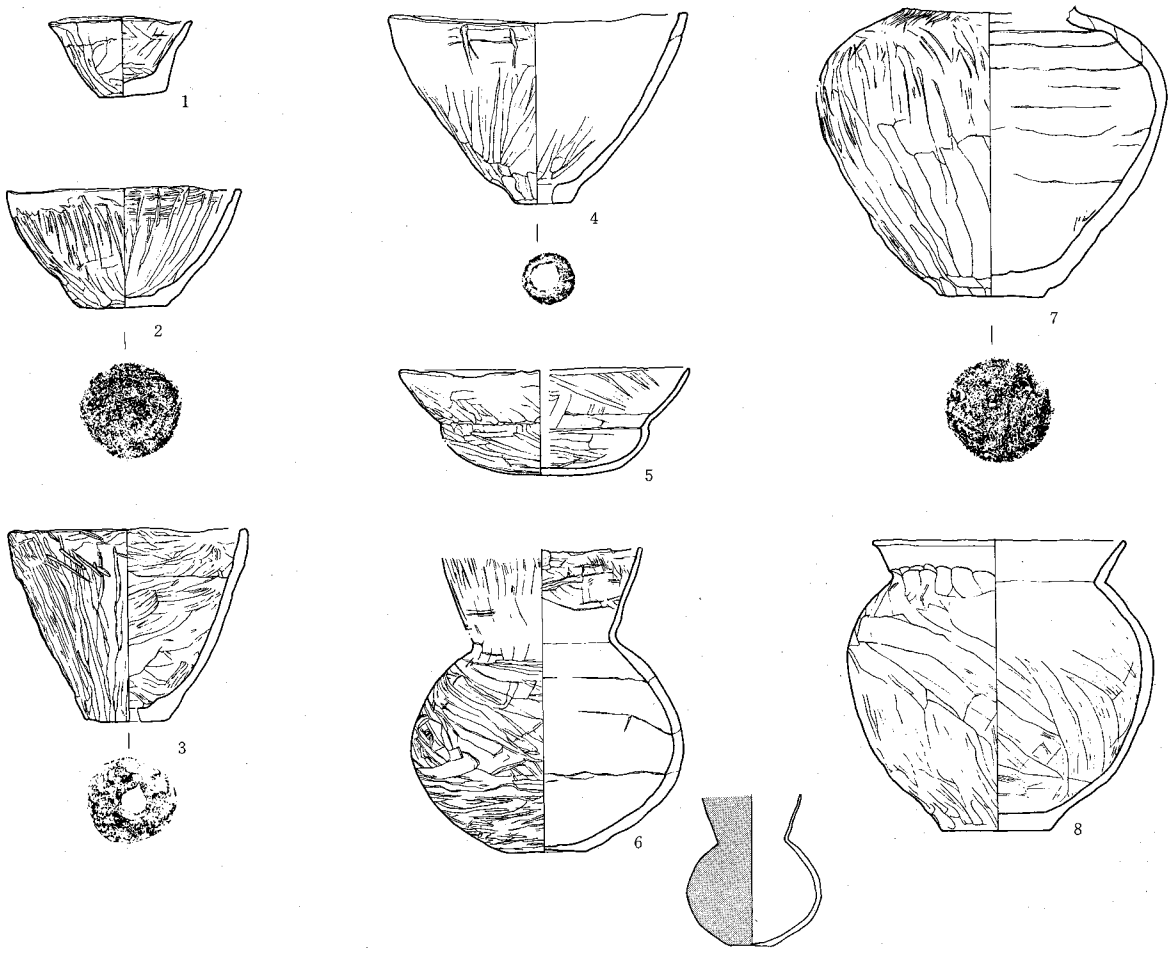
0　1m

図－210　H405号住居跡

西壁沿い遺物出土状況

H405号住居跡（5H－134）　**位置**　台地西端の平坦地チ4～リ4に所在する。東西方向の3ないし4のラインは、南に分布の中心を持つ石田川期住居跡の北限であり、例外なくここで止まっている。本住居跡は石田川期のものとしては最も北限にある住居の内の一つである。付近には同時期の住居跡が南に向かって散在している。　**形状**　南北3.1m、東西3.5mの隅丸長方形を呈す。壁の形状は直線的な南壁を除き、いずれも外方に膨んでいる。北壁西端と東壁南端は、住居内側に強く寄せており、その部分がこけたようになっている。長軸方向N－24°－E、面積10.2m²、壁高は地層断面北壁側の観察によると最大46cmを計る。周溝は幅7～12cm、深さ2～4cmで、四壁下を全周する。　**炉**　西壁際中央やや北寄りの焼土範囲が炉跡と推定される。形は80×50cmの長円形を呈しており、ロームの床面をそのまま地床炉としている。　**遺物**　西壁沿いで、炉跡を挟んでその北と南にまとまって出土している。北群からは手捏状小型土器（1）、埦（2）、甑（3・4）、長頸壺（6）が、南群からは坏（5）、平底甕（8）、その他壺の体部小片等が出土している。これらはいずれも土師器であり、床面ないし床面直上から出土したものである。南壁沿い中央やや東寄りの所からは、床面から約10cm浮いた状態で土師器甕が出土している。　**テラフ**　覆土中で床面に最も近い所で16cmの所に、F・P様の軽石を含む淡褐色の灰層が認められた。榛名山二ツ岳噴出のF・A層と見られる。

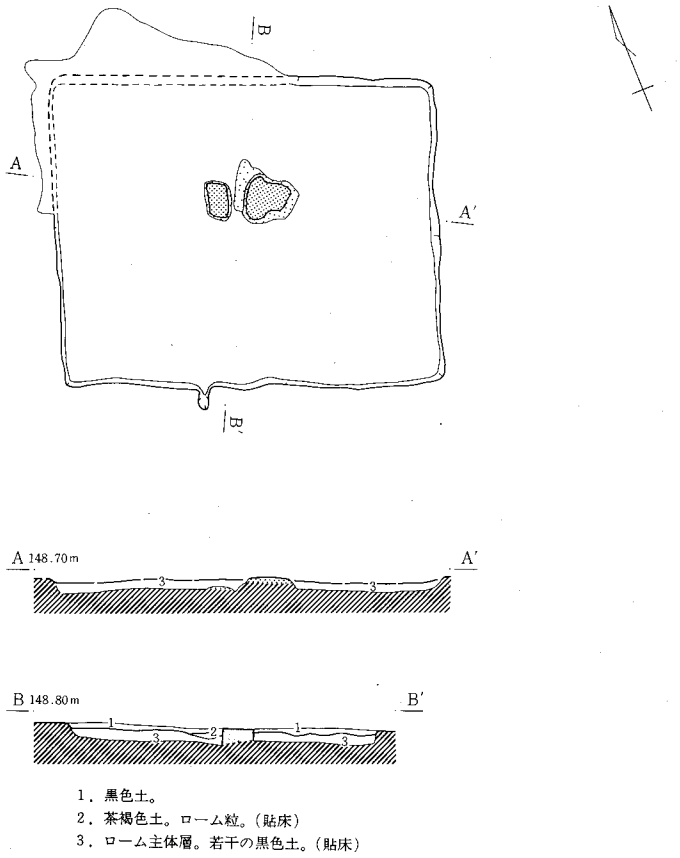
（唐澤）



図－211　H405号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　壺（6・7）、6は長頸壺で口縁部先端を欠失する。胴部は最大径を中心よりやや下に置く。底部は不整円形気味の平坦面を持つ。外面調整は口縁部縦ヘラナデ、胴部に横ヘラナデ痕を残す横ヘラ磨き、底部ヘラ削り、内面調整は口縁部にヘラナデ、胴部に上位（肩部）粘土紐接合痕を残す指押え、中位は斜ハケ目、下位は横ハケ目、底部の窪みにはハケ目痕を残す。外面に赤彩を施す。胴部外面と口縁部内には光沢がある。7は口縁部を欠失する壺で肩の張りが非常に大きい。外面調整は肩部に粗いハケ目を残す縦ヘラナデ、底部ヘラ削り、内面調整は縦ヘラナデで、粘土紐接合痕を顕著に残す。胴部の半分以上に黒斑を持つ。胎土中には多量の雲母を混ぜる。　甕（8）、平底。球形の胴部に、くの字状に直線的に外反する口縁部を持つ。調整は口縁部内外面に横ナデ、胴部外面に縦及び斜ヘラナデを施し、同下位にはヘラ削り、胴部内面ハケ目、底部外面にはヘラ削りを施す。胎土に多量の雲母を含む。胴部には黒斑が見られる。　坏（5）、形状的には小型坩に似るが、口縁部が短かく、低い器高から判断して坏的な機能が想定される。最大径を口径に取り、大きく開いた口縁部を持つ。底部は緩かな丸底で、浅い胴部からくの字状に延びる口縁部は内彎する。口唇部先端は尖る。調整は口縁部内外面と胴部内面にヘラナデ、胴部外面にヘラ削りを施す。口縁部外面の口唇部寄りには横ナデが認められる。胴部内面は平滑である。　埦（2）、やや深めの埦で、内面の剝落が著しい。外面調整は縦ヘラナデ後、粗いハケ目を縦に施す。底部は軽いヘラ削りである。内面調整は口縁部の横ハケ目、それ以下には縦ヘラナデの後、粗い縦ヘラ磨きを施す。胎土中には小石、雲母を含む。　甑（3・4）、いづれも単孔。3は口縁部の開きの少ない甑で、口縁部の器肉がやや厚くなっている。口縁部内面には粘土紐接合痕が見られる。外面調整は縦ヘラナデ後、粗いハケ目を縦に施す。底部は軽いヘラ削りである。内面は粗い斜ハケ目の後、縦ヘラナデを施す。底部穿孔はヘラ状工具で行われたものと見られる。体部には黒斑が見られる。4は口縁部の開きの大きい甑で、器肉の厚さも平均している。調整は外面に縦ヘラナデ、内面は平滑でナデとも見られる。口縁部外面には粘土紐接合痕が残る。胎土中には多量の雲母を含む。底部穿孔には筒状の道具の使用が考えられる。　手捏状小型土器（1）、粘土紐による成形。調整は体部外面に縦ヘラナデ、同内面に横ヘラナデ、底部外面にはヘラ削りを施す。つくりは全体に雑である。　（唐澤）

H406号住居跡



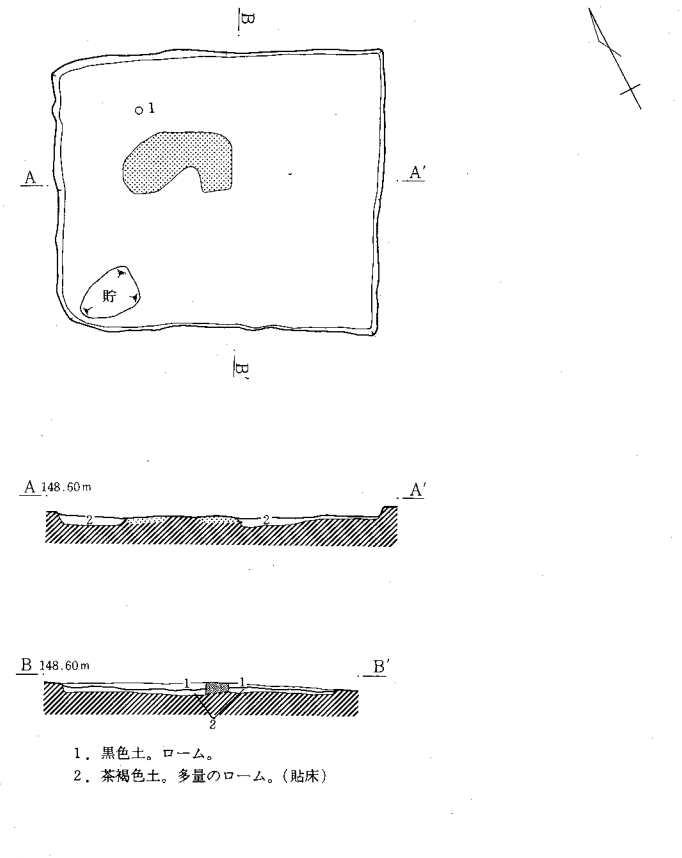
1．黒色土。
2．茶褐色土。ローム粒。（貼床）
3．ローム主体層。若干の黒色土。（貼床）

0　1 m

図－212　H406号住居跡

H406号住居跡（5 H－135）　**位置**　調査区域南西端付近、ル101～1に所在する。台地の東西位置の西部付近に当たり、全体として平坦な所となっている。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ長方形で、南北3m、東西3.8mである。各壁ともに直線的である。長軸方向はN－91°－E、面積12.3m²、壁高5～15cmである。　**ピット**　現状において不明である。　**炉**　住居中央北寄りに東西にならんで2つの焼土が検出された。西側の範囲は40×28cm、東側は68×48cmである。ほぼ同じ地床炉構造である。西は厚さ6cm、東は厚さ11cmを測る。　**床面**　貼床されていると見られるが範囲・厚さ等不明である。　**貯蔵穴**　貯蔵穴については確認されなかった。　**遺物**　床面上、覆土中土からは出土遺物は無かった。　**その他**　床面は全体的に10cm程掘りすぎている。北西隅付近の壁も掘りすぎである。　（近藤）

H407号住居跡



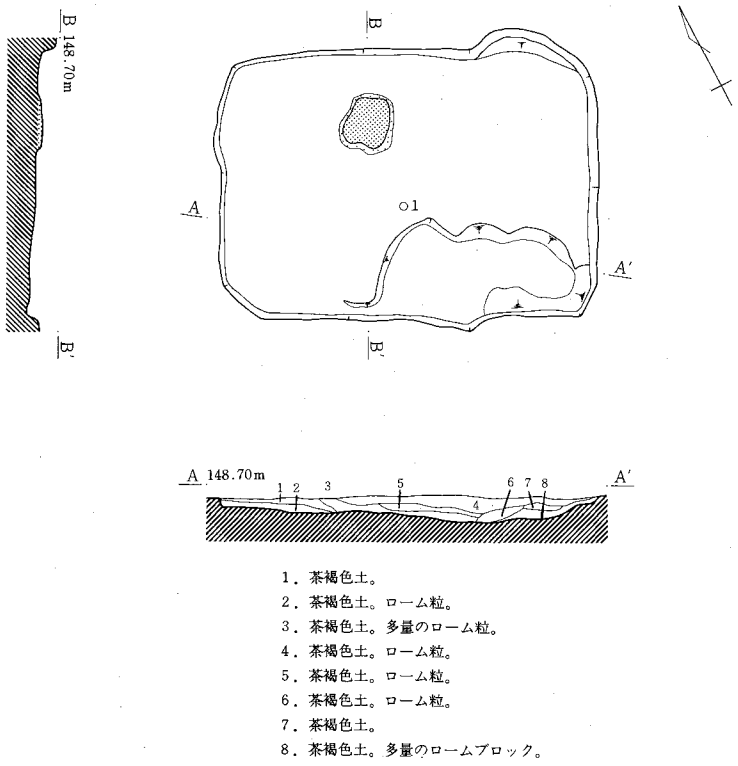
1．黒色土。ローム。
2．茶褐色土。多量のローム。（貼床）

0　1 m

図－213　H407号住居跡

H407号住居跡（5 H－136）　**位置**　調査区域南端、ヲ101～1に所在する。台地の東西位置の中央付近に当り、全体として平坦な所となっている。　**形状**　東西に長軸を持つ台形で、南北2.9m、東西3.4mである。北壁、西壁は直線的で、東壁はほぼ直線的、直線的であるがやや内に膨む。北南壁は東隅は鈍角で南西隅は隅丸である。長軸方向はN－85°－E、面積9.5m²、壁高2～8cmである。東壁は西壁に比べ北端が23cm長い。　**炉**　住居中央北西寄りにある。床面と同じレベルの地床炉で、長軸116cm×短軸66cmの不整形である。　**貯蔵穴**　南西隅に位置し、長軸66cm×短軸42cm×深さ（床面掘りすぎのため推定である）17cmの規模で形状は長円形をなしている。　**遺物**　炉と北西隅の中間に位置して甑(1)が出土している。　**その他**　床面全体が3～7cm掘りすぎている。柱穴は確認されなかった。　（近藤）

H408号住居跡

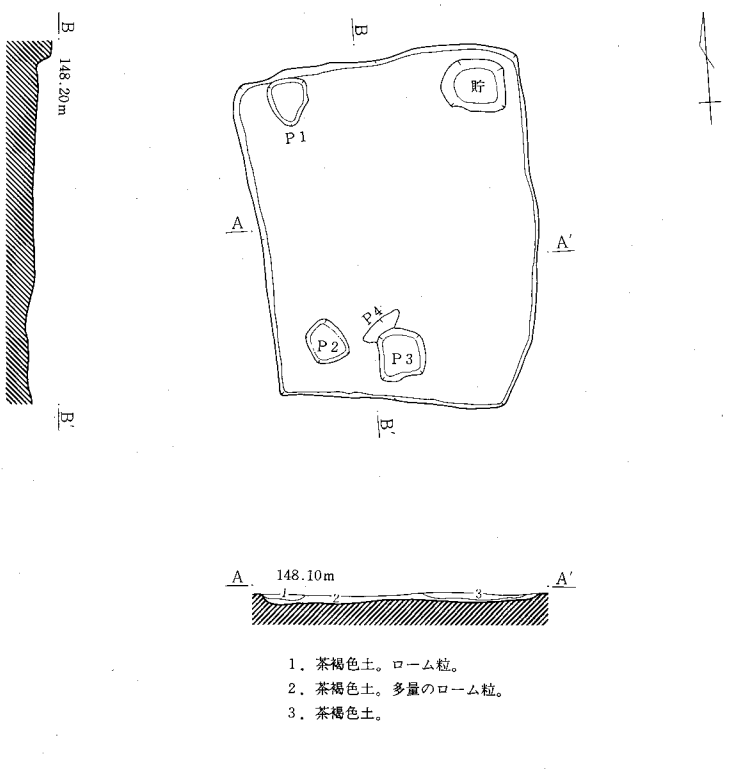


図－214　H408号住居跡

H408号住居跡（5H－137）　**位置**　調査区域南端、ル101にある。上武国道予定地北、中央部よりやや西寄りの平坦地に位置する。遺構の分布はやや疎らであるが、東に接してH406号住居跡がある。**形状**　東西に長軸を持つ隅丸長方形で、南北2.76m、東西3.86mである。北壁の東側一部が外方に膨らんでいる他は、ほぼ直線的である。長軸方向はN－117°－E、面積は10.4m²、壁高11～23cmである。周溝は存在しない。**炉**　住居床面中央部よりやや北西の所に位置する。焼土部分が不整方形を呈して広がっており、規模は64×56cmである。焼土の厚さは約5cmある。地床炉と考えられる。火床面は床面とほぼ同じ高さである。**貯蔵穴**　なし。**遺物**　住居中央付近からは土師器甕(2)と土師器高坏の脚部(3)が出土した。床面とのレベル差は、前者が2cm、後者が11cmそれぞれ高い。**その他**　本住居跡の南東部分が、2m×1mの範囲に亘って、床面が他より約10cm低くなっているが、その性格や機能等は不明である。

（鵜木）

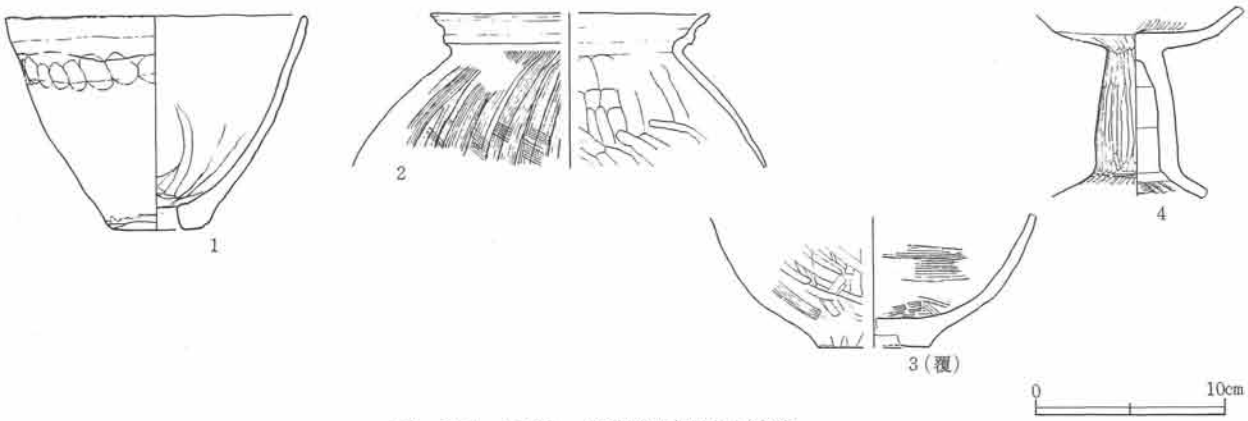
H409号住居跡



図－215　H409号住居跡

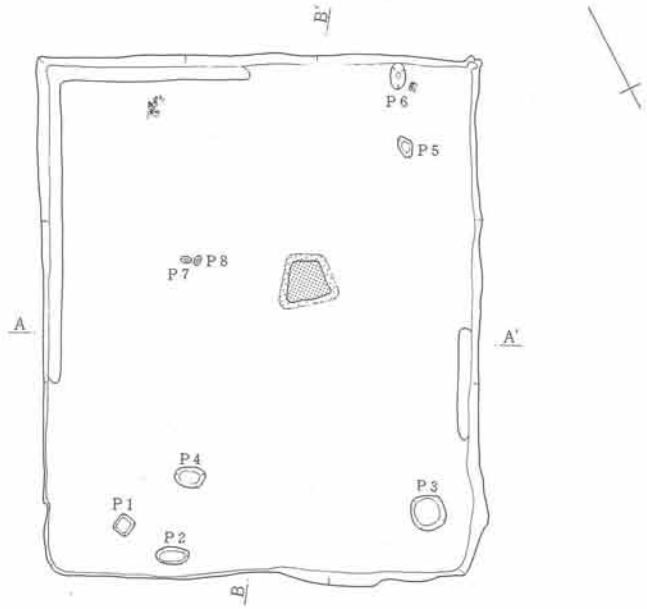
H409号住居跡（5H－138）　**位置**　調査区域南端、ヌ101～102にある。台地の最南端、中央部より西寄りの平坦地に位置する。南西に接してH410号住居跡がある。又、北西に接して159号掘立柱建物跡がある。**形状**　南北に長軸を持つ不整四角形である。長さは北壁2m、南壁2.34m、東壁3.66m、西壁3.23mである。北・南壁はやや外へ膨らみ、東・西壁はやや内へ寄っている。長軸方向はN－4.5°－W、面積9.8m²、壁高2～14cmである。周溝は存在しない。**ピット**　北壁西寄りの壁直下に1個（P1、深さ18cm）、南西隅に1個P2（46×40cm、深さ13cm）、南側中央に2個（P3、P4）ある。P1、P2は、その位置、形状等から推して柱穴の可能性もある。P3はやや方形を呈し、56×29cm、深さ11cm。P4はそれに密着するように位置し、48×14cm、深さ17cm、不整形である。P3、P4とも、機能や性格は不明である。**カマド**　なし。**貯蔵穴**　北東隅にある。四角張った長円形で、規模は68×56cm、深さ48cmである。

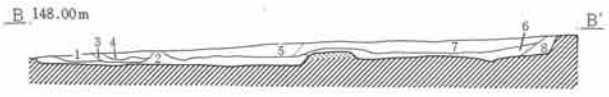
（鵜木）



図－216　H407・408号住居跡出土遺物

H410号住居跡





1．茶褐色土。ローム粒。
2．茶褐色土。多量のローム粒。
3．茶褐色土。ローム粒。
4．茶褐色土。多量の焼土粒。ローム粒。
5．茶褐色土。多量のローム粒。焼土粒。
6．茶褐色土。多量のローム粒。
7．茶褐色土。黒色が強い。ローム粒。
8．茶褐色土。多量のロームブロック。

図－217　H410号住居跡　　0　1m

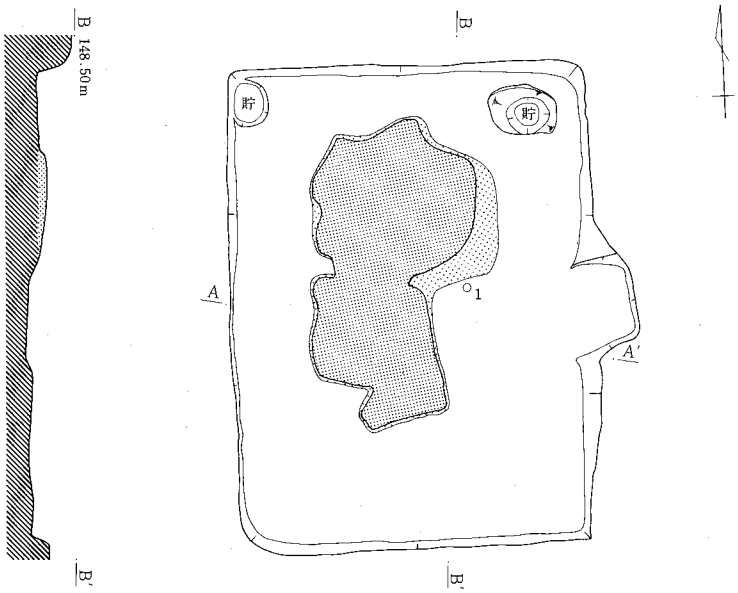
住居跡全景

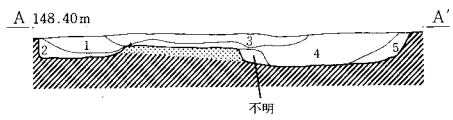
H410号住居跡（5H－139）　**位置**　調査区域南西端、ヌ101にある。台地の最南端西寄りの緩やかな斜面上に位置する。南に上武国道予定地が接する。東にH409号住居跡がある。　**形状**　南北に長軸を持つ長方形で、南北5.36m、東西4.47mである。四壁とも直角で、非常に整然とした四角形である。南東隅、南西隅は隅丸を呈する。長軸方向はN－1°－W、面積は24㎡、壁高は7～22cmである。北壁西寄り中央部から西壁北寄り中央部にかけてと、東壁中央南寄りの一部に周溝が認められる。それぞれ深さ4～7cm、幅11～16cmである。　**ピット**　床面に8個ある。P1・P2・P4は南西隅に、P3は南東隅に、P5・P6は北東隅に、P7・P8は中央部よりやや西に位置する。形状、位置等から推して柱穴とは考え難い。各ピットの性格、機能等不明である。　**炉**　住居中央寄りにある。等脚台形状を呈し、規模は42×40cmである。かたくしまった焼土が堆積し、地床炉と考えられる。焼土層の厚さは8～11cmである。焼土の上には土師器片が散乱していた。　**遺物**　住居北西隅と北東隅の壁寄りの所に炭化物の出土があった。床面とのレベル差は、それぞれ＋30cm、＋34cmである。　**テラフ**　覆土中に、二ツ岳系の軽石を含まなかった。

（鵜木）

出土遺物　**土師器**　甑(1)、第407号住居跡出土。小型浅鉢型の単孔甑。底部中央に径20㎜程の小孔を穿つ。穿孔は焼成前。口縁部を形成する粘土接合部に、軽く指頭痕を残す。全面指ナデ調整。内面底部辺にヘラ調整痕あり。色調は浅黄色、部分的に黒褐色を示す。酸化鉄粒や砂粒を含む。—2・3・4は第408号住居跡出土—　甕(4)、小破片。胴部外面は粗いハケ目後、ヘラ磨き。底部は周辺部調整後、ヘラ磨き。内面は粗いハケ目。色調は暗赤褐色。焼成良好。　台付甕(2)、S字状口縁の形態は、大きく外反し、口唇部で丸味を帯びる。胴部外面ではハケ目の下に、更に斜のハケ目を認める。内面は指頭痕を残し、指ナデ調整される。口縁部は内外面横ナデ調整。色調は淡褐色。酸化鉄粒、砂粒を含む。口縁部と肩部外面には煤が付着し、内面では有機物痕を認める。　高坏(3)、脚部は柱状で若干中膨みの形態を示し、裾部には緩やかな稜が形成される。坏部も底部辺に稜を形成する。坏内外面及び脚部外面は、丁寧なヘラ磨きが施される。脚部内面はヘラナデ、裾部内面はハケ目による調整。色調は浅黄橙色。酸化鉄粒や砂粒を含む。　(中束)

H411号住居跡（図版37）



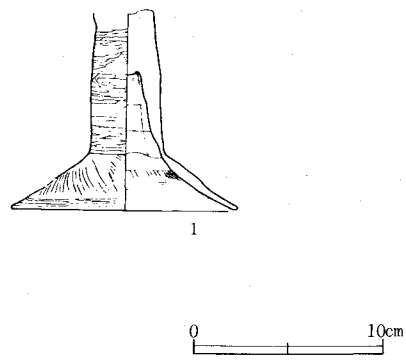


1．茶褐色土。ローム粒。
2．茶褐色土。多量のローム粒。
3．茶褐色土。ローム粒。
4．茶褐色土。多量のロームブロック。
5．茶褐色土。多量のローム粒。

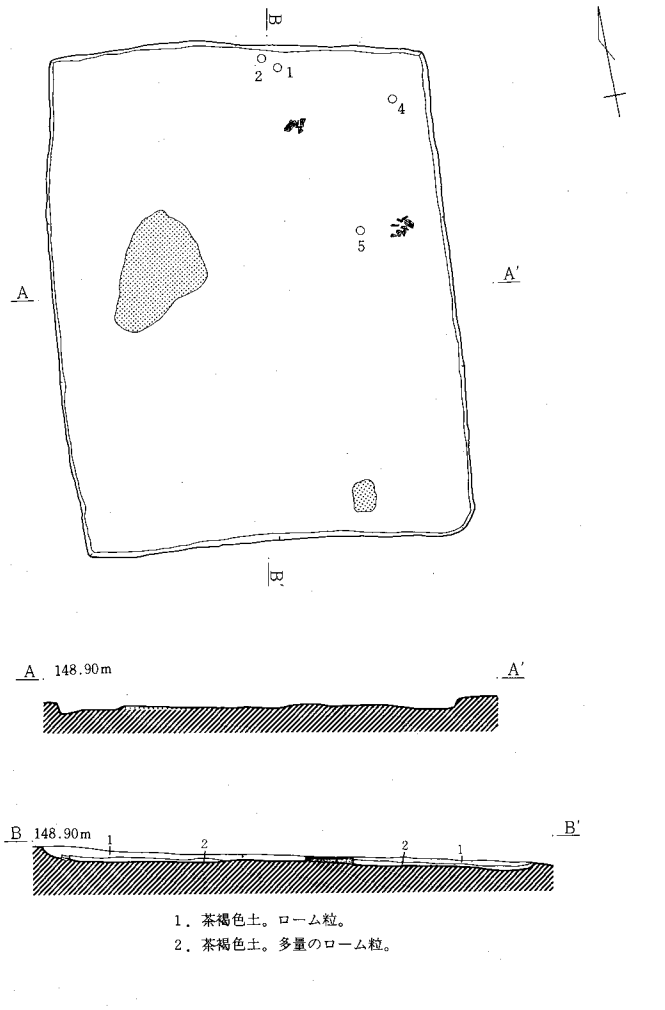
H411号住居跡（5H—140）　**位置**　調査区域の南西、リ101にある。台地谷寄りの緩やかな斜面上に位置する。東に接して56号溝が走り、北に接してH412号住居跡がある。**形状**　南北に長軸を持つ隅丸長方形で、南北4.97m、東西3.64mである。四壁とも直線で、整然とした四角形を呈する。南東隅を除き、角はすべて隅丸である。長軸方向はN—2°—E、面積は18.3㎡、壁高24～80cmである。周溝は存在しない。東壁中央部に「張り出し」の施設を持つ。台形を呈し、規模は95×64cmである。　**ピット**　柱穴や本住居に関連すると思われるピットは存在しない。　**炉**　不明。住居の中央部、南北に及ぶ広い範囲に焼土がある。不整形のひょうたん形を呈し、規模は320×173cmである。焼土の厚さは9～14cmである。地床炉と思われる。焼土範囲の広さから、住居内における単なる炉と考えてよいものかどうか疑問もあり、焼失住居との見方も成り立つ。しかし、床面には炭化物等の散乱もなく、特に焼失したとの証拠もない。　**貯蔵穴**　北西隅と北東隅にある。ともに円形を呈し、規模は前者が50×36×16cm、後者が72×52×50cmである。この2つの貯蔵穴及び前述の東壁中央部の張り出しはH416号住居跡のあり方に類似している。　**遺物**　中央東寄り、焼土部分の脇より土師器高坏の脚部(1)が出土した。　**テラフ**　覆土中に二ツ岳系の軽石は含まれない。　(鵜木)

図—218　H411号住居跡　0　1 m

出土遺物　**土師器**　高坏(1)、脚部は細長い柱状を成し、裾部は緩やかな稜を形成して、くの字状に広く移行する。裾部上半は器肉も厚く、緩やかな曲線を描き、薄く直線的な端部へと続く。図面の断面部分が、形状を特徴的に表現しているといえよう。脚柱部外面は、ハケ目の上に細かな横ヘラ磨きを施し、内面は横ヘラ削り整形される。裾部外面は粗い斜ハケ目を残し、端部は横ヘラ磨き。内面は、斜ハケ目の上に横ナデを施す。細かなヘラ磨きにより、器面には光沢が生じる。色調は淡い明褐色。胎土は比較的精良であるが、酸化鉄粒や砂粒が少量混入する。焼きしまりは良好。　(中束)

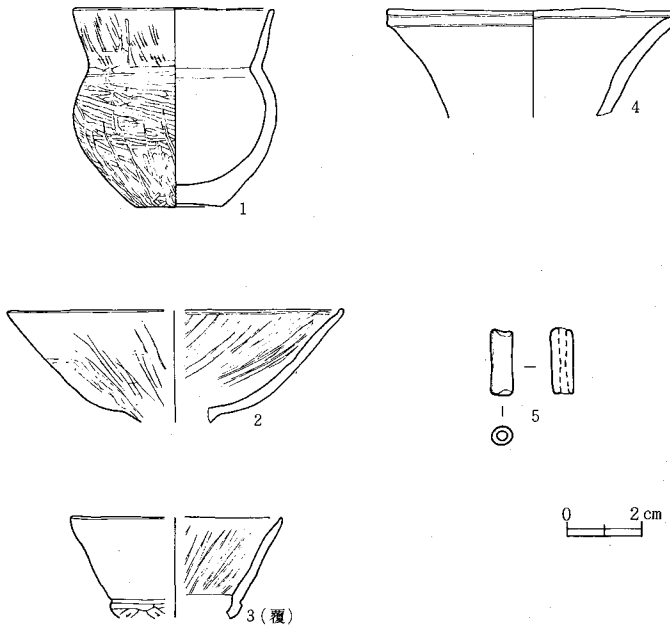


図—219　H411号住居跡出土遺物



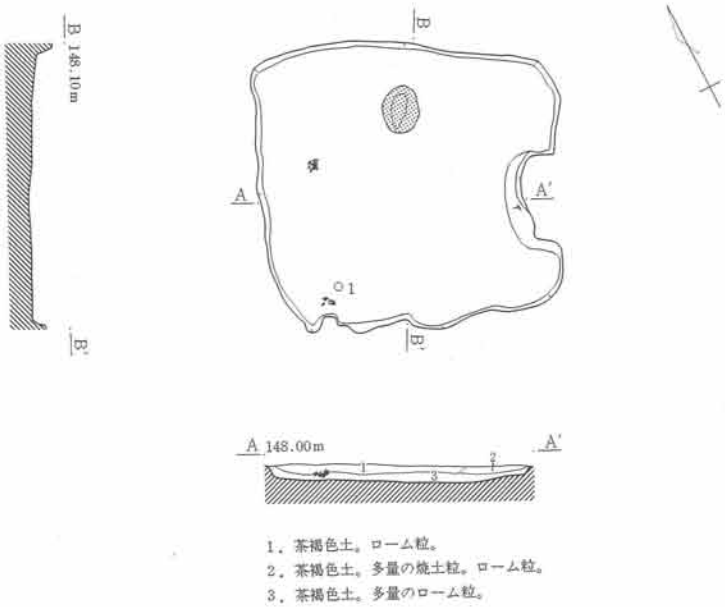
図－220　H412号住居跡

H412号住居跡（5 H－141）　**位置**　調査区域の南西、リ101にある。台地谷寄りの緩やかな斜面上に位置する。東に接して56号溝が走り、南に接してH411号住居跡がある。　**形状**　南北に長軸を持つ長方形で、南北5.28m、東西4.16mである。東壁は直線であるが、北・西壁は外方に膨らみ、南壁は内方に膨らむ。西壁は東壁に比べて東端が約15cm長い。南東隅のみ隅丸を呈する。長軸方向はN－2°－E、面積は20.5㎡、壁高は6～20cmである。周溝は存在しない。　**ピット**　柱穴及び本住居跡に関連すると思われるピットは存在しない。　**炉**　住居西寄り中央部と、住居南寄り隅にある。前者は不整三角形を呈し、規模は126×90cm、後者は不整四角形を呈し、規模は33×24cmである。前者の焼土は、床面から5cmの厚みを持つが、後者の焼土層は不明である。二つの焼土部分の性格を考察すると、前者は位置、層の厚さ等から地床炉と思われるが、後者は果たして「炉」として機能したかどうか速断出来ない。　**遺物**　東北隅付近の床面から、管玉（5）、小型壺（1）、土師器高坏（2）、土師器壺口縁部（4）が出土した。　**テラフ**　覆土中には、二ツ岳系の軽石は含まれていなかった。　（鵜木）



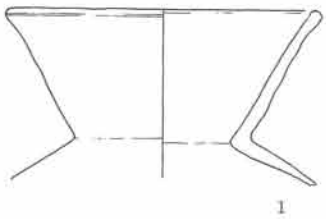
図－221　H412号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　壺（4）、口唇部がつまみ上げられた形態を示す。口縁部は外反状に開き、内外面に横ナデが施される。色調は浅黄色。内外面⅔程は黒褐色である。砂粒を多量に含む。内面及び口唇部周辺は脆く、器面が荒れている。小型壺（1）、口縁径・胴部径・器高がほぼ等しい数値を示す。平底土器である。口縁部は内外面横ナデ、外面は全面にハケ目を施したのち、口縁部から胴上半部は細かな横ヘラ磨き、胴下半部は細かな縦ヘラ磨きが加えられる。底部は無調整。胴部内面の調整技法もヘラ磨きと思われるが、器面の荒れが著しく、観察は不可能である。内面頸部辺の調整は、他土器との接触により生じた磨滅痕であろうか。色調は浅黄橙色。口縁部から胴上半部外面½程に、有機物の付着がみられる。軽石粒や砂粒を含み、焼成は良。　小型坩（3）、口縁径が胴部径や器高より大きな値を示す。口縁部は内外面横ナデ。内面は更に、細かなヘラ磨きが施される。底部外面はヘラ削りされ。色調は浅黄橙色。砂粒を含む。　高坏（2）、内外面に丁寧な細かいヘラ磨きが施される。外面ヘラ磨きの下に体部では横ハケ目、底部辺ではヘラ削りが認められる。色調は明黄褐色。酸化鉄粒や砂粒を含む。　**石製品**　管玉（5）、全長17㎜、直径6㎜を計る。滑石製で、表面が黒味を帯びた、細身の管玉である。　（中束）



図－222　H413号住居跡　　0　1m

H413号住居跡（5H－142）　**位置**　調査区域の南西、リ102にある。台地谷寄りの緩やかな斜面上に位置する。東に接して56号溝が走り、北に接してF230号土坑、H411号住居跡がある。　**形状**　北西～南東に長軸を持つ隅丸の不整四角形で、南北2.92m、東西3.06mである。四壁とも不規則な形を呈する。北壁は外方に彎曲し、南壁は出入りが激しく、曲線状を呈する。東壁は中央部が内に入り込み、西壁は全体に緩やかな曲線を描いている。長軸方向はN－22°－E、面積は7.8m²、壁高12～21cmである。周溝は存在しない。　**ピット**　柱穴と思われるもの、本住居跡に関連すると思われるピットは存在しなかった。　**炉**　住居北部の中央部寄りにある。長円形を呈し、規模は50×40cm、地床炉と思われる。焼土の厚さは不明である。　**貯蔵穴**　本住居跡に関連すると思われる貯蔵穴は存在しなかった。　**遺物**　南西隅より土師器壺口縁部（1）、中央部西寄りと南西隅より炭化物の出土があった。いずれも5～14cm浮いている。　**テラフ**　覆土中には、二ツ岳系の軽石は含まれていなかった。　（鵠木）



0　10cm

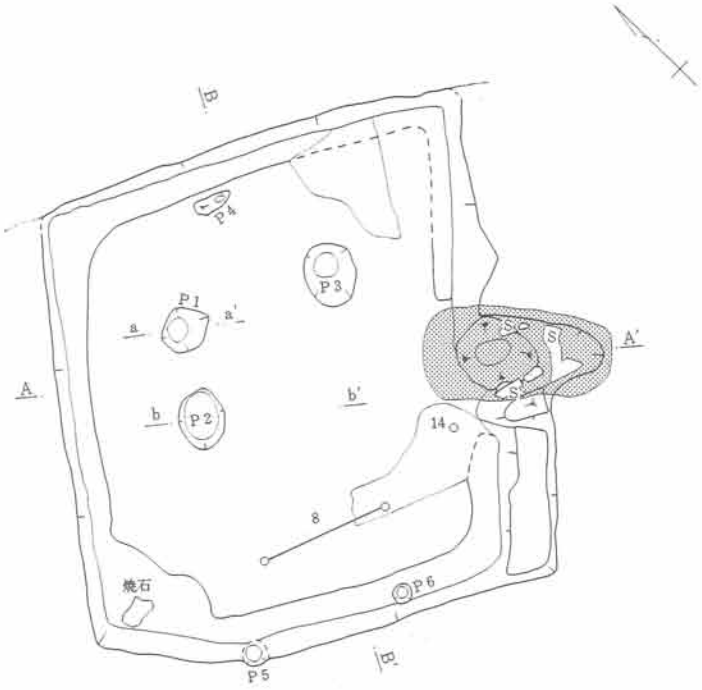
図－223　H413号住居跡出土遺物

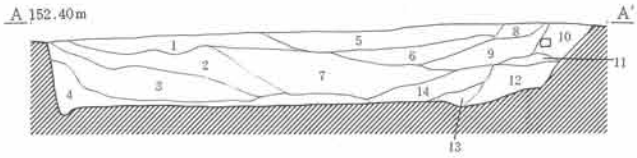
出土遺物　　**土師器**　壺（1）胴部及び底部を闕失する。口縁部の形態は、単口縁で、幅が長く、直線的に大きく開く。頸部は強く収縮する。口縁部は内外面横ナデ、口唇部中央は、ナデにより浅い凹が生じ、内面がやや肥厚する。肩部外面も横ナデ。内面は指ナデが施される。色調は明黄褐色を主体とし、口唇部辺は黒褐色、肩部内面は赤褐色である。礫や砂粒を含む粗い胎土ではあるが、焼成は良好である。　（中束）

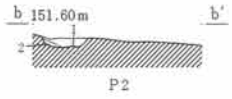
遺物1出土状況

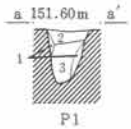
住居跡全景

住居跡全景









住居跡全体
1．茶褐色土。ロームブロック。
2．茶褐色土。ロームブロック。
3．黄褐色土。多量のローム粒。
4．茶褐色土。ローム粒。
5．茶褐色土。ローム粒。
6．茶褐色土。ロームブロック。
7．茶褐色土。ローム粒。
8．茶褐色土。
9．茶褐色土。多量のローム粒。
10．赤褐色土。多量の焼土粒。
11．茶褐色土。多量のローム粒。
12．赤褐色土。多量の焼土ブロック。ローム粒。
13．茶褐色土。多量の焼土粒。ローム粒。
14．茶褐色土。ロームブロック・焼土粒。

P1
1．暗褐色土。ローム主体。
2．黒褐色土。ロームブロック。
3．黒褐色土。ローム粒。

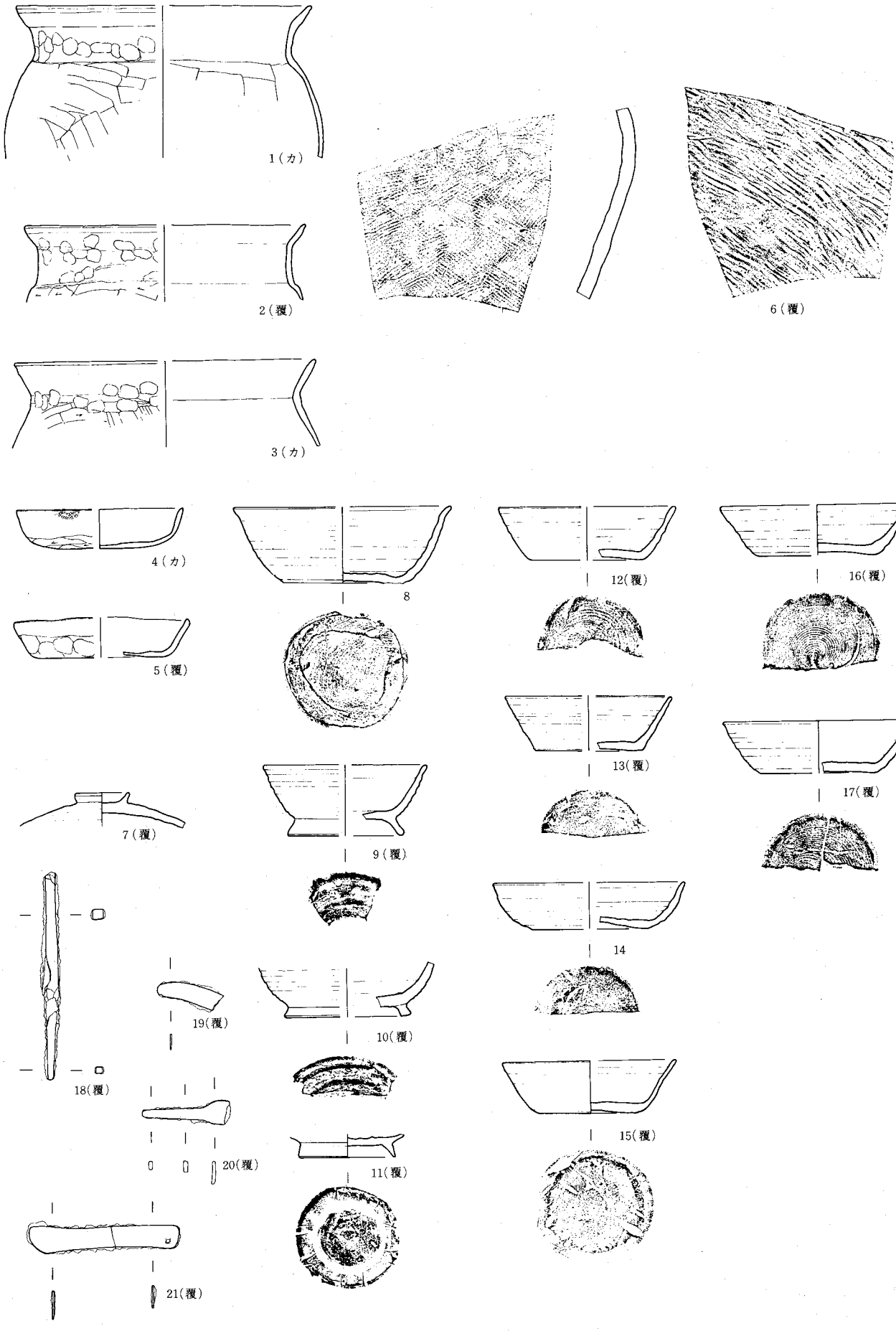
P2
1．黒褐色土。ローム粒・焼土粒。
2．暗褐色土。ローム主体。

図－224　H414号住居跡

住居跡全景

カマド全景

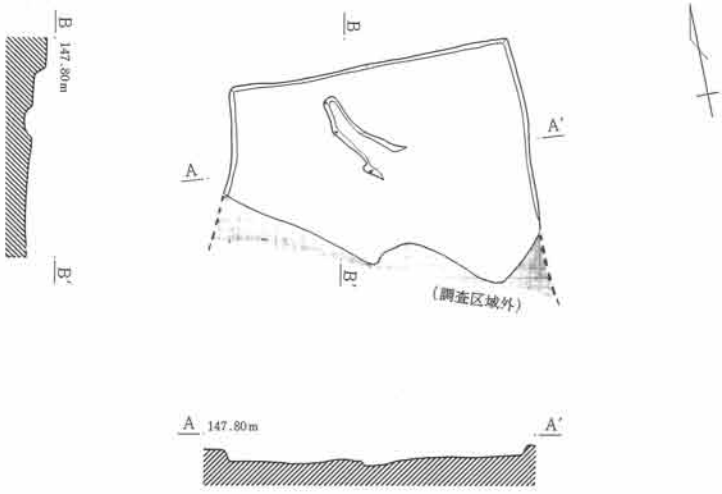
H414号住居跡（5H－143）　**位置**　調査区域中央部北寄り、ヲ5～6にある。台地の中央やや北寄りの平坦地に位置する。周囲の遺構分布は比較的疎らである。西に接して158号掘立柱建物跡がある。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ不整四角形で、南北5m、東西4.4mである。北壁はカマドより南半分は44cmほど東に入っている。北西隅は鈍角を成し、全体的に平行四辺形状を呈す。長軸方向はN－37°－E、面積は21.2m²、壁高は68～98cmである。カマド部分を除き全周に溝を巡らす。幅20～34cm深さ10～13cmである。**床面**　カマド前及び中央部を除き、壁下を一巡する部位に貼床が認められる。土質は軟らかく、厚さ15～28cm、幅1～1.5mである。　**ピット**　床面に4個（P1～P4）、南壁中1個（P5）、南溝中に1個（P6）ある。位置、形状等からP1・P3・P5・P6が柱穴と考えられる。　**カマド**　東壁南寄りにある。燃焼部左右に2個ずつ焼石が残存し、石材により構築されたと思われる。全長150cm、袖部内幅60cm、燃焼部長80cm、壁への掘り込み角度58°、壁外掘り込み116cm（右）、157cm（左）である。又、南西隅からも焼石が出土しており、これもカマド使用の石材と考えられる。（燃焼部左壁にこの石を入れると、左右燃焼部壁の石使用部の長さが等しくなる。）　**遺物**　P1内より鉄滓、覆土中より多量の土器及び鉄滓や羽口が出土している。　（鵜木）



図－225　H414号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕(1～3)、1の口縁部は受け口状を示し、口縁下半部には指頭痕が認められる。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面横ヘラ削り、胴下半部に向けて斜ヘラ削りを施す。内面頸部辺にヘラ痕を残す。色調は明赤褐色。砂粒を多量に含み、軟質である。2の口縁部は、端正なコの字形を示し、頸部の張り出しも強い。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横ヘラ削り整形。内面はナデが施され、平滑である。口縁外面に、ヘラ痕を認める。色調は淡い明褐色。外面は黒色を帯びる。砂粒を多量に含む。焼成は良好。3の口縁部は、直線的に外傾し、頸部外面には指頭痕が認められる。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面には、波状を形成する横ヘラ削りが施される。色調は淡赤褐色。内面は淡い暗褐色を示す。酸化鉄粒や多量の砂粒を含み、やや軟質である。内外面ともに器面が荒れている。　坏(4・5)、4の口縁部の形態は、緩やかに外傾する。口縁部は内外面横ナデ、底部外面はヘラ削りが施され、内面はナデにより平滑となる。色調は淡褐色。砂粒を含み、やや軟質である。口唇部辺に煤が付着する。5の底部は平底形態を示し、口唇部は丸味を帯びて、やや内傾する。体部には、幅広く指頭痕を残す。口縁部は内外面横ナデ、底部外面はヘラ削り、内面はナデが施され、平滑である。色調は淡い橙褐色。砂粒を含む。焼成は良好。　**須恵器**　甕(6)、上端部が内彎形態を示す。胴部片であろうか。外面には平行叩き目痕を残し、内面には、細かな平行条をもつ当て具の重複が認められる。色調は暗青灰色を示し、堅緻である。　蓋(7)、右回転ロクロ使用。切り離し技法不明。天井部中央に凹状の小さなつまみを貼付。つまみ部調整。つまみ周辺部に回転ヘラ削りを施す。つまみ部剝離面に、二重の浅い溝を認める。色調は灰白色。黒色粒を含み、やや軟質である。　埦(8～11)、8は右回転ロクロ使用。内面はロクロ目が顕著である。底部切り離しは、回転糸切りによる。高台部貼付痕を認める。高台周辺部調整。色調は淡い青灰色。黒色粒を含み、若干気泡が入るが、堅緻である。9はロクロ回転方向、切り離し技法不明。高台部貼付後、高台周辺部調整。高台はハの字形に張り出し、端部は丸味を帯びる。色調は淡灰色。黒色粒を含み、若干気泡が入るが、堅緻である。10はロクロ回転方向不明。底部に糸切り痕を認める。高台部貼付後、高台周辺部調整。高台は厚味をもって張り出す。色調は灰白色。長石・雲母を含む。やや軟質である。11は右回転ロクロ使用。切り離し技法不明(ヘラ切りか。)高台部貼付後、高台周辺部調整。高台は断面三角形を示す。色調は青灰色。黒色粒を含み、気泡が入る。堅緻である。　坏(12～17)、12はロクロ回転方向不明。底部は回転糸切り。色調は紫灰色。若干気泡が入るが、堅緻である。13はロクロ回転方向不明。体部の形態は、直線的に外傾する。底部は回転糸切り。色調は灰白色。気泡が入り、やや軟質である。14はロクロ回転方向不明。体部が丸味を帯びる。底部はヘラ切りか。色調は淡青灰色。砂粒を含み、やや軟質である。15は右回転ロクロ使用。底部は回転糸切り。色調は淡灰色。気泡が入るが、堅緻である。16は右回転ロクロ使用。底部は回転糸切り。色調は灰白色、底部辺は灰黒色。やや軟質である。17はロクロ回転方向不明。口唇部はつまみ上げられ、外反する。底部は回転糸切り。色調は体部外面が黒色、底部はやや褐色を帯びる。酸化鉄粒を含み、軟質である。内面は器面が荒れている。(中束)

H415号住居跡

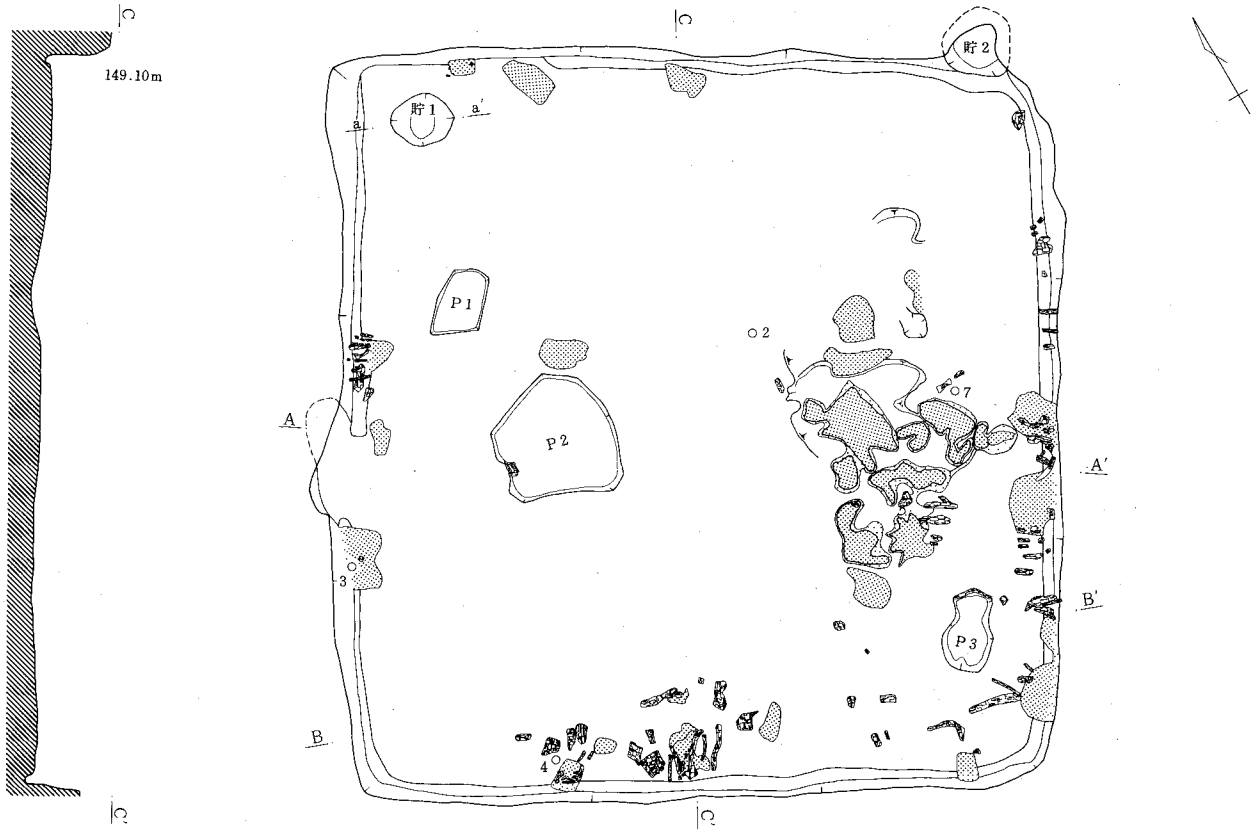


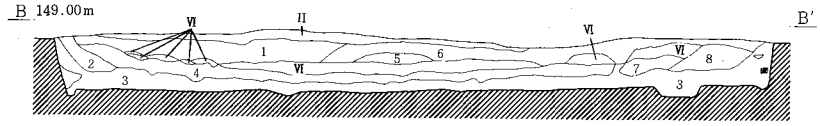
住居跡全景

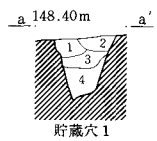
図－226　H415号住居跡

H415号住居跡(5H－144)　**位置**　上武国道北側、ヌ102にある。台地西寄りの緩やかな斜面上に位置する。北に接してH409号住居跡、西に接してH410号住居跡がある。　**形状**　南北に長軸を持つと思われるが、現状で南北2.5m以上、東西2.9mである。北・東壁は直線であるが、西壁は弓状に内に彎曲している。南壁は不明である。長軸方向(南北方向で測定)はN－2°－E、面積は5.8㎡、壁高は8～14cmである。周溝は存在しない。　**ピット**　検出された床面には、本住居跡に関連すると思われるピットは存在しない。　**カマド・炉**　本住居跡に関連するカマドないし炉は、検出されなかった。　**貯蔵穴**　関連する貯蔵穴は検出されなかった。　**遺物**　覆土中、床面上とも関連する遺物の出土はなかった。　**重複関係**　不明。　**その他**　中央部北寄りの所に、高さ約9cm、長さ約1mの凸部がある。かたく、しまった部分であるが、その機能、性格等下明である。周囲の住居跡、及び地層より石田川期の住居跡とみられる。　(鵜木)

H416号住居跡（図版38）







貯蔵穴1

住居跡全体
1．黒褐色土。
2．茶褐色土。ローム粒・炭化物。
3．茶褐色土。多量のローム粒。焼土粒。
4．黒褐色土。
5．茶褐色土。
6．茶褐色土。
7．茶褐色土。
8．茶褐色土。ローム粒。

貯蔵穴1
1．茶褐色土。ローム粒。
2．茶褐色土。ローム粒。
3．茶褐色土。ローム粒。
4．茶褐色土。多量のローム粒。

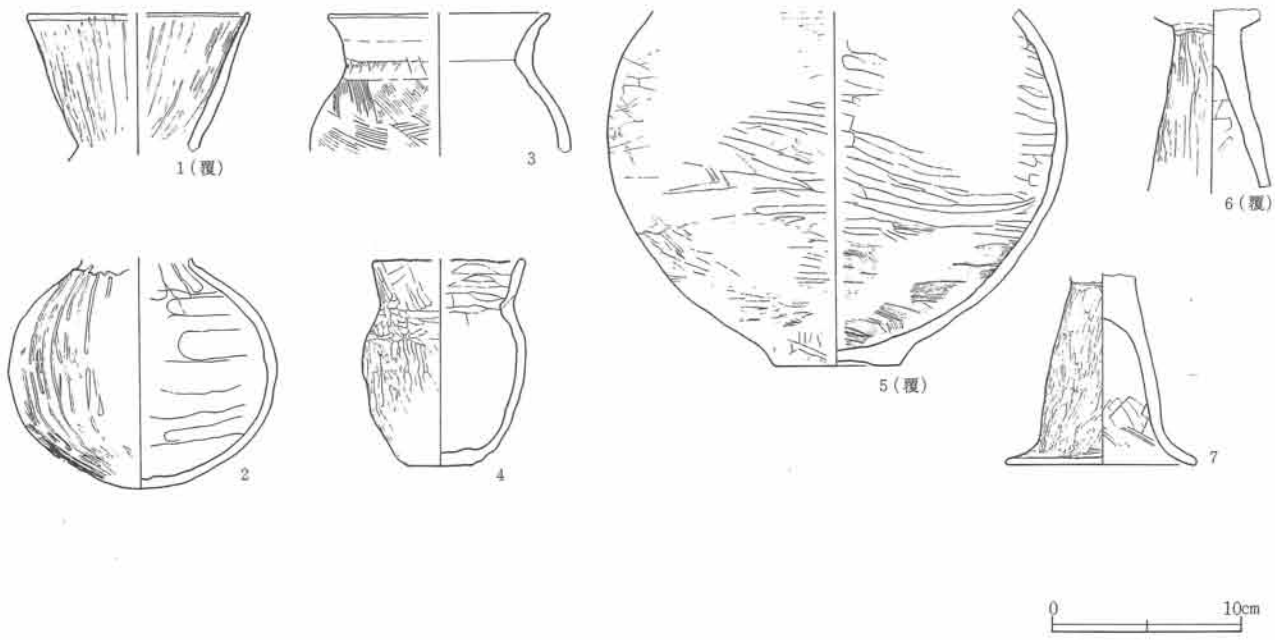
図－227　H416号住居跡

0　1 m

住居跡全景

南壁中央部付近炭化材出土状況

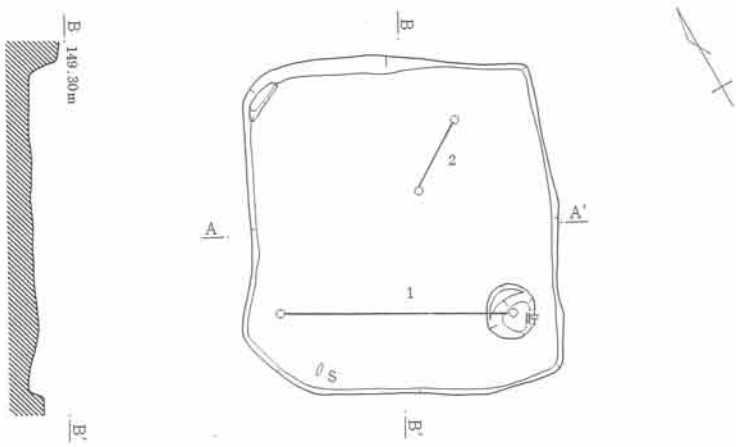
H416号住居跡（5H—145）　**位置**　調査区城南端、ヌ101～1とル101～1にまたがってある。台地南端の緩やかな斜面上に位置する。北東に接して1号墳、西に接して重複住居H467号、H468号住居跡がある。**形状**　北西～南東に長軸を持つ隅丸長方形で、南北7.75m、東西7.4mである。四壁ともほぼ直線であるが、角を隅丸にしたため、全体的にややふくらみを持った形となっている。長軸方向はN－2°－E、面積は57.2㎡、壁高は43～80cmである。北壁西端と西壁中央部の張り出し部を除き、壁直下に周溝が認められる。深さ3～14cm、幅6～16cmである。西壁の中央部南寄りの所に、張り出しが認められる。長円形状を呈し、規模は1.36m×0.5mである。　**ピット**　床面に3個（P1・P2・P3）ある。P1は67×46cm、深さ28cm、P2は132×128cm、深さ10cm、P3は84×53cm、深さ23cmの規模である。その位置、大きさ等から推して、柱穴とは考え難い。本遺跡内において、これだけの規模を持つ住居は少ない。　**炉**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　北東隅と北西隅にある。前者は円形で、住居外へ突出して造られており、規模は68×56cm、深さ70cm、後者は円形で、72×72cm、深さ37cmである。　**遺物**　床面中央より土師器甕（2）、西壁張り出し部南より土師器甕（3）、南溝近くより土師器壺（4）、東壁中央近くより土師器高坏脚部(7)が出土した。3は床面から17cm浮いて、他は、床面又は同直上の出土である。　**テラフ**　床面から18cmの所にF・Aブロックを含む層がある。　**その他**　焼失住居と思われ、中央東寄りの床面が広範囲に焼けている。東壁中央から南壁にかけて、西壁中央付近、北壁中央付近等広範囲に炭化材が散乱している。（鵜木）

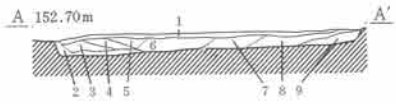


図－228　H416号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　小型壺（1・2）、小破片。1は横ナデ後、内外面に細かなヘラ磨き。ヘラ磨きの手法は、上下一連の反復による。色調は淡い明褐色。2は丸底形であり、底部辺をヘラ削りにより形成。胴部外面はヘラ削り後、細かなヘラ磨き。内面は指ナデ。底部辺に、放射状のヘラ痕をみる。色調は淡い明褐色。胴部に黒斑あり。　甕（3・5）、3は外反する口縁部をもつ。肩部外面に細かなハケ、内面にナデを施した後、口縁部内外面横ナデ。石英を含み、色調は外面黒褐色、内面淡い黄褐色。5の底部は未調整。胴下半部形成後、内外面ハケ調整。更に胴上半部成形。ハケ調整後、外面全体ヘラナデ。内面ヘラナデ。色調は黒褐色。　小型甕（4）、底部は平底状に造り出し、胴部は棗形である。胴部外面は粗いハケ調整後、ヘラ磨き。内面ヘラナデ。口縁部外面はヘラナデ後、粗いハケ調整。内面は横ヘラナデ。色調は黒褐色。口縁部辺黄褐色。　高坏（6・7）、中膨みの形態を示す。6の上半部は柱状を留め、7の裾端部は稜を形成する。6の外面は、細かなヘラ磨きにより光沢を生じ、内面はヘラ調整。7の外面は、ハケ調整後、ヘラ磨き。裾部は横ハケ後、横ヘラ磨き。内面はハケ調整後、端部横ナデ。6の色調は暗赤褐色。7は淡い明黄褐色。酸化鉄粒を含む。（中束）

H417号住居跡





1．黒褐色土。
2．茶褐色土。ローム粒。
3．黒褐色土。
4．黒褐色土。ローム粒。
5．黒褐色土。
6．茶褐色土。多量のローム粒。
7．黒褐色土。ローム粒。
8．黒褐色土。ローム粒。
9．茶褐色土。ローム粒。

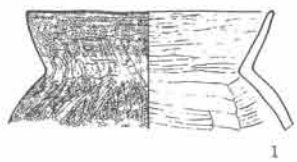
0 1 m

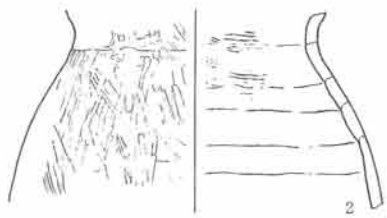
住居跡全景

貯蔵穴内遺物出土状況

図－229　H417号住居跡

H417号住居跡（5 H—146）　**位置**　調査区域の南西、リ101にある。台地南西部の緩やかな斜面上に位置する。西に接して56号溝が走り、東に接してH466号住居跡、北に接してH463号住居跡がある。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ隅丸方形で、南北3.44m、東西3.12mである。全体的にふくらみを持った形である。長軸方向はN－1°—W、面積は10.2m²、壁高は12～30cmである。周溝の確実な存在は不明であるが、北西隅、壁直下にあるピット（P 1）が周溝との見方も出来る。形状は長円形を呈し、規模は25×7cm、深さは8cmである。　**炉**　本住居跡に伴う炉跡は検出されなかった。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、円形で、規模は58×50cm、深さ37cmである。北側部分が2段に造られている。　**遺物**　床面南より土師器甕（1）が、中央部北より土師器甕（2）が出土した。いずれも床面から出土している。　**テラフ**　覆土中に二ツ岳系の軽石を含まない。　**その他**　西壁南側がやや外方に張り出す形は、H456号住居跡に類例があるが、いかなる機能を有するかについては不明である。　（鵜木）



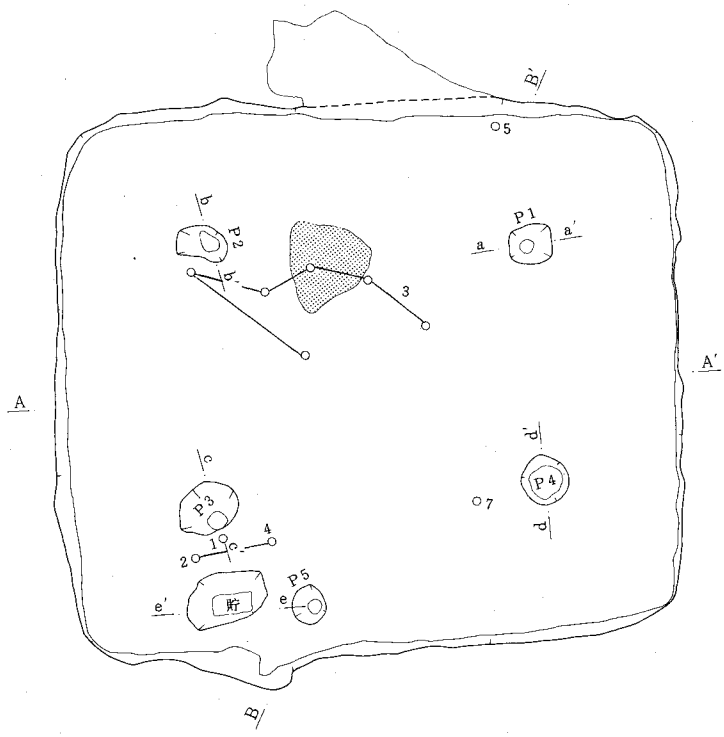


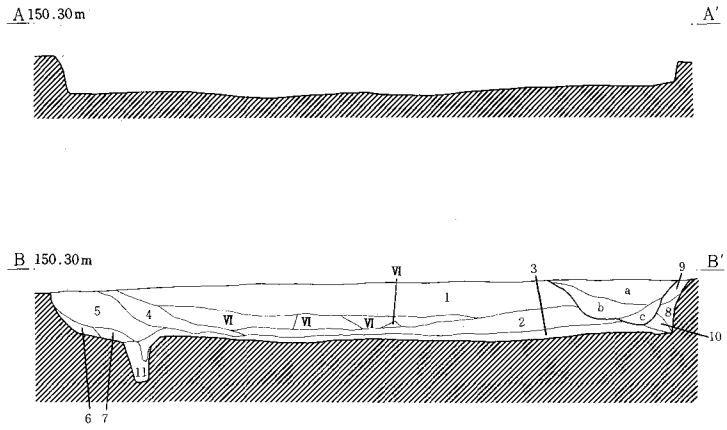
0 10cm

図－230　H417号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1・2）、1は、直口縁でやや内彎する器形の土器である。肩部外面はハケ調整後に細かなヘラ磨きが施され、内面はヘラナデされる。口縁部は横ハケ調整後、外面に横及び縦ヘラ磨き、内面に横ヘラ磨きが施される。色調は明赤褐色。砂粒を少量含み、焼きしまりも良好。口縁の一部にみられる器面の脆さは、二次的な火熱によるものであろうか。外面には煤が付着する。2は破片である。外面は、頸部辺に粘土紐接合がみられ、ハケ調整後に粗いヘラ磨きが施される。内面には、15～20㎜幅の粘土紐が4段程明瞭に残る。ハケ目は頸部辺にのみ若干施され、肩部辺は指ナデ、又はヘラナデが加えられる。色調は、外面が淡い暗赤褐色。内面はにぶい橙色を示す。2～3㎜程の石英粒や酸化鉄粒、及び多量の軽石粒が混入する。外面には若干煤の付着も認められる。やや軟質である。　（中束）

H418号住居跡





住居跡全体
1．黒褐色土。
2．漆黒色土。
3．黒褐色土。ローム粒・ロームブロック。
4．黒褐色土。
5．黒褐色土。ローム粒。
6．黒褐色土。多量のローム。
7．不　明
8．暗褐色土。ローム主体。
9．暗褐色土。ローム。
10．黒褐色土。ローム粒。
11．暗褐色土。多量のローム粒・ロームブロック。

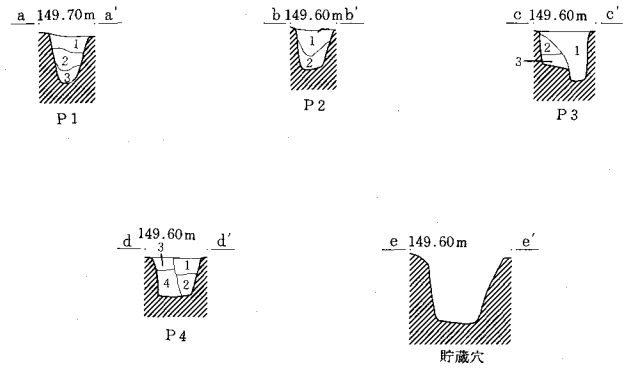
58号溝
a．暗褐色土。ローム粒。
b．黒褐色土。多量の砂粒。
c．黒褐色土。砂粒。

P1
1．黒褐色土。ローム粒。
2．黒褐色土。やや黒色み強。
3．暗褐色土。ローム粒やや多量。

P2
1．黒褐色土。
2．黒褐色土。ローム粒。

P3
1．暗褐色土。やや多量のローム粒。
2．黒褐色土。
3．暗褐色土。ロームブロック。

P4
1．黒褐色土。
2．黒褐色土。やや黒色味強。
3．黒褐色土。
4．黒褐色土。ローム粒。



図－231　H418号住居跡

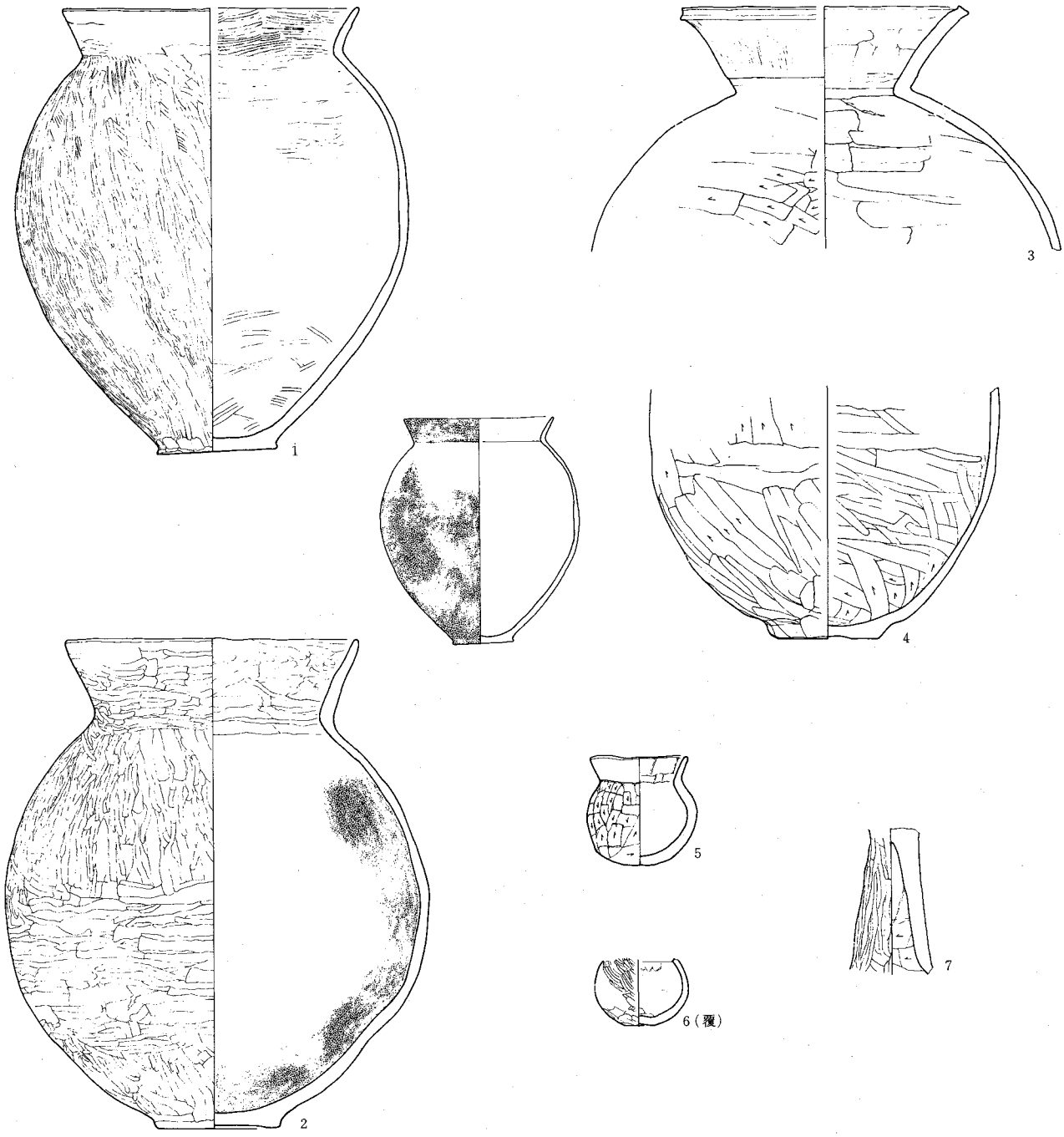
0　1m

住居跡全景

小型坩（遺物５）出土状況

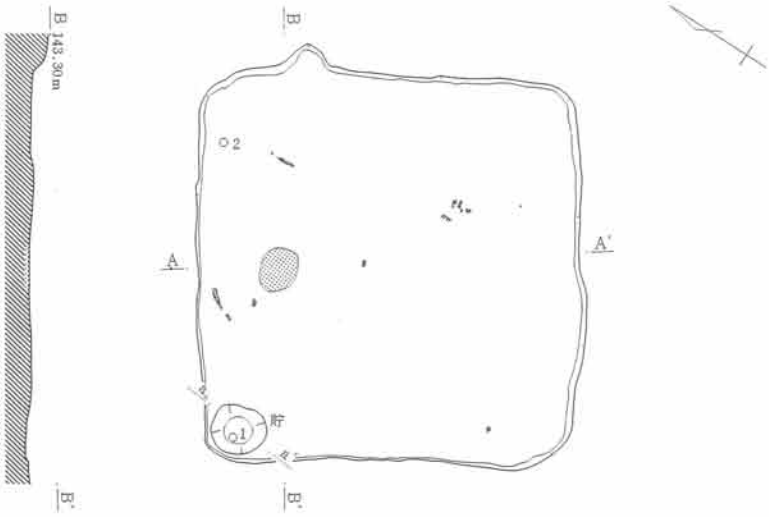
H418号住居跡（５H－147）　**位置**　49・50号溝と58号溝の交点付近、ヨ１～２に所在する。南下がりの緩傾斜地で、西に近接してH471号住居跡がある。　**形状**　南北5.6m、東西6.5mの隅丸台形を呈す。壁はいずれもほぼ直線的であるが、コーナーが隅丸となっているため四壁に膨みを感じさせる。西壁は東壁に比べ南側が約30cm長い。南壁は西寄りの所で壁の走向に乱調を来たすが、掘りすぎと見られる。長軸方向N－76°－E、面積35.4m²で大型の部類に層す。壁高は北東側が最も高く61cmである。周溝は全く認められなかった。　**ピット**　４本の柱穴（Ｐ１～Ｐ４）と、他に１個のピット（Ｐ５）が検出された。柱穴は住居跡の対角線上にほぼのっており、コーナーから約180cm内側に位置している。柱穴は径50cm前後、深さ40～42cmである。柱穴間の中心距離は、東西方向Ｐ１～Ｐ２＝3.36m、Ｐ３～Ｐ４＝3.52m、南北方向Ｐ１～Ｐ４＝2.50m、Ｐ２～Ｐ３＝2.94mで東西に細長い台形を呈す。なお、柱穴内地層断面によると、柱の太さは20cm前後と推定される。Ｐ５は南壁沿い西寄りの貯蔵穴のすぐ東側にある。深さ29cmで、柱穴より若干小さい程度の規模である。他の例から見て出入口関連施設の痕跡と推定される。　**炉**　住居中央北寄り、柱穴Ｐ１とＰ２を結ぶ線上でやや西に片寄って認められた。平面は96×86cmの不整形をなし、床面と同じレベルの地床炉である。　**貯蔵穴**　南壁沿い西壁寄りに長方形の貯蔵穴が認められた。規模は、88×54cm、深さ70cm。　**遺物**　貯蔵穴付近（1・2・4）及び炉跡を中心とする広範囲の区域（3・5・7）から出土した。これらは４と２の一部が貯蔵穴内覆土中から出土したのを除くと、いずれも床面ないし床面直上から出土している。　**テラフ**　住居跡床面に最も近い所で10cmの所の覆土中に、F・Aと見られる淡褐色の灰層が認められた。　（唐澤）

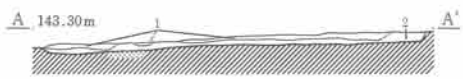
H418号住居跡出土遺物



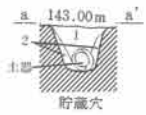
図－232　H418号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　甕（1・4）、平底甕。1の外面は口縁部上端横ナデ、同下半にヘラナデ。胴部外面は肩にハケ目を残すが、ほぼ全面にヘラ磨き。内面は口縁部にハケ目（横）、胴部に光沢のないヘラ磨きを施す。4は外面ヘラ削り、内面ヘラナデで、1に比べ簡略である。1の肩には煤が付着。　壺（2・3）、2は胴下半部に最大径を置く。調整は外側全面と口縁部全面にていねいなヘラ磨き、胴部内面に粗いヘラナデ(横)。肩部外面に煤、胴部内面に黒色炭化物が薄く付着する。3は球形の胴部で、口唇部先端を外頃して平坦化する。調整は口縁部横ナデで、外面にハケ目(縦)、内面にヘラナデ（横）痕を残す。胴部は外面にヘラナデ、内面に指ナデとヘラナデ。堅緻な焼成で、ていねいなつくり。　小型坩（5・6）、法量・つくりは共通するが、6は精選された胎土で、ていねいに調整する。口縁部横ナデ、胴部外面ヘラナデ、同内面指ナデ（横）。　高坏（7）　柱部のみ残存。外面にヘラ磨きを施すが光沢はない。内面はヘラ削りで裾部側の内径を広げている。　（唐澤）

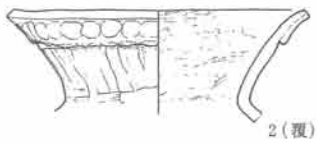


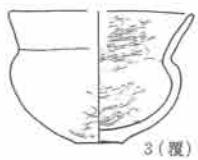


住居跡全体
1．漆黒色土。(F・A降下前)
2．黒褐色土。1cm大の炭化物。
貯蔵穴
1．黒色土。
2．暗褐色土。ローム粒・ロームブロック。



図－233　H419号住居跡





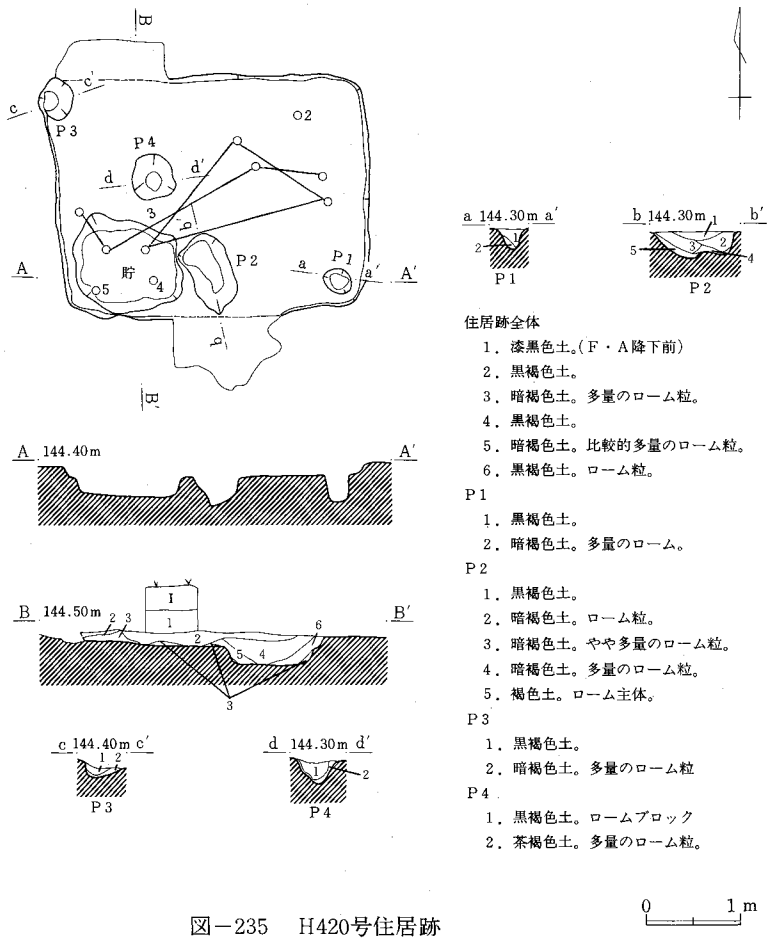
図－234　H419号住居跡出土遺物

住居跡全景

H419号住居跡（5H－148）　**位置**　上武国道予定地の南、ネ106に所在する。南下がりの緩傾斜地で、西には幅約50mの浅い窪地が南北に延びている。　**形状**　南北4.1m、東西4mの隅丸方形を呈す。北壁と南壁は若干内に反り、東壁と西壁は若干外に膨む。北壁西寄りの突出部は掘りすぎと見られる。長軸方向N－30°－E、面積15.7m²、壁高6～17cmで北側が高い。周溝は認められない。　**床面**　床面の平面観察及び貯蔵穴壁面の観察によると貼床は認められない。特に踏みしめられている箇所もなかった。　**炉**　住居中央西寄りに、長円形に焼土化した床面が認められた。炉跡（地床炉）と見られる。　**貯蔵穴**　南西隅。円形、60×53cm、深さ52cm。　**遺物**　貯蔵穴内から土師器甕(1)が、西壁沿いから土師器甕の小片が散在して認められた。1はほぼ完形で、あたかも貯蔵穴の底部に置かれたかの如く、口縁部を上に向けて出土した。覆土中からは、壺口縁部(2)や小型甕(3)が出土した。いずれも土師器である。　**テラフ**　覆土中にはC軽石のみで、二ツ岳系の軽石はまったく認められなかった。F・A降下以前の住居跡と推定される。1層の色調も漆黒色を呈し、F・A降下前の特色を示している。　**その他**　住居跡内に炭化材が散在して認められた。いずれも小片であるが、床面ないし床面直上で認められている。本住居跡には焼失の痕跡も特に認められないので、住居の廃棄直後に炭化材が捨てられたものと考えられる。　（唐澤）

出土遺物　　**土師器**　壺(2)、口縁部のみ残存。折り返し口縁。調整は、折り返し部に指頭痕を顕著に残す横ナデ、それ以下の外面に縦ヘラナデ、内面は横ヘラ磨きを施す。色調は淡褐色。口縁部内面に黒斑。　甕(1)、頸部のしまりが弱く、球形の胴部を持つ。胴部最大径を中央に置く。頸部内側は稜線を巡らす。調整は口縁部内外面横ナデ、胴部外面は肩部に斜ハケ目、それ以下に横ヘラ削り、胴部内面は肩部と腰部に横ハケ目、その中間にハケ目痕を残す横ヘラナデを施す。胴部中ほどでは、胴上半と下半の接合痕が認められる。色調は淡褐色。口縁部と肩部外面に厚い煤、胴部内面下端に薄く黒色付着物が認められる。　小型甕(3)、口径と胴部径が等しく、器高より大きい。調整は内外全面にていねいなヘラ磨きを施す。色調は淡褐色。　（唐澤）

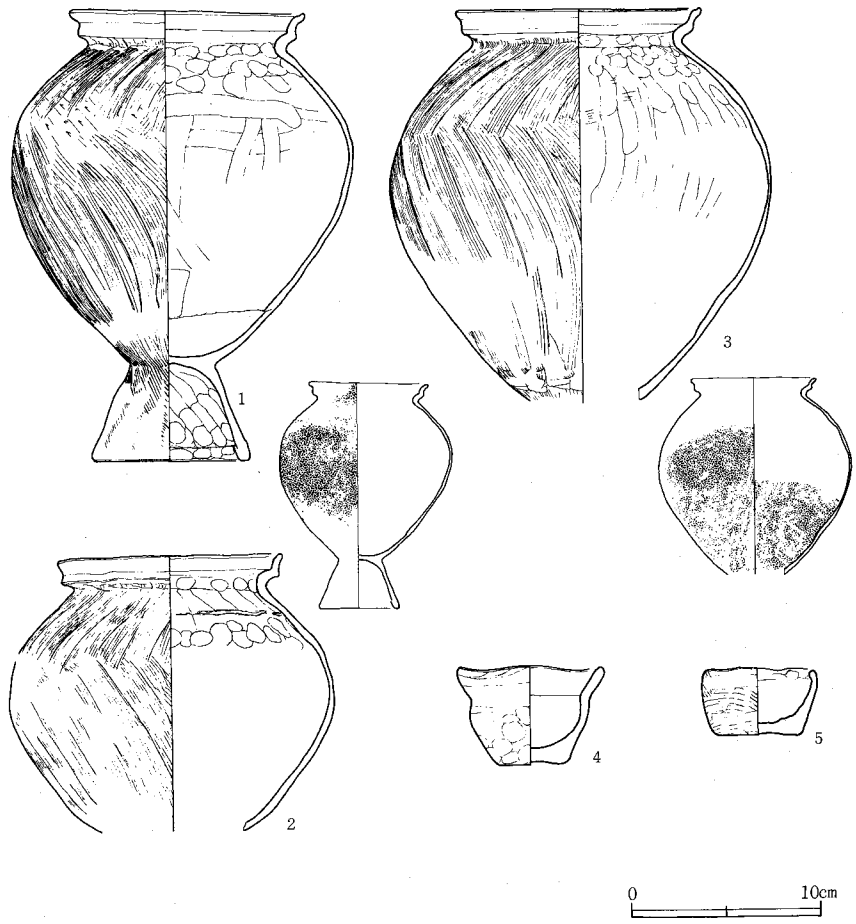
貯蔵穴内遺物出土状況



図－235　H420号住居跡

H420号住居跡（5H－149）　**位置**　上武国道予定地のすぐ南、ラ104～105に所在する。18区では最も北端にあり、小規模な部類に属す。同規模のものが東から南にかけて3軒近接して存在する。　**形状**　南北2.5m、東西3.3mの隅丸長方形を呈す。北壁と西壁はほぼ直線的だが、東壁と南壁には若干外に膨む傾向がある。北壁は南壁に比べ西側が約20cm長い。長軸方向はN－90°－E、面積7.9m²。壁高は覆土の堆積状況から見て40cm前後以上あったものと推定される。　**床面**　床面の表面観察及びピット壁面の観察結果等から見て貼床は認められない。特に踏みしめられた部分もなく全体に軟らかい。　**ピット**　貯蔵穴を除き4個のピットが認められた。P1・P3は規模・深さ（32cm）・位置に共通性が見られ、同一機能を持つものと見られるが、性格不明である。P2（深さ29cm）は貯蔵穴のすぐ東にあり、H418号住居跡等と共通している。出入口の施設に伴うピットと見られる。P4は深さ32cmで性格不明である。　**貯蔵穴**　南西隅。やや不整の長方形で、115×98cm、深さ20cm。住居跡に比して異常に大きい。　**遺物**　貯蔵穴内及び東・西・北壁に近い所から出土している。貯蔵穴内のものは底部ないし直上から、床面のものは大部分が9～15cm浮いて出土した。

（唐澤）

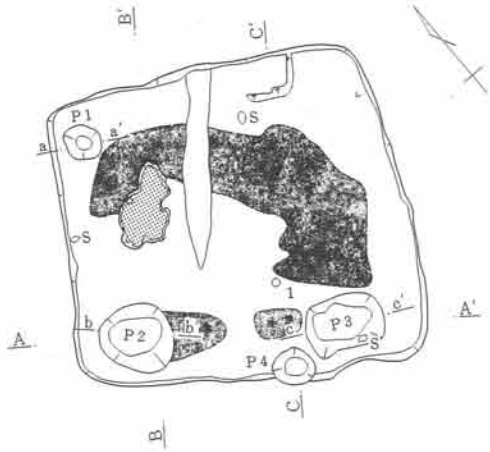


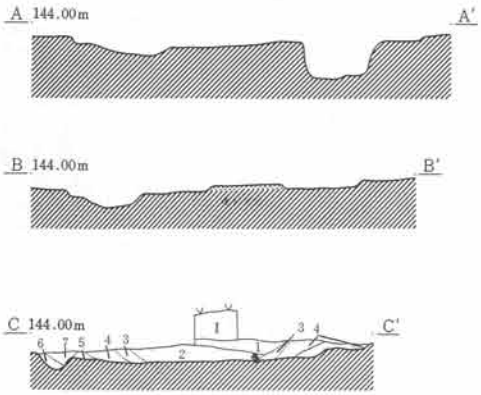
図－236　H420号住居跡出土遺物

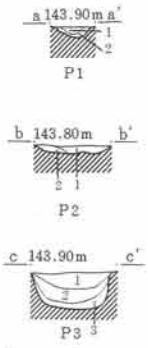
出土遺物　**土師器**　甕（1～3）いづれも台付甕。2・3は台部を欠失する。形状づくりはほぼ同じだが3は他よりも一回り大きい。3者の調整手法は、口縁部内外面の横ナデと胴部外面に施された2段の斜ハケ目は共通するが、胴部の内面調整で1・2と3の間に若干の違いが見られる。1・2は指押えまたは指ナデが肩部のみで、それ以下には縦・横・斜のハケ目が入るのに対して、3の指押えと指ナデは胴部中ほどまで延びており、その上に重ねて肩部から内部全面に横ヘラナデを施している。1の台部外面は斜ハケ目を指ナデで縦にすり消す、内面は指押え及び指ナデである。端部は内側に折り返す。色調は淡褐色で、胎土中に雲母を含む。1・3外面に煤、3内面に黒色炭化物付着。手捏状小型土器（4・5）、4は口縁部内外面横ナデ、体部外面指押え、同内面横指ナデ、底部外面にヘラ削りを施す。5は内外面に横ヘラナデを施すが、両面に顕著な指頭痕を残す。底部外面ヘラ削り。色調は淡褐色。雲母含む。

（唐澤）

H421号住居跡







住居跡全体
1．漆黒色土（F・A降下前）。
2．黒褐色土。ローム粒。
3．暗褐色土。ローム粒。
4．黒褐色土。
5．暗褐色土。ローム粒。
6．暗褐色土。多量のローム粒。
7．暗褐色土。ローム粒。

P1
1．黒褐色土。ローム粒。
2．暗褐色土。ローム主体。

P2
1．黒褐色土。ローム粒。
2．暗褐色土。ローム主体。

P3
1．黒褐色土
2．黒褐色土。
3．暗褐色土。ローム主体。

0　1 m

図－237　H421号住居跡

0　10cm

図－238　H421号住居跡出土遺物

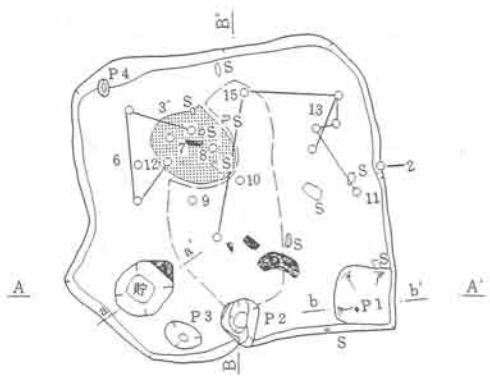
住居跡全景

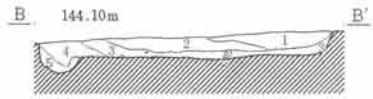
H421号住居跡（5H－150）　**位置**　ラ106に所在する。H420号住居跡の南約15mにあり、同様の小規模の部類に属す。　**形状**　南北3.3m、東西3.7mの隅丸の不整四角形。北壁と東壁、南壁と西壁は直交関係にあり、それぞれは直線壁と曲線壁の組み合わせを持つ。長軸方向N－96°－E（南壁走向）、面積11.3㎡。壁高は覆土の堆積状況から見て本来は25cm以上あったものと見られる。　**床面**　住居中央部を取り囲むように、黒色土の貼床を施す。床面は全体に軟らかい。　**ピット・貯蔵穴**　北東隅を除く各コーナーにピットが所在する。そのうちP3は長方形で84×37cm、深さ41cmで貯蔵穴にふさわしい。その西に接するP4は深さ14cmで、出入口施設に伴うピットと見られる。P1（深さ17cm）、P2（深さ8cm）は性格不明だが、貯蔵穴を含め同様のピットの配例の認められるものにH409・402号住居跡等があり注目される。　**炉**　住居中央西寄りの南北に細長い不整形の焼土（地床炉）。表面は非常に固く、床面より4～5cm高い。住居内に散乱する焼石は、炉に関連するものと見られる。　**遺物**　炉表面及び貯蔵穴内覆土中とその周辺から土師器小片が出土した。1は床面から14cm浮く。　（唐澤）

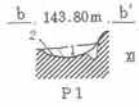
出土遺物　**土師器**　甕（1）、口縁部片。胴部から〝く〟の字状に外反する短かい口縁部を持つが、頸部のくびれはそれほど強くない。調整手法は内外面とも細かな斜ハケ目の後横ナデを施す。頸部外面には口縁部から続くハケ目が良く残る。色調は淡褐色。　（唐澤）

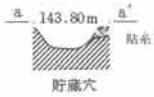
H422号住居跡

H422号住居跡（5H－151）　**位置**　上武国道予定地南の、ラ106に所在する。H421号住居跡の西3mに位置する。　**形状**　東西・南北とも3.05mの隅丸正方形を呈す。南東隅のみが鋭い角をなし、他のコーナーと異なる。西壁南半の張り出し状の突出部は掘りすぎと見られる。南北方向N－4°－E、面積8.9㎡で小規模な部類に属す。壁高は1～27cmで北側が高い。周溝は認められない。　**床面**　貯蔵穴の東壁上端に厚さ10cmの貼床が認められた。範囲は不明である。P2と北壁中央を結ぶ線を中軸として、240×120cmの範囲に踏みしめられて固い床面部分が認められた。東壁・西壁沿いには、床面の軟らかい部分が広く認められた。　**ピット**　南壁沿いにP1～P3、北西隅にP4が認められる。P1は南東隅に所在する正方形の浅いピットで、60×58cm、深さ12cmである。貯蔵穴と似た機能を持つものと推定されるが、床面は荒れていた。P2は深さ12cmで、ここから北に床面の固い部分が始まっているので、出入口施設に関連するピットと考えられる。P3・P4は底部が非常に荒れた浅いピットで、貼床を掘ってしまったものと見られる。　**炉**　住居中央やや北西寄りに所在する長円形の地床炉。　**貯蔵穴**　南西隅。隅丸正方形を呈す。72×53cm、深さ23cm。　**遺物**　炉跡を中心に、住居の北半分に集中して出土している。一諸に長さ15cm程度の細長い小石（転石）や炭化材が出土している。これらは炉跡上のものはその表面に、他の大部分のものは床面から3～12cm浮いて出土している。　**その他**　本住居跡については焼失住居の徴候は全く認められず、炭化材の存在については他に理由を考える必要がある。　（唐澤）









住居跡全体
1．黒褐色土。
2．1に比べやや黒色味が弱い。
3．黒褐色土。細粒～5cm大の炭化物。
4．暗褐色土。ローム粒。
5．暗褐色土。多量のローム粒。

P1
1．暗褐色土。
2．暗褐色土。

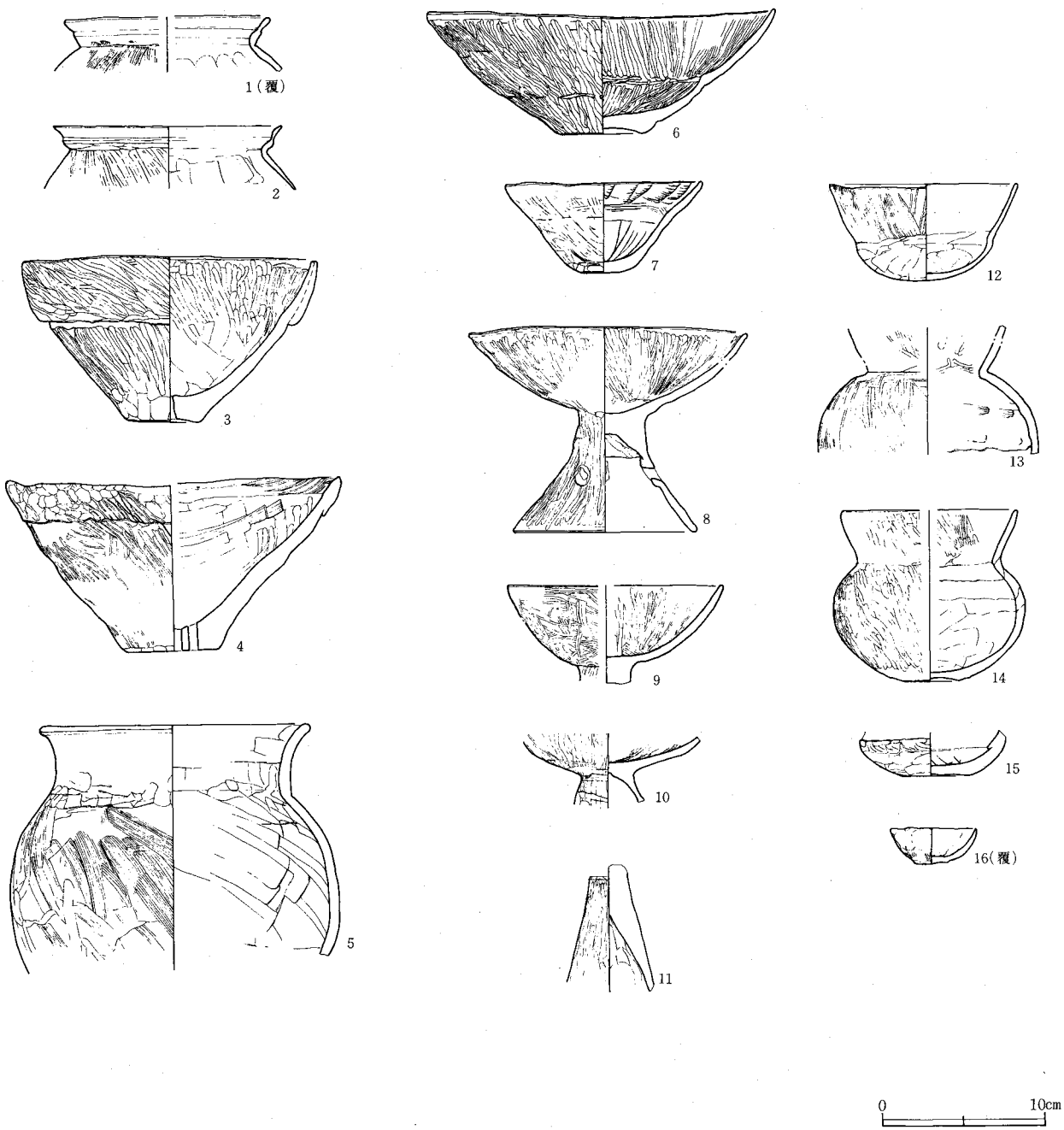
0 1m

図－239　H422号住居跡

遺物出土状況全景

高坏（遺物8）出土状況

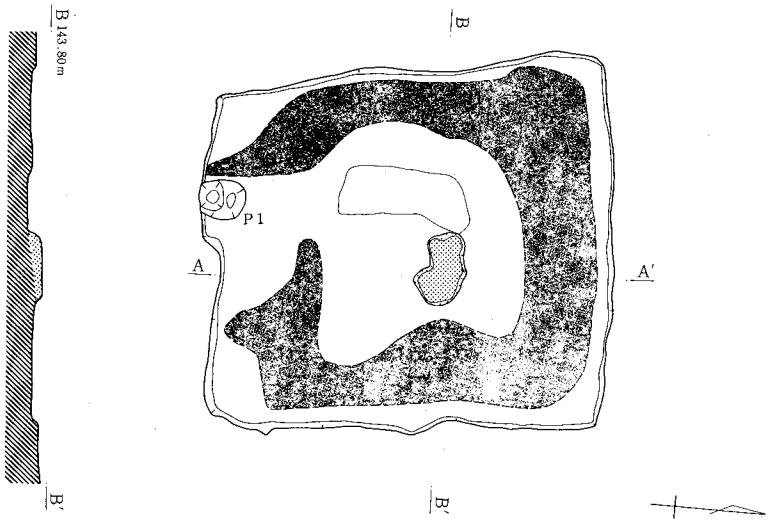
H422号住居跡出土遺物

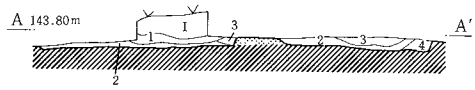


図－240　H422号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　壺(5・13・14)、5は立ち上がりの強い口縁部を持つ。口縁部内外面に横ナデ、胴部外面に目の細かい斜ハケ目、同内面に斜ヘラナデを施す。13は長頸壺。外面は斜ヘラ磨き、内面は口縁部で横ヘラナデ痕を残す斜ヘラ磨き、胴部は指押えで部分的に横ヘラナデ。14は小型壺で口径、胴部径、器高がほぼ等しい。外面及び口縁部内面は光沢のある斜ヘラ磨き、胴部は上位に粘土紐接合痕を残す横ヘラナデ。つくりていねい。　甕(1・2)、S字状口縁甕。両者とも口縁部内外面の横ナデと胴部外面の斜ハケ目を共通にするが、胴部内面は1が斜指ナデ、2が横ヘラナデと異なる。外面のハケ目は浅い。　甑(3・4)、3は単孔で幅の広い折り返し口縁を持つ。外面は大部分がヘラ磨きで下位に指押え、内面は折り返し部分が斜ヘラ磨き、それ以下はヘラ削り。つくりていねい。4は多孔(1＋5)で、幅の狭い折り返し口縁を持つ。外面は全面の斜ハケ目の後、折り返し部に指押え、体部下位に斜ヘラナデを加える。内面は口縁部に斜ハケ目を残す他は、全面に斜ヘラナデ。穿孔は3・4とも筒状用具による。4のつくりは雑である。　鉢(6)、内面の稜の所で上半と下半を接合する。外面は接合痕を残す。内外全面に斜ヘラ磨きを施す。　小型坩(7・12・15)、7は胴部と口縁部の境が不明瞭。胴部内面のみ放射状ヘラ磨き、他はヘラナデ(口縁部横、胴部斜)内外面に第1次調整の粗い斜ハケ目を残す。口縁部は外面粗い斜ヘラ磨き、内面横ナデ、胴部外面ヘラ削り、内面に横または斜のヘラナデ。15は胴部のみ。外面ヘラ削り、内面ヘラ押え。　高坏(8～11)、8・10は脚部に3つの円窓を持つ。10の坏部には屈曲部が見られる。坏部内外面及び脚部外面にヘラ磨きを施す。9の坏は半球形状を呈する。調整は前者に同じ。11は内面に絞り目が見られる。外面ヘラ磨き。脚部内面の調整は8・10・11の3者で異なる。8は円窓以下横ナデ、以上縦指ナデ、10は縦ヘラナデ、11は指押えを施す。　手捏状小型土器(16)、椀形、外面ハケ目に指押えを加える。内面横ヘラナデ。　(唐澤)

H423号住居跡





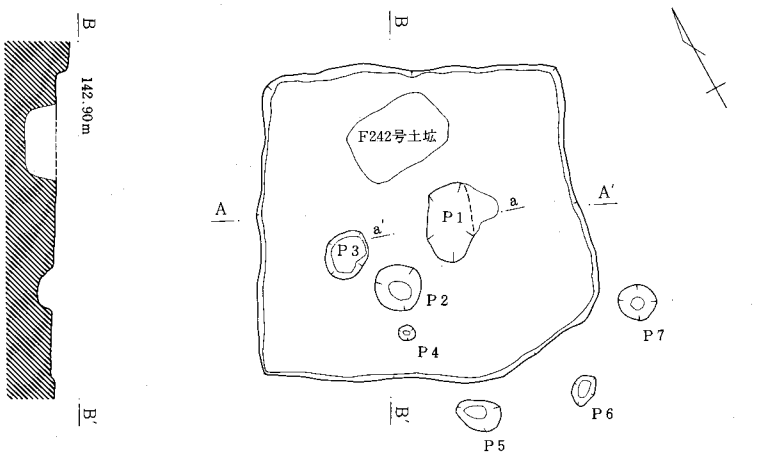
1．漆黒色土（F・A降下前）。
2．暗褐色土。ローム粒。
3．黒褐色土。
4．暗褐色土。比較的多量のローム粒。

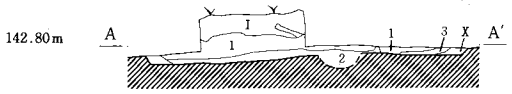
0　1 m

図－241　H423号住居跡

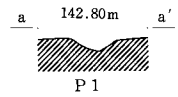
H423号住居跡（5 H－152）　**位置**　H422号住居跡の西5m、ラ106に所在する。　**形状**　南北4.1m、東西3.9mの台形を呈す。北壁は南壁に比べ西側が46cm長い。壁の形状は東壁がほぼ直線をなすが、それ以外では、北壁一外に膨らむ、南壁一西半に若干の張り出し、西壁一ゆるやかに波を打つ等、それぞれに変化が認められる。長軸方向N－4°－W、面積15.2m²。壁高は覆土の堆積状況から見て、少なくとも18cm以上はあったものと推測される。周溝は認められなかった。　**床面**　特に固い部分は認められなかったが、住居中央部分及び南壁中央部を除く壁沿いに、黒色土の貼床が施されていた。厚さについては未調査のため不明である。　**ピット**　南壁西半の張り出し部にP1が確認された。この部分から住居中央にかけては貼床が認められないが、これはH422号住居跡の床面の踏み固められた部分の範囲と一致する。このような点から、P1は出入口施設に関連するピットと推測される。深さは25～26cmで、掘り替えが見られる。　**炉**　住居跡中央やや北寄りに、東西に細長い不整形の地床炉が存在する。焼土表面は固く焼けており、住居床面より約10cm高い。　**遺物**　床面から9cm浮いて土師器小片（壺または平底甕体部）が出土した。覆土中には縄文土器が認められた。　（唐澤）

H425号住居跡





1．黒褐色土。二ツ岳系軽石なし。
2．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
3．暗褐色土。多量のローム。

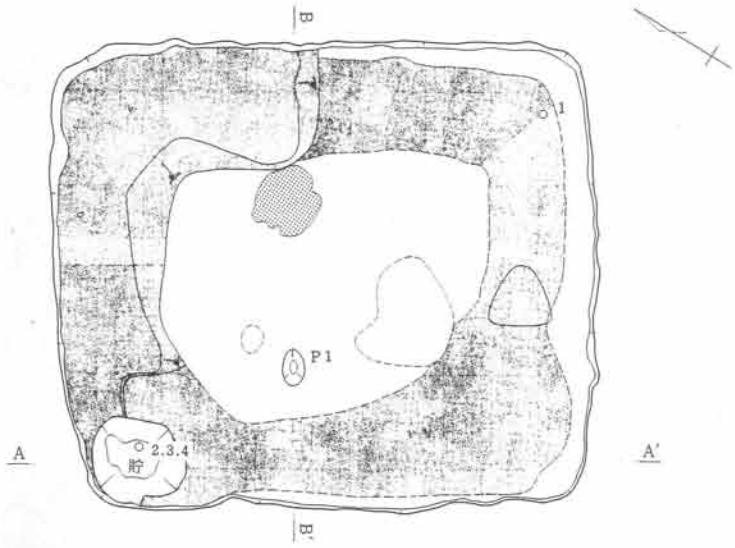


0　1 m

図－242　H425号住居跡

H425号住居跡（5 H－154）　**位置**　H424号住居跡の南7m、ナ107に所在する。北に近接するH419・424号住居跡とともに長軸方向の東偏度が大きい。　**形状**　南北3.2m、東西3.45m（張り出し部分で計測）の不整四角形。東壁は南半部で約30cm程ゆるやかに張り出しており、南東隅の角を削るようにして南壁に続いている。長軸方向N－120°－E、面積10.3m²でやや小型の部類に属す。壁高は検出面からは6～12cmであるが、覆土の堆積状況から見て30cm以上はあったものと見られる。周溝は認められなかった。　**床面**　貼床は認められない。踏みしめられて特に固い部分もなく、全体に軟らかい。　**ピット**　住居内中央部に4個（P1～P4）、南東隅住居外には3個（P5～P7）認められた。深さはP1、22cm、P2、15cmで他は不明である。P5～P7は南東隅コーナーの直線部分と対応しており注目されるが、住居内ピットを含めて住居跡との関連は不明である。　**遺物**　床面又は床面直上及び覆土中からの遺物はまったく認められなかった。　**テフラ**　I層を除く覆土中には、C軽石のみで、二ツ岳系の軽石はまったく認められなかった。本住居跡の時期は周囲のもの同様石田川期のものと見られる。　**重複関係**　住居内北部でF242号土坑と切り合う。覆土より見て土坑の方が新らしい。（唐澤）

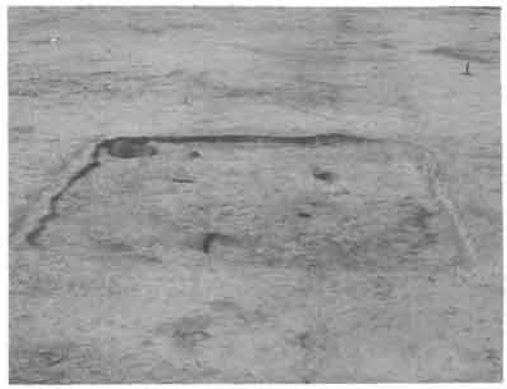
H424号住居跡



1．黒褐色土。(貼床)
2．暗褐色土。ロームブロック。(貼床)
3．黒色土。ローム粒。(貼床)
4．暗褐色土。焼土。
5．黒褐色土。ローム粒。

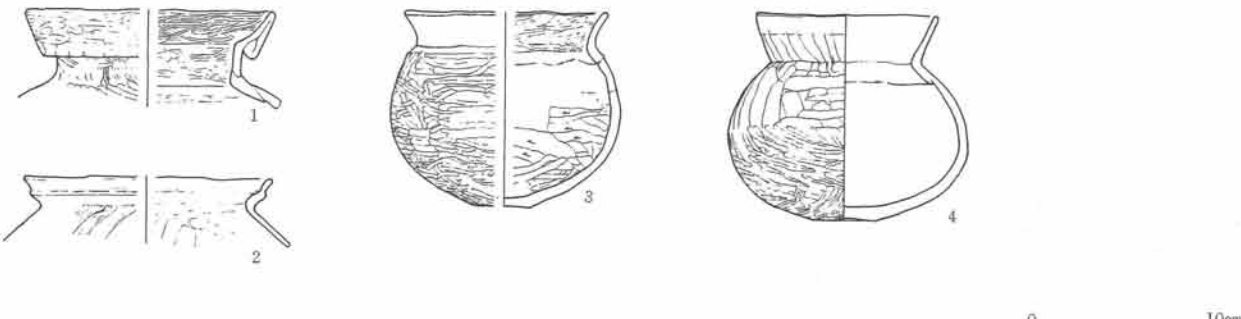
0　1 m

図－243　H424号住居跡



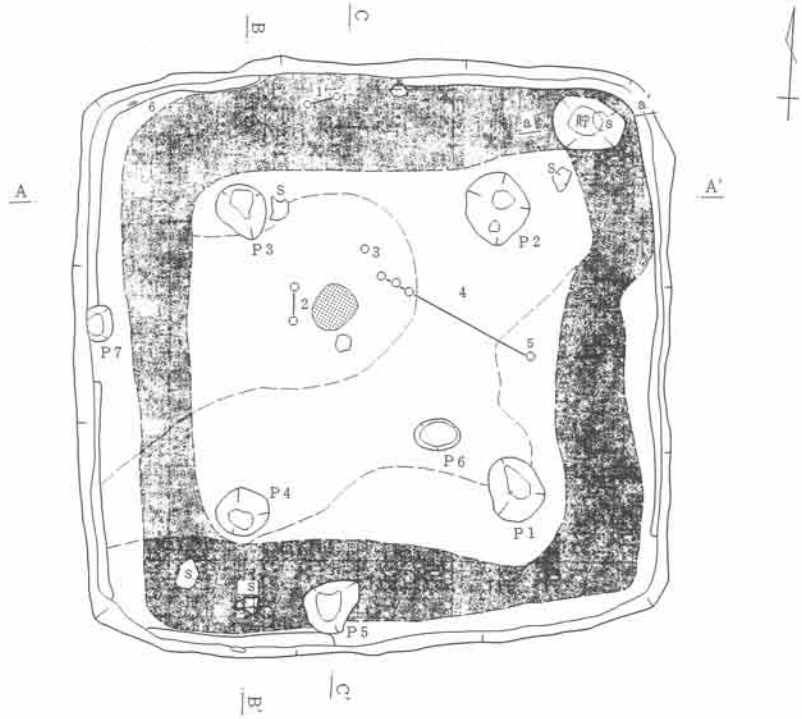
住居跡全景

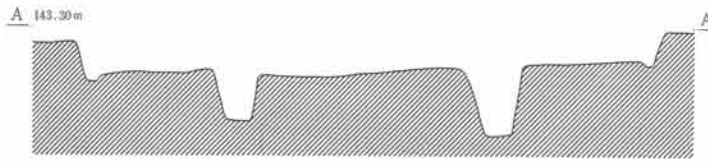
H424号住居跡（5 H－153）　**位置**　H423住居跡の西８m、ナ107に所在する。周囲の住居跡に比べ方位の東偏度が大きく、ほぼ同じ位のものが側にもう２軒（H419・425号住居跡）認められた。　**形状**　南北4.9m、東西5.7mの隅丸長方形。西壁は南半で内に寄せており、その結果、北壁は東壁に比べ西側が約30cm長い。長軸方向N－121°－E、面積25.7m²、壁高5～21(北側)cm。周溝は認められない。　**床面**　中央部を除く四壁下に、幅80～120cm、厚さ12cmの黒色土の貼床が確認された。貼床の施されていない中央部南側で２カ所に固く踏みしめられた箇所があった。　**ピット**　住居中央南寄りで長円形のピットが認められた。深さ12cm。　**炉**　住居中央北寄りの貼床のない箇所に地床炉が認められた。表面は赤橙色に固く焼けていた。　**貯蔵穴**　南西隅。隅丸長方形を意図したものと思われる。規模104×90cm、深さ38cmである。　**遺物**　北東隅付近（1他）では床面から５～11cm浮いて、西壁沿いでは小片が床面（推定）で数カ所に、貯蔵穴内のもの（2～4）は底部から10cmの所で出土した。　（唐澤）

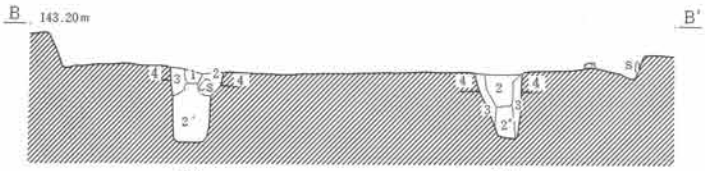


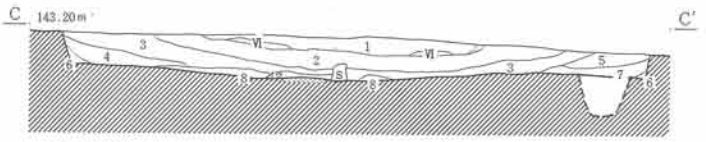
図－244　H424号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　壺（1・3・4）、1は有段の折り返し口縁。外面調整は折り返し部に斜または横のハケ目を残す粗い横ヘラ磨き、頸部斜ハケ目、肩部斜ヘラ磨き、内面は全面横ヘラ磨きを施す。肩部以下欠失。3・4は小型壺。3は短かい口縁部で、胴部最大径を中央に置く。調整は外面で口縁部横ナデ、胴部は上位から中位に横の、下位に斜のヘラ磨き、内面には口縁部横磨き、胴部上位に指頭痕を残す横指ナデ、それ以下は横ヘラナデを施す。4はやや口縁部が長く、胴部最大径を下位に置く。調整は口縁部上半と同内面に横ナデ、口縁部から胴部中位にかけての外面に縦ヘラナデ、それ以下に斜ヘラ磨き、胴部内面には横ヘラナデを施す。　甕（2）、S字状口縁甕。口縁部横ナデ。胴部外面のハケ目の刻みは深い。胴部内面には指ナデの後横ヘラナデ。　（唐澤）









住居跡全体
1．黒色土。
2．漆黒色土。
3．黒褐色土。
4．黒褐色土。ローム。
5．黒褐色土。
6．暗褐色土。比較的多量のローム。
7．黒褐色土。ローム。
8．暗褐色土。多量のローム

貯蔵穴
1．黒褐色土。
2．黒褐色土。ローム粒。
3．黒褐色土。ローム粒。

P3・P4
1．黒褐色土。ローム粒。
2．黒褐色土。ローム粒。
2'．2に比べやや黒味が強い。
2"．2に比べ比較的多量のローム。
3．黒褐色土。ロームブロック。
4．黒褐色土。ロームブロック・炭化物。(貼床)

0 1 m

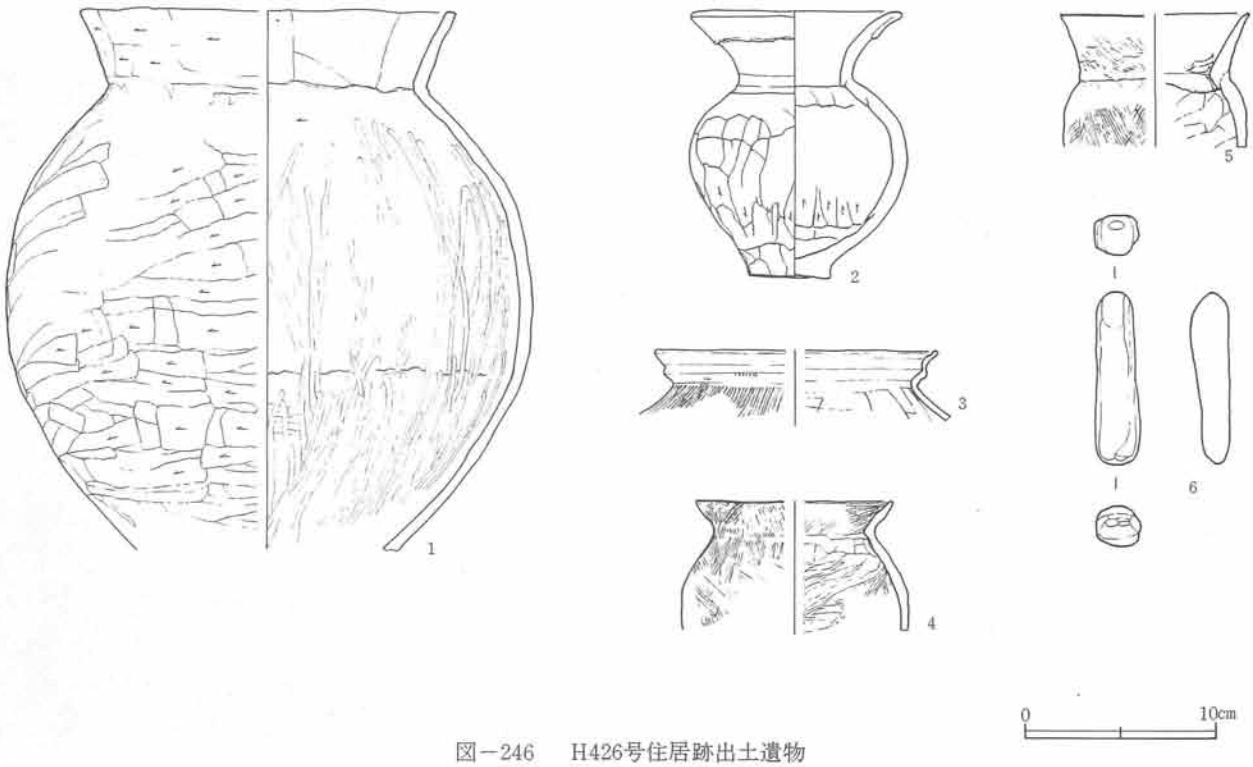
図－245　H426号住居跡

住居跡全景

貯蔵穴内円形偏平石出土状況

H426号住居跡（5 H－155）　**位置**　ラ107。この付近では、等高線の最も張り出した条件の良い所に位置する。　**形状**　南北6.1m、東西6.1mの隅丸正方形。四壁はいずれも外に膨らむ傾向を持つ。長軸方向N－5°－W、面積34.9m²、壁高18～38（北側）cm。南壁下東半を除き周溝をめぐらす。　**床面**　四壁下に厚さ20cmの黒色土の貼床を施す。P2東壁、P3・P4の壁には黒褐色土の貼床が認められる。これは住居中央部分を除き2種類の土で貼床を施したものと見られる。炉を囲むようにして西壁南側まで踏み固め部分が認められた。　**ピット**　柱穴（P1～P4）は住居対角線上に位置する。柱穴間の中心距離は東西方向P2～P3＝2.78m、P1～P4＝2.98m、南北方向P1～P2＝3.06m、P3～P4＝3.4mで、その配置は不整四角形となる。柱穴の深さは60～80cm、そこに建てられた柱径は地層断面から12～15cmと推定される。　**炉**　住居中央やや北西寄りの地床炉。　**貯蔵穴**　北東隅。底部は隅丸方形ぎみで、76×56cm、深さ73cm。　**遺物**　炉の周囲及び四壁寄りの床面から出土。北壁沿いのものは床面付近から、他は5～24cm浮く。住居内に散乱する偏平ぎみの焼石も同じ傾向。なお、貯蔵穴及びP4底部から楕円形偏平の転石出土。　**テフラ**　床面から最も近い所で22cmの所にF・A。

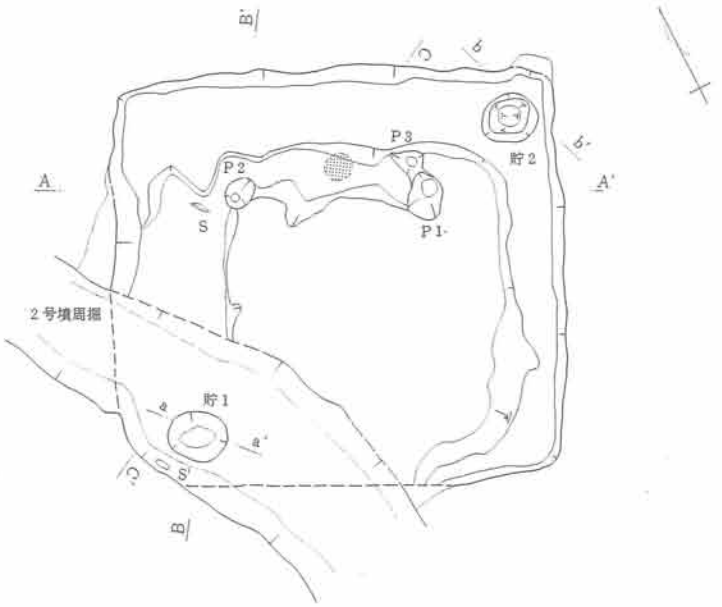
（唐澤）

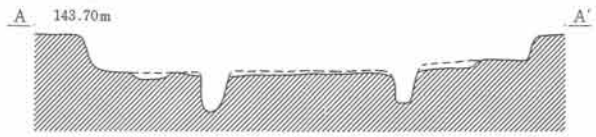


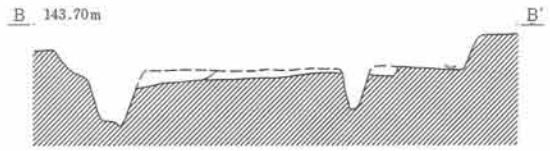
図－246　H426号住居跡出土遺物

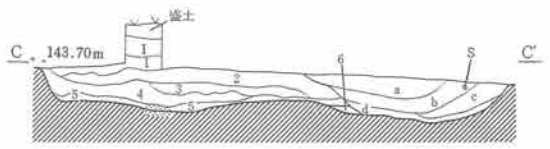
出土遺物　**土師器**　壺（1・2）、1はやや細長い球形の胴に、口径の大きく短かい口縁部がつく。調整は口縁部内外面に横ヘラナデ。胴部外面に横または斜ヘラナデ、同内面には粗い横ヘラナデ後粗い縦ヘラ磨きを施す。全体に調整は雑である。外面全体に煤が付着する。底部欠失。2は口縁部がラッパ状に大きく開く小型の壺で、口縁部は折り返し口縁になる。調整は口縁部内外面に横ナデ、胴部外面は全面に縦ヘラナデを施すが、上位はていねいに、中・下位は雑に仕上げる。胴部内面は下位に約1・5cmの幅で横ハケ目を巡らす所があるが、他は全面縦ヘラナデで雑に仕上げている。底部外面はヘラ削りである。胴部外面に黒斑を持つ。　甕（3～5）、3はS字状口縁甕で、肩部以下を欠失する。口縁部上半は長く延び、屈曲もややシャープさに欠ける。調整は口縁部内外面に横ナデ、胴部外面にハケ目、同内面に横ヘラナデを施す。ハケ目は深い刻みを持つ。焼成は良好である。4はやや細長い胴部に内彎気味の口縁部を持つ甕で、胴部下半を欠失する。外面調整は全面ハケ目だが、口縁部から胴部上位には縦、胴部中位には斜のハケ目を施す。また、口縁部には2次的な斜ハケ目も加える。内面は口縁部で横ハケ目を残す横ヘラ磨き、胴部で斜ヘラナデ痕を残す斜ヘラ磨きを施す。外面全体に煤が付着する。5は細長い胴部に、大きく開く口縁部を持つ小型の甕で、胴部中位以下を欠失する。口縁部と胴部最大径はほぼ一致する。口縁部先端は尖る。調整は口縁部にハケ目痕を残す横ナデ、胴部外面は斜ハケ目で、肩部のみ横ヘラナデで消す。胴部内面はヘラナデ後斜ヘラミガキを加える。1～5の壺及び甕の色調はいづれも淡褐色で、胎土中に雲母を含む。　石製品（6）、表面は全面に磨滅が見られる。黒灰色の安山岩。　（唐澤）

H426号住居跡出土遺物



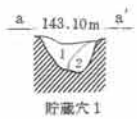






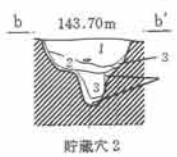
住居跡全体
1．黒色土。
2．黒色土。
3．漆黒色土。二ツ岳系の軽石なし。
4．黒褐色土。ローム粒。
5．暗褐色土。ローム粒。
6．暗褐色土。多量のロームブロック。(貼床)

貯蔵穴1
1．黒茶褐色土。ローム・ロームブロック。
2．茶褐色土。ロームと黒色土の混土。



貯蔵穴1

貯蔵穴2
1．黒褐色土。ローム。
2．黒茶褐色土。ロームと黒色土の混土。
3．黒茶褐色土。ローム粒・ロームブロック。
4．褐色土。ローム粒主体。



貯蔵穴2

2号墳周掘
a．黒色土。
b．黒色土。ローム粒。
c．黒褐色土。ローム粒。
d．暗褐色土。ローム粒・ロームブロック。

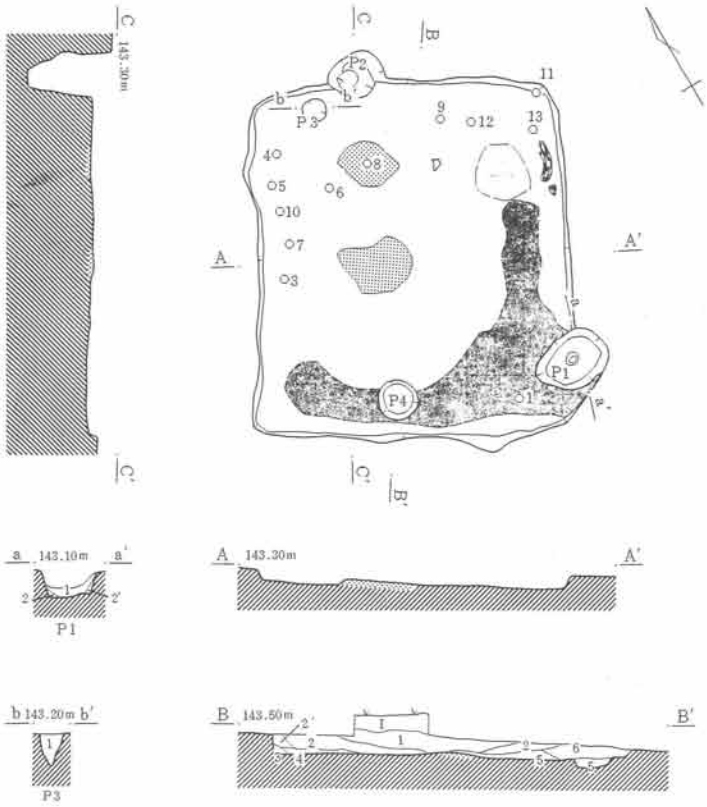
図－247　H427号住居跡

住居跡全景

北壁下中央付近高坏脚部出土状態

H427号住居跡（5 H－156）　**位置**　ラ106～107。東の谷地へ向かう傾斜面の頂端付近に位置する。　**形状**　南北4.2m、東西4.5mの隅丸長方形。西壁北端の下端は20cm程の張り出し状になっている。長軸方向N－86°－E、面積19.8m²。壁高は覆土の堆積状況から見て50cm以上はあったものと推定される。周溝は認められなかった。　**床面**　黒色の貼床が壁沿いに全周していたが、覆土と間違えて完掘してしまった。貼床は西側で壁に接して120cmと幅広くなっているが、他では壁から50～60cm内側の60cm前後の幅と狭くなっている。住居空間内の部分による機能の差を想定させる。床面は全体に軟らかかった。　**ピット**　北壁側に、壁と平行に2個のピットが認められた。深さは20～22cmとやや浅いが、柱穴と考えられる。ピット間の中心距離は207cmである。南の対応する箇所では認められなかった。　**炉**　P1・P2を結ぶ線上の中央やや北寄りに円形（推定）の地床炉が認められた。　**貯蔵穴**　北東隅及び南西隅の2カ所で認められた。前者は長方形で、60×50cm、深さ86cmで2段に掘られている。後者は長円形で64×52cm、深さ46cmである。　**遺物**　床面直上で、脚部が円筒形に細長い高坏等が出土したが、粉失。　**重複関係**　2号墳と切り合う。古墳が新らしい。　（唐澤）

H428号住居跡



住居跡全体
1．漆黒色土。（F・A降下前）
2．黒褐色土。
2'．2に比べ軽石が少い。
3．黒褐色土。ローム粒主体。
4．黒褐色土。ローム粒。
5．黒褐色土。多量のローム粒。
6．黒褐色土。ローム粒。

P1
1．漆黒土。
2．暗褐色土。ローム粒。

P3
1．黒色土。ローム粒。

0 1 m

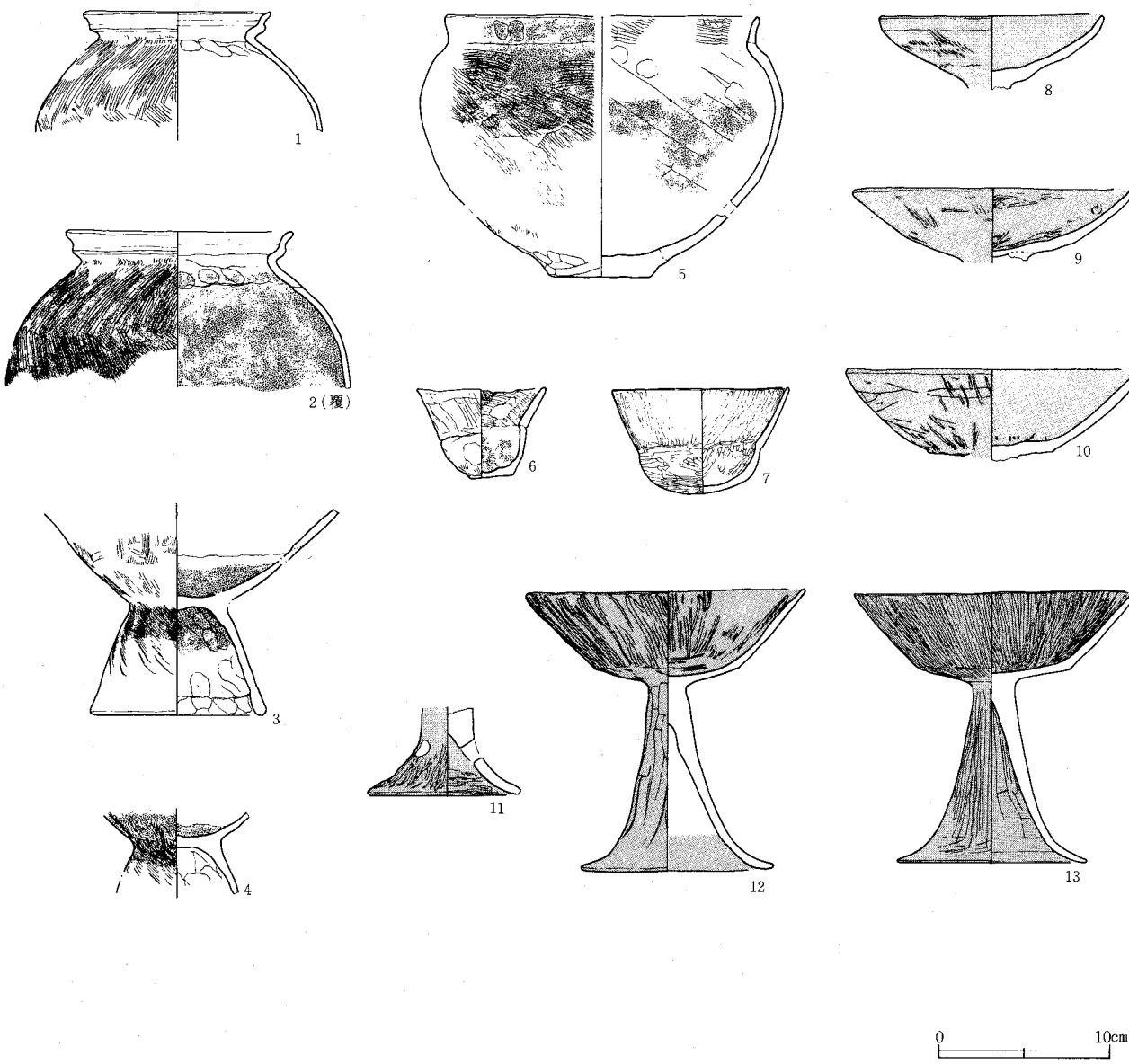
図－248　H428号住居跡

住居跡全景

遺物8出土状況

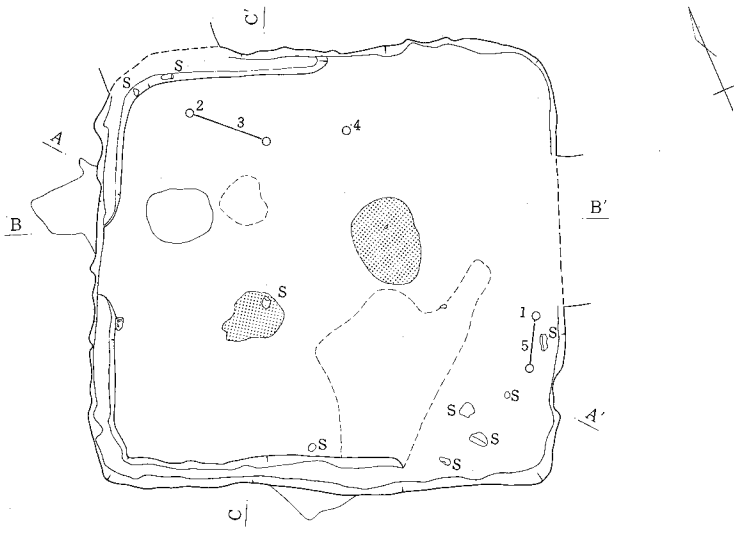
遺物7出土状況

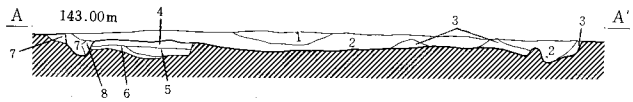
H428号住居跡（5H－157）　**位置**　H427号住居跡の西3.5mの、ム107に所在する。本住居跡のある台地と東の谷地との境は崖となっており、そこに向かう緩傾斜面上に位置する。崖から西約10mである。　**形状**　南北3.7m、東西3.3mの隅丸長方形。北壁と東壁は外方に膨みを持つ。南壁は北壁に比べ東側が約20cm長い。長軸方向N－26°－E、面積12m²。壁高は検出面から測定すると11～24cmで北側が高いが、住居内覆土の堆積状況から見て本来は26cm以上あったものと推定される。　**床面**　床面の平面観察によると、南壁から東壁沿いに貼床黒色土が認められた。しかし、北東隅の踏み固められた部分も黒色土となっており、この部分まで貼床が認められる。　**ピット・貯蔵穴**　東壁南端（P1）、北壁西寄り（P2・P3）、南壁中央付近（P4）の計4個のピットが存在する。このうちP1、P2は一部壁の外に出ている。P1は2段に掘られており、底部上段の深さ29cm、同下段の深さ49cmである。P2は深さ70cmである。両者は貯蔵穴とも見られる。P3はP2の西に位置する。深さ38cmで覆土中に二ツ岳系の軽石を含むので、住居廃棄後のものと見られる。P4は深さ13cmで性格は不明である。　**炉**　住居中央北西寄りに南北に並んで、2ヶ所に床面の焼土化した所が認められた。いづれも形は不整形で東西に長く、地床炉と見られる。北側のものは表面が赤橙色に固く焼けていたが、南側のものは焼けがやや弱く表面もやわらかい。後者は床面から4cm程盛り上がっていた。2つの炉は、ある時期に炉が移動したことを物語っているとも考えられる。　**遺物**　住居跡の北半に、炉を挟んで東と西の両側にまとまって出土した。東側では高坏のみ4点（9•11～13）が出土した。西側では台付甕（3、.4）、平底甕（5）、高坏（10）、手捏状小型小器（6）などが出土した。また、北側の炉上からは高坏（8）が、南壁沿い西寄りの地点及び覆土中からは台付甕（1•2）が出土した。これらはいづれも床面から2～16cm浮いて出土したが、比較的まとまりのある器種構成を示す。北側炉の東から焼石（床面から＋13cm）が、東壁沿い北寄りの所からは炭化材が出土した　（唐澤）



図－249　H428号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕(1～5)、1～4は台付甕、5は平底甕である。1はS字状口縁甕でやや小型。口縁部内外面横ナデ、胴部外面2段の斜ハケ目、同内面に指押えと指ナデ（縦）後軽い横ヘラナデ。胴下半部欠失。2もS字状口縁甕で、口縁部上半がやや長く延びる。調整は胴部内面に第2次調整のヘラナデが施されないだけで、他は1とまったく同じである。胴下半部欠失。3は胴上半部を欠失する甕で、台部下端を内に折り返す。胴部外面には細かい斜ハケ目を浅く施し、所々に横・斜ヘラナデまたはヘラ削りが見られる。同内面は横・斜ヘラナデ、底部付近のみ放射状の縦ヘラナデを施す。台部外面は斜ハケ目を指ですり消す。同内面は縦方向の指ナデで、縦に仕上げる。4は胴部と台部の接合部分。調整は3と同じである。5は直立ぎみの短口縁の甕で、浅めな器高とやや張りの大きい肩を持つ。口縁部は外面指押え、内面横ハケ目、胴部外面は上位（肩部）横ハケ目、中位斜ハケ目、下位斜ヘラナデ、同内面は斜ヘラナデで底部周辺に横ハケ目、低部側面と同外面はヘラ削りである。2～5の外面に煤、内面には黒色炭化物が薄く見られる。　小型坩（7)、口径が胴部径・器高より大きい。調整は外面で口縁部に斜ヘラ磨き、胴部に横ヘラ磨き、内面は全面に斜ヘラ磨きを施す。ていねいなつくりで、全面に光沢を持つ。　高坏(8～13)、いづれにも赤彩を施す。8は最も法量の小さいもので、口縁部が立ち上がり気味になる。口縁部内外面横ナデ、体部内外面にていねな指ナデ（?）を施す。体部外面の粘土紐接合部には斜ハケ目が残る。坏部内面に黒斑を見る。脚部欠失。9は口径に比べ浅い坏部を持つ高坏で、内外全面に放射状のヘラ磨きを施す。堅緻な焼成である。脚部欠失。10は坏部の底部と体部の境に屈曲の認められる高坏で、口唇部外面にヘラを当てて先を尖らす。外面調整は横ヘラナデ後に縦ヘラ磨き、内面は体部縦ヘラミガキ、底部同心円状（?）ヘラミガキを施す。脚部欠失。内面は著しい剝落。11は筒状の柱部を持つ高坏で、均等に3つの円窓を穿つ。外面縦ヘラ磨き、内面横ヘラナデ。12・13は坏部外面に稜線（屈曲部）を持つ高坏で、長い脚部は裾広がりに開く。坏部全面と脚部外面に縦ヘラ磨きを施す。脚部内面は縦指ナデで、絞り目が認められる。8～11は内外全面に光沢がある。　手捏状小型土器（6)、小型坩に近い形状。口縁部外面斜ハケ目、胴部外面と口縁内面斜ハケ目の後指押え、胴部内面横指ナデ。　（唐澤）



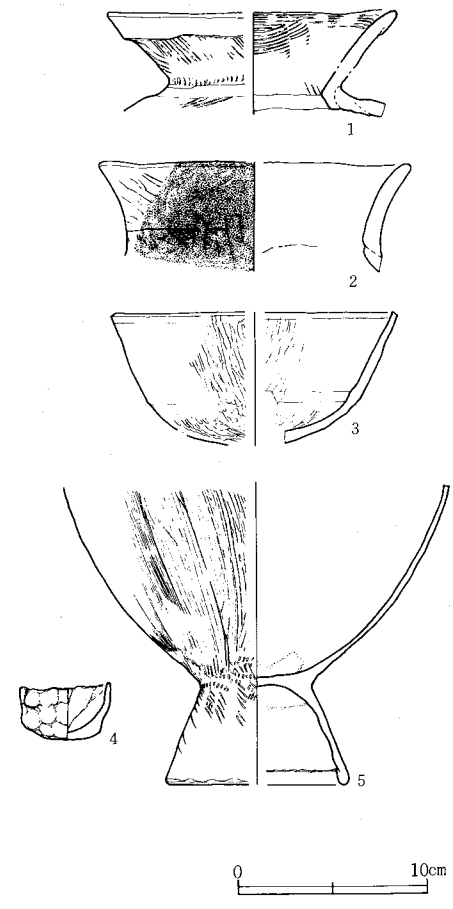


1．黒褐色土。
2．黒褐色土。ローム粒。
3．黒褐色土。ローム粒。
4．暗褐色土。ローム粒・ロームブロック。(貼床)
5．黒褐色土。ローム粒。(貼床)
6．暗褐色土。やや多量のローム粒。(貼床)
7．黒褐色土。
8．暗褐色土。ローム粒。

0　1 m

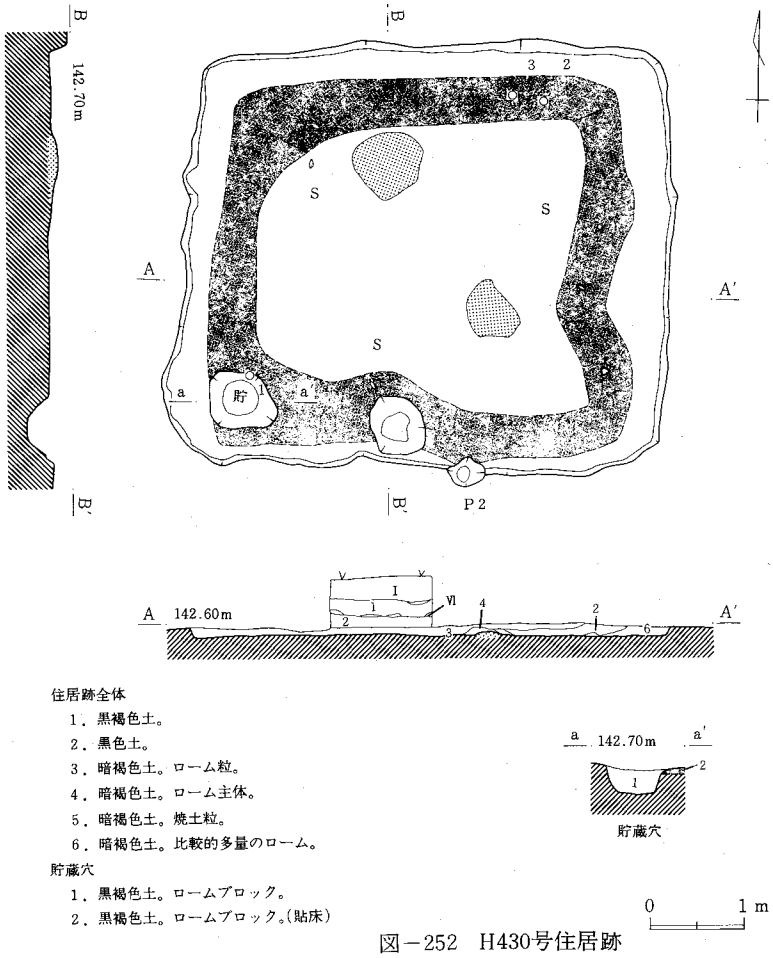
図－250　H429号住居跡

H429号住居跡（5 H－158）　**位置**　ラ107～ム107。東側谷地の崖に向かう緩傾斜面上に位置する。南に接してH430号住居跡がある。北側で2号墳と切り合う。　**形状**　南北4.6m、東西5.8mの隅丸方形。北壁と西壁はほぼ直線をなすが、南壁及び東壁は外方に膨らむ傾向を持つ。南壁は北壁に比べ西側が約30cm長い。長軸方向N－84°－E、面積21.8m²、壁高6～20cmで北側が高い。周溝は東壁を除く他の壁下の全体または一部に存在する。　**床面**　東側の炉から南壁下まで固く踏みしめられた部分が認められた。南壁に接する部分は出入口と推測される。住居中央部分を除き厚さ18cmの貼床が施されている。幅不明。　**炉**　住居中央付近で2カ所に地床炉が認められた。いずれも赤橙色に固く焼けた表面をしており、周囲床面より1～3cm盛り上がっていた。　**遺物**　炉から北壁寄り及び南東隅にややまとまって出土した。前者からは甕（2）、椀（3）、手捏状小型土器（4）、後者からは壺（1）、台付甕（5）、平底甕等が出土した。いずれも床面から3～10cm浮いていた。なお、南東隅にまとまって、他でも壁下や炉上で大小の石塊が出土しているが、これらの出土状況は遺物とほぼ同じである。　**重複関係**　2号墳と切り合う。古墳が新しい。　（唐澤）



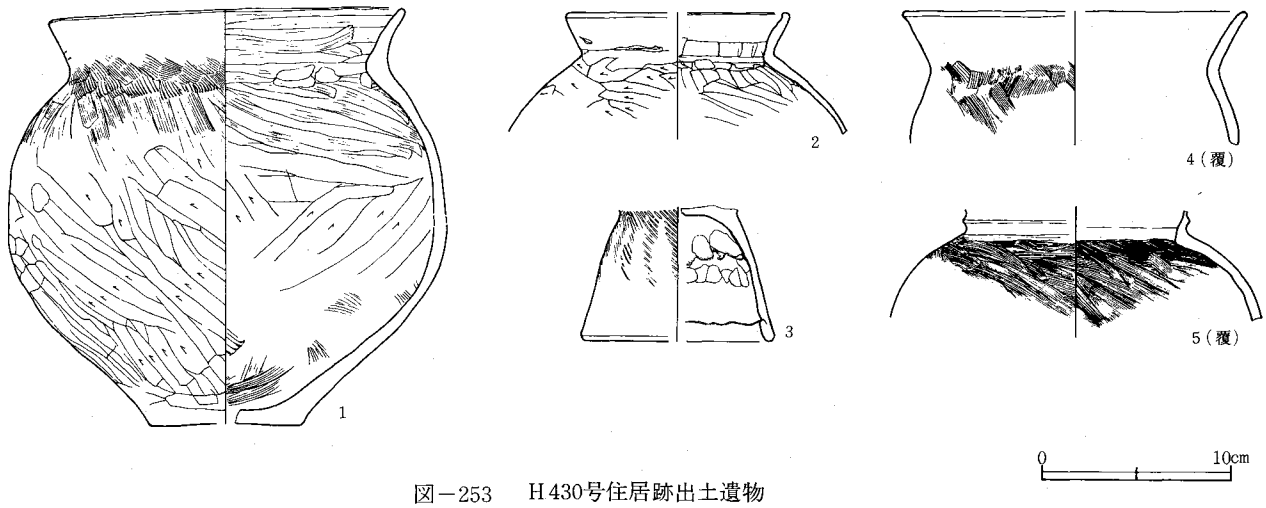
図－251　H429号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　壺（1）、幅の狭い折り返し口縁を持つ。肩部以下欠失。第1次調整として胴部内面を除く全面にハケ目を施し、第2次調整として口縁部内外面に横ナデ、胴部外面にヘラナデ(？)を施す。　甕（2・5）、2はしまりのない口縁部を持つ。口縁部のみ残存。外面に斜ヘラナデ後、口縁部には横の、頸部は縦のヘラナデ、口縁部内面は横ヘラナデを施す。5は台付甕。胴部上半欠失。胴部外面に刻みの浅いハケ目、同内面に斜ヘラナデ、台部は外面上半に斜ハケ目の指によるすり消し、同下半指ナデ、内面横指ナデを施す。　椀（3）、丸底のやや深目の椀。口縁部先端は平坦に仕上げる。接合部に段差がある。内外全面ヘラ磨き。手捏状小型土器（4）、内外面に顕著な指頭痕を残す雑なつくり。内面は斜指ナデを施す。　（唐澤）



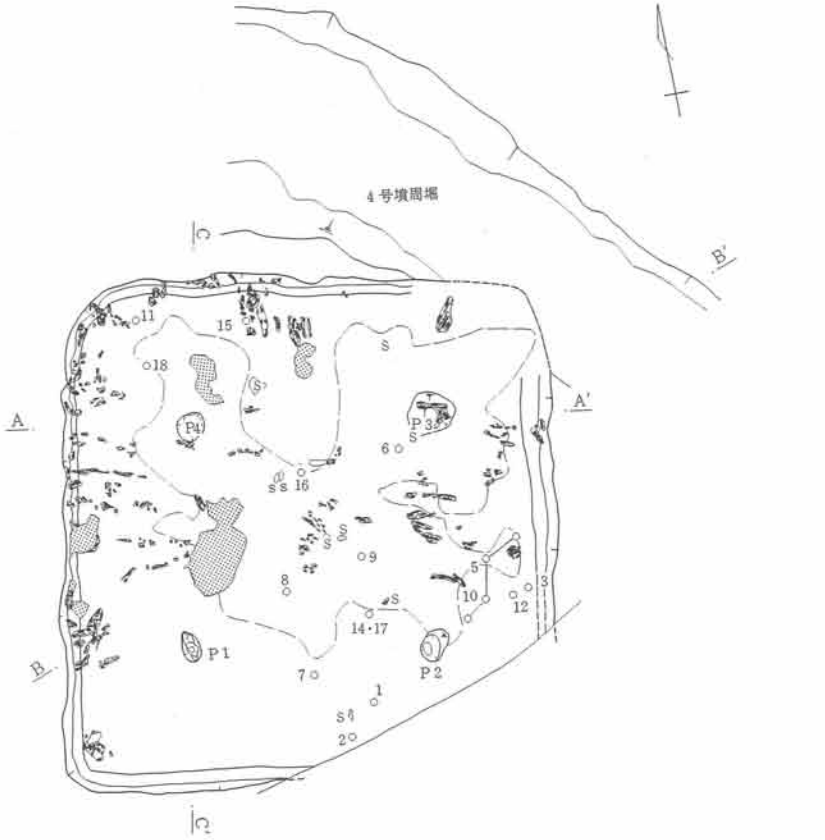
図－252　H430号住居跡

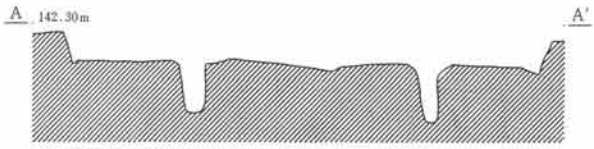
H430号住居跡（5 H－159）　**位置**　H429住居跡の南約50cmのラ107～108、ム107～108にまたがって所在する。　**形状**　南北4.4m、東西5.1mの隅丸台形。北壁と東壁は外方に膨らみ、南壁の西端部分から南西隅にかけて弱い張り出しを持つ。西壁の斜行により、南壁は北壁に比べ西側が約45cm長い。長軸方向N－88°－E、面積21.5m²、壁高6～18cmで北東側が高い。周溝は認められなかった。　**床面**　住居中央部を除き幅50cm前後、深さ7cmの黒色土貼床が全周する。床面は全体に軟らかい。　**ピット**　南壁中央部に大小2つのピット（P1・P2）が検出された。P1は深さ30cmで、位置から考えて出入口施設に関連するピットと見られる。P2は深さ20cmで性格不明である。　**炉**　住居中央北寄り及び同西寄りの2つの地床炉が認められた。いずれも周囲の床面より4～6cm盛り上がっていた。　**貯蔵穴**　南西隅。上端は隅丸正方形、下端は円形を意図したものと見られる。72×60cm、深さ27cm。　**遺物**　壺と甕が出土した。1は貯蔵穴になだれ込むように、2・3は床面から0～17cm浮いて、4・5は覆土中からのものである。また南側炉の東の焼石は床面ないし同直上で、炉との関連が考えられる。　**テフラ**　覆土中にF・Aがブロック状に層をなして認められた。　（唐澤）

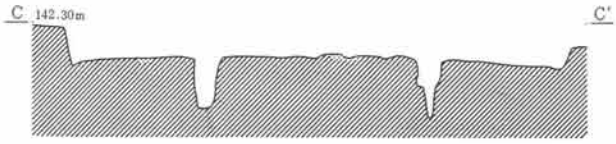


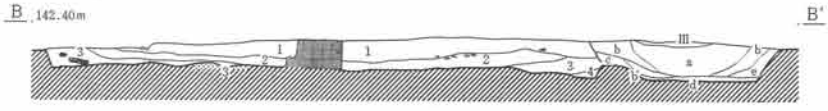
図－253　H430号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1・3～5）、1は球形の胴部に口径の大きい口縁部がつく。口縁部は内外面横ナデ、頸部外面に浅い斜ハケ目、胴部外面はヘラ削りで中位以下にはやや深い削りを施す。胴部内面は斜ヘラナデで、下位にハケ目を残す。底部外面はハケ目である。3は台付甕の台部で、接地部分内側に折り返しを持つ。調整は外面上半で斜ハケ目を指頭によるすり消し、下半指ナデ、内面天井部は指押え、側面に指頭痕を残す横指ナデを施す。形態的には他に比べ下方の開きが少ない。4は細長い胴部を持ち、胴部最大径と口径がほぼ等しい。頸部のしまりも弱い。調整は口縁部内外面横ナデ、肩部外面斜ハケ目、同内面に横ヘラナデを施す。外面には煤が付着する。胴部中位以下を欠失する。5はS字状口縁を持つ甕で、口縁部先端と胴部中位以下を欠失する。肩の張りの度合が大きい。調整は口縁部内外面横ナデ、肩部内外面に非常に細かい斜ハケ目を施す。肩部内面には縦ハケ目も若干見られる。堅緻な焼成で、厚い器壁を持つ。甕類はいづれも胎土中に雲母を含み、色調は淡褐色を呈す。　壺（2）、球形の胴部に短かい口縁部を持つ。調整は口縁部内外面横ナデで、頸部内面に横ヘラナデ、胴部外面斜ヘラ削り、同内面に縦ハケ目・指ナデを残す斜ナデ。色調は淡灰褐色で堅緻な焼成。胎土中に雲母を含む。胴部中位以下欠失。　（唐澤）









431号住居跡
1．黒褐色土。二ツ岳系軽石なし。
2．黒褐色土。やや黒色味強。炭化物。
3．黒褐色土。ローム粒・炭化物。
4．暗褐色土。比較的多量のローム粒。

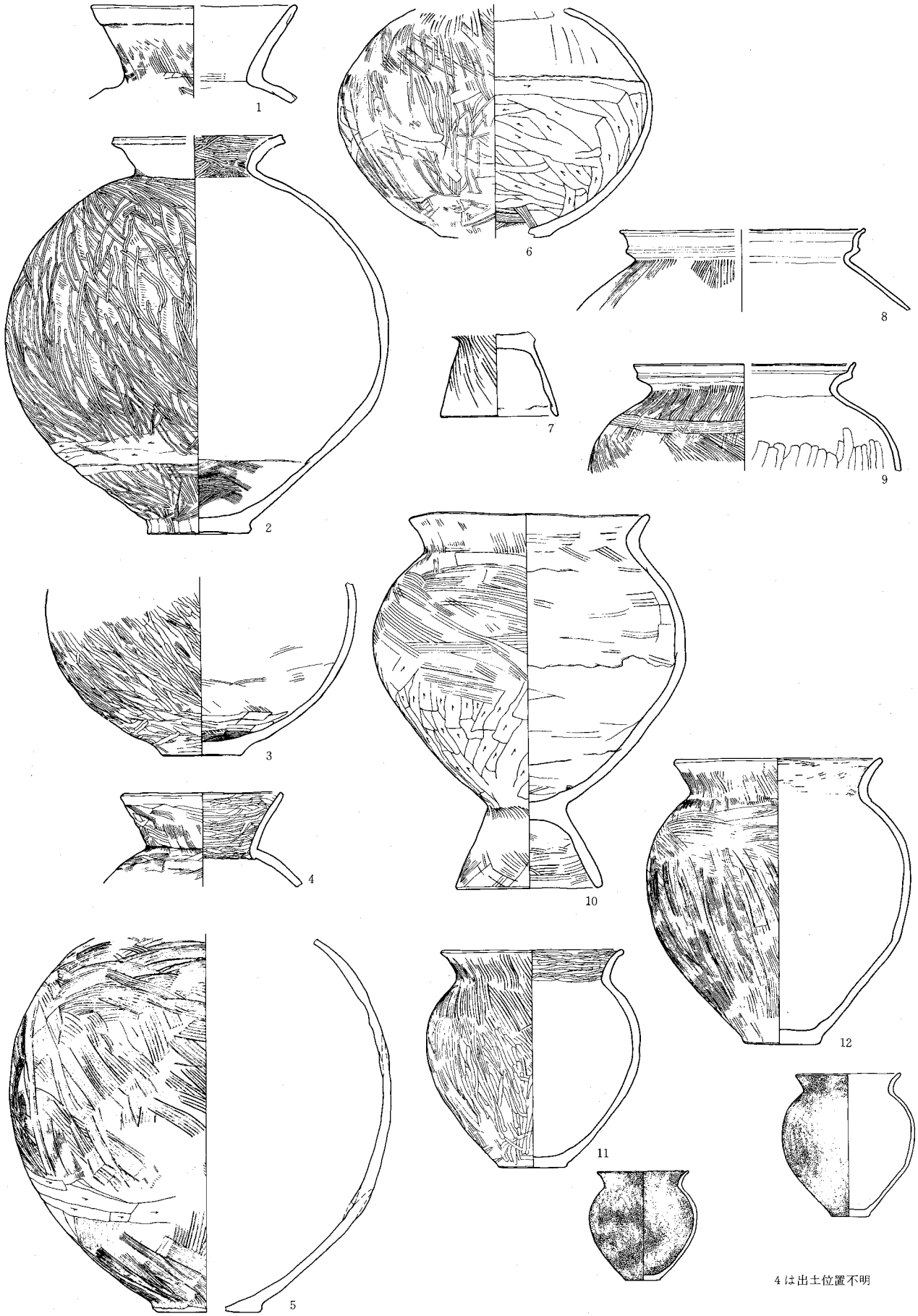
4号墳
a．黒色土。
b．黒褐色土。ローム粒。
b'．ややローム粒が多い。
c．黒褐色土。ロームブロック。
d．暗褐色土。多量のローム粒。
e．暗褐色土。比較的多量のローム粒。

0　1 m

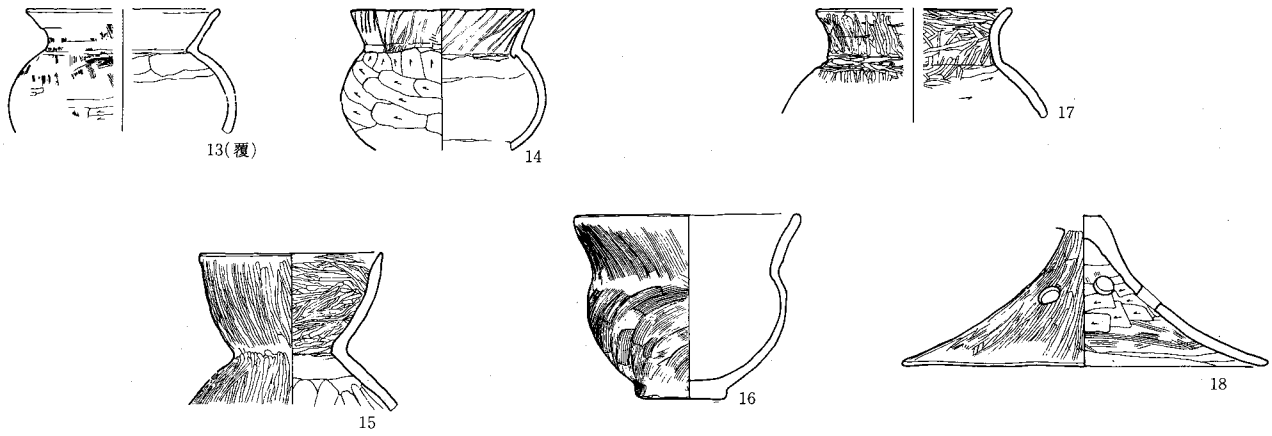
図－254　H431号住居跡

遺物出土状況全景

H431号住居跡（5H－160）　**位置**　4号墳と北東隅を切り合って、周堀内側のラ108～ム108にかけて所在する。**形状**　南北5.2m、東西5.1mの隅丸方形と推定される。北東隅は古墳に切られ、南東隅は生活道路にかかるため未調査である。長軸方向N－17°－E、面積25.9㎡（推定）。壁高は地層断面（付図1参照）によると最高60cmを測る。幅6～19cmの周溝をめぐらす。　**床面**　一部に貼床らしき黒色土が認められたが、床面下は未調査のため明確にできなかった。P1～P4を結ぶ住居中央部を中心に、固く踏みしめられた所が認められた。これは南壁際まで延びており、ここに出入口が想定される。**ピット**　柱穴（P1～P4）が住居対角線上に、コーナーから160cm前後内に入った所に認められた。柱穴径は上端で本来は25cm前後と見られ、深さは54～66cmであった。P1は2段に掘られており、深さ30cmの所で径12cm前後と細くなっている。　**炉**　住居中央西寄りの、大きめな不整形の焼土が炉跡と推定される。西壁側に入口を想定すると、正面の奥に炉があったことになる。地床炉で東西に細長い。　**遺物**　北東隅の遺物群（11、18）と東壁中央西寄りの遺物群（3、5、10、12）を除くものは、底面から10cm前後浮いていた。住居内に散乱する石も、同様な傾向を示す。東壁中央西寄りの遺物群は、当初からの位置を保っており、住居の機能空間を考える上で興味深い。　**その他**　本住居跡は焼失したものであり、西壁を中心に、住居内に向かって倒れた炭化材が出土した。南壁ぞいでは、他の壁に比べて、踏み固められていない部分が広く認められ、上記の遺物同様、住居の機能空間を考える上での好資料である。　**重複関係**　4号墳と切り合うが、本住居跡が旧い。（唐澤）

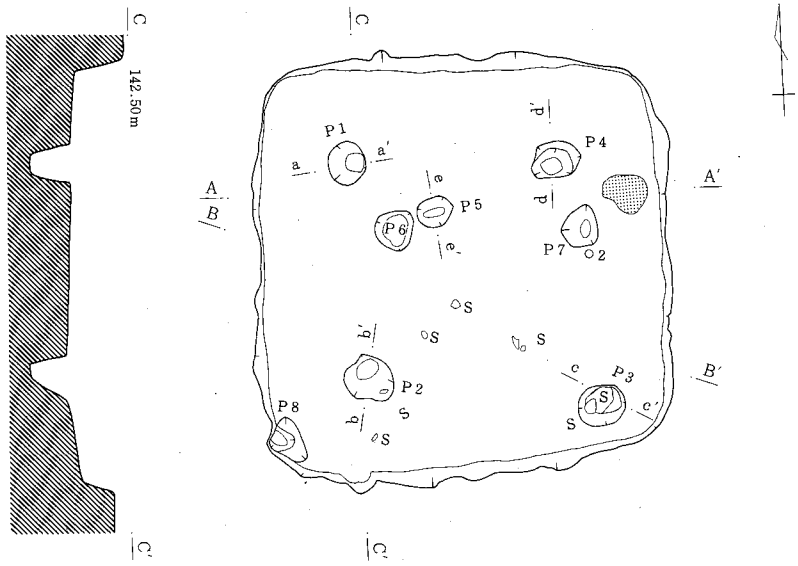


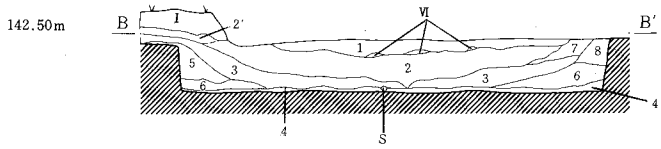
図－255　H431号住居跡出土遺物(1)

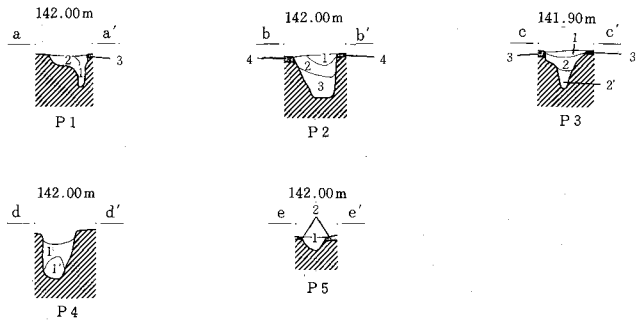


図－256　H431号住居跡出土遺物(2)

出土遺物　**土師器**　壺（1～6・13～17)、1は折り返し口縁で、肩部以下を欠失する。口縁部は斜ハケ目の後、外面上半と内面に横ナデ、肩部は外面に横及び斜のヘラ磨き、内面に同方向の指ナデを施す。折り返しの取り付けは雑である。色調は淡褐色で、胎土中に雲母を含む。外面に光沢を持つ。2は大きな球形の胴部に小さめな口縁を付ける。口縁部は短かく外反し、端部にヘラを当て平坦に仕上げる。口縁部外面横ナデ、同内面横ヘラ磨き。胴部外面は斜のハケ目を残すヘラ磨きで、中位以下はていねいに施す。器接合箇所は横のヘラ磨きを施す。色調は白味がかった淡褐色。外面に光沢を持つ。3は胴部中位以上を欠失するが、6同様の扁平気味の体部を持つものを考えられる。外面はハケ目を残す斜のヘラ磨きをていねいに施す。内面は横のヘラナデで、底部との境付近に横ハケ目を残す。底部外面はヘラ削り後ヘラ磨き。色調は褐色で、外面に光沢を持つ。4は肩部以下を欠失する。外面はハケ目を残存して粗い横ヘラミガキ、内面は口縁部で横ヘラ磨き、肩部には横ヘラナデを施す。淡褐色で、胎土中に雲母を含む。つくりはていねい。外面に2次的に火を受ける。5はやや細長い球形の胴部を持つ甕で、口縁部と底部中央を欠失する。外面は上位で横、中位以下で斜のハケ目を残すが、所々に斜ヘラナデを加える。下位の接合箇所ではヘラ削りを施す。内面は全面斜の浅いハケ目である。底部外面ヘラ削り。色調は淡褐色で、内面は灰色に近い。6は扁平な球形胴を持つが、口縁部と底部中央を欠失する。外面は上位に目の細かいハケ目、下位に目の粗いハケ目またはヘラ削りの後に、全面に縦ヘラ磨きを施す。内面は胴部と底部境付近にハケ目、上位に指頭痕を残すが、大部分はヘラナデである。底部ヘラ削り。色調は淡褐色で、外面に光沢を帯びる。17は口縁部に立ち上がり部分を持つ壺で、先端は短かく外反する。口縁部は内外面ともヘラ磨きで、外面立ち上がり部には指頭痕、他には横ナデ痕を残す。色調は淡褐色、胎土中に雲母を含む。外面に光沢を帯びる。13・14は小型壺で、扁平な球形胴を持つ。口縁部は直線的に短かく延びる。13の調整手法は外面で、口縁部上半を指によるナデ、同下半から胴部上位は非常に細かいハケ目、中位以下はヘラナデでハケ目を消す。内面は口縁部から胴部上位まで指ナデ、それ以下は横ヘラナデを施す。14は外面で、口縁部縦ハケ目の後粗い縦のヘラ磨き、胴部ヘラ削り、内面は口縁部で横ハケ目の後斜ヘラ磨きを施す。両者はいづれも淡褐色で、胎土中に多量の雲母を含む。13は内外全面に丹彩を施す。15は口縁が内彎する長頸壺で、胴部中位以下を欠失する。口縁部先端を尖らす。外面は全面に縦のヘラ磨きをていねいに行なう。内面は口縁部で横または斜のヘラ磨き、胴部で指ナデを施す。色調は淡褐色で、光沢を帯びる。甕（7～12)、7は台付甕の台部のみ残存する。端部は内側に折り返す。調整は内外面全体にていねいな指ナデを施す。外面はその後縦帯状にハケ目を入れる。台部上面には指押痕が残る。色調は黒色。ていねいなつくり。8はS字状口縁甕で胴部中位以下を欠失する。口縁部内外面横ナデ、胴部外面ハケ目。胴部内面はヘラナデか。色調は褐色。9は8と同じS字状口縁甕で、胴部外面に帯状の横ハケ目を持つ。口縁部内外面横ナデ、外面の稜はシャープである。胴部外面は2段の斜ハケ目で、最後に横ハケ目を施す。同内面は上位で指押え、以下縦ヘラナデ。ハケ目の刻みは深い。色調は淡褐色(肩部黒色)。10は単口縁の台付甕で、台端部の折り返しを見ない。口縁部はハケ目を残す横ナデ、胴部外面は上半にハケ目、下半にヘラ削り、胴部内面はハケ目を残す横ヘラナデを施す。台部外面は斜ハケ目の指頭によるすり消し、内面は横ハケ目、天井部は指ナデを施す。内外面のハケ目は非常に浅い。色調淡褐色。胎土中に雲母。11・12は単口縁の平底甕である。11の外面調整は口縁端部横ナデ、そこから胴部上位まで縦のハケ目、胴部中位以下は縦ヘラ磨きを施す。内面調整は口縁部に横の胴部に斜のヘラ磨きを施す。底部外面もヘラ磨きである。色調は淡褐色で、頸部に厚い煤付着。12は外面調整に口縁部上半横ナデ、下半から胴部全般に縦または横ハケ目、内面は口縁部にハケ目を残す横ヘラ磨き、胴部内面にていねいな横ヘラナデを施す。ハケ目の刻みは浅い。色調は暗褐色。16は小型甕。内面はヘラナデか。高坏(18)、裾が大きく広がる高坏で、上から見ると正三角形状に並んだ6個の円窓を穿つ。外面は縦ハケ目を若干残す縦ヘラ磨き、内面は端部に横ナデ、その上に横ハケ目、円窓付近に横ヘラナデ。色調淡褐色。　（唐澤）







住居跡全体
1．黒褐色土。
2．漆黒色土。
2′．2と3の中間の色調。
3．黒褐色土。
4．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
5．黒褐色土。ロームブロック。
6．黒褐色土。ローム粒。
7．黒褐色。
8．暗褐色土。やや多量のローム。

P1
1．暗褐色土。多量のローム。
2．暗褐色土。多量のロームブロック。
3．暗褐色土。ローム粒・ロームブロック。(貼床)

P2
1．黒褐色土。ローム粒・ロームブロック。
2．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
3．暗褐色土。やや多量のロームブロック。
4．暗褐色土。ローム粒・ロームブロック。(貼床)

P3
1．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
2．暗褐色土。多量のローム粒。
2′．2よりやや黒色味が強い。
3．暗褐色土。ローム粒・ロームブロック。(貼床)

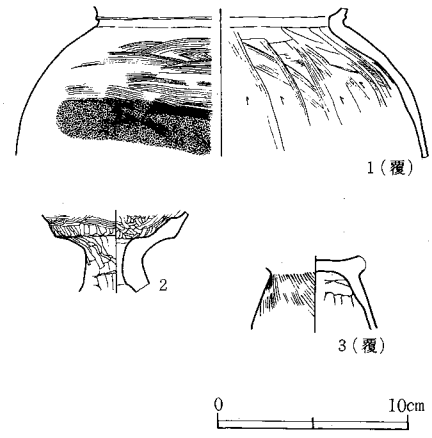
P4
1．黒褐色土。ローム粒。
1′．1より若干黒色味強。

P5
1．黒褐色土。ローム粒。
2．暗褐色土。ローム・炭化物。(貼床)

0　1 m

図－257　H432号住居跡

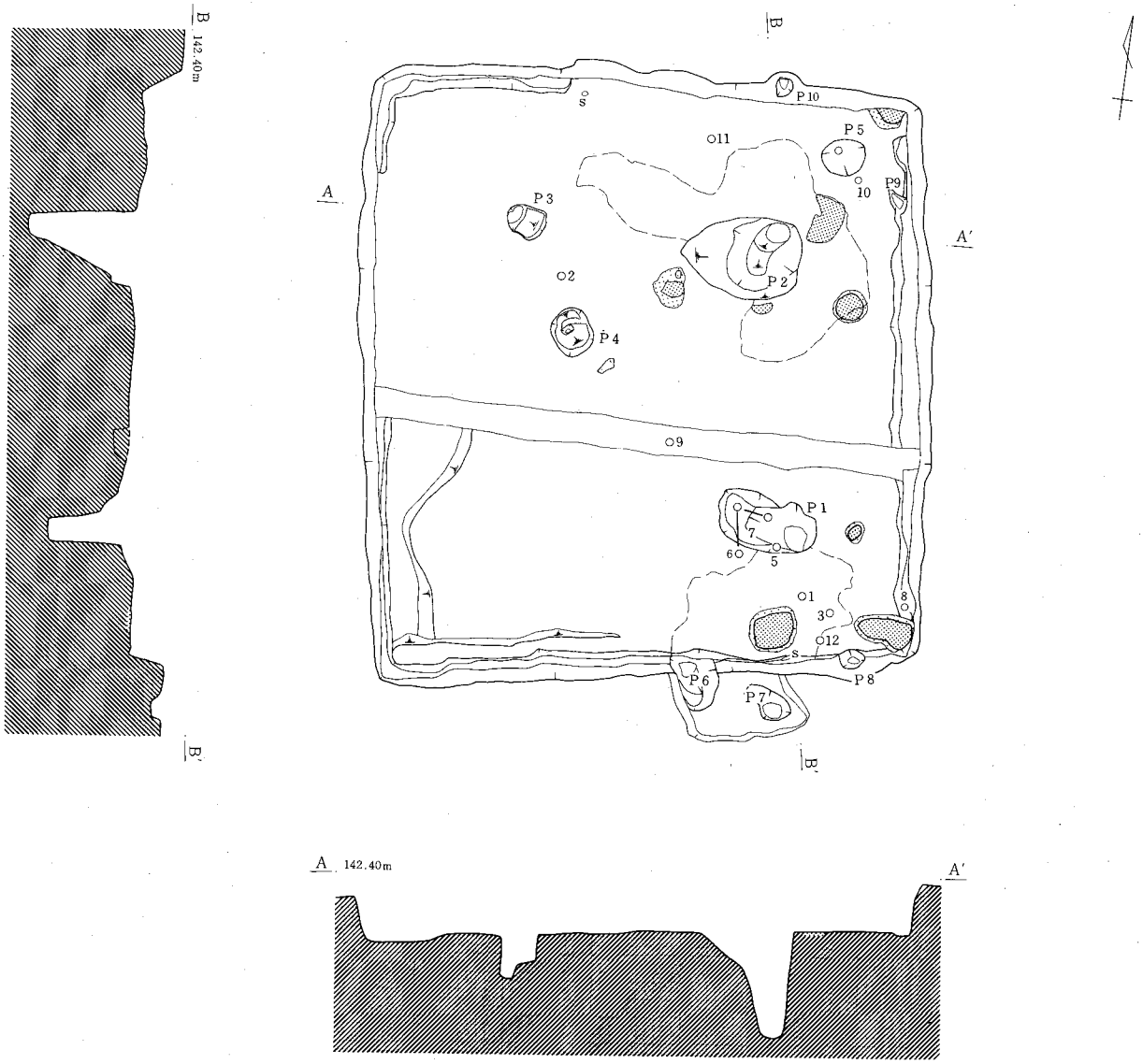
H432号住居跡（5H－161）　**位置**　ナ108に所在する。　**形状**　東西・南北4.2mの隅丸台形。南壁が斜行し、西壁は東壁に比べ南側が約30cm長い。北壁はやや内側に反るが、他は若干外に膨む傾向がある。長軸方向（南北で測定）N－2°－E、面積17.2㎡、壁高は50～69cmで北側がやや深い。周溝は認められなかった。　**床面**　ピット壁面の観察によると6cm前後の貼床が認められるが、平面観察でははっきりしなかった。また、特に固く踏みしめられた所もなかったが、全体に一定のしまりを持っていた。　**ピット**　柱穴（P1～P4）の他に4つのピット（P5～P8）が認められた。柱穴間の中心距離は、東西方向P1～P4＝207cm、P2～P3＝254cm、南北方向P1～P2＝217cm、P3～P4＝254cmである。柱穴の配列は、P3が南東隅に片寄っているため、不整方形となる。P5～P8は深さが6～14cmで、性格は不明である。　**炉**　P4、P7の東側の東壁寄りに焼土のブロックが認められたが、床面から浮いており、炉とは認めがたい。　**遺物**　床面から24cm浮いて器台（2）、覆土中から甕（1、3）が出土している。住居内に散乱する小石は、ほぼ床面上にのっている。また、P3上の大きな石（板石・転石）は、ほぼ床面と同レベルに乗っていた。　（唐澤）



図－258　H432号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1・3）、1はS字状口縁甕と見られるが、屈曲部の外面稜線は非常に弱くなっている。肩の張りが大きい。口縁部内外面横ナデ、胴部外面横ハケ目、同内面斜ハケ目。淡褐色で堅緻な焼成。3は台付甕の台部。外面はハケ目を指で縦にすり消す。内面は指押え。褐色。　器台（2）、坏と脚部の接合部のみ残存。坏外面に横、坏部下端から脚部に縦のヘラ磨き、脚部内面に横ヘラナデ。穿孔は筒状用具で行ない、両端の口径をヘラで広げる。褐色。　（唐澤）

H433号住居跡（図版39）

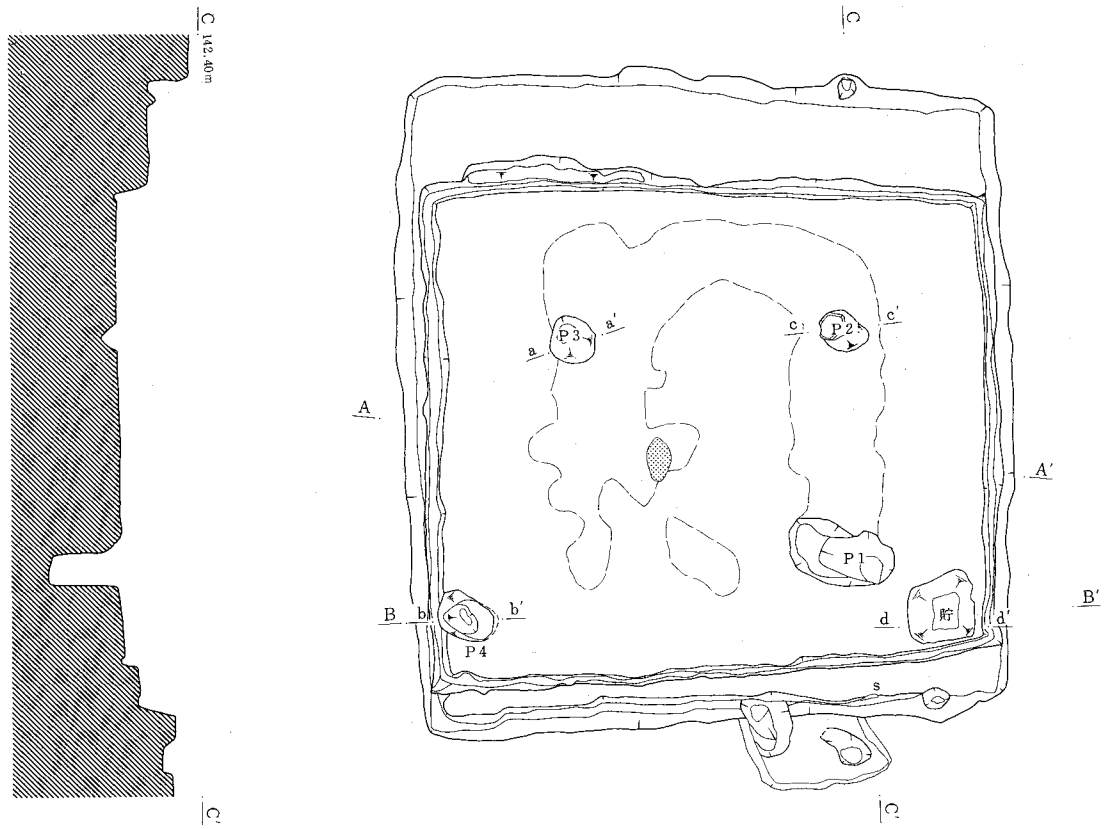


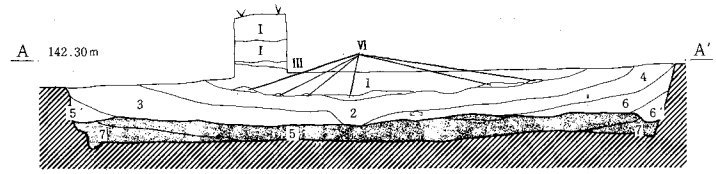
図－259　H433号住居跡（建替え後）

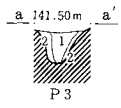
H433号住居跡（5H－162）　**位置**　3号墳と4号墳に挟まれたナ108に所在する。　**テフラ**　建替え住居床面から最少で24cm上にF・Aが、60cm上にB軽石が層を成して認められた。

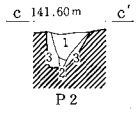
〈建替え前〉　形状　南北2.5m、東西6.2mの台形。東壁はやや外方に膨らむ傾向を持ち、西壁に比べ南北両側でそれぞれ30cm、計60cm短かい。長軸方向N－85°－E、面積30m²。壁高は覆土の堆積状況から見て85cm以上はあったものと見られる。四壁下に周溝が認められた。　**床面**　貯蔵穴北側壁面に貼床が認められた。中央部を除く四壁下に貼床が施されているものと見られる。柱穴をつないで方形に幅100cm前後の踏み固め部分が認められた。　**ピット**　4本の柱穴（P1～P4）が住居の対角線上に認められた。P1は建替え後の柱穴と重なっているものと見られる。P4は位置的に疑問があるが、他に該当するものはない。深さは35～78cmである。　**炉**　住居中央西寄りに南北に細長い地床炉が認められた。　**貯蔵穴**　南東隅。70×70cm、深さ71cm。　**遺物**　貯蔵穴と東壁の間から土師器甕または壺の小片が出土した。

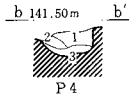
〈建替え後〉　形状　南北6.85m、東西5.9mの台形で、当初住居の南北壁側を拡張している。東壁は西壁に比べ南北両側でそれぞれ20～26cm短かく、当初住居に似た傾向を示す。長軸方向N－5°－W、面積38.8m²。壁高は覆土の堆積状況から見て60cm以上はあったものと見られる。周溝は南壁下のみ認められた。南壁外中央東寄りには張り出し様の施設が存在する。検出面からの深さ7～12cm、住居床面からは12～23cm上段にある。底面は固く、それに続く住居床面も固く踏みしめられているので、出入口施設とも見られる。　**床面**　当初住居を16～24cm埋めもどし、その面で住居を拡張している。P2周辺からP3にかけてと、南壁東寄り部分に固く踏みしめられた範囲が認められた。　**ピット・貯蔵穴**　P1～P3は柱穴と見られるが、南西部分には存在しなかった。深さは37～120cmである。P5は深さ51cmで貯蔵穴とも見られる。　**炉**　P2の南及び南西に位置する焼土は床面で焼けている。他は床面上にのっている焼土ブロックである。前者は地床炉の痕跡とも考えられる。　**遺物**　住居跡南東及び北東付近でややまとまって出土した。5～7は貼床中から、2・8～12は床面から2～8cm浮いて、1・3は30cm以上浮いて、覆土中からは4が出土した。　（唐澤）

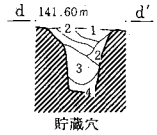












住居跡全体
1．黒色土。
2．漆黒色土。
3．暗黒色土。多量のローム粒。
4．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
5．暗褐色土。ローム粒・ロームブロック。(貼床)
5′ 5に比べロームブロック少。
6．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
6′ 6にロームブロックを混ぜる。　　に
7．暗褐色土。ローム粒とロームブロック。(貼床)

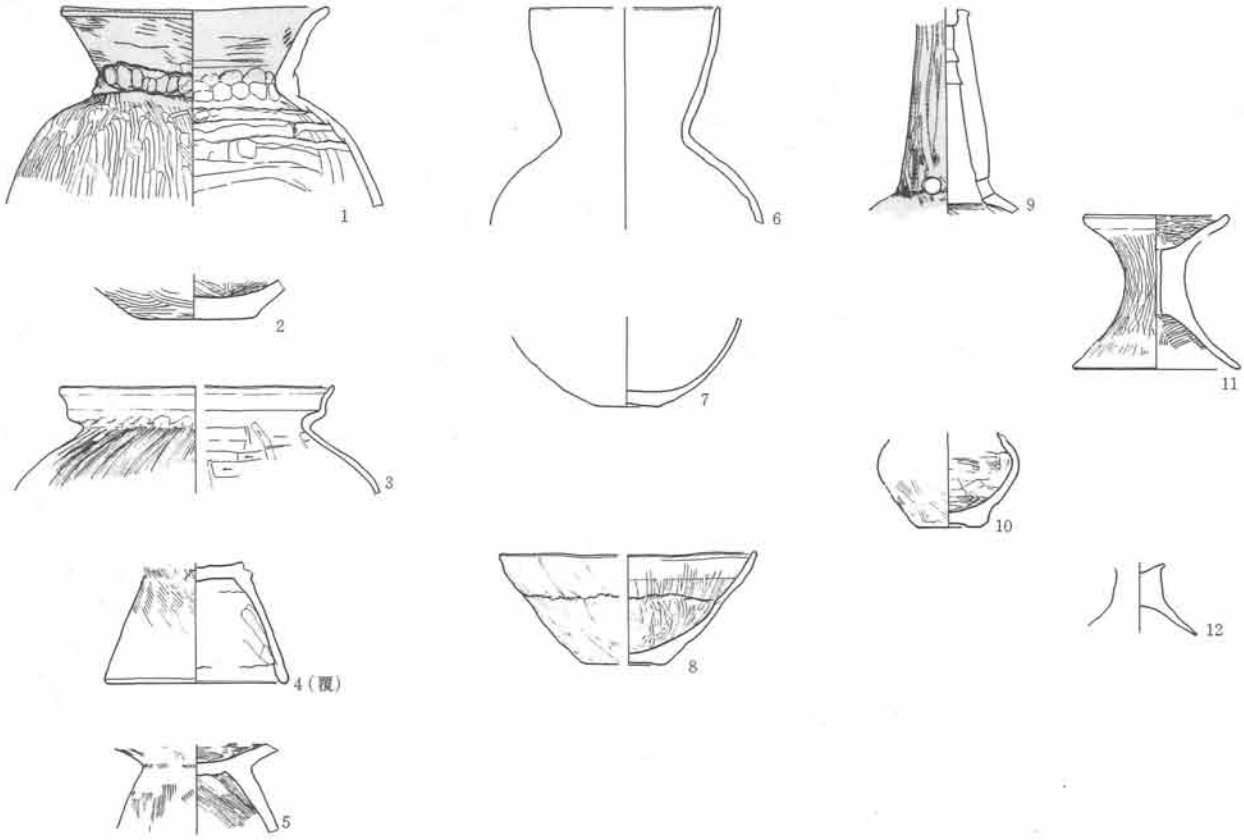
P2
1．黒色土。
2．黒色土。ローム粒。
3．暗褐色土。ロームブロック。

P3
1．黒色土。
2．暗褐色土。ローム粒。

P4
1．黒褐色土。ローム粒。
2．暗褐色土。ローム粒。
3．暗褐色土。多量のローム粒。

貯蔵穴
1．黒色土。
2．暗褐色土。ローム粒。
3．暗褐色土。ローム粒。
4．暗淡褐色土。ローム主体。

図－260　H433号住居跡（建替え前）

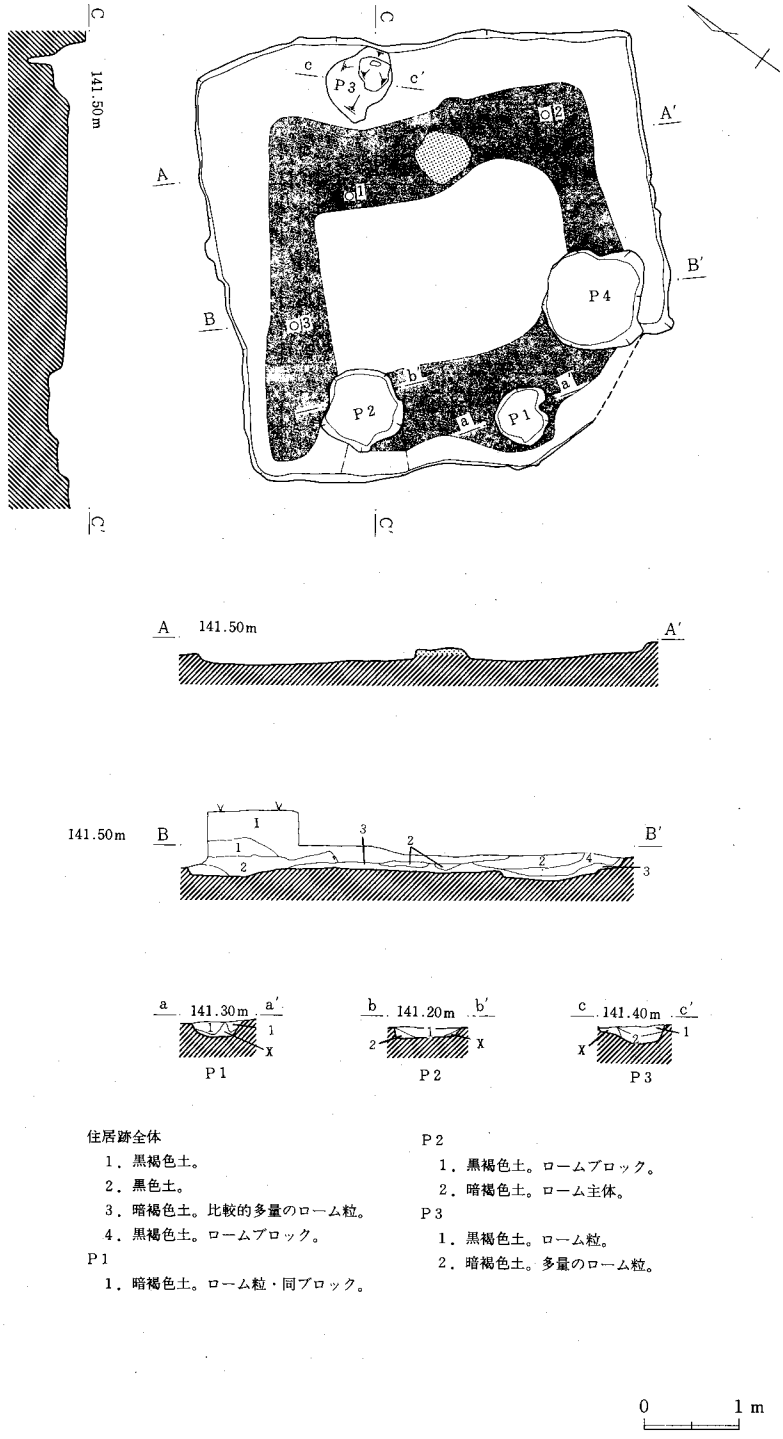


図－261　H433号住居跡出土遺物

0　10cm

出土遺物　**土師器**　壺(1・6・7)、1は頸部に帯状の粘土紐を巻きつけ、口縁部の内外面には赤彩を施す。粘土紐には指頭痕を並べる。2ケ所ほどハケ目の刻みを入れた箇所もある。調整は口縁部横ナデで、外面に斜、内面に横のハケ目を残す。胴部外面は縦ハケ目を残す縦ヘラ削り、同内面は粘土紐接合痕と指頭痕を顕著に残す横ヘラナデ。6・7は同一個体と見られる長頸壺。内彎する口縁部の先端を尖らす。外面調整は口縁部縦ヘラナデ、胴部横または斜ヘラナデ、内面調整は口縁部斜ヘラナデ、胴部上位指押えの後横指ナデ、中位～下位軽い横ハケ目、下端～底部ヘラナデ。底部外面指押え。外面にやや光沢。　甕(2～5)、2は底部のみ残存。外面は横と斜のハケ目、内面は底部中心に向かう放射状の粗いヘラ磨き。底部外面はハケ目。3はS字状口縁甕で、肩部以下欠失。口縁部内外面横ナデ、頸部外面ヘラナデ(ヘラ削り状)、胴部外面斜ハケ目、胴部内面横ヘラナデ。甘い焼成。4は台付甕の台部。端部に折り返しを持つ。外面上半はハケ目の指ナデによる縦すり消し、下半はていねいな指ナデ、内面は縦指ナデで天井部は指押え。台部上面は横ヘラナデ。5は台付甕の胴部と台部の接合部。外面に縦、内面に斜、上面に横のハケ目。4と異なり厚い器壁で、非常に細かいハケ目を持つ。堅緻な焼成。鉢(8)、内外面の接合痕が折り返し状に見える。内外全面に縦ヘラ磨き。底部ヘラ削り。内外面に光沢。　小型坩(10)、多量の砂粒を混ぜ、表面が荒れる。調整は外面に斜、内面に横のハケ目を残す指ナデ。底部は周縁部を若干高くする。つくり雑。　高坏(9・12)、9は柱部下端に均等に3個の円窓を持つ。外面には赤彩を施す。柱部外面は非常に細かい縦ハケ目の後縦ヘラナデ、同内面に横ヘラ削り、裾部外面粗い横ヘラ磨き、同内面非常に細かいハケ目。12は全面指押えと指ナデ。手捏状を呈す。薄い器壁。　器台(11)、X字形。外面全面に縦の、受け部内面に横のヘラ磨き。脚部内面斜ハケ目。　(唐澤)

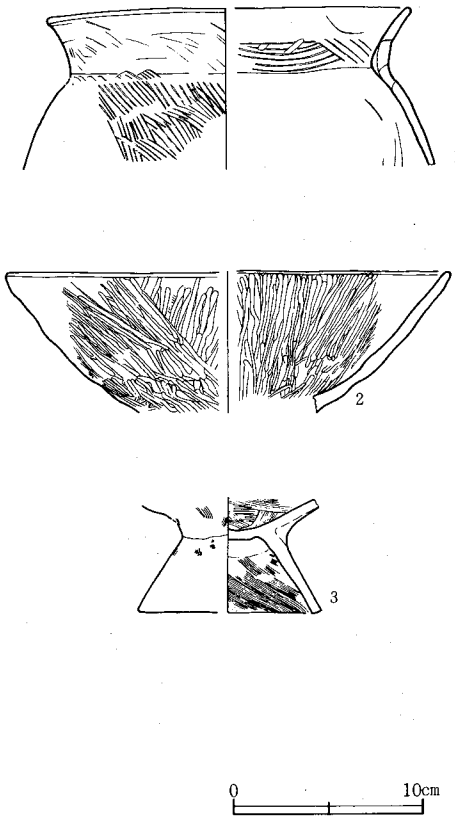
H433号住居跡出土遺物



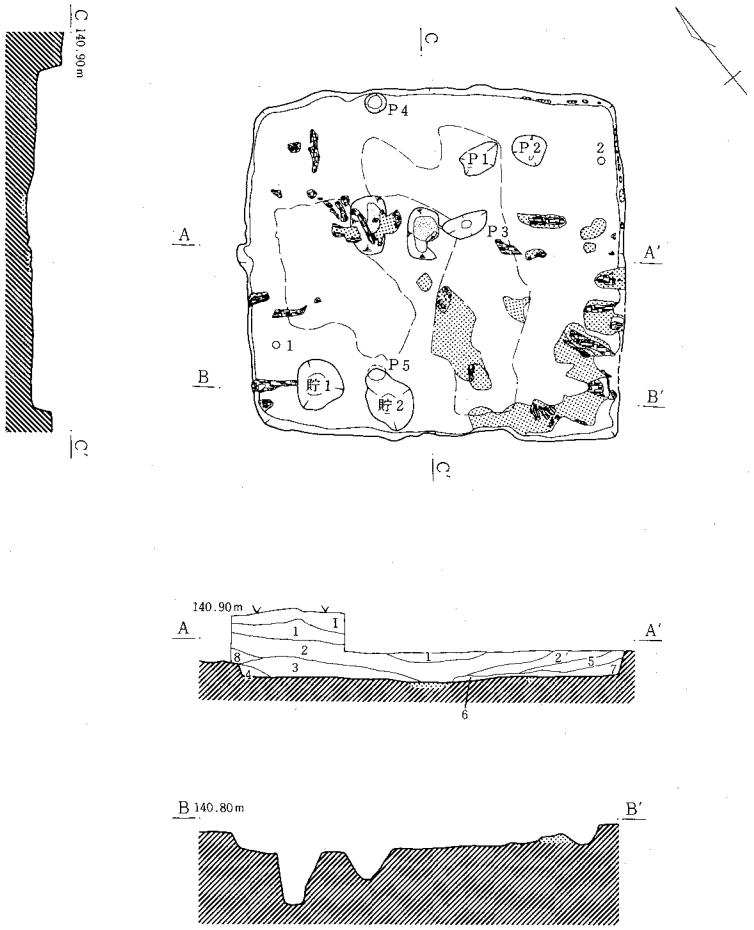
図－262　H434号住居跡

出土遺物　**土師器**　甕（1・3）、1は細長い胴部に外反する口縁を持つ甕で、胴部中位以下を欠失する。外面調整は、口縁部に斜ハケ目と指頭痕を残す横ヘラナデ、肩部に2段の斜ハケ目、内面調整は、口縁部に横または斜の櫛目を残す横ヘラナデ、肩部に横または斜のヘラナデを施す。口縁部外面に煤が付着する。3は台付甕の台部と底部である。台端部には折り返しが見られない。器壁は厚めだが、一定している。台部と底部の接合部外面には補強用の粘土を当てているが、取り付けは雑である。調整は底部外面にやや細かいハケ目、同内面に横または斜ハケ目、台部外面指押えで上端の所々に短いハケ目を入れる。同内面は非常に目の細かい斜ハケ目。台端部の接地面は平坦で角を持つ。　高坏（2）、半球形状の坏部のみ残存する。調整は内外面ともヘラ磨きで、外面は斜（接合部のみ縦）、内面は縦のヘラ磨きが施される。坏部中程やや下位に器接合部が認められる。　（唐澤）

H434号住居跡（5H－163）　**位置**　調査区域南端の、ナ109に所在する。南北方向に走る西側低地寄りの緩斜面上に位置する。南には大正用水が走り、遺跡地南限を画す。　**形状**　南北4.6m、東西4.7mの不整方形。西壁・北壁は外に膨む傾向があり、南壁は弱く波を打つ。東壁のみきれいな直線をなす。方向（南北方向で測定）　N－19°－E、面積19.5㎡。壁高は覆土の堆積状況から見て40cm以上はあったものと見られる。周溝は認められない。　**床面**　住居中央部分を除く壁沿いに、幅50～80cmの黒色土貼床が認められた。床面上での平面観察によるため深さは不明である。　**ピット**　住居南半に3個（P1、P2、P4）、北壁沿いに1つ（P3）認められた。しかし、P1、P2、P4は深さが9～14.5cmと非常に浅く、貼床の施行範囲内に位置する。大きさ及び貼床との位置関係から見て、掘り過ぎとも考えられる。P3は不整形をなすが2段に掘られている。深さは底面上段18cm、同下段で62cmである。　**炉**　住居中央北寄りの貼床面上に地床炉が確認された。表面は赤橙色に固く焼けており、周囲床面より11cm盛り上がっていた。　**遺物**　土師器の甕（1）、高坏（2）、台付甕（3）等若干の遺物が出土した。いづれも床面から10cm以上浮いて出土した。　（唐澤）

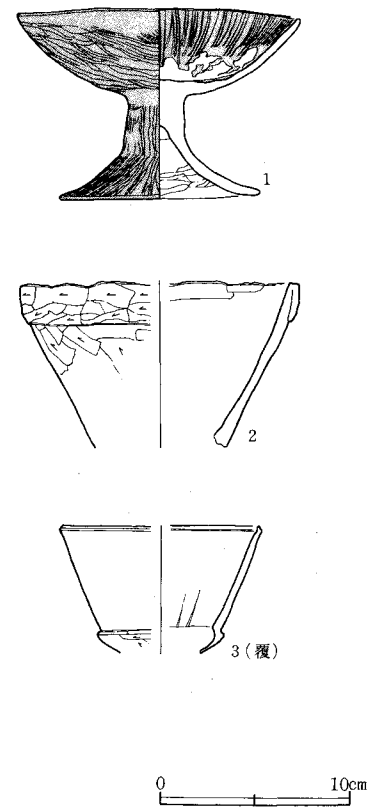


図－263　H434号住居跡出土遺物



図－264　H435号住居跡

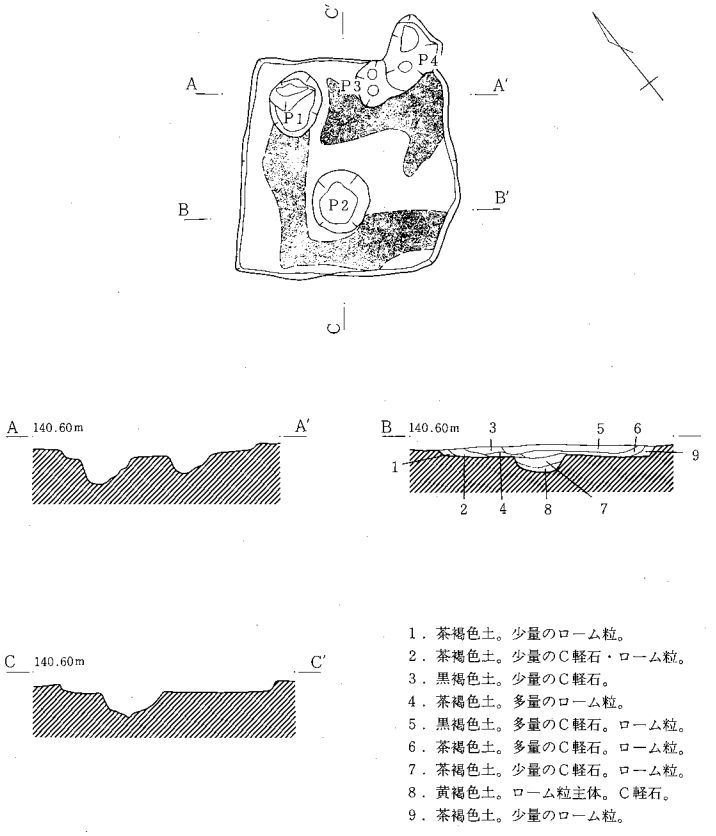
H435号住居跡（5H－164）　**位置**　ナ110。南西向きの緩傾斜面上に位置する。　**形状**　南北3.6m、東西3.9mの隅丸長方形。壁は四壁とも外に膨む傾向を持つ。西壁は東壁に比べ南側が20cm短い。長軸方向N－103°－E、面積13.4m²。壁高は覆土の堆積状況から見て40cm以上と推定される。　**床面**　壁から20～30cm離れて黒色土の貼床の一部が認められた。他の例から見て住居中央部を除き壁沿いに一巡しているものと見られる。炉を取り囲むように固く踏みしめられた部分が認められた。東壁沿いは軟らかい部分が広く見られ、床面に機能差が考えられる。　**ピット・貯蔵穴**　住居北半のピット（P1～P4）は深さ13～27cmで、性格不明。南壁東寄りの2つの大きなピットは貯蔵穴と考えられ、2つの炉に対応するものと見られる。深さは東30cm、西54cm、P5は踏み固め部分がこの付近から始まる事から、出入口施設に伴うピットとも考えられる。　**炉**　住居中央西寄りに、地山床面を8cm前後掘りくぼめた地床炉が、2つ並んで検出された。　**遺物**　住居北半(2)及び西壁寄り(1)で土師器片が数点出土した。床面から3～13cm浮いていた。　**その他**　焼失住居で炭化材・焼土等が出土した。北東隅壁は赤橙色に焼けていた。壁際の炭化材のレベルは壁側が高く、倒れた状態で出土した。　（唐澤）



図－265　H435号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甑（2）、底部が欠失しているため鉢とも考えられるが、他の例から見て甑であろう。口縁部外面に折り返し口縁を持つ。外面調整は、折り返し部に横のヘラ削り、体部に斜のヘラナデを施す。内面は全面に横のヘラナデを施す。外面のつくり、特に折り返し部の調整は雑である。色調は淡灰茶褐色で、胎土中に雲母と粗い砂粒（石英を含む）を混ぜる。　小型坩（3）、口径が胴部径、器高より大きく、胴部径と器高がほぼ等しい。口縁部と胴部の境にヘラを立てるように削り、胴部側外面に鋭い稜を巡らす。口縁端部は内彎し、受口状になる。調整は口縁部横ナデで、内面下方にヘラ押えの痕跡を残す。胴部は外面にヘラ削り、内面に指ナデを施す。色調は淡褐色で、黒斑がある。胎土中には雲母を含む。　高坏（1）、坏部は底部外面に弱い稜を持つ。脚部は短かい柱部に短かめに開く裾を持つ。外面全体と坏部内面及び裾部内面に赤彩を施す。外面調整は坏部側面に櫛目状の斜ハケ目を残す斜ヘラ磨き、脚部は縦ヘラ磨き、内面調整は坏部縦ヘラ磨き、脚部に横ヘラ削り、脚部接地面に横ナデを施す。色調は白味の強い淡褐色、胎土は精選された土で雲母を含む。坏部の底部内面は厚くほぼ完全に剝落している。人為的か。　（唐澤）

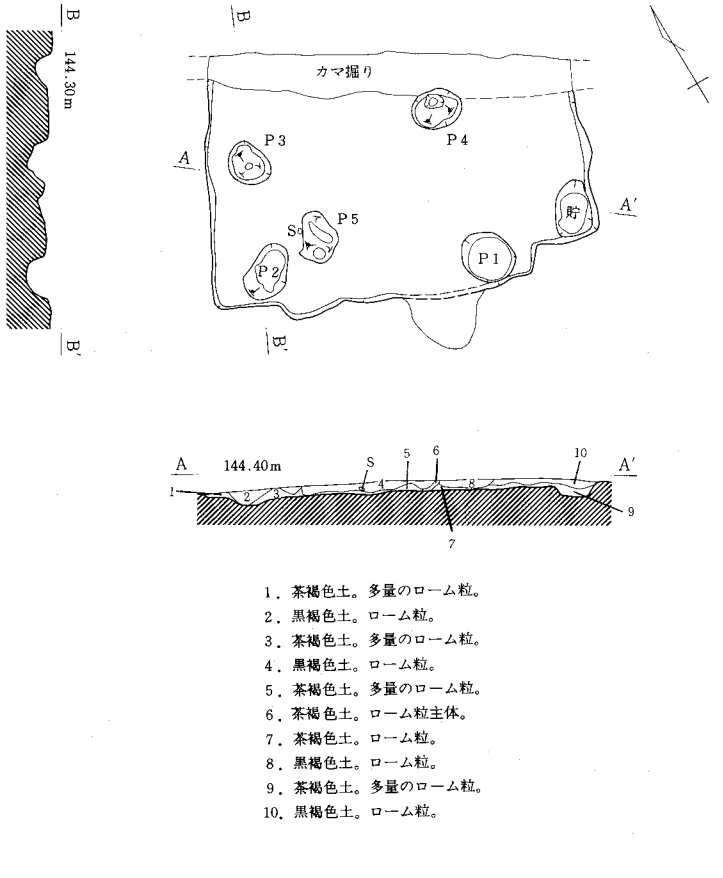
H436号住居跡



図―266　H436号住居跡

H436号住居跡（5H―165）　**位置**　調査区域の南東、ネ110にある。台地最南端の緩やかな斜面上に位置する。周囲の遺構分布はやや疎らであるが、東にH435号住居跡がある。**形状**　北西～南東に長軸を持つ方形（東隅にピットによる張り出し部を持つ）で、南北2.2m、東西2.22mである。南壁は北壁に比べ、西端が約20cm、西壁は東壁に比べ、南端が約20cm長い。北東、南東隅は隅丸を呈する。長軸方向はN―12°―E、面積は44.3m²、壁高は5～10cmである。周溝は存在しない。　**床面**　全体的に軟らかく、中央から東壁下中央部分を除くほぼ全周に貼床が認められる。厚さは不明であるが、幅60cmである。土はC軽石の混入する黒色土である。　**ピット**　床面に三個（P1、P2、P3）東隅に1個（P4）があるが、位置、形状、大きさ等から考えて、柱穴とは認め難い。特にP1～P4の底部は凹凸が激しい。P1とP4はH411号、H416号住居跡の例から貯蔵穴の可能性もある。P2は貼床外の所にあり、P1、P4とは異なる機能を持つと推定される。　**炉**　認められない。　**遺物**　覆土中から土師器甕体部片が出土したが、床面上からの出土はない。　**テフラ**　覆土中に二ツ岳系の軽石は含まれない。　（鵜木）

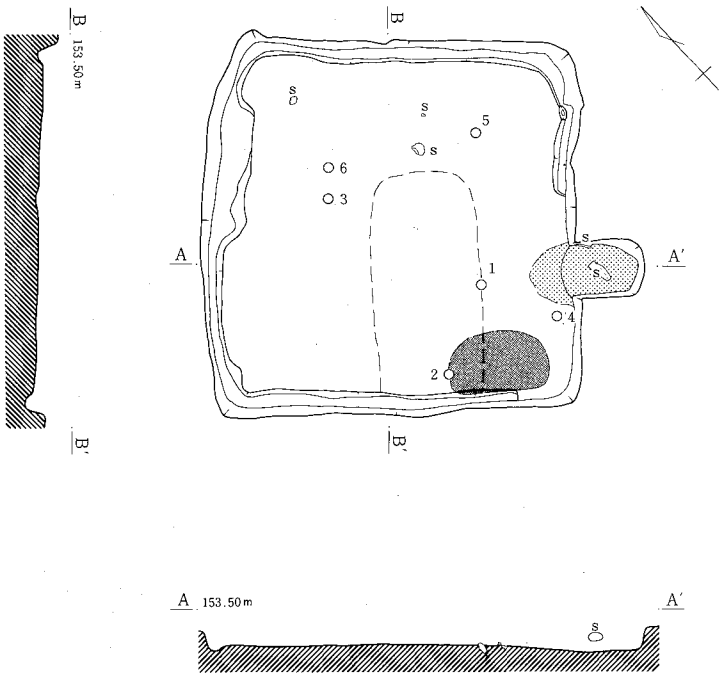
H437号住居跡



図―267　H437号住居跡

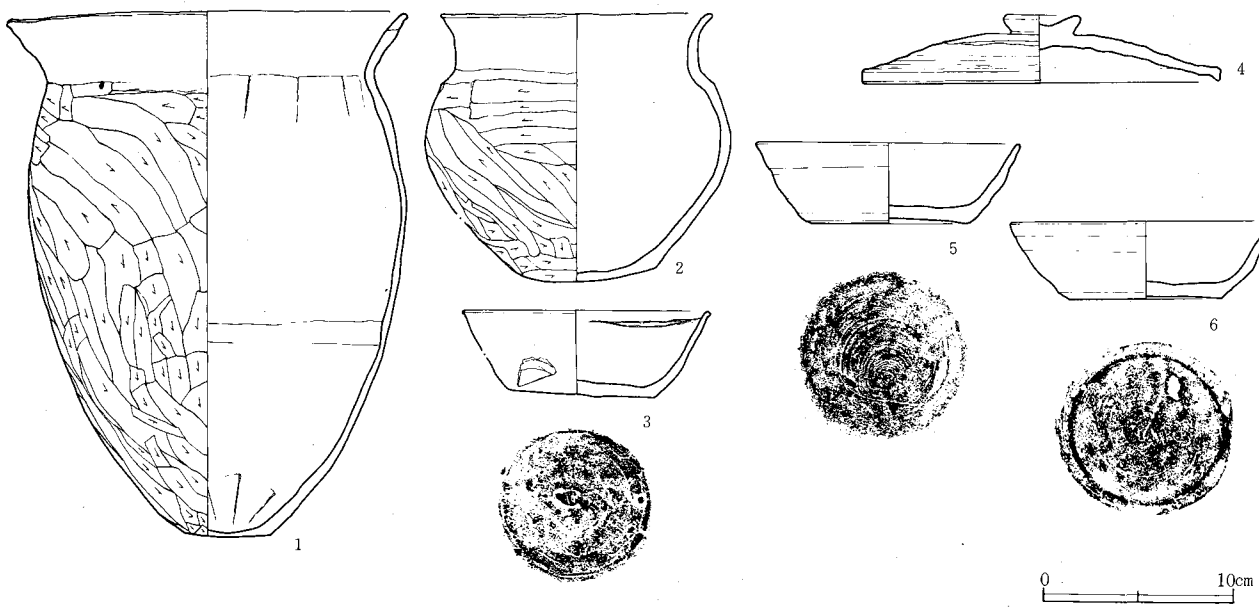
H437号住居跡（5H―166）　**位置**　調査区域の南東、ナ106にある。台地の南傾斜の緩やかな斜面上に位置する。周囲の遺構分布は疎であるが、東にH420号住居跡、H423号住居跡がある。　**形状**　北東～南西に長軸を持つと思われる台形で、北壁の長さ3.7m（推定）、南壁4.04m、東壁1.8m、西壁2.5mである。東壁、西壁はほぼ直線であるが、南壁は両端の内側約70cmの所から張り出しが始まる。北壁はカマ掘りによって切られ、不明である。長軸方向はN―83°―E、面積は9.3m²前後（推定）、壁高は3～6cmである。周溝は存在しない。南壁中央の張り出しは、幅2.7、奥行0.25mである。　**床面**　全体的に軟らかいが、貼床の形跡はない。　**ピット**　床面に5個（P1～P5）ある。位置、形状等からP1、P2、P3、P4が柱穴との見方も出来るが、住居跡の広がりと、ピットの配列が反対になっており、断定はし難い。　**炉**　それらしい痕跡や焼土部分も認められない。　**貯蔵穴**　南東隅にある。長円形を呈し、規模は60×38cm、深さ19cmである。　**遺物**　床面上の遺物はない。　**テフラ**　第8層を除き、二ツ岳系の軽石は含まれない。　（鵜木）

H438号住居跡（図版40）



図－268　H438号住居跡

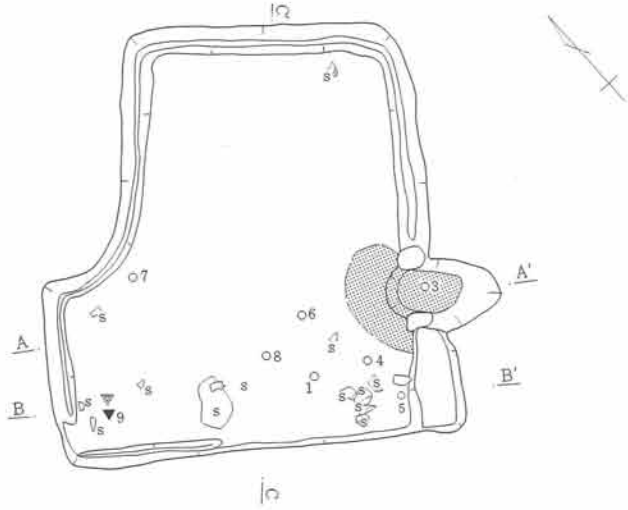
H438号住居跡（5 H－167）　**位置**　ル7～8にかけて、溝状遺構1の北に接して所在する。　**形状**　南北3.8m、東西3.8mの隅丸方形。西壁は外方に膨む孤をなすが、他の壁はほぼ直線である。南壁は北壁より西側に40cm、西壁は東壁より北側に20cm長い。南北方向N－14°－E、面積14.2m²、壁高14～17cmである。周溝はカマド付近及び南東隅を除き全周する。幅12～20cm、深さ5～8cm。　**床面**　南壁中央やや西寄りからカマド前にかけて、床面が固く踏みしめられていた。　**カマド**　東壁中央やや南寄り。壁外に構築している。燃焼部左壁に石材1石が貼りついていた。火床面は良く焼け込んでいる。全長＝燃焼部長78cm、袖部内幅54cm、燃焼部先端の壁への掘り込み角度80°。燃焼部のレベルは、住居床面より6cm程低い。南東隅から南壁にかけての床面には、灰の散布が認められた。　**遺物**　遺物は、いずれも、床面または床面直上で出土した。小型甕（2）の出土した南壁沿い西寄りの位置は、灰の散布地と同じ所であり、カマド内の灰と一諸にこの所に廃棄されたものとも見られる。この場所には、他にも土師器甕小片が若干散布している。　**重複関係**　溝状遺構1と切り合う。覆土から見て、本住居跡が旧い。　（唐澤）

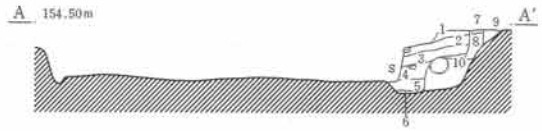


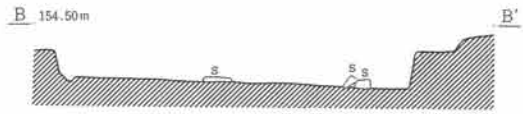
図－269　H438号住居跡出土遺物

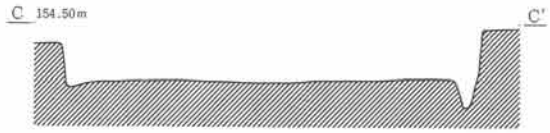
出土遺物　**土師器**　甕（1・2）、1は口縁部が〝く〟字状に外反する甕で、口径と胴径がほぼ等しい。口縁部は内外面横ナデ。底部はヘラ削りで、丸みを残す。2は小型甕で、頸部の立ち上がりが明確化し、頸部と肩部の境に稜をつくる。調整手法は1と同じ。底部に丸みを残す。　**須恵器**　坏（3・5・6）、3は内面全体と外面の一部に自然釉がかかる堅緻な焼成。底部には回転ヘラ切り痕を残す。口縁部内面には直接重ね焼き痕を残す。5は底部に全面回転ヘラ削り調整を施す。体部下端には1段の回転ヘラ削り調整を加える。やや甘い焼成で、胎土中に細かな白色鉱物を多量に含む。6は底部回転糸切り後、周辺部回転ヘラ削り調整。体部下端に1段の回転ヘラ削り調整を加える。色調は黄褐色で、甘い焼成である。　蓋（4）、口径の小さいリング状のつまみを有する。端部を短かく折る。天井部には回転ヘラ削り調整を施す。須恵器のロクロの回転方向は5が左、他はすべて右。　（唐澤）

H439号住居跡（図版41）









1．茶褐色土。焼土粒。
2．茶褐色土。焼土粒・炭化物。
3．茶褐色土。ローム粒・焼土粒。
4．茶褐色土。
5．茶褐色土。ロームブロック・焼土粒。
6．茶褐色土。多量のローム粒。
7．赤褐色土。多量の焼土粒。
8．赤褐色土。多量の焼土ブロック。
9．茶褐色土。小量の焼土粒。
10．赤褐色土。多量の焼土粒。

0　1 m

住居跡全景

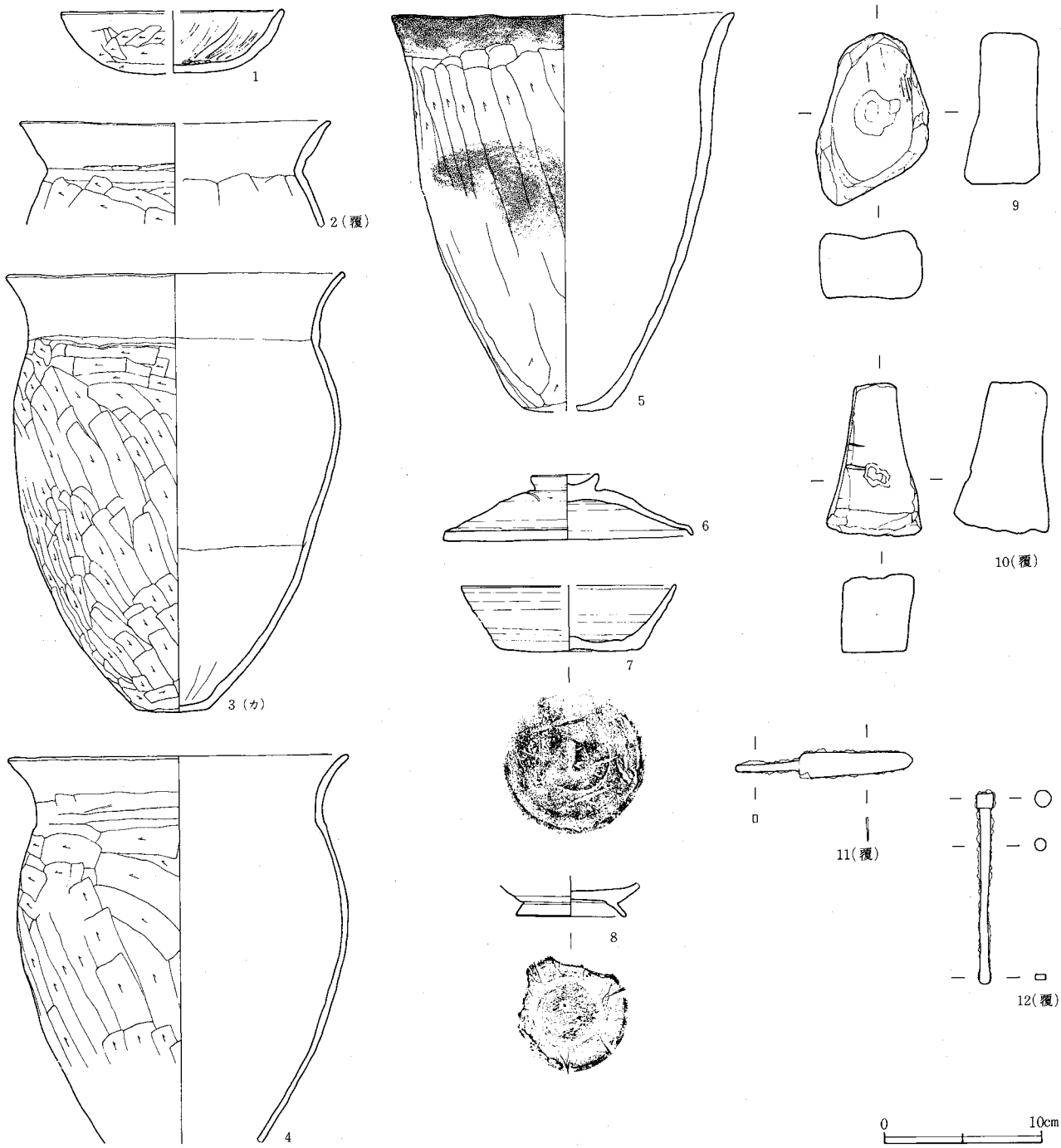
カマド全景

カマド付近遺物出土状況

図－270　H439号住居跡

H439号住居跡（5 H－168）　**位置**　調査区域やや北寄り、ヲ8にある。台地中央の緩やかな斜面上に位置する。東に接してH440号住居跡がある。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ長方形で、南北4.35m、東西2.46m（北壁）ないし3.54m（張り出しを含む南壁）である。長軸方向はN－7°－E、面積は14.2m²、壁高は28～56cmである。カマドより南の東壁と南壁東半分を除く壁直下に周溝が存在する。深さ4～31cm、幅13～28cmである。西壁南端とカマド南側の東壁に各種施設が付属する。前者は「張り出し」で台形を呈し、規模は180×100cmである。住居構築の際、計画的に設置されたものと思われる。後者は「棚状平坦面」で長方形を呈し、規模は106×41cmである。後者の類例にH273号住居跡がある。　**床面**　南壁沿いで周溝のない部分を除き、硬くしまっている。　**カマド**　東壁南寄りにある。袖石が床面上約10cmの所に設置されている。全長104cm、袖部内幅46cm、燃焼部長64cm、壁への掘り込み角度68.5°、壁外掘り込みは92cmである。床面と火床面の差は12cmである。南東隅に散乱する焼石はカマド使用のものと思われる。　**遺物**　カマド内から土師器甕（3）が、南壁東半部から土師器甕（4・5）、同坏（1）、須恵器坏（7）、同椀（8）、同蓋（6）が出土した。南壁東半部のものは、この付近の石と共に床面から10～18cm浮く。南西隅床面上では砥石(9)が出土した。なお、南壁下中央西寄りの石は、床面についている。　**重複関係**　53号溝と重複する。堆積土層等より推して本遺構の方が旧い。

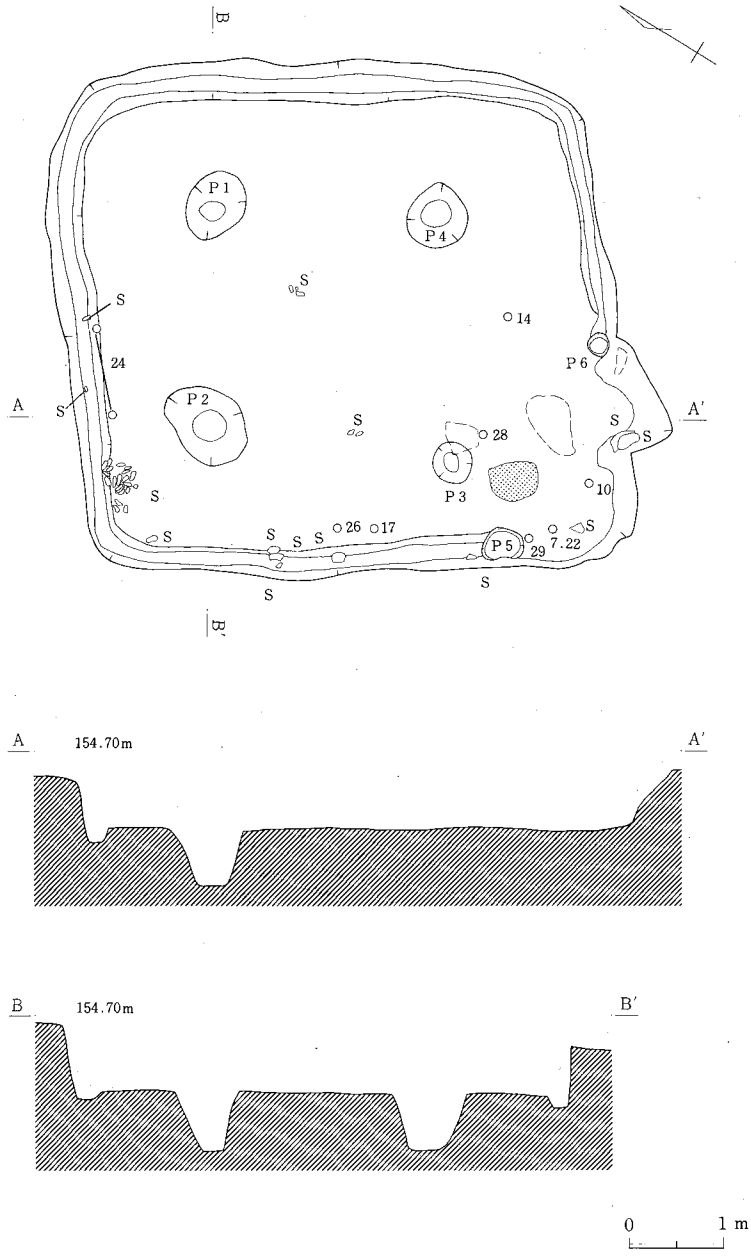
（鵜木）



図－271　H439号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（2～5）、2は〝く〟の字状に強く外反する甕で、頸部が締まる。頸部外面には幅のせまい小口状工具で強い凹線を引く。口縁部内外面に横ナデ、肩部外面ヘラ削り、同内面横ナデ。3・4は頸部に締まりを持たずゆるやかに外反する甕で、2・5に比較し薄いつくりである。口縁立ち上がり部外面には指頭痕を残すが、調整法は2にほぼ同じである。3と4の違いは、3が肩部の削り込みが深いために段差ができるのに対して、4は肩部との境に浅い凹線をめぐらし、頸部側が一段低くなることである。3の方が古い整形法と言えよう。5は頸部が締まらずわずか口縁部が外反する甕で、胴部は縦位のヘラ削りである。口縁部や胴部内面の調整は2～4と同じである。5の胎土は粗い砂量を多量に混ぜるもので、厚い器壁を持つ。　坏（1）、内面体部に粗い放射状暗文、同底部にラセン状の暗文を施す。器壁の厚い坏で、外面は口縁部を除く全面にヘラ削りを施す。　**須恵器**　坏（7）、ロクロ整形で、底部に回転ヘラ切り痕を残す。周辺部には回転ヘラ削りが施されているものとみられる。色調はやや白っぽい灰色で、つくりはていねいだが、やや甘い焼成である。底部外面にワラ状の細長い痕跡がつく。　埦（8）、付高台。高台はハの字状に開く薄いつくりで、接着はていねいである。体部下端には2段の回転ヘラ削りを施す。色調は若干褐色味を帯びる灰色で、やや甘い焼成である。　蓋(6)、径4cm程度のリング状のつまみを持つ。形状は笠形で、天井部に回転ヘラ削りを施す。　**鉄製品**（11・12）、11は幅の広い部分の両側が刃になる。鉄鏃か。12は木工具の一種か。太い部分の先を欠損する。　**石製品**　砥石（9・10）、いずれも流紋岩製。使い込んでいる。　（唐澤）

H440号住居跡（図版41）

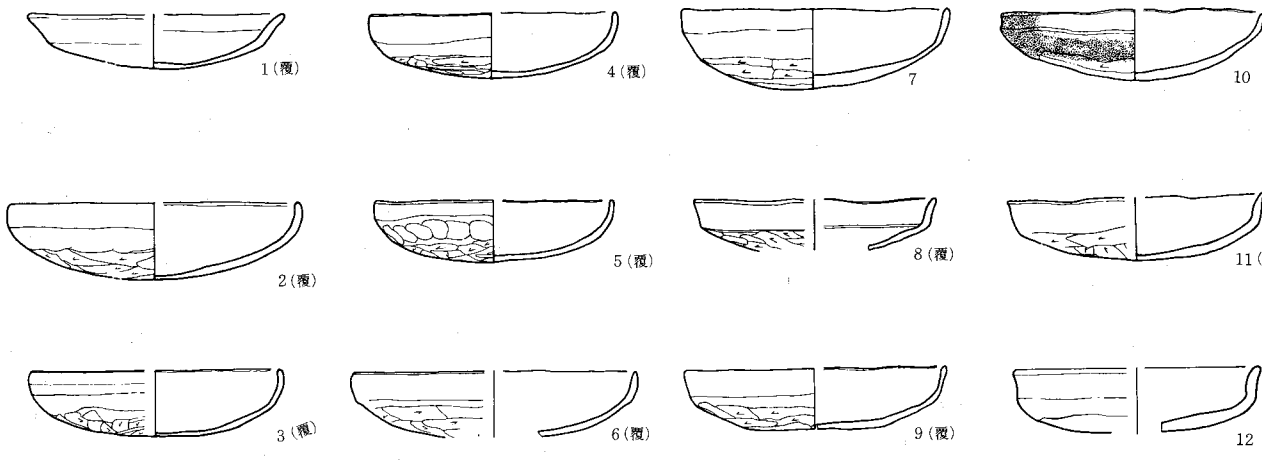


図－272　H440号住居跡

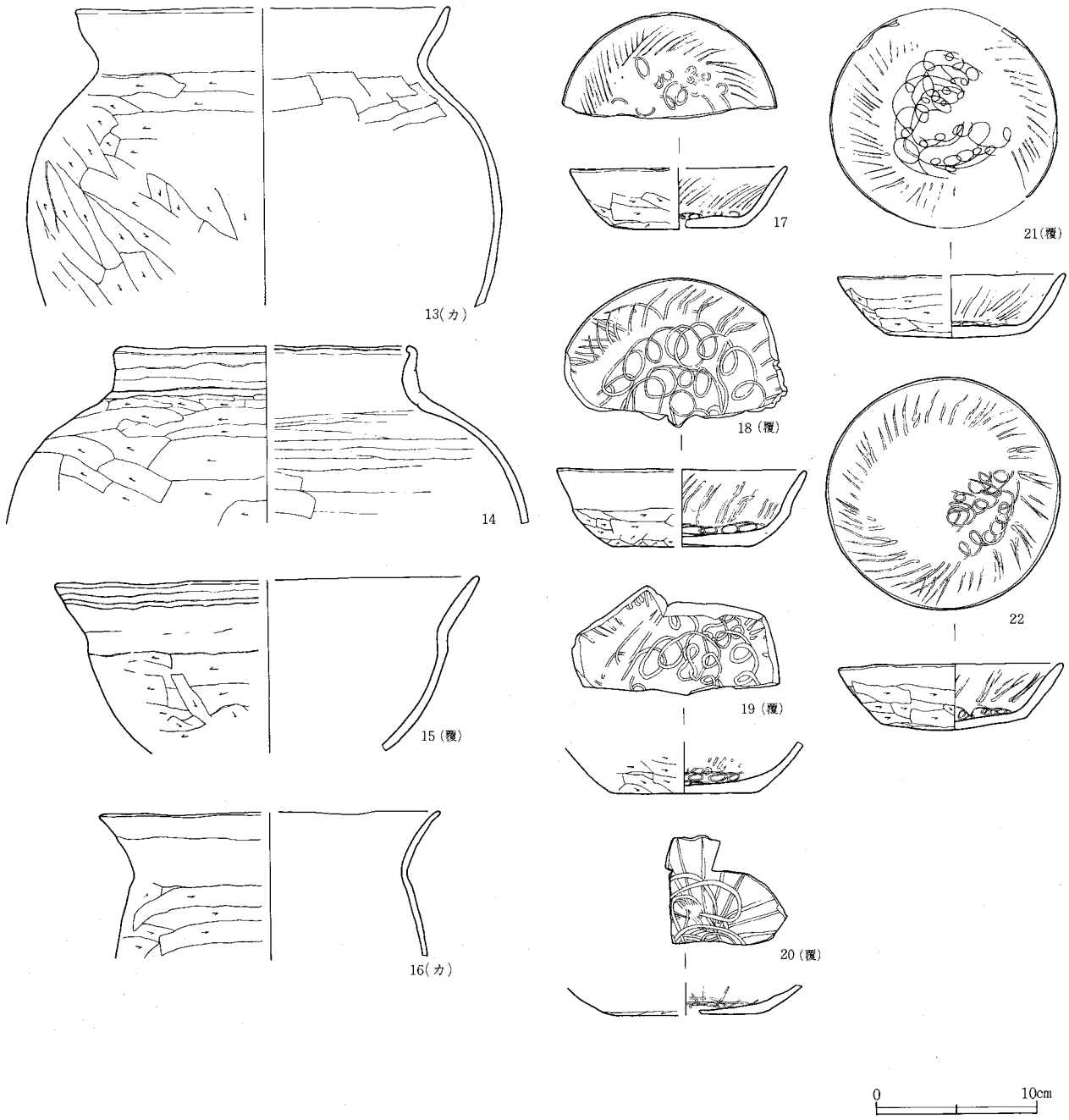
H440号住居跡（5H－169）　**位置**　調査区域の北部、ヲ8に所在する。台地の東西位置の中央付近に当り、微傾斜となっている。**形状**　南北5.22m、東西5.56mの隅丸平行四辺形である。北壁と東壁は外に膨む傾向にあるが、南壁と西壁は内に寄る。長軸方向はN－31°－Eであり、面積は27.7m²、壁高45～69cmである。東壁北半分を除き、壁下全体に幅14～32cm、深さ10～15cmの周溝をめぐらす。**床面**　カマド手前に小範囲65×45cmの楕円形に固く踏み付けられた部分がある。　**ピット**　床面の4個の断面の形状はいずれも逆載頭円錐形であり、その規模は、P1、深さ65cm、P2、深さ62cm、P3、深さ52cm、P4、54cmである。これらは柱穴と考えられ、中心間の距離は、P1～P2＝2.3m、P2～P3＝2.4m、P3～P4＝2.6m、P4～P1＝2.4mである。また南壁にかかって南東隅寄りにP5（深さ15cm）、カマドの袖部外側にP6（深さ15cm）がある。　**カマド**　東壁南寄りにある。右壁の2石は燃焼部壁石と見られる。全長78cm、袖部内幅70cm、燃焼部長76cm、壁への掘り込み角度50°で、壁外掘り込みは64cmである。火床面と住居床面は同じ高さで、カマド手前の床面上には50×40cmの焼土及びP3北側に30×30cmの灰が見られる。

遺物　カマド内及び同左袖部付近の床面から12cm浮いて、土師器甕（13・14・16）、西壁及び南壁の壁沿いからは、上から落ち込んで来た形で、床面から3～18cm浮いて土師器坏（7、9、10、12）、須恵器坏・埦（24・26～29）等が出土した。また、南西隅付近には、ほぼ同形の川原石（長さ10cm前後）が床面上に、一部は周溝の埋土中床面レベルで、多数出土した。

（白石）

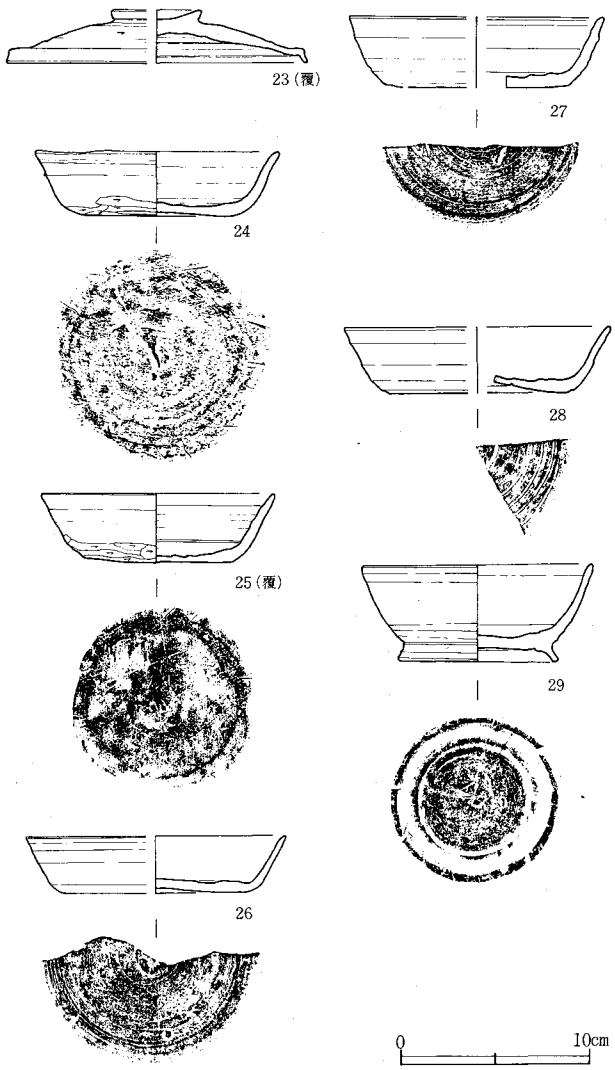


図－273　H440号住居跡出土遺物（1）



図－274　H440号住居跡出土遺物(2)

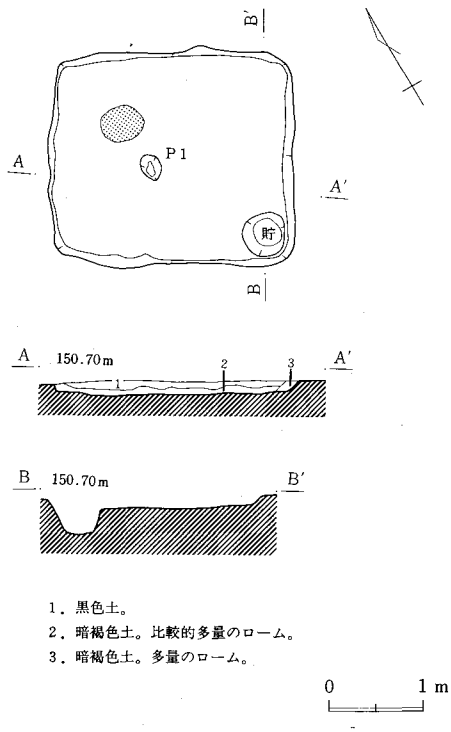
出土遺物　　**土師器**　坏（1～12･17～22）1は口縁部が大きく外反し、皿形を示す。2～5は体部が丸味を帯び、口唇部が内湾する。幅の狭い横ナデが口縁部に施される。2及び5は底部ヘラ削りとの中間に、指頭痕を残す。6の口縁部は丸味を帯び、底部ヘラ削りにより僅かな稜が形成される。7及び9は、口縁部がやや外傾する。10は2及び5同様中間に指頭痕を残すが、口縁の幅が狭く、やや直に立ち上がる形態を示す。軟質で、器面の荒れが著しい。11は口縁が直に立ち上がり、口唇部で僅かに外反する。8は口縁の立ち上がりが直線的で、底部ヘラ削りも鋭い。12は全体的に器肉が厚い。口縁は直に立ち上がり、口唇部辺で外反する。色調は橙色。軟質で、器面が荒れている。17～22は暗文坏の一群である。口縁部は内外面横ナデ、底部及び体部外面はヘラ削り、内面全体をヘラ磨きした後に、体部放射状暗文、底部ラセン状暗文を施文する。18・19と比較して、21の暗文線は細い。20は暗文線が明確で、刻み込むような施文方法である。放射状暗文の上に、ラセン状暗文が施される。18は部分的に放射状暗文の重複がみられ、格子状を形成する。暗文坏は平底形態を示し、胎土中に微細な雲母片を含む。なお17・21は軟質で、器面が荒れている。　甕（13･16）、13は大型甕の破片である。口縁部は受け口状を示す。口縁部は内外面横ナデ、肩部外面は横及び斜ヘラ削り、胴上半部は斜ヘラ削りされる。内面は頸部辺にヘラ痕を残す。16の口縁部は、くの字状に大きく開き、内外面横ナデ、肩部外面は横ヘラ削りされる。　短頸壺(14)、口縁部の形態は、外面に粘土紐接合痕を残し、口唇部が内傾して丸味を帯びる。胴上半部が張り出して、最大径を示す。口縁部は内外面横ナデ、胴部外面は横及び斜ヘラ削り、内面はナデが施され、平滑である。砂粒や微細な雲母片を多量に含み、軟質である。　鉢(15)、器形は鉢形であるが、胎土中に多量の砂粒を含み、又外面に煤の付着がみられるなど、煮沸用具としての可能性が強い。整形技法は甕と同様である。　（中束）



図－275　H440号住居跡出土遺物（3）

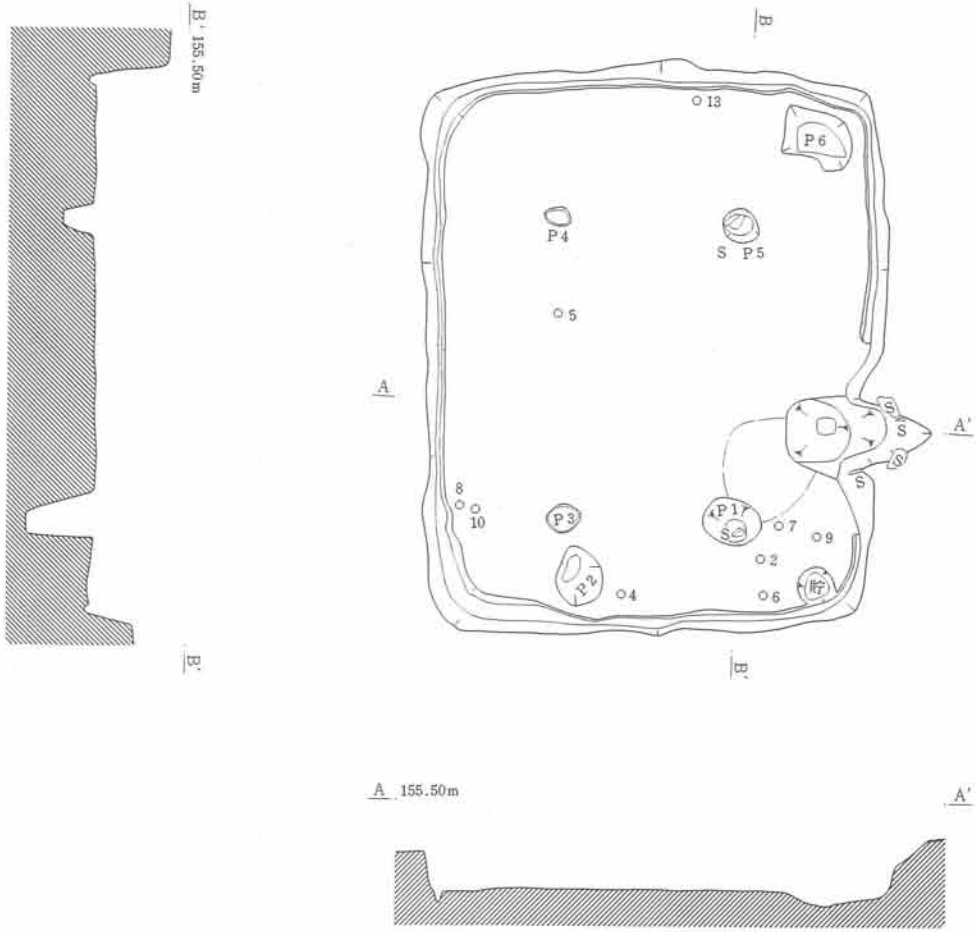
出土遺物　**須恵器**　蓋(23)、右回転ロクロ使用。切り離し技法不明。天井部中央につまみ部を貼付。つまみ部調整。つまみ部は、中央が緩やかな凹状を示す。つまみ部周辺には回転ヘラ削りが施される。やや扁平な器形となる。色調は青灰色。微細な黒色鉱物を多量に含有し、内面には気泡が認められる。焼成は良好である。　坏(24～28)、24は右回転ロクロ使用。底部内面はロクロ目を顕著に残す。底部ヘラ切り後、底部の一部及び周辺部に手持ちヘラ削りが加えられる。ヘラ削りにより、底部周辺には丸味が生じ、緩やかに外反する口縁部へと続く形状を示す。色調は淡灰色。礫や砂粒を少量含み、焼成は良好である。25は右回転ロクロ使用。体部が直線的に外傾する。底部内面にロクロ目を残し、体部内外面はナデが施される。底部回転ヘラ切り後、底部全面及び周辺部に手持ちヘラ削りを施す。ヘラ削りにより、底部から体部への移行位置には稜が形成され、端正な作りとなる。色調は淡い暗灰色。礫や砂粒を少量含み、焼成は良好である。26は右回転ロクロ使用。体部が直線的に外傾する。底部切り離し技法不明。底部及び周辺部全面ヘラ調整か。素地は灰白色、底部外面から口縁部にかけて、浅黄緑色の自然釉がかかる。微細な黒色粒を多量に含み、焼成は良好である。27はロクロ回転方向不明。底部切り離し技法不明。26同様、底部及び周辺部全面ヘラ調整か。色調は灰白色。白色粒や砂粒を少量含み、焼成は良好である。28はロクロ回転方向不明。底部切り離し技法不明。全面ヘラ調整か。中央に浅い溝あり。色調は暗青灰色。黒色鉱物の溶解を認める。　埦(29)、右回転ロクロ使用。体部がやや丸味を帯びて外傾する。体部内外面にナデが施される。底部は回転ヘラ切りか。体部下端ヘラ調整後、高台部貼付。高台部周辺ナデ調整。高台は細身で、外側に大きく張り出す。色調は淡い明緑灰色。黒色粒及び砂粒を少量含み、焼成は良好である。　（中束）

H441号住居跡



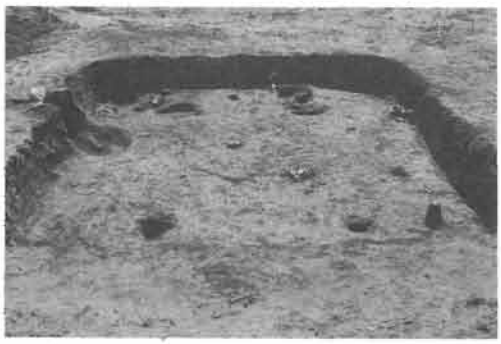
図－276　H441号住居跡

H441号住居跡（5 H－170）　**位置**　調査区域のほぼ中央、ワ3に所在する。本台地上では、最北端の石田川期の住居跡の一つである。周囲には住居跡の分布がほとんどなく、南にH476号住居跡が隣接しているだけである。　**形状**　南北2.2m、東西2.4mの隅丸長方形で非常に小規模な住居である。壁は北壁と西壁が外側に膨む弧を描くが、東壁はやや内側に反り、南壁はほぼ直線的だが西側で内に寄っている。長軸方向N－92°－E、面積5.1m²、壁高7～13cmで北壁側がやや高い。周溝は認められなかった。　**床面**　床面は特に固い所は見受けられず、全体に軟らかかった。Ⅺ層を床面としており、貼床は認められなかった。　**ピット**　住居中央やや南西寄りに、小ピット1が検出された。径25cm前後、深さ18cm。その性格は不明である。　**炉**　住居中央北西寄りに、床面の焼土化した範囲が認められた。東西にやや細長い円形で、表面は軟らかく、焼けもそれほど強いものではなかった。地床炉と見られる。焼土化した範囲は東西46cm×南北38cmで、表面の高さは周囲の床面と同じである。　**貯蔵穴**　南東隅の円形ピットが貯蔵穴と見られる。47×44cm、深さ28cm。　**遺物**　覆土中から土師器甕・同坏片・鉄製品（不明）・砥石・鉄滓等が出土したが、床面または同直上付近からの出土は見られなかった。　**その他**　覆土中に榛名山二ツ岳の軽石をまったく含まない。（唐澤）



図－277　H442号住居跡

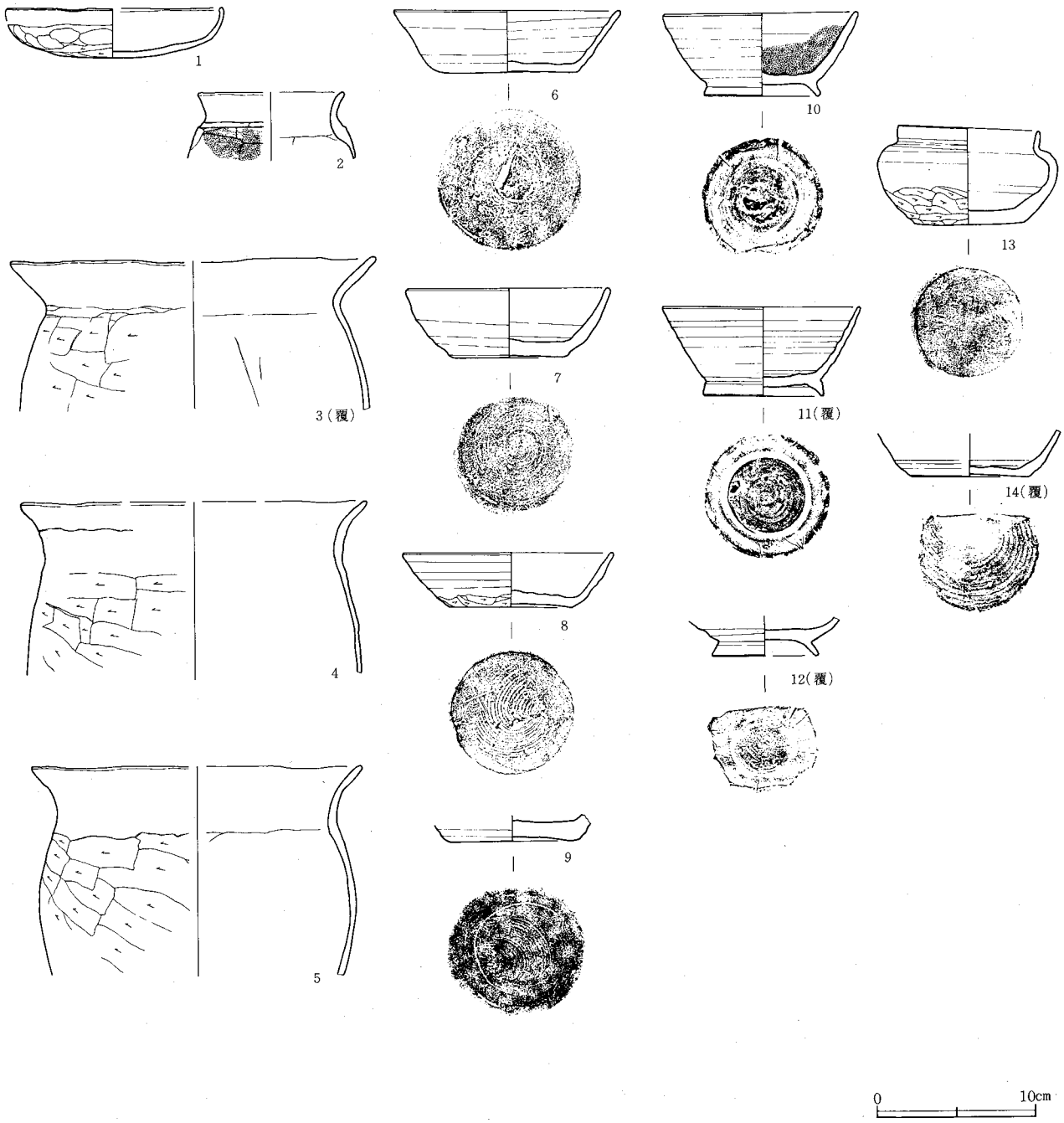
0　1m



住居跡全景

カマド全景

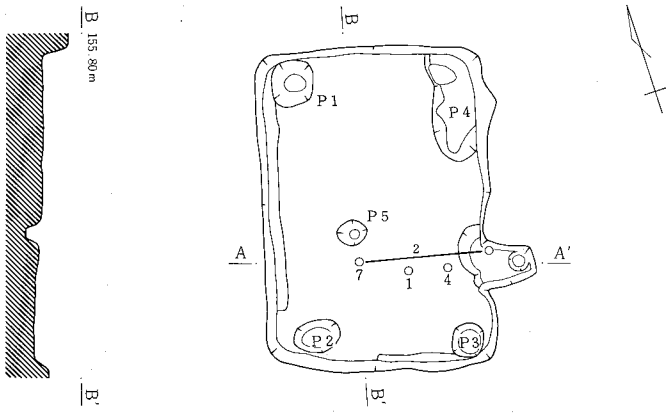
H442号住居跡（5H－171）　**位置**　調査区やや北寄り、ワ9にある。台地上の緩やかな斜面上に位置する。周囲の遺構分布は密で、西に接してH295号住居跡がある。　**形状**　東北～南西に長軸を持つ隅丸長方形で、南北5.8m、東西4.71mである。全体にやや膨らみを持った住居である。長軸方向はN－22°－E、面積は25m²、壁高は35～84cmである。カマド付近を除く壁直下すべてに周溝を巡らす。深さ4～24cm、幅7～24cmである。カマドとP1の間の床面が円形（径約1m）に硬く踏み固められている。他の床面とほぼ同じ高さである。　**ピット**　床面に6個（P1～P6）ある。形状、位置、大きさ等から推してP1、P3、P4、P5が柱穴と考えられる。他のピットは機能、性格等については不明である。　**カマド**　東壁南寄りにある。石材使用により構築されたものと思われ、煙道部左右の壁、右袖部に石（袖の芯にしたと思われる）が確認された。全長96cm、袖部内幅60cm、燃焼部長43cm、壁への掘り込み角度74°（燃焼部）、39°（煙道部）、壁外掘り込み68cmである。床面と火床面の差は最大16cmである。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、円形。規模は39×38cm、深さ9cmである。　**遺物**　南東隅、貯蔵穴付近の床面から土師器小型甕（2）、同坏（1）、須恵器坏（6、7、9）が出土した。西壁南側の床面より須恵器坏（8）、須恵器埦（10）が出土した。P2付近からは土師器甕（4）が、中央部北寄りの床面から土師器甕（5）、北壁直下の床面からは須恵器短頸壺（13）が出土した。又、覆土中からは羽口片、鉄滓が出土している。　**重複関係**　54号溝と重複する。覆土層から判断して本遺構が旧いと思われる。（鵜木）

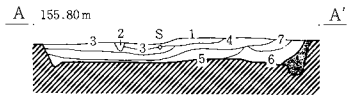


図－278　H442号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　甕(2～5)、2は小型甕。肩部と口縁部の境に浅い凹線を引く。口縁部外面は指押え後、軽い横ナデを施す。3は頸部の締まりの強い〝く〟の字状の口縁部を持つ甕である。肩部の削り込みで、所々に口縁部との境に段差ができる。口縁部は指ナデで、外面に指頭痕を残す。胴部内面は横ヘラナデ。4・5は頸部の立ち上がりが明確化しつつある甕である。調整手法は3と同じである。5の内面には焼土が付着する。　坏(1)、丸底の坏だが、平底化の傾向にある。体部外面上端及び同内面横ナデ、底部内面は指押え、同外面ヘラ削り、体部外面下半に指押えを施す。**須恵器**　坏(6～9・14)、いずれもロクロ成形。6は底部回転ヘラ切り後、周辺部に回転ヘラ削り調整を加える。体部内外面のロクロ痕を消す。7は底部全面に回転ヘラ削り調整を施す。切り離し技法は不明。8は青灰色の固く焼き締った坏で、底部周辺に「×」のヘラ記号を刻す。底部の切り離しは回転糸切りで、底部周辺及び体部下端に手持ヘラ削りを施す。9は底部のみ残存する坏で、回転糸切り後、周辺部に回転ヘラ削り調整を施す。14の切り離し技法は回転糸切りだが、その後ヘラによる軽いナデつけがみられる。これがヘラ削りかどうかは不明である。以上のロクロの回転方向は8が右で、他は左方向である。7と9は胎土中に白色の細砂粒を多量に含み、色調、焼き上がり等の点で共通する。　椀(10～12)、付高台。10・12の高台はハ字状に開く細長い高台で、取りつけはていねいである。体部内外面の調整はヘラ状工具によるロクロナデである。11は、高台が三角形状になり、開きも少ない。体部内面と同外面下端にヘラ状工具によるロクロナデ。11・12の胎土中には多量の黒色粒子を含む点で共通する。　小型壺(13)、底部外面及び胴部下半に手持ヘラ削り。底部内面と胴部外面に自然釉がかかる。非常に堅緻な焼成。　(唐澤)

H443号住居跡（図版42）





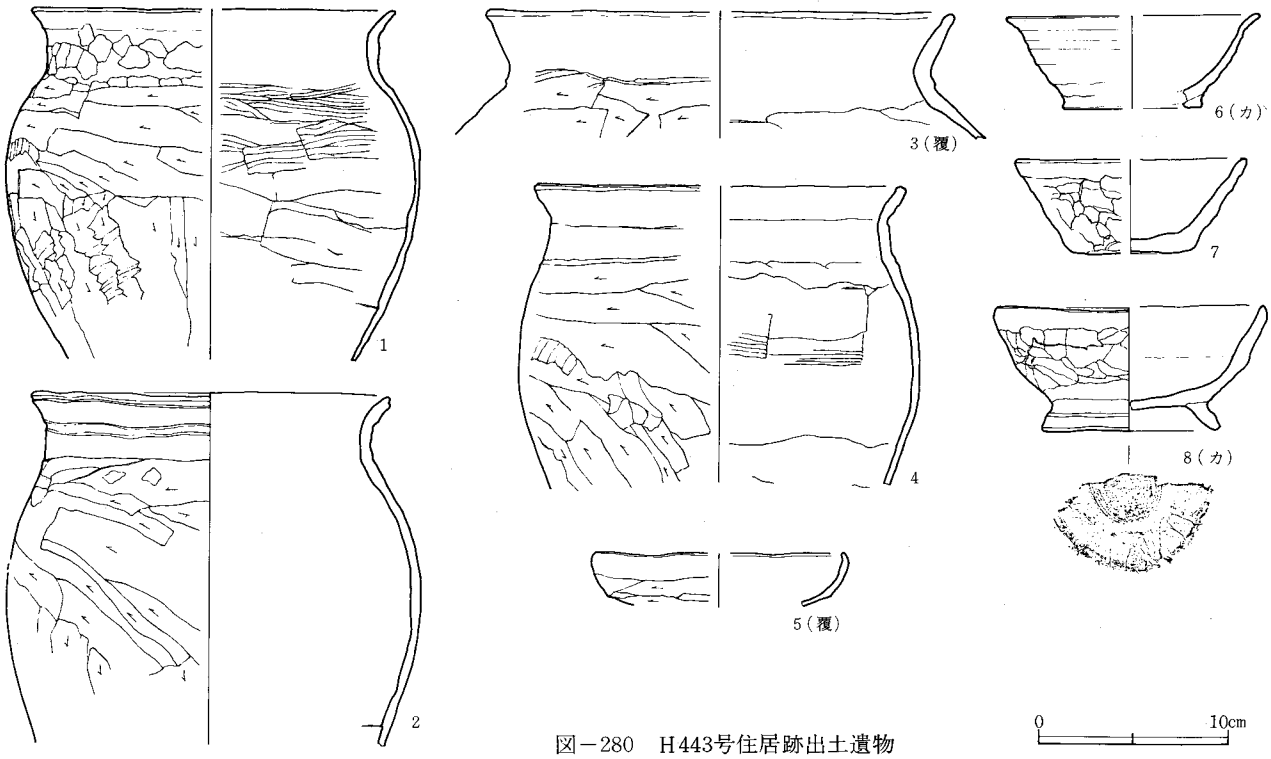
1．黒褐色土。ローム粒
2．黄褐色土。ロームブロック
3．黒褐色土。ローム粒。
4．黒褐色土。ローム粒。
5．茶褐色土。多量のローム粒。
6．茶褐色土。多量のローム粒。
7．茶褐色土。多量のローム粒。

0　1 m

図－279　H443号住居跡

H443号住居跡（5H－172）　**位置**　調査区域北寄りの、ワ9にある。台地の緩やかな南傾斜の斜面上に位置する。東に接して50号溝がある。　**形状**　南北に長軸を持つ隅丸長方形で、南北3.26m、東西2.26mである。東・西壁は直線であるが、北・南壁はやや外へ膨らむ傾向を持つ。長軸方向はN－14°－E、面積は7㎡、壁高は16～36cmである。西壁及び南壁東半分に周溝を巡らす。深さ10cm、幅10～12cmである。　**ピット**　床面に5個（P1～P5）ある。位置、形状、大きさ等から推して、P1、P2、P3、P4（形状は他の3つと異なるが）が柱穴と考えられる。　**カマド**　東壁南寄りにある。袖部も消失している。全長60cm、袖部内幅37cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度77°、壁外掘り込みは56cmである。床面と住居の火床面との差は－7cmである。　**貯蔵穴**　位置からしてP3が考えられるが、同ピットは柱穴の可能性が大きい。　**遺物**　カマド内、及びカマド手前付近から、床面から3～9cm浮いて土師器甕（1、2、4）、土師器埦（6～8）が出土した。　**重複関係**　H454号住居跡と東壁側で重複する。カマドがH454号住の中に構築されていることから、本遺構が新しいと考えられる。

（鵜木）

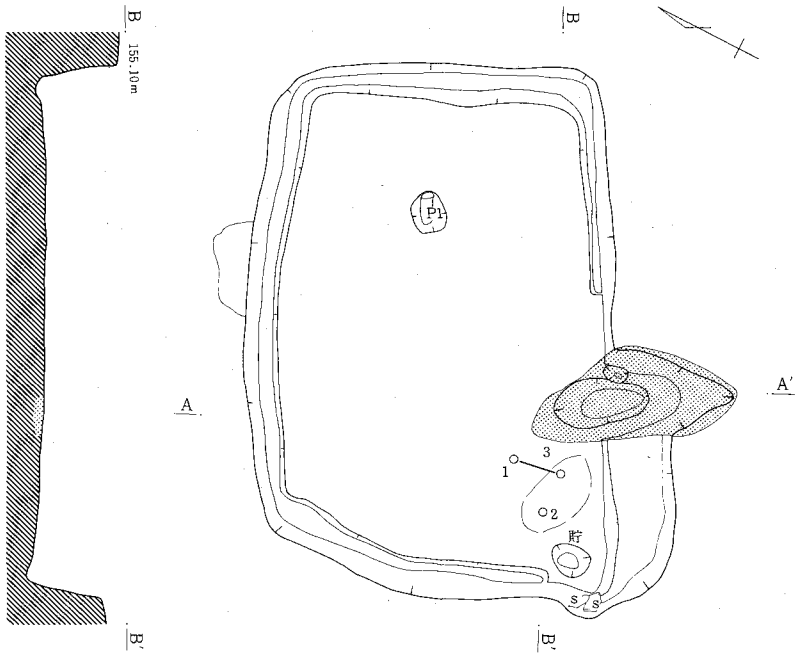


図－280　H443号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1～4）、1・2・4はコの字状口縁磨の範疇に入るものだが、典型的なものに比較すると、形態的には肩部と頸部の境が不明瞭になり、胴部が丸みを持ち、頸部が内傾する等の特色がある。器壁も厚くなる。調整は口縁部内外面に横ナデ、胴部外面ヘラ削り、同内面はハケ目状の痕跡を残す横ヘラナデ（小口状の道具か）を施す。3は大甕で、肩部の削り込みが深く、頸部との境に段差ができる。口縁部内面横ナデ、胴部内面は横ヘラナデ。　坏(5)、

底部に丸みを残す坏で、口縁部は内彎する。　**須恵器**　埦（6）、付高台。高台は底部と体部の境に接着する。台形の低い高台で、接地面は平坦。口縁端部は肥厚し、外反する。　**土師質須恵器**　坏（7）、暗黒褐色の坏で厚い器壁を持つ。調整手法は、口縁部と体部内面に横または斜へラナデ、底部内面にへラ押え、胴部外面に凹凸の激しい雑な指押えとナデつけ、底部は簡単なへラ削りである。　埦（8）、付高台。淡明褐色。口縁部と体部内面に横へラナデ、底部内面に指押え、胴部外面に細かいへラ削り、高台はへラによる横ナデ。　（唐澤）

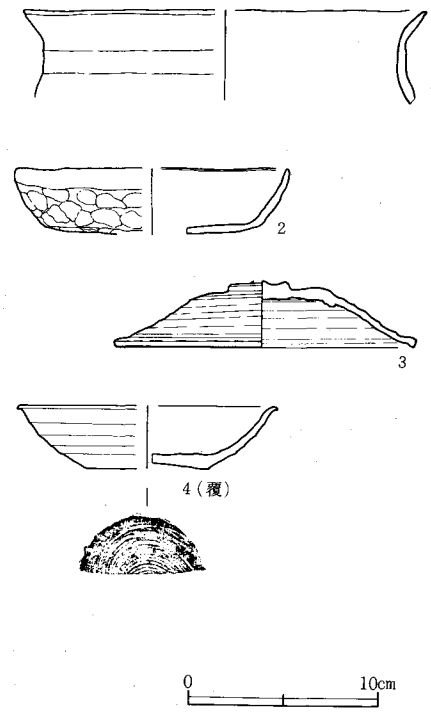
H444号住居跡（図版42・43）



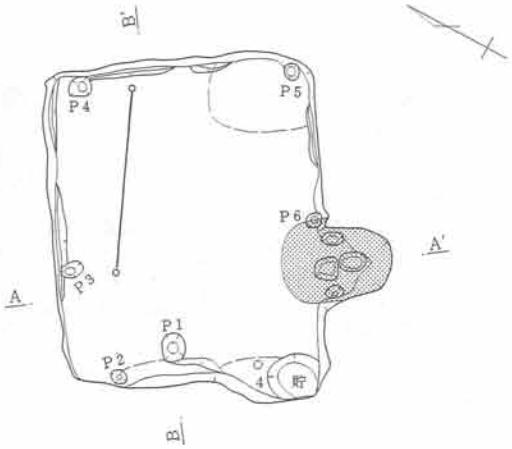
図－281　H444号住居跡

出土遺物　　**土師器**　甕(1)、口縁部辺から肩部にかけて、ハの字形に開く形態を示す。砂粒を含み、軟質である。肩部外面のへラ削りが認められる。　坏(2)、底部は平底状、口縁部は若干内傾する形態を示す。底部外面はへラ削り、口縁部は内外面横ナデ、体部には指頭圧が加えられる。色調は暗赤褐色。　**須恵器**　蓋（3)、右回転ロクロ使用。端部は丸味を帯びる。天井部中央に小さな凸状のつまみを貼り付け、周辺部にはへラ調整が加えられる。礫を多量に含み、内外面暗青灰色。内面に重ね焼きの痕をみる。器形に歪みあり。　坏(4)、ロクロ回転方向不明。口唇部は外反する。底部切り離しは糸切りによる。あげ底状を示す。内面は平滑。礫を含み、色調は緑灰色。　（中束）

H444号住居跡（5H－173）　**位置**　調査区域北寄りの、ヲ9にある。台地の南向きの緩やかな斜面上に位置する。北東に接してH445号住居跡がある。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ隅丸台形で、南北5.35m、東西3.64mである。長軸方向はN－33°－E、面積は18.5m²、壁高は63～79cmである。カマド付近から南東隅を除き、周溝を巡らす。深さ6～9cm、幅10～36cmである。カマドから南の東壁に棚状の平担面(1.9×59cm)が付属する。カマドと貯蔵穴の間は踏み固めてある。　**ピット**　床面に1個（P1）あるが、性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄りにある。全長138cm、袖部内幅78cm、燃焼部長43cm、壁への掘り込み角度49°、壁外掘り込みは138cmである。床面と火床面との差は-24cmである。　**貯蔵穴**　南東隅、円形で規模は40×40cm、深さ22cmである。　**遺物**　カマド左手から土師器甕（1)、同坏(2)、須恵器蓋(3)が、床面から5～17cm浮いて出土した。　**重複関係**　171号建物跡が本遺構と重なる。両者の新旧関係は不明である。　（鵜木）

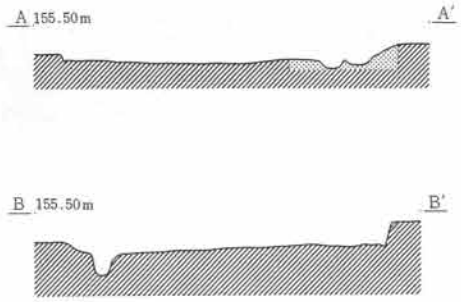


図－282　H444号住居跡出土遺物



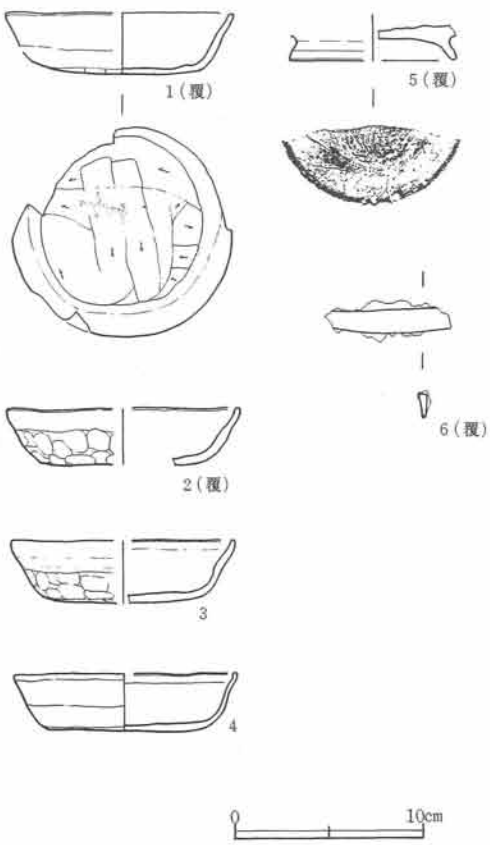
住居跡全景

カマド全景



0 1m

図－283　H445号住居跡

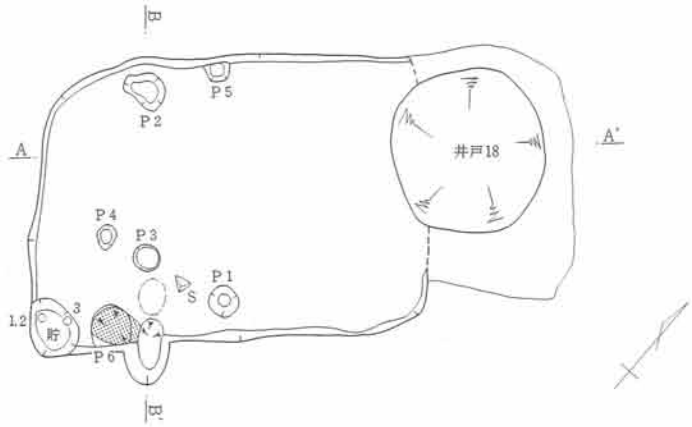


図－284　H445号住居跡出土遺物

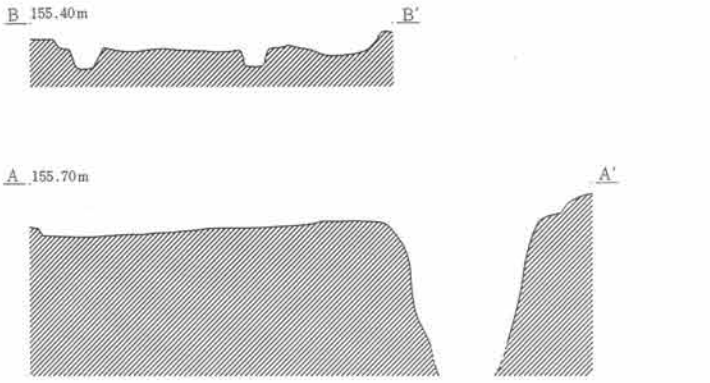
H445号住居跡（5H－174）　**位置**　調査区域北寄りの、ヲ9にある。台地中央やや北寄りの緩やかな斜面上に立置する。南西にH444号住居跡がある。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ長方形で、南北3.32m、東西2.76mである。長軸方向はN－29°－E、面積は9.4m²、壁高は6～27cmである。東壁北半、北・西壁の一部に周溝が残存する。深さ2cm、幅6～12cmである。南壁東側に張り出しがある。台形で、規模は103×32cmである。**ピット**　床面に6個（P1～P6）ある。位置、形状等から推して、P2～6が柱穴と思われる。P1は出入口施設に関連するピットと考えられる。　**カマド**　東壁南寄りにある。袖石を抜いたと見られる深さ10cmのピットが左右袖付近にある。全長76cm、袖部内幅70cm、燃焼部長56cm、壁への掘り込み角度38°、壁外掘り込みは76cmである。住居床面と火床面はほぼ同じレベルである。　**貯蔵穴**　南東隅にある。円形を呈し、規模は54×48cm、深さは16cmである。　**遺物**　3は床面から0～11cm浮いて、4は床面で出土したが、本住居跡につくものとは考えにくい。（鵜木）

出土遺物　　**土師器**　坏（1～4）、いずれも器壁は薄く、体部にゆるやかなくねりが認められるが、底部の平底化したもの（2・4）と若干丸みを残すもの（1・3）の2種類がある。調整手法はいずれも同じで、体部外面上半と同内面に横ナデ、体部外面下半に指押え、底部内面に指押えまたは指によるナデ、同外面にヘラ削りを施す。口縁部先端は尖らす。1の底部外面には墨書を認めるが、墨痕が薄いため字形の読み取りは十分でない。　**須恵器**　埦（5）、付高台。ハの字状に開く細長い高台を付す。接着はていねいである。色調は白みがかった灰色で、堅緻な焼成である。内外全面に非常に細かい気泡状の穴がある。底部には回転糸切り痕（右回転）。　**鉄製品**刀子（7）、棟方に関。　（唐澤）

H446号住居跡

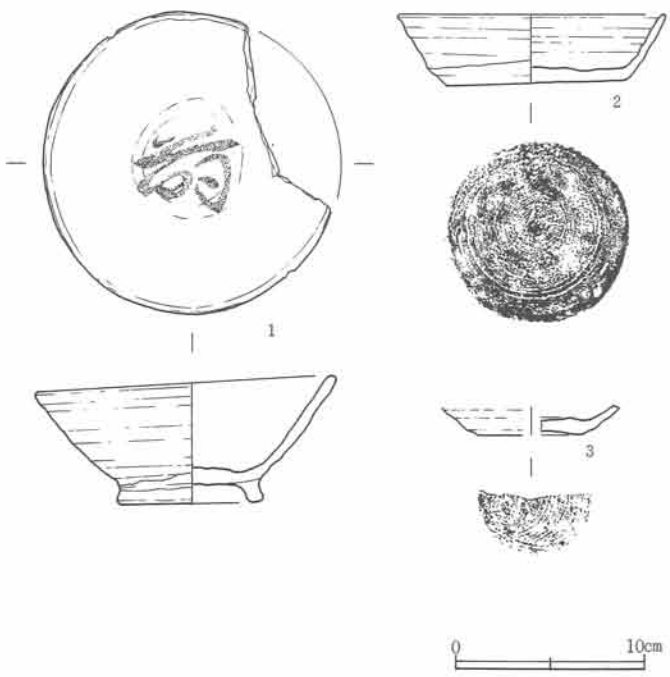


住居跡全景



貯蔵穴内遺物出土状況

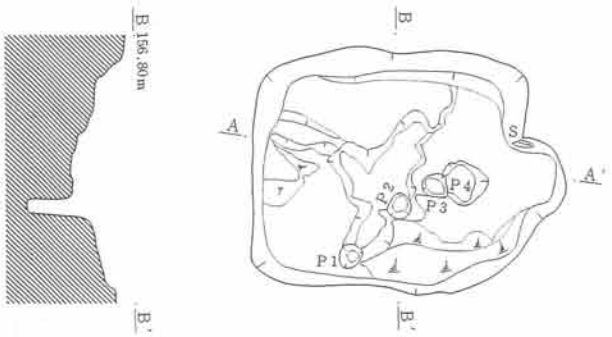
図－285　H446号住居跡

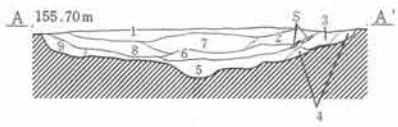


図－286　H446号住居跡出土遺物

H446号住居跡（5H－175）　**位置**　調査区域北寄りの、ヲ9にある。台地の緩やかな南傾斜の斜面上に位置する。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ隅丸台形で、南北4.14m、東西2.86mである。北壁は18号井戸によって切られている。長軸方向はN－18°－E、面積は11.4㎡、壁高は1～17cmである。周溝は存在しない。　**ピット**　床面に6個（P1～P6）あるが、柱穴と認定できるものは不明である。ただ、P6はカマド右袖に接する位置にあって、焼土に覆われており、「灰かき穴」と考えられる。規模は44×42cm、深さ10cm前後である。　**カマド**　東壁南寄りにある。全長52cm、袖部内幅28cm、燃焼部長28cm、燃焼部長35cm前後、壁への掘り込み角度55°、壁外掘り込みは44cm（右壁）、52cm（左壁）である。床面と火床面の差は11cmである。　**貯蔵穴**　南東隅にある。長円形で、規模は66×41cm、深さ19cmである。　**遺物**　貯蔵穴内覆土中より須恵器坏（2・3）同埦(1)が出土した。　**重複関係**　18号井戸に切られる。　（鵜木）

出土遺物　**須恵器**　坏（2・3）、2は右回転ロクロ成形。体部は緩やかに外傾する。底部切り離し後、底部全面ヘラ調整。体部下端にもヘラ調整が及ぶ。底部の作りは厚く、全体的に重量感のある形態を示す。色調は淡い青灰色、体部外面は灰白色。礫や砂粒を含むが、焼きしまり良好。内面に少量の鉄分が付着する。3はロクロ回転方向不明。底部切り離しは回転糸切りによる。底部はあげ底状となる。器面に褐色の気泡痕が多数認められる。内面に線刻「井」あり。　埦(1)、右回転ロクロ成形。底部切り離し後、高台部貼り付け。高台は厚味を帯びて、張り出す。更に底部全面及び外面調整。色調は青灰色。黒色鉱物や砂粒を含み、軟質。内面の底部に認められる墨書は、「蒔」であろうか。　（中束）





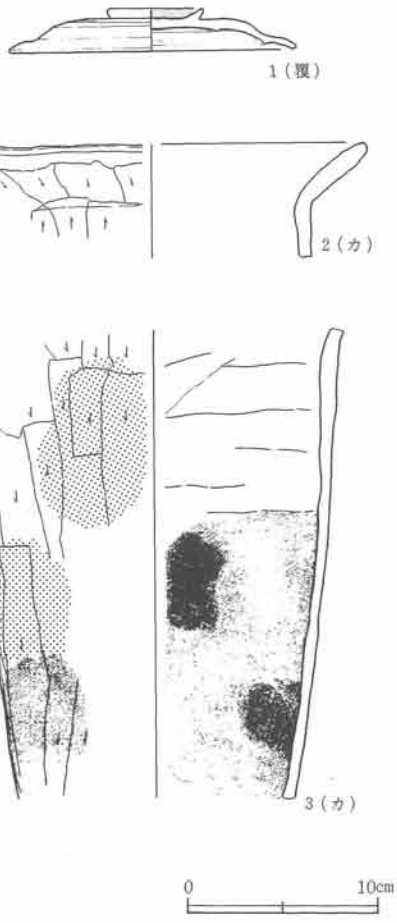
1．黒褐色土。
2．黒褐色土。ローム粒。
3．茶褐色土。ローム粒・焼土粒。
4．茶褐色土。ローム粒・焼土粒。
5．黒褐色土。ローム粒。
8．黒褐色土。ローム粒。
8．黒褐色土。ローム粒。
9．茶褐色土。多量のローム粒。

住居跡全景

カマド内甕（遺物２・３）出土状況

0　1m

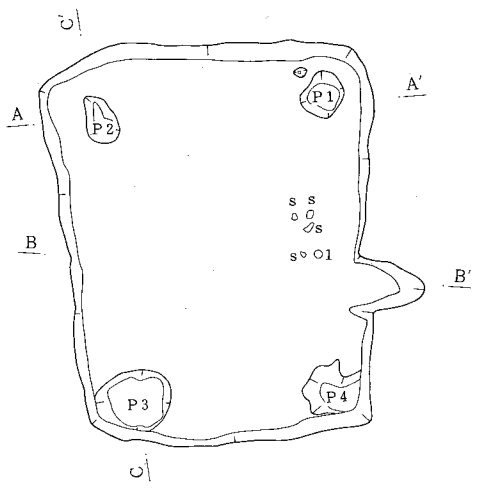
図－287　H447号住居跡

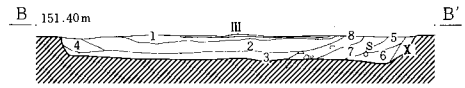


図－288　H447号住居跡出土遺物

H447号住居跡（５Ｈ－176）　**位置**　調査区域北部、ワ10にある。台地北寄りの緩やかな斜面上に位置する。東に接して50号溝が走っている。　**形状**　北西～南東に長軸を持つ隅丸の不整方形で、南北2.17m、東西2.75mである。全体的に膨らみを持った形である。長軸方向はＮ－102°－Ｅ、面積は5.5m²、壁高は21～38cmである。周溝は存在しない。　**床面**　凹凸が激しく、荒れており、埦底状の形を呈する。　**ピット**　床面に４個（Ｐ１～Ｐ４）あるが、位置、形状等から推して、柱穴とは考えにくい。ピットの性格、機能等については不明である。　**カマド**　東壁南寄りにある。左袖部に袖石に使用したと見られる石が残存する。覆土中より焼土や土器が出土し、使用されていたことは確実と思われる。全長62cm、袖部内幅60cm前後、燃焼部長50cm前後、壁への掘り込み角度49°(水平面から)、壁外の掘り込みは、カマドを中心にして右から44cm、左から62cmである。住居床面と火床面は、床面の認定が難しいが、ほぼ同じと考えられる。　**遺物**　カマド内より土師器長胴甕の一部（２、３）が出土した。　（鵜木）

出土遺物　　**須恵器**　蓋(1)、右回転ロクロ使用。内面にかえりをもつ。切り離し技法不明。天井部中央に、円形の扁平なつまみを貼付。つまみ部調整。つまみ部周辺回転ヘラ削りを施す。色調は淡青灰色。礫や黒色粒を含む。つまみ部に朱が付着する。　**土師器**　甕(２・３)、同一個体と思われる。器壁が厚く、長胴甕の形態を示す。口唇部外面に粘土紐接合痕を認める。口縁部は内外面横ナデ、頸部から胴部外面にかけて縦ヘラ削り、内面はナデが施される。色調は黄褐色。砂粒を多量に含み、軟質である。胴部外面は煤が付着し、火熱によるものか、器面が荒れている。（中束）



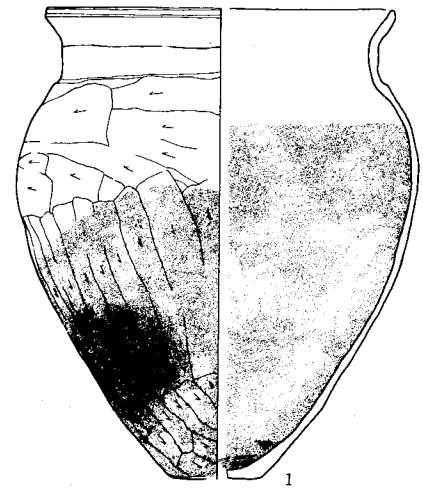


住居跡全体
1．黒色土。
2．黒色土。
3．暗褐色土。ローム粒。
4．黒褐色土。ローム粒。
5．暗赤褐色土。焼土粒・炭化物。
6．暗赤褐色土。比較的多量の炭化物。
7．黒褐色土。ローム粒・焼土粒・炭化物。
8．黒褐色土。ローム粒。

0 1 m

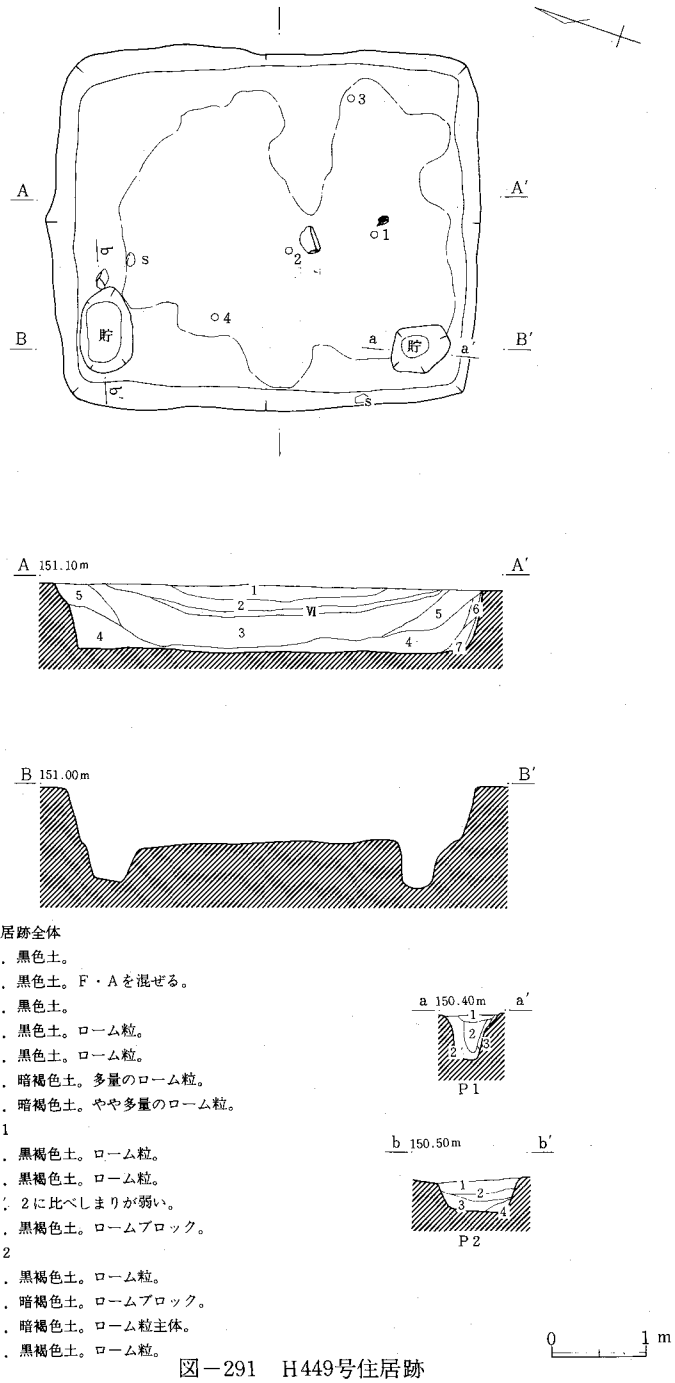
図－289　H448号住居跡

H448号住居跡（5H－177）　**位置**　本台地の調査区域の中央付近で、台地西端寄りのリ3に所在する。本住居跡は、南北溝47・56号と東西溝60号に挟まれており、カマドを持つ住居跡としては、最南端にあるものの一つである。　**形状**　南北4m、東西3.35mの南北に長軸を取る隅丸台形の住居跡である。壁は南壁が外側に膨む弧を描くが、他はほぼ直線をなす。北東隅と北西隅は、気持張り出し状になっている。長軸方向N－17°－E、面積11.8m²、壁高17～28cmで北壁側がやや高い。周溝は認められなかった。　**床面**　踏みしめられて固くなっている所は、特に認められなかった。床面の平面観察によると、Ⅺ層を床面としており、貼床は認められなかった。　**ピット**　住居跡四隅にピットが認められた。深さは北東隅のP2が28cmとやや深いが、他は9～14cmである。南東隅のP4は貯蔵穴とも見られるが、四隅のピットから考えて柱穴と見るのが妥当であろう。柱穴間の距離は、東西方向P1～P2＝2.4m、P3～P4＝2.2m、南北方向P1～P4＝3.2m、P2～P3＝3mで、台形ぎみの矩形に配置されている。　**カマド**　東壁中央南寄りに、壁外に構築している。右袖部は地山を掘り残して、左袖に前端をそろえている。全長78cm、壁外掘り込みは右壁60cm、左壁76cm、燃焼部長52cm、袖部内幅46cm、燃焼部先端の壁への掘り込み角度31°。火床面は先端部に向かって低くなり、そこで住居床面より－6cmである。　**遺物**　カマド前の床面上で土師器甕（1）が細片で出土した。　**テフラ**　覆土中1層上面に、B軽石の純層がわずか残存した。　（唐澤）



図－290　H448号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　甕（1）、いわゆるコの字状口縁甕で、頸部の立ち上がりは明確である。口唇部外面は平坦で、先端を尖り気味に仕上げる。胴部は丸く張った肩から直線気味に底部まで続く。全体に整った形状を示す。調整手法は口縁部に指頭痕を残す横ナデ、頸部と肩部及び口縁外反部との境には浅い凹線、胴部外面は肩部で横ヘラ削り、それ以下では斜ヘラ削り、同内面はヘラナデで、底部付近にはハケ目状のヘラナデ痕、底部外面はヘラ削りを施す。胴部外面の底部付近ヘラ削り個所では、ヘラ削り時にできる稜線を顕著に残す。色調は肌色に近い淡褐色で、胎土中に若干の小石と粗い砂粒を混ぜる。胴部外面には煤が、同内面には黒色炭化物が付着する。　（唐澤）

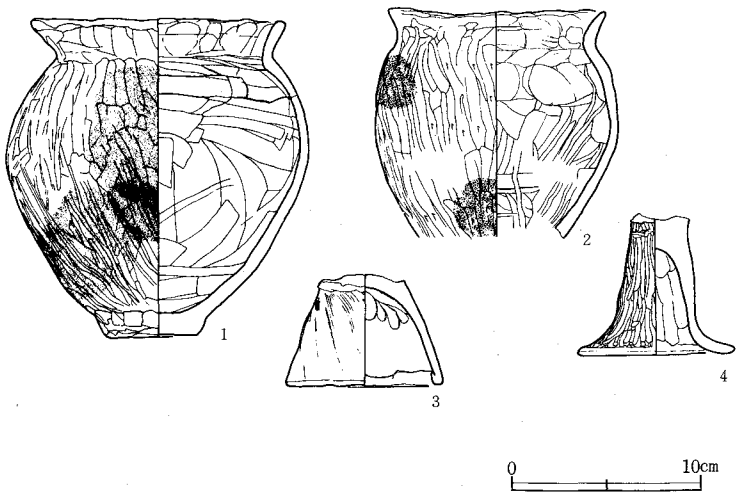


住居跡全体
1．黒色土。
2．黒色土。F・Aを混ぜる。
3．黒色土。
4．黒色土。ローム粒。
5．黒色土。ローム粒。
6．暗褐色土。多量のローム粒。
7．暗褐色土。やや多量のローム粒。

P1
1．黒褐色土。ローム粒。
2．黒褐色土。ローム粒。
2′．2に比べしまりが弱い。
3．黒褐色土。ロームブロック。

P2
1．黒褐色土。ローム粒。
2．暗褐色土。ロームブロック。
3．暗褐色土。ローム粒主体。
4．黒褐色土。ローム粒。

図－291　H449号住居跡

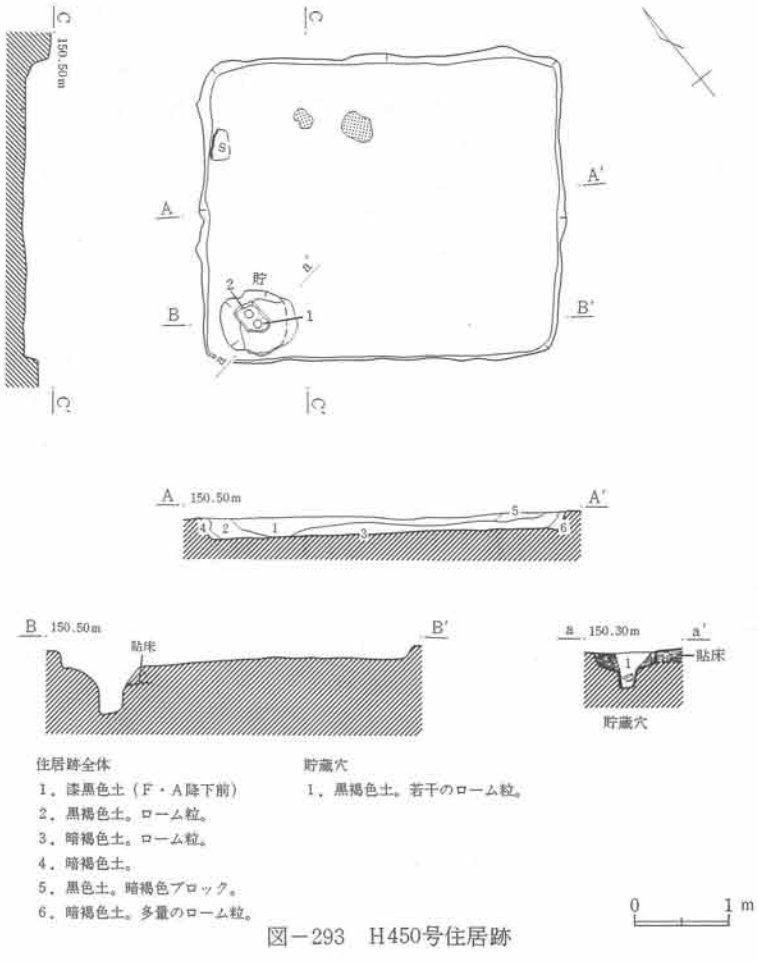


図－292　H449号住居跡出土遺物

H449号住居跡（５H－178）　**位置**　リ３。H448号住居跡の南西４mの所に隣接する。石田川期の住居跡としては、本台地では、分布の最北端に位置する。　**形状**　南北3.5m、東西4.1mの隅丸長方形。壁は四壁とも外側に膨む孤を描くが、西壁はやや直線化傾向が強い。長軸方向N－134°－E、面積12.9㎡、壁高70cm前後で概して深い。周溝は認められなかった。　**床面**　広範囲にわたって、固く踏みしめられている。西壁沿いには広く踏みしめられてない部分がある。　**炉**　床面上で焼土化した所は認められなかったが、住居中央西寄りの床面に焼石が散乱していること、同所の北側に接して、床面の軟らかい部分が、固く踏みしめられた範囲内に入り込んでいることから見て、この入り込んだ地点＝住居中央北寄りの所に、地床炉を想定することができる。　**貯蔵穴**　南東隅と南西隅の２ヶ所で確認された。前者は下端が長円形をなし、規模は66×50cm、深さ51cm、後者は長軸を西壁に合わせた南北に細長い隅丸長方形で、規模は92×56cm、深さ39cmである。　**遺物**　住居中央西寄りの焼石と一諸に平底甕(1、2)、北壁沿いで台付甕脚部（3)、南西隅貯蔵穴の西側から高坏脚部（4）等が出土した。いづれも床面から３～10cm浮く。　**テフラ**　覆土中にF・A純層。　（唐澤）

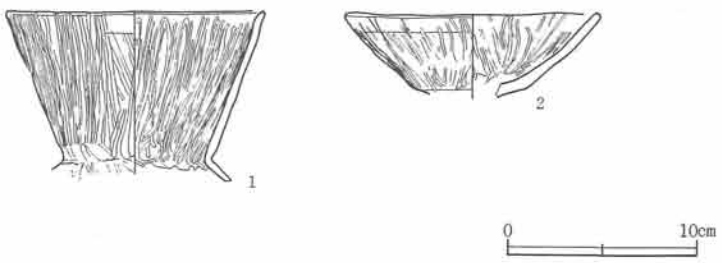
出土遺物　　**土師器**　甕（１～３)、１は単口縁の平底甕で、ほぼ完形で遺存した。外面調整は、口縁部で指頭痕を残すヘラ削り状の粗い縦または斜のヘラナデ、胴部は全面縦ヘラ削りで、下半に斜の粗いヘラ磨きを重ねる。内面調整は、口縁部で指頭痕を残す横ヘラ削り、胴部内面は強いヘラナデで、上位と下位には横、中位には斜または縦に施す。底部外面はヘラ削り後ヘラ磨きを加える。全体の調整は非常に雑で、形状の歪み、器壁の凹凸等が激しい。２は１に比べ肩の張りの少ない甕で、底部を欠失する。１同様つくりは非常に雑である。外面調整は口縁部上半に指押え、下半から胴部全体に縦ヘラ削り、内面調整は口縁部にヘラによる横の強いナデつけ、胴部は全面横ヘラナデで、下半に粗いヘラ磨きを重ねる。１・２の胴部外面には煤が付着する。３は台付甕の台部で、端部に折り返しを持つ。外面のハケ目を斜ヘラナデで帯状にすり消す。内面は指ナデである。つくりはやや雑である。　高坏（4)、脚部のみ残存する。柱部に若干エンタシス状の膨みを持つ。外面調整は縦ヘラ磨き、内面調整は指ナデによる。裾部に黒斑が見られる。１～４は淡褐色あるいは白味の強い淡褐色で、胎土中に雲母や粗砂を混ぜる。　（唐澤）

H450号住居跡



図－293　H450号住居跡

H450号住居跡遺物出土状況

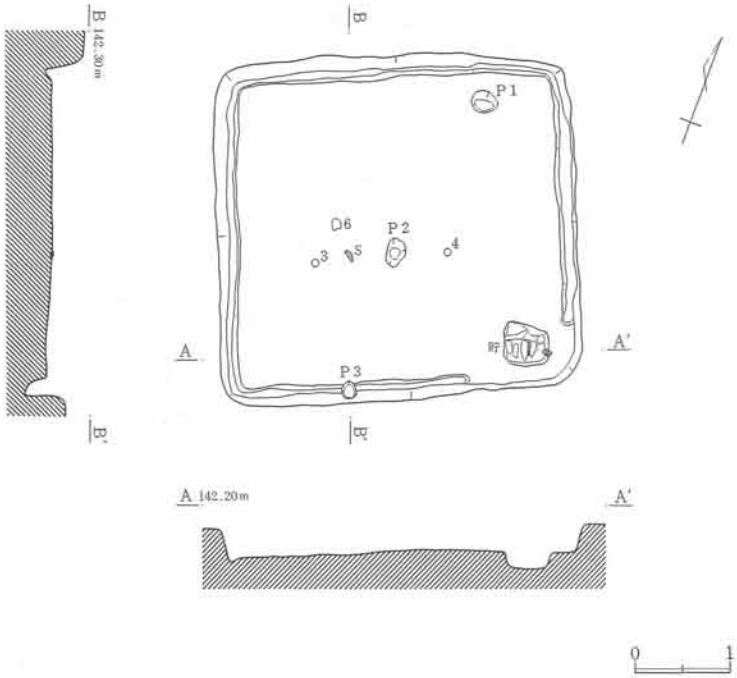


図－294　H450号住居跡出土遺物

H450号住居跡（5H－179）　**位置**　1号墳の北東約8mの、ヌ2に所在する。すぐ北には、同じ石田川期のH458号住居跡が隣接している。　**形状**　南北3.1m、東西3.75mの隅丸長方形を呈す。壁はほぼ直線をなしているが、南壁の西端の貯蔵穴部分で、やや張り出しぎみの孤を描く。長軸方向N－103°－E、面積11.3m²、壁高11～27cmで北壁側がやや高い。周溝は検出されなかった。　**床面**　貼床は、貯蔵穴の東側壁面に厚さ12cmで認められた。他の例から見て、住居中央部を囲む周溝状の掘り形に貼床を施したものと推定される。床面で、踏みしめられて固い部分は認められなかった。　**炉**　北壁西寄りに近接して、床面に2ヶ所焼けている所が認められた。焼土の表面は軟らかく、焼けもあまり強くないものであったが、すぐ西側の壁下から焼石が出土しており、焼失住居でもないことから判断すれば、本住居に伴う地床炉と見るのが妥当である。焼石は偏平な石で、表面が非常に磨滅していた。　**貯蔵穴**　南西隅。2段に掘削されている。上段は下端が隅丸長方形と推定され、規模は70×68cm、深さ16～20cmである。下段は上段の北東壁に寄せて、規模39×25cm、深さ20cmの不整形に掘り下げている。　**遺物**　住居跡北東隅の、床面または床面直上から、長頸壺頸部（1）、高坏坏部（2）等の小片が出土した。　**その他**　覆土中には、榛名山の一峯二ツ岳墳出にかかる軽石はまったく認められなかった。軽石は、浅間山噴出にかかるC軽石のみであった。　（唐澤）

出土遺物　**土師器**　壺（1）、直線的に開く口縁部を持つ長頸壺で、肩部以下を欠失する。口縁部の調整は内外面共に曲線的に施されたやや斜めのヘラ磨きで、口縁端部付近には横ナデ痕を残す。若干残存した肩部には外面に縦ヘラナデ後縦ヘラ磨き、内面に指押えを施す。ヘラミガキは粗い。色調は暗い淡茶褐色。高坏（2）、坏部のみ残存する。坏部は内彎しながら立ち上がるが、底部外縁に稜を持つ。調整は内外面に縦のヘラ磨きを密に施し、口縁部先端には横ナデ痕を残す。色調は明るい淡褐色で、ていねいなつくりである。1・2共に堅緻な焼成で、胎土中に雲母や石英を含む。　（唐澤）

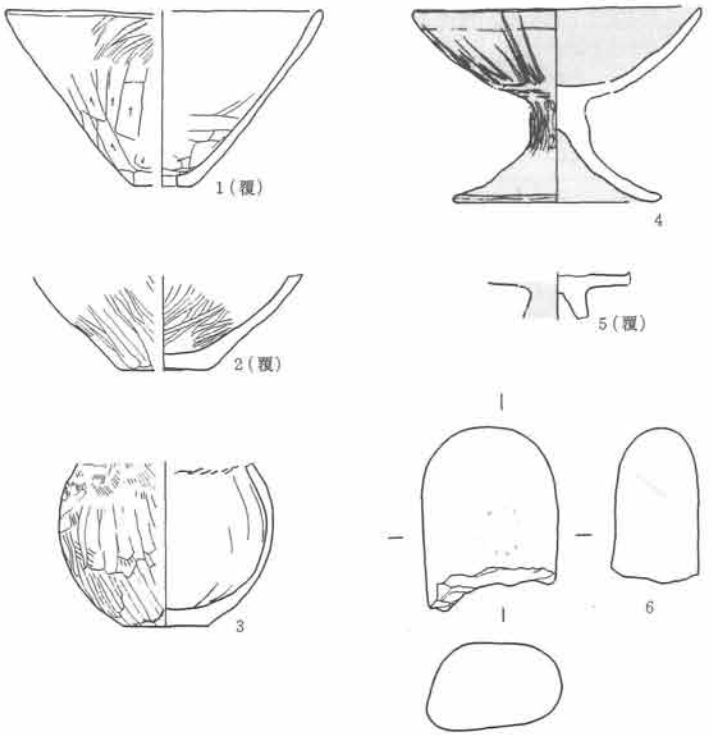
H451号住居跡



貯蔵穴内石出土状況

図－295　H451号住居跡

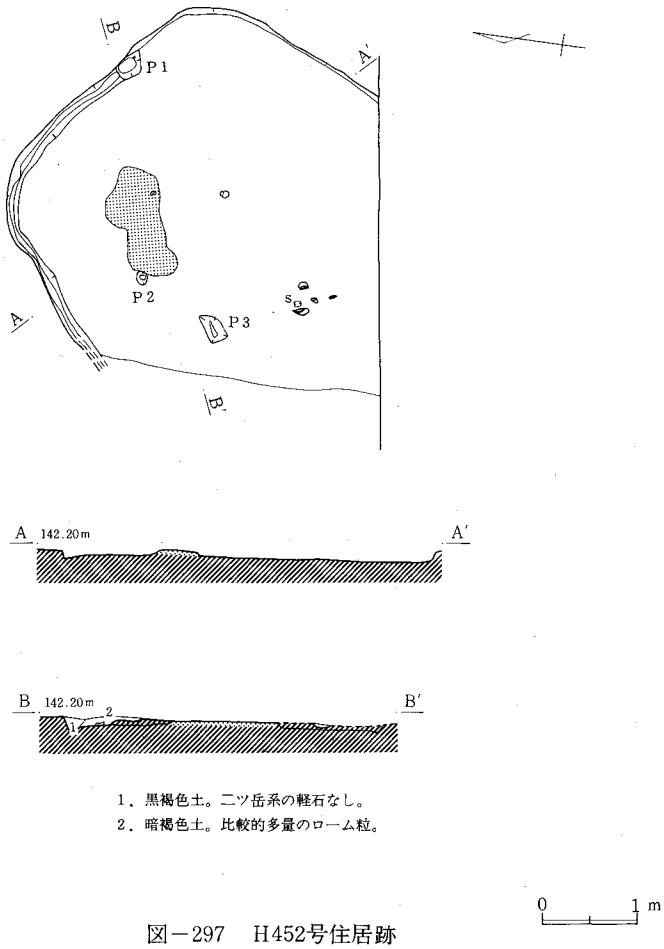
H451号住居跡（5H－180）　**位置**　ム107。北東に隣接して2号墳が所在する。　**形状**　南北3.4m、東西3.7mの隅丸長方形。長軸方向N－64°－E、面積11.9m²、壁高18～43cm（西壁側）。南東隅を除き周溝がめぐる。　**床面**　特に固い所も、貼床もない。　**ピット**　住居中央（P2）及び北東隅付近（P1）。深さ、P1、15cm、P2、12cm。いづれも性格不明。　**炉**　特に見受けられないが、P2の西側に焼け石1を含む石2石が、床面直上から出土しているので、この辺に地床炉を想定することもできる。　**貯蔵穴**　南東隅。下端で整った長方形を呈す。規模は48×44cm、深さ18cm。貯蔵穴には、細長い割れ石が9個敷きつめられ、その一端にかかるようにやや大ぶりな自然石が置かれていた。割れ石のうち2個は焼石であった。　**遺物**　P2周辺で、床面から3～8cm浮いた状態で土師器高坏等が出土した。（唐澤）



図－296　H451号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　壺（3）、球形の胴部を持つ小型壺。口縁部を欠失する。外面調整は肩部に斜ハケ目、1ケ所それに重ねて斜の櫛描、肩より下は縦ヘラナデ、内面調整は頸部付近に斜櫛描文、胴部は底部中央に向かう放射状の縦ヘラナデ。底部外面ヘラナデ。胴部外面に煤が付着する。　甕（2）、胴部下位から底部にかけて残存。外面は縦ヘラ磨き、内面は斜ヘラ磨き。底部外面はヘラ削り後粗いハケ目。調整は全体に雑である。　甑（1）、単孔。口縁部器壁は厚めにつくり、その外面には粗い斜ハケ目を施し、他と区別する。口縁部を除く外面調整は縦または斜ヘラナデ、内面下半には横ヘラナデを施す。底部外面ヘラ削り。褐色で焼成良好。　高坏（4・5）、両者共赤彩を施す。5は坏部外面に弱い稜、柱部の短かい脚部を持つ。外面調整は坏部側面に斜、底部に横、脚部に縦のヘラ磨きを施す。坏部内面は厚く著しい剝落があるが、ヘラ磨きと見られる。脚部内面は上半が横ヘラ削り、下半は櫛描状の横ハケ目を残す。5は坏部底面に広い平坦面、坏部外面に稜、エンタシス状に膨む脚部を持つ形状と推定される。柱部内面には絞り目が見られる。坏部内外面と脚部外面ヘラ磨き。　**その他**（6）輝石安山岩。転石。　（唐澤）

H452号住居跡



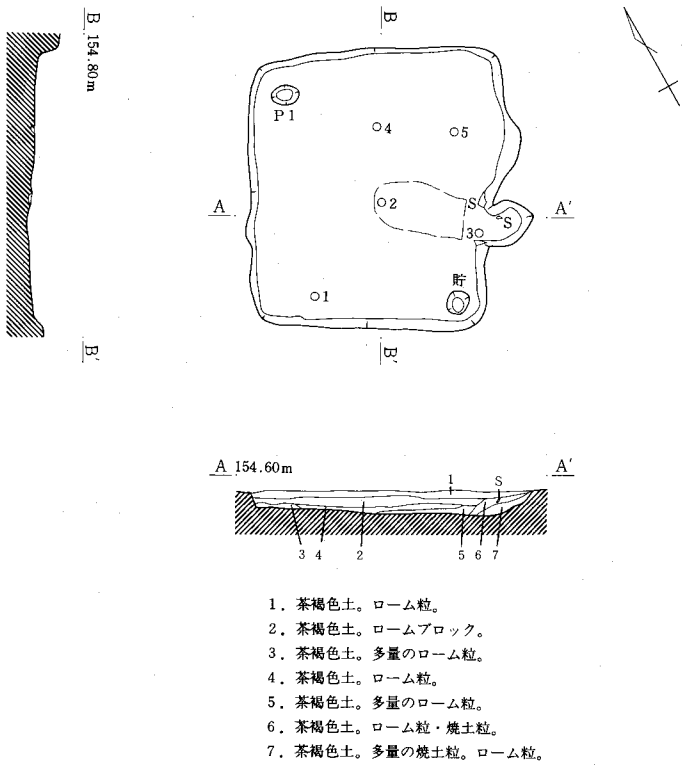
1．黒褐色土。二ツ岳系の軽石なし。
2．暗褐色土。比較的多量のローム粒。

0 1 m

図－297　H452号住居跡

H452号住居跡（5 H－181）　**位置**　ム108。本台地における調査区域の南端で、H451号住居跡とともに、東側谷地に面する崖に近い所に位置している。西に隣接して4号墳がある。本住居跡の南側は、生活道路に一部がかかるため未調査である。　**形状**　遺構の大部分が削平されていたため、北壁全部と東西壁の一部が確認されただけで、全体の形状を知りうる資料を把握するにいたらなかった。焼け石等の散布状況から見て、南北3.6m以上、東西4mであるが、形をいま一つ明確にできないため、規模は不明と言わざるを得ない。北壁の走向はN－103°－E、面積は少なくとも15㎡以上はあるものと見られる。北壁から西壁にかけて幅8～13cm、深さ3～7cmの周溝をめぐらす。　**床面**　全体に軟らかく、貼床は認められない。　**ピット**　3個認められたが、北壁沿いのP1は、39cmの深さを持つが、P2・P3の深さは5ないし11cmである。　**炉**　北西隅寄りに、南北に細長い焼土範囲が検出された。表面は赤橙色に固く焼け込んでおり、地床炉と見られる。調査時点で表面の一部はすでに削平されていた。　**遺物**　北西隅付近の床面から、石田川期の甕もしくは壺の小片が1個出土したのみで、他は縄文式土器の小片であった。　（唐澤）

H453号住居跡（図版43）

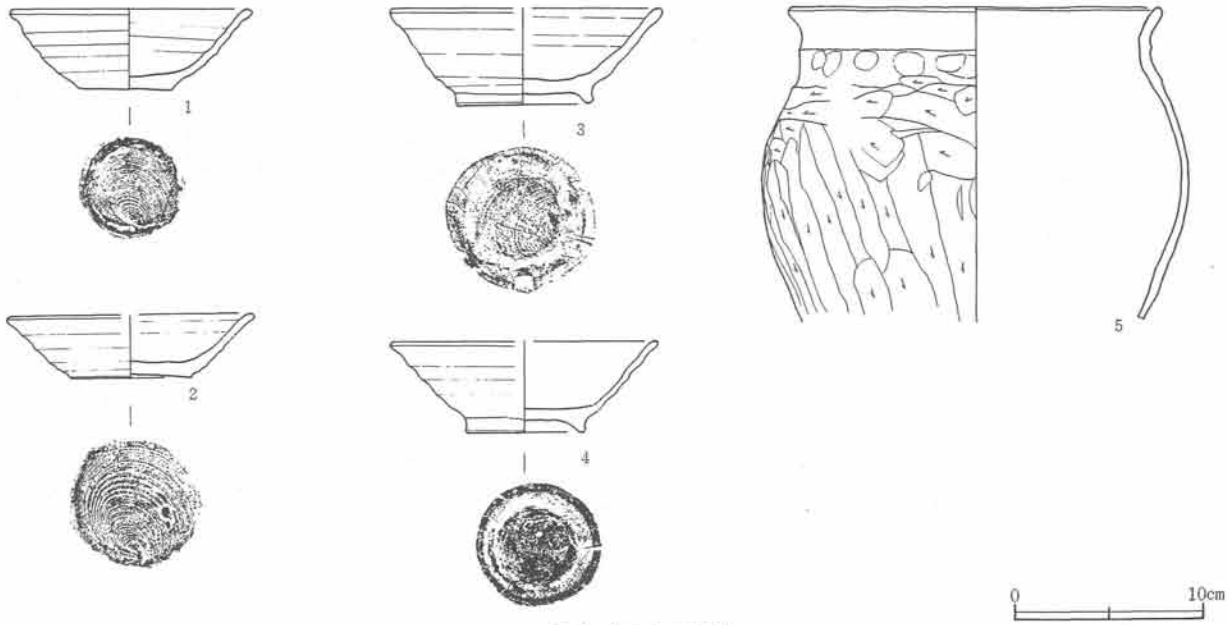


1．茶褐色土。ローム粒。
2．茶褐色土。ロームブロック。
3．茶褐色土。多量のローム粒。
4．茶褐色土。ローム粒。
5．茶褐色土。多量のローム粒。
6．茶褐色土。ローム粒・焼土粒。
7．茶褐色土。多量の焼土粒。ローム粒。

0 1 m

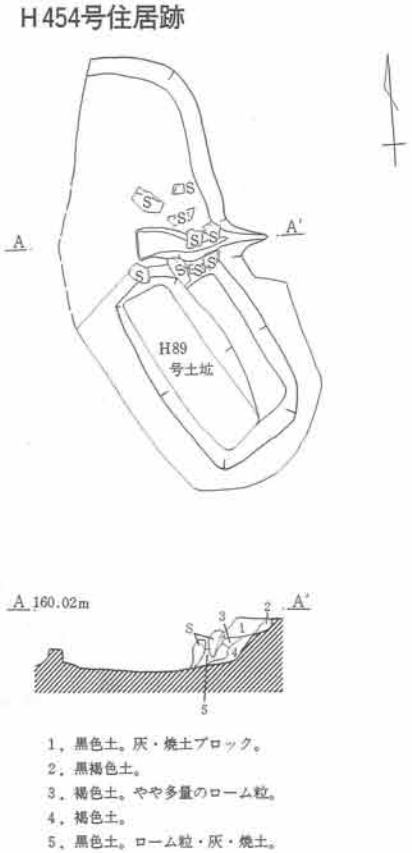
図－298　H453号住居跡

H453号住居跡（5 H－182）　**位置**　調査区域の北部、ヲ8にある。台地の緩やかな斜面上に位置する。遺構の分布が密の所で、西に接してH440住居跡がある。　**形状**　北東～南西に長軸を持つ隅丸台形で、南北2.87m、東西2.65mである。東壁は西壁より北端が25cm長く、外方に大きな膨らみを持つ。長軸方向はN－30°－E、面積は6.7㎡、壁高は9～24cmである。周溝は存在しない。　**床面**　カマド手前が、長円形に100×50cmの広さで踏み固められている。　**ピット**　床面北西隅に1個あり（P1）、規模は30×22cm、深さ13cmである。その性格、機能等については不明である。　**カマド**　東壁南寄りにある。左右袖部と左壁燃焼部に石が、又、左袖部から燃焼部にかけて粘土が残存しており、石材と粘土をもって構築したと考えられる。全長58cm、袖部内幅38cm、燃焼部長30cm前後、壁への掘り込み角度47°、壁外掘り込みは50cmである。住居床面と火床面のレベル差は－2cmである。　**貯蔵穴**　南東隅にある。円形で、規模は26×24cm、深さ31cmである。　**遺物**　カマド内から須恵器埦(3)が、住居跡床面からは、土師器甕(5)、須恵器坏（1、2）、同埦（4）が出土した。　（鵜木）



図－299　H453号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（5）口縁部はコの字形態を示し、横ナデにより、中央に稜が生じる。器面は、外面胴上半部横ヘラ削り、胴下半部縦ヘラ削りが施される。内面はナデにより平滑。炭化物付着。　**須恵器**　坏（1・2）1の底部は小さく、口径の⅓以下の値を示す。内面はナデにより平滑。底部切り離しは回転糸切り。底部がやや突出する。製作上底部には粘土が補足された可能性も考えられる。内外面黒色。2は右回転ロクロ使用。皿状を成す。底部切り離しは回転糸切り。埦（3・4）3は右回転ロクロ成形。底部回転糸切り後、高台部貼り付け。更に高台周辺部調整。色調は体部灰黄色、底部辺黒色。砂粒を含み、軟質。4はロクロ成形。底部回転糸切り後、高台部貼り付け、周辺部調整。2同様底部の作りは小さく、やや突出する様相を示す。内面は平滑。色調は淡灰色。砂粒を含み、軟質。　（中束）

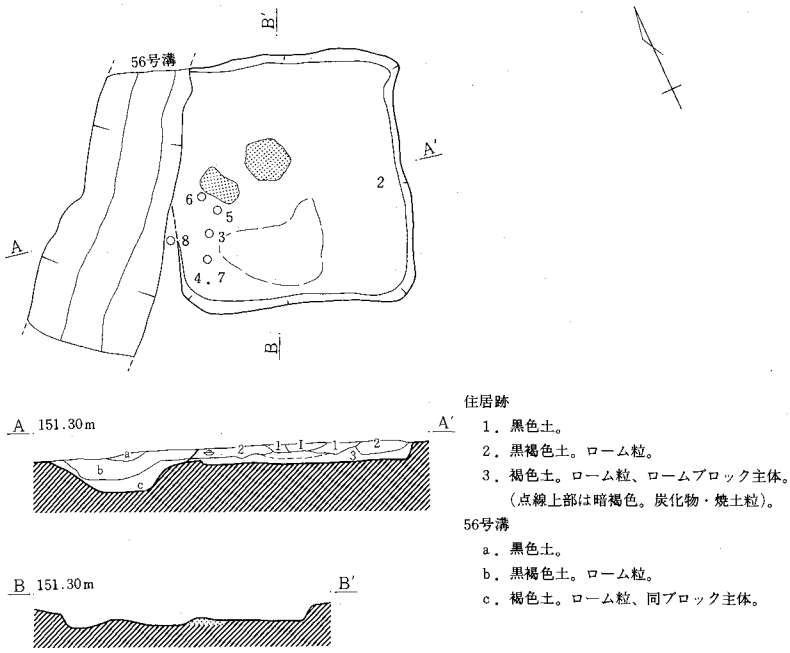


住居跡全景

H454号住居跡（5 H－183）　**位置**　調査区域北側、南に緩やかに下る台地上のワ9に所在する。　**形状**　住居の西半分をH443号住居跡に削り取られ、更に残存部分南半をH79号土坑によって掘りこわされているため、東壁及び北壁の一部にかかる住居北東隅とかろうじて破壊を免れたカマドを残すのみである。したがって規模は推定で南北2m以上×東西1.7m以上。壁高は遺構確認面から10～38cm。カマドを持つ東壁の方位はN－13°－Wで、周溝及びピット、貯蔵穴は確認されなかった。　**カマド**　東壁南寄りと思われる位置にあり、全長84cm、袖部内幅20cm、燃焼部長42cmで、壁外への掘り込み62cmと細長く、左右2石ずつの袖石を使用している。（カマド手前の石は住居に付くものでなく、後で投げ込まれたものと思われる）　**遺物**　床面出土の遺物はなかった。　**重複関係**　西側でH443号住居跡、南側でH79号土坑、そして南北に走る49・50号溝を切り合う。いずれも本住居跡の方が旧い。　（松村）

図－300　H454号住居跡　0　1m

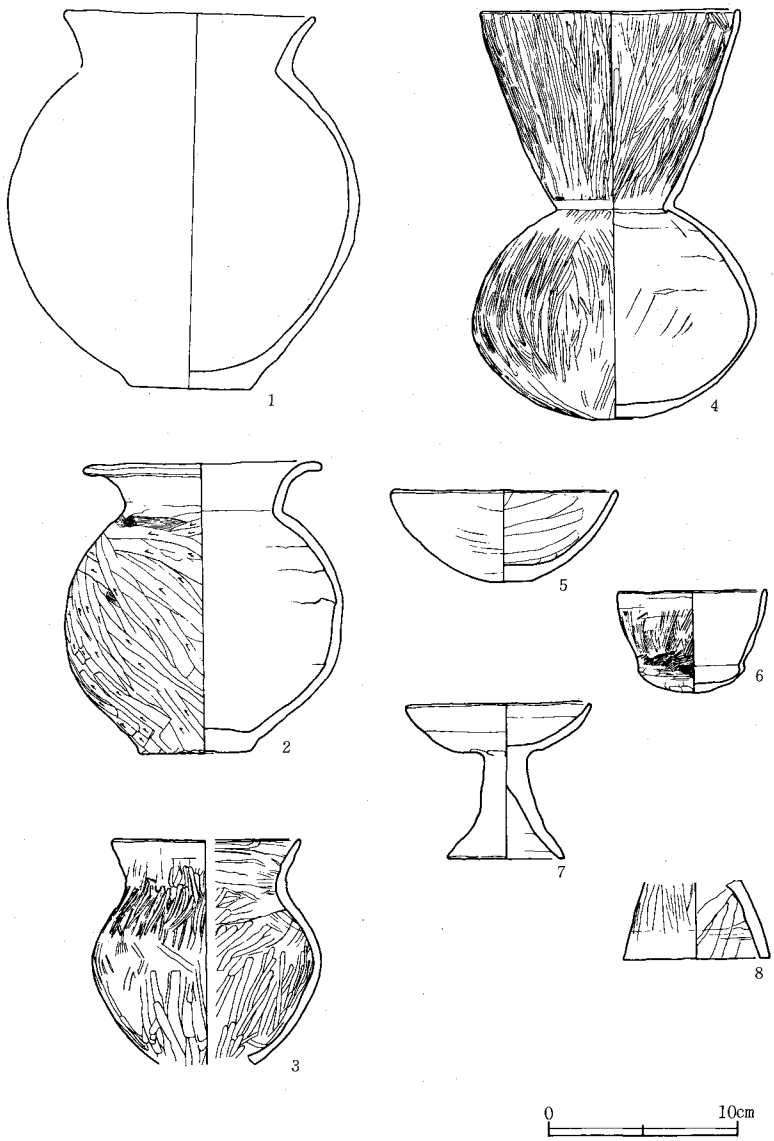
H455号住居跡（図版44）



図－301　H455号住居跡

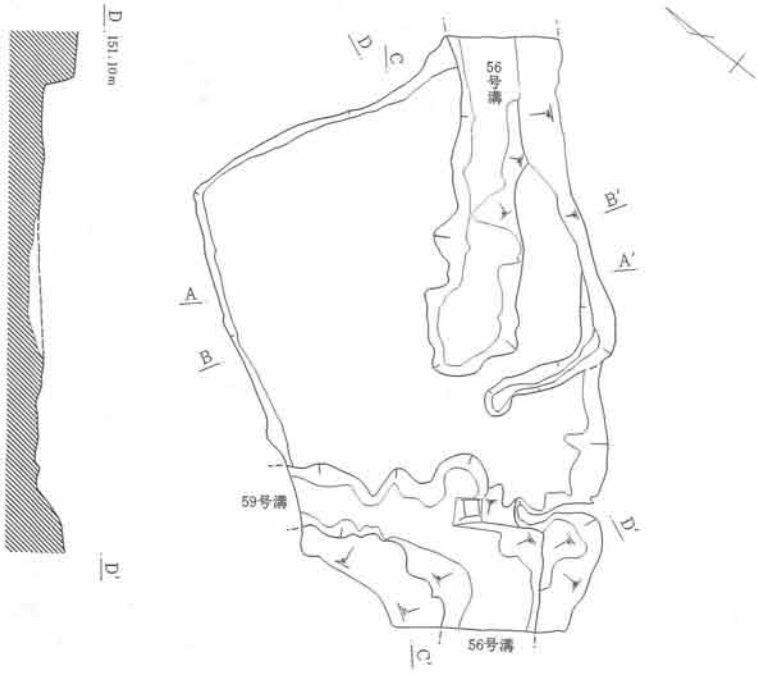
H455号住居跡（5H－184）　**位置**　調査区域西際、標高151mのチ3に所在する。　**形状**　西壁北3分の2及び北西隅を56号溝によって切られているが、1辺2.4mの隅丸方形を呈する。壁は若干の膨らみはあるがほぼ直線で、壁高12～20cm。方位はN－7°－W、面積は推定で5.7m²である。周溝及びピット、貯蔵穴は確認されなかった。　**炉**　住居中央やや西寄りの床面に、焼土範囲が2カ所確認された。中央寄りの炉は48×42cmの不整円形をし、西寄りの炉は42×25cmの隅丸長方形をしており、南壁とこの炉との間は床面が固く踏み固められていた。　**遺物**　踏み固められて固くなった床面の西側（炉に向った時、左手になる位置）で炉の南側にあたる西壁際から、遺物が並べ置かれた状態で出土した。

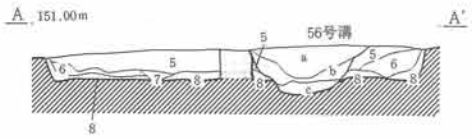
（松村）

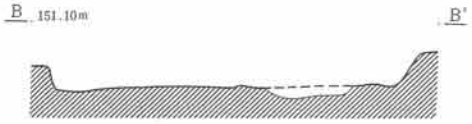


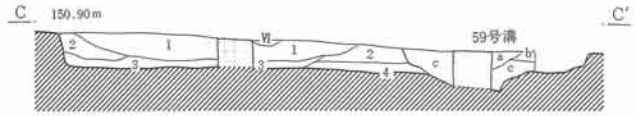
図－302　H455号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1～3・8）、1～3は平底甕。1は口縁部内外面にヘラによる横ナデ、胴部外面に浅い斜ハケ目、同内面に横ヘラナデ、底部外面にヘラ削りを施す。2は口縁部の開きの大きい甕で、口縁部内外面は細かく浅い斜ハケ目の上に斜ヘラ削りで、肩部は更に縦方向に荒い研磨を施す。胴部内面は横方向の浅く細かいハケ目である。3は口縁部にヘラによる横ナデ後部分的に軽いヘラ削り、胴部外面上半に櫛目状工具による縦方向ナデつけ、同下半は縦方向の軽いヘラ削りで器面を平滑にする。胴部内面はヘラミガキ。8は台付甕の台部のみ残存。端部に折り返しはなく、接地面を平にする。外面は指押えの後縦のハケ目、更に縦または斜ヘラナデを施す。下端付近は内外面とも横ヘラナデ、内面は斜ヘラナデ。　壺（4）、偏平な胴にゆるやかに内彎する口縁部を持つ長頸壺で、先端を尖らす。調整は外面と口縁部内面にヘラミガキ。小さな底部はヘラ削り。　埦（5）、小さな平底の底部を持つ。内外全面に横または斜めのヘラナデ。　小型坩（6）、内面及び口縁部上端はヘラによる横ナデ、口縁部外面はハケ目、胴部ヘラ削り。　高坏（7）、浅い坏部。坏部外面上端と内面はヘラによる横ナデ、他は指押え。脚部内面に絞り目。　（唐澤）









住居跡全体
1．黒色土。ローム粒。
2．黒褐色土。ローム粒。
3．黒色土。ローム粒・ロームブロック。
4．褐色土。ローム粒・ロームブロック主体。
5．黒色土。ローム粒。
6．黒褐色土。ローム粒。
7．黒褐色土。ローム粒。
8．褐色土。ローム粒・ロームブロック主体。

56号溝
a．ローム粒・ロームブロック主体層。
b．黒褐色土。砂質。ローム。
c．ローム粒・ロームブロック主体。黒色土。

59号溝
a．黒色土。固い面が数層重なる。
b．黒色土。砂層。
c．黒褐色土。砂質。

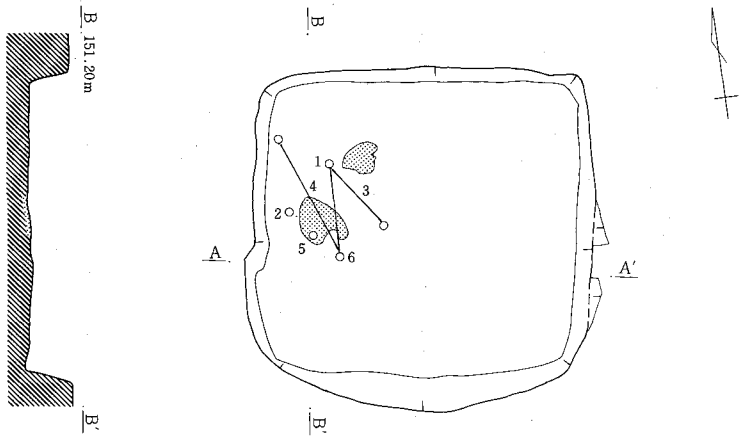
0 1 m

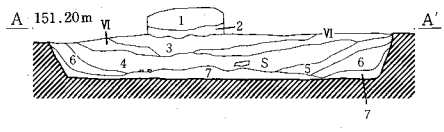
図－303　H457号住居跡

住居跡全景

56号溝との重複状況

H457住居跡（5H－186）　**位置**　調査区域西際で南西に緩やかに下りはじめる台地上、チ3の56号溝と59号溝との交点の位置に所在する。　**形状**　南壁が溝によって掘り取られてないが、南東隅に住居に属す深さ12～16cm、幅8～22cmの周溝が確認されており、東西3.7m×南北3.3mの東西にやや長い長方形をしていることが判る。壁はやや外方に膨らみ、壁高19～36cm。面積は推定で11.4m²、方位はN－95°－Eである。ピット、貯蔵穴、炉あるいはカマドといった施設は確認されなかった。　**テフラ**　本遺構中央付近覆土中にF・A純層の堆積を確認した。床面から23cmの位置にあり2層の間層を挟んでいて、地層断面から、本遺構がほぼ埋り切ってからの堆積である。　**遺物**　本遺構に係る遺物の出土はなかった。　（松村）





1．黒色土。
2．黒色土。
3．黒色土。
4．漆黒色土。ローム粒・ロームブロック。
5．黒褐色土。ローム粒・ロームブロック。
6．黒褐色土。
7．褐色土。ローム粒・ロームブロック主体。

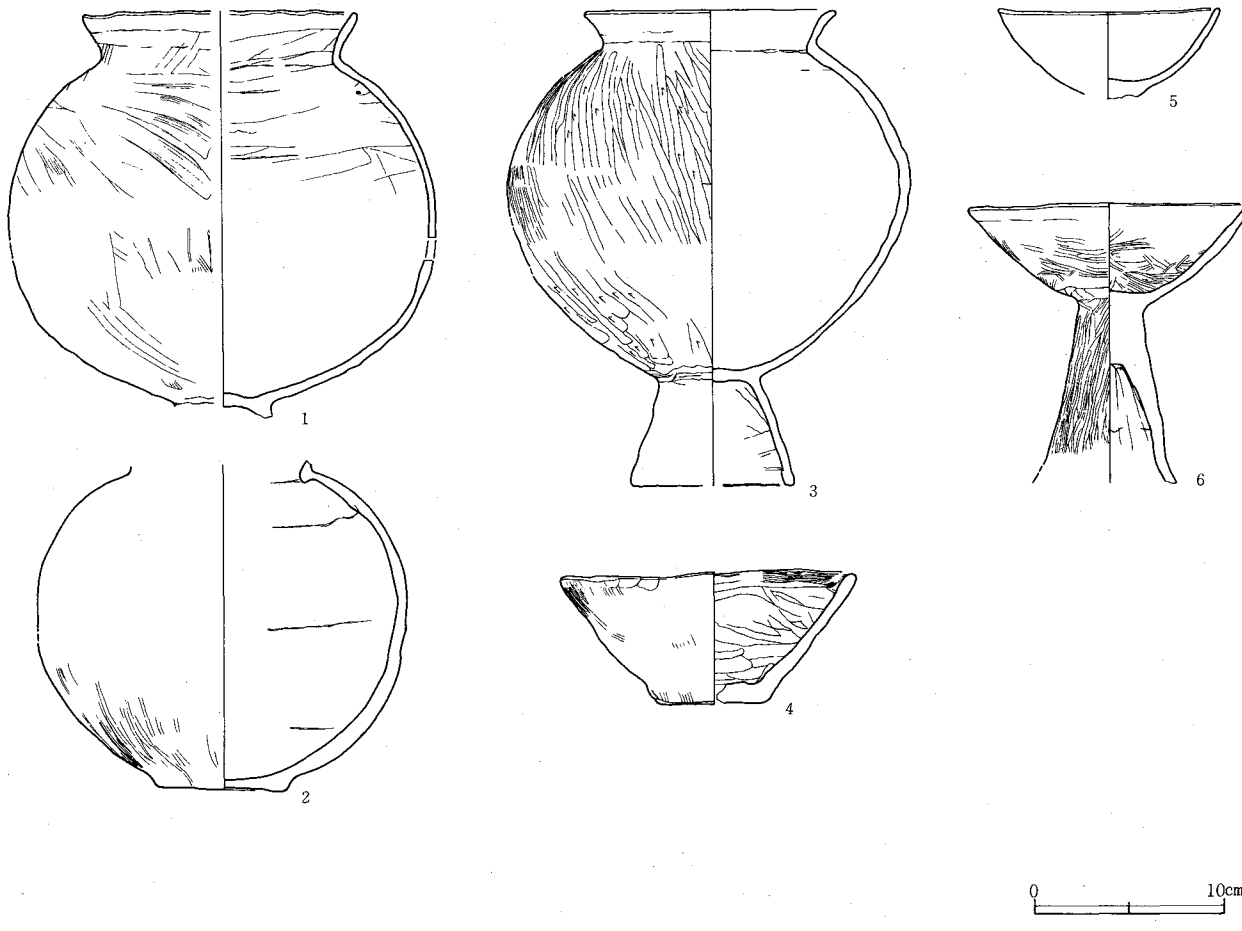
H456号住居跡（5H－185）　**位置**　調査区域西際、標高151m、チ3のH455号住居跡の南側3mの位置にある。　**形状**　南壁がわずかに外方に膨らみを持っている他はほぼ直線の壁で、1辺3.1mの隅丸方形。壁高は39～50cmだが、地層断面から推定される構築時の壁高は約60cm以上である。方位はN－19°－Eで、面積は9.6m²である。周溝及びピット、貯蔵穴は確認されなかった。床面から20cm程の覆土中に厚さ約10cmのF・Aブロックを含む層が確認された。　**炉**　住居北西寄りに2カ所焼土範囲が確認されたが、焼けは弱く形も不整形である。平面形を見ると西壁の南3分の1程が外にやや出っ張っている様に見えるが、ここに広い空間を持たせることを意図したものかどうかは不明である。

遺物　住居南西隅に高坏脚部があった他は炉の周辺に集中して出土した。これらの遺物は、床面上または同直上で出土した。覆土中から石斧、黒曜石片、縄文式土器が出土した。

（松村）

0　1m

図－304　H456号住居跡

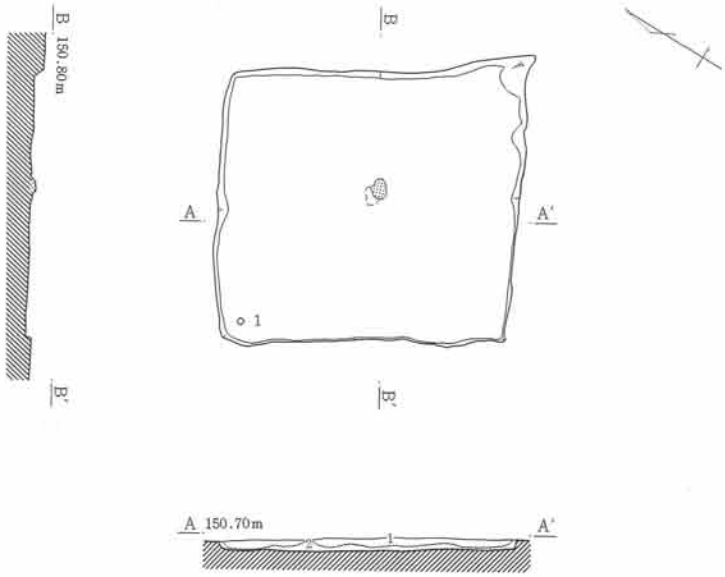


図－305　H456号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1～3）、1・3は単口縁の台付甕。1はやや偏平ぎみの胴部を持つ。口縁部内外面はヘラによる横ナデの後指押えを施すが、粘土紐痕を残す。胴部外面は軽い斜ヘラナデ、同内面は横ヘラナデである。台部を欠失する。小礫や粗い砂粒を含む胎土で、焼成も甘く、つくりも雑である。2は3より若干小型の甕で、胴は球形に張る。調整は口縁部内外面横ナデ、胴部外面は雑なヘラ削り、同内面には横ヘラナデを施す。台部は端部に折り返しを持つ。台部の調整は外面指押え、内面指押え後、指による横ナデ。胎土中に粗い砂粒を含む。2は平底甕で口縁部を欠失する。胴は球形に張る。調整は外面に軽い斜ヘラナデ、内面に粘土紐痕を残す横ヘラナデ、底部外面ヘラ削りである。胎土中には小礫を多量に混ぜ、焼成時に全面に細かいヒビ割れが入る。焼成も甘い。　甑（4）、単孔で、体部は直線的に延びる。外面調整は縦方向のハケ目の後、斜めの軽いヘラナデ。内面は口縁部に細かい横方向のハケ目、体部に斜めヘラナデを施す。粗い砂粒を含み、焼成はやや甘い。　高坏（5・6）、5は坏部のみ残存。胎土中に小礫や多量の粗い砂を混ぜ、内外全面に細かいヒビ割れがある。粗雑なつくりである。形も歪む。調整は内外面に横ヘラナデ、外面下端に縦ヘラナデを施す。6は脚部内面を除く全面に赤彩を施す。坏部内外面及び脚部はヘラミガキで光沢を持つ。脚部内面には縦方向のヘラナデ痕を残す。脚部先端は欠失する。胎土中には粗い砂粒を含むが、焼成は良好である。　（唐澤）

H458号住居跡

H458号住居跡（5H－187）　**位置**　1号墳の北側20m程の所に、住居東隅をヌ3に接して所在する。　**形状**　北西～南東に長軸を持つやや平行四辺形ぎみの長方形で、東西3.2m、南北2.8mである。長軸方向はN－119°－E、面積8.6m²、壁高は非常に低く4～13cmである。4壁ともほぼ直線で、隅も東隅がやや張り出す感じになっている他は南、北隅が鈍角、西隅が隅丸ときっちりと掘られている。　**炉**　住居中央にある。20×16cm、焼土の厚さ6cmの長円形で、炉に接した南西部分が踏み固められている。　**遺物**　住居西隅床面から出土(1)。　（松村）



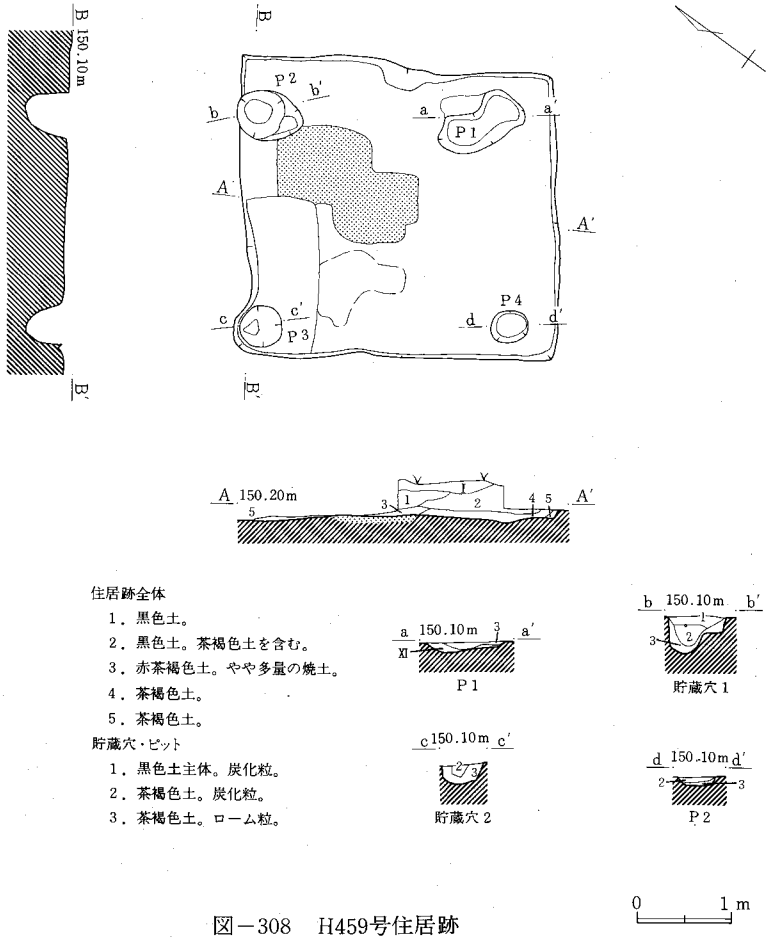
図－306　H458号住居跡

南西隅小型坩（遺物1）出土状況

図－307　H458号住居跡出土遺物

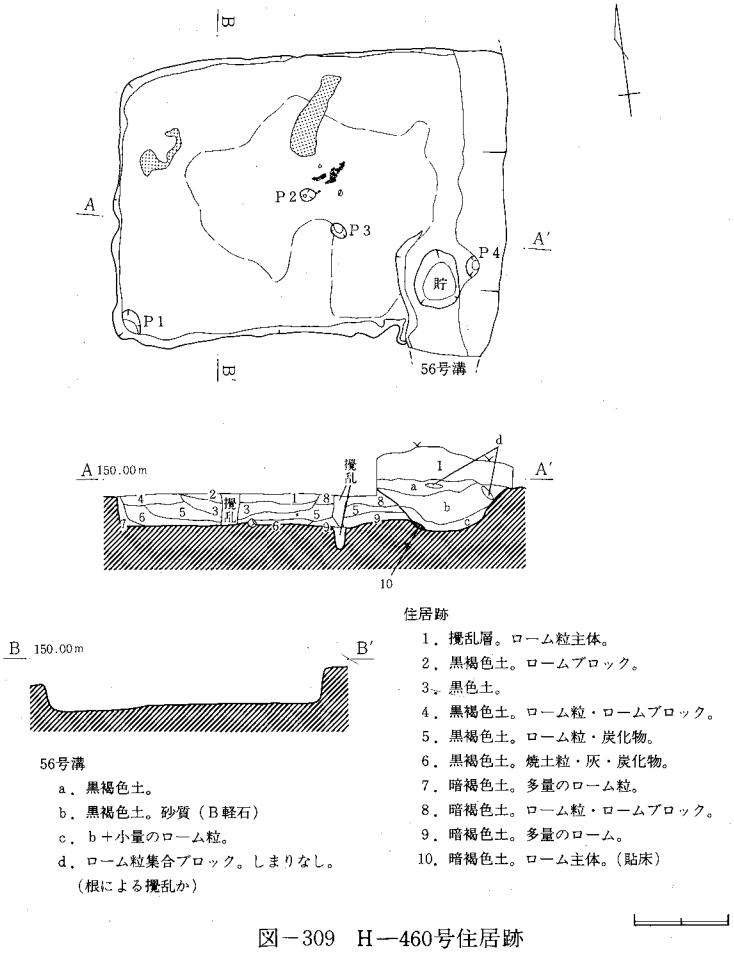
出土遺物　**土師器**　小型坩（1）、口径が胴部径・器高より大きく、胴部径と器高のほぼ等しい坩である。調整は口縁部の内外全面及び底部に粗いヘラミガキを施す。底部外面はヘラ削りである。薄い器肉のつくりで、焼成は良好である。色調は淡灰褐色だが、口縁部中程から下位の外面には、黒斑を有する。体部は極めて偏平な形状を呈す。　（唐澤）

H459号住居跡



図－308　H459号住居跡

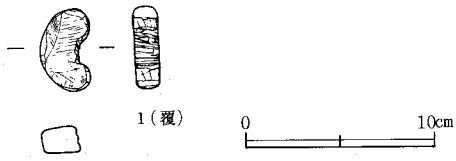
H460号住居跡



図－309　H－460号住居跡

H459号住居跡（5H－188）　**位置**　リ2。本遺構の東25mほどに古墳（1号墳）がある。**形状**　南北3.11m、東西3.29mで方形を呈する。壁の形状は、南壁と東壁はほぼ直線、北壁は中央部で段差をもつ直線、西壁は北半分まで直線で、南側は一旦内に入り込みP3に沿って外に張り出す。壁高は4～8cm。隅角は南西隅の隅丸を除くと、他はすべて直角に近い。長軸は東西で、方向をN－27°－E（南北方向）にとり、面積は9.5m²を測る。**床面**　ついては南西隅付近が固く踏みしめられていた。西壁沿い南方で貼床が確認された。**ピット**　4箇確認されているが、P2・3はその深さや設置場所等からみると貯蔵穴の可能性も指摘できよう。P1とP4は柱穴として機能したと考えられ、それらに関係してP3・P2がときとして柱穴になったとも思われる。また、P1は2箇のピットの連結したものと捉えることができた。**炉**　方形のものが二つ連結している。特に東半分は固くなっており踏み固められた感がある。**貯蔵穴**　西壁の北端と南端にみられる。**その他**　貯蔵穴が2つあること、炉の表面の固さに差があること、P1が2箇のピットの連結したものであること等を考え合わせると、一度建て替えられていると考えるのが妥当であろう。なお遺物の出土はない。　（中澤）

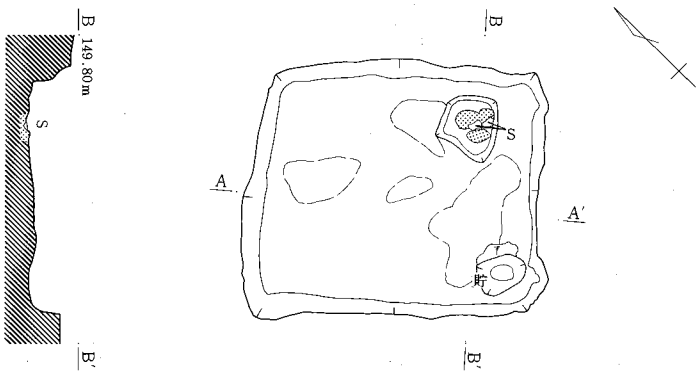
H460号住居跡（5H－189）　**位置**　台地の西端を南北に走る56号溝に切られ、チ1～リ1にかけて所在する。56号溝を挟んで、東にはH459号住居跡が隣接する。南側には、同時期の石田川期住居跡が高い密度で分布する。**形状**　南北2.85m、東西3.6m（推定）の隅丸平行四辺形を呈す。東壁は56号溝と切り合うため不明だが、貯蔵穴の位置から見て、溝の東側下端線がほぼ東壁と一致するものと推定される。北西隅と南東隅が鈍角となる。壁は北壁が外側に膨む弧を描くが、他はほぼ直線的である。長軸方向N－94°－E、面積10.2m²、壁高26～40cmで北壁側が高い。周溝は認められなかった。**床面**　住居中央及びその一部が南壁に延びて、床面の固い範囲が認められた。南壁と接する部分は入口と考えられる。**ピット**　4個認められたが、P4は住居につくか溝につくか不明である。深さは7～17cmで、概して浅い。**炉**　住居中央北寄り。地床炉。**貯蔵穴**　南東隅。この付近は、56号溝により10～20cm床面が削られている。規模は現状で62×48cm、深さ13cm。**遺物**　覆土中から滑石製勾玉の模造品が出土した。**その他**　焼失住居と見られ、中央部床面に炭化材小片が、北壁西半で10cmの厚さで焼土が見られた。**重複関係**　56号溝と切り合う。本住居跡が先行する。　（唐澤）

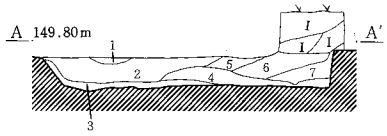


図－310　H460号住居跡出土遺物

出土遺物　　**石製品**　勾玉（1）、滑石製の勾玉である。側面は平坦で、外縁は鋭い角を持つ。C字形の内面には細かく石材を刻んだ跡が残る。両側面の背寄りには弱い稜が見られ、背の部分の厚さを若干減じている。この勾玉については未製品とも考えられるが、石製模造品とみることも可能である。本遺跡では18区住居跡内から臼玉１ケ（所在不明）を検出したのみで、他に石製模造品は出土していない。　（唐澤）

H461号住居跡



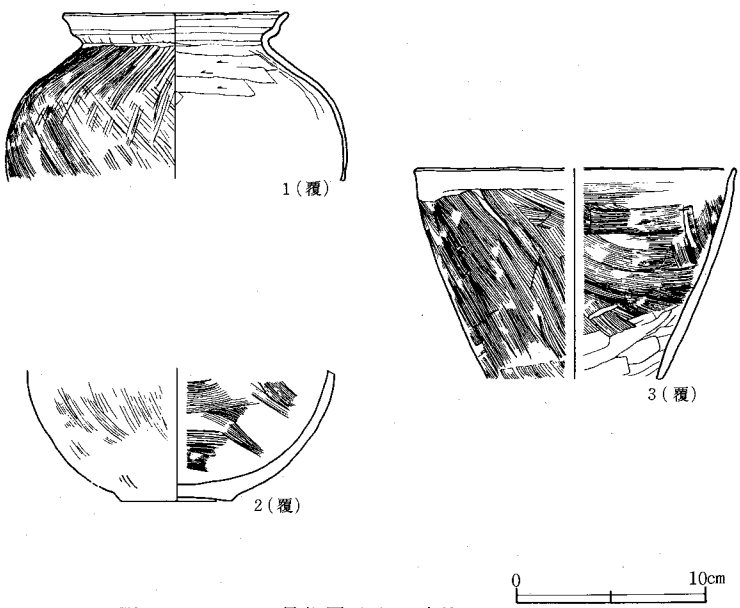


1．茶褐色土。炭化物。
2．黒褐色土。ローム粒・炭化物。
3．黄褐色土。ローム主体。
4．黒褐色土。ローム粒。
5．黒褐色土。多量のローム粒。
6．茶褐色土。多量のローム粒。
7．黒褐色土。ローム粒。

0　1 m

図－311　H461号住居跡

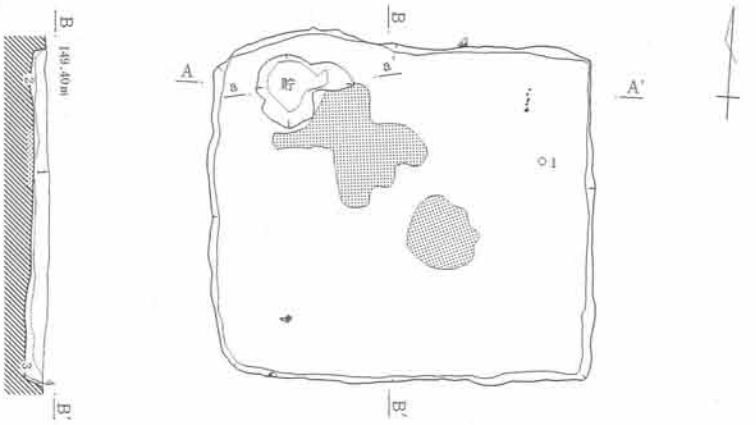
H461号住居跡（５H－190）　　**位置**　上部国道予定の北部、ヌ１にある。西側の谷地に向かって傾斜する台地の緩やかな斜面上に位置する。西に接してH456号住居跡がある。**形状**　北西～南東に長軸を持つ長方形で、南北2.39m、東西2.88mである。南・東壁はほぼ直線であるが、北・西壁は外へやや膨らみを持ち、全体にいびつな形である。南西隅を除き隅丸である。長軸方向はN－111°－E、面積は6.5m²、壁高16～47cmである。周溝は存在しない。　**床面**　炉、貯蔵穴の周囲、中央部、西壁付近の床が硬く踏みしめられている。いずれも不整形の長円状を呈し、規模はそれぞれ50×40cm、140×70cm、50×20cm、80×40cmに亙る。　**炉**　北東隅にある。深さ６cm前後の不整四角形を呈する。規模は68×60cmで、中央に石が２個残存しており、石材を使用した地床炉と思われる。中央40×36cmの範囲に亙り、焼土部分が見られる。厚さ３cmで、強く焼けており、表面も硬く、締まっている。**貯蔵穴**　南東隅にある。長円形を呈し、規模は51×51cm、深さは32cmである。　**遺物**　床面上に遺物はなかったが、覆土中からＳ字口縁甕、長頸壺、小型壺や縄文式土器片が出土した。　（鵜木）



図－312　H461号住居跡出土遺物

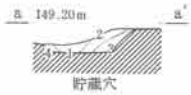
出土遺物　　**土師器**　壺（3）、口頸部の破片であろうか。器面調整は、内外面ハケ目を施した後に、口唇部周辺横ナデ、内面頸部辺に斜ヘラ削りが加えられる。外面には煤が付着し、内面の色調は浅黄橙色を示す。0.5㎜程の石英粒を含む。砂粒の混入は少ない。焼きしまり良好。　壺(2)、胴下半部の残存。底部を円盤状につくり出す。中心部はやや上げ底ぎみにする。内面調達は細いハケ目で、底部はその上にヘラナデを施す。外面は粗いハケ目の上に横ヘラナデを施す。底部外面はヘラ削り。淡い茶褐色で、軟質。　台付甕（1）、Ｓ字状口縁の形態は、緩やかに外反し、外面の張り出しも僅かである。肩部は凹状に屈曲して張り出す。外面は、ヘラ削り後に粗いハケ目を施す。内面は指頭痕を残し、肩部辺ヘラ調整される。口縁部及び胴部外面には煤が付着する。肩部内外面の色調は灰白色。砂粒を含む。　（中束）

H462号住居跡



住居跡全景

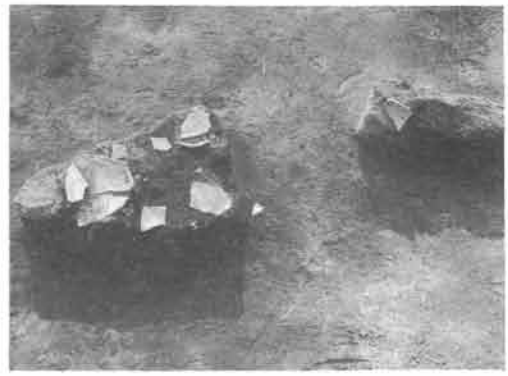
住居跡全体
1．黒褐色土。ローム粒・焼土粒。
2．茶褐色土。多量のローム粒。
3．茶褐色土。多量のローム粒。
4．黄褐色土。ローム粒主体。



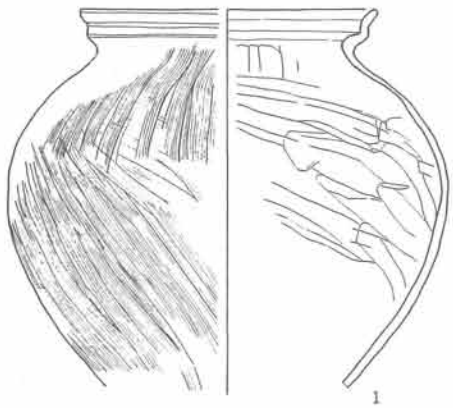
貯蔵穴
1．黒褐色土。ローム粒。
2．黒褐色土。ロームブロック。
3．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
4．暗褐色土。多量のローム粒。

0 1 m

図－313　H462号住居跡



遺物１出土状況



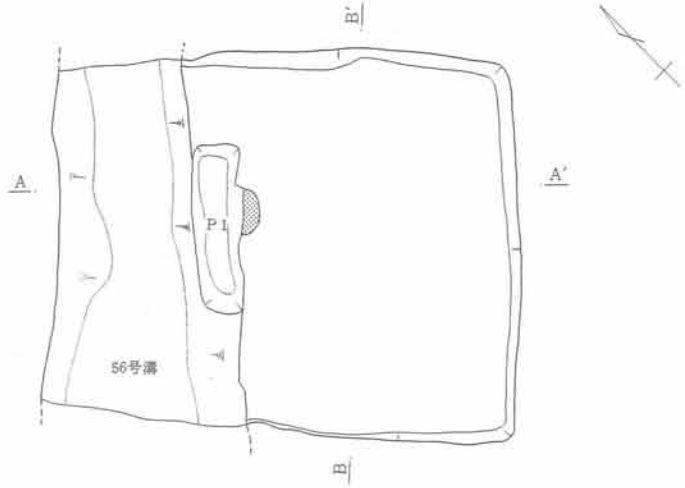
0 10cm

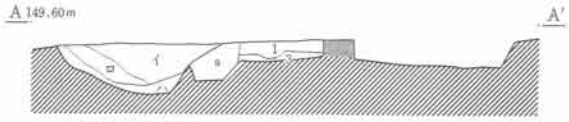
図－314　H462号住居跡出土遺物

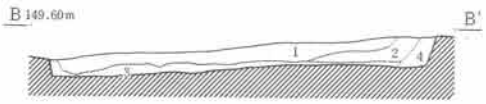
H462号住居跡（５H－191）　**位置**　１号墳の南西に高い密度で分布する石田川期住居跡群を構成する１住居跡で、チ１～リ１にかけて所在する。この住居跡群の中では、他の大部分と壁の走向を異にしており、同じものは他にH467号住居跡とH473号住居跡に見られるだけである。　**形状**　南北3.6m、東西3.9mの長方形を呈す。北西隅と南西隅は隅丸を持つが、他は鋭い隅角となっている。壁は全体に直線的につくられているが、貯蔵穴のある北壁西側は、外側に大きく膨らむ弧を描いている。長軸方向N－60°－E、面積12.8m²、壁溝12～30cmで、地形が西側に傾斜しているため、東壁側が高い。周溝は認められなかった。　**炉**　住居中央部を挟んで、北西側と南東側の２カ所に、焼土が認められた。前者は、広範囲に焼けているが、形が不整形であり、焼けにむらが多く、表面の高さも床面より６～９cm高い。炉としてはやや不自然である。これは、北東隅と南西隅付近の炭化物の出土と合わせて、本住居跡が焼失住居だったことを物語るものであろう。後者の焼土は円形に赤く良く焼けており、表面の高さも周囲床面と同じである。また、ここからはS字状口縁甕が出土しており、炉に良く見られる所である。しかし、通例から見ると位置に問題がある。　**貯蔵穴**　北西隅。やや不整の円形を呈す。規模104×78cm、深さ25cm。炉の位置同様、通例から外れているが、他とは入口の方向が異なるのであろう。　**遺物**　炉付近以外では、S字状の口縁甕（1）が10cm前後浮いて出土。　（唐澤）

出土遺物　　**土師器**　甕（1）、S字状口縁甕で、台部を欠失する。口縁部は内面に平坦面を有し、外面屈曲部は丸味を持つ。口縁部上段は先端で外反する。肩部の張りは大きいが、胴がやや長くなっている。調整は口縁部内外面に横ナデ、胴部外面に２段の斜ハケ目、同内面は全面に斜ヘラナデを施す。頸部内面には縦の指ナデが若干残る。色調は口縁部で淡褐色、胴部以下は暗灰褐色を呈する。胎土中には多量の雲母・砂粒を含む。　（唐澤）

H463号住居跡







住居跡
1．茶褐色土。焼土粒。
2．黒色土。
3．茶褐色土。炭化粒・黒色土。
4．茶褐色土。

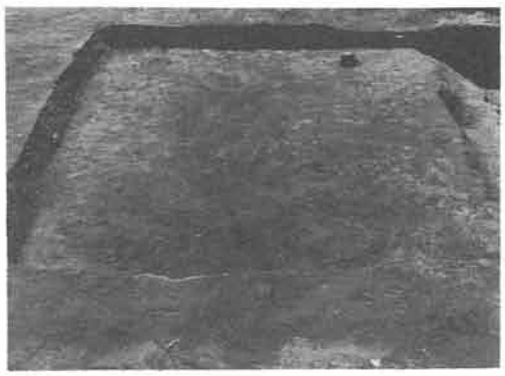
P1
a．茶褐色土。

56号溝

イ．茶褐色土。砂質。
ロ．茶褐色土。ローム。
ハ．茶褐色土。ロームブロック。

0 1 m

図－315　H463号住居跡

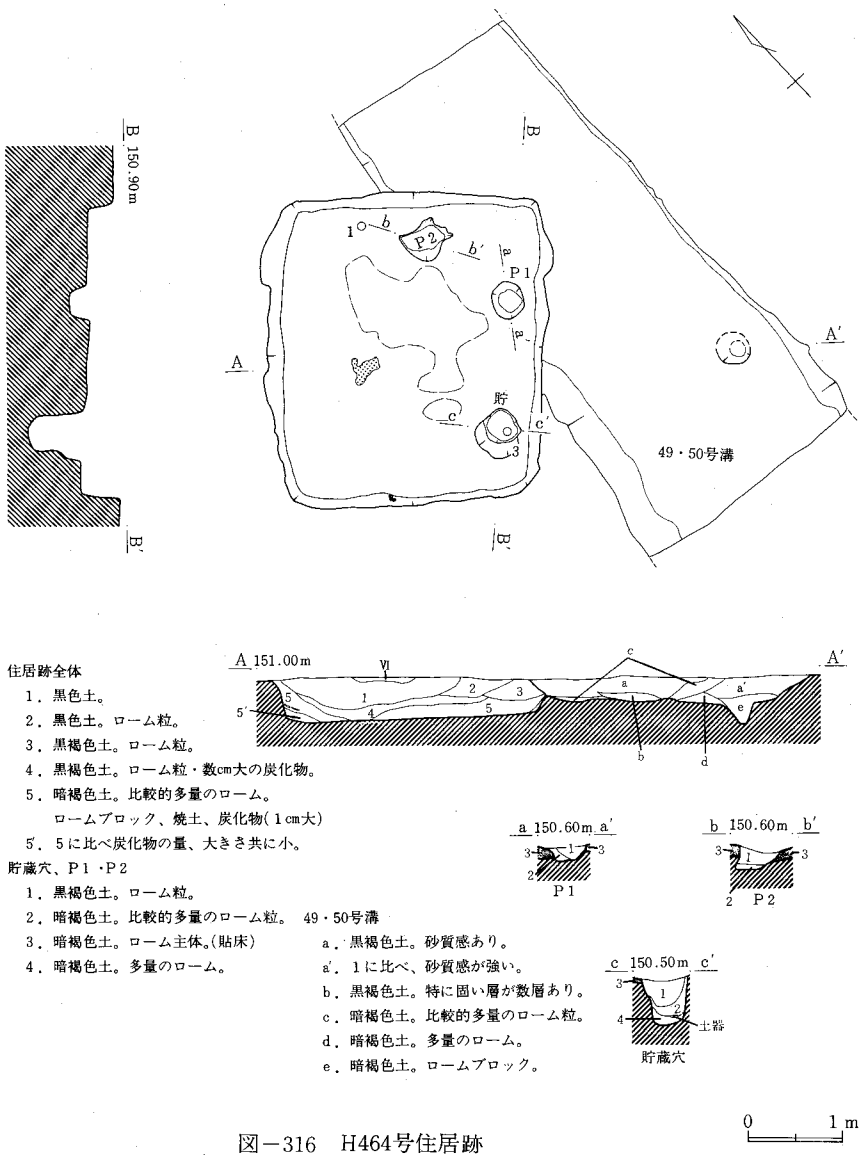


住居跡全景

地層堆積状況（東から）

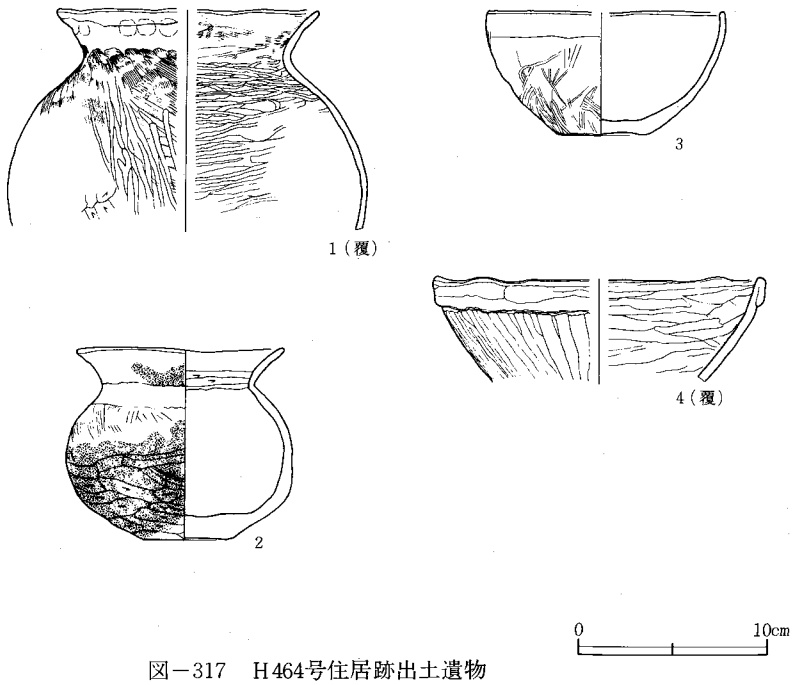
H463号住居跡・50号溝重複状況

H463号住居跡（5 H－192）　**位置**　リ1。本遺構の東30mほどに古墳（1号墳）がある。　**形状**　56号溝に破壊され西壁が残存しないため南北3.81mしか確認できない。東西は56号溝に切られる所まで3.3mほどを測る。壁の形状は、北壁は中央部で外方にやや突出し、東壁は直線、南壁は外方に少し膨らむ。壁高は14～45cm、面積は11.6m²以上を測る。東西に長軸を考えたときの方向はN－109°－Eである。　**ピット**　検出されなかった。　**炉**　住居中央（推定）より西寄りに確認できる。しかし、本住居を廃棄した後掘られたと思われる長方形の掘り込みにより、炉を示す床面上の焼け部分が切られている。　**貯蔵穴**　不明。　**遺物**　南壁近くの床面より土師器甕の破片、南壁に接するようにして2箇の石器が出土している。　**その他**　56号溝と重複し本遺構の方が旧い。また、H473号住居跡とも重複するが、その新旧は不明である。　（中澤）



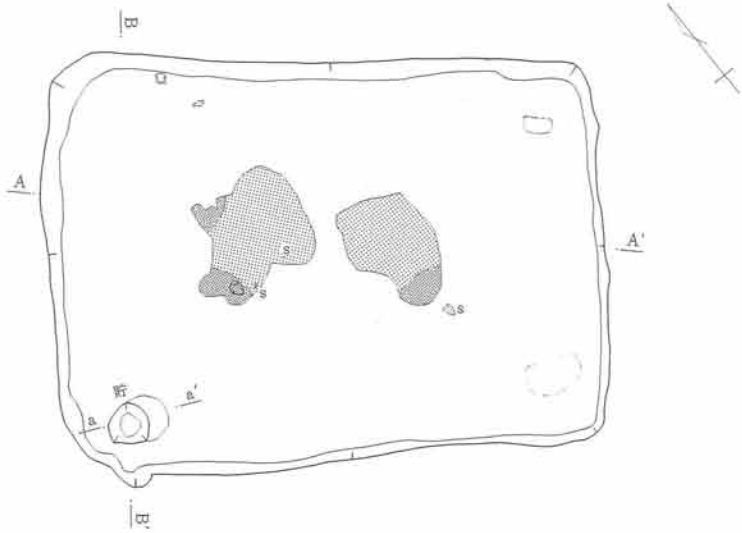
図－316　H464号住居跡

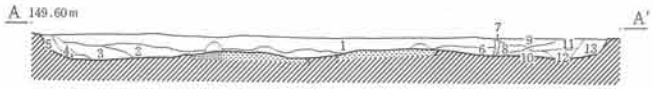
H464号住居跡（5H－193）　**位置**　49・50号溝が途中で51号溝を合わせて南下し、東西に走る58号溝と接する点の、北約25mの地点、オ3～ヨ3に所在する。49・50号溝と重複しており、南に182号掘立柱建物跡、東にH379号住居跡が隣接している。　**形状**　南北2.7m、東西3.05mの隅丸長方形を呈す。北壁は外側に膨む弧を描くが、他は直線的な壁となっている。東壁は西壁より南側が約20cm長い。長軸方向N－58°－E、面積7.7m²、壁高は17～51cmで、北壁と西壁側が高い。周溝は認められなかった。　**床面**　住居中央部に不定形の固く踏みしめられた範囲が認められた。貼床は、ピット及び貯蔵穴壁面に認められるので、中央部を除き壁下に周溝状に施されているものと見られる。厚さは10cm前後である。　**ピット**　2個検出された。P1は深さ18cmで、その位置から見て出入口施設に伴う柱穴と推定される。P2は深さ30cmで、性格は不明である。　**炉**　住居中央北寄りの不整形の焼土が、地床炉と推定される。この焼土は、円形の深さ4cmの窪地の中にある。　**貯蔵穴**　南西隅。円形で規模は50×46cm、深さ53cmである。　**遺物**　2は床面から12cm浮いて、3は貯蔵穴底部付近。　**重複関係**　49・50号溝と切り合う。溝の方が新しい。
（唐澤）

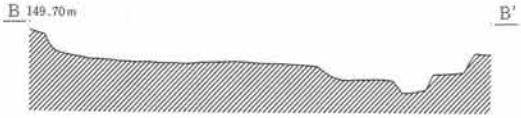


図－317　H464号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　壺（2）、外面に煤付着。形態的には小型甕が妥当か。外面調整は口縁部横ナデ、胴部上半に斜ハケ目を残す軽い横ヘラナデ、下半にヘラ削り、内面は口縁部と胴部に横の、底部に不定方向ぎみのヘラナデ。　甕（1）、胴部は丸く張り球形胴に近い。内側全面と肩部を除く胴部にヘラ磨きを施す。肩部外面と口縁部内面に残るハケ目は非常に細い目を持つ。口縁部外面は顕著な指頭痕を残す横ナデ。胴下半部欠失。　甑(4)、内彎する体部は整った形を持つが、下半部を欠失する。鉢の可能性もあるが他例から見て甑が妥当。調整は折り返し部と内面に横の、外面に縦ヘラナデ。つくりていねい。　椀（3）、口縁部に横ナデ痕を残すが、内外全面にていねいなヘラ磨き。光沢を持つ。　（唐澤）



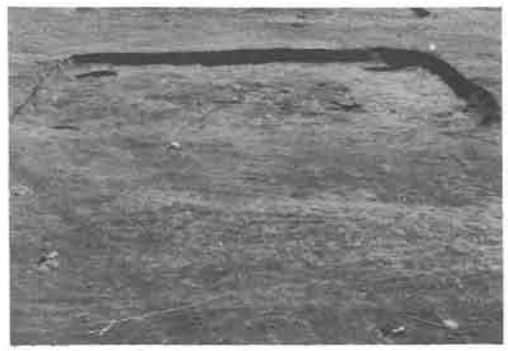




住居跡全体
1．黒褐色土。
2．茶褐色土。多量のローム粒。
3．黒褐色土。ローム粒。
4．茶褐色土。
5．茶褐色土。ローム粒主体。
6．茶褐色土。多量のローム粒。
7．攪乱層。ローム粒主体。
8．黒褐色土。
9．黒褐色土。
10．茶褐色土。多量のローム粒。
11．黒褐色土。ローム粒。
12．黒褐色土。ローム粒。
13．茶褐色土。多量のローム粒。炭化物。

貯蔵穴
1．黒褐色土。ローム粒。
2．黒褐色土。(貼床)

図－318　H465号住居跡



住居跡全景

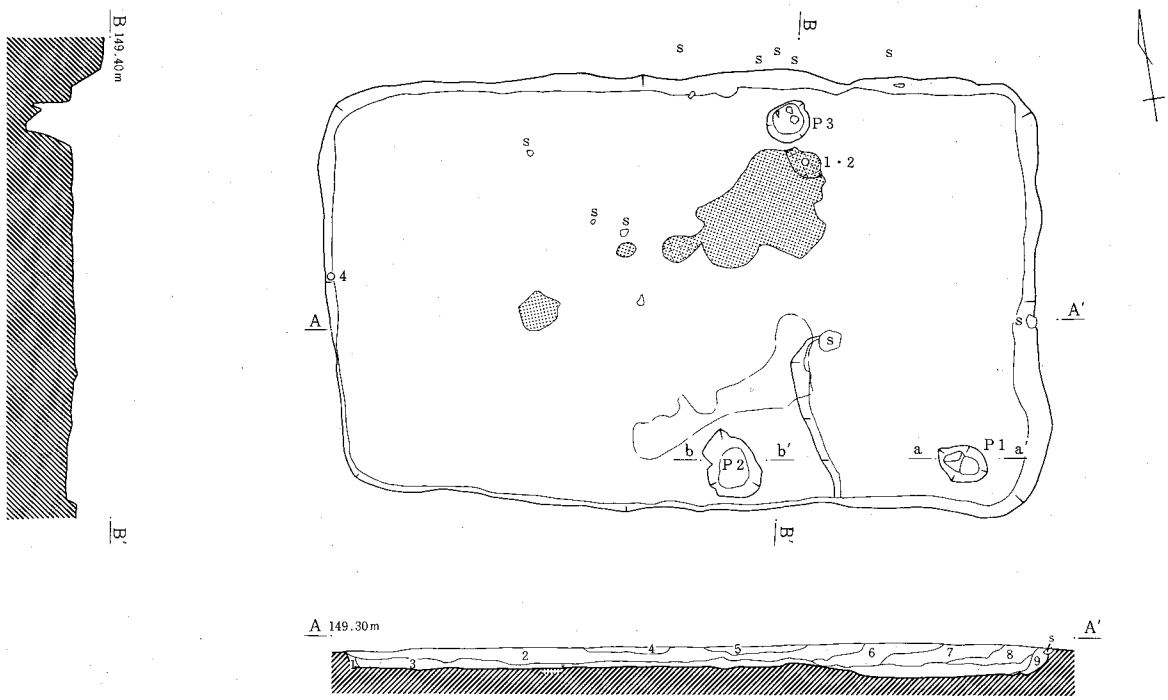
住居跡全景

H465号住居跡（5H－194）　**位置**　1号墳西側の高い密度で住居跡が分布する区域の北端、リ1に所在する。　**形状**　南北4.2m、東西5.7mの隅丸台形。他の同時期の住居跡に比べ、細長い形状を取る。西壁は東壁より南北西端が50cmづつ長く、顕著な台形を示す。長軸方向N－98°－E、面積22.3㎡、壁高18～35cm(北壁側)。周溝は認められない。　**床面**　貯蔵穴壁面の観察等から、10～15cmの厚さの貼床が考えられる。住居中央付近では、地山を床としている。　**炉**　中央部を挟んで焼けが認められた。両者とも焼けにムラがあり、焼土の広がりとともに、炉跡としては疑問がある。焼失した住居であろうか。　**貯蔵穴**　南西隅。44×20cm、深さ22cm。　**遺物**　東側焼土及び北壁下中央付近で土師器甕または壺の小片が床面から出土したが、実測・写真には耐えないものであった。　(唐澤)

1(覆)

出土遺物　　**土師器**　手捏状小型土器(1)、厚い底部のみ残存する。形状は不明である。内外全面に指頭痕による凹凸が激しい。内面には細かい横ハケ目を施す。色調は淡褐色。　(唐澤)

図－319　H465号住居跡出土遺物



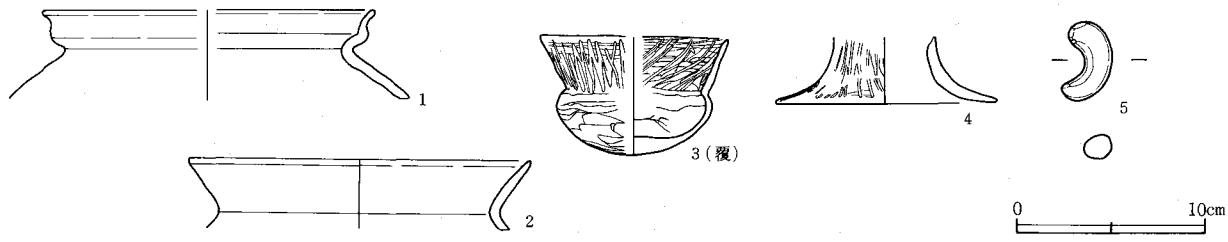
住居跡全体
1．茶褐色土。ローム粒主体。
2．黒褐色土。ローム粒・炭化物。
3．茶褐色土。多量のローム粒。
4．黒褐色土。
5．黒褐色土。
6．黒褐色土。
7．黒褐色土。ローム粒。
8．黒褐色土。ローム粒。
9．茶褐色土。ローム粒主体。

P1
1．黒褐色土。ローム粒。
2．黒褐色土。ロームブロック(貼床)

P2
1．黒褐色土。ローム粘。
2．黒色土。
3．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
4．黒色土とロームの混土層。(貼床)

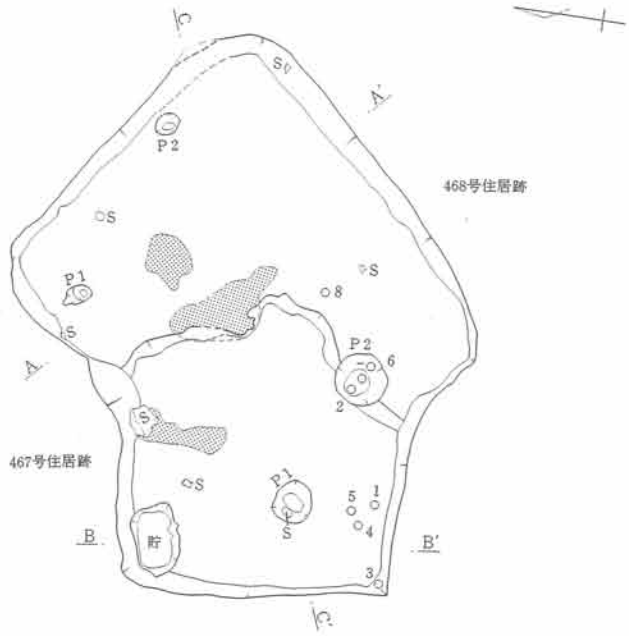
図－320　H466号住居跡　　0　1 m

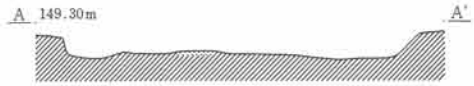
H466号住居跡（5H－195）　**位置**　リ101～1、ヌ101～1。H465号住居跡のすぐ南に位置する。　**形状**　南北4.35m、東西7.25mの隅丸台形。東壁は西壁に比べ南側が約30cm長い。長軸方向N－99°－E、面積30.7㎡、壁高12～29cm(北壁側)。**床面**　P2の北側に、東西に細長く踏みしめられている所が確認された。貼床はP1、P2の壁面に認められるが、範囲は不明。周溝状になるか。厚さ6～15cm。南東隅床面は、他より約10cm低い。　**ピット・貯蔵穴**　P1(深さ22cm)とP3(深さ48cm)は貯蔵穴的なものとも見られる。P3内からは表面の磨滅した拳大の自然石が出土。P2は深さ54cmで、その位置関係から見て、出入口施設に伴う柱穴とも見られる。　**炉**　不整形に広範囲の焼土が見られた。一般の炉としては疑問。　**その他**　次の点でH465号住居跡と共通する特色をもつ。①東西に非常に細長く、長軸方向も等しい。②隅丸台形。③広範囲の床面に焼けを持つ。　**遺物**　南東隅壁付近から管玉未製品142個(図324)が、南壁沿い西側から勾玉(5)が床面から10cm以上浮いて出土。1、2は焼土直上、4は床面から7cm浮いて出土。　(唐澤)

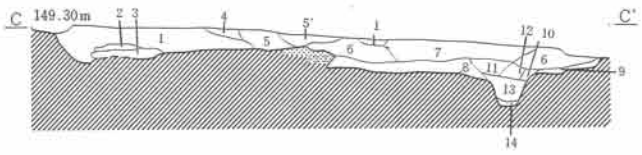


図－321　H466号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　甕（1・2）、1はS字状口縁甕。口縁部外面屈曲部は丸味を持つ。若干残存する肩部外面のハケ目は粗く浅い。同内面は縦ナデ。2は内外全面に横ヘラナデ。頸部外面に非常に細かい斜ハケ目。外面に煤付着。　小型坩（3)、口縁部内外面に粗い斜ヘラ磨き、胴部外面ヘラ削り、同内面指ナデ。　高坏（4)、若干膨みを持つ柱部が想定される。外面粗い縦ヘラ磨き。　**石製品**　勾玉（5)、滑石製。　(唐澤)







1．黒褐色土。
2．黒褐色土。やや褐色味が強い。
3．黒色土。ローム。
4．黒褐色土。やや褐色味が強い。
5．黒褐色土。ローム粒。
5'．5に比べ粘性。しまりが弱い。
6．黒褐色土。
7．黒色土。
8．暗褐色土。ローム粒・ロームブロック。
9．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
10．黒褐色土。
11．黒褐色土。焼土粒。
12．黒褐色土。
13．黒褐色土。
14．黒褐色土。ローム粒。

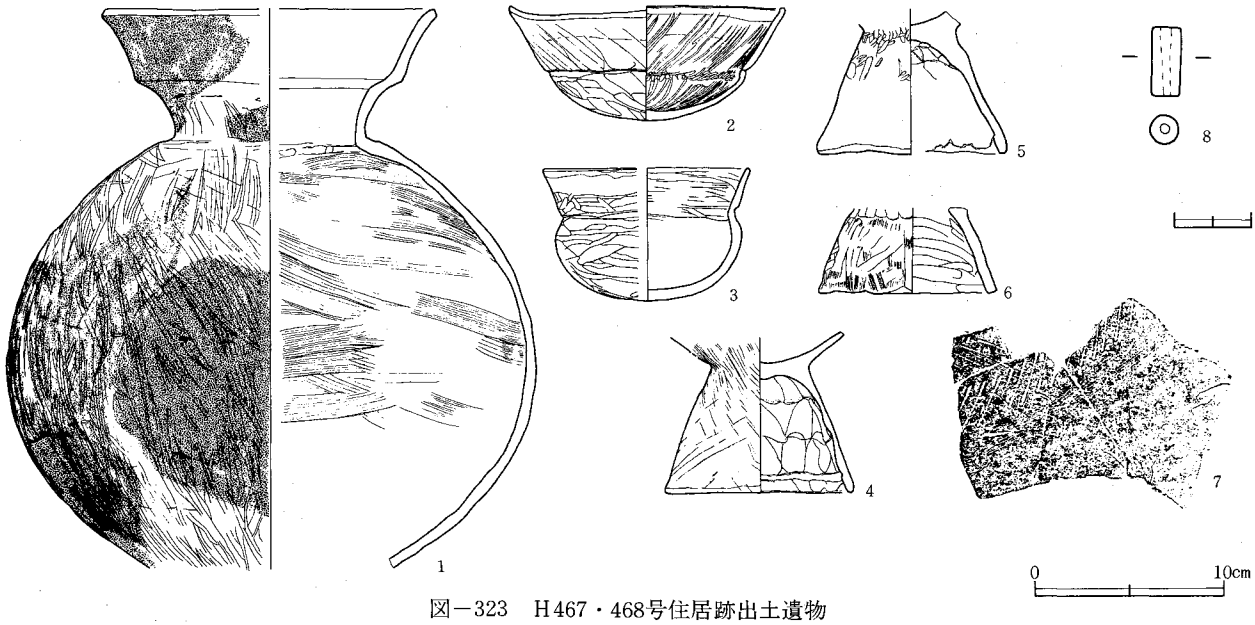
図－322　H467号・468号住居跡　　0　1m

H467・468号住居跡全景

南壁側遺物出土状態

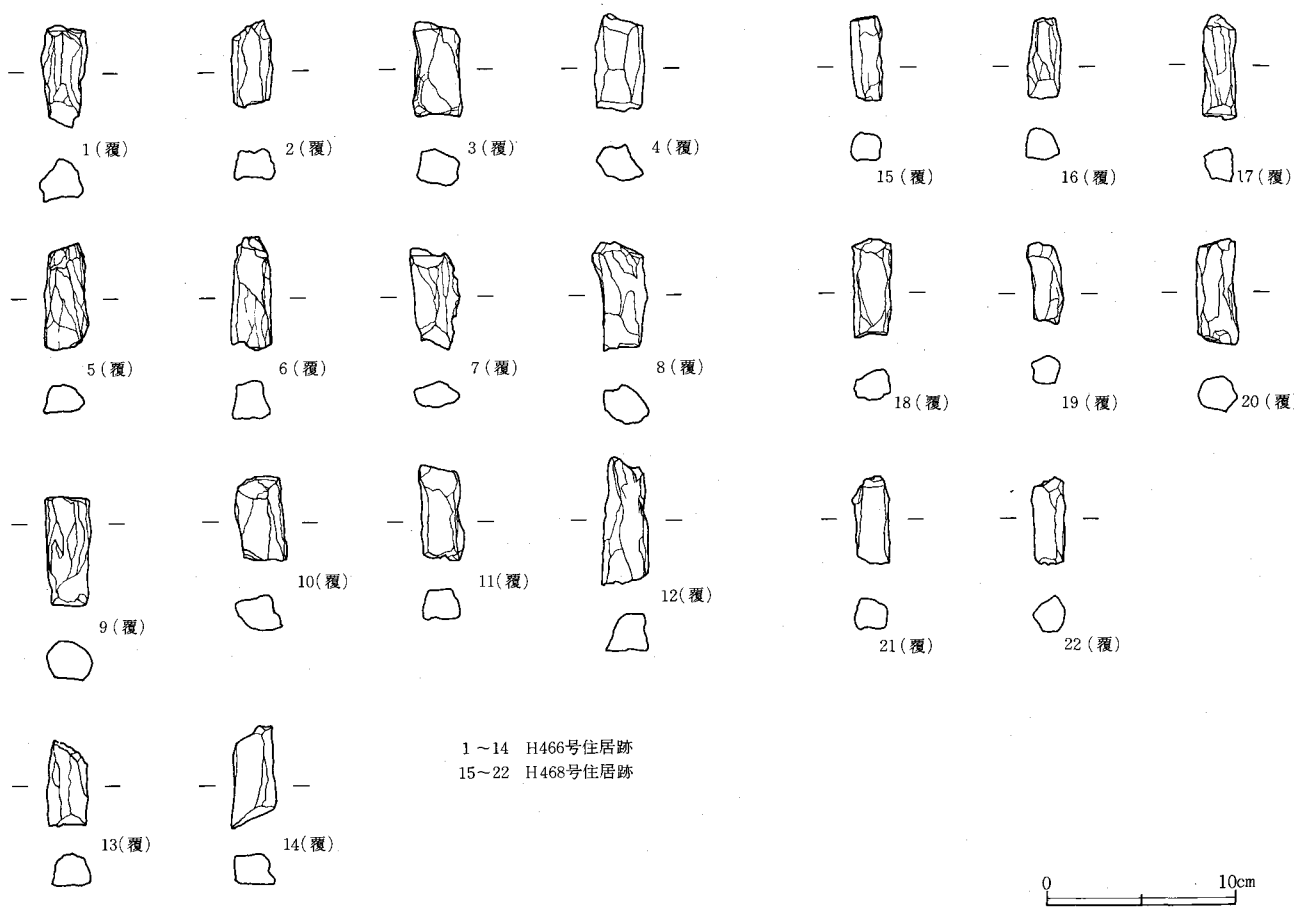
H467号住居跡（5 H－196）　**位置**　ヌ101～1。H466号住居跡のすぐ東に位置する。**形状**　H468号住居跡との重複部分の壁が確定できないため判然としない。現状で南北2.75m、東西3mの不定方形。長軸方向N－32°－W、面積6.6m²、壁高10cm前後。**床面**　貼床や踏み固め部分はない。**ピット**　P1深さ36cm。P2深さ32cm、H468号住居貯蔵穴か。**炉**　不明。北壁にかかる細長い焼土は、10cmの厚さで床面に乗っており、炉とは考えにくい。**貯蔵穴**　北西隅。隅丸長方形で、72×48cm、深さ22cm。**遺物**　南壁沿いの床面ないし同直上からまとまって出土した。焼土中央付近では、滑石製の勾玉が出土した。また、層内からも出土。**重複関係**　H468号住居跡と切り合う。地層の違いは余り明確でないが、地層断面から本住居跡の方が旧いと見られる。（唐澤）

H468号住居跡（5 H－197）　**形状**　南北4.15m、東西3.55mの隅丸長方形。長軸方向N－15°－E、面積14.5m²（推定）、壁高15～35cm（北壁側）。**床面**　重複部分に貼床。**炉**　2個所とも赤橙色に焼け、床面から4～6cm盛り上がる。南のものは15cm程の厚さに焼け込み、不整形に広範囲に焼けている。H465・466号住居跡と共通している。**貯蔵穴**　不明。H467号住居P2か。**遺物**　床面から10cm浮いて管玉（8）が出土。北東壁沿い覆土中から管玉の未製品50個が出土した。（唐澤）



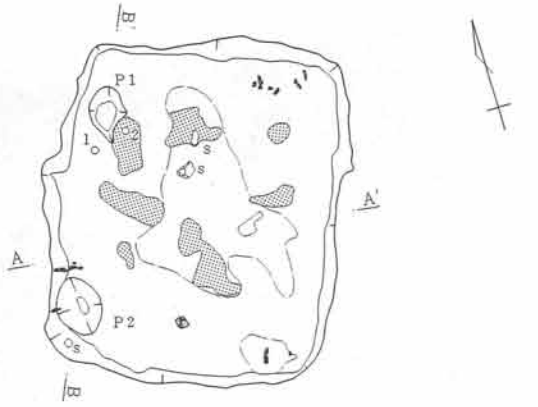
図－323　H467・468号住居跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　壺（1）、1は有段口縁。外面は全面ヘラ磨き、内面は口縁部横ヘラナデ、胴部中位までやや細かいハケ目(下位は剝落で不明)。外面全面に煤付着。7は櫛描の綾杉文と平行文を施す壺体部片。無文の所に煤付着。甕（4～6）、いづれも台部のみ残存。4・5は端部に折り返しを持つ。4は外面上半指ナデによる縦すり消し、下半斜ヘラナデ、内面指ナデ、上面（底部）放射状ヘラナデ。5の外面は非常に細かいハケ目を部分的に指ナデによるすり消し、内面横ヘラナデ。5は内外面指ナデ。形が歪む。上面（底部）ヘラナデ。　小型坩（3）、口径が胴部径・器高より大きい。口縁部は外面斜ハケ目、内面横ハケ目の後両面に横ヘラナデ、胴部内外面に横ヘラナデ。口縁部と胴部の境にへら状工具をめぐらして凹線を入れる。　坏（2）、外面は口縁部上半横ナデ、同下半～胴部上端斜ヘラナデ、胴部ヘラ削り、内面全面ヘラミガキ。　**石製品**（8・9）、管玉(8)、緑色火山岩類か。　（唐澤）

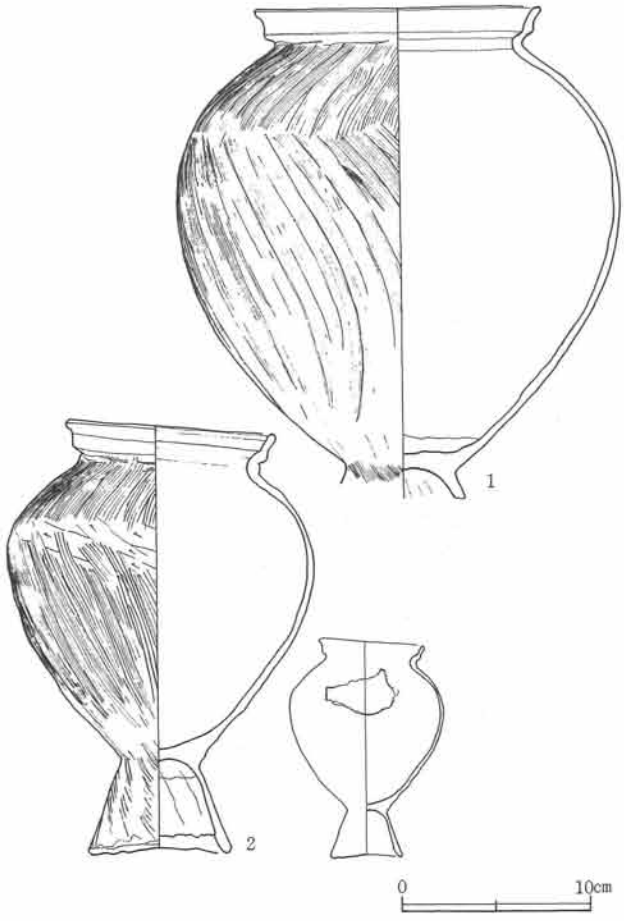


図－324　H466号・468号住居跡滑石製未製品

H469号住居跡



図－325　H469号住居跡



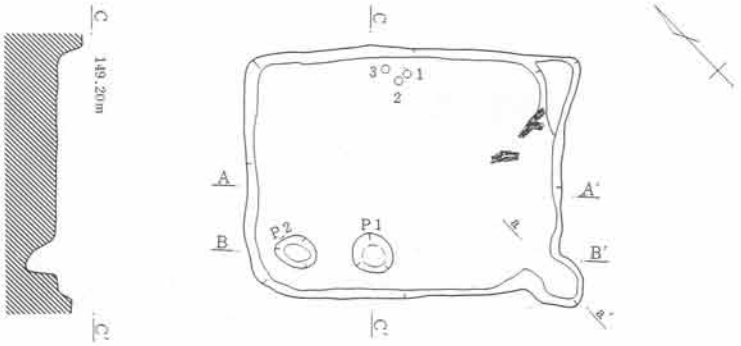
図－326　H469号住居跡出土遺物

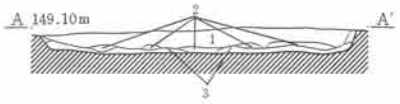
住居跡全景及び遺物出土状況

H469号住居跡（5H－198）　**位置**　チ101～リ101。1号墳西側の高密度の住居跡分布地域の西端に位置する。西側の谷地へ下る緩傾斜面を掘削して構築する。**形状**　南北3.37m、東西2.81mの隅丸長方形。南壁と西壁は、外側に膨らむ緩やかな弧を描く。南壁西端は大きくこけており、結果として西壁は東壁に比べ西側が約20cm長い。長軸方向N－23°－E、面積8.9m²、壁高14～50cmで東壁側が高い。周溝は認められなかった。**床面**　住居中央部分を中心に不整形に固く踏みしめられている。南壁東端の一部も固く踏みしめられていた。貼床は、南東隅貯蔵穴東側壁面に8cmの厚さで認められた。他の例から見て、中央部を除き周溝状に貼床が施されているものと思われる。**ピット**　北西隅南寄りにピットが検出された。規模は40×40cm、深さ20cm。南東隅の貯蔵穴とともに、その内外から遺物がまとまって出土するので、貯蔵穴的な機能を持ったピットとも考えられる。**炉**　踏み固め部分の北側にかかる焼土は、一段窪んだ中にあり、その付近床面から炉材とも考えられる転石が出土するので、これが本住居跡の地床炉と推定される。**貯蔵穴**　南東隅。長円形、54×50cm、深さ26cm。**遺物**　P1の南の床面直上から土師器甕（1・2）が、貯蔵穴内からも同形態甕の細片が出土。**その他**　数カ所の床面の焼けと炭化物の散布から焼失住居と推定。（唐澤）

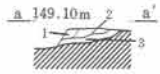
出土遺物　**土師器**　甕（1・2）、いづれもS字状口縁を持つ台付甕である。1は2に比べ肩部が丸く張る。調整は口縁部内外面に横ナデ。胴部外面は2段の斜ハケ目だが刻みは浅い。特に下段のハケ目は非常に浅く、地の縦ヘラ削りがほとんど現われる。胴部内面は全面ヘラナデと見られる。若干残存する台部外面は胴部と異なる非常に細かい斜ハケ目が見られる。同内面には指押えまたは縦指ナデが施される。肩部に厚い煤が付着する。2は小型の台付甕である。調整は口縁部内外面横ナデ。胴部外面に浅い2段の斜ハケ目、上下段のハケ目の境には地のヘラ削りが現われる。胴部内面は上端に指押え・指ナデ痕を残すが、他は全面横ヘラナデである。台部は接地面内側に折り返しを持つ。外面は指頭による調整後、ハケ目を縦帯状に入れる。内面は指ナデである。1・2共に、長胴化した胴部、浅いハケ目と地のヘラ削りの現出、曲線的に描かれるハケ目、甘い焼成等の点で共通する。（唐澤）

H470号住居跡





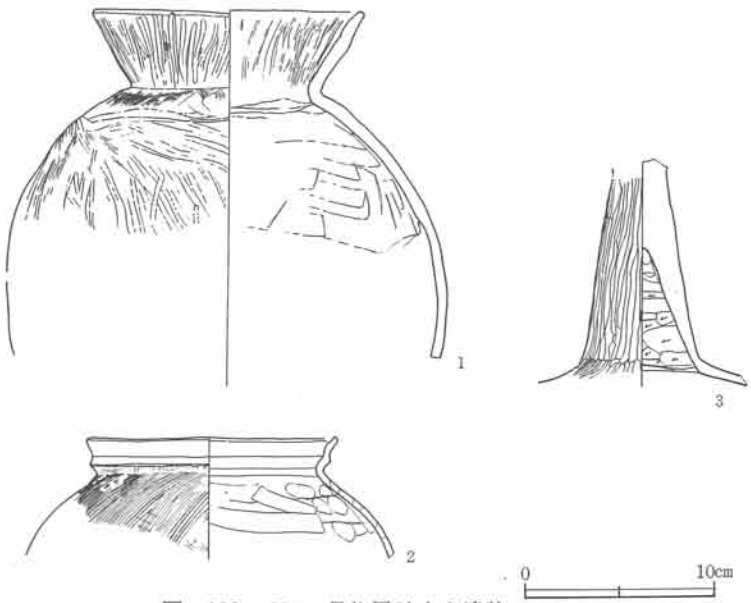
住居跡全体
1．黒色土。二ツ岳系の軽石を含む。
2．黒色土。ローム粒。
3．暗褐色土。
カマド状張り出し部。
1．黒色土。ローム粒。
2．赤褐色土。焼土。
3．ローム粒と黒色土の混土層。



住居跡全景

北壁中央付近遺物出土状態

図－327　H470号住居跡　0　1m



図－328　H470号住居跡出土遺物

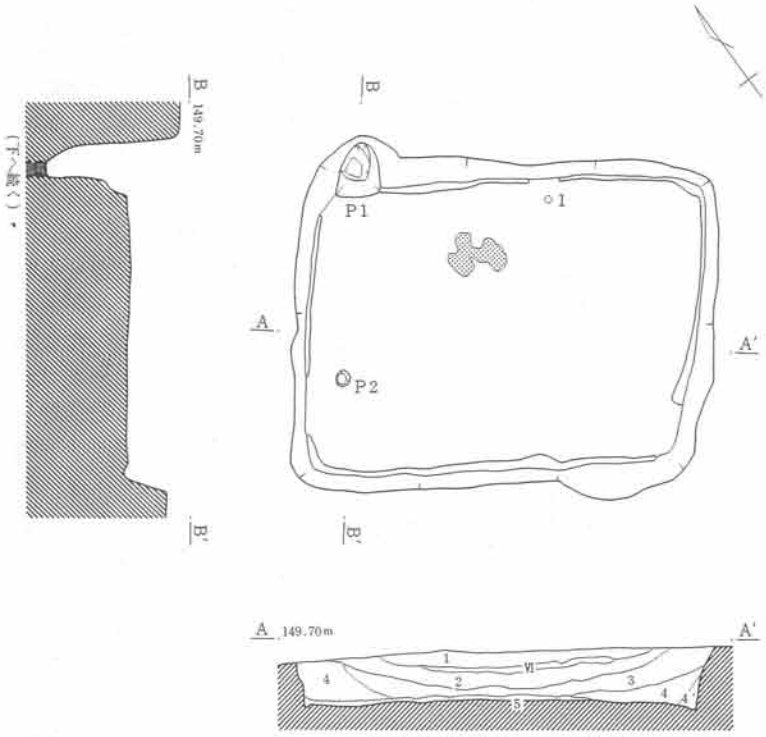
H470号住居跡（5H－199）　**位置**　1号墳の周溝の渡り部分の前方にあたるヲ1に所在し、調査区域中央を通る生活道に住居の一部がかかっている。　**形状**　北西～南東に長軸を持つ長方形で東西3.2m、南北2.5mである。長軸方向はN－107°－E、面積7.7m²、壁高12～28cmで、壁はいずれもほぼ直線である。北東隅は住居床面よりも20cm前後高く、テラス状になっている。南東隅のカマド様張り出しは壁外に66cm掘り込まれ、幅30cm前後で外方に向って徐々に高くなっており、底面は弱いが赤褐色に焼けている。　**ピット**　南壁西寄りに2個検出。P1は46×40cm、深さ34cm、P2は45×33cm、深さ10cmと浅く、断面の形状は皿形をしている。いずれも遺物は伴わなかったが貯蔵穴の可能性が強いと思われる。

遺物　北壁中央付近にS字口縁甕（2）、壺上半部（1）、高坏脚部（3）が床面より8cmの位置で出土した。他に北東隅付近床面より5cmの所に炭化材が検出されている。

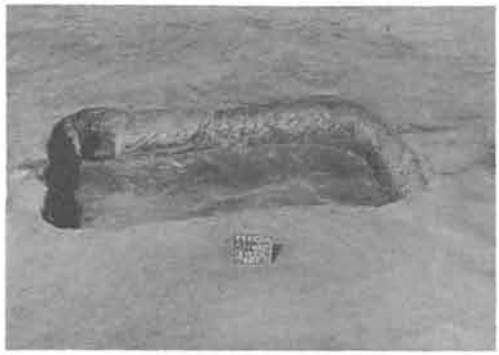
（松村）

出土遺物　**土師器**　甕（2）、口縁部に直線的な傾向がみられるS字状口縁甕である。台付とみられる。内面は横方向の軽いヘラナデである。淡褐色で、焼成は良好である。　壺（1）、球形に張る胴を持ち、締まりの強い頸部を持つ。調整は第1次調整として口縁部外面に非常に細かいハケ目、同内面に横方向のヘラナデ、胴部外面に斜ヘラ削りを施し、それらの上に粗いヘラミガキを重ねる。胴部内面は横方向のヘラナデである。　高坏（3）、坏部を欠失する。つくりはていねいだが、粗い胎土。外面は光沢のないヘラミガキ、脚部内面はヘラ削り。紋り目がある。　（唐澤）

H471号住居跡



図－329　H471号住居跡



住居跡全景

高坏脚部（遺物１）出土状態

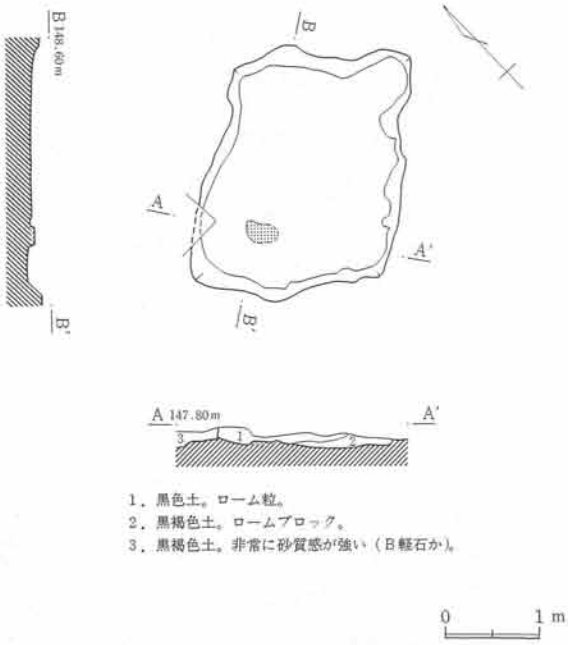
H471号住居跡（５H－200）　**位置**　カ１～２。東10mの地点で南北溝49・50号と南北溝58号が接している。周囲は概して住居跡の分布の少ない所である。　**形状**　南北3.05m、東西4.15mの隅丸平行四辺形を呈す。北西隅と南東隅が鈍角となる。南壁のみ直線化傾向を示すが、他は外側に膨む孤を描く。長軸方向N－131°－E、面積12.6m²、壁高は50cm内外である。全体に幅４～５cm、深さ１～５cmの周溝をめぐらす。　**ピット**　北東隅（Ｐ１）と西壁沿い南寄り（Ｐ２）の２個所に存在する。Ｐ１は一部が壁の外に張り出している。規模58×40cm。深さは145cmまで掘り上げたが、更に下がる。Ｐ２は15×17cm、深さ10cm前後の小規模なものである。Ｐ１・Ｐ２いづれも、その性格は不明である。　**炉**　住居中央北西寄りで、60×44cmの範囲に不整形に焼土化した床面が認められた。表面は赤橙色に強く焼けていた。本住居跡に附随する地床炉と見られる。　**遺物**　北壁下中央部の床面直上から、高坏脚部の破片（1）が出土した。他には、覆土中も含めて、遺物の出土は全く認められなかった。　**テフラ**　床面から30cmの覆土中に、厚さ６cmのＦ・Ａブロックの集積層が見られた。　（唐澤）

図－330　H471号住居跡出土遺物

H471号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　高坏（1）、裾部外端を欠失して脚部のみ残存。外面はハケ目の上にヘラ磨き（裾部は横）、内面裾部横ナデ、同柱部縦ヘラナデで下端に指ナデ。柱部上面に坏部設置の痕跡。　（唐澤）

H472号住居跡



図－331　H472号住居跡

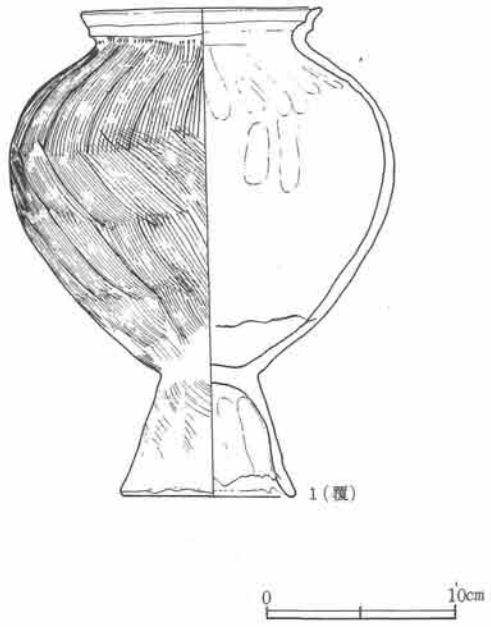
H472号住居跡（5H－201）　**位置**　上武国道予定地の北、ヲ102～ワ102に所在する。南下がりの緩傾斜面上に立地するが、台地全体から見ると平坦地に近い所となっている。生活道路と48号溝に挟まれた三角地帯の底辺に近い所に位置する。　**形状**　南北2m、東西2.35mの平行四辺形ぎみの不整四辺形。四壁の平面形はいずれも波を打つ。西壁は東壁に比べ北側が23cm程長くなっている。長軸方向N－51°－E、面積4㎡、壁高4～14cmで、北壁から西壁にかけてやや高くなっている。周溝は認められなかった。　**床面**　特に踏み締められて固い所もなく、地山のX層を床面とし、貼床も認められなかった。　**炉**　住居の北東隅寄りに、34×20cmの範囲に床面が焼けていた。焼けの程度はかなり弱く、表面もやわらかいが、本住居跡に附随する地床炉と考えられる。表面のレベルは、周囲床面より5cm前後高い。　**遺物**　床面または同直上から、遺物の出土はまったく見られなかった。覆土中から土師器甕（1）が出土しただけである。　**その他**　覆土中に榛名山の一峯二ツ岳系の軽石を含まないので、他の例から見て、F・A降下以前の住居と考えられる。なお、本住居跡は、本遺跡において、最も小規模なものである。

（唐澤）

住居跡全景

炉跡全景

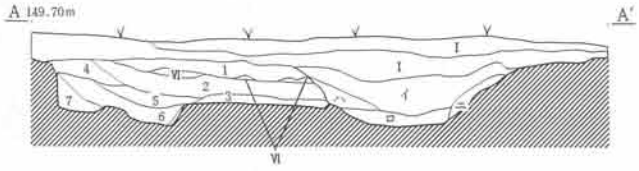
出土遺物　　**土師器**　甕（1）、台付のS字状口縁甕。厚い器肉を持ち、全体に雑なつくり。口縁部横ナデ、胴部外面は浅いハケ目（所々に地のヘラ削り現出）、同内面は指ナデで肩部以下はその上にヘラナデ。台部は端部を内方に折り返す。外面はハケ目の帯を施す。内面は顕著な指頭痕。褐橙色。小石粗砂粒。　（唐澤）



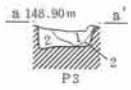
図－332　H472号住居跡出土遺物

H472号住居跡出土遺物

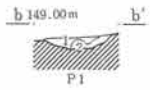
H473号住居跡



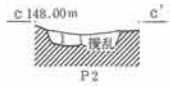
住居跡全体
1．黒褐色土。
2．黒色土。
3．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
4．黒褐色土。ローム粒。
5．黒褐色土。ローム粒。
6．暗褐色土。多量のローム。
7．暗褐色土。ローム粒主体。



56号溝
イ．黒褐色土。砂質。
ロ．黒褐色土。ロームブロック。砂質。
ハ．黒褐色土。炭化物。砂質弱。
ニ．黒褐色土。ローム粒。砂質。



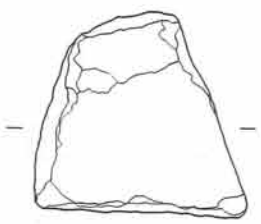
P1
1．暗褐色土。ローム粒。
2．暗褐色土。多量のローム粒。

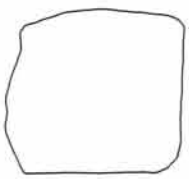


P2
1．黒褐色土。ローム粒・ロームブロック。
2．暗褐色土。ロームブロック。

P3
1．黒褐色土。ローム粒。

図－333　H473号住居跡　　0　1 m





0　10cm

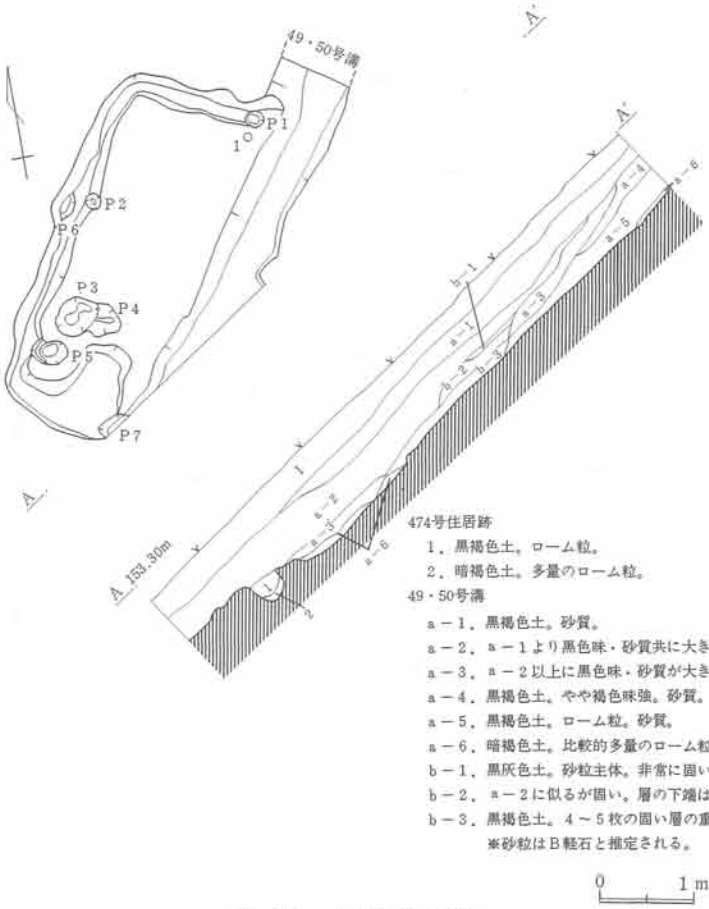
図－334　H473号住居跡出土遺物

H473号住居跡（5H－202）　**位置**　1号墳の西、リ101～1に所在する。本住居跡は、南側に高密度で分布する石田川期住居跡群の北西に位置する。**形状**　長軸3.75m、短軸3.05mの長方形。北東壁と北西壁には、外に膨らむ弧を描く傾向が見られる。北の隅はH463号住居跡と重複しており、コーナーは不明。長軸方向N－42°－W、面積20.2m²(推定)。壁高は、地層断面の観察によると、少なくとも50cm以上はあったものと見られる。西のコーナーには、台形状の張り出しが見られる。**床面**　特に固い所や貼床は認められなかった。**ピット・貯蔵穴**　P1は、74×68cm、深さ15cmで、その北壁に寄せて、更にもう一段20×16cm、深さ18cmの小ピットが掘られている。P2は、78×64cm、深さ18cmで、P1上段の規模にほぼ同じである。いずれも貯蔵穴と見られる。　**炉**　住居中央付近床面に、弱く焼けた地床炉が認められた。　**遺物**　P1上段底部から8cm浮いて、砥石が出土しただけである。　**テフラ**　床面から25cmの覆土中にF・Aブロック集積層。　**重複関係**　56号溝及びH436号住居跡を切り合う。前者は56号溝が新しいが、後者との関係は不明。（唐澤）

住居跡全景（手前）

砥石（遺物1）出土状況

出土遺物　**石製品**　砥石（1）、据え砥の残片で、実際はこの2倍近くあったものと見られる。使用面は図の上下面と右側面の3個所である。流紋岩製。　（唐澤）

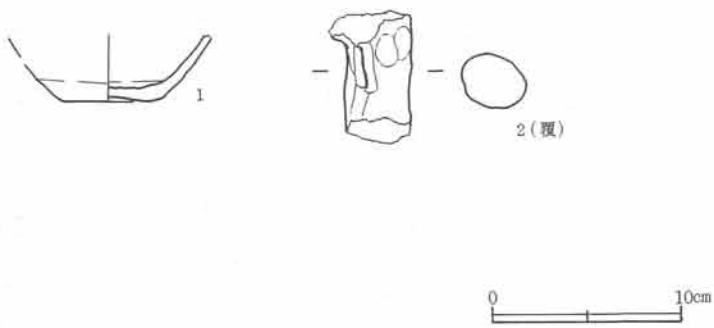


図－335　H474号住居跡

住居跡全景

須恵器坏（遺物１）出土状況

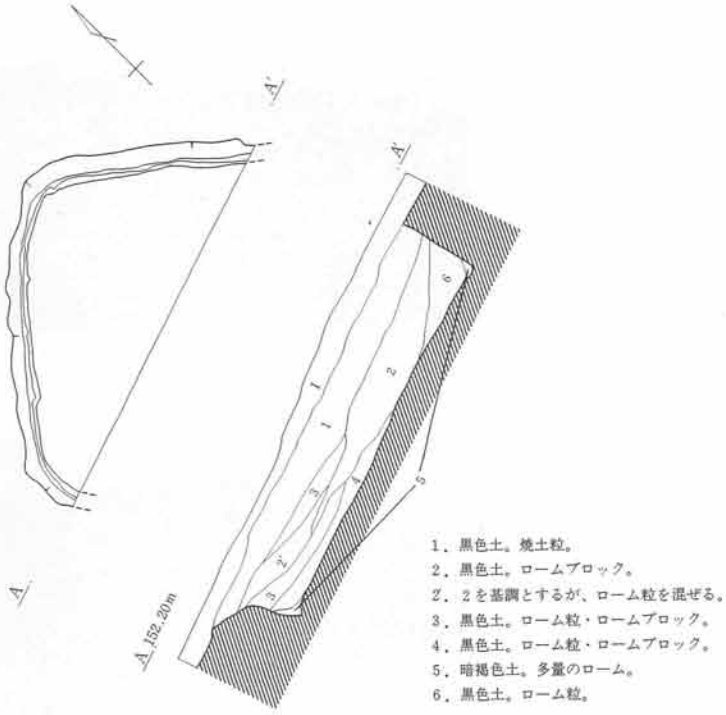
H474号住居跡（５H－203）　**位置**　カ６に所在する。周囲には国分期の竪穴式住居跡が分布しており、西15mには４号製鉄址がある。本住居跡の東半分は49・50号溝に切られる。　**形状**　東半分が不明のため定かでないが、現状では南北3.8m、東西1.7mを測る。隅角は隅丸を呈す。各々の壁下には幅９～23cm、深さ12～26cmの周溝をめぐらす。面積7.9㎡（現状）、方位Ｎ－４°－Ｅ（西壁）、壁高７～30cmである。　**床面**　南壁沿いの周溝が住居内に広がるが、これはこの部分の貼床を掘りすぎてしまったものと思われる。厚さ７～16cm。範囲不明。　**ピット**　北壁にＰ１（深さ８cm）、西壁中程にＰ２（10cm）、Ｐ６（不明）、南西隅付近床面にＰ３（37cm）、Ｐ４（22cm）、Ｐ５（45cm）、南壁沿いにＰ７（26cm）がある。それぞれの性格については不明である。　**遺物**　Ｐ１付近床面直上から須恵器坏（1）が、覆土中からカマドに使用する土製支脚とみられる円柱状の焼き物が出土した。　**重複関係**　49・50号溝に切られる。　**その他**　覆土中の二ツ岳系の軽石及び須恵器坏（1）から、平安時代の住居跡と推定される。従って、住居の東壁部分にはカマドが付設されていたものと推測される。　（唐澤）



図－336　H474号住居跡出土遺物

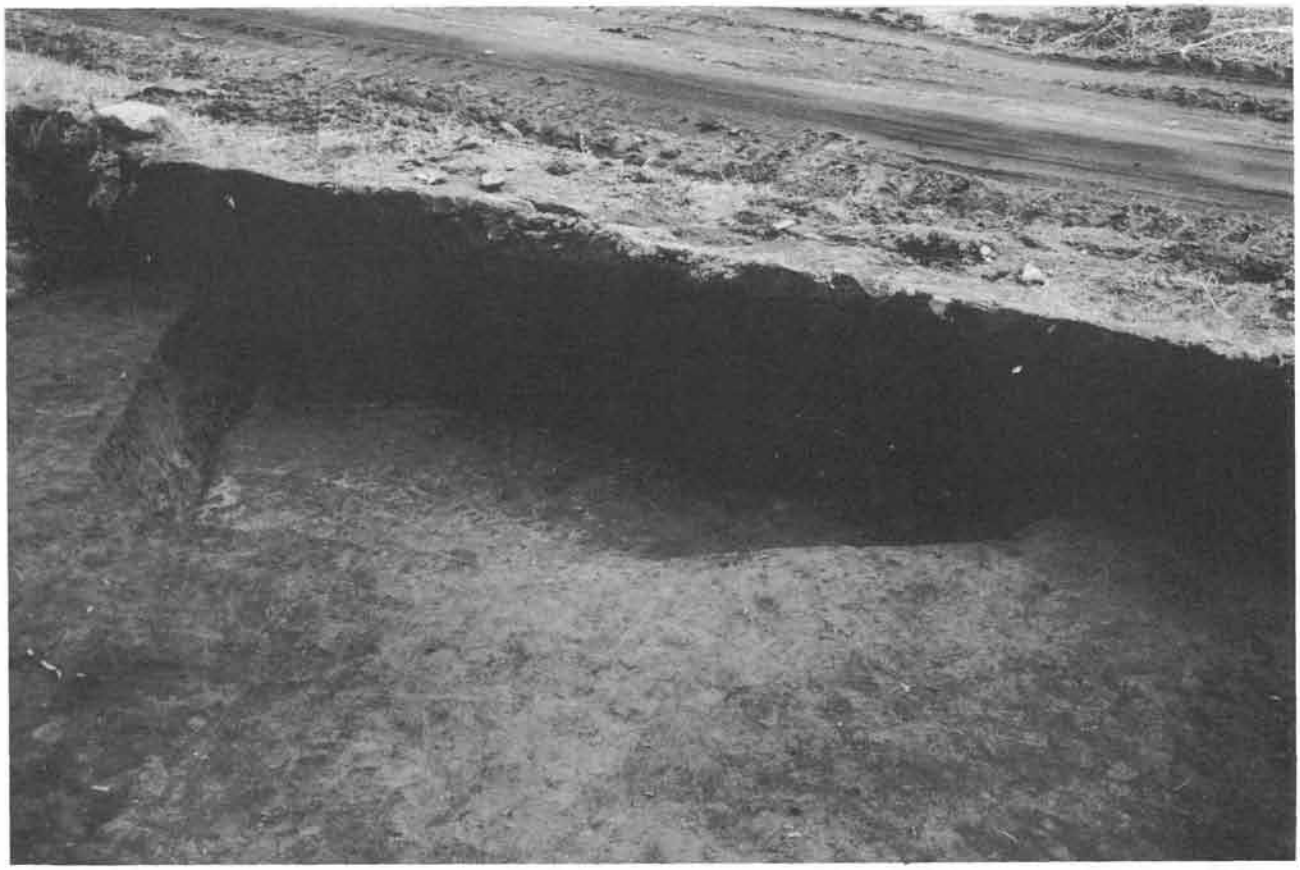
H474号住居跡出土遺物

出土遺物　**須恵器**　坏（1）、小さな底部を持つ坏で、体部内外面のロクロ痕を消す。切り離しは回転糸切り未調整。ロクロは右まわり。色調は灰白色で、底部付近の内外面は黒灰色。やや甘い焼成。　**その他**　土製支脚か（2）。図上端で横に広がる。上面に平坦部が一部残存する。指頭痕を残す指ナデ調整。色調は茶褐色で土師質。　（唐澤）



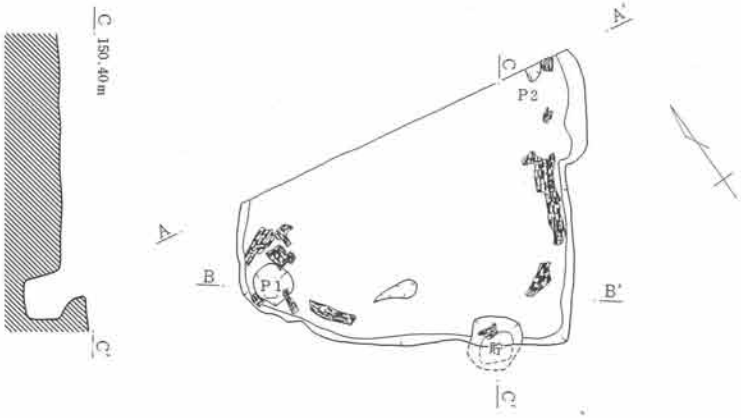
図－337　H475号住居跡　　0　1 m

H475号住居跡（5 H－204）　**位置**　ワ4。台地の東西の中央に位置し、概して平坦な所である。奈良時代以降のカマドを持つ住居跡と、石田川期の住居跡の分布の境界に位置する。本住居跡の南側一帯は、概して住居跡の分布が少ない。本住居跡の西側半分は、生活道路下のため未調査になっている。　**形状**　南北3.5m＋α（3.6m前後か）、東西2.6m＋αの隅丸四辺形と推定される。北壁はほぼ直線をなすが、西壁は外側にゆるく膨らむ弧を描く。コーナーは隅丸の度合が大きいため、壁線が膨らんでいるような印象を受ける。南北方位N－13°－E、面積5.4m²以上、壁高は北壁で最高45cmを測る。　**床面**　調査区域の東半から未調査区にかけての住居中央付近は非常に固く踏みしめられている。貼床は床面の平面観察の範囲内では認められなかった。　**遺物**　床面または同直上、及び覆土中から遺物の出土はまったく見られなかった。　**その他**　本住居の使用された時期は、覆土全体に榛名山二ツ岳噴出にかかる軽石を含むので、本台地の他の例から推して奈良時代以降のものと考えられる。　（唐澤）



住居跡及び地層断面

H476号住居跡

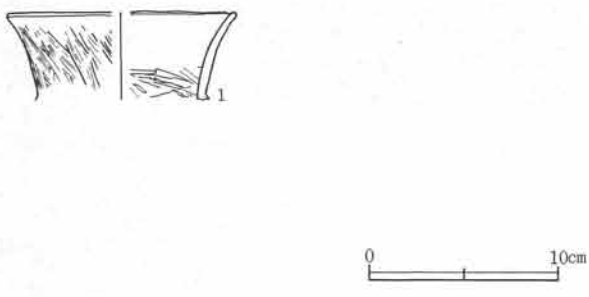


図－338　H476号住居跡

住居跡及び増層断面

南西隅付近炭化材出土状態

H476号住居跡（5H—205）　**位置**　南北溝の48号と49・50号溝に挟まれた、ワ3に所在する。北に隣接して同時期のH441号住居跡があるだけで、周囲はほとんど住居跡の分布しない区域となっている。北側3分の1は生活道路下のため未調査である。　**形状**　南北3m以上、東西3.4mの隅丸四角形と見られる。東壁は北側で、約10cm外に張り出す。南壁は西側3分の1が大きく内に寄る。長軸方向N—20°—W、面積7.3m²、壁高は地層断面の観察によると、東で70cm、西で55cmを測る。周溝は認められない。　**床面**　住居中央付近は固く踏みしめられている。　**ピット・貯蔵穴**　南西隅のP1は深さ34cm、未調査区に一部がかかるP2は深さ20cm(現状)。南壁東寄りのピットは、半分以上が壁の中に掘り込まれており、貯蔵穴と見られる。P1もその位置の共通性から推して、貯蔵穴的なものと考えられる。　**遺物**　P1を大きく取り囲むようにして床面直上から土師器壺小片が出土した。1の図はその口縁部である。　**テフラ**　床面から34cmの覆土中にF・Aブロック集積層。　**その他**　壁沿いに炭化材が出土。焼失住居と見られる。　（唐澤）

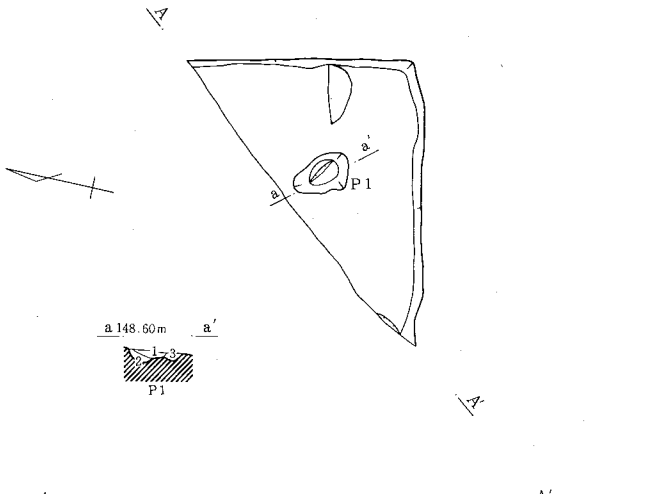


図－339　H476号住居跡出土遺物

H476号住居跡出土遺物

出土遺物　　**土師器**　壺（1）、口縁部のみ残存。外面はハケ目を顕著に残すヘラナデで上端のみ横ナデ、内面は中ほどやや下方まで横ナデ、それより下位は横ヘラナデの上に横ヘラ磨き。内外面概して平滑。黒茶褐色。　（唐澤）

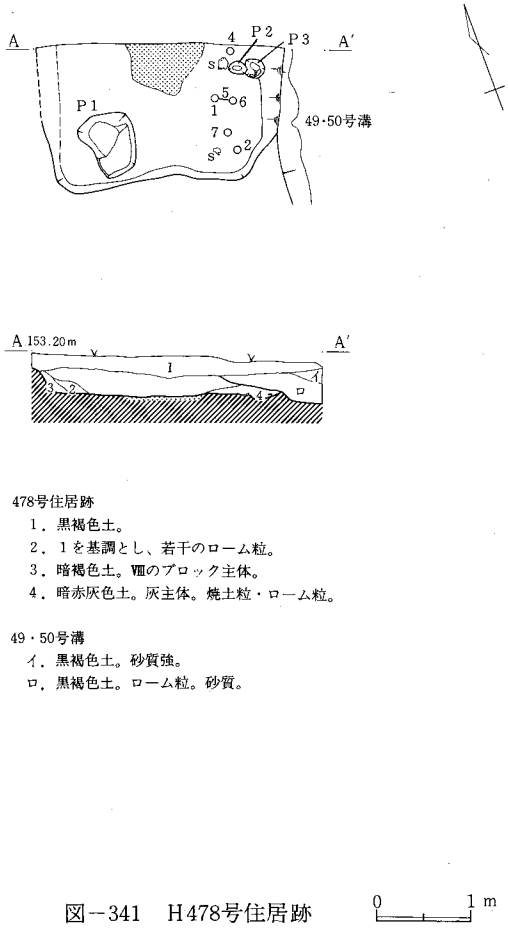
H477号住居跡



図－340　H477号住居跡

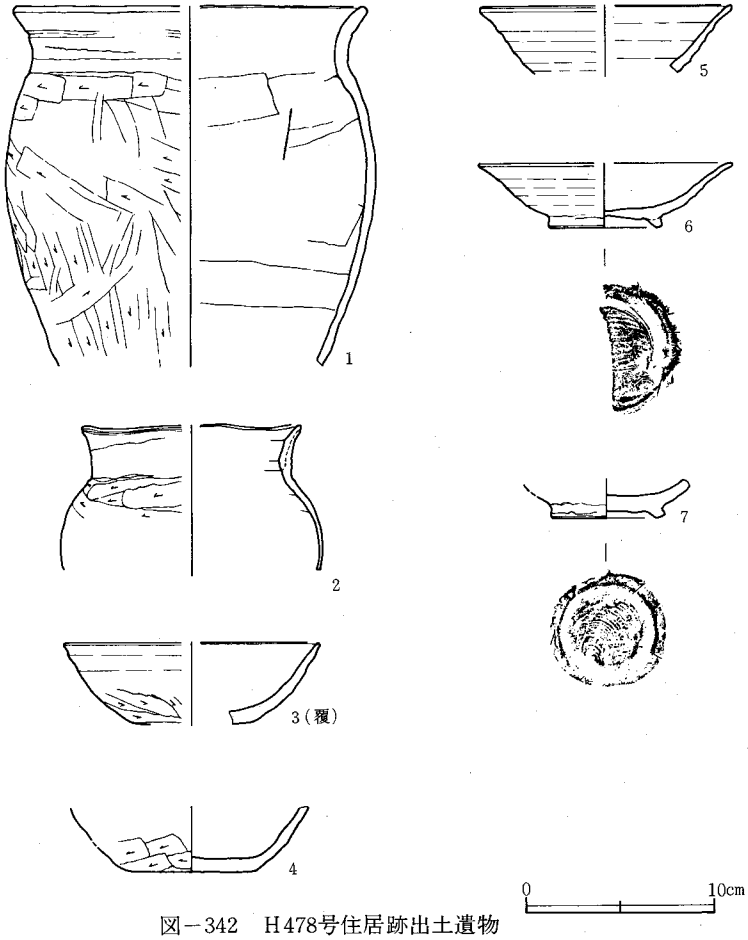
H477住居跡（5H－206）　**位置**　ヲ1。南北溝48号と生活道路が形づくる三角地帯の頂点付近に位置する。本住居跡の北側は、広い範囲にわたって住居跡のほとんどない区域となっている。　北側2分の1は生活道路下のため未調査である。　**形状**　南北5m＋α、東西 2.8m＋αの方形の住居跡と推定される。壁は直線的につくられているが、南壁西側は内に寄り、こけたような形になる。東壁走向N－10°－W、面積4.5㎡以上。壁高は、地層断面の観察によると、東壁で30cm、南壁で22cmである。この付近では住居構築時の表土がすでに削平されているので、実際はそれ以上の深さになる。　**床面**　床面での観察及び東壁南寄りの掘りすぎ部分から判断して、住居中央部分を除き、約10cmの厚さで貼床が施されているものと見られる。　**ピット**　P1は深さ10～15cmで性格不明である。P2は南壁西側の位置から判断して貯蔵穴と考えられる。　**炉**　地層断面下の、P1北端に近い床面で焼土の一部が認められた。炉と見られる。　**遺物**　覆土を含めて、遺物の出土はまったく認められなかった。　**その他**　本住居跡は、覆土中に二ツ岳系の軽石を含まないこと、炉址が推定されること、及び周辺の住居跡から見て、石田川期のものと推定される。
（唐澤）

H478号住居跡



図－341　H478号住居跡

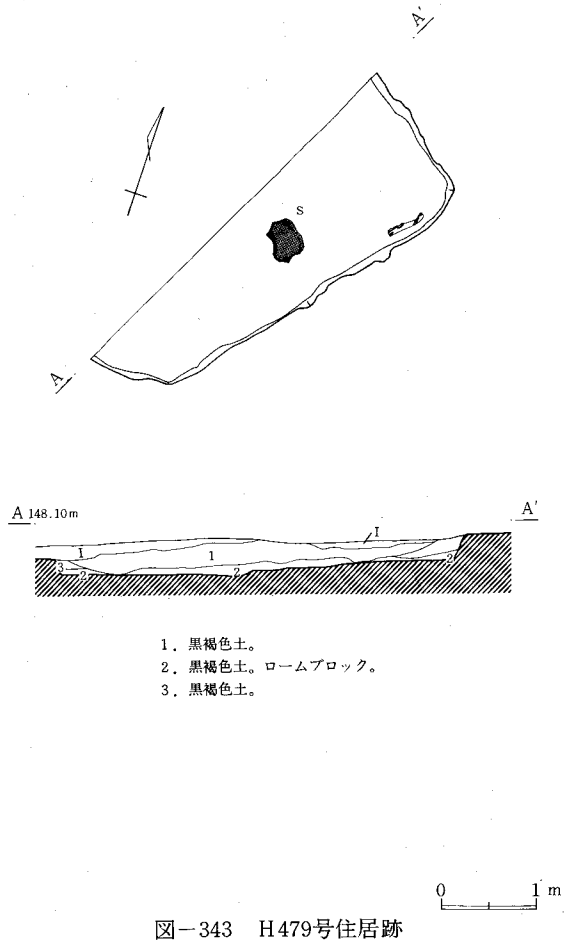
H478号住居跡（5H－207）　**位置**　カ7。南北溝49・50号が同じ南北溝の51号溝と合流する点から南10mに所在する。南に隣接するH474号住居跡同様に、東端を49·50号溝に切られる。北側半分は生活道路下とため未調査である。　**形状**　南北1.5m＋α、東西2.6m前後の隅丸長方形になるものと見られる。本住居跡は、出土遺物、覆土中の軽石、周囲に分布する住居跡から推して、奈良時代以降の南北方向に長軸を取る住居跡と推定される。西壁はやや掘りすぎている。南壁は、東端部分で15～20cmの張り出しを持つ。長軸方向N－17°－W（推定）、面積2.5㎡以上。壁高は、地層断面の観察によると、西壁で30cmである。　**床面**　焼土付近が非常に固く踏みしめられている。カマド前から住居中央部を除く床面には貼床が施される。住居中央部の焼土は、カマド前に位置し、焼けもそれほど強いものではない。また、この部分は貼床のない部分＝固く踏みしめられた所であり、カマド内の燠を利用してこの部分を乾燥させたものとも考えられる。　**ピット**　南西隅付近に大きなピット（P1）が、焼土と東の壁際に2つの小ピット（P2·P3）が確認された。前者の深さは17～26cm、後者はP2、39cm、P3、36cmである。　**カマド**　東壁のP2・P3の北がカマド跡である。地層断面の観察によると、この部分の底面がゆるやかに立ち上がり、そこに灰を主体とし、焼土粒を混ぜる層が覆っている。　**遺物**　東壁沿いに集中して5～11cm浮いて出土したが、掘りすぎの貼床を考慮すると床面ないし床面直上である。　**重複関係**　49・50号溝と重複する。本住居跡の方が旧い。
（唐澤）



図－342　H478号住居跡出土遺物

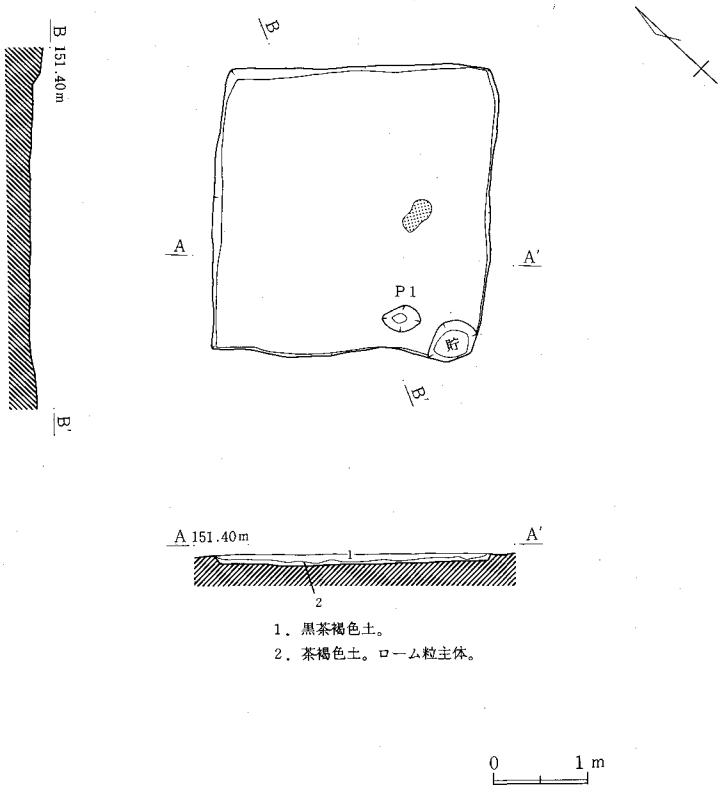
出土遺物　**土師器**　甕（1・2）、1はコの字状口縁甕だが、頸部の立ち上がりは不明瞭で、屈曲部のシャープさが認められない。器肉は厚くなっており、つくりも雑である。調整手法は、口縁部は外面に指頭痕を残す横ナデ、頸部外面の肩部と口縁外反部の境には浅い凹線、胴部外面はヘラ削り、同内面は横ヘラナデ（下半には斜ヘラナデを加える）を施す。色調は軽い茶色で、胎土中に多量の黒雲母・小石・粗い砂粒を混ぜる。2は1に比べ薄い器肉を持つが、口縁部に類似点が認められる。調整は1よりていねいだが、手法はまったく同じである。口縁部に粘土紐の巻き上げ痕を残す。色調は淡褐色で、胎土中に細かい砂粒を混ぜる。　坏（3・4）、いづれも同じつくりの土器であるが、4は雑なつくりで、胎土中に粗い砂粒が多く、色調も淡灰褐色で土師質須恵器と同じ焼成である。調整手法は口縁部及び内面に横ナデ、体部外面中ほどに指頭痕、体部外面下半と底部はヘラ削りを施す。　**須恵器**　坏（5～7）、5は底部を欠失するが、6・7は付高台で、底部外面に回転糸切り未調整痕を残す。5の外面の顕著なロクロ痕、7の高台のやや雑な接着を除くと、概してていねいなつくりである。色調は5・6が灰色、7が灰白色である。ロクロの回転方向は右である。　（唐澤）

H479号住居跡



図－343　H479号住居跡

H479号住居跡（5H－208）　**位置**　ヲ102。遺跡内を南北に縦断する生活道路が、上武国道予定地と一緒になる地点の北側に所在する。ここで、生活道路は48号溝と共に二等辺三角形の区域を画しており、その底辺の西端やや北側に本住居跡は位置する。北30mには1号墳が、東20mには3軒の掘立柱建物跡があるが、周囲に分布する竪穴式住居跡はすべて石田川期のものである。本住居跡の西半分は、生活道路下のため未調査である。　**形状**　南北4.12m、東西1.6m＋αの隅丸の四角形と推定される。北壁・東壁は全体に直線的につくられているが、東壁南端はこけており、隅丸の度合いが大きい。東壁走向N－38°－E、面積4.7m²以上。壁高は、地層断面の観察によると最高25cmであるが、地層断面中にすでに住居跡築造当時の土層が残っていない（削平されている）ので、実際はもっと高い壁を有していたものである。周溝は、調査範囲内では認められなかった。　**床面**　特に固く踏みしめられた所は認められなかった。床面はX層ないしXI層の地山で、貼床は見られなかった。　**遺物**　床面及び床面直上、あるいは覆土中からも、遺物の出土はまったくなかった。　**その他**　東壁北端から炭化材が出土している。細かくいくつかに分かれているが、のっている面や木目の方向（南北方向）が同じなので、1本の炭化材と見られる。床面より6.5cm浮いている。図中の石は、偏平な安山岩山石で、表裏とも一面に良く焼けている。床面から8cm浮いている。なお、本住居跡は、覆土中に榛名山二ツ岳の軽石を混ぜないこと、東壁にカマドを持たないこと、石田川期住居跡の分布区域内にあること等から、石田川期の住居跡と推定される。　（唐澤）



図－344　H495号住居跡

H495号住居跡（5H－224）　**位置**　ル4。1号墳の北25mに本住居跡がある。　**形状**　南北3.10m、東西2.84mの方形を呈し、面積は8.2m²を測る。長軸は南北、その方向はN－22°－Eである。壁の形状は、南壁以外はほぼ直線で、南壁は波打つ。壁高4～12cm。床は全般にやわらかい。　**ピット**　南壁の東端近く、貯蔵穴近くに確認できる。その規模は34×26cm、深さ15cmである。　**炉**　住居中央東寄りにあって、38×21cmの瓢形を呈する。焼土の厚さ1～3cm。　**貯蔵穴**　南東隅で56×40cm、深さ8cmの不整円形である。　**遺物**　北東隅付近で土師器甕の破片2片が出土。　（中澤）

表—15 竪穴式住居跡出土鉄関係遺物　　（覆土中）と特にことわりのないものは、床面ないし、床面付近の出土

住居No.	鉄製品	鉄滓	羽口	砥石	備考
272号				流紋岩	
273号	種類不明（覆土中）				
275号	鉄鎌片（覆土中）			流紋岩	
276号				流紋岩	
278号	釘 刀子				刀子を分析資料に使用
279号	釘（覆土中） 刀子（覆土中）			（覆土中）流紋岩	
280号	釘または柄	鍛冶滓			
282号	種類不明（覆土中）	鍛冶滓 （椀形鉄滓他覆土中）		輝石安山岩	
283号	刀子？	鍛冶滓 （椀形鉄滓覆土中）			
284号	鎌片				
285号		鍛冶滓（P_5内覆土中）		出土したが、所在不明	
286号		鍛冶滓		流紋岩	
288号		鍛冶滓（椀形鉄滓）			
289号	種類不明	鍛冶滓	径 6.5～7.5cm （2ケ）		
290号	鎌	鍛冶滓			
291号		鍛冶滓（椀形鉄滓）			
293号	鉄鏃？ 刀子				
295号		鍛冶滓 （椀形鉄滓他覆土中）			
298号	釘 鎌（覆土中）	鍛冶滓（覆土中）		流紋岩	

住居No.	鉄製品	鉄滓	羽口	砥石	備考
299号		鍛冶滓 （椀形鉄滓他覆土中）	覆土中		
300号	鎌？ 刀子（覆土中）	鍛冶滓（椀形鉄滓覆土中）			
301号	刀子？	鍛冶滓 （椀形鉄滓他覆土中を含む）	覆土中		
302号		鍛冶滓（覆土中）			
303号	種類不明（覆土中）	鍛冶滓（椀形鉄滓覆土中）			
304号	刀子 L字型金具（覆土中）	鍛冶滓（覆土中）			
305号				流紋岩 （2ケ）	
307号		鍛冶滓（椀形鉄滓他覆土中）	覆土中	輝石安山岩 （覆土中）	
308号	種類不明 釘 釘（覆土中） 刀子または、鎌（覆土中）	鍛冶滓（覆土中）			
309号		鍛冶滓（覆土中）	径 7.5cm前後	流紋岩 （覆土中）	
315号		鍛冶滓（椀形鉄滓覆土中）			
317号	刀子（覆土中）		径 8.5cm前後 長さ 10.5cm		
318号		鍛冶滓（覆土中）			
319号		鍛冶滓（覆土中）			
320号	鉄鏃				
354号		鍛冶滓			
355号		鍛冶滓（椀形鉄滓）			
358号	釘	鍛冶滓（椀形鉄滓）			
359号	刀子 釘状（覆土中）	鍛冶滓（椀形鉄滓中心）	径 5cm		
361号		鍛冶滓			

住居No.	鉄製品	鉄滓	羽口	砥石	備考
364号	刀子（覆土中）	鍛冶滓	径 7cm前後		
366号		鍛冶滓			
373号		鍛冶滓			鉄滓は炭化物を多量にかみ込む。
387号		鍛冶滓（椀形鉄滓覆土中）			
391号				頁岩	
394号		鍛冶滓（椀形鉄滓）			
397号	刀子片	鍛冶滓（椀形鉄滓覆土中）			
398号				頁岩	
401号		鍛冶滓（椀形、手のひら型他）	径 8cm前後か（カマド内）		
414号	刀子 種数不明3 } 覆土中	鍛冶滓（椀形鉄滓P_1内・覆土中）	覆土中		
418号		鍛冶滓（椀形鉄滓）			
433号（建替後）				出土したが所在不明	
438号	鏃？	鍛冶滓			
439号	釘？（覆土中）	鍛冶滓（椀形鉄滓他）		流紋岩（2ケ）	
440号	種類不明（覆土中）	鍛冶滓（椀形鉄滓覆土中）		流紋岩（覆土中）	
442号		鍛冶滓（覆土中）	径 7.5cm（覆土中）	凝灰質砂岩（覆土中）	
444号		鍛冶滓（覆土中）			
445号	刀子（覆土中）	鍛冶滓		輝石安山岩（覆土中）	
451号	種類不明（覆土中）				
473号				流紋岩	

表一16 竪穴式住居跡ピット計測値一覧表　　（単位　cm）

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
	貯蔵穴	55 × 48	23	
268号	P_1	38 × 22	29	柱穴
	P_2	12 × 6	6	柱穴
	P_3	18 × 14	19	
	P_4	18 × 12	2	間仕切り的なものか
	P_5	16 × 14	2	間仕切り的なものか
	P_6	138 × 66	14	間仕切り的なものか
	P_7	20 × 20	12	柱穴出入口施設に関連するものか。
	P_8	40 × 36	28	柱穴
269号	P_1	28 × 26	19.5	
	P_2	38 × 30	53.5	
	P_3	20 × 18	20	
	P_4	44 × 38	42	
	P_5	22 × 20	28	
	P_6	34 × 26	27	
	P_7	24 × 17	35	
	P_8	26 × 22	30	
	P_9	42 × 20	11（上）　38（下）	
	P_{10}	26 × 24	36	
270号	P_1	78 × 68	22	
	P_2	26 × 16	6	
	P_3	56 × 50	15	
	P_4	59 × 54	25	
	P_5	32 × 30	8	
	P_6	48 × 40	8	
	P_7	82 × 71	18	
	P_8	58 × 50	30	
	P_9	34 × 26	21	
	P_{10}	38 × 34	39（検出面から） 22（床面から）	
271号	貯蔵穴	46 × 32	24	
	P_1	91 × 65	35	貯蔵的な機能をもつか
	P_2	52 × 50	40（遺構検出面から） 7（床面から）	
272号	貯蔵穴	44 × 30	31.8	
	P_1	48 × 32	8.9	
	P_2	30 × 18	50.9	柱穴か
	P_3	44 × 42	58.8	柱穴か
	P_4	36 × 34	24.7	灰かき穴
273号	貯蔵穴	46 × 40	42	
	P_1	86 × 70	24	主柱穴か
	P_2	56 × 38	15	主柱穴か
	P_3	62 × 46	25	主柱穴か

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
273号	P_4	76 × 60	12	主柱穴か
	P_5	54 × 48	30	灰かき穴
274号	貯蔵穴	52 × 43	27	
275号	貯蔵穴	72 × 56	11	
277号	P_1	50 × 38	16	出入口施設に伴うものか
278号	貯蔵穴	46 × 36	30	
	P_1	70 × 58	14	
279号	P_1	54 × 46	17	
	P_2	42 × 15	12	
280号	貯蔵穴	70 × 66	16	
	P_1	86 × 47	6	
281号	貯蔵穴	54 × 34	12	
	P_1	94 × 37	6	
	P_2	36 × 35	9	
282号	P_1	24 × 16	14	出入口施設に関連するものか
	P_2	38 × 18	9	出入口施設に関連するものか
	P_3	30 × 30	10	
283号	P_1	約54 × 50	35	
	P_2	68 × 50	15	
	P_3	63 × 58	6	
284号	P_1	100 × 88	23	主柱穴
	P_2	90 × 86	23	主柱穴
	P_3	52 × 48	42	主柱穴
	P_4	68 × 46	34	主柱穴
	P_5	36 × 36	30	
	P_6	32 × 28	13	
	P_7	38 × 19	24	
	P_8	24 × 16	53	
	P_9	20 × 18	35	
	P_{10}	28 × 19	26	
	P_{11}	20 × 19	41	
	P_{12}	26 × 24	9	
	P_{13}	24 × 21	22	
	P_{14}	26 × 22	33	
	P_{15}	20 × 17	12	
285号	貯蔵穴 I	32 × 30	25	
	貯蔵穴II	56 × 52	27	
	P_1	40 × 36	25（東半） 38（西半）	主柱穴。建て替えあり。（第1次・第2次）
	P_2	22 × 16	12	第1次主柱穴
	P_3	32 × 21	48	第2次主柱穴
	P_4	46 × 42	13	
	P_5	38 × 30	36	第2次主柱穴

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
285号	P_6	34 × 30	10	第1次主柱穴
	P_7	26 × 26	34	第1・2次主柱穴
	P_8	24 × 22	24	
	P_9	69 × 48	18	灰かき穴
286号	P_1	44 × 40	13	主柱穴か
	P_2	86 × 52	42	
	P_3	34 × 28	10	主柱穴か
	P_4	40 × 32	17	
	P_5	40 × 36	14	
	P_6	34 × 20	20	
	P_7	24 × 24	36	主柱穴か
287号	P_1	46 × 26	19	
	P_2	26 × 22	25	
	P_3	36 × 22	13	
	P_4	26 × 22	28	
	P_5	36 × 24	22	
	P_6	26 × 20	16	
	P_7	32 × 12	57	
	P_8	34 × 27	36	
	P_9	34 × 20	20	カマド跡、燃焼部の可能性あり。
	P_{10}	83 × 63	20	
288号	P_1	44 × 44	43	
	P_2	56 × 46	12	
	P_3	50 × 42	27	
	P_4	30 × 26	14	
	P_5	77 × 60	20	
	P_6	44 × 28	26	
	P_7	20 × 19	34	
	P_8	31 × 25	30	
	P_9	73 × 約54	20	H287号住のカマド跡の可能性あり
	P_{10}	34 × 32	33	H287号住に付く可能性あり
	P_{11}	27 × 21	18	
	P_{12}	30 × 26	14	
	P_{13}	32 × 28	29	
	P_{14}	52 × 24	15	
	P_{15}	29 × 26	22	
	P_{16}	40 × 12	26	
289号	貯蔵穴	72 × 50	29	
	P_1	21 × 20	8	
	P_2	22 × 14	不明	
	P_3	35 × 34	20	出入口施設に関連するのか。
	P_4	25 × 22	20	

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
289号	P_5	64 × 48	16	灰かき穴
	P_6	30 × 25	13	
	P_7	18 × 12	不明	
290号	貯蔵穴	68 × 55	22	
	P_1	50 × 36	25	主柱穴
	P_2	19 × 12	10	主柱穴
	P_3	52 × 50	18	主柱穴
	P_4	46 × 36	15	
	P_5	32 × 22	3	
	P_6	30 × 20	2	主柱穴
291号	貯蔵穴	32 × 28	23	
	P_1	30 × 19	22（西） 25（東）	
	P_2	32 × 29	19	深さは遺構検出面から柱穴か
	P_3	34 × 26	26	深さは遺構検出面から柱穴か
292号	貯蔵穴	82 × 62	22	
293号	貯蔵穴	46 × 41	30	
295号	P_1	90 × 68	12	
	P_2	56 × 32	8	
	P_3	28 × 24	13	主柱穴か
	P_4	11 × 11	9	
	P_5	18 × 16	12	主柱穴か
296号	P_1	50 × 37	11	
	P_2	28 × 22	14	
	P_3	19 × 8	7	
297号	貯蔵穴	94 × 64	12	
	P_1	58 × 28	20	
298号	P_1	22 × 21	7	
299号	P_1	21 × 14	11	
	P_2	32 × 16	8	
300号	貯蔵穴	50 × 50前後	12	
301号	P_1	41 × 34	10	H302号住居跡のカマド灰かき穴か
302号	P_1	94 × 74	26（南西隅）	
303号	貯蔵穴	33 × 32	14	
304号	貯蔵穴	66 × 52	25	
	P_1	66 × 54	16	
	P_2	33 × 29	21	
	P_3	47 × 46	18	
307号	貯蔵穴	64 × 44	14	
	P_1	39 × 30	12	
	P_2	23 × 20	12	
308号	貯蔵穴	90 × 52	21	その中に、32×24cm深さ38cmのピットあり
309号	P_1	31 × 26	13	出入口施設に関連するものか

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
312号	貯蔵穴	55 × 30	13	
	P_1	53 × 31	7	
313号	貯蔵穴	60 × 44	11	
314号	貯蔵穴	40 × 32	17	主柱穴か
	P_1	30 × 23	9	主柱穴か
	P_2	44 × 40	13	主柱穴か
	P_3	58 × 40	13	出入口施設に関連するものか
	P_4	40 × 30	11	
315号	貯蔵穴	46 × 36	30	
316号	P_1	25 × 16	11	
	P_2	18 × 16	4	
317号	P_1	36 × 20	20	
	P_2	24 × 23	38	
319号	P_1	26 × 12	7	
	P_2	33 × 11	4	
320号	貯蔵穴	68 × 58	15	
322号	P_1	89 × 54	12	灰かき穴か
354号	P_1	39 × 28	12	H366号住の入口施設と関係あるものとみなされる。その場合深さは約20cm
355号	P_1	32 × 14	15	
	P_2	20 × 10	不明	
356号	P_1	74 × 56	79	貯蔵穴的な機能を持ったピットか
357号	貯蔵穴	84 × 58	14	
	P_1	64 × 52	58	主柱穴
	P_2	97 × 43	23（東） 31（西）	主柱穴
	P_3	25 × 15	28	
	P_4	28 × 22	なし	
	P_5	23 × 19	30	貯蔵穴内のピット
	P_6	50 × 33	34	H395・396号住居の一部の可能性もある。
	P_7	89 × 29	45	主柱穴
	P_8	36 × 28	65	
	P_9	13 × 13	11	
	P_{10}	32 × 19	23	主柱穴
	P_{11}	23 × 23	51	
	P_{12}	20 × 19	24	
	P_{13}	16 × 16	14	
358号	貯蔵穴	70 × 48	26	
359号	貯蔵穴	82 × 64	34	
	P_1	70 × 66	53	主柱穴
	P_2	76 × 66	46	主柱穴
	P_3	103 × 80	20	
	P_4	82 × 60	51	主柱穴
	P_5	80 × 64	55	主柱穴

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
359号	P6	86 × 56	49	主柱穴
	P7	104 × 24	なし	
	P8	34 × 18	なし	
	P9	26 × 24	なし	
	P10	40 × 20	18	
	P11	52 × 30	22	
	P12	30 × 22	なし	間仕切り的な施設に伴うものか
	P13	36 × 24	なし	壁柱
	P14	22 × 20	29	間仕切り的な施設に伴うものか
	P15	34 × 32	なし	壁柱
	P16	110 × 10	なし	
	P17	16 × 12	なし	
	P18	18 × 16	なし	壁柱
	P19	30 × 22	30	壁柱
	P20	80 × 16	なし	
	P21	14 × 8	なし	
	P22	27 × 25	不明	
360号	P1	124 × 58	42	カマド痕跡か
361号	貯蔵穴	92 × 68	30	
	P1	29 × 22	41	出入口施設に関連するものか。
	P2	18 × 15	23	
	P3	14 × 10	不明	
362号	貯蔵穴	96 × 86	30	
	P1	86 × 62	27	貯蔵穴的な機能を持つものか
	P2	54 × 44	51	主柱穴か
	P3	40 × 34	15	柱穴か
	P4	40 × 32	12	出入口施設に関連するものか
	P5	60 × 38	58	
363号	貯蔵穴	94 × 66	17	
	P1	30 × 24	なし	
	P2	52 × 28	21（西） 15（東）	
	P3	54 × 32	12	
	P4	32 × 28	30	
	P5	16 × 16	なし	
	P6	18 × 10	なし	
	P7	26 × 22	26	
	P8	27 × 14	なし	
	P9	22 × 22	なし	
	P10	20 × 18	なし	
	P11	10 × 8	なし	
364号	貯蔵穴	164 × 72	32	

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
364号	P1	48 × 36	84	主柱穴
	P2	86 × 70	99	主柱穴
	P3	70 × 56	59	主柱穴
	P4	58 × 56	36	主柱穴
	P5	58 × 48	30	出入口施設に関連するものか。
	P6	54 × 47	22	
	P7	52 × 36	16	
	P8	32 × 28	58	
	P9	34 × 26	5	
365号	貯蔵穴	100 × 34	21	
	P1	25 × 23	13	出入口施設に伴うものか。
	P2	20 × 16	床面が若干くぼむ程度	
366号	貯蔵穴	86 × 70	29	
	P1	28 × 20	32	主柱穴。建て替えあり。
	P2	38 × 14	なし	主柱穴。建て替えあり。
	P3	24 × 22	40	主柱穴
	P4	30 × 22	52	主柱穴
	P5	28 × 22	30	
	P6	120 × 96	24	
	P7	36 × 32	15	
	P8	62 × 58	57	
	P9	40 × 38	36	
	P10	28 × 24	29	
367号	P1	42 × 30		
	P2	50 × 24	不明	この中に20×18cm、深さ25cmのピット有り。
	P3	25 × 20	18(検出面から)	住居外。
368号	貯蔵穴	70 × 44	32	
	P1	(推定50 × 50)	16	掘りすぎ
	P2	58 × 48	12	この中に16×16cm、深さ37cmのピット有り。
	P3	42 × 32	19	
	P4	38 × 30	24	主柱穴
	P5	50 × 46	21	主柱穴
	P6	40 × 34	15	壁柱
	P7	36 × 26	9	壁柱
	P8	32 × 22	19	壁柱
	P9	76 × 38	17	壁柱
	P10	90 × 60	14	壁柱
369号	貯蔵穴	58 × 54	22	
	P1	90 × 70	18	
370号	貯蔵穴	68 × 36	6	
	P1	98 × 90	7	
371号	貯蔵穴	70 × 56	49	

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
371号	P_1	61 × 51	16	
	P_2	40 × 31	30	出入口施設に関連するものか。
372号	P_1	34 × 20	15 (49)	( )内は遺構検出面から
	P_2	50 × 34	44 (78)	
	P_3	40 × 21	34 (69)	
	P_4	78 × 19	18	
	P_5	78 × 30	13	灰かき穴か
	P_6	30 × 28	12	
373号	貯蔵穴	64 × 48	19	
	P_1	35 × 28	32	出入口施設に関連するものか。
374号	P_1	34 × 28	28 (71)	柱穴か( )は遺構検出面からの深さ。
	P_2	40 × 30	8 (48)	
	P_3	80 × 40	6	
	P_4	18 × 14	なし	
375号	P_1	43 × 32	37	柱穴
	P_2	38 × 28	33	柱穴
	P_3	81 × 24	17 (北) 38 (南)	柱穴
	P_4	60 × 45	35	柱穴。建て替え前は貯蔵穴か。
	P_5	42 × 30	61	柱穴
	P_6	40 × 13	23	柱穴
	P_7	27 × 25	41	柱穴
	P_8	24 × 20	28	柱穴
	P_9	52 × 50	15	灰かき穴とみられる
	P_{10}	64 × 50	15	灰かき穴とみられる
	P_{11}	16 × 12	17	出入口施設に関連するものか。
377号	P_1	26 × 16	22	
378号	P_1	104 × 68	32	主柱穴
	P_2	98 × 67	38	主柱穴
	P_3	43 × 39	58	
	P_4	131 × 106	62	底部付近壁面焼土化
	P_5	41 × 33	65	
	P_6	128 × 49	29	主柱穴
	P_7	56 × 28	28	主柱穴
379号	貯蔵穴	60 × 46	55	
	P_1	40 × 40	6	
	P_2	19 × 7	4	
380号	貯蔵穴 I	44 × 42	15	
	貯蔵穴 II	50 × 24	34	
	P_1	48 × 40	不明	
381号	貯蔵穴	32 × 26	56	
	P_1	50 × 44	10	柱穴
	P_2	58 × 58	45	

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
381号	P_3	62 × 46	32	
	P_4	56 × 32	12	柱穴
383号	貯蔵穴	(50 × 48)	(35)	
384号	P_1	36 × 36	22	主柱穴
	P_2	54 × 38	33	主柱穴
	P_3	42 × 38	54	主柱穴
	P_4	48 × 36	58	主柱穴
	P_5	66 × 56	45	貯蔵穴
	P_6	52 × 48	11	貯蔵穴か
	P_7	102 × 16	9	周溝か
	P_8	48 × 28	17	周溝か
	P_9	62 × 32	9	周溝か
	P_{10}	86 × 46	12（西） 20（東）	
	P_{11}	40 × 34	29	貯蔵穴か
	P_{12}	24 × 20	10	
	P_{13}	34 × 18	7	
	P_{14}	37 × 30	30	
	P_{15}	22 × 16	15	
385号	貯蔵穴	70 × 54	41	
	P_1	33 × 30	40	主柱穴（第1・2次兼用）
	P_2	56 × 46	9	主柱穴（第1・2次兼用）
	P_3	44 × 36	9	第2次主柱穴
	P_4	62 × 44	8（北） 5（東） 10(南)	第1次主柱穴
	P_5	82 × 52	14	第1次主柱穴
	P_6	52 × 36	10（北） 21（南）	第2次主柱穴
386号	P_1	52 × 34	9～12	
	P_2	54 × 52	55	貯蔵穴か
	P_3	40 × 32	18（北） 60（南）	
388号	P_1	42 × 36	18	
	P_2	174 × 40	20	東壁にオーバーハングしている
389号	貯蔵穴	48 × 46	49	
	P_1	54 × 54	18（東） 27（西）	入口施設に関係するものか
390号	貯蔵穴I	97 × 65	76	
	貯蔵穴II	55 × 40	23	
	P_1	24 × 18	66	主柱穴
	P_2	28 × 19	34	主柱穴
	P_3	33 × 26	68	主柱穴
	P_4	52 × 30	58	主柱穴
391号	P_1	32 × 30	8	柱穴か
	P_2	40 × 32	38	柱穴か
	P_3	23 × 22	30	
	P_4	40 × 34	17.5	柱穴か

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
391号	P_5	21 × 18	11.5	
	P_6	16 × 14	7	
	P_7	29 × 18	22	
392号	貯蔵穴	64 × 50	32	
393号	P_1	42 × 38	29	
	P_2	66 × 52	5	
395 396号	P_1	54 × 54	22	
	P_2	42 × 18	61（北） 29（南）	
	P_3	36 × 36	18	
	P_4	46 × 26	29	
	P_5	32 × 18	57	
	P_6	24 × 24	15	
	P_7	38 × 16	26	
	P_8	24 × 24	9	
	P_9	45 × 33	34	H357号住のP_6と共通どちらに付くか不明
397号	貯蔵穴	86 × 72	27	
	P_1	42 × 30	6	
	P_2	26 × 20	18（床面から） 55（遺構検出面から）	
	P_3	42 × 28	11	灰かき穴
398号	P_1	45 × 17	8	
	P_2	38 × 32	35	貯蔵穴か
	P_3	34 × 32	35	貯蔵穴か
	P_4	24 × 19	12	
	P_5	57 × 35	12	
399号	P_1	74 × 60	24	柱穴
	P_2	68 × 56	13	柱穴
	P_3	73 × 60	17	柱穴
400号	貯蔵穴	64 × 60	34	
401号	貯蔵穴	78 × 76	30	
402号	P_1	26 × 14	不明	
	P_2	32 × 26	7	
	P_1	24 × 20	40	
403号	P_2	18 × 10	なし	
	P_3	30 × 20	なし	
404号	P_1	28 × 11	27	} ハシゴ状の出入口施設とも考えられる。
	P_2	18 × 11	37	
	P_3	27 × 24	8	出入口施設に関連するピットか
407号	貯蔵穴	66 × 42	推定（17）	
409号	貯蔵穴	68 × 56	48	
	P_1	52 × 42	18	柱穴か
	P_2	46 × 40	13	柱穴か
	P_3	56 × 29	11	

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
409号	P_4	48 × 14	17	
410号	P_1	20 × 18	35	
	P_2	36 × 18	10	
	P_3	36 × 36	29	
	P_4	32 × 23	9	
	P_5	24 × 16	27	
	P_6	28 × 17	13	
	P_7	11 × 7	14	
	P_8	11 × 6	6	
411号	貯蔵穴I	72 × 52	50	
	貯蔵穴II	50 × 36	16	
414号	P_1	48 × 44	58	主柱穴
	P_2	62 × 52	15	
	P_3	68 × 56	87	主柱穴
	P_4	42 × 16	なし	
	P_5	26 × 26	46	主柱穴
	P_6	20 × 20	23	主柱穴
416号	貯蔵穴I	68 × 56	70	
	貯蔵穴II	72 × 72	37（床面から）	
	P_1	67 × 46	28	
	P_2	132 × 128	10	
	P_3	84 × 53	23	
417号	貯蔵穴	58 × 50	37	
418号	貯蔵穴	88 × 54	70	
	P_1	46 × 42	48	主柱穴
	P_2	56 × 34	51	主柱穴
	P_3	67 × 52	52	主柱穴
	P_4	53 × 50	40	主柱穴
	P_5	42 × 36	39	入口施設に伴うピットとも考えられる
419号	貯蔵穴	60 × 53	52	
420号	貯蔵穴	115 × 98	20	
	P_1	30 × 27	32	
	P_2	78 × 44	39	出入口施設に関連するものか。
	P_3	40 × 36	32	
	P_4	46 × 44	32	
421号	P_1	44 × 36	16.5	
	P_2	80 × 76	8	
	P_3	84 × 37	41	貯蔵穴か
	P_4	40 × 40	14.2（18）	出入口施設に関連するものか。
422号	貯蔵穴	72 × 53	23	
	P_1	60 × 58	12	貯蔵穴的な機能を持つものか
	P_2	52 × 38	12	出入口施設に伴うものと推定される。

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
422号	P_3	40 × 28	不明	貼床を掘ったものか。
	P_4	19 × 12	不明	
423号	P_1	50 × 44	25（北） 26（南）	出入口施設に伴うものか
424号	貯蔵穴	104 × 90	38	
	P_1	38 × 24	12	
425号	P_1	82 × 56	22	
	P_2	48 × 48	15	
	P_3	54 × 42	なし	
	P_4	18 × 16	なし	
	P_5	48 × 32	なし	
	P_6	34 × 24	なし	
	P_7	40 × 36	なし	
426号	貯蔵穴	76 × 56	73	
	P_1	70 × 56	60	主柱穴
	P_2	76 × 66	70	主柱穴
	P_3	62 × 52	80	主柱穴
	P_4	56 × 50	70	主柱穴
	P_5	48 × 34	41	
	P_6	48 × 34	11	
	P_7	38 × 28	14	
427号	貯蔵穴 I	60 × 50	85.5	
	貯蔵穴II	64 × 52	46	
	P_1	50 × 28	20	柱穴か
	P_2	36 × 28	22	柱穴か
	P_3	36 × 26	不明	
428号	P_1	70 × 56	29(東) 49(中央)	二段ピット。貯蔵穴か
	P_2	60 × 50	70	貯蔵穴か。
	P_3	26 × 24	38	住居廃棄後のもの。
	P_4	42 × 42	12.5	
430号	貯蔵穴	72 × 60	27	
	P_1	62 × 58	30	出入口施設に関連するものか。
	P_2	36 × 28	20	
431号	P_1	34 × 20	66	主柱穴
	P_2	36 × 24	不明	主柱穴
	P_3	52 × 44	61	主柱穴
	P_4	32 × 28	54	主柱穴
432号	P_1	46 × 40	34	主柱穴
	P_2	50 × 48	46	主柱穴
	P_3	52 × 42	40	主柱穴
	P_4	49 × 40	48	主柱穴
	P_5	38 × 32	14	
	P_6	42 × 40	不明	

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
432号	P_7	42 × 40	不明	
	P_8	44 × 38	6	
433号（建替え前）	貯蔵穴	70 × 70	71	
	P_1	108 × 76	78	主柱穴第2次住居P_1と兼用か
	P_2	55 × 40	38	主柱穴
	P_3	48 × 46	70	主柱穴
	P_4	62 × 44	35	主柱穴
433号（建替え後）	P_1	128 × 62	93	主柱穴
	P_2	138 × 82	120	主柱穴
	P_3	46 × 34	57	主柱穴
	P_4	53 × 44	40	
	P_5	50 × 42	81	
	P_6	59 × 46	28（北） 15（南）	
	P_7	56 × 30	15	
	P_8	27 × 24	なし	
	P_9	34 × 18	18	
	P_{10}	20 × 19	8	
434号	P_1	62 × 48	23.5	貼床の掘りすぎか
	P_2	88 × 80	12	
	P_3	78 × 60	62	
	P_4	103 × 100	9	貼床の掘りすぎか。
435号	貯蔵穴I	50前後 × 48	30	
	貯蔵穴II	54 × 49	54	
	P_1	42 × 27	16	
	P_2	34 × 32	13	
	P_3	50 × 24	27	
	P_4	22 × 20	7	
	P_5	径26前後	不明	出入口施設に伴うピットか
436号	P_1	70 × 56	27（北） 12（南）	貯蔵穴か
	P_2	68 × 62	25	
	P_3	42 × 32	17（北） 18（南）	
	P_4	80 × 56	25（北） 30（南）	貯蔵穴か
437号	貯蔵穴	60 × 38	19	
	P_1	63 × 50	19.5	柱穴か
	P_2	64 × 41	26.5	柱穴か
	P_3	50 × 38	22	柱穴か
	P_4	52 × 41	37	柱穴か
	P_5	56 × 38	18（北） 20（南）	
440号	P_1	76 × 60	65	主柱穴
	P_2	96 × 70	62	主柱穴
	P_3	42 × 42	52	主柱穴
	P_4	69 × 63	54	主柱穴

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
440号	P_5	44 × 32	約15	
441号	貯蔵穴	47 × 44	28	
	P_1	26 × 22	18.5	
442号	貯蔵穴	39 × 38	9	
	P_1	64 × 48	67	主柱穴
	P_2	55 × 54	7	
	P_3	36 × 30	50	主柱穴
	P_4	26 × 20	40	主柱穴
	P_5	38 × 36	38	主柱穴
	P_6	72 × 50	13	
443号	P_1	50 × 44	25	主柱穴
	P_2	50 × 35	12.5	主柱穴
	P_3	37 × 32	36	主柱穴
	P_4	116 × 46	12	主柱穴
	P_5	30 × 26	22.5	
444号	貯蔵穴	40 × 40	22	
	P_1	42 × 34	15	
445号	貯蔵穴	54 × 48	16	
	P_1	30 × 26	21	出入口施設に関連するものか。
	P_2	16 × 15	9	柱穴
	P_3	24 × 16	13	柱穴
	P_4	23 × 21	14	柱穴
	P_5	18 × 16	なし	柱穴
	P_6	18 × 16	28	柱穴
446号	貯蔵穴	66 × 41	19	
	P_1	32 × 32	42	
	P_2	46 × 36	32	
	P_3	29 × 28	20	
	P_4	26 × 20	10	
	P_5	24 × 19	27	
	P_6	44 × 42	10前後	灰かき穴と見られる
447号	P_1	28 × 23	19	
	P_2	26 × 24	62	
	P_3	27 × 24	79	
	P_4	46 × 44	14	
448号	P_1	48 × 38	9	主柱穴
	P_2	56 × 34	28	主柱穴
	P_3	82 × 64	13	主柱穴
	P_4	60 × 50	14	主柱穴
449号	貯蔵穴 I	66 × 50	51	
	貯蔵穴II	92 × 56	39	
450号	貯蔵穴	70 × 68	40	

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
451号	貯蔵穴	48 × 44	18	
	P_1	28 × 24	15	
	P_2	30 × 21	12	
	P_3	20 × 16	24	
452号	P_1	28 × 22	39	
	P_2	15 × 11	5	
	P_3	28 × 18	11	
453号	貯蔵穴	26 × 24	31	
	P_1	30 × 22	13	
459号	P_1	84 × 60	13	柱穴
	P_2	70 × 52	43	貯蔵穴か
	P_3	45 × 44	37	貯蔵穴か
	P_4	40 × 33	10	柱穴
460号	貯蔵穴	62 × 48	25cm前後（推定）	
	P_1	30 × 18	6	
	P_2	16 × 14	不明	
	P_3	19 × 14	17	
	P_4	22 × 14	8	56号溝につく可能性もあり
461号	貯蔵穴	51 × 51	32	
462号	貯蔵穴	104 × 78	25	
464号	貯蔵穴	50 × 46	53	
	P_1	40 × 34	18	出入口施設に関連するものか
	P_2	42 × 32	30	
465号	貯蔵穴	44 × 42	22	
466号	P_1	48 × 40	22	貯蔵穴的なものとみられる
	P_2	70 × 54	54	出入口施設に関連するものか
	P_3	46 × 44	48	貯蔵穴的なものとみられる
467号	貯蔵穴	72 × 48	22	
	P_1	44 × 40	36	
468号	貯蔵穴	57 × 54	32	
	P_1	20 × 16	43	
	P_2	28 × 22	8	
469号	貯蔵穴 I	54 × 50	26	
	P_1	40 × 40	約20	
470号	P_1	42 × 40	19	貯蔵穴か
	P_2	40 × 36	8	貯蔵穴か
471号	P_1	58 × 40	145～	
	P_2	17 × 15	不明	
473号	P_1	74 × 68	15	
	P_2	64 × 60	24	中に20×16cm、深さ10cmの小ピット
	P_3	78 × 64	18	
474号	P_1	19 × 18	8	

竪穴No.	ピットNo.	長径×短径	深さ	備考
474号	P_2	17 × 16	10	
	P_3	42 × 38	29～37	
	P_4	36 × 28	22	
	P_5	39 × 28	45	
476号	貯蔵穴	56 × 50	43	全体の½以上が壁の中に入る
	P_1	42 × 38	34	貯蔵穴的なものとみられる。
	P_2	18 × 16～	20	
477号	P_1	58 × 38	10（北）～15（南）	
	P_2	径32cm以上	7～	貯蔵穴か
478号	P_1	68 × 60	17(上段) 26(下段)	
	P_2	19 × 14	39	
	P_3	21 × 20	36	
495号	貯蔵穴	56 × 40	8	
	P_1	34 × 26	15	

4　竪穴遺構

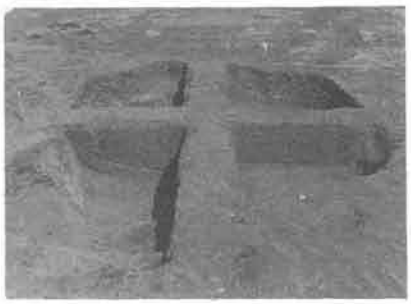
概　要

芳賀東部団地遺跡では、竪穴式住居跡状の形態を持ち、住居ならばカマドを持つ時期のものにもかかわらず、カマドのない遺構を、5軒検出している。これをH竪穴遺構と称することにする。以下、本報告書で取り扱うのは、この内の東側台地に係わる3軒分（H3～5号竪穴遺構）である。

H3号竪穴は、比較的平坦な所で住居跡群に挟まれてわずか1軒で所在するのに対し、H4・5号竪穴は、東側の谷地へ向かう傾斜面上で、住居跡や掘立の密集する1群に含まれて所在する。これらH竪穴遺構に確実に附随する遺物はなく、覆土中の遺物のありかたも、特に顕著な特色はない。

遺構の構造としては、3者とも柱穴とカマドのない点で共通するが、それぞれの違いも大きい。H3号竪穴は小規模な点に特色がある。H4号竪穴は、床面中央にロームを掘り残した凸起部があり、その中央に柱穴状のピットを持つ点で特異である。H5号竪穴は東壁中央南寄りにカマド状の若干の張り出しがあり、住居構築途中で放棄したものか。

これらの遺構は、覆土及び覆土中の遺物から、周囲の住居跡や掘立と同じ奈良・平安時代のものである。　（唐澤）

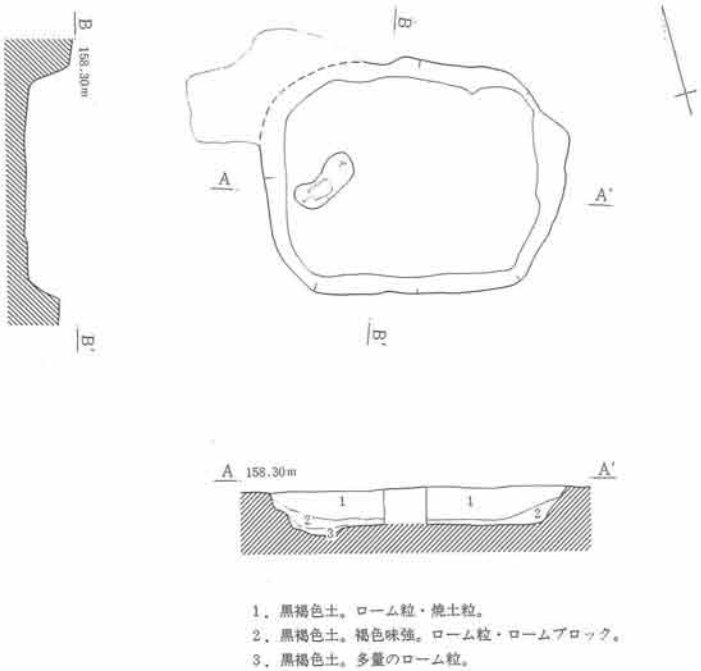


H竪穴遺構3地層断面（西から）

H竪穴遺構4全景

H竪穴遺構5全景

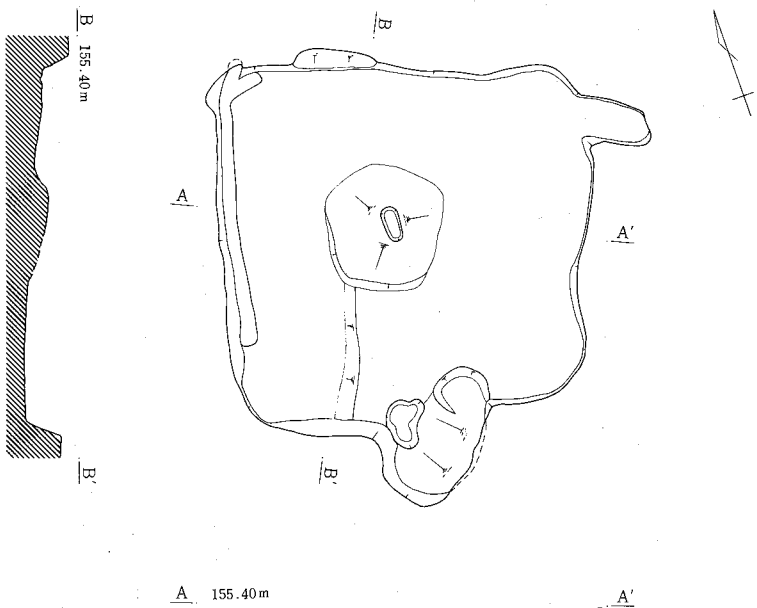
H3号竪穴遺構



図－345　H3号竪穴遺構

H3号竪穴遺構（5H－竪穴1）　**位置**　ヲ12に所在する。北と南にはそれぞれ7～8軒の住居址群があり、それに挟まれて他に遺構のない所に1軒で所在する。　**形状**　東西方向に長軸を取る隅丸の長方形で、西壁側の幅がやや広い。規模は東西2.65m、南北2.12mの小型の遺構である。面積4.9m²、長軸方向N－102°－E、壁高30～46cmで北壁側が高くなっている。　**ピット**　西壁寄りに1個検出された。長方形で、規模は72×30cm、深さ8cmである。性格は不明である。　**遺物**　床面及び覆土中から、遺物の出土はまったくみられなかった。　**その他**　本遺構の時期については、覆土中に二ツ岳系の軽石を含むこと、周囲の住居内の覆土と良く似ていることの2点から、周囲の住居址群とほぼ同じ頃の奈良時代から平安時代のものと推測される。またこの性格については、極めて小規模な竪穴であること、南北の住居址群から離れて所在することと関係するかも知れない。　（唐澤）

Ｈ４号竪穴遺構

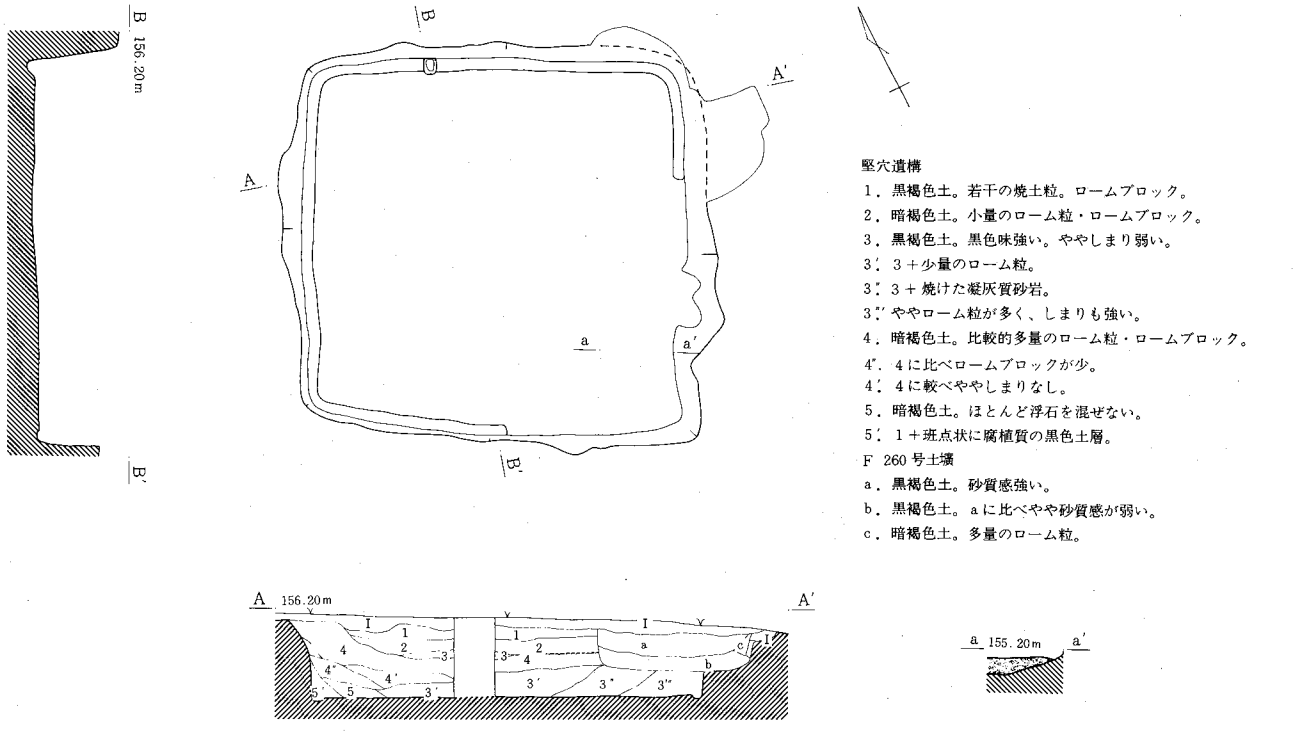


図－346　Ｈ４号竪穴遺構

Ｈ４号竪穴遺構（５Ｈ－竪穴２）　**位置**　タ９に所在する。周囲には奈良・平安時代の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が分布する。　**形状**　隅丸の方形で、規模は東西・南北共に3.9m、面積12.4㎡、南北方向Ｎ－10°－Ｅ、壁高16～40cm。　**床面**　床面中央にロームの盛り上がり部分がある。これは断面等で見ても固くしまっており、地山ロームとの差はみられなかった。当初から地山を計画的に掘り残したものとみられる。規模は南北1.3m、東西1.24m、床面からの高さ約10cmである。また、この中央には、36×18cm、深さ16cmのピットがある。　**遺物**　覆土中から、Ｈ359号住居跡出土の坏に類似するものが、数多く出土している。　（唐澤）

Ｈ５号竪穴遺構（５Ｈ－竪穴３）　**位置**　タ10。　**形状**　南北3.9m、東西4.07mの隅丸方形。東壁の中央南寄りに、不整形の小さな張り出し状の施設がある。他の住居跡ではここにカマドの来ることが注意される。面積15.2㎡、南北の方位Ｎ－27°－Ｅ、壁高65～92cm。　**床面**　東壁の張り出し部付近に、厚さ36cmの貼床がある。範囲不明。　**遺物**　床面付近から、幅が狭く低く削り出した高台を持つ須恵器坏（底部回転ヘラ切り後周辺部回転ヘラ削り調整）。覆土中から底部全面手持ヘラ削り調整の須恵器坏、締まりのある〝く〟字状口縁甕等が出土。　**その他**　本遺構は、住居構築途中で放棄したものと推測される。　（唐澤）

Ｈ５号竪穴遺構



図－347　Ｈ５号竪穴遺構

5　掘立柱建物跡

概　要

芳賀東部団地遺跡全体で、約200棟の掘立柱建物跡が検出された。これに建て替えや、今後の机上での組み立てを考慮するならば、総数は更に増加することが予想される。この内、本書に収録したのは建て替え分を含む64棟である。規模は、1間×1間が1棟、2間×1間が5棟、2間×2間が33棟(内、庇2棟)、3間×1間が3棟、3間×2間が13棟、3間×3間が2棟、4間×2間が1棟、4間×3間が1棟、6間×2間が1棟、2間×2間の総柱が4棟である。

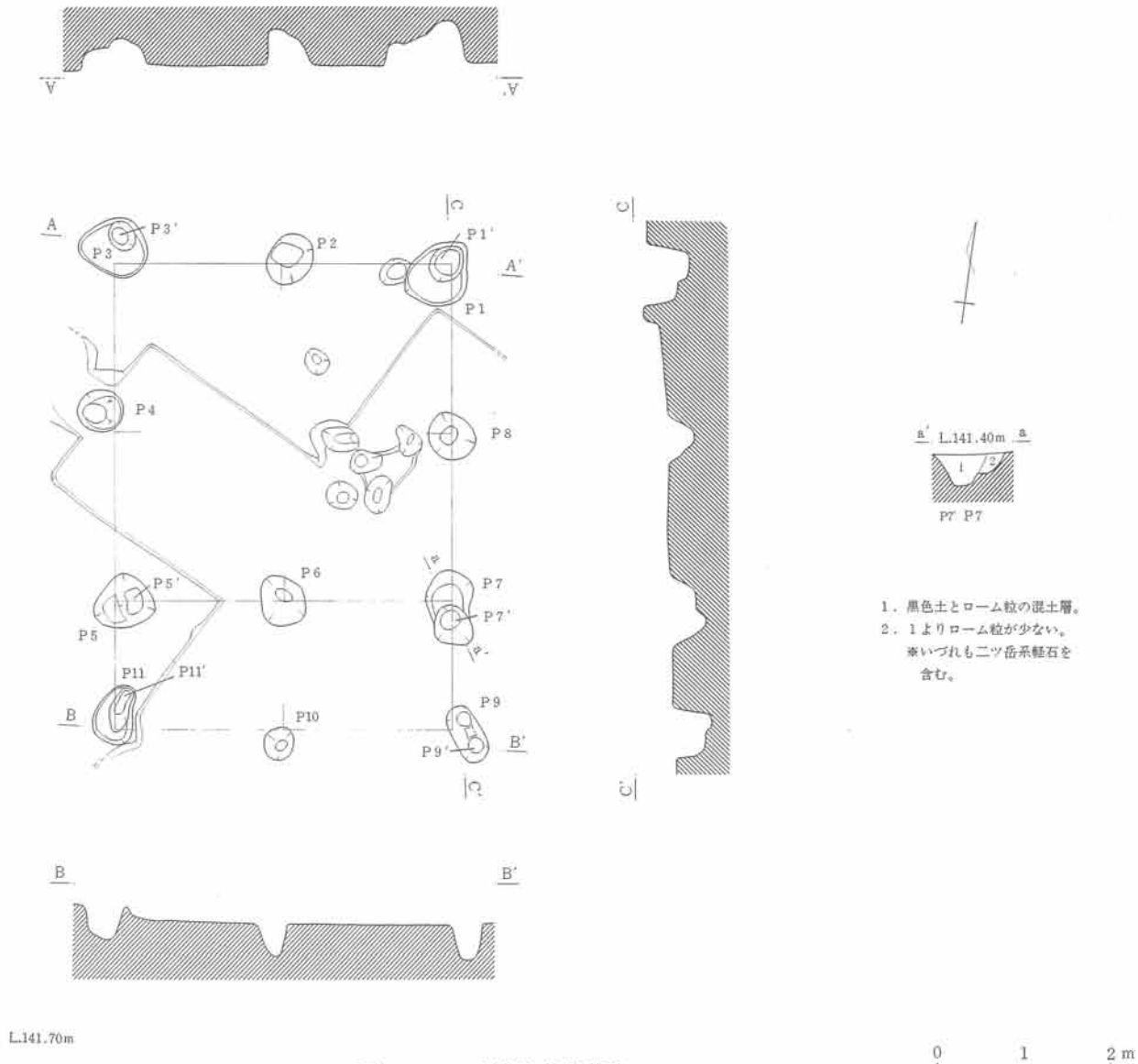
分布の特色をみると、(1)数棟以上でまとまっているもの、(2)1～2棟で存在するものの2種類がある。(1)は更に、(イ)L字型に配列するものと、(ロ)しないものの両者がある。周囲の竪穴式住居跡との関係でみると、(A)周囲または同じまとまりの中に、奈良・平安時代の竪穴式住居跡を持つもの、(B)持たないものとがある。ここで注目されるのは、(1)—(イ)—(A)の類型で、東側斜面に2群存在するが、そこの竪穴式住居跡には一際大型のもの（H359号住、H395・396号住）や、鍔帯を出土する住居（H364号住）が検出されていることである。また、この2群には、他に比較して大型の掘立がみられることも注意される。本遺跡ではL字型の配列とそれ以外の配列の間には、特別な意味が見出されそうである。また、庇のある2軒は、調査区域南端の同じ建物跡群中で検出されている。

(A)の類型は、柱穴内の覆土や遺物からみても奈良・平安時代のものであろう。しかし、(B)の類型に属する掘立（例えばワ101やヌ101付近の掘立）は、周囲が石田川期の竪穴式住居跡のみで、柱穴内の覆土中に二ツ岳系の軽石がほとんど見られないことを以って、石田川期のものと断じるには躊躇せざるを得ない。今後の検討を要する所であろう。

掘立柱建物の建て替えは、重なり具合及び方位から考えて2～3回程度とみられる。掘立柱建物跡を含む群によっても異なるであろうが、これが竪穴式住居と同時に存在したものか、或は竪穴に替って掘立柱建物が出現したのか、検討を要する所である。また、掘立柱建物跡を含む群と含まない群及び、倉庫と推定される総柱建物跡を含む群と含まない群にはどのような差があるのか、興味深い所である。（唐澤）

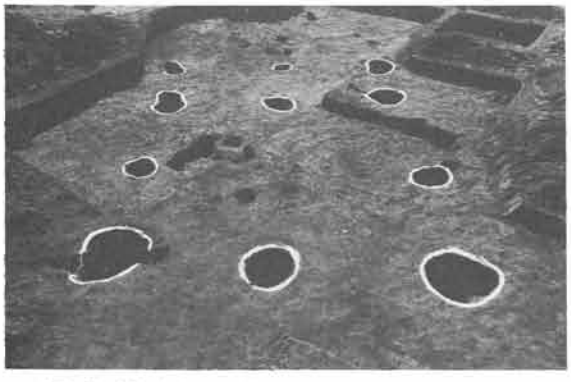
住居跡及び掘立柱建物跡群（レ3～4付近、東から）

116号掘立柱建物跡



図－348　116号掘立柱建物跡

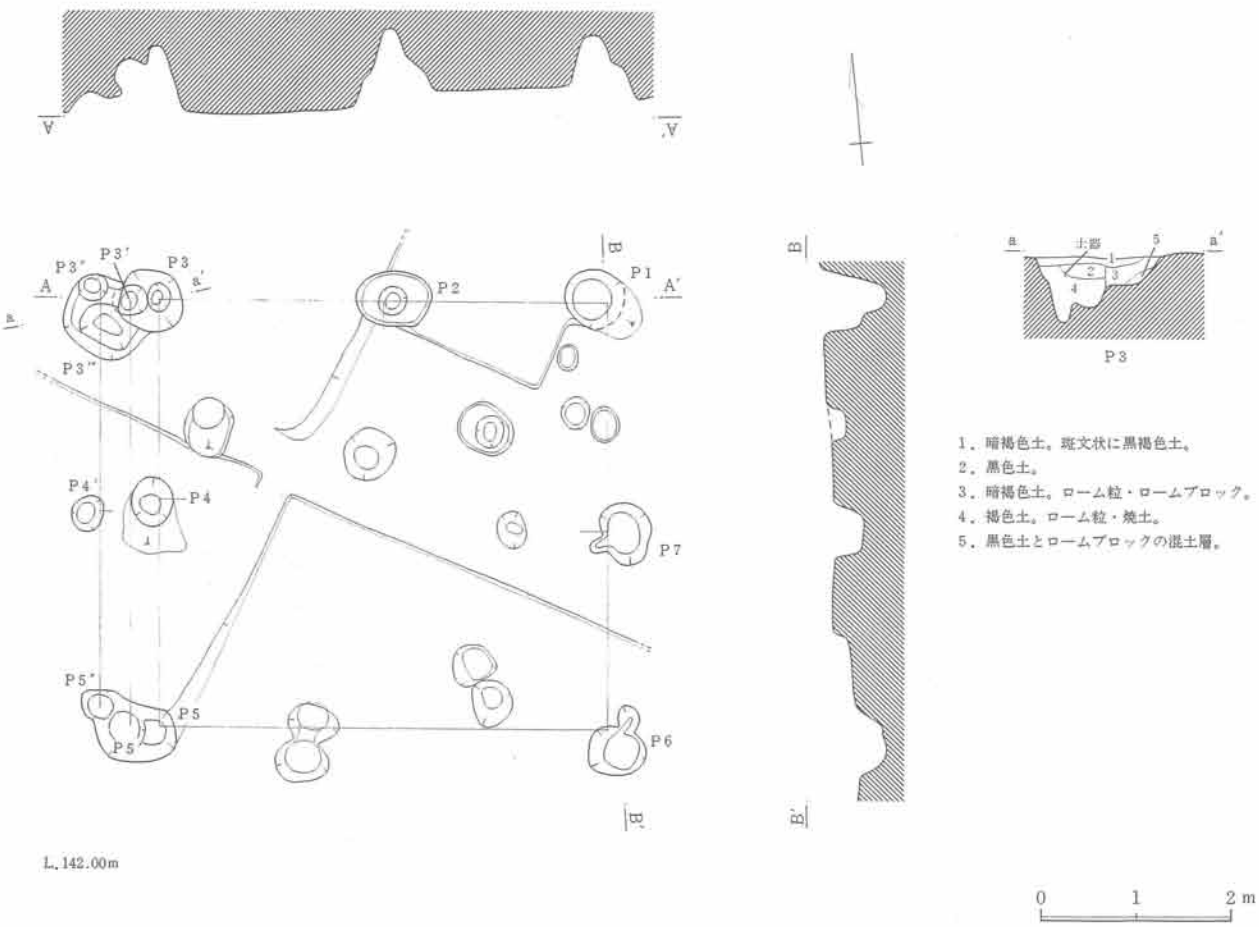
116号掘立柱建物跡　**位置**　17区調査区域南端のヨ110に所在する。南に隣接して大正用水が東行する。周辺の3棟の掘立柱建物跡と4軒の竪穴式住居跡で一群を構成する。**形状**　2間×2間の建物跡で、南側に1.2m離れて庇を設ける。身舎部の規模は、南北4.2m、東西3.9mで、建て替え後東西を3.6mに減じているものとみられる。面積は建て替え前21.1㎡、建て替え後19.5㎡、長軸方向はN－10°－Wである。柱間間隔は南北列2.1m、東西列1.95m、建て替え後東西列を1.8mに減じているものとみられる。**柱穴**　庇部分の柱穴は、身舎より一まわり小さい。**遺物**　柱穴内より典型的な土師器「コ」字状口縁甕、底部糸切り未調整でやや軟質の須恵器坏、「ハ」の字に開くやや長い長方形の高台を持つ須恵器塊等が出土した。**その他**　周辺の掘立の中に、同じような庇を持つものがある。（唐澤裕）



掘立柱建物跡全景（北から）

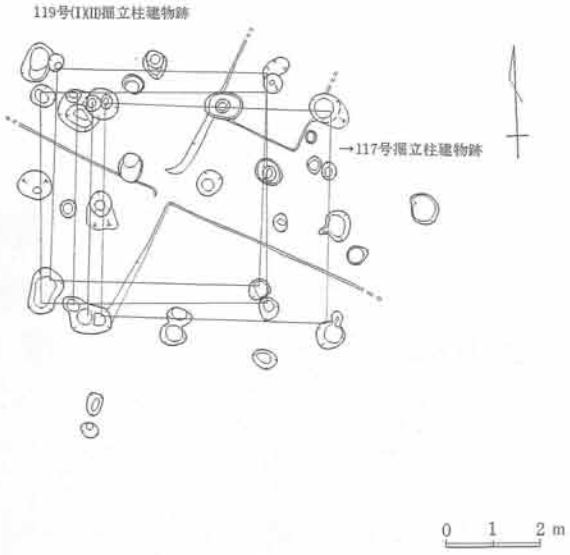
P_7・P'_7地層断面（西から）

117号掘立柱建物跡

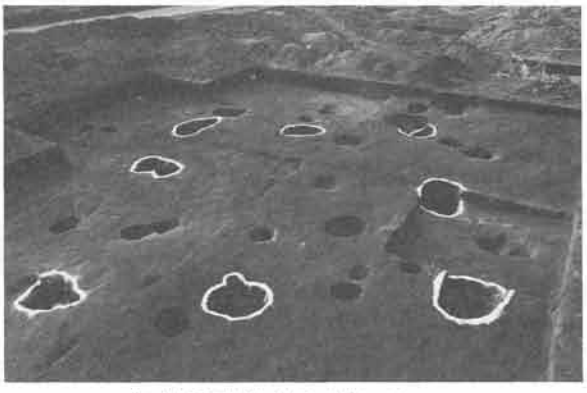


図－349　117号掘立柱建物跡

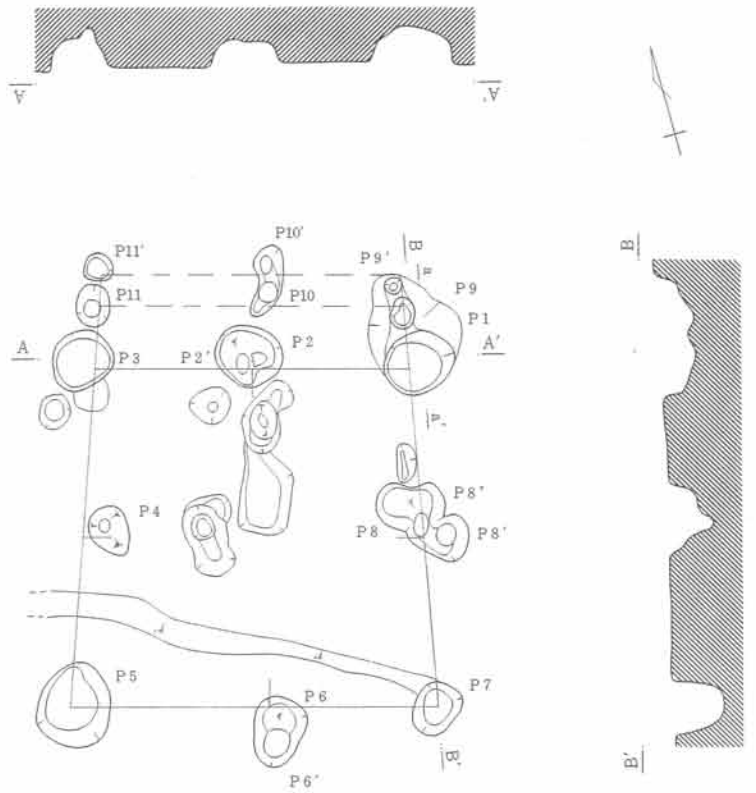
117号掘立柱建物跡　**位置**　カ111～ヨ111に所在し、119号建物跡と重複する。　**形状**　東西２間、南北２間の掘立柱建物跡であるが、南側の長辺は中間の柱穴を欠いている。東西方向に長軸をとっており、N－93.5°－Eの方向を示している。西側短辺の外側にはそれぞれの柱穴について、１個から３個の柱穴が存在することから１回乃至２回の建て替えがあったものと推定される。面積は内側で21.6㎡、外側で24.3㎡を測る。　**柱穴**　掘り形は円形及至楕円形を呈し、径は60cm前後のものが多い。Ｐ３には４個の柱穴が、Ｐ５には３個の柱穴が重複している。また、Ｐ４の西に接して１個の柱穴が存在する。Ｐ３には柱痕跡が認められ、径はいずれも15cm前後を測る。　**遺物**　ピット内から須恵器坏底部片（回転糸切り未調整）が出土した。　（田口）



図－350　117,119号掘立柱建物跡関係図

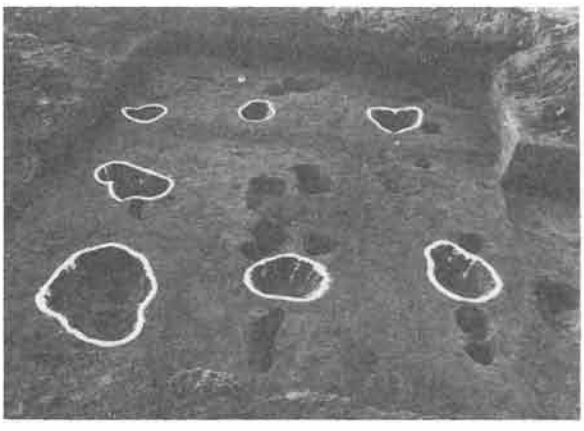


掘立柱建物跡全景（東から）

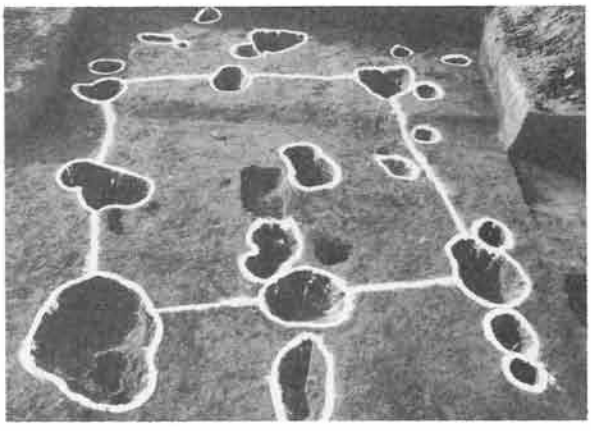


図－351　118号掘立柱建物跡

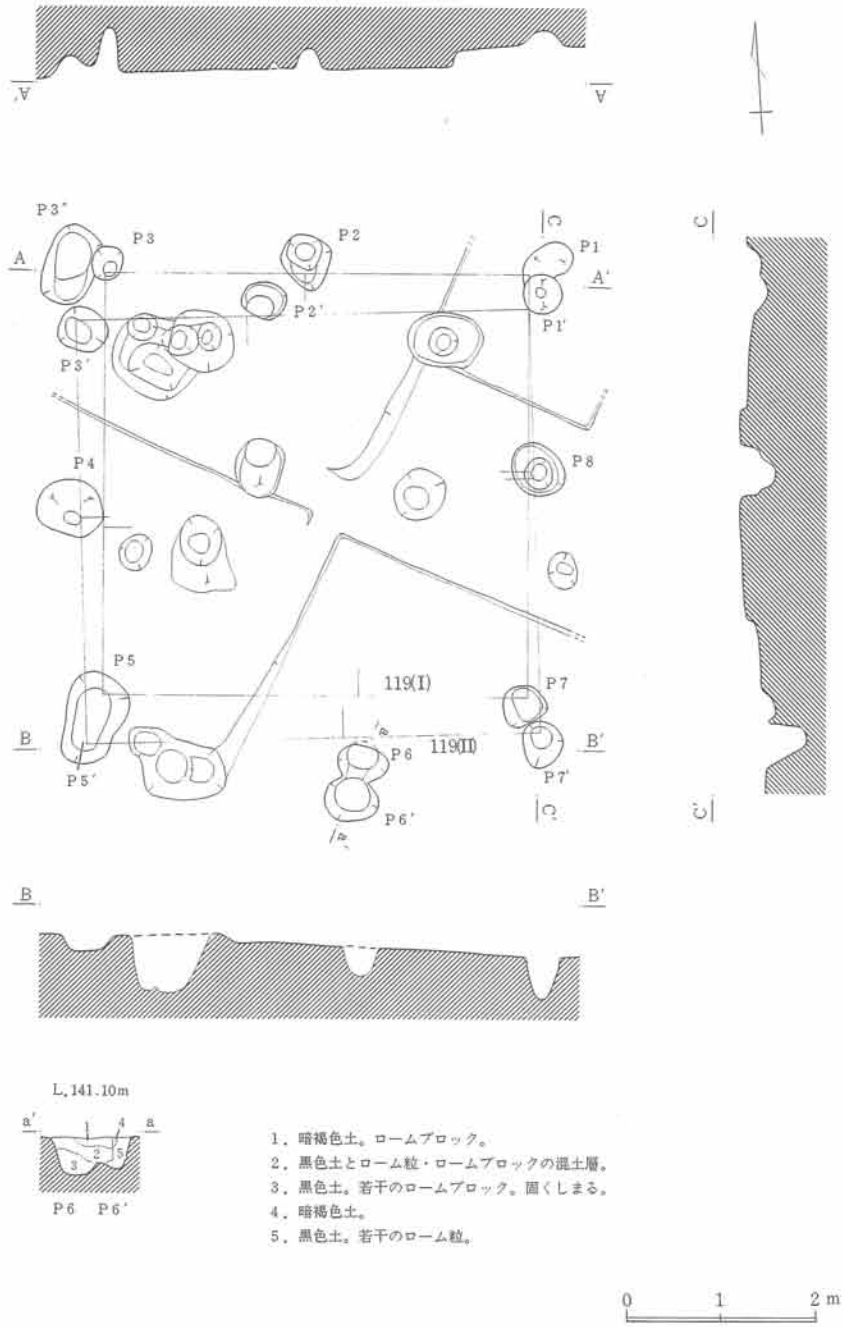
118号掘立柱建物跡　**位置**　17区調査区域南端のヨ111に所在する。北側には同じグループを形成する３棟の掘立柱建物跡と４棟の竪穴式住居跡がある。　**形状**　２間×２間の台形を呈する建物跡で、南北3.6m、東西は南辺で3.9m、北辺で3.3mを測る。北側には60cmないし90cm離れて庇状の柱穴列があり、建て替えが認められる。面積は15.1㎡ないし16.2㎡、南北の主軸方向はＮ－16°－Ｅである。柱間間隔は、南北方向の柱穴間が1.8m、東西方向は南辺で1.95m、北辺で1.65mとみられる。　**柱穴**　身舎部分は60cm前後の柱穴径を有するが、庇部分の柱穴は30cm前後で一まわり小さい。庇部分柱穴と、Ｐ２・Ｐ６・Ｐ８には建て替えがみられる。　**遺物**　柱穴内から、典型的な土師器「コ」字状口縁甕、酸化炎焼成の土師質須恵器坏(底部糸切り未調整)、偏平化した擬宝珠つまみを持つ須恵器蓋等が出土した。　（唐澤裕）



掘立柱建物跡（身舎部分、北から）



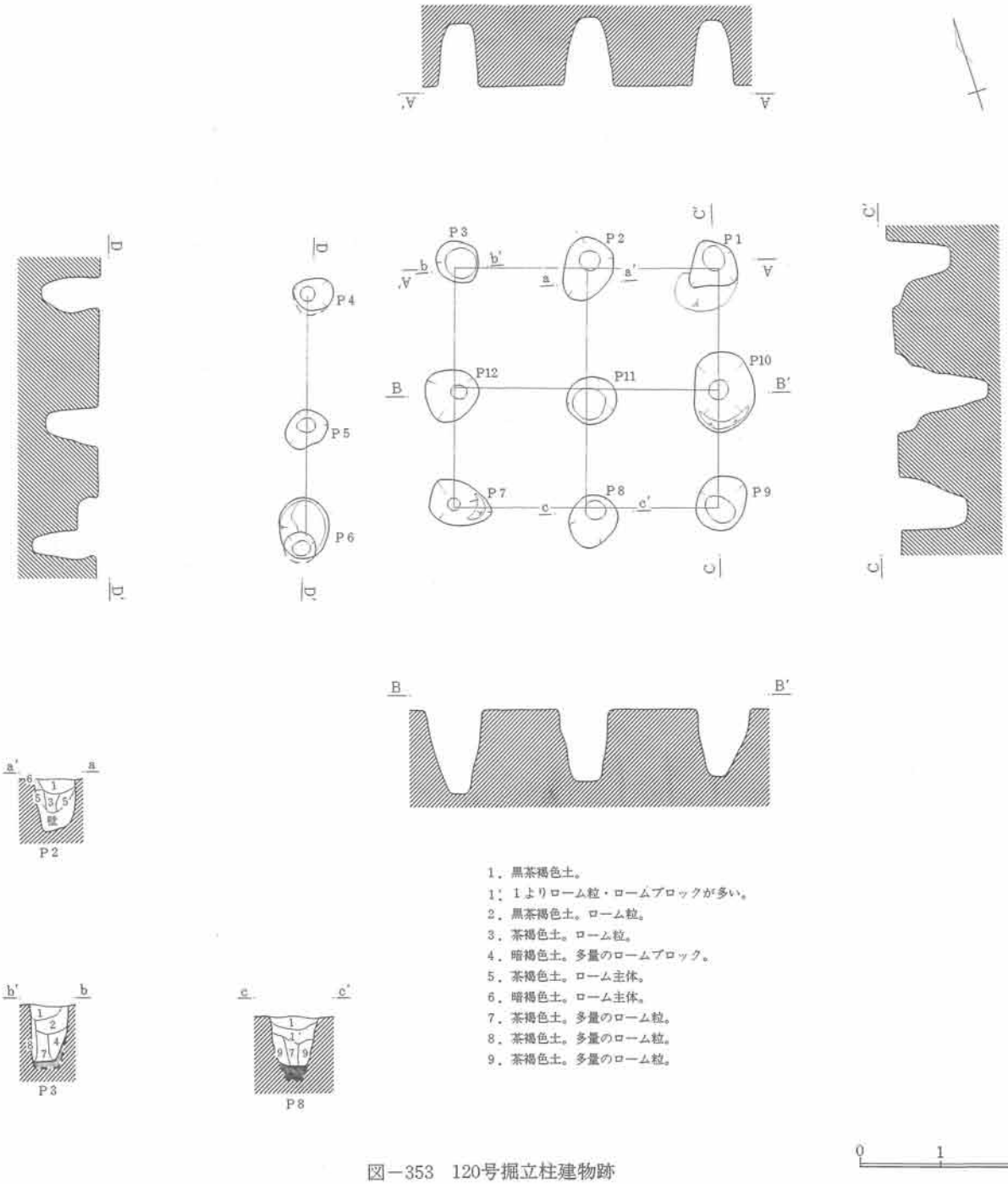
掘立柱建物跡全景（北から）



図－352　119号掘立柱建物跡

119号掘立柱建物跡　**位置**　カ111～ヨ111に所在し、117号建物跡と重複する。　**形状**　建て替え関係とみられる２棟の掘立柱建物跡から成り立つ（119号建物跡のⅠ、119号建物跡のⅡ）。119号建物跡のⅠは東西２間（4.5m）、南北２間（4.5m）の正方形のプランを持つが、Ｐ６は東方にずれている。この119号建物跡のⅠより南西方向にわずかにずれて119号建物跡のⅡが存在する。119号建物跡のⅠと同じく東西２間南北２間の規模を持つが、それぞれ4.8m、4.5mと異なっており、東西方向に長軸をとっている。Ｐ６′は同じく東方向にずれている。　**柱穴**　掘り形は全体としては円形にまとまる傾向を見せている。Ｐ４～Ｐ８については119号建物跡のⅠ・Ⅱに共通しているが、その他の柱穴は重複、あるいは隣接関係にある。径は40～50cm前後のものが多い。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（田口）

掘立柱建物跡全景（西から）

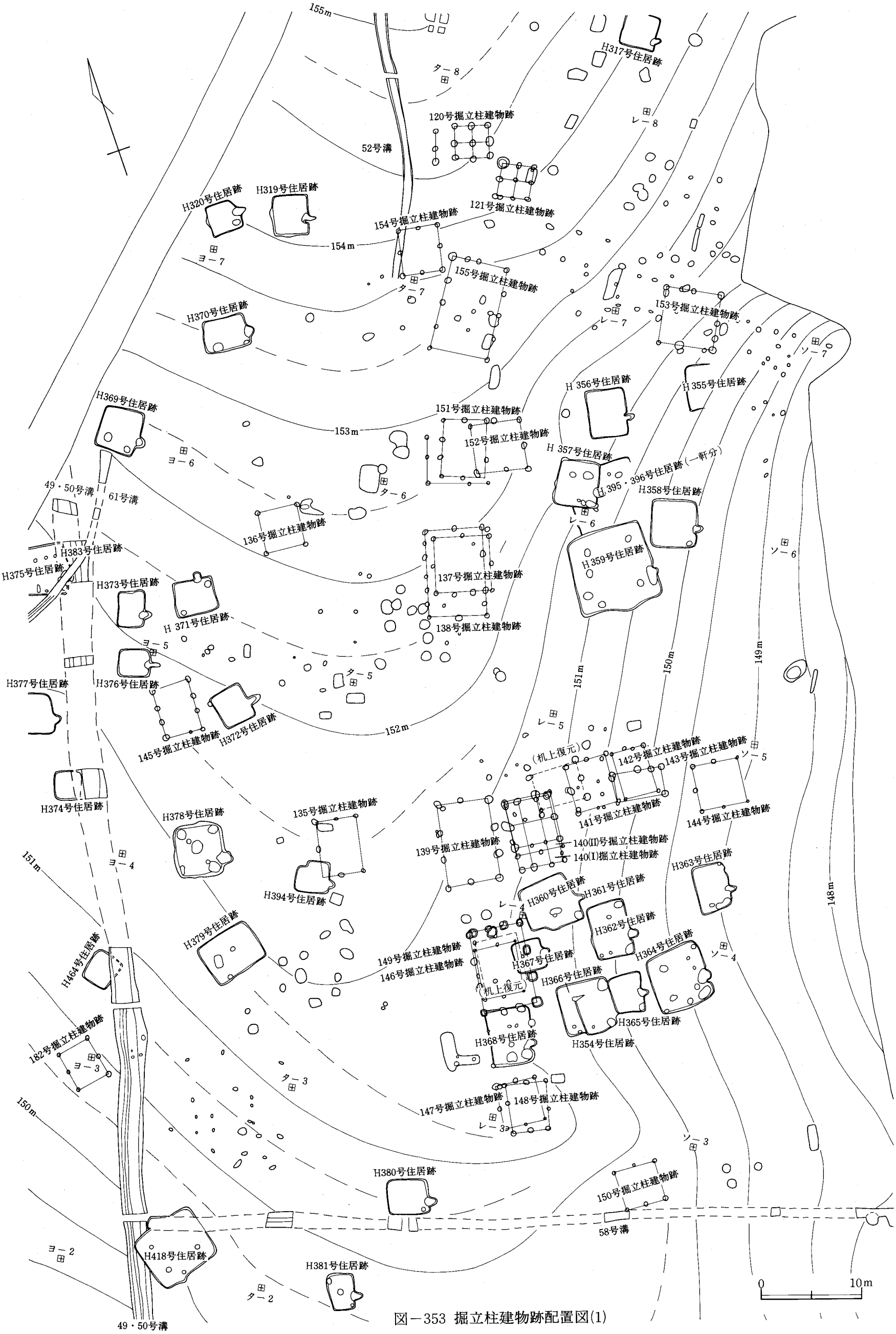


図－353　120号掘立柱建物跡

120号掘立柱建物跡（5K－1）　**位置**　タ7に所在し、東斜面直前の台地に立地する。東に接して総柱2間×2間の121号建物跡が、また西接して52号溝がある。　**形状**　2間(3.3m)×2間(3m)の総柱で、東西方向に長軸をとる。長軸方向は、N－106.5°－E、面積は9.9m²である。西方1.8mには本建物跡に付属すると思われる柱穴列が、約1.5m間隔で3箇認められる。方位はN－18.5°－Eで、やや東にふれ、柱の並びもやや南寄りになっている。　**柱穴**　掘り形は全体として円形を呈するものが多く、径60～80cm前後、深さ80cm前後のものが多い。P2～P4・P7・P8には地層断面図に柱痕跡が認められ、径は15cm前後とみられる。　**遺物**　本遺構に関係する遺物の出土はみられなかった。

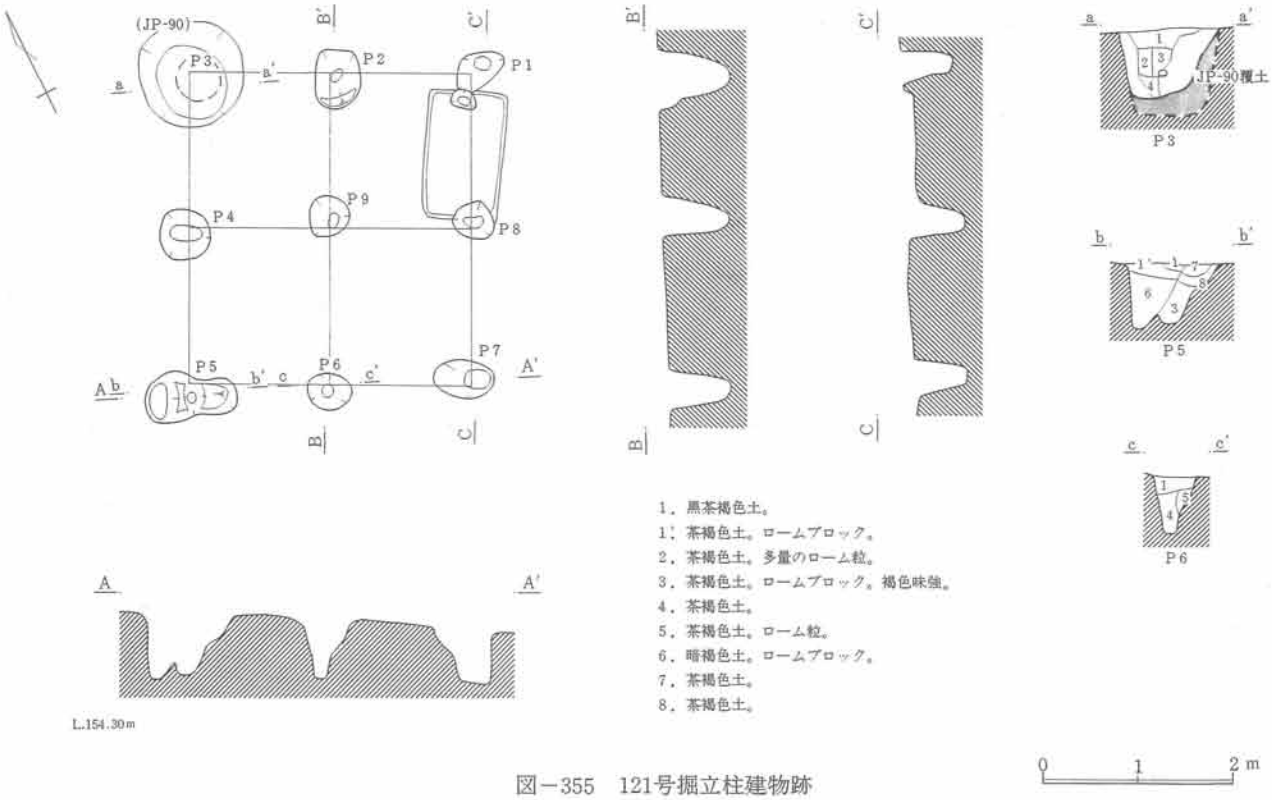
（中澤）

掘立柱建物跡全景（西から）



図－353 掘立柱建物跡配置図(1)

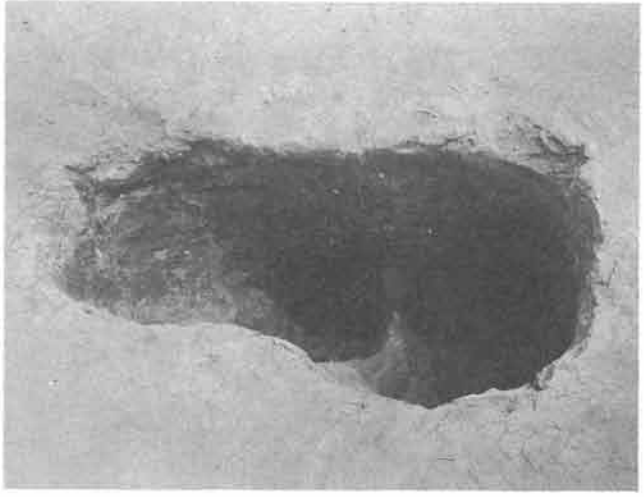
121号掘立建物跡



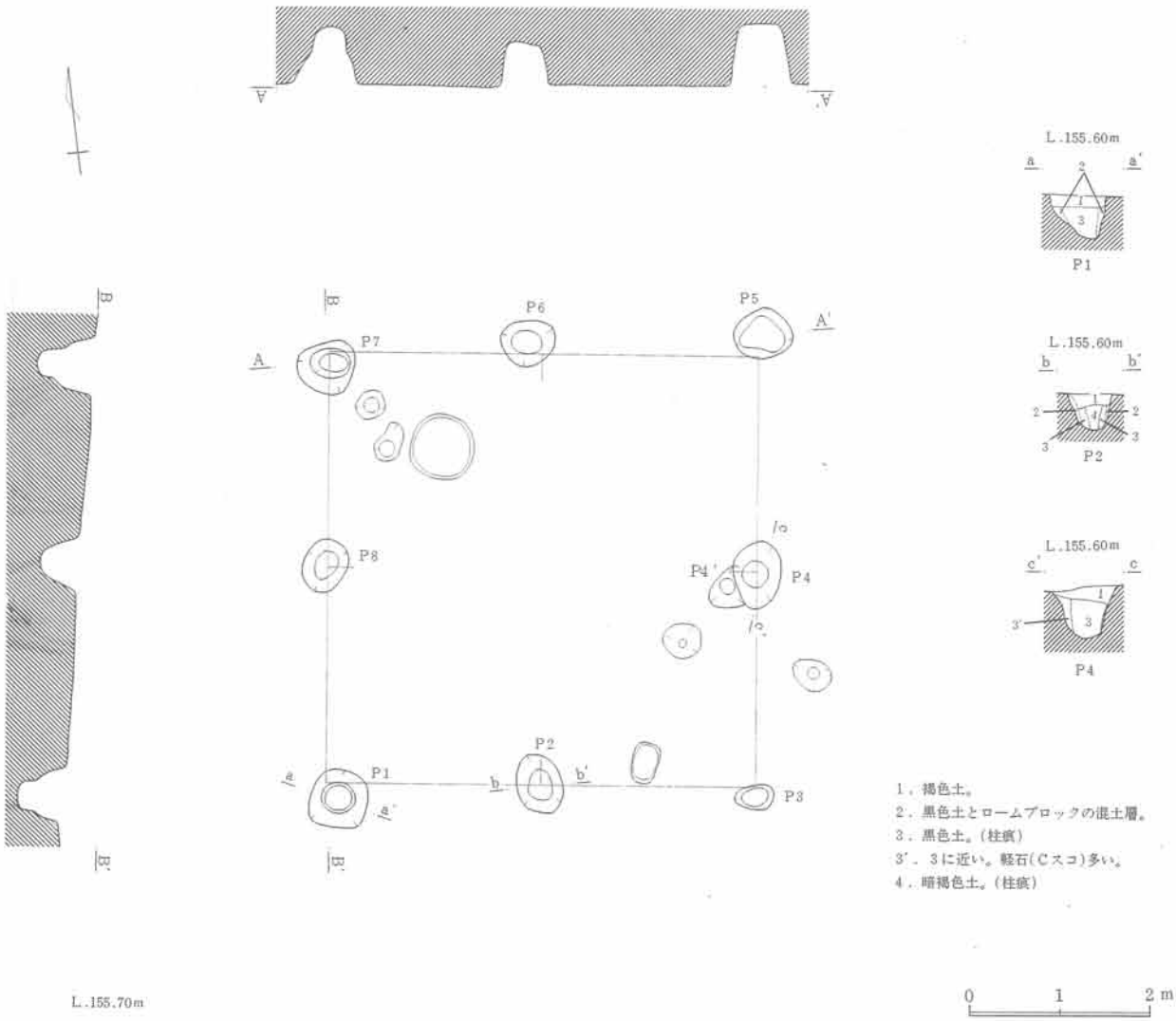
図－355　121号掘立柱建物跡

121号掘立柱建物跡（５Ｋ－２）　**位置**　タ７にあり、台地東斜面上の高台に位置する。西に接して、総柱２間×２間の120号建物跡がある。　**形状**　２間（3.3m）×２間（３m）の総柱建物跡で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はＮ－27°－Ｅ、面積は9.9㎡である。　**柱穴**　掘り形は全体として円形ないし長円形を呈するものが多く、径40～60cm前後、深さ50～80cm前後である。Ｐ１に１回、Ｐ５に２回の建て替えが認められる。　**重複関係**　Ｊ90号土坑、Ｆ90号土坑との間に認められる。土層等より推して、本遺構はＪ90号土坑より新しく、Ｆ90号土坑より古いと思われる。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

掘立柱建物跡全景（北から）

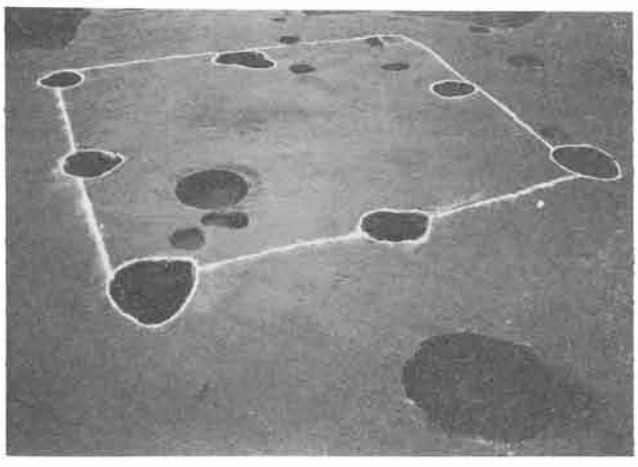


178　P_5全景（北から）

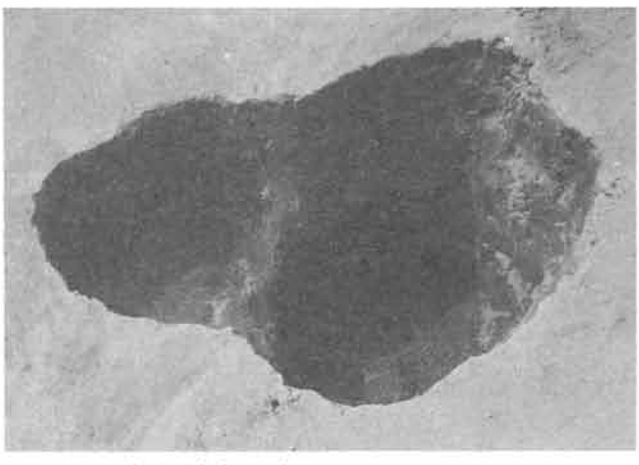


図－356　122号掘立柱建物跡

122号掘立柱建物跡（5K－3）　**位置**　タ10～レ10に所在し、東南に傾斜する台地上に立地している。東は2間×2間の123号建物跡が重複している。　**形状**　2間（4.8m）×2間（4.8m）の正方形の掘立柱建物跡である。主軸方向（南北方向）はN－7.5°－Eで、面積は23㎡を測る。　**柱穴**　掘り形は全て円形を呈し、径50～70cm前後のものが多い。P2には地層断面に柱痕跡が認められ、径は10cm前後が推定される。また、P4は建て替えている。　**重複関係**　123号建物跡とは、柱穴どうしの切り合いがないため、新旧関係は不明。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（田口）

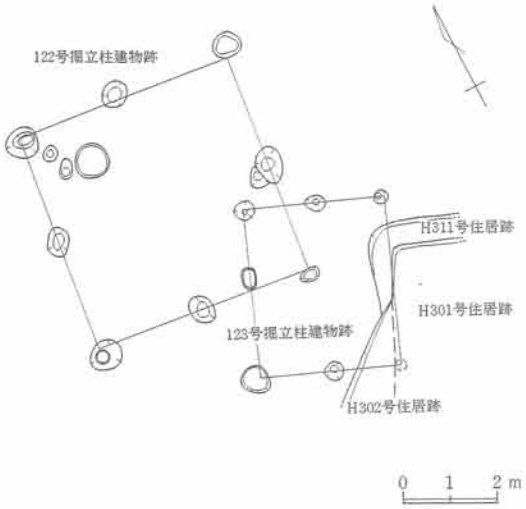


掘立柱建物跡全景（西から）



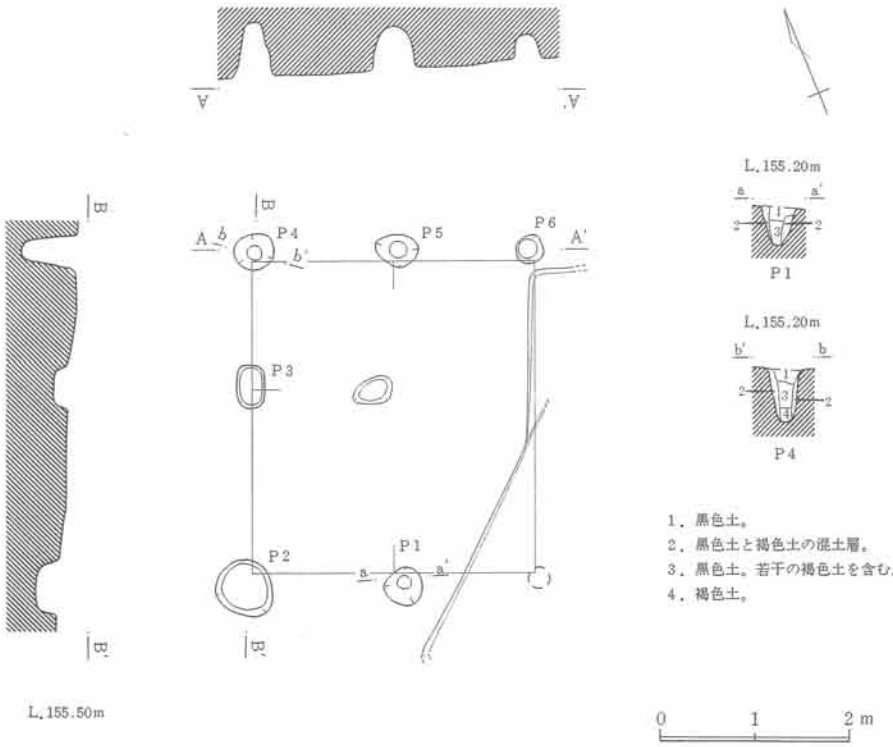
P_4・P'_4全景（南東から）

123号掘立建物跡



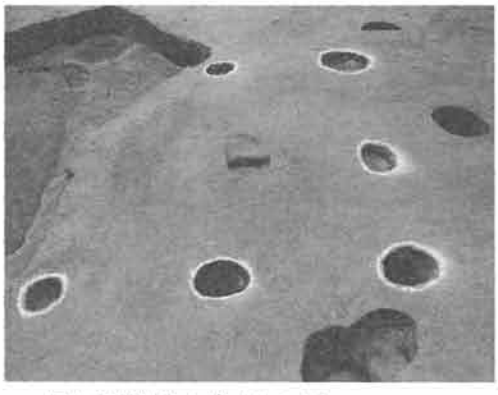
図－357　122,123号掘立柱建物跡関係図

122・123号掘立柱建物跡重複状況（西から）



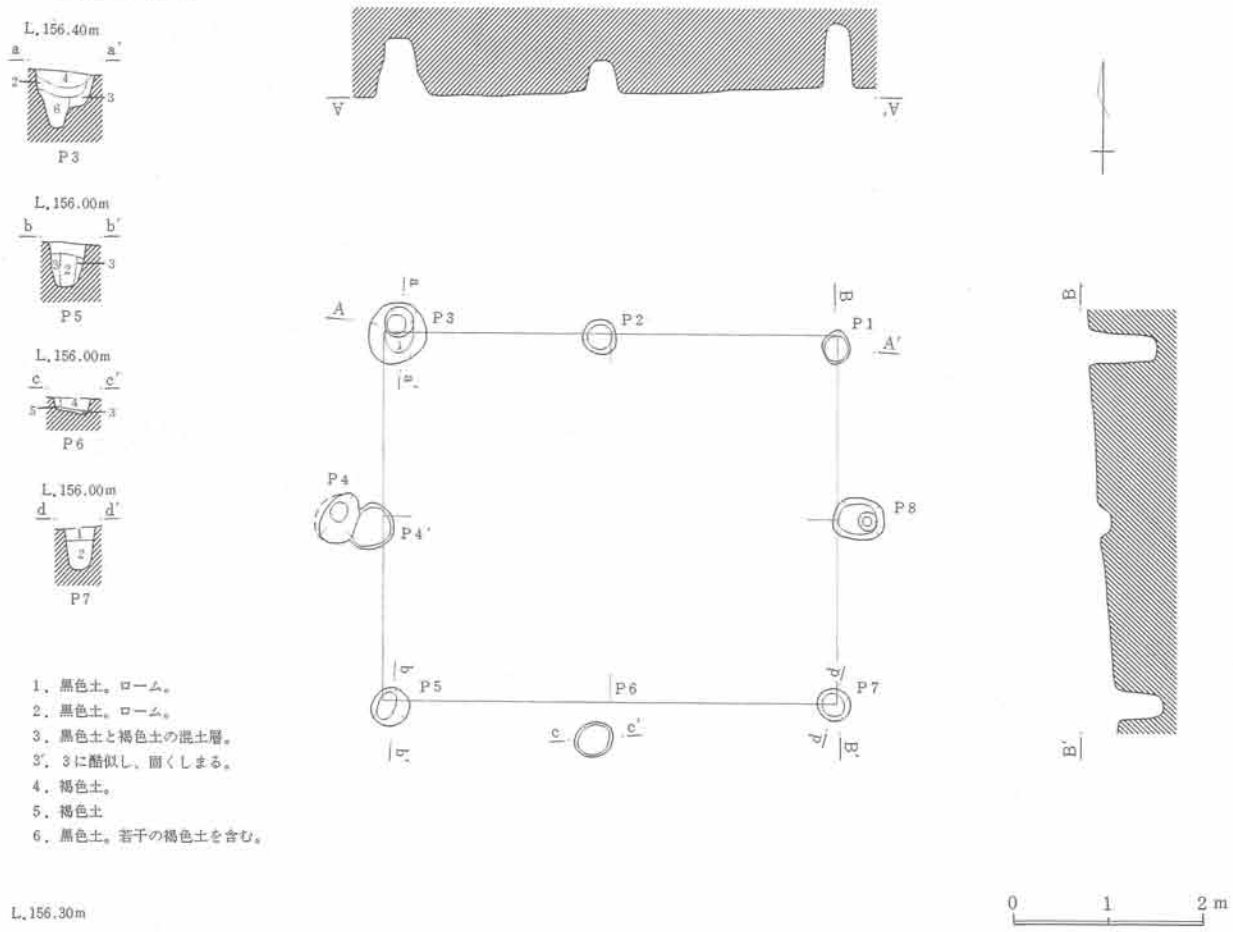
図－358　123号掘立柱建物跡

123号掘立柱建物跡（５Ｋ－４）　**位置**　チ10に所在し、東南に傾斜する台地上に立地している。西は２間×２間の122号建物跡と重複し、東はH301・302・311号住居跡と重複している。　**形状**　東側は住居と重複しているため、柱穴２つを欠くが、他の柱穴の状況より２間(2.95m)×２間（3.50m）の掘立柱建物跡が推定される。南北方向に長軸（N－21.5°－E）をとり、面積は9.9㎡である。　**柱穴**　掘り形は殆どが円形を呈するが、Ｐ３のみが長円形の平面をもつ。径40cm前後のものが多いが、深さは柱穴によって異っている。Ｐ１、Ｐ４には地層断面図に柱痕跡が認められ、径は15cm前後と見られる。　**遺物**　特徴のある遺物の出土はなかった。　（田口）



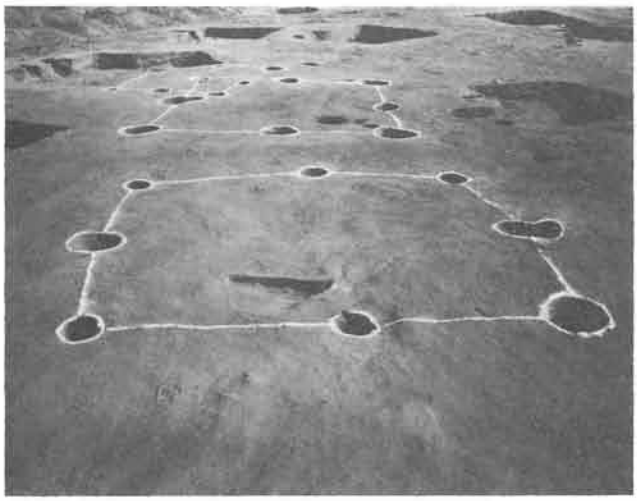
掘立柱建物跡全景（北から）

124号掘立建物跡



図－359　124号掘立柱建物跡

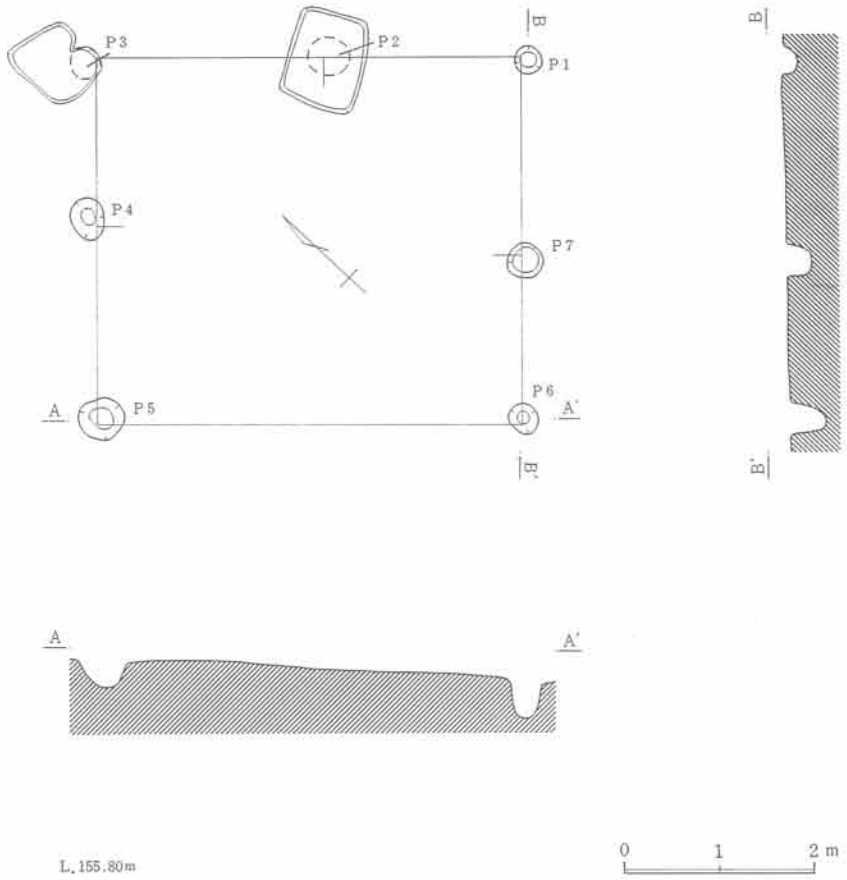
124号掘立柱建物跡（5 K－5）　**位置**　タ10の東南傾斜面上に立地し、123号建物跡の北西方向に隣接している。　**形状**　東西2間、南北2間の掘立柱建物跡で、実長はそれぞれ4.8m、3.9mを測る。東西方向に長軸をとり、N－89°－Eに向く。面積は18.7㎡であるが、南北の中間に位置する柱穴が東・西とも外側に膨らみを見せている。　**柱穴**　掘り形はいずれも円形を呈し、径30cm～40cm前後のものが多い。P 4は建て替えの可能性を持っている。また、P 2、P 3、P 5は地層断面図等から柱痕跡が認められており、径15cm～20cmにまとまりを持つ。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（田口）



掘立柱建物跡全景（手前、北から）

P_3全景

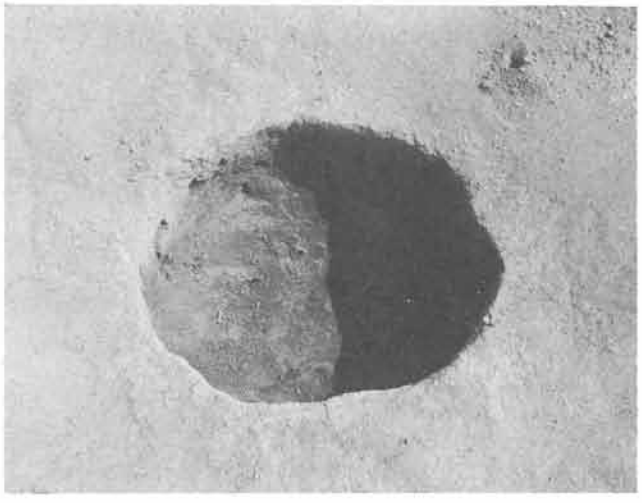
125号掘立建物跡



図－360　125号掘立柱建物跡

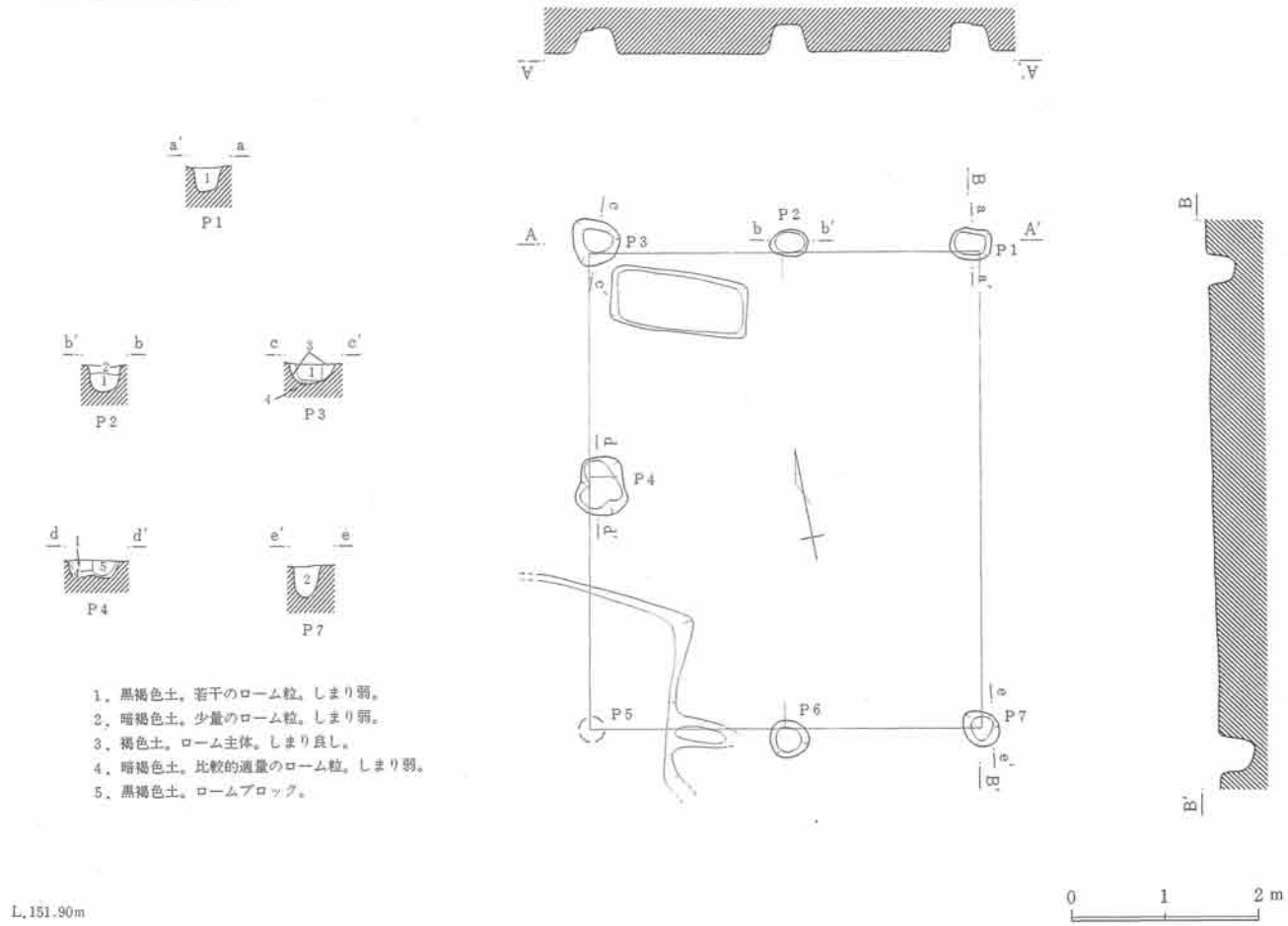
125号掘立柱建物跡（5K－6）　**位置**　タ9に所在し、西に接して52号溝が走っている。　**形状**　東西方向に長軸をとり、N－136.5°－Eを測る。一応東西2間、南北2間の掘立柱建物跡と考えられるが、南側の東西方向の中央には柱穴が認められなかった。東西1間、南北2間の建物跡であった可能性も考えられる。面積は17.5m²を測る。　**柱穴**　掘り形は殆どの柱穴が円形を呈する。径の大きさから30cmを中心とするものと、45cmを中心とするものの2通りに別れるが、いずれも比較的しっかりした掘り形を備えている。柱痕跡はいずれのピットからも確認できなかった。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（田口）

掘立柱建物跡全景（北から）



P_7全景

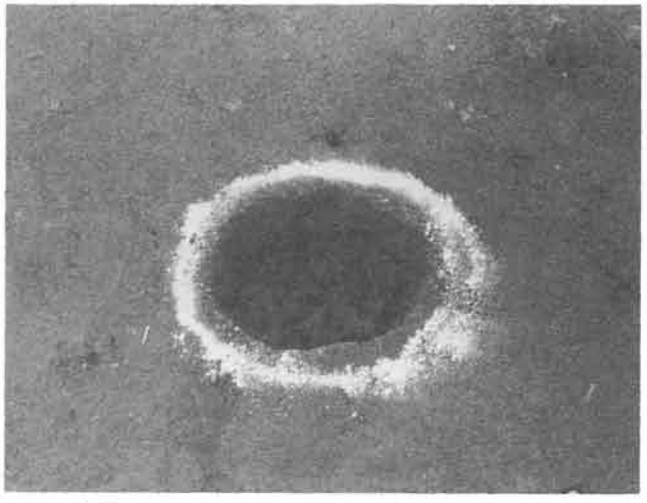
135号掘立建物跡



図－361　135号掘立柱建物跡

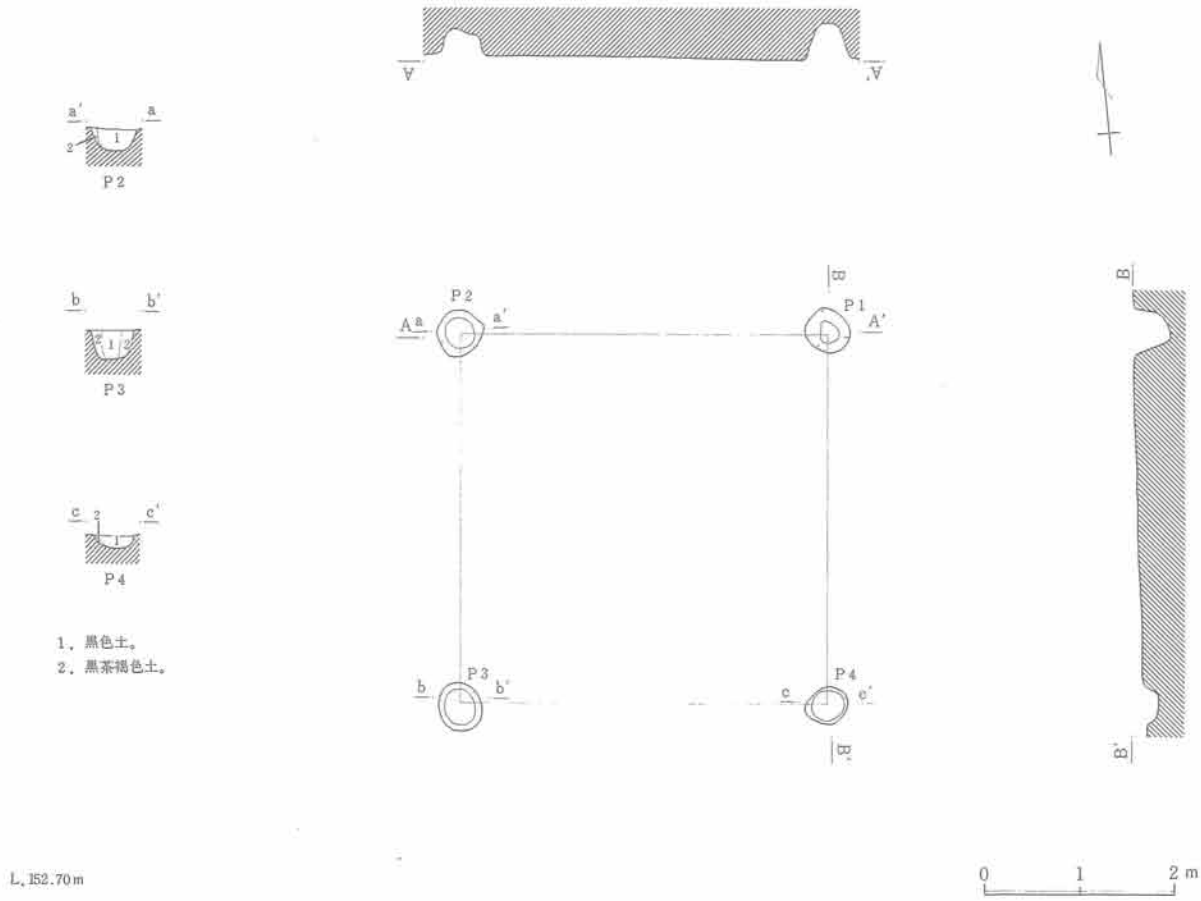
135号掘立柱建物跡（5K－16）　**位置**　タ4に所在する。　**形状**　南北棟の2間（5.1m）×2間（4.2m）の建物跡で、面積は21.4mを測る。柱間寸法は南北方向で2.7mと2.4m、東西方向で2.1mとみられる。P5はH394号柱住居跡と重複するが、新旧関係はおさえられなかった。また、東側柱穴列の中央の柱穴は認められなかった。方位はN－11°－E、面積21.4m²。　**柱穴**　柱穴は円形または長円形を呈するが、P1のみ隅丸長方形ぎみである。一般に径40cm前後、深さ30cm前後である。P3の地層断面には径28cmの柱痕跡が認められるが、他の掘立やこの種の掘り形にくらべ大きい。P4には建て替えが見られる。　**重複関係**　H349号住居跡。新旧不明。　（唐澤）

掘立柱建物跡全景（西から）



P_2全景

136号掘立建物跡

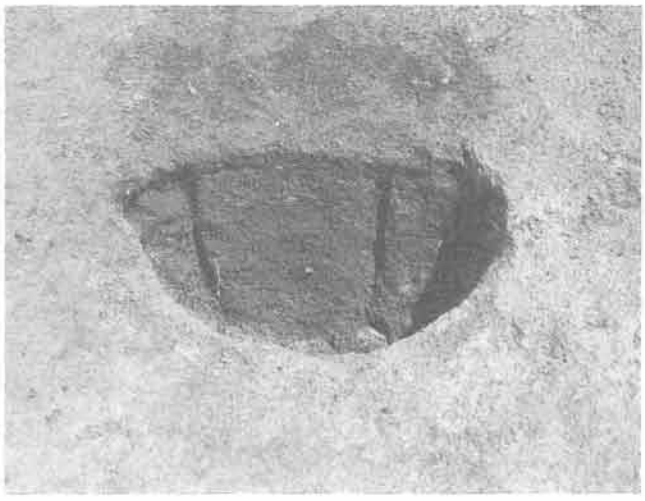


図－362　136号掘立柱建物跡

136号掘立柱建物跡（5K－17）　**位置**　ヨ5に所在し、東斜面にかかる手前25mほどに位置する。　**形状**　1間（3.9m）×1間（3.9m）の規模をもち、正方形を呈する。面積は15.2m²、南北の方向はN－5.5°－Eをとる。柱穴間の寸法が3.9mと長いことが他の建物跡と大きく異なる点である。　**柱穴**　掘り形は全体として円形を呈するものが多く、径40～50cm前後、深さ30～40cm前後となっている。P4のみ深さ17cmを測り、他柱穴跡より浅くなっている。P1の地層断面図には径20cmほどの柱痕跡をみとめることができる。　**遺物**　本遺構に関係する遺物の出土は認められなかった。

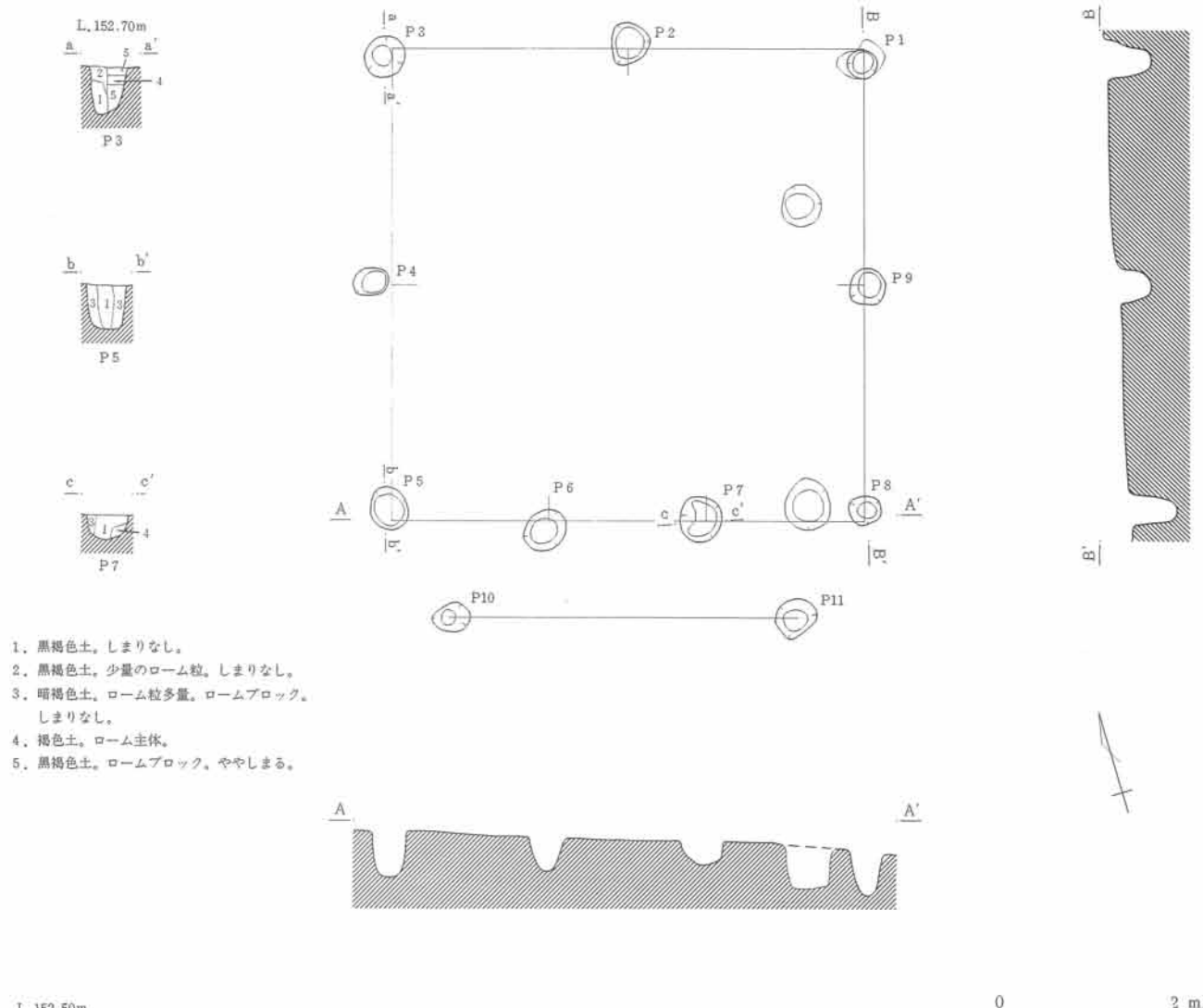
（中澤）

掘立柱建物跡全景（西から）



P_3地層断面

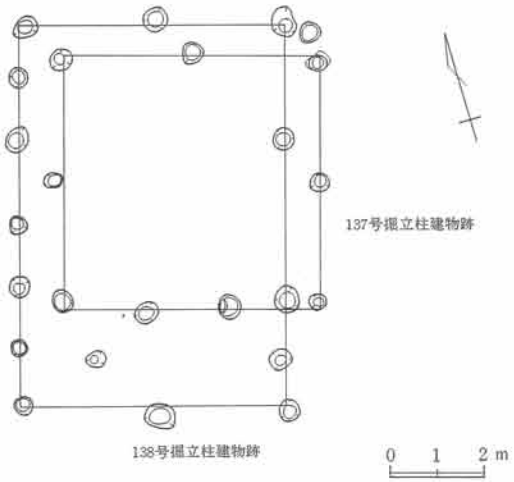
137号掘立建物跡



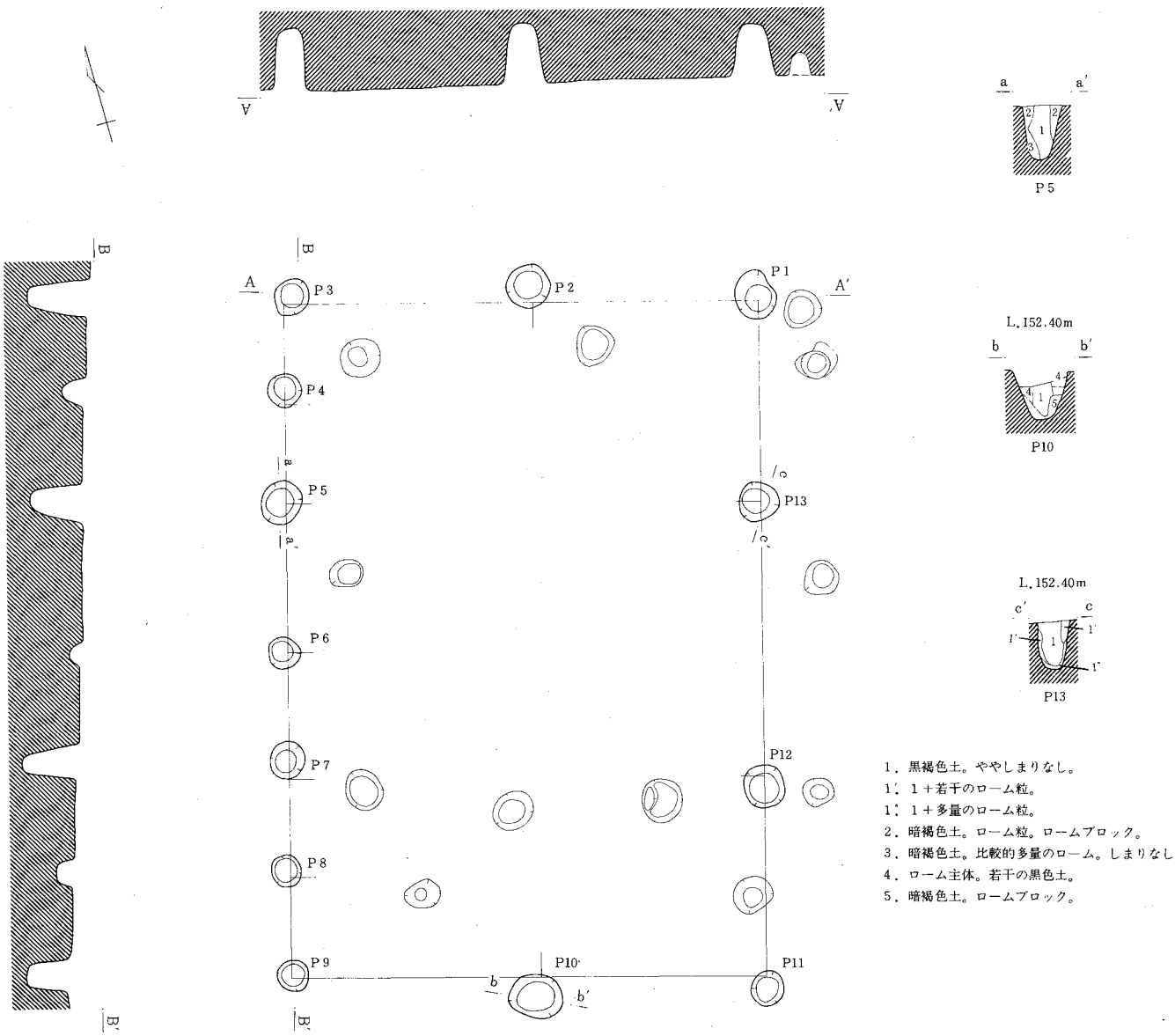
図－363　137号掘立柱建物跡

137号掘立柱建物跡（5K－18）　**位置**　タ5。　**形状**　3間（5.4m）×2間（5.4m）の建物跡で、南北方向の方位はN－16°－Eを測る。南側柱穴列（南辺）のみ3間で、他はすべて2間である。柱穴間の寸法は南辺のみ1.8m、他は2.7mに統一されている。南辺から南1.2mの所に2個のピット（P10・P11）が検出された。位置関係から見て本建物跡の一部と考えられるが、確証はない。2個の柱穴間の距離は3.9mである。　**柱穴**　円形の掘り形で径50cm前後、深さ33～61cmである。P3、P5、P7の地層断面には柱痕跡が認められ、径は20cm弱と推定される。　**重複関係**　138号建物跡と建て替え関係にあると見られるが、柱穴どうしの切り合いがないため、新旧関係は不明である。　（唐澤）

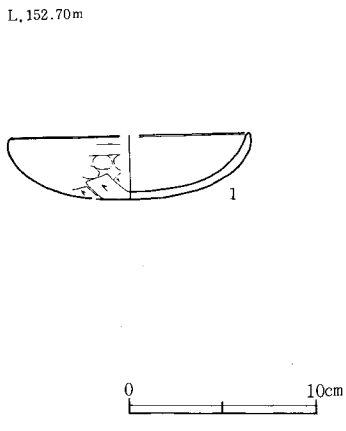
掘立柱建物跡全景（西から）



137,138号掘立柱建物跡模式図



図－364　138号掘立柱建物跡



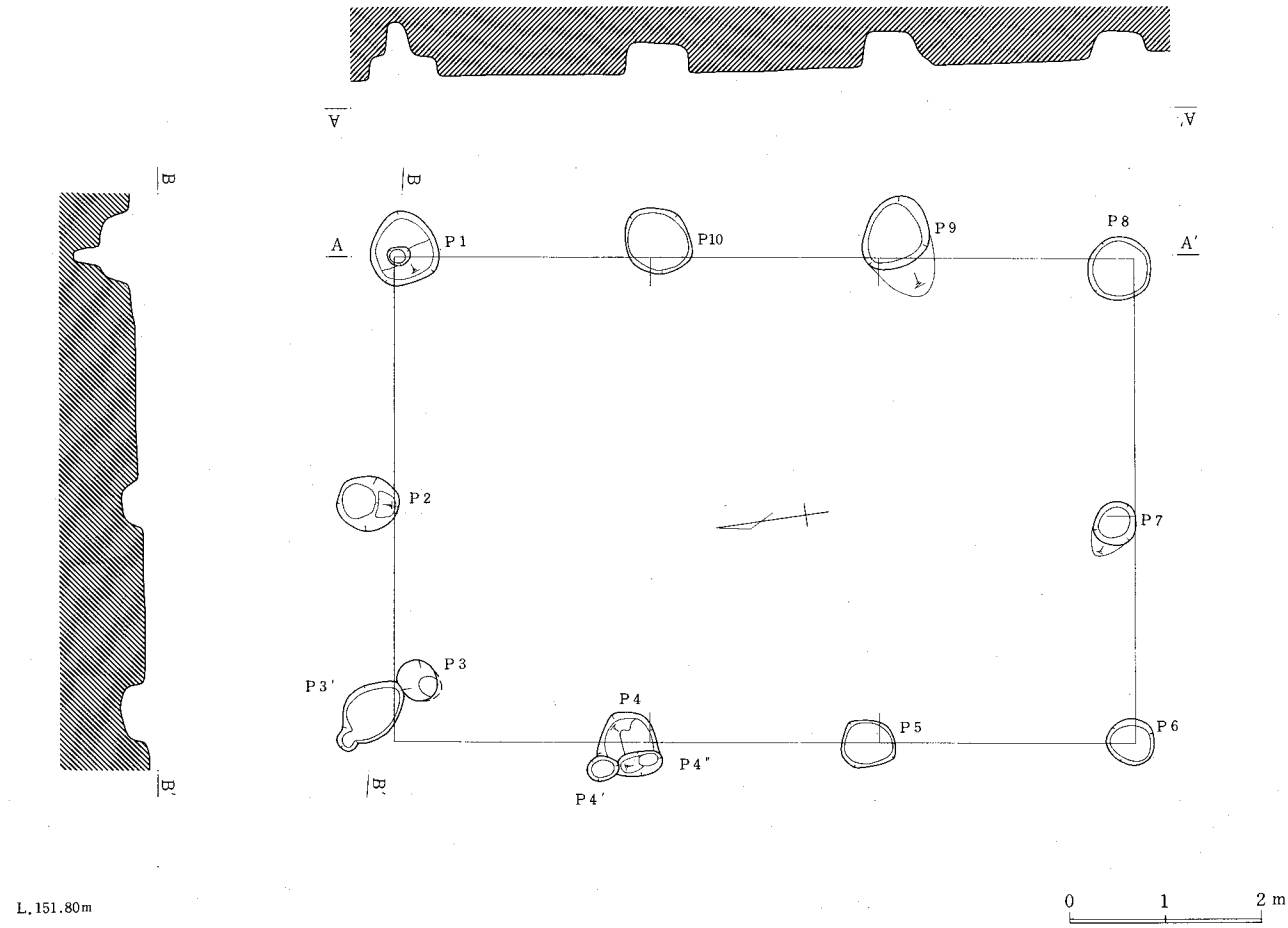
図－365　138号掘立柱建物跡出土遺物

138号掘立柱建物跡（5K－19）　**位置**　タ5。137号建物跡と重複して、東斜面直前の高台に立地する。　**形状**　東西2間(5.7m)、南北は東3間・西6間(8.1m)の長方形の建物跡である。柱間は東西で3＋2.7m、南北は東側列で2.4＋3.3＋2.4m、西側列で1.2＋1.2＋1.8＋1.5＋1.2＋1.2mである。長軸方向N－15.5°－E、面積46.1m²である。　**柱穴**　掘り方は円形を呈する。規模は大部分のものが、径50cm前後、深さ54～77cmとなっているが、西側列のP4・P6・P8は、径40cm前後、深さ22～29cmで、一回り小さい。P4、P6、P8を除く西側列の柱穴は、東側列の柱穴と位置及び規模の点で対応する。P5、P10～P13には柱痕跡が認められ、径は20cm前後と見られる。　**遺物**　P2から土師器坏が出土した。　**重複関係**　137号建物跡と切り合う。新旧不明。

（唐澤）

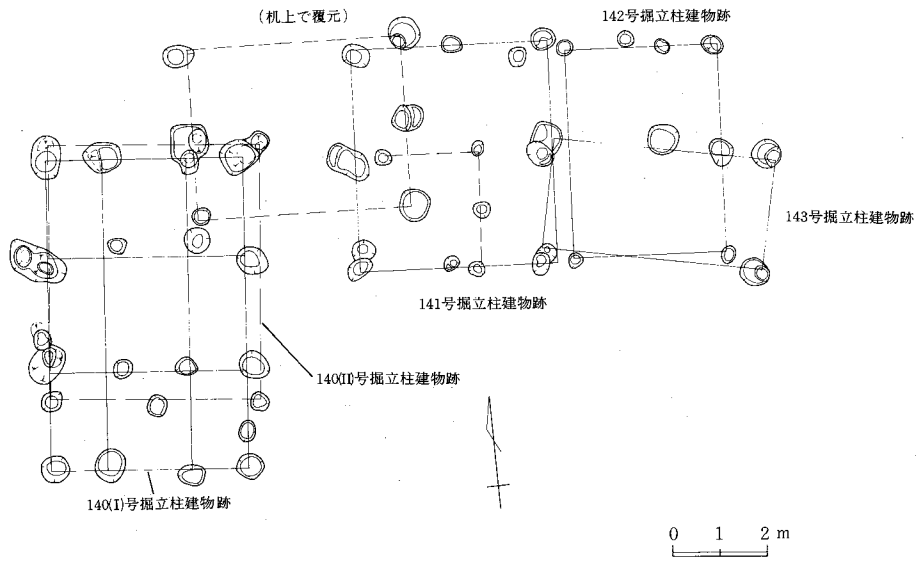
出土遺物　　**土師器**坏（1）、底部～口縁部片。丸底の底部を持つ。調整は口縁部外面横ナデ、底部ヘラ削りで、両者に挟まれた所には指頭痕を残す。内面は、底部中央付近に指頭痕を残すが、磨耗しているため細かい調整は不明である。色調は明褐色で、胎土中に細かい砂粒と雲母を含む。　（唐澤）

139号掘立建物跡

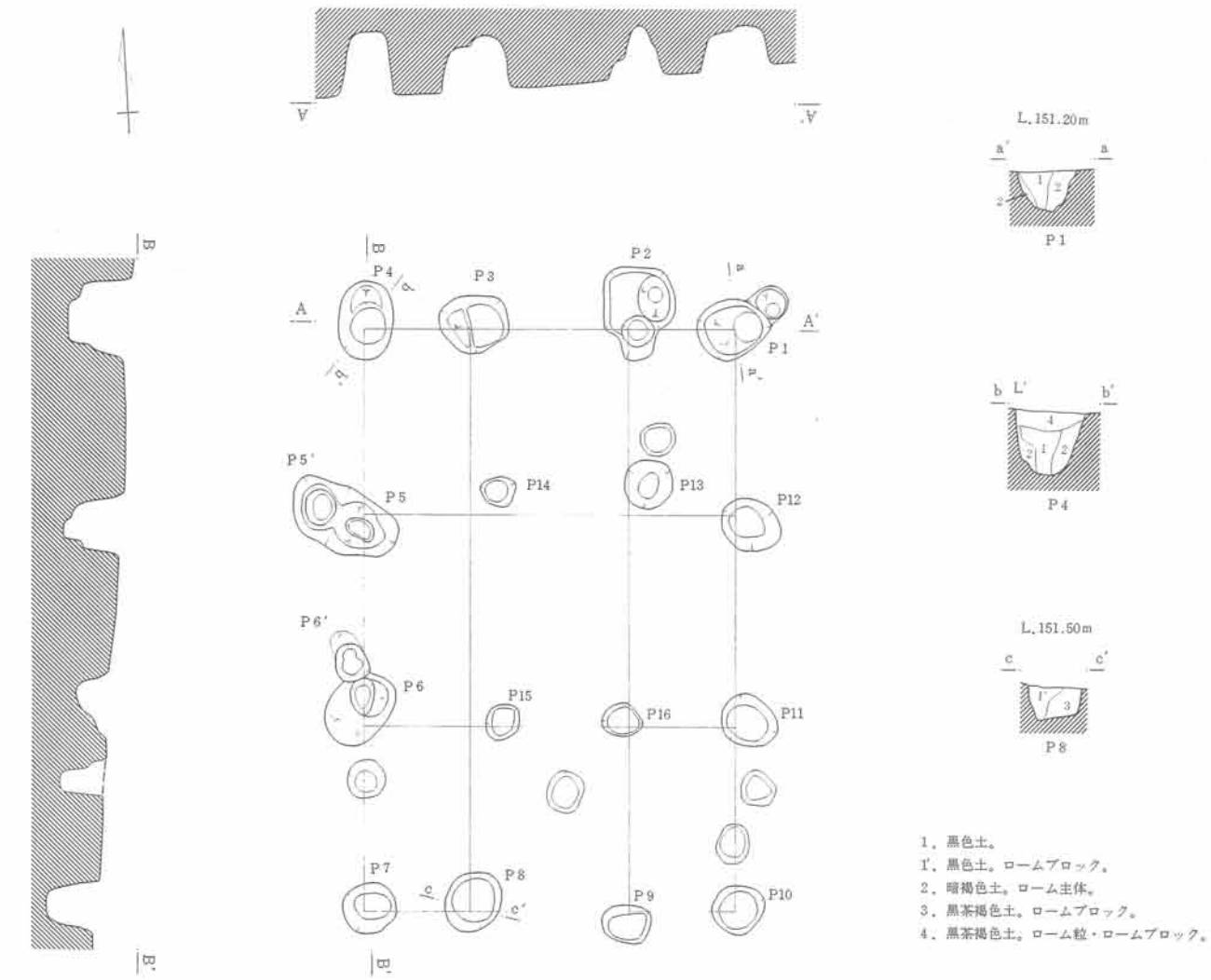


図－366　139号掘立柱建物跡

139号掘立柱建物跡（5 K－20）　**位置**　タ4に所在し、本遺構の東部分は東斜面上に立地する。140号建物跡と139号建物跡とは長軸をほぼ一にして接している。　**形状**　3間（7.8m）×2間（5.1m）の長方形を呈し、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN－8.5°－E、面積は39.7m²である。　**柱穴**　掘り形は全体として円形が多く、径は50～90cm、深さ20～60cmと数値の幅が広い。東西方向の北列と南列の中央にある柱穴は、いずれも中心から約15cmほど西に寄っている。P1、4の地層断面図からは径15cm前後の柱痕跡が認められる。　**遺物**　本遺構に関係する遺物の出土はみられなかった。　（中澤）

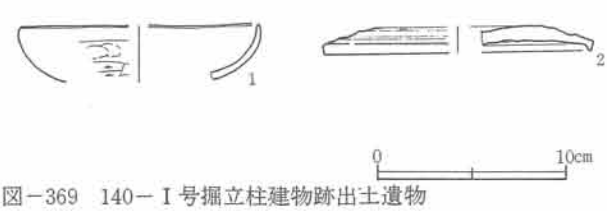


図－367　140(I)・140(II)・141・142・143号掘立柱建物跡関係図



図－368　140(I)号掘立柱建物跡

140—Ⅰ号掘立柱建物跡（5K—21—Ⅰ）　**位置**　レ4。東斜面に立地する。　**形状**　3間（6.6m）×3間（4.2m）の建物跡で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN—5°—Eで、面積は27.7㎡である。P13～P16は、側柱よりも1回り小さく、床束とも見られる。　**柱穴**　掘り形は全体として円形を呈するものが多く、径50～70cm、深さ60cm前後のものが多い。P1、P4、P8の地層断面図には径15cm前後の柱痕跡が認められる。　**重複関係**　140—Ⅱ号と重複する。その新旧は不明だが、140号—Ⅱに属すると考えられるP5′・6′のあり方が、本遺構に規制されているような位置にあることから本遺構を旧としたい。　**遺物**　P5から須恵器蓋、P10から土師器坏等が出土した。　（中澤）

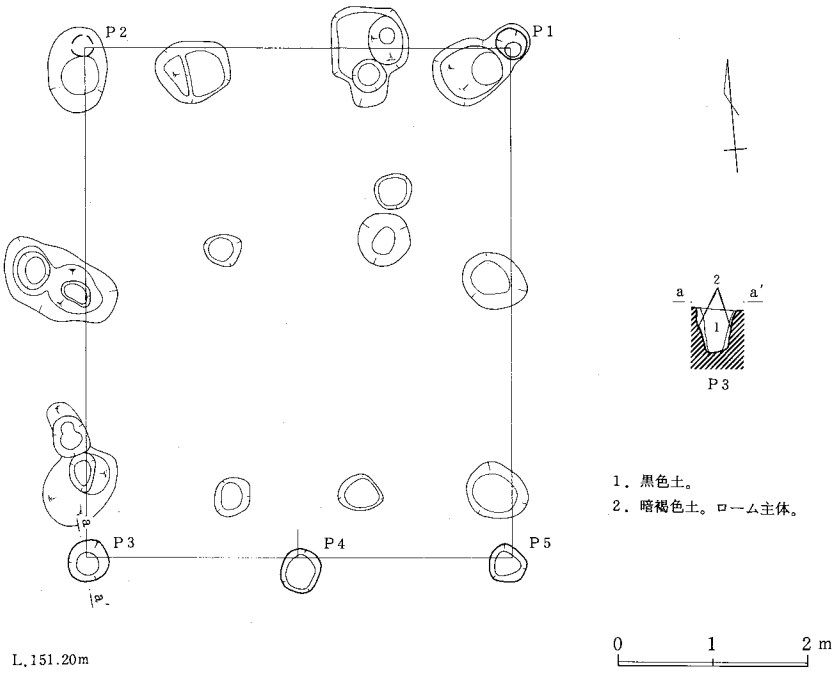


図－369　140－Ⅰ号掘立柱建物跡出土遺物

出土遺物　**土師器**　坏（1）、体部～口縁部小片。丸底とみられる。色調は淡褐色で、良好な焼成である。　**須恵器**　蓋（2）、偏平な形状呈す。頂部には回転ヘラ削りを施し、鈕に向かって凹ます。色調は灰色で、堅緻な焼成。表面には気泡状の細かい穴。ロクロは左回転。　（唐澤）

掘立柱建物跡全景（東から）

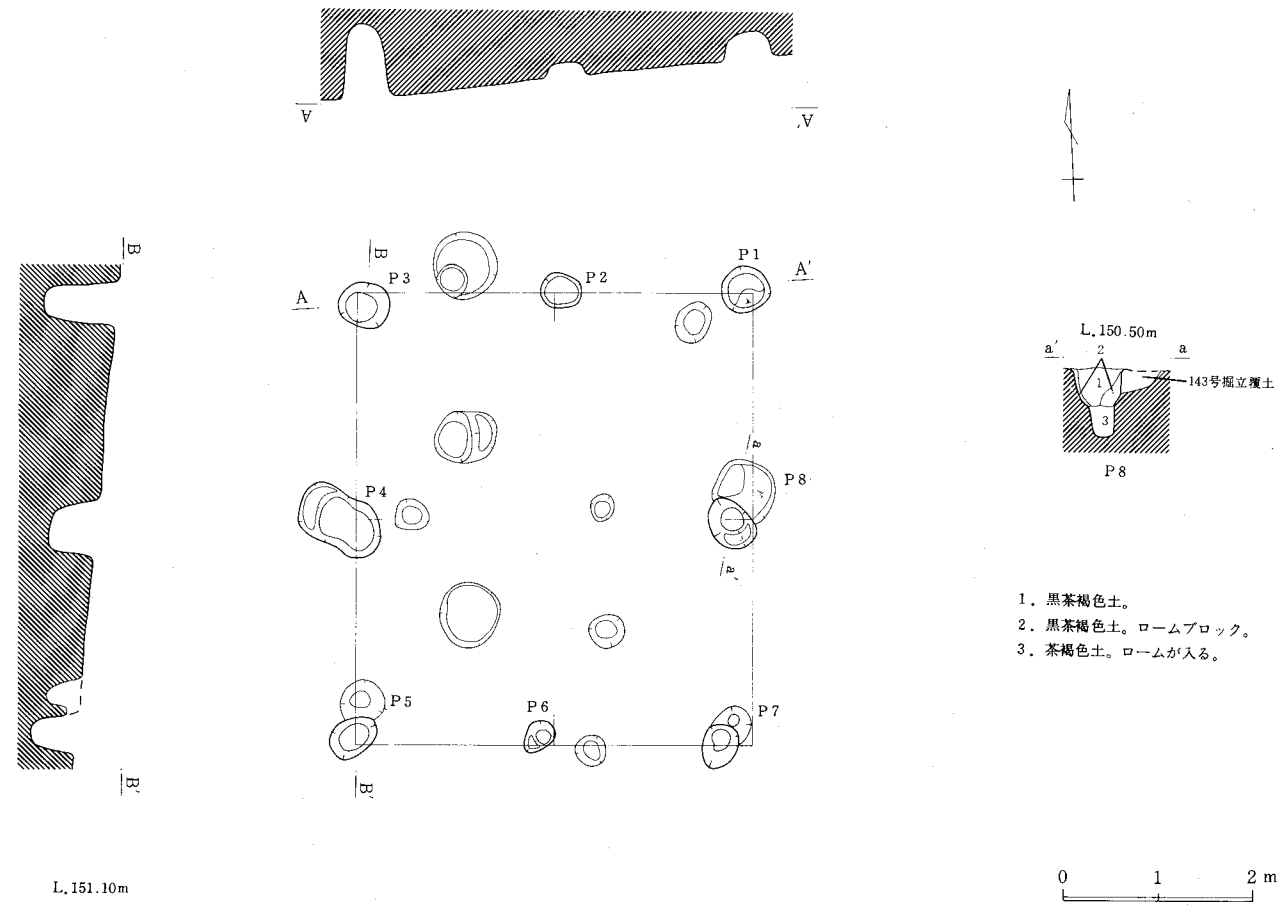
140—II号掘立建物跡



図—370　140(II)号掘立柱建物跡

140—II号掘立柱建物跡（5K—21—II）　**位置**　140—I号掘立と重なる。建て替え関係と見られる。　**形状**　3間(5.4m)×2間(4.5m)の建物跡と考えられる。西辺は140—I号掘立P5・P6の建て替えであるP5′・P6′に柱を建てたものと考えられる。北辺と東辺の中央の柱は、140—I号掘立のP2・P3とP11・P12をそのまま利用しているようにも見える。とすれば、北辺の柱間は3間となる。主軸方向N—4°—E、面積24.3m²である。　**柱穴**　P3には径18～22cmの柱痕跡が確認された。　**重複関係**　140—I号掘立の他に、北東隅にかかる2間×1間の東西棟の建物跡と重複する。後者との新旧関係は不明である。前者は140—I号を参照。　（唐澤）

141号掘立建物跡



図—371　141号掘立柱建物跡

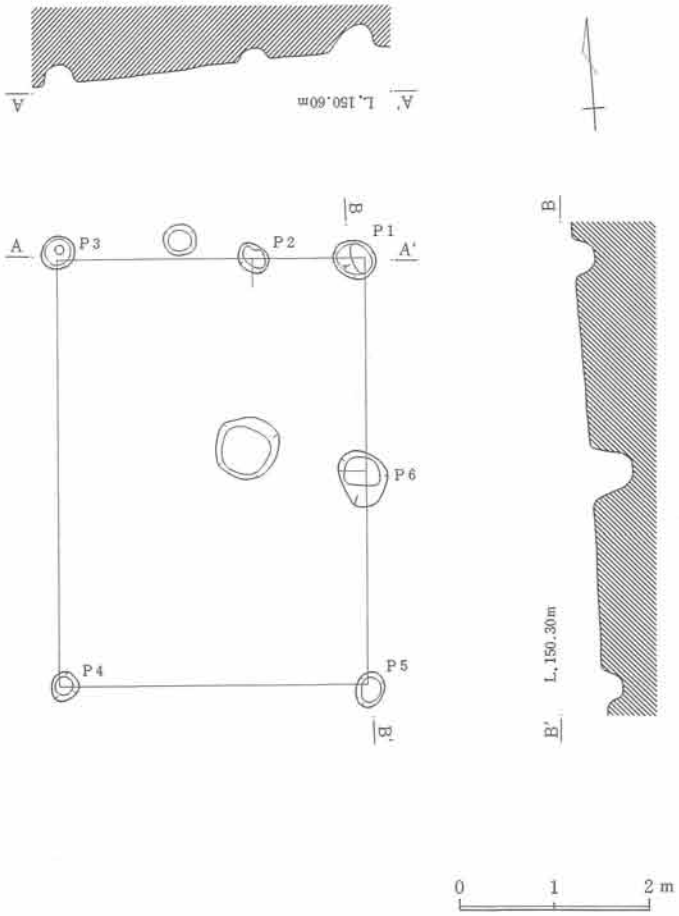
141号掘立柱建物跡（5K—22）　**位置**　レ4に所在し、東斜面に立地する。　**形状**　2間（4.8m）×2間（4.2m）の長方形で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN—3.5°—Eで、面積は20.2m²を測る。しかし、東西方向の南辺は柱穴跡のあり方から、3.9mつまり1.95+1.95mの可能性もあることを付記しておく。　**柱穴**　掘り形は円形を呈するものが多く、径30～50cm前後、深さに関しては傾斜地に位置することから南・北・西側列の柱穴跡が50cm前後で、東側列のものより一段と深くなっている。　**重複関係**　143号建物跡と重複し、本遺構の方が新しいことはP8の地層断面図から明らかである。　**遺物**　P2内から須恵器坏の底部片が出土した。　（中澤）

図－372　141号掘立柱建物跡出土遺物

出土遺物　**須恵器**　坏（1）、底部片。ロクロ整形。底部切り離し技法は回転糸切り（未調整）。色調は暗灰褐色で、堅緻な焼成。胎土にやや粗い砂粒を含む。底部内面は広く、平坦。　（唐澤）

掘立柱建物跡全景（東から）

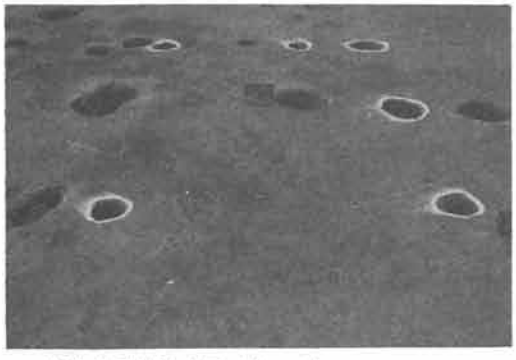
142号掘立建物跡



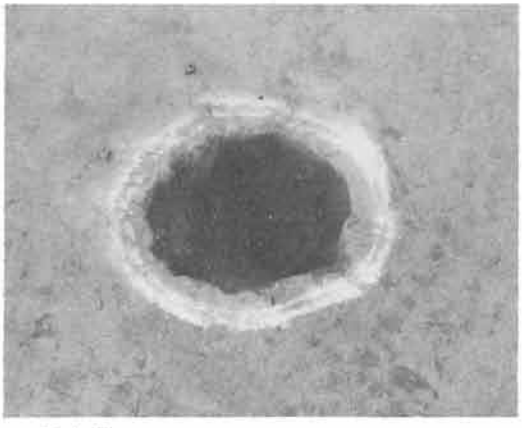
図－373　142号掘立柱建物跡

142号掘立柱建物跡（５Ｋ－23）　**位置**　レ４。レ３からレ４にかけては、11軒の掘立柱建物跡と９軒の竪穴式住居跡が、群として一つのまとまりを持って所在する。掘立柱建物跡はＬ字形に配列され、その内側に竪穴式住居跡がくる。両者の間には、立地の違いも若干認められる。掘立柱建物跡は、南北に配列されたものは東斜面直前の高台に、東西方向に配列されたものは東斜面上に立地するのに対し、竪穴式住居跡はほとんどすべてが東斜面上に構築されている。以上のように両者の間には、配列及び立地の上で違いが認められる。本建物跡は、Ｌ字形の掘立柱建物群のうち、東西方向に配列されたものの一つである。　**形状**　２間（4.5m）×２間（3.3m）の長方形の建物跡で、南北方向に長軸をとる。西辺と南辺の柱間は、それぞれ１間となっている。長軸方向Ｎ－３°－Ｅ、面積14.9㎡。　**柱穴**　円形の掘り形で、径30～40cm前後、深さ15～28cm前後であるが、Ｐ６は60×52cm、深さ43cmで他と趣を異にする。柱穴の底面の標高は、Ｐ１～Ｐ４が150m前後であるのに対して、Ｐ５・Ｐ６の２つは149.6m前後と低くなっている。　**遺物**　丸底風の土師器坏小片が出土した。**重複関係**　143号建物跡と重なるが、柱穴間の切り合いがないため新旧関係は不明である。また、西に近接する141号建物跡とも、距離的に近すぎるため、同時に存在することは不可能である。

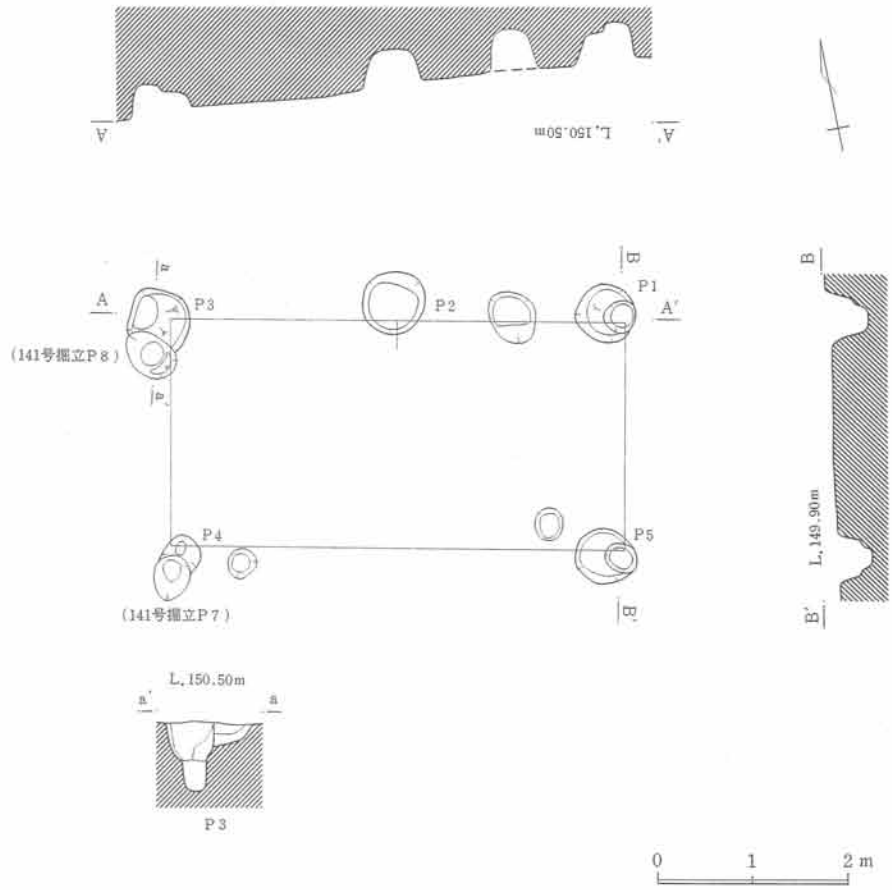
（唐澤）



掘立柱建物跡全景（南から）

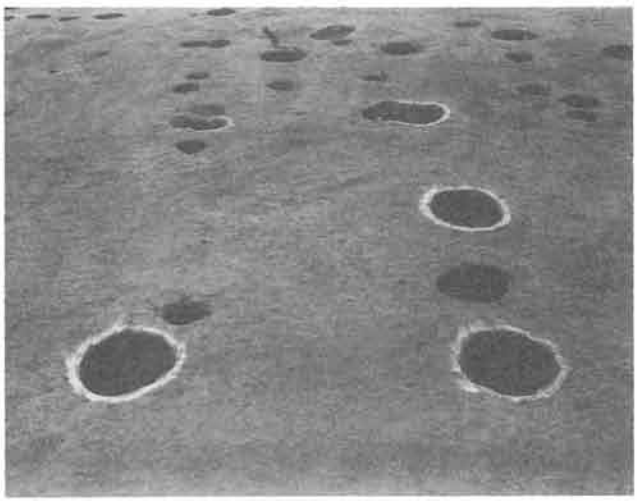


P_1全景

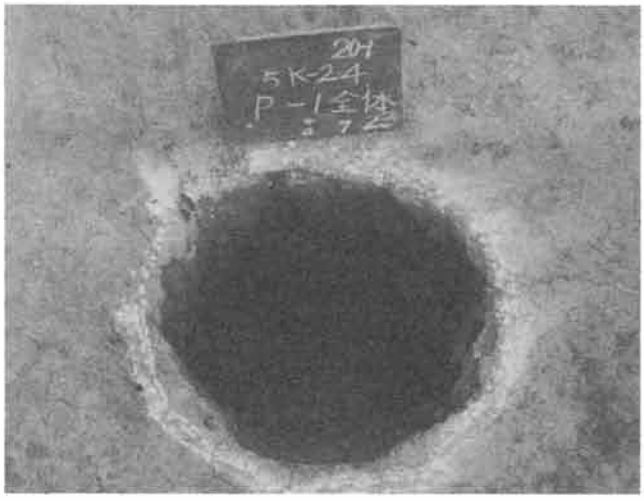


図－374　143号掘立柱建物跡

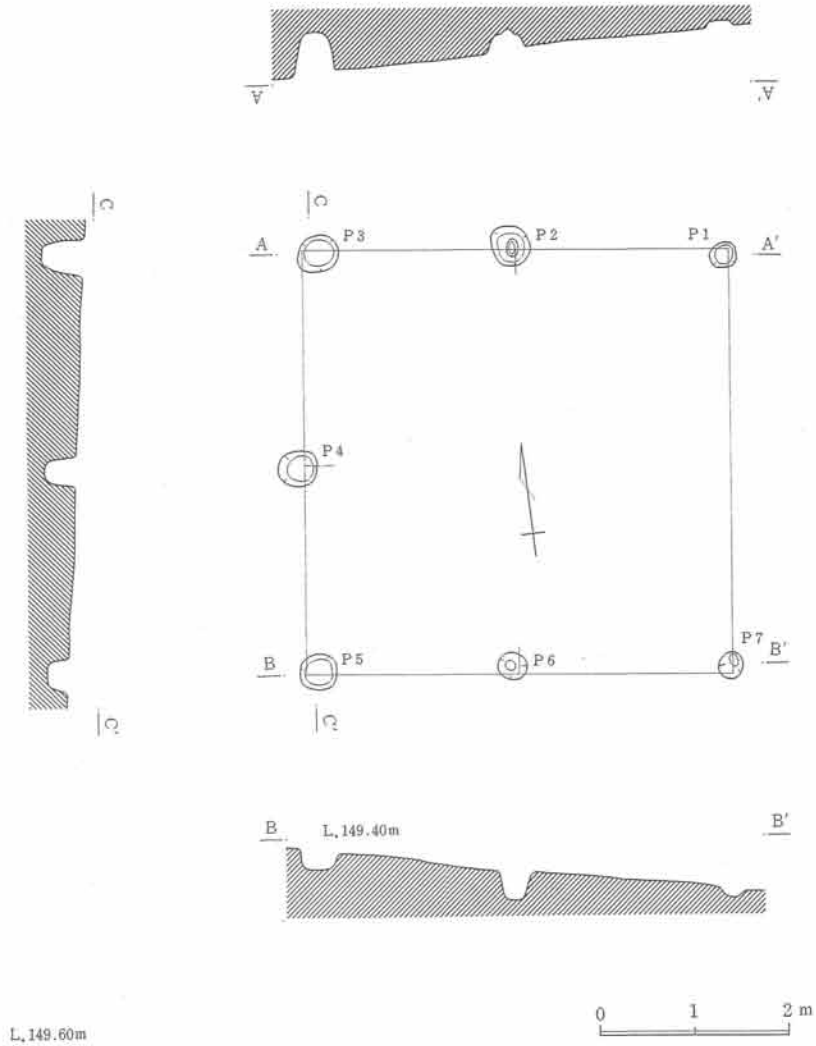
143号掘立柱建物跡（5K－24）　**位置**　レ4。142号建物跡と重なって、東側斜面途上に立置する。他の6軒の掘立柱建物跡と、L字形の建物群の北辺を構成する。このL字形の建物群の内側には、9軒の竪穴式住居跡が存在する。**形状**　2間（4.8m）×1間（2.4m）の長方形で、東西方向に長軸をとる。南辺の柱間は1間となっている。柱間の距離は2.4mを基準にして矩形をつくっている。長軸方向N－101.5°－E、面積11.5㎡。同じ建物群の中で、東西方向に長軸をとるのは、本建物跡だけである。　**柱穴**　円形を呈する。P4を除き、径65cm前後、深さ34～46cmである。P4は40～×39cm、深さ21cmで、やや小さい。斜面下方の柱穴ほど、柱穴底面の標高は低くなる。P3・P4は141号建物跡の柱穴により南側が破壊されている。　**遺物**　関係する遺物の出土はみられなかった。　**重複関係**　141号建物跡と柱穴を切り合う。141号建物跡が新しい。　（唐澤）



掘立柱建物跡全景（東から）

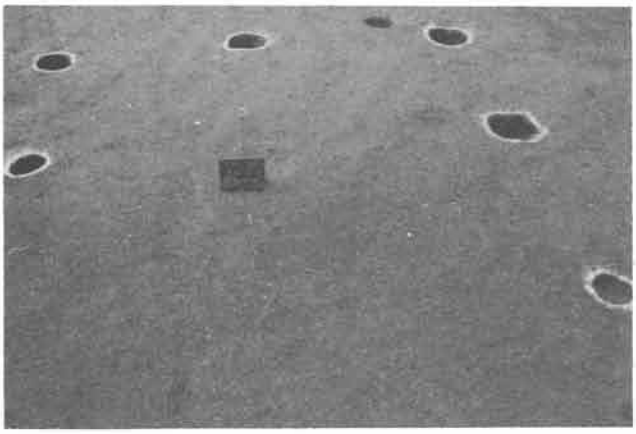


P_1全景

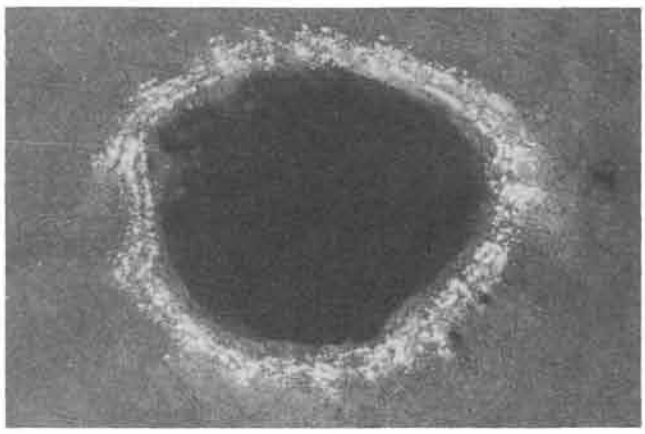


図－375　144号掘立柱建物跡

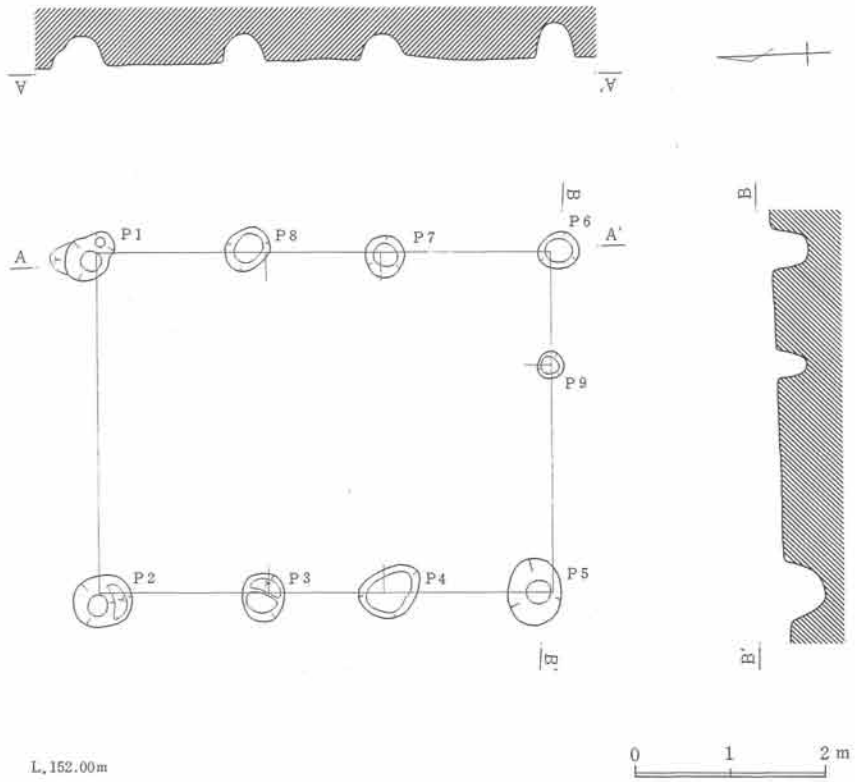
144号掘立柱建物跡（５Ｋ―25）　**位置**　レ４～ソ４。11軒の掘立柱建物跡で構成するＬ字形の配列の北辺東端に位置する。本建物跡群の中では東斜面の最下端に位置する。西側に隣接する142・143号建物跡とは2.5～３mの間を置く。東の谷地水田との比高差は５m前後である。　**形状**　２間（4.5m）×２間（4.5m）の正方形の建物跡である。斜面下方の東辺のみは１間となっている。柱間の距離は１間2.25mで矩形をつくる。南北方向Ｎ－７°－Ｅ、面積20.3㎡。　**柱穴**　掘り形は円形を呈す。規模は径40cm前後、深さは21～46cmであるが、東辺の柱穴（Ｐ１・Ｐ７）は径30cm前後、深さ7～10cmとひとまわり小さい。これは、本建物跡が斜面上に立置するためひときわ削平が大きく、特に東辺のＰ１・Ｐ７が顕著であるとも考えられる。また、東辺の柱間が、他と異なり１間なのも、中間の柱穴がやや浅いため削平されたとも考えられれ。北辺中央の柱穴Ｐ２は、掘り形の底部中央に、深さ５cmの浅い窪みをもつ。　（唐澤）



掘立柱建物跡全景（東から）

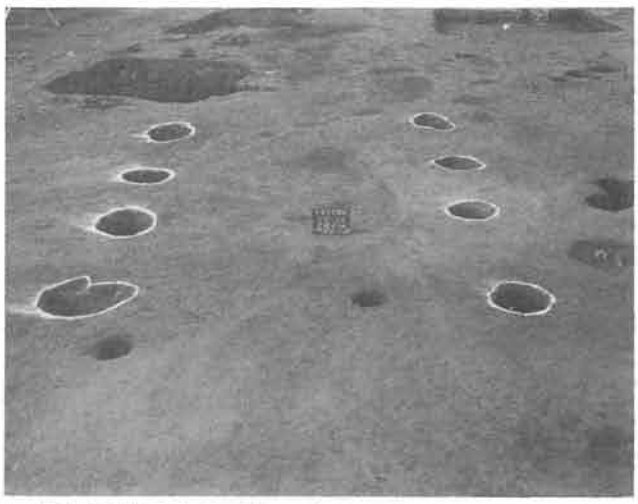


P_3全景



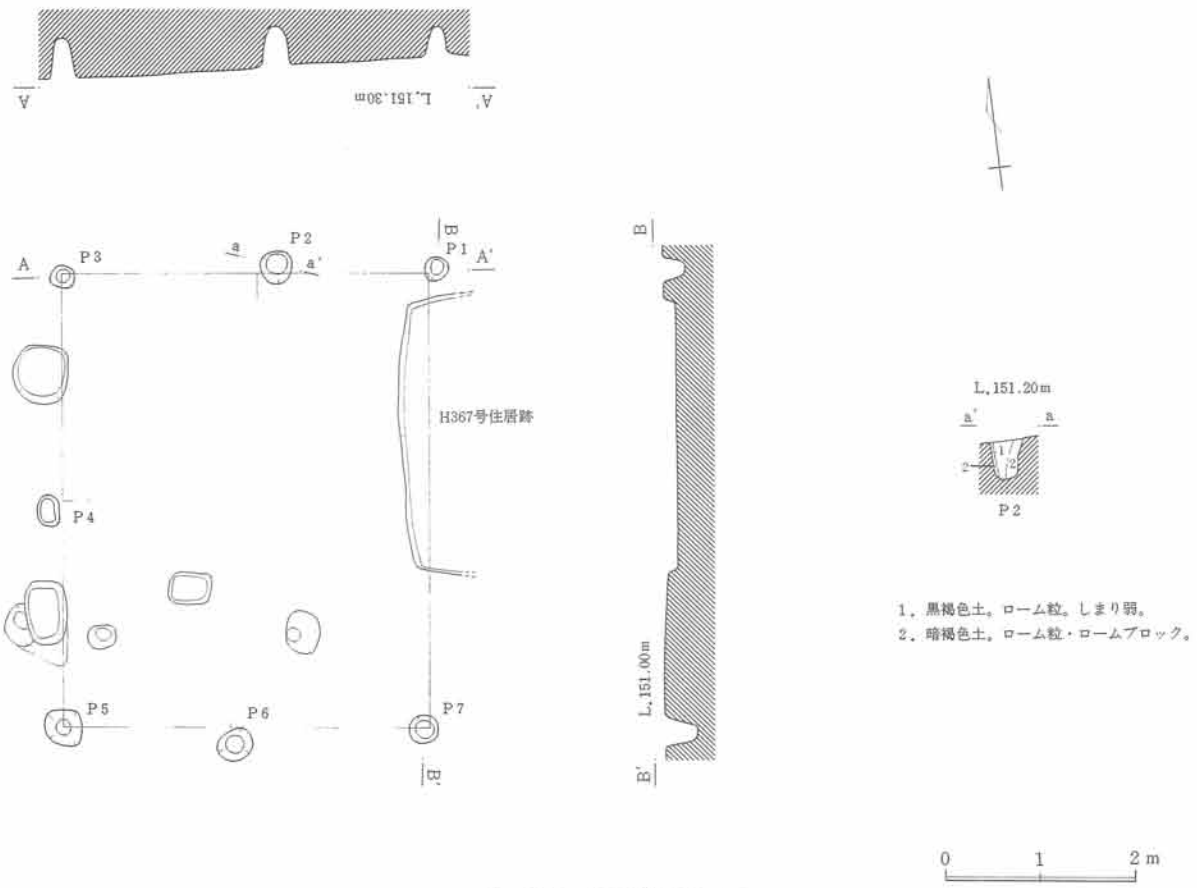
図－376　145号掘立柱建物跡

145号掘立柱建物跡（5 K－26）　**位置**　ヨ4に所在し、東斜面手前30mほどの台地に立地する。本建物跡西側には49・50号溝が南行している。　**形状**　3間（4.8m）×2間（3.6m）の長方形を呈し、長軸を南北方向にとる。長軸方向はN－3°－Eで、面積は17.2m²を測る。南北の柱穴列は東西とも、その尺度の割合が6：4：6、つまり中間の柱穴間の長さが、両端の柱穴跡間の長さの三分の二になっていることが特徴といえよう。また、東西南側についても、中央に位置すべき柱穴跡（P 9）が東寄りに確認されている。その位置は東西全長の約3分の1のところである。　**柱穴**　掘り形が円形を呈するものが多い。深さは30cm前後が多くなっている。　**遺物**　本遺構に関連する遺物の出土はみられなかった。　（中澤）



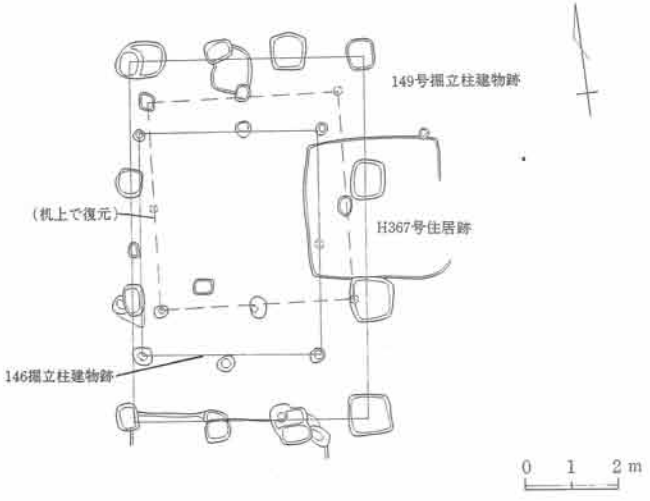
掘立柱建物跡全景（南から）

145掘立柱建物跡付近遠景

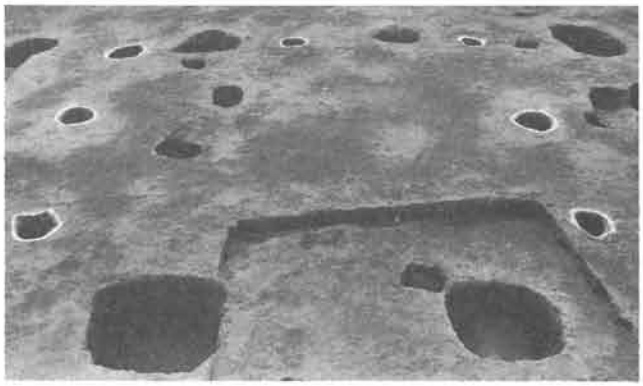


図－377　146号掘立柱建物跡

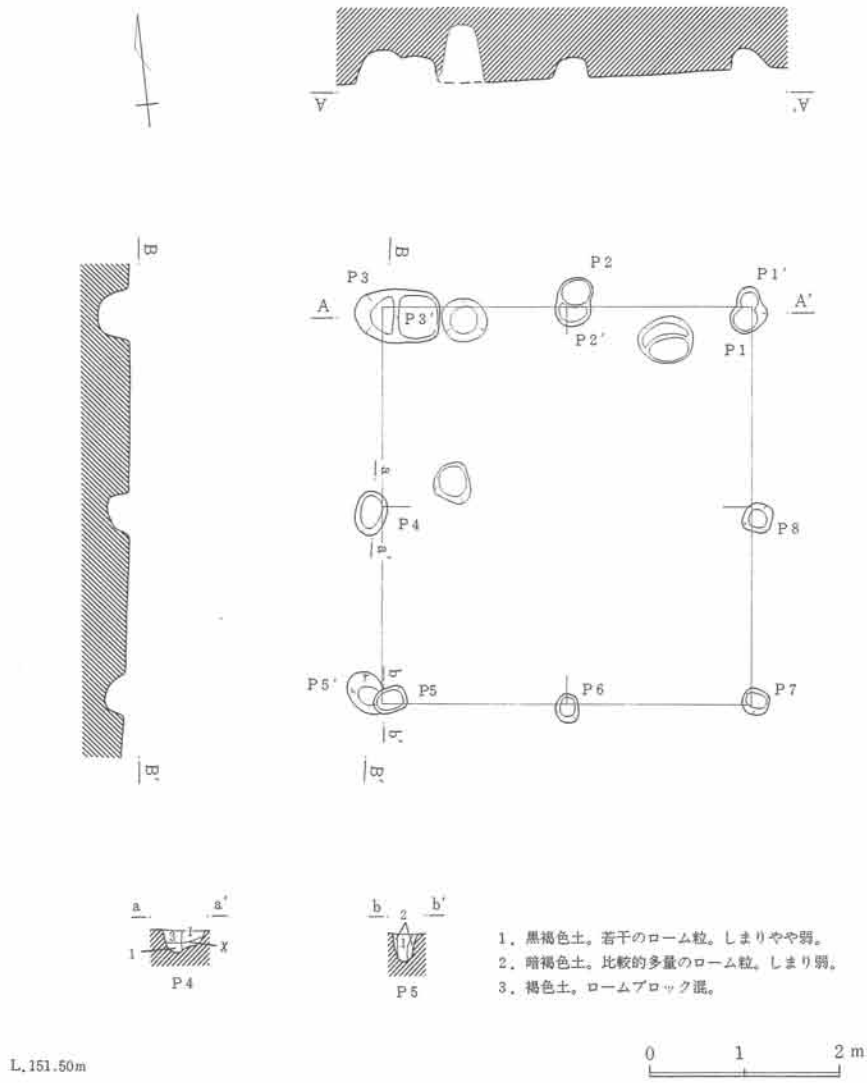
146号掘立柱建物跡（5K－27）　**位置**　タ3～レ3。北辺と西辺からなるL字形に配列する掘立柱建物跡群の西辺中央に位置する。北辺の建物跡が東斜面上にあるのに対し、西辺は斜面直前の高台に立地している。南北に隣接する139・147（148）号建物跡とは、7m前後の距離を置く。　**形状**　2間（4.8m）×2間（3.9m）の長方形で、南北方向に長軸を取る。柱間の距離は長軸方向で2.4＋2.4m、短軸方向で2.1＋1.8mである。特に後者の場合、南北の対応する柱間を取りかえている。長軸方向N－7°－E、面積18.7㎡。　**柱穴**　掘り形は全体として同形を呈するものが多く、径35～40cm、深さ45cmである。西辺中央のP4は長円形の掘り方で、深さは16cmと浅い。P2に柱痕跡が認められるが、径8～27cmの間である。　**遺物**　P4内から丸底風の土師器坏小片、薄手の土師器甕体部小片等が出土した。　**重複関係**　149号建物跡と重なる。東側ではH367号住居跡とも一部重複する。いづれも新旧関係は不明。　（唐澤）



図－378　146・149号掘立柱建物跡関係図



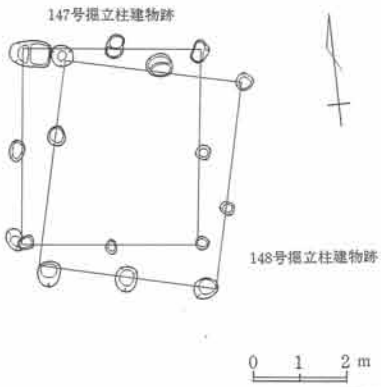
掘立柱建物跡全景（東から）



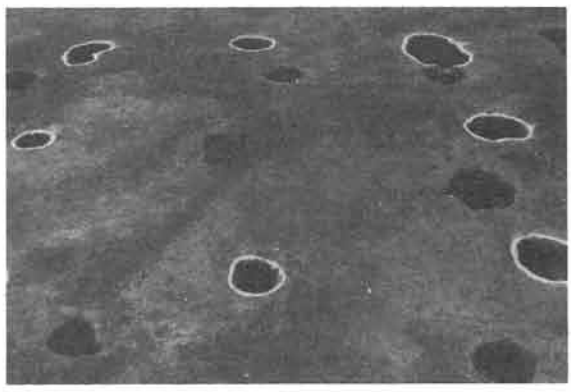
図－379　147号掘立柱建物跡

147号掘立柱建物跡（5K－28）　**位置**　レ2～3。L字形の掘立柱建物跡群の南端に位置する。東斜面直前の高台に立地する。南9mには58号溝が東西に走る。　**形状**　2間（4.2m）×2間（3.9m）の建物跡で、南北に長軸をとる。柱間の距離は、長軸方向で2.1m、短軸方向で1.95mである。P1～P3・P5は2つの柱穴が重なっており、建て替えを示すものと見られる。長軸方向N－6.5°－E、面積16.4m²。　**柱穴**　円形または長円形の掘り形で、径は30～50cm前後、深さ32～39cmであるが、長軸方向の東辺と西辺の中間の柱（P4、P8）の深さは14～24cmで他よりも一段浅く掘られている。　**重複関係**　148号建物跡と重なる。このような例は他にも多く、建て替えを意味すると見られる。新旧不明。

（唐澤）

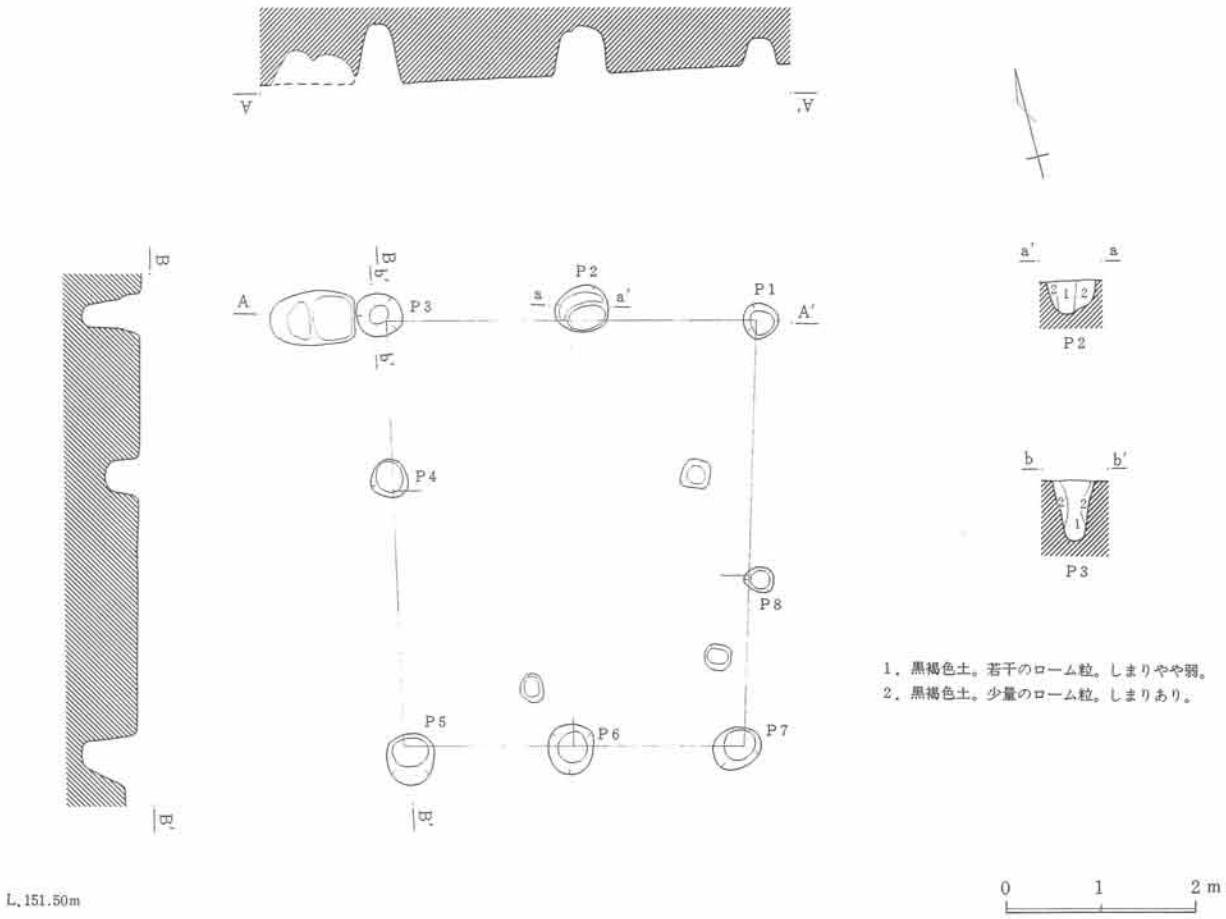


図－380　147,148号掘立柱建物跡関係図



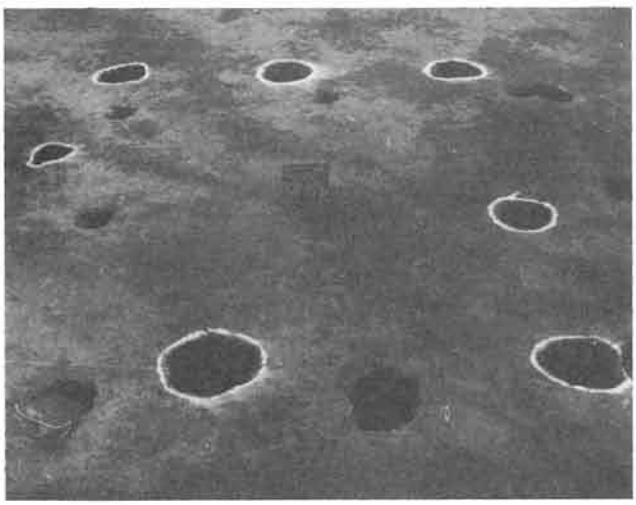
掘立柱建物跡全景（東から）

148号掘立建物跡

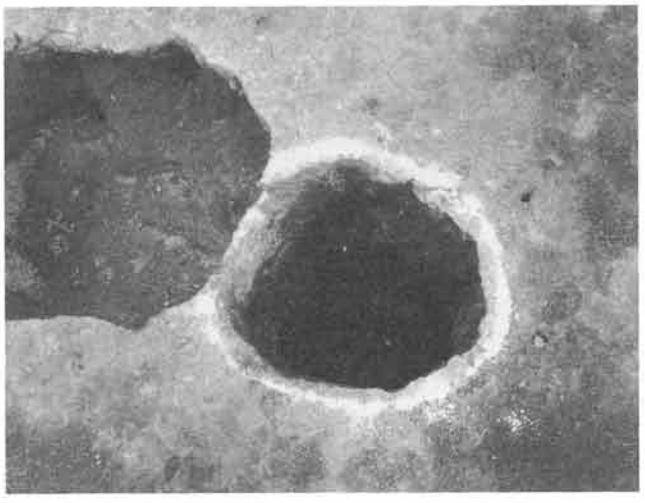


図－381　148号掘立柱建物跡

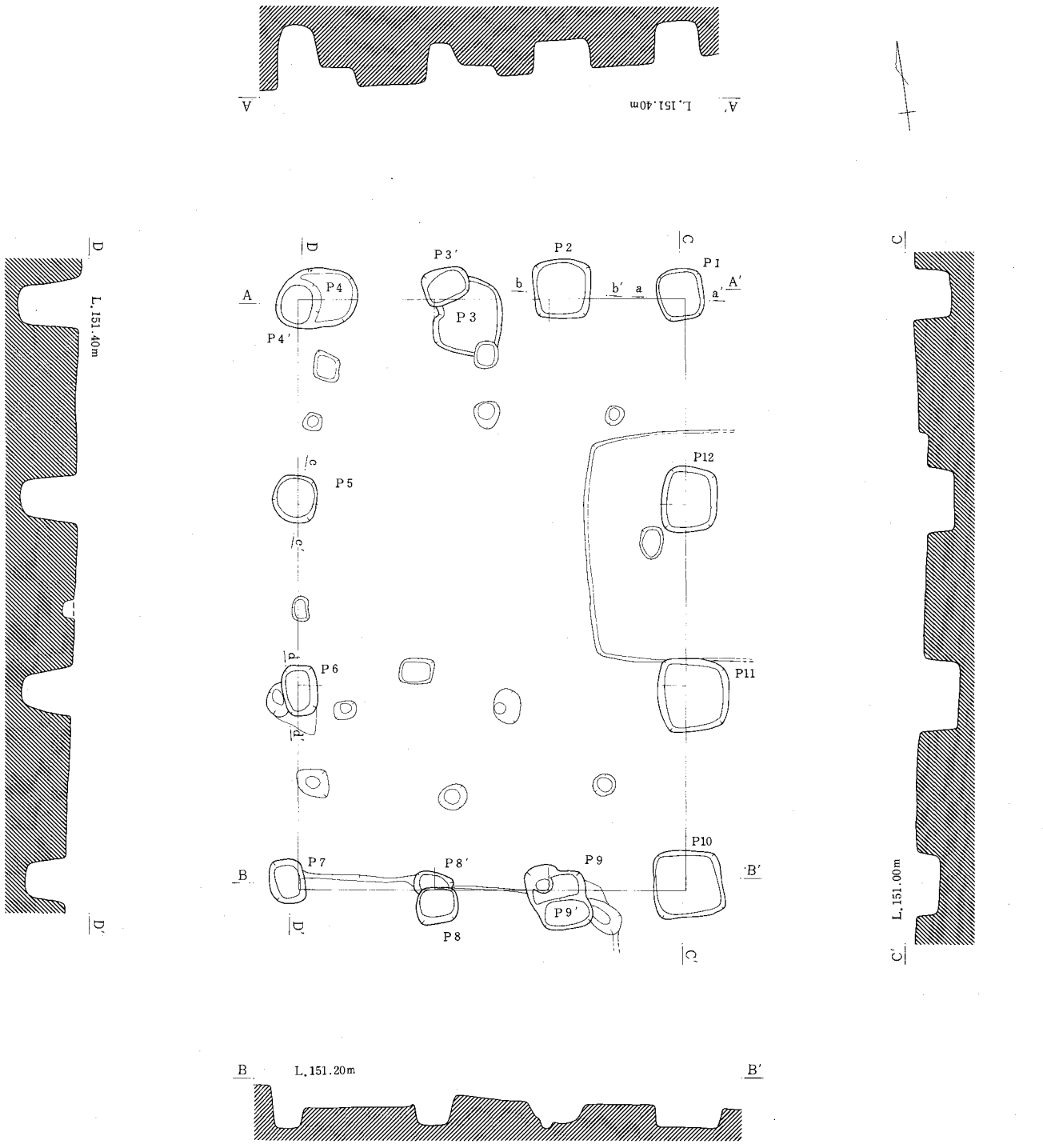
148号掘立柱建物跡（5K－29）　**位置**　レ2～3。147号建物跡と重なって、L字形に配列する掘立柱建物跡群の南端に位置する。　**形状**　2間（4.5m）×2間（3.9m）の建物跡で、南北方向に長軸をとる。柱間は長軸方向で2.7＋1.8mで、東辺と西辺の相対する柱間の距離を変える。短軸方向の柱間の距離は、北辺1.95m、南辺1.8mで一定している。全体の形としては、北辺に比べ南辺が30cm短い台形となる。長軸方向N－14°－E、面積16.9m²。　**柱穴**　円形の掘り形を呈し、径50cm前後、深さ50～60cmであるが、東辺寄りの柱穴は径、深さともにやや小さい。柱穴底面の標高は150.7～151.0m前後で、ほぼ一定している。P4の底面は6cmの深さに浅くもう一段掘る。柱径は20cm前後。　**重複関係**　上記。新旧不明。　（唐澤）

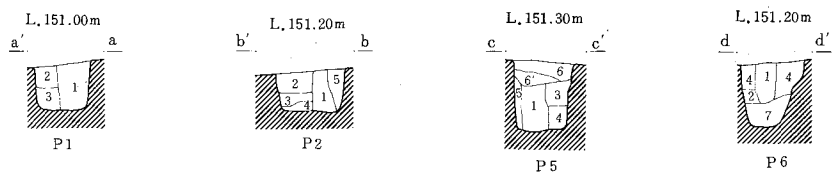


掘立柱建物跡全景（北から）



P_3全景





1．黒褐色土。ローム粒少量。しまり弱。
2．暗褐色土。比較的多量のローム粒。ロームブロック。
3．黒褐色土。若干の小ロームブロック。
4．暗褐色土。多量のローム。しまり普通。
5．暗褐色土。比較的多量のローム粒。しまりやや弱。
6．黒褐色土。少量のローム粒とロームブロック。
6′．6より黒色味強。ロームブロックは少。
7．褐色土。ローム主体。非常に固い。

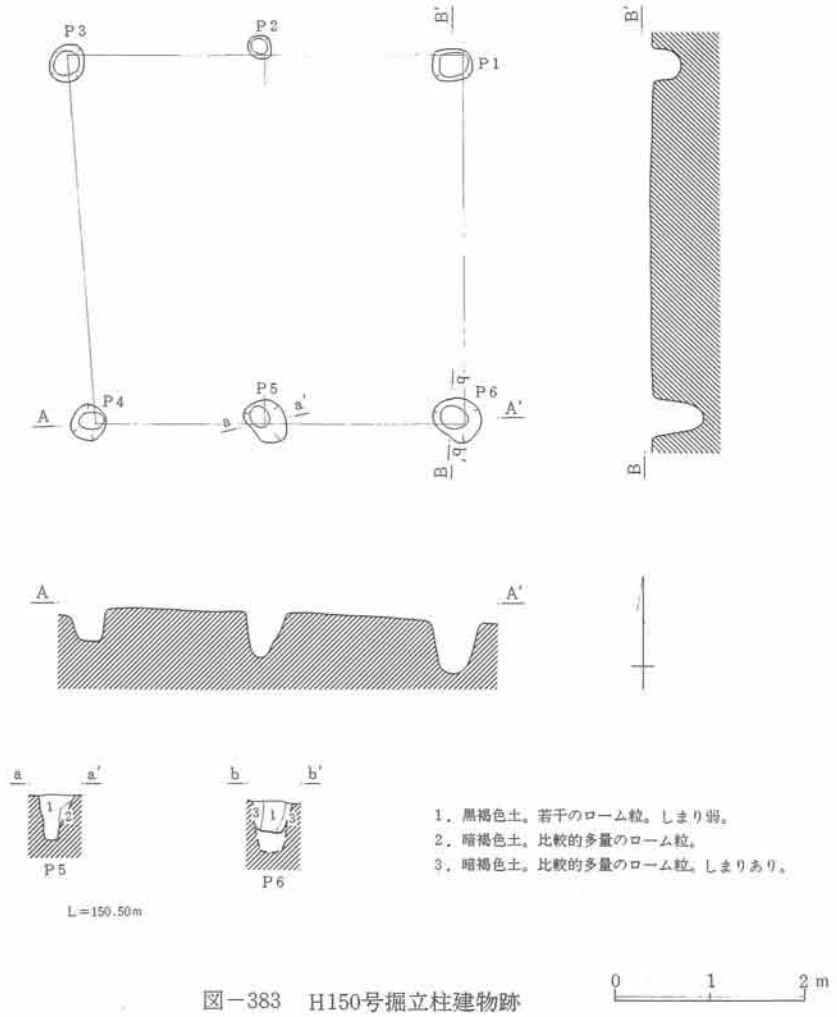
図－382　149号掘立柱建物跡

0　1　2 m

149号掘立柱建物跡（５Ｋ—30）　**位置**　タ３～レ３。　**形状**　３間（7.8m）×３間（5.1m）の、南北方向に長軸を取る建物跡である。柱間の距離は、長軸方向で2.7+2.4+2.7m、短軸方向で1.8+1.5+1.8mで、中央の柱間を30cm短くしている。長軸方向Ｎ—７°—Ｅ、面積39.8㎡。　**柱穴**　方形の掘り方を持つ。東及び北辺に正方形で大ぶりな掘り形を、西及び南辺には長方形ないし円形のやや小規模な掘り形にする。掘り形の最大のものは、一辺が96×94cm（Ｐ11）である。深さは22～74cmと変化に富む。掘り形底面の標高も150.30～150.99mと深さにほぼ対応する。Ｐ３、Ｐ４、Ｐ８、Ｐ９は建て替えが認められる。柱の大きさは、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ５、Ｐ６の地層断面によると25～30cmの径を持つ。　**重複関係**　146号建物跡及びH367・368号住居跡と重複する。前者とは建て替え関係にあるものと見られるが、柱穴どうしの切り合いがないため新旧関係は不明である。後者は、地断及び覆土の観察から、本遺構が新しい。　**その他**　本建物跡は、位置、面積、掘り形の形状、柱間の配置、柱の太さ等から見て、周囲の建物跡を卓越している。（唐澤）

掘立柱建物跡全景（西から）

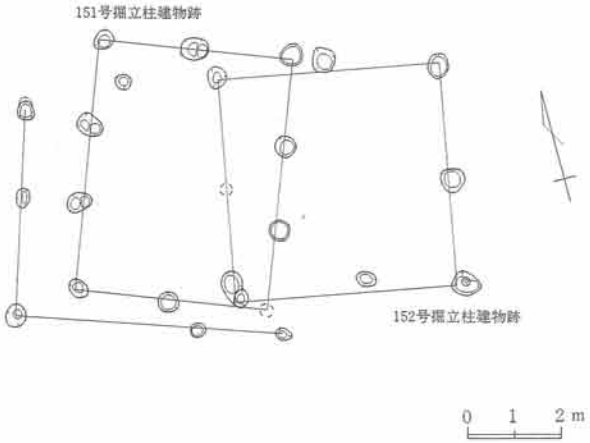
150号掘立建物跡



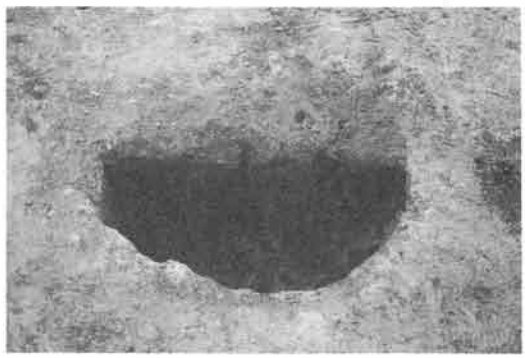
図—383　H150号掘立柱建物跡

150号掘立柱建物跡（５Ｋ—31）　**位置**　レ２。東斜面の上端近くに立置する。北に近接して11軒の掘立柱建物跡と９軒の竪穴式住居跡からなる遺構群が、南には一部を切り合っている58号溝が東西に走る。本台地の中央東寄りには、49・50号溝が南北に走るが、この溝の東側で、58号溝の南には掘立柱建物跡は一棟も検出されていない。　**形状**　２間（4.2m）×１間（3.9m）の建物跡で、東西方向に長軸をとる。しかし長軸方向の南側柱穴列(南辺)は、北の4.2mに対し、わずか3.9mで、形状は台形となる。長軸方向Ｎ—91°—Ｅ、面積15.8㎡。　**柱穴**　北東隅のＰ１は若干方形ぎみだが、他は円形の掘り形を持つ。規模は径40～50cm、深さ30～50cm前後が一般的だが、北辺中央のＰ２は、径約15cm、深さ12cmと小規模になっている。柱穴底面の標高も他に比べて高くなっている。　**遺物**　Ｐ１内からカエリを持つ須恵器蓋小片が出土した。　**重複関係**　58号溝と南西隅のＰ４が切り合う。地層断面の観察によると(図—445)、58号溝の方が新しい。（唐澤）

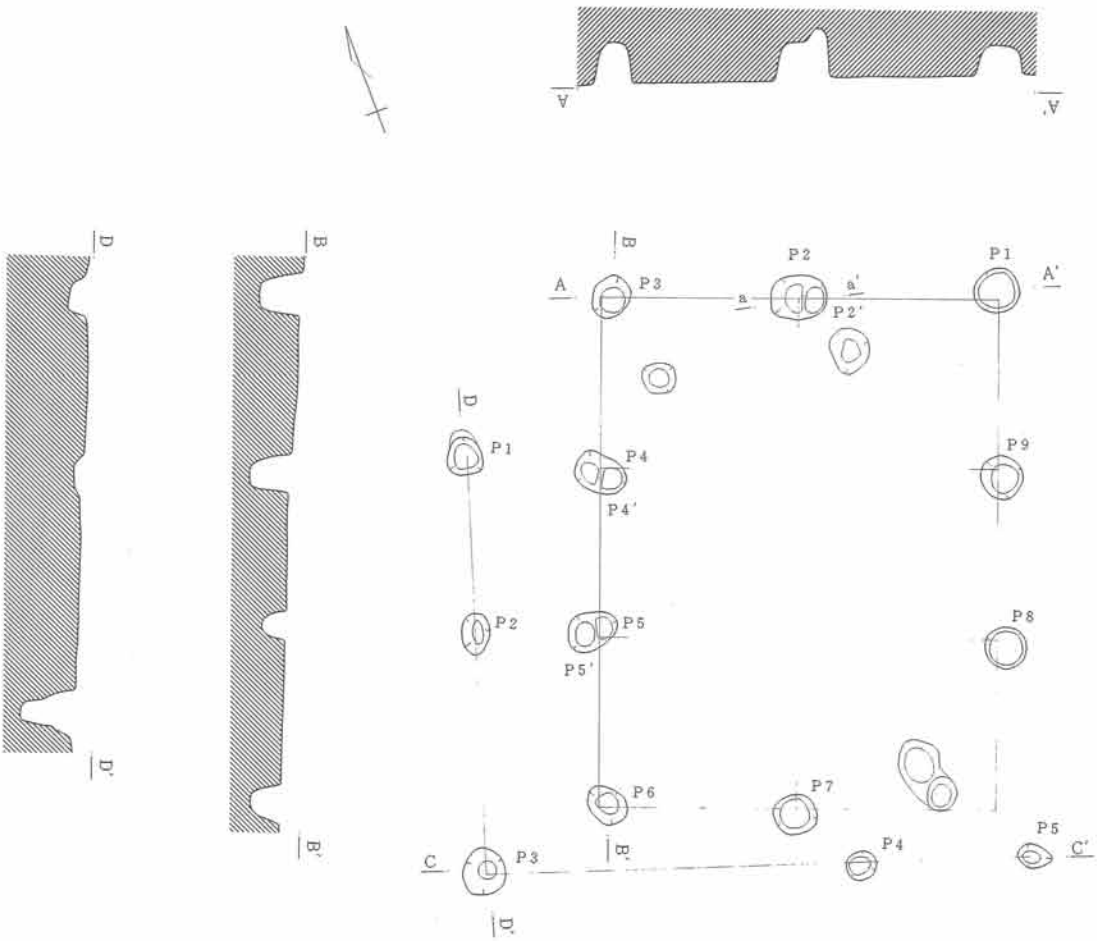
151号掘立建物跡



図－384　151,152号掘立柱建物跡関係図



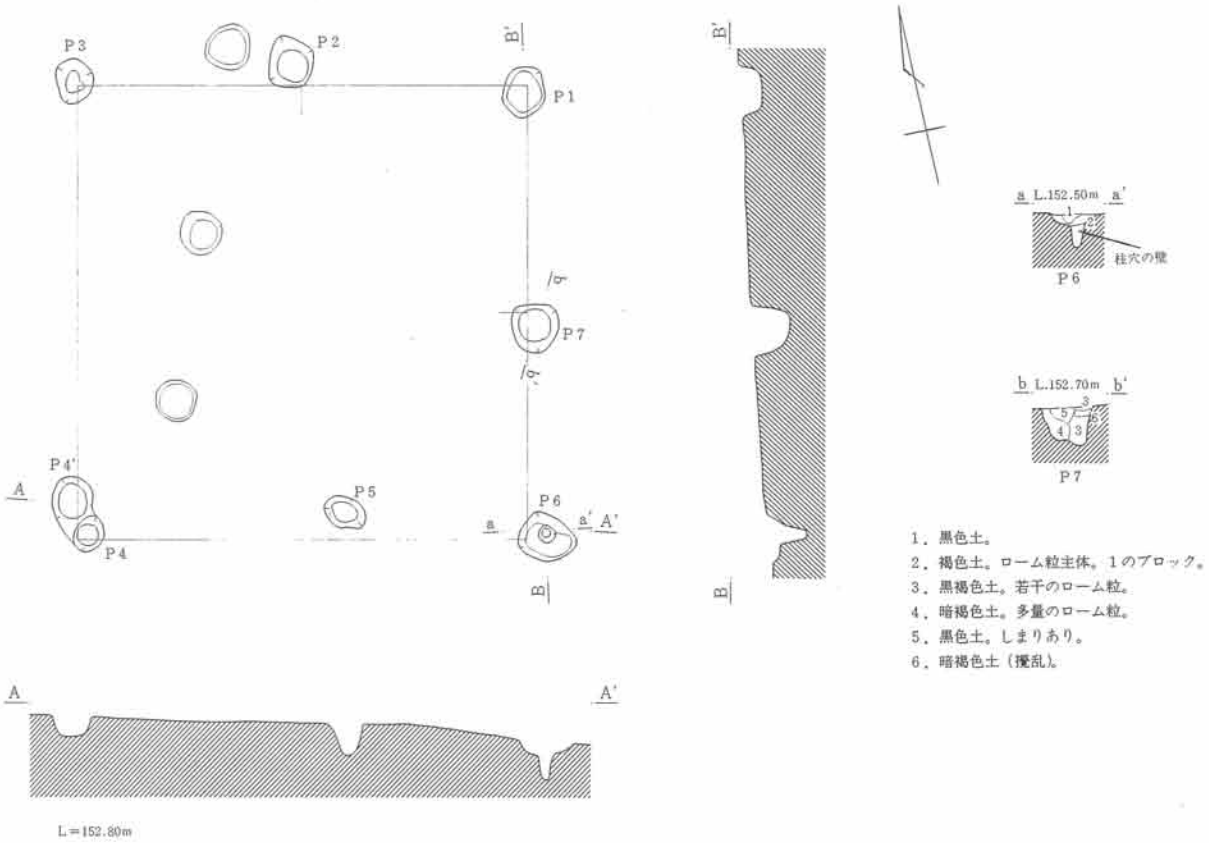
P_2地層断面（北から）



図－385　151号掘立柱建物跡

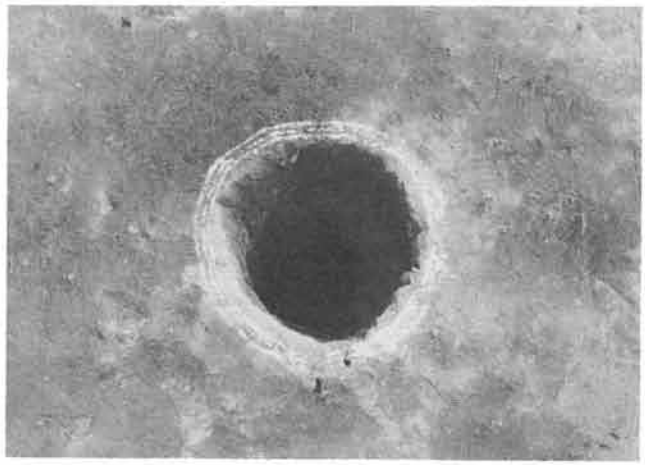
151号掘立柱建物跡（５Ｋ－32）　**位置**　タ６。９軒の掘立柱建物跡と６軒の竪穴式住居跡からなる遺構群に含まれる。竪穴式住居跡は東斜面に構築されているのに対し、掘立柱建物跡は東斜面直前の高台を中心に立地する。**形状**　３間(5.4m)×２間（4.2m）の建物跡で、南北方向に長軸をとる。柱間の長さは、長軸方向で1.8m、短軸方向で2.1mと一定の長さを取る。南東隅の柱穴は認められなかった。長軸方向Ｎ－21°－Ｅ、面積22.7m²。　**柱穴**　円形の掘り形で、径45～50cm、深さ30～47cmである。柱穴底面の標高は西辺が152.5m前後に対し、地形的にやや低い東辺及び南辺は、152.4m前後と10cm程低くなっている。本来は同じ程度の深さの柱穴を意図したものであろうか。Ｐ２、Ｐ４、Ｐ５は、２つの柱穴が重複しており、柱の建て替えがあったものと見られる。　**重複関係**　152号建物跡と東側で重複する。両者は建て替えの関係にあると見られるが、柱穴どうしの切り合いがないため、新旧関係は不明である。本建物跡の西辺と南辺に沿って、Ｌ字形の柱穴列が検出された。建物跡の一部か。他に続く柱穴は不明。　（唐澤）

152号掘立建物跡

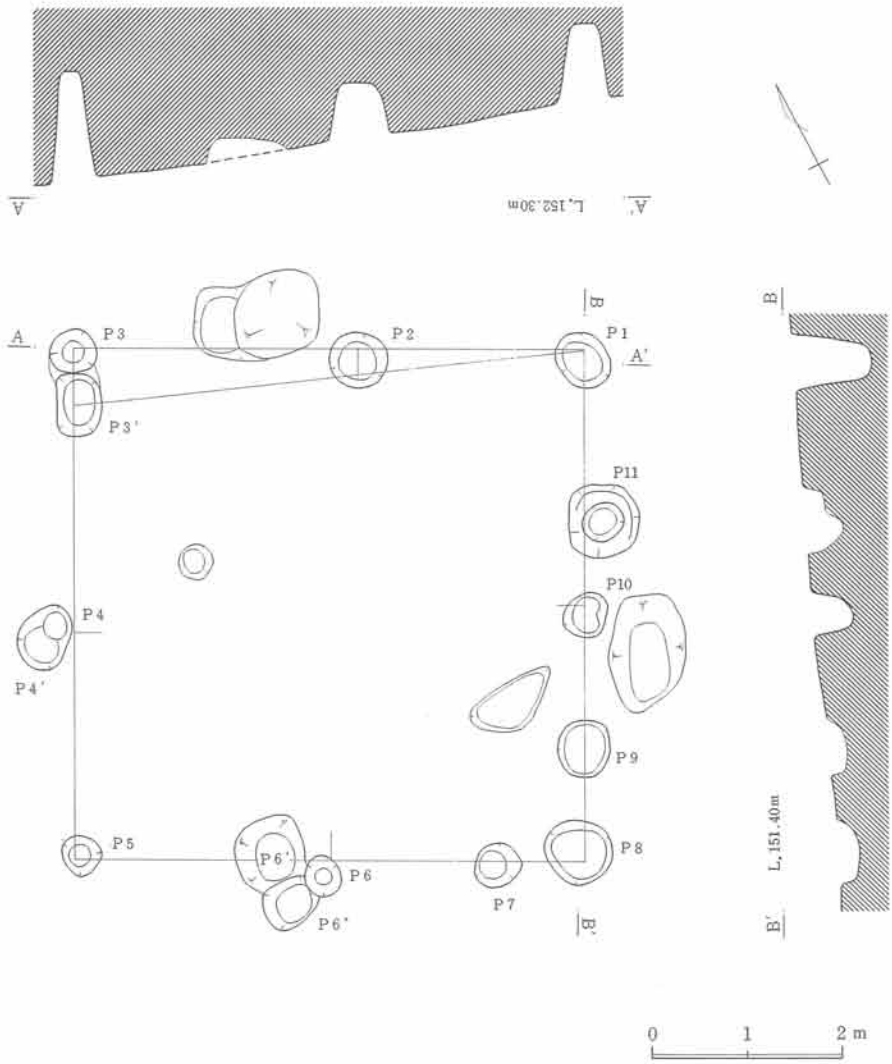


図－386　152号掘立柱建物跡

152号掘立柱建物跡（５Ｋ－33）　**位置**　タ６。151号建物跡と重複して、東斜面に一部がかかる。　**形状**　２間(4.8m)×２間（4.8m）の正方形の建物跡。西辺は中間の柱がなく１間となっている。柱間の長さは、東辺と北辺が2.4＋2.4m、南辺が2.7＋2.1mである。北辺と南辺の中央の柱穴は、四隅の柱穴を結ぶ補助線の外側（Ｐ２）ないし内側（Ｐ５）に若干ずれる傾向を持つ。このような例は、他の建物跡でも良く見られる所である。南北方向Ｎ－11°－Ｅ（南北方向）、面積23m²。　**柱穴**　円形の掘り形で、径50cm前後、深さ27～45cmである。Ｐ４は建て替えが認められる。柱の規模は、Ｐ５・Ｐ７の地層断面に認められた柱痕跡によると、径18ないし19cmである。また、南東隅のＰ６は２段に掘られており、下段のピットは径18cmなので、これが柱のさし込まれた跡とすれば、先の柱の規模と一致する。　**重複関係**　151号建物跡と一部重なるが、柱穴どうしの切り合いがないため新旧関係は不明である。　（唐澤）



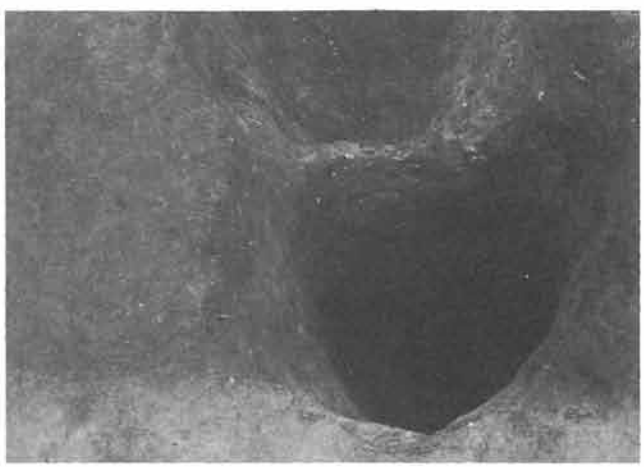
P_3全景



図－387　153号掘立柱建物跡

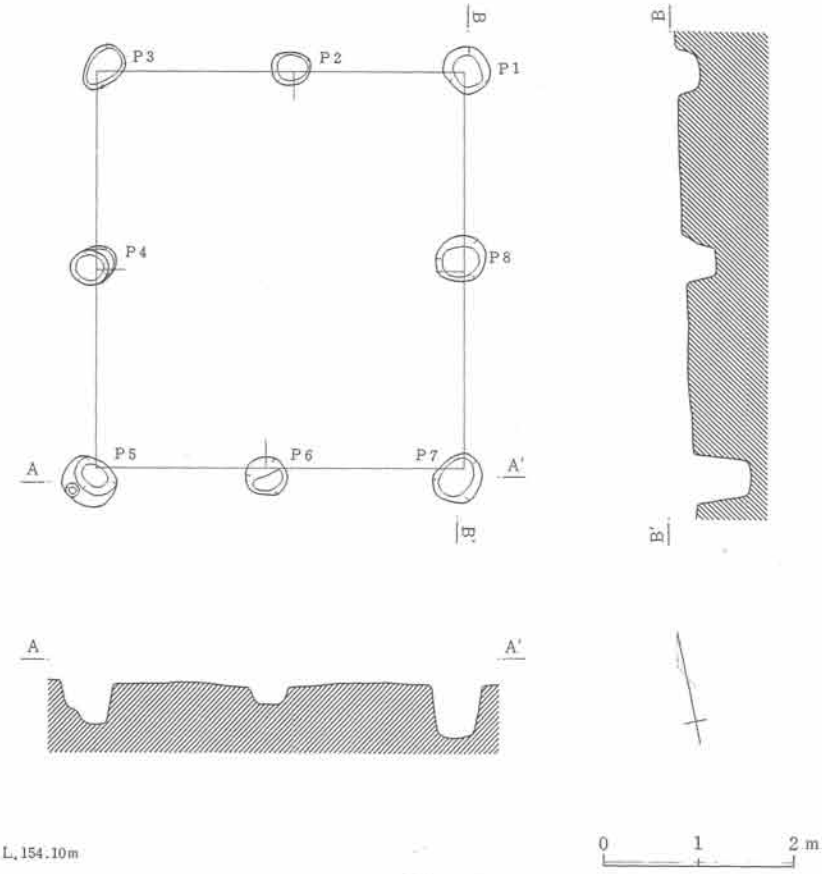
153号掘立柱建物跡（5K－34）　**位置**　レ6～7。この周辺の掘立柱建物跡群の中では、唯一の東斜面に構築された建物跡である。この東西では多数の柱穴が検出され、他にも建物跡が想定されたが、建物跡として柱穴の組めるものはなかった。　**形状**　P3・P4・P6には柱の建て替えが認められるが、この時に一辺5.4mの正方形の建物（面積29.2㎡）を、同じ間取りでほぼ同規模の台形（面積27.5㎡）につくり替えている。P6はその後もう一度建て替えている。柱間の長さは、北辺3＋2.4m、東辺1.8＋0.9＋1.5＋1.2mで、建て替え前と同じ。南辺は2.7＋1.8＋0.9mから2.1（2.4）＋2.4（2.1）＋0.9mに、西辺は3＋2.4mから2.4＋2.4mに変更している。長軸方向（南北）N－28°－E。　**柱穴**　円形の掘り形で、一般に径50～60cm前後、深さ50cm前後のものが多い。P1・P3・P5の3つの柱穴は82～115cmと特に深い。柱の規模は、P6の地層断面の観察によると、22cmの径を持つ。　（唐澤）

掘立柱建物跡全景（北から）



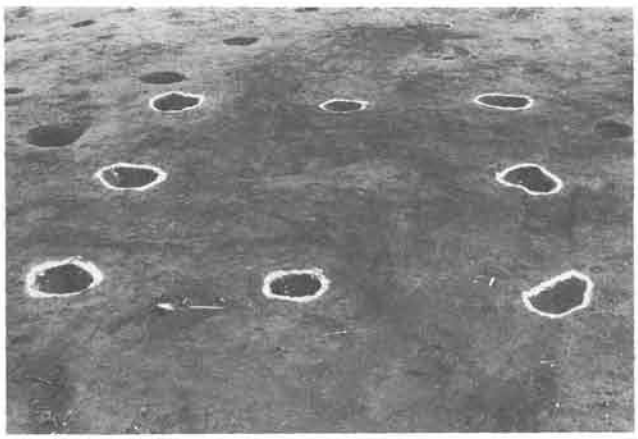
P_3・P'_3（北から）

154号掘立建物跡

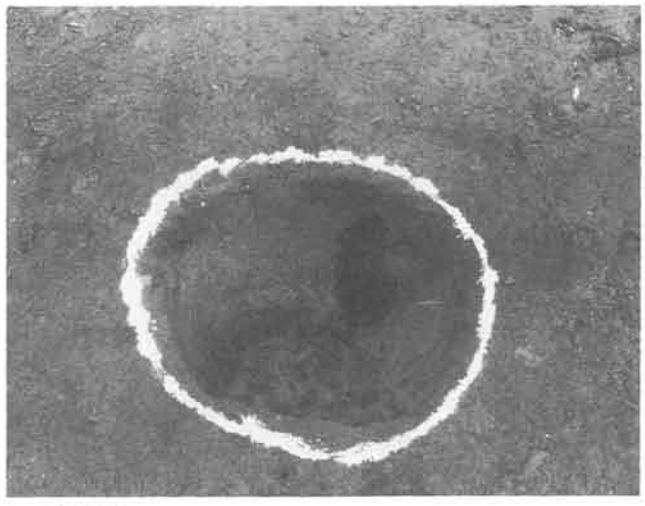


図－388　154号掘立柱建物跡

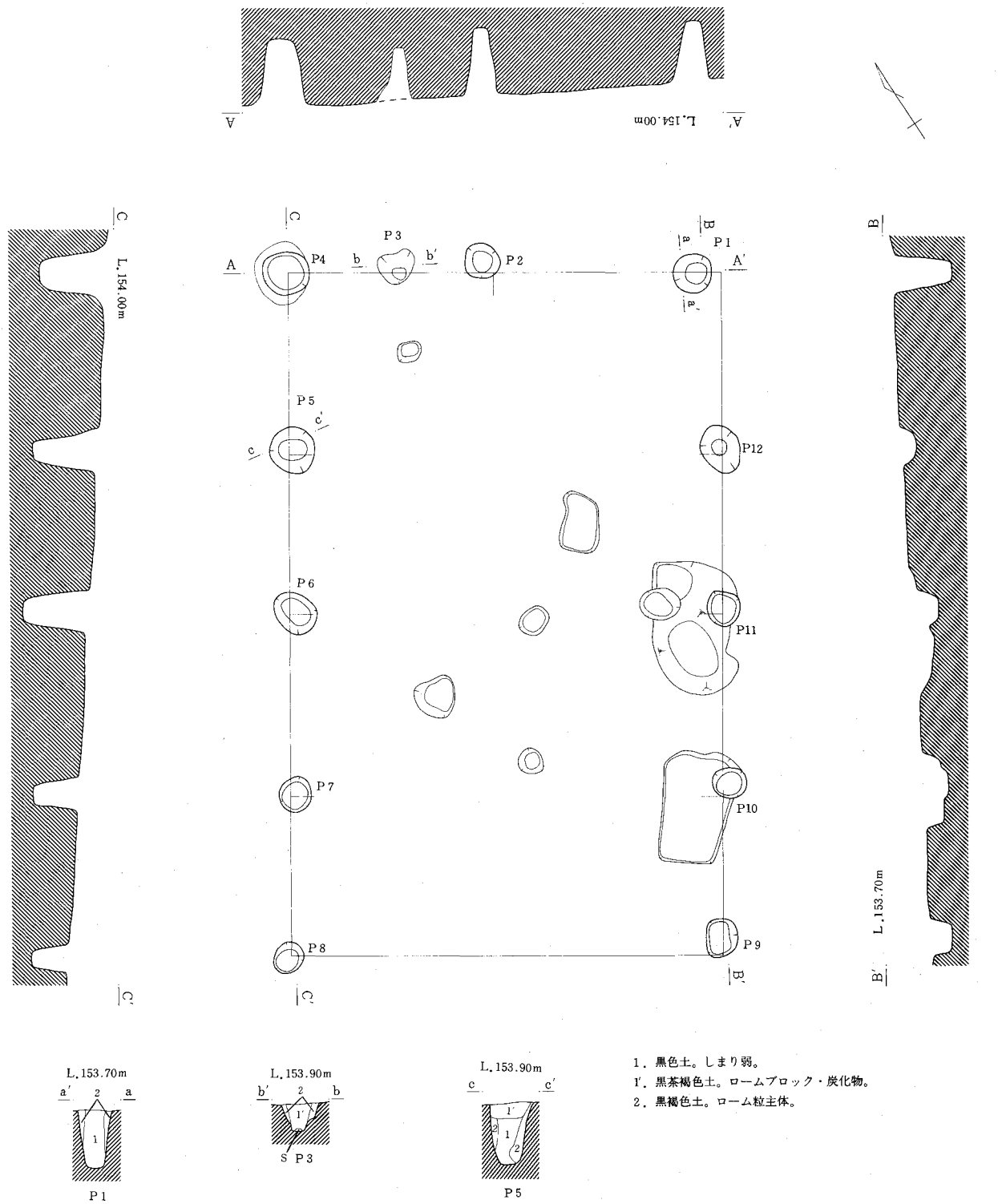
154号掘立柱建物跡（5 K－35）　**位置**　ヨ7およびタ7に所在し、東斜面にさしかかる手前の台地に立地する。東に接して155号建物跡がある。　**形状**　2間（4.2m）×2間（3.9m）で、南北方向に長軸をとり、その方向はN－11°－E、面積は16.3㎡である。　**柱穴**　掘り形は四隅の柱穴跡が長円形を呈す。長軸50cm前後、短軸30～40cm前後、深さ20～50cmにおよぶ。また、他の柱穴跡は円形を呈し、径40～50cm、深さ20～40cm前後。四隅に位置する長円形は、その長軸が東西または南北に対し45度の傾きをもって掘られている。P 5の地層断面図には径16cmの柱痕跡が認められる。　**重複関係**　52号溝と重複し、本遺構の方が旧いことは、P 3の覆土上部に水が流れたと考えられる地層が確認されている。　**遺物**　本遺構に関連する遺物の出土はみられなかった。　（中澤）



掘立柱建物跡全景（北から）



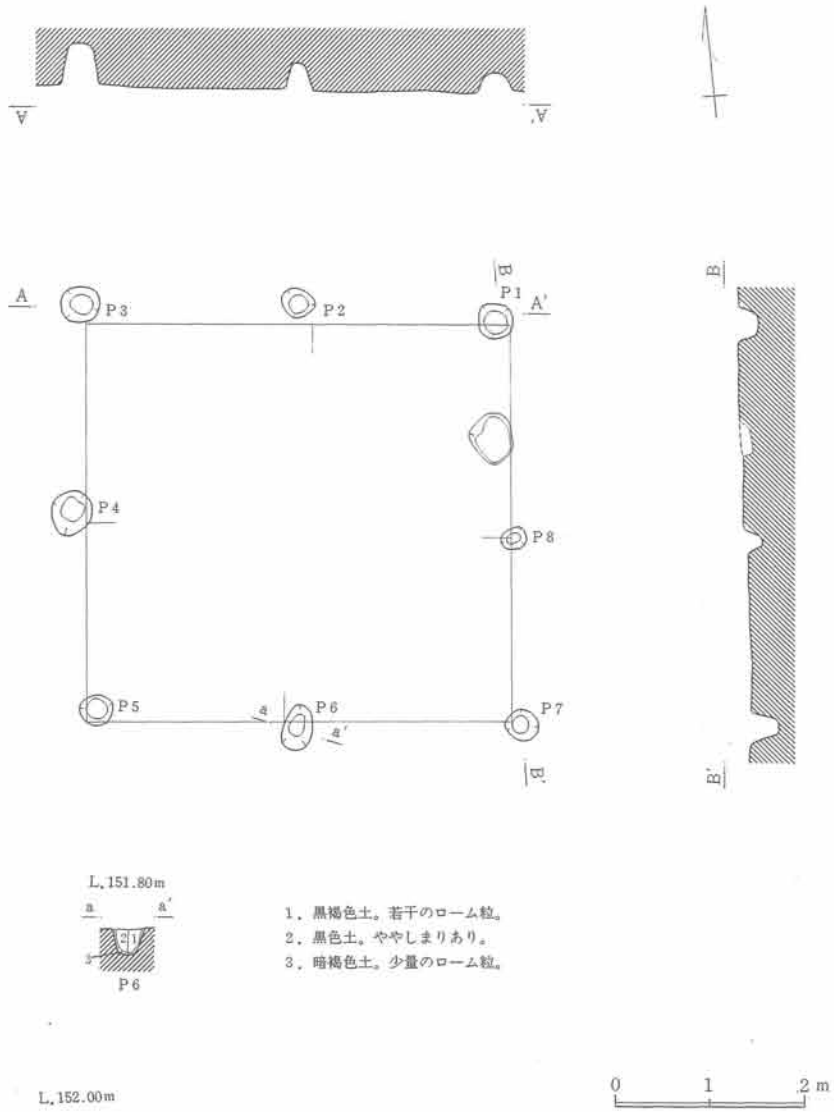
P_5全景



図－389　155号掘立柱建物跡

155号掘立柱建物跡（5K－36）　**位置**　タ6からタ9に所在し、東斜面直前の台地に立地する。西接して154号建物跡がある。　**形状**　4間（9m）×3間（5.4m）であるが、南辺側は1間（5.7m）になっている。南北方向に長軸をとり、長軸方向はN－33°－Eである。面積は51㎡である。　**柱穴**　掘り形は円形のものが多く、径40～60cm、深さに関しては西辺側の柱穴跡が80cm前後におよぶ。それに反し、東辺の柱穴跡は30cm前後のものが多くなっている。P1・P4・5には地層断面図に柱痕跡が認められ、径は20cm前後と考えられる。なお、P8の掘り形は長円形を呈している。　**遺物**　本遺構に関係する遺物の出土はみられなかった。　（中澤）

156号掘立建物跡

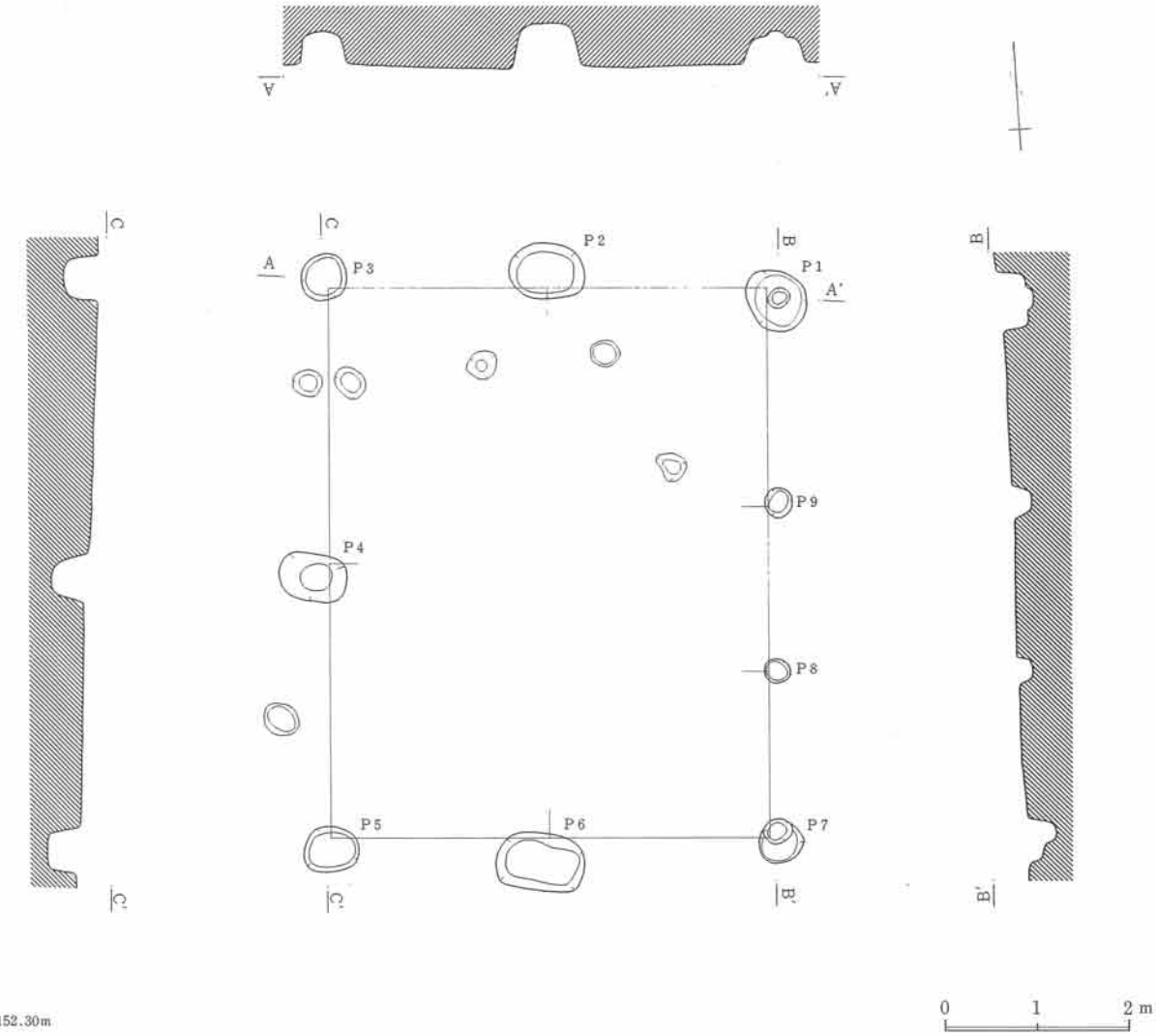


図－390　156号掘立柱建物跡

156号掘立柱建物跡（5K—37）　**位置**　リ4。本台地の北側に分布の中心をもつ奈良時代以降のカマドをもつ住居跡群と、南側に分布の中心を持つ石田川期住居跡群の境界に位置する。東西の47・56号溝に挟まれた平坦な地に立地する。周辺には他に掘立柱建物跡は検出されず、本建物跡がわずか1棟所在するだけであった。　**形状**　2間(4.5m)×2間(4.2m)の、東西方向に長軸を取る建物跡である。柱間の長さは、長軸方向が2.4+2.1mで、南・北辺の相向かいの柱間の長さをかえている。短軸方向は両辺とも2.1+2.1mと考えられるが、東辺は2.25+1.95mとも考えられる。後者の場合、ピットは位置的にしっくりと納まる。長軸方向N—96.5°—E、面積18.9m²。　**柱穴**　P6の長円形を除くといずれも円形の掘り形で、径40cm前後、深さ30cm前後である。この中で、東辺中央のP8は小規模なつくりで、径20cm前後、深さ16cmとなっている。P6には地層断面に柱痕跡が認められ、径は10～17cmである。　**その他**　平面形に歪みがあり、やや平行四辺形ぎみとなっている。　（唐澤）

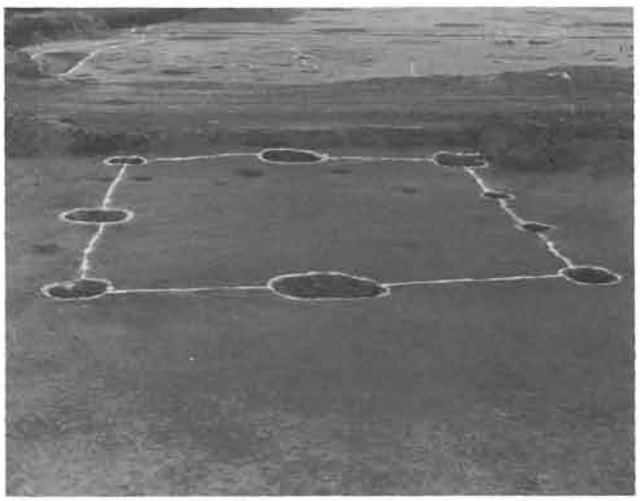
掘立柱建物跡全景（北から）

P_6全景



図－391　158号掘立柱建物跡

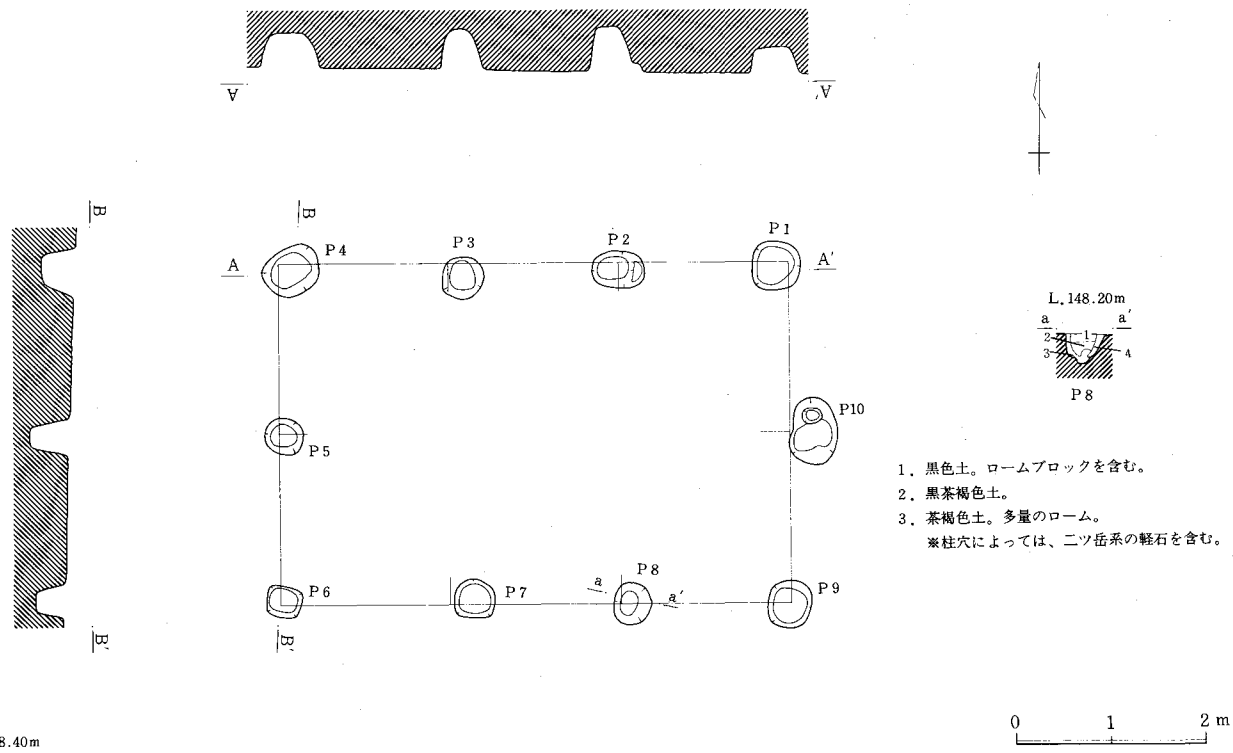
158号掘立柱建物跡（５Ｋ－39）　**位置**　ル５～ヲ５。東と西を南北に走る49･50号溝と48号溝で、北側を東西に走る46号溝で画された区域の、北西隅寄りに所在する掘立柱建物跡群の中の１軒である。　**形状**　南北３間（６m）×東西２間（4.8m）。西辺は２間。柱間の長さは、東辺2.4mと1.8m、西辺３m、南北辺2.4mを基準にしている。長軸方向N－3.5°－E、面積28.8㎡。　**柱穴**　掘り形は円形ないし長円形を呈す。Ｐ２・Ｐ６は下端の形状から見て建て替えの可能性もある。東辺西端のＰ１・Ｐ７の底部には、更にもう一段深さ８～14cmの小ピットがある。Ｐ１・Ｐ７に挟まれたＰ８・Ｐ９は、径30cm前後、深さ16ないし19cmで、他に比べ半分以下の規模である。　（唐澤）



掘立柱建物跡全景（南から）

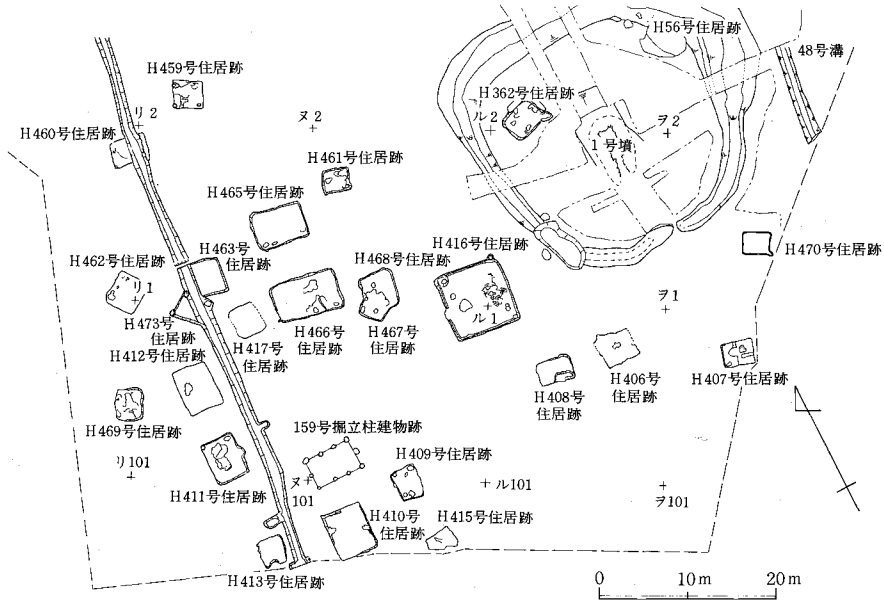
掘立柱建物跡全景（西から）

159号掘立建物跡



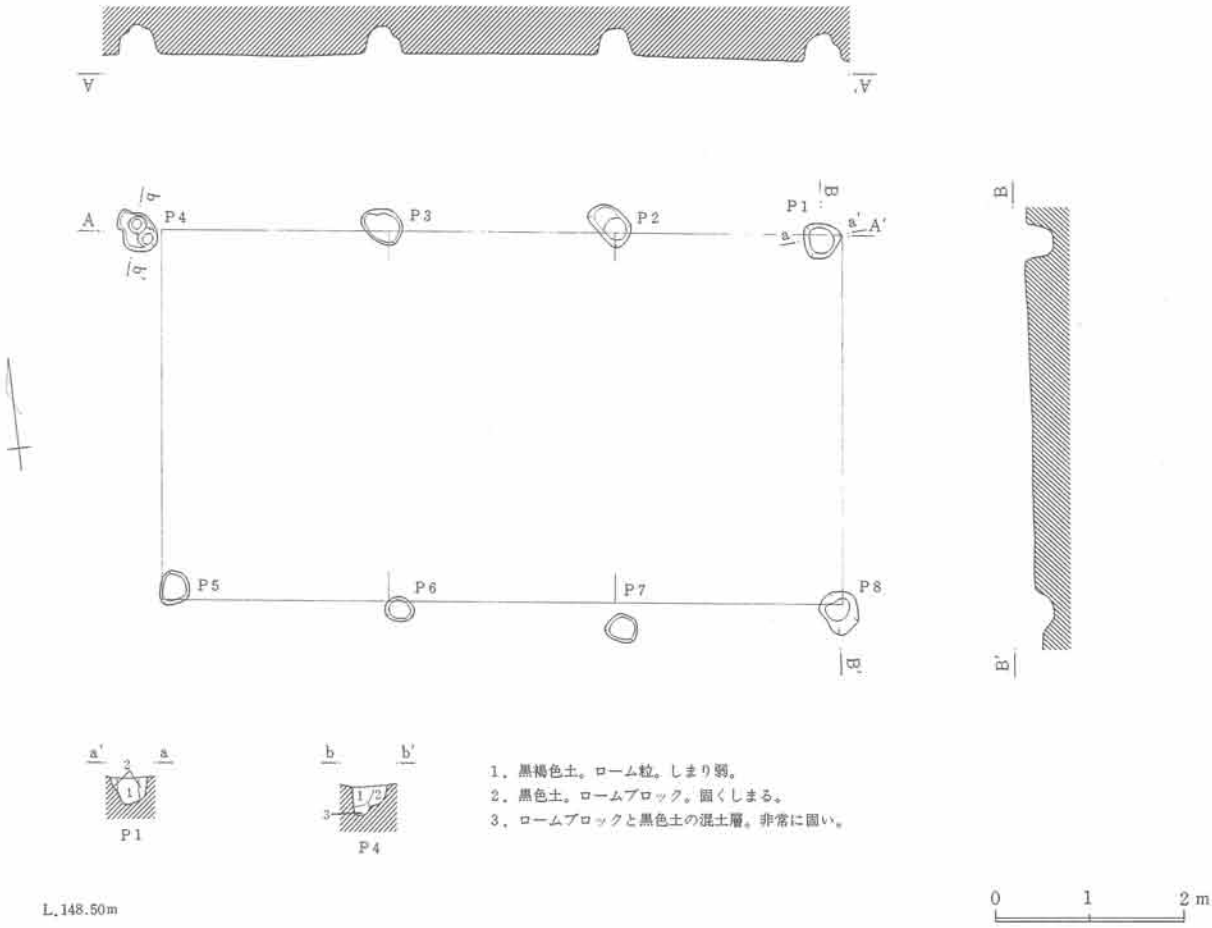
図－392　159号掘立柱建物跡

159号掘立柱建物跡（5K－40）　**位置**　ヌ101～102。1号墳の南西35mに所在する。西に近接して56号溝が南北に走る。この付近は石田川期の住居跡の分布する区域となっており、カマドを持つ住居跡はまったく認められない。ここでは、石田川期住居跡が一定の空間を馬締形に取り囲む形で濃密に分布しており、その囲まれた空間の中に本建物跡は所在する。　**形状**　3間（5.4m）×2間（3.6m）の建物跡で、東西方向に長軸をとる。柱間寸法は1.8mを基準にしているものと見られるが、長軸方向中央の柱間を2.1mに意図したとも考えられる。長軸方向N－89°－E、面積19.4m²。　**柱穴**　全体として円形または長円形の掘り形を持つが、P4、P6は隅丸方形ぎみになっている。深さは26～49cmである。北東隅のP4は、その長軸を建物跡の対角線に直交するように配置しており、他の隅の柱穴の置き方と異なる。P10は底部に凹凸が激しく、荒れている。　（唐澤）



図－393　159号掘立柱建物跡位置図

160号掘立建物跡

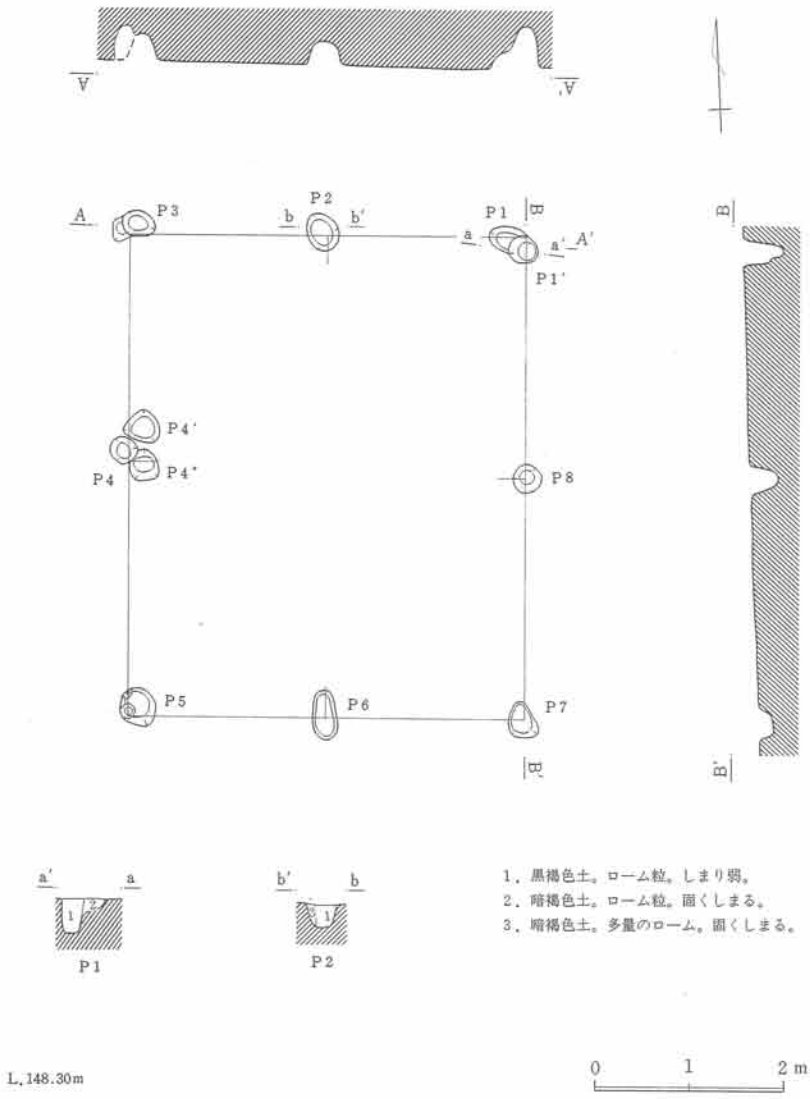


図－394　160号掘立柱建物跡

160号掘立柱建物跡（５Ｋ－41）　**位置**　ワ101。南北に走る48号溝が、上武国道予定地に入る所のすぐ北に位置する。本建物跡を含め、４軒の掘立柱建物跡が一群となって検出された。付近一帯は石田川期住居跡の分布する所となっている。　**形状**　３間（7.2m）×１間（3.9m）の建物跡で、東西方向に長軸をとる。長軸方向の柱間寸法は、2.4mに統一される。長軸方向Ｎ－97°－Ｅ、面積28.1㎡。　**柱穴**　円形の掘り形で、径40～50cm、深さ15～32cm。北西隅のＰ４は建て替えと見られる。柱の径はＰ１、Ｐ４の柱痕跡によると20cm程度である。　**その他**　西に近接する161号建物跡との距離は１m。覆土中に、浅間山と榛名山噴出にかかるＣ軽石及び二ツ岳系の軽石は認められなかった。　（唐澤）

掘立柱建物跡全景（西から）

P_4全景（北から）

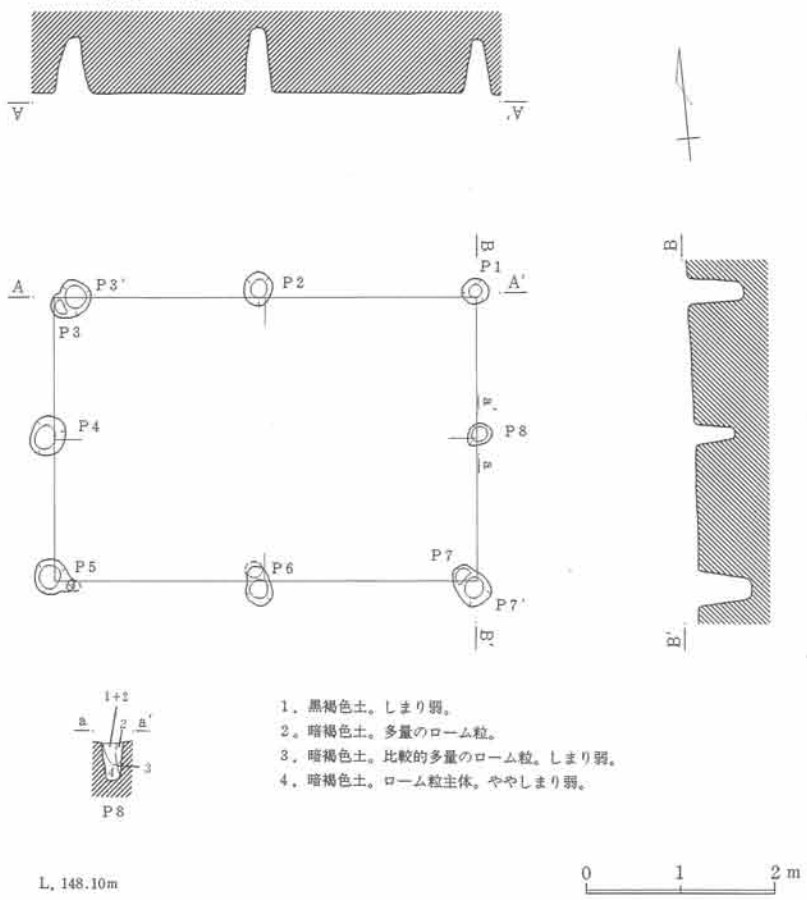


図－395　161号掘立柱建物跡

161号掘立柱建物跡（5K－42）　**位置**　ワ101。160号建物跡の西1mに所在する。付近一帯は、石田川期の住居跡の分布地で、この付近から本台地の南側に分布の中心がある。本建物跡の西半に重なって、48号溝が南北に走る。　**形状**　2間（5.1m）×2間（4.2m）の建物跡で、南北方向に長軸を取る。柱間寸法は長軸方向で2.4+2.7m、短軸方向では2.1+2.1mを意図したものと見られる。西辺中央のP4はその後2度程建て替えられており、その際に柱間寸法は当初の2.4+2.7mから、2.1+3m（P4′）あるいは2.55+2.55m（P4″）に変化したものと見られる。長軸方向N－3°－E、面積21.4㎡。　**柱穴**　円形ないし長円形の掘り形を呈する。径は30～40前後、深さ14～38cmである。P1及びP4には建て替えが認められる。P6もあるいは建て替えか。P2の地層断面には柱痕跡が認められ、径は18～20cmであった。　**重複関係**　本建物跡の西半で、南北に走る48号溝と重複するが、新旧関係は不明である。南に近接する162号建物跡とはほぼ接しており、同時に存在することは不可能である。　**その他**　柱穴覆土中には、浅間山及び榛名山墳出にかかるC軽石と二ツ岳系の軽石を含まない。

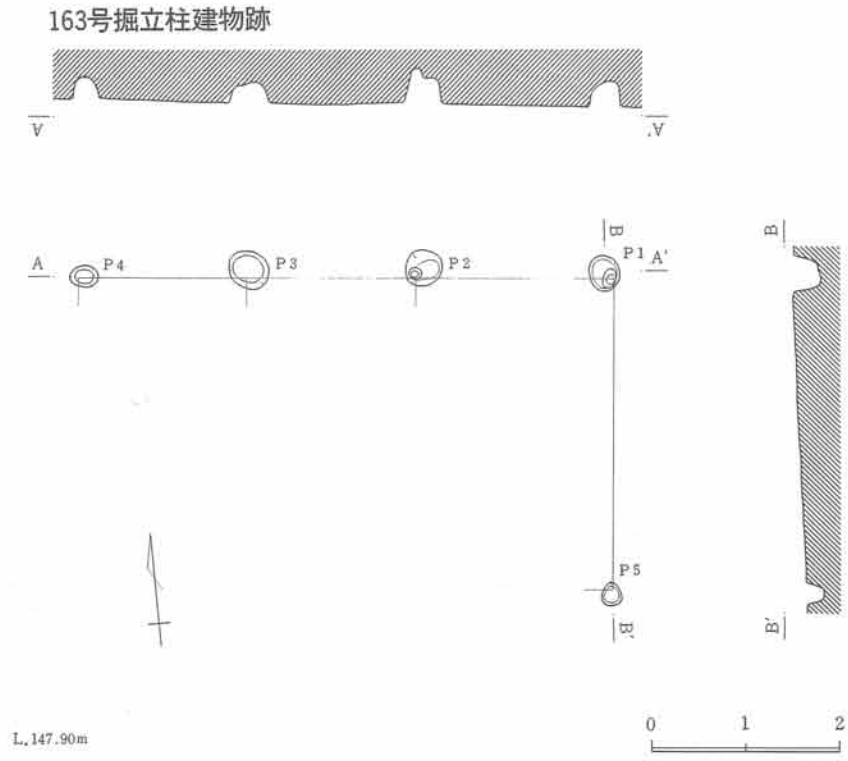
（唐澤）

掘立柱建物跡全景（西から）

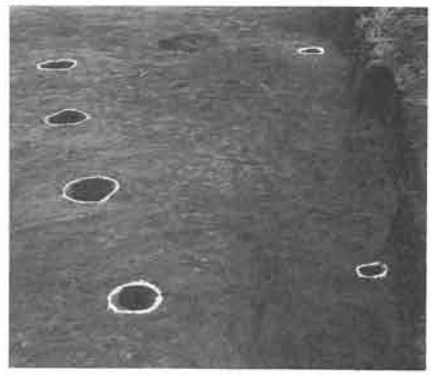


図－396　162号掘立柱建物跡

162号掘立柱建物跡（5K－43）　**位置**　ワ101。161号建物跡に接してその南に位置する。群在する4棟の掘立柱建物跡は、6m程の空間を挟んで北に3軒、南に1棟と分かれているように分布する。本建物跡は160・161号建物跡と共に、北の3軒の中に含まれる。**形状**　2間（4.5m）×2間（3m）の長方形の建物跡で、東西方向に長軸をとる。柱間の寸法は、長軸方向を2.25m、短軸方向で1.5mに統一している。長軸方向N－96°－E、面積13.5m²。**柱穴**　いずれも円形の掘り形で、径30～40cm前後、深さ26～71cmである。P3・P7には建て替えが認められる。P5・P6の側壁には、斜め方向のピットが認められた。P5・P6との関係は不明である。**その他**　北の161号建物跡と接しており、同時に建物が存在することは不可能である。柱穴覆土中には、浅間山及び榛名山噴出にかかる、C軽石と二ツ岳系の軽石は含まれていなかった。（唐澤）



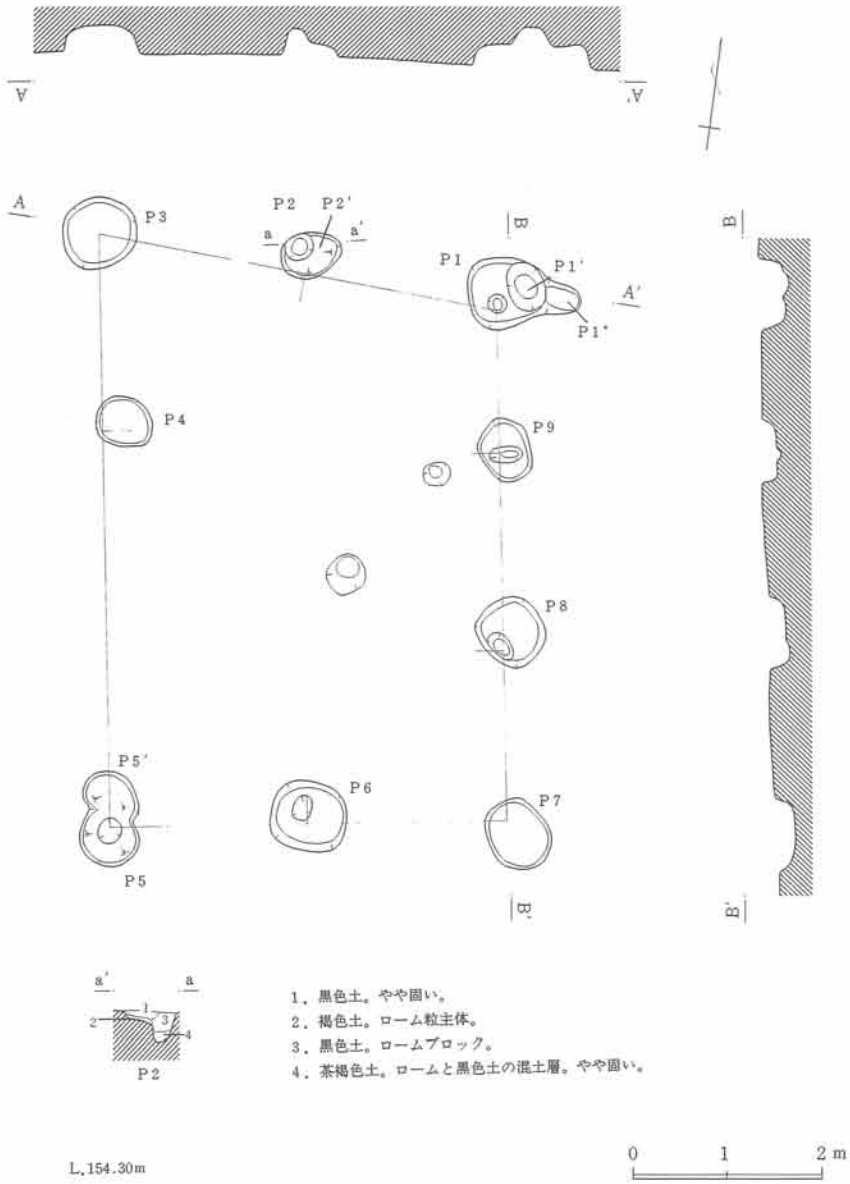
図－397　163号掘立柱建物跡



掘立柱建物跡全景（西から、手前右の柱穴は疑問）

163号掘立柱建物跡（5K－44）　**位置**　ワ102。4軒の掘立柱建物跡群のうち、最南端に所在するものである。南半は上武国道予定地にかかるため未調査である。　**形状**　東西3間（5.7m）、南北1間（3.3m）以上の建物跡である。北に隣接する3軒の建物跡の短辺長は3～4.2mであり、本建物跡の南北長がその範囲内のものであるとすれば、南北長は1間（3.3m）になる。長軸方向の柱間寸法は2.1＋1.8＋1.8mである。長軸方向N－96°－E、面積18.8m²。**柱穴**　円形の掘り形。径30～40cm、深さ21～39cm。**重複関係**　45号溝と重複。新旧は不明。（唐澤）

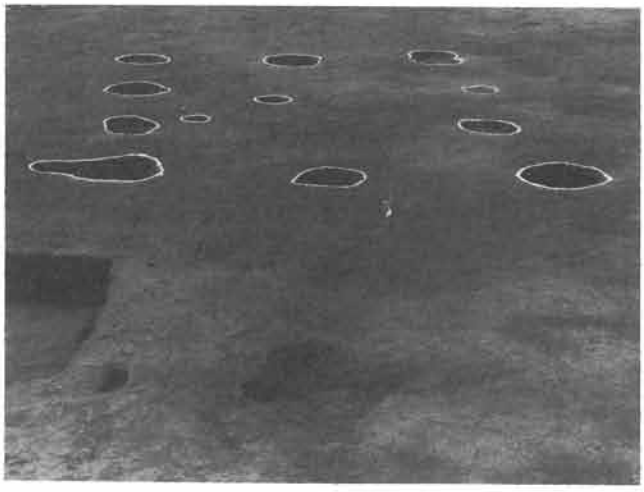
図－396 掘立柱建物跡配置図(2)



図－399　164号掘立柱建物跡

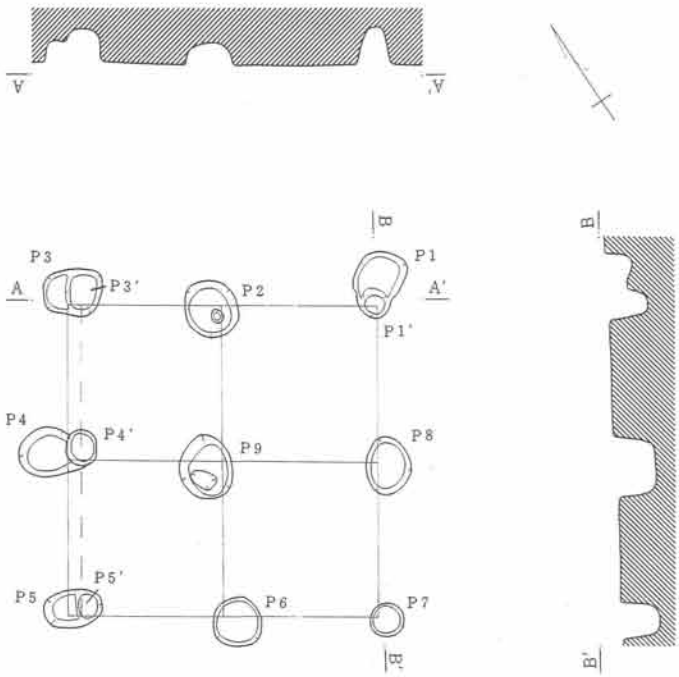
164号掘立柱建物跡（５Ｋ－45）　**位置**　ヲ８に所在し、ゆるやかな南斜面の高台に立地している。　**形状**　東辺３間（5.4m）、西辺２間（6.3m）、南辺２間（4.2m）、北辺２間（約4.3m）の台形を呈す。長軸方向はＮ－8.5°－Ｗ、面積は24.5㎡である。　**柱穴**　掘り形は大部分が円形で、Ｐ６・８・９のように若干角ばっているものもある。規模はＰ２の径48×48cmからＰ３の径80×74cm、深さＰ４の13cmからＰ１の40cmにわたる。底面標高はＰ５の153.56mからＰ９の153.92mである。Ｐ１は３回建て替えの痕跡があり、Ｐ２・５は２回の建て替えの痕跡がある。Ｐ２には地層断面図に柱痕跡が認められ、径は20cm以下と見られる。　**遺物**　本遺構に関係する遺物の出土はみられなかった。

（近藤）

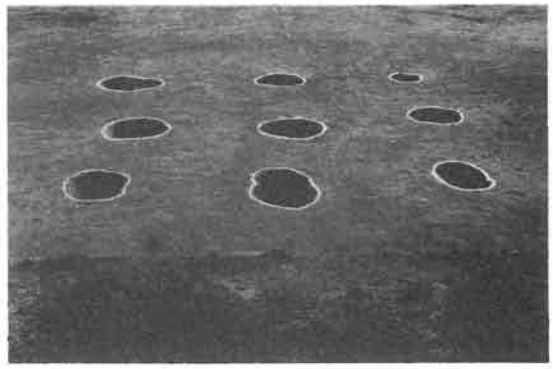


掘立柱建物跡全景（北から）

165号掘立柱建物跡



図－400　165掘立柱建物跡

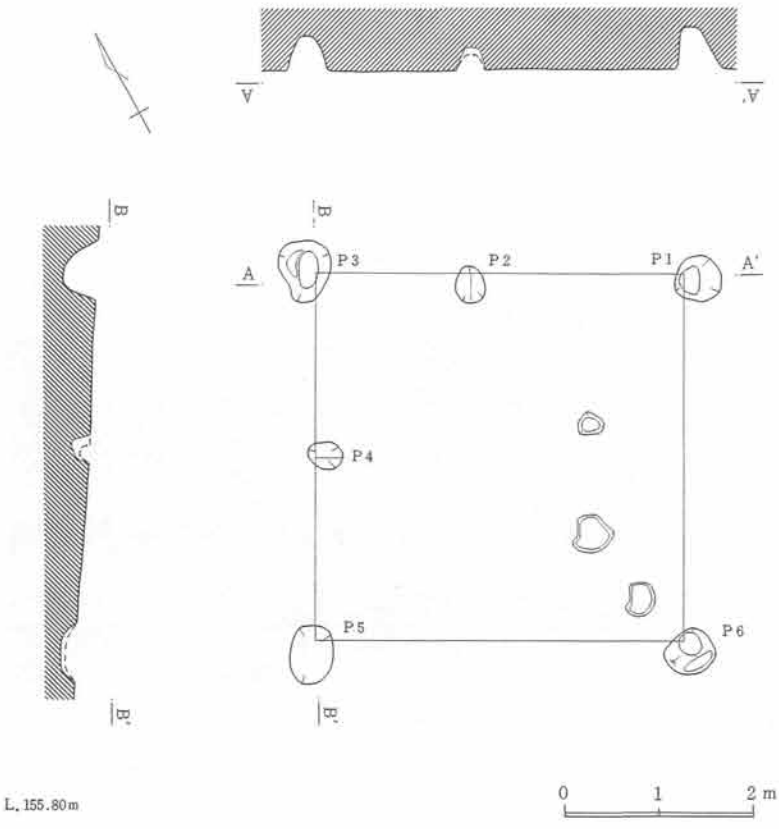


掘立柱建物跡全景（西から）

165号掘立柱建物跡（５Ｋ－46）　**位置**　ル９～10にあり、道路の西側の南斜面上に位置している。南にH290号住居跡がある。　**形状**　２間（3.3m）×２間（3.3m）の正方形、総柱建物跡である。東西については、南側がやや広くなっている。総柱の中心の柱は、建物の中心点より、南西方向に約30cmずれている。南北方向はＮ－37°－Ｅ、面積は10.9㎡である。西側のピット３・４・５に接して、Ｐ３′・４′・５′の柱穴列が３個あるが、建て替えによるものと思われる。この建て替えの結果、東西行は0.5尺分（15cm）せばまる。面積は10.4㎡である。　**柱穴**　掘り形は全体として円形を呈し、径30～60cm前後、深さ20～40cm前後である。　**重複関係**　本遺構には重複関係はないが、柱の建て替えによるものと見られるピットがＰ３、４、５に隣接して存在している（Ｐ３′・４′、５′）。なおＰ１にも建て替えの痕跡が認められる。　**遺物**　遺物の出土はなかった。

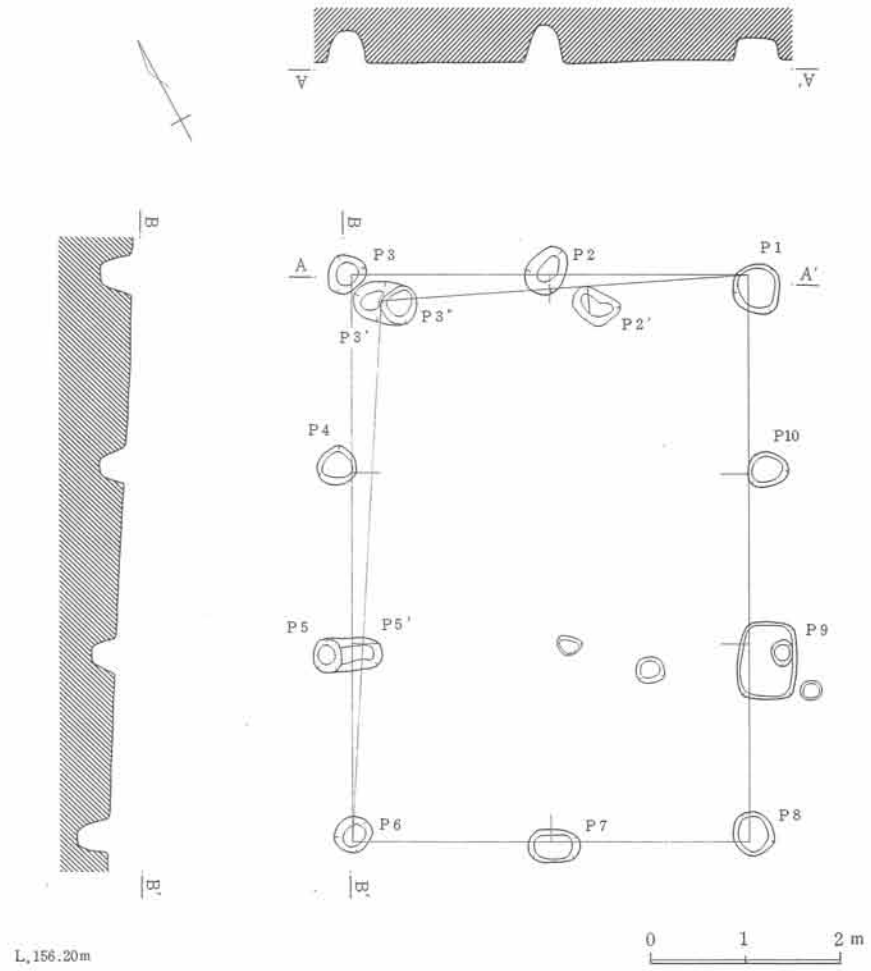
（鵜木）

166号掘立柱建物跡



図－401　166号掘立柱建物跡

166号掘立柱建物跡（５Ｋ－47）　**位置**　ル９～10とヲ９～10にまたがって所在する。全体として緩やかに南に下っている台地上に立地している。　**形状**　北側柱穴列、西側柱穴列が２間、南側柱穴列、東側柱穴列が１間の１辺3.9mの正方形を呈する。主軸方向（南北方向）はＮ－29°－Ｅ、面積は15.2㎡である。Ｐ４は西側柱穴列の中央に位置するが、Ｐ２はＰ３に寄っている。　**柱穴**　掘り形は円形もしくは長円形で、四隅の柱穴は断面が皿形をして浅いＰ５を除いて、径50～60cm前後、深さ40cm前後である。Ｐ３とＰ６は建て替えか。Ｐ２とＰ４はそれぞれ北側柱穴列と西側柱穴列の中間に位置し、径30～40cm、深さ15cm前後の他に比べ小さく浅い。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（松村）



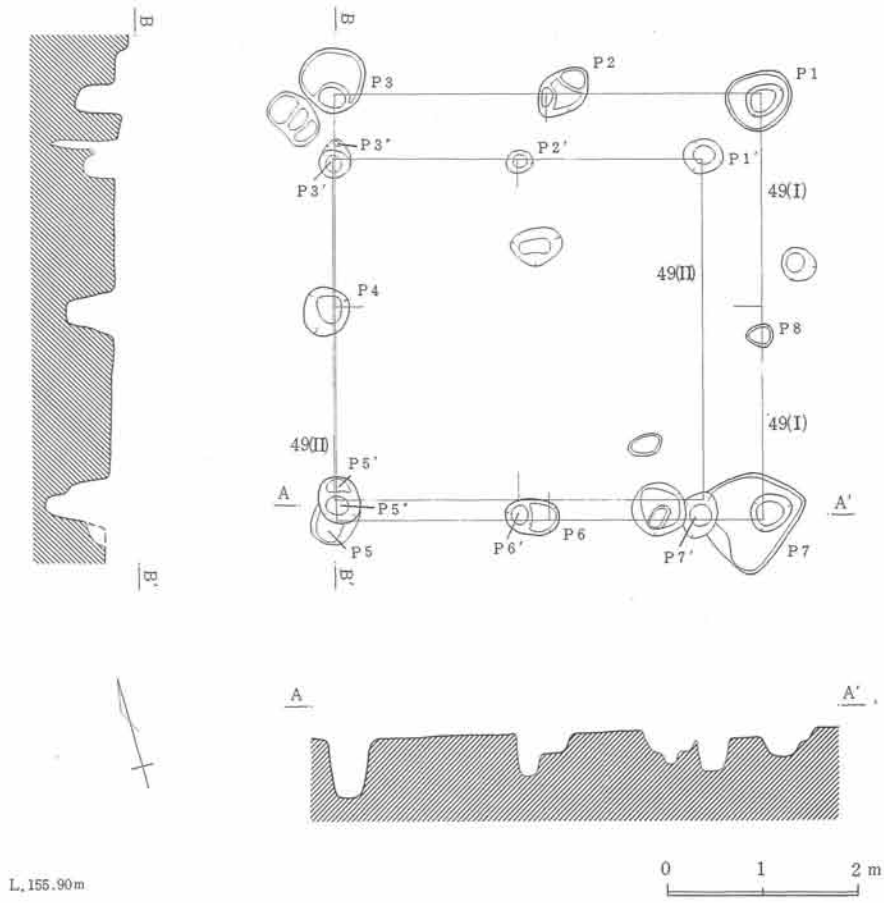
図－402　167号掘立柱建物跡

167号掘立柱建物跡（5 K－48）　**位置**　ル10に所在し、南斜面の高台に立地している。164号建物跡から175号建物跡まで四囲を溝に囲まれた掘立柱建物跡群の中で最北端に位置している。　**形状**　南北３間（６m）×東西２間（4.2m）の建物跡で、長方形を呈する。南北に長軸をとり、主軸方向はN－29°－E、面積は25.2㎡である。　**柱穴**　掘り形は大部分が円形で、一部隅丸長方形（Ｐ７、Ｐ９）を呈する。柱穴の規模はＰ５の径36×30cmからＰ９の径82×64cm、深さＰ８の21cmからＰ９の44cmにわたる。底面標高はＰ６の155.52mからＰ１の155.86mである。Ｐ２、Ｐ３、Ｐ５は建て替えがみられ、その結果、形状は不整四角形となる。建て替え後の面積は23.7㎡である。Ｐ９の地層断面図には柱痕跡が認められ、径は12～14cmと見られる。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（近藤）

掘立柱建物跡全景（北から）

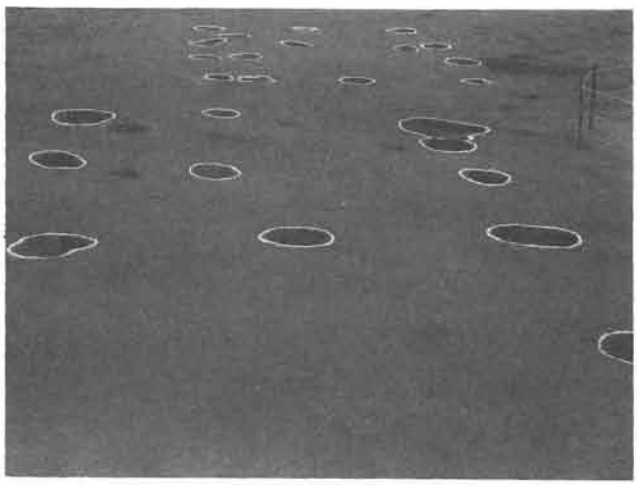
P_5・P'_5全景（南から）

168号掘立柱建物跡

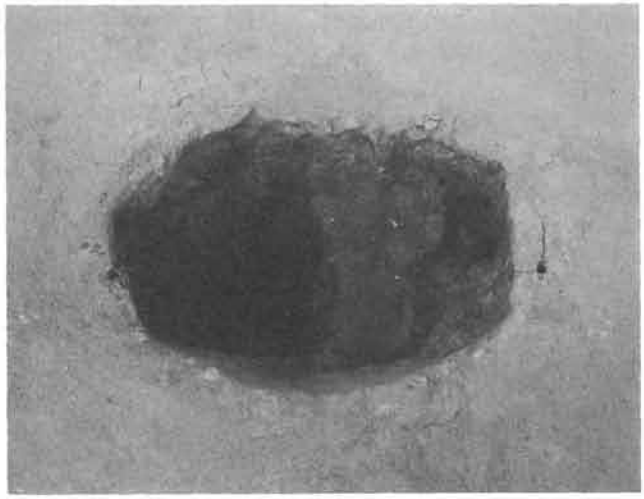


図－403　168号掘立柱建物跡

168号掘立柱建物跡（5K－49）　**位置**　ヲ10にあり、道路の西側、南斜面上に立地している。東に接して3間×2間の169号建物跡、西に接して2間×1間の166号建物跡がある。　**形状**　168－Ⅰ号建物跡は2間（4.5m）×2間（4.5m）の正方形で、南北方向はN－15°－E、面積は20.3㎡である。168－Ⅱ号建物跡は2間（3.9m）×1間（3.6m）の正方形で、主軸方向はN－10.5°－E、面積は14.05㎡である。すべての柱穴を、新しく建て替えている。**柱穴**　掘り形は全体として円形を呈するものが多く、径30～50cm前後、深さ30～50cm前後のものが多い。Ⅱ号の掘り形は円形で、径20～40cm前後、深さ30～50cm前後である。P1、P3、P5、P7には柱痕跡が認められ、径は10cm前後である。　**重複関係**　建て替えによると思われる遺構168－Ⅱ号建物跡（本遺構は168－Ⅰ号建物跡）がある。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

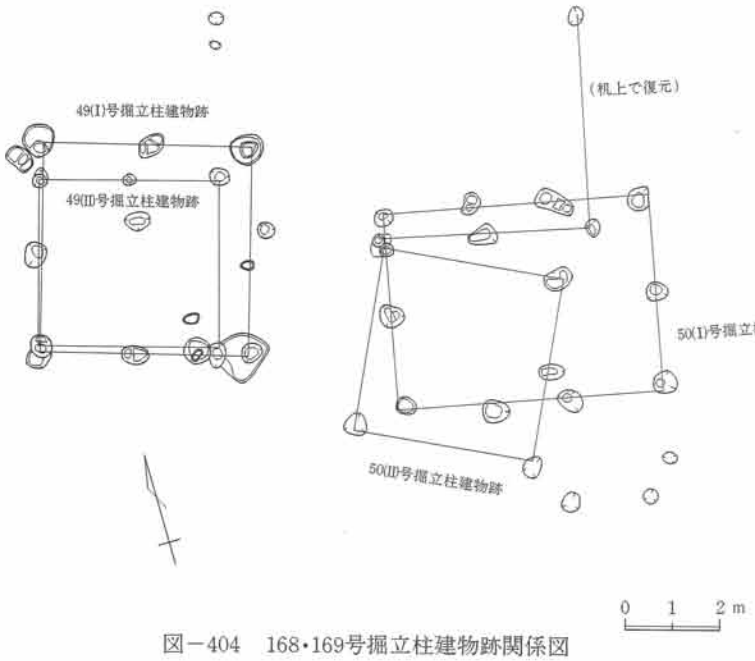


掘立柱建物跡全景（西から、中央の柱は疑問）



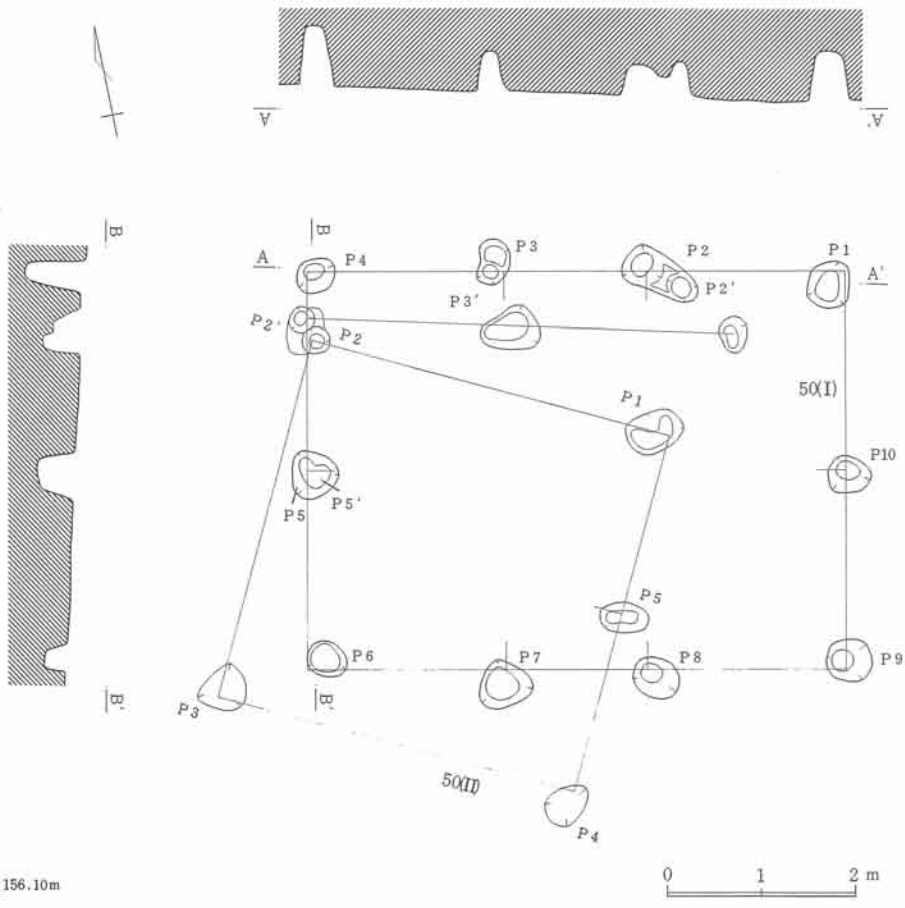
P_6・P'_6全景（南から）

169号掘立柱建物跡



図－404　168・169号掘立柱建物跡関係図

掘立柱建物跡全景（169・Ⅰ、西から）



P_2全景（北から）

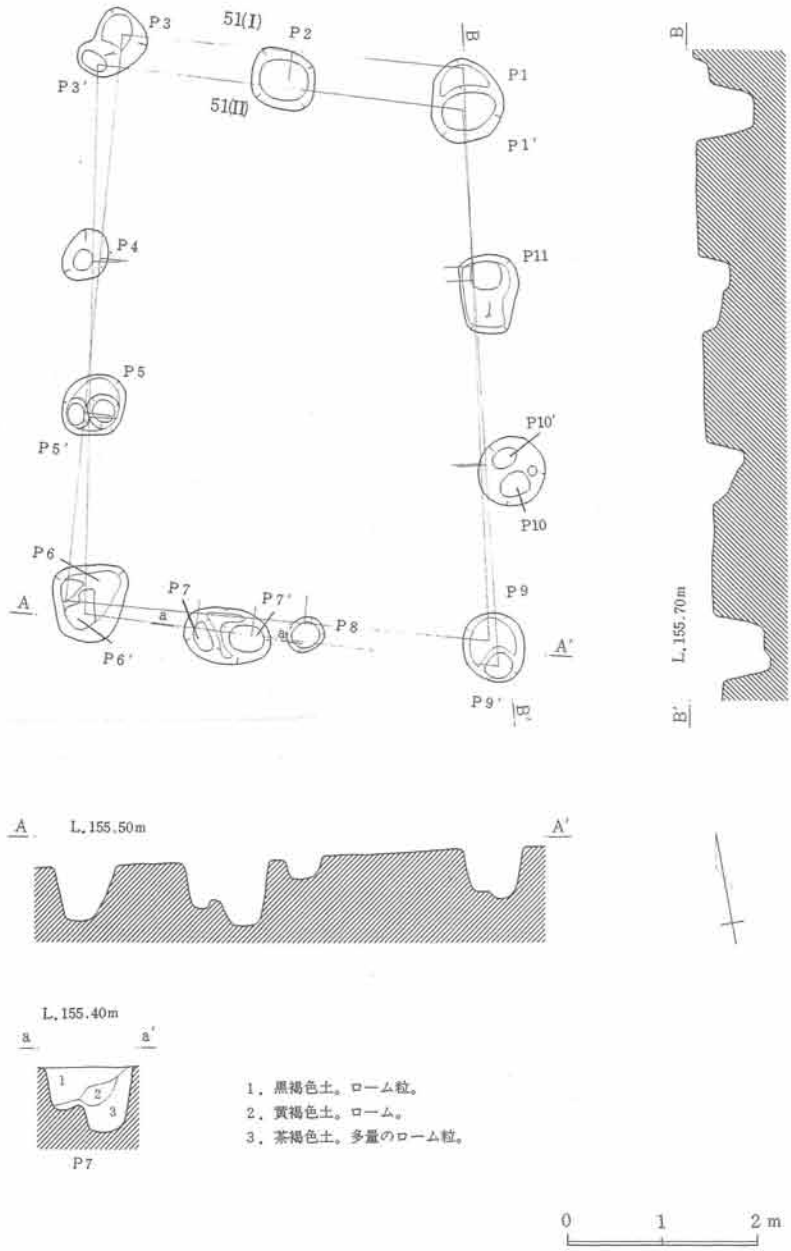
P_5全景

図－405　169号(I)(II)掘立柱建物跡

169号掘立柱建物跡（5K－50）　**位置**　ヲ10にあり、道路西側の平坦地に立地している。西に接して168号建物跡がある。　**形状**　169－Ⅰ号建物跡は3間（5.7m）×2間（4.2m）の長方形で、東西方向に長軸をとる。長軸方向はN－101°－E、面積は23.9㎡である。柱間寸法は東西2.1＋1.5＋2.1m、南北2.1＋2.1mである。169－Ⅱ号建物跡は、一間（3.9m）×2間（3.9m）の正方形で、主軸方向（南北方向）はN－26°－E、面積は15.2㎡である。　**柱穴**　Ⅰ号の掘り形は全体に円形を呈し、径30～60cm前後、深さ40～60cm前後である。柱穴の底は、大部分U字状を呈する。Ⅱ号の柱穴とみれるピットはP1、P2、P5が確認出来るが、P3、P4の存在は、全体図や航空写真から推定されたものである。**重複関係**　Ⅰ・Ⅱ号は建て替え関係ともみられる。新旧関係は不明である。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。

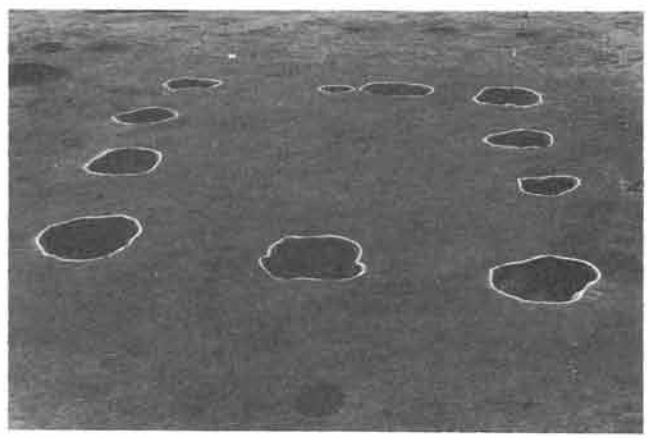
（鵜木）

170号掘立柱建物跡

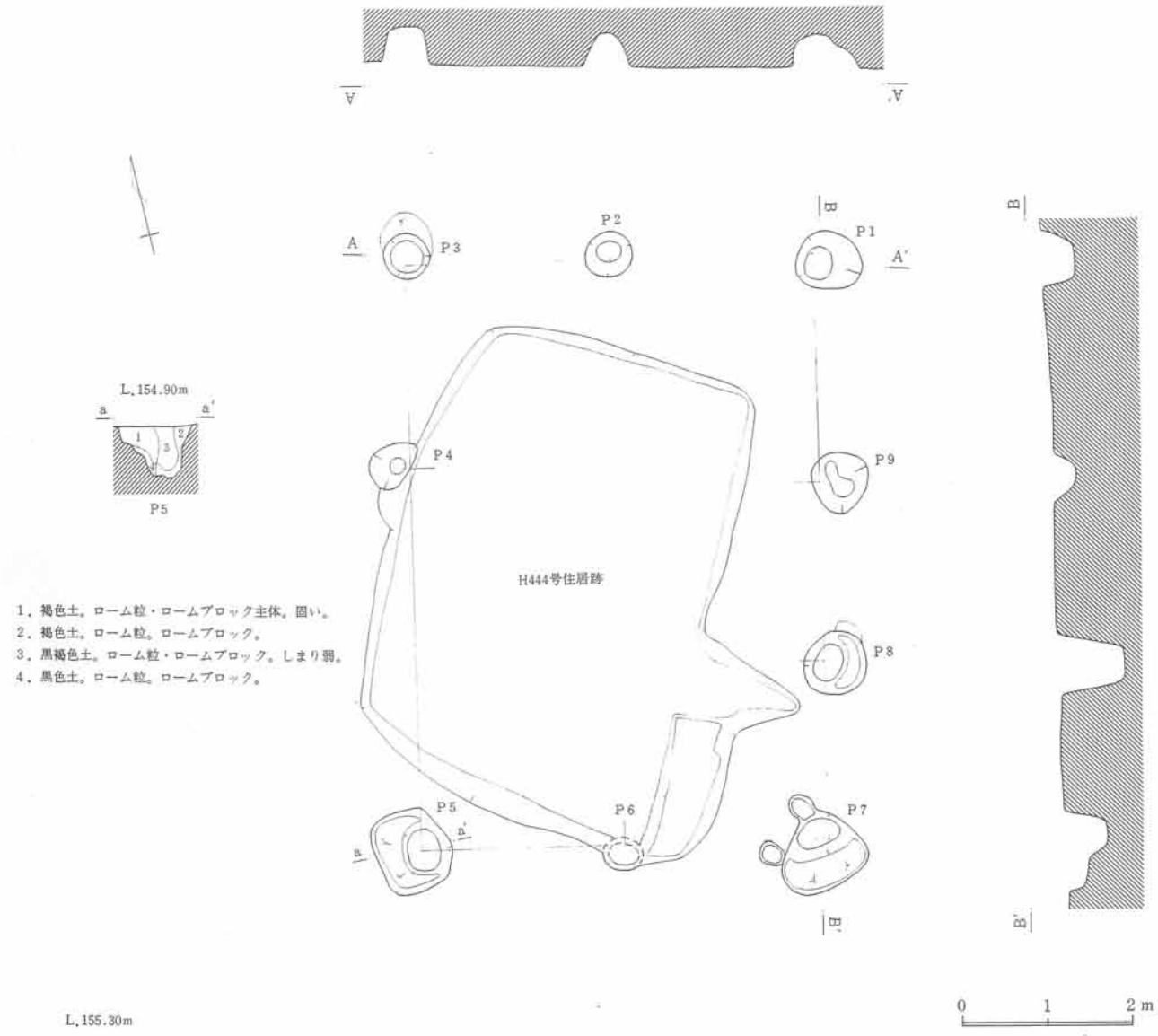


図－406　170号掘立柱建物跡

170号掘立柱建物跡（5K－51）　**位置**　ヲ9～ワ9にあり、道路西側の平坦地に立地している。西に接してH445号住居跡、171号建物跡がある。　**形状**　3間（6m）×2間（北側3.6m、南側4.5m）の台形で南北方向に長軸をとる。長軸方向はN－15.5°－E、面積は24.3㎡である。（I）　**柱穴**　掘り形は全体として円形ないし長円形を呈し、径40～60cm前後、深さ30～50cm前後である。　**重複関係**　本遺構は建て替え（II）によると思われる柱穴の重複関係が見られる。建てかえと見られるピットは、P1′・3′・5′・6′・7′・9′である。建てかえは、建てかえ前とほぼ同形・同規模で、長軸方向はN－16.5°－E、面積は24.3㎡である。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

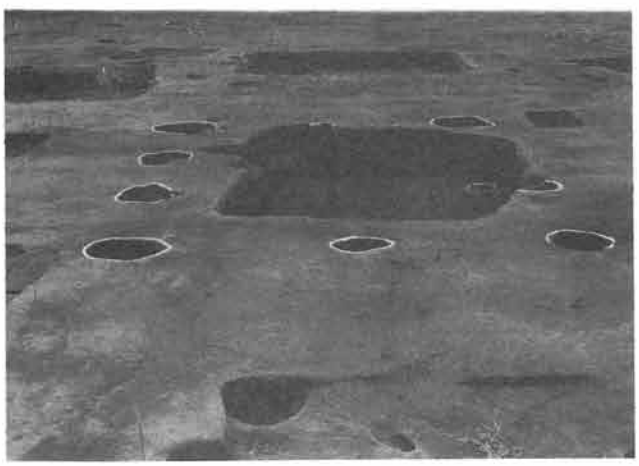


掘立柱建物跡全景（北から）

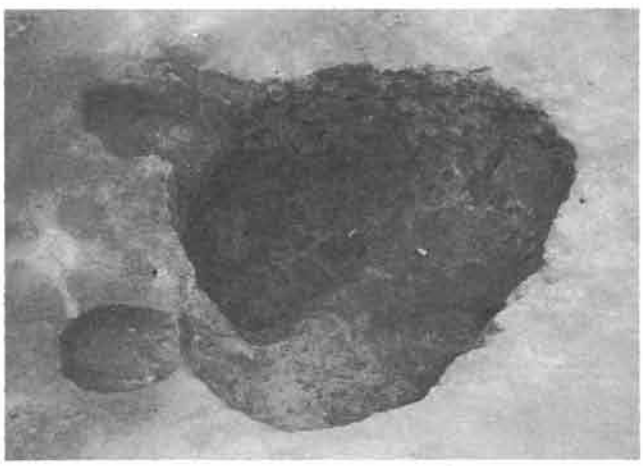


図－407　171号掘立柱建物跡

171号掘立柱建物跡（5 K—52）　**位置**　ヲ9に所在し、南斜面の高台に立地している。重複している遺構にH444号住居跡がある。　**形状**　南北3間（6.9m）×東西2間（4.8m）の建物跡で、長方形を呈し、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN—12.5°—E、面積は33.12㎡である。　**柱穴**　掘り形は全体として長円形を呈するものが多い。規模はP6の径46×20cmからP7の径102×86cm、深さP4の26cmからP8の77cmにわたる。底面標高はP5の154.19mからP1の154.72mである。P5には地層断面図に柱痕跡が認められ、径は26cm前後と見られる。　**重複関係**　住居跡との新旧関係は不明である。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（近藤）

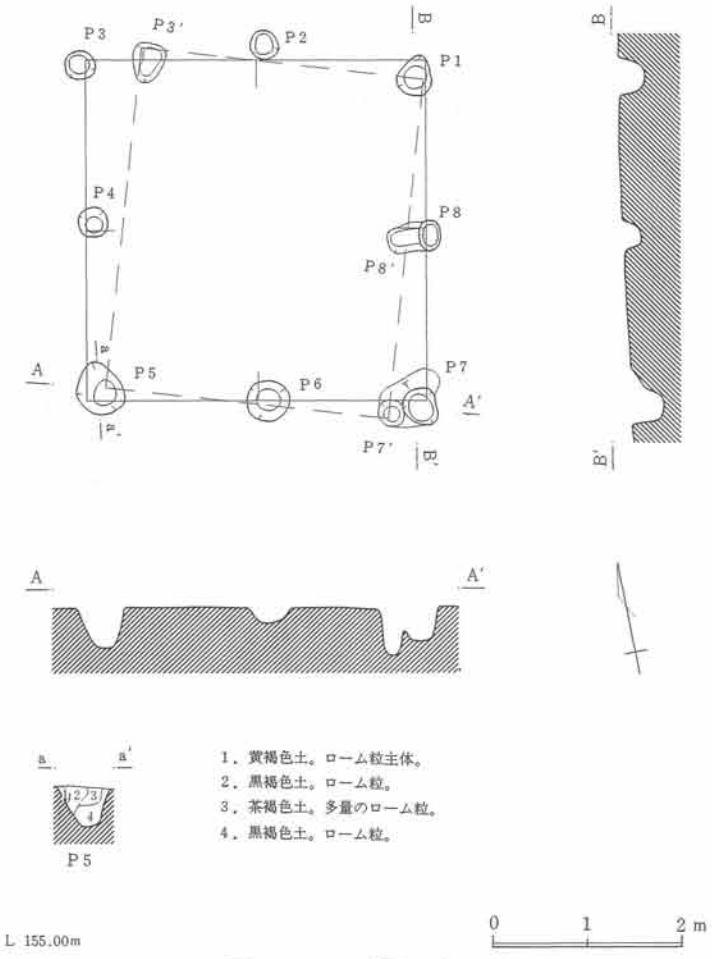


掘立柱建物跡全景（北から）



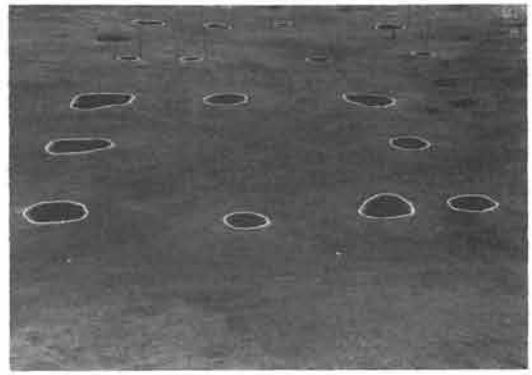
P_5（西から）

172号掘立建物跡



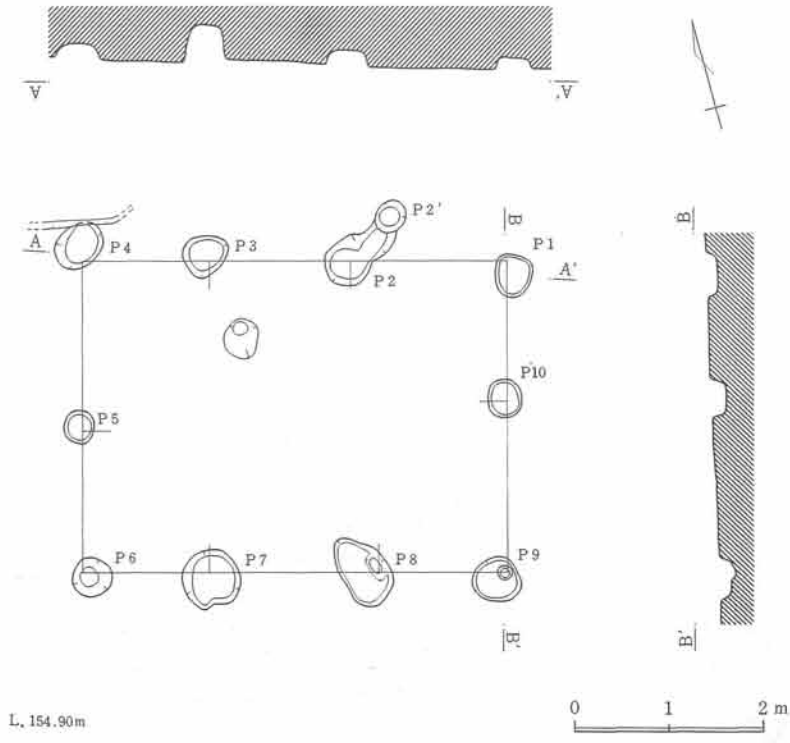
図－408　172号掘立柱建物跡

172号掘立柱建物跡（5K－53）　**位置**　ヲ9に所在する。　**形状**　建て替えとみられる重複を示す。Ⅰは2間（3.6m）×2間（3.6m）の正方形で、面積12.96㎡、長軸方向N－11.5°－Eである。Ⅱは2間（3.6m）×1間（3m）の長方形で、面積10.8㎡、長軸方向N－18°－Eである。**柱穴**　掘り形は全体として、円形ないし長円形を呈し、径30～50cm、深さ18～50cm前後である。Ⅰでみると、間に挟まれる柱穴は、四隅のものより一まわり径の小さい傾向がある。(Ⅰ)　**重複関係**　本遺構は建て替えによると思われる柱穴(柱もか)の再利用が考えられるのは、P1・P5である。建て替えによると思われる柱穴はP3′・P7′・P8′である。(Ⅱ)　**遺物**　関連す遺る物の出土はなかった。　（鵜木）



掘立柱建物跡全景（Ⅰ・Ⅱ、北から）

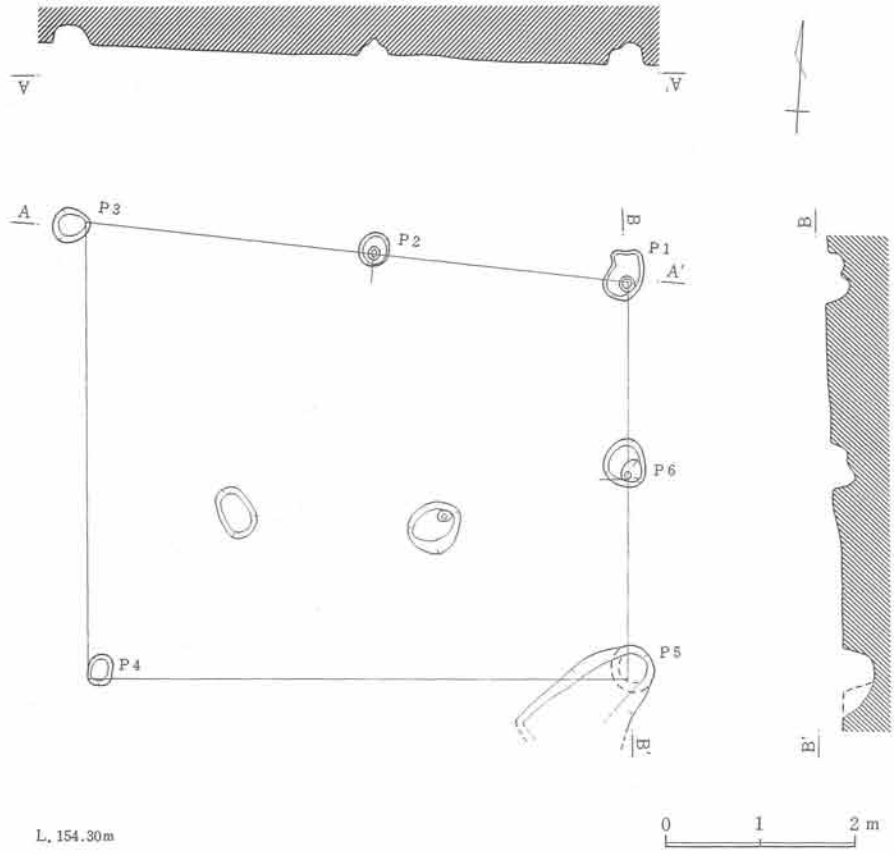
174号掘立建物跡



図－409　174号掘立柱建物跡

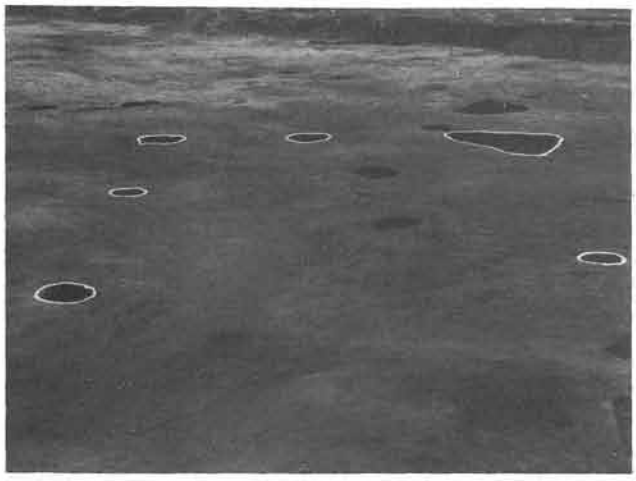
174号掘立柱建物跡（5K－55）　**位置**　ワ8にあり、道路西側の平坦地に立地している。西に接して、H453号住居跡、北西に接してH143号住居跡がある。　**形状**　3間（4.5m）×2間（3.3m）の長方形で、東西方向に長軸をとる。長軸方向はN－105°－E、面積は14.95㎡である。柱間寸法は東西1.35＋1.5＋1.65m(北側)、1.35＋1.8＋1.35m(南側)、南北1.8＋1.5mである。南北柱の東辺と西辺は、お互いに向かい合っている所の柱間間隔を変えている。　**柱穴**　掘り形は全体に円形を呈し、径30～60cm前後、深さ20～40cm前後である。柱穴の底についても、大部分はU字状を呈するか、平坦になっている。P2には2～3回の建て替えの痕が認められる。また、P8にも図では不分明であるが、2～3回ほどの建て替えの痕跡が認められる。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

175号掘立建物跡



図－410　175号掘立柱建物跡

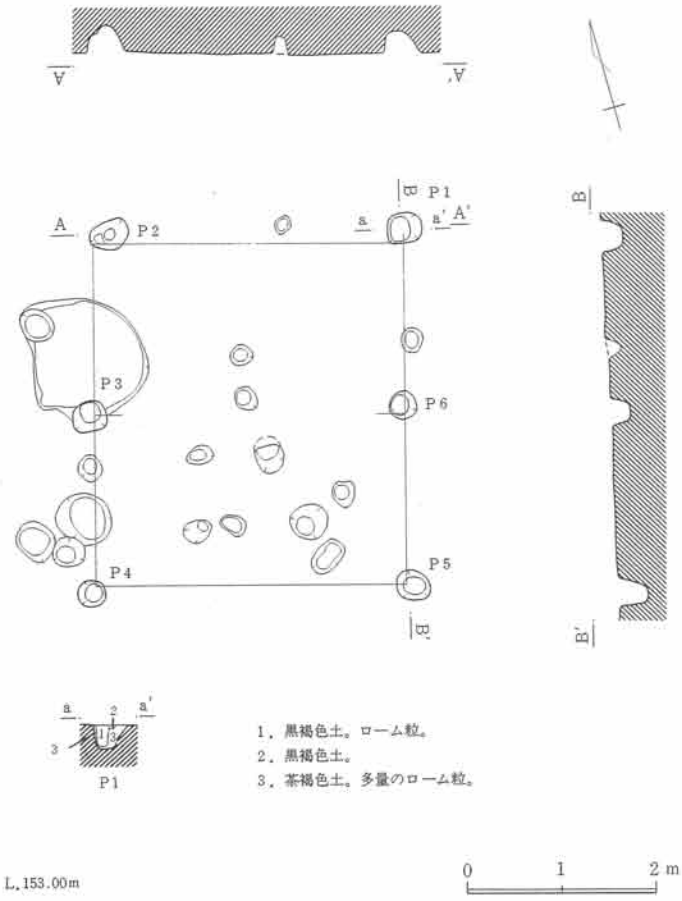
175号掘立柱建物跡（5K－56）　**位置**　ヲ8～ワ8に所在し、南斜面の高台に立地している。　**形状**　北辺2間（約5.7m）、南辺1間（5.7m）、西辺1間（4.8m）、東辺2間（4.2m）の台形を呈し、東西方行に長軸をとる。長軸方向はN－86.5°－E、面積は25.65m²である。　**柱穴**　掘り形は全体として円形を呈するものが多い。規模はP4の径32×26cmからP1の径53×38cm、P4の深さ11cmからP5の深さ32cmにわたる。底面標高はP5の153.73mからP1の153.95mである。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（近藤）



掘立柱建物跡全景（西から）

P_1全景（北から）

176号掘立建物跡



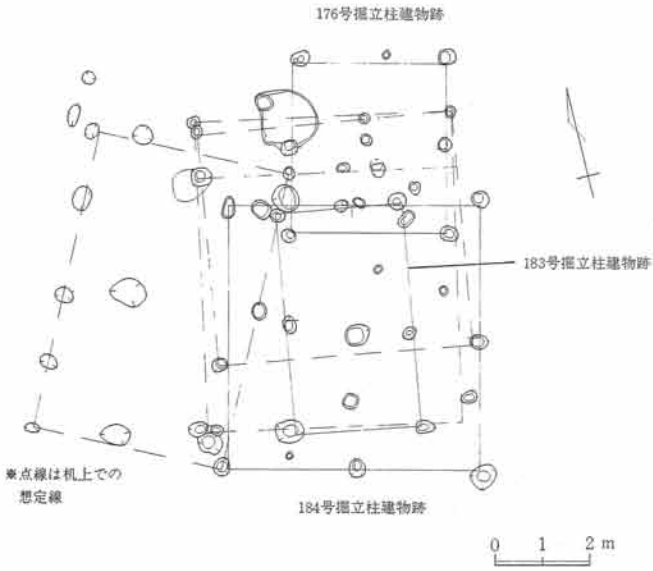
図－411　176号掘立柱建物跡

掘立柱建物跡全景（西から、P_3位置ずれる）

P_2全景（北から）

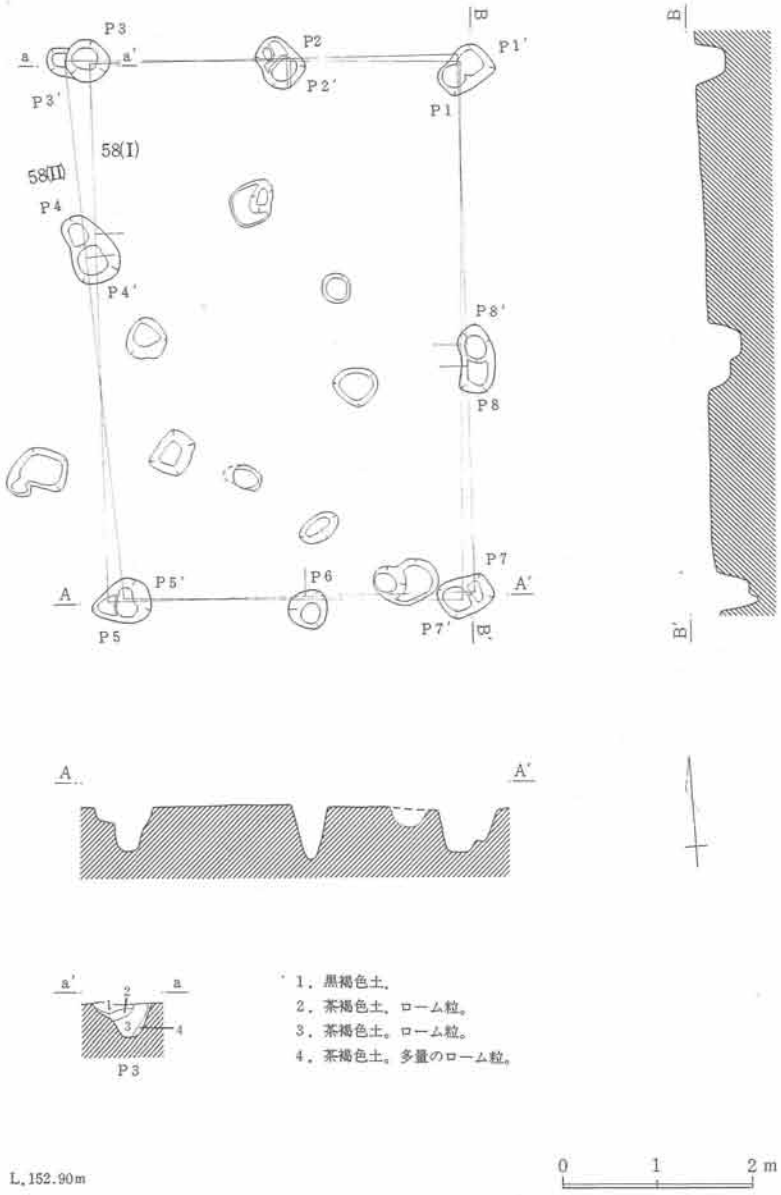
176号掘立柱建物跡（5K－57）　**位置**　ヲ6～7にあり、道路西側の平坦地の中央部に立地している。西に接して、177号建物跡がある。　**形状**　2間(3.6m)×1間(3.3m)の長方形で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN－14.5°－E、面積は11.8㎡である。柱間寸法は南北1.8＋1.8m、東西3.3mである。　**柱穴**　本遺構を構成すると思われるピットは、合計6穴を数える。掘り形は全体として円形を呈する。径30～40cm前後、深さ20～40cm前後である。柱穴の底については、大部分がU字状を呈する。ただし、P2においては、建て替えた可能性がある。本掘立柱建物跡の範囲内には数穴のピットがあるが、本遺構との直接の関係は認め難い。　**重複関係**　本遺構と183号建物跡、184号建物跡の三軒の掘立柱建物跡が重複する。183号建物跡は184号建物跡の中にすっぽりと包み込まれるように入っており、176号建物跡の南側部分が、それぞれ上記の2住居跡の北側部分と交錯する。3遺構の新旧関係は不明である。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。

（鵜木）



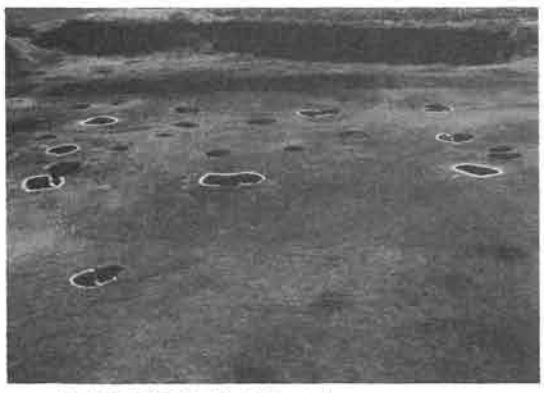
図－412　176・183・184号掘立柱建物跡関係図

176・183・194号掘立柱建物跡重複状況（西から）



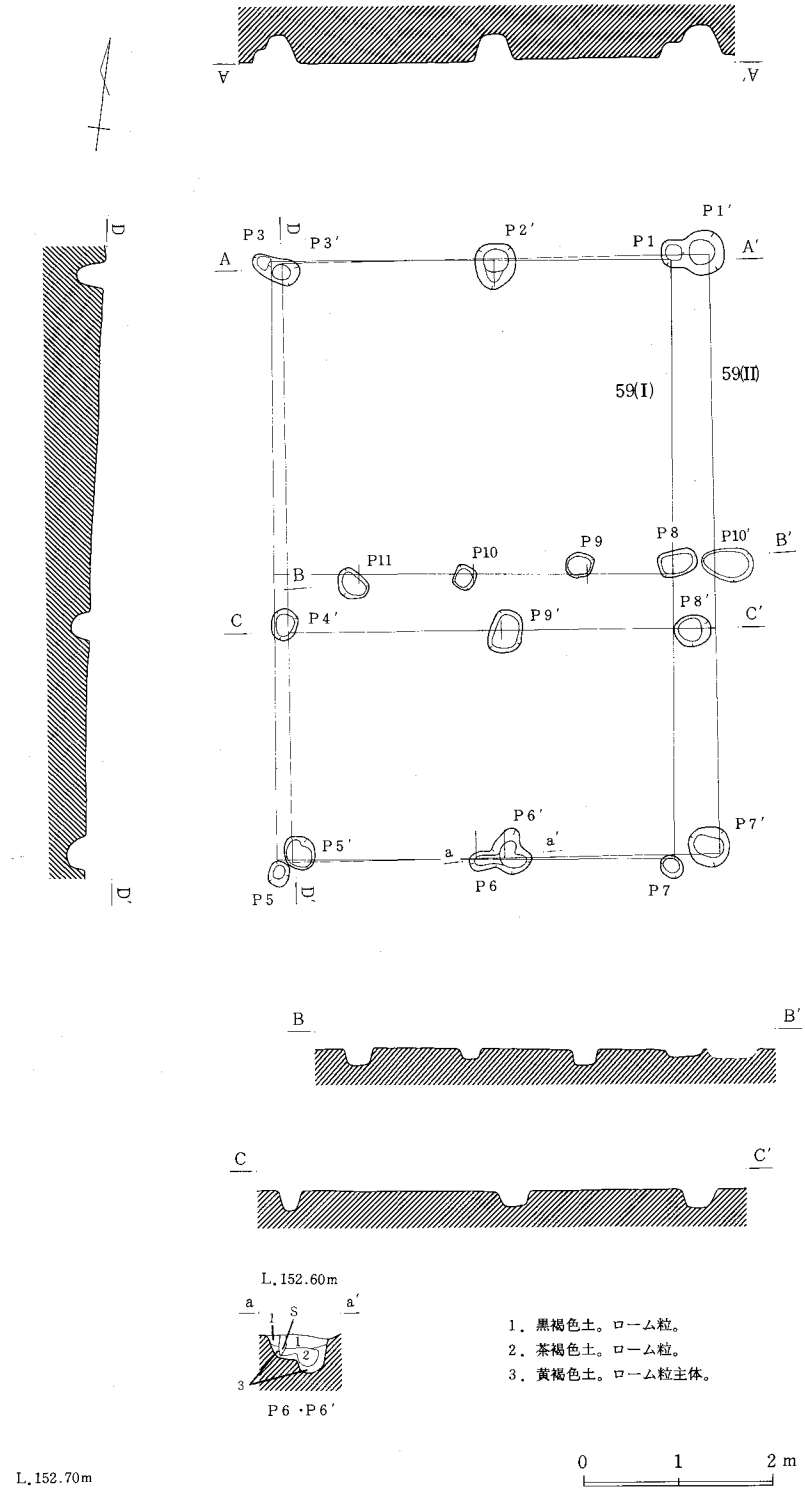
図－413　177号掘立柱建物跡

177号掘立柱建物跡（5K—58）　**位置**　ル6にあり、道路西側の平担地に立地している。北西に接して178号建物跡がある。　**形状**　177—I号建物跡は2間（5.7m）×2間（3.9m）の長方形で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN—5°—E、面積は22.2m²である。建て替えと見られる177—II号建物跡は、建て替え後の形状は台形で、2間（5.7m）×2間（北4.2m、南3.6m）、面積22.2m²である。II号の柱穴の掘り形は円形で、径40cm前後、深さ40～60cm前後である。　**柱穴**　I号は円形ないしは不整方形（P1、2、7）を呈する。径30～40cm前後、深さ30～50cm前後である。　**重複関係**　本遺構は建て替えによると思われる柱穴の重複関係が見られる。P3・3′の断面より、I号が古いと思われる。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）



掘立柱建物跡全景（東から）

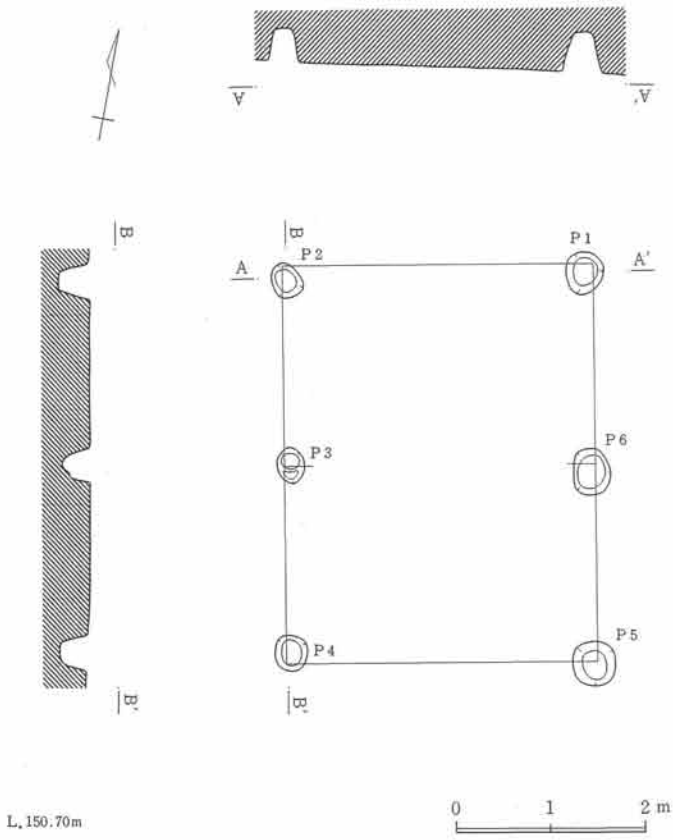
P_2（西から）



図－414　178号掘立柱建物跡

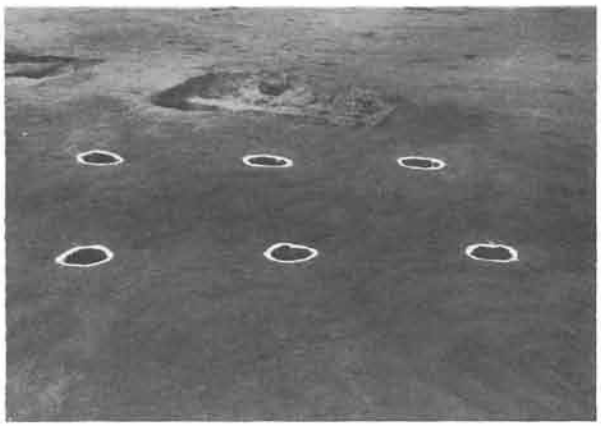
178号掘立柱建物跡（5K－59）　**位置**　ル6にあり、道路西側部のほぼ中央の平坦地に立地している。東南に接して177号建物跡がある。　**形状**　範囲を同じくして、建て替え関係にあると見られる2棟の建物跡（ⅠとⅡ）が検出された。Ⅰは2間（6.3m）×2間（4.2m）の長方形で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN－7°－W、面積は26.5㎡である。柱間寸法は南北3.3＋3m（東側）、6.3m（西側）、東西2.1＋2.1m（南側）、4.2m（北側）である。Ⅱは2間（6.3m）×2間（4.5m）の長方形で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN－7.5°－W、面積は28.4㎡である。柱間寸法は南北3.3m×3m、東西2.25m×2.25mである。　**柱穴**　Ⅰの掘り形の形状は全体として、円形又は方形を呈する。径20～30cm前後、深さ20～30cmのものが多い。ただし、P5は深さ50cmあり、他に比べて例外的である。Ⅱの柱穴の掘り形の形状は、円形又は長円形を呈する。径30～40cm前後、深さ20～30cm前後である。P9～P11（Ⅰ）とP4'・P9'・P8'（Ⅱ）は建物跡内において、「間仕切り」に類似した施設とも考えられる。　**重複関係**　P1とP1'、P6とP6'の地層断面から178－Ⅱ号建物跡が新しいと思われる。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

182号掘立建物跡



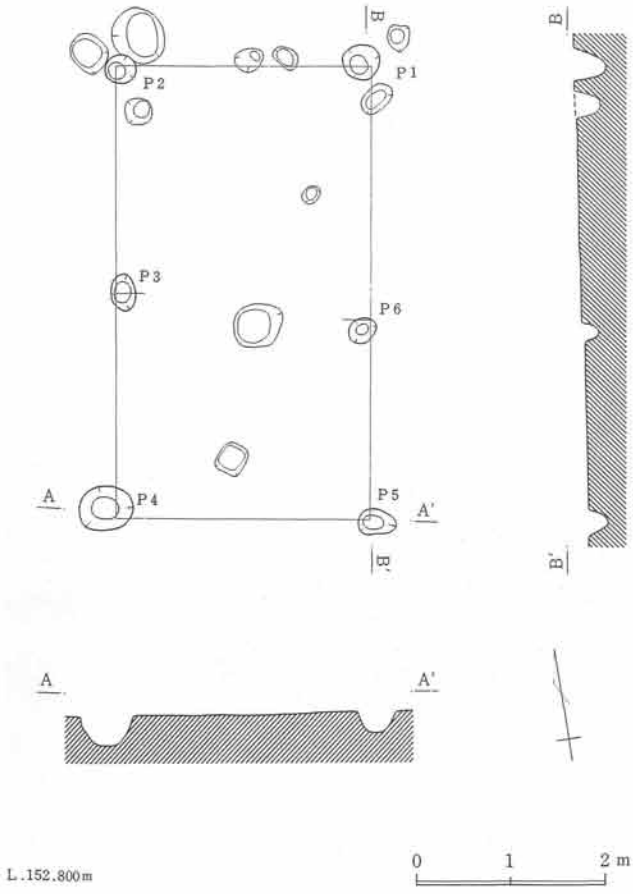
図－415　182号掘立柱建物跡

182号掘立柱建物跡（5K－63）　**位置**　カ2～3、ヨ2～3。南北に走る49・50号溝の西に近接する。そこから南15mの地点で、東西に走る58号溝が始まる。周囲に近接して、他の掘立柱建物跡は検出されなかった。**形状**　2間（4.2m）×1間（3.3m）の建物跡で、南北方向に長軸をとる。長軸方向の柱間寸法は2.1mである。長軸方向N－11°－W、面積13.9㎡。　**柱穴**　円形の掘り形を持つ。径は東側柱穴列（東辺）がやや大きくて50cm前後、西側柱穴列（西辺）は一まわり小さくて40cm前後である。深さは26～43cmである。P3底部は、その中央を径20cm、深さ10cmに、もう一段掘り下げている。　（唐澤）



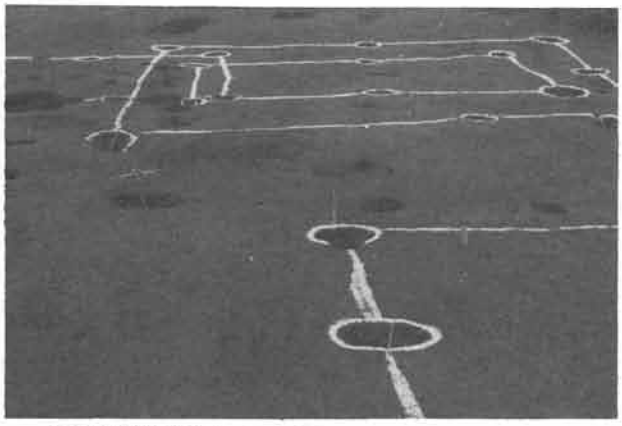
掘立柱建物跡全景（西から）

183号掘立建物跡

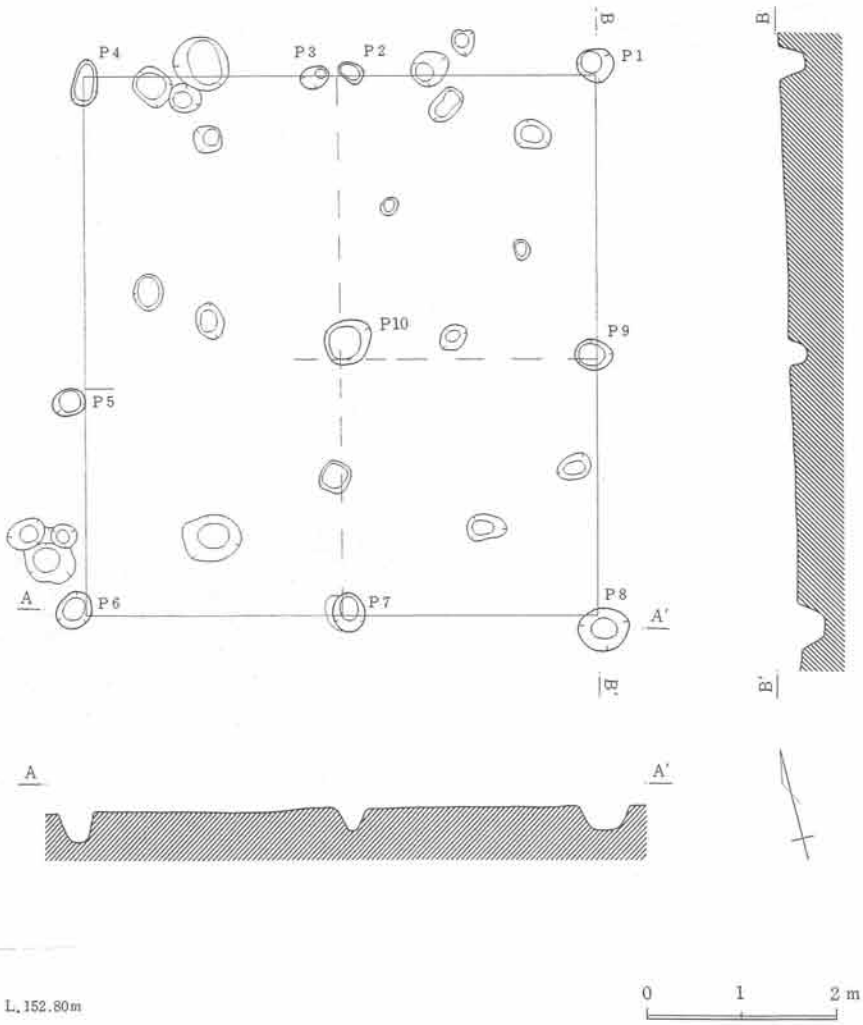


図－416　183号掘立柱建物跡

183号掘立柱建物跡（5K－64）　**位置**　ヲ6にあり、道路西側の平坦地に立地している。西に接して175号建物跡がある。　**形状**　2間（4.8m）×1間（2.7m）の長方形で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN－8°－E、面積は13㎡である。南北の柱間寸法は南北2.7＋2.1m（東側）、2.4＋2.4m（西側）である。　**柱穴**　掘り形は全体として円形を呈する。径30～40cm前後、深さ20～30cm前後である。柱穴の底の部分については、大部分がU字状を呈している。　**重複関係**　本遺構と176号建物跡、184号建物跡の3軒の遺構が重複するが、新旧関係は不明である。　**遺物**　関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）



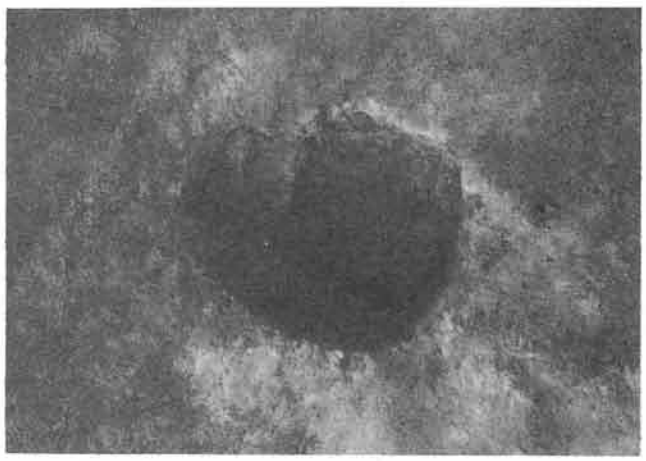
掘立柱建物跡全景（西から）



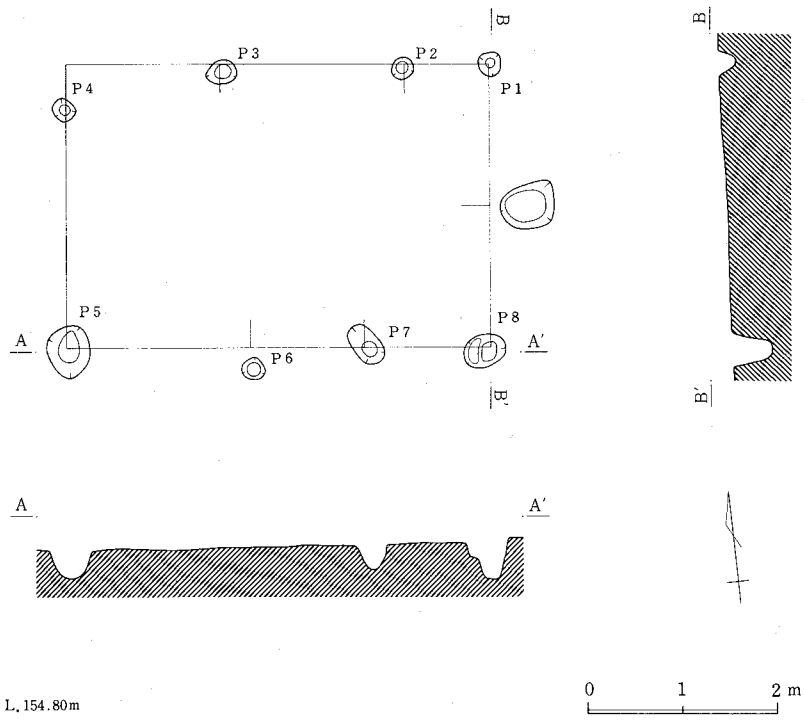
図－417　184号掘立柱建物跡

184号掘立柱建物跡（５Ｋ－65）　**位置**　ヲ６。　**形状**　２間（5.7m）×２間（5.4m）の長方形で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はＮ－31°－Ｅ、面積は30.7㎡である。柱間寸法は南北3.3m＋2.4m（西側）、３m＋2.7m（東側）、東西2.7m＋2.7mである。この付近には、組めないピットが濃密に分布しているが、Ｐ10は建物跡の中央に位置しており、本建物跡は、総柱になる可能性もある。　**柱穴**　掘り形は全体として円形を呈し、径30～50cm前後、深さ20～30cm前後である。柱穴の底は大部分がＵ字状か平担である。Ｐ６は一度約20cmの所まで掘り、その後さらに規模を小さくして掘り下げたと思われ、２段の柱穴になる。本遺構を構成するピットは、計10穴を数える。Ｐ２、Ｐ３は北辺の中央柱の建て替えと考えられる。Ｐ４の長円形も、建て替えの結果と考えられる。　**重複関係**　176号建物跡、183号建物跡と重複する。新旧関係は不明。　（鵜木）

掘立柱建物跡全景（西から、総柱）

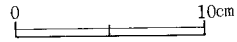


P_7全景（南から）



図－418　195号掘立柱建物跡

195号掘立柱建物跡（５Ｋ－76）　**位置**　ル９、ヲ８～９。東西南北の四方を溝で囲まれた区域内を、更に四等分している53号溝と54号溝の交点の南西に所在する。南には、ほぼ同じ方位を取る164号建物跡と175号建物跡がある。　**形状**　３間（4.5m）×２間（３m）のやや歪んだ長方形の建物跡で、東西方向に長軸を取る。短軸方向東辺中央の柱穴Ｐ９は、東辺両端の柱穴を結ぶ補助線よりやや外に位置する。西辺は東辺の２間に対して１間であり、長さも2.55ｍと東辺より45㎝短い。これは、北側柱穴列（北辺）西端のＰ４が、他のものより内側に設置されているためである。長軸方向Ｎ－96°－Ｅ、面積11.5㎡。　**柱穴**　円形の掘り形を持つ。大きさに２種類あり、Ｐ５・Ｐ８・Ｐ９は50cm前後、他のものは25～30cm前後の径を持つ。深さは14～43cmである。Ｐ８は２段に掘られている。　（唐澤）



図－419（番号不明）掘立柱建物跡柱穴内

表—17　掘立柱建物跡ピット計測値一覧表

（単位、cm）

掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
116号	P_1	70×40～	33～		（不明）
	P'_1	46×38			141.05
	P_2	62×50	42		141.04
	P_3	40×36～	26		141.38
	P'_3	36×29			141.25
	P_4	54×48	17	20	141.21
	P_5	50×30～	26		141.04
	P'_5	43×35			140.93
	P_6	58×50	41		140.90
	P_7	56×40～	32		140.99
	P'_7	52×44			140.86
	P_8	56×50	29		140.99
	P_9	32×30前後	44		140.82
	P'_9	34×30前後			140.82
	P_{10}	39×35	37		140.86
	P_{11}	70×47	54		140.91
117号	P_1	60×60前後	71		141.14
	P_2	80×58	75		141.08
	P_3	30×26～	71	15前後	141.24
	P'_3	40～×32～	55		141.41
	P''_3	32～×29～	36		141.63
	P'''_3	58～×40～	31		141.62
	P_4	54×48	48		141.34
	P''_4	40×34	28		141.56
	P_5	54×38～	65		141.15
	P'_5	44～×40～	68		141.11
	P''_5	40前後×38	62		141.13
	P_6	60×50	39		141.13
	P_7	66×54	34		141.36
118号	P_1	74×62	43		140.80
	P_2	66×62（P'_2分含む）	28		140.95
	P'_2	P_2で一緒に計測	31		140.92
	P_3	68×56	43		140.81
	P_4	57×43	13		141.02
	P_5	90×80	36	16	140.82
	P_6	56×35～	30		140.82
	P'_6	45×40	30		140.82
	P_7	58×48	57		140.53
	P_8	46×28～	34		140.81
	P'_8	50×40前後	35		140.80
	P''_8	60前後×50前後	51		140.64
118号	P_9	34×28	42		140.81
	P'_9	20×18	41		140.82
	P_{10}	22×20	26		141.00
	P'_{10}	35前後×34	23		141.03
	P_{11}	44×36	44		140.81
	P'_{11}	30×30	31		140.99
119号（I）	P_1	40×36	16		141.58
	P_2	62×54	35		141.61
	P_3	36×32	50		141.51
	P_4	72×58	14		141.69
	P_5	70×40～	30		141.51
	P_6	52×40前後	32		141.31
	P_7	46×42	27		141.32
	P_8	62×52	37		141.43
119号（II）	P'_1	42×42	19		141.51
	P'_2	46×40	46		141.51
	P'_3	52×45	37		141.68
	P'_5	52×30～	20		141.57
	P'_6	58×50前後	32		141.23
	P'_7	48×41	46		141.11
120号	P_1	56×54	80		153.80
	P_2	80×60	85	13	153.76
	P_3	54×50	80	14	153.82
	P_4	52×40	74	10～	153.86
	P_5	56×44	68		153.89
	P_6	76×64	82		153.74
	P_7	80×56	91	12	153.64
	P_8	66×58	80	10～	153.65
	P_9	70×60	83		153.62
	P_{10}	100×74	105		153.45
	P_{11}	62×60	90		153.61
	P_{12}	66×64	86		153.65
121号	P_1	60×36	58		153.49
	P_2	62×48	71		153.45
	P_3	（不明）			
	P_4	54×54	70		153.47
	P_5	（不明）	81		153.43
	P_6	48×40	65		153.40
	P_7	64×40	58		153.36
	P_8	44×40	63		153.37
	P_9	44×42	73		約153.85
122号	P_1	68×62	56		154.83
	P_2	70×50	46	10	154.91

掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
122号	P_3	46×28	34		154.91
	P_4	76×56	63		154.84
	P'_4	44～×43	(不明)		(不明)
	P_5	68×58	73		154.95
	P_6	60×50	47		155.17
	P_7	58×46	68		155.03
	P_8	60×48	44		155.06
123号	P_1	42×40	46	9～16	154.67
	P_2	64×58	26		154.95
	P_3	46×30	18		155.14
	P_4	42×38	62	8～14	154.79
	P_5	46×34	50		154.83
	P_6	30×30	29		154.93
124号	P_1	36×30	71		155.51
	P_2	38×36	37	19	155.90
	P_3	68×60	64	15cm前後	155.67
	P_4	58×36	37		155.77
	P'_4	48×46～	23		155.91
	P_5	30×30	48	16～18	155.46
	P_6	44×38	18		155.74
	P_7	36×32	49		155.44
	P_8	56×44	31		155.80
125号	P_1	30×30	14		155.36
	P_2	44×不明	24		(推定) 154.88
	P_3	34×34	22		(推定) 155.60
	P_4	46×36	46		155.30
	P_5	48×45	31		155.38
	P_6	34×30	39		155.08
	P_7	40×38	26		155.24
135号	P_1	44×34	31		151.49
	P_2	40×30	31		151.50
	P_3	56×50	27	28	151.55
	P_4	62×50	22		151.56
	P_5	(不　　明)			
	P_6	40×40	25		151.40
	P_7	44×36	37		151.32
136号	P_1	46×42	40	約20	152.30
	P_2	52×46	30		152.35
	P_3	50×46	35		152.15
	P_4	46×40	17		152.43
137号	P_1	34×34	53		151.92
	P_2	50×44	33		152.17
	P_3	52×48	61	15～19	151.99

掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
137号	P_4	38×34	37		152.17
	P_5	50×44	58	16～18	151.84
	P_6	52×44	42		151.91
	P_7	52×50	33	20	151.92
	P_8	40×34	51		151.63
	P_9	42×40	40		151.97
	P_{10}	44×36	61		151.72
	P_{11}	50×48	54		151.67
138号	P_1	58×50	61		151.86
	P_2	54×54	72		151.83
	P_3	46×42	77		151.88
	P_4	42×42	29		152.29
	P_5	50×48	66	20	151.87
	P_6	38×38	25		152.26
	P_7	46×42	71		151.75
	P_8	38×36	22		151.16
	P_9	38×38	54		151.77
	P_{10}	64×53	58	24	151.70
	P_{11}	44×40	57	13～19	151.57
	P_{12}	52×48	55	約24	151.70
	P_{13}	48×48	61	22	151.75
139号	P_1	80×74	61	12～16	150.90
	P_2	68×60	48		151.15
	P_3	90×56	27		151.40
	P'_3	45×40	45		151.22
	P_4	48×14	56	14～20	151.01
	P'_4	34×28	28		151.29
	P''_4	48×24	56		151.01
	P_5	58×50	24		151.24
	P_6	50×50	20		151.26
	P_7	48×46	40		151.00
	P_8	68×68	29		151.00
	P_9	80×68	39		150.97
	P_{10}	78×68	33		151.11
140号(I)	P_1	76×66	49	11～	150.62
	P_2	36×34	63		150.63
	P_3	76×68	62		150.74
	P_4	63×60～	76	18	150.65
	P_5	71～×70	70		150.65
	P'_5	74×50～	84		150.51
	P_6	88×68	45		150.77
	P'_6	44×37	55		150.67
	P_7	68×60	61		150.45

掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
140号	P_8	70×62	44	10～16	150.51
	P_9	55×44	19		150.61
	P_{10}	56×55	33		150.38
	P_{11}	68×56	45		150.35
	P_{12}	70×60	60		150.34
	P_{13}	58×58	85		150.18
	P_{14}	44×34	33		150.92
	P_{15}	40×38	23		150.87
	P_{16}	48×38	20		150.75
140号（II）	P_1	40×34～	34		150.77
	P_2	58×36～	（不明）		（不明）
	P_3	44×42	53	18～22	150.61
	P_4	46×40	61		150.34
	P_5	40×38	22		150.53
141号	P_1	50×50	33		150.26
	P_2	46×38	20		150.64
	P_3	54×46	77		150.27
	P_4	94×56	53		150.34
	P_5	54×38	52		150.14
	P_6	38×28	24		150.19
	P_7	50×38	21		150.04
	P_8	58×42	78	～24	149.66
142号	P_1	46×40	26		149.90
	P_2	34×28	15		150.13
	P_3	36×36	25		150.26
	P_4	34×30	28		149.93
	P_5	40×28	19		149.63
	P_6	60×52	43		149.54
143号	P_1	64×62	46		149.43
	P_2	68×66	39		149.70
	P_3	66×60～	34		150.10
	P_4	40～×39	21		150.16
	P_5	66×60	36		149.40
144号	P_1	32×28	7		148.96
	P_2	42×40	21		149.04
	P_3	44×40	46		149.04
	P_4	41×38	37		149.04
	P_5	40×38	22		149.07
	P_6	32×28	30		148.74
	P_7	30×26	10		148.74
145号	P_1	60×48	33		151.59
	P_2	74×62	45		151.37
	P_3	52×44	33		151.43

掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
145号	P_4	70×52	36		151.40
	P_5	70×56	37		151.32
	P_6	44×40	37		151.46
	P_7	44×42	27		151.58
	P_8	50×42	29		151.58
	P_9	29×27	31		151.48
146号	P_1	26×24	24		150.66
	P_2	36×34	47	8～27	150.65
	P_3	26×24	43		150.79
	P_4	34×23	16		151.04
	P_5	40×36	48		150.62
	P_6	38×34	46		150.55
	P_7	30×30	35		150.55
147号	P_1	48×38	24		151.04
	P'_1	24×24前後	14		151.14
	P_2	54×34	39		150.97
	P'_2	38×25～	22		151.14
	P_3	90×57	34	16～20	151.05
	P'_3	56×46～	28		151.11
	P_4	46×33	14	16～20	151.15
	P_5	36×26	32	10～16	151.03
	P'_5	50前後×36	23		151.12
	P_6	30×25	34		150.95
	P_7	28×28	24		150.96
	P_8	32×32	33		150.90
148号	P_1	40×38	31		150.91
	P_2	58×50	53	19～21	150.78
	P_3	50×46	63	12～22	150.77
	P_4	40×40	36		151.01
	P_5	56×48	60		150.72
	P_6	54×48	55		150.72
	P_7	52×44	23		150.69
	P_8	32×28	39		150.80
149号	P_1	70×60	50	29～33	150.39
	P_2	78×76	44	29～34	150.64
	P_3	102×92	22		150.68
	P'_3	64×46	50		150.68
	P_4	80～×80	28		150.99
	P'_4	66×60	81		150.46
	P_5	62×60	74	26～27	150.49
	P_6	68×47	70	22	150.48
	P_7	59×48	56		150.54
	P_8	56×48	52		150.50

掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
149号	P'_8	50×35前後	45		150.57
	P_9	76×40～	37		150.54
	P'_9	70×46	40		150.51
	P_{10}	90×88	29		150.56
	P_{11}	96×94	52		150.30
	P_{12}	88×74	46		150.36
150号	P_1	42×34	30	10	149.99
	P_2	16×14	12		150.28
	P_3	43×38	35		150.12
	P_4	38×35	36		150.09
	P_5	50×40	49	16	149.90
	P_6	50×48	52	15～22	149.76
151号	P_1	48×48	32		152.51
	P_3	46×40以上	41		152.49
	P'_2	40×30前後	55		152.35
	P_3	46×39	47		152.51
	P_4	40×30以上	46より小		不明（152.43より大）
	P'_4	36×30前後	46		152.43
	P_5	34×30以上	27		152.58
	P'_5	42×35前後	36		152.49
	P_6	46×36	32		152.38
	P_7	44×42	36		152.32
	P_8	44×44	30		152.38
	P_9	46×44	31		152.43
152号	P_1	56×46	27		152.46
	P_2	52×46	36		152.46
	P_3	48×40	36		152.49
	P_4	40×31	45		152.18
	P'_4	46×43	25		152.43
	P_5	46×34	32	18	152.25
	P_6	62×48	44	約15	151.99
	P_7	52×50	41	19	152.18
153号	P_1	64×52	82		150.47
	P_2	62×58	56		151.09
	P_3	52×48	115		150.96
	P'_3	66×48	59		151.51
	P_4	40前後×40前後	60		151.38
	P'_4	58×50前後	(不明)		(不明)
	P_5	43×40	88		150.83
	P_6	44×38	53	22	150.76
	P'_6	76×約70	25		151.18
	P''_6	約60×50	18		151.11
	P_7	52×45	52		150.46

掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
153号	P_8	70×66	23		150.60
	P_9	60×56	19		150.73
	P_{10}	48×44	43		150.67
	P_{11}	80×74	40		150.77
154号	P_1	46×32	25		153.80
	P_2	42×34	27		153.77
	P_3	54×38	26		153.78
	P_4	50×40	42		153.56
	P_5	58×50	48	16	153.39
	P_6	44×44	21		153.60
	P_7	56×46	57		153.26
	P_8	56×50	35		153.63
155号	P_1	52×52	81	24～26	152.80
	P_2	46×46	93		152.88
	P_3	50×46	66	18～20	153.14
	P_4	60×58	93	22～26	153.02
	P_5	61×60	89	19～34	152.91
	P_6	62×50	90		152.75
	P_7	48×42	59		152.88
	P_8	48×38	49		152.85
	P_9	52×40	30		152.83
	P_{10}	44×40	34		152.87
	P_{11}	44×44	31		152.99
	P_{12}	66×50	23		153.26
156号	P_1	38×36	22		151.64
	P_2	34×32	24		151.56
	P_3	42×38	44		151.34
	P_4	50×44	30		151.42
	P_5	36×34	36		151.32
	P_6	50×32	28	10～17	151.42
	P_7	35×32	30		151.44
	P_8	28×14	16		151.62
158号	P_1	68×66	40		151.81
	P_2	82×60	58		151.68
	P_3	52×50	38		152.82
	P_4	74×52	42		151.65
	P_5	60×50	36		151.58
	P_6	95×62	37		151.58
	P_7	49×48	45		151.63
	P_8	28×26	16		151.86
	P_9	33×30	19		151.86
159号	P_1	52×51	29		148.03
	P_2	58×40	47		147.80

掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
159号	P_3	45×44	45		147.83
	P_4	61×50	39		147.88
	P_5	40×40	42		147.75
	P_6	38×34	31		147.79
	P_7	43×40	30		147.83
	P_8	44×40	33		147.83
	P_9	50×46	26		147.93
	P_{10}	72×48	49		147.78
160号	P_1	40×38	30	22～23	148.06
	P_2	50×32	28		148.01
	P_3	46×36	31		147.97
	P_4	52×36	32	16～23	147.98
	P_5	34×32	21		147.97
	P_6	32×26	17		147.98
	P_7	34×30	15		147.96
	P_8	38×26	20		148.06
161号	P_1	40前後×28	14		148.05
	P'_1	32×30	43		147.76
	P_2	42×33	26	18～20	147.92
	P_3	34×28	30		147.85
	P_4	29×29	34		147.74
	P'_4	34×32	36		147.72
	P''_4	34×31	36		147.72
	P_5	43×38	38		147.61
	P_6	53×28	24		147.77
	P_7	40×30	17		147.84
	P_8	32×32	28		147.84
162号	P_1	28×28	59		147.46
	P_2	36×30	71		147.30
	P_3	28×18以上	26		147.75
	P'_3	36×33	60		147.41
	P_4	44×36	65		147.30
	P_5	44×36	36		147.56
	P_6	45×28	58		147.35
	P_7	25×18以上	39		147.57
	P'_7	34×32	57		147.39
	P_8	28×24	46		147.54
163号	P_1	39×32	30		147.52
	P_2	39×38	39		147.40
	P_3	44×40	24		147.53
	P_4	30×22	25		147.49
	P_5	24×22	21		147.49
164号	P_1	78×40～	41		153.73

掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
164号	P'_1	60×38	41		153.73
	P''_1	40～×32	21		153.93
	P_2	48×40～	33	～20	153.72
	P'_2	30～×30～	11		153.94
	P_3	80×74	28		153.73
	P_4	60×53	13		153.81
	P_5	63×60～	23		153.56
	P'_5	60前後×50	17		153.62
	P_6	80×74	25		153.61
	P_7	76×64	15		153.79
	P_8	74×68	27		153.79
	P_9	70×54	19		153.92
165号	P_1	54～×50	40		155.40
	P'_1	32～×30	45		155.29
	P_2	62×56	47		155.22
	P_3	48×24～	23		155.44
	P'_3	51×38	35		155.32
	P_4	56～×52	32		155.30
	P'_4	38×34	48		155.14
	P_5	40×38～	32		155.23
	P'_5	35×27	39		155.16
	P_6	52×50	27		155.29
	P_7	36×36	41		155.17
	P_8	60×50	44		155.21
	P_9	68×58	29		155.33
166号	P_1	52×50	45		155.21
	P_2	40×32	18		155.50
	P_3	64×54	37		155.30
	P_4	34×30	12		155.47
	P_5	64×48	14		155.30
	P_6	52×44	35		155.11
167号（I）	P_1	54×48	24		155.86
	P_2	52×42	39		155.72
	P_3	42×38	33		155.78
	P_4	42×39	25		155.77
	P_5	36×30	33		155.64
	P_6	40×38	33		155.52
	P_7	56×36	25		155.59
	P_8	47×44	21		155.58
	P_9	82×64	44	12～14	155.49
	P_{10}	42×38	28		155.73
167号（II）	P'_2	48×35	25		155.86
	P'_3	42×30～	23		155.88

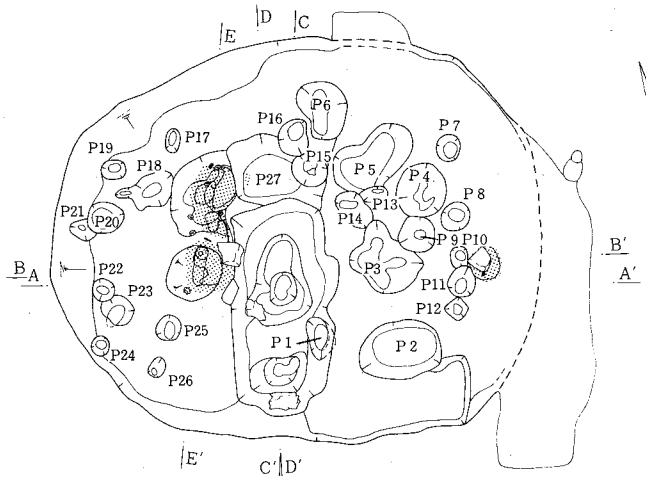
掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
167号（II）	P''_3	38×38	44		155.67
	P'_5	44～×35	14.5		155.78
168号（I）	P_1	68×60	34		155.56
	P_2	66×44	38		155.46
	P_3	73×70	54		155.27
	P_4	52×48	49		155.17
	P_5	46×30～	11		155.48
	P_6	40×34～	22		155.39
	P_7	46×39	32		155.37
	P_8	28×24	6		155.70
168号（II）	P'_1	40×36	53		155.43
	P'_2	28×24	32		155.54
	P'_3	32×30	46		155.35
	P''_3	32×12～	94		154.87
	P'_5	40×16～	43		155.16
	P''_5	40×34	67		154.92
	P'_6	32×26	45	15前後	155.16
	P'_7	43×38前後	46		155.21
169号（I）	P_1	50×44	54		155.47
	P_2	44×43	48		155.49
	P'_2	36×32	38		155.59
	P_3	36×24～	27		155.65
	P'_3	30×23	43		155.49
	P_4	40×36	65		155.22
	P_5	53×30	40		155.36
	P'_5	30前後×20～	33		155.43
	P_6	44×38	25		155.42
	P_7	54×52	41		155.32
	P_8	52×44	57		155.22
	P_9	50×46	72		155.15
	P_{10}	46×40	45		155.50
169号（II）	P_1	60×43	47		155.49
	P_2	30×30	43		155.40
	P'_2	26×26	40		155.43
	P_3	（不明）			
	P_4	（不明）			
	P_5	52×34	45		155.47
170号（I）	P_1	66×30～	14		155.48
	P_2	66×62	58		154.96
	P_3	56×41～	22		155.25
	P_4	60×46	33		155.05
	P_5	38～×38～	23		155.07
	P_6	50前後×30～	25		154.97

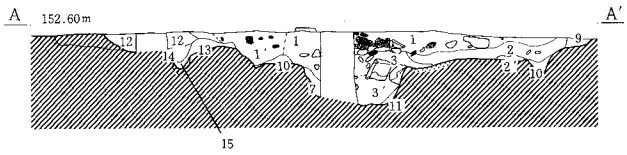
掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
170号（I）	P_8	40×36	23		155.05
	P_9	64×50～	50		154.93
	P_{10}	60前後×50前後	31		155.20
	P_{11}	84×62	33		155.26
170号	P'_1	50×59	62		155.00
	P'_3	53×38	37		155.10
	P'_5	40～×28～	33		154.98
	P'_6	70前後×46～	59		154.63
	P_7	50前後×17～	51		154.74
	P'_7	54×44	68		154.57
	P'_9	40×39	58		154.85
	P'_{10}	60前後×40前後	40		155.11
171号	P_1	80×68	43		154.72
	P_2	66×62	40		154.70
	P_3	54×54	45		154.62
	P_4	64×44～	36		154.66
	P_5	98×86	64	26	154.19
	P_6	46×20～	31		154.50
	P_7	102×86	50		154.41
	P_8	78×74	77		154.19
	P_9	72×68	33		154.67
172号（I）	P_1	44×36	28		154.65
	P_2	30×28	20		154.75
	P_3	32×30	24		154.70
	P_4	32×32	26		154.61
	P_5	58×46	42		154.38
	P_6	46×42	17		154.63
	P_7	40×33	34		154.46
	P_8	32×24	40		154.48
172号（II）	P'_3	41×33	33		154.63
	P'_7	28×26	52		154.28
	P'_8	36～×30	18		154.70
174号	P_1	46×38	12		154.65
	P_2	約50×48	25		154.53
	P'_2	36×31	50		154.27
	P_3	50×43	43		154.30
	P_4	55×44	16		154.50
	P_5	36×32	16		154.43
	P_6	42×40	28		154.25
	P_7	60×58	19		154.38
	P_8	87×48	31		154.30
	P_9	28×28	16		154.47
	P_{10}	41×35	16		154.56

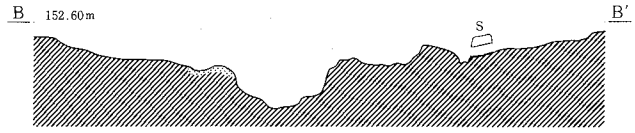
掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
175号	P_1	53×38	24		153.95
	P_2	36×32	18		153.92
	P_3	40×36	20		153.77
	P_4	32×26	11		153.75
	P_5	52×30～	32		153.73
	P_6	50×44	23		153.90
176号	P_1	38×32	26		152.64
	P_2	43×30	28		152.57
	P_3	36×32	46		152.32
	P_4	30×28	28		152.44
	P_5	34×32	30		152.42
	P_6	30×30	23		152.56
177号（I）	P_1	36×20～	27		152.55
	P_2	36×30～	28		152.50
	P_3	48×44	37		152.41
	P_4	36×30～	21		152.52
	P_5	36×24～	16		152.50
	P_6	41×21	57		152.10
	P_7	37×20～	32		152.30
	P_8	34×34～	21		152.47
177号（II）	P'_1	44×30～	33		152.49
	P'_2	44×40前後	55		152.23
	P'_3	30×20～	61		152.17
	P'_4	51×44～	30		152.43
	P'_5	48×40～	48		152.18
	P'_7	42×33	44		152.16
	P'_8	42×36	33		152.35
178号（I）	P_1	30×22～	16		152.48
	P_3	20×16～	15		152.54
	P_5	26×22	50		151.92
	P_6	22～×20	29		152.11
	P_7	26×22	31		152.10
	P_8	40×26	6		152.42
	P_9	28×28	16		152.33
	P_{10}	24×22	11		152.40
	P_{11}	36×28	17		152.35
178号（II）	P'_1	48×44	34		152.30
	P'_2	46×42	29		152.40
	P'_3	32×26	31		152.38

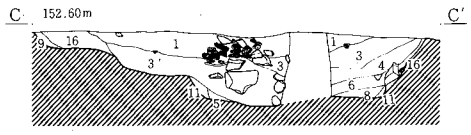
掘立No.	ピットNo.	長径×短径	深　さ	柱痕径	底面標高
178号（II）	P'_4	34×28	20		152.29
	P'_5	36×32	19		152.24
	P'_6	44×40前後	39		152.01
	P'_7	44×42	26		152.15
	P'_8	40×34	20		152.29
	P'_9	46×34	20		152.28
	P'_{10}	54×37	（不明）		（不明）
182号	P_1	44×40	43		150.14
	P_2	38×32	33		150.08
	P_3	38×30	28		150.11
	P_4	38×36	30		150.07
	P_5	46×46	33		150.10
	P_6	50×40	26		150.23
183号	P_1	40×38	32		152.40
	P_2	33×32	10		152.63
	P_3	40×26	22		152.46
	P_4	60×48	33		152.24
	P_5	40×26	21		152.38
	P_6	32×26	17		152.48
184号	P_1	40×36	28		152.49
	P_2	28×20	22		152.46
	P_3	32×23	19		152.49
	P_4	48×26	22		152.50
	P_5	34×28	30		152.33
	P_6	42×36	33		152.19
	P_7	42×34	24		152.30
	P_8	54×46	26		152.31
	P_9	42×31	17		152.48
	P_{10}	50×46	34		152.31
195号	P_1	25×24	16		154.55
	P_2	24×24	14		154.56
	P_3	32×26	43		154.22
	P_4	25×22	14		154.49
	P_5	50×46	31		154.16
	P_6	27×25	28		154.20
	P_7	46×28	29		154.23
	P_8	46×36	41		154.15
	P_9	56×56	28		154.38

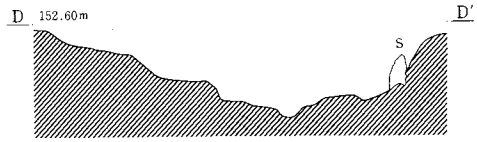
6 製 鉄 址











1．黒褐色土。若干の焼土粒・炭化物・鉄滓・チップ・ノロ。
1'．小鉄滓とチップをかなり多量に含む。
2．黒褐色土。炭化物・焼土ブロック・チップ・ノロ。
2'．2＋小量のローム粒。
3．黒褐色土。比較的多量の鉄滓（5～10cm）・チップ。
3'．小粒の鉄滓。1cm前後の炭化物多量。
4．黒褐色土。小量の鉄滓。炭化物・チップ。
5．黒褐色土。非常に多量のチップ。
6．黒褐色土。ローム粒・ロームブロック。小量の鉄滓。炭化物・チップ。
7．暗褐色土。比較的多量のローム粒。チップ・鉄滓。
8．小鉄滓の層。チップ。
9．黒褐色土。混り物ほとんどなし。
10．黒褐色土。ローム。チップ・焼土粒。
11．暗褐色土。ローム主体。鉄滓。
12．黒褐色土。若干のローム粒。チップ。
13．黒褐色土。小量のローム粒。チップ。
14．黒褐色土。鉄滓・チップ。
15．暗褐色土。多量のローム。
16．黒褐色土。若干の鉄滓・チップ。

0 1 m

図－420 第4号製鉄址

芳賀東部団地遺跡では、製鉄址と認定できるものは5基あった。このうち第1巻で扱う東側台地では2基（製錬炉1、小鍛冶遺構1）検出された。

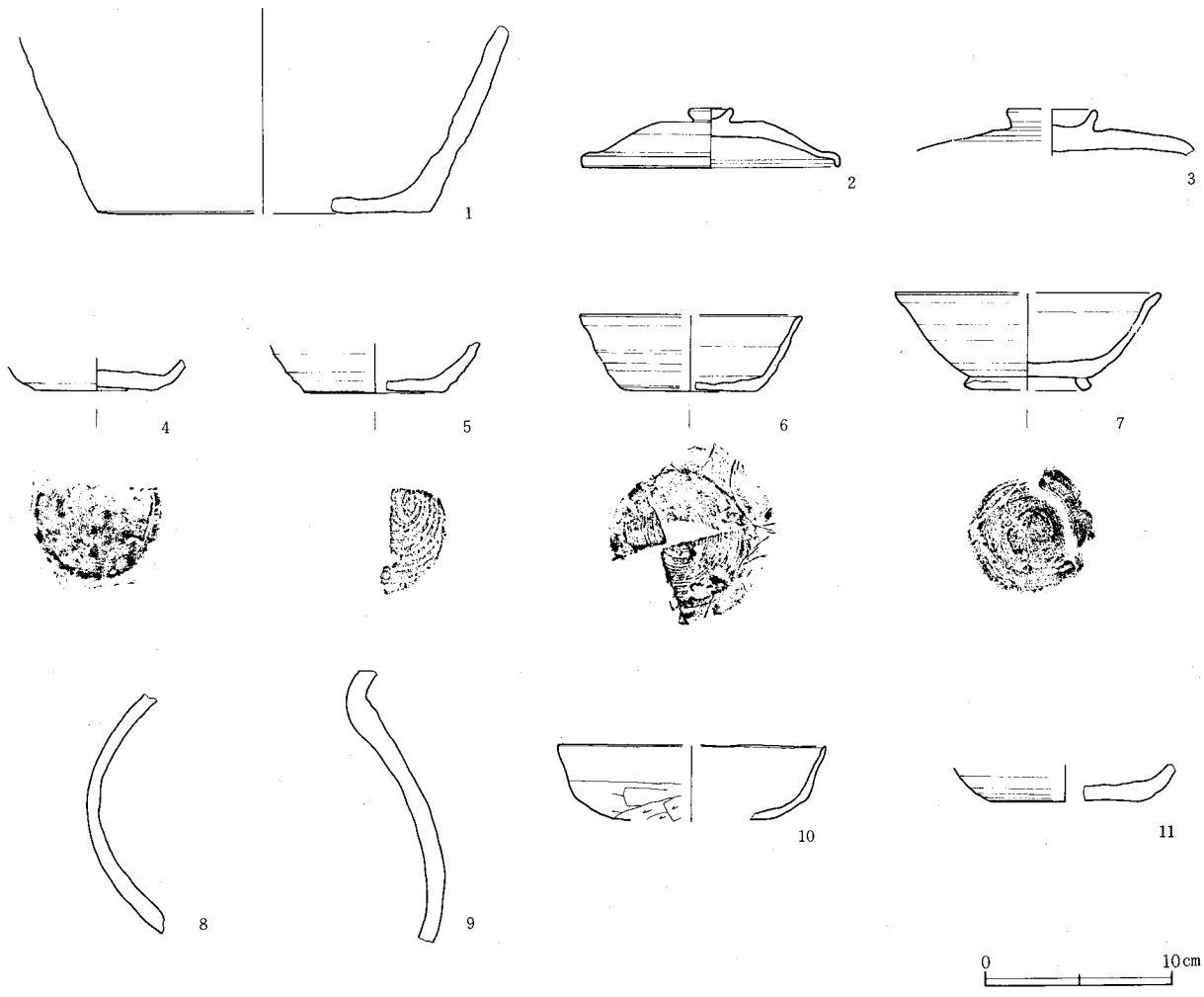
4号製鉄址（5T－1） **位置** 南下りの緩傾斜面上ワ6に所在する。台地の東西位置の中央付近で、49・50号溝と51号溝の交流点の南西約20mの所に位置する。本遺構の南から東にかけては国分期の竪穴式住居跡が、西から北西にかけては掘立柱建物跡が存在する。5号製鉄址は、北25mの所に間に46号溝を挟んで所在する。 **概要** 東西に長い楕円形の竪穴の中に、中央よりやや西に偏して製錬炉とその北に続く作業場が検出された。作業場の西側には2ヶ所の焼土化した浅い窪地があり、鍛冶炉の跡とみられた。竪穴東端付近の焼土化した所も同じものと見られた。製錬炉・作業場掘り形と鍛冶炉を取り囲むように多数の小ピットが認められたが、鍛冶滓等の排棄穴と推定された。 **竪穴** 規模は東西5.2m、南北4.1mで、遺構検出面からの深さは最大35cmである。壁は斜めにゆるやかに立ち上がり、壁高も20cm前後で、竪穴式住居跡とは趣を異にする。竪穴の長軸方向は概ねN－70°－Wで、製錬炉・作業場掘り形の長軸線と直交関係にあるので、これらと同時に掘削されたものと考えられる。柱穴は特定しがたいが、P7とP8の深さが50.7cmに55.8cmで他に比して深く、位置的にも柱穴に近いが、他に該当するものがなく判然としない。竪穴の周囲からはいくつかの柱穴状のピットが検出されたが、覆土中に多量にB軽石を含むので、後の時代のものと見られた。 **製錬炉** 掘り形の規模は東西1.1m、南北1.2m前後の方形で、深さは最深部で竪穴床面から54cmを測る。掘り形底面は南半分がピット状に20cm程深くなっているが、これを埋める平担な面で一定のしまりが認められた。この面での深さは、同前で36cmである。西壁下端を北に追って行くと、作業場に至る手前で東に折れる。ここまでが炉主体部と見られる。下端での規模は東西65cm、南北80cmの長方形を呈す。また、ここにある石は、掘り形上部からずり落ちるような形で出土している。一方、南壁に貼りつく石は、そこより下の壁は直で、上の壁は傾斜を持つ変化点にあり、平の面を内側に向けて立てている。恐らくこの石は、元の位置を保っているものと見られる。石の種類は輝石安山岩の山石である。南北方向の地層断面によると、この石の下端まで厚さ14cmのチップスを混ぜる小鉄滓の層があり、これが炉床下の防湿施設とも見られる。これが南に行くに従って薄くなるのは、冷却した鉧塊をかき出す時に削られたことも考えられる。炉内面で、他に元位置を保つ石や、壁面に粘土等を残している所はなかった。また、地山壁面の焼けている所も認められなかった。 **作業場** 製錬炉の北側に、ほぼ同じ幅（1.1m）で約2m続く。中程で北半分が一段（約30cm）高くなる。北端の立ち上がりは余り明確ではないが、P15・P16・P27を含む。P27は作業場に降りる階段状の施設ともみられる。製練炉前面の掘り形は、2段のピット状に深くなるが、これを埋める平担な面でしまりが認められた。製練炉低面との比高差は、ピットの底で約30cm、しまりのある面で約10cm低い。 **鍛冶炉** 作業場西側の2つは、深さ10～15cmの浅い窪地内にあり、その中心を

東に偏して焼土化していた。竪穴東側のものには窪地が見られなかった。焼土のあり方をみると、三者とも中央部が青灰色に還元され、それを取り囲むように周縁部のみ赤橙色に酸化していた。これらの焼土面付近からは、重量感のある1～2cm程度の小鉄滓とチップスが多量に出土した。作業場東の北側の鍛冶炉は、同じ窪地内で青灰色の焼土面が南北2ヶ所で認められるので、2期にわたる使用が考えられる。付近から、鍛造の台石に当るようなものの出土はなかった。

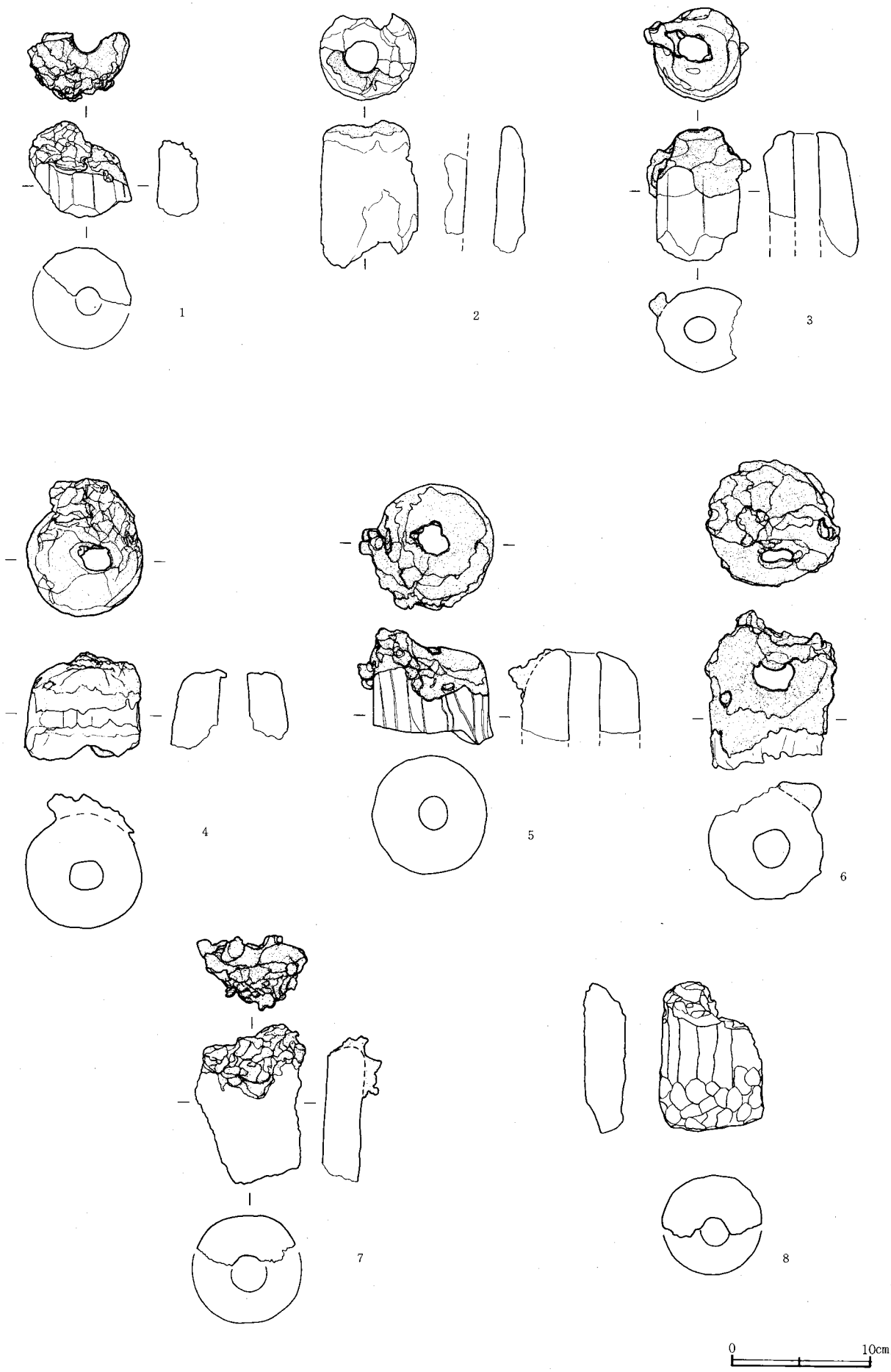
遺物　覆土中からは、輝石安山岩焼石、塊形鉄滓、及びチップスが多量に出土した。これに混って、多量の羽石と若干の土師器・須恵器・鉄製品・炉壁・石製紡錘車等の破片が出土した。これらの内容及び出土状況から判断して、本遺構の廃棄後は、小鍛冶に関わる廃棄物を中心に、ゴミ穴的に使用されたものと考えられる。　（唐澤）

表－18　4号製鉄址ピット計測値一覧表　（単位：cm）

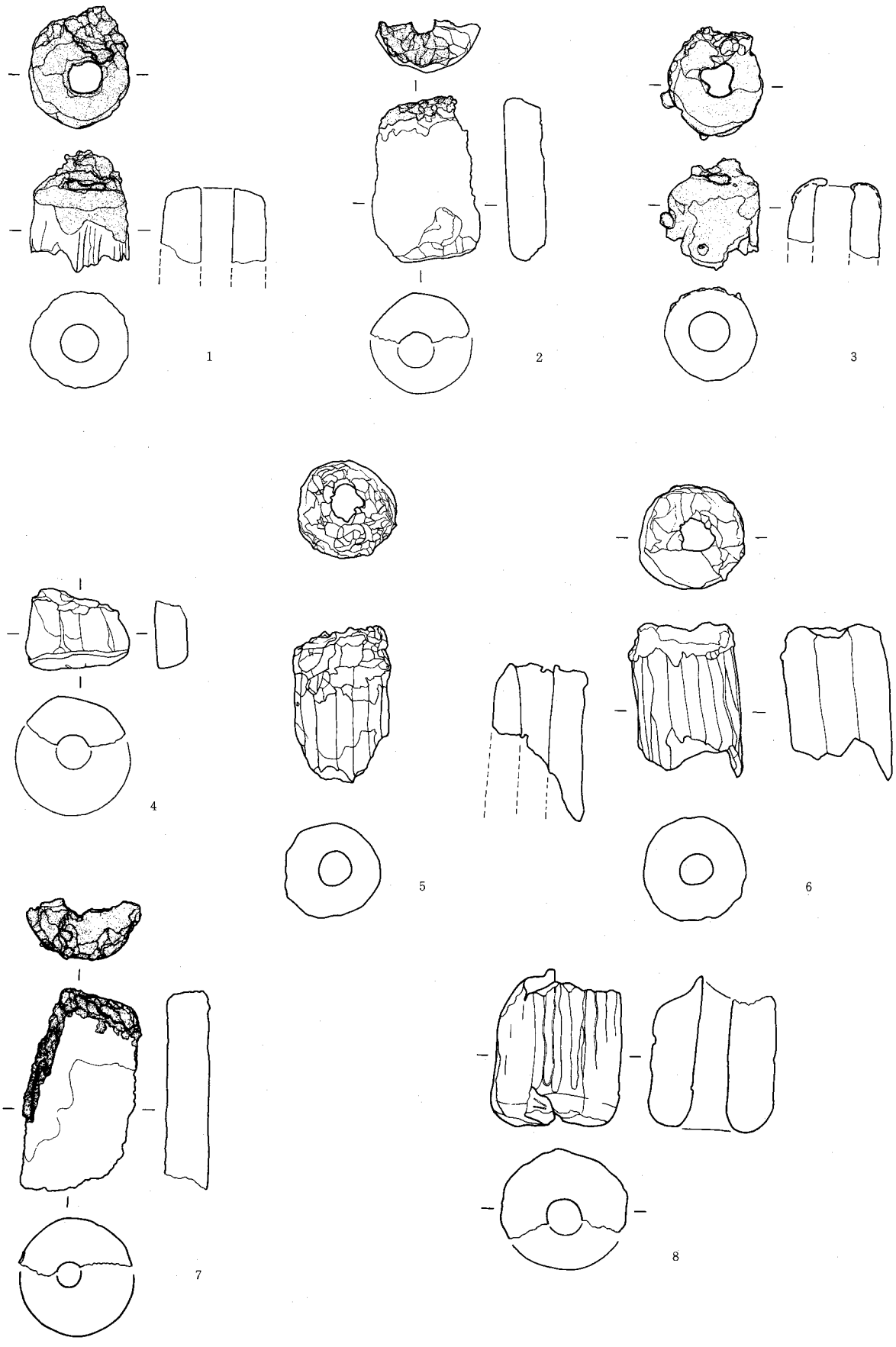
番　号	長　径	短　径	深　さ	番　号	長　径	短　径	深　さ
P 1	46	22	5（炉底より）	P15	40	34	32.3
P 2	88	62	27.3	P16	39	32	20
P 3	80	78	19.2	P17	26	16	9.5
P 4	58	52	27.2	P18	64	36	12.2
P 5	94	70	14	P19	28	21	10
P 6	62	54	12.7	P20	41	32	11.4
P 7	29	26	50.7	P21	29	23	6.9
P 8	33	30	15.6	P22	24	24	12
P 9	38	37	41	P23	36	30	43.5
P10	38	36	17.5	P24	22	20	40
P11	34	30	23.9	P25	28	26	55.8
P12	22	20	12.4	P26	22	16	17
P13	30	17	11.7	P27	75	62	29.4
P14	46	28	11.7				



図－421　4号製鉄址出土遺物(1)



図－422　4 号製鉄址出土遺物(2)



図－423　4 号製鉄址出土遺物(3)

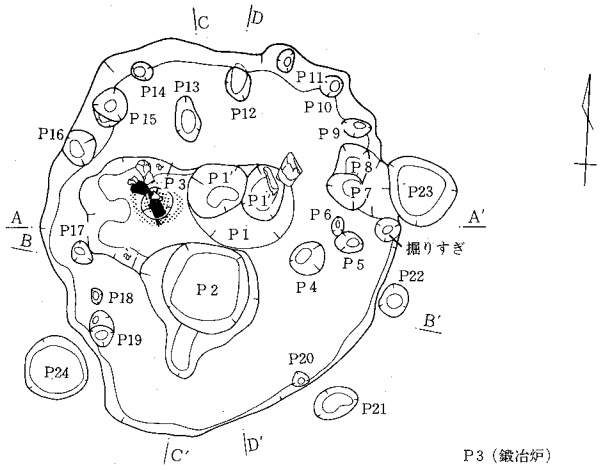
出土遺物　遺構に確実につく遺物の出土は、なかった。大部分は覆土中から出土したものである。　**土師器**　坏（図419—10。以下同図）、底部に丸みを残す坏で、体部は強い横ナデによりS字状のゆるやかなカーブを描く。内面掘曲部には指頭痕による顕著な凹凸が認められる。体部内面の一部には縦方向のハケ目状の痕跡が認められ、横ナデ前の小口状用具による第一次調査痕とみられる。口縁部先端を尖らす。　**須恵器**　坏（4～6、11）、底部は全て回転糸切り未調整である。　埦（7）、付高台。高台は長方形状を呈すが、やや形がくずれる。端部は内側の角を接地点とする。高台は八字形に開くが、低いものになっている。口縁部を外反、肥厚させる。同端部内面はヘラ状用具を当て平坦に仕上げる。底部外面は回転糸切り未調整である。　蓋（2・3）、2の笠部外面の調整は、傾斜部の中程まで回転ヘラ削りを施す。内面調整は外周部分を除き、ロクロ回転使用のヘラナデを施す。3は天井部外面の平坦面にのみ回転ヘラ削りを施す。2・3の胎土中には多量の細かい白色鉱物を混ぜる。ロクロの回転はいずれも右方向である。　壺（8）、体部小片であるが偏平ぎみな胴部をもつ壺形土器と考えられる。色調は黒灰色で、極めて焼成である。胎土中は、蓋2・3と同じものである。　甕（1・9）、1は内外面に顕著な指押え痕が認められ、その後内面はヘラによる横方向の粗いナデつけ、外面は主に横方向のヘラナデを施す。内外面とも凹凸が激しい。9は全体に1と似た雰囲気を持ち、同一個体ともみられる。内面は指でナデつけるが、同じ円状の叩き目文が薄く認められる。頸部付近にはロクロ使用のヘラナデ痕が認められる。1・9とも色調は灰色で、やや甘い焼成である。図示したもの以外に、須恵器長頸瓶、鉄製の鎌、刀子、石製紡錘車（片状蛇紋岩か。中央の孔内面の黒茶褐色のサビ状付着物から鉄の心棒が想定される。）、スサ入りの製錬炉々壁等がある。出土土器全体の傾向は、土師器甕にはコ字状口縁甕がなく、口縁部が緩やかに外反する薄手の甕が中心である。同坏は底部に丸みを残すものが大部分で、ラセン状暗文坏も認められる。須恵器坏はほとんどが底部糸切り未調整である。高台埦の高台は短かく太くなる傾向にある。坏・埦の一部には口縁部を外反・肥厚させるものがある、等である。　**羽口**（下表）　（浜田・中野覚・唐沢）

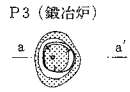
表—19　4号製鉄址出土羽口　　※（ ）は残存長　（単位　cm）

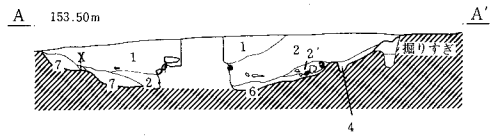
遺物番号	全　長	径	孔　径	備　考
図422—1	(4.1)	6.8	2.1	覆土中、挿入部側残存、スサ入る、夾雑物少ない
〃　—2	(10.2)	6.8	2.3	覆土中、挿入部側残存、スサ入る、夾雑物やや多い
〃　—3	(9.0)	5.8	2.3	覆土中、挿入部側残存、スサ入る
〃　—4	(6.7)	8.0	1.9	覆土中、挿入部側残存、夾雑物少ない
〃　—5	(6.7)	8.3	2.1	覆土中、挿入部側残存、スサ多い、夾雑物多い
〃　—6	(6.2)	8.1	2.2	覆土中、挿入部側残存、夾雑物少ない
〃　—7	(8.8)	7.9	2.7	覆土中、挿入部側残存、スサ多い、夾雑物多い
図423—1	(5.6)	6.8	2.7	覆土中、挿入部側残存、夾雑物多い
〃　—2	10.9	7.4	2.5	覆土中、完形推定可、スサ入る、夾雑物多い
〃　—4	(5.2)	8.0	2.3	覆土中、挿入部側を欠失、スサ多い、夾雑物少ない
〃　—7	(13.5)	7.5	2.2	覆土中、挿入部側残存、スサ入る、夾離物多い
〃　—8	(9.0)	8.5	2.4	覆土中、挿入部側を欠失、スサ入る、夾雑物少ない

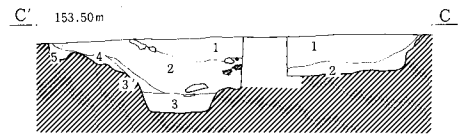
表—20　5号製鉄址出土羽口　　※（ ）は残存長　（単位　cm）

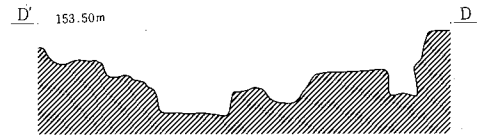
遺物番号	全　長	径	孔　径	備　考
図426—1	(9.4)	6.0	1.8	覆土中、挿入部側残存、スサ入る、夾雑物やや多い
〃　—2	(3.9)	8.4	2.2	覆土中、挿入部側残存、夾雑物少ない、砂質
〃　—3	8.3	7.3	2.6	鍛冶炉付近で床面から9cm浮いて出土。完形、スサ入る、夾雑物少ない
〃　—4	7.9	8.4	2.2	覆土中、完形推定可、スサ多い、夾雑物多い



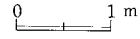








1．黒色土。多量の炭火物・焼土粒。1～2cm大の鉄滓。
2．黒褐色土。炭化物・焼土粒。1～10cm大の鉄滓。
2′．2に比べ若干ローム粒が多い。
3．黒褐色土。ローム粒・ロームブロック。炭化物・焼土粒。1～2cm大の鉄滓。
3′．3に比べ若干ローム粒が多く。しまりも強い。
4．暗褐色土。多量のローム粒。若干量の小鉄滓。
5．黒褐色土。ロームブロック。他に混りものなし。
6．2＋ロームブロック＋比較的多量のローム粒。
7．暗褐色土。比較的多量のローム粒。炭化物が多い。

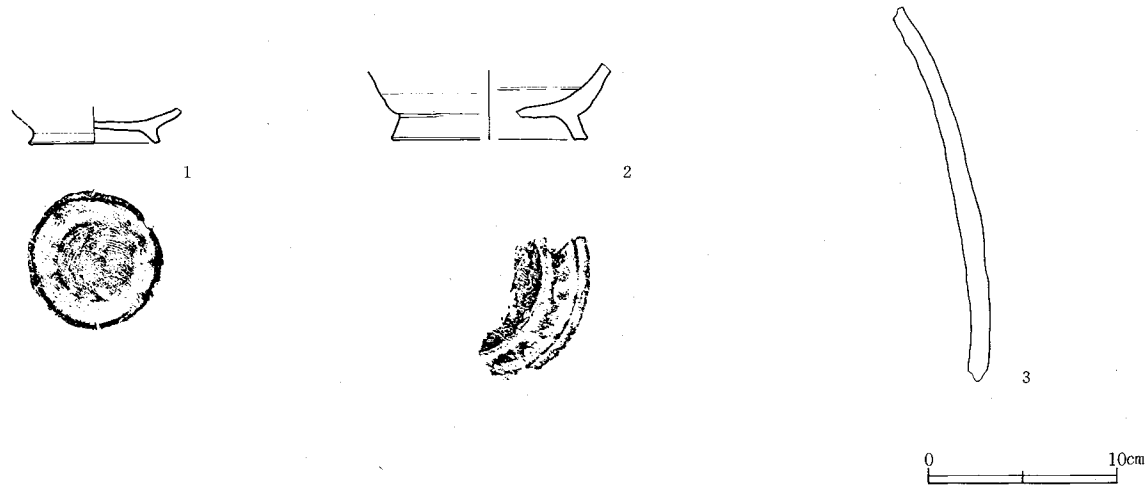


図－424　5号製鉄址

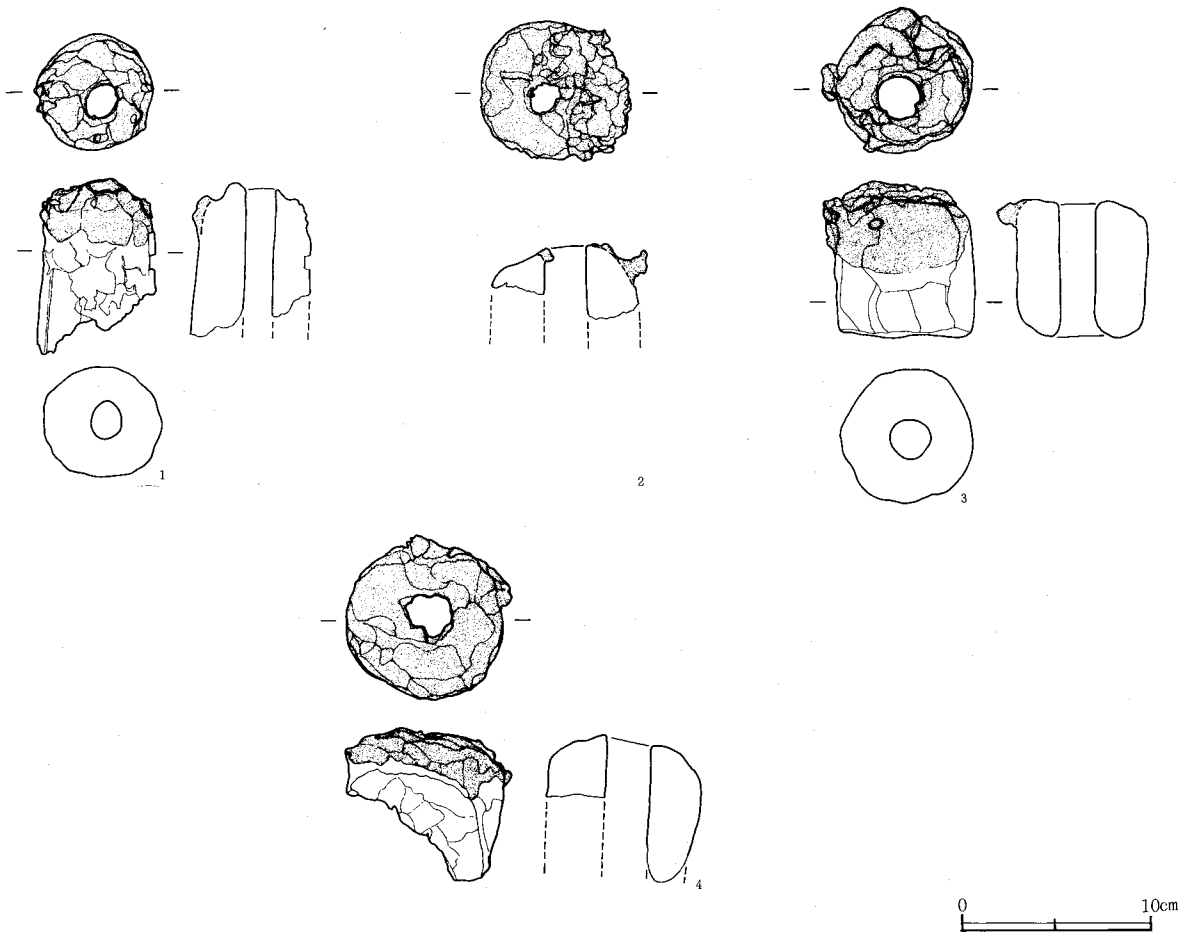
5号製鉄址（5T－2）　**位置**　四囲を溝に囲まれた区域内の南端ヲ7に所在する。南に近接して区域の南限を画す46号溝があるが、これは北側と東側を画す溝と共に、覆土中にB軽石を含むので、本遺構使用時には存在していない。従って、南約25mにある4号製鉄址とは、同地区内のものと見られる。　**竪穴**　南側にやや張り出しぎみの円形の竪穴の西寄りに鍛冶炉を築く。竪穴の規模は、東西3.8m、南北4.2mで、遺構検出面からの深さは最大60cmである。壁は4号製鉄址同様に、斜めに緩やかに立ち上がる。壁沿いには、南東部分を除いて、径20～30cm前後の小ピットが多数認められる。これは上屋構造に関連するものであろう。東側竪穴外のP21・P22は入口施設に関連するものかも知れない。　**鍛冶炉**　周囲床面より一段低くした所に、炉底をピット状に掘り下げた鍛冶炉を築く。ピットの規模は、東西32cm、南北34cmの円形で、深さ12.5cmの逆円錐形の浅い断面を持つ。内面は地山面で、上端を除く全面を青灰色に固く焼く。底部のみは、直径約4cm位が赤橙色に焼けている。外側では、ピット上端から5～6cm程離れてそれをとり囲むように、幅4～9cmのリング状の赤橙色の固い焼土面が検出された。炉の東側（竪穴中央部）には、やや大きめの円形と方形ぎみのピット（P1・P2）があるが、これらは鍛冶滓等の排棄穴と推定される。調査時には、廃棄物に特定できるものの出土はなかった。　**遺物**　鍛冶炉に重なるように、焼石（輝石安山岩割れ石）や羽口、鉄滓等が出土した。覆土中からも焼石や鉄滓・羽口等が出土したが、4号製鉄址に比べ概して少なかった。　（唐澤）

表－21　5号製鉄址ピット計測値一覧表　（単位：cm）

番　号	長　径	短　径	深　さ
P1	116	90	34
P2	94	92	63
P3	118	118	23.9
P4	39	35	21.7
P5	30	23	10.8
P6	22	13	6.8
P7	44	38	38.6
P8	32	32	30.4
P9	32	20	22.4
P10	24	23	6.5
P11	24	17	7
P12	37	27	26.5
P13	50	28	22.2
P14	24	20	21.9
P15	43	38	18.6
P16	40	34	34
P17	26	21	10.5
P18	17	12	23.5
P19	39	27	47.7
P20	18	17	19.2
P21	48	32	18
P22	34	28	22.6
P23	69	69	29.3
P24	70	68	21.1



図－425　5号製鉄址出土遺物(1)



図－426　5号製鉄址出土遺物(2)

出土遺物　　**須恵器**　埦（1・2）、付高台。いずれも八字状に開くが、1は台形で短く、接着がやや雑である。2は体部下端に1段の回転ヘラ削り痕を認める、両者とも糸切り未調整。　甕（3）、体部片。他に短頸壺用須恵器蓋で天井周辺部に鍔を持つ、その内側に稜状の凸線を立てるものがある。土器傾向は5号製鉄址にほぼ同じ　**羽口**（327頁、表20）

（浜田・唐澤）

7　溝

概　要

芳賀東部団地遺跡全体で、74条の溝（調査地区ごとに、同一溝に対して別番号をふっている可能性があるので、今後の検討で若干減少する可能性がある）と２条の溝状遺構が検出された。この内、今回の報告書に収録したものは、東側台地に係わるもので、溝20条と溝状遺構２条である。これを覆土により分類すると、次のとおりである。

(1)　覆土中に二ツ岳系の軽石を混ぜ黒色味の強いもの。…52号溝（１条）

(2)　覆土中にＢ軽石純層を堆積するもの。……39・45・48号溝（３条）

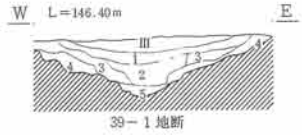
(3)　覆土中にＢ軽石を多量に混ぜ砂質なもの。……40・41・46・47・49～51・53～60号溝、溝状１・２（17条）

(4)　覆土が耕作土（表土）と同じもの。……61号溝（１条）

上の分類は同時に時期差も表わしており、走向や形状にも顕著な違いがみられる。(1)は南北方向に大きくうねりながら走向し、H307号住居跡に切られていることから、奈良・平安時代の集落出現前、二ツ岳系軽石の降下後に掘削されたものと考えられる。(2)はＢ軽石降下前のもので、奈良・平安時代の集落の存続したある時期に掘削されたものとみられる。(3)はＢ軽石降下後のもので、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が廃棄された後のものである。(2)・(3)の走向は極めて直線的なもので、或は直角に折れ、或は直交し、或は平行するなどの特色を持つ。また、一定の空間を方形に囲んだり、何組かの溝間の距離がほぼ一致する例もある。(2)・(3)の溝は、全てが同時存在でないとしても、ある程度の企画性を持って掘削されたことが予想される。(3)は極めて新しい時期のものと見られる。弧状に一部が検出された。

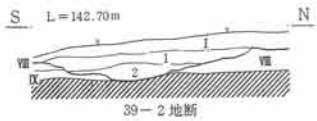
溝の機能は、(1)・(4)については不明であるが、(2)・(3)についてはそのあり方からみて区画することを第１義の目的にして、排水を兼ねて掘削されたものと推測される。ここで興味深いのは、掘立柱建物跡、或は竪穴式住居跡の密集している地区を、(2)・(3)の溝で囲む例がみられることである。これは、溝の大部分がＢ軽石降下後のもので、全てが竪穴式住居や掘立柱建物と同時に存在することはないが、これらの消滅後もここに区画を必要としたことを物語るものであろう。なお、本文に収録した溝の幅や深さは、規模の違い以外に、遺構検出面の深さによる差も考えられる。　（唐澤）

39号溝（５Ｗ—19）



39－１地断

1．黒色土。Ｂ軽石。
2．黒色土。Ｃ軽石。二ツ岳系軽石。
3．黒褐色土。ローム粒。Ｃ軽石。二ツ岳系軽石。
4．Ⅸ＋黒褐色土＋ローム粒。
5．淡灰色土。粒子細かく均質。Ｃ軽石。



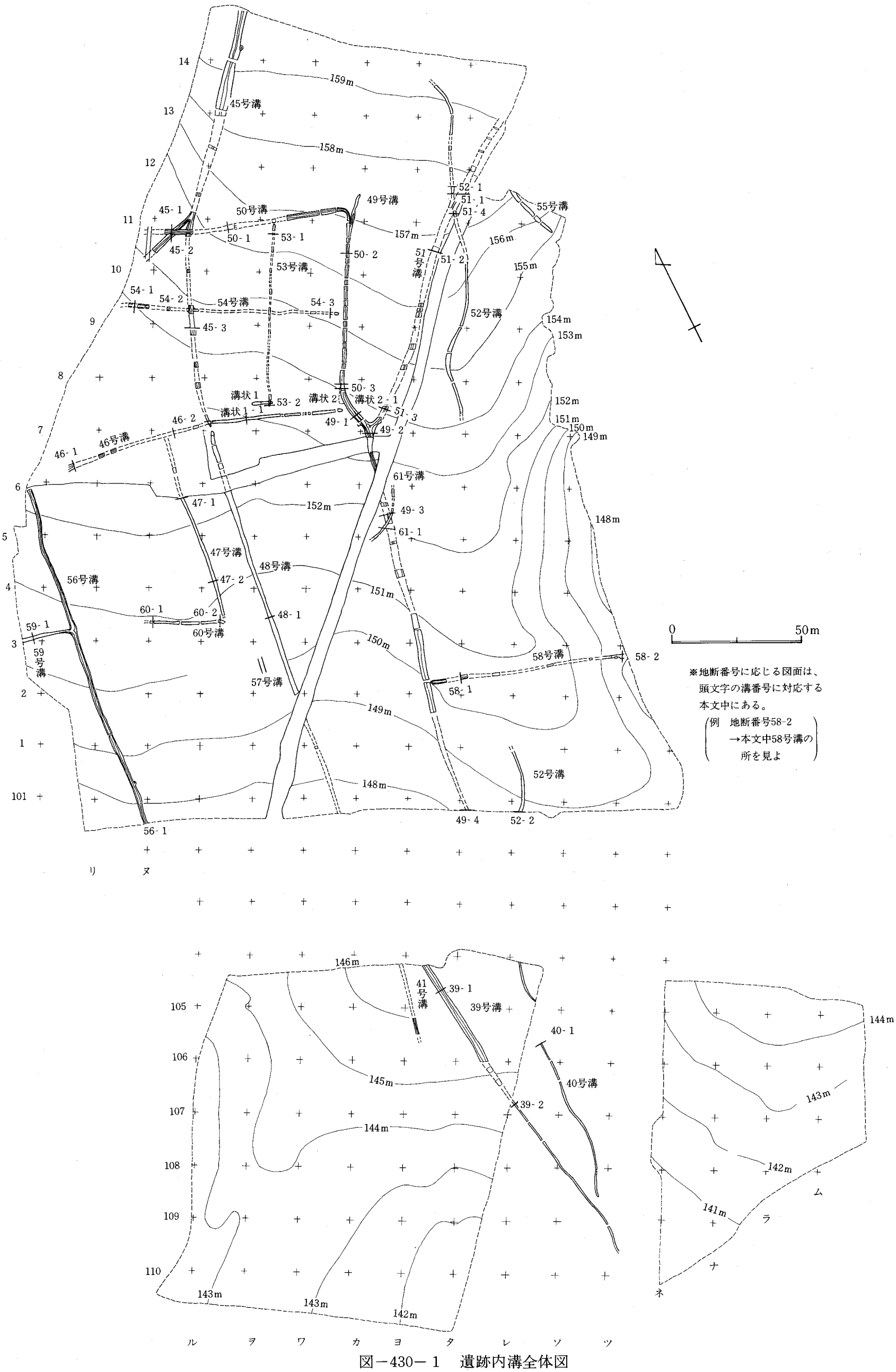
39－２地断

1．黒褐色土。多量の砂粒。
2．黒色土。しまり良く粘質。
Ｃ軽石。二ツ岳系軽石。

図－427　39号溝

位置　ヨ105からツ110にかけて、概ねＮ—10°—Ｗの方向に直線的に走る。レ106からツ110の間の地形は、南北に走向する浅い窪地となっている。**規模**　南側は更に続くが、現状で長さ135m、幅2.25～2.6m、深さ30～60cmを測る。　**概要**　上武国道予定地で中断されているが、走向及び覆土からみて48号溝と一連のものと見られる。覆土中にはＢ軽石の純層が堆積する。底部は水の影響で固い。　**遺物**　底面付近から、灰釉陶器の長頸瓶及び埦の破片が出土している。　（唐澤）

溝全景（南から）

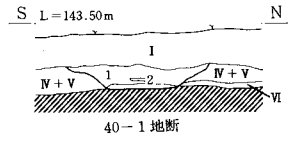


※地断番号に応じる図面は、頭文字の溝番号に対応する本文中にある。

(例　地断番号58-2
→本文中58号溝の所を見よ)

図－430－１　遺跡内溝全体図

40号溝（5W—18）



40－1 地断

1．黒色土。C軽石。しまり良。
2．砂　層。

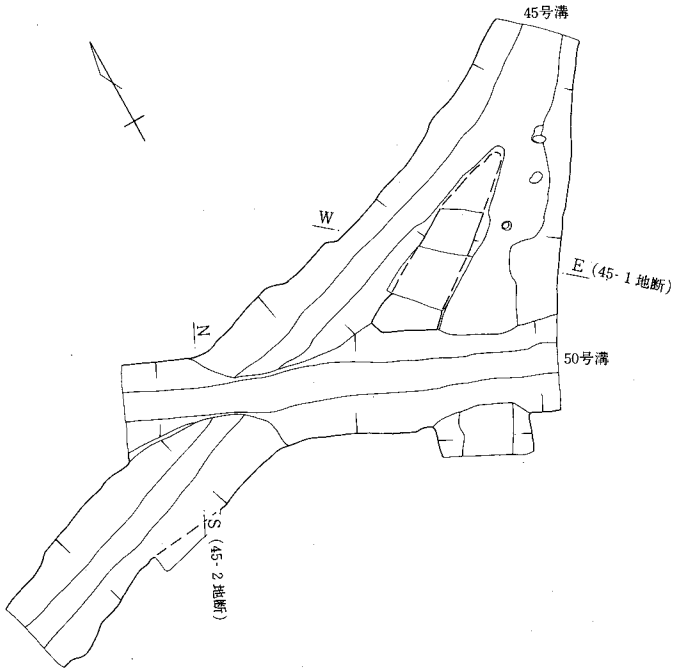
図－428　40号溝　0　1 m

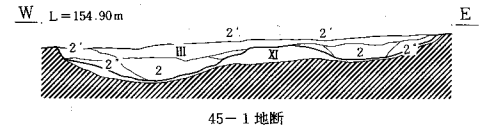
位置　レ105からソ109にかけて、概ねN－6°－Eの方向に走向する。 **規模**　現状で長さ約100m、巾1.6m前後、深さ30cm前後を測る。 **概要**　上武国道予定地で中断されているが、走向及び覆土からみて、49・50号溝と一連のものと考えられる。もっとも、40号溝は走向に波をうつ点が49・50号溝と異なる。39号溝南端は走向からみて、本溝の一部とも考えられる。覆土中にはB軽石を含む。底面は非常に固い。　（唐澤）

41号溝

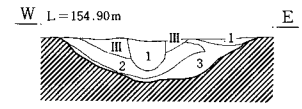
位置　南はヨ106から、北はヨ105の上武国道予定地内まで延びる。走向はN－13°－Eである。南端はヨ106の先については不明である。 **規模**　現状では長さ約30m、幅1m、深さ30cmを測る。 **概要**　南端と共に北側の始りも不明であるが、走向を北に延ばすと39号溝（48号溝）と交わる。あるいは、39号溝（48号溝）の分岐したものかも知れない。ただ、地層断面図の註記には、底面を覆う土はB軽石を含むとあるので、上記溝より新しい時期に当る。　（唐澤）

45号溝（5W－1）



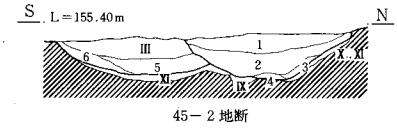


45－1 地断



45－3 地断

1．暗褐色土。B軽石を含む。
2．黒色土。C軽石。
3．黒色土。暗褐色土とロームの混土層。



45－2 地断

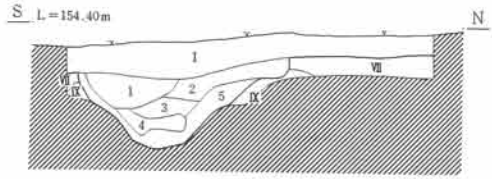
1．暗褐色土。二ツ岳系軽石。
2．黒褐色土。軽石含まず。
3．暗褐色土と褐色土の混土層。
4．黒色土。固くしまる。多量のC軽石。
5．黒色土。C軽石・二ツ岳系軽石。
5．黒色土。C軽石。二ツ岳系軽石。

0　1 m

図－430　45号溝（50号溝）

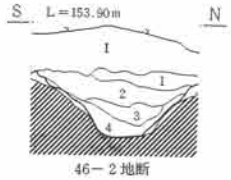
位置　北は調査区域外のル14以北から始まり、南端は46号溝と交わるル7で終る。 **規模**　現状で長さ約160m、幅1.1～4m、深さ26～68cmを測る。ヌ11の分岐点付近から、幅・深さ共に減少する。 **概要**　分岐点で溝の走向がN－38°－Eから西寄りに変化する。南端では1.5mを置いて、ほぼ同じ方向で48号溝が始まる。覆土中にはB軽石純層がある。 **重複関係**　東西方向に走る46・50・54号溝と切り合う。いずれも45号に溝切られる。（旧い）。　（唐澤）

46号溝（5W—16）



46－1地断

1．褐色土。C軽石。B軽石。二ツ岳系軽石。砂質。
2．黒色土。ローム粒。C軽石。二ツ岳系軽石。
3．茶褐色土。ローム粒。C軽石。
4．黒色土。C軽石。B軽石。二ツ岳系軽石。
5．暗褐色土。ロームブロック。C軽石。B軽石。二ツ岳系軽石。

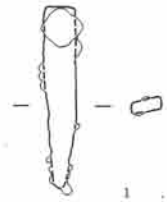


46－2地断

1．暗褐色土。砂質。ローム粒。
2．黒色土。砂質。ローム粒。
3．黒褐色土。ローム粒・ロームブロック。
4．黒褐色土。ローム粒。ロームブロック。
※1～3には、C軽石、二ツ岳の軽石。

図－431　46号溝

位置　東端はワ7の49•50号溝の2m手前から始まり、西方に直線的に走る。45号溝との交点では角度をやや南に変え、西端は走向の延長が56号溝と直交する。 **規模**　現状で長さ110m、幅1.7～2.3m、深さ70～100cm。走向はN—110°—Eで、45号溝から西はN—98°—Eになる。覆土は全体に砂質で、B軽石を多量に含むと見られる。 **遺物**　覆土中から国分期の土師器甕、坏小片や刀子残片が出土している。 **重複関係**　ル7で45号溝と切り合う。46号溝が新しい。　（唐澤）

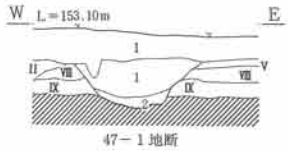


図－432　46号溝出土遺物

溝全景（東から）

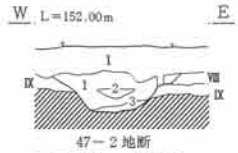
出土遺物　**鉄製品**　刀子(1)、茎と刀部1cm程を残存する。茎は棟の側に幅を広げる。　（唐澤）

47号溝（5W—B）



47－1地断

1．黒褐色土。B軽石。
2．暗褐色土。B軽石。



47－2地断

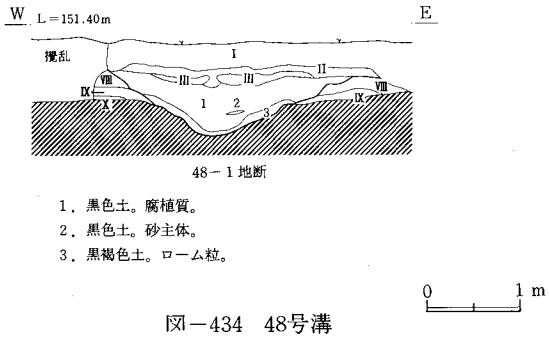
1．黒褐色土。B軽石。
2．砂主体層。
3．黒褐色土。多量の砂流。

図－433　47号溝

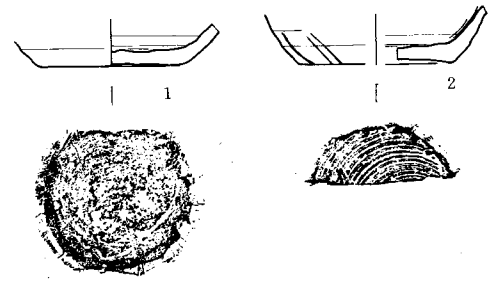
溝全景（北から）

位置　南向きの緩傾斜面を、北のヌ6から南のル3まで直線的に走る。 **規模**　確認できた範囲で、長さ70m、幅1.4m、深さ45～56cmを測る。 **概要**　北側は46号溝の手前1mの所まで確認されている。南端は遺構検出面までの削平がやや深いため明確におさえられなかった。覆土はB軽石を含む砂質土である。覆土から見て46•60号溝とほぼ同時期のもので、46号溝の走向とは直交し、一時期旧い48号溝の走向と平行する。走向は概ねN—9°—Eである。　（唐澤）

48号溝（5W－1－1）



図－434　48号溝

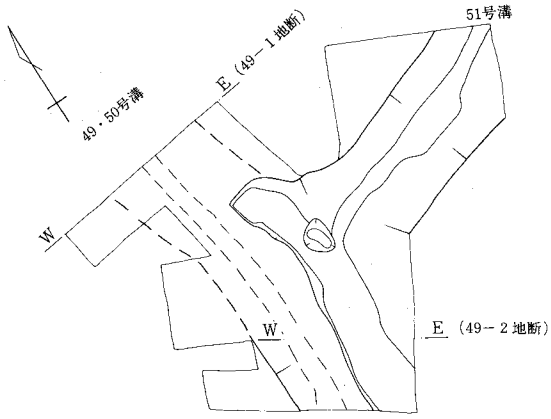


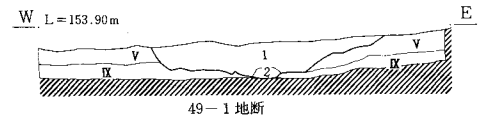
図－435　48号溝出土遺物 0　10cm

位置　ル7の45号溝立ち上がりから1m置いて、ほぼ同じ走向で上武国道予定地内まで進む。　**規模**　長さ155m、幅1.3～3.4m、深さ22～64cmで、南に行く程小規模な溝になる。　**概要**　覆土中にB軽石純層を含む。走向は概ねN－8°－Eである。39号溝とは一連のものとみられるので、現状の総延長は約360mである。　**遺物**　須恵器大甕・同坏、埦形鉄滓等が出土。　**重複関係**　161・163号掘立と重なるが、新旧不明。　（唐澤）

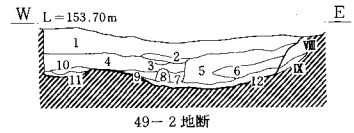
出土遺物　**須恵器**　坏（1・2）、1は底部糸切り後周辺部回転ヘラ削り。2は糸切り末調整、体部下端に1段の横方向手持ヘラ削り。内外面に火襷。　（唐澤）

49号溝（5W－2）

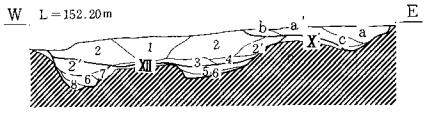




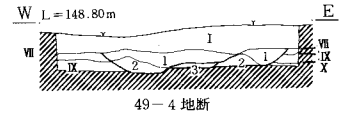
1．灰褐色土。砂層（B軽石）
2．黒褐色土。固くしまった砂層。



1．褐色土。ローム粒。
2．黒色土。しまる。
3．黒色土。ロームブロック。
4．灰褐色土。砂質。
5．黒褐色土。ローム粒。
6．黒褐色土。ローム粒。
7．黒色砂層。
8．褐色土。砂質。
9．黒色土。下部に砂層。
10．黒色土。中に黒色砂層。
11．褐色砂層。
12．褐色土。ローム。



61号溝
a．耕作土。
a′　やや砂質感の強い耕作土。
b．ほこりっぽい耕作土。
c．礫混入の砂質土。



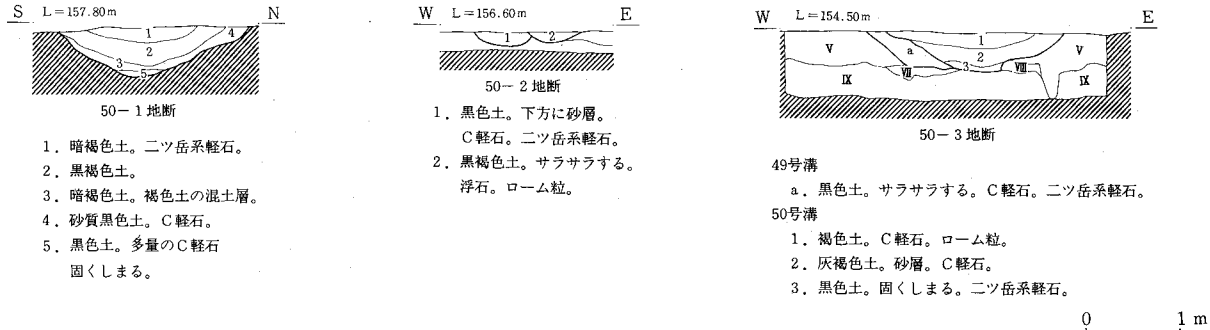
1．黒褐色土。砂質性。
2．黒褐色土。砂質性。
3．黒褐色土。砂質性の固い層。

49・50号溝
1．灰黒褐色土。多量のB軽石。
2．黒褐色土。B軽石。
2′　2＋若干のローム粒。
3．黒灰色土。固くしまる。
4．黒褐色土。若干のローム粒。
5．黒褐色土。少量のローム粒。砂質。
6．暗褐色土。多量のローム粒。砂質。
7．暗褐色土。多量のローム粒・ロームブロック。
8．暗褐色土。ローム粒主体。

図－436　49号溝（50・51号溝）　0　1 m

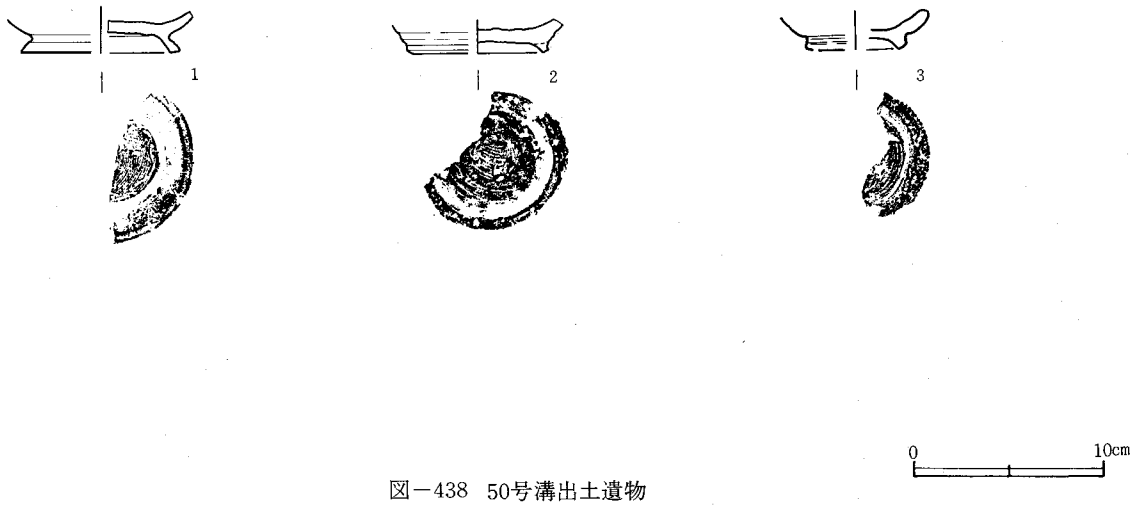
位置　ワ11北部で固い底面のみ検出され、ワ10で50号溝と重なり、そのまま上武国道予定地南の40号溝に続くものとみられる。　**規模**　現状で長さ約250m（40号溝を含むと400m）、幅0.5～1.9m、深さ12～40cmを測る。ワ8付近からは50号溝に近い規模になる（図－437参照）。　**概要**　覆土は砂質性で多量のB軽石を含む。底面は非常に固い。ワ10以南は、50号溝に重なって掘り返す。　**重複関係**　50号溝より新しい。オ5の61号溝より旧い。　（唐澤）

50号溝（5W－3）



図－437　50号溝（49号溝）

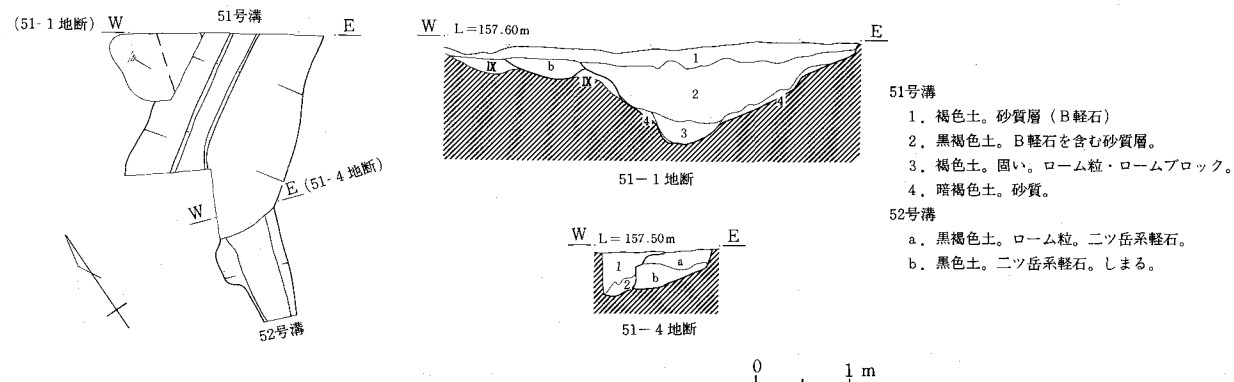
位置　ヌ10からワ10まで東西に走向し、そこで直角に南に折れて49号溝と重なる。以下南の状況は49号溝と同じ。　**規模**　長さは現状で東西方向が約80m、南北方向は49号溝と同じ。幅は0.7～2.5m、深さ15～80cmを測る。　**概要**　45・46・49号溝と共に四囲を方形に囲む区域をつくる。覆土は砂質でB軽石を含むものと見られる。レベルの最高はワ11付近、西端は谷に落ちるか。　**遺物**　ヌ10・ワ11で高台埦等。　**重複関係**　45号溝を切り、49号溝に切られる。　（唐澤）



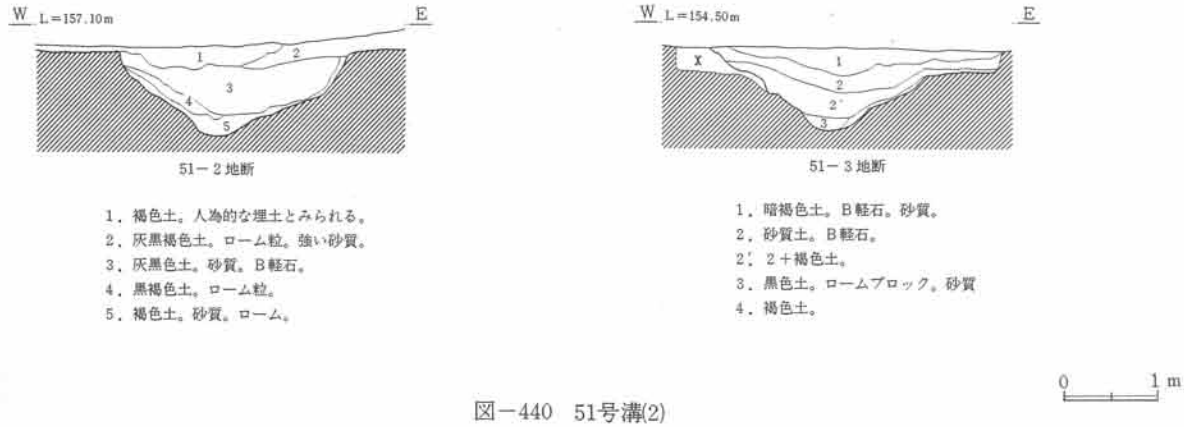
図－438　50号溝出土遺物

出土遺物　　**須恵器**　埦（1～3）、1は青黒灰色、つくりはていねい。2・3の高台接着は雑。3は軟質。　（唐澤）

51号溝（5W－4）



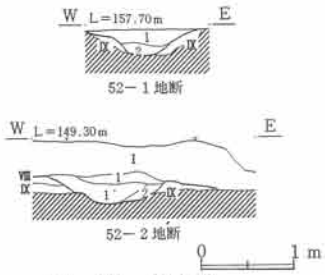
図－439　51号溝（52号溝）(1)



図－440　51号溝(2)

位置　北は調査区域外のレ14以北から始まり、ワ７で49・50号溝と合流する所まで続く。　**規模**　現状で長さ150m、幅2.1～2.9m、深さ0.7～1.1mを測る。　**概要**　生活道路に沿って、概ねN－50°－Eの走向を持つ。45号溝と共に本遺跡では最大の幅・深さを持つ。覆土は全体にB軽石を含む砂質。ヨ10付近では覆土上部に人為的な埋土（褐色土）が見られた。底部には固い砂質層がある。　**重複関係**　タ13でH305号住居跡、ヨ９でH294号住居跡を切る。　（唐澤）

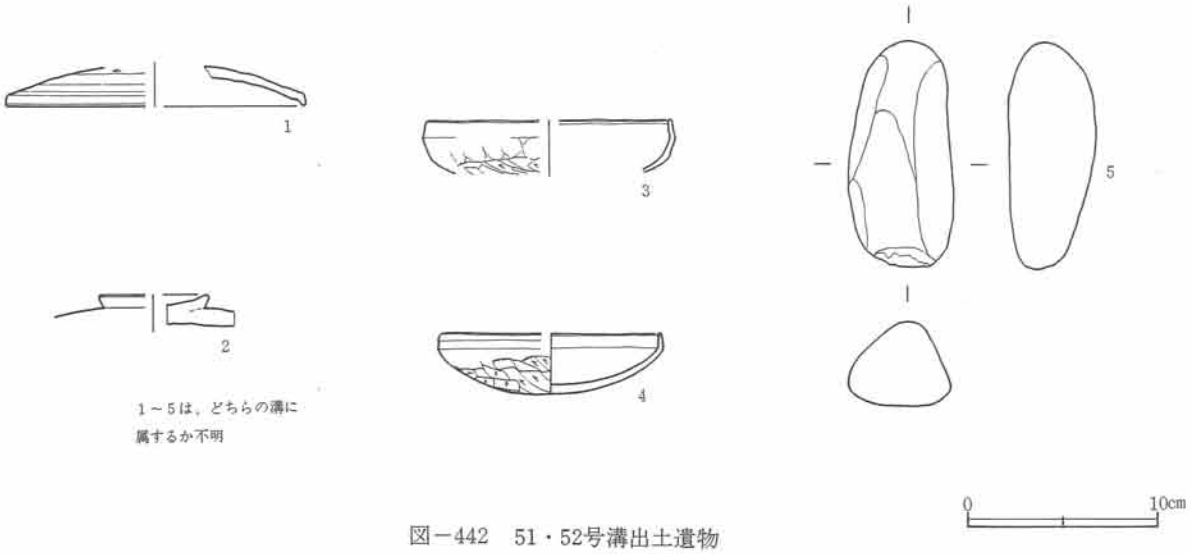
52号溝（５W－５）



図－441　52号溝

溝全景（北半分、北から）

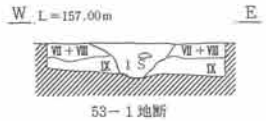
位置　北側はヲ13で確認され、大きくうねりながら南は上武国道予定地内まで続く。その南では検出されなかった。途中ヨ７～タ１は、遺構検出面が深すぎるため不明である。　**規模**　現状ではヨ７～タ１分を含め長さ約300m、幅0.8～1.25m、深さ13～49cmを測る。　**概要**　覆土は強い黒色土で、B軽石降下前のものである。底部は非常に固い。他の溝と異なり直線的でない。　**重複関係**　ヨ11で51号溝、ヨ10でH307号住居跡に切られる。　（唐澤）



図－442　51・52号溝出土遺物

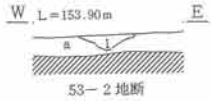
出土遺物　　**土師器**　坏（３・４）、丸底。口縁部を短く立てる。　**須恵器**　蓋（１・２）、両者とも黒色粒を含む同じ胎土。１は非常に堅緻な焼成。　**その他**　（５）、全体に磨滅。図下端小口面のみ細かく欠ける。安山岩。　（唐澤）

53号溝（5W－6）



53－1地断

1．黒褐色土。数枚の砂層をはさむ。全体に砂質。



53－2地断

53号溝
1．褐色土。浮石を含む。
溝状遺構1
a．黒色砂質土。

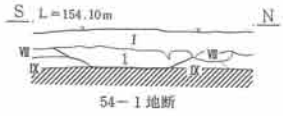
0 1 m

図－443 53号溝（溝状遺構1）

位置 ヲ10からヲ7まで南北に直線的に走る。 **規模** 長さ70m、幅60～130cm、深さ17～43cm。 **概要** 四囲を45・46・49・50号溝で囲まれた方形の区域を、中心から東西に分ける形で存在する。南北端は46・50号溝と3.5mないし0.5m離れて始まっており、水を流すことよりも区画を設定することを目的とした溝と考えられる。走向N－28°－E。 **重複関係** 住居跡・掘立柱建物跡・54号溝、溝状遺構1を切る。 （唐澤）

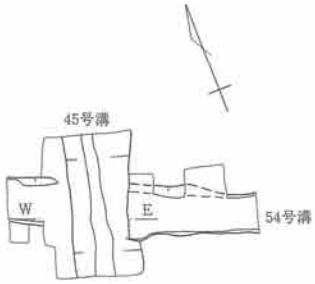
溝全景（北から）

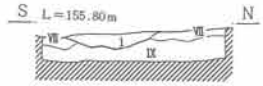
54号溝（5W－7）



54－1地断

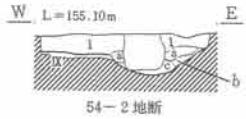
1．砂層。C軽石。二ツ岳系軽石。





54－3地断

1．砂層。C軽石。二ツ岳軽石。



54－2地断

54号溝
1．砂層。C軽石。二ツ岳系軽石。
45号溝
a．黒色土。しまりあり。C軽石。二ツ岳系軽石。
b．aより軽石が多い。
c．褐色土。ローム粒主体。

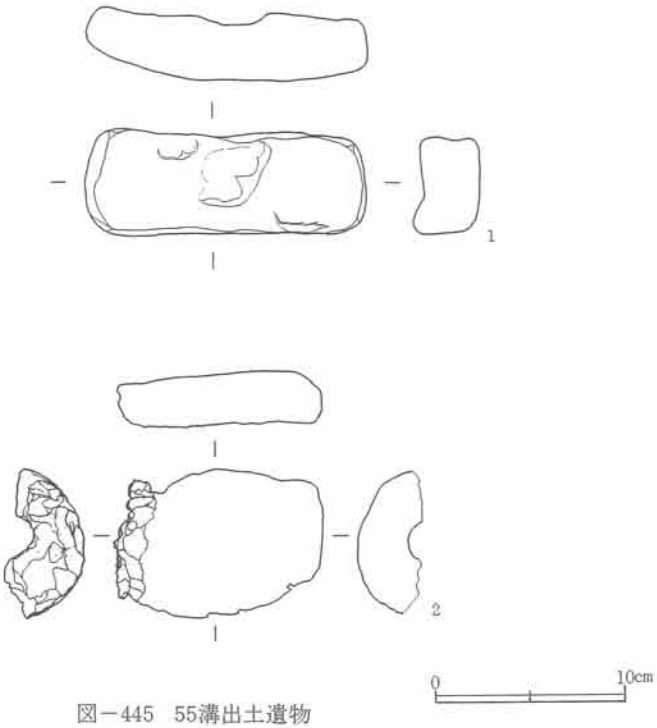
0 1 m

図－444 54号溝（45号溝）

位置 リ9からワ9まで東西方向に直線的に走る。 **規模** 現状で長さ83m、幅1～1.6m、深さ16～27cm。 **概要** 東端は49・50号溝の西1.5mから始まる。西端は谷地に落ちるものと見られる。53号溝と直交する形で、四囲を45・56・49・50号溝で囲まれた方形の区域を、中心から南北に2分する。走向はN－119°－E。覆土は砂質で、B軽石を含むとみられる。底部の固い所もある。 **重複関係** 住居跡・掘立柱建物跡及び45号溝を切り、53号溝に切られる。 （唐澤）

55号溝（5W－8）

位置　タ11からレ10にかけて所在する。東側の谷地へ向かう斜面上に立地する。北側は調査区域外に延びる。　**規模**　現状で長さ23m、幅1.1～1.5m、深さ15cm前後である。　**概要**　本台地の溝はお互いに有機的な関連性がうかがえるが、55号溝は52・61号溝と共に、他の溝と走向・覆土等の点で趣を異にする。覆土は砂質性が強いが、やや耕作土に近い面もある。走向はN－162°－E。　**遺物**　羽口、常滑様の大甕片、南北朝時代の五輪塔地輪が出土。　（近藤・唐澤）

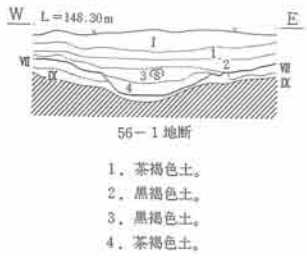


図－445　55溝出土遺物

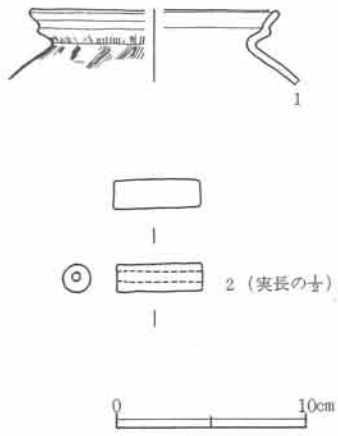
出土遺物（1）、凸面頂部はやや荒れるが、全体に磨滅する。人為的なものかどうか不明。羽口（2）　（唐澤）

溝全景（東から）

56号溝（5W－14）



図－446　56号溝



図－447　56号溝出土遺物

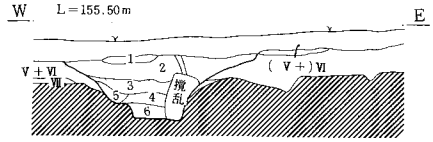
位置　北側はト6から直線的に南下し、上武国道予定地内まで続く。その南では検出されなかった。　**規模**　現状で長さ140m、幅0.9～1.4m、深さ35～50cm。　**概要**　未調査であるが、56号溝と46号溝の走向を延長するとほぼ直交する。また、47・48号溝とは平行する。チ3では59号溝を分岐する。覆土は砂質で、B軽石を含むものと見られる。走向はN－8°－Eである。　**遺物**　石田川期と国分期の土器片、管玉。　**重複関係**　重複するすべての住居を切る。（唐澤）

出土遺物　**土師器**　甕（1）、外面ハケ目は細く、浅く、弱い。　**石製品**　管玉（2）、滑石製。　（唐澤）

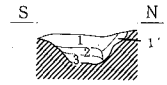
57号溝（5W－15）

位置　ヲ2。1号墳の東側周堀の法面から検出された。北側は周堀から先では確認されなかった。南側は古墳の東西方向地層断面の東側周堀内法面に見られるのを最南端とする（付図1）。　**規模**　現状で長さ8m、幅60cm前後、深さ10cm前後である。　**概要**　覆土は砂質の黒色土または黒褐色土で、周堀中のB軽石純層を切る。覆土の砂質分はB軽石とみられる。走向は概ねN－11°－Eである。　（唐澤）

58号溝（５W—17）



58－１地断



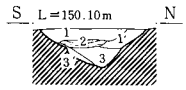
58－２地断

1．茶褐色土。砂質感強。Ⅰ層か。
1′．黒褐色土。ローム粒。１基調。
2．黒褐色土。砂質感あり。C軽石、二ツ岳系軽石。
3．黒灰色土。５枚の薄い固い層。ローム粒。砂質。
4．黒褐色土。砂質。しまり良。
5．暗褐色土。比較的多量のローム粒。
6．褐色土。ブロック状のローム主体。

図－448　58号溝　　0　1 m

位置　ヨ２からツ２まで、東西方向に直線的に走る。ツ２では崖状に深く落ち込んでおり、ここから台地東の谷地が始まるものと考えられる。 **規模**　長さ75m、幅・深さは残存状態の良い所で、それぞれ2.05mに70cmであった。 **概要**　西端は49・50号溝と接する所で立ち上がる。東側斜面ではこの溝より南に掘立はない。覆土はＢ軽石と見られる砂質性の強い黒褐色土。走向はＮ－109°－Ｅ。 **重複関係**　H380・418号住居、150号掘立、Ｆ249号土壙を切る。　（唐澤）

59号溝（５W—20）



59－１地断

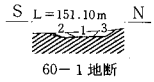
1．黒褐色土。砂質層。
1′．１＋ローム粒。
2．黒褐色土。砂質。２枚の固い薄層を含む。
3．黒褐色土。砂質。やや粘質。
3′．１＋ローム粒。

0　1 m

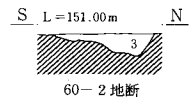
図－449　59号溝

位置　56号溝から分岐して、ト３からチ３にかけて検出された。西側の谷地へ向かう緩斜面を、直線的に東西に走る。西端は谷に落ちるものと見られる。 **規模**　現状で長さ20m、幅0.65～1.12m、深さ26～42cmを測る。 **概要**　走向はＮ－104°－Ｅで、56号溝とほぼ直交する。覆土は砂質土層で、Ｂ軽石を含むものとみられる。56号溝と同時期に掘削されたものであろう。 **重複関係**　東端でH457号住居跡を切る。　（唐澤）

60号溝（５W—21）



60－１地断



60－２地断

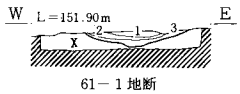
1．黒褐色土。砂質性強。少量のローム粒。
2．黒褐色土。黒色と砂質強。
3．黒褐色土。Ⅸ層ブロック。

0　1 m

図－450　60号溝

位置　ヌ３からル３にかけて検出された。遺構検出面からの深さが浅いため、東西両端の本来の位置は不明である。 **規模**　現状で長さ30m、幅0.7～1.2m、深さ６～24cmを測る。 **概要**　走向はＮ－118°－Ｅで、54号溝とほぼ一致する。図－430は東端が南へ折れるようになっているが、確証はない。覆土は砂質の強い黒褐色土で、Ｂ軽石を含むものとみられる。 **重複関係**　ヌ３でH104号土壙と重複する。土壙を切る。　（唐澤）

61号溝（５W—22）



61－１地断

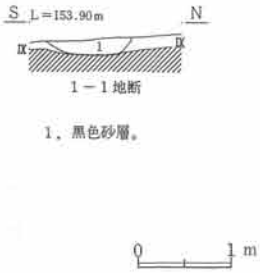
1．耕作土と同じ層。
2．黒褐色土。鉄分凝縮粒。
固くしまる。

0　1 m

図－451　61号溝

位置　カ５を、孤を描くように南北に走る。南北両端は、いずれも生活道路下に入り、その先については不明である。 **規模**　現状で長さ約30m、幅0.92～1.54m、深さ20～26cmを測る。 **概要**　覆土は耕作土とまったく同じで、新しい時期の掘削と推定される。底面は非常に固くなっている。 **重複関係**　49・50号溝及びH375号住居跡と重複する。いずれをも切っている（図－436）。　（唐澤）

溝状遺構１

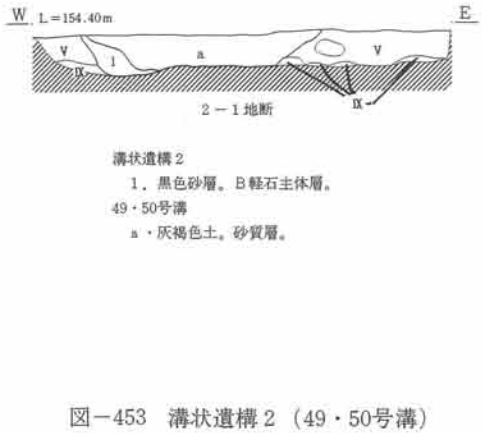


図－452　溝状遺構１

位置　ル７からヲ７にかけて所在する。46号溝の北4.5mの所に平行（東西方向）に走り、東端は53号溝南端と直交して切り合う。　**規模**　全長８mで、東西両端は明確に立ち上がる。幅は最大１m、深さは14cmを測る。　**概要**　非常に短い溝で、その用途については理解に苦しむ。覆土は黒色砂層で、B軽石を多量に含む。出土遺物等もなかった。　**重複関係**　H438号住居跡を切り、53号溝に切られる。　**その他**　溝状遺構２と似た形状。覆土を示す。　（唐澤）

溝状遺構全景（西から）

溝状遺構２



図－453　溝状遺構２（49・50号溝）

溝状遺構全景（南から）

位置　ワ７で、49•50号溝と重複して検出された。　**規模**　長さ6.5m、幅は最大2.2m以上、深さ43cmである。幅については、東半分を切られているため、不明である。　**概要**　果して溝であるかどうか不明であるが、長さの短い点や覆土が溝状遺構１と類似するので、溝状遺構２とした。覆土は溝状遺構１同様の黒色砂層で、これはB軽石とみられる。走向はN－32°－Eである。　**重複関係**　上記のとおり。　（唐澤）

8 土　　壙

概　要

芳賀東部団地遺跡全体で、約500余りの土壙が検出されている。今後整理が進む中で多少の変更が出るであろうが、その内訳をみると、縄文時代の土壙（J土壙と呼称する。以下同じ）103、古墳・奈良・平安時代の土壙（H土壙）118、浅間山噴出にかかるB軽石降下後の土壙（F土壙）279（井戸を含む）を教える。本報告書で対象となるのは、この内の古墳・奈良・平安時代のH土壙で、東側台地に係わる計80の土壙である。これの全体については、表20をご参照願いたいが、本文の収録に当っては、これを(1)、F・A降下前の土壙、(2)、長方形の土壙、(3)、方形の土壙、(4)、円形の土壙、(5)、2段に掘られた長方形の土壙、(6)、細長い土壙、(7)、不整形の土壙、(8)、その他の土壙の8つに分類し、計25の土壙を収録した。(8)のその他の土壙は、調査時にはF土壙と考えられていたが、出土遺物からみてH土壙の可能性もあるので、今回の分に収録することにした。

東側台地ではH土壙の他にJ土壙14、F土壙175（他12時期不明29）が検出されているが、これらの分布を見ると（付図4参照）、J土壙は高燥部分を中心に台地全体に分布する。F土壙は東側の谷地に向かう傾斜面上で58号溝の北側と、1号墳北側のル5付近、及び上武国道予定地の北側リ101～ル101付近の3カ所にまとまって分布する。これに対して、H土壙は調査区域全体に分布し、これといって顕著な特色はないが、比較的濃密に分布する所を上げれば、45・46・50・51号溝で囲まれた範囲と、リ101付近である。両者は竪穴式住居跡あるいは掘立柱建物跡が濃密に分布する所であるが、一方の濃密分布地の58号溝の北部の緩斜面では、極めて少ない所となっている。

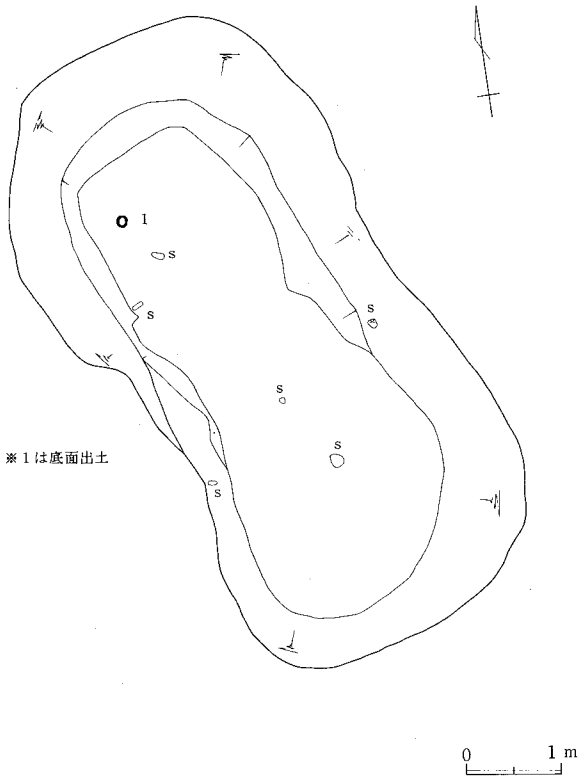
H土壙の性格については、大部分が不明と言わざるを得ないが、(8)のF182号土壙低面から完形の灰釉陶器と須恵器の埦が出土しており、これが副葬品とすれば、似た形状の(7)の土壙と共に墓壙とみることもできる。また、本文には収録していないが、(4)の円形の土壙の小規模のものは柱穴になるものも考えられる。

なお、芳賀東部団地遺跡全体のH土壙数に対して、東側台地の数が多いのは、調査方法の違いと考えられる。

（唐澤）

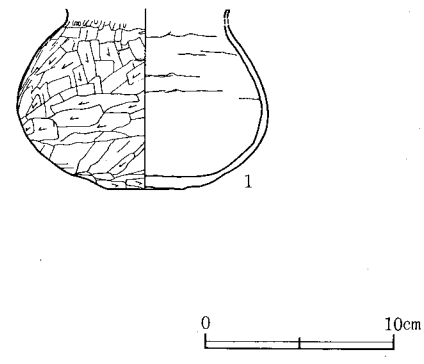
(1)　F・A降下前の土壙

H76号土壙（遺物）（5P－219）



図－454　H76号土壙

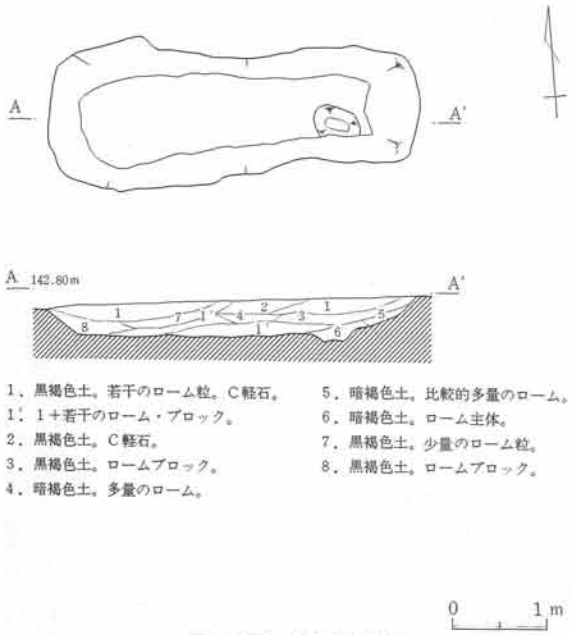
位置　1号墳の南西部の周堀と重複して、ル1に所在する。土壙の長軸方向と周堀がほぼ一致する。　**形状**　南北方向に長軸を取る細長い土壙で、中央部はややくびれる。規模は長さ7.1m、幅3.6m、長軸方向はN－33.5°－Wである。遺構確認面からの深さは最大99cmである。　**遺物**　床面から土師器壺胴部が出土した。　**その他**　1号墳周堀との重複関係は不明だが、遺物から石田川期の土壙と推測される。　（唐澤）



図－455　H76号土壙出土遺物

出土遺物　**土師器**　壺(1)　胴部最大径を中央より下に置く偏平ぎみな壺。口縁部を欠失する。外面は全面に粗いヘラ削り、内面には横ヘラナデを施す。外面部には縦ハケ目を残す。色調は褐色で、精選された胎土を用いる。（唐澤）

H78号土壙（5 P—225）

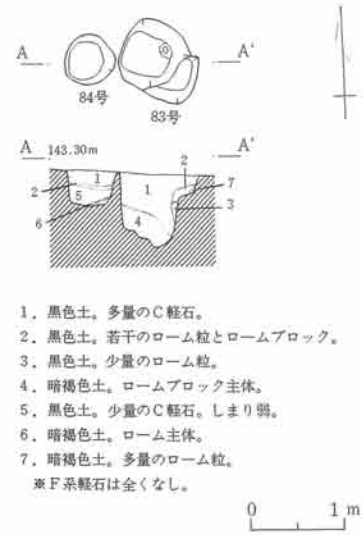


図－456　H78号土壙

位置　ナ108に所在する。周囲には多数の石田川期の住居跡と3基の古墳が分布する。　**形状**　東西方向に細長い土坑で、H76号土壙と似た形態を持つ。規模は長さ4.5m、幅1.15m、長軸方向はN—100°—Eである。　**遺物**　覆土中より石田川期の台付甕片が出土しただけである。　**その他**　覆土中はC軽石のみで、F・A降下前のものと見られる。　（唐澤）

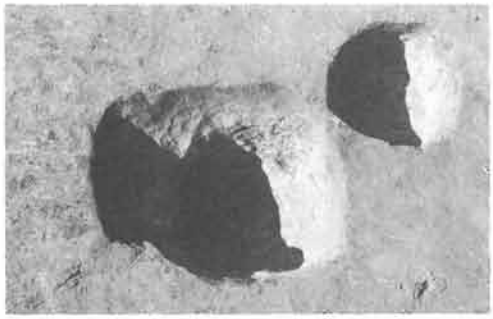
土壙全景

H83・84号土壙（5 P—232・233）



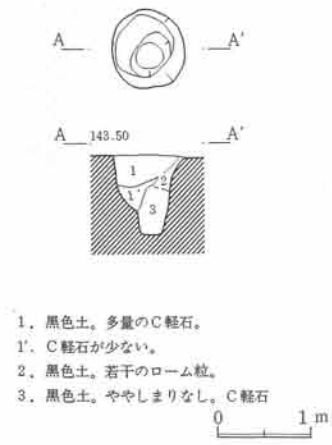
図－457　H83・84号土壙

位置　ム107。H428号住居跡の東1mに位置する。　**形状**　円形（84）または隅丸方形（83）をなし、後者は東壁側が2段になる。規模は前者で径53cm、後者で86×74cmである。深さはそれぞれ35cmと82cmである。　**その他**　両者の覆土中には、二ツ岳系の軽石が含まれず、F・A降下以前のものと見られる。位置的にH428号住居跡に関連するものとも見られる。　（唐澤）



土壙全景

H102号土壙（5 P—256）

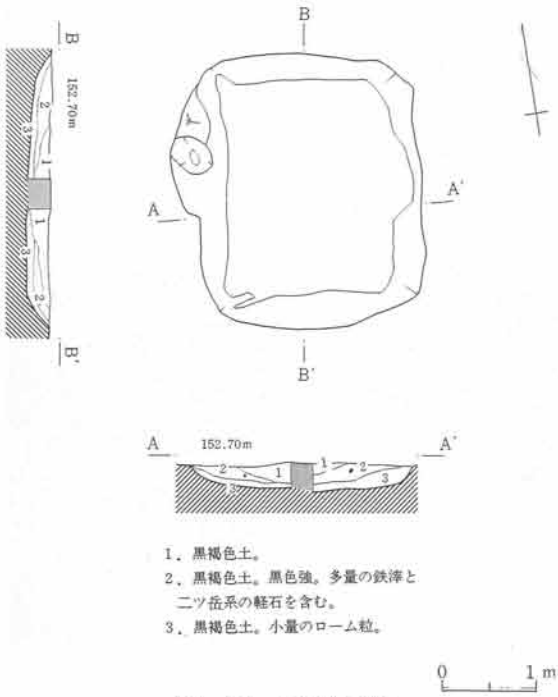


図－458　H102号土壙

位置　ム106。H428号住居跡の北約1mに所在する。　**形状**　円形の土壙で、底部は先細りになる。規模は径77cm、深さ94cmである。　**その他**　覆土中にはC軽石を含むが、二ツ岳系の軽石はまったく認められなかった。F・A降下以前の土壙と見られる。位置的に見て、H83・84号土壙と共に、石田川期のH428号住居跡と関連する土壙とも見られる。　（唐澤）

土壙全景

H77号土壙（５Ｐ－220）



図－459　H77号土壙

位置　周囲に国分期の住居跡の分布するワ６に所在する。西1.5mには、４号鉄製址がある。　**形状**　南北方向に若干長い方形で、規模は長さ2.89m、幅2.34mである。深さは最大30cmである。西壁中央やや北寄りに46×33cm、深さ（土壙上端から）34cmの小ピットが検出された。　**遺物**　覆土中から国分期の土師器・須恵器、若干の鉄滓が出土した。　（唐澤）

土壙全景

(2)　長方形の土壙

H60号土壙（５Ｐ－１４１）

図－460　H60号土壙

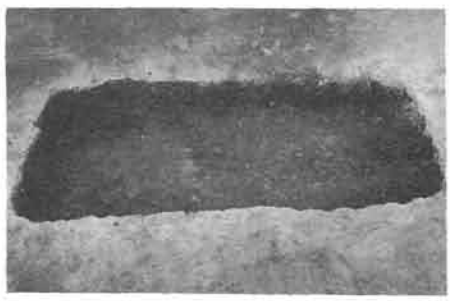
位置　ソ101。周囲には石田川期の住居跡を中心に、若干の国分期の住居跡が存在する。本土壙を含め３基の土壙がまとまって存在する。　**形状**　南北に長い長方形の土壙で、長さ2.05m、幅1.15m、深さ17cmである。床面には、深さ６cmの小ピットが東西に並ぶ。南壁沿いでは５cm程一段高い所があった。　**遺物**　覆土中から国分期の土師器・須恵器片が出土した。　（唐澤）

土壙全景

H81号土壙（５Ｐ－229）

図－461　H81号土壙

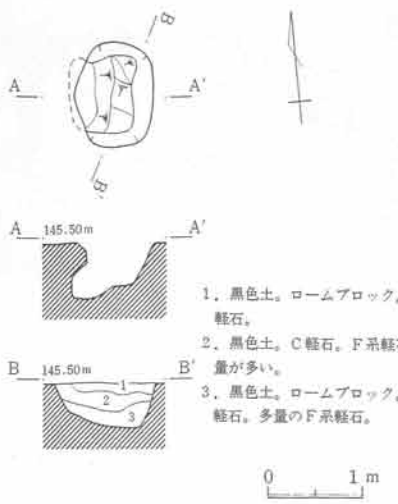
位置　四囲を溝に囲まれたヲ９に所在する。周辺には国分期の住居跡と掘立柱建物跡が濃密に分布する。　**形状**　南北に細長い長方形で、規模は長さ2.1m、幅0.9mである。深さは最大26cmで、床面は平坦である。壁は、ほぼ直に立ち上がる。　**その他**　遺物の出土はなかったが、覆土からみて、周囲の国分期の住居跡と同じ頃のものと見られる。　（唐澤）



土壙全景

(3) 方形の小土壙

H33号土壙

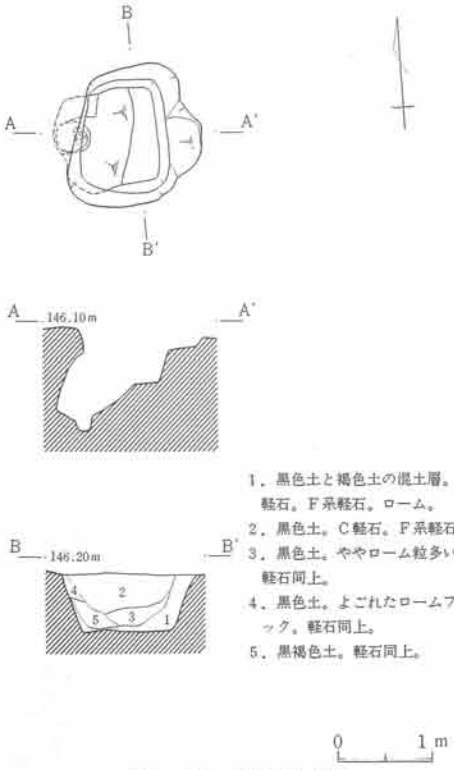


図一462　H33号土壙

位置　上武国道予定地の南レ106に、東西を39・40号溝に挟まれて所在する。周辺には、規模・形態の類似するH32～36号土壙が存在するが、住居跡や掘立柱建物跡はない。　**形状**　南北に長い隅丸の長方形で、西壁側はオーバーハングしている。規模は長さ2.23m、幅1.7m、深さ45cmである。長軸方向N—3.5°—E。西壁下は床面より更に15cm深い。　（唐澤）

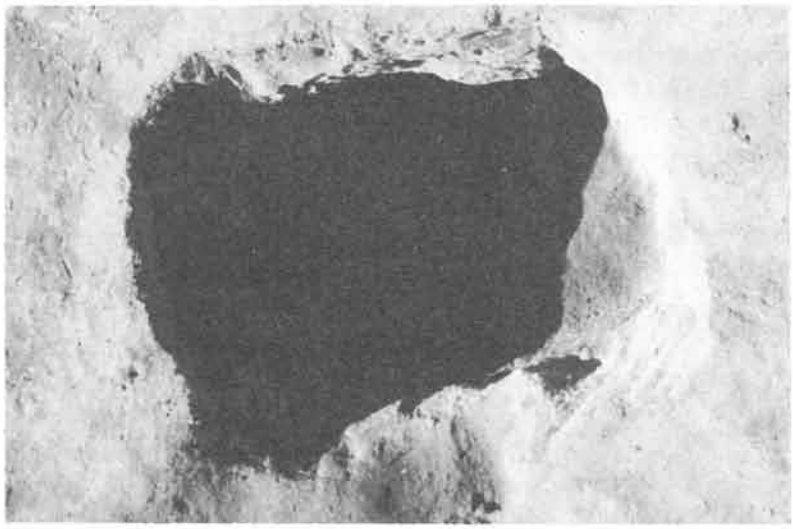
土壙全景

H34号土壙



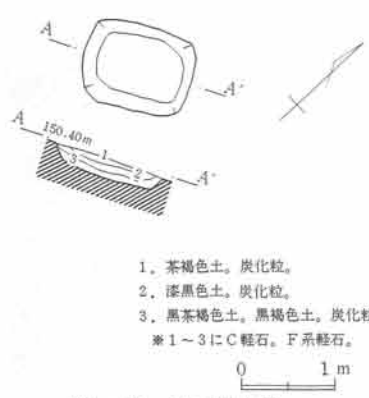
図一463　H34号土壙

位置　H33号土壙の北15m、タ105に所在する。　**形状**　南北方向に長軸を取る台形で、西壁側はオーバーハングしている。その底部は円形のピット状で、床面より50cm深い。規模は長さ2.17m、幅（最大）1.53m、床面の深さ46cm。長軸方向N—2.5°—W。　**その他**　遺物の出土はないが、覆土中の軽石から見て、F・A降下後のものである。　（唐澤）



土壙全景

H57号土壙（5 P—122）

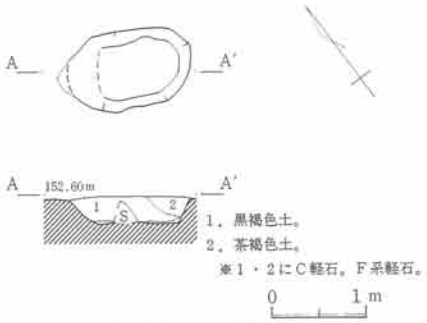


図一464　H57号土壙

位置　レ2。周囲には石田川期の住居跡が分布するが、北20mにある50号溝（東西）の北側には、真間・国分期の住居跡・掘立柱建物跡が存在する。　**形状**　隅丸の小形の長方形で、規模は長さ1.2m、幅0.9m、深さ20cmである。長軸方向はN—53.5°—Eである。　**その他**　覆土中にC軽石や二ツ岳系の軽石の他に焼土粒を含み、底面と側面に焼けがある。　（唐澤）

土壙全景

H63号土壙（5 P－148）



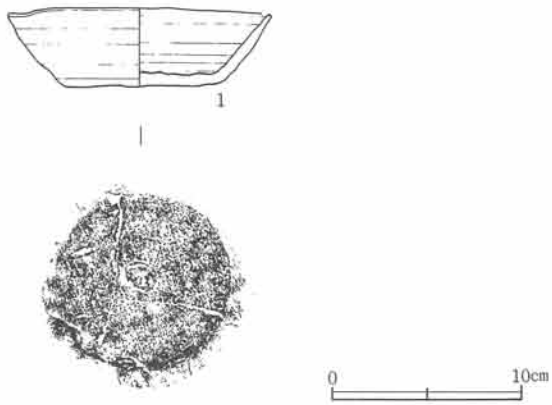
図－465　H63号土壙

位置　周囲に国分期の住居跡や掘立柱建物跡の分布するワ6に所在する。西1.5mには4号製鉄址が位置する。　**形状**　東西に細長い長円形で、西端は先がややすぼまる。規模は長さ1.4m、幅0.85m、深さ28cmである。長軸方向はN－60.5°－Wである。　**その他**　底面中央付近に25cm大の安山岩山石が出土した。覆土中には二ツ岳系の軽石を含む。　（唐澤）

土壙全景

H67号土壙（5 P－152）

図－466　H67号土壙

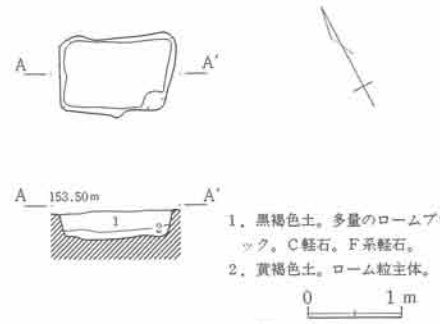


図－467　H67号土壙出土遺物

位置　ワ5。周囲には国分期の住居跡や掘立柱建物及び4号製鉄址が存在する。本土壙の南に、ほぼ同じ形態・規模の小土壙が、4個まとまってある。　**形状**　南北に細長い台形の土壙で、規模は長さ1.03m、幅（最大）0.64m、深さ15cmである。長軸方向はN－34.5°－E。　**遺物**　北西隅から10cm浮いて須恵器坏が出土した。　**その他**　覆土中には二ツ岳系の軽石を含む。　（唐澤）

出土遺物　**須恵器**　坏（1）、ロクロ整形。切り離し技法は回転ヘラ切りで、その後周辺部回転ヘラ削り調整。厚い器壁で、焼成はやや甘い。色調は黒みがかった灰色。　（唐澤）

H86号土壙（5 P－238）

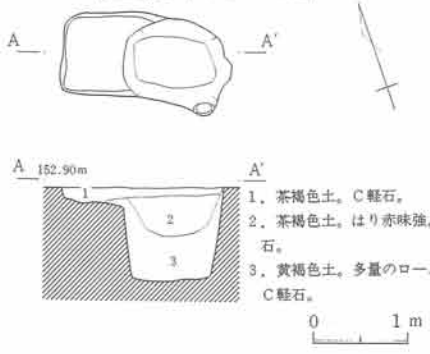


図－468　H86号土壙

位置　四囲を溝に囲まれた区域内の南西隅付近、ワ7に所在する。西3mに5号製鉄址、南2mに46号溝が東西に走る。周囲には国分期の住居跡や掘立柱建物跡が分布する。　**形状**　東西に長い長方形の小土壙で、規模は長さ1.23m、幅0.75m、深さ31cmである。長軸方向はN－114.5°－E。壁の立ち上がりはほぼ直立する。　（唐澤）

土壙全景

H100号土壙（5 P－253）

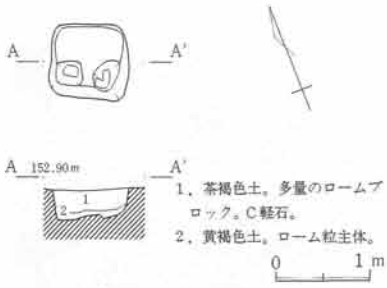


図－469　H100号土壙

位置　ヲ6。一群の掘立柱建物跡の西端に位置する。　**形状**　長さ1.8m、幅0.87mの土壙で、東半分を一段深く掘る。深さは西半部で17cm、東半部で96cmである。西半部と東半部は別個の小土壙が重複していると見ることも可能である。長軸方向はN－56.5°－W。　**その他**　本土壙は、周囲に分布する土壙から見て、国分期のものと推測される。　（唐澤）

土壙全景

H101号土壙（5 P—254）



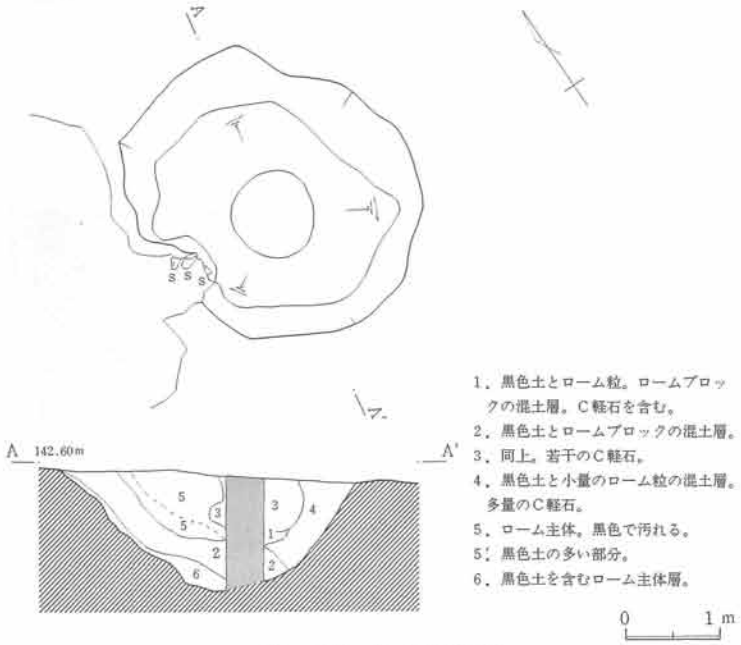
図－470　H101号土壙

位置　ヲ6。H100号土坑の南1mに隣接する。　**形状**　隅丸のほぼ正方形を呈す小土壙で、規模は長さ80cm、幅75cm、深さ28cmである。長軸方向はN—27.5°—Eである。南東隅と南西隅には、深さ12cmの小ピットがある。　**その他**　周囲に分布する遺構から見て、本土壙は国分期のものと考えられる。　（唐澤）

土壙全景

(4)　円形の土壙

大H 7号土壙

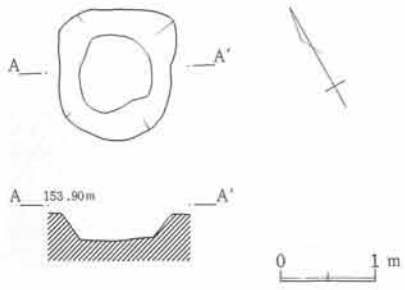


図－471　大H 7号土壙

位置　タ109。本土壙を北限として、南に国分期の遺構がまとまって分布する。　**形状**　不整円形の大型土壙で、規模は3.81×3.19m、深さ1.1mを測る。　**遺物**　覆土中から国分期の土師器甕（コ字口縁になりきらず）、同坏（底部に丸味を残す）、炭化材、クルミ等が出土した。　**重複関係**　H271号住居跡より旧い。　**その他**　人為的埋てん。　（唐澤）

土壙全景（手前部分）

H96号土壙（5 P—248）

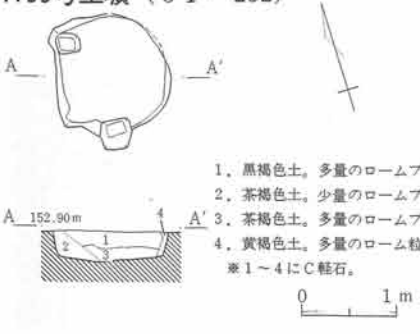


図－472　H96号土壙

位置　四囲を溝に囲まれた区域内の南東の隅付近ワ7に所在する。東2mには溝状遺構2が位置する。この区域内には、国分期の住居跡と掘立柱建物跡が、高い密度で分布すす。　**形状**　上端が隅丸方形ぎみの円形で、径は135cmないし120cmである。深さは33cmを測る。　**その他**　周囲の遺構からみて、国分期の土壙と考えられる。付近に類似の3土壙。（唐澤）

土壙全景

H99号土壙（5 P—252）



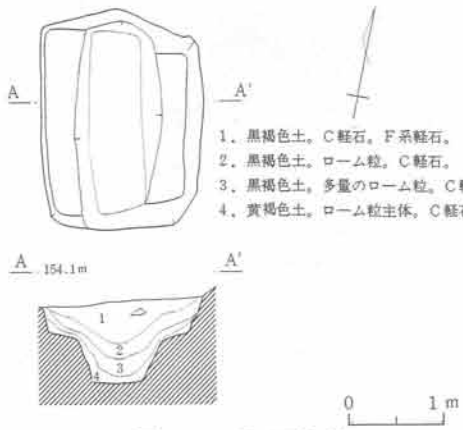
図－473　H99号土壙

位置　ヲ7。一群の掘立柱建物跡群の北部、176号掘立柱建物跡と重なって存在する。北4mには46号溝が東西に走る。　**形状**　円形の土壙で、径は約140cm前後、深さ30cmを測る。西壁のみ直線。南壁と北壁沿い床面には、整った長方形の小ピットがある。深さは、南で20cm、北で7cmである。　**その他**　周囲の遺構から国分期と見られる。　（唐澤）

土壙全景

(5) 2段に掘られた長方形の土壙

H79号土壙（5 P－227）



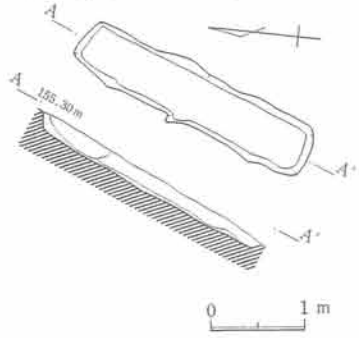
図－474　H79号土壙

位置　ワ9。49・50号溝の東に接して所在する。溝の西方は住居跡等が濃密に分布するが、東方は51号溝まで遺構の少ない区域となっている。　**形状**　南北に細長い長方形で、東西両壁を2段に掘る。規模は長さ2.64m、幅1.74m、深さ60cm。　**重複関係**　北側をH454号住居跡と切り合う。住居跡の石材がカマド材とすれば、本土壙が旧い。　**その他**　国分期か。　（唐澤）

土壙全景

(6) 細長い土壙

H92号土壙（5 P－244）



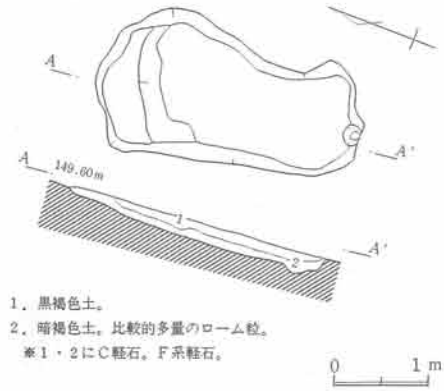
図－475　H92号土壙

位置　ル9。53号溝と54号溝の交点の北西付近に所在する。付近には国分期の住居跡と掘立柱建物跡が濃密に分布する。　**形状**　幅の割に南北に非常に細長い土壙である。規模は長さ2.7m、幅0.6m、深さ15cmである。長軸方向はN－20.5°－Eである。　**その他**　周囲の住居跡等から判断して、国分期の土壙と考えられる。　（唐澤）

土壙全景

(7) 不整形の土壙

H62号土壙（5 P－143）

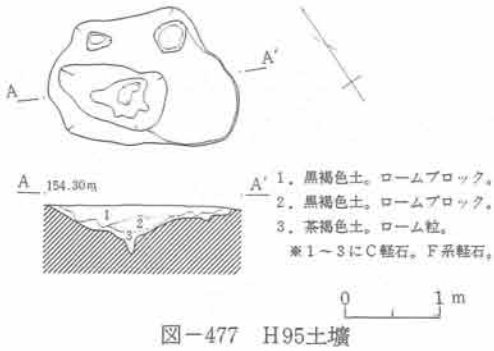


図－476　H62号土壙

位置　ソ101。ここは石田川期住居跡の分布区域だが、東7mには国分期のものも存在する。本土壙を含め3個の土壙がまとまってある。　**形状**　南北に細長い土壙で不整形を呈するが、あるいは長方形を意図したものか。規模は長さ3m、幅1.58m、深さ最大30cmで、長軸方向はN－3°－Eである。北壁側は15cm程一段高い。　**その他**　覆土中に二ツ岳系の軽石。　（唐澤）

土壙全景

H95号土壙（5 P－247）

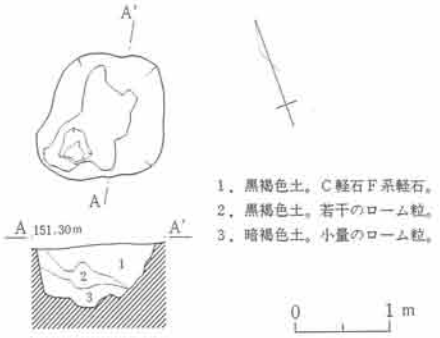


図－477　H95土壙

位置　ル8。周囲には国分期の住居跡や掘立柱建物跡が濃密に分布するが、本土壙から西側はほとんど遺構のない区域となっている。　**形状**　東西に長軸を取る不整形の土壙で、規模は東西2m、南北1.35mである。深さは35cmを測る。底面には3個のピットが検出された。深さは北壁沿いのもので3～8cm、南西隅は約40cm。　**その他**　国分期か。（唐澤）

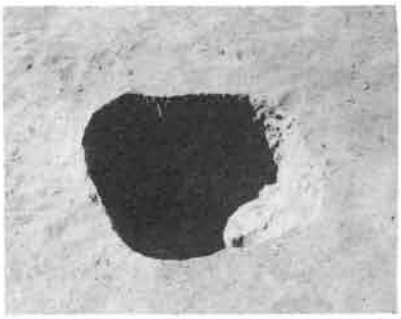
土壙全景

H103号土壙（5 P－260）



図－478　H103号土壙

位置　ヌ3。石田川期の住居跡と真間・国分期の住居跡の、東西方向の境界線付近に位置する。　**形状**　隅丸方形に近い形を呈するが、下端等から見て不整形の土壙とするのが妥当である。底面も凹凸が激しい。規模は東西1.3m、南北1.25m、深さ62cmを測る。　**その他**　覆土中に二ツ岳系の軽石を含むので、F・A降下後のものである。　（唐澤）



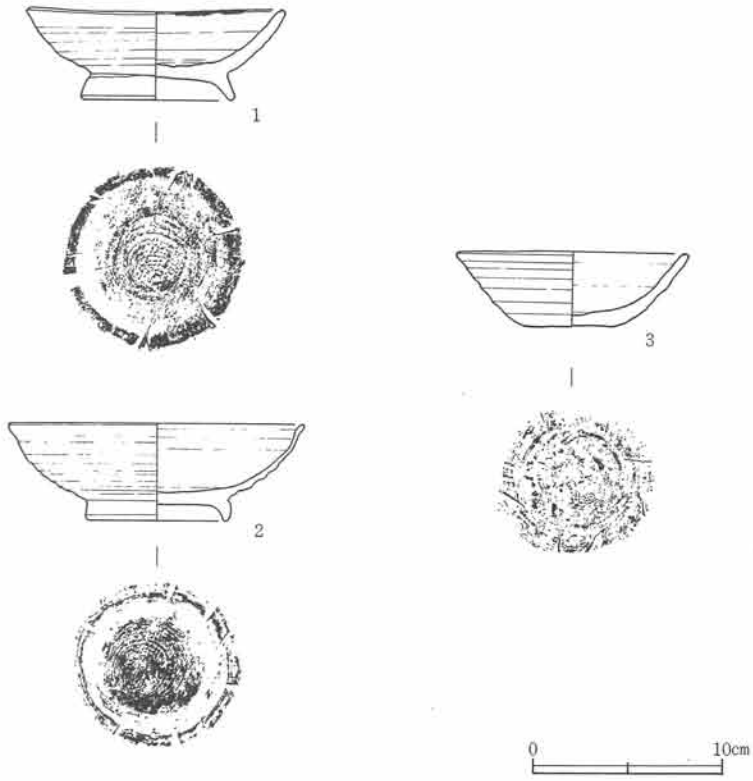
土壙全景

(8)　その他の土壙

F182号土壙（5 P－128）

図－479　F182号土壙

位置　ソ3。東の谷地へ向かう傾斜面上に立地する。この付近は、真間・国分期の住居跡・掘立柱建物跡を中心に分布する。　**形状**　等高線の走向に合わせて南北に長軸を取る長方形で、規模は長さ2.5m、幅1.05m、深さ53cmを測る。　**遺物**　副葬品とみられる灰釉陶器と須恵器の埦・坏が床面から出土した。　**その他**　調査時にはB軽石降下後としたが、再考を要する。　（唐澤）



図－480　F182号土壙出土遺物

出土遺物　　**須恵器**　坏（3）　ロクロ整形。切り離し技法は糸切り（未調整）。小さめの底部から直線的にのびる体部を持つ。厚い器壁で、やや甘い焼成。色調は灰白色。底部から体部下半に黒斑。　埦（1）　高い付高台と浅めに内彎する体部を持つ。厚い器壁で、やや甘い焼成。体部外面に黒斑。色調・つくり・焼成・胎土等は3とまったく同じ。形態は2の灰釉陶器埦に似る。　**灰釉陶器埦**（2）、付高台。底部には回転糸切り痕を残す。内面には積み重ね焼痕、灰釉（不透明釉）は口縁部につけがけ。体部外面に顕著なロクロ痕。色調は灰白色。丸石2号窯式に相当。　（唐澤）

表—22 土壙一覧表

不整形で方位の入っているものは、長軸の概ねの方向である。 (単位＝cm)

名　称	位　置	平面形	長軸長	短軸長	深　さ	方　位	備　考
H大P－7	タ—109	不整円形	381	319	110		H—271に続く
HP—32	レ—105	不整円形	162	148	東46西76	N—14°—E	
HP—33	レ—106	長円形	223	170	45	N—3.5°—E	
HP—34	タ—105	不整形	217	152.5	46	N—2.5°—W	
HP—35	タ—105	不整形	126	82	23	N—0°	
HP—36	レ—106	長円形	143	104	37	N—12°—E	
HP—38	ヲ—106	不整形	277	114	39		不整のため測定不能
HP—39	ル—106	不整形	187	116	30	N—96°—E	
HP—40	ヲ—105	不整形	171	149	27	N—22.5°—E	
HP—41	ワ—110	長円形	239	99	39	N—22.5°—E	
HP—42	ワ—110	不整形	254	209	91		不整のため測定不能
HP—43	不　明	長円形	102	66.5	不　明	N—18.5°—E	
HP—44	ヲ—12	長方形	200	110	33	N—113.5°—E	5 P－2
HP—45	カ—13	長円形	52	43	27	N—53.5°—W	5 P－6
HP—46	カ—11	円　形	128	115	7		5 P－8
HP—47	タ－9	長方形	70	36	25	N—16.5°—E	5 P—59
HP—48	レ—11	不整方形	70	45	18		5 P—66 不整のため測定不能
HP—49	レ—10	円　形	45	35	22		5 P—67
HP—50	レ－7	円　形	55	50	57		5 P—77
HP—56	タ－6	長方形	250	180	15	N—21.5°—E	5 P—110
HP—57	レ－2	長方形	120	90	20	N—53.5°—E	5 P—122
HP—58	レ－1	長方形	100	65	11	N－6°—E	5 P—124
HP—59	ソ－2	長円形	70	50	2	N—32.5°—E	5 P—126
HP—60	ソ—101	長方形	205	115	15	N—19.5°—W	5 P—141
HP—61	ソ—101	長方形	200	142	20	N—25.5°—W	5 P—142
HP—62	ソ—101	不整方形	300	158	30	N－3°—E	5 P—143
HP—63	ワ－6	長円形	140	85	28	N—60.5°—W	5 P—148
HP—64	ワ－5	長方形	115	60	15	N—28.5°—E	5 P—149
HP—65	ワ－5	長方形	100	54	12	N—35.5°—E	5 P—150
HP—66	ワ－5	長円形	150	75	18	N－3°—E	5 P—151
HP—67	ワ－5	長方形	103	64	15	N—34.5°—E	5 P—152
HP—68	ワ－5	長円形	145	80	15	N—44.5°—E	5 P—153
HP—69	ル－4	長円形	115	55	5	N—43.5°—E	5 P—173
HP—70	リ—101	長方形	222	175	46	N—86°—E	5 P—193
HP—71	リ—101	不整円形	140	113	60		5 P—199 不整のため測定不能
HP—72	リ—101	長方形	105	83	23	N—93.5°—E	5 P—200
HP—73	リ—101	隅丸方形	95	60	54 36	N—89°—E	5 P—201
HP—74	ヌ—101	不整円形	165	140	34		5 P—203 不整のため測定不能
HP—75	リ—101	方　形	88	83	52	N－3°—E	5 P—204
HP—76	ル－1	長円形	710	360	25	N—33.5°—W	5 P—219
HP—77	ワ－6	隅丸方形	289	234	29	N—7.5°—E	5 P—220
HP—78 （FA以前）	ラ—107	長方形	450	115	39	N—100°—E	5 P—225

名　称	位　置	平面形	長軸長	短軸長	深　さ	方　位	備　考
HP—79	ワ—9	長方形	2.64	1.74	80	N—32°—E	5P—227
HP—80	ワ—8	長方形	250	100	35	N—12.5°—E	5P—228
HP—81	ヲ—9	長方形	210	90	22	N—21°—E	5P—229
HP—82	ヲ—9	隅丸方形	162	88	23		5P—230 位置不明
HP—83（FA以前）	ム—107	方形	86	74	82	N—21.5°—E	5P—232
HP—84（FA以前）	ム—107	円形	53	52	35		5P—233
HP—85	ワ—9	長方形	210	120	47	N—62.5°—W	5P—237
HP—86	ワ—7	方形	123	75	31	N—114.5°—E	5P—238
HP—87	ワ—7	不整形	93	76	52		5P—239 不整のため測定不能
HP—88	ヲ—10	不整形	185	103	29	N—27°—W	5P—240
HP—89	ル—10	不整形	105	80	26		5P—241 不整のため測定不能
HP—90	ル—9	不整形	180	130	40	N—15°—W	5P—242
HP—91	ル—9	三角形	220	120	33		5P—243
HP—92	ル—9	長方形	270	60	15	N—20.5°—E	5P—244
HP—93	ル—9	長方形	150	80	15	N—12.5°—E	5P—245
HP—94	ル—9	不整形	130	92	16	N—32°—W	5P—246
HP—95	ル—8	不整形	200	135	35		5P—247
HP—96	ワ—7	円形	135	120	31		5P—248
HP—97	ヲ—8	長円形	130	102	16	N—98°—E	5P—249
HP—98	ヲ—10	不整形	110	60	39	N—96°—E	5P—251
HP—99	ヲ—7	円形	140	117	30		5P—252
HP—100	ヲ—6	不整形	180	87	96	N—56.5°—W	5P—253
HP—101	ヲ—6	隅丸方形	80	75	28	N—27.5°—E	5P—254
HP—102（FA以前）	ム—106	円形	77	77	94		5P—256
HP—103	ヌ—3	不整形	130	125	62		5P—260
HP—104	ヌ—3	長方形	180	124	49	N—35°—E	5P—263
HP—105	ヌ—2	不整形	136	130	75以上		5P—264 不整のため測定不能
F—182	ソ—3	長方形	250	105	53		5P—128 HPの可能性が大

Ⅶ 化 学 分 析

1．芳賀東部団地遺跡出土土器の胎土分析

奈良教育大学　三 辻 利 一

1 はじめに

須恵器と違い窯跡の残っていない土師器は現段階では胎土分析によって産地を同定することは難しい。しかし、胎土が同じかどうかは判定できる。同じ胎土の土師器は同じ産地でつくられた可能性をもち、異なる胎土の土師器は別の産地でつくられたものと考えられる。このような考え方にしたがって、芳賀東部団地遺跡出土土師器が分析された。

2 分 析 法

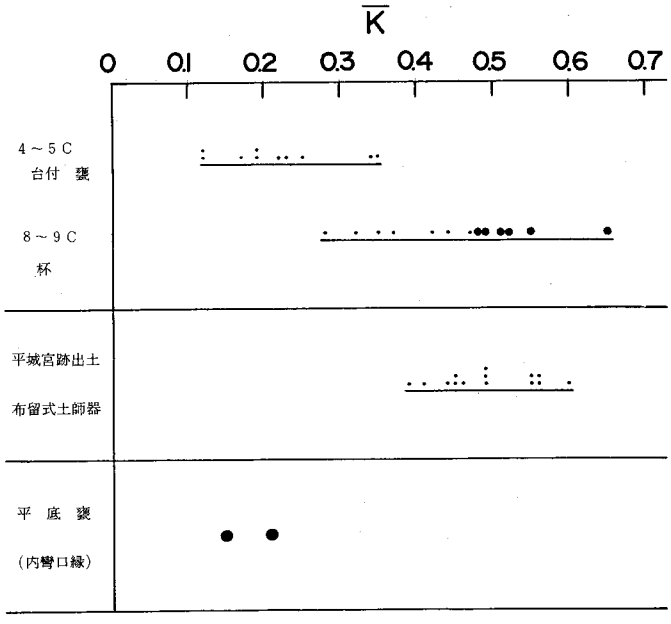
芳賀東部団地遺跡出土土器資料は前橋市教育委員会から、また、平城宮出土布留式土師器は奈良国立文化財研究所から提供された。

資料土器片は表面を研磨したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で200メッシュ程度に粉砕された。粉末試料は直径2cmの塩化ビニール製リングに入れ、約15トンの圧力を加えてコイン状のペレットを作成し、蛍光X線分析用試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）の5元素が定量された。定量分析には岩石標準試料JG—1を使用した。分析データはJG—1による規格化値で示された。規格化値は%濃度やppm濃度と同じで一種の絶対濃度である。規格化値が大きいということは含有量が多いことを示す。したがって、規格化値で胎土の違いを示すことができる。

3 分 析 結 果

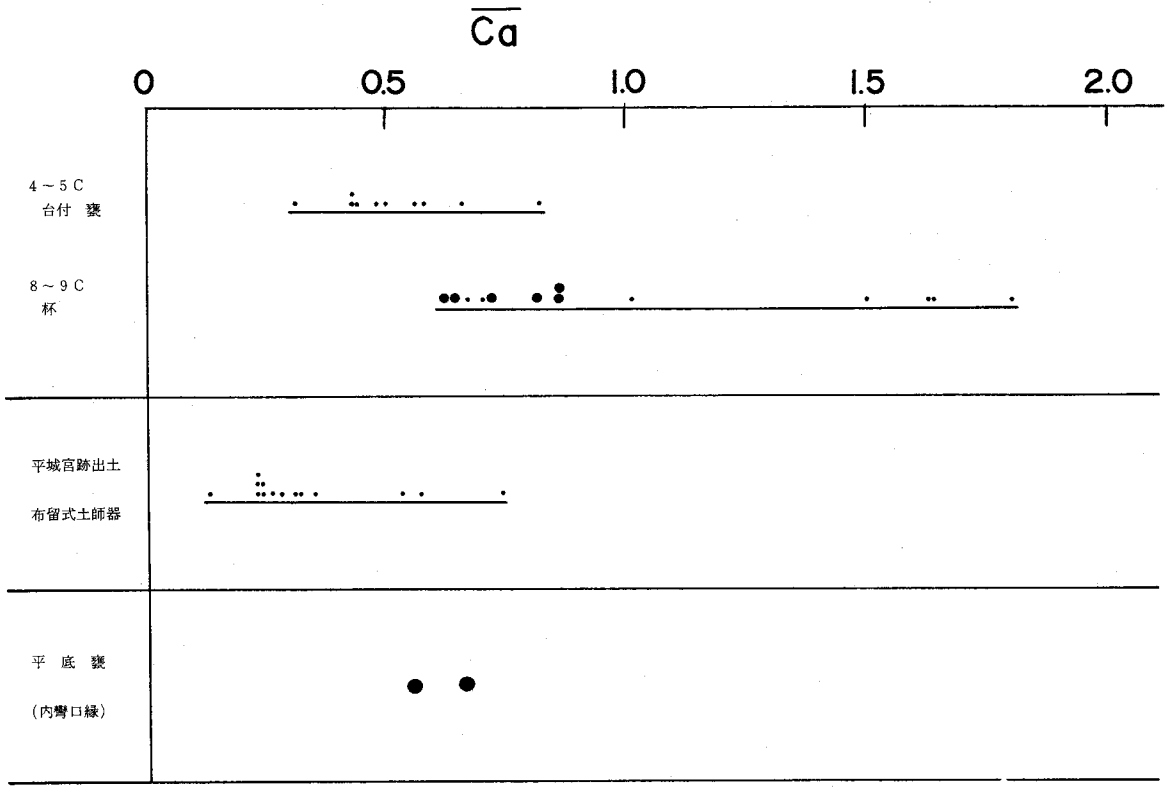
芳賀東部団地遺跡出土土器の分析データを表23に、また、平城京出土布留式土師器の分析データを表24に示す。分析した土器資料の器形などは備考欄に記入してある。これらのデータから各因子ごとに土師器胎土の違いを比較してみよう。

図481には、K量を比較してある。芳賀東部団地遺跡出土土師器のうち、4～5世紀の台付甕と8～9世紀の坏胎土の間にははっきりした相違が認められる。台付甕にはK量が少ないのに対し、坏にはK量が多い。さらに、坏の中でも、ラセン状暗文を施した坏にはK量は少なく、暗文をもたない坏にはより多い。両者のK量にははっきりした相違が認められる。一方、平城宮出土布留式土師器のK量は芳賀東部団地出土の8～9世紀の坏胎土に対応する。そうすると、芳賀東部団地遺跡から出土した内湾口縁の平底甕のK量は少なく、台付甕に対応することが分かる。台付甕は関東産と考えられているから、平底甕も胎土からみて関東産と推定される。

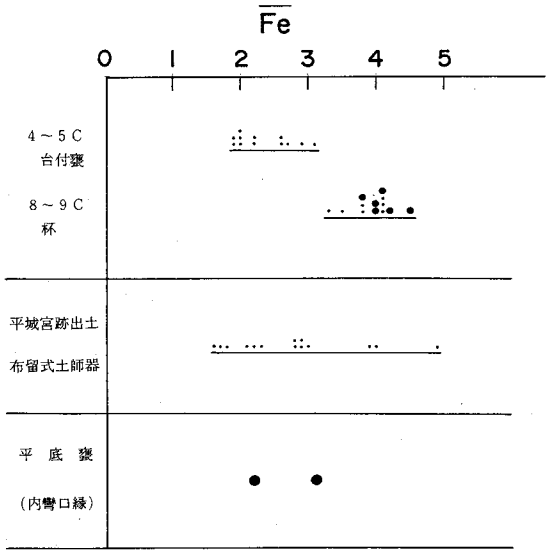


図－481　芳賀東部団地遺跡出土土師器のK量

図482には Ca 量を比較してある。台付甕の Ca 量は少ないのに対し、坏の Ca 量は多い。また、坏のうちでも、暗文のない土師器の方が暗文のある土師器より Ca 量が少ない傾向がある。平城宮出土布留式土師器の Ca 量は台付甕に対応する。そうすると、芳賀東部団地遺跡出土の平底甕の胎土は平城宮出土の一部の布留式土師器の胎土に対応するが、むしろ、芳賀東部団地遺跡出土の台付甕に対応するといった方が



図－482　芳賀東部団地遺跡出土土師器のCa量



図－483　芳賀東部団地遺跡出土土師器のFe量

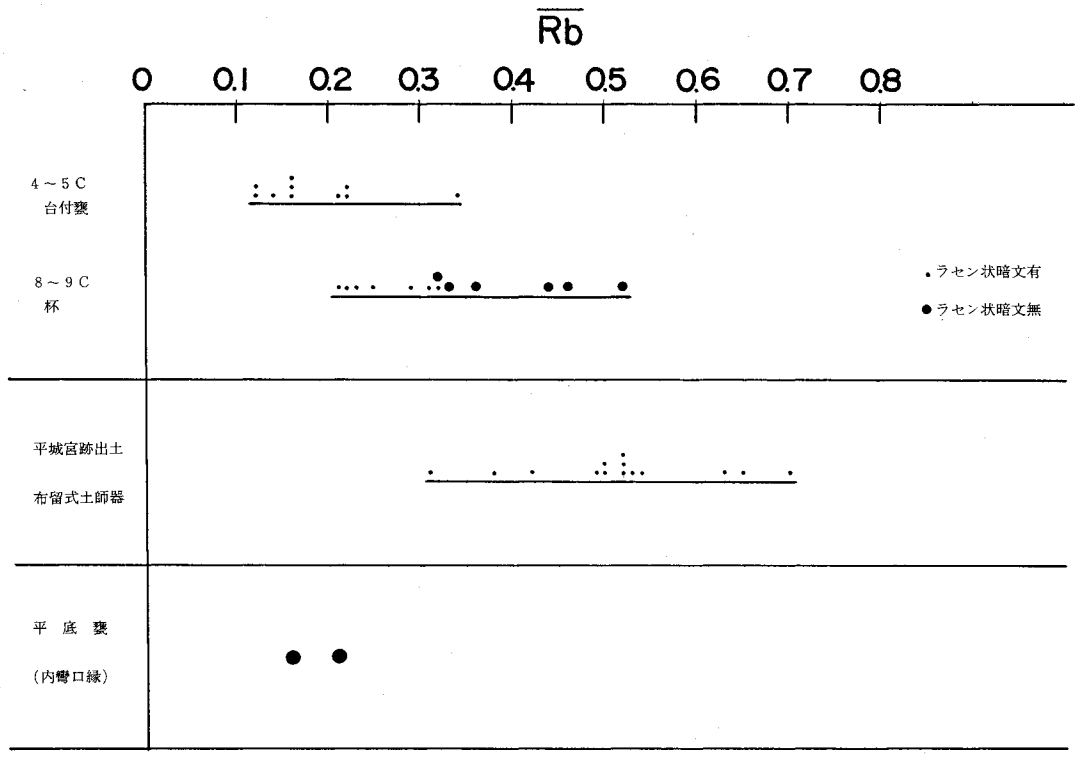
よい。したがって、K量でも、Ca量でも台付甕に対応することになる。

図483にはFe量を比較してある。Fe量は台付甕には少なく、坏には多い。しかも、暗文のない坏にはさらに多い。このように、種々の因子で暗文のある坏と暗文のない坏胎土には明確な差違が認められた。一方、平城宮出土布留式土師器のFe量はかなりばらついているが、大部分のものはFe量が少なく台付甕に対応する。そうすると、平底甕はFe量でも台付甕に対応することが分かる。

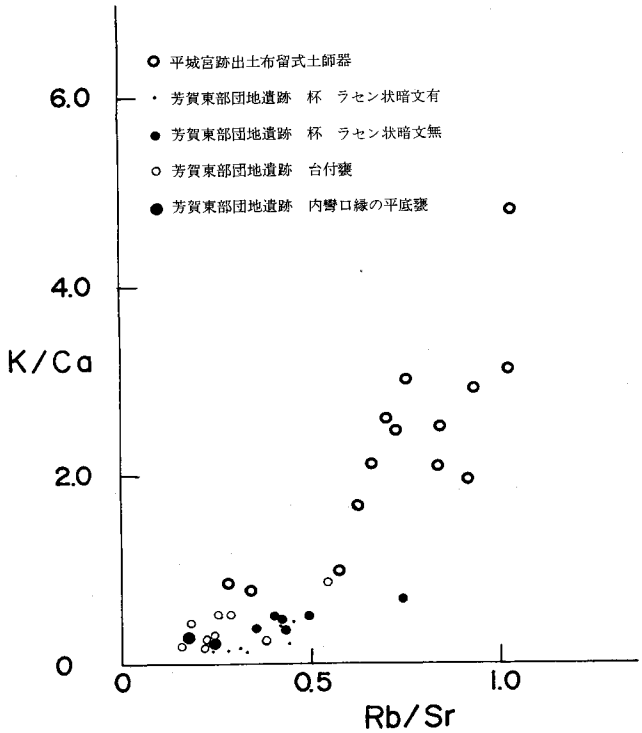
図484にはRb量を比較してある。この図ではRb量が台付甕、ラセン状暗文のある坏、暗文のない坏、平城宮の布留式土師器の順に多くなることが分かる。須恵器ではRb量が少ないのはフォッサマグナの東側の須恵器の特徴である。一般に、この傾向は土師器、弥生土器にも認められる。この点からは芳賀東部団地遺跡出土の台付甕は関東型、逆に、平城宮の布留式土師器は西日本型と云えるだろう。また、Rb量でも平底甕の胎土は台付甕に対応し、関東産であることを示唆する。

表23・24より、Sr量には有意な差違が認められないので、Sr量の図は省略した。

最後に、K/Ca ～ Rb/Sr 分布図を図485に示す。花こう岩をはじめ、砂、火山灰、粘土、種々の土器でKとRb、また、CaとSrの間に正の相関関係があることが見つけられている。その結果、K/Ca ～ Rb/Srの間にも正の相関関係が成り立つ。図485に分布する点はおおよそ右上がりの直線に沿って分布していることが分かる。すなわち、K/Ca ～ Rb/Srの間に正の相関があることを示す。そして、平城宮出土布留式土師器は右上半部分に、また、芳賀東部団地遺跡の土師器は左下隅にまとまって分布する。右上半部分は西日本産土器の分布する領域であり、また、左下隅はフオッサマグナから東側の土器の占める領域である。したがって、芳賀東部団地遺跡の土師器はすべて関東産と推定される。勿論、



図－484　芳賀東部団地遺跡出土土師器のRb量



図－485　芳賀東部団地遺跡出土土師器のK/Ca－Rb/Srの分布図

幾内系の要素を持つとされる内彎口縁の平底甕も胎土は関東産である。

以上の結果、土器型式からみて西日本産とされる平底甕はどの因子をみても胎土は関東産であり、まず、西日本産である可能性はない。さらに、芳賀東部団地遺跡出土の坏胎土はラセン状暗文のある土師器と暗文のない土師器では異なり、各々、産地は別であることは明瞭である。しかも、両者とも図485では関東領域に分布しており、関東産であることには間違いない。

台付甕には単口縁、S字状口縁のものと台部に折り返しのあるものとないものの両者含まれているが、胎土には殆んど差違は認められない。したがって、同一産地のものか、別産地のものが混じっているのかの判別はできない。

なお、芳賀東部団地遺跡出土灰釉陶器の分析データも表23に示してあるが、いずれもRb量が多く、Sr量が少ない典型的な西日本型胎土を有する。しかも、Fe量がきわめて少ないという美濃地方産陶質土器の特徴をもつので、間違いなく美濃産であろう。しかし、美濃地方の窯跡出土灰釉陶器の胎土分析データはまだ出されておらず、現段階ではどの窯のものかは不明である。表23の分析値のばらつきからみて、必ずしも同一窯跡のものではなく、いくつかの窯跡のものが含まれていると推定される。

表—23　芳賀東部団地遺跡出土土器の胎土分析データ

※備考欄の「住居名＋数字」はその住居跡の遺物番号を示す。

試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	K/Ca	Rb/Sr	備考
1	0.22	0.43	1.9	0.12	0.46	0.43	0.19	土師器４C後半～５C前半、台付甕台部（折り返しなし）H434号住－３
2	0.25	0.44	2.2	0.22	0.56	0.46	0.29	〃　〃　（　〃　）H455号住－８
3	0.35	0.56	2.9	0.16	0.46	0.50	0.25	〃　〃　（　〃　）H467号住－６
4	0.23	0.58	2.6	0.21	0.61	0.32	0.24	〃　台付甕口縁部（単口縁）H456号住－３
5	0.12	0.43	2.6	0.22	0.40	0.23	0.39	〃　台付甕（S字状口縁）H382号住
6	0.19	0.48	2.0	0.16	0.50	0.32	0.23	〃　〃　（　〃　）H412号住
7	0.17	0.50	1.9	0.16	0.53	0.28	0.23	〃　〃　（　〃　）H417号住
8	0.19	0.82	2.7	0.14	0.63	0.19	0.16	〃　〃　（　〃　）H431号住
9	0.34	0.31	2.0	0.34	0.45	0.88	0.55	〃　〃　（　〃　）H431号住
10	0.12	0.66	2.0	0.12	0.55	0.14	0.15	〃　〃　（　〃　）H431号住－９
11	0.15	0.55	2.2	0.21	0.65	0.22	0.23	〃　内彎口縁の平底甕 H432号住
12	0.21	0.66	3.1	0.16	0.61	0.26	0.19	〃　〃　１号墳－２
13	0.35	1.80	3.8	0.23	0.69	0.16	0.24	土師器８C後半～９C前半、ラセン状暗文坏 H279号住－１
14	0.42	1.63	4.1	0.29	0.47	0.21	0.44	〃　〃　H296号住－１
15	0.28	1.01	4.1	0.21	0.54	0.18	0.31	〃　〃　H358住－１
16	0.44	0.70	3.8	0.32	0.60	0.41	0.42	〃　〃　H359号住－６
17	0.32	1.50	3.5	0.25	0.58	0.14	0.33	〃　〃　H370号住－１
18	0.37	1.64	3.3	0.22	0.61	0.15	0.28	〃　〃　H439号住－１
19	0.47	0.67	4.1	0.31	0.54	0.46	0.45	〃　〃　H440号住－20
20	0.51	0.86	3.8	0.46	0.83	0.38	0.45	〃　暗文持たない坏 H279号住
21	0.49	0.85	4.0	0.32	0.72	0.38	0.35	〃　〃　H296号住
22	0.48	0.62	4.5	0.36	0.58	0.50	0.49	〃　〃　H358号住
23	0.55	0.71	4.2	0.33	0.65	0.51	0.40	〃　〃　H359号住
24	0.52	0.81	4.0	0.44	0.83	0.42	0.42	〃　〃　H439号住
25	0.65	0.64	4.1	0.52	0.55	0.66	0.74	〃　〃　H440号住
26	0.78	0.07	0.8	0.98	0.17	7.86	4.45	灰釉陶器埦 H272号住－８
27	0.44	0.10	0.9	0.63	0.24	2.95	2.04	〃　長径瓶 H285号住

試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	K/Ca	Rb/Sr	備　考
28	0.46	0.07	0.8	0.63	0.27	4.55	1.81	〃　(不明) H285号住
29	0.58	0.17	0.9	0.88	0.51	2.67	1.74	〃　(皿か) H286号住
30	0.61	0.06	1.2	0.79	0.29	8.23	2.77	〃　(長径瓶か) H288号住
31	0.76	0.06	0.8	1.05	0.24	9.91	4.48	〃　(長径瓶か) H298号住

表—24　平城京出土布留式土師器の胎土分析データ

試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	K/Ca	Rb/Sr	備　考
32	0.45	0.74	2.3	0.38	0.83	0.75	0.34	甕
33	0.56	0.28	2.9	0.49	0.51	2.43	0.72	〃
34	0.49	0.13	1.7	0.50	0.36	4.78	1.03	〃
35	0.55	0.32	2.1	0.54	0.61	2.09	0.66	〃
36	0.55	0.23	1.6	0.52	0.51	2.96	0.75	〃
37	0.49	0.31	1.8	0.70	0.57	1.94	0.91	〃
38	0.56	0.24	2.2	0.63	0.50	2.91	0.93	鉢形土器
39	0.46	0.35	3.0	0.53	0.63	1.65	0.62	〃
40	0.39	0.57	3.9	0.31	0.82	0.85	0.28	〃
41	0.49	0.23	2.8	0.50	0.53	2.58	0.70	小型丸底壺
42	0.44	0.26	4.0	0.52	0.47	2.06	0.83	〃
43	0.60	0.24	2.9	0.65	0.47	3.14	1.02	器　台
44	0.45	0.23	2.8	0.53	0.47	2.45	0.84	〃
45	0.41	0.53	4.9	0.42	0.55	0.95	0.57	〃

2、群馬県前橋市芳賀東部団地遺跡出土滓の分析について

東京工業大学名誉教授　桂　　敬
東京工業大学文部技官　高塚　秀治

1.　はじめに

芳賀東部団地遺跡の発掘調査に伴い、出土した製鉄関連遺物の分析結果について報告する。

今回分析を行った試料は9点で、鍛冶工程において生成したと思われる滓8点と、使途不明な棒状の小片1点とである。

2.　試料分析について

試料分析は、化学組成については蛍光X線分析法(ガラスビード法)、鉱物組成については粉末X線分析法にて行った。なお蛍光X線分析においては、分析用試料（ガラスビード）を作成するため、試料の前処理を以下のように行った。

試料は電気炉中(大気中)にて900°Cで一昼夜加熱し、共存する水分、有機物、揮発性物質を除去した。この条件では、二価の鉄 (Fe_2O) は総て三価の鉄 (FeO_3) となる。また、表示した9成分で100%となるよう規格化した。

3.　分析結果について

分析結果を下表に示す。

表—25　群馬県前橋市芳賀東部団地遺跡出土鉄滓の化学組成および鉱物組成

分析者　桂　敬、高塚秀治

	Sio_2	Tio_2	Al_2O_2	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	K_2O	P_2O_5	Ti/Fe	鉱　物　組　成
GH—1	15.84	3.82	5.90	68.24	0.22	1.74	3.23	0.67	0.34	0.048	Wü, Mt, Fa
2	12.18	4.09	5.56	74.95	0.22	1.18	1.39	0.14	0.28	0.047	Mt, Wü, Fa
3	15.64	3.56	5.79	70.83	0.19	1.43	2.06	0.21	0.29	0.043	Mt, Wü, Fa
4	8.63	2.19	2.89	82.44	0.15	1.07	2.16	0.33	0.14	0.023	Wü((Fa))
5	14.60	0.80	3.76	75.93	0.07	0.62	3.25	0.84	0.13	0.009	Wü, Fa
6	60.76	0.69	16.48	11.87	0.14	2.38	6.60	1.00	0.07	—	——
7	16.40	5.70	5.77	63.10	0.40	4.14	4.24	0.87	0.38	0.077	Wü, Mt, (UI), Fa
8	14.62	2.60	4.44	72.50	0.18	1.85	2.47	1.05	0.28	0.031	Mt, Wü, Fa
9	18.50	0.38	4.46	74.00	0.02	1.00	1.17	0.39	0.07	0.004	Mt, G, Fa, Le

鉱物組成の記号について：Wü は Wüstite (FeO), Mt は Magnetite (Fe_3O_4)
Fa は Fayalite ($2FeO \cdot SiO_2$), UI は Ulvöspinel ($2FeO \cdot TiO_2$),
G はGoethite (Feo (OH)), Le は Lepidocrocite ($rFe_2O_3 \cdot H_2O$),
(( )) はわずかに認められるもの

以下、各試料の外観的特徴と鉱物組成について示す。

GH—1。2号製鉄址。多孔質な滓

粉末X線分析結果：Wüstite, Magnetite, および Fayalite.

GH—2。2号製鉄址。多孔質な滓

粉末X線分析結果：Magnetite, Wüstite, および Fayalite.

GH—3。2号製鉄址。炉の北側、流状模様ある鉄滓

粉末X線分析結果：Magnetite, Wüstite および Fayalite

GH—4。4号製鉄址覆土中。底面椀状を呈する滓

粉末X線分析結果：Wüstite を主とし、わずかな Fayalite が認められる。

GH—5。5号製鉄址。覆土中より採取したもので内部はやや緻密

粉末X線分析結果：Wüstite を主とし、Fayalite も認められる。

GH—6。4号製鉄址。覆土中より採取した流状を呈する小さな棒状物

粉末X線分析結果：結晶鉱物はほとんど認められない（非晶質）。但し d =3.36A°にのみ微小なピークが認められる。

GH—7。4号製鉄址。比較的小さな滓で内部は緻密

粉末X線分析結果：Wüstite, Magnetite, Fayalite が認められるが、Magnetite は Ulvöspinel と分相して認められ

る。

GH－8。4号製鉄址。小さな滓、椀状滓の破片とも思われる。

粉末X線分析結果：Magnetite, Wüstite, この他に Fayalite が認められる。

GH－9。4号製鉄址。鉄片に付着していた滓

粉末X線分析結果：Magnetite, Goethite, Fayalite, Lepidocrocite が認められる。

4．分析結果についての考察

本遺跡は、製鉄関連施設を含む遺跡であることは明らかであるが、今回の分析を行った試料の中には製錬滓は1点もなかった*1。鉄器を作成するための作業工程としては鉄素材の品質を調整する（炭素含有量の調整、不純物の除去）ための工程（精錬）と、鉄（鋼）材から鉄器を作る（鍛造、熱処理）ための工程（いわゆる小鍛冶）が考えられるが、本遺跡に存在した製鉄関連遺構は、こうした性格をもっていたものと判断される。遺物の遺存状況、形状、分析結果とから前者（精錬）の作業工程によって生成した滓は GH－1・2・3・7・8の5点である。これらの滓の鉱物組成はいずれも Wüstite, Magnetite（少量の Ulvöspinel を固溶しているとのと思われる）、Fayalite が顕著に認められ、製錬時の不純物をかなり多く含んでいる*2。

これに対して、後者（鍛造、熱処理）の作業工程によって生成した滓（GH－6は滓ではない）は GH－4・5・(6)・9である。この段階では、すでに製錬時の不純物はかなり少なくなっている。従って、SiO_2、Al_2O_3、MgO、CaO などの成分の大半は、この作業工程中に新たにつけ加えられた成分であることが理解できる。このことは、当時（9～10世紀）の鍛冶技術を考える上で重要な意味をもつものと考えられる。すなわち上記4成分が新たにつけ加えられるような鍛冶の技法を見出す手がかりが得られると思われるからである。この様なことから、GH－6は鍛造、熱処理工程に用いられた材料の一部ではなかったかと思われる。GH－6は、化学組成で見るならば、粘土と MgO、CaO 成分を含む鉱物との混合物のようでもある。これがどの様にして用いられたかは今のところ判じえないが、いずれにしても、高温作業中に流出したもので、その際少量の鉄成分、チタン成分をとり込んだものと思われる*3。

また GH－9は鉄片（約30g）に付着していたスラグである。鍛造中に空気酸化した金属鉄 (Magnetite)、その後の水分等によって金属鉄が錆化 (Goethite, LePidocrocite) したものが鉱物組成から理解できる。Fayalite が存在するのは、鍛造中に酸化した2価の鉄 (FeO) が SiO_2 成分と反応して生成したものであろう。

＊1今回の分析では、製錬滓の存在は皆無であったが、分析個体数（9点）に問題がある可能性もある。

＊2、不純物の多少を示す指標として Ti/Fe 値が考えられる。製錬滓は通常 Ti/Fe ＜0.12の場合が多い。したがって精錬、鍛造・熱処理と作業工程を経るに従って、Ti/Fe 値は低くなるのが一般的である。

＊3、筆者自身としては鍛冶用鉄（鋼）材の被覆用材として用いたのではないかと考えており、分析値との関係においても整合すると判断している。

Ⅶ　ま　と　め

1　芳賀東部団地の古墳

1　分布からみた特色

前述のように、本遺跡で確認・調査された4基の古墳は、いずれも遺跡地南半区域に集中している。中でも、1号墳を除いた他の3基は、台地東端に近く、東側の谷に接するところに互いに近接してつくられている。

今回報告する調査対象区域では、これら4基の古墳の他に縄文時代の住居5軒と古墳時代初期の石田川期の集落跡及び奈良～平安時代にかけての集落跡が調査された。このうち、石田川期の集落が分布する区域と奈良～平安時代の集落が分布する区域は大きく二分される傾向が認められる。1号古墳は、この両者の分布の境界線に近いところにあり、1号古墳周辺から南側区域に石田川期の住居跡が集中的に認められる。特に、2号～4号墳のある遺跡地東南部でこの傾向が強い。一方、1号古墳から北の区域には、奈良～平安時代の住居跡が集中し、石田川期の住居跡や古墳は確認できない。すなわち、石田川期の集落区域と古墳の分布区域とがほぼ一致する傾向が指摘できる。また、この台地では、石田川期に先行する弥生時代の遺構は全く認められないとともに、後続すべき古墳時代の住居（鬼高期等）もほとんど認められない。この時期のものは谷一つへだてた西側の台地で確認されており、この点も注目すべきところである。

石田川期の住居跡及び古墳は、南の調査対象区域外にひろがるものと考えられる。すなわち、今回報告する遺跡地内では、古墳時代初期の頃、南半区域が人々の居住地として選定されはしたが、それも一時的で、その後人々は居住の場を周辺の他の地区へ移している。さらに、奈良時代以降、この地域が再び人々の居住空間として見直され、墓域外であった北半部に集落が営まれ始めるにいたったのである。

調査区域内で見る限り、石田川期の住居分布区域と古墳分布区域が一致する傾向がある。これは調査区東南端で顕著であり、石田川期住居分布の西限と古墳分布の西限が見事に一致している。この両者の間には、百有余年の時間的ずれがあるとみられる。この分布上の一致が単なる偶然であるのか、歴史的意味があるのか今後の検討を要するところである。古墳時代初期に集落の営まれた区域が、その後の人々によっても何らかの土地利用がなされ、立木等のない形で継承され、古墳構築の適地となっていたのであろうか。

2　墳丘及び内部主体

4基の古墳はいずれも円墳である。墳丘の規模は1号墳22.7m、2号墳12.6m、3号墳20m前後、4号墳27m（推定）の径をもち、いずれも周堀をめぐらしている。4号墳が30mに近い径をもつが、概して小形の円墳である。1号墳を除いてはいずれも削平、平夷されていたが、周囲に埴輪片等は確認できず、いずれも埴輪を配列していた形跡はない。4号墳を除く他の3基は、周堀全体を調査し得たが、このうち2号の周堀は墳丘をほぼ正円形に全周するが、1号墳及び3号墳にあっては、形が不正円形であるとともに、墳丘南側で途切れ全周しない。1号墳では、墳丘裾部にテラス状の平坦面がめぐっているが、他の3基にあっては、墳丘が完全に平夷されていたためその存在の有無を確認することができなかった。

1号墳及び2号墳ともに、石室入口の開口部は周堀内径部に接するものではなく、かなり墳丘内に入り込んだ所に位置する。いずれも石室入口前面は、耕作等により後世の削平、攪乱が著しく、この部分の構築時の様相を把握し得なかったが、石室開口部の位置からして石室入口前には、前庭が設置されていたものと考えられる。

内部主体　　主体部を把握し得たのは、1号墳、2号墳の2基だけであった。2基とも両袖型の横穴式石室である。2号墳は、墳丘削平に伴って石室の破壊も著しく、石室の根石を一部残すのみであり、1号墳にあっても、石室入口部はこわされ、石室の全体規模については、ともに正確なところは明らかでないが、両者の規模を石室全長及び玄室部で比較してみると表—26のとおりである。

表—26　1・2号墳石室計測値一覧表

		1号墳	2号墳
石室全長		m 5.70（推定）	m 3.60（推定）
玄室	長	3.39	2.70
	奥幅	1.76	0.95
	前幅	1.56	0.90

1号墳石室に比較して2号墳石室はかなり小型である。特に石室全長が3m代というのは、県内の横穴式石室の中でも小型の部類に属する。

県内にある石室全長3m代の両袖型の横穴式石室としては、勢多郡宮城村の新

山２号古墳、高崎市乗附町の御部入20号古墳、同21号古墳、渋川市入沢のかね塚古墳、沼田市奈良の奈良ワ号古墳、伊勢崎市豊城町の権現山１号墳、利根郡昭和村久呂保中裏古墳等がある（『群馬県史』資料篇３）。これら石室の規模は表—27のとおりである。

表—27　小型の横穴式石室計測値一覧表

		久呂保中裏	新山２号	御部入20号	同　21号	かね塚	奈良ワ号	権現山１号
石室全長		3.82m（推定）	3.05m	3.10m	3.05m	3.61m	3.50m	3.50m
玄室	長	2.42	1.71	2.44	1.55	1.94	2.08	2.25
	奥幅	1.15（中央）	1.49	1.20	1.25	0.75	1.19	0.70
	前幅	0.91	1.52	1.00	1.26	1.16	1.35	0.92

これら石室に共通していることは、いずれも自然石を利用していること、奥壁にはやや大ぶりの石を設置しているが、左右側壁に使用している石はいずれも小形であること、天井石の残っていた石室はないが、石室幅が0.7mから1.5m前後であり、天井石にもさほど大きな石は使用していなかったと推測されること、小円墳であること等である。いずれも、古墳構築にあたって、高度な技術（石材加工等）、大きな労働力を必要としない条件であり、古墳構築に際し省力化が図られているものといえろう。

新山２号古墳に近接してある新山１号古墳も、玄室長2.29m、同幅1.69mと小さく、石室全長も３m余とみられるが、この石室からは銅製の巡方、丸鞆が出土している。また、久呂保中裏、かね塚、奈良ワ号の各古墳はいずれも榛名山二ツ岳爆裂に伴って降下した軽石層の上にあり、軽石降下後に構築されたものである。さらに、新山１号古墳、同２号古墳、かね塚古墳、御部入21号古墳の石室には本県終末期古墳に特徴的にみられる玄門の設置、玄室プランの胴張り等がみられる等の特色があげられる。これら古墳の構築時期については、権現山古墳が石室前から出土した土師器をもって７世紀前半に位置づけられているが、他の古墳は、７世紀中半以降から８世紀初頭と考えられている。

芳賀東部団地２号墳も小形石材を使用し、石室幅を狭くして奥壁使用石材、天井石使用石材も小ぶりの石を使用する傾向が認められる。また、測定値が比較的正確に求められる玄室部でその数値をみると、玄室長270cm、同前幅90cm、奥壁から梱石間240cmはいずれも30cmの倍数、すなわち、唐尺を使用しての企画、構築が行われたものとみられる。２号墳からの出土遺物は、耳環３個の他鉄鏃等で年代推定の可能なものはないが、上記のことから、本古墳も前記諸小型古墳同様に、７世紀後半の構築と考えられる。

１号古墳は、２号古墳に比較して石室もやや大きく、使用している石材も大ぶりである。また副葬品も残存していたものだけでも直刀２本の他鉄鏃類も多い。さらに、本墳の周囲には近接して存在する古墳もなく、北端に１基だけやや離れて構築されている等のことから、４基のうちでは他と異なった存在といえよう。石室は、自然石乱石積であるが、玄室入口には玄門を設置し、玄室には胴張りが認められる。また、石室入口前には前庭も設置されていたものと推測される等、本県の終末期古墳の特色をそなえており、本古墳も７世紀後半代のものといえよう。

３号墳、４号墳については、周堀の確認のみで主体部については、まったく不明であるが、１号・２号墳とほぼ同時期のもの、すなわち、７世紀代でも中半以降のものとみて大差ないのではなかろうか。

芳賀東部団地にあっては、７世紀中頃以降８世紀初頭の頃にかけて、以前石田川期に集落の営まれた区域が墓域として設定され、ここに小円墳を主体とした古墳が構築されてきた。奈良時代に入ってからは、この墓域の北側区域に再び人々の居住の場ができ、平安時代にいたるまで続けられていた。古墳終末期から奈良時代にかけての墓域と居住区域とのあり方を単的に示す好資料といよう。今後整理のすすむ中で、古墳時代集落のみられた西側地区も含め居住区と墓域の関係がさらに深められることであろう。（松本）

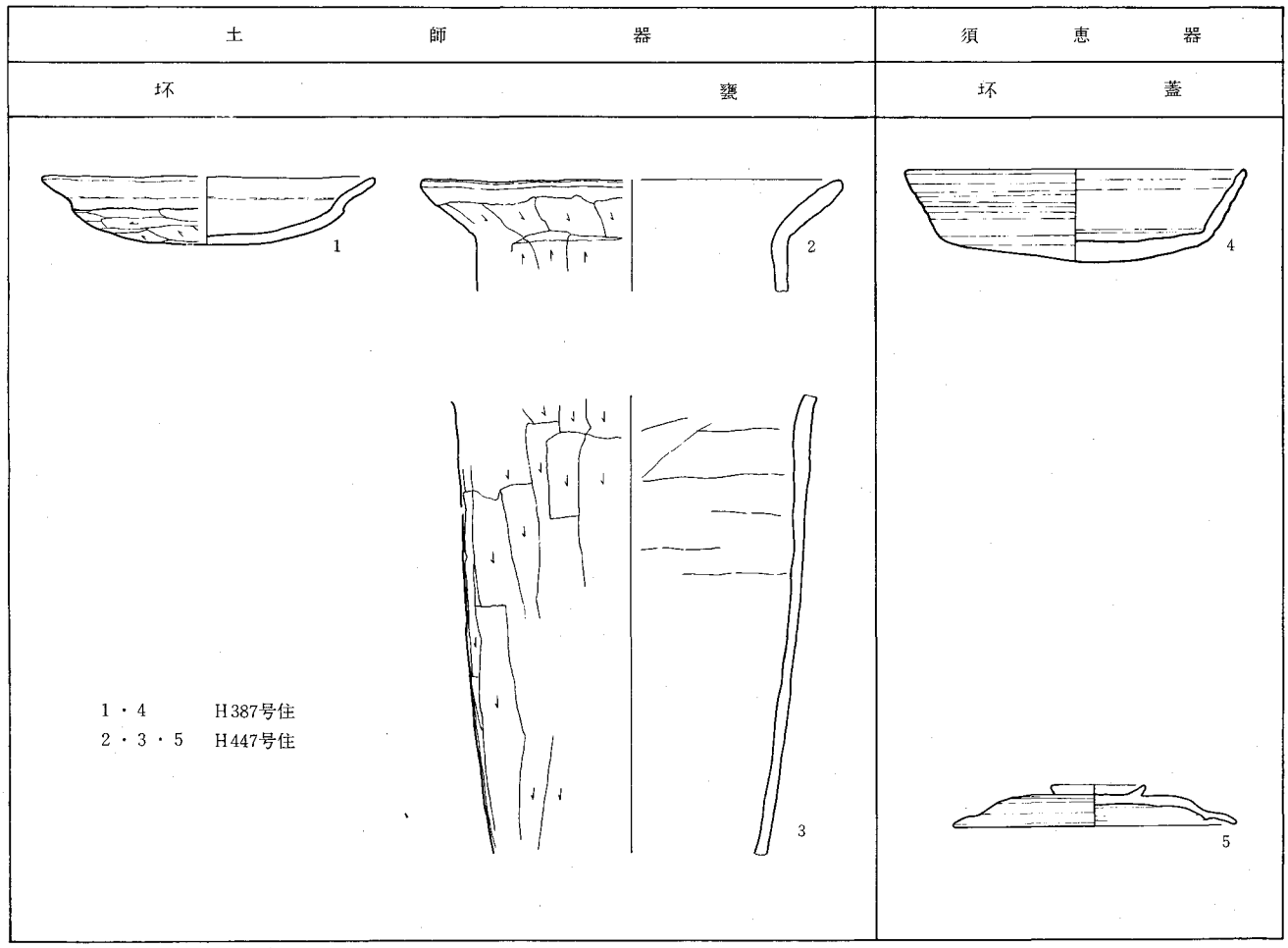
2　奈良・平安時代の土器の分類

1　はじめに

前述のように、本書に収録した竪穴式住居跡は、石田川期73軒、奈良・平安時代109軒の計182軒である。ここで分類を試みようとするのは、後者の奈良・平安時代の竪穴式住居跡から出土したものを対象にしている。

芳賀東部団地遺跡では、諸条件の制約の中で、短期間内に発掘調査を実施せざるを得なかった。よってこの節で重大な係わりを持つ遺物の記録方法及び取り上げ方についても、原則として比較的床面に近いものを残して記録化し、他は掘り上げの途上で「覆土中」として取り上げる、最も簡便な方法を採った。遺物が床面上、或は床面直上で出土したとしても、その住居に属するものかどうかは判断できないし、また覆土中で出土したとしても、壁際等の遺物はその住居で使用された可能性を考慮する必要がある。本遺跡の調査方法ではこれらの点を必ずしも明確化できないため、本書では床面乃至床面に近いものと、覆土中のものとを一諸に収録してある。従って、1住居跡内出土遺物として数時期に亙るものもみられよう。これから実施しようとする分類でもこの資料を使用するわけであるが、以上述べたような危険性が伴うことは明らかである。

ところで、本遺跡では、互に良く似た土器群を持つ竪穴式住居跡どうしで切り合っている例が数ヶ所で認められる。仮に土器型式で言えば、ほぼ同じものか、新らしい住居跡の方が1型式進んだ程度のものである。また、切られている方（旧）の住居跡には、人為的に埋めもどしているような形跡は特に認められない。このことから、本遺跡では廃棄された竪穴式住居の覆土が自然に比較的早く堆積する状況が窺われる。住居跡の埋没が比較的短期間に行われるとすれば、周囲の土器が流入したにせよ、ゴミ穴として利用されたにせよ、覆土中の遺物はある一定期間内のものが中心を占めることが想像される。また、覆土中の土器もその住居で使用されたものより極端に新らしいものが混ざる可能性は少ない



図－486　H387号住類土器群

と考えられる。以上のような観点から、必ずしも厳密ではないにせよ覆土中の遺物を混じえてもある程度の土器分類は可能なものと考えられる。芳賀団地遺跡出土土器の、より厳密で、より細かい分類は、今後の整理が進む過程で明確化して来るものと思われる。今回は、そのための捨て石の役割が果せれば十分であり、また今後に生かしてゆく意味で識者の御叱正をいただければ幸甚である。

2　分類の観点

土器を分類するに当っては、大部分の竪穴式住居に共通して出土し、消耗が激しいために比較的形態・技法等の変化の度合いが大きいと予想される器種を中心に分類するのが好つごうであろう。本遺跡では、これに該当するものとして、土師器では甕と坏、須恵器では坏と埦や蓋がある。(12) そこで、本節ではこれら器種の形態的・技法的変化を中心に分類し、それ以外のものについては適宜採り上げることにした。器種構成については、上記したように、その住居で使用された一括遺物を中心に扱うわけではないが、各分類ごとの傾向を知る上で目安程度の役割は果たすと思われるので、参考までに記述することにした。分類された土器群の名称は、各分類に属する住居跡で最も若い番号のもので代表させた。なお、実際の分類に当っては、群馬県教育委員会文化財保護課参事井上唯雄氏の御指導を得た。しかし、その意を十分くみとれず、図版・文章での誤解及び誤ちは、全て文責者に帰するものである。

3　土器の分類

〈H387号住類土器群〉(図—486)

器種は、土師器に坏と甕、須恵器には坏と蓋がある。土師器甕は厚い器肉の長胴甕で、締まりのない頸部に円筒状の胴部を持つ。外面調整は、口縁部中程から胴部全面に縦方向のヘラ削りを施す。土師器坏は、丸底の底部に外反する口縁部を持つ。外面には明確な稜を持つ。須恵器坏は、浅めな器高に丸底の厚い器肉の底部を持つ。底部外面は、全面に丁寧な回転ヘラ削り調整を施す。底部内面には不整方向のヘラナデを加える。蓋は、径の大きい偏平なつまみで内面にかえりを持つ。つまみ周辺の天井部には、ロクロを利用した回転ヘラ削り調整を施す。つまみ内側には朱を施す。他にH387号住覆土中から、丸底ぎみの底部を持つ土師器大型甕片が出土している。

本土器群は、器種の残存量が少ないため全体がいま一つはっきりしないが、土師器では鬼高式土器的な様相を残すことが特徴的と言えよう。須恵器坏は、底部の丸底のものが中心を成すのではなかろうか。

〈H283号住類土器群〉(図—487)

器種は、土師器に甕・小型甕・坏の3種類、須恵器には甕・小型壺・坏・埦・蓋の5種類がある。土師器甕は胴部に張りが出て来て、フットボール型の形状を呈す。同時に、頸部にも〝く〟字状の締まりが出る。また、器肉を薄く削り込むもの(11)も認められる。胴部の外面調整は縦方向のヘラ削りを中心とするが、頸部付近に横方向のヘラ削りの認められるもの(11)もある。また、胴部の厚いヘラ削りの結果、頸部の胴部側に一段低い段差のできるもの(10)がある。小型甕は厚い器肉で、甕と良く似た形態を取るが、最大径は胴部にとる。土師器坏は全て丸底で、大部分の口縁部は内彎する。口縁部が外反する坏(9)は、外面に稜を持つが、H387号住の土器群のものに比べ非常に弱くなっている。須恵器坏は3個体分出土したが、底部の平担なもの(13)と、丸底を残すもの(14)の2種類がある。前者の底部外面の調整は、全面回転ヘラ削りで体部下端に1段乃至2段の回転ヘラ削りを施すもの(13)と、手持ちヘラ削りを施すものの両者がある。底部に丸みを残す坏の底部外面の調整は、手持ちヘラ削りである。須恵器埦は1個体分のみ出土しているが、これは底部周縁の内側にハ字形に開く細長い高台を付す。体部外面下半には回転ヘラ削りを施す。須恵器蓋は、つまみが7.5cm前後のもの(18)、5.5cm前後のもの(15・17)、擬宝珠形(16)の3種類がある。このうち前2者の内面にはかえりがあるが、擬宝珠形のものについては端部が現存しないため不明である。いずれも天井部に回転ヘラ削りを施すが、擬宝珠のものは残存部の外部全部に広く回転ヘラ削りを施す。

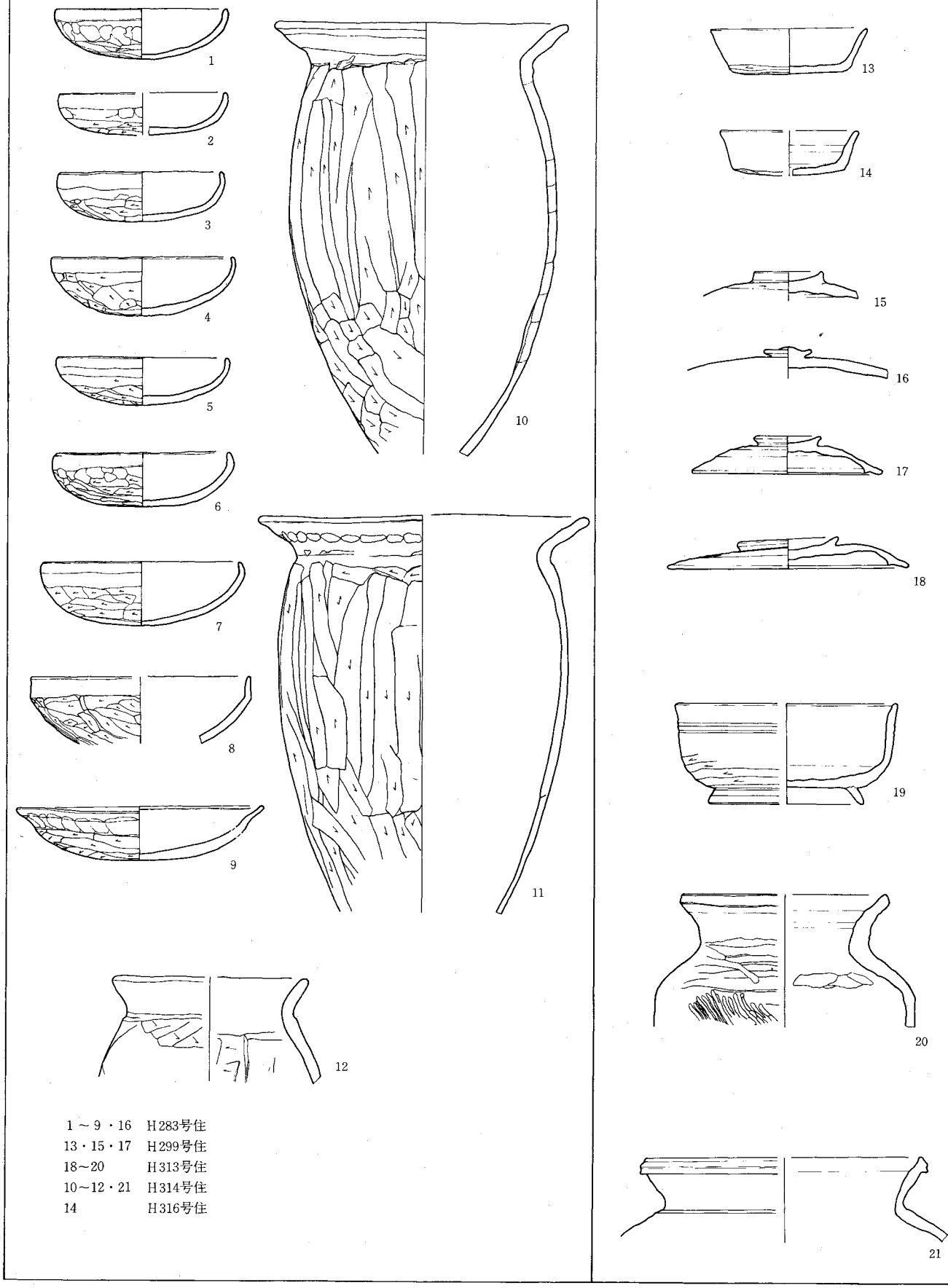
本土器群の特色は、土師器甕のフットボール型の形態に特に顕著に現われる。また、土師器坏の口縁部内彎傾向が一般的なのもこの土器群の特色と言えよう(可能性として、前のH387号住の土器群の土師器坏も内彎傾向の強いものが多いと推測される)。須恵器では、19の大型埦や16の擬宝珠のつまみを持つ蓋が認められたのは本土器群だけであるが、点数が1点づつのため、これが本土器群の特色となりうるかどうかは不明である。

この土器群に含まれるものとして、他にH299、313、314、316、374、378号住の6軒がある。

〈H294号住類土器群〉(図—488)

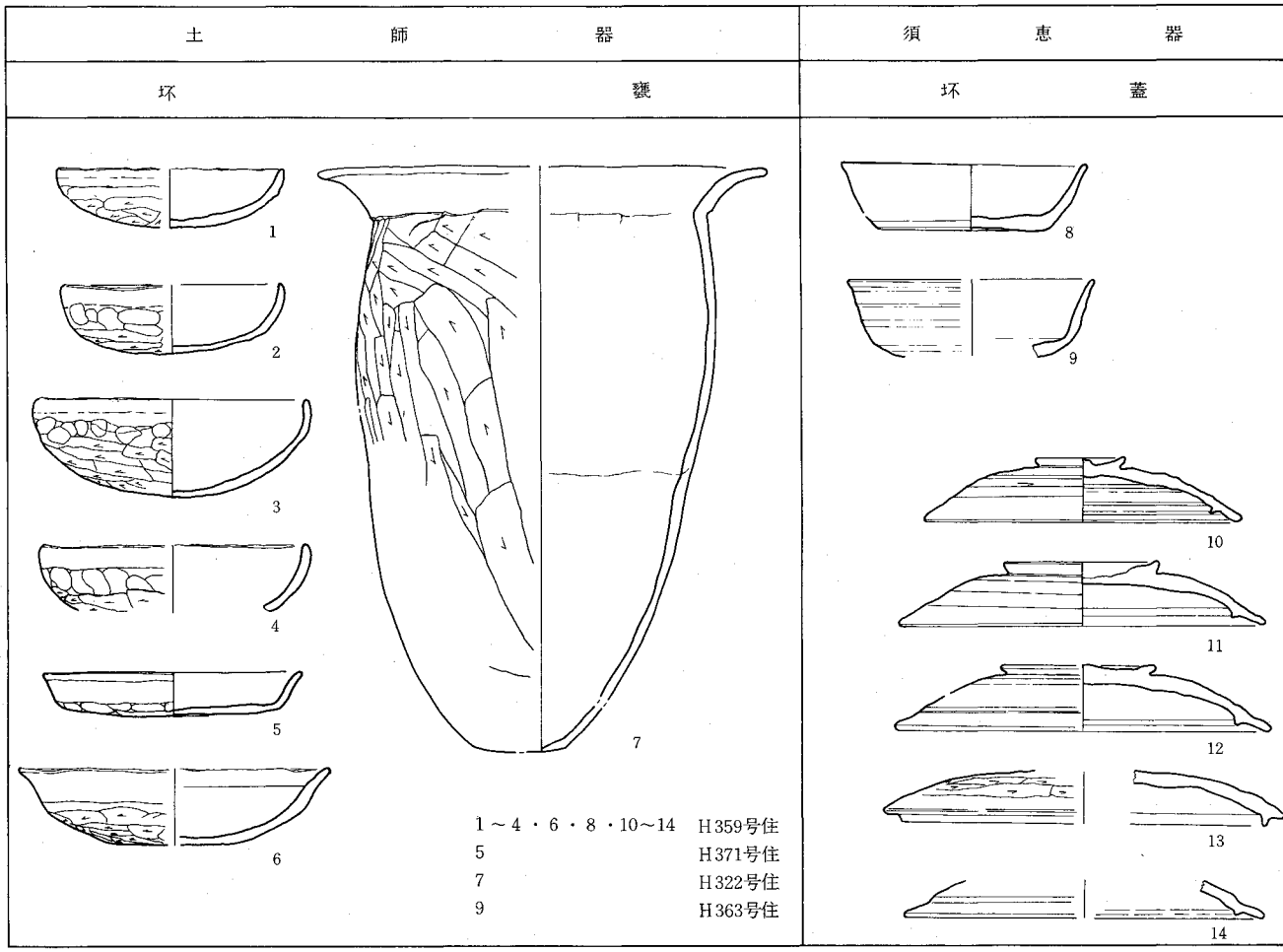
器種としては、土師器に甕・小型甕・坏が、須恵器には坏・蓋・大型甕がある。土師器甕は前2者の土器群と比べ、

土師器		須恵器
坏・小型甕	甕	坏・蓋・埦・小型壺・甕



1～9・16　H283号住
13・15・17　H299号住
18～20　H313号住
10～12・21　H314号住
14　H316号住

図－487　H283号住類土器群



図－488　H294号住類土器群

ある程度器肉の薄いのが一般化し、器高もやや低くなる。外面調整でも肩部付近に斜め方向のヘラ削りを施し、全体的に器肉の非常に薄い〝く〟字状口縁甕やコ字状口縁甕に近い形態・技法をとるようになる。しかし、まだ最大径は胴部より口縁部に置き、頸部に肩部側の低い段差を持ち、肩部のヘラ削りが横方向になっていないなど、前2者の土器群に共通した面も多い。土師器坏は、底部が丸底のものと平底風の盤状坏の2者がある。前者は更に口縁部が外反するものとしないものとに分かれる。前者のうち口縁部が外反しないものは、前のH283号住の土器群では口縁部に内彎傾向が認められたが、ここではほぼ直に近い状態に立っており、内彎傾向はあっても極めて弱い。丸底で口縁部が外反する坏（6）は、ここでもH283号住の土器群と同じ形態をとる。後者の盤状坏（5）は、1点のみなので本土器群の特色になるかどうか不明である。他に比べやや薄手のつくりで、底部に若干丸味を残す。須恵器坏は、底部に丸みを持つもの（9）を残すが、全体に平底のものが主流である。いずれも底部外面は全面回転ヘラ削り調整を施し、体部のロクロ痕を消すなど丁寧なつくりである。須恵器坏の出土点数は極めて少ない。本土器群以降では、前2者の土器群のように大型の坏は出土しない。須恵器蓋は前2者の土器群に比べ、大型で器高も高くなっている。つまみは径の大きい円盤状のものと小型のものがあり、いずれもつまみ中央部が凸起する。内面にはかえりを持つものが主体となるが、かえりがなく端部を短く折るものも若干認められる。技法としては、つまみ径及び笠部径の大きい蓋（11～14）は、笠部外面の回転ヘラ削りをかえりのある位置まで施し内面にはヘラナデを加えるが、つまみ及び笠部径の小さい蓋（10）は、つまみ周辺の天井部のみ回転ヘラ削りを施し内面のヘラナデは認められない。前者に比べ調整を簡略化していると言えよう。かえりのない蓋は小片であるが、10と同じ調整手法とみられる。

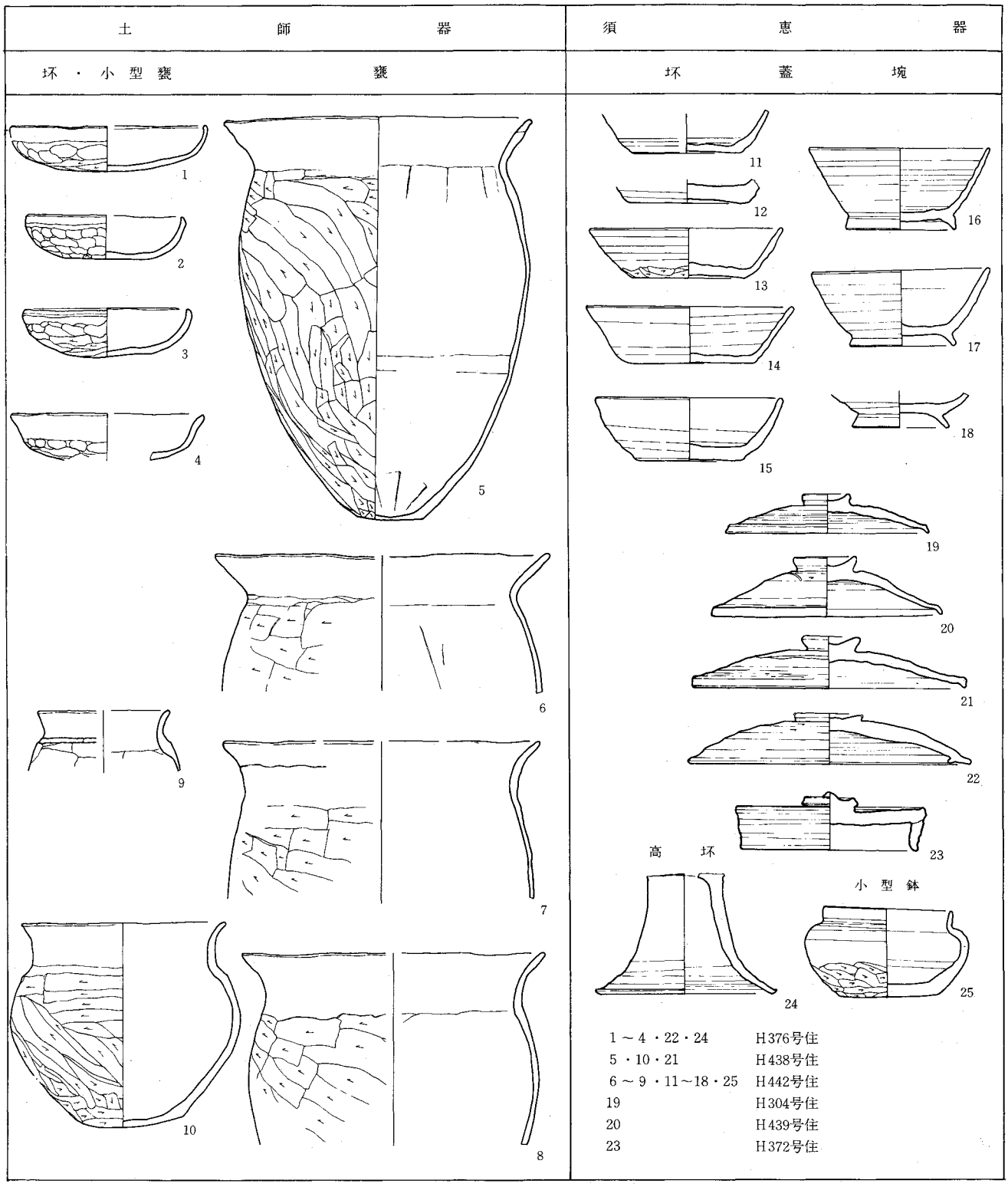
本土器群の特色は、土師器甕の形態・技法が薄手の〝く〟字状口縁甕やコ字状口縁甕に似てきたことが上げられる。土師器坏は、前のH283号住とほぼ同じ形態をとりながらも、口縁部の内彎傾向がほとんど認められない。また、全体に小柄な坏が多くなることも挙げられよう。須恵器坏では、本土器群まで丸底が認められる。

本土器群に属するものに、他にH320・322・355・359・363・366・368・371号住がある。

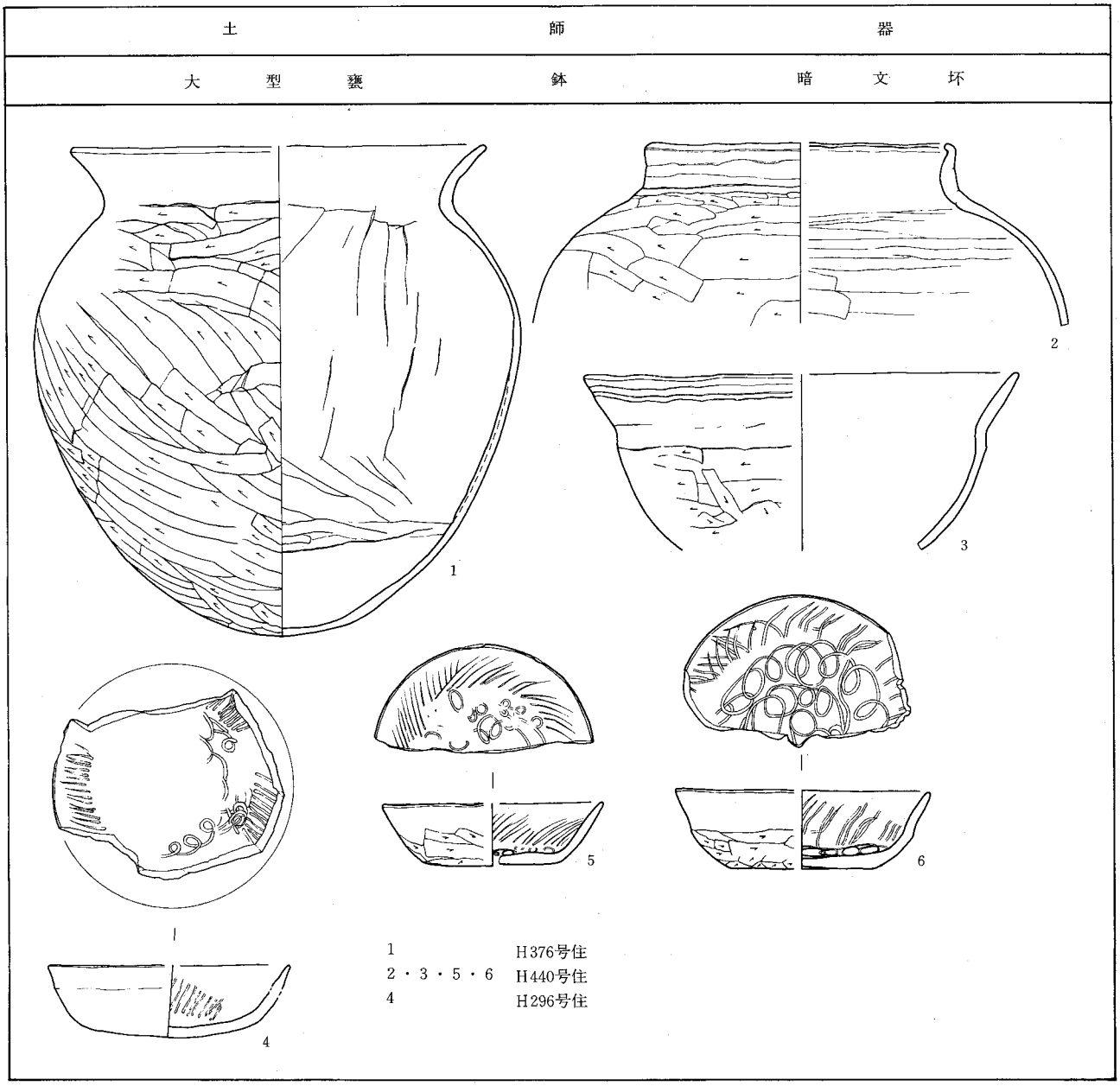
〈H275号住類土器群〉（図—489、490、491）

器種としては、土師器に甕・大型甕・小型甕・鉢・坏が、須恵器には大型甕・小型鉢・長頸瓶・坏・埦・蓋・高坏がある。土師器の口縁部形態と須恵器坏の底部外面調整の有無により、更にA・Bの2類に細分される。

H275号住類土器群A（図—489、490）　土師器甕の器肉は2～3㎜程度に薄くなる。前3者の土器群と異なり、胴部の張りが大きくなり、口縁部径と胴部径がほぼ等しくなる。口縁部の形態は、前のH294号住の土器群と同様に〝く〟字状に頸部の締まるもの（図489—5・6）と、緩やかに外反するもの（図489—7・8）との2種類がある。外面調整としては、肩部に横方向のヘラ削りが施され、口縁部外面に顕著な指頭痕を残すものが現われる。土師器大型甕は、一般の甕に比べ口縁部径が一回り大きく（22～26cm）、球形の胴部で肩が大きく張り、最大径（30～32cm）を胴部にとる所

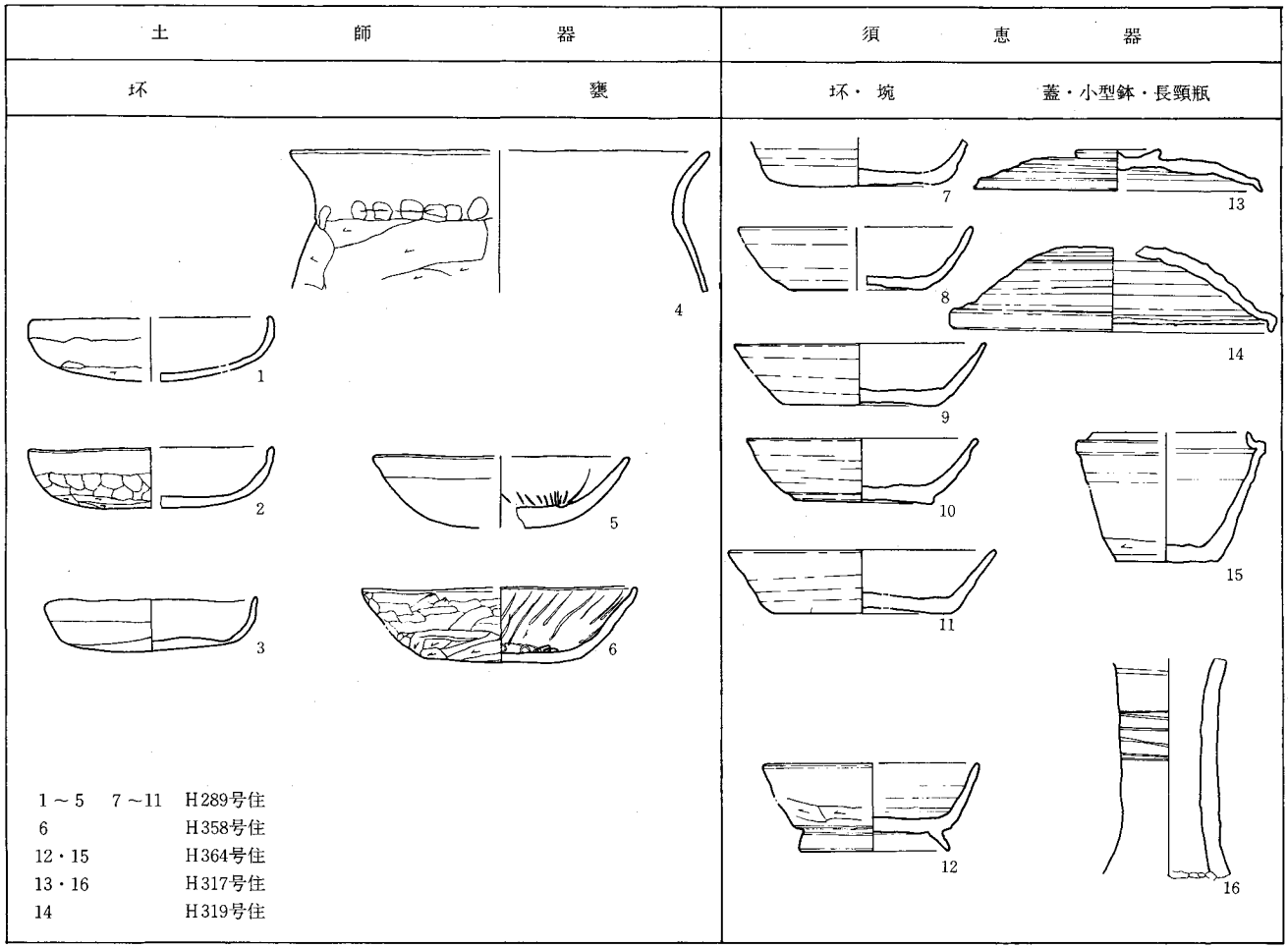


図—489　H275号住類土器群A(1)



図－490　H275号住類土器群A(2)

に特色がある。口縁部は〝く〟字状に外反するもの、頸部の締まりが弱く緩やかに外反するもの、口縁部が短かく直に立ち、短頸壺に似た形態をとるものの3種類がある。器肉は2～3㎜程度の薄いつくりで、成形・調整技法は一般の甕とほぼ同じである。小型甕は胴部に最大径をとり、口縁部の立ち上がり部分が明確になりつつあり、図489—10は特に顕著である。また、小型甕の中には台付のものもある。以上述べた甕類の底部には、丸みを残すものがある。土師器鉢は鉄カブトに似た形態をなし口縁部の下端に弱いくびれ部を持つ。最大径は口径にとる。器肉は2～3㎜程の薄いつくりである。土師器坏は、丸底風の前3者の土器群以来の系譜を引くものと、内面に暗文を持つものの両者がある。前者は平底に近い形態になり、口縁部径・器高ともに小規模なものが主体となる。内面に暗文を持つ坏は、丸底風と平底風のものがあり、いずれも厚い器肉を持つ。内面の暗文は、体部に斜め方向または放射状に、底部にラセン状の暗文を施す。外面調整は、上端を除く体部全面と底部にヘラ削りを施す。須恵器坏は、体部が直線的に延びて浅めなものと、内彎ぎみの体部にやや深めな器高を持つものとの2種類がある。底部の切り離し技法は回転糸切りと回転ヘラ切りがあるが、前者の場合周辺部に回転ヘラ削り調整を施す。底部の調整として他に全面回転ヘラ削り、周辺部手持ヘラ削り等がある。体部下端に1段乃至2段のヘラ削りを加えるものがある。須恵器の小型高台埦は本土器群で初めて認められる。底部にはハ字状に細長く開く高台を持つ。底部外面の調整は、回転糸切り未調整ものものと、高台取り付け後先端の細いヘラ状道具により、全面に回転ヘラナデとも称すべき調整を施しているものとがある。H387号住やH283号類土器群で認め



図－491　H275号住類土器群B

られた大型の坏や大型の高台埦は、前のH294号住類土器群以来認められない。須恵器蓋は、一部のものにかえりが残存するものの、かえりのないものが中心となる。それに伴いつまみも小型化する。短頸壺用とみられる蓋（図489—23）も1点だけ本土器群で出土した。須恵器小型鉢と高坏脚部も、本土器群で1点づつ出土した。

H275号住類土器群B（図—491）　器種構成及び形態・技法等は基本的にはAと同じである。ここでは、形態及び技法に若干の違いが認められるもののみとり上げることにする。土師器甕は頸部の立ち上がり傾向の強いものが出現する。土師器坏では底部の平坦化が一層進み更に小規模な坏（3）が認められる。また須恵器坏に底面外面の糸切り未調整のものが出現し、須恵器坏全体の約2分の1を占めるようになる。須恵器蓋に器高の高い笠形のものが認められるが、わずか1点のみである。蓋受けのある小型鉢と長頸瓶も本土器群に入るが、両者とも1点づつの出土である。

本土器群（A・B）の特色は、器種構成として土師器に球形胴の大型甕と暗文を有する坏があり、本土器群の大きな特徴である。須恵器では小型埦の出現とともに、坏の比率が土師器坏と同じ位に増加する。また、土器群Aの短頸壺用とみられる須恵器蓋や、同高坏、同小型鉢、土器群Bの須恵器小型鉢、長頸瓶等、わずか1点づつであるが、須恵器の器種が豊富なのも大きな特色と言えよう。形態的・技法的には、土師器甕の口縁部径と胴部径がほぼ等しくなり、器肉が極めて薄くなる。また、土器群Aの小型甕や土器群Bの甕の口縁部の立ち上がり傾向が顕著になった。土師器坏は、前3者の土器群の系譜を引くものは一層平坦化が進み、小型のものが多くなった。須恵器は、土器群Bで底部外面に糸切り未調整のものが出現し、須恵器坏全体の約2分の1を占めるようになる。全体として、須恵器の勢いが盛んになる土器群と言えよう。

本土器群に入るものとして、他にH275・276・282・296・298・304・306・309・372・376・438・439・440（以上、土器群A）、278・279・289・300・303・307・315・318・319・357・358・364・369・370・377号住（以上、土器群B）等がある。

〈H271号住類土器群〉（図—492）

器種は、土師器に甕・小型甕・鉢・坏がある。前のH275号住の土器群と異なり、大型甕や暗文坏はほとんど認められない。須恵器には坏・埦・蓋・平瓶がある。平瓶は本土器群でのみ、わずか1点出土しただけである。また灰釉器長頸瓶が出土した。

土師器甕は、緩やかに外反する口縁部を持つ甕の外にコ字状口縁甕が出現する。〝く〟字状に頸部の強く締まる甕はほとんど見られない。甕は本土器群で初めて胴径が口縁径を凌駕する。肩部の外面調整も広範囲に横方向のヘラ削りを施す。小型甕にも口縁部がコ字状のものが認められ、それ以外のものでも口縁部の立ち上がりは明確に認められる。小型甕には台付のものが多くみられる。土師器坏は全て平底化するが、若干底部に丸みを残す。口縁部径は13cm前後のものと11cm前後のものとの2者に統一されるが、後者の小型の坏が過半数を占める。須恵器坏は、ほとんどが底部回転糸切り未調整であるが、一部に回転ヘラ削りを施すものがある。須恵器埦は、口縁部径に比し底径の小さいもの（27）が出現する。高台は全体に断面の太いものが現われ、その形も長方形、二等辺三角形、中央部がややくびれる長方形など変化に富む。高台の開き具合は、ハ字形に直線的に開くもの以外に、高台下半部に開きの強いもの（24・26・27）や、ほぼ直に立つもの（23・28）が認められる。坏や埦には口縁端部が外反・肥厚するもの（18・28）が出現する。須恵器蓋は笠形の形態をとり、つまみは中央部が凸起しつつも平盤化する。出土量は少ない。灰釉陶器は本土器群で初めて現われる。30は長頸瓶と推定され、軟質の褐色がかった素地に、外面にハケ塗りを施す。

本土器群の特色は、土師器甕の口縁部形態にコ字状を呈すものが出現すること、土師器坏は小型化し、底部に丸みを若干残しながらも平底化することが上げられる、器種構成では、土師器坏に替って須恵器坏が主流になる。また、灰釉陶器が本土器群で初めて認められるようになる。

本土器群に属するものは、他にH284・295・297・308・312・354・360・362・397・400・403・404・414・444～446号住等がある。

〈H267号住類土器群〉（図—493）

器種としては、土師器に甕・小型甕・坏が、須恵器には坏・埦・皿・長頸瓶がある。須恵器の皿と長頸瓶は、本土器群でわずか1点づつ認められただけである。

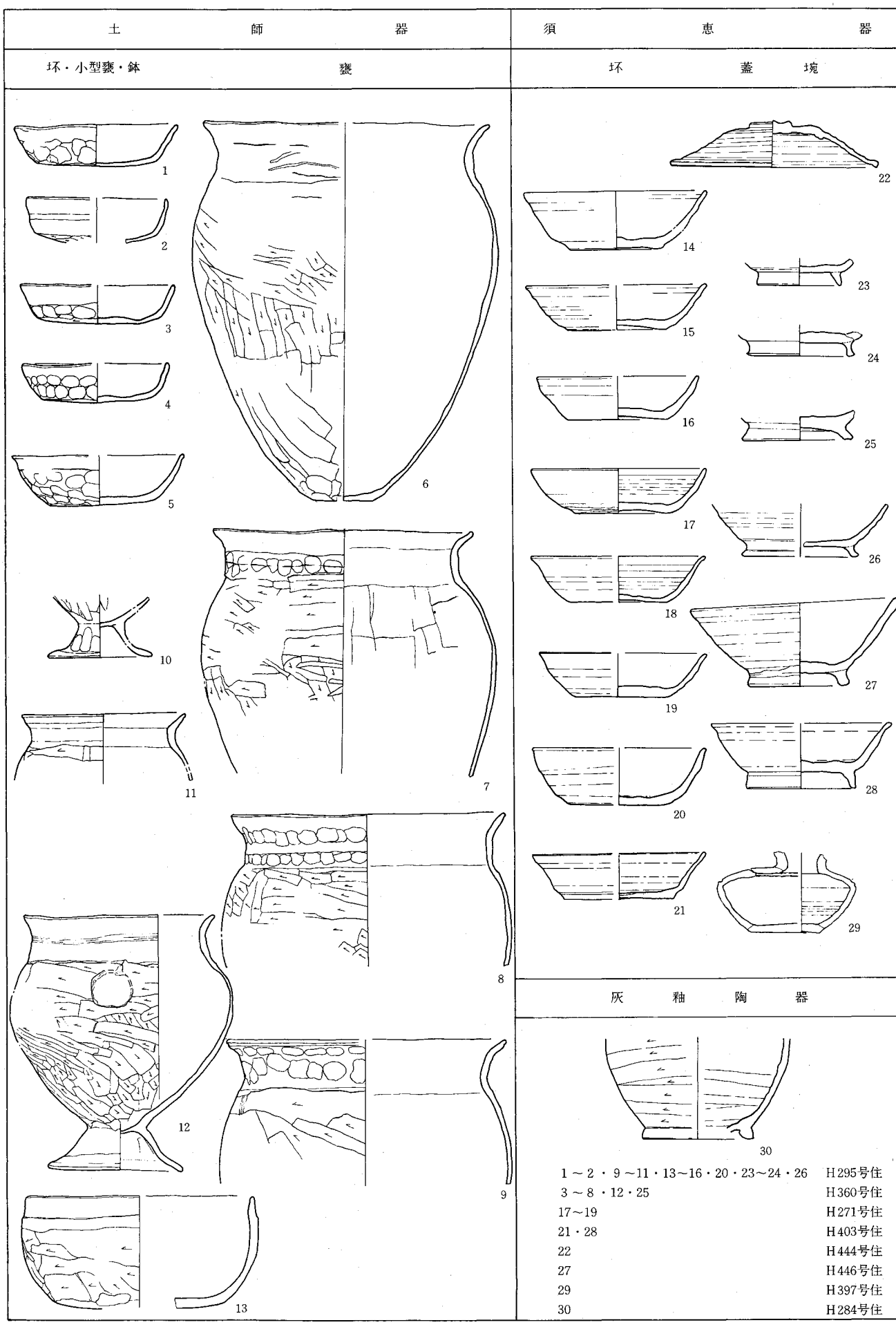
土師器甕の口縁部形態は、コ字状に統一される。器肉の厚さは2～3㎜の薄いものの他に、5㎜前後の厚いものも認められ、それに伴い胴部の張りの大きいもの（3）がある。小型甕もコ字状の口縁部を持つが、形態・技法等は、基本的に前のH271号住類土器群のものとほぼ同じである。土師器坏には、平底の器高の浅いもの（1）と、埦形の深めなもの（2）の両者がある。前者の坏の底部には丸みがまったく認められず、体部は強い横ナデの結果緩やかなS字を描くものが多い。口縁端部が内側に若干丸く張り出しているような形になるものもある。後者の埦形の坏はわずか1点認められるのみで、須恵器を模倣した形態ともみられる。色調も淡褐色で、堅緻な焼成である。外面調整は、上端を除く体部全面と底部にヘラ削りを施す。形態及び技法は、前のH275号類住土器群の暗文を持つ坏に類似する面が多い。須恵器坏は、底部は全て回転糸切り未調整である。底径は口縁部径に比べ小さくなり、比は2：1前後となる。須恵器埦は高台が低くなり、その断面も太めな台形・偏平な方形・三角形状を呈する。ハ字状に細長く開くものはほとんどみられない。高台端部がほぼ平坦な場合、端部内側の角を接地点とするものが多い（8）。また、高台の取り付けの雑なものや、底径が口縁部の40％程度に小さい深めの埦も認められる。須恵器の坏と埦の口縁部は、外反・肥厚するものが一般的となる。皿は付け高台で、高台や口縁部の形態は須恵器の坏・埦に酷似する。須恵器長頸瓶は、ハ字状に開く短かめの付高台を丁寧に接着する。

本土器群の特色は、土師器甕が全てコ字状口縁に統一され、同坏が完全な平底になることが挙げられる。須恵器坏・埦は底部の小さいものが認められ、口縁端部の外反・肥厚するものが一般的となる。埦の高台は太く短かめのものになり、ハ字状に開くものはほとんど認められない。器種構成としては、土師器坏が激減し、須恵器坏・埦が取って替わる。また、本土器群には皿や長頸瓶もみられる。

本土器群に属するものとして、他にH270・274・277・292・293・301・305・373・375・381・399号住等がある。

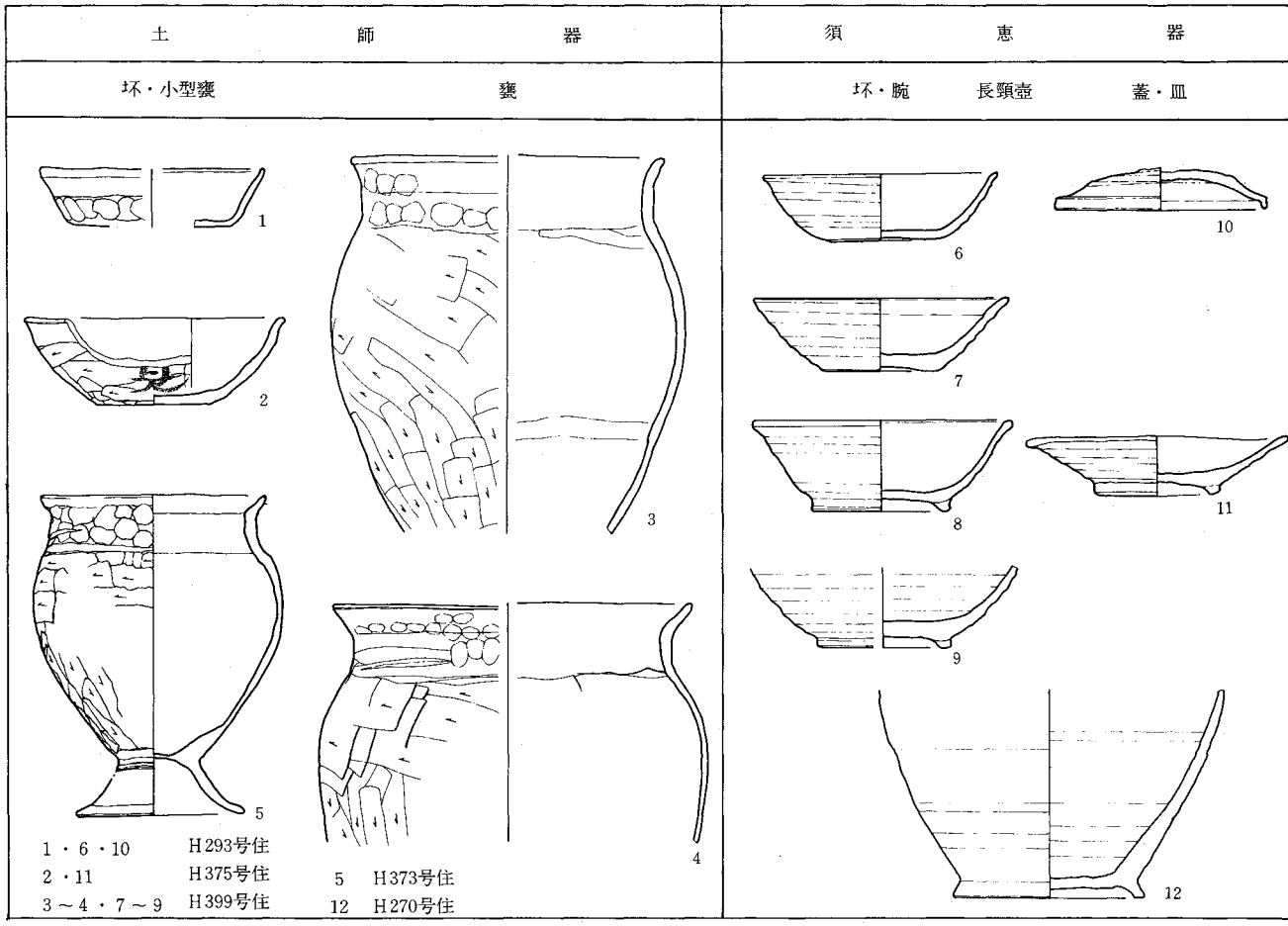
〈H273号住類土器群〉（図494、495）

器種としては、土師器に甕・小型甕・坏の他に、新たに羽釜・埦・小型丸底土器がみられる。須恵器には坏・埦・甕がある。土師器の小型丸底土器は、本土器群でのみわずか1点出土しただけである。



1～2・9～11・13～16・20・23～24・26	H295号住
3～8・12・25	H360号住
17～19	H271号住
21・28	H403号住
22	H444号住
27	H446号住
29	H397号住
30	H284号住

図－492　H271号住類土器群



図－493　H267号住類土器群

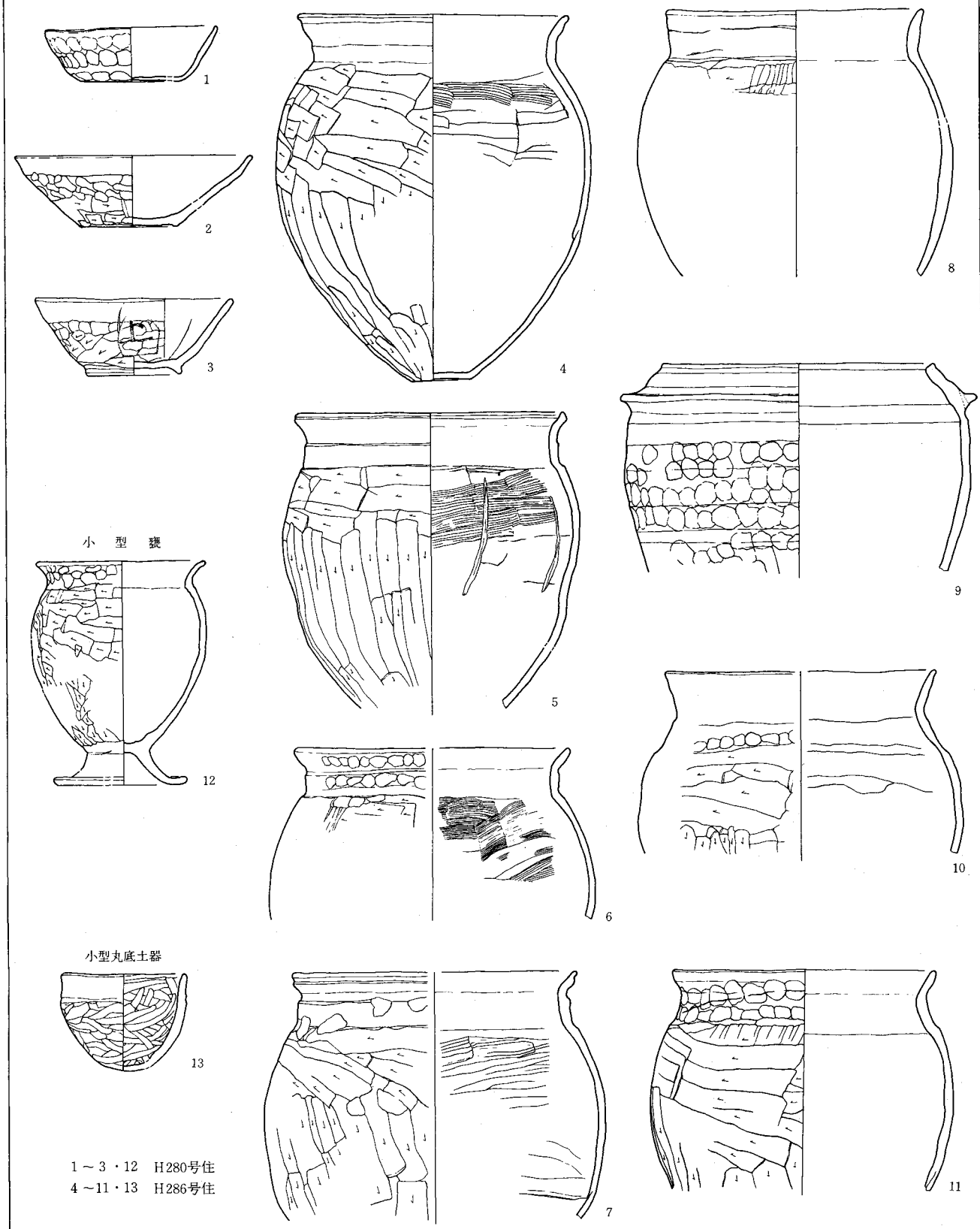
土師器甕は、いわゆるコ字状口縁を呈すが、大部分のものは頸部が内傾し、中には肩部と一体化するものもある。更にこれが進むと、口縁部が〝く〟字状に外反したり、直立ぎみに立つもの（図494－8）も出現する。胴部は球形に大きく張るのが一般的である。器肉も5～6㎜前後の厚いものとなる。小型甕は口縁部がコ字状を呈するものが少なく、大部分のものが〝く〟字状に外反する。台付甕の台裾部は、今までの土器群と比べ接地面が大きくなる。土師器羽釜は本土器群から認められ、三角形の鍔に、大きく内彎する口縁部を持つ。口縁部にはヘラを当てて内傾させる。最大径は胴部に置き、全体に寸づまりの形態を持つ。土師器坏は前のH267号住類土器群と同様の小型平底坏である。土師器椀（2・3）は、付け高台で（2は高台がとれる）、須恵器椀の形態を模倣したものとみられる。他に須恵器坏を模倣したとみられるものもある。体部外面は、口縁部を除き全面に指押え、またはヘラ削りを施す。高台は台形状の低いもので、接着は丁寧である。須恵器坏は、底部が口縁部径の2分の1未満で、全体に底部の小さい椀形の形状になる。須恵器椀は、高台端部を丸く仕上げるものが一般化し、雑なつくり、接着のものが多い。須恵器坏・椀は、口縁端部が外反し、肥厚するものが一般的である。焼成はいずれも軟質なものが大部分である。外面には顕著なロクロ痕を残す。須恵器甕は肩部から上のみ残存するが、細長い無果花形の胴部を持つものと推定される。灰釉陶器皿は、高台の外面が弧状で、内面の内彎する三日月高台を付す。口縁端部は外側に短かく折る。釉は体部内面にのみ施され、ハケ塗りとみられる。

本土器群の特色は、土師器甕の内傾する頸部及び球形の胴部と、器肉の厚い変化が第1にあげられる。須恵器坏は底部の小さい椀形のものになる。器種構成としては、新たに土師器羽釜が加わると共に、須恵器を模倣した坏や椀が良くみられるようになる。また、灰釉陶器皿は三日月高台で、ハケ塗りとみられる。なお、本土器群以降のものには、須恵器蓋が全く認められない。

本グループに属するものとして、他にH280・285～288・291・443・453・478号住等がある。

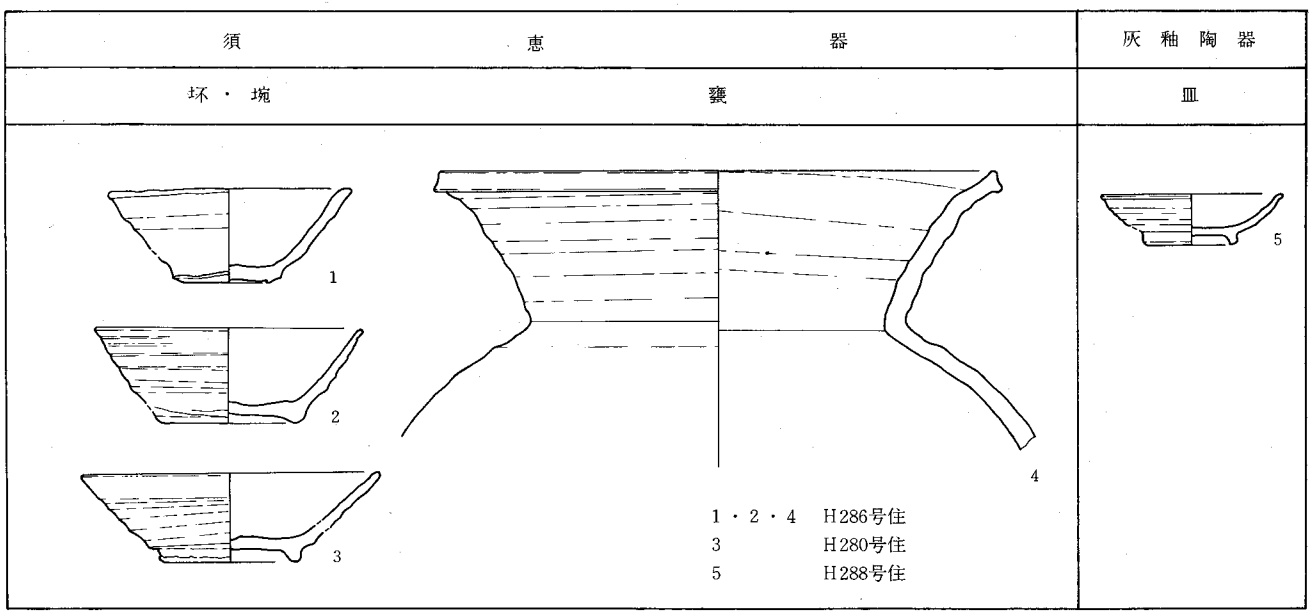
土　　師　　器

坏　・　埦　　甕　・　羽　釜



1～3・12　H280号住
4～11・13　H286号住

図－494　H273号住類土器群(1)



図－495　H273号住類土器群(2)

〈H272号住類土器群〉(図－496)

この土器群に入るものに、典型的なものはH272号住があるだけである。他に可能性があるものとしてH474号住が1軒あるだけで、これも須恵器坏の破片が1点出土したのみで所属する土器群はいま一つ決し難い所がある。

本土器群の器種としては、土師器に甕・小型甕、須恵器に埦が確認される。また、須恵器の技法でつくった褐色素焼きの内黒土器埦が、1個体分認められる。灰釉陶器としては、皿が出土している。この他、土師器には羽釜・坏・埦が、須恵器には坏・甕等が想定されるが、確実なものはみられなかった。

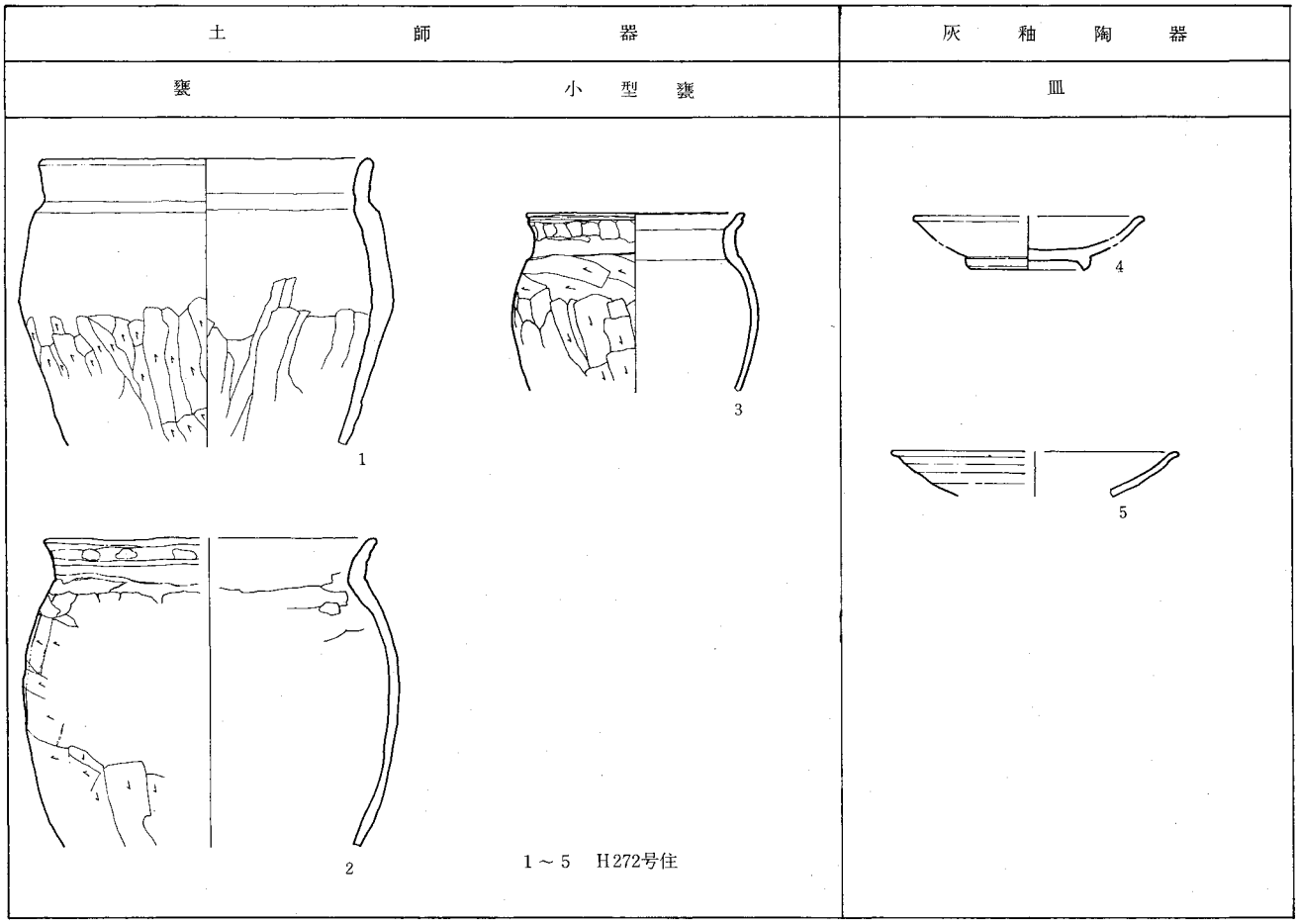
土師器甕の口縁部は、短かく外反するのみで、コ字状口縁甕の面影はない。器肉も前の土器群に比べ一層厚くなり、最大で1cm約を測るものもある（1)。胴部は前のH273号住類土器群と同様に球形に張るものもある（2）が、下半部の削りを厚くし、胴部外面を〝く〟字状に掘曲させるものが現われる（1)。小型甕は口縁部にコ字状の形態を残すが、頸部が内傾しコ字状口縁としてシャープさに欠ける。胴は球形に張っており、全体に前のH273号住類土器群の甕に似る。内黒土器埦は、ハ字状に開く約1.5cmの高い高台を付すもので、底部には回転糸切り痕を残す。内面は煤を付着させ、ヘラ研磨している。須恵器埦は底部片のみ残存するが軟質の焼成で、器壁断面は黄灰色の色調を呈するが、内外面はいぶされて黒色になる。高台は外れているため不明である。灰釉陶器皿は皿のみ認められる。5は体部片のみであるが、口縁端部が外方に軽く折れる。4の高台は断面の幅が広く、外面下端で弧状をなす。底部は全面に回転ヘラ削りを施す。両者とも漬け掛けとみられる。

本グループの特色は土師器甕にあり、コ字状口縁の形態がなくなり、全体に土釜的な様相を持つ甕になっている。灰釉陶器は、前のH273号住類土器群のものと異なり、漬け掛けになることも特色と言えよう。

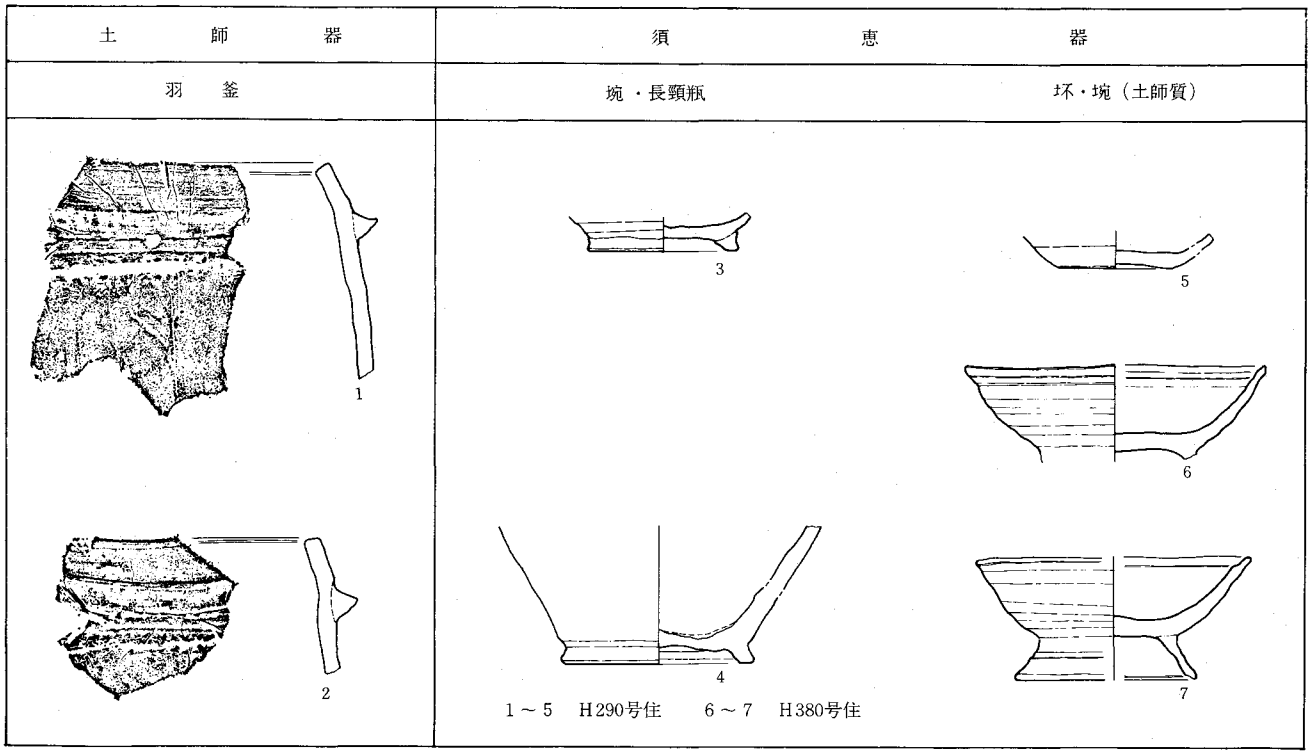
〈H290号住類土器群〉(図－497)

本土器群に属するものとして、他にH380号住があるのみである。しかし、このH380号住居跡では土師質の須恵器埦2点（6・7）が対象となるだけで、ほかにH290号住と同じ器種を共有していないため、両者が果して同じ土器群に属するのかどうか疑問が残る。しかし、土師質の須恵器埦の分類上の位置を考えた場合、前に分類したH273号類土器群以前のものに入れることは難しいと考えられる。これと形態的・技法的に比較的近いものに、H272号住類土器群の内黒土器埦がある。しかし、この内黒土器埦と比べた場合、一層大型化し、高台の高さも倍近くあり、色調も淡褐色で、異なる土器群のものとも考えられる。また、H290号住には土師質の須恵器坏があり、これと焼成・技法が類似する。そこで、今回はとりあえず本土器群のものとして扱うことにする。

器種としては、土師器に羽釜・須恵器に高台埦、そして先に述べた土師質の須恵器として、坏・埦がある。羽釜の鍔は2等辺3角形状で、先端を尖らす。口縁部は内彎しつつも、H273号住の土器群のものに比べると立ち上がりは顕著である。須恵器埦は灰白色を呈し、軟質の焼成である。高台の取り付けは極めて雑で、形もひしゃげている。体部の外面調整も雑である。底部内面には、ヘラ状用具によるロクロ使用の渦巻痕を顕著に残す。底部は糸切り未調整である。土



図－496　H272号住類土器群



図－497　H290号住類土器群

師質の須恵器坏は淡褐色で、底部に回転糸切り痕を残す。底部のみ残存する。土師質の須恵器埦は付高台で、いずれも淡褐色を呈す。成形・調整にはロクロを使用し、底部の切り離し技法は回転糸切りである。その後の高台接着時にロクロナデで糸切り痕を消す。高台の接着は丁寧である。体部内外面もヘラ状用具（？）で丁寧に仕上げる。土師質の須恵器は全体に丁寧なつくりである。長頸瓶（4）は、須恵器が2次的な火熱を受けて、色調が褐色になった可能性がある。本土器群とは別の土器群のものとも考えられる。

本土器群の特色は、羽釜の形態と土師質の須恵器埦・坏にあるが、この両者が同一の土器群に納まるかどうかは、先に述べたように今後検討を要する所である。また、本土器群が一つ前のH272号住類土器群と本当に別なグループに属するのかどうかも、一層の検討を必要としよう。いずれにせよ、本土器群と前のH272号住類土器群は、竪穴式住居跡の軒数が少なく、良好なサンプルに恵まれないので、今後、類例の増加を待って今一度検討することになろう。

以上の分類を、形態・技法を中心に表化したものが、表—28である。

4　土器群の新旧関係と年代について

住居どうしの切り合いは13ヶ所で確認されたが、このうち比較的良好な土器群を持ち、上記で分類した土器群に対応できるものは次の5件であった。左に住居跡の切り合い関係、右に対応する分類上の土器群を記す。

H286号住→H287号住→H288号住 ……H273号住類土器群→H273号住類土器群→H273号住類土器群

H289号住→H297号住……H275号住類土器群(B)→H271号住類土器群

H306号住→H307号住……H275号住類土器群(A)→H275号住類土器群(B)

H309号住 ↗H308号住 ↘315号住 ……H275号住類土器群(A) ↗H271号住類土器群 ↘H275号住類土器群

H366号住→H354号住……H294号住類土器群→H271号住類土器群

（※→に向かって新しくなる。）

上記の右側の土器群を整理すると、次のようにまとめられる。

H275号住類土器群(A)→H275号住類土器群(B)→H271号住類土器群

H294号住類土器群——————————↑

これから、H275号住類土器群(A)・H275号住類土器群(B)・H271号住類土器群は、その順に新しくなる土器群であることがわかる。また、H294号住類土器群は少なくともH271号住類土器群よりも古いタイプの土器群である。

本書に収録した住居跡の切り合い関係からは、以上のことしか判明しないが、ここで、土器自体の変化から更に新旧関係を考えてみることにする。須恵器坏の底部外面の調整方法に着目すると、(1)、全面回転ヘラ削り乃至手持ヘラ削りだけの土器群、(2)、全面回転ヘラ削り、周辺部ヘラ削り（糸切り・ヘラ切り）、ヘラ切り未調整等を混ぜる土器群、(3)、(2)に回転糸切り未調整を加えた土器群、(4)、回転糸切り未調整だけの土器群、の4種類がある。一つの土器群が新旧両者の形態・技法を持つものを混ぜ、且つ、大量生産等の事情に応じて複雑・丁寧なものから簡単・粗雑なつくりのものへ変化するならば、先の須恵器坏は(1)→(2)→(3)→(4)と変遷したものと考えることができる。これを土器群に当てはめるならば、(1)H387・283・294号住類土器群→(2)H275号住類土器群(A)→(3)H275号住類土器群(B)→(4)H271・267・273・272・290号住類土器群となる。同じ観点で埦高台部の形状・取り付け技法等をみてゆくと、H283・275(A)・(B)号住類土器群→H721号住土器群→H267・273・272・290号住土器群といった変遷が考えられる。次に土師器甕の胴部と口縁部形態及び器肉の厚さ、同坏の底部の形状に着目すると、前者ではH387号住類土器群→H283号住類土器群→H294号住類土器群→H275号住類土器群(A)・(B)→H271号住類土器群→H267号住類土器群→H273号住類土器群→H272号住類土器群の変遷が想定され、後者ではH387・283・294号住類土器群→H275号住類土器群(A)・(B)→H271号住類土器群→H267・273・272号住類土器群の順に丸底から平底へ変遷してゆくことが判明している。この土師器甕と同坏の変遷は、前に述べた切り合い関係や須恵器坏・埦の変遷とほぼ対応しており、矛盾する所はない。更に他の器種の形態的・技法的変遷も、これらに対応する形でみられる。以上から、本節で実施した分類は、そのまま時間的な変遷と考えるのが妥当であろう。しかし、これはあくまでも資料の不十分な状態での仮説であり、今後の整理・検討を進める中で、更に厳密な土器群の設定とともに、一つでも多くの切り合い関係で検証して行く必要がある。また、すでに述べたようにH290号住類土器群は内容的に問題があり、H272号住類土器群との関係もいま一つ不分明であり、今後の資料の増加に伴い検討を要するところである。

次に、分類と相対的な時間的序列とを与えた土器群に対して、具体的な時を考えてみることにする。しかし、本書第

1巻の資料では、最も新しい時期に位置づけられるH290号住居跡覆土中（床面から32cm）にB軽石純層が堆積していること、本節で扱った全ての住居跡覆土中には二ツ岳系の軽石が含まれており、従って最も旧い住居跡もF・AまたはF・P降下後に造られたものであること、H275号住類土器群(B)に位置づけられるH364号住居跡壁際床面レベルから青銅制銙帯が出土したことの3点が、具体的な時を考えるための資料である。これを要するに、本節で検討した土器群は上限が6世紀代で下限が12世紀代、H275号住類土器群(B)は奈良時代以降のものと、漠然と年代が判明するにすぎない。

本来、芳賀団地遺跡で出土した遺物には、芳賀団地遺跡内の資料を駆使して絶対年代を与え、他遺跡のものと比較・検討することによって考古学的な深化を得ることができることは言うまでもない。今後整理される資料の中に、芳賀団地遺跡内の遺構・遺物の絶対年代を考える上で極めて重要なものがあることは明らかだが(1)、本書の資料では上記した程

表—28　土器の形態・技法等一覧表

器種		形態・技法＼土器群	387	283	294	275(A)	275(B)	271	267	273	272	290
土師器	甕	1．最大径	口縁部		胴部＝口縁部				胴部			
		2．口縁部	〈字状（締まる）									
					〈字状（緩やかに外反）							
									コ字状			
		3．器肉	厚い					薄い				
										厚い		
	大型甕											
	羽釜											
	坏	1．底部	丸底						平底			
		2．口縁部	内彎									
		3．暗文杯				放射線・らせん状						
		4．須恵器模倣										
須恵器	坏	1．法量	大形			小形						
		2．底部	丸底									
			平底									
		3．底部切り離し										
		a．全面回転ヘラ削り										
		b．回転ヘラ切り				周辺部回転ヘラ削り						
						未調整						
		c．回転糸切り				周辺部回転ヘラ削り						
								未調整				
		d．手持ヘラ削り	全面				周辺部					
		4．体部下端ヘラ削り										
		5．口縁端部外反・肥厚										
	埦	1．法量	大形					小形				
		2．高台	ハ字状に開く。細長い									
								ほとんど開きなし、太く短かい。				
	蓋	1．かえり			有り							
								無し				
		2．つまみ			大・中形							
								小形				
灰釉陶器									ハケ塗り		漬け掛け	
土師質の須恵器（内黒土器含む）												

度のことがわかるだけである。そこで、芳賀団地遺跡内の資料による絶対年代の考察は、今後の整理・検討に期待することにして、今回は、上記土器群を構成する須恵器や灰釉陶器の一部の器種を手がかりに、これが他の遺跡では何時頃に押えられているか、参考程度に考えてみることにする。

まず上限であるが、H387号住類土器群は、土師器甕と同坏に、南関東編年の鬼高III的な様相を残しているものと考えられる。また、須恵器坏は、いささか地域を異にするが、和銅年間に開設されたする美濃国官衛窯である岐阜市朝倉窯出土の高台埦の埦（坏）部に類似し[2]、伊場遺跡では伴出する木簡等の関係から8世紀初頭以降に位置づけられる高台埦の埦（坏）部に類似する[3]。次に下限であるが、B軽石降下前の土器群として最も新しいものと考えられている下渕名遺跡II区91号住居址出土遺物[4]や鳥羽遺跡SK332土坑出土遺物[5]、或はそれに近い時期のものとみられる荒砥玉反田遺跡8号住居の出土遺物[6]と、本分類で最も新しい時期に位置づけられるH290号住類土器群と比較すると、類似する土師質の高台埦を共有しながらも、H290号住類土器群には土師質（カワラケ様）の皿形土器を欠き、羽釜口縁部に内彎傾向が残るなど、ある程度旧い様相を示すものと考えられる。以上から、本分類で最も旧い様相を留めるものは、他の遺跡では700年前後乃至8世初頭以降の年代のものに対応し、下限を示すとみられる土器群はB軽石降下時よりある程度旧いことが予想される。

須恵器坏は、国分寺の創建瓦乃至塔の再建瓦と結びつけて、概ね年代のわかるものがある。武蔵国分寺の創建に関連し、より創建時に近いと推定される埼玉県入間市の東金子窯址群中の前内出2号窯出土の坏は、底部の調整が全面ヘラ削りのものと外周に回転ヘラ削りを施すものとの2種類がある。また、これより一時期遅れるであろうとされる前内出1号窯出土の坏は、全て底部の回転糸切り後、外周部に手持ヘラ削りまたは回転ヘラ削りを施したものであった[7]。一方、上野国分寺の創建時以来の瓦を焼いている笠懸村山際窯跡では、数種類の須恵器坏・埦・蓋等を出土するが、最も古手の様相を呈する坏には、底部回転糸切り後周辺部ヘラ削り調整を施すものや、回転ヘラ切り未調整のものがある。これらは創建瓦の焼成時に近いものと推定される。また、入間市新久に所在する八坂前窯跡は、4～6号窯跡の調査の結果、「続日本紀」承和12(845)年の条にみえる武蔵国分寺塔の再建瓦を焼いた瓦窯と考えられ、ここで併焼された須恵器坏・埦は、4・6号窯の坏は底部の回転糸切り離し後、外周に回転ヘラ削りを施すものと未調整のものが出土し、前者は焼台として利用されていた。5号窯坏は全て回転糸切り未調整で、埦にのみ外周回転ヘラ削りの痕跡を残していた。また、4～6号窯出土の坏の口縁端部には、肥厚するものも認められる[9]。以上に述べた国分寺に関係するとみられる瓦窯乃至同周辺出土の須恵器坏に、本節で分類した土器群を対応させると、H387・283・294号住類土器群は前内出2号窯より旧い時代に、H275号住類土器群(A)は前内出1・2号窯または山際窯と同じ頃に、H275号住類土器群(B)は八坂前4・6号窯より旧い所に、H271号住類土器群は八坂前4・6号窯と同じ頃かそれ以前に、H267号住類土器群は八坂前5号窯と同じかそれより新しい時期に、それぞれ位置づけられる。

時期を限定する材料となるものに他に灰釉陶器がある。前の分類ではH271号住類土器群で長頸瓶、H273・272号住類土器群に皿が出土している。この皿の形態・技法・施釉方法を産地とみられる東濃の灰釉陶器の編年[10]に対応させると、H273号住類土器群のものが10世紀前半に位置づけられる光ヶ丘1号窯式に、H272号住類土器群のものは10世紀後半に位置づけられる大原2号窯式に対応するものとみられる。

以上、いくつかの土器群について具体的な年代を当てはめてみたわけであるが、これを表化すると次のとおりである。

表—29　分類した土器群と対応する他遺跡出土遺物1・2

土器群	387	283	294	275(A)	275(B)	271	267	273	272	290
対応する各地の遺跡とその年代	和銅年間開設の岐阜朝倉窯 伊場遺跡・8C初頭以降			前内出1・2号窯 山際窯 （8C中～後半頃）		八坂前4・6号窯（9C中頃）	←→ 八坂前5号窯（9C中頃）	光ヶ丘1号窯（10C前半）	大原2号窯（10C後半）	下渕名・II区91号住 荒砥五反田・8号住 鳥羽SK332土坑 より旧い

上の表は、あくまでも他の遺跡と機械的に対応させたものであり、本節で分類した土器群そのものの年代を示すもの

ではない。そのためには、更にいくつかの前提条件や資料操作を必要とするであろう。しかし、前に述べたように本遺跡出土土器の絶対年代を考える上で参考程度にはなるものと思われる。

5　今後の課題

ところで、今まで述べてきた分類或は編年的序列の最終目的は、芳賀団地遺跡における奈良・平安時代の集落構造を究明することにある。また、「II、位置と環境」でも述べているように、本遺跡地付近は平安時代前半につくられた『和名抄』にのる勢多郡芳賀郷または藤沢郷に比定する見方が強い(11)。もし、本遺跡がこれら郷の一角に当るとすれば、集落そのものを越えて、更に郷の実態に迫ることができる可能性もある。

いずれにせよ、まず最小単位の生活集団の抽出が必要である。これが文献にみえる房戸に相当するのか、或は郷戸に当るのか、それとも全く別なものになるのか、まず究明する必要があろう。そして、それが時間的変遷の中でどのような変化をみせ、生活する一空間とどのような係わり方を示すのか。近接する他の生活集団との係わり方にどのような変化をみせるか。また、時間的変遷の中で掘立柱建物はどのような現われ方をするのか。総体としてどのような集落構造を持つのか。そして、郷との接点をどこに求めることができるのか。そのためには、周辺の遺跡内容の検討をどう進めるか、等々。究明すべき問題は余りにも多く深い。しかし、本遺跡は、その内容からみて、上記課題にせまり得る内容を持つものと確信している。本書の今までの資料でもある程度のところまで迫ることはできるかも知れない。しかし、芳賀東部団地遺跡だけでも土師器を伴う竪穴式住居跡495軒、掘立柱建物跡約200棟があり、本書に収録したのは前者で35%（奈良・平安時代のものに限定すると22%）．後者30%で、第2巻がむしろ中心と言える。遺構のあり方も第2巻で扱う西側台地がむしろ中心と言える様相を持つ。これが芳賀団地遺跡全体では約800軒の土師器を伴う竪穴式住居跡が検出されている。このような状況では、一部分の資料で集落論を述べることに不安を覚える。また、広範囲、長期に亙る調査のため、発掘担当者の交替も激しく、未だ十分な意見交換ができていない。

集落構造については、今後の整理が進む中で、編集・執筆委員を中心とする検討会組織を設定し、そこでの成果を報告書第2巻以降等に掲載することにしたい。なお本節では、奈良・平安時代を中心とする土器群についてのみ触れたが、同様の分類・編年や集落論を古墳時代のものにも、今後進めて行く予定である。　（唐澤）

(1)　例えば芳賀北部団地遺跡では、「神功開宝」を伴出したり、B軽石層が床面近くで堆積する竪穴式住居跡があるとのことである。
(2)　「シンポジウム・神奈川県内における古墳時代後期から平安時代土器編年試案」（『神奈川考古』第5号　1978）
(3)　(2)に同じ。
(4)　井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」（群馬県史編さん委員会『群馬県史研究』8　1978）の記載文による。
(5)a　群馬県埋蔵文化財調査事業団『清里・陳場遺跡』　1981
　b　大江正行・中沢　悟「群馬県における平安時代の年代観について」（『シンポジウム・関供地方における9世紀代の須恵器と瓦』　1982　立正大学文学部考古学研究室）
(6)a　群馬県教育委員会『荒砥五反田遺跡』　1978
　b　(4)に同じ
(7)　「シンポジウム・奈良・平安時代土器の諸問題 第II版」（神奈川考古同人会『神奈川考古』第14号　1983）
(8)　井上唯雄・若月省吾「笠懸村の原始古代」（『笠懸村誌』別巻1983）
(9)　小林昭彦「八坂前窯跡の概要」((5)bに同じ)
　(7)に同じ。
(10)a　田口昭二「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」（『考古学ジャーナル』№211　1982）
　b　田口昭二『美濃焼』　1983
(11)a　「郡郷の成立」（『前橋市史』第1巻　1971）
　b　尾崎喜左雄『群馬の地名』下巻　1976
(12)　本分類では、H267味住類土器群のころから出現し、部分的に色調が淡褐色乃至灰褐色で土師質味を帯び始めた須恵器については、他の須恵器と同じものとして扱った。本分類で使用した「土師質の須恵器」は、これらに比べ全面に色調が淡褐色を帯び、軟質の焼成で、技法及び形態的に異なるものを指している。なお、本書の「VI　遺構と遺物」の遺物説明では、前者を「土師質須恵器」と扱っているものがある。

結

芳賀団地遺跡群発掘調査報告書第一巻を刊行するにあたり関係各位に厚くお礼を申し上げます。

本遺跡は、昭和48年芳賀北部団地遺跡の発掘調査を実施してから８年余の歳月を経て終了したものである。

この間に芳賀西部工業団地、芳賀東部団地の発掘調査を面的に実施してきたものである。

この間に、多数の遺構・遺物が発見された。調査にあたっては、多くの調査担当者が係わり調査を継続してきたのである。報告書刊行に当り発掘調査に少しの期間でも直接携った担当者で文化財保護係職員として残っている者は３名のみであり、のべ数十名に及ぶ担当者は他に転出し庁外者となっている。

このような状況の中で幾多の障害をのりこえ調査報告書第１巻が刊行されることは至上の喜びである。

本遺跡地は、赤城山南麓の開折谷上の台地上に位置し、約40haに亙る面的な調査を実施した他に類例のない調査例である。

そのために、住居の占地状況、生産地、墓域等を知る上で、また、丘陵上の幾多の集落の変遷、竪穴式住居跡と掘立建物跡の配置、溝等の関連日土器では火山灰、住居跡の切り合い等を鍵とする型式分類、編年的研究等の好資料となるものである。

また、今後の研究により文献史学で解明されつつある「郷」「郷戸・房戸」等の実証的研究を考古学的側面からその実態を究明する一助になるものと確信をしている。

これこそ先人が遺してくれた至上の資料であり、記録保存としての報告書の刊行・整理された遺物その他の資料が今後の研究に役立つものと期待している。

報告書にいくら最大もらさず記録されたとしても遺跡そのものではない。しかし、記録として後代に伝えることは我々に課せられた重大な責務である。

（福田）

写　真　図　版

図　版　目　次

図版１　遺跡全景（19区・20―１区）
図版２　遺跡遠景
　　遺跡遠景
図版３　調査前遺跡地近景
　　遺跡現形
図版４　遺跡遠景（18区・20―1区）
　　遺跡遠景（19区・20―1区）
図版５　遺跡遠景（18区）
　　19区全景
図版６　19区道路西北部
　　20―１区　東半
図版７　20―１区　西半
　　20―１区　道路東
図版８　20―１区　西側
　　18区
図版９　１号古墳（石室・裏込め全体）
　　１号古墳（石室・裏込め全体）
図版10　１号古墳（石室西側裏込め）
　　１号古墳（石室東側裏込め）
図版11　１号古墳（奥壁）
　　１号古墳（袖部）
図版12　１号古墳（根石列）
　　１号古墳（床面）
図版13　１号古墳（遺物出土状態）
　　１号古墳（遺物出土状態）
図版14　２号古墳全景
　　２号古墳（石室全体）
図版15　２号古墳（遺物出土状態）
　　３号古墳（礫の出土状態）
図版16　３号古墳全景
　　４号古墳
図版17　H267号住居跡全景
　　H269号住居跡全景
図版18　H270号住居跡全景
　　H271号住居跡全景
図版19　H273号住居跡全景
　　H273号住居跡（カマド及び棚状施設）
図版20　H276号住居跡全景
　　H280号住居跡（カマド）
図版21　H281号住居跡全景
　　H282号住居跡全景
図版22　H283号住居跡（カマド）
　　H285号住居跡（カマド付近）
図版23　H286・287・288号住居跡全景
　　H288号住居跡全景
図版24　H289号住居跡全景
　　H290号住居跡全景
図版25　H291号住居跡（カマド）
　　H301・302・311号住居跡全景
図版26　H303号住居跡（東壁上の集石）
　　H309号住居跡（カマド）
図版27　H310号住居跡全景
　　H313号住居跡全景
図版28　H315号住居跡全景
　　H316号住居跡全景
図版29　H317号住居跡全景
　　H318号住居跡全景
図版30　H320号住居跡全景
　　H354・365・366号住居跡全景
図版31　H359号住居跡
　　H370号住居跡全景
図版32　H373号住居跡全景
　　H375号住居跡全景
図版33　H376号住居跡（遺物出土状況）
　　H378号住居跡全景
図版34　H378号住居跡（カマド）
　　H381号住居跡全景
図版35　H387号住居跡全景
　　H394号住居跡全景
図版36　H399号住居跡全景
　　H403号住居跡（遺物出土状況）
図版37　H404号住居跡（遺物出土状況）
　　H411号住居跡全景
図版38　H431号住居跡（遺物出土状況）
　　H416号住居跡全景
図版39　H431号住居跡（遺物出土状況
　　H433号住居跡全景
図版40　H438号住居跡（遺物出土況態）
　　H438号住居跡全景
図版41　H440号住居跡（床面集石）
　　H439号住居跡全景
図版42　H443号住居跡全景

H444号住居跡全景
図版43　H453号住居跡全景
H444号住居跡（棚状施設）
図版44　H455号住居跡（遺物出土状況）
H455号住居跡全景
図版45　H469号住居跡（遺物出土状態）
H476号住居跡全景
図版46　H４号竪穴遺構全景
４号製鉄址（遺物等出土状況）
図版47　４号製鉄址全景
４号製鉄址全景
図版48　４号製鉄址（製錬炉他）
４号製鉄址（鍛冶炉）
図版49　５号製鉄址（遺物等出土状況）
５号製鉄址全景
図版50　19区溝全景
19区溝　北半部
図版51　45号溝
45号溝　分岐点
図版52　45・46・48号溝交点
49・50号溝交点
図版53　49・50・51号溝交点
48号溝
図版54　56号溝
56・59号溝交点
図版55　49・50・61号溝
39・40号溝
図版56　墨書土器集成(1)
図版57　墨書土器集成(2)
図版58　墨書土器集成(3)
図版59　線刻土器集成

遺跡全景（19区・20—1区）

図版 2

遺跡遠景（南から）

遺跡遠景（北から）

遺跡遠景（南から）

調査前遺跡地近景（南から）

図版 4

遺跡遠景（18区・20—１区、東から）

遺跡遠景（19区・20—１区、北から）

遺跡遠景（18区、南から）

19区　全景（南から）

図版6

19区　道路西北部（西から）

20—1区　東半（西から）

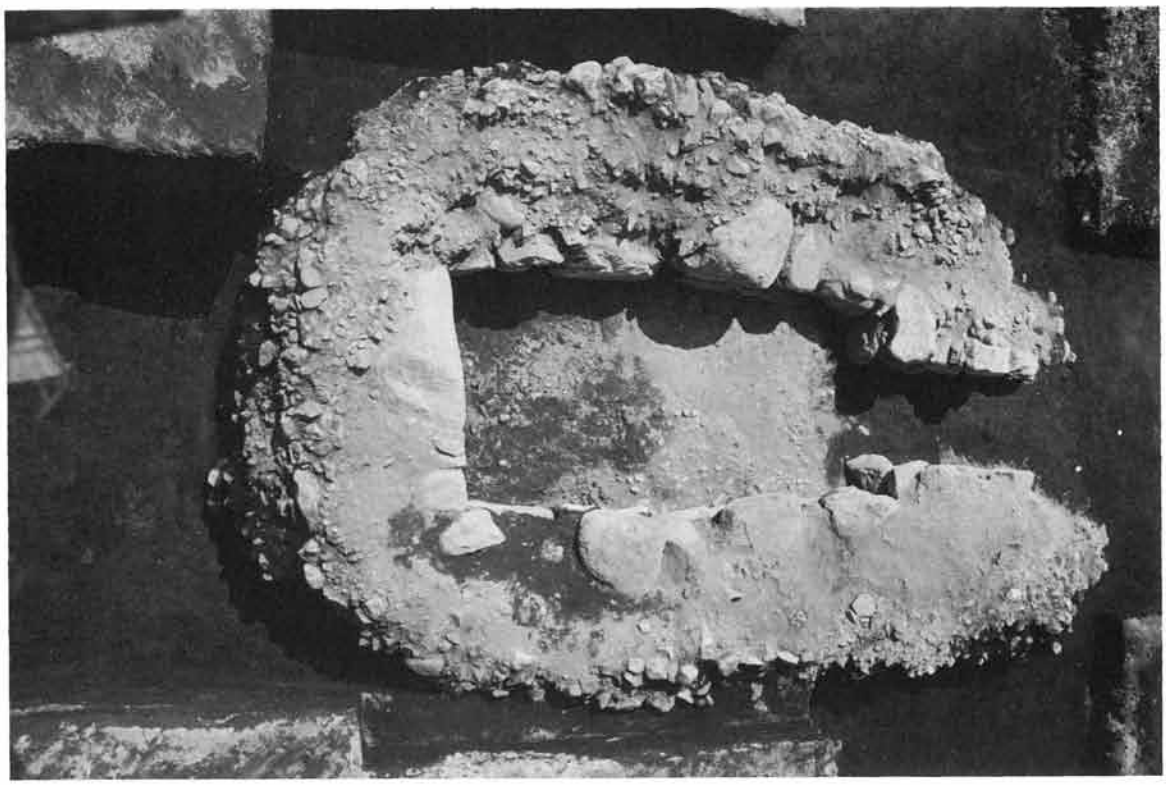
20—1区　西半（東から）

20—1区　道路東（南から）

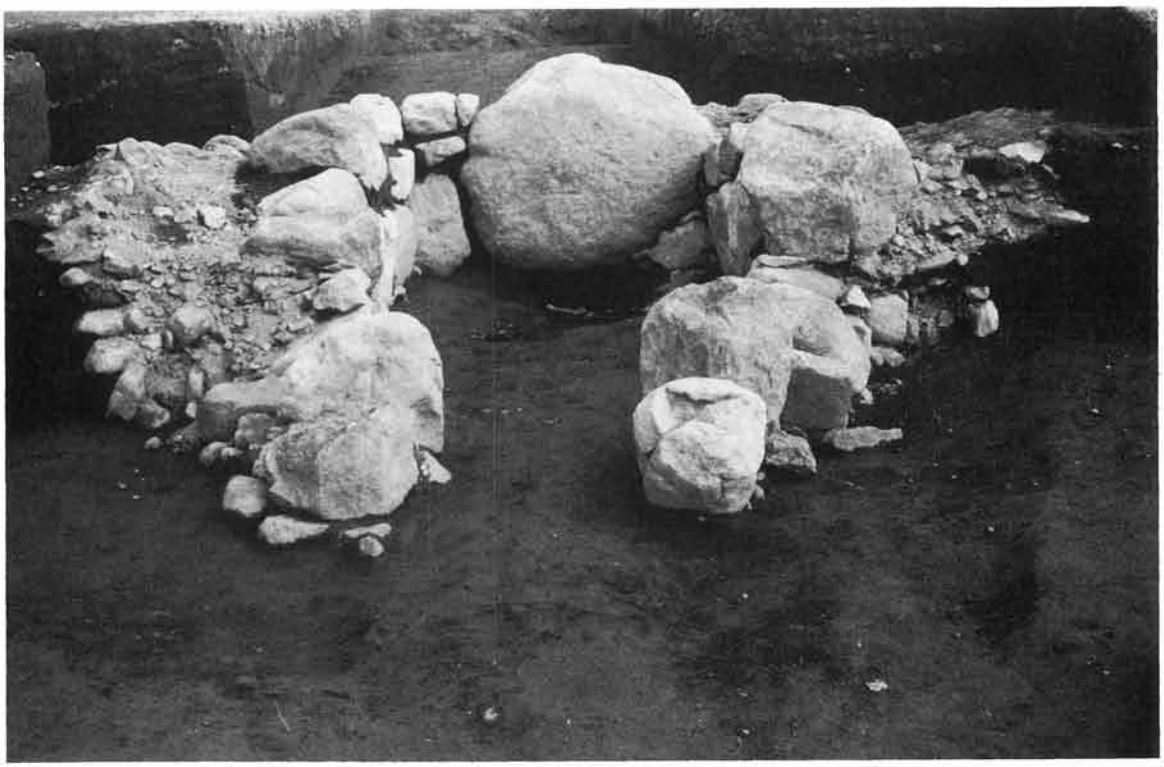
図版 8

20—1区　西側（南から）

18区　（北から）



1号古墳（石室・裏込め全体）



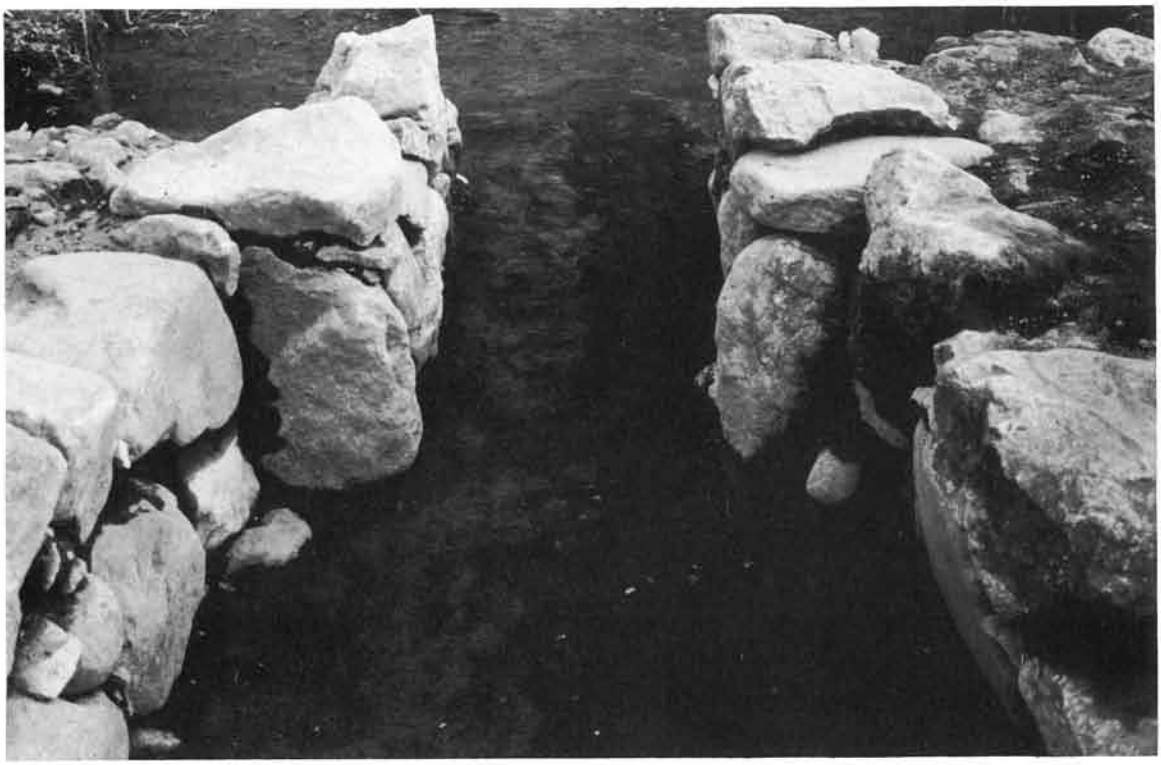
1号古墳（石室・裏込め全体）

図版10

1号古墳（石室西側裏込め）

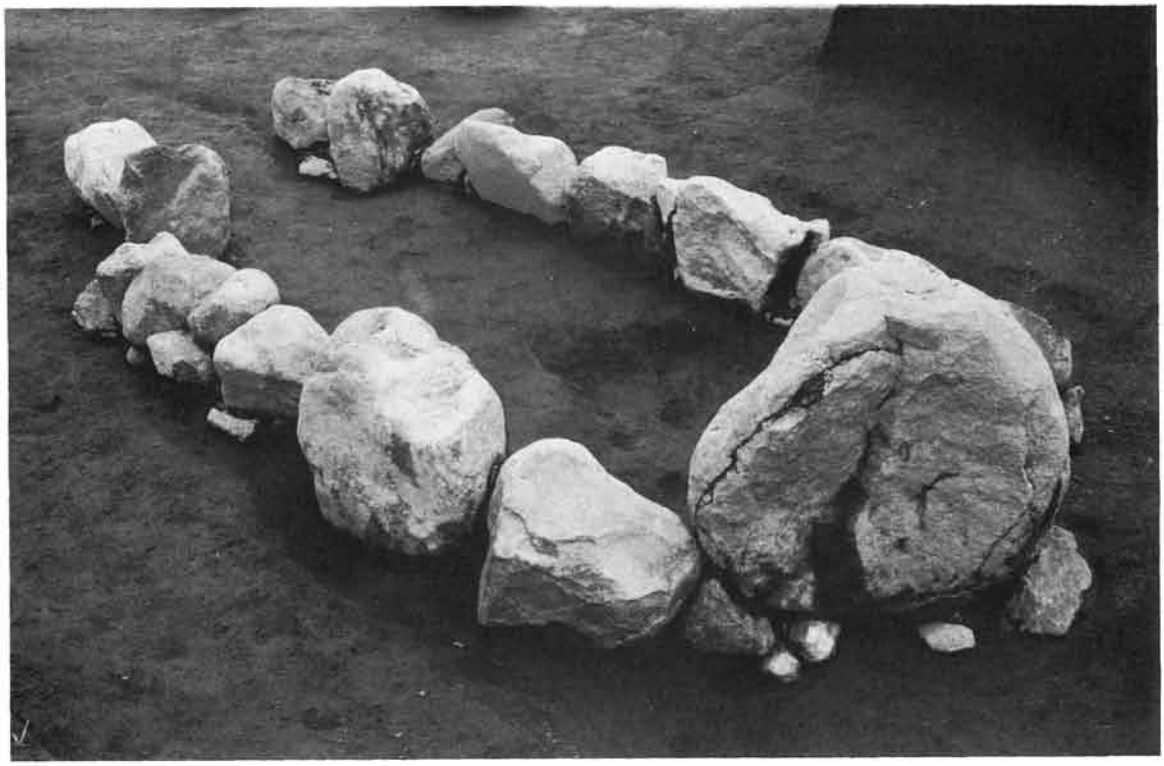
1号古墳（石室東側裏込め）

1号古墳（奥壁）



1号古墳（袖部）

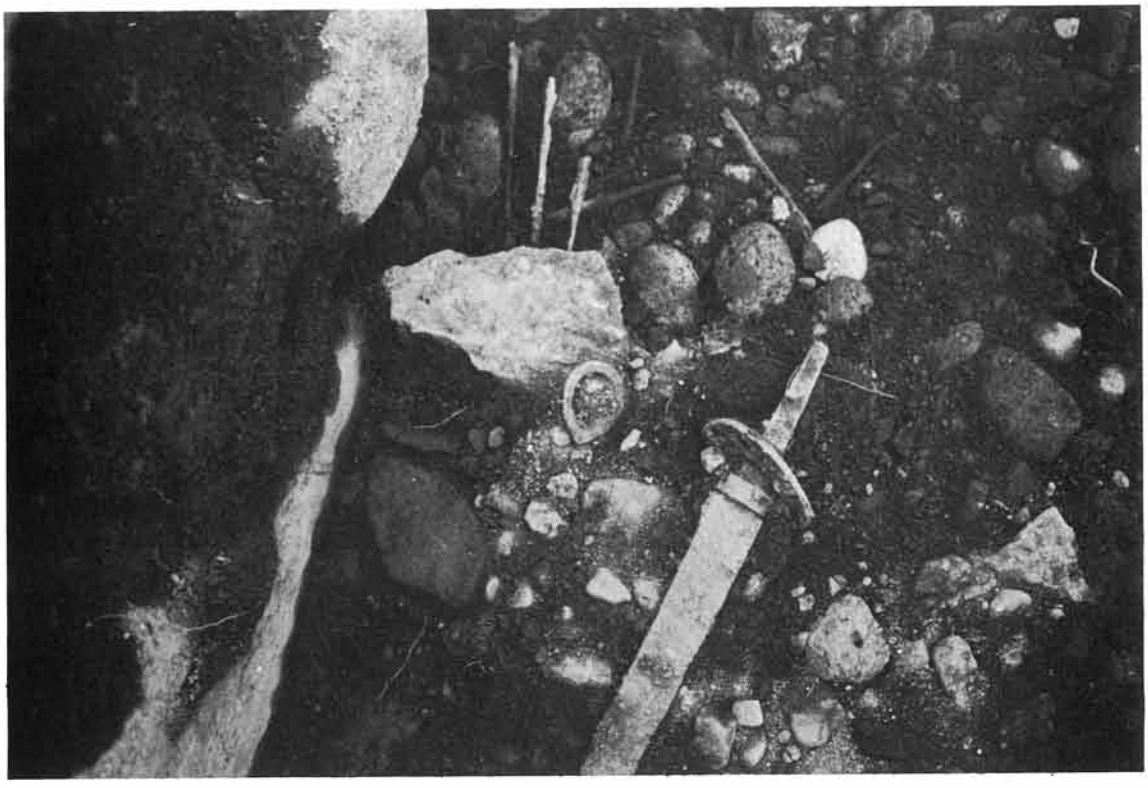
図版12



1号古墳（根石列）

1号古墳（床面）

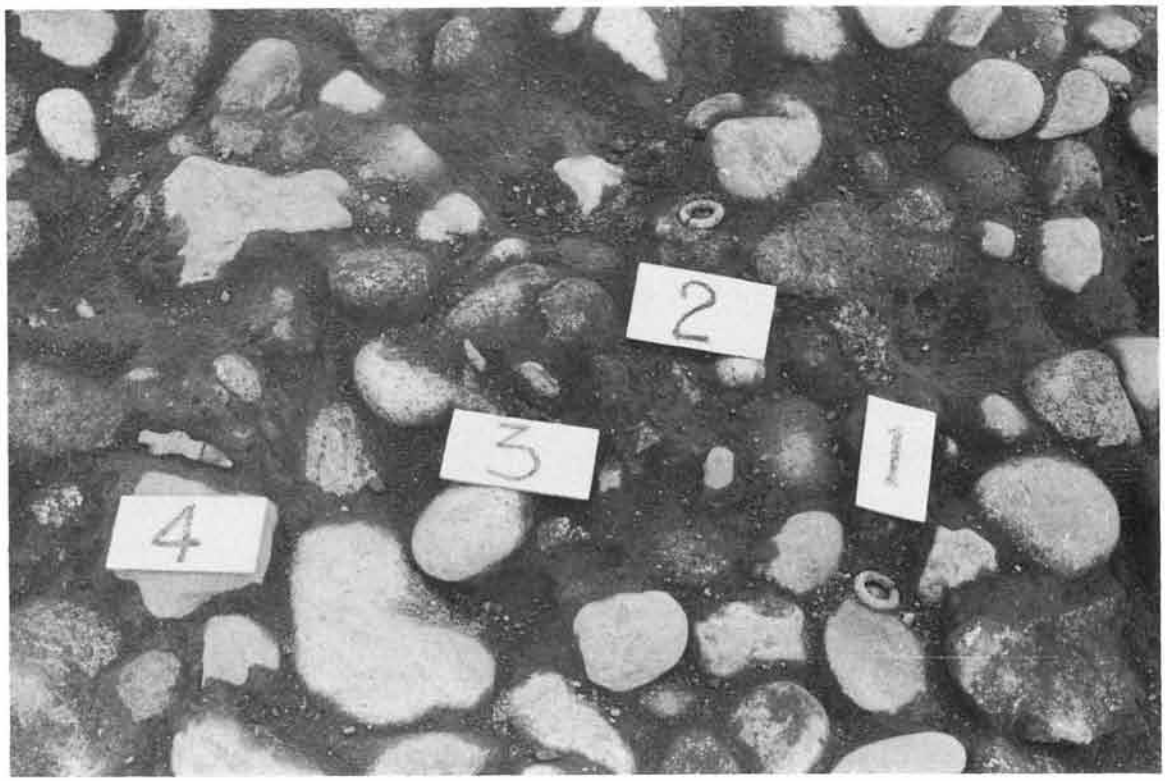
1号古墳（遺物出土状態）



1号古墳（遺物出土状態）

2号古墳全景（北から）

2号古墳（石室全体）



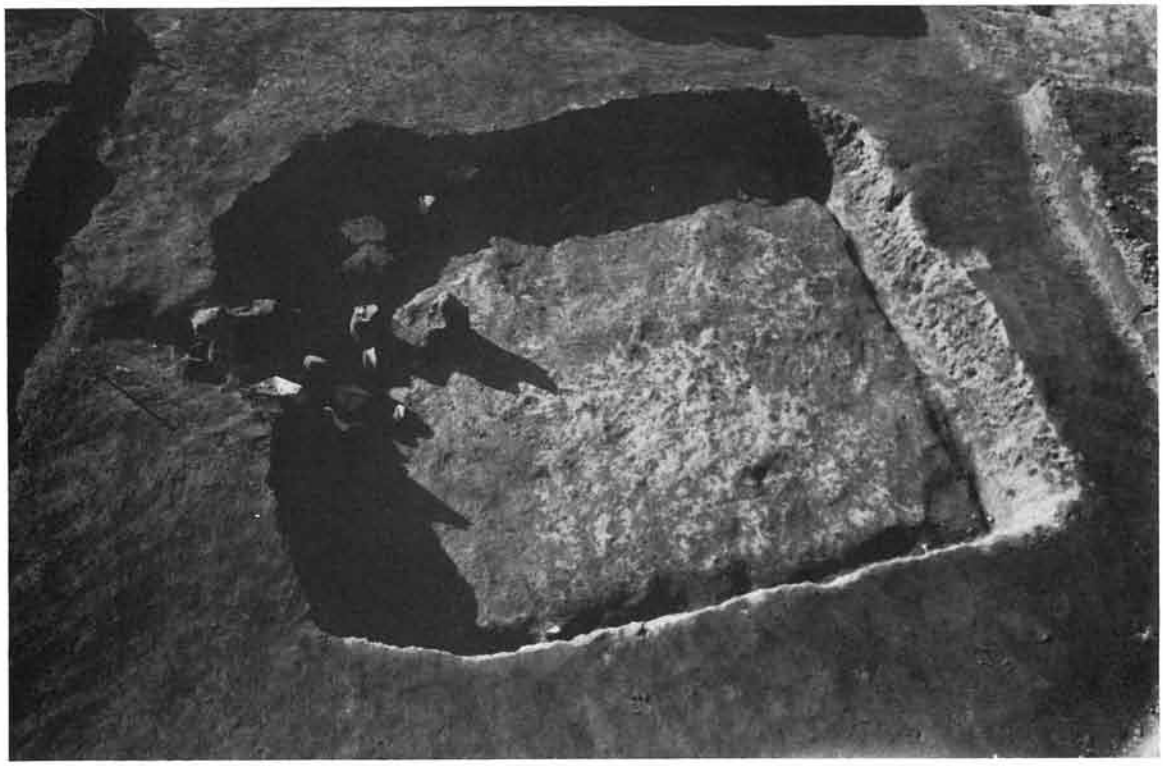
2号古墳（遺物出土状態）

3号古墳（礫の出土状態、南西から）

図版16

3号古墳全景（南から）

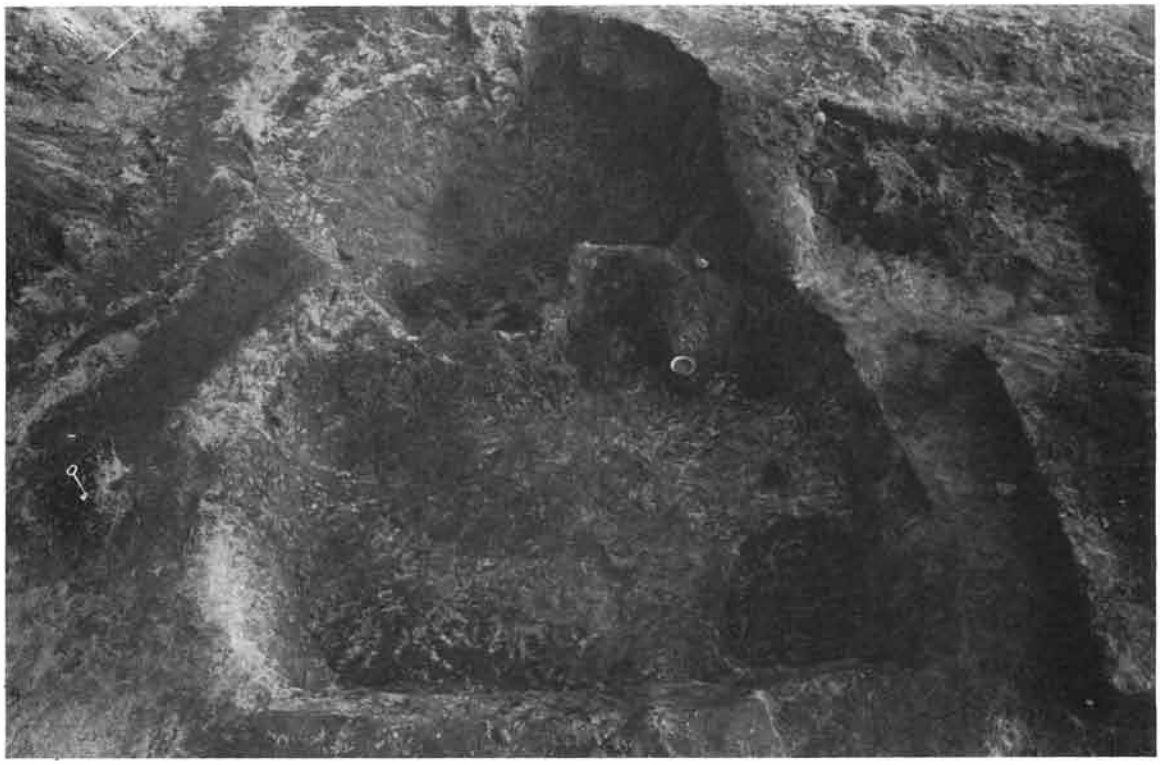
4号古墳（西から）



H267号住居跡全景

H269号住居跡全景

H270号住居跡全景

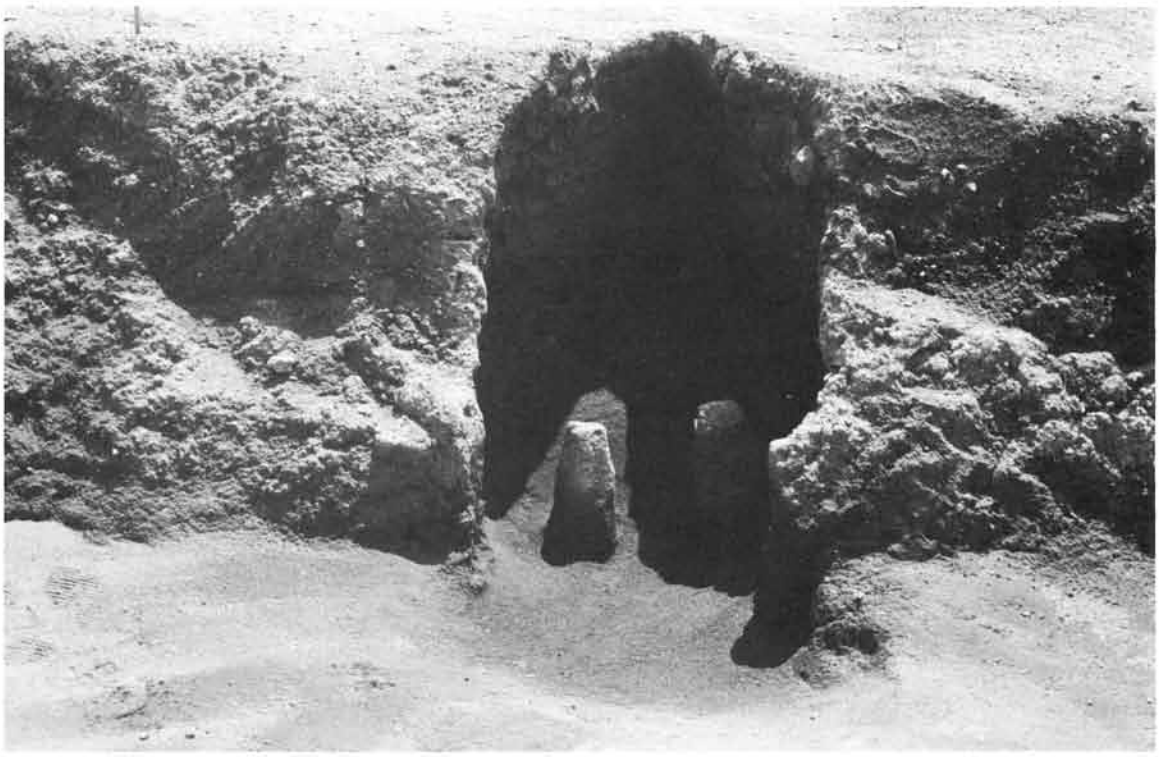


H271号住居跡全景

H273号住居跡全景

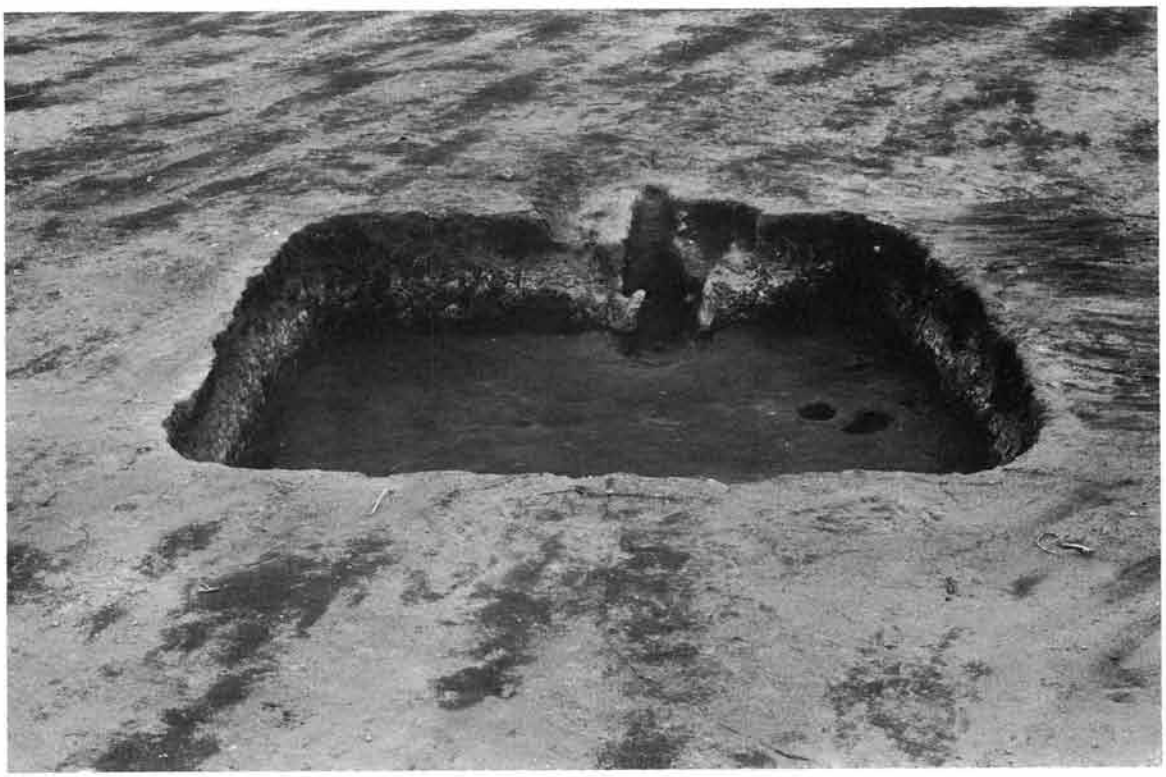
H273号住居跡（カマド及び棚状施設）

H276号住居跡全景

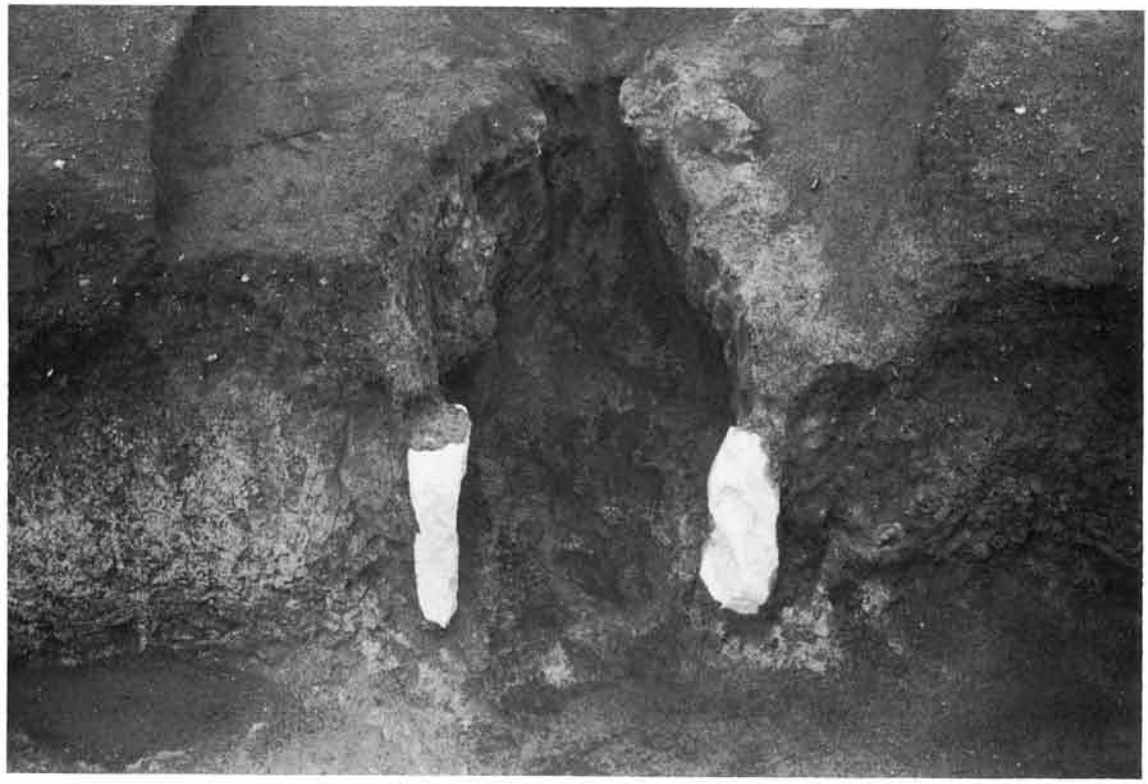


H280号住居跡（カマド）

H281号住居跡全景

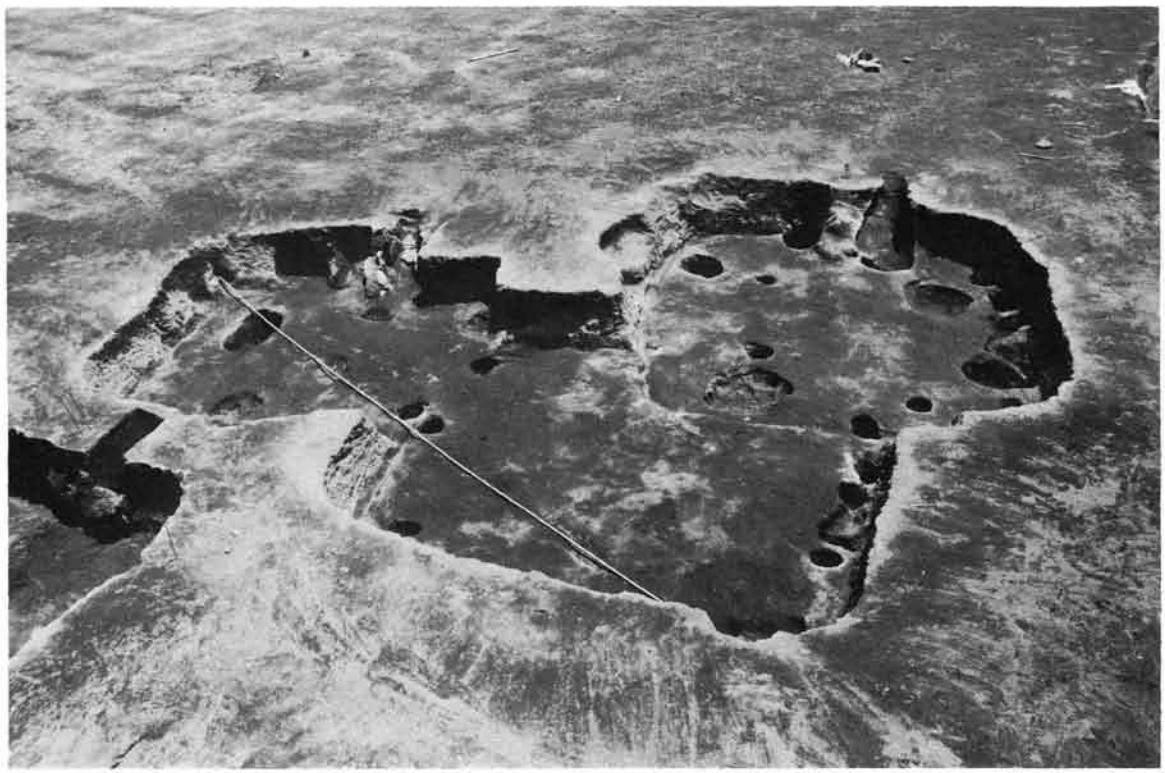


H282号住居跡全景



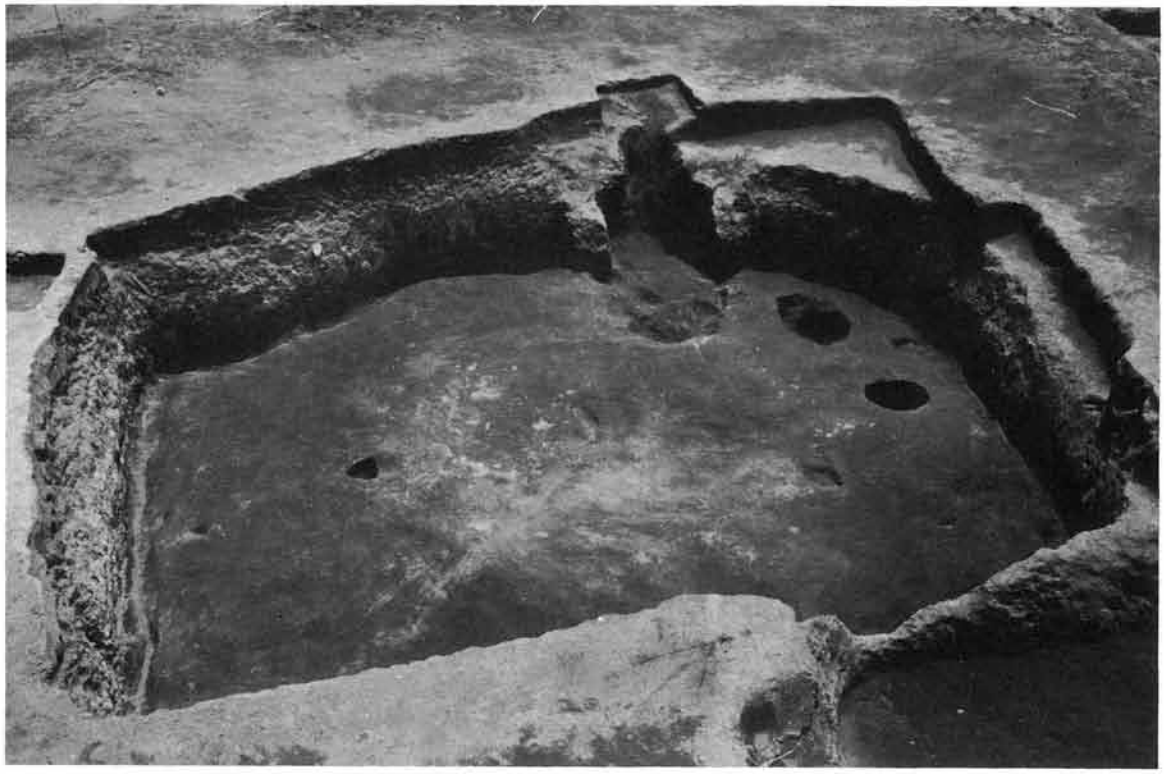
H283号住居跡（カマド）

H285号住居跡（カマド付近）



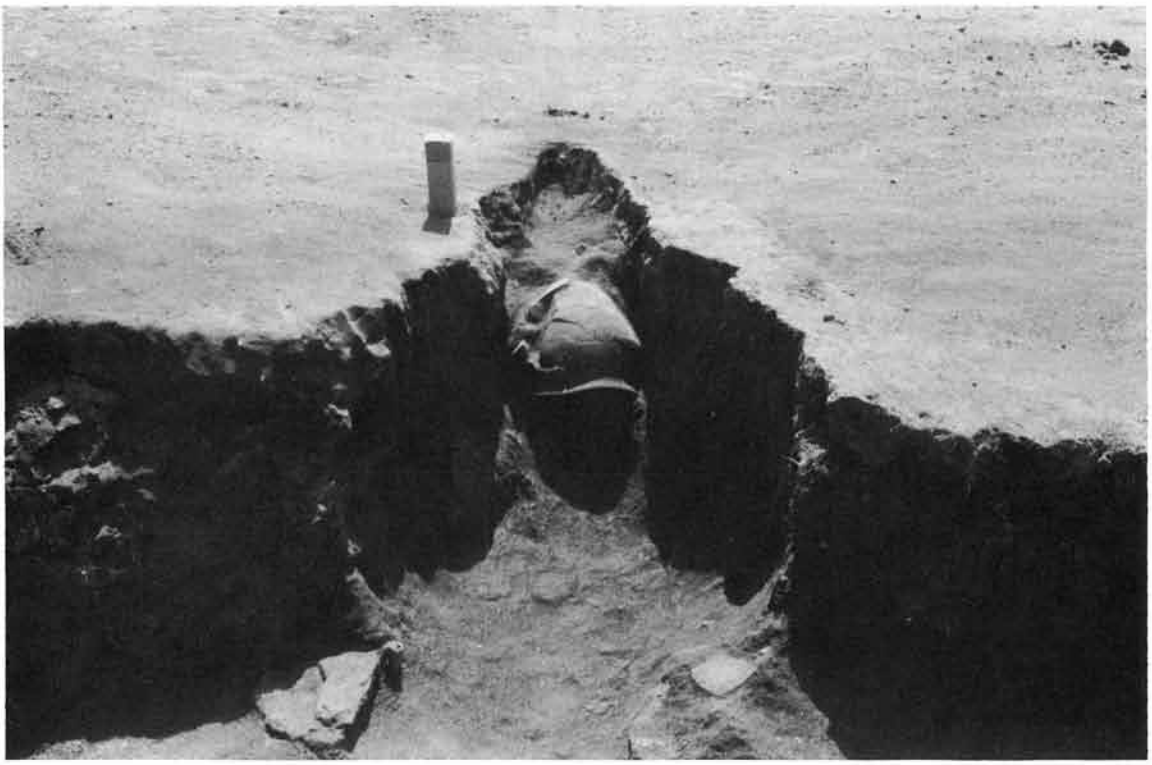
H286・287・288号住居跡全景

H288号住居跡全景



H289号住居跡全景

H290号住居跡全景



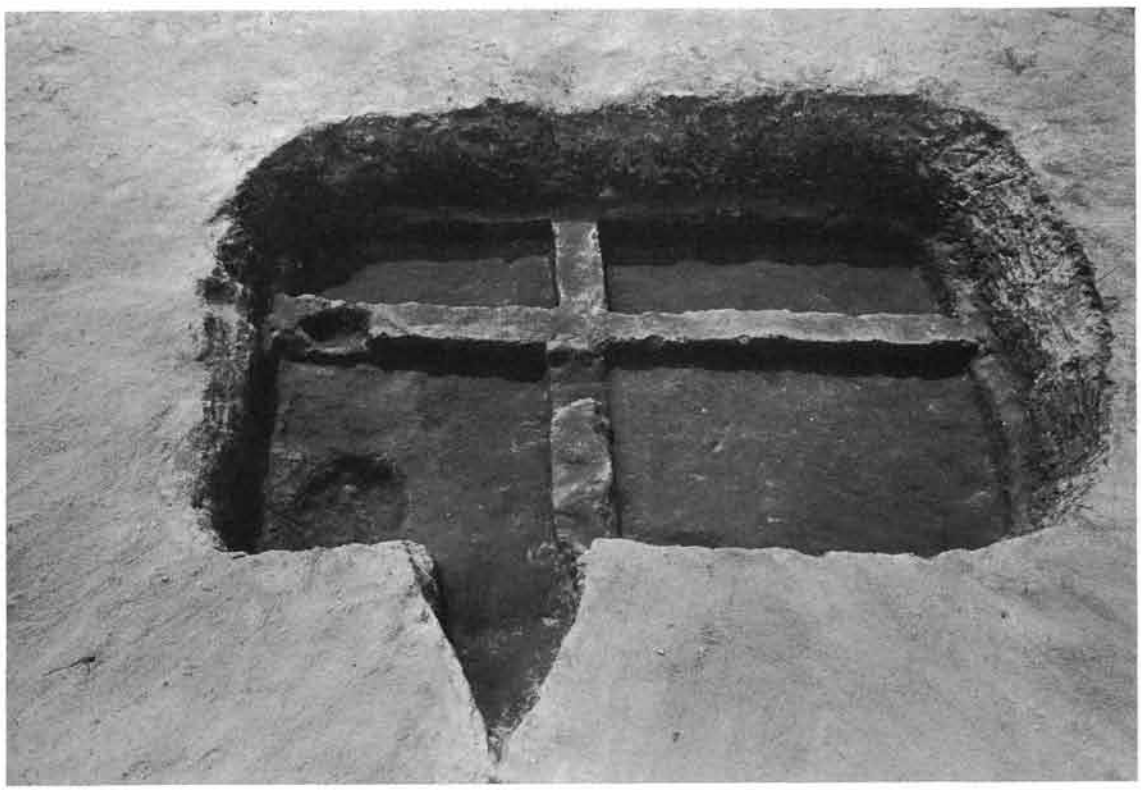
H291号住居跡（カマド）

H301・302・311号住居跡全景

H303号住居跡（東壁上の集石）

H309号住居跡（カ マ ド）

H310号住居跡全景

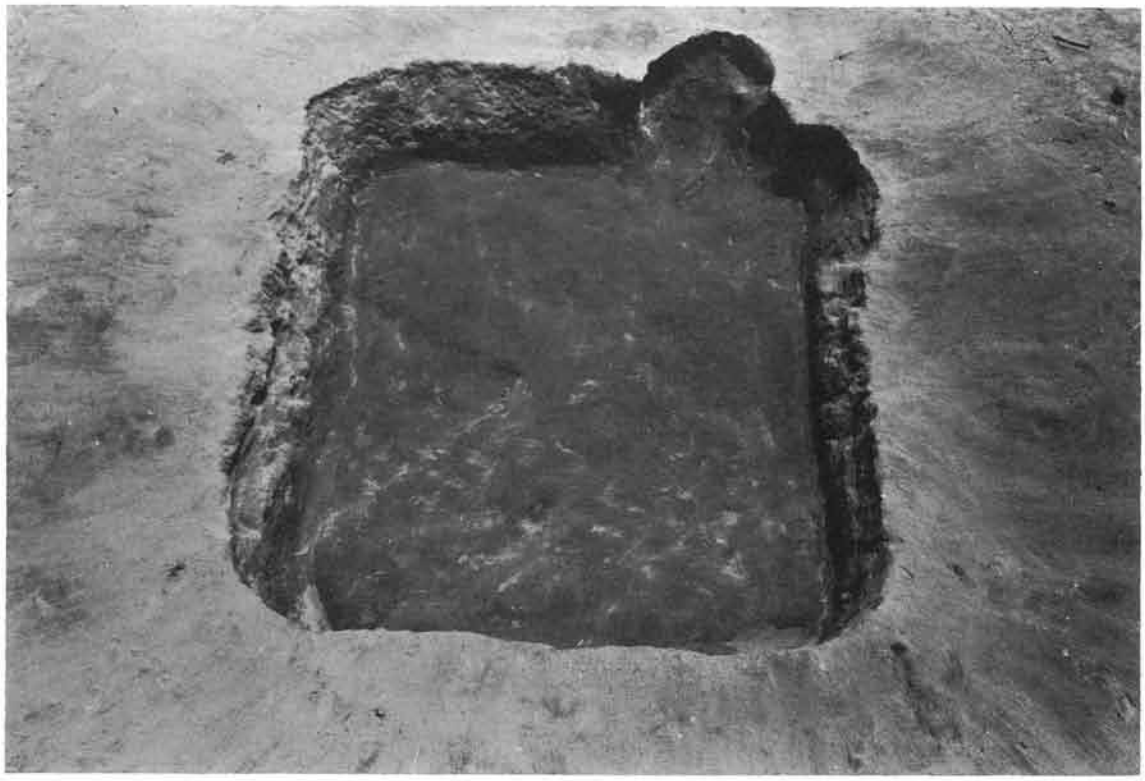


H313号住居跡全景

H315号住居跡全景

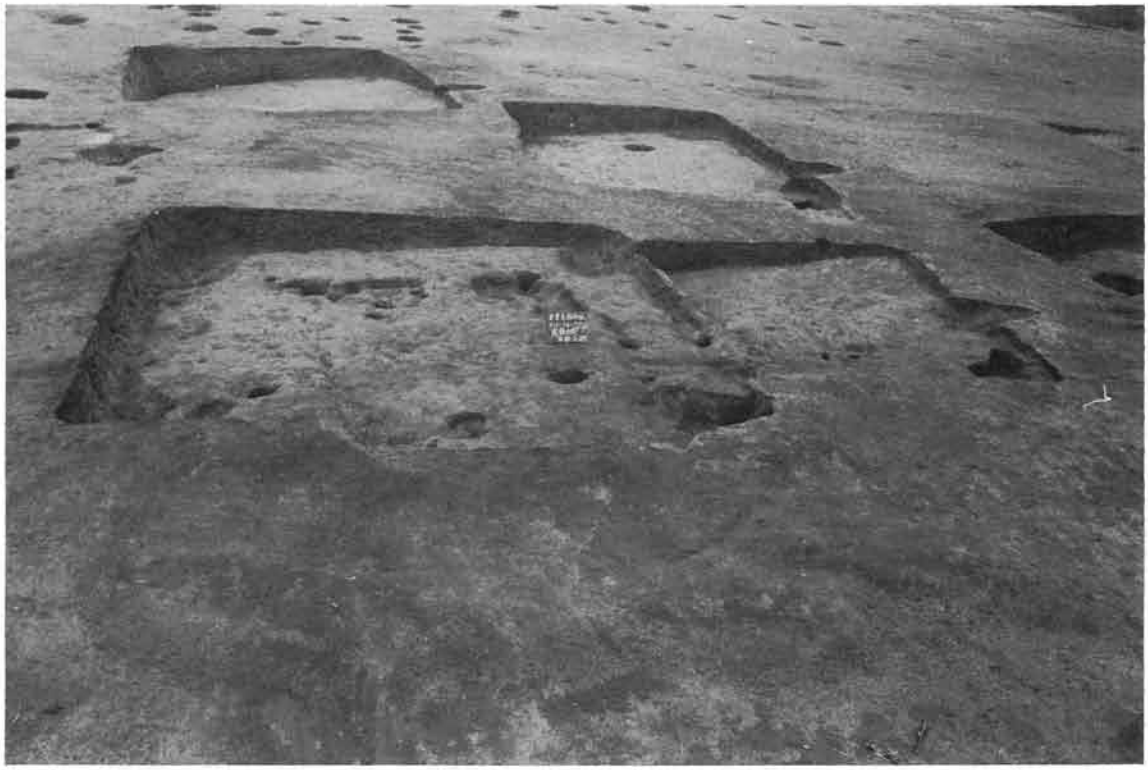
H316号住居跡全景

H317号住居跡全景



H318号住居跡全景

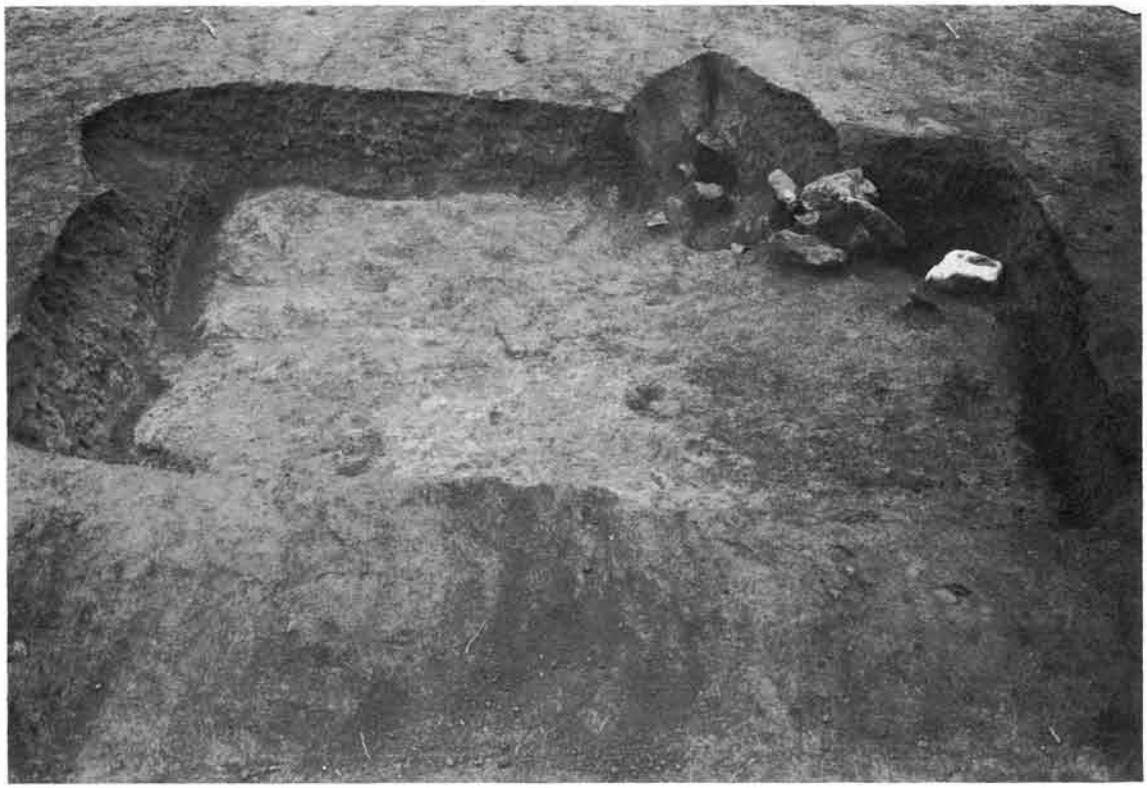
H320号住居跡全景



H354・365・366号住居跡全景

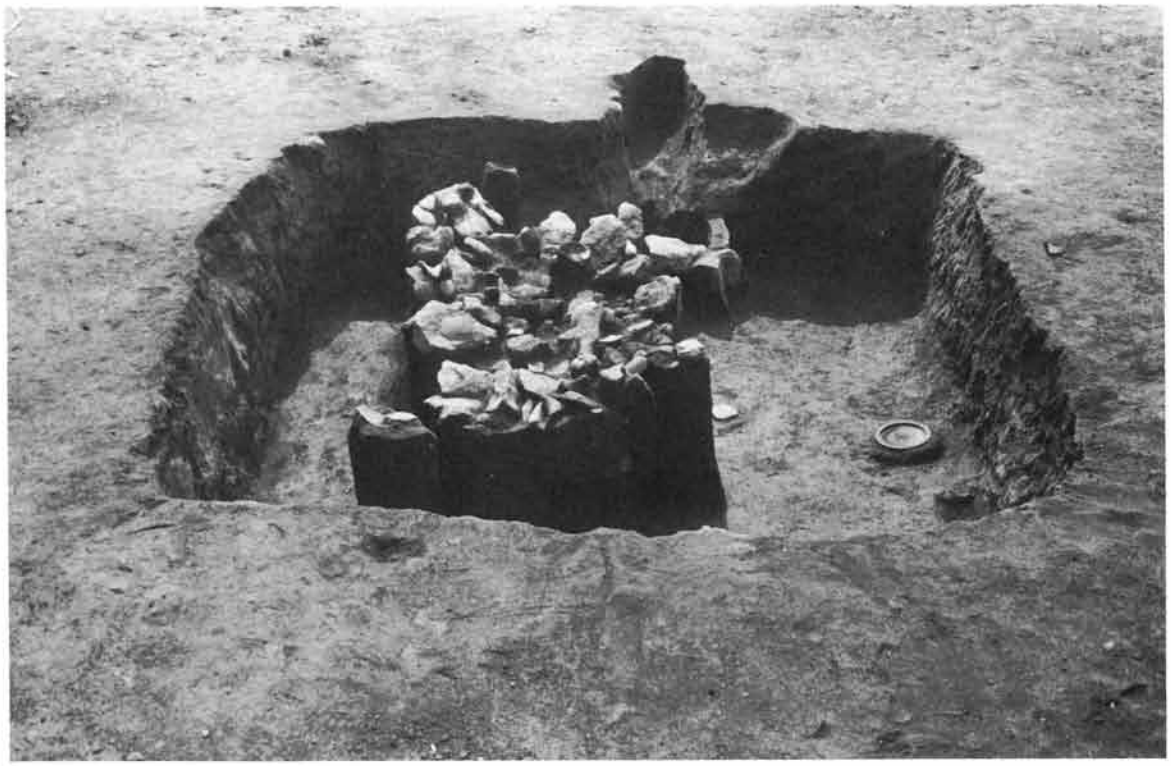
H359号住居跡

H370号住居跡全景



H373号住居跡全景

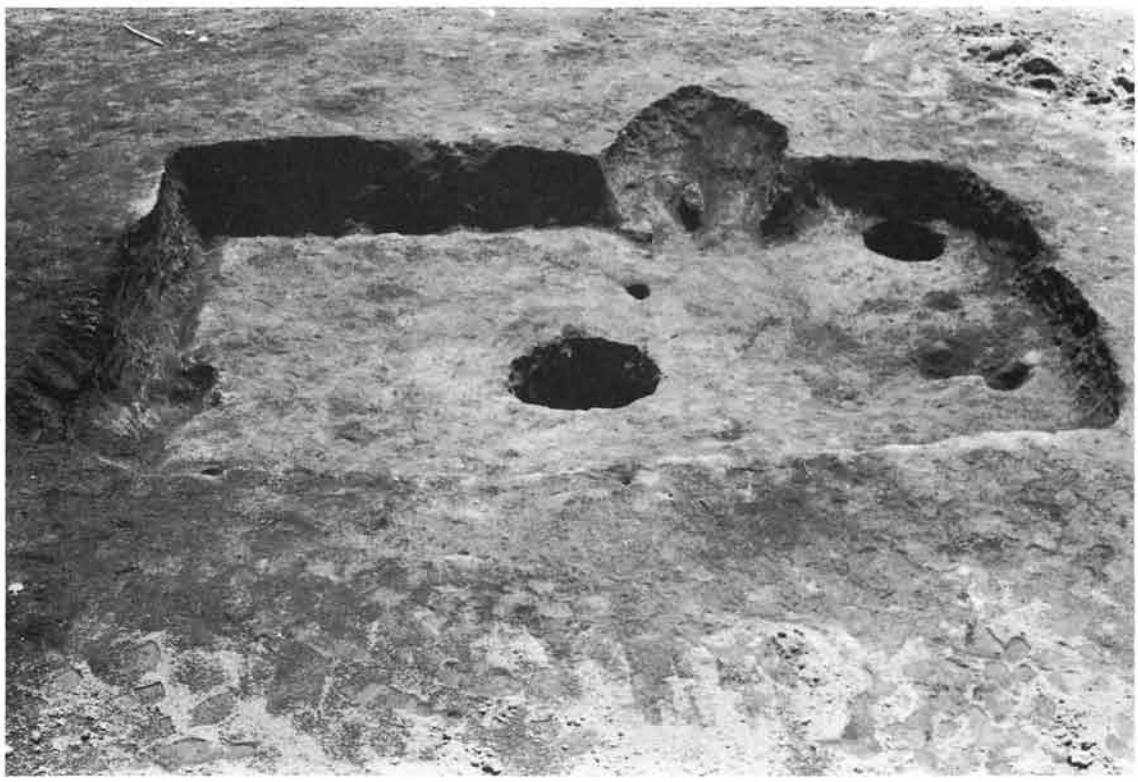
H375号住居跡全景



H376号住居跡（遺物出土状況）

H378号住居跡全景

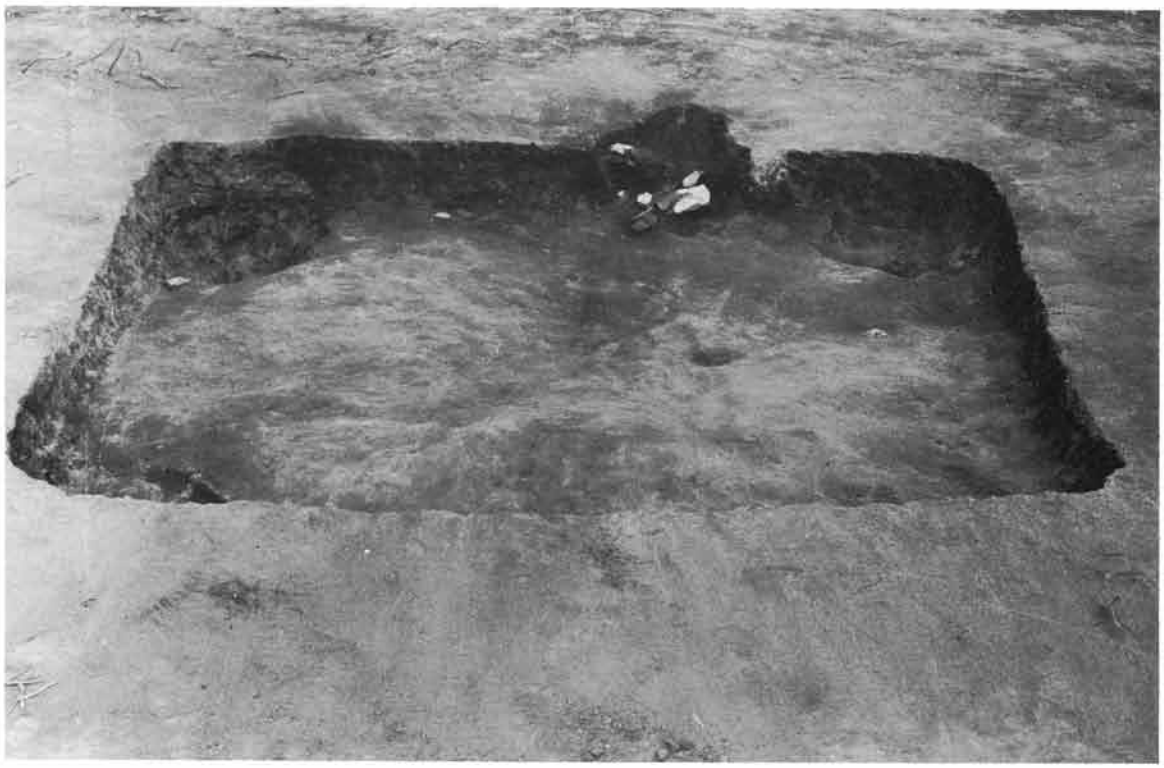
H378号住居跡（カマド）



H381号住居跡全景

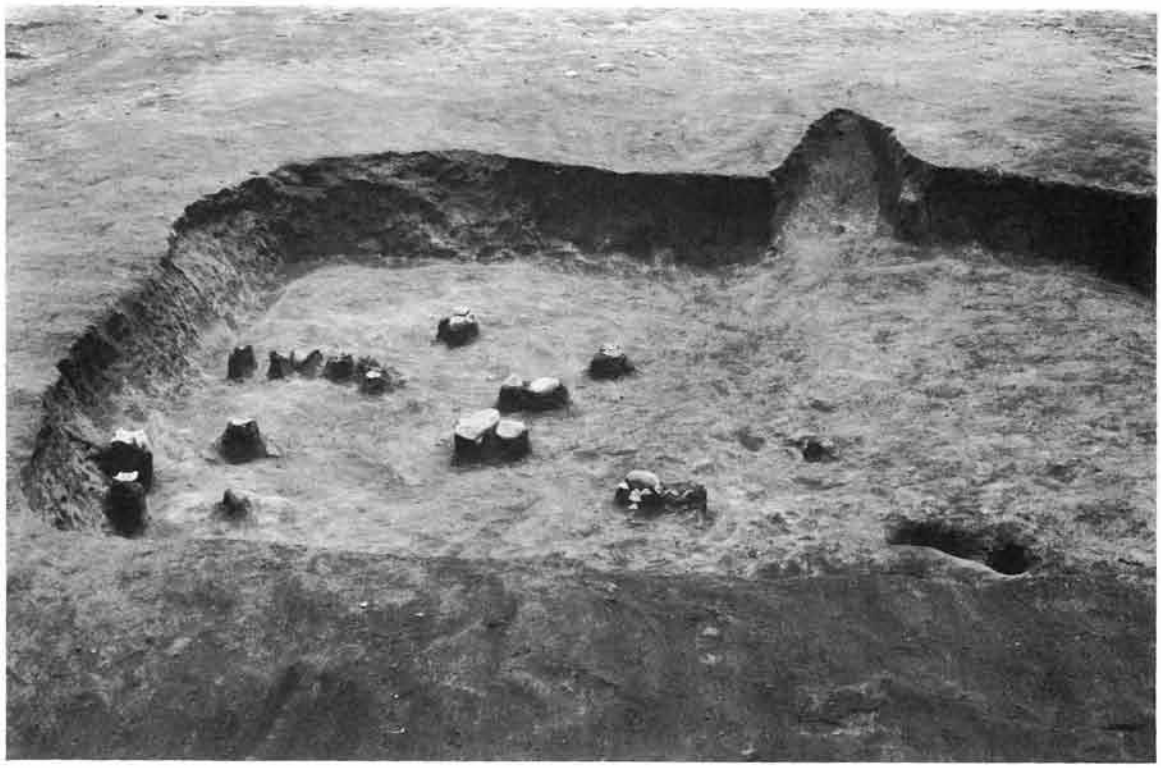
H387号住居跡全景

H394号住居跡全景

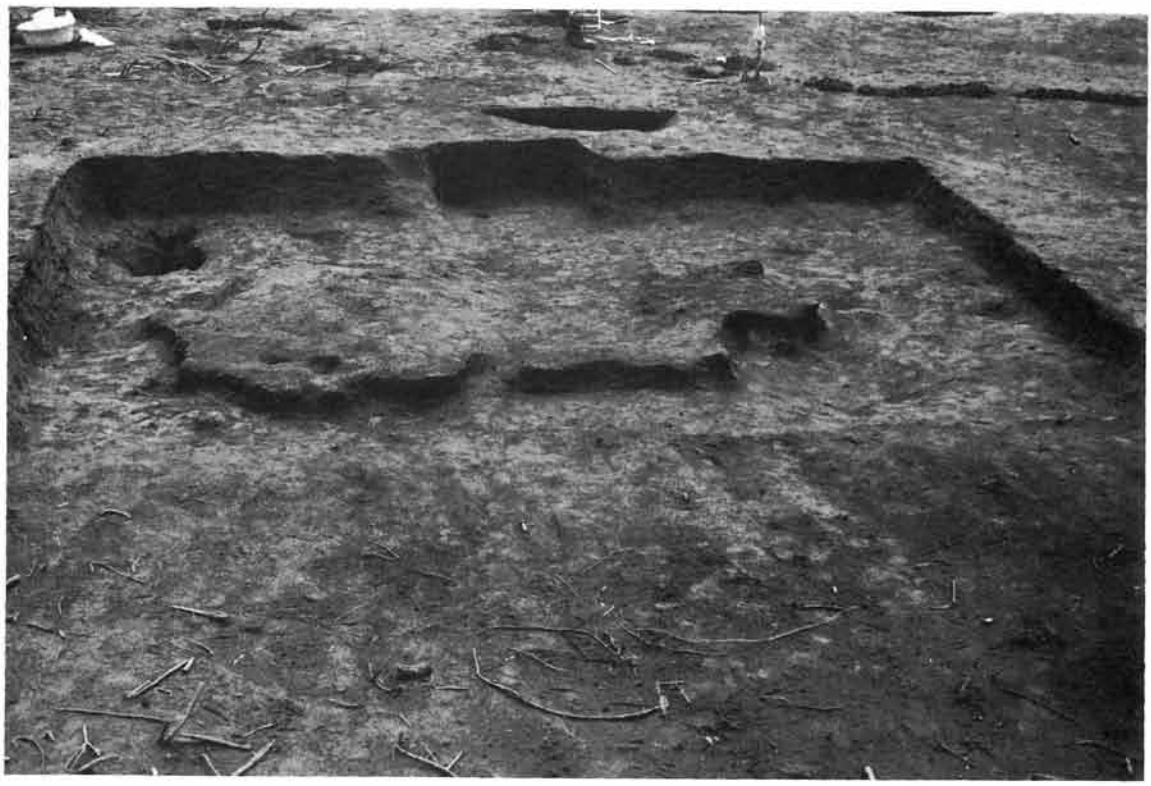


H399号住居跡全景

H403号住居跡（遺物出土状況）



H404号住居跡（遺物出土状況）

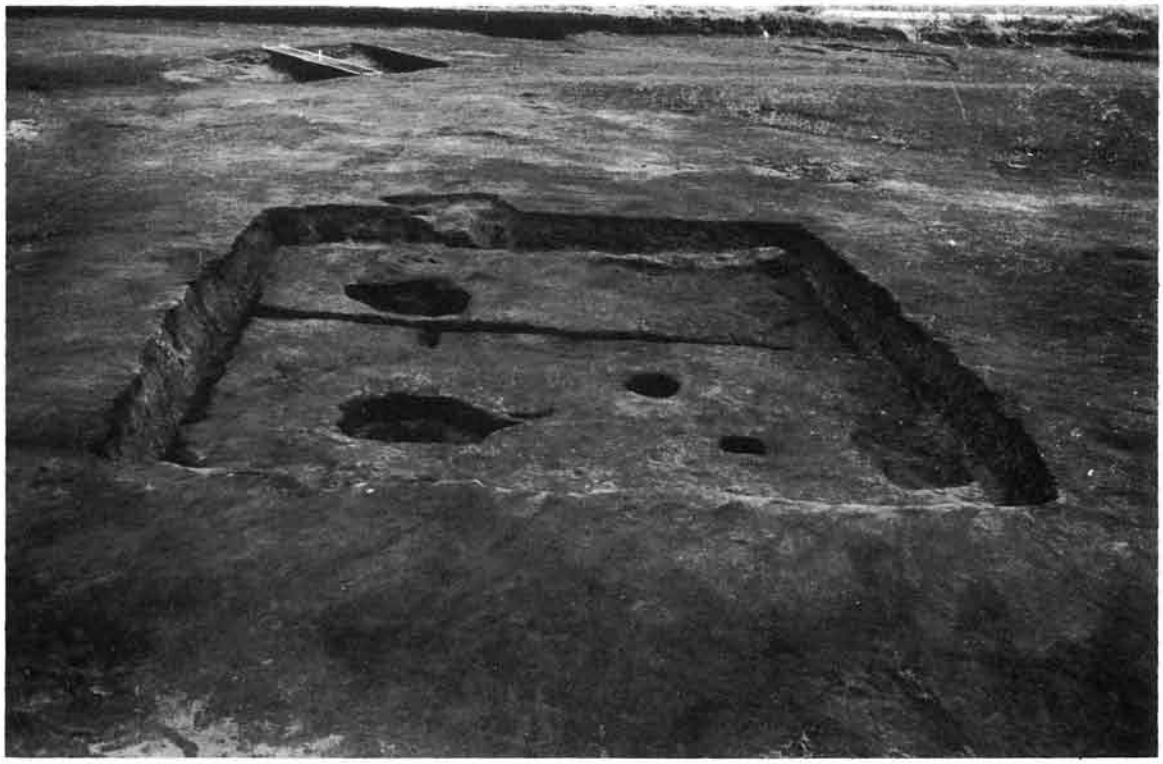


H411号住居跡全景

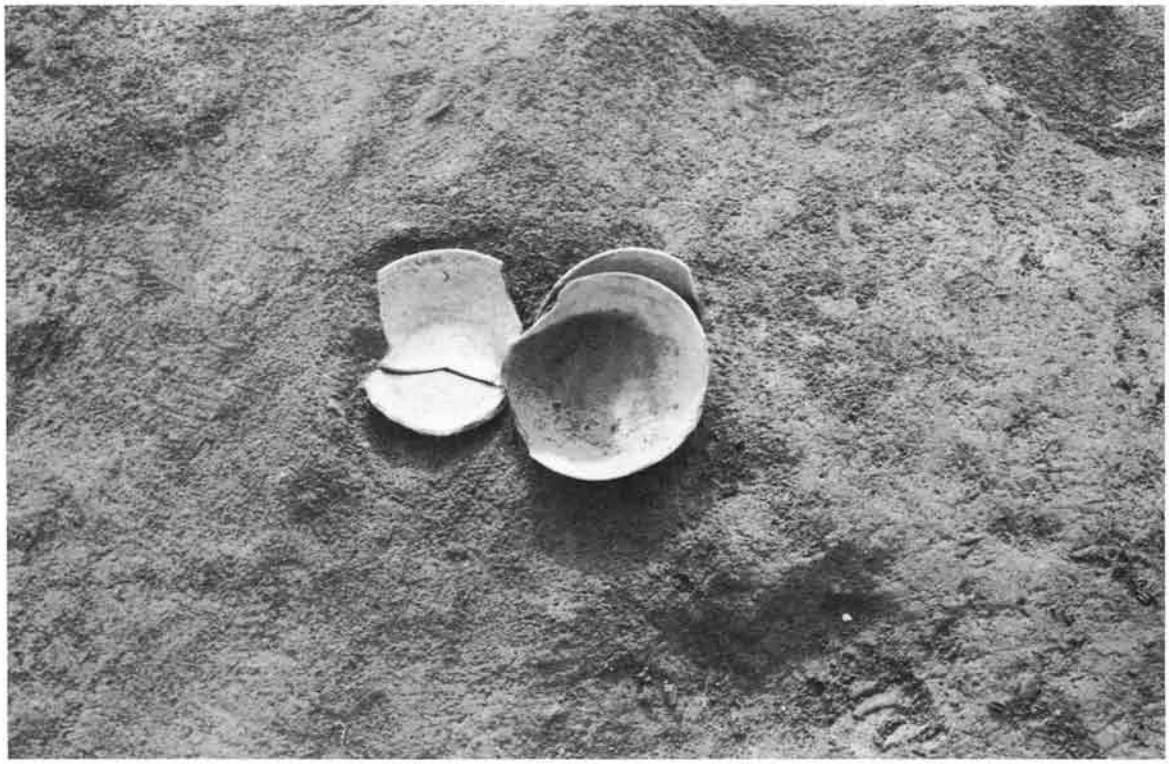
H431号住居跡（遺物出土状況）

H416号住居跡全景

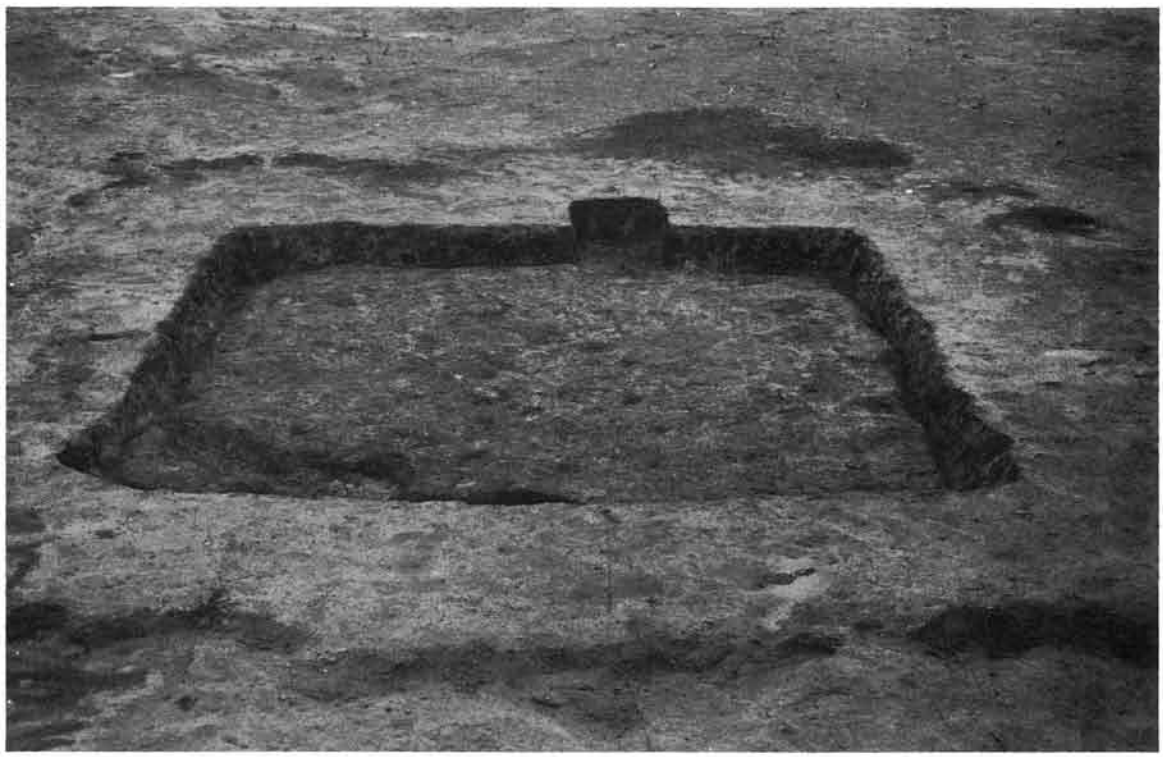
H431号住居跡（遺物出土状況）



H433号住居跡全景



H438号住居跡（遺物出土状況）



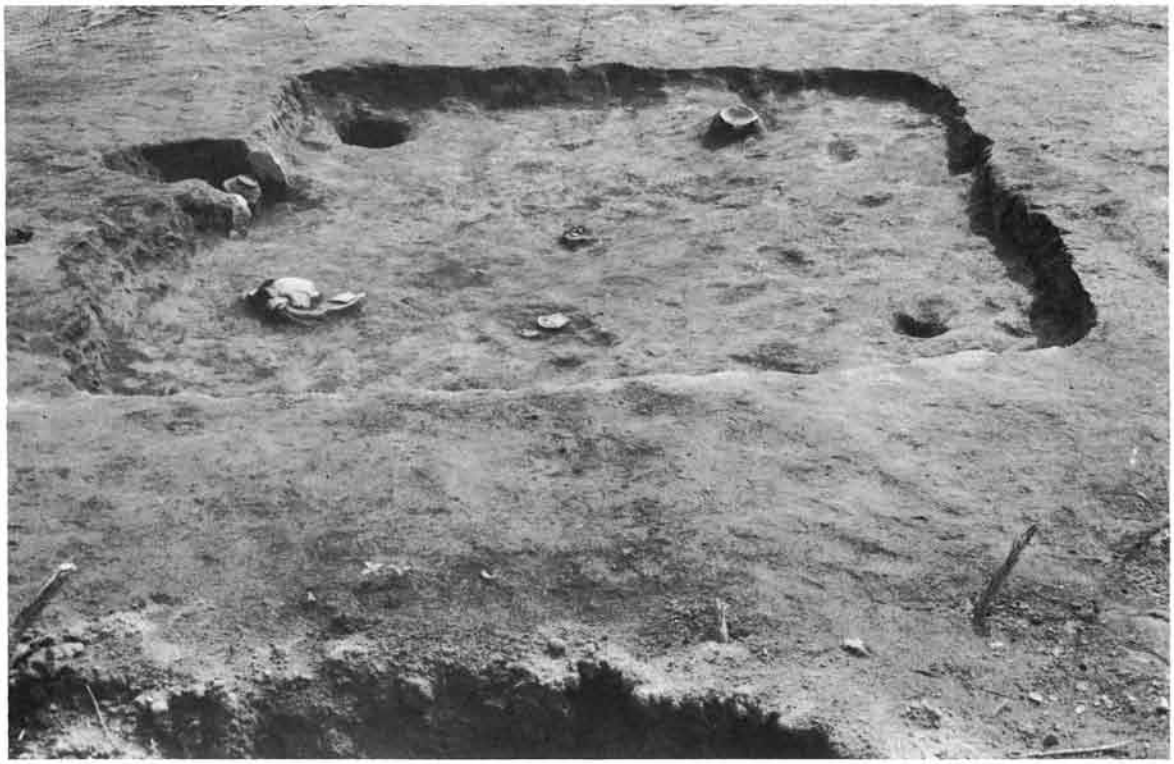
H438号住居跡全景

H440号住居跡（床面集石）

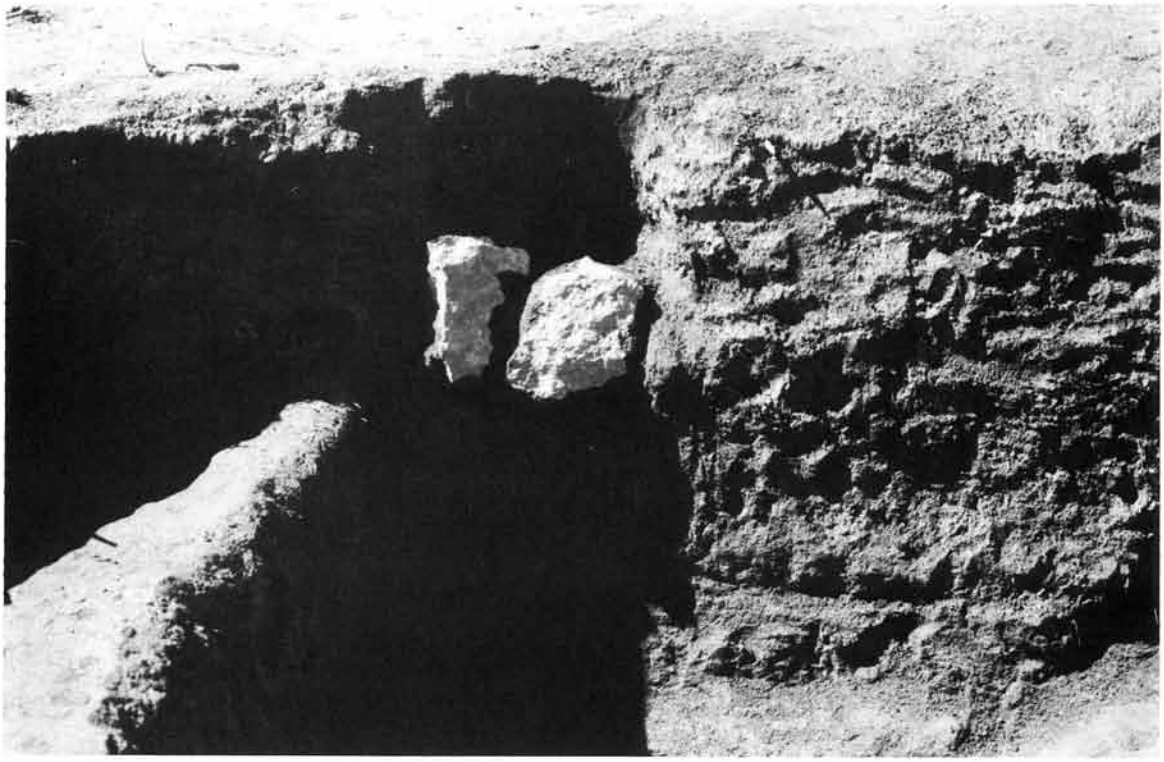
H439号住居跡全景

H443号住居跡全景

H444号住居跡全景



H453号住居跡全景

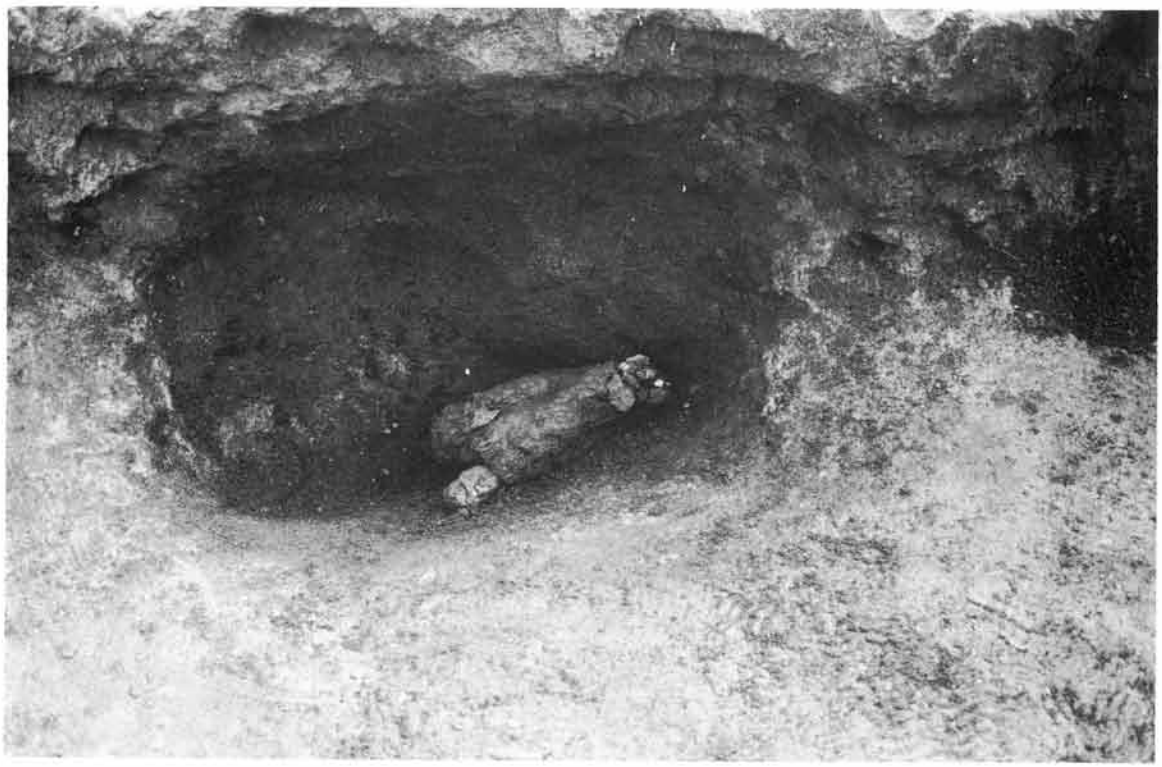


H444号住居跡（棚状施設）

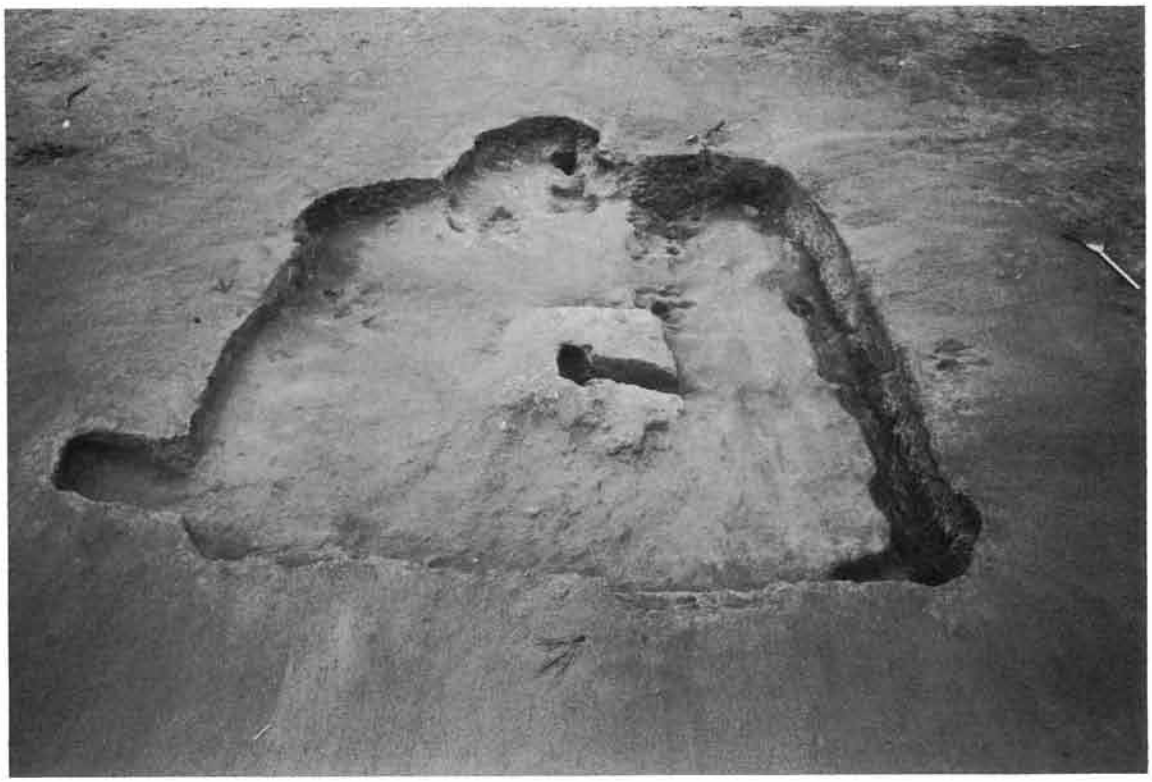
455号住居跡（遺物出土状況）

H455号住居跡全景

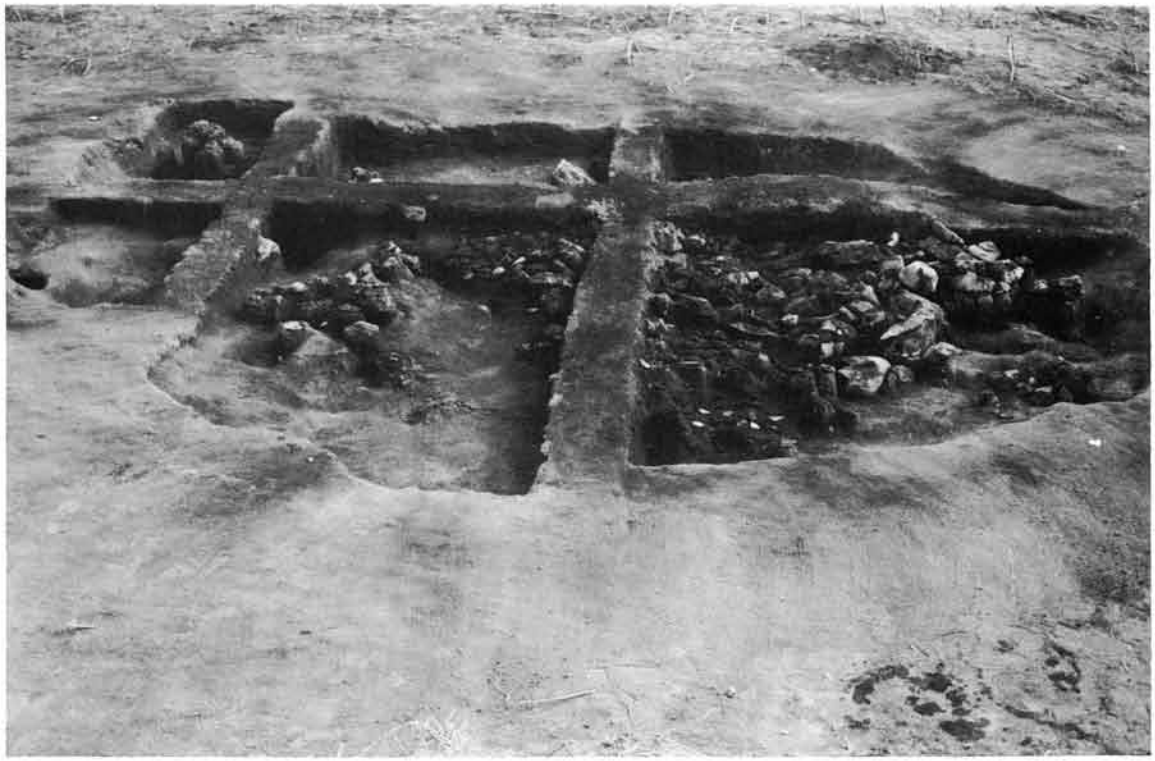
H469号住居跡（遺物出土状況）



H476号住居跡全景



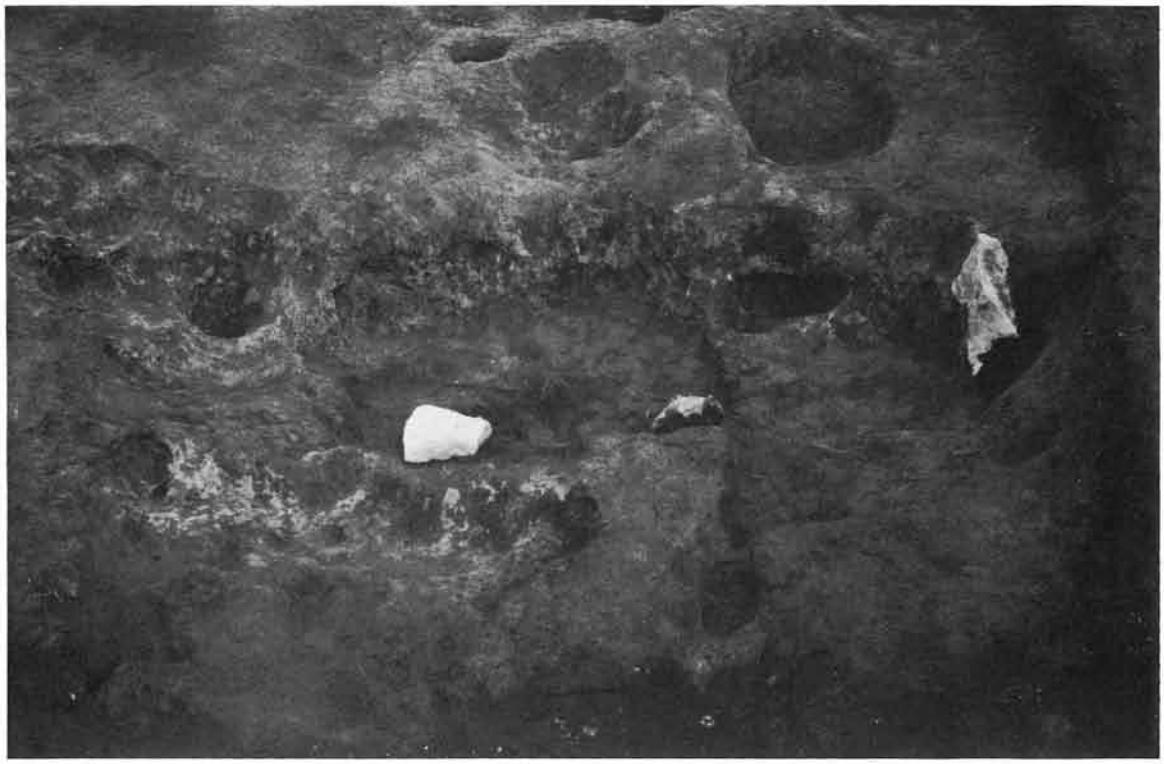
H 4 号竪穴遺構全景



4 号製鉄址（遺物等出土状況北から）

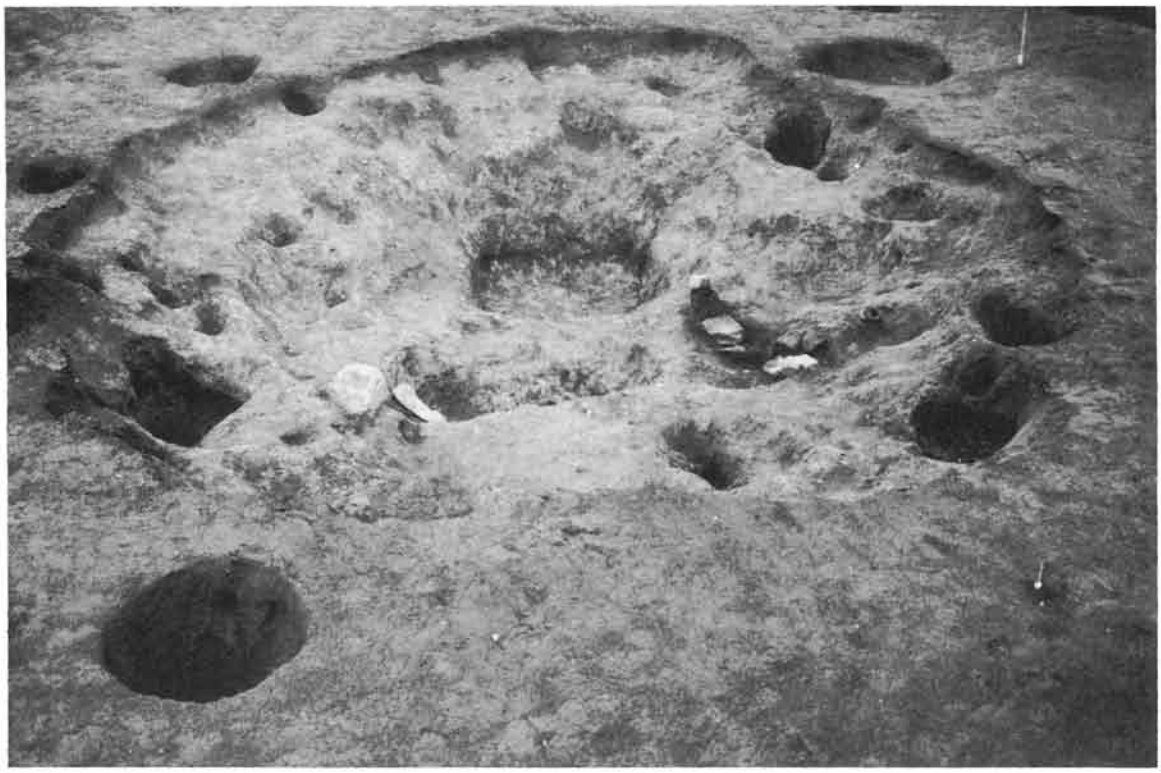
4号製鉄址全景（北から）

4号製鉄址全景（西から）



4 号製鉄址（製錬炉西から）

4 号製鉄址 （鍛冶炉）



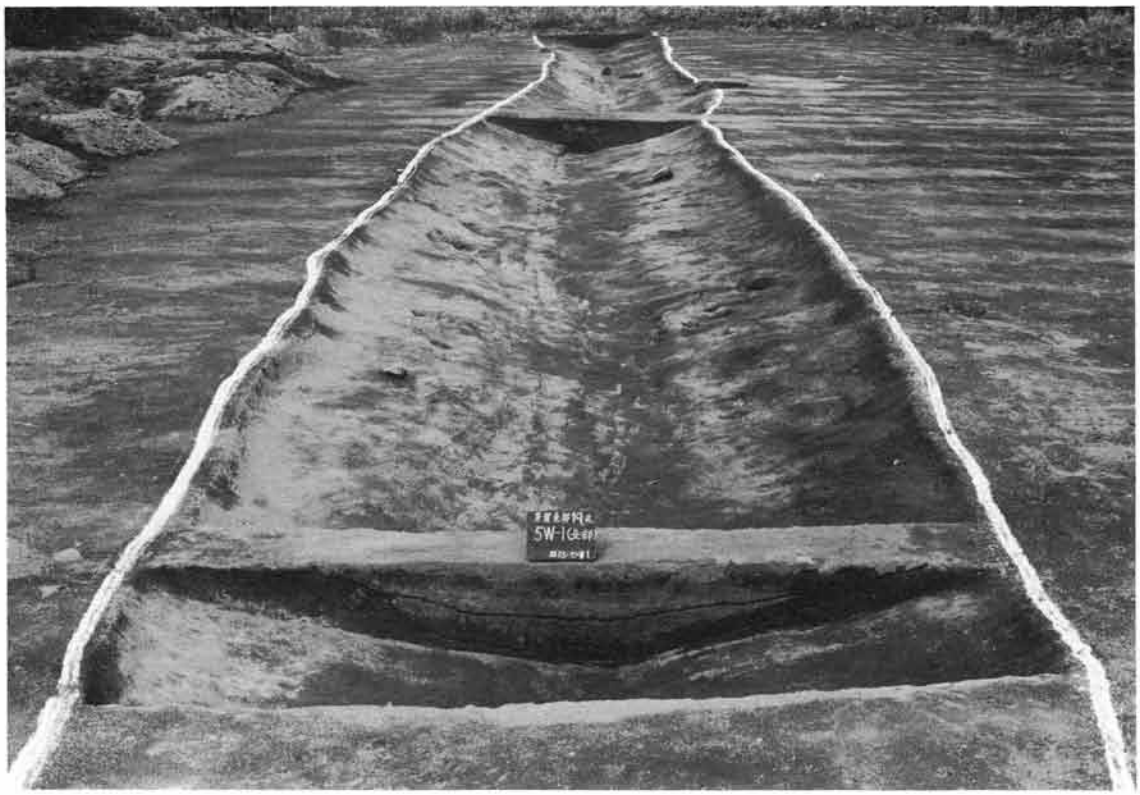
5号製鉄址（遺物等出土状況北から）

5号製鉄址全景（北から）

図版50

19区　溝全体

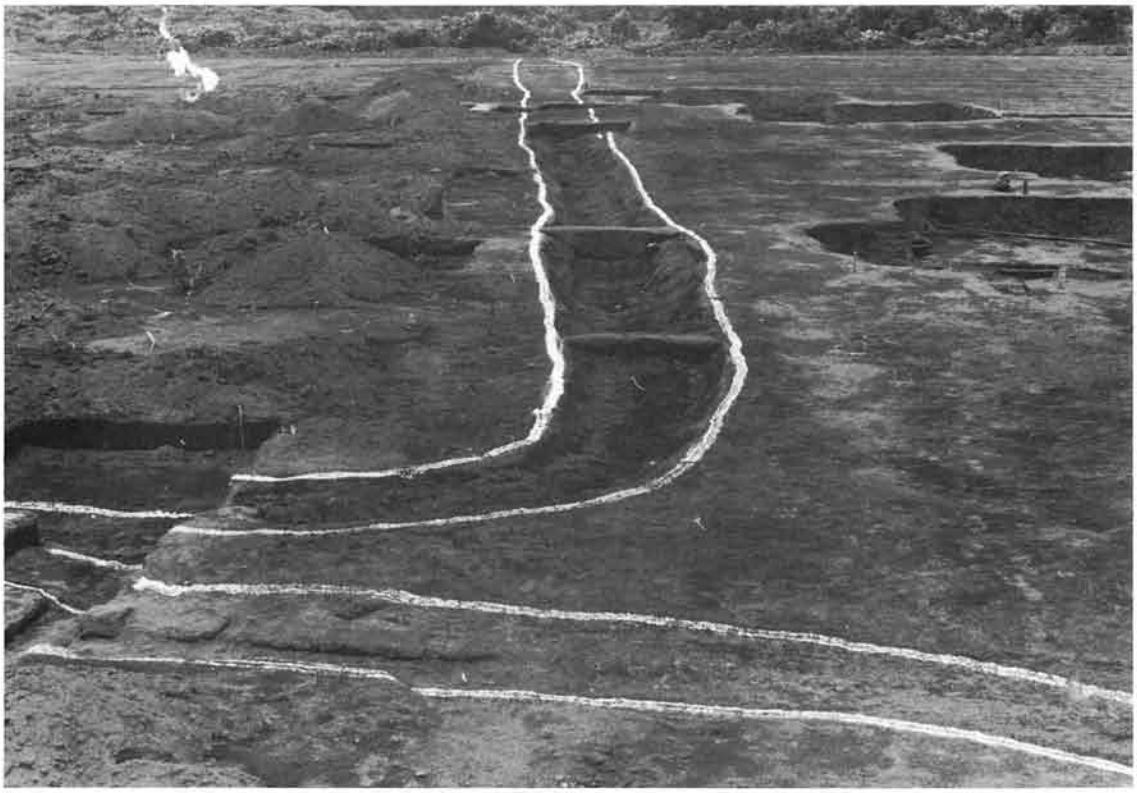
19区　溝北半部（東から）



45号溝（南から）

45号溝分岐点（北から）

45・46・48号溝交点（南東から）

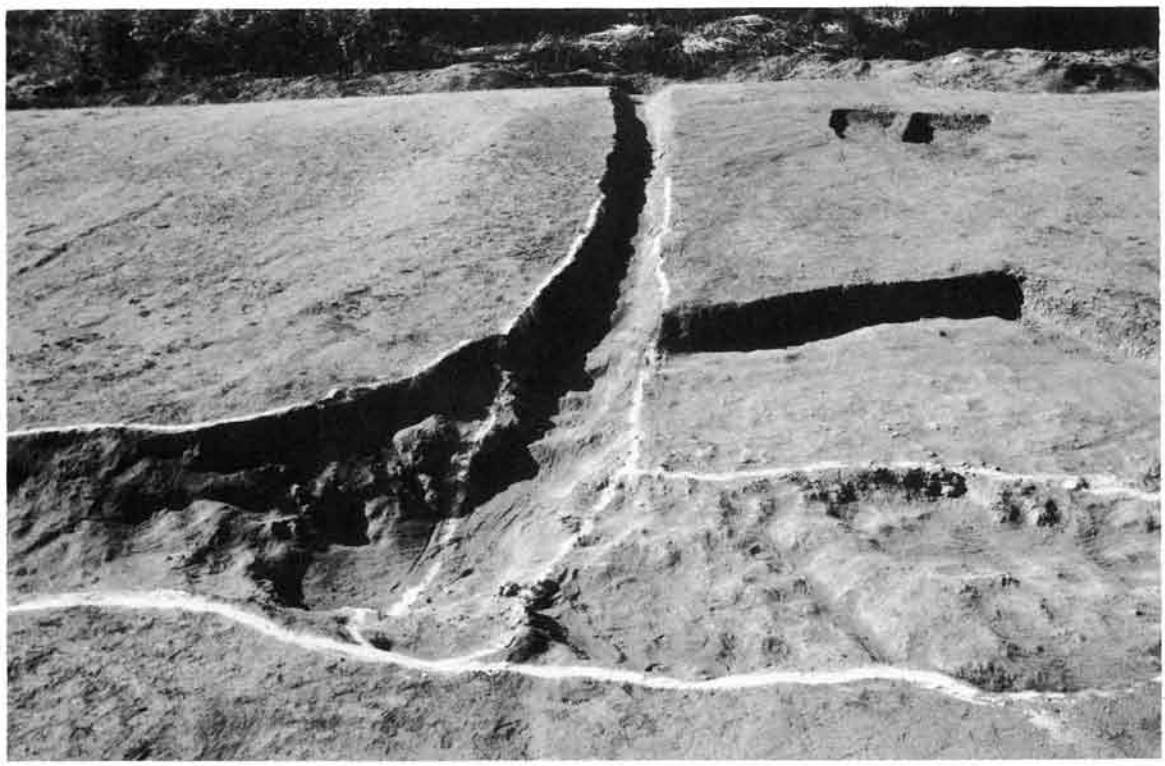


49・50号溝交点（東から）

49・50・51号溝交点（西から）

48号溝（北から）

56号溝（北から）

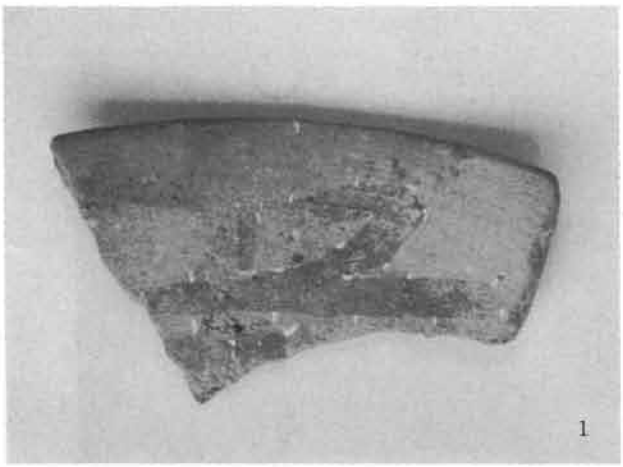


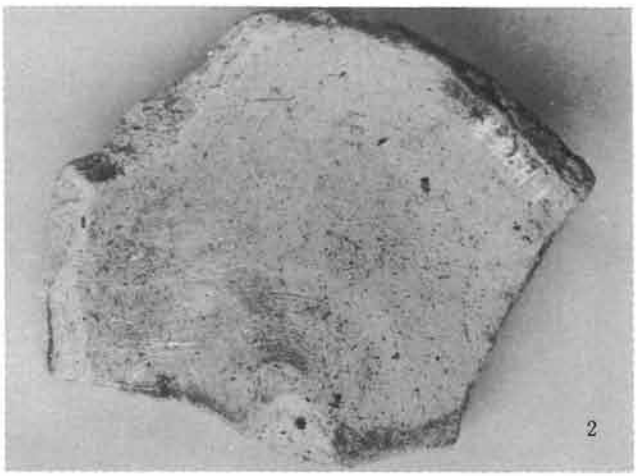
56・59号溝交点（東から）

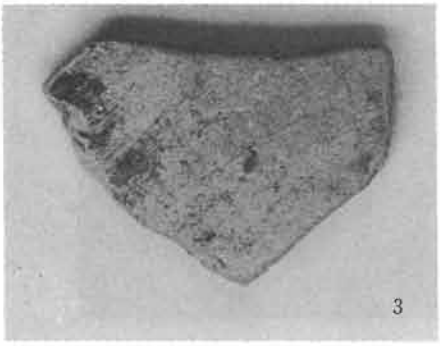
49・50・61号溝（北から）

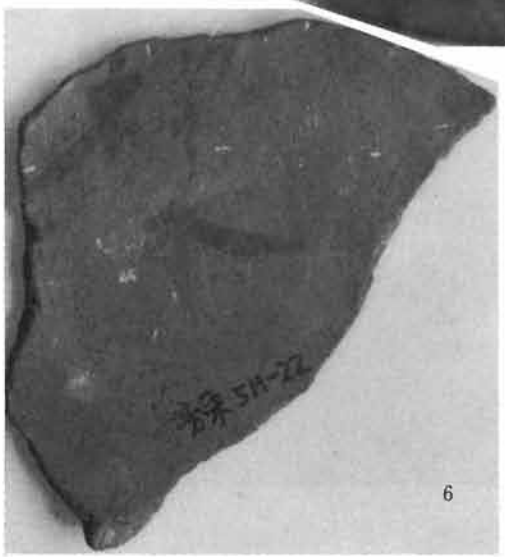
39・40号溝（南から）

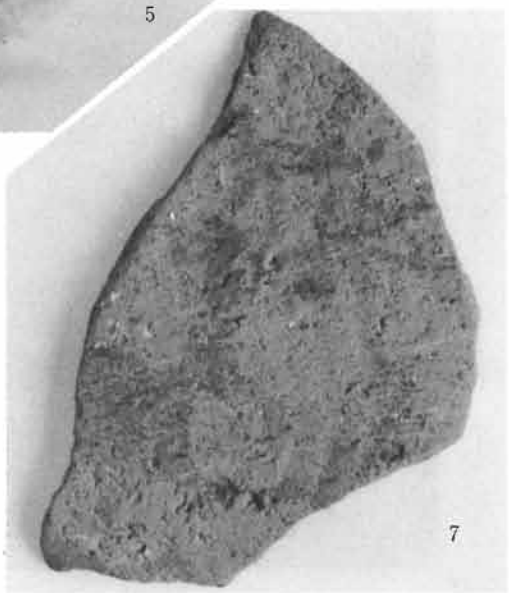
図版56　黒書土器集(1)











1、H272号住　2、H272号住　3、H272号住
4、H1号住※　5、H280号住　6、H293号住（内）　7、H293号住（外）

※第2巻収録予定

1

2

3

4

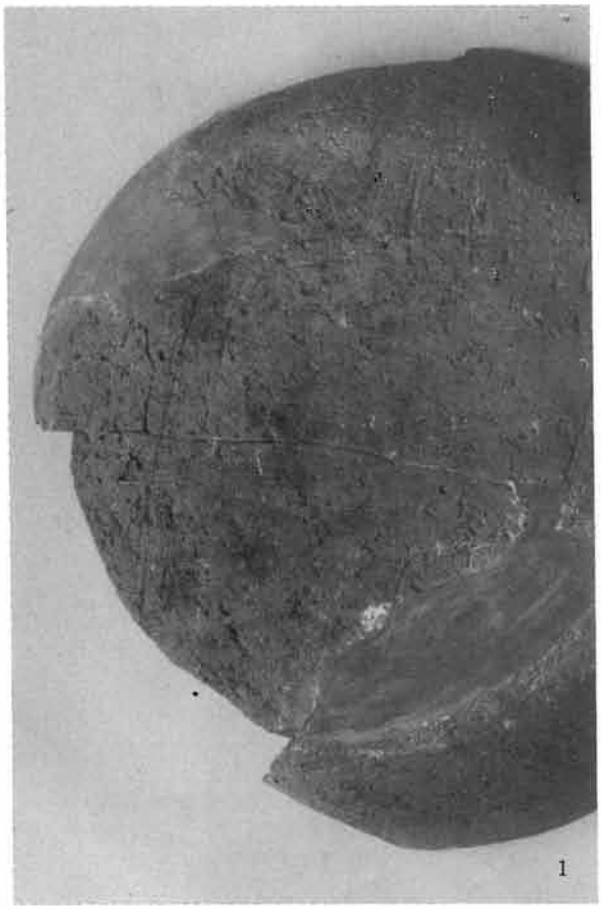
5

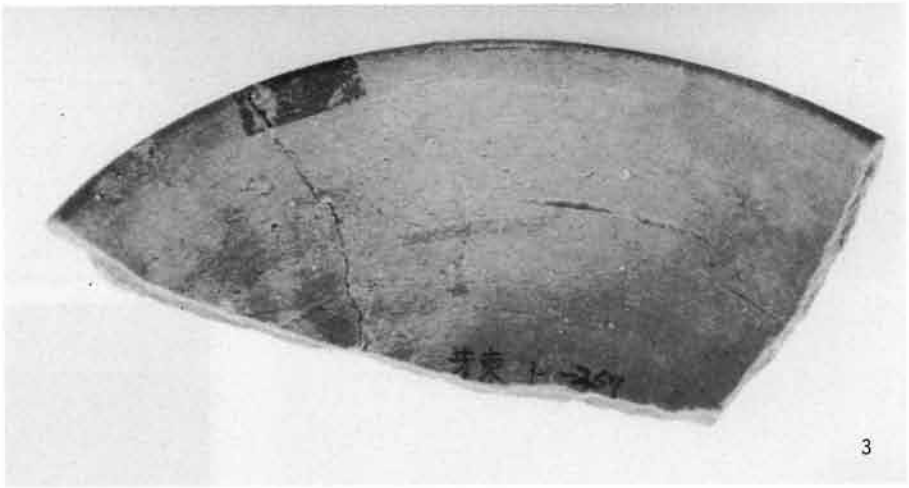
6

1、H299号住　2、H306号住　3、H315号住（内）　4、H315号住（外）
5、H69号住※　6、H375号住（外）　7、H375号住（内）

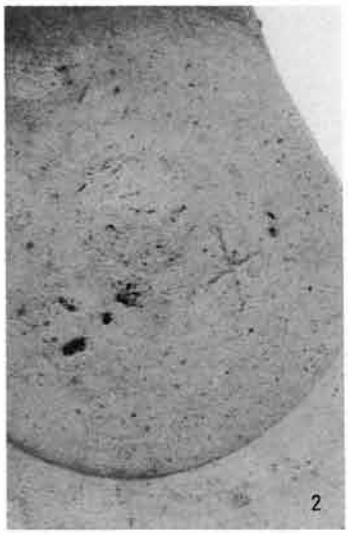
※第2巻収録予定

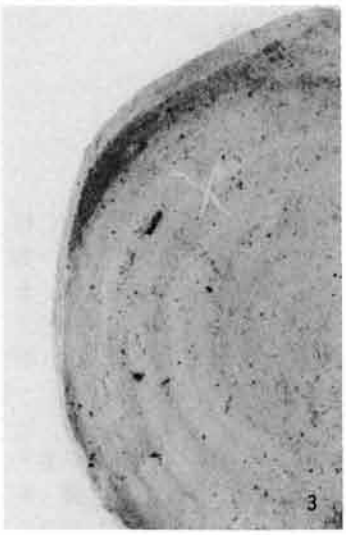
図版58　黒書土器集成(3)

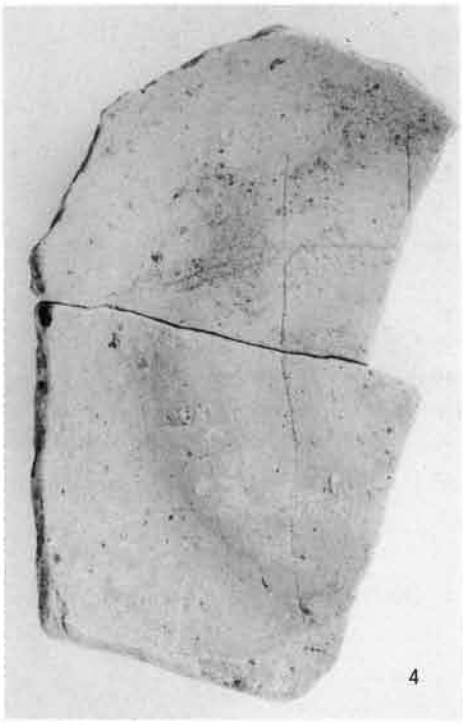


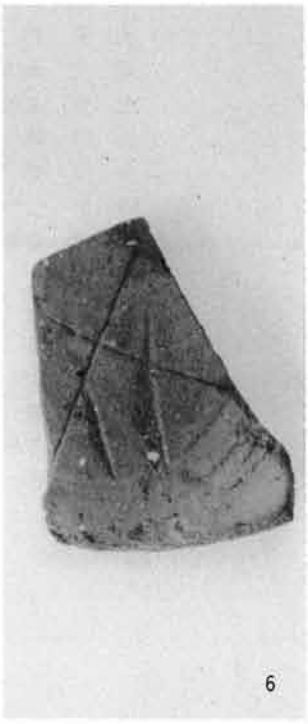


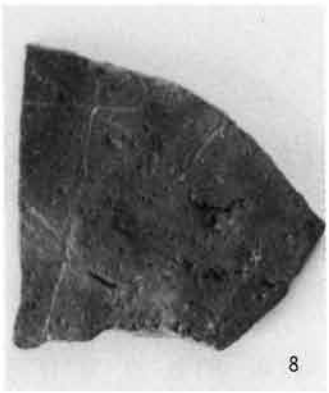
1、H445号住　2、H446号住　3、H267号住











1、H276号住　2、H289号住　3、H295号住　4、H295号住（内）　5、H295号住（外）
6、H315号住　7、H315号住（内）　8、H315号住（外）　9、H376号住　10、H440号住　11、H442号住

発掘作業に参加した方々

青柳宏枝　荒木正男　五十嵐くま　衣川英子　石綿信雄　井上淳一　井上浩　岩崎久美子　上原清美　上原美奈子　大川きよ　大沢好幸　尾上ぬい子　鬼形美由紀　金井君江　金子栄一　狩野なつ江　椛沢喜十郎　椛沢とく　樺沢由理　亀井弘美　岸朱美　木村権司　桑原ゆかり　木暮幸子

小林うめ　小林春美　小林ひちの　小屋政雄　坂本真智子　桜井香緒里　佐藤竜家　佐藤初子　佐藤藤衛　塩野賢吉　設楽初子　芝崎香代子　柴崎まさ子　渋川則子　城代富美江　神保恵子　鈴木こま　鈴木タカ　鈴木孝子　鈴木とし子　鈴木紀子　鈴木ハル　鈴木八重子　鈴木柳子　須田卯太

須田まさえ　高井悦子　竹内敏江　田代倉雄　田代芳三郎　田村佳子　角田もと江　登丸丈　登丸たけ　長岡武八　長沢克江　中島幸重郎　中嶋千春　中嶋つな子　中島つる　中島みつ　中根とよ　中束彰子　南雲いく子　橋本賢次　橋本タキ　飛田野正佳　平林チヨ子　平林ふさ　広川洋子

深沢清子　福島きみ子　福島裕子　福田俊子　船津真一　古松英太郎　星野さと　星野辰男　松井英治　松井國光　松倉りつ子　松村ふさ　茂木早苗　山田晶子　山田孝子　湯本鳥三郎　横堀いへ　横堀喜美子　横堀すみえ　横堀ます　横山秀子　吉澤松寿　吉田公夫　吉田きみ子　渡辺正美

芳賀団地遺跡群第１巻

芳賀東部団地遺跡Ⅰ（古墳～平安時代編その１）

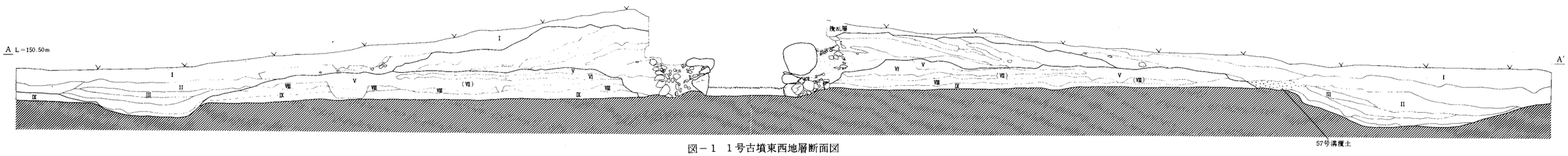
印刷　昭和59年３月26日
発行　昭和59年３月31日

発行　前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番１号

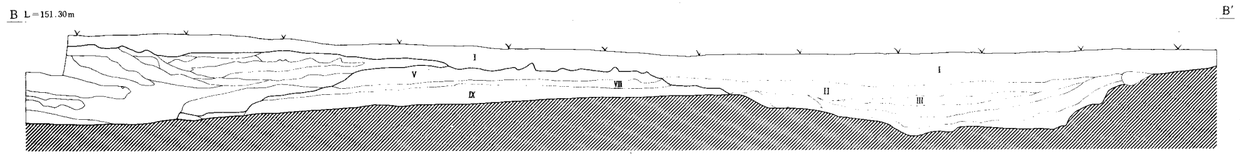
印刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67

粕川村出土文化財管理センター

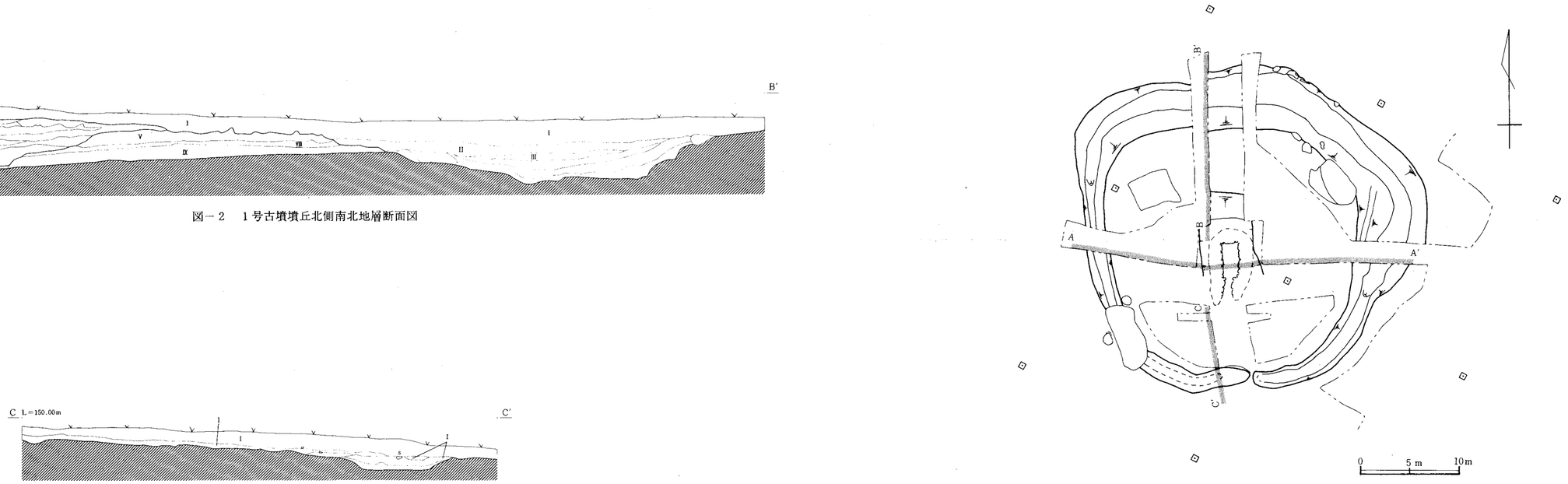
付図１　１号古墳・４号古墳地層断面図



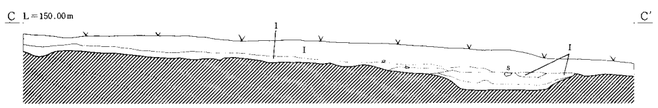
図－１　１号古墳東西地層断面図



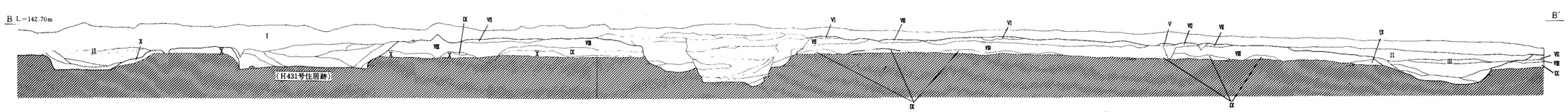
図－２　１号古墳墳丘北側南北地層断面図



図－５　１号古墳地層断面位置図



図－３　１号古墳墳丘南側南北地層断面図



図－４　４号古墳東西地層断面図

※地層断面実測個所については、本文中、４号古墳全体図参照。

付図２　遺跡全体図

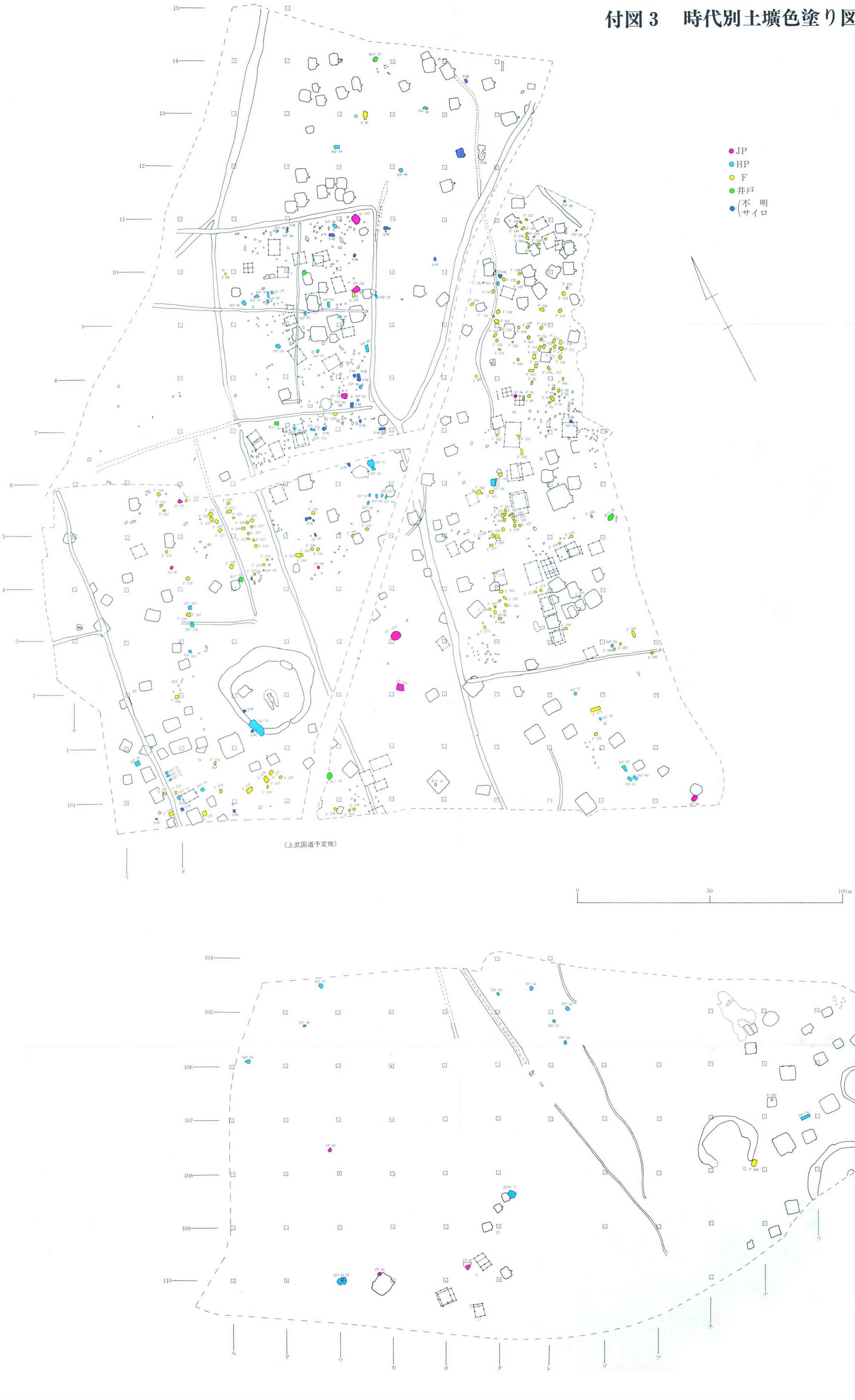
記号説明

- J：縄文式土器を伴う竪穴式住居跡
- H：土師器を伴う竪穴式住居跡
- K：掘立柱建物跡
- M：古　墳
- W：溝・溝状遺構
- T：製鉄址

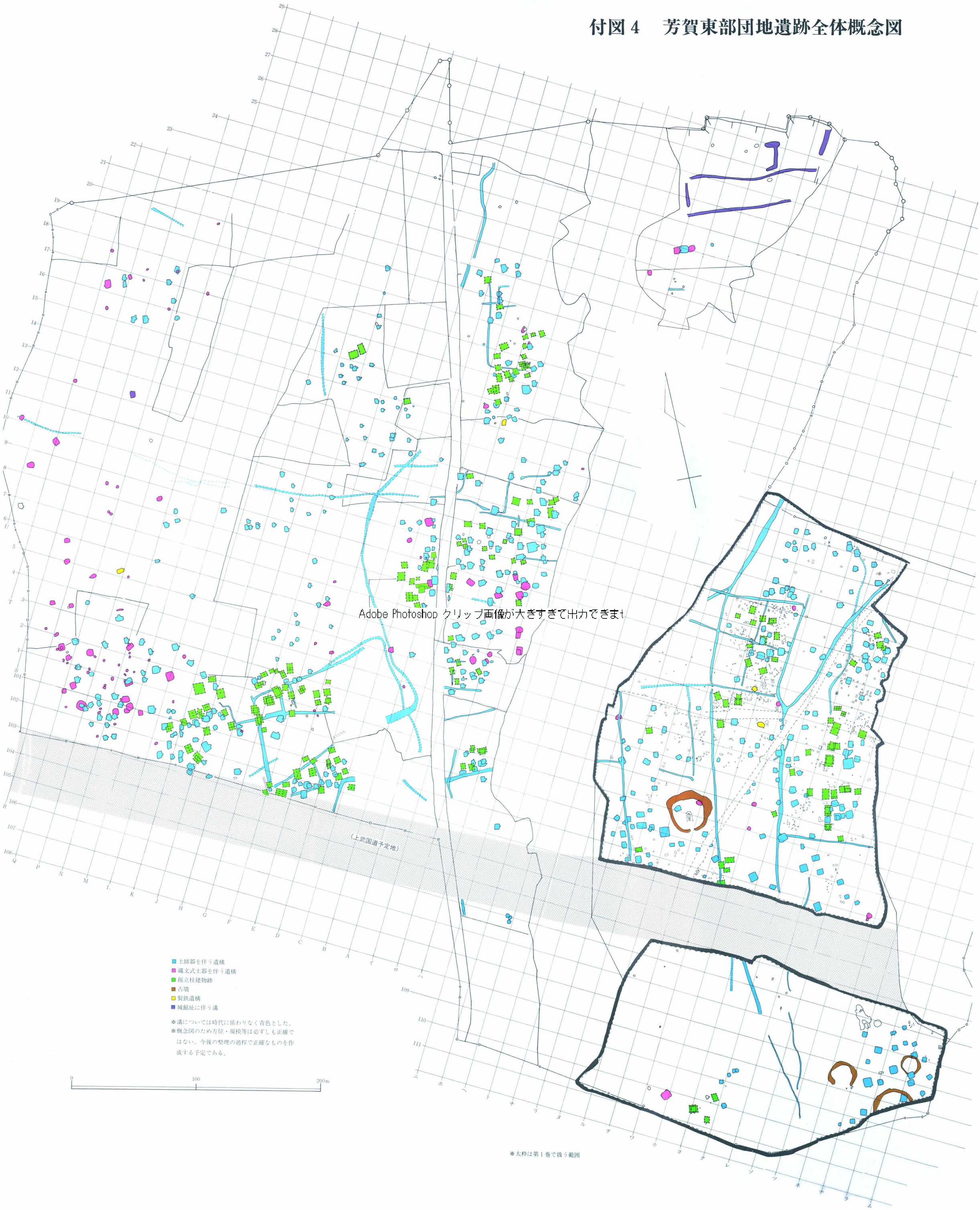
等高線の単位：m

（　）は掘削前地表の等高線

付図３　時代別土壙色塗り図



付図 4　芳賀東部団地遺跡全体概念図



Adobe Photoshop クリップ画像が大きすぎて出力できません